

モンハン世界に成り行き
で転生した中身おっ
さん

びびんば

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転移した先は、モンスターが蔓延る弱肉強食の世界でした。

主人公は中身おっさん。

モンスターが群雄割拠する世界で、周囲の人に支えられながら頑張っていく話です。基本ほのぼの。

※モンハン世界について、独自解釈が入ります。苦手な人はご注意ください。

※初投稿、何もかもドの付く素人です。改行と……多め。読みにくい人ごめんなさい。

目次

01 見知らぬ状況にもうろたえないよう にしましょう。	1	10 現実の厳しさを思い知りましょ う。	67
02 情報を確認し、現状を分析しまし よう。	12	11 もう一度現状を確認しましよ う。	74
03 逃げましょ。	22	12 自分にできることを理解しまし よう。	83
04 撃退ましょ。	31	13 ある受付嬢の話？	103
05 人里を見つけましょ。	40	14 行きつけのお店を見つけましょ う。	114
06 村に泊りましょ。	46	15 新たな技を習得ましょ。	125
07 神託を授かりましょ。	52	16 新たなフオロワー層の獲得を確 認し	
08 これからの生き方を決めましょ う。	56		
09 モンスターを倒す職業について知 り			

	ましよう。	139			
	17 お礼を伝えましよう。	148			
	18 さらにお礼を伝えましよう。				
159	19 スパルタ教育を始めましよう。				
169	20 スパルタ教育に身をゆだねましよう。				
	う。	182			
	21 自主練を始めましよう	191			
202	22 イシザキ亭に貢献しましよう。				
	23 ある受付嬢の話②	217			
	24 クエストを受注しましよう。				
	25 決意表明をしましよう。	248	234		
	26 武具の最終点検をお願いしましよう。				
	う。	262			
	27 クエストに向かいましよう。				
277	28 リベンジしましよう。	295			
	29 カミングアウトしましよう。				
	30 師弟対決をしましよう。	331	315		
	31 ある宿の看板娘の話①	343			
	32 ただいまを伝えましよう。	366			
	33 打ち上げをしましよう。	387			

	3 4	女神様とお話しましょう。	—	400
	3 5	圧迫面接を受けましょう。	—	415
	3 6	カミングアウト(笑)をしましょう。	—	434
	3 7	損害賠償と雇用契約について考えま しょう。	—	451
	3 8	アイルー達の話を読みましょう。	—	469
	3 9	オトモとの生活を始めましょう。	—	482
	4 0	一人の訓練方法を考えましょう。	—	497
	4 1	クエストを受注しましょう。②	—	640
	4 2	待遇改善を模索しましょう。	—	514
	4 3	狩猟を行いましょう。	—	535
	4 4	シンパシーを感じましょう。	—	561
	4 5	見栄を張りましょう。	—	581
	4 6	ある受付嬢の話③	—	594
	4 7	ある受付嬢の話④	—	614
	4 8	ハンター業を本格的に始めましょ う。	—	629
	4 9	緊急事態(笑)に対応しましょう。	—	640

5 0	ついていきましよう。	726	5 8	小さい方も狩りましよう。	807
5 1	圧迫面接(二回目)を切り抜けましよう。	726	5 9	強襲に対処ましよう。	826
5 2	防具を強化ましよう。	687	6 0	汚く戦いましよう。	843
5 3	倫理観について学びましよう。	712	6 1	最後の悪あがきをましよう。	858
5 4	余計な発言には気をつけましよう。	726	6 2	治療を受けましよう。	889
5 5	クエストを受注ましよう。③	755	6 3	女神様と直で話ましよう。	907
5 6	ハーレム野郎の生態を観察ましよう。	771	6 4	退院手続きをましよう。	927
5 7	大きい方を狩りましよう。	783	6 5	説得のプレゼンをましよう。	944
			6 6	バイトの様子を見に行きましよう。	967

6 7 新たな決意を表明しましょう。

988

6 8 教えを請いましょう。

1009

6 9 本当の訓練を始めましょう。

1031

7 0 訓練の意図について、考察しましよ

う。

1063

7 1 コミュニケーションの大切さを学び

ましょう。

7 2 あるオトモアイルーの話①

1090

7 3 あるオトモアイルーの話②

1131

7 4 訓練の日々を過ごしましょう。

1160

7 5 お世話になった人に、挨拶をしま

しょう。

1184

7 6 神様世界の近況報告を聞きましよ

う。

1207

7 7 残りの方にも、挨拶をしましょう。

う。

1235

7 8 出発しましょう。

7 9 道中気をつけましょう。

8 0 撤退させましょう。

8 1 あるソロハンターの話①

8 2 あるソロハンターの話②

8 3 あるソロハンターの話③

8 4 タオカカに泊まりましょう。

1379

1354

1330

1306

1277

1253

- 1571 9 0 雪の鬼を分析しましょう。
- 1548 8 9 村のピンチを救いましょう。①
- 1520 8 8 一人でも特訓してみましょう。
- 1498 8 7 冬山の狩りをこなしましょう。
- 1464 8 6 雪玉の名人に会いに行きましょう。
- 1436 8 5 ミヨシ村での生活を始めましょう。
- 1414 8 5 ミヨシ村での生活を始めましょう。
- 1876 1 0 0 村のピンチを救いましょう。②
- 1844 9 9 人間関係の難しさと紳士らしさについて考えましょう。
- 1815 9 8 助けましょう。
- 1783 9 7 ある受付嬢の話⑦
- 1756 9 6 ある受付嬢の話⑥
- 1729 9 5 ある受付嬢の話⑤
- 1703 9 4 新たな武器を探しましょう。
- 1667 9 3 宴を盛り上げましょう。
- 1639 9 2 飲み会をしましょう。
- 1596 9 1 雪の鬼を倒しましょう。

- 101 轟竜を狩猟しましょう。 | 1899
- 102 賢いモンスターを、相手取りま
しょう。 | 1931
- 103 編み出しましょう。 | 1973
- 104 完了報告をしましょう。 | 2010
- 105 美味しい朝ごはんを食べましょ
う。 | 2039
- 106 ミヨシ村にさよならしましょう。 | 2069
- 2092
- 107 ワサドラに帰りましょう。 | 2069
- 108 救援に向かいましょう。 | 2123
- 109 経緯を聞きましょう。 | 2154
- 110 急襲に備えましょう。 | 2179
- 111 ただいまをしましょう。①
- 2223
- 112 ただいまをしましょう。②
- 2255
- 113 色んな裏を知りましょう。
- 2285
- 114 休みを満喫しましょう。 | 2315
- 115 人それぞれの趣味を学びましょ
う。 | 2336
- 116 リベンジの下調べをしましょう。
- 2365
- 117 慎重に採掘場を進みましょう。

- 1 2 4 強さを自覚しましょう。 | 2625
- 2584 1 2 3 痛みをこらえて戦いましょう。
- 2554 1 2 2 もう一度見つけましょう。
- 2526 1 2 1 ジンオウガを待ちましょう。
- う。 | 2503
- 1 2 0 ストーキング行為は自重しましょう 2478
- 1 1 9 報告をしましょう。 | 2423
- 2400 1 1 8 リベンジを果たしましょう。
- 1 2 5 家族の事情を知りましょう。
- 2649 1 2 6 夢の中で逢いましょう。 | 2675
- 1 2 7 頼れる人に相談しましょう。
- 2706 1 2 8 翁を倒しに行きましょう。
- 2737 1 2 9 泡狐竜と相対しましょう。
- 2763 1 3 0 オトモを絶賛しましょう。
- 2797 1 3 1 怒り狂うモンスターと戦いましょう。
- う。 | 2821

- 1 3 2 挽回しましょう。—— 2842
- 1 3 3 マスター？に報告しましょう。 2873
- 1 3 4 わがままを言いましょう。 2901
- 1 3 5 新たな情報を収集しましょう。 2924
- 1 3 6 ランチデート？を楽しみましょう。 2951
- う。—— 2970
- 1 3 7 復帰しましょう。—— 2987
- 1 3 8 金獅子クエストを受けましょう。 2987
- 1 3 9 ご挨拶申し上げます。 2987
- 1 4 0 森の奥まで行きましょう。 3015
- 1 4 1 警戒しながら進みましょう。 3043
- 1 4 2 ソロでやりましょう。—— 3075
- 1 4 3 やっぱり二人でやりましょう。 3107
- 1 4 4 状況を確認しましょう。—— 3151
- 1 4 5 思い知らされましょう。—— 3239
- 1 4 6 報告と考察をしましょう。 3207
- 1 4 7 いつもの日常を、噛み締めましょ 3272

- う。 | | | | |
- 148 依頼を受けましょう。 | | | | | 33233296
- 149 黒蝕竜を狩猟しましょう。 | | | | |
- 3361
- 150 黒く蝕まれましょう。 | | | | | 3406
- 151 黒蝕竜の狩猟を報告しましょう。 | | | | |
- | | | | |
- 152 退院しましょう。 | | | | | 34793447
- 153 人間関係とリスクについて考えま
しょう。 | | | | | 34793447
- | | | | |
- 154 打ち上げをしましょう。 | | | | | 35523509
- 155 さよならをしましょう。 | | | | |
- 156 ある宿の看板娘の話② | | | | | 3619358735523509
- | | | | |
- 3913
- 163 あるソロハンターの話④ | | | | | 3795
- 164 あるソロハンターの話⑤ | | | | | 38733830
- 165 古龍討伐を開始しましょう。 | | | | |
- | | | | |
- 3765
- 162 禁足地に向かいました。 | | | | |
- | | | | |
- 161 決意を新たにしましょう。 | | | | | 3728
- う。 | | | | |
- 160 ザキミーユシティに入りまし
よ | | | | | 369736663641
- 159 準備をしましょう。② | | | | |
- 158 準備をしましょう。① | | | | |
- 157 ある宿の看板娘の話③ | | | | |

1 6 6 天廻龍を狩猟しましょう。

3958

1 6 7 あるソロハンターの話⑥ |

3990

1 6 8 天廻龍と約束しましょう。

4045

1 7 0 思い出しましょう。(終) |

40894066

あとがき

1 7 1 続けましょう。(後日談①)

4092

1 7 2 続けましょう。(後日談②)

4114

1 7 3 続けましょう。(後日談③)

4129

1 7 4 続けましょう。(後日談④)

4149

1 7 5 終わりました。(後日談⑤)(終)

4173

01 見知らぬ状況にもうろたえないようにしましょう。

目が覚めた。

さて……今からいびきをかくマイワイフを起こし、息子を叩き起こしながら朝食と保育園の準備……。

できない。

目が覚めたら俺の家じゃない。

頭金400万、固定金利で毎月安定した返済を30年続けてローン返済する4200万円の自宅……じゃない!!

足元は水。

深さ3cmくらいの水が張った湖が、延々と広がっている。

上空はチラホラ雲もあるが快晴。

どこぞの塩湖のようなイメージだとわかりやすいかもしれない。

水は冷たくもなく、熱くもない。

というよりも、自分の感覚があまりない感じがする。

自分が自分ではないような、そんな漠然とした不安に駆られてしまう。

そんな時だった。

急に頭の中に声が聞こえてきたのだ。

『……あー、聞こえますか？ 双治さん？』

「のわあ！」

驚いてしまった。恥ずかしい。

今年で33歳なのに。

妻子抱える身なのに。

『双治さん、落ち着いてくださいね？』

「は、はい。いや、落ち着いてられないと申しますか、どうにもこうにも。」

俺しかない非現実的空間で、なぜか頭の中から声がするのだ。

平静を保てない。

上司にどやされ続け、鍛えられたと思っていた俺のハート……どうやらとんだ思い違いだったようだ。

その声は続けて、とんでもないことを教えてくれた。

『いきなりなことを言いますが、私は神です。』

「……。」

『信じられないと思いますが、まずは話を聞いてくださるとうれしいです。続けても？』
「は、はいいい……。」

もう信じるしかない。

やたら現実味のない自分の体。

ただ、夢ではないとははっきりわかる。

これはリアルだ。

ありえない状況にある。

そして頭に響く、母性溢れる女性の美しい声。

これは、神と信じるしかないと思う。

とりあえず落ち着くため、その女神様に一つ質問を試してみることにした。

「私、死にましたか……?」

『少し説明が難しいのですが、おおむねそのような感じですよ。』

予想が当たった。それじゃあついでに、もう一つ質問。

「そしてここはあの世……でしょうか……?」

『その点も、おおむねそのような感じですよ。』

この予想も当たり。ラスト、これが大事な質問だ。

「俺の……私の家族は生きていますか?」

『はい、双治さんのご家族はみな無事です。ご心配なく。』

「それはよかったです……。ちなみに、私の考えていることって、分かりますか?」

『ええ、分かります。ですが、言葉にしてくれると助かります。きちんと言葉として気持ちを整理していただかないと、人の複雑な心の中を読むことは難しいです。でも、双治

さんの気持ちはとても読みやすいです。私の声が美しいと聞いて、うれしかったです。ありがとうございます。』

なんと、思いを読むことができるのはすごい。

さすが女神様。

邪なことを考えなかった自分をほめたい。

しかし、声だけでも、女神さまが美人さんであることは想像がつく。恥ずかしがっているのか、少し照れたような声だった。

かわいい。

……今はそんなことを考えている場合ではないな。

「……ええと、とりあえず家族が無事なら、よかったです。あの、他にも色々、質問してもよろしいですか？」

『ええ、私が答えられることは、何でもどうぞ。』

言葉こそ単調ではあるが、いい人？神様？なのだと思う。

そこからは、俺と女神様の一問一答が始まった。

端的に言うとは、俺は偶然にも時空の穴、時断崖と呼ばれるものに挟まれた。

そして元の世界からはいないことになってしまった、らしい。

そんなこと天文学的な確率らしく、女神様曰く、人間で巻き込まれたことがあるのは、歴史上で数えられるほどしかないのだとか。

時を司る神のミスで、こういうことはごくまれに起こるらしい。

ただし時の神は、神としての次元というか格が高すぎて、俺のようなちっぽけな存在がどうなろうと知ったこつちやないスタイルとのこと。

そこで、地球を司る女神さまのお出まし、というわけだ。

心配していた家族は、元々俺がいなかった前提として、世界まるごと書き換えられたため、無事?とのこと。

いや俺にとっては悲劇でしかないわけだが。

ここまで質問して思った。

……運が無さすぎる。

天文学的の確率って、人類史上数人しかないとところに当たってしまったということか。いや、笑えない。どうしようか、これ。

元の世界的に俺は完全にいなくなったものとして扱われているわけだ。というか、ハナからいなかったものとして。

それは悲しい。

時の神とやらがいたら、小一時間説教をしてやりたいぐらいには不満だ。

だがここで、女神さまから意外な提案が来た。

『そこで、私から一つ、双治さんに提案があります。』

「なんでしよう。」

『双治さん、全く違う世界線……異世界といえましょうか。そこで第2の人生を歩んでみませんか?』

「……可能なんですか?」

『例外中の例外ですので、他の神々にSNSを使つて情報を拡散すれば、4、5人ぐらい手が挙がるかと。』

「その神様SNS、すつごく気になります。」

『少しお待ちくださいね……はい、つぶやきました。』

神様の世界もSNSとかあるんですね。

シユールすぎる。

そしてしばらくして、女神様に返信が来た。

『お一人、返信が来ました。この神の世界はいかがでしょう。おそらく双治さんが好き

な、「けんとまほうのふぁんたじい」の世界に……近いと思いますよ?」

「……確認になりますか、私が元の世界に戻ることは難しいんですよね?」

『ええ、そればかりは。何せ存在が全く無い状態からですので。人間でなくてもよいというのであれば、可能かもしれません。』

「それは例えばどんな生き物になりますか?」

『今すぐに転生できそうな生命体というと……バンドウイルカ、ホンヤドカリ、オオスズメバチ、ジャ○ロ・クワイ、腸炎ビブリオなどになります。どうしますか?』

「ぜひ新しい世界でお願いします!」

何が悲しくて人の腹の中で胃腸炎を起こさなければならぬのか。

とうか4つ目はなんだ?あのアーティストのことを言っているのか?ラーメンのCMかつこよかつたくらいしか知らないのだが……。

……新しい世界でいい。

何を隠そう、俺はそういうったファンタジーな世界観は大好きなのだ。

返事はすぐに。

どうせなら、楽しそうな世界で第二の人生を送りたい。

『わかりました、それでは今から転送いたします。ささやかながら、私の方から、その世

界で最低限生きていくのに必要なものはお渡ししておきます。』

「何から何まで、ありがとうございます。」

『いえ、これも私の義務です。私からのギフトは、目覚めたら確認できるかと。』

ギフト、か。これは期待しておこう。

次の世界で少しだけ楽しく過ごせそうな気がする。

しばらくすると、俺の周りに巨大な魔方陣のようなものが現れた。小学生の頃の体育館ぐらいあるのではないだろうか。大きい。

その魔方陣はぐるぐる回っていて、一瞬光ったかと思うと少しずつその半径を減らししていく。そして俺の体も少しずつ薄くなってきた。どうやら次の世界にこれから向かうらしい。

『それでは双治さん、ここで私は失礼いたします。声だけで姿も見せずに、申し訳ありませんでした。』

そんなことないです、次の人生を与えてくださってありがとうございます。

『すでに双治さんの体は、転送先の方に送られ始めています。少し時間がかかりますが、目が覚めたら見知らぬ天井……ということになりますね。』

そうか、この年にして第二の人生か……。老後にゴルフ三昧を予定していた俺としては、この第2の人生は全くの想定外だが、まあいいだろう。

せつかくもらったおまけ人生、全力で楽しんでやろうではないか。

『……双治さん、前向きなところ悪いですが、この世界相当サバイバルです。どうぞお体には気を付けてください。』

……えっ、何ですかその言い方。

結構大変なんですか、生きていくのが。

マジですか？ 平和な現代日本に生きてきた身としては、確かにサバイバルなんてマジで経験ないわけですが、なにかしら神様からの贈り物で生きていくことは可能なのかなと、少しは期待したりもしちゃったりなんかしてしまっただけでしてー

『完了しました。それでは、私はここで失礼いたします。よい人生を。』

「ちよつとま……。」

そこで声が途切れ、俺の意識は完全に無くなった。

02 情報を確認し、現状を分析しましょう。

目を覚ます。

どうやら新しい世界に着いたらしい。

先ほどまでいた湖の上ではない。

本当に生まれ変わったのだろうか。

とにかく急いで身を起こす。

なぜなら、サバイバルな世界と聞いたから。

俺のことをペロツと食べてしまうような奴らがいてもおかしくない。

起き上がった瞬間、横にあった岩陰に隠れた。ゆっくり顔を出して辺りを見渡す。

周囲は木々がまばらに生えた草原。

サバンナと言うには少しばかり肌寒い、でも過ごしやすそうな感じがする。

身を隠せる岩や大木もちらほらと見える。

……とりあえず脅威は何もなさそうだ。

「意外と、普通だな……。」

声の具合や耳の聞こえ具合を確認してみる。

大丈夫、健康そう。手も足も、口の中も、問題はないように感じる。

少し落ち着いて、自分の体を見つめてみると、全く体つきが違うことが分かる。

少々ビール腹になっていた、33歳のおっさんだったはずだが、今の体は明らかに若い。

大学生とか、下手したら高校生とかではないだろうか。

無駄なぜい肉はほとんどない、引き締まった肉体である。体が軽い。

服は、全身まるで忍者装束のようないで立ちだ。パーカーのフードのように、顔を隠すためであろう布が、首の後ろについている。

靴はやたら頑丈そうな素材でできているが、そこまで重くは感じない。よい品物なのかもしれない。

頭に何か、額当て？のようなものが巻き付いているので、ほどいてみた。

「よつと……。なんだ？この模様…忍者みたいなの…。」

何かのシンボルマークなのか、4つの正三角形が重なってできた大きな一つの正三角

形、そんな形の絵が彫ってある。

ひとまず頭に巻き直しておいた。

とりあえず、素っ裸で転生ということは無くて一安心だ。遠慮なく使わせて頂こう。

しかし、女神さまのギフトが何なのかが分からない。

若い肉体と持ち物だけかな？と思っていたら、腰にとんでもないものがあつた。

ポーチだ。

ゆっくりそのポーチを開けてみると、急に頭の中に、

〈アイテムポーチ〉

〈リストから調査〉

〈装備〉

〈クエスト情報〉

……

その他色々な項目が浮かんできた。

……完全にゲーム画面だな！これ！

……ゲームなどはあまり詳しくない方だが、眼前に「アイテム」なんていう言葉が現れたら、ゲーム画面だと思えない。

よくできたVRゲームだと言われれば信じてしまいたいそうになる。

この画面は、自分以外からは見えるのか見えないのか。この画面を見る力は俺だけにもらったギフトなのか、それともこの世界の住人が共通して使えるものなのか…疑問は尽きない。

だが、この画面のことに詳しくなっておかないと、なんだかこの先生きのこれない気がする……。

「…うん、どのみち今やることなんて分からないし、色々いじってみよう。」

岩を背もたれにして、このゲーム画面とにらめっこを始めた。

まずはポーチを触ってみる。すると例のゲーム画面が開いた。

一番上の〈アイテム〉を見てみよう。

頭で（アイテムアイテムアイテム…）と念じてみると、アイテムの一覧のリストが開いた。

思うだけでいいのか、単純でよかった。

空中に指で操作とか、もし周りから見えていないのなら、ただの変人にしか思われなかつたろう。

携帯食料、応急薬、回復薬、毒消し、ウチケシの実、砥石、ピッケル、シビレ罨、……
使い方は分からないが、とりあえずハンパ無い数のアイテムがあることが分かる。

そんなにたくさん入っているように見えないが、もしやドラ○もんのポケット的な
ポーチなのかもしれない。試しに携帯食料を取ってみよう。

「出てこい携帯食料……おわっ！」

ポーチに手を入れて念じたら携帯食料を持つことができた。何て便利なポーチだ。

携帯食料は、つまるところおにぎりだった。この世界にも米があることが地味にうれ
しい。

食べてみると、塩味が効いていて、なかなかうまかった。

「どうやらアイテムはこの中にぎっしり入っているみたいだな……こうやって引っ張れ
ば、取り出せるぞ。」

独り言を言いながら、いろんなアイテムを出したりしまったりしてみる。

……お？アイテム情報も見られるのか。

おにぎりを頬張りながら、アイテム一覧の右にある文字の羅列に注目する。

シビレ罨を意識すると、情報を見ることができた。

「シビレ罨は…モンスターの動きを止めることができる罨…捕獲に使用可能…か。」

よくわからないアイテムの使い方もこれをヒントに何とかできるかもしれない。

捕獲というからには、敵がいて、その敵を捕縛するための方法がある、ということだ。その後は、一通り持っているアイテムの情報に目を通してみた。

次はやはり〈装備〉だ。

(装備装備…)と念じてみる。いけた。

やはり、自分の今の装備を確認したり変更したりできる項目のようだ。

何々…:ミヨシ村装束一式…:見切りLv1、精霊の加護Lv2、防御Lv2…:なるほど、わからん。

試しに装備を外してみようと〈全解除〉を選択してみたら、パンツとインナーのみになってしまった。

一瞬で着替えられるなんてすごいアイテムポーチだ…。

…:感心している場合ではない。

早く装備しなくては、変態の仲間入りをしてしまう。

(ミヨシ村装束一式を装備……)と念じてみても、何も起きない。やばい、装備できないと本当に変態の仲間入りである。

「〈装備〉からさっきの装備を選択して……よし、着替えられた!」

どうやら装備を付けるときは、単に念じるだけではダメらしい。

しつかり〈装備〉から選ばないといけないようだ。

それだけでもすぐ着替えられるのですごいことだが。

そして気になるのは、やはりこの「見切り」や「精霊の加護」の部分。

発揮できる自分自身の力のことだと推測はできる。そしてLvはその強さを表しているのだろう。

もういちど、情報画面をよく見直してみた。

「お? 〈スキル〉って項目があるじゃないか……これで情報は見られないかな……。おつ、いけた!」

〈スキル〉の項目で、先ほどの「見切り」などの説明が載っていた。

よかった……この情報画面、説明書のように使えるかもしれない。

「見切りは……会心率の上昇……Lv1で+5%……Lvは7まで上がるみたいだな。Lvが上がっても、どれだけ上昇するのかわからないみたいだな。じゃあ次、精霊の加護は……」

自分の持つスキルをこうして文字で確認できるなんて、新鮮だ。

前の世界なら俺のスキルはどんなのだったのだろうか。ふと気になった。まあ多分大したものじゃないだろうが。

一通り、スキルの確認を終える。

今俺に発動しているスキルは

〈見切り〉

〈精霊の加護〉

〈防御〉

〈砥石使用高速化〉

の4つだ。

精霊の加護は、低確率で相手の攻撃を3割〜5割ほど軽減するスキル。

防御は、そのまんま防御力が上がるみたいだし、砥石使用高速化もそのまんま、刀を研ぐのが速くなるスキルのようだ。

装備画面とスキル画面を見終わった。

すごいで、この情報画面。

少なくとも、全く何も無い状態で投げ出されるより1億倍いい。

ありがとう女神様……………！この情報画面で、俺、この世界を生きていきます……………！！

「他の画面も確認してみるか……………ん？」

……………今何か、足元が動いたような。

地震では……………ないと思う。

……………また揺れた。規則的に上下しているような感覚がある。

「まさか……………この岩つて……………！」

背もたれにしていた岩。座っていた岩。妙に温かさを感じられるその岩。その先を
目で追って、よく見てみると……。

「これって……顔と翼あ?!?!」

俺が初めて大型モンスターを出会っ（てしまっ）た瞬間だった。

03逃げましょう。

まずい。

まずいまずいまずい。

現状を簡単にまとめる。

一休みしていた岩が、実は大きな怪物の背中でした。

例えば、自分の周りに蚊が飛んでいたらどうするか。

答えは至極単純。打ち払う。

じゃあ、今目の前にいる巨大生物は、俺のことを見逃してくれるのか。

……思いつきり背もたれにしてゴロゴロさせていただいたわけだが。

そんなうつつとおしい羽虫のような俺を見逃してくれるのだろうか。

「ウヲオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「~~~~~!!!」

!!!!!!

ものすごい鳴き声……もはや雄たけび？ 咆哮？ が響き渡る。

思わず目をつぶって耳を押しさえる。

許してくれるわけがないよな。

同時にとんでもない恐怖心が心の底から湧いて出てくる。

「……み、見逃してくれませんか……。」

映画に出てくるすぐやられそうなしょぼい敵役のようなセリフが出てくる。

巨大生物の上だからということもあるが、腰が抜けて動けない。体が馬鹿みたいに震えている。

恐怖。これは恐怖の感情だ。

しかも上司に怒られたとかとんでもないミスをしたとか、かみさんの誕生日を忘れていたとか、そんな生易しいものじゃない。

生き物として、本能的に悟る。

今俺は圧倒的にピンチなのだ。

「グルルルル……グアア!!」

「うをおおお?!?!」

小便を漏らす暇も与えてくれないのか、明らかに不機嫌そうな大岩モンスターは、俺を自分の背中から振り落とした。

地面に衝突する。めちやくちや痛い。

血の味が口の中全体に広がる。

とにかく生き残らなければ。

気合を入れて立ち上がる。

足はまるで生まれたての小鹿のようにブルブル震えているが、何とか両の足で地面を踏みしめる。

怪物を見据える。

まずはとにかく大きい……。

公園のジャングルジムなんか優に超える高さ。何より圧倒的な存在感。

15mぐらい吹っ飛ばされたが、あまりの大きさに笑いが込み上げてきた。

体は岩に覆われていて、頭はごつごつのドラゴンのような風貌だが、体はずんぐりむつくりしている。

……岩が動いていると言われれば、そう見えなくもない……。

「ウオオオオオオオ……！」

「な、何かあれやばい気がする……?」

大岩モンスターが遠吠え?をすると同時に、口が光りだした! 体の岩と岩の間が赤く光っている。

まずい! 多分だが、あれはゴジ〇みたいビームが来る前触れな気がする……!

走る! 足がもたつくが、コケる前に足を出す! 先にある岩陰に飛び込んだ。

その直後だった。

怪物が口からビームを放った。

「……マジかよ……!!」

とんでもない衝撃を、岩を背にして受ける。ストロブの目の前に全身をさらけ出すよ
うな、それ以上の熱さを感じる……!

歯を食いしばって耐えた。おそらく時間はそこまで経っていない。2秒間ぐらいと
いったところなのだろう。でも俺の中ではとんでもなく長い時間に感じられた。

全身の感覚を確かめる。5体満足で済んだ……体が何とか反応したんだ。

「岩溶けてんじゃねえか……！なんで俺生きてるんだよ……!!」

大岩モンスターを見る。とにかく観察、隙を見つけて逃げるしかない。

どうやらヤツはそこまで速くない。体が重いのか、のっそのつそと歩いて俺に向かってくる。

少し落ち着いてきた。死ぬかもしれないという状況だと人間落ち着くもんだな……。

「グルルルル……」

「ん？なんか様子が……？」

明らかに最初より挙動がおかしい。動きが遅い。もしやチャンスなのではないか。

ビームを放つと遅くなるとかそういうモンスターなのか……？ダメだ。情報が足りない。

情報……情報……。

「あつー！」

あるじゃないか、情報画面が！

さつき見ていた、俺への神様からのギフトが！

急いで情報画面でモンスターの情報が無いか探す。

モンスターモンスター……モンスター一覧のような画面は無い……ん？ハンターノート？

「これか!!」

〈ハンターノート〉という項目を開くと、モンスターの情報はおろか、武器やアイテムの使用方法や、町の情報などが見られるようになっていた。

だが、今はゆっくり見ている時間は無い。

とにかく今は目の前にいるモンスターの情報を見つければ。

「グオオオアアアアアア!!!!」

「ツ!!やばい!動きが元に戻ってきた!」

情報画面越しに見える大岩モンスターは、先ほどよりは明らかに体が軽そうに動き出

している。

時間の猶予はなさそうだな。急いでモンスターの一覧を開く。

「これだ……バサル……モス……。」

〈モンスター情報〉の中に、唯一名前が載っている。他はみな、「????」と表示されている。恐らく、見たことのあるモンスターの情報しか開示されないんだろうな。

アニメ版のポケ○ン図鑑みたいな。

【モンスター名】バサルモス

【種族】飛竜種

【別名】岩竜

【詳細】

鎧竜グラビモスの幼体。成体の半分ほどのサイズで比較的小となしいが、外敵と判断した相手には積極的に襲い掛かる。

普段は背中だけを地表に出した状態で岩に擬態している。岩の様な外殻は圧倒的な強度を誇り、並の攻撃では歯が立たない。

筋肉の発達している腹部だけは若干装甲が薄く、割れると大きな弱点となる。……

驚いた。

すごいぞ。

ついさつきまで見たことも無かったモンスターの情報が、ここまで網羅されているとは。

恐るべしギフト。

ここで少しわかったのは、腹部が弱点……とまではいかななくても、弱い場所ということ。

よし、じゃあ反撃だ!!

……などと言えたらかつこいいのだが、それは無理だ。

こちとらずぶの素人。武器も何も持っていない。

だが、ある一つの考えが浮かんできた。

情報画面、アイテム、ギフト、でかいモンスターの腹……なるほど。これは、いけるかもしれない。

俺は、ゆっくりと迫りくるモンスターを前にして、多少は反撃をしてみようと決意した。

どうせ拾った命だ。やってやろうじゃないか。

04 撃退しましょう。

見晴らしの良い草原。ところどころ大きな岩や木が生えている。

空は曇天。まったく知らない世界にやってきたというのに、心躍ることなんて一つもない。

とにかく生きなければならぬ。

生存本能が告げるのだ、「頭を使い！何とか切り抜ける！」と。

とにかく目の前にいる大岩モンスター、バサルモスを、何とかしなければ。

〈モンスター情報〉の画面で、こいつの弱点や生態は何となくわかった。

もしかしたら、多少ひるませることができるかもしれない。

逃げる隙を作れば、こいつはそこまで速くないから、逃げ切れる目算はある。この体なら。

「グルルルル……。」

「こゝ、こゝええ!!……けどーやるしかない!」

ズシンズシンと、テレビの中でしか聞いたことの無い効果音が、リアルに鳴り響く。その度に、俺の弱虫が「はよ逃げや」と忠告してくる。うるさい、俺は反撃するんだ。

考えた行動に移る。

とはいってもやることは単純だ。

さっき見たアイテムの中で、こいつを足止めできそうなもの。

そう、シビレ罠を使う。

シビレ罠は、基本的に「弱った敵を捕獲するのに使用する」他に「相手の自由を奪うことができる」らしい。

なので、動けなくなったバサルモスにある程度ダメージを与える。

そこでもう一つ。恐ろしいものを見つけている。

アイテムポーチに「大タル爆弾G」なるものが、二つ入っていたのだ。

この爆弾、持ち運びもできないほど大きい。

だが俺のアイテムポーチなら入る。入ってしまう。

「アイテム」ならば、何でも入りそうだ。

シビレ罨を何とか仕掛ける。

罨とか言うぐらいなんだから、多少の足止めにはなる……はずだ。

かかった瞬間大タル爆弾を二つ設置。しびれている間に爆弾に着火。そしたらひたすらに逃げよう。

もしかしたら腹の装甲とやらが剥げて弱点になり、チャンスになるのかもしれないが、あいにくこれ以外に攻撃が思い浮かばない。

第一、武器もないのだ。

頭の中でやることの算段が付いた。

あとはやる気だ。気合だ。

「ふうー……。よしー！」

深呼吸して、気持ちを整える。

バサルモスが、後ずさりする俺に近づいてくる。

さっきのビームを放つ様子はない。成人男子が歩くぐらいの速度で俺を追ってくる。

「……………今だ!!」

振り返り、とにかく全速力で反対方向に走る！

追ってくるバサルモス。

だが遅い。少しずつ距離が開いてくる。

この体、めちやくちや軽い。いくら走っても疲れない気がする。

やはり加齢とは恐ろしいものだ。

このまま逃げ切れるかとも考えたが、バサルモスには翼がある。

モンスター情報では飛ぶことができるらしい。

何とかダメージを与えて、逃げる時間を稼ぐ。

距離が少し開いたところで、急いでアイテムポーチを触り、アイテム一覧からシビレ罠を選択する。

途端に「ドサツ」と、シビレ罠が落ちて、そして地面に「カチツ」と設置された。

……全自動？俺は何も仕掛けなくていいのか？楽な罠だな！

おそらくこれでいい。はずだ。やってみなくちや分からない。

もはや博打だ。

バサルモスはのっそのっそと俺を追ってきている。

心なしか疲れているようにも見えてきた。

人間、慣れるものだ。初めは怖くて仕方なかったのに、今や落ち着いて相手を見るこ
とができる。

怖いけど！めちやくちや怖いけど！

「おい！こつちだバサルモス!!こつちにこい!!」

「グアアアアアアアアアア!!!」

俺と罨の延長線上にバサルモスが来るようにして、相手を挑発する。

すると、突然。

ゆっくりだったバサルモスが、頭を突き出してこつちまで突進してきた。

あまりの急な速度の変わりように、何の対処もできない。

「あ、死んだわ。」と思った。目の前に迫ってくるバサルモスに思わず目をつむった。

……。

……。

あれ？生きています？

目を開ける。

「ク……オアアアア……！」

目の前には、罨が発動して、びりびりと音を立てながら、動けないでいるバサルモスがいた。

シビレ罨、成功だ！

バサルモスが、うまいこと罨に引っかかってくれたようだ。

しかも俺と衝突寸前のところで。目の前にはバサルモスの苦悶？の表情が見られる。……死ぬかと思った。

しかしこいつ、近くで見ると厳ついなあ……。

……観察している場合ではない。急いで腹部に大タル爆弾Gを二つ設置しよう。

シビレ罨はどういうわけか、バサルモスにしか効いていない。俺には一切痺れが来ないのだ。

原理がよくわからない。

もうどうにでもなれ精神で、情報画面の「アイテム一覧」から、大タル爆弾Gを選んだ。2回選べたから2回押す。

すると俺の目の前にありえないぐらいでかいタルが現れた。

もうちよつと、ワイン蔵のタルぐらいを想像していたのだが……醬油蔵のタルぐらいあるなこれ。

これ全部爆弾!?こわっ!しかも2つ!?こわっ!

「やばい、巻き込まれたら死ぬな……離れたところから着火しよう!急げ!!」

アイテム情報には、小さい刀やクナイ、石ころで着火は可能、と書いてあった。

俺は石が当てられそうな15mほどの距離を開けて、ソフトボールぐらいの大きめの石を構える。

爆弾の位置は、想定通り腹部の下。まだバサルモスは、痺れ続けている。

「爆弾を起爆させるには、爆弾上部に強い衝撃を与えるとよい、か。よし!」

シビレ罨がだんだんと弱まってきた。もう少しでバサルモスが動き出すだろう。深呼吸する。

落ち着いて石ころで狙いを定める。

「いけっ!!」

石を思いっきり、爆弾めがけて投げる。

念のため、3〜4個石を持っていたが、運よく全力投球が、タルの上部に当たってくれた。

やはりこの体、身体能力がハンパ無い。ものすごい剛速球だった。

「ガッ」とタルに石が当たった。

頭の中で「よしっ!」と思った、その次の瞬間だった。

ドゴオオオオオオオオオ

!!!!!!

「
!!!!!!」

ハチャメチャな爆発音とともに、俺は吹き飛ばされた。

05人里を見つけましょう。

爆風は、本当に凄まじいものだった。

15mくらいは離れていたはずの俺が吹っ飛ばされたのだ。

「……………背中いつてえ……………指は…動く…頭も足も平気か……………」

思わず受け身を取ろうと体を丸めたのがよかったのか、背中に痛みがある程度で済んだ。

「……………そんなことより、バサルモスは!?」

まだ煙と火薬の臭いが残る爆破跡に目を凝らす。

草原の風で、徐々に視界がよくなってきた。

バサルモスは、爆破跡の土の上に横たわっていた。

爆破の影響で翼がひしゃげている。モンスター情報の通り腹部が弱かったようだ、血が流れて大きな傷になっている。

「クオオオオオオ……!!」

苦悶の声を漏らしているバサルモスだが、立ち上がる様子は見られない。

まだまだ生命力にはあふれているようにみえるが、すぐに逃げた方がよさそうだった。

「すまん……これも俺が生きるため……! すまん!!」

心なしか憎々しげに俺を見つめてくるバサルモス。

相当のダメージを食らわせることができたと思うが、俺はもうこれ以上、こいつを傷つけることはできない気がした。

こつちが勝手に岩場と間違えたのだ。だからあつちはこつちの命を狙ってきた。

「喧嘩両成敗ってことで……許せ。」

そう言つて俺は振り返り、全速力で駆け出した。

* * * * *

「はあつ……はあつ……!!こ、ここまで来ればっ!!大丈夫だろっ!!」

とにかく一目散に逃げてきた。もはやバサルモスなどどこにいるかわからない。

ここに来る途中、遠目に小さなモンスターが見えたりしたのだが、スルーしてきた。

バサルモスと比べて小さいというだけで、子どもぐらいの大きさはありそうだった
が。

「暗くなってきたし……何とかしのげるところは無いかな……?」

困ったときに役立ちそうな情報画面を確認してみる。

もはやドラ○もんの四次元○ケット状態である。

できたら休むことができそうな場所に行きたい。

あわよくば、村や町なんかの人の住む場所ならなおよし。

何か情報はないか、情報画面をくまなく探してみる。

「お？・そういえば〈マップ〉があつたような……。」

バサルモスと戦っている時は無我夢中でスルーしたが、〈マップ〉があつた気がする。この情報画面があれば、この見知らぬ世界でも何とかなりそうな気がしてきた。

マップの中を見てみる。

まず今自分がいるところ、現在地が赤くマップ上に点滅している。

〈ザキミーユ平原〉か。マップには大陸全体が写っているが、その南東部に位置している。

中央南から北東部にかけては火山地帯と山脈が連なり、平原は大きく山と海に囲まれているようだ。

近くに何か町は無いものか探してみる。

タブレット端末のごとく、頭の中でスワイプしてみるとマップが拡大して表示され

た。

一番近いところに「ワサドラ」という村があるようだ。

この地図の縮尺がよく分からないため確証は持てないが、その村を目指して歩いてみよう。

何せ現在地が分かるのだ、迷うことはないだろう。

* * * * *

途中できれいな小川を見つけた。

なるべく上流の水を汲んで飲んでみる。

非常においしい。

生水はよくないのかもしれないが、四の五の言っではいられない。

異世界に来たからには、腹に寄生虫の一匹や二匹、飼う覚悟でいなければ。

そもそもこの体はなんだか丈夫な気がする。

ポーチの中の携帯食料を手早く食べ、再び街を目指すことにした。

転生初日に、大岩モンスターのパサルモスから逃走してかなり疲れはあるが、今日中にワサドラとやらに着きたい。

俺は少し疲れた足に気合を入れて、歩き出すのだった。

06村に泊まりましょう。

3時間ぐらい歩いただろうか。

遠くの方に、石の塀に囲まれた集落が見えてきた。あれがワサドラだろう。

ここまでに、実は何度か小さなモンスターと戦闘になりかけたのだが、「けむり玉」を投げてその隙に逃げるということを繰り返した。

「けむり玉」は、敵がこちらを見失ってしまうらしく、それを使ってうまく逃げられた。辺りが霧のように白んでしまっただけで驚いてしまったが。

これもアイテム情報画面のおかげだ。けむり玉が無ければ正直やばかった。

マップに書かれていた通り、ここはへワサドラで合っていた。

入り口の門に村の名前が書かれている。

ただ、想像と違って、村と言うには少々規模が大きいような…。

店など何も無い辺鄙な村を想像していたのだが、入り口から見える建物は、石造りで立派なものがあるし、何より入り口に門番が立っている。

門番が雇える村というならそれはもう町では…？

いや、村や町の定義なんて人それぞれなのかもしれないが。

村に入ろうとするなり、門番のおじさんに止められた。

そりやそうだ。

身分を証明するものは無いか聞かれたので、何も無いことを素直に伝えることにした。

「身分証明が何もない？……またこのパターンか。まったく、手続きは、こっちも大変なんだ。帰れる場所があるなら、すぐ帰るんだな。」

「いやー、帰るに帰れなくなつたと申しますか。どうしようもないんです……。」

異世界に転生して初の人とのコミュニケーション……言葉が通じること、何より人間と会話ができたことで感動していたら、何か変な物を見る目で睨まれてしまった。

「……おまえさん、何かやばいやつなんじゃねえか？」

「いやいやいや！至極まつとうな普通の人間ですよ！」

「そう言われてもなあ。……身なりはしっかりしていて、モンスターの討伐もしてきた

ようだが……もしや流れのハンターか？」

「ええと、実は……」

仕方がないので、気が付いたら平原に横たわっていて記憶が無いことを伝えてみる。間違っていない。

もちろん転生したことや神様と会ったこと、ギフトなどについては黙っておく。すまん、おっちゃん。

「……そうかい、大変だったんだなあ……。しょうがねえ、仮入村の手続きを教えてやるよ。ついてきな。」

「あ、ありがとうございます。」

その後は仮入村の手続きを行った。

証明書をもつていかないと宿に泊まったり買い物をしたりすることさえできないらしい。

というかおっちゃんがとてもいい人でよかった。

俺が敵とかだったらどうするつもりだったんだらうか。……まあ入れたから良しとしよう。

ひとまず体が疲れているので、ワサドラで数軒あるうちの一つの宿屋まで行くことにする。

アイテムポーチに入っていたお金と思しきものは、金色の硬貨が10枚、銀色の硬貨が50〜60枚、銅色の硬貨が8枚だった。

……バランス悪くない？

貨幣価値についてはよくわからないが、門番のおじさんの話だと、このワサドラに宿は3つしかないそうだ。

紹介された宿を目指して、歩いてみる。マップには絶えず、現在地と周辺の地理が簡単に載っていたため、迷うことはなかった。

宿屋に着いた。

外観は古いが掃除が行き届いていて清潔感のある場所だった。

「ホエール」という、名前が珍しいこの宿は、腰の曲がったおじいさんが経営していた。

1泊の料金である銀貨2枚を渡すと、おじいさんは笑顔で2階の客室まで案内してくれた。

「夕飯は食べていくかの？別に500zもらうが。」

「じゃあお願いします。部屋で食事をとることはできますか？」

そういつて銀貨を1枚渡すと、銅貨が5枚返ってきた。

なるほど、銅貨10枚で銀貨1枚、銅貨5枚で宿の夕飯が食べられるぐらいの貨幣価値という感じか。

10枚で次の価値の硬貨一枚分だと仮定する。銅貨5枚で夕飯一食、500円と考えればわかりやすいか？

そうすると、銅貨8枚は800円ぐらい、銀貨50枚は5万円ぐらい、金貨10枚は10万円ぐらいかな？

銅貨1000円、銀貨10000円、金貨100000円と覚えよう。

「部屋でも食事はできるし、下の食堂でも食べられるからの。好きな方を選んでくれ。」

ありがたい。すぐにでも休みたい衝動に駆られるが、腹もすいているし、体もきれいにしたい。

そういえばこの宿は風呂があるのだろうか。いや、文化レベル的に風呂というより、

体をふく程度である可能性が高い。

案の定、部屋についてしばらくすると、おじいさんがたらいに入った桶と布を持ってきてくれた。

「ここに客が来るのは久しぶりでの。ゆっくりしていくといい。」

そう言うと、しわくちやの笑顔で頭を下げ、おじいさんは部屋から出ていった。

この村に来てから2人の人間と出会ったが、二人ともいい人過ぎて心配になる。

そうして体をきれいにし、夕飯を食べた。

今日はいろいろあった……女神さまに転生させられ、バサルモスから逃亡し、見知らぬ土地を歩き続けて……。だめだ、振り返るにも、疲れがたまりすぎている。

こうして俺は、力尽きるようにベッドで寝てしまうのであった。

07 神託を授かりましょう。

「……じさん。双治さん。」

「ふああいつ!!」

頭の中に響く美しい声：女神さまからの声だ。

大きな声を出してしまった。

窓から見えるのは朝焼けの空。昨日泊まった部屋で間違いない。

昨日のようなウユニ塩湖。パターンでは無いのか。

だんだんと目が覚めてきた。女神さまの声が続いて響く。

「……昨日ぶりです。お元気ででしょうか。」

（元気です。まったく現状が掴めないままですが、とりあえず転生初日に宿に泊まることはできました。）

……とりあえず心の中で会話を試みる。

宿「ホエール」のおじいさんに、独り言の多い変な奴だと思われたくない。

「会話は問題ありませんね。実は、双治さんが心配で駆け付けました。初日にまさか命の危機に見舞われるとは。」

（女神さまに直接心配いただくほどではないですよ。）

「いえ、アフターサービスも兼ねておりますので。それに……。」

（……それに？）

気にかけていただけたなら、ありがたい限りだ。

というか、バサルモスと戦ったのは、神様からしても「まさかの事態」だったのか。

まあ死ぬかと思っただし。

「いえ、双治さんの転生の話が、神様SNSでたいへん話題になりました。バサルモスから逃げになる手腕、知識も何もない中でたいへん見事だった、と、この世界の神も言うておりました。」

（それは……女神さまのギフトのおかげといいますか、むしろそれが無ければ何もできなかつたといえますか……。）

「神様SNSの方も、控えめに言っておバズりました。」

(……は?)

「というかデイリーランクで一位です。このままいけばウィークリーとマンスリーもランキング上位は堅いかと。」

もう何を言っているのかわからない……。どういうこと??

「ですので、簡単に言うと、双治さんは今、バズっていらつしやいます。そもそもその存在自体が、少し珍しい方なので。」

(……私は、神様の方々からちよつと注目を浴びている。それで私のその後が気になった女神さまは、野次馬根性7割で私のことを見に来た。というわけでしょうか。)

「あいかわらず、察しがよくて助かります。あと野次馬根性、9割です。」

ほめてないぞ。皮肉だぞ。正直すぎるぞ、女神様。

でもまあ……神様世界でどんなに話題になろうと、俺自身には何の影響もなさそう。

「なので一つ、私から神託を授けます。」

(し、神託?)

「ぶつちやけた話、お願い、というやつです。」

ぶつちやけてきたなあ、この女神様。

まあいいです。

命の恩人である女神さまに何をお願いされようと、聞こうとは思っておりません。

(女神さまの言うことは正直断れませんね。どのようなことでしょうか。めつちや怖いのですが。)

「そこまで構えずに。」

構えるつちゆるいの。

とにかく、そのお願いとやらを聞いてみよう。

「実は、昨日のような戦いを、今後もコンスタントに行っていてほしいのです。」

(……はあ?)

3秒ほどの沈黙の後、俺は結構失礼な返事を申し上げたのだった。

08 これからの生き方を決めましょう。

異世界に転生して2日目の朝。

俺は女神様と頭の中で会話を行っていた。

そして神託という名の無茶ぶりを受けていた。

……窓から見える朝焼けのキレイさに、現実逃避したくなる。

ああ、どんな世界でも、朝は美しいなあ……。

「昨日のような戦いを、今後もコンスタントに行って行ってほしいのです。」

(2回も言わなくていいです!というかそれ、どういう意味ですか??)

なぜ俺がモンスターと戦い続けなければならないのか。

何とか食いつなぎながら、この世界で適した職業を探しつつ、第2の人生をエンジョイしようかな〜とか考えていたのに。

「では、このお願いに至った経緯をお伝えします。」

(よろしくお願ひします。)

「はい。」

一から説明を聞くことにした。

この人…ではなくこの女神様、何か気をつけなきゃと思い始めた。

「まず、私はあなた方が捉えているところの地球の女神です。」

(それは……聞きました。)

「そして、神々は様々な物体、事象、概念……ありとあらゆるところに存在します。双治さんに分かりやすく例えると、八百万の神々、というところでしょうか。」

そうして女神さまは、背景となる神様事情を話し始めた。

難しい話にもなってきたが、かいつまんで、分かりやすくまとめるところなる。

①生命体増えすぎで概念も物体も増えすぎ神様増えすぎ。

神様間の認識にどうしても齟齬が発生するわー。

↓神様同士のネットワークを強固にする必要があるんじゃない？

⇒神様版インターネット作ったわ。

②神様間のコミュニケーションに革命起きてね？

↓神様間のネットワークで発信受信が盛んになれば、神界全体が盛り上がるんじゃない？

⇒神様版SNS作ったわ。

③SNS大流行じゃね？

でも何か神同士のやりとりも飽きてきてね？

もつと下々に目を向けたら面白いんじゃない？

↓地球女神「うちの時断崖喰らって転生した人間テラワロスww」

⇒バズりまくる。そんなレアキャラの奮闘記とか超面白そうなんですけどー。

「………という感じですよ。お分かりになりましたでしょうか。」

(はい……、それはもう……。)

いやいやいや。

いやいやいやいや。

何してくれちゃってんのよ女神様!?

俺が目立つたっていうか、女神様が勝手に目立たせてくれちゃってますよね!?

「地球側への広告収入も相当なものになりそうです。ありがとうございます。」

（お礼言われても仕方がないんですがそれは）

「ありがとうございます。」

（反省しないつもりですわねわかります……）

その後も、女神さまの自重しないSNSはつちやけ話を聞いた。

（つまりは、時の神という高次元すぎる神のミスでこの世界に投げ出されたレアキャラな俺が、さらに頑張る姿が見られれば、もうバズりまくるだろうと。そういうことですね……?）

「はい、そうです。」

(で、その奮闘する姿は、モンスターと戦う必要はあるんでしょうか?)

「ここが聞きたい。異世界にいるレアな存在の俺が、一生懸命生活するだけではダメなのか。」

「仮に双治さんが普通に異世界で生活する様子……だけでは、正直あまり面白くないと思います。神々はかなりの数で好戦的な方が多いですし、戦って強くなる姿が見たいのではないかと予想します。」

(……私が仮にその要求に応えなかった場合は……。)

「いえ、双治さんは100%応えます。」

(いやいや、お待ち下さい！本当に！私は、別に世界最強を目指したいとか、凶悪なモンスターを打倒したいとか、そんなことは考えてませんよ!?)

「……本当ですか?」

(……ええ。)

「本当の本当に、心の奥の双治さんご自身に尋ねてみてください。」

女神さまは一拍置いて、こう言った。

「好きではないですか？ こうした、剣と魔法の世界が。」

(……………)

「強くなる主人公が。成り上がりが。」

(……………)

心の奥底の自分が答える。

……好きだ。

ああ、そういうのは大好物だ。

手に取る漫画や小説も、そういう趣向のものが多かった。

強くなる主人公が好きだった。

弱い自分を、主体性の無い自分を、強くなっていく主人公に投影した。

そして夢想しては、楽しんでいた。

そして今。

俺の目の前の、この世界に俺は来ている。

神の不手際で、何かよくわからないままに。

ただ、この状況を楽しんでいないと言え、嘘になる。

だってこの世界は。この世界は……。

「非常にこの世界は単純にできています。すなわち……。」

(……)

「喰うか、喰われるか。」

(ツ……！)

単純だ。昨日の俺がそうだ。

「血沸き肉躍る、この世界で、双治さん。強くなってみませんか。私は、そう願っていらつしやるとわかった上で、この世界が向いているとわかった上で、ここに送りました。……SNSでバズった件に関しては、たいへん申し訳ありません。あそこまで反響があるとは思いませんでした。ですが、つまりそれは、多くの神々があなたの活躍を期待しているということです。」

第二の人生が始まった。いきなりの大型のモンスター。

怖かった、ちびりそうだった。

でも、死にたくなかった。負けたくなかった。

「その不屈の気持ちでこの生を全うされることを、我々は期待しています。」

(……)

「世界が変わり、私がお手伝いできることはあまりありませんが……私のギフトを……活用いただければ、多少は双治さんの力になると思います。」

……なりたい。変わりたい。

強くなつて、第2の人生を過ごしてみたいな。

「……ありがとうございます。肯定いただきまして。」

顔が見えないまま続く、女神さまとの会話。

目の前には宿の窓。そこから見える村の家々と、朝焼け。

だが、目をつぶれば、そこに女神さまの笑顔が見えたような気がした。

(……やってみますよ。あがいて見せます。正直怖いし、逃げたい。でも、せつかくだから、憧れた姿目指して、四苦八苦してみせますよ。)

「……とても意志のこもったお返事ですね。かつこいいと思います。」

女神さまにほめられたのはこれが初めてではないが、妙にうれしかった。

……やってみよう。中身はおっさんだが、肉体は若い。夢を見るのにはまだまだ十分な年齢と言える。

せいぜい頑張ってみようじゃないか。

とりあえず、この世界で、昨日のように戦う職業って何だろうか。女神さまに聞いてみよう。

(で、女神様。手始めに私は何をすべきかー。)

「さあ、それではこれから忙しくなりますね。まずはそちらの世界の神に正式に許可をいただきましょう。私のアカウントだけで発信するのも限界があるでしょうから様々

な神々に観測いただいて双治さんの様子をアップロードしていく形にしましょう。S
NSの利点を存分に生かしてもはや私でも制御しきれない一大コンテンツに成長させ
……そういえば中継映像の配信や本人インタビューという形もできますね。これはし
ばらくはわたくしが独占権をもって行使していく形が望ましいでしょう。ゆくゆくは
記者発表のような形で各SNSやニュースサイトに多重配信を行ってもらおうというこ
とも可能です。そしてゆくゆくは……」

……あのー？女神様？聞いてます？もしもし？女神様？

「それでは双治さん、私は失礼いたします。ぜひとも、その一生懸命な姿勢を崩さず、頑
張ってください……。」

（あのっ！まだ聞きたいことが!!）
「応援しております。」

……。

……。

切れてしまった、のか？

……ま、まあいいか。とりあえず、神と呼ばれる方々がご所望なのは一生懸命生きて、できれば戦う姿、ということだった。

そしてそれは、俺も望んでいるんだ。

気づかされた形だが、自発的に、頑張っていきたいと今思っている。

「……頑張っていこう。」

朝日がすっかり昇り、眩しい。だが、新しい出発には何とも心地よい。

そんなことを感じながら、俺はポーチを腰に付け、新しい一步を踏み出すことにした。

……女神さまに一抹の不安を感じながら。

09 モンスターを倒す職業について知りましょう。

宿の一階では、朝食が用意されていた。

固めのパンに、ベーコンと野菜が入ったスープ、ドリンクは柑橘系の果実のジュースだった。

とても美味しそうなおいがして、食欲をそそる。

昨晩の夕食もうまかった、この世界の食事レベルはかなり高い。

「…おはようございま……おじいさんはいないのかな？」

何となく独り言をつぶやく。

女神さまとの会話？ 念話？ では全くしゃべっていなかったからか、妙に声を出して話をしたい欲求に駆られてしまう。

周りには誰もいないことが分かり、ほっとした。

ところが、その独り言に、返事が返ってきた。

「おじいちゃんなら、いないよ？ 今頃裏手でなんか作業しているんじゃないかな。」

「お、君は……?」

少し驚いた。受付にも誰もいないかと思っていたら、そのカウンターの向こう側からひよっこりと、女の子が顔を出してきたのだ。

歳は中学生ぐらいだろうか。7分丈のズボンとTシャツにエプロンを身に付けている。

茶色がかった黒髪のパブカットで、鋭く大きな目が、どこことなく猫を連想させる。

「私はドール……って言います。ようこそ、宿屋『ホエール』へ。狭いし古いけど、ゆっくりして行ってね。」

「ありがとう。俺は……ソウジ。」

「ソウジさんね。知ってるよ。宿帳見たもん。」

淡々と受け答える姿は、体育会系の女子、って感じた。

そうだよな、さすがにおじいさん一人で切り盛りできないよなあ。

「その朝食、私の手作り。冷めないうちに食べて。感想、後で聞かせてね……聞かせてく

「ださいね。」

「ははは、無理に敬語つかわなくてもいいよ。」

「そう。助かる。ありがとう。」

「ああ、じゃあいただきます。」

両手を合わせて、フォークを手取る。

一瞬変な顔をされたが、日本式のいただきますは染み付いた習慣なのだ。許してほしい。

* * * * *

「そうだ、ドールさん。聞きたいことがあるんだけど。」

「さん付け、しなくていいよ?」

「じゃあドール、教えてほしいんだ。」

中身的には一回り以上年下なのに、しっかりしている子だ。

今一番聞きたいことを素直に聞いてみることにした。

「モンスターと戦う職業、といえば、どんなのが思い浮かぶ？」
「……え？」

キョトンとされてしまった。質問がまずかったのだろうか。

「い、いや実はね……。」

取り繕うように、俺は昨日の門番のおじさんにした、記憶喪失（という設定）の話をしてみた。

「というわけなんで、事情に疎くて、変な質問したなら申し訳ない。」

「そうか……。ごめんなさい、ソウジさん。私よくわかっていなくて。」

話をするなり謝られてしまった。

やはりこの村、いい人が多すぎる気がする。大丈夫なのか。

「いやいやいや、分からなくて当然だ。俺もいきなり、ごめん。」

「ううん、私てつきりソウジさんがプロのハンターさんなんだって思ってた。一式装備身に付けているし、筋肉もそれなりについていたから。」

「……は、はんたー?」

聞き慣れない単語が出てきた。

「うん、通称ハンター。モンスターハンターのことだよ。」

「モンスターハンター……それがつまり、さっき俺が質問した……。」

「そう、この世界に生きる人なら、だれでも必ず知っているよ。モンスターと戦う人なんて、みんな『ハンター』って答えると思うよ?」

「そうか……ありがとう。」

やはり、常識レベルのことだったらしい。

よし、とにかくそのハンターとやらに、なってみよう。

「じゃあドール、最後の質問。そのハンターとやらになるためには、どうしたらいいの?」

「村で一番大きな建物に行つて、登録すればいいんだよ。」

「と、登録？」

「そう。『ハンターズギルド』にいつて、ハンター登録してくれば、ハンターになれるんだ。」

学生時代、派遣のバイトをしていたことを思い出した。

登録講習受けて、いろんなバイトを請け負ったものだが、あのノリなのだろうか。

「でも、ハンターになる前にやるべきことがいっぱいあつて——」

「じゃあひとまず、そのギルドつてところに行つてみるよ。」

「……えっ!？」

「ごちそうさま。部屋はもう一泊していききたい。きれいにしているつもりだけど、汚れていたらごめん。」

「そ、そうじゃなくて、ソウジさん、ハンターになるの!？」

「ああ、試しにね。」

「試しに、つて!悪いことは言わないから、やめておいた方がいいつて!」

「すまん、スポンサーが望んでいることでさ。危ないことは重々承知だ。」

命を賭ける仕事なんだもんな。そりや止められもするよ。

やつぱりいい子だな、このドールつて子。

頭もよさそうだし、おじいさんが溺愛しているのではないだろうか。

「行ってくる。今夜もここに泊まるつもりだから、よろしく頼んだ。」

「す、すぼんさー?……え、えええ……。」

肯定とも否定ともとれないドールの返事だったが、まあ部屋は取っておいてくれるだろう。

そう楽観的に考えながら、俺は村で一番大きな建物へと足を向けた。

10 現実の厳しさを思い知りましょう。

ワサドラ村……もう俺の中では町と言っても遜色ない、そんな規模の村の中で、ひと
きわ大きな3階建ての建物があつた。

石造りで、よく言えば迫力のある、悪く言えば雰囲気悪い、そんな建物だ。

なんとなくバサルモスを連想させるのもよくない。俺のトラウマを刺激してくる。

「でっかいなあ……。」

現代日本で様々な巨大建築物は見てきたはずなのだが、この建物のもつ独特の雰囲気
はすごい。

威厳を感じるとともに、おどろおどろしいような。

どこか、入ってはいけなところ感じてしまう。

まあ入るんだけど。

石造りの建物の入り口には、「ワサドラ冒険者ギルド」という看板が掛かつてある。
とりあえず入ってみた。

正面と右手にカウンターがあり、何人かのハンターのような人が、受付の方々に対応を受けている。

左手は食事をするところまでであるようだ。というよりも、酒場のような雰囲気だ。さすがにこの時間に飲んでいる人は少ないのか、閑散としている。

天井には、まるで市役所のように案内板があちこち垂れ下がっている。迷わずに「冒険者登録」の窓口まで来ることができた。

「冒険者の登録に来ました。」

なるべくにこやかに、受付の女性に話しかける。

第一印象は大事だ。社会人の基本にして全てと言ってもいい。

「こんにちは！ハンターの登録ですね？」

「は、はい。」

緊張して声が裏返ってしまったが、逆に初々しい印象を与えられたようで、にこやか

に対応してくれた。

お姉さんは、おそらくギルドの受付の制服と思しき服を身にまといつている。受付台に隠れて上半身しか確認できないが、めちやくちや美人さんだ。

「それでは、こちらをご記入下さい。代筆や代読は必要ですか？」

「多分大丈夫です。…もし必要ならお願いします。」

「わかりました！」

自分が文章を書けるのか、読めるのか、それさえ分からない。何とかなるだろうと思つて返事をしてしまったが、文字なんて転生してから書いてない。大丈夫だろうか……。

「はい！ありがとうございます。きれいな字でとても読みやすいです！」

……普通に日本語を書いたつもりなのだが、ほめられてしまった。

これもギフトの一部なのだろうか、鉛筆で文字を書くとき、思いのままに書くことができた。

次は、受付のお姉さんとの簡単な面接が始まった。

「ソウジさん……ですね。ハンターズギルドは、その方にあつたクエストを紹介・斡旋し、ハンターの方々と依頼主が同時に笑顔になれるよう、お手伝いをする機関です。そのため、ハンターとなられた皆さんには、必ずこうして簡単な面接を行っています。たくさん質問しますが、よろしいですか？」

それは納得だ。犯罪者やよからぬことを企むやつはどこにでもいるものだし。

「はい、大丈夫です。」

「それではよろしく願います！ではまず……。」

質問に答えていく。

「答えにくい質問は、お答えいただけなくて大丈夫ですよ。ではまず、ご出身は？」

「えと、覚えが無く……。」

「……記憶があやふやということですか？……では、得意な武器種やハンタースキルな

どは(ござ)いますか?」

「ぶ、武器ですか? ちよつとよくわからなくて……。」

「……では、以前なされていたお仕事などは……?」

「えと、資材管理です。クライアントに資材等物品を納品する業務の傍ら、そのシステムの構築や改善、現地の担当者との交渉など、あらゆる部門で仕事を行ってきました。」

思わず転職活動中の決まり文句のようなことを言ってしまう。

この世界に商社という概念があるかは知らないが、お姉さんの表情が「ほかーん」としている。

多分この答え方はよくなかった。うん。

「な、何かしらの商いを行っていた、ということですよね?」

「そ、そうです。」

フォローされてしまった。

だ、だんだんとお姉さんの顔が曇っていくぞ……。

* * * * *

結局面接は10分ほどで終わってしまった。

最後辺りの「あ、ダメだこの人何もわかっていない。」的なお姉さんの顔は忘れられない。

適正武器とか言われても、わからないものは分からない。

必要なら買うべきなのだろうが、そんなお金は無い。

稼ぐためには仕事をしないとイケない。

その仕事はハンター。

……詰んだ気がする……。

ハンターズギルドに登録され、無事にハンターになることはできた。

だがお姉さんは「ごほん」と咳をすると、少し険しい表情で俺に話しかけてきた。

「ソウジさん。これでハンターに登録することはできました。ギルドカードは、もうすぐお渡しできます。ですがその前に、私からソウジさんに一つ、ご提案をいたします。」

「は、はい。たいへんありがたい限りです。」

「まずハンターになれる方々の多くは、大きな街の養成所や、出身の町や村でハンターとしての経験を積み、ギルドに登録なさいます。」

「そ、そうなんですね。」

養成所なんてあるのか。

「確かに、全く何も経験の無い方が、いきなりハンターになるというケースも珍しくはありません。」

「はい。」

「ですが……そういった方々は、9割方辞められるか、行方不明になります。」

「……わあ……。」

「我々ギルドは、ハンターになる方を止める権利はありません。ですがこの状況を良しとしてはおりません。こんな村ですので、村付きのハンターになってくれるなんて、とつてもありがたいんです。」

切羽詰まっている状況なのですか？とは聞き返せない。

俺はかなりの異端みたいだから。

「ですので、せめて武器の扱いや採取の仕方といった最低限のスキルを身に付けていただければ……ということになりました。初心者ハンターの育成機関を、ギルド側でも設けることにしたのです。」

「それは、ありがたいことでは……」

「ですので！ソウジさん。講習会に参加して下さい！私たちが精一杯ハンターさんのサポートをします！先ほども申し上げましたが、村に貢献できるハンターさんになって下されば、私たちもありがたいんです！」

そうか、何のスキルもない俺みたいなやつが、だれでもハンターになれる。

よほどの食い詰めた者もやってくるに違いない。

一攫千金を求めて。

一種の救済機構のようなものなのかもな……。俺は今、この世界の社会の底辺にいる。間違いなく。

その後、受付のお姉さんから、ギルドの講習会の日程を聞いた。

何でも、新人ハンターが割と増えているらしく、そのほとんどは、さっきの話みたいに行方不明やら失踪やらあるいは……。

なので、その講習会とやらは、ほぼ毎日開設しているらしい。

しかも現役ハンターさんが。

ギルドカードと呼ばれる、ハンターの免許証みたいなものももらえた。

発行に銀貨5枚はかかるらしいが、ギルド側からお金を借りる形で払ってしまった。

正直財布の中が心許なかったので助かった。絶対に返そう。

そのまま明日の講習会の予約を行い、俺はギルドを後にするのだった。

11もう一度現状を確認しましょう。

宿屋「ホエール」に戻ってきた。

おじいさんの孫のドールに紹介されてギルドに向かった時は、多少ウキウキしていた。

「これからが俺の冒険の始まりだ！」と。

……。

「もう心折れそう……。」

部屋に入って冷静になって考えてみる。

そりゃ確かに都合が良過ぎたな。

何の経験もない俺が、命を賭けて活躍するような凄腕ハンターにパツとなれるわけない。

新人に、億単位の金が動く案件を任せると言われれば、答えは「NO」だ。

経験を積ませ、失敗も成功も経験させてから……と考えるのが、当たり前だし普通だ。

むしろ経験を積ませてくれる、初心者ハンター向けのシステムがこの村のハンターギルドに出来上がっていた、その幸運に感謝すべきだ。

「……前向きに考えれば、上出来だ。」

ギルドカードの発行代金を肩代わりしてくれたのは、借金をわざと背負わせてこちらが簡単にやめないようにするためかもしれない。

宿に2日泊まるぐらいのお金なんて、金持ちからしたらはした金かもしれないが、食い詰め者からしたら大金だろう。

発行代金以外にも、生活費や装備代金について不安があればここへ、と言われて紹介されたのは、明らかに堅気ではない方々が入りする建物だった。

あれはやばい。気がする。借りない方がいい。

サラ金、ダメ絶対。

お金と言えば、手持ちの残り金額も、そこまで余裕があるとは言えない。

換算してみたのだが、宿のおじいさんの言っていた「Z」を基準に考えると、現在15万とちよつとは金がある。

宿代が銀貨2枚で2000z、食事は銅貨5枚で500zと考えると、宿泊代と食事だけで1日3500z消費することになる。

この世界の暦がまだよくわからないが、単純計算でひと月とちよつとは持つと考えてよい。

だが、それ以外の支出に何があるかわからない。

焦ってきたぞ……。

分らないことだらけだ。とにかく情報が不足している。

この世界の日常生活に必要な知識さえ俺にはない。

ハンターになるための知識経験なんて、それはもう圧倒的に足りない。

情報が欲しい……情報……。

「あつ。」

……忘れていた。あるじゃないか。

俺にだけ許された情報源が。

おもむろに腰に手を伸ばす。ポーチに手をかける。

すると目の前に、まるでゲームのメニュー画面のような「ギフト」が浮かんでくる。これだ。とにかくこれで今できることを試しに試すんだ。

分からなかったことを、調べることができる。一人で解決できることがある。

ようし、そうと決まれば、さっそくまずハンターについて調べよう。

空中を眺めながら、さっそく「ハンターノート」の項目を選択する。

バサルモス戦で役に立ったこの項目。

あの時は後回しにしてしまったが、ハンターに関する記述もあつた気がする。

「ハンターの業務」、クエスト受注、武器種の選択、各武器種の操作方法……これめちやくちや大事なことを書かれていそうだな……。」

そう小さく、独り言をつぶやく。

時間はあるのだ、朝早くからギルドを訪れて、まだ昼食時でもない。

しらみつぶしにこれらの画面を見ていこう。

* * * * *

「なんてこった……大体的ことが分かってきたぞ……！」

恐るべし情報画面。

言いにくいのが、情報画面は情報画面だ。それ以上も以下でもない。とにかく恐れ入った。

ハンターという仕事については、ほぼ網羅しているのではないか。そう思えるほどだ。

まずはクエストについて……クエストとはつまり、ギルドにきたハンター向けの依頼だ。

これには様々な内容のものがあることが分かった。

受付のお姉さんが言っていた〈採取〉〈納品〉系のクエスト。

○○の葉が何枚欲しいだの、△△のモンスターの毛皮をいくつ納品してほしいだの、そういった集める系のクエストらしい。

また、モンスターを倒す〈討伐〉や、その場からモンスターを撤退させるだけでもクエストクリアになる〈撃退〉、畏による〈捕獲〉といった種類があるようだ。

なので、ハンターの業務は多岐にわたる。モンスターに関わる依頼以外にも何でも受けられる、と言った方がよいだろう。

次に武器種やスキルについて。この情報はもう、超有用だった。

武器種とは、そのまま武器の種類。

両手で剣と盾をもつ最もオーソドックスな〈片手剣〉や、両手で自分の身長ほどもある剣を使いこなす〈大剣〉。

遠距離射撃が可能な〈ライトボウガン〉〈ヘビィボウガン〉、演奏することでステータスを上げたりそのまま鈍器としても殴れたりする〈狩猟笛〉。

変わり種では虫を使ってモンスターからエキスを取りながら戦うという〈操虫棍〉など。

とにかくたくさんさんの武器が存在していた。

そして。そしてそして。

それらの武器全て、おれはポーチの中に持っていた。

意味が分からないかもしれないが、この小さなポーチの中に、数十種類の武器や装備が入っていたのだ。

なぜ気付かなかったんだ……。そしたらバサルモス戦でも多少は戦えたのかもしれないのに。

……嘘です。武器の扱いなんて分かりません。思い上がってすみません。

これらの武器は、一瞬で装備することができた。

と言つても「持っている片手剣を装備したい。」と念じるだけではダメだった。情報画面の〈武器装備〉の画面から選択する必要がある。

これは〈装備〉と同じシステムだな。

選択したら……いつの間にか、自分で剣と盾を手にしていた。

……これはすごい。本当にゲーム画面の中のキャラクターになった気分だ。

選んだ武器の名前は、「ハンターズナイフ」というらしい。

初心者用の武器で、他の武器も見てみたが、全て初心者用だった。

そして、右腕には、肘から甲まで覆うぐらい大きさの盾が付いている。

説明書のように〈操作方法〉という文字を見付けた俺は、ムズムズする気持ちを抑えられず、部屋を飛び出した。

* * * * *

「読んだだけではよくわからんからなー」

実際に剣を振ってみなくては、何とも分かりづらいだろう。

なので、さっそく試してみたくなった俺は、宿の庭を借りて素振りをしに行うことにした。

〈武器装備〉で武器種をバカスカ変えていたら、ドールやおじいさんに変な目で見られそうなので、とりあえず片手剣を装備したまま行ってみる。

ちなみに、体の装備は、以前と同じへミヨシ村装束一式だ。

昨晩体を拭くときに、全て外してポーチにしまっていたのだが、汚れがある程度落ちて綺麗になっていた。装備の洗浄効果もあるのか、このポーチ。

庭は、前世の学校の多目的室ぐらいの広さがあった。

宿の建物に四方囲まれる形で、屋根はなく空が見える。その隅の方をお借りした。おもむろに片手剣を構える。

周囲には何も無いが、一応確認。うん、何もない。

まずは思い切って振ってみるか。

「鞘から出して、と。……よー……ハッ……ヤあッ！」

……うん、まるでなっていない。笑えるほどなっていない。

素人ながら自分でもよくわかる。

体は非常に軽やかだ。しなやかで素早く動けるし、力もあると思う。

おそらく前世の俺がこの剣を振ったら、多分剣に振り回されて自滅するだろう。筋肉痛どころではない気がする。

多分この体、やれと言われれば、バク中とかできる気がするし。

「体は軽いんだよな……技術が伴ってない感じ……。」

癖になってしまった独り言をつぶやく。

このまま振り続けても意味がない、と断じた俺は、空中に〈操作方法〉の画面を出してみる。

「斬り落とす……としか書いてないんだよなあ。」

それだけしか書かれていないのだ。

何かこう、やり方とか練習方法とか書いていないものか……。
そう試行錯誤を続けている最中だった。

「ねえ、何してるの？」

「おわっ！」

「わわ、びつくりしないですよ。私だよ、ドール。」

急に話しかける女性には耐性がついてきたと思っていたが、そんなことはなかった。

「すまん、驚いてしまった。」

「集中してたんだね、結構前からいたんだけど。」

「気付かなかった。」

「いいよ。ハンターさんって集中するとすごいって知ってるし。」

他人には見えないこの画面と、にらめっこしていただけなんです。
そんなことを白状できるわけもなく、会話を続ける。

「いつから見てたの?」

「えつと、剣を振った音が聞こえて、ソウジさん帰ってきたんだって。それで見に来たらすごい顔で集中していたから。」

「そうか。いや、恥ずかしい……。」

「気に障ったらごめん。続けていいよ。」

年下の子どもに気を遣われて、何とも申し訳ない気持ちになる。

……でも人から見てもらうのはありじゃないか?

「……ドールは、いろんなハンターを見てきたのか?」

「どうかな。宿に泊まった人が、そうやって庭で練習するのを見るのは、好きなんだ。だから、見ていると言えば見てるかも。」

どうせずぶの素人なんだ。ドールは今までいろんなハンターを見てきている。

どんなもんか判定してもらおう。

こうして俺はプライドなど宇宙のかなたに放り投げ、実質一回り以上年下の少女に教

えを乞うことにしたのだった。

12 自分にできることを理解しましょう。

ドールに、剣の振りを見てもらうことにした。

いや、少女に何か師匠的な部分を見出したわけではない。

ただ、自分一人では煮詰まっていたのは確かかなわけで。

「じゃあ、いくぞー。」

「う、うん。」

さつきドールにお願いしたら、今まで見たことの無いぐらい目を見開いて「え？」という顔をされた。

そりやそうだよ。昨日今日会ったやつに「剣の振りを見てほしい」なんて言われてみる。

……キモい。

早まったかもしれない。でももう遅い。すでに構えてしまった。

ちなみにドールに「ハンターになることはできたが、初心者講習会をまずは受けるこ

とになった。」と伝えると、「よかった。」とだけ返事された。

知り合ったやつが、無謀なことに突っ込むよりはよほどいいよな。
優しい子だな、と改めて思った。

「まずは、斬り下ろし……ハッ!!」

そうして、自分でもよくわからないまま、〈操作方法〉に書いてあった技名を言つて、
剣を振る。

するとすぐドールから指導が入った。

「斬り下ろし? 片手剣の人って、もつと上から力強く振り下ろしてたよ?」

「そうなのか!?! ……じゃあ……こう?」

言われた通り、力強く振り下ろしてみる。

「うーんとね。ごめん、うまく言葉にしづらい。そんなに強くなって、次の斬りにつなげられるような感じで。」

「……もう少し力を抜いてみるか……。」

* * * * *

「……ハアツ！」

「あ、いいかも。それ。」

様になってきたらしい。やはり人に見てもらって正解だったかもしれない。

いや、ドールに見てもらって、正解だったかもしれない。

多少フィーリングな言語を使うが、非常に分かりやすかった。

ただ、流石に長時間拘束するのはどうかと思う。すでに30分ほどは見てもらって
いた。

「ごめんな、ドール。いい練習になったよ。ここからは一人で練習してみる。」

「そこは『ありがとう』だよ。謝られてもうれしくない。」

「そうか、確かに。ありがとう。」

「……ふふっ。どういたしまして。」

初めてドールが笑うのを見た気がした。

「じゃあ、次が最後ね。ソウジさん。もう一回、剣を振ってみて。」
「よしきた。じゃあ、今日の総仕上げだ。」

本当にいい子だ。

報いるためにも、今日一番の出来の振りを見せたい。

集中する。今日のことをおさらいする意味で、もう一度情報画面の〈操作方法〉を開く。

斬り下ろし、とだけ書かれている。何の説明もない。

でもだいたい体に馴染んできたこの動き、モノにしたい！

そう願った瞬間だった。

頭の中に情報が流れ込んできた。

【片手剣の使い方……斬り下ろし……派生先……横切り……水平切り……回転切り……ハードバツシユ……ジャストスラツシユ……バックステップ……旋刈り……溜めてタイミングよく……ガードとカウンター……】

そして何も変化のなかった〈斬り下ろし〉の部分が光り出した。

「ドール……そこからもう少し離れて見てて。」

「えっ?」

「頼む……。」

「わ、分かった。離れるね。そ、ソウジさん?大丈夫?」

「……いくよ。」

ドールが十分に離れたのを確認し、光り出した〈斬り下ろし〉を、頭の中で選択した。

「……フッ!」

息を吐きだすと同時に、斬り下ろす。すぐに刃を返して切り上げる。さらに踏み込んで斬り下ろしと切り上げ、そのまま横薙ぎ、勢いを殺さずに回転して強烈な横薙ぎを行う。

「れ、連続技…。」

ドールが何かを言っていたが、よく聞こえなかった。

それぐらい集中していたわけで。

最後の技が終わった後、俺は今までにならない感触を得ていた。

「これは……。」

頭の中に情報が入ってきた、と思ったら、片手剣の操作の仕方が分かった。分かっ
てしまった。

そうか、斬り下ろしはあくまで初手、そこから連続でつなげて相手を畳みかける。それがこの武器の特徴か。

「すごい……。」

あつけにとられているドール。だが、それは俺も同じだ。急に〈操作方法〉が光り、武器を扱えたのだから。

なぜできたか、それは間違いなくこのギフトの力だろう。

そしてこの肉体。

先ほどの尋常ではない連続技の応酬。正直体がちぎれるかと思っただが、今では体はびんびんしている。

「ソウジさん。すごい。こんなの見たことないよ。」

「……うん。できたな。」

「感動が薄いと思うけど……。でも、斬り下ろしどころじゃなかったね。あんなに連続して素早く剣を振るえるなんて、驚いた。」

「……あのー、ドールさん。お願いがあります。」

「……何でしょう?」

「……もう一度だけ、剣を振るのを、見てもらってもいいですか?」

「……ふふふ。あははははは。」

こんなに笑う子だったっけ？そう思うほど、ドールは今までにないぐらい楽しそうだった。

「うん、いいよ。でも、さん付けじゃなくて、ドール、だからね。あと、敬語もなし。」
「はい、すみません。」

性懲りもなく再び謝り、その後何度もドールに剣の振りを見てもらったのだった。

13ある受付嬢の話？

私はハイビスと言います。

お仕事は、今急成長中の村、ワサドラのハンターズギルドで、受付嬢をしています。

……そうです！

全女の子の憧れ、ギルド受付嬢！

友達には心底羨ましがられます。

「そんなことないよ」とか返しつつ、内心は鼻高々！

だって筆記試験とかすごく難しかったですし、正直容姿が良くないと面接でキツパリ落とされる、とも聞いてました。

なので、合格できたときは……何かこう、人としても女として認められたような、そんな自己有用感に包まれました！

嬉しくて、涙を流したところまでは、本当に幸せでした。

……まあ、仕事が始まってみれば、忙しすぎて未だに彼氏もできません。急成長中の村となればお仕事の量も増えます。

ま、まあそこはいいでしょう!

やりがいのある仕事だと思いますし?

まだまだ新人に毛が生えた程度の私は、一番大変な新人登録窓口にいるわけですけど

!

でもそこで、金の卵を見つけるといいう、とても大切な業務を請け負っているんですか
ら。

頑張りましょう、私! いつかイケメンハンターが並ぶ受付台に担当できる日を夢見て
!

* * * * *

そうこうしている内に、ここで働いて数年が経ちました。

月日が立つのは早いですね、村もどんどん成長し、以前よりもさらに発展しております。
す。

もはや村と呼んではいけないのでは……? ?

変なツツコミはさておき。

どうしよう、私も最早中堅クラスです。

流石に部署の変更を申し出ておりますが、上司や先輩からは、

「さすがハイビスくんだね！的確にハンターの実力を加味して、対応する手腕。私も鼻が高いよ！」

「ハイビスすごいよ。私そこまで新人に細かにケアしたり、アドバイスしたりできないもん。」

と言われます。

いや、嬉しいんです。嬉しいんですけどね。

何というか、自分で言うのもアレですが、私有能な方らしく。

ギルド内どころか村の上役からも、発展に貢献している一人として扱われています。

……困りました。

これでは私のイケメンゲット玉の興寿退社計画が潰れそうです。

未だに、というか本格的に「ハンター登録」の部署の敏腕受付嬢としてやっておりません。

……お給料もかなり上がって、なかなか文句も言えません……！

新人さんって見ていてハラハラするんです。

私が一昨年から提案して実行に移った、新人育成講習会。かなり好評を博しました。自分が受け持ったハンターさんが死ぬのは、悲しい連絡を貰うのは、懲り懲りなんです。

ましてや新人さんは、そうなってしまいう確率が高いわけで……

何とかしたいと思って企画、提案をしたら、うまくいってしまいました。

おかげで、ギルド内でも盤石の地位を築いております。

しかも、育ったハンターさんはここには来ません。

イケメンの方なんて、先輩や後輩がゲットして掻っ攫う始末です。

今日は朝一から受付です。

……私、新人受付担当のまま、独身を貫くのでは……。

ですが仕事は仕事。ハンター志望の方に罪はありません。

今日も今日とて、業務を遂行していきましよう。

* * * * *

「ハンターの登録に来ました。」

早速いらつしやいました。笑顔が素敵な方です。

しかもイケメンさんですよ！朝イチからラッキーです！

真つ直ぐここに来られたということは、間違いなくハンター志望の方でしょう。

「こんにちは！ハンターの登録ですね？」

「は、はい。」

堂々とされたかと思っていたら、急に新人らしい返事が返ってきました。

うんうん、始めは緊張しますよね！

「それでは、こちらをご記入下さい。代筆や代読は必要ですか？」

「多分大丈夫です。…もし必要ならお願いします。」

「わかりました！」

あちらは初めての経験。

私もなるべく笑顔で対応です。

しかし、とてもきれいな字……まるでお手本のようですね。

装備も一式揃えてきてます。合格！

武器も見たかったのですが、まあ持つてきてないというケースは、まああります。

「はい！ありがとうございます。きれいな字でとても読みやすいです！」

褒めるところは褒めます。これ、大事です。

この方、なんとか頑張りたいという空気がピシバシ感じられます。

少しでも自信をつけてあげて、モチベーションを維持させるのが良いタイプだと思います。

名前は「ソウジ」さんですね。

筋肉の付き方もとてもしなやかです。うん、この方は伸びますよ！

いけないいけない、業務をきちんとなしませう。

「ソウジさん……ですね。ハンターズギルドでは、その方にあつたクエストを紹介・斡旋

し、ハンターの方々と依頼主が同時に笑顔になれるよう、お手伝いをする機関です。そのため、ハンターとなられた皆さんには、必ずこうして簡単な面接を行つていきます。たくさん質問しますが、よろしいですか？」

「はい、大丈夫です。」

「それではよろしくお願ひします！」

私の予想ではこのソウジさんという方、村付きのハンターだった可能性が高いです。

しかも即戦力も狙えそうなレベルだと睨みました！

でも、自信が無さ気なのは気になりますね。

面接で見極めましょう。

「答えにくい質問は、お答えいただけなくて大丈夫ですよ。ではまず、ご出身は？」

「えと、覚えが無くて……。」

「ん？覚えがない？……つまり隠したいということでしょうか。それとも記憶喪失パターン？」

「……記憶があやふやということですか?……では、得意な武器種やハンタースキルなどはございますか?」

「ぶ、武器ですか? ちょっとよくわからなくて……。」

「ちょっと待って下さい、下方修正しましょう。」

「武器も知らないとなると、全く話が変わってきますよ!」

「……では、以前なされていたお仕事などは……?」

「えと、資材管理です。クライアントに資材等物品を納品する業務の傍ら、そのシステムの構築や改善、現地の担当者との交渉など、あらゆる部門で仕事を行ってきました。」

「えっと……よくわからないです!」

「クライアント? システム? 何を仰っているのか、良くわかりません! というかこの方そのものが良くわかりません!」

「な、何かしらの商いを行っていた、ということですよね?」

「そ、そうです。」

フォロー成功です。

……おかしいですね。私、自慢じやありませんが、ここ最近は何も鍛えられてきたのか、ハンターさんの腕の目利きにはかなりの自信があります。

ですがこのソウジさん。全く経験に当てはまりません。

参りました。

雰囲気というか、身に纏う空気は明らかに強者なんです。

でも受け答えは、素人さん丸出しです。

頭が混乱してきました……。私、見る目には自信があつたのになあ……。

* * * * *

結局、面接では何もわかりませんでした。

正確に言えば、何も分からないことが分かりました。

受付嬢失格です、こんな方、どうやって報告を上げればよろしいのでしょうか。

「さようなら。」と、切り捨てることもできません。

でも違うんです。

私の第六感が、この方を逃してはならないと、警鐘を鳴らすのです。

……直感を信じましょう。

ハンターに登録後、見極めも兼ねて、講習会に参加してもらいます。

まさか自分が作った講習会制度が、このように役立つとは……やっておいてよかったですね。

その後、ハンターになる危険性や講習会についてお話して、ソウジさんにはお帰りいただきました。

明日また来られるようですし、担当の教官に彼がどんなものだったか教えてもらいましょう。

教官の人、まだ決まっていなくていいんですね。

どんな方なんでしょうか。

しかし、熱弁を振るい過ぎたでしょうか……ソウジさん、落ち込んで帰っていった様

です。

若いのに醸し出す雰囲気は少しくたびれていて……何かうまく言えないんですが、おじさんを奮い立たせようと活を入れている気持ちでした。

明日も来てくれるといいのですが……お金貸しましたし、来るでしょう。真面目そうな方でしたから。

それに、整ったお顔は好印象でした。

もしハンターとしても一流なら、私コロツと行ってたかもしれませんね！

ソウジさんのギルドカードを眺めながら、自分の行く末を案じる自分。

新人さんの行く末も一緒に考えなければならぬのが、この仕事の大変なところ……。

14行きつけのお店を見つけましょう。

宿の庭でドールに剣の振りを見てもらった後、俺は流石に疲れて部屋に戻っていた。更に他の武器も試そうとしたのだが、ドールは仕事があるし、一時間も付き合わせて悪いことをした。

後でまた、お礼を伝えておこう。

「結局、開放条件は分からなかったな……。」

開放とは、片手剣の〈操作方法〉が完全に表示されていたことだ。

頭の中で〈操作方法〉内の技名を選択すると、どう動けば良いかがわかるのだ。

武器の扱いに関してド素人の俺でも、それなりに使えるようになる。

あんなに苦勞していた斬り下ろしはおろか、様々な連撃に繋がられた。

ドール曰く「ここまで剣さばきがすごいと思っただのは初めて。」とのこと。

……自分でもよく分からないが、どうやら一端の剣士並みには武器を扱えることがわかった。

これは嬉しい。開放の条件はわからないが、これなら明日の講習会で無様な真似を晒さなくて済みそうだ。

「腹減った……。」

安心したら、急に腹の虫が悲鳴を上げた。

急激に動いたためか、体が栄養を摂れと唸っているだ。

備え付けのポットから水を飲む。

即座に体に吸収されていくのがわかる。喉も相当に乾いていた。

俺は遅めの昼食を取るべく、一式装備に着替えて飲食店に行くことにした。

途中、宿のおじいさんに会えたので、ドールが練習に付き合ってくれたことについて、詫びとお礼を伝えておいた。

「うちの子がお客さんの役に立てたなら何よりだよ。」と笑顔で言ってくれたのでよかった。

ついでにおすすめの店はないか尋ねると、「うちの飯には負けるがね。」と前置きをおいた上で、3つほど教えてもらえた。

もう一度お礼を伝えた後、その中の一つに向かうことにする。

* * * * *

村の中は、かなりの人でにぎわっていた。

村の住人だけでなく、行商人やハンター、なんだかよくわからない人たちがわんさかいて、正直驚いた。

と同時に、「もう村と言い張るのは無謀では？」と、何度目になるかわからない突っ込みをつぶやく。

それぐらいにはにぎわっていた。

……いい。活気にあふれているし、なんなら人間ではなさそうな種族の人たちまでいる。

自分が異世界にいる、と改めて認識させてくれる。

わくわくするじゃないか。

ひげを蓄えた小さいおじさんや、耳が尖った美人、二足歩行する猫耳の人まで、多種多様な人種が入り混じっている。

ていうか猫耳の人種多いな！

マップの現在地を確認しながら、人混みの中を潜って、めあての店を目指す。

「イシザキ亭……イシザキ亭……あ、あれか？」

大通りから脇にそれた小道。住宅しかない中、一軒だけ木の看板が、入口に下がっている。看板には、無骨に「イシザキ」とだけ書かれている。

中々入るのに勇気のいる店だが、思い切つてドアを開けてみた。

ドアには鐘がかかっている、うるさくはない程度の音が店内に響いた。

客はゼロ。小さな窓から少し中は見えたのだが、やはり客は誰もいないようだ。

「い、いめんください。」

静かな店内に俺の声が響く。奥からは食欲をそそる香りが漂っている。

右手にはカウンター席が並び、左手には上品な木製の机と椅子が5セット程。どれもデザインが洒落っていて、落ち着く雰囲気だ。

きよるきよるしていると、お店の人であろう女性が、奥からやってきた。

「あ、いらっしやい！ちょっと！お客さんだよ！」

「どうも。やっていますか。」

「絶賛営業中だよ！好きな席に座ってねー！」

奥から出てきたのは、20代後半位の快活な女性だった。

厨房にいる人間に呼びかけていたので、まだ人がいるのさう。

口ぶりから旦那さんさう。

俺はカウンターに腰掛けることにした。なぜならカウンターには、見たこともない植
物やスパイスが、瓶の中に入れてずらりと並んでいたからだ。

前の世界でカレーをスパイスから作っていた俺としては、興味がある。

奥さんはそれからメニュー表を持ってきた。

あるじゃないか、メニュー表。

……文字だらけでどれがいいかわからない。

写真などはまだないのかな？

「すみません。」

「はい、お決まりですか？」

カウンター越しに、俺に水を出しながら尋ねてくる。

奥さん、めちやくちや美人さんだ。右の泣きぼくろが非常に色つばい。肩にかかる程度のウェーブがかかった髪が、とても良く似合っている。

しかも……で、でかい。カウンターにアレが乗っている……！

オレンジ色のエプロン、その奥にはたいそう立派な山二ツ。

「……………えーと、おすすめはありますか？」

いかんいかん。俺は見た目は若いかもしれないが、中身はやはりおっさんのままだ。

こういう目線に女性は敏感だと聞く。早々に目線をメニュー表に戻し、おすすめを聞いてみる。

「今は、そうねえ。ガーグアの卵のオムライスとか……キノコとリノプロ肉のソテーがおすすめだよ！」

「じゃあ、その二つください！」

いかん、聞いただけでよだれが出そうだ。

「あいよー」と江戸っ子のような返事をした奥さんは、厨房に行つて、旦那さんに注文を伝えていた。

一瞬旦那さんが見えたが、スキンヘッドで腕が丸太のようないかつい男性だった。さっきのエロ目線がバレたら、俺殺されるんじゃないか。自重しよう。目立たないように……。

* * * * *

「うまあああああい!!!」

目立たないなんて無理でした。

何このオムライス、ふつわふわの半熟卵とデミグラスソースが合うにもほどがある。ライスはケチャップライスではなく、少しスパイスの効いたピラフのような味わいで、ナッツのような、食感のよい食材がアクセントになっている。

そのライスは、濃厚な卵とソースに合う。合い過ぎ。

それにこのキノコ！何だこれ、こんな食感初めて！

リノプロ肉？ってやつも、めっちゃうまい。

歯ごたえがあるのにぷりぷりで噛み切りやすく、アツアツの肉汁がキノコとばっちりマッチングしている！

味付けはシンプルなのになあ……素材もよく、下ごしらえも丁寧に行われている。

「あはははは！そうだろ！ウチの自慢の味さー！」

「いやこれめっちゃうまいなにこれうま」

返事も忘れるほど熱中した俺は、10分程で完食してしまった。

量はかなりあったのだが、空腹もあいまって、一瞬で食べきってしまった。

「……こんなうまい飯、初めてです！」

「嬉しいね、アイツにも伝えておくよ。」

アイツとは、厨房の旦那さんのことだろうか。

ものすごい腕の太さで、ものすごくおいしい料理。

かっこいいわあ……。

「でもねえ、最近お客がめつきり減っちゃって。困ってるんだよ。」

「確かにお客さん、俺だけですもんね。」

隠れた名店を見つけた気分だったが、この昼飯時に誰もいないってどうなんだろう。

「実はね……大通りの方に、街で人気の大手のレストランが新店舗出しちゃってさ。味は絶対に負けてないんだけど、値段がちよいとあちらの方が安いんだ。」

「な、なるほど……。」

通い詰めて通い詰めて、全メニュー制覇したいと思うほどには、この店はうまかった。だがこのままでは、店が無くなってしまわないか。

それは困る。

「奥さん！俺この店の味好きです。通い詰めますよ。」

「あら、ありがたいねえ。常連さん出来上がり♪」

また来よう、ここはとにかく美味かった。

別に奥さんが気になるわけではないぞ。繰り返し返す、気になるわけではない。

そんなことを自分に言い聞かせていると、不意にこんなことを言われてしまった。

「ちなみに！私は、『奥さん』じゃあないよ？」

「へ？」

「奥にいるのは兄貴、よく間違われるんだよね。こんな店だけど、またよろしくね！若いのー！」

背中をバンつと叩かれた。

めっちゃ痛い。

痛いけど、なんだろうこの気持ち。

おっさん心に刺さる。

このお胸の大きい気さくなお姉さんの感じ。

「……………」ちそうさまでした。」

「また来てね！待ってるよ。」

笑顔で見送るお姉さん。

おっさんがキャバクラにハマる気持ちがわかった気がする……。
……また来よう。

15 新たな技を習得しましょう。

宿に戻ってきた。

やることはたくさんある。

まずはポーチの確認をしておこう。

そういえば中身をちゃんと見ていない。

イシザキ亭のお姉さんにうつつを抜かす前に、まずは所持品を確認しなければ……。

ポーチを触る。

見慣れた情報画面が出てくる。

その中から〈アイテムポーチ〉を確認すると、ズラツと一覧でアイテムが見えるようになる。

とは言っても、前見たときと変わりはない。

携帯食料、応急薬、回復薬、毒消し、ウチケシの実、砥石、ピッケル、シビレ罨、……

「……………ん？」

ふと気になったところ。へリストから調合という欄。

調合とは……つまり何かと何かを組み合わせるという意味だよな……

調合できる一覧から選べるものは何もなかった。

つまり今は調合できるものは無い、と考えていいんだよな。

しかし、これはかなり有用かもしれない。

調合したいアイテムが、何と何を組み合わせることができるか。

これを見れば丸わかり。

本来は色々文献を調べたり、人に教わったりして知っていくのだろうが、この画面を調べれば何とかなりそうだ。

問題は調合できるかどうか。

この辺はアイテムが揃ってないとわからないことも多いので、後回しにすることにした。

* * * * *

情報画面をいじり続けていく。

〈ギルドカード〉という項目を見つけた。

前は選択できなかったはずだ。

登録をしたからか、今は選ぶことができる。

「……討伐モンスター、使用武器頻度、達成クエスト数、二つ名………個人情報満載だ。」

カードからは様々な情報が分かるようだ。

仕組みはわからないが、個人が行ったハンター業に関する実績が、記録されていくのだろう。

ホントもう、完全にゲームだよこのシステム。

大事なのは、この情報は俺にしか分からないのか、ハンターズギルドも分かるのか。後者だとすると、何かちよつと怖い気もする。

……まあ明日の講習会で聞いてみよう。

「ギルドに管理された傀儡のハンター達！とか週刊誌の面白い見出しになりそうだな

………ん？」

ふと見つけた討伐モンスターの履歴……何か書いてある。

「バサルモス 撃退 1423. 86 ザキミーユ平原」

へ？

バサルモス……撃退したことになっている!?

特にギルドに報告したわけではない。

なぜ記録されているのか。

それに、逃げまくっただけなのに撃退扱い……？

もうわからない事だらけだ。

ただ、「撃退」と言う2文字は、倒したわけではないということだ。

今リベンジに来られたら、ひとたまりもない。

「平原に行く時は気をつけていこう……。」

さて、気を取り直して、本題に移る。

昼に習得できた〈片手剣〉の〈操作方法〉についてだ。

なぜ習得できたのか、未だによくわかっていない。

このままでは気持ちが悪いので、そのやり方を明らかにしたい。というか、他の武器も試してみたい。

早めの夕食を部屋で取り終えた俺は、薄暗くなってきた庭に向かうことにした。

* * * * *

「次に試す武器はどうするかな……？」

少しワクワクしながら、〈武器装備〉の一覧を開く。

周囲は薄暗く、武器の出し入れしても周りからはよく見えないだろう。

そう考えて、様々な武器を手を持つことにしてみた。

「ランス……来い！」

装備すると、一瞬で手に〈ランス〉を持つことができた。

まだ慣れないので何とも無様だが、とりあえず構えてみる。

じっくりくるものを試してみよう。

「重っ!!……でも防御には向いていそうな感じがするな。」

ワクワクが止まらない。

次々に武器を持ち替えてみる。

「大剣装備!……うおお、でかいし重い……。ロマンあるなあ。ベル○ルクみたいだ。」
「ハンマー装備!……やっぱ重い!一撃にロマンを感じますなあ……。」

ニタニタしながらブツブツ言う薄暗がりの男。

ドールとかに見つかったら大変なことだ。暗くてよかった。
宿から漏れる薄い明かりを頼りに、すべての武器を手にとってみた。

「重いわあ……こりや体鍛えなきやいかな。」

すべてを手にとって構えてみた結果、分かったことが2つ。

まずい1つ目。

大体が重い！

今の肉体はかなり素早く動ける。

片手剣のときも実証済みで、激しい動きにもすぐ対応できる自信がある。

だが、〈ハンマー〉や〈大剣〉、〈ヘビーボウガン〉といった、名前からして重そうな武器。

これは持つのにも苦勞した。

パワー系統の体ではないのだろう。

片手剣とは比較にならないほどのキツさを体感した。

このことから、この体に今の所合っている武器がだいたい絞られてくる。

そして2つ目。

それぞれの武器の〈操作方法〉を確認してみたところ、やはりさっきの〈片手剣〉と同じように、技は1つしか表示されなかった。

これはまだ仮定だが、ドールと練習していたあの時間。あの時の何らかのきっかけで、技を習得した、ということだろう。

ここから候補を考え、試してみる武器を決定しよう。

〈大剣〉は、とても男の子心をくすぐられたのだが、いかんせん重すぎた。

同様の理由で〈スラッシュアックス〉〈チャージアックス〉〈狩猟笛〉〈ハンマー〉〈ランス〉〈ガンランス〉、そして〈ヘビィボウガン〉も断念。

「笛、めっちゃ楽しそうなんだけどなあ。」

前世で音楽を趣味としていた俺としては、心残りだ。

更に〈弓〉や〈ライトボウガン〉〈操虫棍〉も断念。これは単純に、矢や弾といったアイテムが無かった。

それに、弓とかボウガンとか、こんな庭でぶっ放したら、流石に迷惑すぎる。そして虫についてはよく分からない。

武器として持つことにはさほど苦労しなかったので、アイテムや猟虫が手に入ったら試してみたい。

となると残りは〈双剣〉〈太刀〉か。

パワーが必要な武器が多すぎる……そう考えると、片手剣を始めにチョイスしたのは間違つてなかった。

まあ、一覧の一番上にあつたから選んだだけなんだが。

残り2つになつた候補たちを、改めて持つてみる。

一番しつくり来たのは、まさかの――

「双剣か……。」

なぜかはわからないが、一番しつくり来た。

片手剣で、両手を使って武器と盾で攻撃していたからなのか。

片手剣なら太刀が一番相性が良さそうなものだが。

ちなみに、太刀を振るつてみたのだが、如何せんヒョロヒョロとした剣筋で「あ、だめだこれ。」とわかるほどだった。

……と、とりあえず、消去法で決めたところはあるが、〈双剣〉を試してみよう！
どの武器も、また後で試してみればいいし！

「操作方法には……二段斬りだけ……？ 2つ同時に攻撃するのか？」

武器の名前は「ツインダガー」。

2つの刀つて、そのまんまの意味だろう。

構えてみる。

イメージは、前世で知らない人はいなかった、あの二刀流の剣豪の肖像画だ。

ダランとした構えで、二刀を下に構える。

そのままゆっくりと上げて……

「二段斬り！」

振り下ろす。

太刀ほどビヨロビヨロしてはいないが、まあひどい。

モンスターなど相手にできないだろう。

「もういつちよ、二段斬り！」

今度は上段の構えから、タイミングを一刀ずつずらして振り下ろす。

技の名前を発するのは、ドールとの練習で行っていたからだ。

少し恥ずかしいが、何がきつかけがわからない以上、何でもやってみよう。

「しっくりこない……集中して……。」

何度も剣を振るう。技名を唱えながら。

そして息を整えて、また構える。

その繰り返し。

時刻はもう夜。

時間的に言つて、そろそろラストにしなければいけない。

こんな練習で、〈操作方法〉を開放できるとは思ってないが、何か掴みかけている気がする。

「双剣を……モノにしたい！……ハアッ！」

疲れてきて重心が下がってきたからか。

二段斬り？を深い踏み込みで放ったら、明らかにスピードに乗った気がした。

「！」

一瞬で、この一撃が今日一番の出来だと悟る。

余計な力を入れず、イメージしていたモンスターの部分に当たる瞬間だけ、スツと力を込める。

そして振り抜いた。

「おわつとー！ととと……いてっ！」

威力が全く違った。

振り抜いた瞬間、思わず剣に振り回されて、くるくる回ってコケる。

ダサい……。

だが、今のはいい感じだった気がする。

「〈操作方法〉は……！」

すぐに確認する。

もし成功していたなら、〈操作方法〉で二段斬り以外の技も確認できるはずだ。

「おっ！やったぞ！」

二段斬りは成功したのだろう、片手剣のときと同じように、様々な技名が一覧に現れてくる。

嬉しい感覚とともに、片手剣のように連続技技できるのか試してみようと。

そう思った瞬間だった。

「うっ……いい!! ああああ!!」

頭が激しく痛みだした。思わず変な声が出てしまう。

「な、何で……!?!」

目がチカチカする。周囲がグワングワンと回っている。

いや違う、自分が回っているのだ。

そう気づいた時には、俺は地面に倒れてしまつて。

「ぐえあ。」

まるで時代劇の三下の様に、意識を失つた。

16 新たなフオロワー層の獲得を確認しましょう。

「……うじさん？ 双治さん？」

（むにやむにや、もう食べられないよう。）

「……。」

（はい起きますすみません。無言はやめてください。）

意識を失った。

そしたら例のきれいな湖の上に寝ていた。

だから、多分女神様に声をかけられる気がした。

ちよいと冗談をかましたら、フランクに無視されるとは。

仲良くなったものだ。

「仲良くはないです。」

（そんな。シヨック。）

おそらく何かまた、新情報でも教えてくださるのだと思う。

女神様の声を、座して待つ。

「双治さん。実は今回、忠告しに来ました。」

（忠告……ですか？）

なんかまずいことをやらかしたのか。

声しか聞いたことないから分かる。いつもよりトーンが低い。

女神さまが続ける。

「双治さんは、気を失いました。」

（はい。）

「理由は、お分かりになりますか？」

（………オーバーワーク？）

「はい、概ね正解です。」

双剣の〈操作方法〉が判明した瞬間、気を失った。

尋常じゃない頭痛だったしなあ……とりあえずもうやりたくない。

「まさか一日に2回も、武器のマスタリングを行うとは予想外でした。先にお伝えしておくべきでした。」

「いえ、私こそ調子に乗ってすみませんでした。」

マスタリングとは、あの〈操作方法〉がわかる瞬間のことだろうか。

「マスタリングは、脳や体への負担がかなり大きいです。お体の方は問題ないようですが、頭への負荷が多すぎたのでしょうか。」

「双剣は失敗ですか？」

「いえ、むしろ双治さん向きの武器かと。推奨します。技の方も、問題なく習得できております。」

双剣の〈操作方法〉の一覧が習得できなかったのでは？と心配していたが、問題ないようだ。

「安心しているところに申し訳ないのですが、現在マスタリング可能な武器種は片手剣と双剣のみです。」

(えっ?)

「これ以上のマスターリングは、双治さんの命に関わります。」

命、と聞いて、少し怖くなった。

「そもそも、片手剣と双剣のマスターリングに必要な第1技の習得がここまで早いとは、思いませんでした。少なくとも数ヶ月はかかるものです。次回は数年単位で、次のマスターリングはおやめください。」

(……)

「よろしくおねがいします。」

有無を言わせぬ、そんな感じのトーンだった。

でも、少し無機質な話し方に心配の感情が混じっている気がして。

(わかりました。死にたくは、ないです。)

「よかったです。」

新しい武器を試したい気持ちはあるが。

そこまで器用な方でもない。1つ2つの武器を極める方が俺には向いている気がする。

女神様も公認の「推奨武器」らしいし。

「先程も申し上げましたが、双剣は最適解です。スタミナや鬼神化状態の維持など、気を配るべき部分は多いですが、素早さに特化したスタイルです。双治さんの肉体には、正解だと思われれます。」

（それはよかったです。）

「むしろ、ノーヒントでここまでたどり着いた双治さんに驚かされました。」

（色々考えましたよ。）

「ええ、見ておりました。」

見られていたのか。そりやそうか、恥ずかしい。

「飲食店の女性に鼻を伸ばすところと同じぐらいバズりました。」

（ちよつと待て。）

えーつと？女神様??

どこまでSNSに上げてるの??

「それはもう、隅から隅まで、です。心は中年、体は青年。アンバランスさに戸惑うかわいい姿が、主にF1〜F3の主婦層にウケています。」

（ウケを狙っていたわけではないんですが!?というか神様の主婦層って何!?!）

「まさかここに来て、新たな客層の獲得に成功するとは。私も良い意味で驚かされました。」

（私も驚きですよ!）

何かダメだ!この女神様ダメだ!

（女神様?私は今日一日で武器種2つの習得に成功しました。）

「ええ。」

（ギルドでハンター登録をした際、落ち込むこともありましたが、前向きに考え、新しい武器種の〈操作方法〉習得に励みました。）

「はい。」

（しかも、マスターリング？とやらはかなり難しいんですね？そのへん頑張ったことへの反応とかは、無いんでしょうか!?)

「ええ、ありました。そこそこバズっております。」

そこそこ……一応死にかけたのに……。

「やはり、血の気の多い方々がフォロワーに多いのです。武器の扱いの習得というよりは、やはりその先の戦いを好まれるのでは無いか、と推測します。」

（なるほどー……。）

「……双治さんがフォロワーを意識し始めていることに、感銘を受けております。」

（意識してないわ!!畜生!）

さつきからもうタメ口だ。

もういいや、俺もフランクになろう。

「明日はいよいよハンター講習の初日ですね。おそらく苦勞することはないかと思われ

ます。どうぞ、思いのままに頑張る姿をお見せください。」

(……分かりました。とは言っても、私はフォロワーの神様方とか、その辺は意識しませんよ！)

「はい。」

(……私のやりたい様に、一生懸命やらせていただきますので！)

「はい、それこそフォロワーが望まれる姿です。よろしくおねがいます。」

だめだ。

結局俺は足掻くしかなくて、そしてその姿がウケているんだ。

「マスタリングは、当分おやめください。本当に。それでは失礼します。」

(お、お疲れさまでした……。)

大切な忠告と、割とどうでもいい神様SNSについての、2つのお話を聞いた。

(……忠告は甘んじて受ける。SNSについては、もう気にしないことにしよう……。)

薄れゆく意識の中で、
そう誓う俺だった。

17 お礼を伝えましょう。

目が覚める。

「……は……」

「見慣れた天井だ。」

2日しか寝泊まりしていないのに、見慣れたも何もないのだが、一応お決まりのセリフを発してみる。

日は既に昇っていて、外からは人の声や生活音が聞こえてきた。

コンコン。

ノツクの音が。

「はいはい、おります。」

まだ頭痛が残る体を無理やり起こして、ドアを開ける。いや、開けようとしたら、向こうが勝手に開けてきた。

「ソウジさん！」

「おわつと。」

ドアを開こうとしたらグイッと開いたので、バランスを崩しかけた。つんのめった先は、心優しき従業員さん。ドールだ。

「ああ、良かった……。起きたんだね。」

目に涙を浮かべた少女が、安堵の顔で笑いかけてくれた。おそらくは、俺を部屋まで運んでくれたのだろう。心配をかけてしまった。

「すまん、世話をかけてしまって……。」

「……。もう、ビックリしたんだよ?」

いつもの淡々とした口調に戻ったドール。

「えーっと……。本当に、ごめん。心配かけた。」

「ううん。大丈夫。でも、心配はしたよ。」

もう一度謝ったあと、ドールは椅子に座らせて、俺はベッドに腰掛けて、色々と聞いた。

俺が意識を失ったとき、ドールは俺の部屋にいたらしい。

体を拭く桶の回収に来たが、俺がいないと気づいて、宿を何となく探していると、庭から大きな声がした。

ただ事ではない様子に慌てて庭に行くと、尻を突き出し、口から泡を吹いて白目で倒れる俺を発見。

最初は何かの冗談かと思ったとか。

でも様子がおかしいことに気が付き、慌てて宿のおじいさんに連絡。

2件隣の武具屋の人の手を借りて、とりあえず俺を部屋まで運んだらしい。

「夜中も何回か見に来たんだ。でもソウジさん、目を覚まさないから。」

「……重ね重ね、すみませんでした!」

まさか女神様に会ってました、なんて言えるわけもない。

夢みたいなものだし。

「ドールは一晩中診ていてくれたのか？」

「そのつもりだったんだけどね。セツヒトさん……近所の武器屋の人なんだけど、容態が悪いわけではなさそうだし、疲労が溜まつただけだろうから、心配はいらないだろうって。だから私も休んだよ。」

「何にせよ助かったよ……。感謝してる。」

「いいよ。お客さんだしね。それに——」

なにか言いたげなドールだったが、遮るように部屋にノックの音が響いた。

「お、気が付いたかの？よかったよかった。」

宿のおじいさんだった。

「驚いたよ、まさか倒れているなんてのお。元気そうで何より。」

「ご心配とご迷惑をおかけしまして、申し訳ありません。」

深々と頭を下げる。当然だ。

「気にしなさんな。お客さんだからの。礼ならドールと、セツヒトに言っておくれ。部屋まで運んでくれたんじゃ。」

おじいさんもおじいさんで本当にいい人だ。

この宿に決めて、心から良かったと思う。

「あー、セツヒトというのはのう……。」

「私から説明したよ、おじいちゃん。」

「そうかい、そりや良かった。アイツがいなきや、部屋まで運ぶこともできなかつたろうしの。」

「後で必ずお礼に行きます!」

まだ会ったこともない人だが、恩を仇で返すわけにはいかない。いずれ装備は新調したい。今から挨拶に行こう。

「あ。」

しまった。

講習会のことをすっかり忘れていた！

「すみません！今日ギルドにまた行かなくてはいけないんです！今の時間は……!?」
「お昼にはまだなっておらん。初心者講習会のことだろう？まだ時間はあるさ。」

よかった。

テンパっても仕方がないが、初日ドタキャンなんて洒落にならん。

「じゃあ、まずはご飯を食べよう。ドール、用意してきてくれるかい？」

「うん、わかった。ソウジさん、準備してくるから、ゆつくり降りてきて。食べる場所は食堂でいい？」

「ありがとう！大丈夫だ。」

そう言うと、二人は部屋を出ていった。

「よかったのう、ドール。」

「もう、おじいちゃん…っ！…。」

ドア越しに二人が何か言っているが、とにかく急いで準備をしよう。

ポーチを手に取り、〈装備〉〈武器装備〉から一式装備と双剣を選択する。

一瞬で着替えられた。

「準備終わっちゃったよ……。」

ドールに、ゆっくり、と言われた手前、あんまり早く行きすぎても仕方がない。ベッドに寝転んで、しばらくポーツとすることにした。

* * * * *

遅めの朝食、いや早めの昼食を取ったあと、もう一度二人にお礼を言った。ついでに宿の予約を3日分ほどしておいた。

銀貨6枚を渡すと、

「武具屋に行くなら、わしの名前、ホエールを伝えるといい。まあお前さんの顔は覚えられてると思うがの。」

と笑われた。

「行ってきますー！」

「いってらっしゃい。無理しちゃ、だめだよ？」

優しい送り出しに、心が温まった。

武具屋にはすぐ着いた。

本当に近所だ。

看板に「武具屋セツヒト」と、無骨に書かれてある。

レストランのイシザキ亭でも思ったが、商売っ気のない感じが伺える。

武具屋の、俺を運べるほどの力を持つ人。

敵つそうだ……怖い人ではないことを祈ろう。

「ごめんくださいー！」

ドアの前で呼びかけてみる。

………反応なし。

「………失礼しますー！」

思い切ってドアを開ける。

店の中は、宿の部屋ぐらいの広さだった。

両壁にあらゆる武器や装備が並んでいる。

目の玉が飛び出るほど高いものや、「値段応相談」という恐ろしいものまで。双剣や片手剣も、それなりにあった。

正面の受付の横には、「強化受け付けます。」「鎧玉買い取り要相談」など、何かよくわからない貼り紙が並んでいた。

「ごめんくださいーい……ホエールさんの紹介で、お礼に参りました……。」「
「あー、はいはい。」

奥から女性の声が聞こえる。

「はいはい、お待たせー。お客さん、何かご所望？」

「いえっ、私はですなーー」

「おー？その顔はもしかしてー!？」

ん？

「えっと、ホエールさんの紹介で参りました……。もしかして、セツヒトさん……。ですか？」

「そうだよー、私、セツヒト。やっぱり昨日のぶっ倒れたお兄さんじゃない。やつほー、元氣?!？」

お、女の人かーい。

驚きの中、よくわからないツツコミが俺の頭の中にこだました。

18さらにお礼を伝えましょう。

倒れた人間を運ぶ。

酔っぱらいの介抱をしたことのある御仁なら、その大変さがわかると思う。

まず、重い。

酔っ払いが女性ならまだいい。可愛い女の子なら、運ぶこつちもモチベーションは上がるというものだ。

ならおっさんはどうか。

重い、酒臭い、夏なら汗の匂いも追加される。

そんな人をタクシー乗り場まで運ぶ。

こつちも酔っているのだ、辛いつたら無い。

では、目の前のお姉さんはどうか。

ケツ突き出して泡吹いて白目をむいた男性を、お姫様抱っこで部屋まで運んだというのだ。

信じられるだろうか。

ていうか何？俺は女性にお姫様抱っこで運ばれたということか？

死ぬほど恥ずかしい……。

「……と言うわけで、涙を浮かべたドールちゃんの要請の元、私は馳せ参じたわけ。そして……何とー！」

「……。」

「泡吹いてオシリ突き出して白目をむいたお兄さんがいたってわけー！」

「……。」

「仕方がないから、ヒョイツと抱えて、部屋まで運んであげたわけですよー。あの宿、爺さんと女の子しかいないからねー。」

「……。」

「いやー笑えたよー昨夜は。だってイケメンが白目向いて泡吹いてオシ리를ぷりつて出してさー。流星に元ハンターの私も、笑いがこらえきれなくて……。」

「もうやめて！人の醜態ほじくり返さないで！というか何回も同じ話しないでえ！」

「あははー！ごめんねー！君、ノリが良さそうだったし。」

お姉さんの発言を纏めると。

お姉さんは元ハンターで、俺を運ぶとか余裕で、むしろ現場を楽しんでいた、と。
うん、ヒドい。

だが、この場合アホなポーズで倒れた俺が一番ヒドい。

「きよ、今日は、そのお礼に参りました。」

「んー、いーよいよ。元気ならそれだけでめっけもんだって。」

「助かりました、セツヒト……さん。」

「その名前、あんまり好きじゃないんだよねー。せつちゃんていいよー?」

「せつちゃんさん、ありがとうございます。」

「うーん、何かかしこまりすぎな気もするけどー? まあいいやー。」

とつてもいい笑顔。ニコニコしながら俺を見つめてくる。

長い銀色のストレートの髪。

口は常ににやにやしている。

糸目で表情は読みにくいが、先程から笑顔は絶えてない。

そして、年齢が全くわからない。

現在の俺と同じ位？いやいや、そしたらハンターを引退して自分の店を構えるなんてできないだろう。

……いろいろ紆余曲折あったのだろう。深く考えないことにする。

女性のそういう部分は、邪推すると痛い目を見る。

これは前世でも経験済みです。

セツヒトさんの口調は、何だかマイペースでのんびりした感じだが、何とか隙がない。

やはり元ハンターということか、強いんだろうな、というのはよくわかった。

だって男の俺をひよいって、ひよいって……ハンターってすごい。

「まあ、でもさー。」

セツヒト……せつちゃんさんが続ける。

「心配かけちゃ、駄目だよー？」

糸目が片方若干開き、俺を見つめてくる。

目を逸らさず、答える。

「はい、もう二度と。」

「……うーん、よろしい。いいね君。気に入ったよー。」

「そ、それはどうも。」

怖っ。目開くの怖っ。

モンスターに見つめられたかと思ったわ！

この人めちやくちや強いよ！絶対！

嫌な汗が何故か止まらない。

変なことと言わないように自重しつつ、武器について尋ねてみる。

「セツ……せつちゃんさんは、武器屋は一人でやられているんですか？」

「お、何々。私に興味湧いてきた感じー？」

「いやいやいやいや！そんな失礼なことではなく！」

「なーんだ、期待しちやっただー。」

「はい。」

だから、その目で見つめてくるのはやめてほしい。
心臓が止まりそうになる。

「うーん、武器屋を始めた理由は、何か楽しそうだったからかなー？キミみたいな新人君をイジってニヤニヤするの、楽しいよね。」

「イジってるって、自覚はあるんですね……。」

「そー。性格悪いよねー。でも、君、格別に面白いよー。うん。そそられるー……。」

値踏みされるように、じつと見つめられる。

いや、むしろ獲物を探す獣みたいなの……？

いかん！視線に取り込まれる！

話題を本題に戻そう。

「その、俺まだハンター駆け出しでして。これからもしかしたらお世話になるかもしれないので、お礼と挨拶に来た次第で。」

「あー、なるほどー。君かー、おとといこの村に来た新人ハンターさんってー。」

そ、そうですー。

いかんいかん、つられるな。

「そ、そうです。」

「ん、いーよ。そういうことなら。よろしくされてもー？袖振り合うも多生の縁ってね。いつでもおいでー？お姉さんが教えてあげるよー。」

「あ、ありがとうございますー！」

「とりあえず、得意な武器だけ聞いといていいー？」

「片手剣と双剣、とりあえずこの2つです。」

「……へー、了解りようかい。」

今なんか変な間があつたような……。

「うん、今日はちよーつと忙しいんだー。でも明日からなら、いつでもおいでよー。だい、かんげーい。」

そういうとセツヒトさん……せつちゃんさんは両手を広げて変なポーズをとった。

○しぎんまいの社長さんみたいだ……。

良かった、これでお礼を伝えることもできたし、武器屋と既知の仲になることができた。

「それでは、お忙しい中失礼しました！」

「えーっ？もう行っちゃうのー？」

「実はこのあとギルドに行くんです。講習会？というのに参加するので。」

「あー、そかそかー。なーる。」

のんびりとした口調に惑わされそうになる……でも、やっぱりこの人強いよ。隙がない。
いや、隙なんか探してどうするんだ俺。アホか。

「じゃー、気をつけて行ってらっしゃい？」

「はい！」

「あー。待って待って。」

そう言うのと、セツヒトさんが近寄ってきて、何かを俺に手渡す。

ていうか並ぶと背が高いなこの人！スタイル良すぎだろ！顔近い！いい匂い！

「これー、お礼。」

「？」

「〈初心の護石〉。まー、先輩からの餞別ってやつー？」

「餞別って……使い方間違えてません？」

「硬いことは、いいからいいからー。昨日笑わせてくれた、おーれーいー。」

手をギュツと握って、〈初心の護石〉とやらを渡してくれた。

……普通こういうのは断るものだろうが、拒否するのも失礼な気がする。

「……ありがとうございます！大切にします！」

「んー、よろしい。やつぱり君、いいねー。」

「えっと、じゃ、じゃあ、行ってきます！」

何かとても恥ずかしい気持ちになって、逃げ出すように店を出ていく。

「がんばってね。」

後ろから声があったが、振り返ることができなかつた。

だって耳まで真っ赤になっていただろうから。

俺、おっさんなのに……女性への耐性は皆無のようです。

19ス。パルタ教育を始めましょう。

ハンターズギルド入口に着いた。

昼も過ぎ、人はまばら。ハンター達は、すでにそこかしこでクエストを進めているのだろう。

そんな中俺ときたら。

……両頬をバチンと叩いて、気合いを入れ直す。

先程のセツヒトさんとの一件で、何だか心がユルユルになっております。

おっさんなのに。中身30過ぎのおっさんなのに。

気持ちを切り替えて、ギルドのドアを開いた。

前回の受付に行けばいいと言うことだったので、そこに向かう。

誰もいなかったが、一応待ってみよう。

5分ぐらい待つと、声をかけられた。

「ソウジさん……ですね？講習会参加の。」

「あ、こんにちは。お世話になります。」

「は、はい。お世話になります。」

思わず出てくる社会人の癖。

許して、社畜根性は早々消えないんです……。

話しかけてきたのは、前回の受付嬢のお姉さん。

首からかかった名札が今日は見える。ハイビスさん……というらしい。

「お待ちしてました。では案内しますので、こちらにどうぞ。」

ハイビスさんに着いていく。

何かチラチラと見られている気がする……気のせいかな？

そんな微妙な空気のまま、案内されたのは屋外だった。

修練場という看板が見える。

ここで講習会が開かれるのだろうか。

「私はここまでです。ソウジさん……頑張ってくださいね。」

「は、はい！」

そう言つて、ハイビスさんは去つていっ……去つていかない？

何してるんだあの人、見つからないと思つているのか、訓練場の入り口からこちらを覗いている。

万引きGメンみたいだな……。

ま、まあいいや。気にしないことにする。

無かつたことにするスキルは、社会人になつてかなり鍛えられてきたんだ。
ここで役に立つとは思わなかつたが。

* * * * *

20分程は経つた。

俺は直立不動のまま。

このままでいいのか、なんて思いながら、目だけを動かして周囲を確認する。

ハイビスさん、見えますよ！

顔だけギリギリ出しているつもりでしょうが、ロングヘアーがバツチリはみ出てます

よ！

もうすっごい気になる！

何なんだあの人！しかしやっぱり美人だな！

ち、ちがうちがう！無かったことにするスキル発動！

そんな邪念だらけの頭の中。

突如として、寒気が襲ってきた。

ほんの一瞬。

（えっ、何この感じ怖い）

そのまま立ち尽くすのはやばい気がして。

即座に俺は左に倒れ込むように転がった。

その瞬間だった。

ズドッ！

「……チッ。」

怖そうな人が、俺のいた場所に、木剣を振り落としていた。

「……………えっ？」

沈黙。

しばし後。

その怖そうな人が、木剣を地面から引き抜き肩に乗せると、ゆっくりとこちらを振り向いた。

めっちゃいい笑顔で。

「やあっ！君が新人のソウジ君だね！歓迎する！私の名はマシヨルク！今日から君を担当することになった教官役のハンターだ！」

「……………えっ。」

「驚かせてしまつてすまない！君を試すつもりが、多少強めになつてしまつたな！ハ-

ハツハツハツハツハ！」

待て。

ちよつと待て。

今俺、かなりやばかったんじゃないか!?

「どうしたんだい？腰が抜けてしまったかい？手を貸してあげよう！」

「ちよつと待てえええ!!」

俺の声が、訓練場に木霊する。

「どうした？何か質問があるのかい？」

「違いますよ！危うく大怪我するところでしたよ！」

「いやいや、当てるつもりなど無かったさ！手加減の具合は間違えてしまったようだがね！すまない！」

「舌打ちしてたでしょう！明らかに殺る気満々だったでしょう！」

「ハーハツハツハ！」

「誤魔化してるう！」

外してからの舌打ちだったぞ。

しかも！地面にめり込む程の強さで！

「ハーハツハツハツ……おや、剣が折れてしまったな！」

「折れてんじゃねえか！」

もはやタメ口。

女神様と同レベルになったぞこの男。

いや女神様と同レベルって。ある意味神か。

「しかし、避けられるとは全く予想してなかったぞ！ソウジ君！なぜ避けられた!?!」

「そりゃ……殺気を感じて気づいたら横に転げました……。」

「うむ！第一関門は突破だな！立派立派！」

「第一関門？」

第一関門？なんだそりや。

「……モンスターは、急襲する。こちらの及びもつかないところで、動き、反撃する。しかも相手を殺すほどの勢いでな！だが人間ほど感情をコントロールできるわけではない！殺気を感じ取り、ここぞというときに避ける。これが、〈緊急回避〉だ！」

「緊急回避……。」

「うむ！対人間ではないハンターだからこそ、必要不可欠な技と言える。」

そういえば、先程の武器屋のセツヒトさんからも、強者の雰囲気を感じた。

あれは殺気というか、雰囲気だったか。

そこらへんの空気に、俺、敏感になっているのか。

「本当に驚いている！誇りたまえ、ソウジ君！次は第二関門だ！」

「早くない!？」

俺のツツコミは、全く通らないらしい。

教官……マシヨルクさんは、木剣を俺に向けた。

「続いては、先を読む訓練だ！多少スパルタで行くが、覚悟してくれ！」

「ちよつと待つて下さい！説明を！説明をしてください！」

「避ける！」

超シンプルな説明を終えると、教官は構える。

美しい。単純にそう思った。

そして、この後恐ろしい斬り筋が来るのも、なんとなくわかる。

だって、目が笑ってないんだよこの教官！

「ハアッ！」

「うおあ！」

思わず飛び退く。鼻の数センチ先を、剣先が掠める。

「君は双剣使いの様だな！なら、防御を捨てろ！避けるんだ！痛みを覚えろ！慣れるんだ！」

「慣れるかってんだちくしよおおおお!!」

教官が持つ木剣が、ものすごい速度で斬りかかってくる。

俺は無手。

背中の双剣を抜く暇もない。

というか、反撃はしてはいけないんだろう。

その為の訓練だ。

とにかく避けるしかないんだなチクシヨウ!

「ハッ！ハッ！ヤア!!!」

「てっ！...いうか！無理っ！...あだっ!!」

ついに肩に、剣先が当たってしまった。

それだけなのに。

それだけなのに、めっちゃ痛い。

「足は生きている！動きを止めない！」

「は、はいい!!」

迫りくる剣先を見つめることは、しない。

大体剣の長さは分かった。

だつて当たつてしまったから。

間合いが分かった。

太刀筋もわかりやすい。

教官がそういう風に行っているのだろうか。

さつき教官は言った。「先を読む訓練」と。

とにかく見るんだ。

(足運び……重心……かぶり、予備動作……ここ！)

不思議だ。

怖い。

怖いんだが、何かワクワクする。

某戦闘民族みたいなことを考えていた。

「ハッ！ヤア！セイ！タアアア！」

（上……からの右！フェイント……突き……！）

避けまくる。

なんで避けられているのか、自分でもよくわからない。

「……………フッ！」

（っ!!まるで予備動作がない!?!抜刀術!!?!）

ついに読みきれない一撃がきた。

剣を納めた体勢から、一気に横薙ぎをかましてきた。

正気かよこの人。

そんなことを思った瞬間、思わず腕でガードしてしまう。

木剣を。

腕で。

……。

……。

数秒の沈黙後。

「いってええええええ!!」

あまりの痛さに、俺は膝をついてしまった。

20スパルタ教育に身をゆだねましょう。

「ほらっ、回復薬グレートだ！飲んだら、次に患部にすり付けてみるといい！」
「あ、ありがとうございます……。」

骨でも折れたんじゃないかと思うほどの痛みがあつたのだが。

一応は痛みはひき、腫れていた右腕も次第に治っていく。

すごいなこの薬……。

「しばし休憩だ！10分後、次の訓練を再開する！」

「じ、10分!?!」

「ああ！ある程度痛みが残っているまま行おう！実践ではそんなこと、日常茶飯事だからな！」

「は、はいい。」

うへえ、と声を漏らす。

教官は、隣で何か薬と液体を混ぜたかと思うと、一定の速度でかき混ぜていく。10秒ほどでできたのは、先程もらった回復薬グレートというものだった。

「……よし！患部にすりつけるといい！」

「いや！先程もらいましたから！」

天然なのかこの人。

「そうか！ではこれは私が頂こう！」

「貰うんかい！」

「ちなみに、今のが回復薬グレートの作り方だ！覚えてかな!?」
「それも訓練だったんかい！休憩中ちやうんか!!」

もはやボケとツッコミである。

マシオルク教官は、赤と黒がベースカラーの重装備だ。

肩や腰にはトゲトゲがついていて非常に厳つく、怖かった。

だが、俺が怪我をした瞬間、この薬を出して介抱してくれた。

優しいのか厳しいのか全くわからん。

アメとムチしかない教育方針なのかもしれない。

もしくは……天然さんの可能性がある。

「しかしソウジ君には驚かされつばなしだぞ！ここまで私の連撃を避けたハンターはいなかったな！誇っていい！」

「あ、ありがとうございます。」

アメか？アメなのか!?

褒め言葉も、純粋に受け取っていいのか、よくわからなくなってしまう。

「君はどこかでハンターをしていたのかな！」

「い、いえ、全くの素人であります！」

だめだ、マシヨルク教官の口調に合わせると、完全に軍隊の答え方になってしまう！なるようになれ！もうこの人の前ではこの口調でいいや！

「そうか！だが、身のこなしは相当なものだな！これからが楽しみで仕方がない！」

そう言うのと教官は俺に木剣を二本差し出しさせてきた。

「第二関門も合格とする！言うことは特にない！」

「えっ！この講習、終わりですか!?!」

「ああ！今日の分はな！今君が口にした『先を読む』ということ。私の重心や動作、目線を読む力、感服だ！後は実践でいいだろう！」

「よ、良かったあ……。」

とりあえずあの痛い思いは、もうしたくない。

「この剣を手取るんだ！次の場所に移動する！」

「りよ、了解であります！」

ヤバイ。

この口調に慣れたら、もう戻れない気がする。

* * * * *

「次はここだ！」

やってきたのは、周りを岩山と滝に囲まれた場所。

ギルドの奥にこんな場所があるとは思わなかった。

よく見ると岩山のそこかしこに足場が見える。

あそこまでどうやって移動するんだろうか。

そして何より異様なのが、中央に鎮座する、一匹の蛙。

……のようならくり？ ロボット？

疑問が尽きない中、教官が岩山の奥にある歯車を回し始める。

ある程度勢いがついたところで、今度は滝にある水車の留め具を外した。

その途端、「ギギギ……」と音を立てて、中央のカエルが動き始める。

「これは〈へからくり蛙〉という！非常に丈夫な作りになっているので、攻撃の練習には

もってこいだ！」

そう言うのと、教官はからくり蛙に納刀のまま構えをとる。

やはり美しい。

何というか、構えが次の動作に向けて一番自然になっているというか、無駄が全く無い。

そう思っていると、教官は目にも留まらぬ速さで剣を振り抜いた。

「凄い……………」

人ってあんなに速く動けるのか…………。

攻撃を受けた蛙はビックともしなかった。

だが、教官は止まらない。

斬り上げに続けて回転斬り、その後突きを連続でおこなって…………ああ、もう目で追うことができない。

まるで舞っているようだった。

すると、からくり蛙が「ガガツ」と音を立てて動かなくなつた。

「このように、短時間に一定のダメージを与えると止まる仕組みになっている！
「なるほど。」

「ようし、やってみろ！」

「できるかあ！」

脊髓反射で突っ込んだ。

「なに!? まずはやってみなくては始まらないではないか！」

「たしかにそうですが！何かコツとかやり方のアドバイスは無いんですか！」

「うむ！確かに！」

「あと！訓練に見通しがほしいです！今日行う訓練はこれだけですか？」

そう、実はもうすぐ夕方、日が暮れる。

さらに言えば、全身疲れていて、満足に動けるかわからない。

「ようし！では、考えている訓練を伝える！心して聞くように、」
「サーイエツサー！」

疲れているんだな、俺。

ノリがよく分からなくなってきたぞ。

「まずは攻撃！モンスターを前にして、一定のダメージを与える！これをしなければ、大型モンスターを屠るなど夢のまた夢だ！」

「サーイエツサー！」

「また、並行して岩山を登る訓練を行う！コツをつかめば簡単だぞ！エリアの移動には必ず必要になるスキルだ！」

「さ、サーイエツサー！」

「更に！休憩時間を利用してアイテムの調合や罾の仕掛け方と言った、ハンターに必須のスキルを習得する！」

「さ、サーイエツ」

「そしてそして！訓練後は宿で筋トレと素振り、調合などの自主練を行ってもらおう！毎日宿題として、私が出来るを確認する！」

「……………サー……………」

「こんなところだ！異存は無いかな！」

「……………」

「ようし！沈黙は肯定とみなす！最後に！君に仮免許を渡し、最終試験の大型モンスター討伐を行ってもらおう！そうすれば、免許皆伝だ！」

「……………サーイエツサアアアアアアアアアア!!!」

講習会と聞いて、こんなスパルタ教育が待っていたとは。

誰も予想できないですよねそうですね。

その後狂ったように双剣を振った俺は、力尽きるように倒れたのだった。

21 自主練を始めましょう

水をぶっかけられて目を覚ました俺は、すでに日の暮れかけた街をトボトボと歩いていた。

「明日は朝食後！ギルド受付に集合だ！」

「サーイエツサー！」

「よし！解散！」

きつちり明日の予定を押さえられ、全身筋肉痛の中宿に戻ってきた。

「あ、お帰りなさ……うわあ、ボロボロだね。」

「た、ただいま帰りました……っ！」

ドールに出迎えられ、ホツとしたのも束の間、筋肉が悲鳴をあげる。

「待って、待って。疲れているときは、お風呂に行ったほうがいいよ。銭湯、案内してあげる。」

「お風呂？お風呂いいなあ。」

「だ、大丈夫？歩ける？」

何とか歩ける。

というかお風呂があるなら、一刻も早く浸かりたい。

だって汗でビショビショだし、臭くてかなわない。

おじいさんに断りをいれた俺は、ドールに案内をお願いすることにした。

* * * * *

「ここだよ。」

「おお……ここが銭湯かあ。」

のれんが掛かった入り口。煙突から立ち上る煙。

かすかに開いた開き窓からは、湯気が出てきている。

ここや……日本人の心、銭湯や……。

疲れのあまり訳のわからないテンションになる。

この辺、前の世界とあんまり変わらないな、などと思っていたら、ドールがとんでもない事を言い出した。

「じ、自分で脱げる？」

「ん？そりやあまあ……。」

「私、手伝おうか？」

「ああたの……んんん？」

何を言ってるんだこの子は。

それとも俺の耳がおかしくなったのか？

「いやいやいや。まずもって入れないだろ？男湯なんだし。」

「おとこゆ？」

「ん？だから、男女別で入るから、ドールは無理だろ？」

「よくわからないけど、みんな一緒に入るんだよ？銭湯。」

えっ。

何それ。

「待て待て待て！それはいけない……だろ!?なんかこう……だめじゃないか!？」

だめだ。

疲れて頭が回らん。

純粹な少女に教えられる程の語彙が、俺にはない。

「だって私、おじいちゃんと一緒によく入るよ?」

マジか。

何だこの世界。混浴OKなのか?

じゃ、じゃあこの暖簾の向こうには、マーベラスでファンタスティックでラグジュアリーな空間が広がっているのか!?

「それにソウジさん、か、体痛そうだし。脱ぐのも、た、大変じゃないかなって。」

いやいやいや。

……いやいやいやいやつぱりまずい。

それに混浴だった場合、他の女性とかいたとして。

鼻の下が伸びたおっさんの顔を、ドールに見られたくない！何となく！

「す、すまんドール、体少し触られるだけでも痛くてさ。気持ちは嬉しいけど、ゆっくり自分で脱ぐとするよ。」

「そう？……わ、私、別に嫌じゃないよ？」

「だ、大丈夫だから！大丈夫！じゃ！行ってきます！案内ありがとう！」

そう言うと、そそくさと銭湯に入っていく。

「………いつてらっしやい。」

何だかむくれ顔なのは気のせいでしょうか。
気のせいですよね。

よし、なら気にしないでおじさん体洗っちゃうぞー。
混浴かあ……。

変な期待をしながら、銭湯に入っていく俺であった。

* * * * *

「なるほど、納得した。」

銭湯から出てきた俺は、宿屋に向かって歩き出す。

火照った体に、風が心地良い。

「ああいう感じなら、混浴もできるわな。」

そう、先程向かった銭湯。

少し俺の認識とは違っていた。

初めは、男女一緒にスッポンポンになってキャツキャウフフする感じかと勝手に想像

していたが。

フタを開けてみたらそんな事はなかった。

まずは男女別になった脱衣所で服を脱ぐ。

次に男女別の湯浴み場で体をきれいにする。

その後は湯浴み着に着替え、サウナで汗を流す。

このサウナだけ、男女一緒。

サウナ後はまた湯浴み場で汗を洗い流す。

以上。

……つまりまあ、こちらの世界では、銭湯とは、サウナがメインのものなんだろう。

古代ローマの公衆浴場みたいな感じ。

知らんけど。

ちよつと安心した。いきなり女性の裸が目の前に来たらどうする。

のぼせて、また泡吹いて倒れたら洒落にならない。

そんなことを考えながら、村の大通りをゆつくり歩く。

疲労と温かさで、すぐ眠りにつきたいが、夕飯を食べて、自主練をしなければなら
ない。

教官の宿題は「回復薬グレート」5つの作成だ。それを念頭に置きながら、宿に歩みを進めた。

* * * * *

夕飯を取り終えた俺は、早速調合に取り掛かる。

「まずは……〈リストから調合〉で試してみるか！」

教官からもらった「回復薬」と「ハチミツ」を手に持ち、リストの中の「回復薬グレート」を選択する。

すると、いつの間にもやら回復薬を持った左手に、「回復薬グレート」が出来上がっていた。

「まじかよ……何か申し訳ないな……。」

一瞬で出来てしまった。

味気ない。

喜ばしいことではある。

だが、何とも空しい。

「……自分でもやってみるか！」

今度は、教官の見様見真似で2つの材料を混ぜ込んでみる。

宿のおじいさんから借りたスプーンを使って十秒ほど掻き混ぜ……でも何も変化なしか！

じゃあ回す速度をあげてみよう。幸い材料はたつぷりとある。

試行錯誤を繰り返すこと30分。

「で、できた!!」

ようやく一本！

達成感がある。

アイテム表示にはバツチリ「回復薬グレート」の文字が。

コツを掴んだ気がする。肝は、ハチミツを入れる速度だ。一定の量を、一定の掻き混ぜ速度で入れればいいわけだ。

「簡単には出来ないな……教官10秒ぐらいできてたのに。」

そこからまた15分ほどかけて、ようやく回復薬グレート5本を作ることができた。

「せっかく教えてもらえるんだし、講習会期間中は、ギフトに頼らず自分でやってみるか。」

* * * * *

次に庭にやってきた。

風呂に入った後にしたくはなかったが、これから筋トレと素振りだ。

「素振りはともかくとして、筋トレはギフトなんか使えないし。ここも真面目にやるか！」

ついた地力は、絶対に役に立つ。

最終試験である、大型モンスター討伐のために。
本気で頑張ることにした。

筋肉痛が辛いけど……！

22 イシザキ亭に貢献しましょう。

「ランニングはすべての基本だ！スタミナは双剣使いの肝！とにかく走り込むんだ！」
「サーイエツサー！」

* * * * *

「腕の筋肉ばかり使わない！全身で体重を支えて岩山を登るんだ！やればできるぞ！」
「サーイエツサー！」

* * * * *

「スタミナがない時は肉を食べるんだ！」

「サーイエツサー！」

「食べながら、相手の動向から目を離さないように！自分の隙は敵には好機！ピンチを作らない！」

「(モグモグ) ふぁーい えっふぁー!」

* * * * *

「双剣は手数数の武器! 太刀 太刀 丁寧に素早く! 回転を上げれば、他の武器を圧倒する性能がある!」

「サーイエツサー!」

「手を止めない!」

「さ、サー!!」

* * * * *

「チツ…………やるではないか! 午前の講習はここまで! 昼食にしよう!」

「今確実に舌打ちしましたよねえ!」

「午後は立ち回りとモンスターの生態に関する勉強会を行うぞ! 昼食は奢りだぞ!」

「サーイエツサー!」

講習会が始まって、1ヶ月が経過した。

マシヨルク教官によるシゴキ……もとい講習は続いていたが、なんとか俺も音を上げずに頑張っている。

マシヨルク教官は、本当にもうダメだ、というところを的確に見抜き、訓練内容を変えたり、内容を濃くしてくる。

教官として選ばれたのは、やはり伊達ではない。

たまに、本気で殺しにかかってくるんだが。

そして何よりもすごいのが、体力とスタミナ。

もう無尽蔵じゃないかと思うくらいだ。

疲れた様子を見たことがない。

このぐらいじゃなきゃ、第一線でモンスターを相手にするなどできないのだな、と思う。

「食事処までランニングで行こう！付いてくるんだ！」

「サーイエツサー！」

俺の弟子？つぷりもかなり板についてきた。

講習開始当初は、ドールや宿のおじいさんに心底心配された。

だが、日々のトレーニングを続ける内に体力・スタミナ共に付き始めてきた。

最近ようやく慣れてきたと思う。

まあその辺を加味してよりキツイ講習に進化させていくのが、マシヨルク教官の怖いところ。

ギリギリぶつ倒れる前に終わるもんなあ、毎日。

そうしてギルド奥の修練場から、ランニングで食事処に向かった。

* * * * *

「またここですか。」

「うむ！ここは非常にうまい！」

やってきたのは「イシザキ亭」。

以前俺がキャバクラでのおっさんの気持ちばかりかけたことでおなじみの店だ。

ちなみに女神さま情報では、初めて来たときの俺の反応がかわいくて、奥様のファン

層をゲットするに至ったとか。

その辺はもう気にしないことにしている。

「たのもうっ！」

「あらっ、マシヨルクさんにソウジさん！いらっしやい！」

昼時、混雑している店内に滑り込んだ俺たちは、何とかテーブルに着くことができた。

そう、何と「イシザキ亭」は今、ワサドラでちよつとしたブームになっている。

そして、なぜ俺たちがなじみ客のように扱われているのか。

その辺も含めて話しておこう。

* * * * *

事の起こりは3週間ほど前。

ようやく、俺が昼食を吐かずに食べることができるようになってきたころ。

「ソウジ君！相談がある！」

「えっ!? 珍しい。何でしょうか?」

マシヨルク教官が俺に相談してきたのだ。

「私はワサドラに来て日も浅い! 教官としての日々もめまぐるしい! おかげで町のことは全くと言っていいほど分からない!」

「あ、教官は『町』派なんですね。」

どうやらワサドラを町と呼ぶか村と呼ぶか、住人が日々論争を繰り広げているとか。

ちなみに俺は断然「町」派だ。

閑話休題。

「日々がんばるソウジ君に何かねぎらおうと、昼食をご馳走したい! だが、店が分からないのだ!」

「そうですね。でも教官? 私も来てまだ一ヶ月経たないぐらい——」

「そこでだ! ソウジ君! 何処か美味な食事処を知っているなら教えてもらいたい! この通りだ!」

「話無視して頭下げられた!!」

という経緯で、俺が唯一知る店、「イシザキ亭」に案内したのだった。

そこから教官はいたく「イシザキ亭」が気に入ったようで、毎日昼をご馳走してくれた。

正直とても助かっている。

そして通い始めて1週間。

「ケイさん！お勘定をお願いしたい！」

「あーいよっ。いつもありがとね。これ、おまけのアメちゃんだよ！」

「ありがとうございます。」

いつものようにケイさんにドギマギしながら、アメをもらう。

ちなみに、お姉さんの名前は「ケイ||イシザキ」さんだった。

教官が名前を知りたいと言ったら、教えてくれた。

なので俺たちは、「ケイさん」と呼んでいる。

「時にケイさん！ここはいつも客がないな！うまいのにもつたないぞ！」

「教官、ストレート過ぎです。」

「あはははは、事実だしねえ。いや実はねえ——」

そうやってケイさんは、大通りの方の大型の新しいレストランに、お客が取られていくことを話した。

頷く教官。

「なるほど……。」などと、珍しく考え込んでいる。

そこまではよかった。

だがそこから教官が発した言葉に、俺はめまいがした。

「……よし！ソウジ君！」

「サーイエツサー！」

脊髄反射で返事をしてしまう。

「この店が売れるアイデアを、私と一緒に考えるんだ！」

「サーイエツサ……アア？」

何言ってるんだこの天然教官は。

とその時は思ったが。

今思えば、教官なりに、この絶品料理を出す店を繁盛させたかったのだろう。

「さあ！ソウジ君！考えを述べてくれたまえ！」

「いきなり無茶な！」

「たしかにそうだな！ではスクワットをしながら5分待とう！はじめっ!!」

「サーイエツサー!!」

畜生。体に鬼教官のかけ声が染みついてやがる。

こうして、教官は頭をひねらせながら、俺はスクワットをしながら、顧客獲得のアイデアを考えに考えていった。

5分後、俺が出したアイデアはこうだ。

「?」店の看板のインパクトが全くない。表にレストランと分かるような看板を作りましょう。

②入口前に、おしゃやかな黒板スタンドを設置しましょう。今日のおすすめやシエフの一言をチョークできれいに書くと、お客も入りやすいです。大通りの方から誘導できるように、小さな案内板を大通りからこちらに向けて設置していきましょう。

③ついでにメニューも、表に数冊出しましょう。メニュー表自体も字ばかりで見にくいので、挿絵を入れて見た目が分かりやすいようにしましょう。

④そのメニューに添える説明文は、簡潔に、そしておいしそうに。新鮮、おすすめ、人気No. 1など、ポジティブな言葉を色んな料理にちりばめて、見る人の食欲をそそりましょう。

⑤内装は落ち着いてとても良く、並んでいるスパイスの瓶はセンスを感じます。思い切つてオブジェとしてスパイス瓶を棚に並べましょう。カウンターに置いたらケイさんが見えなくなります。

⑥看板娘として、ケイさんを前面に押し出しましょう。美人さんはそれだけで宣伝効果が高いです。

⑦ポイントカードを作りましょう。初めは2回来たらドリンク無料から始め、次は5回、7回、10回……という風にしていき、リピート率を上げていきましょう。

⑧客が増えることを見越して、伝票システムを導入しましょう。後々の金銭処理も楽になります。注文を聞くときには……

……

そうして思いつく限りの案を提案をすると、ケイさんも教官も、何なら厨房から出てきたシエフのお兄さんまで、口を開けて驚いている顔だった。

そして、ケイさんが俺の手を握ってこう言った。

「……ソウジくん！」

「は、はい！」

「これ、いいじゃない!!これならお客さんが増えるかもしれないよ！」

「ほ、ホントですか?今思いついただけなんですが。」

前世での記憶を頼りに案を出しただけなのだが。

こっちでは一般的では無いのかな。

「素晴らしいぞ！ソウジ君！私も驚きすぎて話すのを忘れていた！」

教官がいつもより笑顔だ。目も笑っているような。

そしてシェフのお兄さん。腕組んで厳つい顔だが、大きくうなずいている。ご納得いただけたようなら何よりだ。

「しかし、私が看板娘かい!?そ、そればかりはちよつとねえ……。」

「何を仰る！ケイさんは美しいぞ！男がこぞつて集まるだろうな！私が保証しよう！」

「ま、マシヨルクさんまで……。」

顔を真っ赤に染めるケイさん。

可愛いと思つたが、そこは胸の内に秘めておこう。

「しかし、私は何をすればいいんだい？ちよいと年を考えると、あの大型レストランの店員さんみたいなのはちよつとねえ……。」

そうなのだ。

大通りにオープンした店、店員さんが異様にレベルが高いし、若い。しかも格好が、神〇屋のパンを売る従業員さんみたいな制服なのだ。

ミニスカートだし。

おかげで男性客が溢れ返っている模様。

「いや、逆です。何もせず、いつも通りに接客をしてください。」

「えっ?」

「先程も言いましたが、この店は落ち着いた雰囲気と一流の料理の店。奥まっていますし、入りにくいなあ、と思う人もいるでしょう。そこを逆手に取ります。」

「っ、つまりどうするんだい?」

「メニュー表を見て、意外とお手頃な値段設定であることをアピールし、美人のケイさんの温かで明るい接客でハートをキャッチ。あとは料理を口にすれば、もうその人はこの店の虜になります。隠れた名店を見つけた気分。これは間違いないです。」

変に気取る必要はない。

入りやすい、でもいい雰囲気。

気さくなお姉さんとちよつと無骨だけど味は確かなシェフ。
更にこの立地。

この組み合わせ、絶対いける。

* * * * *

そうして現在。

この繁盛ぶりである。

「こうしてみると、少し前までお客さんがいなかったのが、嘘みたいですね。」
「うむ！これはかなりうれしいぞ！繁盛しているようで何よりだ！」

正直に言うと、ケイさんはただいるだけで男の客が寄ってくるだろう。

だがこの店はレストランであり、何よりも美味しいのだ。

ここを一番の推しにして、ケイさん笑顔と接客、入りやすくして良い雰囲気で脇を固めた方がいいと考えたが、見事にハマったようだ。

「ここまでの成果を出すとは！ソウジ君！第4関門突破だ！」

「その関門システムには疑問しか湧かないのですが、ありがとうございます。」

教官は何も考えていないのではと思うかもしれないが、実は教官も教官で動いてくれた。
ていた。

知り合いという知り合いに、声をかけるといふ、最も初歩的かつ即効性の高い営業を行っていたのだ。

ギルドの幹部とか首都の重役とか来たときは、コネクションの強さに驚かされたものだが。

それも相まって、この現状。

下手したら一番貢献してくれたのかもしれない。

かくして俺は、講習第4関門（？）を無事通過したのだった。

23ある受付嬢の話②

なんとも気になる新人ハンター、ソウジさんの対応に、私が右往左往していたその日。ハンターズギルドワサドラ支部も、少し大変なことになっていました。

理由は2つです。

まず、一つ目の問題。

村にほど近い岩山地帯でバサルモスが発見されたのです。

まあ、いること自体は大した問題ではないのです。

中堅ハンターがパーティーを組めば、大抵は討伐可能なモンスターですから。

しかも近年増えてきているモンスター。討伐対象になるため、屠ること自体は問題ないとは判断できません。

ですが今回は話が違いました。

すでにかかりのダメージを、負っていたというのです。

しかも、バサルモスが弱点とする箇所を、ありえない火薬量の爆弾で弾き飛ばした形跡があるとのことでした。

これは憂慮すべき事態なんです。

弱点を的確に狙うのは、ほぼ間違いなく人間の仕業です。

しかも武器ではなく、大型爆弾による攻撃。

無認可ハンターの密猟行為の可能性が出てきたんです。

ハンターズギルドは、ただただハンターさんのお手伝いをしているだけではありません。
ん。

人間とモンスターの生息域を維持し、モンスターの生態系を守るという大切な役目も
担います。

密猟行為は、村付きの登録をされていないハンターさんの狩猟行為も含まれますの
で、半ば黙認されてきました。

ですがそういった方々ほど、モンスターの生態系の維持にはとても気を配ってらっ
しやいます。

ですが、今回のケースは、あの屈強なバサルモスを追い込むほどの大型爆弾を使った
攻撃です。

もし大量にその爆弾があるというなら……。

うーん、これはギルドも騒ぎますよねえ……。

由々しき事です。ギルマスも慌てていますね。

こういうときは、新人担当で良かったと思います！大きな問題にはほとんど関わりのないところですからね！

なーんて考えいたんですけどね。

……ソウジさんのハント履歴。

なんですかこの「バサルモス撃退」って。

ええええ……。

どうやったら武器も何も持っていない、存在も知らないような人が、撃退できるんですか!!

本人に問い正して、上に報告すべきでしょうか……。

やはり明日見極めておきましょう！謎が多すぎますあの人！

そして2つ目の問題。

かの有名なG級ハンターのマシヨルクさんが、突如として村に訪れたのです。しかも首都ザキミーユシティのハンターズギルドマスターの紹介状付きで。

しかもたった一文、

「教官に推薦する。以上。」

……………なんですかこの投げやりな紹介状は！

マシヨルクさんと言えば、あの有名なG級ハンターのクラン「カホ・チータ」のメイ
ンメンバーですよ!?

泣く子も黙る、ヘビィボウガン使いですよ!?

おかげでギルド内は騒然。

いきなり伝説が目の前にいらしたんですから、そりや皆さん、浮足立ちます。
しかも教官で！私の管轄になっちゃう！

そんなこんなで。

「すまない！ギルドマスターに尋ねたところ、君が担当ということやってきたぞ！私はマシヨルク！しがないボウガン使いだ！」

もう来ちゃった！私に！

ギルドマスター！忙しいからって私に投げましたね！

いつか化けて出てやるう……。

「ほう！君はハイビス君というのだね！私のことは気軽にマシヨルクと呼んでくれ給え！」

呼べません！

伝説のハンターさん呼び捨てなんてできません！

まずいです。

私の受付嬢人生の中で、一番の難題がやってきました。

「恐れ多いです。改めて私、ハイビスと申します。」

「うむ！よろしく！」

「え、えーとですね、つかぬことをお聞きしますが、このワサドラに教官として務めたい、ということでお間違いなかったでしょうか……?」

「ああその通りだ！私のいたクランはこの度活動を休止してね！私もそろそろ弟子を取りたいと思っていたのだ！」

G級ハンタークラン「カホ・チータ」は、数年前の古龍襲来の際、撃退に成功。

演劇になるほどの有名なお話です。

しかし、所属G級ハンターの2名が死亡、他のメンバーの負傷も残り、惜しまれながらも活動休止になったんです。

もちろん覚えております。

大陸中が、厄災からの解放による安堵と、トップハンターたちの活動休止による不安に包まれましたから。

「昔世話になったワサドラに、私ができることは！」

「は、はい！」

「より良きハンターを、輩出していくことではないかな!？」

「な、なるほどお……。」

「ではいきなりで済まない、ハイビスくん！早速弟子候補を紹介してくれないか!?」
「わ、わかりました！」

どうしましょう。

どうしましょうどうしましょうどうしましょう!?

紹介しないわけにはいきません。

でも現在いる、そして明日にはすぐ来られる新人ハンターさんって……。

ソウジさんしかいないんですけど……。

「じ……実は明日昼過ぎから、一人新人ハンターさんがいらっしやいます。」

「おお！それはタイミングがいいな！」

「ですので、まずは明日ぜひ面接など行っていただいてから——」

「手配が早くて助かる！さすがギルドマスター推薦の受付嬢だ！早速明日から、私の教官人生をスタートさせるとしよう！」

「……え、えと、ですから——」

「それでは明日また参る！よろしく頼む！」

そう言うと、マシヨルクさん、もといマシヨルク教官は颯爽と去っていきました。嵐のような方でした。

G級にはアレな方が多いと聞いておりますが、先行きが不安しかありません。

ま、まあでも！経験豊富なハンターさんを新人に紹介できると考えれば、悪い話ではないですよね！

……ソウジさん、礼儀正しい方でしたし。

経歴はもう本当に疑問しかありませんが、マシヨルクさんなら大丈夫でしょう！だ、大丈夫……ですよね……。

* * * * *

翌日。

ついにソウジさんがいらつしやいました。

時間通りです、やはり真面目な新人ハンターさんということ……いやいやいや、も

しかししたら密猟組織の末端……いやいやいやいや、私は何を考えているのでしょうか。

とにもかくにも、本日はマシヨルク教官との顔合わせのみの予定です。
いつものように……いつものように……。

「ソウジさん……ですね？講習会参加の。」

「あ、こんにちは。お世話になります。」

「は、はい。お世話になります。」

礼儀正しいです。

しかも話し方も自然ですね……。

年齢の割に経験が豊富……幼いときから悪い組織に育てられ……ギルトに潜入して
内部から……

いけませんいけません、何を考えているんでしょうか私は！

憶測でモノは言えません！教官とのお話を見ながら見極めましょう！

「お待ちしました。では案内しますので、こちらにどうぞ。」

修練場に向かいます。

マシヨルクさんからここへ案内するように指定されました。面接などをここで行うのでしょうか、不思議な方です。

しかしソウジさんのことが、気になって仕方ないです。案内中も不審な点はないか、目が離せません。

「私はここまではです。ソウジさん……頑張ってくださいね。」
「は、はいー！」

さて、私も仕事に戻りましょう！

……ソウジさんの監視という名の仕事に！

ご心配なく。しっかりと建物に隠れながら、見つからないようにしております。午後の仕事も全て引き継ぎ済み！

万事抜かりはありませんよ！

有能な受付嬢として、ここはしっかりと見張らせて頂きます！

* * * * *

おかしいです……。

マシヨルクさんが、時間になってもいらっしやいません。

(もしや私、時間を間違えたでしょうか!?)

かれこれ20分ほど立っております。

その間ソウジさんは直立不動のままです。

(これはよくないですね……私の落ち度かもしれませんし、一度確認を……)

そんなことを考えたいた矢先でした。

急にソウジさんの背後に、マシヨルク教官が現れたのです！

え？何あれ手品!?

とか何とか思っていたら、次の瞬間！

マシヨルク教官が、木剣を両手で持ち上げ、振り下ろしたのです。
それはもう、思いつ切り。

(~~~~~)!!!

人間ビックリしすぎると、声が出ないものなんですネ……。

しかも、驚いたのはこれだけじゃありません。

まるで打合せしていたかのように、先ほどまで直立不動で立っていたソウジさんが、急に左に転んで避けたのです。

新人のソウジさんが。

マシヨルクさんの剣を。

お二人のあまりの速さに、もう口をパクパクさせるしかありませんでした。

ソウジさんは、全く予期していなかったのか、怒ってらっしゃいます。すごいです！伝説のハンターに向かって、大声で突っ込んでらっしゃいます！わたしには無理です。

(どうやらマシヨルク教官なりの面接だったようですね……ですよね？)

マシヨルクさんが何やらお話をされているのですが、ここからだとはよく聞こえませ
ん。

緊急回避……？？という言葉がころうじて聞こえた程度です。

そういうと、マシヨルクさんが急にソウジさんを攻撃し始めました！

ええええ!!??

危ないですよ!!

木剣とはいえ、当たればまず間違いない怪我しますよ!!

(ソウジさんが死んでしまいます……!!)

……あれ？

避けてる。

避けてますよ！

ソウジさん避けられていますよ！

少なくともあのマシヨルクさんの剣速、私が受付嬢として数々のハンターさんを見てきた中でも、かなり速い方です。

なのに、ソウジさん。

避けていますよ!!

(すごい！)

そこ！そう！

ああ危ない！

わっすごい！)

素晴らしい反応速度です！ソウジさん！

反撃しないのは、避ける訓練だからでしょうか？

ずっと回避を繰り返すソウジさん、恐ろしい速度の連続技を繰り出し続けるマシヨルク教官。

レベルの高いエンターテイメントを見ているかのような、そんな気持ちになつてきます。

でも、流石にソウジさん、体力が尽きたのでしようね。

マシヨルクさんの低い姿勢からの抜刀に対応できず、腕でガードしました。

(うわあ痛そう……。でもでも、見直しましたよ！)

あの回避速度！一線級でやっていけそうな程、いやそれ以上ですね！

私の「逃してはいけない」予感当たっていたのかもしれない。

そこからの武器の扱いについては、体力も底をついたのでしよう、実に新人らしい動きでしたが。

そこはいいのです。筋力や技術は、後でいくらでもついてきます。

反応速度は、いくら鍛えても中々伸びないものです。

今後が楽しみなハンターさんだと、再評価できましたね！

新人ハンター担当として、嬉しい限りです。

* * * * *

本日は無事お開きになりました。

時刻はもう夕方。

ソウジさん、ボロボロですね。

やめてほしくないのです、あとでフォローをしておきましょう。

……私はなぜ監視をしていたのでしょうか……。

あっ！

そうでした！ソウジさんは何者なのか見極めるためです！

見直している場合じゃありません！

（人となりなんて何もわからなかったです！というかむしろ、「実は裏組織の実力ある刺

客」説が濃厚になっている気がします！)

うん！

決めました！

……………この問題は、先送りにしましょう!!

……………。

……………だって難しいって言うか……………まだまだ実力がちぐはぐと言うか……………

やっぱり今後も監視を継続していきます。

新人担当受付嬢として！

24クエストを受注しましょう。

講習漬けの日々が始まって、一ヶ月と少し経った。

岩山登りや体力メニューも何とか突破した俺は、少しずつ実践に向けた内容ががんばっている。

教官は「この短期間で素晴らしいぞ！」と褒めてはくれるものの、いまいち実感が湧かない。

なぜなら、自分の実力がつけばつくほど、教官との差がいかにあるかがわかってきたから。

マシヨルク教官は、化け物かもしれない。天然の。

まあ焦っても仕方がない。

そんなこんなで、今日も今日とて日課の筋トレを行っていたら。

ある事態が発覚するのだった。

* * * * *

「ソウジさん、次の宿泊、どうするかい？」

宿のおじいさんに、宿泊の期間を延長するかどうか訪ねられた。

勿論する。もはやここは俺の第二の実家みたいなものだ。

おじいさんの座る受付台を見ながら、そんなことをしみじみと思う。たった2ヶ月足らずだが、この宿にはそれだけ愛着がわいている。

いつまでもいたい。

だが。

……お金がそろそろ底を尽きそうなのだ……!!

だって修行の日々だったわけ。

自分が成長しているのが嬉しいのだ。

キツイけど。

なので、おじいさんにはとりあえず3日分の宿泊代を払った。

さあ、いよいよ残りの金が少ないぞ。

マシヨルク教官に相談しよう。あの人、元プロハンターらしいし。

先立つものがなければなあ。

* * * * *

「何だそんなことか！ハッハッハッハッ。」

マシヨルク教官は笑い飛ばす。

翌朝、俺が「実はお金がもう無いんです。」と言うと、笑われた。

いやぶつちやけ、毎日修行漬けにしたあなたにも責任があるんですよ！

「いや、すまない！小さいことで悩むソウジ君が可愛くてな！」

「死活問題なんですが。」

「それもそうだな！初めて教官を試してみたが、弟子の生活を支えるのも師匠の努め！少し待っていてくれ！」

そういうと、徐に懐を探つて袋を取り出すと、俺にポイツと投げてきた。

「ていうか教官するの初めてだったんかい！」という突つ込みもさせてもらえないまま、なんとか受け取る。

ズツシリ。

重っ！

「教官？これは？」

「白金貨10枚ほどある！持つて行くといい！」

「は、はく？」

「金貨にして100枚ぐらいかな？まあ私にとつては端金だ！好きに使つて構わないぞ！」

え？

はくきんかはくきんか……白金貨!?

白金貨つて、金貨十枚相当のあの白金貨あ!!!??

「いやいやいやいや!!こんな受け取れませんか!」

「何っ!足りないのか!?!全くいやしんぼだな、ソウジ君は!どれぐらい必要なのだ!?!」
「違います違います!大金を受け取ることはできないと言ってるんですよ!!」

こんなすごいお金、何でこの人懐に持つてるの!?

ていうか端金!!?金銭感覚おかしいですよ!!

「しかし!他にどうすればいいのだ!?!」

「いやいや!普通にハンターとしての仕事があればいいかと思うんですが!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なるほど!それはその通りだな!」

「分かっていたただけで何よりです!遅いわ!」

丁重に袋をお返しする。

貰えたらどんなに楽か。

でも稼いでもないのでこんな金額受け取れない!!

「ようし!ではソウジ君!」

「サーイエツサー!」

「実践だ!モンスターを狩るぞ!」

「サーイエツ……………はい?」

また何か言い出したぞこの人。

そう言う、「ついてきたまえ!」と言って、ギルド内部に向かい出す教官。

え?本当に?実践って…………。

「今からあ!?!」

「うむ!思い立ったが吉日!ちょうどよい機会だ!」

足早にギルドの受付に向かう教官についていく。

「ソウジ君！今からクエストの受注方法を教える！次回からは自分でできるようにしてほしい！では行くぞ！」

「アカン。本気のやつや。」

結構な付き合いで、この人の性格は分かっている。

一度口に出した以上は、これはもう「絶対」なのだ。

「ハイビス君！ハイビス君はいるかな！」

「ブフォー！はい！」

受付のハイビスさんと呼ぶ教官。

新人受付窓口いつものように座っているハイビスさんは、お茶を吹き出しながらも返事をしていた。

器用な方だ。

「マシヨルクさん！ギルド内部で大声を出されては困ります！」

「ハツハツハツ！すまない！」

瞬時にお茶を拭き取るハイビスさん。

しかし教官はそんなことはお構いなく続けた。

「すまないついでに、一つ頼みがあつて来たのだ！」

「えつ、えつと、何でしようか？」

こちらをチラチラ見ながら、応対するハイビスさん。

正直、めちやくちや美人なので、そんな姿も素敵に見える。

ブ Rondロヘアーが今日もきれいにセットされ、受付嬢の制服がその美しさを最高に際立たせている。

まあ、建物から隠れてこちらを見るときにバレバレな時があつたり、実は隠れてお菓子を食べててほつぺたにカスがくつついたまんまだつたり、色々ドジなところもあるのだが。

そういったところも人気の理由なんだろうな。

教官がハイビスさんの目の前にやってきた。
俺もついていく。

「うむ！頼みというのは他でもない！」

「は、はい！何なりと！」

「この一番弟子、ソウジ君に、大型モンスター討伐のクエストを受けさせてはくれまいか
!?!」

「かしこまりました………ええええええ!?!」

「いやその反応になりますよね普通……。」

たった一月ほどトレーニングした素人が、モンスターの討伐に行くとか、頭おかしい
としか……。

ハイビスさんが続ける。

「ち、ちなみに具体的にどのようなクエストをお探ですか?！」

「場所は岩山地帯！バサルモス討伐だ！」

……。

……。

「できるかあああああ!!」

ハイビスさんとハモるとは、なんとも光栄な。

ちがうちがう。

無理ですよ教官!

この前たまたま撃退できたような相手を、今度は討伐!?

「なに、問題はない!今のソウジ君ならいけると踏んだまでだ!と言う訳でハイビス君!ちようどよいクエストなどはないだろうか!」

「お……お待ち下さいマシヨルクさん!まだソウジさんは、一月ほどしか訓練を行っておりません!いくらマシヨルクさんとパーティを組むとはいえ、流石に許可は——」

「いや違う!ソウジ君一人で討伐するのだ!」

「……………へ?」

今日何度目か分からないキョトン顔を見せるハイビスさん。

数多いハイビスファンの皆様、普段なかなか見せない顔が見られますよー。

「師匠として保証する！彼は既に狩猟可能な領域にいる！私が言うのだから間違いないな！」

「つまりそれは……ハンター最終試験のことを仰っているのですか!？」

「ああ、それでよい！早すぎるかもしれないが、受けること自体に問題はないだろう!？」

俺を置いてけぼりだが、何かバサルモスをソロで撃破しろってことらしい。

しかも最終試験とかなんとか聞こえたぞ。

「し、しかし……ですが……。」

「難しいだろうか！」

ハイビスさんが考えに考えていらっしやる。

そして俺の方を向いた。

「……………ソウジさん。」

「は、はい！」

何だか久々に面と向かって話したような。

「……………訓練校に通ったり、弟子になったりしてハンター試験に合格するには、通常最低でも一年は必要です。それだけ経験を積まなければ、それは命を投げ出しているようなもの。」

ハイビスさんの雰囲気、急に重苦しいものになる。

とても、実感がこもっていた。

「正直に申し上げますと、この一月と少し、私はあなたをとある理由で観察しております。詳しい理由は申し上げられませんが、ソウジさんの実力は相応にレベルアップをしていると思います。」

「うむ！私も太鼓判を押す！」

教官が相槌を入れる。
構わず続けるハイビスさん。

「ですが！私はこれまでに何度か、実力を見誤り、あるいは過信し、不遇のまま消えていく新人さんを見てきました。それを踏まえて、問います。」

少しの間。

重苦しい雰囲気そのままに、ハイビスさんが凜とした目で俺を見つめる。

「……バサルモス討伐一体。場所は岩山。制限時間は3日。試験監督としてマシヨルク教官が同行。こちらのクエストを……受けられますか？」

俺の返答を待つ体制になるハイビスさん。

やはりいい人だな、と思った。

実力があり、人を見る目も確かでハンターからの信頼も厚い。

何よりこの優しさが、彼女の良さなのだろうと思う。

だが、申し訳ない。

これが命を投げ出す程のクエストならば、教官は絶対に討伐しろとは言わないはずだ。

ハイビスさんの心配はご尤もだ。

だがここは、男として、ハンターとして、意地を張りたいたいと思った。

「……………受けさせてください、ハイビスさん。そのクエスト。」

「……………かしこまりました。……………ソウジさん、ご武運を。」

こうして、俺の人生初めての大型モンスター討伐クエストが始まるのだった。

25 決意表明をしましょう。

「クエストのスタートは、明日朝からです。期間は三日以内。それまでにバサルモスを討伐し、証明部位をお持ち帰りください。部位に関しては……。」

ハイビスさんから、懇切丁寧にクエストの内容についての説明を受ける。

確認は大事だと思うので、メモをしっかりと取っておく。

「……………また、今回は試験を兼ねるため、教官としてマシヨルクさんが同行します。ただし、アドバイスや手助けは厳禁です。命の危機に遭った時のみ、手助けを許可します。マシヨルクさんが手出しをすれば、試験は不合格となります。」

ソロ討伐というからには、そういうことだろうな。

俺が一人で討伐することに意味がある。

教官を頼るようでは、半人前のままだ。

「説明は以上になります……ソウジさん、何かご質問はありますか？」

「いえ、また確認してわからないことがあれば聞きます。」

「ええ、そうして下さい。明日の朝までに準備を整える、こういうのも全て、試験内容に含まれますので。」

ということはアレかな？

準備段階で教官を頼るのもNGということか。

準備は入念にしなければ。

そのまま俺と教官はハイビスさんに礼を言つて、ギルドを後にすることにした。

特例中の特例なのだろう、ハイビスさんは挨拶もそこそこに、忙しくギルド内を回り始めた。

何とか頑張ろう。

教官にいつだか教えてもらった、「命あればこそ！」の教えは徹底して守る。

その上で、このクエスト。絶対にクリアしてみせる。

* * * * *

準備から自分で行わなければならない。

いつもの様に昼食を「イシザキ亭」で取った俺たちは、宿の前で別れた。

「近くにいるとあれこれと教えそうだな！教えたことを思い出しながら、準備をするといい！」と言って、その場を去っていった。

待ち合わせは明日の朝、ガーグア車乗り場の前で。

そこまでに、何とかしてみよう。

ポーチの中身を確認するため、俺は一旦宿に戻ることにした。

宿に戻ると、ドールと鉢合わせた。

今日はブラウンのパーカーに、デニム生地七分丈のズボンを履いている。

いつもと違う時間帯に「ホエール」に帰ってきたため、不思議に思われたようだ。

「あれ？ソウジさん。早いね。」

「ああ、今日はね。」

「今日は、つて。明日は遅いみたいな言い方。」

「そうかもしれない。実は、大型モンスターの討伐クエストを受けることになった。」
「……えっ？」

「期間は三日間。だから、明日明後日帰ってこなくても、心配しないでくれ。」

「……も、もう大型モンスターの討伐に行くの!？」

「うん。今から準備をしないとなあ。」

頭をポリポリ掻きながら、これからのことをさつと考える。

部屋に戻って、ポーチの中身を確認。

必要なものがあれば買い揃えるつもりだ。

セツヒトさんのいる武具屋は夕方には閉まるはずだ、少し急ぐか。

「それじゃ、ドール。これから準備をするから……ドール？」

ドールに話しかけるが、返事がない。

何か俺、失敗した？

「ど、ドール？大丈夫か?？」

頭に手を伸ばした、その時だった。

「っ！」

バシンっ！

手を払われた。

痛い。

そのままドールは、宿の外に出て行ってしまった。

「……………えっ。」

突然の出来事に、呆然としてしまう。

……………。

………思春期真っ只中の女の子の頭を気安く触ろうとするのは、良くなかった
………。

いかん。とんだセクハラ野郎だ！

相手は子どもだが、立派なレディ。

安易な俺を呪いたい………！

どうしよう、心が痛い。

「ソウジさん、どうした？」

「のわっ！」

急に後ろから声をかけられてビククリした。

ホエールさんだった。あー驚いた。

「ホツホツホツ、わしの気配に気づかんとは。油断しておったな？」

「すみません、急に色々ありまして……。」

おたくの可愛い孫娘をセクハラしかけて、手を払われました。なんて言ったら俺殺されるんじゃないや……。

「まあ、一部始終は見ておった。ソウジさん、大型モンスターの討伐に行くんじゃないやな？」
「見ていたんですね……。失礼しました。実は明日の朝から、バサルモスを討伐するクエストを受注しまして。」

見られていたらしい。

ああシヨック。

我が人生第二の住まいと言っても過言ではないこの宿で、その店主と看板娘に嫌われてはもうやっていけないぞ。

「心配なさんな、ソウジさん。ドールがああなったのは、少しタイミングが悪かっただけじゃ。」

……タイミング？

俺が首を傾げていると、おじいさんが続けて言う。

「……少し来てくれるかの？」

「は、はい。わかりました。」

ホエールさんに付いていく。

そこは店の奥。二人の居住スペース兼事務所のようなところだった。

おじいさんは徐ろに、ブレスレットのような物を持ってきて、俺に見せてきた。

金属製のそれは、宝石のような青い石が数個くっついていて、女性がつけるには少し無骨な造りだった。

「これは……？」

すごい装飾品、というのが分かる。

放つ雰囲気は凄まじい。

何かしら曰く付きの一品なのかもしれない。

しばらく眺めていると、ホエールさんがゆっくりと話し始めた。

「これは、わしの倅の形見じゃ。」

倅ってことは、息子？

それってつまり……。

「……ドールの父親の形見、とも言えるの。」

「それは……。」

知らなかった。言葉が続かない。

ホエールさんが、重い口を開き始めた。

「……息子は、村で一番のハンターじゃった。ワサドラが、ここまで発展しておらんかった頃、まだまだモンスターはうようよと周りにおってのう……。そんなモンスター共を、息子はソロで何頭も仕留めてきおった。村の男たちが束になっても勝てないような、そんなモンスター共をな。」

おじいさんは、心底誇らしげに話す。

生息圏を賭けた、人間とモンスターの戦いということだろう。

開拓地は、ある意味モンスターとのせめぎあい、恐ろしい数のクエストが舞い込むと、教官に聞いたことがある。

「バサルモスやイヤンクック、テツカブラにアオアシラ。村のそばに現れた、と聞いたらすぐさま対処する。誇らしかったのう。そのうち結婚し、ドールが生まれた。そんな矢先じゃ……………あの怪物が現れた。」

そう言うと、ホエールさんは戸棚から、ドス黒く鋭利で平たい石の様なものを取り出した。

「暴食竜、イビルジョー。この黒いのは、そやつの鱗での。」

「イビル、ジョー……………」

「……………第一級災害指定種に指定されておる、正真正銘の化け物じゃ。」

「……………息子さんは、そのイビルジョーに？」

「ああ、食われた……………のかもしれん。確かかなことは何も分からん。ただおびただしい量の血と、装備品が見つかった。」

「……………」

「観測班も確認はしておらん……ハンターズギルドに正式に登録されてもいない、村付きのハンターじゃ。こうした末路は、必然じゃったのかも……。」

食われたのか、とは聞けなかった。

あまりに残酷すぎるから。

「明日は……倅の、ドールの父の、命日じゃ。」

「えっ……………」

「……色々考えてしまったんじやろうの。」

奇妙ではあった。

二人だけで宿を経営する姿が。

どこか無意識に、聞かないように、知らないようにしていた。
藪をつついて蛇を出すようなことは、したくなかったから。

「ソウジさん、さつきも言ったがあまり気になさんな。ドールにも、わしから言ってお

く。」

「ホエールさん……。」

「……ドールは、お前さんのことを、慕っておる。まるで父のようにな。………倅に頭を撫でられた記憶は、今も鮮明に残っておるそうじゃ。」

「すまない、と謝るのは簡単だ。」

でも、それは違う気がする。」

俺だって、ドールに好意を向けられて嬉しかった。」

男女のそれとは違う、家族のような好意。」

温かく、それだけで辛い講習にも耐えられた。」

知ってしまった。」

ドールの悲しみを知ってしまったから。」

俺は、負けられない。」

「ホエールさん。」

「……なんじゃ?」

「おれ、負けません。強くなりました。胸を張って、ドールにただいまと、言つてやりますよ。」

俺なりの決意を口にする。

「ホッホッホッ! 心配はいらんようじゃな! ……すまんの、ソウジ君。お前さんなら、話しても良いと思つた。まあ、あのマシヨルクも一緒じゃろ? 滅多なことにはなるまいて。」

「はい。でも、俺はソロでやり遂げるつもりです。」

「ふむ。……ええの、ソウジ君。頑張つてきなさい!」

「……はい!」

おじいさんに背を向けて、部屋を出る。

大きな決意を胸にして。

「俺は、絶対に負けない。」

口にすると同時に、改めて気合を入れ直した。

26 武具の最終点検をお願いしましょう。

「セツヒトさん、いますかー？」

武具屋にやってきた。

ポーチの中身を補充するため、雑貨屋に寄った俺は、あらかた不足のアイテムを購入した。

そして最後に、セツヒトさんの店にやって来た。

ここで武器と防具を見てもらおうと考えたからだ。

と言つても、俺のポーチにはクリーンアップされるギフトが付いているので、見た目にはあまり問題はない。

だが念の為、というやつだ。

人事を尽くす。

実は教官とも、この店に何度か訪ねたことがあるのだが……。

「ソウジ君は手入れがよくできてきているからな！問題ないだろう！私は、さ、先の喫茶店で待っているから、見てくるといい！それでは！」

「お？今日は雑貨屋でセール中か！私はそつちを見てこよう！ソウジ君はゆつくりとしていくといい！それでは！」

とかなんとか言つて、どこかに消えてしまうのだ。

せつかく武器や防具の種類や、手入れの仕方を教えてもらおうと思つたのだが。

おそらくセツヒトさんと、昔何かあつたのではないかと思う。

なので、俺にとって武具関係の師匠は、実質セツヒトさんということになる。

「セツヒトさーん。入りますよー？」

一応断つてから店を開ける。

店なのだから、勝手に入つてもいいとは思ふのだが。

ドアには「開いてるよん」つて木札がかかつてるし。

何だこの木札……裏には「おやすみなさーい」つて書かれている。

……力が抜ける……。

「ごめん下さーい。武具の点検に来ましたー！」

「あーはいはい。ちよつとまってねー。」

店の奥から声がした。良かった、いた。

この人、気分で店閉めちゃうから、不安だったのだ。

時刻は夕方。

「おなかすいたー」とかなんとか言つて、閉められてもおかしくない時間だ。

「ソウジだー。なーんか久しぶりー。」

「お久しぶりです。何かやってみました？忙しいならまた今度来ますが。」

「だいじょーぶ。今終わったからね。……何してたか気になるー？」

「いいえ、気になりません。」

「えー、ソウジ最近冷たいなー。おねーさん寂しいぞー？」

セツヒトさんはことあるごとに俺をいじってくる。

俺が女性に慣れてないのを分かって、その辺をいじってくるので、質が悪い！

しかもドキドキしながら、いじられて多少喜んでいる自分が、なんとも情けない……
おっさんハートは純情なのだ。

……要件はさつさと済ませよう！

「実は明日、クエストを受けることになりました、武具の点検をしてほしいんです。」

「おー。ついにクエストだ。おめー。で？何系？採取？運搬？んー、小型の討伐もありうるかなー？」

「……バサルモスですよ。」

沈黙。

「……んー？なんて言った？」

「……バサルモスの討伐です。明日朝から三日間。教官は付きますが、ハンター試験と兼ねて、行つてきます。」

セツヒトさんは、珍しく両目とも開いたままだ。驚いている。

そりゃそうだ。

「……そかそか。ソウジは早いねー!もう大型かー!」

「そうなんです。自分でも驚いてますよ。なので、双剣の——」

「教官は誰?」

「えっ?」

急に真顔にならんといてください。怖いっす。

「教官は、誰ー?」

「えー、えつと。」

「んー、いやねー?最近メキメキ力を付けていくソウジは、ホント嬉しくてねー?もう私としてはー?可愛い可愛い弟のようなのさー。でも、一ヶ月で、たった一ヶ月で大型モンスターの討伐に行かせるのは、ちょーつとどうかなーってね?せつちゃんさんは思うわけー。わかるー?」

アカン。

なんだか急にセツヒトさんの雰囲気、恐ろしいものになった。

可愛がってくれるのはとても嬉しいのだが、このままではギルドに文句を言いに行きかねないぞ。

それにここで名前を出しては、教官もただでは済まない気がする。

「ま、待つてください、セツヒトさん——」

「せつちゃん、でしょー?」

「せ、せつちゃんさん!俺は大変教官にはお世話になってましてですね。そのプライバシーと言いますか個人情報をおいそれと言うわけには——」

「教官はー。……………だれ?」

そう言うや否や、セツヒトさんは顔を至近距離に近づけて目を離さない。

うわあめつちや美人!そして目で殺される……!!

……………すみませんマシヨルク教官。

この人に隠し事は無理です……………。

「まつ、……………」

「まー?」

天井を見上げて目を瞑り、覚悟する。
冷や汗が止まらない。

「マシヨルク教官です……………」

「……………んー?」

……………。

沈黙。

「わーお……………。流石に予想外。」

セツヒトさんは俺から離れると、受付にあったイスにゆっくり腰掛ける。
そしてなにか考え事をするように、右手を顎にかけた。

「……お、お知り合いですか!？」

「んー、んんつとねー。説明が難しいんだけどー……敵？」

「……な、なるほどー。」

すんませんマシヨルク教官。

弟子は今、師匠を売ってしまいました。

目の前の銀髪美しい女性に。

お許し願いたい。

しかしどうやら、今から殴り込みに行こうとか、そんな剣呑な雰囲気ではなくなつた。

「しかしアイツが教官ねー。どーゆー風の吹き回しー?……まーでも、昔から見る目はあつたからねー。」

「……えつと。せつひーせつちゃんさん。」

「あー、ごめんねー。ソウジに何かしようってんじゃないから、安心してねー? 武具の様子、見るから出してみー?」

いつもの口調に戻ったセツヒトさんは、俺から装備と双剣を預かると、点検を始めた。おしゃべりが好きな人なのに、いたく真剣に武具の点検を進めていく。俺はすることもなく、なんとも気まずい雰囲気の中、店の中の武器を眺めていた。

15分ほどして、セツヒトさんから声がかかった。

「おまたせー。いやー、ソウジはしつかり手入れしてるねー。新品みたいで言うことないわー。」

「あ、ありがとうございます。」

ほぼポーチのおかげなんだが。

「うんうん。おねーさん嬉しいぞー？大切にされてる装備、愛を感じるね。」

「ははは……。きよ、教官の指導が良かったのかも？なーんて。」

「あははは……。チツ。」

「……。す、すごい嫌ってるんですね。」

こんなあからさまに態度に出す？

目が笑っていない。

舌打ちをかますところが教官と似ていますね、なんて。死んでも言えない。

ますます過去に何があつたのか気になる。

でも今日は聞くのはやめておこう。

絶対ろくなことにならない気がする。

「……まー、切り替えてー。」

「は、はい。」

「とりあえず、このままクエストに行つて問題なつしんぐー、ですよ。しいて言うなら、ちよーつと斬れ味がー、心もとないかなー？」

「この剣じや厳しいですかね？」

「んー。バサルモスはねー、とにかく固いのさ。だから、近接武器はあくまで陽動で、遠距離組が、こようバコバコーつて削る感じ？」

「そこなんですよね。弱点の腹部は狙うにしても、刀がすぐダメになりそうで。あ、砥石はたくさん用意してます。」

双剣のよさは手数。教官にみっちり教え込まれた。

そして攻撃を行うと、武器の斬れ味が下がる。

つまり双剣は、斬れ味が悪くなりやすい武器と言える。

なので戦闘中、時には危険な中、何回も刀を研ぐ必要がある。

装備のスキルに〈砥石使用高速化〉があるとはいえ、攻撃が止まる機会はなるべく少なくなりたい。

「んー。ようくわかってるねー。やっぱりソウジはいいねー。」

「相手の特徴を知らないのと、戦略は立てられませんからね。そう教えられました。」

「いい教官やつてるなー、アイツ。むかつくけどー。」

「ははは……。」

いかんいかん、教官の話はしないようにしたかったが、俺の今のハンターとしての礎は、間違いなく教官の講習のおかげ。

どうしても、話に上がってしまう。

「じゃあさー、明日の朝だっけー？それまで、この武器預かっていいーい？」

「えっ？……なにをなさるおつもりですか……？」

「んふふー。可愛い可愛いソウジのためにー？おねーさんが一肌二肌脱いであげようかなってねー？」

「それは……。」

……。

いかんいかんーやらしいこと考えている場合か。

「お、何か別の意味で、期待してない？」

「し、してません！」

「うそっけー。お顔真っ赤にしてー。」

「はい嘘ですちよつと違う意味に捉えましたがごめんなさい。」

「うわー。ソウジやらしーねー。」

「もう勘弁して……。」

今日も今日とてからかわれた。

「まー冗談は置いてねー。明日の朝までに、武器の斬れ味上げておくよー。」

「えっ？可能なんですか!？」

「うん、かのーかのー。まあ料金は……結構いくけど。」

「ぐっ……でもそれは、しょうがないかも……。」

「まー後払いでもいいしー？それともー？体で払ってもらおうかなー？」

「後払いでお願いします。」

きつぱりと断つてから、おれはポーチをふれて残り所持金を確認する。

5000z。残り銀貨5枚ほどか。こりや無理だ、稼がなければ。

「それともソウジ、違う武器とか装備もってないー？」

「えっ、まあありますけど。」

「あるんだ。それ、買い取ってもいいよー？」

「ホントですか？」

「うん、流石に今持つてくるのは大変だろうから、クエストの後にでも持つてきてー。精算してあげるよー？」

「助かります！」

実はポーチの中にある大量の武器。

これが売ることができたら、少しはお金になるのでは、と思っていた。今すぐ出したら不審に思われること間違いないので、次回に清算ならありがたい。

「じゃ、今日はゆっくり休んでおきな？ モンスターは寝かせてくれないぞ？」

「はい、ありがとうございます。お言葉に甘えます。」

「うんうん、よろしー。じゃ、明日朝車乗り場の前に持つていくね？」

「はい！ よろしくお願いします！」

こうして、セツヒトさんは俺の双剣を手にすると、「まかせてー」と言つて、奥の工房に入つていった。

俺も付き合いましたよか？とか言おうと思つたが、「そんなに私と一緒にいたいのかな？？んー？」とかなんとかからかわれそうなので、そつと店を出る。

日も沈みかけ、宿に戻ることにした。

「あつ。」

そういえば。

明日朝ガーグア車乗り場の前って。

教官と鉢合わせになるんじや。

……。

よし決めた！

「スキル！なかったことに！」

こうして、何の解決にもならないスキルを発動した俺は、教官にそつと心の中で謝っておくのだった。

27クエストに向かいました。

「あまり眠れなかったな……。」

日課にしていた筋トレだけ軽くすませて風呂に入り、夕飯をとってとっとと就寝。

したまではよかったのだが。

中々寝付けなかった。

怖くて緊張しているのか、初めてのクエストにドキドキしているのか、わくわくしているのか。

自分でもよくわからない。

「朝ごはん食べよう……。」

日も昇り始めの時間帯。

そう言えばドールと気まずいことになっていたことを思い出し、少しだけ憂鬱になる。

だが、俺は帰ってくるんだ。
この宿に。

ドールに「ただいま」と、言ってるのだ。

「……よしっ！」

両頬をパンツ！と叩くと、俺は食堂に向かった。

受付にも食堂にも、ドールの姿はなかった。

おじいさんに挨拶をすると、

「朝ごはんを用意した後、どっかに行ったわい。……父親の墓にでも、お参りしてるのかも知れんの。」

と教えてくれた。

そうか、今日は、ドールの父親の……。

昨日のことを思い出し、少しだけ、胸が苦しくなる。

「あまり気になさんな、と言ったじゃろう？ わしからも昨日伝えておいた。マシヨルクがいるんじや、滅多なことにはなるまいて。」

「はい、ありがとうございます。」

「うむ。ハンター試験、頑張りなさいよ。」

朝食を食べる。

今日はいつものハムエッグにパンとスープではなく、厚切りの食パンにベーコンとレタス、スクランブルエッグが乗っている割と豪華な朝食だった。

スープも、芋とよくわからないキノコなどが入ったクリームシチューだ。力が湧いてくる。

かなりのボリユームで前世の俺なら半分でギブアップだったと思う。

だが、今の俺ならペろりといける量。

ドールが朝、頑張って作ってくれたのだと思う。ありがたくだこう。

準備もそこそこに、ガーグア車乗り場の前に向かう。

そういえば、教官は無事だろうか。

セツヒトさんとただならぬ仲らしいし、今朝は同じガーグア車乗り場に来るはずだ。

……気にしないことにしよう、そうしよう。

武器の斬れ味、楽しみだなー。

* * * * *

「おはようソウジ君！準備は万端かなー！」

「おはようございます教官！準備は何とか終えました。」

朝から○岡修造ばりにテンションが高いマシヨルク教官。

心の中で、昨日存在を売ってごめんなさい、と謝っておく。

「すばらしいぞ、ソウジ君！だが、見たところあまり眠れていないようだな！ガーグア車の中で少し寝ているといい！」

「はい、そうします。ていうかよくわかりますね!？」

「いつもより少し目の下が黒いような気がしてな！観察眼はハンターの基本だぞ！どれ！私はガーグア車の内装でも確認してこよう！」

そう言ってガーグア車の方に向かっていくマシヨルク教官。

この人、俺のこと見てないようで見ているからなあ……。

教官としては本当にいい人なんだと思う。

………天然だし！人の話聞かないし！スパルタが過ぎて何度か逃げようと思ったけれども！

トントン。

不意に背中を叩かれた。

「おはようございます、ソウジさん。昨日はよく眠れましたか？」

「あ、おはようございます、ハイビスさん……ん？」

今日も可憐なハイビスさん

だが……何だか非常にギンギンの目で微笑んでいらつしやる……。

「ハイビスさん、わざわざ来ていただいてありがとうございます。」

「いえいえいえ、新人ハンターの初クエストや試験の際は、担当受付嬢は見送るようにしているのです。」

「それはそれは、重ね重ね——」

「決して！決して心配で来たわけではありませんからね？ なにか質問があつたらすぐ答えられるように、ずつとギルドで寝ずの番をしていた訳ではありませんからね？ ええ、ちいつとも私、心配しておりませんので！ 怒っておりませんので！」

……ああ！ そういうえばそんな話もしていたような！

……アカン、怒ってらっしやる。

しかもこう、ぷくーつと頬をふくらませるタイプの怒り方！

多分同性が見たらイラつとするやつ！ やめた方がいいですよハイビスさん！

「……申し訳ありません、ハイビスさん。試験ということになって、自分でできることは自分で、と意気込んだ次第です。」

「で、ですから、謝る筋合いなど——」

「本当に、申し訳ありませんでしたあ！」

こう、謝るなら謝るで100%全開で謝る！

日本古来の……必殺！土下座！

「いやいやいや！そこまでしていただかなくてもいいですから！分かりましたから！顔を上げてください！」

「ほんとおおおおにいいい!!すみませんでしたあああ!!!」

「もういいですう！わかりましたからあ！」

ようし、何とかなった。

営業時代に培った謝罪スキル、生かされました。

ありがとう、前世の営業部の先輩。

「もうっ……実は昨日、ソウジさんにお伝えし忘れたことがありますして。」

「それは……?」

ハイビスさんが何かチケットのようなものを俺に手渡した。

「ネコタクチケットです。今回は行きはガールズ車を利用しますが、帰りはこちらのチケットを使つてください。アイルーがお迎えに参ります。」

「アイルー?」

「ええ、我々ギルドと、昔から懇意にしている猫人族です。正式にハンターとして認められれば、アイルーオトモを随伴してクエストを受けることも可能になります。今回ソウジさんは正式ハンターではありませんが、帰りのネコタクチケット使用は認められましたので。」

なんと。

そんな便利な猫さんがいらつしやるのか!

ねこ……。

ねこ……。

知らなかった、後で教官に聞いてみよう。

「ありがとうございます。わざわざこんな朝早くに。」

「いえいえ、むしろ早く行っていたら、私はベッドに潜り込む予定です。」

「あははははー……………」

笑顔が怖いよ、ハイビスさん。

いかん。話題を逸らさなければ！

そんなことを考えていたら、通りの方から武具を担いだセツヒトさんがやってきた。

「おーはよー。ソウジ、おまたせー。約束のブツ、持ってきたよー？」

「おはようございます、せつ……………せつちゃんさん！」

救いの女神現る。

ナイスタイミングですよセツヒトさん！

「んー。一応確認してくれるー？いやー気合い入れたら朝までかかっちゃってねー。お

またせして、ごめんねー？」

「いいんですいいんです、時間通りですよ。」

「そー？よかったー。」

むしろ完璧なタイミングです。

そう思いつつ、包みを広げるセツヒトさんを見る。

セツヒトさんは鞘に入った二刀を俺に手渡すと、使ってみて、と言わんばかりに微笑んだ。

糸目から本気の瞳がちらりと見える。

「それでは失礼して……。」

周囲を確認して、刀を抜く。

青光りする刀身、見た目にはあまり変わらないが、これはかなり斬れ味が良くなったのでは？

思わず情報画面で武器の情報を確認。

「……ハリケーン。」

ツインダガーの派生。段階としては5レベルも上がっている……。これってかなり強いんでは？

「おー？良くわかったねー。初心者用双剣、ツインダガーの派生強化、ハリケーン。刀身の青さがそのまんま斬れ味。それを維持すればー、多分、バサルモスにも攻撃通るよー？」

「おおっ……！すごいですねー！こんなに強くしてくれるとは……？」

「いやいや、おねーさんむしろキミの知識にびっくりだよー。よく知ってたねー？」

情報画面を見ていたことがバレてしまう！

うかつに声を出してはいけなかったな……。

「い、いえ。以前教官から教えてもらいました……。」

「あー……そういえばそうだったねー。……あいつ、今ここにいるの？」

やばい、うまく交わしたつもりが違う地雷を踏んでしまった。

教官、もう再度ごめんなさい。

「おー！ソウジ君！武器も強化したのか！それならば、バサルモスなど恐るるに足らず！準備がよくなる弟子を持って私は幸せ……………」

「……………よー、マシヨルク。元気にしてたー？」

「……………せ、セツヒト……………」

ああああバッドタイミング……………。

教官、間が悪すぎます。

というか、教官がここまでタジタジになるの、初めて見たぞ……………。
そんな感情を持ち合わせていたことにも驚きだ。

よし、俺は黙ってよう。そうしよう。

というかいつの間にかハイビスさんが俺の後ろで縮こまってらっしやる……………。
まあ怖いよねえ。殺気放ったセツヒトさん。

「久しぶりだねー、マシヨルク。」

「あ、ああ。……数年ぶりになるかな……。」

「んーまあ？こんな場所で色々言うのもあれだしー？一つだけ。」

「……………っ！」

見えなかった。

セツヒトさんが、とんでもない速さで教官の前に立ち、拳を教官の顎の下に構えていた。

……速っ!!ええ!!見えなかったんですけど!

ていうか教官の反応速度を超えたあ!?

セツヒトさん、やっぱり半端ないお人だったんだ……。

教官を睨みつけながら、セツヒトさんは続ける。

「ソウジに何かあったら、マシヨルク。お前を許さない理由がまた一つ増えると知れ。」

「……………。」

「返事ー？」

「……………ああ。任せておけ。そこは抜かりなく。それにな……………」

バツ！ズザア！

今度は教官がセツヒトさんの拳を払って、腕を掴んだ。

うん、動きがcaろうじて見えた。

やっぱり教官は教官だな！

もうこの二人何!? 次元が違いすぎる!!

「ソウジ君は、強いぞ。おそらく、私やお前以上にな。」

「なっ……………」

「それに、私はソウジ君の師匠だ。私が死んでも、生きて帰す。」

「どの口がっ……………」

振りほどこうとしたのだろう、セツヒトさんの腕に力が入り、目に見えて太くなる。

だが、ビクともしない。

教官ってすごい。改めてそう思った。

「……すまなかった。また改めて話そう。」

「……ふんっ！」

腕を振りほどくと、セツヒトさんが申し訳なさそうにこちらを振り向く。

いつものセツヒトさんの表情だ。いやもうどつちが「いつも」なのか分からなくなってきたのだが。

「あー、あははー。ごめんねー。……ソウジ、頑張ってきてねー？」

「は、はいー！」

「ん。応援してるよー。じゃ、おやすみー。」

手をヒラヒラさせてのんびり帰っていくセツヒトさん。

……嵐が去った。

* * * * *

「……さて！そろそろ出発しようか！」

「切り替え早いよ！説明もなしか！」

マシヨルク教官は、何事もなかったかのように話を進めようとする。
気になるわ！でも聞けないわ！

いつか二人が話す時が来るまでは、俺からは控えておこうと思う。

「お二人共……そろそろガーグア車が出発できそうですよ？」

「あ、すみません、ハイビスさん！」

空気になっていたハイビスさんが、車の準備ができたことを教えてくれた。
さて、そろそろ出発だ。

そんな時、予想外の声があった。

「ソウジさん！」

「え!?!……ど、ドール!?!」

驚いた。ドールまで見送りに来てくれるとは。

「走ってきたのか？」

「うん……。」

息を切らしながら、見送りに来てくれたのかと思うと、胸が暖かくなる。

「あの、ドール。俺——。」

「ソウジさん。」

「……うん。」

「昨日はごめんなさい。……私、お父さんのこと、誇りに思ってる。ソウジさんが頑張っていることも、よく分かっている。だから——」

泣きそうな顔で、でも笑顔で、ドールは言う。

「気をつけて、行ってきてね。それだけ、伝えたくて。」

「……ああ、任せておけ。ただいまって、必ず帰るから。」

ドールに悲しい思いはさせない。
優しいこの娘に、涙は似合わない。

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい。」

ガーグア車にそそくさと乗り込む。

手を振る。

ドールとハイビスさんが振り返してくれた。

ニヤニヤしているマシヨルク教官がうっとおしい。

セツヒトさんとの関係を、根掘り葉掘り聞いてやろうか。

こうして、色々な人の思いを胸に、俺は初クエストに向かうのだった。

28リベンジしましょう。

ガーグア車に揺られること、1時間ほど。

俺とマシヨルク教官は、岩山地帯にたどり着いた。

御者のおじさんは俺たちを降ろした後、「ぶこ武運を。」と渋い一言と共に、村に戻っていった。

これで、帰りのネコタクチケットを使うまで、基本的に村に戻る手段は無いというところか。

乗り場の横は、簡易的なテントと休憩するスペースが用意されている。

ここは安全地帯なのだろうか。疲れたら休むこともできるらしい。

アイテムを入れるボックスも用意されており、中には簡単な道具類が入っていた。

まあ結構な道具類を用意してきたので、必要はなさそうだが。

「ソウジ君……ここから私は一切の口出しができない！自分の力でモンスターを倒すのだ！」

「サーイエツサー！」

そう言うのと教官は近くで一番高い岩山まで走って行ってしまった。

……速すぎるって。人間辞めてんなー、あの人。

まあ気にしないことにする。

「落ち着いていこう。」

自分に言い聞かせるように、つぶやいた。

ようし、まずはバサルモスの姿を確認するか。

バサルモスは擬態が得意だ。

逆に言えば、岩がゴツンと飛び出ている、そんなオブジェをしらみつぶしに調べていけば、バサルモスにたどり着くことができるはずだ。

……そして正直に言おう。

情報画面のマップには、すでにバサルモスの位置が分かるようになっていた。

自分の位置が赤く点滅しており、大型モンスターの緑色。うーん、やはり恐ろしいぞこの情報画面。

クエストに來ると、その便利さ、もといおそろしさが分かる。

その他にも、〈採取アイテム〉というタブに合わせると、採取アイテムのある場所がピンク色で見える。

……このマップがあれば、金儲けとかすぐできるのではないか……？

と、とりあえず、教官に教えてもらった方法でバサルモスを探りながら、マップに表示されている表示に間違いはないか、確認してみよう。

「よし、出発！」

俺は周囲の警戒を怠らないようにしながら、進んでいった。

* ・ * * * * *

「……………いた。」

バサルモスを発見した。
発見したのはいいのだが。

「バレバレやんけ……。」

隠れる気はあるのか、あのバサルモスは。

〈モンスター情報〉によると、バサルモスは地中に潜ったりビームを吐いたり、意外と器用なモンスターらしいのだが……

なーんの岩山もない地帯で、一つだけポツンと背中の岩石を出しているとは。

緊張感に欠けるが……。

まあいい！ここから講習の成果を教官に披露するときだ。

多分どこかで見ているはず。

バサルモスに近づく。

地面から露出した背中。その奥、出現してくるであろう部分にシビレ罠を設置。

背中横に大タル爆弾も設置。

まずは大タル爆弾で、バサルモスを地中から出す！

「せーの！」

……ドガアアアン！！

石ころを思いつきりぶつけて起爆する。

大タルでこの威力。やはりあの時の「大タル爆弾G」は威力おかしかったんだな……。

すると、地中からのそり。

バサルモスが、姿を現した。

だがここでひるまない。

この後すぐバサルモスは罠にかかるであろう。

その隙に弱点である頭部にある程度ダメージを与える、という算段だ。

さーてここから双剣の出番だ！

バサルモスがシビレ罠にかかる。

「ウオオオオ……!!」

動けなくなるバサルモス。

前も見ただけどこいつ顔厳ついよなあ……。

剣を抜いて、構える。

あの時とは違う。今はこの武器を手にしている。

「鬼人……乱舞!!」

何か中二病みたいなことを叫びながら、双剣の乱舞を、バサルモスの頭部に集中させる。

使わせてもらいます！セツヒトさん！

（『双剣は手数 of 武器！一太刀一太刀丁寧素早く！回転を上げれば、他の武器を圧倒する性能がある！』）

あの時の教官の言葉を思い出す。

「うおおおおおおお!!!」

叫びながら、確実にダメージを削っていく。

(すごいぞ、この双剣……! 固い敵なのに、弾かれることが全くない!!)

セツヒトさんが手渡してくれたハリケーンは、バサルモスの体に弾かれることなく、
一太刀一太刀ダメージを与えられている。

これは助かる!

「ヴ…ヲオオオオオオオオオ!!!」

シビレ罠の効果が終わるや否や、咆哮を上げるバサルモス。
だが、その前の動作を見切った俺は、すぐさま離れて攻撃に備える。

「よっしー…ふうふううう…ここまででは順調!!」

むしろこれからだ。バサルモスが本格的に動き出す。

まずは……………突進攻撃だな!

ー遅い!教官の抜刀の方が、数百倍は速いぞ!

予備動作も大きく、難なく避けていく。

その間も目を離しはしない。

〔『モンスターは必ず予備動作がある!初見のモンスターは、見極めることがすなわち攻略となる!目を離さない!』〕

「サーイエツサー!」

別に教官がすぐそばにいるわけではないのだが。

尋常ではないあの講習の日々が、今こうして生かされている。

それが、とても頼もしい。

続いて、バサルモスが全身を振り回して、薙ぎ払ってくる。

ついにビームが発射される。

その寸前。

俺は斜め前に転んで回避した。

「よっしゃー！成功！」

ずっと考えていたのだ。ビームと俺が形容してしまったのは何故か。

それは、ビームがまっすぐ飛ぶ光線だと、認識しているから。

ならば、ビームを出すタイミングで避けてしまえばいいのではないか。

予想は見事に的中した。

そしてそれはすなわち、

「隙ありいー！」

ビーム攻撃中から攻撃後にかけて、がら空きになった腹部に、もう一度「鬼人乱舞」をぶちかます。

するとバサルモスは、まるで燃料切れのロボットのようにならなくなったあと、腹部をさらして転がった。

(これは……チャンス?)

ここで一気に叩こうと考える。

しかし、またしても教官の声が、頭の中で響く。

(『双剣は、特に気を配るべき部分が多い武器だ！乱舞や回避で、スタミナは削られ、手数が多分斬れ味も落ちやすい！常に確認を怠らないように！』)

「サーイエツサー！」

よく見れば、双剣ハリケーンの青かった刀身は鈍色になり、俺自身も興奮して息も少し上がっている。

まだ狩猟は始まったばかりだ。

ハハハ……。

「離脱！」

俺は足早に、少し遠めの岩山の上に身を潜めた。

岩山を昇るのは、全く苦じゃない。

教官に、つるつるの滝の壁を昇らされた時に比べれば、なんてことはない。

「グアアアアアアアア!!!」

「アイツどこ行ったんや！許さへんでええええ！」とでも言いたげな咆哮。

すまん。バサルモス。休戦休戦。

また油断してくれたら、狩猟再開するからさ。

* * * * *

「ヤッ！ハア！……よつと！」

「ガア！ガア……ガアアア!!」

バサルモスの一撃一撃を避けながら、確実にダメージを重ねていく。あちらはだいぶ疲れていると思う。

こつちはまだ余裕がある。でも油断はしてはいけない。

（『手痛いしつぺ返しは、討伐寸前に起こるものだ！決して最後まで、油断しない！常に慎重に！』）

「サーイエツサーー！」

絶対に油断しない。

とか何とかいいながら、実はさつき2回ほど、しつぽの振り回しに当たってしまった。いる。

動きが分からないまま突撃するからだ……教官。すみません。

しつぽが当たった腹と頬がめっちゃ痛い。

でも痛いのは慣れているんだ。

教官の腕の強さに比べれば、これぐらいの痛み、へっちゃらだ。

反省はすぐに生かす。

着実によけ、確実にダメージを稼ぐ！

「閃光玉！」

「グアアアア!!？」

閃光玉は、絶命の瞬間にとてつもなくまぶしく光る「光蟲」を使用したアイテムだ。モンスターがひるみ、少しの間だけ視界を奪うことができる。

その隙に、「砥石」で斬れ味をもどしつつ、「携帯食料（おにぎり）」を「回復薬」でがぶ飲み。

うええ……合わない！まずい！

まずいけど……耐える！

徐々に視界が戻っていくバサルモス。だがその寸前に、奴の懐に潜り込む。

「くらえ！」

二刀の斬り下ろしからの振り上げ、回転切りの連続技をお見舞いする。すると、ついに腹部の皮が破れ、赤い皮膚がむき出しになった。

「弱点……ここだ！」

狙いを一点に変え、集中して腹部を攻撃する。たまらずひっくり返るバサルモス。隙だらけ。

斬れ味、よし。体力、よし。

いける！

「鬼人……乱っ舞う!!!」

鬼人乱舞を決める。終わった後も攻撃は止めない。

突進連斬からの斬り上げ、同時振り下ろし……と連続技を決めていく。

「グ……グオオオオオ……。」

ズウン……。

「はあっ……はあっ……やった、のか？」

びくとも動かなくなったバサルモス。

念のため触ってみるが、何の反応もない。

「や、やったああああ……！！！」

その場に座り込む。

バサルモス、討伐完了だ。

正直に言おう。

意外とイケた。自分がかかなり強くなってることがわかった。

あの時と同じ敵だからこそ、思える。

俺は、力がついた。体力がついた。

剣の技術が、ハンターの技術がついた。

がんばったと、胸を張って言える。

だからこそ、嬉しい。自分の成長が。

そして。

「バサルモス。ごめんな。お前に罪はないよな。」

息絶えた目の前のバサルモスを見ながら、つぶやく。

モンスターは、ただそこに生きているだけ。

これは、人間が生息するための、ただそれだけのための狩猟だ。

「……お前を倒したこと。忘れない。そしてその命、無駄にはしない。」

証明部位である腹膜を剥ぎ取る。

普通はモンスターの耳やらしっぽやら爪やら、数が少ない部位をギルドに持ち帰ることになっている。

だが、バサルモスは固い。

唯一普通の刃でも通りそうな腹膜が、証明部位なのだそう。

喜びと、命を頂くその行為に、何とも微妙な気持ちでいた時。

後ろの岩山から、マシヨルク教官が飛び降りてきた。

「ソウジ君!!!よくやったな!!!これで君も正式なハンターの一員だ!!!」

「は、はい!ありがとうございます!」

「驚かされっぱなしだったぞ!討伐時間も4時間半!素晴らしい腕前だ!!」

「教官……教官、俺、感謝します。」

狩猟中浮かんできたのは、きつかった講習の日々で叩きこまれた、教官の教えだった。あの言葉がなければ、狩猟成功は無かったかもしれない。

「感謝だと!それを言うのはまだ早いぞ!」

「えっ？」

「ギルドに報告し、5体満足で『ただいま』と家に帰る。ここまでがハンターのクエストだ！忘れてしまったのかな!？」

「……サーイエツサー！申し訳ありません！」

そう、それも教官の教え。

いのちをだいに、だ。

絶対に生きて帰る。無様でも、途中で投げ出しても、命を持って、帰る。もつともハンターに大事な資質だと、教えてくれた。

「うむ！それでは信号弾を打つんだ！あとは解体等をギルドがやってくれ！それで、休憩だ！」

「サーイエツサー！」

信号弾はまるで発煙筒のようになっていて、空に発砲すると赤い煙幕が空高く上がるようになっていて。

空目がけて、信号弾を放つ。

それは、お祝いの花火のようにも、バサルモスの吊いの礼砲のようにも見えた。

29 カミングアウトしましょう。

こちらが赤い信号弾を打ってから少しして。

ギルドの回収班が放ったと思われる青い信号弾が、南後方に上がった。

モンスターの亡骸は、即回収される。

小型モンスターが餌を貪りに来るからだ。すると必然、大型モンスターがそれを狙ってやってくる。

まだ狩猟者の気配が残っているうちに、ギルドの回収班がモンスターを解体し、ギルド支部まで持ち帰る。

ギルドにはそうした役割がいくつもあり、俺たちハンターはその恩恵を大いに受けている。

その費用の大部分は税金と寄付金、何よりこの大型モンスターの素材の代金で賄われている。

このシステムは画期的だと思う。

人々の暮らしは、正直言って前世よりも数世紀遅れている印象だが、ことハンターに

関するシステムについては、よく考えられているな、と思わされる。

まあ、自分の手元に残る素材はほんの少しなのだが、それを持つてもあまりある恩恵だと俺は感じている。

「さて！日もまだ高い！これなら今日中に村に帰れるぞ！素晴らしい狩猟スピードだったな！」

教官は先程から、今までで一番ではないかと思うほど褒めてくれている。

恥ずかしいし、なんだか照れくさい。

だが、心底嬉しい。

あの辛い講習の日々が、報われたのだから。

「これからそのアイルー……？のネコタクとやらに乗れば、夕方には間に合いますか？」

「ああ！十分間に合うだろう！今夜は祝杯だな！私の奢りだぞ！」

「サーイエツサー！」

「よろしい！それでは初めのポイントまで私と競争だ！」

そう言って教官は、とんでもないスピードで最短ルートを進んでいった。

……お、追いつけるか！

仕方がないので、俺はマップを確認しながら、自分なりの最短ルートを突っ走ることにした。

「あの人に追いつくにはまだまだまだ特訓が必要だな……。」

* * * * *

ネコタクが来るまでには、早くてもあと一時間しかかるらしい。

どういう仕組みかはよくわからなかったが、討伐完了を終えたハンターのいる休憩ポイントに、そのアイルーのネコタクがやってくるらしい。

あとはそのアイルーにネコタクチケットを渡せば、村まで連れて行ってくれるという。

……アイルーってすごく便利なんじゃないか？

帰ったら色々調べてみよう。

そんなことを考えていると、教官から声がかかった。

「さて！ソウジ君！無事公認のハンターになった君に、伝えておきたいことと聞きたいことがある！そこに座ってくれたまえ！」

「サーイエツサー！」

「もうその返事も必要ないぞ！これからは私と同格の、プロとして働くのだからな！」

それもそうか。

……そうなのだが、何だか心がそれを許してくれない。

「……教官は、俺にとっていつまでも教官です！いつか肩を並べられる時まで、このままでしょうと思います。」

俺にハンターのイロハを叩き込んでくれた恩は、いくら感謝してもしきれない。

……俺にとっての教官は、マシヨルク教官、ただ一人だ。

「……うむ！そうか！ならば、好きにするがいいさ！」

見たこともないいい笑顔で答える教官。

その笑顔を見れて、改めてクエストをクリアしてよかったと思った。

「伝えることは2つ！まず1つ目！……君はこれから様々な大型モンスターと戦うことになる！だが、基本は同じことだ！相手を観察し、己のすべてを叩き込む！今回の様に、決して準備を怠るんじゃないぞ！」

「サーイエツサー！」

「よし！そしてもう1つ！……死なないことだ！命があれば、また戦える！例え無様でも卑怯でもいい！生きて帰るんだ！それが最も、ハンターとして大切な資質だ！」

「……サーイエツサー！」

これは確認に過ぎない。

だが改めて教えてくれる。

とても大切なことだから。

口を酸っぱくしてもなお、俺に言い続けてきたこと。

決して忘れない。

そして、そのことを改めてこの場で言うということは、つまり。

「……私の講習は、以上だ！」

ここで、マシヨルク教官の教えは、終わりだということ。

「……………ありがとうございました！」

万感の思いを込めて、礼を言う。

感謝を忘れず、ハンターを極めていこう。

「いい顔だな！なに、また会うことがあれば、いつでも相談に乗る！迷ったら、また私を頼るといい！」

「サーイエツサー！」

寂しい。

けど、悲しくはない。

繋がりは切れない、講習は短い間だったが、まだまだ教官との付き合いはありそうだ。

「そして……聞きたいこと。これはソウジ君のプライベートに関わることだ。答えたくないなら、答えてくれなくてもいい。いいな！」

「さ、サーイエッサー！何でありますか!?!」

勢いが少し弱まり、真面目トーンで話す教官。

こちらも構えてしまう。

「あー。なんだ。その……。」

教官らしくない。

そんなに聞きにくいことなのか。

「……教官?」

「うむ。……。」

沈黙が怖い。

何だろう、何かやらかしてしまったのか。

「……すまない！私は、このような性格だからな！単刀直入に聞こうと思う！不愉快なら、黙っていてくれて構わないぞ！」

「は、はい！」

もしやセツヒトさんとのこと？

……いや、それはどちらかというと、教官のプライベートだ。

だとしたら何だ。

「ソウジ君！君は……。」

思わず構える。

何を聞かれるのか。わからん。

「君は、何故………実力を隠している？」

「……………えっ？」

沈黙。

「……………いや、勘違いだったら本当に申し訳ない！ただ、なんと云えばいいのか！私の直感としか言えない！君は、君には、何か凄まじいまでの力を感じるのだ！」

「……………」

「出会った時。最初に私の攻撃を避けた時。正直に言おう。……寒気がした！古龍を目の前にした時とはまた違う、得も言われぬ寒気が！」

教官は。

教官はもしかして。

無意識に、俺のギフトに気付いているのか？

百戦錬磨。一騎当千。

そんな、右に出る者はいないであろう達人の域にいるからこそ。

俺から、女神の恩恵を受けた俺から、その雰囲気を感じ取ったのでは。

「教官……。」

「ソウジ君。教えてはくれまいか？その凄まじいまでの実力を。セツヒトには言っ
てしまっただが、おそらく君は、私やセツヒトよりも強い。そう確かに感じたのだ。」

……教官は、不器用なのだ。

恐ろしいほどに鈍感で天然。

だが、とても優しい。

今だって、俺を思っ
て、苦手な気遣いをして
くれている。

俺はどうだ？

教官に感謝している。

恩を感じている。

俺は黙ったままか？

……それでは義理が無い。

………教官には、すべてを話そう。

そう、決意した。

「……教官、ありがとうございます。気を使っていたいで。」

「なに、そこは問題ない！」

「………教えます。俺の全てを。」

打ち明けよう。

教官は、俺の教官なのだから。

* * * * *

「まずはじめに。俺は、この世界の人ではないです。」

「……な、なんと！」

俺は全てを打ち明けた。

この世界の人間ではないこと。

情報画面というギフトを、女神様からもらったこと。

実力をつけるために、敢えてそれを隠していたこと。

それら全てを、打ち明けた。

「と、いうわけなんです。」

「……ふむ。」

教官は、分かっているのか分かっていないのか、その中間の顔をしながら相槌を打つ。

「で、でも！実力をつけようとしたのは本当なんです。本当にズブの素人だった。でも、やろうと思えば調合もアイテム採取も簡単にできるこのギフトは、俺には余りあるもの。ギフトを使うと、何だか……味気なくて。」

「……剣技はどうなの？その……＜操作方法＞とやらを使えば、君は剣をかなり振るえるのだろうか？」

「そこは、一切使ってません。誓って言えます。バサルモスを倒せたのは、教官が、1から俺にハンターのイロハを教えてくれたからです。」

「……………そうか！」

何だか、教官を騙していたような気分になる。

でも、嘘はない。

回復薬グレートを調合したときも、「何だか味気ないな」と思って、自分で頑張った。だから作れるようになった。

その達成感がたまらなく嬉しくて。

だから、頑張ってきた、と思う。

……と言っても、モンスターの位置把握とか、弱点とか、その辺は頼ってしまったしなあ……………」

胸を張って、「小細工一切なしです」なんて、とても言えない。

「だから、実力を隠しているわけではないんです。むしろ実力がなからこそ、頑張れたというか。……わ、わかります?」

……教官の眉間に、しわが幾重も出来ている。
がんばって考えてくれている……のかも知れない。

「……よし、分かった!ソウジ君!」

「……………えっ?理解してくれましたか!?!」

「いや!異世界とか女神とか画面とか正直良くわからんし、どうでもよろしい!」
「いいのかよ!」

よくないだろ!

結構決心してカミングアウトしたつもりだったのに!

「その様々な情報とやらは、正直言って、調べればすぐわかるものだ！何らズルいとは、私は思わない！そんなことより、その剣技が気になる！」

「さ、さいですか。」

「さあソウジ君！私にその『ぎふと』とやらの剣技で、打ち込んできたまえ！」

「……………ええええ!？」

何と。

正直怒られると思っていた。そんなズルをしていたとは！みたいな。

なんでワクワクした目で俺を見つめるのですかマシヨルク教官。

「きよ、教官？怒らないんですか？私はズルをしていたようなものです。」

「ん？なぜだ！持ちうるものを最大限駆使して戦うのがハンターだ！それに先程の狩猟は、私が教えたことをしつかりと身に着けた、弟子として完璧なものだったぞ！これを褒めずして何が教官か！誇りこそすれど、怒りなど微塵もわかない！」

……………何だろう。

めっちゃ褒められてる。

嬉しくて照れる。

教官も照れてる。

いい年した男同士で照れている。

……………いやキモいわ！

「うむ！いい年した男同士照れあつて！キモいな！」

「わざわざ口に出して言わないでください！」

「まあよい！さあソウジ君！君のその力とやら、見せてみたまえ！」

どうしよう。

この人本気なんだよなあ……………。

……………仕方がない。教官が望んでいるんだ。

俺は、ポーチに触れ、情報画面を起動した。

30 師弟対決をしましょう。

(情報画面……ハンターノート……あった、〈操作方法〉……。)

何か久々にこの画面に触れる気がする。

女神さまに、新たな武器種の〈操作方法〉の習得は止めるように言われてから、すでに一ヶ月経ったのか。

ついに大型モンスター討伐を果たしたんだが、神様達はどんな反応だったんだろう。……まあいいや。そっちは本当に気にしなくて。

今は目の前に集中しよう。

なぜなら、尊敬する師匠と、今から斬り合うのだから。

……字面だけ見ると非常にクライマックスな感じがするが。

使用するのには木刀だ。だって無事にクエスト終わったのにケガするとかアホみたいじゃないですか。

教官の知的好奇心を満足させるための、まあエクストラみたいなものだ。
うん、それぐらいの気持ちで臨もうか。

「教官！何をしましょう！」

「ようし！まずは、私が剣撃を受けるだけにしよう！思いっきり打ち込んで来い！」
「わ、分かりました！」

と言われても。

〈操作方法〉を見る。以前見たときと同じ……いや、なんか増えてる!?

双剣は、主に通常時と鬼人化時の二つの状態で攻撃が変わる武器だ。

斬り払ったり、斬り上げたり、回転して斬ったり、それを二刀を駆使して連続してダメージを加えていく。

これが基本。

なのだが、項目に〈鬼人化【獣】〉や〈空中回転乱舞〉、〈鉄蟲斬糸〉に〈???〉などが追加されている。

後半二つはグレーになっていて選択できない……???って、そもそも何だろう……開放するのは……まずいんだよなあ。止められているし。

「ソウジ君! どうした! 何かまずいことでもあったのかな!？」

「いえ! すみません! じゃあ勢いのある鬼人突進連斬からいきます。」

「うむ! こい!」

鬼人化を行い、構える。

そして〈操作方法〉から〈鬼人突進連斬〉を選択する。

その直後。

まるで自分の体ではないような感覚に包まれる。

と、同時に。

低くなる姿勢。

体重移動をしながら、俺の足は滑らかに前に進む。急加速して細かく右左とステップを踏み、腰の捻転を加える。

そして勢いの乗った回転そのままに、教官の構える先に、木刀の切先が向かう。当たると同時に、脱力していた腕の力を一気に開放。

まるで鞭のようにしなった俺の双剣が、教官に何度もぶち当たった。

「ぬ!!ぬおおおおおお!!
!!!」

剣撃にとつさに反応する教官。

実は鬼人突進連斬は、勢いはあるものそこまでダメージは与えられない。
肝は、連撃を加えつつ相手との距離を詰められるその便利さにある。
はずなのだが。

〈操作方法〉参照の鬼人突進連斬は、俺が今まで練習してきたことを嘲笑うかのよう
に、とんでもない一撃を教官にお見舞いした。

「フッ!!!」

三度目の回転で振りぬくと同時に。

教官が勢いを殺しきれず後ろに転げる。

そしてそのまま、休憩所のテントに激突した。

バキバキ!!ガシヤガシヤーン!!ベキベキ!!
テントが壊れた……!!

ていうか!ていうか……!!

「きよ、きよようかーん!!!」

まさか。まさかだ。

俺が鍛えてきたからなのか。

以前<操作方法>を使用した時より、明らかにスピードもパワーも段違いだ。

だから見誤った。

まさかここまでとは。

「きよ、教官!無事ですか!?!」

「……。」

テントの布、キャンバス生地の白が、破壊された骨組みの上でぺしゃんこになっている。
その上で尻をつきながら変な姿勢で倒れる教官。

呆然としている。

俺も、教官も。

「きよ、教官？」

「ふ……ははは……。」

「大丈夫ですか!?教官!？」

「ははは、ハ——ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ!!!」

笑い飛ばしている。

幸いケガなどは無いようだが。当たり所が悪かったのか……。

「素晴らしい!素晴らしいぞソウジ君!」

「……えっ?」

「ここまで完璧な剣撃!体重に遠心力を加え、さらに足の踏み込みも重ね、ここまでの威力を出すことができるとは!双剣の一発がここまでとは!恐れ入る!!」

「……無事それで何よりです。」

よかった、生きていた。
というかピンピンしてらっしやる。

「…さあ！ソウジ君！次は連続技だ！連撃で来たまえ!!」

「ええええ!!まだやるんですか!!」

「当たり前だ！ここまで来たら、全ての技を確認したい!!ハアハア」
「もはやヤバい人にしか見えない!!」

ドMなのかこの人は。

マシヨルク教官に変な目を向けつつ、連続技をに向けて構える。

（鬼神化、突進連斬、逆手、2連、鬼神乱舞……………!）

「いきますよー!」

「ああ!」

「こうなったらヤケだ。」

突進連斬を繰り出す。すでに自分の身がとんでもなく速く動いていることがわかる。回転の遠心力、少しでもバランスを崩せば吹き飛びそうな勢いをこらえる。勢いに乗った回転の乱舞は、しかし教官によって止められる。

「一度見た技だ！」

それでも俺は止まらない。というか止まらない。

一度プログラムされた連続技は、回避行動を挟まない限り続くのだ。

これは弱点にもなりうるので、やはり実践の経験は大事だと改めて思う。

「やあああ!!!」

逆手切り、踏み込む足で勢いに乗せ更に2連。

防ぎ切る教官。

だがまだだ。

「鬼神乱舞……………!!」

目にも留まらぬ速さの剣戟を、自分が行っているという矛盾。乱舞はもう止まらない。

双剣代わりの2つの木剣が、幾重にも教官に放たれる。

受け切る教官は何なんだすごいな！

最後に少し角度を変えるとその勢いをそのままに体を捻り、回し蹴りの様に頭の後ろから二刀を振り下ろす。

やはり刀身が当たるとその刹那、力を開放して振り切る。

「ぐわ!!!」

教官が受けきれず、もろに食らった！

急所は避けたようだが、いいが入った……………。

ハッと体に自分の意識が戻るような感覚。

「きよ、きようかーんーん！」

「は、は、ははは。」

笑ってるよ！地面に転がりながら笑ってるよ！

「ハーハツハツハツハ！！！」

「きよ、教官？」

「す、凄まじい連続技だったな！本気を出しても防ぎきれなんだ！素晴らしい！素晴らしい！素晴らしいぞソウジ君！」

うん。自分でも驚いている。

恐ろしいまでの威力に。

そして、そこまでの力を出せる、このギフトに。

……………あれ？

教官？何か…………。腕が……………！

「教官！腕が！変な方向に！曲がってはいけない方向に！」

「ん!? おお！これは折れているな！この装備にたかが木剣でここまでやるとはな！ハハッハッハッ！」

「笑ってる場合か——!!! 回復薬！回復薬!!」

* * * * *

「骨が折れるぐらい、モンスター討伐では日常茶飯事だぞ！安心してくれ！」

「いやいやいやいや………骨折れちゃダメでしょう！」

添え木をし、俺の服を破いて回復薬を染み込ませてから患部に当ててる。

曲がっていた腕は、教官が「フンツ！」と言って元の形に戻っていた。
死ぬほど痛い！見ているだけで痛いよ！

「なあに、骨の位置は正確に戻した！あとは薬効で徐々に治っていく！」

確かに、回復薬の効き目は凄いもんな……。

とはいえ何だこの状況。

初クエストで大型を怪我なく仕留めた俺。

万一の為の教官は、骨折。

これ傍から見たら、完全に教官に寄生してクリアした新人みたいに映らないかな。

教官にそのへん訪ねてみたところ、「気球の観測班が、我々を見ていることだろう！心

配はないさ！」とのこと。

うーん、不安しかない。

まあ気にしても仕方はない。

こうして無事にやってきたネコタクに乗り、俺たちは帰路についたのだった。

31ある宿の看板娘の話①

私はドール。

ワサドラ村で、宿の手伝いをしながらおじいちゃんと一緒に暮らしている。

宿の名前は「ホエール」。おじいちゃんの名前をそのまま使っている。

私のお父さんは、ハンターだった。

でも、私が小さい頃に、モンスターにやられて亡くなった。

とんでもなく大きな刀を背負う父が少し怖くて、でも私の頭を撫でるその手はとても優しくて温かかった。

そのことだけは、今でも鮮明に覚えている。

お母さんは、首都ザキミーユシティのギルドで働いている。

なので、私はおじいちゃんと二人暮らし。

寂しくないかと言われれば寂しいけど。

でも、おじいちゃんは、家族としての距離感がちょうどよくて、宿も居心地がいい。

私は、毎日お客さんの為のご飯を作って、宿中を掃除して、ベッドメイキングを丁寧に行っていく。

お買い物も節約しながら、計画的に。

おじいちゃん、お客さんへのサービスにはマメなんだけど、お金に関しては結構ズボラだから。

お母さんの仕送りがあるとはいえ、経営はギリギリ黒字程度。

お母さんに算術は習っていたので、宿の会計は私が担当している。

そんな生活を始めて数年。

とある男性が、宿にやってきた。

名前はソウジさん。

きちんとした装備を身に着けていたので、若いのにハンターとして頑張っているんだな、と思った。

ところが、その人は私がつった朝食を食べながら、変な質問をしてきた。

「モンスターと戦う職業、といえば、どんなのが思い浮かぶ？」

「…………え？」

それは、ハンターだ。ハンターしかない。
キョトンとしてしまった。

だって、ハンターを知らない人なんて、初めて見たから。
でも、事情を聞いたら納得。

ソウジさんは、この村に来る前までの記憶を、一切無くしてしまったと教えてくれた。

記憶喪失。

ハンターさんが強く頭を打ったり屈強なモンスターと戦ったりして、そうなる話を聞いたことがある。

「ごめんなさい、ソウジさん。私よくわかっていなくて。」

ソウジさんがハンターだと勘違いしていたのは私。
できる限り力になりたいな、と。そう思ったんだ。

……まさかその後、すぐさま宿を飛び出して、ギルドに向かうとは思わなかったんだ

けど……。

* * * * *

ソウジさんはあわてんぼうさんだった。

ハンターは、すぐなれるものじゃなくて。

たくさん訓練をしたり経験を積んだりしなきゃいけないって。そうお母さんから聞いていた。

だから、帰ってきたソウジさんが庭で素振りを始めた時は、何だか……応援したくなかった。

記憶を無くした人。

だけどとてもがんばっている。

あれだけハンターにこだわっているんだ。

きつと記憶を無くす前は、ハンターだったんだと思う。

何とか力になりたいと、そう思えるほどに、ソウジさんは必死に剣を振っていた。

「ねえ、何してるの？」

「おわっ！」

「わわ、びつくりしないですよ。私だよ、ドール。」

驚かせちゃった。

「いつから見てたんだ？」

「えっと、剣を振った音が聞こえて、ソウジさん帰ってきたんだって。それで見に来たらすごい顔で集中していたから。」

「そうか。いや、恥ずかしい……。」

「気に障ったらごめん。続けていいよ。」

この宿にやってくるお客さんは、大体ハンターさんか商人さんだ。

そんな人たちが、庭で練習するのを見るのは、とても楽しい。

だから、ソウジさんがまだまだ新米なんだって、すぐわかった。

……あまり言いたくないけど、下手だったから。

そしたらソウジさんが変なことを言ってきた。

私に練習を見てもらいたいって。

私が？なんで？えっと、見るのは楽しいからいいんだけど。

……でも、少しでも力になれるのならって思っていたから。

OKした。

何回かアドバイス？みたいなものをして。

何度も練習して、少しずつ様になってきたソウジさん。

そしたら。

最後ね、と私が言って剣を構えたら、急にブツブツ言い出したんだ。

「ドール……そこからもう少し離れて見てて。」

「えっ？」

「頼む……。」

「わ、分かった。離れるね。そ、ソウジさん？大丈夫？」

「……いくよ。」

ブツブツ言いながら、私に離れて見るように伝えてくる。
少しだけ怖くなった私は、距離をとった。

そしたら次の瞬間。

ソウジさんが、もう見えないうぐらいの速さで剣を振り始めた。

空気を切る音からして違う。

ソウジさんの顔つきが違う。

「すい〜」

やっぱりソウジさんは、ハンターさんだったんだ。それも、凄腕の。
だって、こんな剣の乱舞、見たことない。

やけに感動の薄いソウジさんだったけど、申し訳なさそうに私に「もう少しだけ練習
を見てほしい」と頼まれて。

なんだかオジさんみたいな低姿勢が面白くて。

久しぶりに、私、大声で笑っちゃった。

* * * * *

その後、昼食から戻ってきたらしいソウジさんは、いつの間にか部屋にこもっていた。そしたら夕方過ぎても出てこないから、心配になって部屋に行ってみた。

誰もいなかった。

まあどこかにフラツと出かけたのかもしれない。

……一言言つて欲しかったな……。

……なぜ私は少し怒っているのか。

何だか、自分の心がよくコントロールできていない。

……ここにいないソウジさんは気にしないようにして、体をふくための桶を回収する。

……汚れていないな。そうか、もしかしたら銭湯に行ったのかな。とか思っていたら。

「うっ……いい!! ああああ!!」

庭から、男の人の叫びが聞こえてきた。

……まさかソウジさん!?

庭に行くとき、なんか変な格好で、白目を剥いて、泡を吹いて倒れているソウジさんがいた。

最初見た時はただの冗談なのかと思ったけど。

本当に気絶していた。

「お、おじいちゃん!!!」

慌てておじいちゃんを呼ぶ私。

そこからはもう必死でよく覚えていない。

近くのセツヒトさんに助けを求めに行つて。

すぐセツヒトさんが来てくれて、部屋まで運んでくれた。

「だーいじょうぶ。きつと疲れているのに、無理したんだらうねー。後は寝かしとけば目覚ますってー。」

セツヒトさんがそう言ってくれて、少し安心した。

セツヒトさんは元ハンターで、こういう時頼りにするようお母さんから言われていたから。

私のお姉さんみたいな人だ。

次の日。

目を覚ましたソウジさんに、何度も謝られた。

普通で、元気そうで、本当に良かった。

「よかったのう、ドール。」

「もう、おじいちゃん…っ!」

おじいちゃんにはからかわれちゃったけど、本当に良かったって思った。

* * * * *

その日からソウジさんは、本格的にハンターになるための練習を始めた。

講習の教官は、とても強いハンターさんなんだって、おじいちゃんが教えてくれた。

おじいちゃんに何で知ってるの？と聞いたら、「ちよつとの。」とだけ言つて、教えてくれなかった。

おじいちゃんも、よくわからないところがある。

「だから、ドール？心配はせんでええぞ？」

「べ、別に心配なんて。」

「……顔が赤くなつとる……。」

「もうっ！おじいちゃん!!」

……おじいちゃん。からかうのはやめてよ。

……なんだか意識しちゃうから。

何なんだろうこの気持ち。

大丈夫かなって、何か困ってないかなって、思ってしまった。
……気になるっていうか、心配過ぎるっていうか……。

「……。そうじゃドル。そんなに心配なら——。」

「心配じゃないよ！」

「まあまあ。おそらく今日はソウジ君、かなり疲れて帰ってくるじやろうの。」

「……そ、そうなの？」

「ああ。じゃから、銭湯にでも案内してあげなさい。」

「あ、それはいいかもね。さすがおじいちゃん。」

「何ならワシみたいに、体を洗ってきてあげたらどうじゃ？」

「あ、なるほ……ど？」

あれ？なんでだろう？

おじいちゃんみたいに洗えばいいんだ。

別に特別なことは何も無いのに。

なんか恥ずかしいような……。

その日の夕方。

ソウジさんはボロボロになって帰ってきた。

おじいちゃんの言う通りだった。

なので、ソウジさんを銭湯まで案内する。

おじいちゃんみたいに体でも洗おうか、と尋ねたら、顔を真っ赤にしたソウジさんに断られた。

拒否されて、ちよつとむつとした。

……なんで頭にきているの、私。

やっぱりよくわからない。

* * * * *

毎日自主練を続けるソウジさんは、本当に、すごいと思つた。
講習というのは相当きついんだと思う。

初めの頃なんて、夕飯を食べるのも辛そうだったから。

それでも夜の練習は欠かしていないみたいで。

がんばって、がんばって、と心の中でいっぱい応援していた。

同時に無理をし過ぎないか、ハラハラもしていた。

たまに練習を見せてもらうこともあった。

前は剣と盾を持っていたけど、最近はおつぱら双剣を使っている。

……だんだん様になっていく姿は、ちよつとかつこいいなって思った。

* * * * *

そんな日々が1ヶ月ぐらい続いた。

明日は、お父さんの命日。

お墓にお参りに行って、いろいろ報告をする日。

お母さんも帰ってくるって言っていたけど、到着は遅れるみたい。

そんな、少しだけしんみりした気分でした時だった。

いつもはない時間に宿に帰ってきたソウジさんが、とんでもないことを言い出した。

「実は、大型モンスター討伐クエストを受けることになった。」

「……も、もう大型モンスター討伐に行くの!？」

「うん、今から準備をしないとなあ。」

大型モンスターの狩猟。

早すぎるって思った。

だって、お母さんから聞いていた話だと、ハンターの訓練は1年ぐらいかかるって聞いていたから。

いつか、ソウジさんがそういうクエストを受けるって、分かっていた。

分かっていたんだけど。

分かっていたつもり、だったんだろうな。

いざその話を目の前にすると、大丈夫かなって、心配だなんて、不安が襲ってきて。お父さんが帰ってこなかった、あの日のことを思い出しちゃって。

お父さんは、あの日、大きな手で私を撫でてくれた。

そしてお父さんは、帰ってこなかった。

「ど、ドール？大丈夫か？！」

ソウジさんが心配してくれている。

いけない、何か返事しなきゃ。

そう思っていたら。

ソウジさんが私の頭に手を伸ばしてきた。

ちつとも嫌じゃない。嫌じゃないのに。

頭を撫でられたらいけないって。

そうしたら、ソウジさんは……ソウジさんは……。

帰ってこないんじゃないかって。

「っ！」

バシン！

思わず手を払ってしまった。

ああ。違う、ソウジさん。

ソウジさんが嫌いなんじゃない。

行つてらっしゃいって、そう言えばいいだけなのに。

気付いたら私は、宿の外に飛び出していた。

涙が流れていた。

どこか心の冷静なところで、「行ってらっしゃい」って言えばいいのにつて。

そう思うのに、心は言うことを聞いてくれない。

ソウジさんを思うと、胸が痛い。

そこで気づいた。

わたし、ソウジさんが好きなんだつて。

好きな人が、帰つて来ないかも知れないなんて考えたら。

悲しくて、寂しくて。

あてもなく走り続けて。

そしたら心配してくれた野菜売りのおばさんに声を掛けられて。

「心配かけてごめんなさい。」って謝った。

少し落着いた私は、おばさんに送られて、宿に戻った。

そしたらおじいちゃんに慰められた。

そして、今回のクエストでは、滅多なことにはならないだろうと教えてくれた。

……ソウジさんに謝りたいと思った。

でも合わせる顔もない。

その日私は初めて、体調不良以外の理由で、宿の仕事を休んだ。

おじいちゃんにも休んでおくよう言われて、正直安心した。

* * * * *

「お父さん。」

明朝、まだ日も明け切らない時間。

何だかよく眠れなかった私は、おじいちゃんに一言断りを入れ、お父さんのお墓に向かった。

墓前でお父さんに話す。

「お父さん、あのね……。今、私、好きな人がいるんだ。」

言葉にすると、恥ずかしいな。

「その人は、何だか放っておけなくて、記憶が無くて大変なのに、でもすごくがんばっていて、かっこよくて、でも心配で……。ごめんね、よくわからないよね。」

村近くの見晴らしの良い丘にあるお墓で、お父さんに話をする。

「……今からその人は、大型モンスター討伐のクエストに行くの。……でも私、ひどいことしちゃって……。どうすればいいんだろう。……ねえお父さん——。」

その時。

急に風が吹いた。

周りの草花が揺れる。

風が吹き抜けた、その先。村の入口のガーター車乗り場に。
ソウジさんが見えた。

「……お父さん、ありがとうございます！私、行ってくる！」

走りだす。

間に合えって、願った。

風を切る音が、耳に入る。

丘を下り、無我夢中で村の入口まで走り続けた。

「ソウジさん！」

「ど、ドール!?!」

息が切れて、うまく話せない。
周りに人がいるし、恥ずかしい。

「昨日はごめんなさい。……私、お父さんのこと、誇りに思ってる。ソウジさんが頑張っていることも、よく分かってる。だから——。」

言うんだ。

行つてらっしゃいって。

「気をつけて、行つてきてね。それだけ、伝えたくて。」

「……ああ、任せておけ。ただいまって、必ず帰るから。」

よかった、言えた。

心配だし不安。だけど、頑張つてほしいから。

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい。」

手を振って、見送った。

ソウジさん……心から応援しているからね。

帰ってきたら、いつか伝えたいな、この気持ち。

だから、今は祈ろうと思う。ソウジさんが帰ってくる宿「ホエール」で。

ソウジさんの無事を。

* * * * *

……結論から言うと、ソウジさんはその日に帰ってきた。

「た、ただいま……。」

ばつが悪そうに宿の扉を開けて言うソウジさん。

おじいちゃんはお茶を嘔き出して。私は、キョトンとして帳簿を落としちゃって。

聞いたら、何か早く討伐できちゃったって、気まづそうに言うものだから。
なんだかロマンのかけらもないな、とか思っちゃって。

3人で、心から笑い合った。

32ただいまを伝えましょう。

「乾杯！」

グラスを合わせる。

お客さんでいっぱい「イシザキ亭」で、俺と教官は打ち上げをすることにした。
店に入れるか心配だったが、

「開けておいたよ！でもまさか今日帰ってくるなんてね！驚いちやったよ！」

と言われた。

教官が予約を取ってくれていたらしい。

粹なことするなあ、と教官を見る。

「うむ！クエストの後のこの一杯はたまらん！心に染み渡るようだ！」

「教官、お疲れさまでした。予約まで、ありがとうございます。」

「気にするな！しかしまさか、今日帰ってくることになるとはな！」

大声で笑いながら、ビールをどんどんあおっていく教官。

俺も結構いける口だと思っていたのだが、これを目の前にすると、まだまだだなー。
まあいい、自分のペースで飲もう。

* * * * *

村に着いたのは、夕方少し前のこと。

まずはギルドに報告を、と思い、ハイビスさんを探す。

ところがハイビスさんは、今日お休みだということ。

それもそうか、朝はかなり眠そうだったし。

既にギルドには俺の報告が入っているらしく、証明部位である腹膜の提出をすれば良かった。

引き換えに5400z受け取る。

ついでに報酬素材も受け取れるらしい。

なんでこんなにすぐ受け取れるのか疑問だったが、モンスターの素材はギルドにもあ

る程度ストックがあるらしく、今回受け取れたのは10個ほどだった。

モンスターによってはギルドに在庫がないこともあり、その際は後ほど届けるシステムらしい。

ギルドに預けるか直接受け取るか、そのまま売るか選べるとのことだったので、ひとまず預けることにした。

受付でギルドカードを提示すれば、どの素材をどれだけ預かっているか教えてくれるそう。

……これは便利だと思った。と同時に、それらを管理するギルドの事務職に恐れいつた。

個人個人のもつ素材を人の手で一括管理するなんて、考えただけで目が回る。

前世で資材調達関係の仕事をしていた俺は、PCの前でウンウン唸りながら管理していたというのに。

しかも、ギルド全体でそれらの情報を共有しているとか。

……ネットも何もないのに……どうやって!?

……この世界、やはりハンター関係の仕事については恐ろしいほどシステムチックだ。

そんなこんなでギルドを後にすると、教官から声がかかった。

「それでは、打ち上げをする前に私は銭湯に行く！ソウジ君は宿に一旦戻るのだから？」

「はい。あんなに盛大に送ってもらったあと、こんなすぐに帰るのは気が引けますが……。」

少し気まずい。

「まあ気持ちはわかる！だが、ただいまと言うのだろうか？善は急げ、だな！」

「……はい！」

「イシザキ亭で落ち合うとしよう！それでは！」

教官は三角巾を首から下げたまま、去っていった。

「……………あの骨折れてるんだよなあ。」

ギルドの職員も「えっ!?何でマシヨルクさんが怪我してるの!?!」みたいな顔をしていった。

観測班とやらが俺の討伐の様子を見ていなければ、まず間違いなく、俺の狩猟とは認められなかっただろう。

うーん、やはりギルド、恐るべし。

今回は助けられたな。

そう思いながら、俺は宿に足を向けた。

* * * * *

ホエールでは大変だった。

あんまり早く帰ってきたものだから、何かあったのではないかと心配されてしまった。

無事に討伐できました、と伝え、なんとか二人を宥める。

やつと状況を飲み込むと、ドールは大笑いし、ホエールさんはニコニコして俺を歓迎してくれた。

「ドール、ホエールさん、ただいま帰りました。」

「うん。おかえり、ソウジさん。」

ドールが笑いながら、おかえりと言ってくれる。
安心した。

ドールも、安心した顔をしていた。

なんだかホツとする。

家に帰ってきた気分だ。

「これから荷物の整理をしたら、教官と打ち上げに行つてきます。」

「それはいいのお。全く、こんなに明るい倅の命日は初めてじゃ!……またゆつくり狩
猟の話聞かせておくれ。」

「わかりました。楽しみにしててください!」

二人に見送られ部屋に戻る。

〈情報画面〉から装備を選択し、普段着に着替える。

ベッドに寝転んで心地。

ああ、長い一日だった……。

そして冷静になった頭で考える。

「今回の討伐で得た収入は5400z……。宿が2回とちよつとの分しかないのか……。」

実はそこが少し疑問だった。

命をかける対価としては、少ない気もしていた。

……徐に、起動している〈情報画面〉から〈アイテム一覧〉を開く。

……やはりあった。先程預けたはずのアイテム。

バサルモスの素材である「岩竜の甲殻」や「岩竜の胸殻」「岩竜の尻尾」「岩竜の翼」など、先程ギルドで確認し計計9点が、何故か〈アイテム一覧〉で確認できる。

念の為、目録と数を照合してみるが、間違いない。

ただし、アイテム名の表示はグレーがかっている。

どうやら取り出すことはできないようだが、これはつまり……。

「ギルドに預けている分も、俺のアイテムとして認識されているから、表示されるってこと。」

そういうことかもしれない。

そして、アイテムの情報自体はこれでもいつでも確認できる、と言うわけか。

やはり便利である、このギフト。

そうとなれば、気になるのが素材の値段だ。実は先程、素材をギルドで売ってみてもいいのではと思ったのだ。

世知辛い、金がなければ生きていけない。

そしてハンターにとってそもそもお金になるのは、モンスターの素材である。本来ならば、モンスターから出る大量の素材は全て自分のものだ。

だが、そうは問屋が卸さない。

ギルドの運営費って、かなりかかるんじゃないかと推測できる。

人件費だけでも、相当なものになるだろう。

クエストを受注する人、ハンターの対応をする受付嬢に、クエストの難易度やハンターの人員調整をする担当、ギルドカード発行紛失管理関係、各地ハンターズギルドとの連絡役、素材の管理、ハンターたちが狩猟を無事に行えるように調査班や観測班、ガール車をはじめとしたハンターが利用する交通手段の管理、その人たちの人事管理と管理職……

俺が思いつくだけでもこれだけある。

更にそれらの業務に必要な費用を考えると……いくら寄付と税金から賄われているとはいえ、やはり大部分はモンスターの素材の売却費なのではないか？

そうすると、ギルドである程度素材を確保しているのもうなずける。

銀行が資金を運用して利益を得るように、素材の需要が低い時はため込み、需要が高まると売却して、利益を得ているのでは？

ハンターが素材売却時に困らないように需要と供給のバランスを保っています、という大義名分のもと、利益を出し、ハンターズギルドに必要なお金を捻出しているのでは？

……ちよつとこのシステムを作った方、すごいじゃないの。

ハンターズギルドのトップにいる方々にお会いしたくなってきた。

……いやいやいや、会ってどうするんだ。

というかこのようなハンターズギルドの経営に関する話をしたいわけではない。

そんなマクロで壮大なことではなく、自分の明日の飯さえまならないという小さいミクロのお話だ。

「……えーと、……バサルモスの素材の売値は現在の相場で、甲殻は430z、尻尾は920z……」

素材10点で大体……7000zぐらいか。

すると、今回の報酬は総額約12400z。宿に6回は泊まれるな!!

……ハンターって、意外と世知辛い仕事なんだな……。

でも、モンスター素材をそれだけギルド側に取られるのもわかる。

だってハンターズギルドが行っている業務は業務ですごいんだもの。

……もっと強くなって、稼げるようになろう。

教官なんか、白金貨10枚をはした金つて言つてたしな……。

ドールやおじいさんの暖かい出迎えの後に、一気に守銭奴じみた発想をしてしまう自分が、情けないやら恥ずかしいやら。

でも、お金を目標にするのではなく、モチベーションにするのは、決して悪いことではないと思う。

……思う。

ドールに悪影響を与えないようにしたい……。

コンコン。

ノツクの音が響く。

「はいどーぞ?..」

扉を開けたのは、ドールだった。

「そ、ソウジさん!」

「おお!? な、なんだ?」

何か気合が感じられるドール。

何事?

「えっと……すぐく早かったね。ビックリしちゃった。」

「あ、ああ。そのことか。」

狩猟のことを聞きたくなっただのかな?

「バサルモスは強かったよ。目の前にしたら……本当にこわかった。でも、教官の強さや速さと比べたら、大丈夫だったし。それに……。」

「……それに?」

「ドールや村の人が、優しく送り出してくれたから。絶対ただいまって言うんだって。だから、がんばれたよ。」

間違いないじゃない。

だから、慎重になれた。ハイビスさんはわざわざ朝まで待つてくれていたし、セツヒトさんは武器をかなり強化してくれた。

二人共、ほとんど寝ていないはずだ。

それに、ドールが俺に行つてらっしゃいと言つてくれた。

だから、がんばれたんだ。

「……………」

「……………」

だ、黙られるとただの自慢話みたいで居心地が悪くなる…………。

「そ、それに、一度相手したモンスターだったしな！落ち着いて対処できて、気づいたら

…………倒していた。」

「…………うん、本当に良かったよ。」

心配してくれていたんだろう。

父の命日、ただでさえ心穏やかではないその日に、心配をかけてしまったが、こうして無事に帰れたんだ。良かった。

「ソウジさん。改めて、ね……………」

そういうと、ドールは俺の近くに立って、目を合わせてくる。大きな瞳に、吸い込まれそうになる。少しほっぺたが赤い。

「お、おかえり。」

「……………うん、ただいま。」

改めて言うのが、恥ずかしかったんだろう。

赤い頬が、更に赤みを増した。

ドールって、こんなに表情豊かな子だったっけ？

「そ、それでね。あの時のやり直し、したくて。」

「……………ん？あの時？」

どの時ですかドールさん。

「ほら、私が……………宿を飛び出したとき……………」

「ああ、あの時……………」

……………何だっけ？

……………ああ！そうだ！俺がセクハラじみた行為に及ぼうとしたあれか！

それをやり直し!?改めて訴えられたりするの か!?

「……………ソウジさん、私、別に嫌じゃないよ。」

「えっ?あのセクハラ行為が!？」

「せくは……………?よくわからないけど……………あの時、私を心配してくれたんだよね。」

そうです。

うつむいて黙ったままのドールが心配で。

頭を撫でようと……………。

「うああああ……………」。

「そ、ソウジさん？」

頭を抱える。

思い出すと、改めて冷静に思い起こすと、何たるセクハラ行為……………。

年頃の娘にすることじゃないよ……………。

俺は何だ？なぜあの時、頭を撫でようとした……………!?

心配なら声をかければええやんけ！

心の中でツツコミ。そして反省。

「いや、すまん。己の蛮行を恥じていた次第です。」

「そ、そう?！」

不思議そうに首を傾げるドール。

すると、更に俺の近くにやってきた。

「じゃあ……。ん。」

「……………」

「……………」

「……………えっ?」

何だ。俺の目の前に立ったと思ったら。

頭を俺に見せてきた。

つむじ、右巻きなんだな。

「……………だから、やり直し。はい。」

「……………ああ……………えっ!」

……………ああ!撫でろってこと!?

……………いやいやいやいや、更に俺に蛮行を重ねると!?

「……………ソウジさん？嫌なの？」

上目遣いで俺を心配そうに見つめてくるドール。

嫌とかしたいとかそういう問題ではない気がする。

そもそもやり直してなんだ。

「いやいや！嫌じゃないぞ！そういうわけではなくて——」

「じゃあ、はい。」

頭を再度見せるドール。

……………俺って押しに弱いのかな……………。

ぽんつと、ドールの頭に手を置いた。

「……………。」

「……………、こんな感じか？」

「……………撫でないの?」

「……………さ、サーイエツサー……………」

キャラがぶれている、俺。

ああよくわからないが、撫でよう!

男は度胸!

もうどうにでもなくれ!

ナデナデ。

……………ドールの髪の毛は、ツヤツヤしている。

触ると余計に分かるな、それにクセもないストレート。

肩にかからないぐらいのミドルヘアを、優しく撫で続けた。

……………。

.....。

.....。

.....ダメだ！何かダメだ！

変態じみてきてきたので、手を放す。

「んっ.....。」

「あぁっ！すまん！ビックリするよな！すまん！これでやり直してきたかな！」

「.....大丈夫。」

いや、大丈夫じゃないような。

俺もだけど、ドールも顔が真っ赤だ。

なんだろうこのいたたまれない空気。

非常に恥ずかしいわけで。

「じゃあ、やり直しもできたし、これで。」

「お、おほ。」

「打ち上げ、楽しんできてね。」

「……ああ、ありがとう。」

「ううん。私も……なんでもない。」

そう言うと、ドールはクルツと後ろを向き、何かおぼつかない足取りで部屋を出ていった。

ドールの髪の毛、柔らかかったな……………。

……………。

と、とにかく今は色々忘れて！教官と呑もう！

俺は、パンつと頬を叩くと、イシザキ亭に向かった。

33 打ち上げをしましょう。

そんなこんなで。

イシザキ亭での打ち上げが始まった。

「教官、料理が来ましたよ……って！なんで脱いでるんですか！」

「うむ！暑いからだ！腕もだいぶ良くなってきたしな！」

そんなアホな。

どこの世界にたつた数時間足らずで骨折が治る人間がいるというのだ。

「うむ！絶好調だな！この骨も食べれば完璧だろう！」

「うわー……。」

上半身裸になって骨をバリバリ食う教官。

両腕を使って食べている。

……本当に治ったんじゃないか？それとも強がり？

酔っているのかそれとも素面なのか、判別がつかない。

更には三角巾を頭に巻き、いよいよ原始人じみてきた。

ちなみに止める気はない。

正確に言おう。俺には止められない。

そんな俺を見兼ねてか、ケイさんが近寄ってきた。

「あーいいのいいの、もうドンチャンやっちゃって！」

「でも、いいんですか？こう、店の雰囲気だ。」

そう、いつだか俺が前世の知識を引っ張り出してこの店を助けるアイデアを出した時。

コンセプトは「隠れた名店」だったはずだ。

一流の食事、美しき若女将、落ち着いた雰囲気。

それを、目の前の骨バリバリ白三角巾原人が、ぶち壊してくれている。

「んー、昼間はねちよつと小洒落た感じなんだけどさ。夜はもう、こんな感じよ？」

「えっ、そうなんですか？」

「そうなのよ。マシヨルクさんたら、夜にはよく知り合いの方を連れてきては愉快に騒ぐもんだから、夜はもう普通の居酒屋よ？そしたらまあそれ目当てでお客も増えたもんだからさあ。私達もまあいいかって。」

なんて事だ。

店のコンセプトを揺るがした張本人が、今目の前に！
ていうか講習中もここに足繁く通っていたのね、教官。

……何か腹立ってきた。

「でもまあ、いいのさ！昼の顔と夜の顔、ギャップがあつて面白いじゃない！」

「ケイさん達がいいなら、俺は何も言えませんが……。」

「それにね、いろんなお客さんが増えて嬉しいのよ！昼間は女性とかカップルとかオシヤレな人たちが来てくれるし、夜はハンターさん達がドンチャン騒ぎ！楽しいのよ
ねー、これがまた。」

ケイさんの話を聞きながら、周りを眺めてみる。

たしかに昼間とは雰囲気が違う。

でも、何だろう。これはこれで、店の一体感があって、楽しい気分になる。

いろんな客層にウケる、か。

それもありがたも知れない。

……なんかどこぞの女神様SNS話を思い出してしまった。

そういえば、俺もこの店でケイさんにオツサン心を掴まれた一人だ。

そんなケイさんは、今日は少し胸元が空いた藍色のシャツにGパンを着ている。

そしていつもはエプロンなのに、今日は前掛け。

前世の居酒屋を思い出す。

大きな夢と希望が詰まった2つの凶器が、私はここよと主張激しい。

同じく2つの刀を操る俺の心にバーニング。

……何を言っているのかわからなくなってきた。

酔いが回ってきた気がする。全くペース配分ができていない。

とにかく、店が繁盛しているようで何よりです。

「そうそう、ソウジ君！今日は初の大型モンスター狩猟の記念日なんだろう？」

「え、ええ。そうです。」

「それじゃーこれ。私達からのプレゼントだよ。」

「えっ!？」

包みをもらう。

ケイさんを見つめ返すと、笑顔でうなずいた。

開けていいってことだよな。

キレイに包みを開けると、中に液体が入った小瓶が入っていた。

「それねえ、迷ったんだけど、薬なんだ。何でもいにしえの秘薬って言って、どんなに疲れていても、たちどころに回復してしまうそうだよ。」

えっ、何それすごい。

狩猟中の万が一に備えて、持っておくのといいかもしれない。

一応情報画面で見ると、

【名前】 いにしえの秘薬

【レア度】 4

【現在の相場】 ????

【説明】 体力とスタミナを完全回復する薬

とあった。これ、本物だ。

「いいんですか？こんなに貴重なもの。」

「兄貴が昔使おうとしていたらしいけど、結局使わないままになってたらしくてね。ハ
ンターさんにあげたほうがいいよねってき。貰っておくれよ！お祝い！」

気を遣わせてしまったか。

でも、ありがたかったです。

「それに……店をこれだけ盛り上げてくれた功労者に、労いたいつてのもあつてさ。感謝しているよ。」

改めて礼を言われると、何だか恥ずかしいな。

「ありがとうございます、大切にします！」

お礼をちゃんと伝えた。

そのまま小瓶を眺めていると、夢中で骨を食べていたマシヨルク教官が、こちらに声をかけてきた。

「おお！それはいにしえの秘薬ではないか！」

「そうなんです。いただきました。」

「そうか！いや、それは非常に効果が高いぞ！」

やはり貴重なものなんだな、大切にしよう。

「教官も使ったことがあるんですか？」

「うむ！あるぞ！」

やはり教官ともなると、この辺の貴重な薬をバンバン使って、屈強なモンスターを相手にしていたのだらうな。

「いや、あの時は連戦連戦で大変だったな！」

「ぜひ聞かせてください！」

「私も興味があるねえ！」

ケイさんも乗り気だ。

教官の昔話はあまり聞いたことがないので、俺も興味がある。

「ザキミーユシテイで昔良く使っていた！いや、あの時は大変だったぞ！」

……ん？街中でモンスターを相手にしたのか？

「私も経験がまだ不足していてな！体力には自信があつたのだが、相手もまた無尽蔵のスタミナであつた！おかげで朝まで眠れぬ戦いを繰り広げたものだ！」

「へえー！マシヨルクさんもそんな時代があつたんだねえ。」

……ちよつと待て。

なんか話の方向が。

「教官？」

「お、どうした？ソウジ君！君も使ってみるといいぞ！」

「そうではなくてですね。なぜ街中でいにしえの秘薬を？」

おかしいよな。

ザキミーユシテイは難攻不落。

モンスターの中でも別格の古龍種でも来ない限り、街中にモンスターが入ることなんてありえないはず。

この辺の話は、教官から聞いたことだ。

「モンスター狩の道具ではないのですか？」

「もちろん、そもそも用途はそちらだがな！ 私たち男の楽園！ 娼館で使用するのだ！」

「……………」

「……………」

絶句する俺とケイさん。

「さすがの私の愚息も、連戦続きで役に立たなくなった。目の前には、まだ尚、私を求め
るお嬢さんたち。これに応えねば男がすたると、私は徐に小瓶を手に取り——」
「ちよつと待てええええええ！」

あかん。

これ、つまり……………そういうこと!?

そういう系のヤツなのこの薬!?

ケイさんを見ると、顔をもう茹でダコのように赤くして、今にも沸騰しそうに口をあわ
あわせさせている。

.....よく知らなかったんだな。

「たちどころに完全回復した私は、反り立った愚息を相手にあてがい——」

「ストオオooooooooooooッ!!止まって!!教官ステイ!ステイして!!」

「なぜ止める!ここから私の快進撃が始まるというのに!」

「そういうことじゃねえわ!」

「あわ.....あわあわあわ.....!」

ケイさんが分かりやすく慌てている!!

「蜜を光らせ濡れそぼった泉に、私の怒り狂ったハイニンジャソードが攻め——」

「無駄に官能的な表現!!いや違うなんだこのツツコミ!」

「.....ふえええ.....」

バタン。

ケイさんが倒れる。

何か目が渦巻いてバタンキューって感じで。

「むーどうしたケイさん!!まさか毒でも盛られ——」
「どう考えても教官のせいだよ!!ちよつと耐性無さすぎるだろケイさん!と、とりあえず、お兄さん!お兄さんちよつと来てえ!!」

その後、ケイさんを介抱しながらお兄さんに平謝り。

お兄さんは「まさか使い方を知らなかったとは……。」と逆に驚いていた。

後から分かった話だが、教官は酒が入ると、とんでもない下ネタ発信酔っぱらい野郎になることが判明。

結局俺は教官にお説教した。

この際だから、自重という言葉の頭を叩き込ませた。

最後の最後で、教官に教えることになるとは……なんともアホらしい打ち上げになった。

まあ楽しかったんだけど。

ケイさんには、また日を改めて謝罪しよう……。

34女神様とお話しましょう。

朝になった。

頭が痛い。完全なる二日酔いである。

た。 昨晚は、ケイさん気絶騒動の後にそそくさと店を変え、下ネタ連発の教官と飲み続けた。

た。 ついに潰れた教官を宿まで連れていき、俺も宿に帰って倒れ込むように寝たのだっ

「なるほど、それで中々双治さんとお話ができなかったんですね。」

(……………)

「酔った人間と意思疎通を図るのはなかなか難しいのです。」

(……………)

「双治さん？おはようございます。女神です。」

(……………)

「双治さん？」

(……………)

「……………仕方ありませんね、では先週双治さんが妄想していた食事処の女性とのあれやこれやをSNSで拡散——」

(お、おはようございます女神様！)

「はい、おはようございます。お久しぶりです。」

危ない危ない。

頭も痛いしスルーしようかと企んだらこれだもの。

逆らえないです女神様には。

「約一ヶ月ぶりとなります。お元気でしたか？」

(はい、元気です。まあ見ていらっしやるならおわかりかと思いますが。)

女神様の綺麗な声が頭に響く。

二日酔いの頭にはちよいとキツイ。

……………と思ったら、急になんだかスッキリした。

「遠隔操作でギフト内のアイテムを使わせていただきました。」

（えっ、頭がスツキリしましたよ？）

「はい、『毒消し』の効果です。勝手に使わせていただきました。申し訳ありません。」
（とんでもない、助かりました。）

「双治さんがおつらそうでしたので。お話、大丈夫でしょうか。」

なるほど、アセトアルデヒドを毒として捉えるなら、毒消しで効くのか。すごいな異世界。

女神様と話す？のとは問題はない……もしかしたら急に誰か入ってくるなんてことがあるかもしれないが、傍目から見たらぼーっとしているようにしか見えないだろうし。

（……問題ないです。）

「よかったです。それではまず……双治さん、初めてのモンスターの特獵。お疲れさまでした。」

（は、はい！ありがとうございます。）

「何か劳いの報酬などをお渡ししたかったです、違う世界に干渉するのは中々に骨

が折れまして。言葉だけですが、お疲れ様です、と。それに、感謝も申し上げます。」

感謝？

女神様が感謝するようなことなのかな？

（女神様に私、なにか貢献しましたか？）

「ええ、とても。まずはこちらをご覧ください。」

そう言うや否や、いきなり目の前に情報画面が展開する。

と同時に、グラフのようなものが現れた。これは……。

「双治さんのここ一ヶ月のトレンドの集計……要はどれだけ流行ったかを数値にしたものです。単につぶやかれたものだけでなく、検索語句や各SNSのハッシュタグ、動画の閲覧数なども集計した独自の数値になっています。」

マメだなあ！すごいじゃないかこのグラフ。

前世にあったら、テレビや雑誌などのメディアが欲しがりそうなものだが。

すでにあるのか？そのへんはよく分からん。
グラフを眺めてみる。

(……なるほど、昨日の狩猟直後の伸び率が異常ですね。)

「はい、前代未聞の数値です。」

(……そこまで凄いですか？)

「はい。要因として、一ヶ月待たされての鮮やかな狩猟だったことが挙げられます。それまでの修行の成果を存分に発揮したことで、待たされ続けた古参のフオロワー達が盛り上がりしたようです。」

例の血の気の多い神々の方々だな。

「また、ドールさんの挙動も、大変人気となっております。」

(え!?ドールが!?)

「はい。世界相互不干渉の規約、また、双治さんの精神に大きく影響することも鑑みて、詳しい理由は申し上げられませんが。」

(き、規約？精神？よく分からないんですが。)

「双治さんの心に強く影響してしまう恐れがありました。」
(は、はあ……。)

なぜドールの挙動を俺に伝えるといけないのか。

……まあ女の子のプライベートに抵触するといけないとかそんなんだろう。

ドールに影響がないなら、俺から文句は無いが。

「影響のないギリギリの範囲でお伝えするのなら、『ドールちゃんファンクラブ』なるものが設立されました。」

(神様達何やってんの!?)

文句あるわアホか!!

ファンクラブって!てか「ドールちゃん」って!!

「『あまりに可愛すぎる』『守護神になりたい』『クンカクンカ』など、私も引いてしまうほどの人気です。」

(そうですね!俺も引いてるよ!)

「他にも『双治○○』『双治○○○○』『憎しみで○○を○○○○なら』など……おつといけません。これはお伝えしてはいけない内容でした。」

（すっごい気になるよ！何その伏せられたところ!!）

「自動で規制が入りました。よかったです。」

（よくねえから！ねえなんなの!?!俺大丈夫!?!）

神々つて暇なの!?!

つーかなんで俺にまで目が向けられてるの!?!怖いわ!

「ついでに、こちらのデータもご覧ください。」

（スルーですかそうですか。）

俺の不安など華麗にスルーした女神様は、今度は新たなグラフを映し出した。

先程の総合的な数値を表した折れ線グラフとは別に、様々な折れ線グラフが色分けして表示されている。

「このグラフは、双治さんの周りのの方々に関する数値を表したものです。赤はマシヨル

クさん。青がドールさん。黄色、緑色、紫がそれぞれハイビスさん、セツヒトさん、ケイ・イシザキさんとなっています。」

(こんな集計まで作っていたんですね。)

うん、確定。

神様は暇だ。

「データをみて、どこにどの層が食いつきやすいか分析することで、効率のよい広告収入を狙えますので。」

(その収益って何に使われるんですかね。)

「……たとえば赤のマシヨルクさんと紫のケイ・イシザキさんを見てください。昨晚の打ち上げでかなりの伸びを見せています。」

(またスルーですかそうですか。)

気を取り直してグラフを見る。

ドールの伸びが著しい。特に一昨日から昨日にかけてのグラフの上がり方がすごい。

株価ならストップかかるレベルの右肩上がりだ。

そして女神様が言うように、教官とケイさんの伸びも、そこからグンと伸びている。

「ところが、こちらをご覧ください。」

別の画面を2つ表示する女神様。

忙しいな、まるで気合いの入った若手のプレゼンを見ているようだ。

新しい2画面、表題にはそれぞれ「マシヨルク」「ケイ||イシザキ」と書かれている。

(今新しく出た2画面は……なんの数値ですか?)

「フォロワーを年齢層・性別に分けて、その増減を数で簡単に表したものです。」

よく見ると、マシヨルク教官の「若い女性」の数値が激減している。その代わりに、「若い男性」「おっさん」「おじさん」の数値はグンと伸びている。

おっさんおじさんはの定義はよくわからんが……。

男に人気だ。

イケメンなのに。なんで？

「マシヨルクさんは、不適切な発言がかなり見られ、若い女性層を中心にプチ炎上しました。」

「ぶふおっ!!」

思わず吹き出してしまった。

不適切であれか。下ネタ野郎に変身したからか。

酔いが回るにつれて、下ネタもだんだん直接的になっていったからなあ。

(……いや、炎上して然るべきでしょう。)

「そうですね、その辺は同意いたします。しかしながら、男性からは熱い支持を受けていますし、表には表せませんが、小さい子どもの層からも人気ようです。」

(……あー、なるほど。)

「見ていて面白いのでしょうか。その代わり、イケメン狙いの女性層からは落胆の声が上がりました。難しいものです。」

教官……よくわからないまま女性の神様たちに炎上されてなんか可哀想。

「ケイ・イシザキさんは、男性からも根強い人気がありました。今回のことで女性からの同情票が集まりました。」

（確かに、被害者だもん。完全に。）

「その影響で、胸をロマンとする男神vs男ってやーね女神のレスバトルが掲示板を心に止まりません。罵り合ってます。」

（やってる場合か！ちゃんと神様しろよその方々！暇すぎるだろ!!）

「見えていて滑稽で笑えます。」

（この人止める気ないな！）

神様ってなんだろう。

もう今のところ、暇でしようがないニートみたいなイメージしか湧かないよ！

「とまあこのように、分析を重ねているのです。そこで、双治さん。お願いがあります。」

干渉しないんじゃないですかー。えーやだー。

「嫌というのなら、無理には申し上げません。……おや、こんなところに双治さんが以前

セツヒトさんに顔を近づけられて息がかかってゾクゾクしたことが忘れられずに悶々と過ごした夜の独白過去ログがありますね。困りましたね。こちらSNSにて発信を

「女神様、この私めにあなたの願いを叶えさせて下さい。」

「ありがとうございます。」

俺のプライベート筒抜けだよチクシヨウ！

なんだろうなー。自由に人生謳歌してくださいって割にお願いが多いというか。

まあいいや、ギフトの恩恵は大いにあるし。期待に応えたいとも思うし。

「お願いとは、新たなフォロワー増を狙った活動を増やしてほしいのです。私も何がウケるのか、何が炎上するのか、もはやよく分かりません。」

(……………また難しいお願いですね。)

「すみません。むしろ、SNSでどのようなものがバズるかなどは、現代日本に生きていらした双治さんの方が、よくお分かりでないかと。」

(……………モンスターの特狩は続けても?)

「むしろそちらはメインです。そこがブレたらいけません。」

(そりやそうか。)

「今回、双治さんの周りの方々への反応が凄まじく、こうした脇を固めるのも大切だと実感したのです。」

とは言っても、サブネタとして面白そうなものかあ……。

(あ。)

思いついた。

これなら老若男女問わず、人気がでるかもしれない。

女神様に今思いついたものを伝えると、

「……………。いけるかもしれません。感服しました。やはり双治さん、あなたは素晴らしいですね。」

(実は今回のクエストをやりながら、一度やってみようと思ってたんです。)
「では、そのように。」

女神様はすつと息を整えた。様に聞こえた。

「双治さん、何度もお願いして申し訳なく思います。」

(……気にしないでください。女神様のギフトは本当に役に立っています。恩返し、みたいなもの?です。)

「そう言っていただけと……私も気が楽になります。」

んー、やっぱり綺麗な声だなあ。

こーこういうふとした時に漏らす本音が、ちよつと可愛い。

「心はダダ漏れですから、お気をつけください。恥ずかしいです。」

(わかってやっています。)

「……意地悪です。」

掛け合いも慣れてきたな。

「お一人で向かうクエストも増えることでしょう。どうか、命を大切に。」

(はい、その辺は抜かりなく。)

「…………お気をつけください。それでは失礼します。」

会話が切れる。

目の前にあつたたくさんのグラフとかの画面も消える。

…………最後なんか意味深だったな…………。

気をつけていこう。

俺は今日から一人前のハンターなのだ。

へまはするかも知だが、このもらった命、大切にがんばろう。
改めて決意をするのだった。

35 圧迫面接を受けましょう。

女神様とのお話を終えた俺は、朝食をとるべく、食堂にやってきた。

今日からいよいよプロのハンターか。

……正直実感は湧かないな。

後でギルドに行くつもりなので、ハイビスさんがいたらお礼も兼ねて挨拶と報告をしよう。

今日の朝食は、おかゆとかなり塩分強めの漬物。

柑橘やキウイのような果物が、彩りよく小さいボールに盛られている。以上3品だ。味気ないかもしれないが、二日酔いの弱った胃腸にはなんとも丁度いい。

木製のスプーンで粥をすすする。

あー……………染みるう……………。

そのまま箸で漬物をパクリ。ボリボリ。

塩分薄めの粥に、ガツンとしよっぱいお漬物。

最強の組み合わせだな！

果物はどれも酸味が効いて、甘みは少なめ。

うーん、二日酔いには素晴らしく効くわあ。

女神様のお陰で頭がスッキリしたとはいえ、胃腸は弱ったままだろうし、このメ

ニューはありがたい。

ドールが用意したんだろうな。

あの娘は本当に偉い。

弱った胃腸気を配るとは、もう俺は宿を変えられないではないか。

「ごちそうさまでした。」

「あ、食べられた？おはよう、ソウジさん。」

ちょうどいいタイミングで、食堂にドールが入ってきた。

「すばらしいですよドールさん、二日酔いの飲んだくれのことをよくわかってらっしゃいます。」

「あ、ありがとう。……まだ酔ってる？」

「真面目に。感動しているんだ。ありがとう、俺のために。」

「う、ううん。たまにはこんなのもいいかなって、作ったただけだから。」

　恥ずかしそうに皿を回収するドール。

　水場に行ったあと、すぐこちらに戻ってきた。

「ソウジさん、今日はどうするの？」

「ああ、ギルドには行くが、今日はゆっくりする。でも金も厳しいし、明日から本格営業開始だな。」

「わかった。夕飯用意しておくね。」

　立ち上がる。

　すると、ドールが遮る形で俺の前に来た。

「……行ってらっしゃい。」

「は、はい。行ってきます。」

「……………」

「……………」

「……………ん。」

頭を見せてくる。

なんか既視感。

……………あ、撫でろってこと!?

「あー……………な、撫でるんですか?!

ん。」

「……………毎朝?」

「……………ん。」

肯定なのか否定なのか!

……………まあいいや。姫がご所望である。

手を伸ばして、優しく撫でる。

ナデナデ。

……。

30秒ほどすると、なにか納得したのかドールがゆっくり離れた。

「……ありがとう。」

「い、いえ。お粗末さまでした。」

心臓が悪い。

こんなところホエルさんに見られたら恥ずかしすぎるぞ。

「行ってらっしゃい。」

「ああ、行ってきますー！」

宿を出て大通りに向かう。

アレを毎朝かあ。いや、嫌じゃないんだが。

………セクハラで訴えられませんかように。

* * * * *

ギルドに着いた。

でかい石造りの建物だが、今日は少し違って見えるな。

一昨日まで毎日通っていたのに。

講習が終わったからか、心境がだいぶ違う。

入り口を通ると、かなりの人で混雑していた。

しまった、忘れていた。時間帯的に一番混む時だ。

ギルドは朝が最も人で溢れる時間帯だ。

クエストを受けたいハンターが殺到する。

受付に行けばギルドがその人に見合ったクエストを紹介するのだが、クエストボードに貼られたものを見て自分でクエストを選ぶ人のほうが多い。

そして割の良いクエストはすぐに無くなるため、朝早くから人が溢れ返る、というわけだ。

夕方も混むといえまあ混むのだが、ハンター達が帰る時間もまばらなため、朝の方が人が多い。

今日はその一番のラッシュの時に来てしまった。

いつもはもつと遅めに時間を調整していたからなあ。

村をランニングで周回したり、外で調合の練習をしたり。

これではハイビスさんに会うのも相当に難しいぞ。

新人受付窓口の方に行ってみると、こちらはこちらでハンター見習いや新人でこつた返していた。

初期装備の人だったり、インナーのみの恰好の人だったりして、まばらだ。

そういう俺の装備って、ランク的によの辺なんだろうか。

教官は「いい装備だ！大切に手入れして使うといい！」とか言ってくれていたが。

機会があつたらセツヒトさん辺りに聞いてみよう。

窓口の中に目をやる。

ハイビスさんではない別の受付嬢のお姉さんが、忙しそうに應對している。

黒髪のパニーテールが特徴の、若い女性だ。受け答えも堂々と。凛としてかつこい感じ。

しかし受付嬢の方って美人さんが多いよな。

ハイビスさんも、あれだけ美人でたまにドジだけど有能な方だ。

新人ハンターが頼りにしている存在である。

新人や見習いは特に慎重にクエストを選ばなければならない。

技量も体力もまだまだ未熟なので、内容によつては死ぬ確率が簡単に跳ね上がる。

なので、基本的にクエストボードから勝手にクエストを選ぶことは許されていない。

なぜ俺は許されたのか？教官のマンパワーだろうな……。

そして、この若手ハンター保護や育成の制度を充実させたのが、ハイビスさんらしい。

………とんでもなく有能である。

「ソウジさん、おはようございます。」

「おわっ！ハイビスさん！おはようございます！」

コソコソと後ろから声をかけられて驚いた。

見ると、新人窓口横のドアから顔をのぞかせて、ハイビスさんが隠れながらも俺を手

招きしている。

壁に背をもたれて立っていた俺は、完全に不意を突かれた。

しかし何故隠れているのだ。
そして相変わらず隠れ方が下手だ。

「すみません、こちらへ……………」

「は、はい？」

招かれるままにドアに入ると、ボタンと閉められる。

ギルドの喧騒が少し小さくなり、ここには今二人だけ。

ここはギルド内部のはずだ。

入っていいのか？

「えーっと、ハイビスさん。これはどういったことでしょう。」

「詳しくは後で申し上げますね、急にごめんなさい。ひとまずはソウジさん、バサルモスの討伐成功、おめでとうございます！」

「あ、ありがとうございます。」

少しテンション高めにおめでとうと言われて、面食らう。

「本当は昨日報告をしようと思ったのですが、ハイビスさんお休みなので、辞めておきました。」

「そこです！私も今朝話を聞いてド肝を抜かされました！早すぎますよソウジさん！」
「そこは、私も驚いています。」

わざわざこれを伝えるために、ここに連れてきたのかな？
確かにあちらじやうるさいが。

……とか考えていたが、どうやら違うらしい。
ハイビスさんが続ける。

「で、ここに呼んだのは、他でもありません。ソウジさんがギルドマスターに呼び出しを食らってまして。」

「よ、呼び出し!?ギルドマスターに?誰がですか?」

「ソウジさんですよ?直々に、今すぐとのご指名です。」

ギルドマスターとは何か。

昔、「一番偉いやつだ！」とマシヨルク教官に聞いたことがある。
シンプル。

「何故一番偉い方が、ハンターになつたばかりの俺を？」

「んー……正直ギルマスのお考えはよくわからないのですが……悪いことではないと思
いますよ？」

「……本当に？」

「……さあ！着いてきてください！案内しますね。」

妙な間があつたぞ……。

心配だが、呼び出しを食らつて無視するわけにはいかない。

高校生が職員室の呼び出しを無視するのはワケが違う。

こちらら生活がかかつてるので！

失礼の無いようにしなければ……！

* * * * *

建物の奥、階段を上がって正面にある大きな開き扉。

そこがギルドマスターの部屋らしい。

社長とか校長とか、偉い人の部屋の入口ってすぐわかるよなあ。

雰囲気が違うもの。

コンコン。

「ギルドマスター。ソウジさんをお連れしました。」

「ああ、ありがとう。入っていいですよ。」

ガチャツと扉を開くハイビスさん。

促されるままに部屋の中へ。

「失礼します。」

「やや、どうもどうも。わざわざすみませんね、ソウジさん。ハイビスさん、お茶を出して頂けますか？」

「はい、かしこまりました。」

中に居たのは、シュツとした40代後半ぐらいの男性。

黒いダブルのスーツで、シヨートの黒髪がきちんとワックスで整えられて、細めのメガネが似合っている。

いかにも仕事ができそうな感じの人だった。

この人が、ギルドマスター。

勝手に俺の中で、小太りで体格のいい禿げた中年のおじさんを予想していた。全然違う。

「いやいや、あ、どうぞそちらにおかけください。」

「は、はい。失礼します。」

石造りのテーブルに案内される。

革張りのソファだ！かっこいいな！

しかし、この男のものすごく低姿勢、こちらも申し訳ない気持ちになってしまう。

「お茶です。」

ハイビスさんが入れてくれたお茶を並べる。

「ギルドマスター？では私はこれで……。」

「ハイビスさん、話がスムーズになりますので、同席していただいてもいいですか？業務の方は、彼女がいますよね。」

「は、はい。一応。新人窓口には、ヒナタが居ます。」

「彼女なら問題ないでしょう。ハイビスさん、よろしくお願いします。」

「は、はい……。」

そう言うとハイビスさんが、ギルドマスターの隣りに座った。

気分はまるで面接。居心地は良くない。

「自己紹介がまだでしたね。ハンターズギルドワサドラ支部のマスターをしています、シガイアです。急にお呼び建てしてすみません。」

「いえいえ、お気になさらず。……それで、私はなぜ呼び出されたんでしょうか？」

シガイアさんが、一瞬間を置く。

「……ええ、まずはソウジさん、バサルモスの討伐、おめでとうございます。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「ええ、ギルドではこの史上初の事態に驚きを隠せませんでした。ですが規定通り、ソウジさんをハンターランク3、下位ハンターとして認めようと考えています。」

「そ、そうですか。」

………。

………何だこの沈黙！

「あ、あの？どうかしましたか？」

思わず声をかけてしまう。

すると少し驚いたようなトーンで、シガイアさんが答えた。

「なるほど……。これですね、ハイビスさんが言っていたのは。」

「はい、そうです……。」

「あ、あの、よく事情が分からないんですが……。」

「いやいや！すみません。こちらの話です。……ソウジさん、ハンターランクってわかりますか？」

ハンターランク？

……情報画面にもそういった説明はなかったような……。

「いえ……すみません。私、記憶が喪失しているらしく。説明を頂いてもいいですか？」
「はい。まず、お気を悪くしないでほしいのですが、ハンターランクの制度は、ハンターならば誰もが知るものです。……マシヨルク、やはり教えてなかったかー。」

知らなかったし聞いてないぞ！

教官！お願いしますよ……。

そこからシガイアさんが説明をしてくれた。まず、ハンターにもランクがある。

それがこのハンターランク、HR制度。

見習いからハンターになるとHR1となる。

そこからモンスターの狩猟履歴やクエスト達成の数などを総合し、徐々に数字が上がっていく。

大まかに分けて、HR1～HR3までが下位ハンター、HR4～HR7が上位ハンター、更にその上はG級という、一番上のクラスがあるとか。

それで、いきなりHR3になるというのは……。

「ええ、はつきり言います。これは前代未聞です。」

シガイアさんが話す。

「ハイビスさんの報告、そして教官があのマシヨルク、更に今回のバサルモスのソロ討伐。しかも一日足らずでの狩猟。この事から、ハンターズギルドのトップとして、私がHR3に認定するに至りました。」

「……………」

「いやー、村付きの猛者がHR2にいきなり昇格することは無くはないんですが、全くの新人でこれは、私も初めてですよ。」

「……………えっ?」

状況がよく飲み込めていない。

俺はじゃあ何か? 結構すごいことやっちゃった感じか?

「ソウジさん?」

「は、はい!」

「ははは。あまりそう固くならず。誇っていい。あなたの実力ですよ。」

うん。

嬉しいです。

正直めっちゃ嬉しい。

こうやって数値で自分の頑張りを評価されるのは、素直に嬉しい。

ようやく俺が笑みを浮かべると、シガイアさんもハイビスさんも笑った。

「中々無いことなので、私が直接面接をすると、そういう流れで今回来てもらいました。」
「いえ、そういうことなら来てよかったです。」

「ええ、人となりも問題なさそうです。……………うん、それではいくつか質問をさせてください。よろしいでしょうか。」

「はい。」

そう言うと、シガイアさんがメガネを取って息を吐いた。

隣のハイビスさんが急にビクツとなった。

何だ？部屋の空気が変わったような。

シガイアさんが俺を見つめる。

「ソウジさん……………あなたは何者なのですか？」

急に冷たくなったシガイアさんの言葉に。

俺は少しだけ怖くなった。

36カミングアウト（笑）をしましょう。

「ソウジさん……あなたは何者なのですか？」

シガイアさんの雰囲気は冷たいものに変わった。

何者、というのはどういうことだろうか。

「……………えっ？」

とりあえずどうということかわからないから、こう返しておこう。

「……いや、すみません。不躰な言い方をしてしまいました。記憶を無くされているのですから。分からないものはわからないと、仰ってください。」

少し言い方が柔らかくなる。

でも、何故か安心できない。

目が、俺を見極めようとしている。

俺が何者かを、何としても知らねばと。
そう俺には伝わる。

「ハイビスさんからの報告通り、非常に真面目で礼儀正しい。周囲との関係も良好。例
外中の例外ですが、あなたをHR3に昇格しても構わない、それだけの実力があると思
う。だが、それだけでは無いと、私の勘が告げるのですよ。」

「……。」

「ちなみにハイビスさん。あなたも同じように感じたはずですよ。違いますか?」

「い、いえ。初め見たときから、違和感のようなものは……。」

「……そうですね。」

マシヨルク教官は見抜いた。

俺が異世界から来たことを。

そして目の前にいる二人。

この二人も気づいている?

勘の域は出ないのだろう。

聞き方が曖昧だし、何の確証も無い筈。

なのに、なのに。

目の前にいるギルドマスターのシガイアさん、そしてハイビスさんは……。

「お話しいただけませんか。あなたが隠しているであろう、その何かを。」

気付いてしまうのか。

……いや、すごいわ。この人たち。

素直に驚く。だって、分かるわけではないもの。

でも、自分の第六感に自信があるからこそ、そこに辿り着いたんだろうな。

俺が、異世界人の俺が、どこかおかしいって事を。

「……。」

「……ああ、安心してください。秘密は守ります。そうですね、情報が漏れるようなことがあれば……。」

「……あれば?」

「私は死んでもいい。」

「……………」

「いやいや、ものの例えですよ？秘密保持については、それほど自信があります。」

いきなり死という言葉を出され、ますます緊張してきた。

情報は死ぬ気で守るということか。

「ソウジさん、その反応……何か秘密を持っていると、言っているようなものじゃないですか。」

「……………」

「あなたはどうかやら嘘をつくのが苦手なようだ。好感が持てますよ。」

シガイアさんの張り詰めた雰囲気、少し砕けた。

……まあ、これ以上隠しても、ギルドに不審がられるだけだよな。

何せそのトップが俺を怪しんでいるんだし。

ハイビスさんも違和感には気づいていたか。

……気を付けないとなあ。

俺のギフトは、やろうと思えば簡単に悪事に転用できる。

だから、打ち明ける人は本当に信頼できる人間だけにしたい。
でも俺がポンコツな為、気付かれてしまった。

……秘密を保持しないと死ぬ、とまで言うんだから、信頼してみるか。

「……………分かりました。でも、約束してください。秘密は、守ってほしい。」

「ええ、約束します。ギルドマスターの名に誓って。」

「……信頼します。」

「ハイビスさんはともかく、私は信頼できないでしょう。今日会ったばかりですし。
なので……………」

そう言うと、シガイアさんはハイビスさんの肩を叩く。

「彼女も道連れにしましょう。」

「えっ?」

「この際、この秘密保持の約束に、ハイビスも巻き込んでしましましょう。」

「……………え!」

ハイビスさんとハモる。

勢いよく立ち上がるハイビスさん。

「ギ、ギルドマスター!?! 私は関係ないですよ!?!」

「何を言ってますか。ここに居ろと言われた時点で、察していたでしょう。」

「こ、こんな深刻な話にまで及ぶとは思ってませんでした!」

「でも、聞いちゃいましたね! ドンマイです!」

「こ、こんのタヌキオヤジイイ……!」

巻き込まれまいと頑ななハイビスさんだが、もうここまで聞いてしまった以上、一蓮托生だ。

少し可愛そうだけど。

ハイビスさんとシガイアさん、上司と部下の関係なはずだが、ハイビスさん割とフラシク。

怒りも相まって文句が止まらない。

タヌキオヤジで。

「だ、大体ギルマスはいつつもそうです！マシヨルクさんが来た時だって適当に私に丸投げしましたし！今回だって『私に任せてください』なーんて言って！！結局巻き込むつもりだったんじゃないですか!!」

「迷惑をかけましたね。すみません（笑）」

「謝っているように聞こえませんが！笑っているようにしか見えませんが!!」

「でも、仕方がないですよ、ハイビスさん。今回担当をしている受付嬢はあなたですし、異例のバサルモス討伐を許可してあらゆる部署に働きかけたのもあなたです。今回の昇格に一役買っている、そしてソウジさんの秘密について知らないまでも怪しんでいる。」

「それは……そうですけど……。」

「なら、ソウジさんのことをある程度は知っておかなければならない立場にあると言えますね。ソウジさん、ハイビスに知られるのは問題ないですか？」

「はい、問題ないです。」

「ほら、信頼されてますね、ハイビスさん。」

ハイビスさん、新人にもならない俺がクエストを受けられるよう尽力してくれたんだ

な……。いい人や……。

「ソウジさん。あなたの担当であるハイビスさんもあなたの秘密を知りたいそうです。もし漏らすようなことがあれば、私達が責任を取りますので、よろしくおねがいますね。」

「よ、よろしくおねがいます。」

いいんですかシガイアさん？

後ろでハイビスさんが般若の顔で睨んでますけどいいんですか??

「これは取引です。私達の信用と職責を担保に、あなたの秘密を教えてください。」

「そこまでしていただくなくても……。」

「いえ、そこまでしておけば、あなたは我々を無下にはできない。そこも算段の内ですよ。お気になさらず。」

「は、はははは。」

乾いた笑いしか出ない。

きっとこの人、ハイビスさんを使って俺を呼ばせた時点で、ここまでの展開を読んでいたのだろう。

食えない人である。

タヌキっていうより、スマートな感じだからキツネだな。

「えーつと、ではまず……。」

こうして俺は、2回目になるカミングアウトを行い始めた。

* * * * *

「……信じられません。」

えー。

人が一世一代のカミングアウト（1日ぶり2回目）をしたっていうのに。
シガイアさんは微妙な顔をしている。

一応洗いざらい話したつもりだ。

だがまあ確かに、そんな顔になるのもうなずける。

「異世界にいたがこつちの世界に来ることになりました。神のギフトをもらってます。一応ズルはなるべくせず、ここまでやってきました。やろうと思えばすごい力が使えます。」

なーんて言われて信じられるか？

うん、俺なら無理だな。

シガイアさんが質問を投げかけてくる。

「まず……その〈情報画面〉？とやらです。アイテムを自在に取り出せたり装備をすぐに付け替えられたりする……。今披露してもらうのは可能ですか？」

「あ、はい。」

そう言われて俺は情報画面を操作して「大タル爆弾G」を選択すると、目の前にドンツとバカでかいそれが出てくる。

「!!!」
「えっ……えっ??」

二人とも驚いている。

そういえば人前でやるのは初めてだ。

「すみません、物騒なものを出して。」

すぐにしまう。

元から何もなかったかのように消える爆弾。

「……これは、本物のようだ。」

「……………」

ハイビスさんが口を開けてポカーンとしている。

気にせず次に〈装備〉から「ミヨシ村装備」を、頭から足まで一つずつ選択。

俺の装備が一瞬で変わっていく。

「な、何と……………!」

「……………。」

人つてここまで困惑した顔ができるんだな。

ハイビスさんが、世界で一番困ったさんの顔をしている。

さすがのギルドマスター、シガイアさんは冷静だ。

「……………なにかの作品と言われても納得できませんね。これは本物、神の御業だ……………」

「俺がすごいってわけじゃないんですけどね。この装備変更はとても便利で、着替えに重宝してます。」

そう言いながら、また普段着に戻る俺。

ハイビスさんはそろそろ白目を戻してください。現実ですよー。

「いやはや……………。人生で一番の衝撃でしたよ。ソウジさん、この技に制限などはありま

すか？」

「んー、何回もしたことはないですから何とも……。あ、でも、〈操作方法〉を使った技、あれは少し疲れます。」

「……………ぜひそれも見せていただきたい。」

興味津々といった様子で、すぐに修練場へと直行することになった。

ハイビスさんは心ここにあらずな様子だったので、俺が恐れ多くも手を引いてエスコート。

女性の手つて柔らかいなあとか、そんなおっさんスケベ心を全開にしつつ、修練場にたどり着く。

「私の権限で人払いを済ませました。念の為、入り口も封鎖済みです。ここは岩山に囲まれて、人の目も入りにくい。」

確かにうってつけだ。

しかしまたここに来ることになるとは。

思い起こされる講習の日々。

マシヨルク教官に投げ飛ばされたり、ゴキブリのようにそびえ立つ岩山を登ったり。俺はその真ん中に鎮座する、通称カラクリ蛙と対峙した。

「双剣でよろしいですか？」

「ええ、ひとまずは、機能が停止するまで斬撃を繰り返すというのでどうでしょう。」

「……分かりました。」

機能が停止する、というのは、マシヨルク教官が見せてくれたあれか。

ある一定のダメージを短時間に与えると、からくり蛙が緊急停止するあれ。

「やってみます……………!!」

意識を現実に戻したハイビスさんは、食い入るように俺を見ている。

ハイビスさんなら、普段の修練場の俺と今からの俺の違いがわかるだろう。

「……………フツ!!」

まずは鬼神化、そこから突進連斬、逆手、2連斬り、そして乱舞につなげよう。
技をセツト、息を吐き出して連撃を開始する。

自分の体が自分でわからなくなるこの感覚。
いつになったら慣れるんだろうな。まあ回数こなすしかないのか。

「ハッ……フッ！ハアアアアアアアア！！！！」

声は自然に出てしまう。

テニスも、サーブの際声を吐き出して打つが、その気持ちがよくわかる。

出ちやうんだな、これ。

「……アアアアアア！」

連撃を重ねていく。

見慣れた蛙の顔を、首元を、正確に斬り刻んだ。

乱舞が終わる。

感覚が戻る。

体が軋む……ほどでもないな。疲労もそこまで。やはり教官による講習で地力が付いてきている。

目の前の蛙を見ると、首をダランと下げ、なんかバチバチ言っていた。

「とりあえず、機能停止は——」

そこまで言いかけた途端。

ガ！ガタガタ！

ボンッ！

シューー………。

からくり蛙に亀裂が入り、音を立てて崩れた。

………これって。

「や、やりすぎました……。」

「……………」

「……………」

口をポカーンと開ける二人を見て。

保険って効くのかなあとかアホな事を考えながら、しばらく沈黙の時間が流れたのだった。

37 損害賠償と雇用契約について考えましょう。

からくり蛙が壊れた。

講習中、苦楽を共にしてきたからくり蛙が。

チクシヨウ！誰の仕業だ！

俺だよ！

教官の強烈無比な連撃でも壊れなかったんだぞこの蛙！！

どんなにボコボコにしてもアホみたいに動き続けたのに！！

憎たらしすぎて「いつか壊してやる」とかちよつと考えてみたこともあつたけども！

……ごめんな、蛙！そんなつもりはなかった！勝手に俺の中で「壊れないもの」として認識されていた！

しばらく待っても壊れたまま動かない。

シガイアさんが、ようやく口を開ける。

「……そ、ソウジさん。」

「は、はいー!」

損害賠償請求!? 保険は効くのか!?

保険ってなんだ! 修練場の機器を壊した際に効く保険とか知らんぞ!

「落ち着いてくださいソウジさん。私は今、歓喜している。」

「……えっ?」

「ハイビスさん、今の動きはどう思います?」

尋ねられたハイビスさんは、ハツとしてこちらに向き直った。

「ソウジさんの剣は、常に見てまいりました。……全く別物です。彼がやったとは……目の当たりにした今でさえ、彼がやったとは思えません。」

「……なるほど。やはり、本物のようだ。」

……ハイビスさん、常に見ていたのね。

恥ずかしいやら嬉しいやら。

シガイアさんが話し始める。

「私も、これまでに数々のハンターを見てきました。かの有名な『カホ・チータ』のハンマー使いのハスガ、ヘビィボウガンの名手マシヨルク、ソロハンターの頂点にいた『百手』セツヒト……………彼らをもってしても、この蛙は破壊できなかった。いや、破壊しようとも思わなかったでしょう。それほどまでにこのからくり蛙は硬い。」

「……………」

「装甲にこそ、ありふれた硬金属マカライトを使っていますが、骨組みや関節、作動部位には希少なユニオン鉱石や強力なモンスター素材が使われている。理論上、ソウジさんの剣は、古龍を相手にできるほど、ということになります。」

へええすごいなあ。

古龍まで話に出てきた。

「…………ハイビスさん、この事は、先程も言いましたが他言無用です。」

「は、はい。」

「責任はすべて私がとります。そして、ハイビスさん。ギルドマスター命令です。新人

担当から解任。ソウジ君のいる下位ハンター受付で、ソウジさん担当として正式に任命します。」

「はい！」

ハイビスさんがかしくまって返事をする。

上司と部下の関係がようやくやく見えた気がする。

「ソウジさん。」

シガイアさんがこちらに向き直る。

「あなたはその力を、大いに振るいたいと思いませんか？」

「えっ？」

「やろうと思えば、簡単に金儲けが可能でしょう。悪事に手を染めて、裏の世界の頂点にも立てそうだ。あなたはそのつもりはありますか？」

「……いえ、全く。……俺は今が楽しいんです。この世界で、精一杯生きること。それが、俺の目標ですから。」

うん、悪事とか、全くそんなつもりはない。

この世界に来て短いが、愛着が湧いている。

努力をして、成果を出す。

その達成感に勝るものはない。

まあ、多少ギフトは使わせてもらうかも。

お金がないときとか。

でも、悪い事に使ったり、金儲けするって……………。

なんか違うよな。

「……………それを聞いて安心しました。」

心底安心したような表情を見せるシガイアさん。

「…………改めて、あなたをHR3として、認定します。実績を積み重ねてください。ワサドラで初めてのG級ハンターが誕生するかもしれませんね。」

「あ、ありがとうございます。」

「秘密は保持します。専属担当はハイビスさんです。あなたの力は、無闇に広めないほうがいい。何かあればすぐに私を頼ってください。」

頼りにできる存在が増えた……と思っているのかな？

シガイアさんは信用できると思う。

こうして俺は、無事？HR3に昇格した。

新人としては前代未聞らしいが……あまり実感無いなあ。

まあいいか。

これからクエストを数々受けるんだ。

こなしながら少しずつ実感も湧くだろう。

* * * * *

イシザキ亭で昼を取ったあと、俺は今日の本当の目的地に向かう。

ギルドには、ハイビスさんに報告をするためだけだったんだが……かなり長居してしまった。

あのあとギルドマスターの部屋に戻り、秘密を保持する上で気をつけることについて話し合った。

とは言っても、基本俺はハンター業を本格的に開始するだけだ。

ギフトに関する話は、極力ギルト内のできるだけ人のいないところで言うこと。その内容はハイビスさんを通して3人で共有すること、などを話し合った。

シガイアさんとしては、寝泊まりする場所もギルド内部にしてほしかったようだ。

実はギルドにも寝泊まりするところはある。

要人を招いたときや、緊急時にハンターを泊めるためらしい。

ただ、そこは丁重にお断りした。

確かに、秘密を保持するのに、普通の宿では危険が伴うかもしれない。

ただ俺が、宿「ホエール」に居たいのだ。

それに秘密と言っても、俺が、俺のポーチを触らないことには始まらないので、セキユリテイという面ではあまり困らない。

ちなみに、他の人がポーチを開けたらどうなるのか試してみたところ、中身が少し入っているだけ、という結果だった。

ハイビスさんが少しワクワクしながらポーチを開け、落胆した顔で回復薬とおにぎりを出すという面白い一幕があったのだ。

「ズルいです、ソウジさん……。」と落胆するハイビスさん。
俺もそう思います。そして落ち込むハイビスさんかわいい。

本気でシガイアさんが俺の秘密保持に動いてくれて、安心している。

これが悪い人だっと思ったらと思うと……。カミングアウトするにも、ちよつと不用心だったかも、と反省している。

そんなこんなで。

今日の目的地に着いた。

そのの見た目はまるで、子どもの遊び場だった。

周囲を大木に囲まれ、柔らかい木漏れ日に地面が照らされている。

見上げると、アスレチックパークのように、木々の間に吊り橋が張り巡らされていた。

広がる木々の向こう、木漏れ日の切れた先には、小さめの集落のようなものが見える。

何より異様なのが、中央にそびえるからくり蛙。

トレーニング用かな？ここにもあるのか。

他に何か無いか、よく目を凝らす。

「受付って……どこだ……？」

わからん。

公園にやってきて、受付を探している気分。

そんなものはない、と言われても納得である。

「お？あそこにあるのは……。」

ようやく人影らしきものが見えた。

切り株に座り、膝に大きな本を抱えている。

柔らかい木漏れ日を明かりにして、分厚目の本に一生懸命何かを書いていた。

忙しそうだが、話しかけてみよう。誰もいないんだし。

「あの一、すみません。」

「わわっ！何だにや何だにや！」

驚かせてしまった。

おお……語尾がいかにもって感じ。

獣人と話すのは、生涯2回目の体験である。

初めてはクエストの帰りのネコタクの御者さんだったが、あまり話せてはいない。

白い木綿のような生地ワンピースの後ろから、茶色いシツポがゆらゆら揺れている。

頭からはみ出している三角の耳と鋭い2つの八重歯が、この人が獣人であることを教えてくれている。

赤い髪の毛にきつちり猫目。見た目は人間に近いが、体の大きさが明らかに違う。

可愛らしい姿に惑わされぬように、一人の人間と同じ様に話さなければ。

相手に失礼があつてはいけない。

「失礼しました。ハンターをしていますソウジと申します。驚かせてしまつて、すみません。」

「あー！こちらこそ失礼しましたにや！受付の子、どっかにエスケープしたのかにや……アイツはおやつ抜き決定にや!!」

その子は可哀想だが、自業自得っぽいのでスルーしておこう。

「ようこそ、アイルールの集落へ！ 僭越ながら、ここの取りまとめをしています、オスズと申します。あちしのごとは、気楽にオスズ、とお呼びください。以後お見知りおきを。」
「はい、よろしくおねがいます。」

はああかわええ……………。

何なの!? 何でこんなかわいいの!? 一人称あちしって！ なのにこんなに立派に喋っちゃって！ 偉い偉い!!

……………。

……………。

いかん。平常心平常心。

……………俺は無類の猫派である。

実は猫系の写真を集めたりグッズを見て買ってしまったりするほどには、猫が好きだ。

なので、猫っぽいちっちゃい獣人なんか大好き。

気持ちに嘘はつけないが、おっさんが悶えてもただただ気持ち悪いので、せめて心の中
中で愛でよう。

ちなみに犬も好き。動物全般好き。

愛玩動物に貴賤なし。

閑話休題。

「ハンターさん、今日はオトモをお探ですかにや？それともご依頼で？」

「ええ、俺、新人です。今日はオトモを探しに来ました。」

「にやるほど。それではまず、ギルドカードを貸してくださいますかにや？」

そう言われて、ギルドカードを渡す。

小さい手を器用に使って、ギルドカードをしげしげと眺めるオスズ。

うん、可愛い。

「……新人さんで……HR3……ですかにや？」

「え、ええ。まあ色々あります。」

「ほいほい……承知しましたにや。そうしましたら、こちらへどうぞ！」

怪しまれなくてよかった。

そう、俺がここにやってきた理由、それは……。

ズバリ、オトモアイルーを探しに来たのだ！

オトモアイルー。

ハンターはお供としてアイルーを一匹または二匹まで、伴ってクエストに出られる。アイテムの使用や回復など、ハンターの支援を主としていて、クエストの快適さが違うらしい。

他のハンターとパーティーを組んで、クエストに行って助け合いながら………というのが普通らしいのだが、シガイアさんに固く止められてしまった。

万が一の時、俺がギフトを発動して間近で見られたら、それをごまかすのは厳しい。なので心底信頼できる人でなければ、パーティーを組むことは控えるようにと言われた。

寂しいなあ……。

と、思ったが。

今朝女神様と話した時に思いついたのが、俺がオトモを雇うというもの。

そう、可愛らしい獣人ならば！

万人にウケること間違いなし！！

しかもソロを強いられる俺にとつてうってつけの存在！

そして俺、猫っぽいもの大好き！

一石二鳥どころか三鳥である。

オスズは集落の奥まったところ、机と椅子が並んだエリアに俺を案内してくれた。

小さめの可愛らしい椅子に腰掛ける。

オスズも向かいに座って、本を広げだした。

「すみませんにや、今日は殆どの紹介できるアイルーが出払っておりますにや。受付のショウコも、姿が見えにやいし……どうもアイルーはその辺テキトーなやつが多いにや！あちしは、この状況を憂いておりましてにやあ……。」

「い、いえいえ、気になさらず。急いでいる訳ではありませんから。」
「そう言つて頂けるとありがたいですよにやあ。」

そう言いながら広げた本には、オトモ候補と思しきアイルーたちの名前、性格、得意なスタイルなどがズラツと並んでいた。

一覽表になっており、契約状況とわかる表示には、大体のアイルー猫が「契約中：○○○」と、ハンターの方の名前も書かれている。

個人情報的に大丈夫なのかと多少心配したが、まあその辺は気にしないんだろうな。オスズは、本とにらめっこしたかと思うと、小さい眉間にシワを寄せてウンウン唸りだした。

「うーん……えーつと、さ、サウジさん？」

「ソウジ、です。オスズさん。」

「し、失礼しましたにや！ソウジさん。……大変申し訳にやいのですが、まあ先程申し上げたように、現在大半のアイルーが出払つておりますにや。」

「はい。」

「案内できるアイルーは、いると言えはいるのですがにやあ。うーん……。」

「またも唸りだした。」

「オススメできない感じですか?」

「はい。新人ハンターさんということで、経験がある程度あるオトモを案内したいのですにや。ところがこのワサドラ、近年の急成長に伴ってハンターさんの数も大幅に増加。アイルーの需要がここに来て拡大、中々良いヤツがおりませんにやあ……。」

「なんと。」

リアルな事情が聞けた。

なるほど、新人ハンターも増えれば、それだけ需要も多くなる。新人はパーティーを組みにくいからなあ。

しかし、俺のためにこの可愛いアイルーが一生懸命考えてくれている……。

やはりこの村、人だけじゃなくアイルー猫まで優しい。

無理させているようで、悪いな。

「いいですよ、そこまで急ぎじゃありません。また来ますので。」

「……………にや、にやあく。申し訳にやあです。次、優先して案内いたしますので。」

残念だが仕方がない。

これ以上オスズを困らせたくないしね。

しかしどうするか、とりあえず宿に戻って考え直すか。

ハイビスさんに相談して見るのもありだ。

そしたらまずは宿に――

「ちよーっつと待ったああああ!!!」

「えっ!?!」

急に声をかけられた。

声のする方、上を見上げる。

……………アイルーが俺の頭めがけて落ちてくる!!

危ない!

と、思った時には既に手が出ていた。

シュタ！

思わず両手で受け止めてしまう。

落ちてきたアイルーは、器用にも俺の手に着地。

顔が近い！

するとそのアイルーは、更に顔を近づけて、顔を赤らめて言う。

「う、ウチはいかがですか！」

「しよ、シヨウウコ！」

「ウチを、ウチをあなたのオトモにさせて下さい！」

荒い鼻息が顔に当たる。

状況についていけない俺は、両腕を出したまま中腰。

マヌケな格好でキョトンとするしかなかったのだった。

38 アイルー達の話聞きましよう。

猫はある程度の高さまでなら、無傷で着地が可能だ。

これはどんな動物も可能かと言われれば、そんなことはない。

小学生の頃、飼育委員をしていた時、うさぎを抱っこしたことがある。

俺の持ち方が下手で、ジタバタしたうさぎがぴよんと飛び降りてしまい、委員会の先生から注意を受けた。

うさぎは高いところから飛び降りると骨を折ってしまうから、しっかりと優しく座って抱いてあげる様にしましょう、と。

うさぎはよく跳ねるから大丈夫、などと勘違いしていた俺は、いたく反省した。小さい頃の思い出である。

では、今日の前の獣人はどうか。

優しく受け止めようとしたら、不安定な俺の腕に見事に着地したのだ。しかも余裕で。

やっぱり猫ってすごい。

そんなことを考えながらキョトンとしているしかなかった。
オスズが目をまん丸くして、驚いている。

「こ、こらー！ ショウゴ！ とりあえずそこから降りるにや！」

「あ、オスズさん！ ウチ！ ウチこの方のオトモになりたいです！」

「わ、わかつたからにやあ！ ひとまず降りるんだにや！」

「え？ …… …… わー！ …… す、すんませーん!!」

腕を出したまま中腰というマヌケな体勢を維持していた俺から、ピョンと飛び降りる。

俺の腕にいることに気づいてなかったのだろうか、凄く申し訳無さそうにしている。

金髪のショートヘアから飛び出す猫耳は白色。尻尾も白色。

下は動きやすそうな濃い茶色のハーフパンツ、上は白い半袖のTシャツなのだが、少し大きめなのか七分丈のようにも見える。

カジユアルな格好で、快活そうなイメージが見てとれる。

「まったく！ ショウゴ！ 受付サボってどこに行つてたにや！ しかもハンターさんに何て

失礼な！謝るにや！」

「え、えーつと……どつちを？」

「どつちも謝るんだにや！」

ギャーギャーワイワイちっちゃい獣人たちが言い争っているのだが。

正直言おう。

うん、可愛い。

なんだろう、どんなに凄んでも結局可愛いオスズとか、さつきからペコペコ謝っているシヨウウコ？っていう子とか。

「ほ、ほら！ソウジさんがポカーンとしているにや……。ソウジさん、本当に申し訳ございませんにやあ……。」

「す、すみませんでした……。」

「い、いやいや！気にしないで下さい！別に嫌じゃなかった……じゃなくて！特に怪我とかもしてませんし！腕も……。」

そう言っ腕を見る。

しつかり爪の傷が付き、そこから血が滲んでいた。

「あああ!!血が出てるにやあ!しよ、シヨウコオオオオ!!」

「わ、わーわー!!ご、ごめんなさあああああ!!!」

二人?二匹?はその後しばらくずっと謝りまくっていた。

* * * * *

「……………お、落ち着きましたか?」

あのままでは日が暮れるまで謝っていそうなので、無理矢理先程座っていた机のあるところに戻らせ、二人を座らせた。

腕の方は回復薬をかけて包帯を巻いておく。

そんな深い傷でもないし、すぐ治るだろう。

大体こんな傷、教官との講習じゃ珍しくも無かった。

手早く処置を終わらせると、ようやく二人が落ち着いたようだった。

「……ここ、こほん。ソウジさん、改めてシヨウコが失礼しましたにや……。重ねてお詫びしますにや。」

「う、ウチも、ごめんなさい。」

「……お二人とも。傷も大したことないですし、もう謝るのは終わりましたよ。こんなのですぐ治りますよ。」

うん、謝るのを見るのはもう申し訳ないので、終わりにしよう。

オスズが口を開く。

「ソウジさん、あなたは神のようなお方にや……。オトモはハンターさんを守るものなのにシヨウコつたら全く！」

「気にしないでくださいね。本当に無事です。」

「ソウジさんは敬語で私達に丁寧にしてお話を下さる……。ありがたいことですにやあ。」

そうなの？

アイルーって冷遇されているのだろうか。
不安になってしまおう。

「……そ、ソウジさん！」

「は、はい！」

急にシヨウコと呼ばれるアイルーに話しかけられる。

シヨウコはオスズと同じで、獣人……のはずなのだが、語尾は普通だな。
関西弁のようなイントネーションが特徴的だ。

「さっき言ったことだけど、もう一度言います！ウチをオトモにして下さい！」
「シヨウコ……何でお前はそんなに頑ななんだにや。」

そう、オスズの言う通り。

やたらそこにこだわってくる。

樹上から落ちてきてまで言いに来るんだから、何か大きな理由でもあるのか。

「大体、何でシヨウコは上にいたのにや？今日は受付をするように言っていたはずにや。」
「い、いや、お昼を食べたあとで、すこし眠くなりましてスヤスヤと……それで目を
覚ましたら、ソウジさんが見えたんです？こう、直感で『あ！あの人や！』と。それで
いても立ってもいられなくなって……ごめんなさい！」

直感……特に理由はなかった！

いや、何にそこまで惹かれたのかは分からんが。

シヨウコさんのオトモアイルー的な部分に引っかかるものがあつたのだろうか。

「お前は全く……！」

「ご、ごめんなさいー！」

まるで母親と娘のようだな。

しかし寝てサボるとは中々大物なのかもしれない。

「ソウジさん、ここは隠さずに正直に言うにや。こいつ、シヨウコは、オトモアイルー経
験がありますにや。」

「そうなんですか?」

「はいにや。運動神経は言う事なし。ハンターさんと一緒に大型モンスターのオトモ討伐も何回も達成しておりますにや。まあ素行に難がありますが、実力じゃウチでもかなり高いほうですよ。」

マジか。

本当ならすぐにも雇用契約したいところ。

だが、と続けてオスズが言う。

「……何故か、オトモをするハンターさんが、連続して不幸なことに巻き込まれるということがありましてにや……。ついたあだ名が『招き猫』。もちろん、悪い意味で、ですよ。」

「おお……それは……本当なんですか?」

シヨウコに向き直る。

「はい……受注したハズのクエストが破棄されていたり、ハンターさんがアイテムポ-

チを無くしたり……挙句の果てには、新人さんのクエストに付いていったら手に負えないモンスターに遭遇した、なんてこともありまして……。」

「……。クエストの破棄はギルドの手落ちだし、ポーチをなくすのはハンターの責任でしよう？ 予期せぬモンスターに出遭ってしまうなんてことも、まあ珍しいことではないのではないですか？」

「……9回。」

「えっ?」

「モンスターに出遭ってしまった回数、です。前はハンターさんが……死にかけました……。」

おおお……。

……かける言葉が見当たらない。

運が相当悪い、としか言いようがない。

ゲンを担ぐハンターは多い。

勝負のクエストでは、そうやって運も味方につけようとするのだ。

その時に自分のオトモが「招き猫」なんて呼ばれてたら……。

「おかげで前回の契約から約半年。シヨウコには全くお声がかからない状況が続いてお
りますにや。」

オスズが現状を教えてくれた。

半年は長いな……。

「幸い村の発展のおかげで、オトモ業以外の仕事も多くありますにや。器量もいいので
試しに受付なんぞをやらせてみました……。」

チラリとシヨウコを見るオスズ。

シヨウコは縮こまって気まずそうにしている。

「……はあ。……と、いうわけなんですにや。」

大体の事情が飲み込めた。

不幸は不幸として仕方がない、と割り切れればいいのだろうが、それを気にするハン
ターが多いのも事実。

「……ウチは、やっぱりオトモがいいんです。このまま静かにこの集落で過ごすなんて、考えられへん……。」

「……………」

「そんな時、ソウジさんが見えた時、この人や！って思ったんです。見る目には自信がある。」

「……………」

「ソウジさん、オスズさん、お願いします！これが最後やと思つて。お願いします！」

オスズさんが、俺を見る。

最終決定は、俺ということだろう。

もちろん答えは決まっている。

「いいですよ。俺で良ければ。」

「えっ!？」

「実力も経験も申し分ない。むしろ俺が教えてもらいたいぐらいです。ぜひ、お願いし

ます。」

一生懸命にお願いしていた。

不名誉なあだ名のせいで、望まぬレツテルのせいで苦しんでいた。

同情の心が無いわけじゃない。

でも、頑張りたいと言っているんだ。

応援したいと思うのは、そりや当たり前だろう。

「ほ、本当ですかにや？あちしが言うのもなんですが、運の無さは折り紙付きですにや
！」

「はい、本当です。二言はない。」

「……あ、ありがとうございませす！精一杯、オトモさせていただきます!!」

「ソウジさん……やはりあなたはいい人ですにや。……シヨウコ！頑張ってくるにや！
不幸なことなんて無いって、証明してくるにや！」

「は、はい!!」

そこから二人にお礼を言われ続けながら、俺は契約を結ぶ用紙にサインをした。

これからオトモとして、俺のサポートをしてもらう、アイルー猫、シヨウコ。

彼女は目をウルウルさせながら、また大きな声で、「よろしくおねがいます！」と言った。

不幸なことなんてない。

あつても跳ね返してやろう。

そして、シヨウコの自信と名譽の回復ができたらしい。

俺も精一杯やろうと、心に誓うのだった。

39オトモとの生活を始めましょう。

前略。

前世の万年平社員かと嘆いていた俺へ。

喜べ、派遣の就労契約を結んだぞ。

俺は雇用主。

猫の獣人と。

契約内容は「クエスト5回分、試用期間あり、衣食住はこちらで負担、福利厚生不明、1500z、試用期間内は料金をオトモ紹介側が負担」だ。

え？ 労基にかけられたら一発アウトの案件だつて？

そうなんだよ……。

安すぎだろ、アイルー猫。

一回300z、銅貨3枚つて……ガキの使いじゃないんだから。

一応紹介側に掛け合いましたよ？ 「安すぎません!？」つて。

そしたらオスズが、

「相場よりはかなり安いですよ。でもまあ衣食住も提供いただくとおつては、こんなもんですよなあ。」

というものだから……。

ちなみにその後、普通のオトモアイルーの契約代金も一日500zとのことだった。明らかに需要に対して値段が見合っていないと指摘しておいた。オスズは、

「まさか値切りじゃなくて値上げを要求されるとは思わなかったにやあ……。やはりソウジさんは神のようなお方にや……。」

と、わけのわからんことを言っていたのでスルーしておいた。

見合った対価をもらうのは至極当然である。それによって働く側も誇りを持てるというもの。

オトモの労働環境は厳しいようだ。

ともあれ、俺に初めてのオトモアイルーができた。

明日、早速クエストに同行してもらい、様子を見てみたい。

今日のところはあれだ。とりあえず……。

「シヨウコさん、とりあえず飯にしましょう。」

「は、はい……。」

「ん？食欲がないですか？」

「あ、あのー、ソウジさん？敬語はいりませんよ？拾われたこの身。気軽にシヨウコ、と呼んでください！」

あー。俺も少し迷っていたんだよな。

まあ本人がいいなら、気楽に呼ばせてもらうか。

「……シヨウコ、飯行こうか。……これでいい？」

「バッチリです！そっちのほうがしつくりきます。」

呼び方も決まったところで、宿に戻って夕飯を食べることにした。

* * * * *

「あ、おかえり、ソウジさん。……その子は、どうしたの？」

帰るなり出くわしたドールに、シヨウコを紹介しておこう。

「ただいま、ドール。えーつと、こちら、先程オトモ契約したシヨウコ。今日から世話になる。シヨウコ、こちらこの宿の看板娘のドール。」

「よろしくおねがいます！」

「わわっ、アイルーちゃんだ……よ、よろしく。」

ドールはおっかなびつくりといった様子で、挨拶をする。

アイルーが珍しいのかな？ 確か市中そこらにいる存在だと思っただが。

「今日から俺の部屋にいることになると思う。料金とかどうなるかな？」

「うーんと……ちよつと待ってて。おじいちゃんに聞いてくるね。しよ、シヨウコ……」

さん？お夕飯は食べるのかな？」

「え、えつと……。」

不安げに俺を見るシヨウコ。

夕飯が食べられるのか不安なのか？

「ああ、シヨウコも一緒に頼む。これからしばらく、そうしてほしい。」
「わかった。じゃ、ちよつとまっててね。」

ドールが若干緊張している気もする。

初めてオトモアイルーに会うのか？分かんが、まあいいや。

対照的に、シヨウコは目を輝かせて喜んでいた。

尻尾をピンと立ててご機嫌さんである。

「うれしいです……まさかご主人さまと一緒にご飯が食べられるなんて……。」

「え？衣食住は保証だろ？当然じゃないのか？」

「と、当然ちやいます！」

そうなの？

もちろんこうやって部屋や食事を提供するものが契約内容にあったと思うのだが。

「食事や寝るところは別……馬小屋に寝泊まりすることもあるんです。ウチ、少なくともご主人様と一緒に食事を摂るのは初めてです。」

「そうなのか!?何か……アイルーって大変なのな……。」

アイルーに対する扱いが、なんかやつぱり軽いよなあ。

この世界じゃ当たり前なのかもしれないが。

でも、雇用主として、最低限のことだと思う。

ここは我を通させてもらおう。

「衣食住は俺が保証する。契約にもあつただろ？試用期間とはいえ、俺が背中を預けることになるんだ。きちんと人間……人？らしい生活を送ろう。」

「は、はい……ご主人様！」

……スルーしていたが、その呼び方はなんとかならないのか。

ご主人様って呼ばれるの、めっちゃ恥ずかしい。

とかなんとか考えていたら、夕飯を持ったドールと、宿「ホエール」の主、ホエールさんがやってきた。

テーブルに夕飯を並べるドールを横目に、ホエールさんが話しかけてきた。

「ほほほつ、アイルー猫をお連れするとは……ソウジさんも、本格的にハンターになられたのお。」

「いやいや、今日契約したばかりですから。明日から本格的にクエストに行こうかと思っっています。」

「ああ、無理はされないようにの。ところで、アイルーの宿泊についてじゃが。」

「はい。」

「基本的に同じ部屋を使ってくれるのであれば、追加はもらっておらん。ただ、食事代は2名分きつちりいただくぞい？それでいいかの？」

アイルーって人間にカウントされないのか？

それとも同じ部屋を使うのであれば、だれでも問題ないのかな。

「ハンターさんがよく使う宿じやしの…ほれ、連れ込んだり急に一人になったり、入れ替わりが激しいからの。基本料金は部屋代、というワケじや。」

ホエールさんは「フオフオツ」と言いながら、理由を説明してくれた。

なるほど、ラ〇ホみたいな感じだな。

別に俺も中身はおっさんなわけだし、男のそういった事情に対して忌避感は全くない。

ふとドールを見ると、ホエールさんの説明に顔を赤くしてる。これは分かっているな。

シヨウコは……よくわかっていないのか、ポカーンとした顔をしている。

「じゃあとりあえず、夕飯代はきっちり払わせていただきます。」

「あいわかった。1000zじや。」

銀貨を一枚渡し、二人分の食事を頂くとしよう。

テーブルに目を落とす。

……何故、3人分お皿が並んでいるのか。

「ドール？何か注文より多く多くないか？」

「私もここで一緒に食べる。」

「えっ？それってどういうー」

「食べるから。」

「は、はい。」

有無を言わさぬ雰囲気、気圧されてしまった。

何だ？ドールの様子がいつもと違って……ちよつと……むくれている？

「ご主人様！ご主人様！ウチ、お腹空きました！」

「わかったわかった。じゃあ、いただきます。」

「いただきます！」

「いただきます。」

こうして、奇妙な組み合わせでの夕飯が始まった。

「うーん、若いのう。」

ホエールさんがこちらを見ながら、よく分からないことを言っている。

まあいいや、放っておこう。

今日は肉のシチューにサラダ、パン。

俺が大好きなメニューである。

シヨウコが夢中で食べているが、無理もない。

ドールのリノプロ肉のシチューは絶品なのだ。

ホロホロになった大きい目のリノプロ肉は、その旨味を存分にシチューに移してなお味
わい深い。最高に柔らかくなったその肉を豪快にいただく。

口の中が濃くなったらサラダで口直し。

今日のドリンクはレモンのようなさわやかな酸味がほのかに香る、のど越しさわやかな冷水。

濃い目の味付けに、さわやかな風味が合うのである。

パンでシチューをすくって一口。

ああああ……うめえっす……。

「うまい……うまいよ、ドール。」

「そ、そう。今日はいいリノプロ肉が入ったんだ。」

「ああ、みたいだな。最高に柔らかい。俺の大好物メニューだ……。」

「知って……そ、そうなんだ。よかつたら、おかわりもあるから。」

俺は胃に問いかける。

いいのか。ああ。お代わりもあるぞ。やったー!!

内臓に承認を受けた俺は、ドールにお皿を渡してお代わりをもらった。

「シヨウコはどうだ？俺の好物なんだ。」

「……。」

「シヨウコ……？えっ?!シヨウコ!?!」

驚いた。

泣いているではないか。

何か猫的にアウトなものが入っていたのか？もしや玉ねぎで貧血を起こすとか!?!

でもそれって犬じゃなかった!?

「す、すみません……あまりのおいしさに……ウチ、泣いてしもうた……。」

「わわっ。泣かないで、シヨウコさん。お代わり、いる?」

「ぐすつ……はい!ウチもお代わり、下さい!」

ドールも戸惑っていた。

なんだか見ているこつちが心配になってくる。

そりゃ泣くほどにうまいんだが……アイルルの食事情って一体……?」

さつきまでむくれていたように見えたドールも、いつもの笑顔になっていた。

3人の食事は、夢中で食べていたので会話はほとんどなかったが、とてもほんわかしたものになったのだった。

* * * * *

「あー……超満足……。」

うまいものって、人を幸せにするよなあ……。

この世界の食事がうまくて本当に良かった。というか、ドールがいてくれてよかった。

この子、本格的にレストランとか出店すれば、かなりいい線行くのではないか？

レストランかあ……イシザキ亭もとにかくおいしいのだが、あちらはレストランとしての俺の中の最高の味だ。

ドールは対照的に、家庭的な意味での最高の味。

ひとり暮らしをしばらくして久しぶりに帰ってきた実家で飲む、あの味噌汁のうまいことうまいこと。

「俺の原点はここだったんだー」的な感動。

それに近いものが、ドールの食事には感じられる。

「ドール、ありがとう。おかげで明日からまた、頑張れそうだ。」

「ううん。こんなにペロりと平らげてくれて、私もうれしいよ。」

そりや食べますよ。だっておいしいんだもん。

「俺の中では、家庭的な味の最高到達点にいるよ。これからもずっと、作ってほしい。」

「……えっ？」

「……あ、あー！ま、任せて。じゃあ、わ、私、片づけるから。」

「あ、ああ。」

照れるようなことを言っただろうか。ほっぺを赤らめたドールが水場に消えていく。

ほめ過ぎたのだろうか……？

俺としては、このリノプロシチューについてまだまだ語れるのだが。

「ご主人様……ウチ、大体わかりましたわ……。」

「おお!? 何だシヨウコ、藪から棒に。」

「女の勤が働きました……ご主人様……いけず。」

……いけずって何だろう。……まあいいや。

よく分からないままだったが、とりあえず今からの話をしよう。

「よし、シヨウコ。次はこっちに来てくれ。」

「はい！何をするんでしょうか？」

「特訓だ！」

「と、特訓？」

頭の上に「？」が浮かんだままのシヨウコを連れて、俺は宿の庭に向かうのだった。

40 一人の訓練方法を考えましょう。

シヨウコとドールと俺、3人での夕飯を終えた俺は、荷物を部屋に置いて、宿の庭にやってきました。

ちなみに、シヨウコの荷物と言える荷物は大きなりユック一つだけだ。

あとは身につけているポーチとかぐらい。

大切なものなどは集落に置いて、鍵をかけてきたらしい。

ドールが部屋にベッドを用意してくれるとのことなので、その間、いつもの夜の訓練の時間に充てようと考えた。

シヨウコは頑なにそのへんで寝るからベッドはいらないと言うのだが、俺とドールが何を言ってるんだとゴリ押し。

快適な生活なくして、満足な狩猟無し。

うん、名言ほいけど真実である。

シヨウコはいたく感激していたが、こちらとしてはますますアイルーへの扱いについて疑念が深まるばかりである。

気を取り直して。

庭で、俺はシヨウコと向き合った。

「基本的に、夕飯を摂ったら訓練を行っている。まあ、時間によつて風呂やご飯が前後するが、夕飯、訓練、風呂がいつもの流れだ。」

「はい！」

「……これから俺は訓練を行うが……シヨウコ、その格好は何？」

シヨウコは部屋でリュックを開け、なにかガサゴソしていたのだが……。

「これは、オトモ装備、です。ご主人様。」

「オトモ装備？」

「はい。オトモはハンターさんと同じように武具を装備して戦います。ご主人さまが特訓をすると聞いて、装備してきました！」

小さめのヘルムに胸当てやすね当てを素早く装着したシヨウコは、その傷だらけの装備を見せながら胸を張った。

お世辞にもきれいとは言えないが、よく手入れされていることがわかる。そこかしこにある傷は、モンスターとの戦いの数々を物語っていた。

「なるほど、オトモも装備をするんだな。知らなかった。」

「はい、ご主人さまは装備はないのですか？」

うん、やはりその話になるよな。

俺の格好は、普段着にポーチ一つ。とても装備とは言えない格好だ。

シヨウコは信頼が置きそうだし、ギフトの一端を見せておくか。

これから背中を預ける仲間なんだ。

「シヨウコ、これから凄いことをするが、声を出さないで見ていてくれ。」

「は、はい！わかりました！」

返事を聞くとすぐ、俺はポーチを触って情報画面を起動する。

〈装備〉を選択。慣れ親しんだ「ミヨシ村装備」の一式を次々に選んでいく。

ポチツとな。

「えっ?.....えっ!?!.....えええ!?!」

シヨウコが驚きの声を上げる。

何とか小さい声で反応しているが、そりや驚くよな。

一瞬で目の前の人の装備が装着されていけわけだから。

「も、ものすごい早業や!うち、見えへんかった.....。」

「さらに.....」

続いて〈武器装備〉から双剣「ハリケーン」を選択。

「.....や、やっぱり見えへん.....ご主人様!こんなすごい技をお持ちやったんですか!?!」
「ああ、詳しくはまた説明するが、これが俺の特技みたいなものだ。」

そう言いながら情報画面を見てみる。

.....ん?項目が増えている.....。

〈オトモ装備〉〈オトモ武器装備〉の二つ。

これはつまり、シヨウコの装備を変えられるということか？

何の気無しに、シヨウコが身につけているであろう「どんぐりネコヘルム」「どんぐりネコメイル」を選択。

すると。

「えっ……にや、にやあ!？」

「うわっ!!す、すまん!!」

しまった!装備を解除してしまった!

慌てて再び装備を選択し、戻した。

インナー姿に戻ったシヨウコが、また装備をつけた状態に戻る。

「ご、ご主人様は、人の装備も脱がせられるんや……ビックリしました……。」

「す、すまん、シヨウコ。そんなつもりはなかったんだが。」

「ぬ、脱がすなら脱がすって言うて下さい!ウチにも、心の準備というものがあります
!」

「いや、本当にすまん。」

驚いた……まさか情報画面からオトモ装備を変えられるとは思わなんだ。
シヨウコがジトツと俺を見つめる。

「まさか……ウチを裸一貫にするなんてことも……。」

「で、できないぞ!? そんな力はない!」

「ほ、ホンマですか!? ま、まあ……主人さまならまあ……つてちやいます! ホンマに止めて
くださいね!」

「しないし、できないって! 本当に!」

一度罪を犯した者の言い訳など、中々通るわけもなく。

その後、シヨウコの説得に少し時間がかかってしまった。

* * * * *

「えー……では気を取り直して。」

「はい……。」

何だか微妙な空気だが、強引に進めさせてもらおう。

「俺がここで行っているのは、筋トレと素振り。それだけだ。朝のランニングも始めるつもりだが、そこは付いてこなくてもいいぞ。」

「ウチもやります！」

「そ、そうか？じゃあ、頑張ってみようか。」

ランニングと言っても、教官仕込みのフル装備村周回マラソンなのだが。

一周2kmぐらいを10周、大体一時間で走り終える。

……あれ？よく考えたらハーフマラソンをプロ並みの速さで走るってことだよな……。

……い、いやー。俺も速くなったもんだ。うんうん。

深くは考えまい……こつちの世界の人間は、俺も含め化け物級の体力があるな……。

だって俺がすでにトップアスリートレベルなのだ。教官とかその辺は化け物と言わずして何と呼ぶ。

シヨウコには、無理をさせないようにしよう……。

「それじゃ素振りだ。俺の武器は双剣、手数が命の身軽な武器。だから、この素振りの練習は欠かせないんだ。」

「ご主人様は双剣……了解しました！」

「それから少し試してみたいこともあるから、時間がかかるかもしれない。その時は先に風呂に行くなり部屋に戻るなりしていいからな。」

「はい！」

シヨウコに言い聞かせてから、俺は向きを変え、剣を構える。

まずは慣らし。二段斬りからの返し、車輪斬りを繰り返す。

「フツ……ハツ……ハツ！フツ……ハツ……ハツ！」

温まってきたところで、鬼神化を用いて、乱舞を混ぜた連続技を行う。

この辺りから集中が必要になってくる。

教官から教わったように、常に周囲に気を配ることも忘れてはならない。

かと言って剣が疎かになってもいけない。

この両立が難しく、特に神経をすり減らす。

百を越えたあたりで、かなりの汗が吹き出してきた。

はじめの頃は5回もすればゼイゼイ息も上がっていた。

こういつた反復練習は嫌いじゃない。修正を繰り返しながら、己で己極める時間。

「ふうー。……よし。」

一度、水筒を手にして水分補給をする。

冷たい水が喉に心地よい。

「はああ……すごお……。」

ふとシヨウコを見ると、訓練の始めと場所も変えずにこちらを見ていた。

気にせず次へ。

教官の教えが無い今、正直練習の抛り所が無い。

そこで少し考えたのが、例の〈操作方法〉使用時の自分を真似するという練習法だ。

教官やシガイアさんに見てもらった時、俺は自分だけではまだ至れない剣の境地に達していた。と思う。

ただ、〈操作方法〉の一番の弱点は、プログラムされた動きしかできないという点だ。仮に強敵が出てきて立ち向かうとなったら、これはかなりまずい。

相手モンスターが攻撃のモーションに入っても、避けないまま技を繰り出せばどうなるか。

間違いなく大きなダメージを食らうだろう。

では自在にこのレベルの剣を繰り出せるようになれば？

立ち回りを考えながら相手の動きに合わせて技を出せば？

その為に、俺は俺を目指すことにした。

……言葉にすると何だかすんごいアホらしいが。

一つ一つの技を確認してみよう。

まずは二段斬り。すべての基本。

〈操作方法〉から選択。途端、自分で自分の体が動かさなくなるような感覚。

この状態を、憑依状態、と言う事にしよう。

すぐさま構えからとてつもない速度で繰り出される双剣。

ビュオン!!

これだ、この速さだ。

「えっ!?!」

シヨウコが声を上げる。

「今のは……!?!」

「ああ、うーんと……後で説明するよ。」

ちよいとややこしい部分があるので、シヨウコには後で腹を割って話そう。

「今の動きを忘れないうちに……。」

同じ様に構える。

真似しろ……思い出せ……。

何せ憑依状態は感覚があまり無いのだ。これは難しいぞ……。

姿勢はかなり低かった。力も……ほとんど入ってなかったよな……。
構えて、今度は自分の感覚で二段斬りを行う。

ヒュン！

うん、速くはなつたかな？でも力が無いような。

もう一度〈操作方法〉を選択。

ビュオン！

真似しながらの二段斬り。

ヒュオン！

もういつちよ。

ビュオン！

.....。

.....。

同じような練習を繰り返す。

百回は行ったと思う。

コツを掴みかけているようなそうでもないような。

瞬間の火力が足りないと思う。

なぜできるのだ？ 憑依状態の自分よ。

「ご、ご主人様?!」

「おっ。ショウコ、どうした？」

かなりの時間が経ったはずだが、シヨウコは律儀にはじめの場所から動いていない様子。

「ご主人様は本当に新人ですか!?ありえない程の剣速でした!」

「ああ、そうなんだよね。自分でもわからないんだ。」

「えっ!?!」

「うーんと、簡単に言うと……」

俺はとりあえず、ギフトの武器操作のところについてかいつまんで説明した。

女神様や異世界人だと言うことについてはとりあえず伏せておく。

そのへんは少しずついい。シヨウコがキャパオーバーを起こす気がする。

「はあああ……ご主人様はやっぱりすごいですね!」

「うーん、ところがいいことばかりでもなくてな。」

「え、どうしてです?その力があれば、強いモンスターとも戦えるってことに……。」

「……。気づいたか?」

「なるほど……一度始めたら止まらへん、つまり——」

「ああ、端的に言つて、とんでもないことだ。」

大型モンスターが、リーチの短い俺の双剣を避けてしまつたら？

一撃の強さに欠ける双剣を止めてしまつたら？

手痛い反撃を食らうのは間違いない。

「とはいえ、この力を持って余すのももつたないよな。」

「じゃ、じゃあさつききの……あまり言いたくはないんですが、すごいのと普通の剣撃の繰り返しはつまり……。」

俺が憑依状態と通常の状態を繰り返した訓練のことだろう。

「ああ、ギフトの力を真似して、自分の力にできないか、試してみたんだ。まあ、まだまだ練習が必要だな」

「そうやったんですね……。でも、通常の方？でも、その辺の大型モンスターとかやったら、苦にならんとします！」

「そうか？」

「はい！私、これでも結構な数のハンターさんを見てきました。はつきり言えます！」
「そうか、そう言ってもらえると嬉しいな。ありがとう、シヨウゴ。」
「ええ……!!いやいやいやいや！ウチ、そんな褒められることなんて!!」

手をブンブン振ってくるシヨウゴ。

嬉しいのか、白い尻尾がピンと立っている。

「よし、続けるとしよう。」

「がんばって下さい！」

「今のを1セットとして、今日は軽めに5セットぐらいにしとくか。」

「5セット……ですか!？」

「ああ、軽くだからそんなもんだ。無理はいけないしな。その後は筋トレをして、クールダウンしてから風呂に行こう。」

「無理……してませんか?。」

「ん?いや、これぐらいは序の口だぞ?。」

「ご主人様の感覚、ちよつとおかしい気がしてきました……。」

おかしいのか？

うーん、教官のせいとか、こんなもの何とかかなりそうな気もする。

そのまま予定通り5セット、憑依状態と通常の繰り返しを行い、筋トレを行った。

これを毎日続けていく。教官がいない今、俺ができる最善の訓練が、おそらくこれだから。

絶対、自分のものにしてみせるぞ。

41クエストを受注しましょう。②

オトモアイルーのシヨウコとともに訓練を行ってから、二人で銭湯に行った。すっかり忘れていたが、ここは混浴。と言っても湯浴み着を着て、だが。

シヨウコは全く物怖じせずに、女性用の脱衣所に入っけいき、中で俺と合流。サウナで汗を流した。

俺の背中を洗うと何度も何度も言ってくるので、お願いすることになった。

「ご主人様は、座っていて下さいね！ウチ、背中洗いは自信があるんです！」

何に自信を持っているんだ……と思ったが、確かに上手かった。

というより誰かに洗ってもらうなど、おそらく子どもの頃両親にされて以来だから、上手いか下手かなどよくわからない。

気持ちよかったと伝えると、とても嬉しそうにクネクネしていた。

何だその反応は。

そして……まあ何というか、目のやり場に困る！

いくら獣人とはいえ、見た目はあまり人間と変わらないのだ。

銭湯には何度も来ているし、女性のお客もたくさんいたが、今回は距離が近い。

湯浴み着とはいえ、薄生地一枚はちよつと防御力に欠ける。

シヨウコには、ソーシャルディスタンスを守っていただきたいものだ。

俺はそつちの人ではないから、大丈夫だけどな！

うん！

「ご主人様、お顔赤ないですか？」

「サウナが暑くてなー。」

ごまかせる要素バンザイ！

そんなこんなで。

何だかとても疲れる銭湯を後にした俺たちは、夜も更けた町並みを歩き、宿に帰ってきた。

「あ、おかえり。」

「ドール、まだ起きてたのか。」

「うん、帳簿の整理をしてて。……銭湯に行ってたんだ。」

「ああ。」

「……シヨウコちゃんと一緒にね……。ふーん。」

「あ、ああ。そうだけど？」

やましいことはなにもない。

なにもないっつらない。

「シヨウコちゃん？」

「は、はい!？」

シヨウコが跳ね上がる。

何だドール、その無駄なプレッシャーは。

「銭湯、気持ちよかった？」

「はい！あそこはオトモもオツケーのいい店です。ご主人様の背中も流させていただき

ました!」

「……………ふ……………ん。」

ど、ドールさん?

何だか怒ってらっしやる!?

「ち、ちかうぞドール!?!何もやましいことなんて——」

「またまたご主人様!気持ちよかったって言ってくれたじゃないですか。ウチ嬉しかったわあ。」

そ、それは言葉のあやとか何というか——。

ビキッ

……………空気が凍った!?

「……………ソウジさん。」

「は、はい!!」

いかん。

おそらくドールは、怒っている。

ロリオン事案になりかけのこの所業に対して。

確かに背中を洗ってもらった事実は事実!

……でもやましいことは無いんですよ!

とか何とか思っていたら、ドールがとんでもない事を言ってきた。

「……私も。」

「……へ?」

「明日は、私も行くから。」

「…………ぱーどうん?」

ホワッツ?何を言ってるんだいドールさん?

「……そ、それじゃ!…………おやすみ。」

ボタン。

受付裏、自分の部屋に帰ってしまったドール。

……………何で？

あれか!?

本当にやましいことなど無いか、確認に来るのか!?

しまった、素で通そうとしたのに、うろたえたのがまずかったな…………。

明日は気合を入れて銭湯に行く必要があるな…………。

「いやー、焚きつけるのも苦勞しますねえ。ウチってば果報者です。」

「お前は何を言ってるんだ。」

チクシヨウ、おっさんハートは繊細なのだ。

ちよつとした刺激でブロークンするのを、彼女たちには分かっていたいだきたい。

とはいえ、今日は疲れた。

ギルドでカミングアウト（笑）を行い、シヨウコと契約。そしてドールの乱。部屋に帰った俺は、すぐさま泥のように眠るのであった。

* * * * *

明け方。

まだ夜も明け切らぬ時間、俺とシヨウコは村の入口に来ていた。

「これから村周回ランニングを行う。」

「はいー！」

気合が入っているシヨウコ。

ちなみに今朝はシヨウコに起こされた。

「ご主人様を起こすのは、オトモの特権なんです！」と、朝食を食べながら鼻高々に言う
と、それを聞いていたドールが「……明日は私が起こすから。」と宣言。

ドールの乱、第二幕である。

有無を言わさぬ物言いに、俺たち二人は頷くしかなかった。

……シヨウコ、お前は何がしたいんだ。

しかも「やってやったぜ」的なその態度。いや、何もしてないから！

むしろ引つ掻き回してるから！

ドールもよくわからん。昨日からちよいちよい怒ってるし！

これはあれだな。トラブルメーカーシヨウコにお灸をすえる必要がある。

よし。

ランニングは教官との練習のように、ハードモードでいこう。

「大体10周だ。一時間で終われる様、がんばろう。」

「はい……………つて10周う!?!しかも一時間ですか!?!」

「どうした? だって今日はクエストを受けないと、金も、稼ぎたいし、シヨウコの動きも確認したいし。」

「いやいや! いくら時間がないからって、そんなに走れますか!?! いや、ウチはアイルーやし体力には自信がありますけど……………」

「じゃあ問題なし。出発!」

「にゃあああ!?!」

明け方特有の澄んだ空気を吸い込みながら、ランニングを始める。

「ちよつ、速いですつて！ご主人様っ!!」

いやーいい空気だ。気持ちも体も軽やかになる。

「ちよつ……ご主人様あ！こんなアホみたいなペース、もちませんつて!!」

よーし、気持ちもいいからスピードアップしよう。シヨウコも体力には自信があるよ
うだし！

「ペースが更にい!?!ちよつ！ご主人さまああああ!?!」

.....。

.....。

……。

「どうしたシヨウコー。まだ3周半だぞー。」

「ご主人さ、まあ……ウチが悪かったです……！もう少し、ペースを……。」

「喋れる体力はあるな！よし！続けるぞ！」

「にや、にやああああ……。」

……。

……。

……。

「……まだ半分なんだが。」

村の入り口を通過、今から6周目。

……というところでショウゴがりタイヤしてしまった。

「きゆう……。」

目がクルクル回っている。お星様とか周りに飛ばせれば、完成だな。

何の完成か知らないが。

………教官ならここで水をぶっかけて起こすんだろうな……よく生きてるな俺……。

まあ初日だし、この後の予定もある。

心配してやってきた門番のおじさんに言伝をお願いして、俺は残りの5周をさっさと終わらせることにした。

* * * * *

「ご主人様は化け物です……。」

宿で朝ごはんを食べて少しは体力が回復したのか、シヨウコが失礼なことをのたまう。

何を言うか、真の化け物はマシヨルク教官やセツヒトさんなどを言うんだぞ。

ちなみに、宿を出る際、今日もドールの頭を撫でている。

少しぞんざいだったか、「今日は調子悪い？」と言われてしまった。

心を込めろということか。

うーん、難しい。猫とは撫で方が違う。

猫なら得意なんだけどなあ……。

そんなこんなで。

そう、俺たちはギルドにやってきた。

これからクエストを受けるのだ。

ハンターとして認められてからは初めてのクエスト。

何があってもいいように準備はしてきたつもりだ。

クエストボードに目を向ける。

「ご主人様、ご主人様、あそこ、あそこ、あそこ、このクエストはいかがですか？」

「ん？」

「あのボードの左上にある……。」

俺は、依頼書を手に取る。

「バギイ20頭の討伐……よし、やってみるか。」

そのまま依頼書は戻さず、ギルドのカウンターに向かおうとする。
と、途中で肩を叩かれた。

「おはようございます、ソウジさん。」

「あ、ハイビスさん。おはようございます。」

昨日ぶりだ。

全てを打ち明けた昨日のことを思い出す。

「あ、そうか。クエストを受けるときはハイビスさんに依頼を持っていくんですね。」

「そうですよ、ソウジさん。気をつけてくださいね、私が専属って、ギルドマスターの命令なんですから。」

「いや、失礼しました。……これなんです。」

俺がハイビスさんに依頼書を見せると、ハイビスさんは空いているカウンターに来るよう誘導してくれた。

「バギイ20頭の討伐……間違いないですか？」

「はい。まずは小手調べ、と思ひまして。」

「ソウジさんの実力なら、全く問題はないかと思ひます。依頼されたバギイの数が多すぎるので初心者向けとは言いませんが、大丈夫でしょう。バギイ自体は、好戦的ですがそこまで強いモンスターではありません。」

「数が多いと危険ですか？」

「はい、特に眠らせる攻撃が厄介です。数を集めて襲撃されないようにしてくださいね。」

「眠らせる……わかりました！」

「はい……とところで、そちらのアイルーさんは？」

しまった、紹介するのを忘れていた。
シヨウコに俺の横に来させる。

「この子は、昨日契約したオトモアイルーのシヨウコです。まだ試用期間なんですが、討伐クエストは何度もこなしているらしく、頼りにしています。シヨウコ、ギルド受付嬢のハイビスさんだ。とてもお世話になっている。」

「よ、よろしくおねがいます!」

「あらあら、元気なアイルーですね。しかし、これはアリですね。」

「……?」

アリというのは?

「ああ、今回のクエストに向いているかもしれないですね、という意味です。眠らせてくる攻撃は、眠気を誘われたタイミングで強い衝撃を受けたり、元氣ドリンクを飲むと回復します。オトモ……シヨウコさんがいるなら、殴ってもらえばいいんです。」

「な、殴る?」

「はい、こう、頭の辺りをバチコーンと。」
「……………」

痛そうだなあ…………。

「シヨウコ、いざというときは頼む…………。」

「う、ウチそんなご主人様を殴るなんて、そんな…………!!」

シュツシュツ！シュツ！

シャドーボクシングをしているシヨウコ。

…………言動の不一致が見られるが、頼りにさせてもらおう。

「クエストは、これからすぐに行きますか？」

「はい、そのつもりですが…………。」

チヨイチヨイ。

ハイビスさんが俺を手招きする。

耳を貸せということか。

耳を寄せる。ハイビスさんも俺に寄る。

……ち、近いな。ドギマギしてしまう。

だってすごい美人なんだよハイビスさん。

「ギルマスからの司令で……。」

「はい……。」

小声が耳に響く！息が当たって思わずゾクゾクしてしまう！

ええい！心頭滅却！集中集中！

「……小型モンスターの多頭討伐の際、ギフトを存分に活用してほしい、とのことですよ。」

「……存分に活用？それはつまりマップの機能を……。」

「はい、クエストクリアのタイムにどれだけ影響が出るか知りたい、と。」

「なるほど。」

「無理に、とは申しません。ソウジさんが自力で行いたいなら、その意思を尊重するよう

に、とも言われておりますので。」

ハイビスさんが俺から離れる。

あー、ソワソワゾワゾワした。

「ふーん……。」

なんだ、シヨウコ……ニヤニヤしながらこつちを見るな。

だが、シガイアさんが言いたいことはわかった。

俺のギフトの影響力をはかりたいのだ。確かにモンスターが、エリアのどの位置にいるか正確にわかるなんて、普通はありえない。

観測班と連絡が取れれば、大体の位置は分かるらしいが、それは大型モンスターに限った話。

脅威ではない小型モンスターの位置までわざわざ把握するなんてこと、忙しい観測班がするわけない。

「分かりました、なるべく早めに、討伐をしてみます。」

「はい。ありがとうございます。そのように伝えておきますね。狩猟場所の草原には、ガーグア車を使ってください。」

「助かります、使わせてもらいますね。」

「はい。ではご武運を。」

丁寧な礼をするハイビスさん。

……顔をあげると、まだ何か言いたげな顔をしている。

「……ハイビスさん？まだ何か？」

「えっ!?いや、えーっと……ちよ、ちよつともう一つだけお願いがありました……。」

何だろう、シガイアさんの依頼がまだあるのか？

「あ、いえいえ。私の個人的なお願いです……その、シウウコさんの頭を……撫でもよろしいでしょうか？」

「……………」

「ち、違うんですよ!?その、やましい意味なんて何もございません。ただ、その、撫でた

いだけです！」

「……シヨウコ？」

シヨウコを見る。

尻尾をゆらゆらして少し警戒しているのがわかる。

「………撫でさせてもらっても、いい？」

「う、ウチは構いませんけど……。」

そう言って、カウンター越しに触れるよう、ハイビスさんに近づくシヨウコ。ハイビスさんはおずおずと、右手を優しく頭に載せた。

ナデナデ。

「………っ。」

「………はああ………。」

「………んっ！」

「わっ！すみませんシヨウコさん！耳に当たりましたか？」

「んん、だいじょーぶ………続けていいです………。」

「は、はい！では失礼して………。」

ナデナデ。

何だこの時間。

美女が、可愛い獣人の頭を撫でている。

カウンターに乗り出すんじゃないかと思うほどの勢いで、しかし優しく撫で擦るハイビスさん。

シヨウコも満更じゃないのか、撫でられ続けている。

そしてそれを棒立ちで見つめる俺。

そのまま5分ほど、俺はそこに立ち尽くしかなかつたのだった。

4 2 待遇改善を模索しましょう。

「も、もうええですか？」

「は、はい！ありがとうございます。」

主人の俺が見つめる中、美女が俺と契約中のアイルーを撫でまくる。

そんな意味がよくわからないプチ寝取られ状況に俺が困惑する中、二人の撫で撫でられが終わった。

ハイビスさんがキラキラの笑顔。

対してショウコはなんだかお疲れ気味。

「そ、それではハイビスさん。俺たち、行くので。」

「はい！ご武運を！」

明らかに元気になっているハイビスさんを横目で見ながら、俺たちはガーグア車へ向かった。

「シヨウコ、大丈夫か？」

「は、はい。お待たせしました、ご主人様……。」

憔悴しているぞ!?

「車の中でよく休んでおけよ？」

「はい!ご主人様はやっぱり優しいわあ……。」

いやそれぐらい普通だよ。

ともあれ、草原まで出発。

ガーグア車で目的地まで1時間以上かかるといふ。

俺は昨日から疑問だったことを、思い切ってシヨウコに聞いてみることにした。

「なあ、シヨウコ。村での、いやこの世界でのアイルー猫の扱いについて教えてくれないか？」

「へ?扱い、ですか?どうしてですか?」

昨日から気になっていたのだ。

明らかに安すぎる給金。昨日のシヨウコの感動具合からもわかるように、衣食住について、待遇が悪いこともわかっている。

この世界に、どこか根強い差別意識のようなものがあれば、何とかしてあげたい。

そう思うほどには、アイルーに対する意識が低いと思うし、俺自身アイルーへの愛着が湧いてしまっている。

なので、そういつたことを、シヨウコに打ち明けてみた。

「なあ、正直に教えてくれ。この世界で、シヨウコ達アイルーが差別を受けているというなら、何とかしたいんだ。」

「さ、差別つてご主人様、大げさ——」

「大げさでも何でもなし。この世界で一生懸命生きるのに、人もアイルーもないだろう？ たしかに身体的、心情的な違いはあるのかもしれないが、その辺を認め合ってこそ、楽しい世界になるんじゃないか。」

共生社会。

前世でこの考えを聞く度に、そうだよなあ、位にしか思っていなかった。

だが、今この世界に來たからこそわかる。

モンスターの脅威に常に晒され続けているこの世界で、種族とかそんなことを気にしてはいられない。

「どうなんだ？」

「ん、ん……。」

シヨウコが考え込んでいる。

無理もない、辛い思い出もあるのかも知れない。

すまんシヨウコ。嫌なことを思い出させるのなら、それは俺の責任だ……。

だが、何とかしたいと思うのも事実。教えてほしい。

「例えば、道を歩いていると、特にさっきのハイビスさんみたいに、女の人にキヤーキヤー言われて、『撫でてもいい？』みたいなことを言われることがあります。でもそれは何というか、気持ちええなー、としか。……あ、お風呂に入るのを拒否されたことがあります！何でも『可愛らしいアイルーが一緒に銭湯なんて！もつと自分を大切にしな

「さい！」とか言われたんです。でもウチ、銭湯好きで。だからいつもアイルー用の銭湯に行くんです。」

「そうか……ん？」

「これは差別なのか？」

「そのアイルー用の銭湯というのが、また面白うてですね。銭湯の周りを、人間さんのけーびいん？さんがめっちゃガードしてはるんです。何でこんなことするのか聞いてみたら『俺たちに任せて！君たちには指一本触れさせないからね！』とかよう分からん事ばかり言わはって。いやあ、大変ちゃう？とか友達と言い合いながら、いつも感謝して銭湯に入るんです。」

マシンガントークが止まらないシヨウコ。

「とうかなんだ、これはもしかして差別とかじゃなくて……？」

「あーでもでも、ハンターさんと寝泊まりするときに馬小屋に行かされた時！あれはちよつとウチ嫌でしたねえ。」

おつ、そうだった。シヨウコは馬小屋に寝かされて嫌な思いをした経験があるのだ。
これは明らかに悪意を感じる。

「その時組んだハンターさんが『すまない…：パーティーメンバーに信用ならない奴がいるんだ……。』とか眉をひそめてヒソヒソ声で話してきてですね？その人が信用ならな
いとかが、よう意味が分からなかったんですけど…：そのまま馬小屋の二階まで案内され
まして。その2階は内装をきれいに施されて、清潔なベッドが運び込まれてまして、と
ても快適やったんですが…：ウチ、そんなよりハンターさん達と仲ようおしやべりし
て眠りたかったんです。ひどい扱いやー思たんですけど…：まあベッドも気持ちよ
かったし、お馬さんたちも静かにしてくれはったし。だから、いまご主人様と一緒に眠
れるつてすごく嬉しいんです！ありがとうございます、ご主人様！」

悪意というか善意しか感じねえ!!

…：あ！お給金は!?!お給金!!安いぞ!?

「…：ちなみに、給料は安いとは思わないか!？」

「うーん、確かにお金はあつたら助かりますねえ。まあでも、集落維持のための村からの募金がかなりあるんです。そもそも国の税金からうちの集落維持賄われています。ありがたいことですよホンマ。何でも、大昔に人間さんが、ごつつ強いモンスター撃退するのに協力を惜しまなかったアイルー達がいたとかで、そこから人間さんとの関係は始まっているって聞いたことがあります。」

伝承レベルでアイルーは敬われているってことか!?

あれ!?もはや差別対象どころか敬愛対象と化してない!?国レベルで!?

「せやから、生活には困ってないんですよ。……いつだかオスズさん宛に白金貨100枚が寄付されたときは、流石に集落中大慌てになりましたわ!あのお金、怖くて手を付けられんと、そのままなんちやうかなあ……?」

……話がよく分からなくなってきた。

だが、今までのシヨウウコの話を総合すると……。

「差別とかそんなの、無い感じ?」

「ありませんって、そんなの！むしろ人間さんには感謝するばかりです。可愛がつてくれるし、優しくしてくれはります。大切にされ過ぎて最近はいルー達に逆に困つてしまふというか……ウチらから、自分たちで生活できるんですよ？ま、まあウチみたいにサボつてまふ輩もいるので、その辺は気をつけなアカン！って思いますけど。甘やかされ過ぎないように、自分たちががんばろうっていうのが、今のところ集落の目標ですな！」

……。

盛大な勘違いをしていたようで。

恥ずかしいですよ俺。

差別意識をなくしたい！と、崇高な目標をもつてやる気を出して。

俺が何とかしたい！と奮起しようとしたら。

ふたを開けたら、お互い大事に思いながら生活しているという……。

ちなみに、ガーグア車の御者さんに話を伺うと、昔からいルーというのは人間と共生していくもの、敬愛の対象であるということだった。

なので国が公的な基金を設立し、いルー保護を行っているそうだ。

最近ではもはやアイドルのようになってきているが、ぞんざいに扱ったり性愛の対象にしたりするのはもっての外。

この鉄の掟を破ろうものなら、公的にアイルーとの接触禁止令が出るとか。それは、アイルーをこよなく愛する人間にとつて、死に値すること。

兄ちゃんも気をつけな、と大変失礼なアドバイスを頂いた。

まあ基本的には普通に接することがいいのだと教えてくれた。
なるほど、可愛い子どもに女性が寄っていったって、男性が離れて見守る感じか。

……盛大な勘違いをしておりました、申し訳ありません。

しかし、何がまずいって、昨日銭湯に行ったとき、そういった目線を全く気にしていなかったショウコだ。

アイルー用の銭湯の周りに警備が付くってことは、まあ、つまり、そういった不屈きな輩が少なからずいるってことだ。

守っていかないといけないな、と思った。

……俺は大丈夫なの!!口〇コンちゃうわ!

……一体誰に訴えたかったのかよくわからん俺の心の叫びは、誰に聞かれるでもな

く、
虚空に消えていくのだった。

43 狩猟を行之ましょう。

草原に着いた。

「じゃあな、兄ちゃん、アイルーの嬢ちゃん。頑張れよ。」と言い残し、去る御者のおじさん。

……前回もあの人じゃなかったっけ？

うーん、ダンディ。

「よし、そしたらシヨウコ。これから狩猟を始めるが、一つだけ、俺が大事にしていることを伝える。」

「はい！何ですか!?!」

「絶対に、無理はしない。生きて帰ることを最優先にすることだ。『生きて帰ることが、最もハンターに重要な資質だ』。俺の尊敬する教官の言葉だけだな。そこは必ず、大事にしてくれ。」

「……はいっ！ウチ、その考え好きです。絶対に守ります。」

「うん、まあ、無理はしないってことだな。よろしく頼む。」

シヨウコに大事なことを伝えた上で今回のクエストについて、進め方の打ち合わせを行う。

「じゃあ今回のクエストの話だ。と言っても、やることは単純だ。俺が見つけて、二人で戦う。以上だ。」

「索敵はウチがしなくてええんですか？」

「ああ、これもギフトの力なんだが……俺はモンスターのいる場所が分かる。」

「……ええ!？」

「と言っても、ハンターになってまだ新米だ。討伐自体にはまだ不安も残る。シヨウコ、おかしなところがあつたら遠慮なく教えてくれ。直していききたい。」

「……そんな力があつたら、ご主人様強いし、バギイぐらい余裕やと思うんですけど……。」

「尚更だな。存分に力を発揮しているか、油断していないか、クエストの進行に間違いはないか。そういうったところは経験がものをいう。頼りにしているぞ、シヨウコ。ここまではシヨウコが先輩だ。」

「は、はいっ！ウチ頑張ります！」

「よし、じゃあ出発だ。南東の岩山の向こう、4匹いるぞ。」
「え?!早っ?!」

走りながら武器の最終確認を行う。シヨウコも「動きながらその準備ができるのはええですね!」とほめてくれている。

教官に何度も言われてきたからな。常に動きながら何かを行うこと。死ぬ確率がぐんと減る、と。

最初の群れを発見。

小型モンスターらしく、大きさはシヨウコと同じくらい。小学生高学年の子どもぐらいか?」

ギヤツギヤツと仲間と鳴きながら、周囲の警戒をしている。

「うわあ、ホンマにおった。ご主人様すごい……。」

「シヨウコ、まずは俺だけで行っていいか?」

「はい、ご主人様なら大丈夫かと思えます。気を付けてくださいね!」

「ああ、眠らされたら、その時は頼む。」

「はー」

慎重に身を低くしながら近づく。

草原は、そのまま草が生い茂るだっ広い平野だ。

そこかしこに大きい岩山が見えるが、バギイたちがいるのは生い茂った草むらの中。隠れるには恰好の条件が揃っている。

バギイの見た目は、ちっこい恐竜のような感じ。

薄紫の鱗が鈍く光り、遠目からでも視認しやすいが、曇天ならわかりにくいかも知れない。

大きそうな個体は居ない。警戒の目を向けているのが、この4体のリーダーか……？
鋭い爪は見えるのだが、催眠効果のあるという体液は、当たり前だがわからない。

口から吐き出すという体液……凶暴で頭もいらしいから、囲まれたら良くないと思う。

速攻で片付ける必要があるな。少し緊張する。

息を潜め近づき、警戒の目が反対に向いた瞬間。

俺は走りだした。

首めがけて二段切り、返して、車輪切り。

2匹ほどまとめて吹っ飛ばす。

追撃はせず、残りの2匹に狙いを向ける。1匹が今にも遠吠えを上げそうになっている。

仲間を呼ぶ気か!?

がら空きの首を回転斬り、間合いを詰めながら、正確に頭と喉を狙う。

振り切った双剣ににじむ血の色は赤。後で手入れしないと。

その後、起き上がってくるバギイに、もぐら叩きのように追撃を行う。

「ラストっ!」

連続技の最後、斬り上げの直後に吹っ飛んだバギイは、しばらく動いた後に静止した。

「よし、4匹目。周囲には……敵影無し、と。ふう……。」

案外あつけなかったが、気を抜いてはいけない。

油断したら、教官から怒声が飛んできそうだ。

「……おーい、シヨウコ！」

「はい！」

勢いよくシヨウコが飛び出してきた。

かなりの速さで俺に近づくと、俺に飛びついてきた。

「ご主人様！やりましたね！あまりの早業に、ウチ驚きました！」

「お、おお。そうか、よかった。」

「はい、文句の付け所がありません！しいて言うなら、私にも出番を下さい！」

「はは、すまん。じゃあ次はシヨウコと一緒にやろうな。」

「はい！」

話しながら、バギイの討伐部位である鱗を剥ぎ取る。

死体は重ねておいて、後で回収がしやすいようにまとめておく。

「ええですね、そうやって後々のことを考えて動くのも、大切なことです。」
「おお、ほめられた。そうか、当然だと思っていたが、これも大切なことなんだな。」

再確認。教官が教えてくれたことが生かされているな。

全く、感謝してもし切れない。

……まあ、ハンターの制度とかアイルーのこととか、肝心の部分は教えられなかった
んだけど。

教官らしいと言えば教官らしい。

そう言えばセツヒトさん、元ハンターと言っていたけど、どれだけの方だったんだろ
う。

聞いてもはぐらかされそうだが、帰ったら武器屋によってみよう。

そう考えながら双剣を研いでおく。こればかりは立ち止まって行うしかない。

集中していないと、剣をダメにしてしまいそうで、最低限の周囲の警戒をしながら行
う。

「ご主人様、周囲の警戒はウチがやりますよ?」

「ああそうか。そういう方法もあるな。……シヨウコがいると、クエストが本当に楽に

感じるよ。」

アイルーがいるだけで心持ちがこんなに楽になるなんて。
シヨウコと契約して本当に良かったと思った。

* * * * *

「ご主人様！左！」

「よしっ！はあ!!」

「タイミングばっちりや！ウチ、後方から回り込んで追い込みます！2匹同時、いけますか？」

「ああ平気だ！」

「じゃ、お任せします！」

言うや否や、ダツシュして一瞬でバギイたちの後方に回り込むシヨウコ。

俺にあの瞬発力はない。

持久力なら負けないのだが、素早さはシヨウコの圧勝だな。

「ご主人様っ！」

「あいよ!! 鬼人化……!!」

鬼人化を行い、攻撃力を上げる。

最近鬼人化中に、少しだけ力がみなぎる感覚がつかめるようになってきた。鬼人化を解いた後はどっと疲れるのだが、体力には自信がある。

さっと終わらせてしまおう。

剣を構える。

低い姿勢から、昨夜の訓練を思い出しながら連続技を繰り出す。

斬り応えが無いし、バギイは小さい。

正確に切ることだけ考えよう。

「これでっ！ 最後!!」

回転切りでケリをつける。

吹っ飛ばされたバギイは、その後動かなくなつた。

これで20匹目だ。

討伐部位をきつと回収する。

「ご主人様、ナイスでした！」

「いや、ナイスはショウコだよ。俺が戦いやすいように敵を集めてくれて。すごく楽しかった。」

「まあ、それがウチの得意技ですからね！素早さならだれにも負けません！」

「ははは、頼もしいぞ。次もよろしく頼むな。」

「はい！」

話しながら、バギイたちの体を重ねておくのを忘れない。

部位の数を確認する。20個揃っているな。

信号弾を打つ。これでは帰還するだけだ。

「ホンマ手際がいいですねえ。言うことなんかあらへん。こういう基本のところ、大事にしているハンターさんは、やっぱり強い人多いです。ご主人様、すごいです。」

「教官が良かったからな。……うん、よかった。」

遠い目をして教官を思い出す。

今頃新しいハンターをしごき始めているのだろうか。

その名もない見習いさんに、敬礼を送りたい。がんばれ、と。

「それじゃ、帰るか。」

「……はい！」

一応、マップを見てみる。

寄つて来る脅威などは無さそうだな……。

シヨウコは疑心暗鬼になっている。

そりや立て続けに、自分が組んだハンターが予期せぬモンスターに襲われているのだ。無理もない。

だが、俺のギフトで、そうしたモンスターはいないことを確認済み。

「……シヨウコ。」

「は、はい!!」

辺りを警戒しているシヨウコ。
……少し肩の力が入りすぎだ。

「シヨウコ。ストップだ。」

「へ？と、止まるんですか？……まさか、モンス——」

「落ち着け。」

「えっ。」

ポンツと頭に手を置く。

「大丈夫だ。大丈夫。」

「あ……。」

「俺のギフトの話はしたよな？周りに敵なんかいない。」

「……………」

「信用してくれ、自分だけ頑張るな。俺とシヨウコは一蓮托生。一緒に、やっていけばいいんだ。」

「……………はいっ……………」

緊張が少しはほぐれたようだ。

……………クエストの始めに、先輩として教えてほしいなんて俺が言ったからか。

シヨウコを立ててやる気になつてもらおうと思つたのが、逆にプレツシヤーになつたんだな……………反省。

「ごめんな、俺が教えてほしいなんていうから、頼りなかつたな。」

「えっ!?……………いやーちやいます……………。ウチは、ウチは……………」

「うん。」

「……………ウチ、嬉しかったんです。ハンターさんが、私を頼つてくれる。今までもそんなんあつただけど……………ご主人様がそう言ってくれて、頑張ろうって、思えました。」

目をウルウルさせながら話すシヨウコ。

「招き猫」なんていない。

俺は誓つたのだ。

このシヨウコの不名誉を、払拭すると。

「……シヨウコ。モンスターは来る気配がないし、俺が周りを警戒するから。」

「はい……。」

「安心してくれ。もうシヨウコは、『招き猫』じゃないぞ。」

「………はい！」

いい笑顔だ。

シヨウコに泣き顔は似合わない。

やっぱりこの子は、笑顔でいてほしいな。

うーん。

我ながら恥ずかしいです！

キザですね。

うん、死にたくなってきた。

「……よ、よーし！帰還ポイントまでダツシユだ！負けたらスクワット100回！」

「ご主人さま、………恥ずかしくて、ごまかしてません？」

クスクスと笑うシヨウコ。

この笑顔は……ちよつとムカつく。

「お先！」

「あー！ヒドい！イケズ!!ちよつ、待ってくださいー！」

* * * * *

帰還ポイントについた俺達は、ネコタクを使ってワサドラに帰った。

ちなみに、勝負に勝ったのは俺。

シヨウコはスクワットで「足が痛いわあ……！」とかなんとか言っていたので、ヒョイツと抱っこしてネコタクに乗せてやった。

ネコタクのアイルーは、前回と一緒の御仁。

「立派にハンターをやっていてうれしにゃ。」と言われて、ちよつと照れてしまった。

ニヤニヤしているシヨウコに再びイラつとしたので、耳を軽く引つ張っておいた。

笑い合う俺たち。

やっぱり。シヨウコは笑顏が一番だ。

44 シンパシーを感じましょう。

ギルドに着いたのは昼過ぎ頃。

腹が減った。だが、先に報告を済ませてしまいたい。

とりあえずシヨウコは先に宿に戻るように伝えておいた。

「うちもいますよ?」と言ってはくれたが、ドールたちに先に報告してほしいことと、ギルドマスター絡みの案件で時間がかかるかもしれない旨を伝えて、納得してもらった。

先に食べてもいいと言ったのだが、頑なに俺を待つと言うので、そこは折れた。

せつかく村に早く帰ってきたのだ。携帯食料じゃなくて、ちゃんとしたものを食べた
い。

シヨウコに悪いので、なるべく早く終わらせたいところではある。

だが、予想よりかなり早く終わってしまったため、ハイビスさんに何て報告したものが迷っている。

まあそのまま伝えればいいか。

ギルド前、ハンターの数はまばらだ。

それもそうか、まだ昼だもんな。

ハンターズギルド内が混むのは朝と夕方。

逆に昼は、こうして閑散としていることがほとんどである。

う。
ギルドを見渡す。いつもより人がいないので、ハイビスさんを見つけるのも簡単だろ

.....。

.....。

あれ？

いないぞ？

どっかに隠れて.....いやいや、どこの世界に勤務中にかくれんぼする者がいるのだ。

「どうかされましたか？」

アホな事を考えていたら、黒髪のポニーテールの女性が話しかけてきた。どこかで見たことがあるような……。

スラリとした高めの身長、キリツとした目は力強さを感じさせる。その女性は俺の顔をマジマジと見つめると、話を続けた。

「すみません。もしかして、ハイビス先輩の……。」

「ああ、はい。あなたは新人受付にいた……。」

「はい、ヒナタと申します。」

わかった。

昨日朝、ギルマスに呼び出された際に受付にいた受付嬢だ。

あのときは座っていて、身長が高めなことに気づかなかった。

「すみません、先輩は今、お昼を……。」

「あ、あー。なるほど。そういう時間ですね。」

「ご要件をお伺いします。」

「えっと、はい。クエストクリアの報告に。」

「かしこまりました。……いまギルドは空いておりますので、私で良ければ、どうぞ。」

そう言って受付の椅子を手で示すヒナタさん。

いいのかな。まあいつか。報告するだけだし。

席に着くと、ヒナタさんも向かいに座った。

「では確認します。HR3、ソウジさん。お間違い無いですか？」

「は、はい。」

すぐに名前を言われて驚いてしまう。

「現在届いているクエストクリアの報告は、こちらだけですから。」

「あ、ああ。なるほど。」

そうか、俺しかないからか。

ビツクリした、心でも読めるのかと思った。

「……………本クエストは、今朝受注されたもので、お間違い無いですか？」

「はい。ハイビスさんに。」

「……………討伐部位の提出を、お願いします。」

そう言われて、事前に出しておいた革袋を渡す。

血の匂いが結構するのだが、さすが受付嬢。眉一つ動かさず、後ろのテーブルで確認作業を進める。

非常に素早い手付きで、10分程で確認が終わったようだった。

「……………はい、確認できました。報酬はこちらです。報酬部位はどうされますか。」

「ええと、ギルドで預かる形でよろしくおねがいます。」

「かしこまりました。大切に保管いたします。……………」

「え、ええ。ありがとうございます。」

……………なんだ!?

すつごく訝しげに、無言で資料を見つめるヒナタさん。

クール系だから、ちょっと怖い。

「……失礼しました。討伐時間がだいぶ早めだったもので。」

「あ、ああ、なるほど。」

「理由をお伺いしてもよろしいですか？」

しまったな。

ここでハイビスさんなら、「かくかくしかじか」で通るのだが。

まさか「実はギフトという力がございまして」なんて、本当のことは言えない。

ごまかせるかな。

「そうですね。着いたらすぐ声がしたので、岩山を越えてみようと。そしたら結構数が固まっています。素早い敵は得意なのと、経験豊富なアイルーが上手く誘導してくれました。」

「……大量発生ということではないですね？」

「うーん、まだ経験不足でそういったところは分かりかねますが。」

「いえ、大丈夫です。……そのままそこで20匹討伐を？」

うーん、真実を混ぜつつ誤魔化すのって難しいなあ。

「いえ、そこでは4匹ほど。続いて南下していったら、何度も群れに遭遇した感じですよ。」

「ええ、運がいいのか悪いのか。」

多少脚色込みだが、まるつきり嘘ではない。

初めは4匹討伐した訳だし、そこからマップを見て南に群れがいくつか見つかったので、順に倒していったわけだ。

今回は運が良かった、で通るだろう。

「……報告ありがとうございます。」

「いえ、このぐらい。」

「……観測班の報告とも合致します。お早いクエストクリア、大変素晴らしいです。」

「いやいや。アイルーのおかげですよ。それに、俺の武器は小さくて素早いのは向いています。」

これも嘘ではない。

双剣は攻撃しながらも、高い移動速度を維持できる武器だ。

手数が命。一撃一撃は小さいが、小型モンスターの掃討には向いていると言える。

「また次回もよろしくおねがいます。お疲れ様でございました。」

「はい、お疲れさまです。」

よし、ごまかせたかな？

しかしクールな方だった。

まるでこちらを見透かすかのような視線。ヒヤヒヤしたぜ。

なんて安心したのも束の間。

「……すみません、ソウジさん。一つだけ。」

「えっ!? な、なんですか!?!」

声がかかった。

なんだ!?! もしやバレた!?!

……いやいや、バレる要素はないと思うぞ。

むしろ報告と合致するというのなら、ギルド側も納得せざるを得ないわけだし。

「あの……。」

「は、はい……?」

何この間!?!怖いよ!

「あの、その、あ、アイルーはいらっしやらないのですか?」

「……………へ?」

アイルー?アイルーってシヨウコのことか?

……………なんで?

「あ、ああ。シヨウコなら先に宿に帰ってますが……。」

「えっ……………そ、そうでしたか……。」

なんか落ち込んでらっしやる!?

分かりやすく眉毛がハの字になって「(・ω・)」って顔してる。

……もしかして、シヨウコに会いたいのか?

……い、いやいや。クール系お姉さんだし、その辺は違うだろ。

……違うよな。

「もしかして……会いたいとかですか。」

「……………」

コクン。

まるで小さい子が遠慮しながらも頷くみたいに、首を縦に振るヒナタさん。

あ、この人、猫好きだわ。

同じ道を歩むものとして、シンパシーを感じてしまった。

「……だとしたら、すみません。あいにくシヨウコは——」

「(づ)主人さまー! 遅いですって! はよう(昼)はんに行きましょうよー?」

「めでたいにや！今日はお祝いにや！」

……………。

噂をすれば影。

シヨウコが来ちやったよ。

しかもなぜかオスズまで連れて。

「シヨウコ!?宿に戻ったんじゃないのか!？」

「待つてました。でも我慢できひんと、来たんです。あ、オスズさんはそこで偶然会つて、事情話したら大喜びで。一緒に昼食べよかって話になりました……。」

「ソウジさん。いきなりすみませんにやあ。あちしも、ご一緒にきたらと思ひまして。もちろん、あちしが奢りますにや！よろしくおねがいますにや！」

たまたま偶然とはいえ、タイミングバツチリである。

チラリとヒナタさんに目を向けると、「ばあああああ！」みたいな音が聞こえそうな勢いで喜んでゐる。

冷静そうな方がそんな風に見えるのは、何だか楽しい。

すつごくキラキラした目。猫好きって、傍から見たらこんな感じなのか。

……よし、俺は自重しよう。中身おっさんがキラキラしてもキモいだけだ。

「あー、タイミングバツチリだ、シヨウゴ。ちょうど今、終わったところだ。」

「ほんなら、行きましょ？うちお腹空いてお腹空いてもう背中とひつつきそうなんです。」

言いながら、お腹あたりをポンポンつと叩くシヨウゴ。

その仕草はポイントが高い。

あ、ほら。ヒナタさんがグツと来てる。

「こら、人前で恥ずかしいことしにやい。一人前のオトモは、ギルドでは大人しく待つことも大切にや。」

そう言いながら、めっ！って感じで人差し指を立てて注意をするオスズ。

うん、それもポイント高い。

小さいアイルーが頑張つて背伸びしている感。いい。

……ヒナタさんが片手を顔の前で覆つて、破顔した表情を一生懸命隠している。分かる、分かるぞヒナタさんその気持ち。

「二人とも、こちらヒナタさん。担当の受付嬢が今いなくて、代理です。シヨウコ、ご挨拶。」

「は、はい！失礼しました。ウチはシヨウコつて言います。まだ半人前ですが、がんばりますので、よろしくお願いします！」

礼をするシヨウコ。

頭を下げるも、両の手を前ではなく後ろに広げている。

何だその仕草は。10点満点だ。

ヒナタさんは礼を返すも、「可愛すぎて何も言えねえ！」つて顔をしている。うーん、根っからのアイルー好きだこの人。

クールな印象を崩さないように何とか体裁を保つてはいる。さすが受付嬢。

「アチシはアイルー集落の取りまとめ、オスズですにや。はじめまして、ですにや？以

後、よろしくおねがいします、受付じよーさん！」

オスズはさすが、丁寧な礼を見せる。

だが、頭を下げた瞬間、尻尾がぴーんと天井を向く。

これは猫好きにはたまらん、ピンピン尻尾アピール！

オスズ、10点満点！

……………ヒナタさん、プルプルしながら両手を口の前で覆う。こらえきれないって感じだな！

「ヒナタさん……………あなた、相当好きですね。」

「……………な、何がでしょうか。」

ここに来て、キリツとした顔を作ってごまかされても。

俺にはわかるぞ。あなた、相当ですよ。

「シヨウコ、すまん。お願いがあるんだが。」

「へ？ウチですか？何です？」

「……ヒナタさんに頭を撫でさせて貰えないか？」

「えっ!? またですか?」

「ああ。」

ヒナタさんの気持ちがよーくわかる。夢を叶えさせたいと思うのは、同好の士として当然だろう。

「ま、まあウチは構いませんけど。」

「……オスズさんも、よろしいですか?」

「へ? アチシもですかにや!?!」

「お昼奢りますので。」

「お任せくださいにや!」

二つ返事。

飯に弱いのかこの人。覚えておこう。

二人が、受付から出てきたヒナタさんに近づくと。

「えっ!?! いいんですか!?! こんな幸せなことあるんですか!?!」 って顔をするヒナタさん。
……………もうクールとかそんなん吹き飛んでる。

「そ、ソウジ様。よろしいのでしょうか。」

「二人はオツケーみたいですし。朝はハイビスさんが撫で回してました。大丈夫でしょう。」

「では……………」と言いながら、おずおずと二人の頭に手を伸ばすヒナタさん。

左手をシヨウコの頭へ。右手はオズズさんの頭へ。

ポン、ポン。

手を置くヒナタさん。

「……………」

ナデナデ。

ナデナデ。ナデナデ。

お、ヒナタさんナイスグルーミング。

的確に頭の気持ちいいポイントを探って、優しく撫でていらっしやる。

両方とも同時にそれを行うのは、我々の夢でもあると同時に、猫好き業界では高難度の技。

只者ではない。

「……………」

「……………にゃ、にゃああ。」

「……………う、ふうう。」

喉を今にもゴロゴロ鳴らしそうな、二人のアイルー。

いいなー。俺も中身おっさんの男じやなかったらやってみたい。
だが自重。

真の猫好きは、猫がキモいと思うことはしない！

「……………ありがとうございました。」

「ふにや? 終わりにや?」

「わああ、ウチ、気持ちよかったです。眠るところやった。」

短めのナデナデ。

ヒナタさんには幸福な時間だっただろう。

そして止め時も心得ているとは。

ナデナデは決して長い時間行つてはいけない。

気が移りやすい猫にとって、これは鉄則だ。

「……………ソウジ様も、ありがとうございました。」

「様、はいりませんよ。」

「いえ、そういうわけには。ソウジ様は、いやソウジ様ももしかして…………。」

「…………ええ、あなたと同じ…………。」

「…………なるほど。納得しました。」

見つめる俺たち。

無言でも伝わるシンパシー。

「……ソウジ様、これからもよろしくおねがい致します。」

「同士、ヒナタさん。よろしくおねがいます。」

互いに礼をして、俺はギルドを後にした。

「……？ 一体何やったんや……？」

「そんなことよりシヨウコ、ご飯ですにやご飯。」

「せやった！ はよう行きましょうよ、ご主人さま！」

「よし。じゃあ二人には、ご褒美としてとびきり旨い店を紹介しよう。」

「いただきます！」

二人を連れて、昼飯に向かう。

行くのはもちろんイシザキ亭だ。

今日はシヨウコが頑張った日、そして同好の士が見つかった記念日だ。少しくらいの贅沢は許されるだろう。

この後、体格からは予想できないほどに食べるオスズに、財布の紐を緩くしたことを後悔する俺であった。

45 見栄を張りましょう。

昼食を食べにイシザキ亭に来た俺とオスズとシヨウコ。

控えめに言つて、オスズは大食いであつた。

イシザキ亭で出るメニューは結構なポリリュームがある。俺でも一食で腹が膨れるぐらいだ。

さらに言えば、アイルーは小さい。

シヨウコは半分で「おなかいっぱいや〜。」と言つていた。

じゃあオスズはというと。

……20皿は平らげた。

……嘘だろ……………。

「こことってもおいしいですよ！いくらでも入りますですよ！」

「まだ食べるのか!？」

「ハッ！そういえばソウジさんのおごりでしたにや〜…………腹八分目ぐらいで遠慮してお

きますにや……。」

「お、おう……。」

八分目!?

奢ると見得を張った手前、何も言えない。

「やー、オスズさん、よう食べるんです。」

「……そりやおごるって言ったら喜ぶよ……。」

この体のどこに入っているのか。

オスズは、アイルーの中でも小さいほうだと思うのだが。

……まあ前世でも、大食いの人って痩せている人が多かったような気がする。

「いやあ、こんなに食べる子なんて分からなかったよ。またすごい子連れてきたねえ、ソウジさんは。」

時間が空いたのか、ケイさんがこつちに来てくれた。

今日は、体にフィットするタイプのセーターを着ている。
まあもう主張が凄いな。

何の主張かご想像にお任せする。

まだエプロンをしているからマシかもしれないが、俺が○貞なら殺されているところであつた。

「忙しい時間にすみません、ケイさん。」

「何言ってるの！こっちは作るもん作って、もらえるもんもらえれば幸せなんだよ！」

「ははははは。」

「はい、というわけで、で・ん・ぴよ・う。」

「ははははは……。」

妙に色つぽい言い方で、俺に伝票を渡してくるケイさん。

見たらいつもより桁が一つ違う。

どんだけ食べたらこんな値段になるんだ……。

ちなみに、イシザキ亭に伝票システムを導入したのは、実は俺である。

マシヨルク教官の、イシザキ亭改革案の一つ。

ホールにキッチンに忙しいケイさんを少しでも手伝えればと思ったが、役に立っていないようでよかったよかった。

アイデア提供料として、ちよつとまけてくれないかな。なんて。

「ソウジさん。きつちり、もらうからね！」

「ううう……稼いだお金が……。」

「こんな小つちやくてかわいい子たちとご飯食べられて、幸せじゃないのかい？ほら、男ならドンと胸を張って！お支払い！」

「はい……。」

「それに、今度来た時にちよつとサービスするからさ！」

ドンと胸を張って支払う俺。

ドカンと胸を揺らしてサービスを公言してくれるケイさん。

……よし、元気がでたぞー！

これぞキャバクラ効果。おっさんは単純なのだ。

「そういえばそうそう。最近、お陰様でお店はとても順調なんだけど……そろそろ、ホールかキッチンに一人、店員を雇おうかなと思ってるのさ。」

「すごい人ですもんね。むしろよく二人で回ってきたもんですよ。」

「それでね、ソウジさん！」

「……まさか……?」

「……なんかいい伝手、なあい?」

そうくるかー!

人手は必要かなって思ってたけど、うーん、思いつかない。

「キッチンとホール、どちらが欲しいんですか?」

「そうねえ……兄貴はキッチン専門、私はどっちも掛け持ちできるし……ホールがいるといいね! 経験は問わないからさ。」

うん。それならすぐ見つかりそうだな。

「経験不問、オシヤレな隠れ家レストランでウェイター・ウェイトレスをやってみませんか?」みたいな見出しをつけて募集すれば、すぐ来るだろう。

ちなみに信用ならないのは「アットホームな」「みんなとても仲のいい」「切磋琢磨」この辺だな。

様々なバイトをしたことはあるが、この辺の誘い文句は地雷が多い印象。

なおこれは俺の完全な主観である。

本当にアットホームな職場が実直にアットホームと書いた、そんなパターンがあるかもしれないし。

話が逸れた。

「分かりました、心当たりを当たってみます。」

「あら、助かるよ。知人からの紹介だったら、うちもそっちも、安心できるからね！」
なるほど。

その辺は打算的なケイさんである。

どんな人がいいかな、などと考えていると、目の前の二人が目に入る。

……アイルーなんてどうだ？

もしや飲食店は厳しいのかもしれない。
毛とか……色々？

「アイルーなんてどうです？」

「ええ!?それは、アリなのかい!？」

「アイルーなら人気もありますし、目の前のこの大食いアイルーは、アイルー集落の取りまとめ役のおスズさんです。聞いてみてもいいかもしれませんよ。」

「よっし。あー……ねえねえ、そこなアイルーさん!」

「はにや!?な、なにか御用ですかにや、お胸の大きなお姉さん?」

そこなアイルーって、どんな呼び方だよ。

そしておスズの失礼な返事。これ天然でやってるんだよな、恐ろしい。

……間違つては無いがな!

そこから二人の雇用に関する話が進んでいった。

「にやあ、ちよいと込み入った話になりそうだからソウジさんたちは、先にお帰りください

いなのにや。」

「そうか？まあ俺らがいても話は進まないしな。」

ケイさんにごちそうさまを伝えた後、二人と別れた。

次回行く頃には、アイルーの店員が増えているのだろうか？

正直楽しみである。

「ご主人様、ごちそうさまでした……ウチももつと大きくならなアカン……！」

シヨウコは何を言っているんだ。

気にせず宿に戻ることにした。

* * * * *

俺達は今日の反省会を行うため、部屋に戻った。

部屋に着いて、荷物を整理してお茶を入れて人心地。

ちなみにシヨウコの持ち物や装備は、俺が管理できるようになっている。

というか問答無用で、ギフトがそういう仕様になってしまっている。
これは何故なんだろう。

とにかく、持ち物を勝手に見ることができてしまうので、プライベートな物は自分で管理するように伝えたのだが、

「ご主人さまに隠し事なんて、ありません！」

「でも、俺にパンツとか管理されるんだぞ。嫌だろ。」

「うええ!!……………で、でもまあご主人さまなら……………いやいやいや!嫌、かもです!」

と、こんなやり取りがあった。

……………そこは迷うところではないと思うのだが。

というわけで、クエストに関連するものを俺のギフトで管理することに。

特に、俺のポーチには装備を綺麗にする効果もあるので、シヨウコはそれをいたく喜んでくれた。

結構年季が入っていたしな。

「じゃあ今日の振り返りと次回に向けた話をしておこう。」

「はい！ご主人さま！」

「よし、シヨウコ。俺たちの今の大きな目標は何か分かるか？」

「え、えーと。何でしょう？」

「……そういえば言っただけじゃなかった。」

シヨウコに、女神様やら何やらの話をしていなかった。

前説明したのは、俺がギフトを持っているということと、〈武器操作〉によってレベルの高い攻撃ができるようになるということぐらいだ。

「シヨウコ、俺の目標は、この世界で人生を謳歌する事なんだ。」

「人生を、謳歌、ですか？」

「ああ、俺は前世で下から2番目ぐらいに不幸な死に方……消え方をしたんだよ。だから、この人生は2回目のチャンスなんだ。ここで、一生懸命に生きてみたい。」

「……。」

「ただ、俺の色々な力をくれた女神様が、モンスターを倒したりとかいろいろなことをし

て欲しいみたいでな。俺もそういうのは嫌いじゃないから、ハンターを頑張ろうと思っただけだ。」

「ご主人さまは神様と繋がってはった!？」

「まあ完全に一方通行だけだな。」

「……そうなんや……。ウチ、てつきりご主人さまお金に困って仕方なく、なんて思っていました。」

「まあ、それも間違つてない。お金を集めたいとか強くなりたいとか色々あるんだけどね……。特に金は欲しい。とにかく一番でかい目標は、ハンターとして、この人生を満喫することだ。だがそのためには、普通ではダメだろ? 鍛えて、経験を重ねて、稼いで、強くならなきゃならない。」

シヨウコに話してみても、改めて意識する。

俺のこの人生の意味、目標を。

正直、色々なモンスターと戦つてみたいとも思っている。

転生直後の頃は、あんな平穏な毎日を望んでいたのにな。

努力して、モンスターを倒した時の達成感が凄まじかったのだ。

「なので、次のクエストは少し難易度を上げたい。どんどん追い込んで、自分の限界がわかれば、達成できる目標もわかりやすいしな。」

「その、無茶はせんと、ですよね？」

「それは大前提だな。難しいけど、追い込む事と無茶は違うと考えてくれ。」

「はいっ！」

部屋での打ち合わせは、夕飯時まで続いた。

明日から、たくさんのクエストを受けていこうと思う。

大型モンスターにも挑むことになるが……限界が見えたらまた特訓しよう。

教官の扱きに耐えられたんだし、多分どんな特訓でも耐えられる気がする。

ひとまずは今日も、憑依状態の自分を目指して、がんばるか。

今ひとつ、剣に力が入っていないんだよな。

スピードにも全然乗り切れてない。ひたすらに反復して、探っていくしかないな。

短期目標が決まった。

あとは、コツコツとやるだけ。

そういうのは、大得意だ。

46ある受付嬢の話③

こんにちは、ハイビスです。

ソウジさんがこのワサドラにやってきてから、早いもので1ヶ月が経ちました。

その間、訓練の様子をちよくちよく見させてもらっています。

……………控えめに申し上げて、マシヨルクさん、ちよつと頭おかしいんじゃないかなって思います。

体力づくりの一貫だとは思いますが、講習を行う修練場に来る前に、ソウジさんとマシヨルクさんはランニングをします。

これがもうランニングってレベルじゃないんですよ！

もはやマラソンですよ！

ハンターにとって生命線である体力を鍛えるのは賛成なのですが……村の外周を10周とか、朝から殺しに来てます。

しかも二時間切らないと再スタートらしいです。

初めはソウジさん、吐きまくってましたね……。

さらに！

そこから講習が始まるんです！

はじめの頃こそ、岩山登りを何回かして、剣の訓練や道具の扱いといった基本的なことをされてましたが……。

ソウジさんも体力がついてくると、滝の方の岩登りとか、マシヨルクさんの本気の剣の振り避けるとか始めました。

死にますって。

そして、何より驚かされるのはソウジさんです。

ついていくんです、このスパルタ講習に。

始めは無理でも、何度かやっていく内にコツがつかめるのか、3日も経てば慣れてくるんですよね……。

マシヨルクさんもそうですが、ソウジさんも大概化け物さんです……。

おかげで？ソウジさん、見た目はあまり変わりないのですが、オーラというか纏う雰囲気ですごく変わりました。

ギルドにいると何度か話す機会はあるのですが、全然違うんです。

私が修練場を隠れて覗いているときに、ソウジさんと目があつたことがあります。

私の隠れ方は完璧なので、ソウジさんの気配察知能力がかなり鋭敏になつてきたのでしようね。

……その目があつた瞬間、私に微笑んでくれたんです。

正直言いますよ。

ドキツとしました。

だつてだつて、弟みたいに頼りなくて可愛い感じの子だったのに、いつの間にやら引き締まり、かっこよくなつちやつて……。

これはいけません。

受付嬢としてあるまじき醜態です。

ハンターの方に色目を使ったとなると、受付嬢は針のむしろです。主に受付嬢仲間

気をつけなければなりません。

……先週も、先輩でこっそりイケメンハンターさんと付き合い始めた方がいますが、もうバレバレで、只今絶賛針のむしろ中です。

女って怖いですよね……………。

(少し気をつけないといけませんね……………)

とか何とか思っていたその時でした。

「ハイビス君！ハイビス君はいるかな！」

「ブフォー！はい！」

我がギルド一番の実力者であるマシヨルクさんから、大つきな声でお呼びがかかりました。

お茶を吹き出してしまいました……制服のクリーニングだってタダじゃないのに！

この方イケメンさんなんですが、全く人の話を聞かないところが玉に瑕です。

ついこの前も、「ソウジ君に新しい訓練道具を発注してもらいたい！」とかなんとか言って、すぐに去っていくというわけのわからないことをなさっていました。

なんとかしましたけども。

勘弁してほしいです。

しかもこの方、先輩達にも後輩達にもエラく人気なんですよね。

そりや傍から見ている分には、かつこいいし面白いし、生きる伝説ですし、みんな見ますよ。

でも、こつちは困ります。無下にも懇意にもできない、ちょうどいい塩梅の対応をしないといけません。

「マシヨルクさん！ギルド内部で大声を出されては困ります！」

「ハツハツハツ！すまない！すまないついでに、一つ頼みがあつて来たのだ！」

また来ましたよ、無茶ぶりが！

ええ、聞きますよ！だってあなたの言うことはなるべく聞くようにと、ギルマスからの通達ですからね！

ていうかなんで私がマシヨルクさん担当みたいになつているんでしょうか！！

最近ギルドの女の子に少し人気のソウジさんの担当も私なんです。

おかげでやつかみの視線が辛い辛い。

……まあ……多少はその視線も気持ちいいんですが………ふふ。

いけないいけない。

で、そんなよろしくないことを考えていた私に、マシヨルクさんはとんでもないことを言い出したんです。

「この一番弟子、ソウジ君に、大型モンスター討伐のクエストを受けさせてはくれまいか!?」

「かしこまりまし………ええええええ!?!」

「いやその反応になりますよね普通……。」

ソウジさん、すでに諦めの境地ですか!?

「ち、ちなみに具体的にどのようなクエストをお探ですか??」

「場所は岩山地帯！バサルモス討伐だ!」

え？

……………え？

何を言ってらっしゃるのこの人は。

「できるかあああああ!!」

ソウジさんとハモりました！

「なに、問題はない！今のソウジ君ならいけると踏んだまでだ！と言う訳でハイビス君！ちようどよいクエストなどはないだろうか！」

「お……お待ち下さいマシヨルクさん！まだソウジさんは、一月ほどしか訓練を行っておりません！いくらマシヨルクさんとパーティを組むとはいえ、流星に許可は——」

「いや違う！ソウジ君一人で討伐するのだ！」

「……………へ？」

「師匠として保証する！彼は既に狩猟可能な領域にいる！私が言うのだから間違いない

な！」

「つまりそれは……ハンター最終試験のことを仰っているのですか!？」

「ああ、それでよい！早すぎるかもしれないが、受けること自体に問題はないだろう!？」

問題は……問題しかありませんよ!!

ソウジさんを見ると、どこか諦観のような、覚悟を決めたような、そんな顔をしていました。

そうですよね、この方が言うのですから、返事は「はい」または「イエス」もしくは「喜んで」しか無いですよね。

……うーん。

少し考えましょう。

まず、バサルモス。

このモンスター、個体差は大きいですが、下位ハンターさんが討伐に苦戦することでおなじみの厄介なモンスターです。

攻撃が通らない、遅くて避けやすいものの当たるとかなり痛い一撃。そして光線のよ
うなブレス。

双剣使いのソウジさんには、少しキツイでしょう。

ですがマシヨルクさんは、こう見えてもG級の中のG級ハンター。

古龍撃退スコアをもつ、生きる伝説さんです。

教官として働く前から、様々なハンターを見られてきたことでしょう。

そんな方が、「いける」と踏んでいるのです。

対して私は、プロとは言え、ギルドの受付嬢。

ハンターの方々の技量を測るのは、専門外。

……実力としては、本当にソウジさん、いけるのかもしれませんが。

ならば、私は。

ギルドの受付嬢として、ハンターの方々を支えるプロとして、今私ができることは何でしょうか。

……ソウジさんの覚悟を確認することでしょう。

実力があるからといって、過信して死んでいった先達が数多い事実を。

一ヶ月そこらでバサルモスに挑むことが、どれだけ無謀な事かを。その事をきちんとお話して。

改めて、ソウジさんに確認します。

「……バサルモス討伐一体。場所は岩山。制限時間は3日。試験監督としてマシヨルク教官が同行。こちらのクエストを……受けられますか？」

冷静に問います。

ソウジさんを、奮い立たせるでも、怖気づかせるでもなく、あくまで冷静に。

すると、ソウジさんは深呼吸をしてから、返事をしました。

「……受けさせてください、ハイビスさん。そのクエスト。」

「……かしこまりました。……ソウジさん、ご武運を。」

ちよ……。

ちよつとカツコいいじゃないですか………!!

悔しいですが、やられました。

……覚悟はバツチリのようにすね。

そこからはとにかく急ぎました。

試験というからには、監督役のマシヨルクさんとは別に、観測班への連絡や移動手段の手配、依頼元への確認など、あらゆる仕事が続んできます。

急ぎのクエストなどしよつちゅうの事とは言え、今回は異例中の異例。

何せ、見習いハンターが明日バサルモスを討伐しに行くというのですから。

……でも、なんとか押し通しましょう。

ソウジさんの期待に応えるのです。

ギルマスにも連絡です。

もし幸運にも試験が合格になったり、予想通り不合格になつても、さらなる不運にながつたとしても、どう転んでもすぐ対処できるよう、上への連絡は絶対必要です。

それに、ソウジさんがクエストの確認に再度来ると思いますので、ギルドからは離れ

られませんね。

お夕飯は出前かなあ……。

ケイさんのところに使いをやつて、お弁当でも届けてもらいましょうか。

………よしっ！やりましょう！

ああ、忙しいです目が回ります頭をマルチにフル回転させます。

でもでも、がんばりますよ。

だって私は、ハンターさんを支えるプロ。
受付嬢ですから。

* * * * *

「あー………疲れました………。」

時は進んで、次の日の朝。

ソウジさんを無事に見送って、やっと自分の部屋に帰ってきました。

……ソウジさんいつまで経ってもギルドに来ないんですから！

しょうがなく徹夜ですよ！まあ仕事と並行してましたから、今日は休みを取れましたが！

でも、いい顔をして出発されましたね。

ハンターさんを村の出口で見送ることは、あまりありませんから。

手を振るソウジさんは、やっぱり、なんか弟みたいで、かわいかったです。

……がんばってと、祈るしかないですね。

そういえば、ガーグア車乗り場に居る時。

ちよつとした事件がありました。

武具屋のセツヒトさんとマシヨルクさんが、何やらただならぬ関係にあったようで。

まさに一触即発、という状態になりました。

『孤高のソロハンター「百手」セツヒトと、生ける伝説「カホ・チータ」のヘビィボウガン使いマシヨルク、相対す!』

……うーん。

ゴシップ記事好きの方なら、飛びついてきそうな見出しです。

例の龍災のこと絡みでしょうか。

ミヨシ村壊滅の一件は、ギルドとしても絶対に忘れてはならない事件の一つ。

セツヒトさんが引退した理由の一つですし、マシヨルクさんも絡んでいたとは聞いて
ます。

ただ、伝え聞いている事実は知っていますが、お二人がどういう感情で、どういうお
考えなのか。

そこまでは、流石にわかりません。

ギルマスも絡んでいるみたいですが、詳しいことは私もサツパリです。

………難しいことを考えていたら、眠くなってきました………。

ダメです寝ますおやすみなさい……。

ソウジさん……負けないでくださいね……。

Z Z Z

* * * * *

次の日まで眠るとは。

まだまだ私も若いですネ！

………違う違う。

お休みを、ただただ寝て過ごしてしまった、この感情は何と言うんでしょう。

………時間の感覚があまりありませんが、既に日は昇っています。

とりあえず支度をしてギルドに向かいます。

ギルドに着くと、後輩が珍しく焦った顔をしていました。

ヒナタ、という子です。

黒髪のポニーテールと高めの身長。

目力が強く、一部のハンターさんの間で大人気の若手受付嬢です。

いつも冷静で、感情を表に出す姿はめったに見たことがありません。

でも私は知っています。

彼女が無類のアイルー好きだということを……！

私も、アイルーをはじめとした可愛いものが好きな方です。

元々彼女とは同郷で、仲はいい方でした。

ところがお酒の席で、可愛いもの好き同士として気が合っただけです。

そこからは……彼女の猫好き沼にどっぷりと引き込まれてしまいました。

もう今や、アイルーちゃん超かわいい！って感じですよ。

ですが、彼女、仕事はいたって真面目に行います。

ミスも少なく、この新人ハンター関係の部署では、一番信頼のおける後輩です。

そんな彼女が焦っている……珍しいこともある物ですね。

とりあえず話を聞いてみましょう。

「どうしたの？ヒナタ。」

「あ、ハイビスさん。おはようございます。」

「……珍しく焦った顔をしていたから。何かあったんでしょう？」

「……はい……実は……。」

ギルマスから無茶ぶりでも来たのでしようか。

……あり得ます。ギルマスのシガイアさん、この子のことかなり認めていらつしやいますし。

「実は、ハイビスさんが担当していた見習いハンターのソウジさんですが。」

「……ええ……何かあったの？」

思わず、唾を飲みます。

………最悪のパターンかもしれない。

………そうだったら、私の責任です。

ソウジさん……私、何ということ……。

「昨日夕方に帰ってきました。」

「……………えっ。」

「試験のクエストを見事突破。ソロにてバサルモス狩猟を、達成です。」

「……………ええええええええええ!!?」

「討伐時間は4時間半。平均狩猟時間を軽く上回っています。」

「よ、よじかんはん!?!? 1日もかかっていないの!?!? 観測班からの報告は!?!?」

「間違いないと。試験監督役の手も借りておらず、見事な狩猟だったと。」

ヒナタから、資料を受け取ると、全て確認します。

……………うわぁ、本当だ。昨日帰ってきてる……………。

しかも、バサルモスの銀冠クラス!?!?

グラビモス間近じゃないですか……………。

モンスターにも、個体差というものがあります。

当たり前ですが、モンスターも成長しますし、基本的に大きい方が長く生きているので強いのです。

ギルドではデータを元に、サイズが極端なものを金冠、銀冠と言って分けることができます。

今回ソウジさんが仕留めてきたのは最大金冠の次にあたる、最大銀冠クラス。バサルモスは、グラビモスという更に強くなった個体の幼体ですから、グラビモス間近、というわけです。

なんてことでしよう。

ハンター見習いがそんなにすぐに。

前代未聞です。

……………でも、無事に帰ってきて何よりです。

まずはそこが喜ばしいですね。

あの方ならやってくれるかも、とかそれどころじゃなかった訳ですが…………。とにかく、ギルマスに報告しましょう。

「ヒナタ、受付を任せてもいい?」

「はい、と言うよりハイビスさん、今日の午前は非番では?」

「取り消すわ。緊急事態だもの。いい方の。……ギルドマスターのところへ行つてきます。」

「……かしこまりました。こちらはお任せください。」

「ふふ、ありがとう。」

頼りになる子です。

既に受付窓口の前には大量の新人ハンターたちが詰めかけています。

がんばって、ヒナタ！

すぐ戻るからね！

手を振ると私はギルドマスターの部屋に向かいました。

この喜ばしいのか何なのか、とにかくこの偉業を報告しに参りましょう。ギルマス、いるといいけど。

47ある受付嬢の話④

コンコン。

ギルドマスターの部屋に来ました。

ギルドマスターであるシガイアさんは、このギルドで一番偉い方です。

上司です、上司。

ただまあ、5年目の私が気軽に相談できるくらいには、低姿勢な方です。

でも、見た目に騙されちゃいけません。とても仕事ができる方なんです。

噂では、首都を含めたあらゆる地域でのギルドマスターを歴任してきた、とてもすごい方だとか。

このワサドラ村が急速に発展しているのも、この方の手腕があつてこそ、なんて言われてます。

噂では、本気を出すときはメガネを外すと聞いてます。

ね。その時はめっちゃ怖いそうです……怒ったところなんて、見たことありませんけどね。

「はいはい、どうぞー。」

「失礼します。」

気の抜けた返事を聞き、部屋に入ります。

「はいはい。おはようございますハイビスさん。どうされました?」

「おはようございます、ギルドマスター。一つ報告に参りました。」

今日も今日とて、黒縁の眼鏡が似合ってらっしゃいます。

白いYシャツと無精ひげで、年上の男性って感じがしますね。

「報告ですか?書面で頂ければ確認はしますが?」

「いえ、ソウジさん……一昨日報告に参りました、例の見習いハンターの件です。」

「あーあー、はいはい。あの方ですね。確か異例のハンター試験を受けている。」

「はい。」

「マシヨルクも認めているから、私からも許可せざるを得なかったしなあ……。もしかして、クエストリタイアして帰ってきましたか？」

マシヨルクさんを呼び捨てなんでしょうね、ギルマス。

どういったご関係なのか……。気になりますが、報告が先です。

「いえ、その逆です。」

「……というと？」

「岩竜バサルモスをソロで討伐。狩猟時間約4時間半。昨日の夕方には村に戻り、クエストクリア報告を受けています。」

「……………ほー。それはまた……………すごいなあ！」

「はい、私も先程聞いて驚いています。」

「……………資料はお持ちですか？」

私は手に持っていた、観測班の報告書を渡しました。

「確認しますね。あ、ハイビスさん。座ってお待ち下さい。お茶はいりますか？」
「い、いえいえ、大丈夫です。」

「そうですか、残念。いい茶葉が入ったんですよ。……では少しお待ち下さいね。」

ギルマスのお部屋のお茶って美味しいんですね……ご来客も多いし、それはもちろんそうなんですが。

ギルマスの目は、書類に釘付け。

3分ほどで、確認を終えられました。

「……うーん、いやはや。なんとも素晴らしいですね。」

「はい。」

「この報告を額面通りに受け取るなら、HR3へ認定してもおかしくはないです。バサルモスをこれだけ短時間で狩猟できるなど、上級ハンターでもなかなか難しいでしょう。」

「はい……そうなんですが……。」

「……ですが、このソウジさん。あの方ですよ。以前ハイビスさんから報告を受けた、あの。」

「はい、その方です。」

実は以前から、何度かソウジさん関連でギルマスに報告をしております。

様々な定期報告の際に、思い切って相談したんです。

何か、違和感が拭えない新人がいると。

言動そのものから推測しても、間違いなく一般人かそれ以下の知識しか無いようです。

なのにバサルモス撃退のスコアを持っていて、出自は一切不明。

毎日毎日観察は続けていますが、すごく成長が早い期待の新人、としかわかりません。

「そりゃ手に負えなくて相談しますよ……。」

……!

いけない!

思わず声に出ちやいました!

「……ははははは! ハイビスさんからそのような言葉が聞けるとは、なかなかの新人さ

んですね。」

「し、失礼いたしました。」

やつちやいました。

ギルマスと話すときは、どうしてもこんな感じで碎けてしまいますね……。

上司と部下ですから、その辺ちゃんとしなきゃいけないんですが。

愉快そうに笑いながら、ギルマスは背後にある大量のファイルのうちの一つを取り出しました。

付箋を貼っているページを開き、眼鏡をかけ直しながら話を続けます。

「……いえいえ、部下のそのような本音が聞けて嬉し限りいですよ。……彼は、世間やハンターの事情にはとても疎い。そしてハンターとしての実力もまだまだだが、最近の力のつけようは目を見張るものがある。……この報告ですよね？」

「は、はいそれです。」

大量の文書から、一発でその報告書を見つけ出すとは。

流石ですね、シガイアさん。

「……そうですね……。ではこれから、彼と話してみましよう。」

「えっ。」

「いえいえ、ハンター試験合格のお祝いも兼ねて、彼とお話ししましょう。どの道、飛び級昇格を認めるためには、ギルド重役との面接は避けられません。たまたま私は午前中空いていますすしね。」

「あ、ああ。そういうことですね。承知しました。」

「ええ、他意は無いです。」

「……。」

「……。」

「ギルドマスター、何か企んでいませんか？」

「……いやいや、期待の新人が現れて、喜ばしいなあ、と。」

このギルマス、意外とタヌキさんなんですよね……。

以前も体よくマシヨルクさんを押し付けられましたし……。

「ギルドマスター？私、マシヨルクさんの担当になった覚えはないのに、なぜか担当のよ

うになつてゐるんですが。」

「そうですね、ありがたい限りです。」

「……。」

「……。」

あくまでしらを切るつもりですね！

いいですよ！たかだか5年目の若手は、上司にいいように使われるんです！

ふん！

「……それにですね。」

「……はい？」

「出自も不明。実力もよくわからない。そんな人物を放つておいていいと思ひますか？」

「いえ、……得策ではないかと思ひます。」

「はい。嫌な予感がします。なので、私が見極めましょう。一応、それなりの手を打つておきます。」

「は、はあ。」

ギルマスの目が一瞬本気になったような……？

「ははは、ハイビスさんはとりあえず、彼をこの部屋に呼んでもらえますか？」

「わかりました！」

「あとは私に任せてください。とりあえず呼ぶだけで大丈夫ですので。」

「はい！」

部屋を後にします。とりあえずギルドの受付に戻りましょう。

もしかしたらソウジさんがいるかもしれないですね。

いなかったら……泊まられている宿に行ってみましょうか。

確か「ホエール」に泊まっていると言っていました。

ドールちゃん、元気かな？最近ご挨拶に行けてないから、心配です。

ミヤコさんも、最近帰ってないみたいですし……。

ホエールさんと二人、寂しくしてないかな……。

今度ちよつと顔を出してみましようね。

* * * * *

……………やられました!!

何がつて、ギルマスにやられました!!

面接の際一緒にいると言われた時点で、多少嫌な予感

はしたんですが!!

結局私まで責任を取らされる形じゃないですか!

怒りが湧いてきました!

やっぱりタヌキオヤジはタヌキオヤジでした……………。

何が「私に任せてください!」ですか!!

まあギルマスも何かあったら責任を取る形なんですけどね!

何て怒りの気持ちもあるんですが。

ソウジさんの秘密を知ったら、冷水をかけられたように、それどころではなくなりま
した……………。

ソウジさん。

実力を隠すどころか、とんでもない能力の持ち主さんでした。

ギルドでソウジさんを見つけた私は、無事にギルドマスターの部屋まで連れ出すことに成功。

そこまでは良かったんです。

そしたらタヌキオヤジが、

「ハイビスさん、話がスムーズになりますので、同席していただいてもいいですか？業務の方は、彼女がいますよね。」

ですって。

いやいやいやいや！

今思えば巻き込む気満々じゃないですか！

そして蓋を開けてみたら、ソウジさんの魔法かと思うようなネタの数々!!

あ、これ知ったらいけないやつだって思いましたよ！

アイテムの収納。情報画面。

特に寒気がしたのが、武器操作？っていうものです。

あの、あのからくり蛙が、壊れました。

それはもう、ボンって。

私初めて見ましたよ？

あの蛙さんとっても丈夫なんですからね！

破壊しようと思っても普通できませんから！

それを、普通の双剣で叩き割ったんですよ！

これには、流石のギルマスも絶句。

そして、興奮した子どもようになりました。

うーん。

彼の能力の数々、首都のギルドの猛者達にバレたらとんでもないことになるのでは

.....？

考えただけで震えます。

ギルマスはソウジさんと悪用しないことを確認していました。

でも、ソウジさん。

悪用とか絶対にしなないと思います。

これは、受付嬢の勘というより、女の勘ってやつですね。

自分の力じゃない、授かった力でセコセコするような殿方って………なんか女的に嫌ですよ。

その辺、きちんと見極めてらっしゃるソウジさんは、改めてかつこいいいなって思いましたよ。

………なんか最近、彼のことをかつこいいいかつこいいい言い過ぎですね………。
自重自重。

そして私は、ソウジさんの専属担当になることになりました。

当然ですよ………事情を知る受付嬢って、私しかいませんし………。

はあ、体よく巻き込まれてしまいました。

まあでも、少しはいい気分です。

なんか秘密の共有って、憧れませんか？

私は憧れます。

と言うわけで、ソウジさん。

これから一蓮托生、頑張ってくださいませよう。

………私を路頭に迷わせないでくださいね!!

ひとまずは、簡単なクエストをどんどん突破してもらって、経験を積んでもらいましょう。

ソロでバサルモスを討伐できるんです。下位のクエストなら、ほぼ問題ないんじゃないでしょうか。

そして、私、ついに新人担当から外れました！

晴れて普通の受付嬢担当ですよ！念願の！

なーんて、前なら喜んでいたんでしょ……何でしょう。

ここに来て、イケメンハンターさんの出会いを求めて、焦らなくてもいいかなーって気にもなってます。

つい少し前までは、何としてもイケメンハンターさんゲットして寿退社するぞー！って気になってましたのに。

ソウジさんのせいですわね……。

あの方、どんどんカッコよくなってきてるんですもん。

ちよっとだけ惹かれている自分がおります……。

だ、だめですよ！

とりあえずは、彼が無茶だけはしないように、見守ってまいりましょう！
だって私、彼の専属受付嬢ですから！

48ハンター業を本格的に始めましょう。

シヨウコとバギイ討伐のクエストをクリアしてから。

俺は毎日クエストを受けまくった。

討伐ばかりに偏らず、色々なクエストに力を入れるぞ！

と意気込んで、シヨウコと一緒に、あらゆるクエストを受け、各地を駆けずり回った。近況をまとめておこう。

* * * * *

まずは採取クエスト。

特産キノコと呼ばれるうまいキノコの納品やハチミツの納品、とにかく様々なアイテムを採取して納めるというクエストを受注した。

ギフトの力に頼らず、まず自分の力でやってみようと思ったハチミツの納品は、めちゃくちゃ大変だった。

情報の確認無しで行ったものだから、闇雲に蜂の巣を探す羽目になり、その道中アオアシラに襲われるというアクシデント。

特に問題なく倒せたものの、その死体の処理をお願いする解体処理班への信号弾が無く、シヨウコにギルドまで報告をお願いする始末。

その間にモンスターがよつてきても仕方がないので、アオアシラの解体をしてキャンプまで運ぼうとしたのだが……。

はつきり言おう。解体、これ大変。

足をロープで縛り、手ごろな木に吊り下げる。

この時点でかなり重かったのだが、何とか持ち上げられた。

力もかなりついているなあ……。

次に皮をはいで、内臓もきれいに処理する。

手順は流石に〈情報画面〉を見たが、それでも辛かった。

血のにおいがすごく、そして中々にグロイ。

すぐ洗える水道なんてないので、体は血まみれ。

川の水をアイテムポーチに入れるという荒業を思いつき、そこからは綺麗にしながら解体できた。

なんとか捌き切ったものの、すべてのやる気は0に。

クエストの時間も無くなり、ハチミツの数も足りない。

シヨウコが戻ってきて信号弾を撃つと、俺達はトボトボとネコタクで村に戻る羽目に

なった。

シヨウコにも申し訳ないことをしたので、マタタビ団子を奢っておいた。

ハイビスさんからお叱りを受けてしまった。

「クエスト中にのんきに解体している場合ですか！そういう時は二人ともスタート地点に戻ってネコタクでシヨウコちゃんだけでも帰してください！すぐにギルドから回収・解体班に連絡できますから!!」

「す、すいません。でも、何とか解体できたので……。」

「その間にモンスターに襲われたらどうするんですか！むしろなぜ解体できるんですか!?!回収班からは完璧な解体だったと褒められていましたよ!」

あ、そこはほめられたんだ。

でも、ハイビスさんからマジ叱りを喰らうのは初めて。クエスト失敗の違約金を払うのも初めて。

もう色んな意味で凹んだクエストだった。

この失敗から、採取の際は事前に位置を確認しておくこと、予期せぬモンスターに遭

遇しても慌てない、撃退程度に留めることを学んだ。

アオアシラには申し訳ない事をした……。

そして次からは、事前に〈情報画面〉のマップで位置を把握。

当日思い出しながら採取を行うようにしたのだった。

クエストクリアが早すぎて、ヒナタさんに怪しまれるという一幕があったのだが。

採取クエストの次に行ったのは運搬だ。

正直言おう。

……このクエスト、苦手だ!!

何故って……やたら重いアイテムを採取して、それを持ち帰るからだ。

ハンターがしなくてもいいじゃない……。

後で聞いた話だと、卵や灰水晶といった壊れやすいものは、人の手で持ち帰るのが一番良いのだとか。

運搬技術だけじゃなく、険しい岩山や水場を超える必要もあり、ハンターが総合的に適任となる。

何でも専門で行うハンターもいるとか。

運搬のクエストは3回ほどクリアした。

特にリオレウスとリオレイアの卵の運搬。死ぬかと思った。

運よくリオ夫婦には見つからずに済んだものの、時間がかかるわ見つからないように神経使うわあまり儲からないわで、やりたくないクエスト第1位に堂々のランクイン!!ちなみに何故か、運搬アイテムはポーチに入らない。

試そうとして、灰水晶を割るところだった。

シヨウコ曰く、

「ご主人様は運搬にあまり向いていませんで。」

だそうだ。

うーん、確かに。イライラする。

自分がいかに精神的に未熟か勉強になったし、普段使わない筋肉を鍛えられたと思えば、いい経験になったと思う。

……いい経験になったと思おう!!

そして討伐クエスト。

これは非常に順調だった。

俺が弱腰で入念に準備&予習をしたというのもあるだろうが、連戦連勝。

ドスジャギイを始めとした、オサイズチやドスバギイといった小型種の親玉みたいな大型モンスターとか、ダイミヨウザザミ、ジユラドトスといった水場の近くにいる大型モンスターなど、結構な種類のモンスターの狩猟に成功した。

その中で苦勞したのはプケプケと呼ばれるモンスターである。

何が嫌って、毒を「ブエツ」って感じで吐いてくるのだ。

喰らったら毒消しで対処するしかないのだが、これがまあ面倒くさい。

何より、変形するあの尻尾。

……変形後の尻尾の配色とか、神様がいたずらしたんじゃないかっていうぐらい気持ち悪い。

倒すには倒せたが、今回は毒が効きにくくなる装備などをつけて挑みたい。

そして早急に終わらせたい。

精神的にキツイ。

そんなこんなで、一応討伐クエストをリタイアすることはほとんどなかったが、二つだけ例外があった。

まずはフルフル。

目は退化したのか見当たらない、全身真珠色の皮に覆われている4足歩行のモンスターなのだが……見た目はもう気持ち悪いの一言。

そのくせ、尻尾や首が「ニョインっ！」って感じに素早く伸びるものだから、攻撃が中々かわしづらかった。

というか一番攻撃を受けてしまった。

さらに電撃の攻撃を放ってきて、当たってしまったらしびれて動けなくなる。

シヨウコがいなかったら、俺は今頃フルフルの体内でゆっくり溶かされていたかもしれない。

……うええええ。

そしてフルフルが足を引きずって巢まで帰ろうとするのを追いかけていくと、何と、子育て真っ最中であることが判明。

気性が大人しいフルフルが暴れているということとクエストを受注したのだが、元々はワサドラ近辺にあまり見られない結構希少な種である。

とりあえずスタートのキャンプ地点に戻り、シヨウコを使いに出して確認を取らせ、クエスト自体が取り消しになった。

周囲の生態系をきっちり守るために、ハンターも時としてこういった選択をしなければならぬ。

これは教官との講習で学んでいたため、事前の情報とも併せ、フルフルを見逃した方がいいのでは、と総合的に判断した。

これについては、ギルドの下調べがあまりよくできていなかったことも原因としてあるので、ハイビスさんを経由して、シガイアさんから正式に謝罪を受けた。

でも仕方がないことだと思う。

もともと周囲の生息数が少ない種なのだ。ギルドもまさか繁殖しているなど、知る由もなかっただろう。

そして、リタイアしたもう一つのクエストが、ラングロトラの狩猟である。

ラングロトラは、舌の長い飛び跳ねるアルマジロみたいなモンスターで、見た目はちよつとかわいかった。

でもこいつの出す唾液？ 体液？ はしびれてしまうため、油断は禁物。

バサルモスの出すビームに比べれば格段に遅いので、避けることはできた。

そんなこんなで、正面から対峙しないよう回り込みながら横つ腹を中心に攻撃していたとき、事件は起こった。

ラングロトラが、お得意の丸まり飛び跳ねびよんぴよん攻撃を始めた時。不規則に跳ねるボールのように地面を飛び跳ねるラングロトラが、突如として消えた。

というか、地面の下に落ちていった。

「ご主人様……？アイツ、どこ行つてん……？」

「……もしかして、地下があるのか!？」

落ちていった穴を見てみると、直径2、3mの円形に空いた地面が、30mぐらいの深さで崩落していた。

落ちていったラングロトラは、足を引きずりながら、暗い地下の中を進んで見えなくなっていた。

場所は草原の岩山の北部。

こんな事態はもちろん初めての俺は、シヨウコと相談。

「ご主人さま。悔しいですけど、地下の構造もモンスターの種類もわからんと突っ込むのは、正直お勧めはしません。ここはリタイアしましょう。」

「そうだよなあ。悔しいけど、そのまま報告するか。」

という結論に達し、俺たちはリタイア。

村に戻ってハイビスさんに説明した。

後から聞いた話では、数km程離れた川から続いている、天然の地下水路だったらしい。

今回俺がたまたま見つけたところは、いわゆる岩石地帯。その地下に大空間が広がっていた。

太古の文明の痕跡も見つかったとか。

ギルドはたいそうな慌てぶりだった。

結局、生態や地形の調査をするプロのチームが、首都から招かれることになったそう
だ。

ま、俺には関係のない話だなく。

などと思っていたら、一応第一発見者として、洞窟の名前を付ける権利があるということであった。

そんなもの興味はないので丁重にお断りをしたところ、「ならばこれを」とシガイアさんがお金をくれた。

白金貨なんて初めて見た。

なので、リタイアしたのに豪華な飯を食いに行くという、よく分からん一日となった。

そんなこんなで、失敗したり成功したりしながら、ようやくハンターとしてお金を稼げるようになってきた。

正直言うと、もう少し余裕がほしいところなのだが、今の実力じゃこんなものかな？とも思っている。

セツヒトさんが後払いでいいと言ってくれた武器の加工代金も、この前の遺跡のお金で払うことができた。

「儲かっているならー、お姉さん養ってよー。というか、金落としてけー。」というからか
いも受けたが、もれなくスルーしている。

今度、より強い敵に立ち向かうときは、また武器の相談に乗ってもらおう予定である。

だが、ハンターとしての生活が、ようやく軌道に乗ったかなーというある日。
とんでもない事件が起きてしまうのだった。

49緊急事態（笑）に対応しましょう。

宿「ホエール」での夜。

何時ものように訓練を終え、風呂に行き、就寝しようという時間。

明日は、水獣と呼ばれるロアルドロスの狩猟の日である。

ロアルドロスの情報を改めて見てみた。

【モンスター名】ロアルドロス

【種族】海竜種

【別名】水獣

【詳細】

水の豊富な地に生息する大型モンスター。海水でも淡水でも問題なく活動できるが、水が無いところでの生息はあまり確認されていない。数頭程の雌のルドロスに従えたハーレムを形成し、群れの長として君臨する。頭部の周りにある海綿状の黄色い鬣が特徴で、網目状の構造をしているそれに水分を大量に蓄えることができる。そのため、陸上でもある程度活動することが可能となっている。この水を用いたプレス攻撃は強烈

であり……

うーん。やはりすごいな、情報画面。

何故この画面が見られるのか。

実は今日、毒テングダケの採取クエストに行ったとき、偶然水場にいたのを見つけたのだ。

ただ見ただけで情報画面に情報入るかなー、なんて思っていたら、入った。

何たる力、ありがたい限りだ。

ロアルドロスとハーレム野郎だった。

さすがモンスター。人間とはやることが違う。

そのロアルドロス、周囲に10体は雌のルドロスがいた。

しかもマップのロアルドロスの数を数えると、そのエリアだけで5体もいたし。須く8〜10体は、メスを侍らせている模様。

10人近く女の子侍らすとか、すごいよロアルさん。

……………ちよつと頭にくるので、このハーレム野郎達は集中してボコボコにしたいと思う。

でもこれで準備が立てやすくなった。

巨体を生かしたのしかかりや水のプレスなど、立ち回りについて予習ができる。

また、水やられを引き起こすこともあるようで、ウチケシの実も必要になる。

そうした予備知識も助かる。

そこで、今日は採取も終わって村に帰ると、すぐに雑貨屋に行つて道具類を整えたのだった。

中々に忙しい毎日を送っているなあ、自分でも思う。

朝はランニング。

その後クエストの受注。

順調に行けば、その日の夕方には帰り、風呂、飯、翌日の準備、特訓、就寝。

超絶ブラックな職場環境だと思うが、シウコも楽しそうだ。

ハイビスさんに「働きすぎです！」と毎度のこのように注意されてしまう。

確かになあ。

それに俺が働けば働くほど、ハイビスさんの負担も増えるんだよな。

なので、専属担当のハイビスさんとは別に、ギフトのことはもちろん内緒で、受付できる人を一人増やしてもらうことにした。

このままではハイビスさんに申し訳ないし。
ちなみに、新しい受付嬢はヒナタさんだった。

同志である彼女なら、ギフトのこともある程度話をしてもらいたいとは思ったが、

「私のように巻き込まないでくださいね！ソウジさんの専属は……わ、私なんですからね！」

とハイビスさんに止められた。

そんなに強調するとは、シガイアさんに何か言われたのでは？と勘ぐってしまう。

あの人、ちょっと油断ならないんだよねあ……。

それに、確かに働きすぎかなと思うので、3回のクエストに1回の頻度で休むことにした。

シヨウコは「ウチは平気ですよ！むしろご主人さまと一緒にいさせてください！」と言うので、休みの間も宿に寝泊まりすることを許可することに。

最近はドールと一緒に寝ることも多い。

仲良きことは素晴らしき哉。

……ただどっちが起こすとかどっちが先に撫でてもらうとか、そんなくだらないことで争うのはやめてほしい。

それを止めようとしてもしないホエールさんもなんとかしてほしい。

シヨウコとは四六時中一緒にいるので、村中の人が俺たちをワンセットとして扱って
くる。

俺一人の時などは、「あれ？シヨウコちゃんは？」「シヨウコちゃんはいないのか
……。」「シヨウコちゃんはあはあ。」などとのたまう輩もいる。

最後の奴は軽くぶん殴っておいた。

シヨウコは俺が守る。

しかし、確かに忙しい。

何せ、自分の成長が楽しいのだ。

おっさんの頃には到底無理だったことが、今はできる。

失敗も多いが、それがとても嬉しいし楽しいのだ。

成長は、剣技だけではない。

もちろんその成長も楽しいが、ハンターとしての仕事の成長も味わえている。

充実しているな、と思う。
油断はしないが。

明日のロアルドロス討伐の後は、ルーティンの、休みを取るつもりだ。
と言つても、セツヒトさんのところに行く予定ではあるのだが。

……うーん、ワーカホリック気味だな。

流石に心はおっさんなので、こういう客観的な視点もそれなりに鍛えられている。
たまにはのんびり過ごすのもありかも知れない。

そんなことを考えながら、今日も安らかに眠りにつくのだった。

* * * * *

「………ジさん、ソウジさん。」

「ん——……。」

誰かの声がする。

ああそうだ。もう朝か。

最近では疲れていて、眠りが深い。

聞こえる声は、多分ドール。

最近、シヨウコとどっちが起こすかで勝負しているんだよなあ。
今日はドールがジャンケンに勝ったのか。

まだ眠いが……うん。起きよう。うまい朝食が待っている。

「ソウジさん、起きて。」

「はいはい……起きますよー。」

体を起こす。

目の前を確認する。

何だかドール、大きくなったな。

「おはようドール。……今日はじゃんけんに勝ったのか？」

「じゃんけん……そ、そうそう。私、ドールよー。」
「そうか………んん？」

ドール……ドールさん!?

何だか大きく………なりすぎじゃない!?
ていうか………。

「ど、どなたですか？」

「あらー、もう気づいちちゃった? まあ流石にわかるか。おはよー、ソウジくん。」

「は、はあ。」

目の前にいる人は……誰でしょう。

何だかドールっぽい、でも違うような……。

頭が冴えてきた。

この人……もしかして………。

一気に目が覚めた。

おいおいおい。

おいおいおいおい。

ちよつと待て。

この、目の前にいる、ドールと瓜二つだが全く違う……主に胸の辺りの大きさが違う、この女性は……。

「お、お母さん!?!」

「あらあら、もう私をお義母さんだなんて……。ドールも中々隅に置けないわねえ。」

「ちがうわっ! あ、違いますよ!」

やばい、話が進まん。

頭が絶賛混乱中。

「は、初めまして。この宿でお世話になっております、新人ハンターのソウジと申します

！」

「とても礼儀正しいわ！百点！」

「何の点数ですか！」

「いいツツコミね、これは逸材だわっ！」

いかん！

「ここに来てマシヨルク教官に鍛えられたツツコミ力が遺憾なく発揮されている!？」

「……あ、あの。何故俺の部屋に——」

ドタドタドタドタ！

ガチャツ!!

「ちよつ、ちよつとお母さん！」

「あらー、ドール。おはよう！」

「何勝手にお客さんのお部屋に入っているの!？絶対ダメって、約束したでしょ!？」

「少しくらいいいじゃないの。だってあれだけ手紙でおノロケ連発していた『ソウジ

さん』つて人に、ご挨拶したくて〜。」

「ちよつ、それは言わないやくそ——」

「まあ、なるほどなるほどねえ。雰囲気は真逆だけど……いい男っぷりはあの人にソツクリね！ドールがすk——」

「お母さあん!!!」

ドールがすごい音を鳴らして部屋に入ってきたと思つたら、すごい剣幕で怒つてい
る。

グツと母親の腕を掴んで、ドアまで引き込むドール。

そんな大声出せるのか、ドール。

「今なんかお母さん言いかけてましたけど。」

「そうなのよ、この子つたらね、いつもやり取りする手紙で、もうゲシユタルト崩壊する
ぐらいソウジさ——」

「お、お母さん！下に行くよ！付いてきて！」

「えつ、でもまだ——」

「き・な・さ・い！」

「ああんー！」

腕を引っ張るドール。引かれていくお母様。

……………いや若いな！お姉さんでもおかしくないわ！

あれ？ドールのお母さんって、何している人？

ていうか、うーん……………いたのね。

……………とりあえず着替えて飯食おう飯！

寝間着から服にギフトでチェンジして……………。

あれ？何か忘れているような……………。

「あれ？シヨウコは？」

そうだ、シヨウコがない。どっか行ってるのか？

と思っていたら、ドアをノックもせずに入るアイルーが一人。

シヨウコだ。

「ご主人さまー。今日はジャンケンしてませんが、やはりオトモである私が起こしに参りましたよー……つて着替え中!?失礼しましたご主人さまー……起きるの早ないですか!」

「ついさつき、強烈に起こされた。」

「ま、まさかドールちゃんに!?むうう……さすが、あの娘は油断できひんわ……。次は負けへん!」

「いや、違うぞ。」

「ほへ?」

間拔けな顔をするドール。

さつきの俺を見ているかのようにである。

「起こしに来たのは、ドールのお母さんだ。」

「……………へっ!」

うん。そうなるよな。

そこからシヨウコに説明するのに、少し時間がかかった。
いや、説明も何も、俺もよくわからんのだが。

……まあいいや！とりあえず朝ごはん食べよう！
気を取り直した俺は、食堂に向かうのだった。

50ついていきましよう。

回想。

少なくとも、俺が中学とかの頃には、俺の母さんはかーちゃんだった。

何言ってるか分からないと思うが、まあつまり、おばちゃんだった。

平日、ワイドショー見ながらせんべいをボリボリ食ってブツブツ言ってる、まーステレオタイプかーちゃんだったわけだ。

別に不満に思ったことなど無い。

それが普通だし、どこの友達のところのお母さん方も、漏れなくかーちゃんだったし。

なので、よくドラマやアニメにいる「美しいお母さん」なんて、もはやツチノコレベルの存在であった。

では、目の前にいる人は？

俺とドールとシヨウコとホエールさんと、いつもの四人と共に朝ごはんを食べているこの美しい人は？

何とドールのお母さんというではないか。

見つけましたよ、ツチノコ。ありえない存在。

美しいお母さんがここに！

「うーん！ドールちゃんのご飯って、やっぱり一番美味しいのよね。ザキミーユシテイってなんでもご飯美味しいけど、これには敵わないわ！」

「お母さん？」

「は〜い？」

「そ、その。褒めてくれるのは嬉しいんだけど……まずはソウジさんに謝って。」

「あらあら、そうね。ソウジくん？」

「は、はいいい！」

なんで緊張してるんだ俺。

というか家族の朝食に紛れ込んでるみたいなこの感じ、いいのか。

ドールのお母さんは、Yシャツとタイトスカートという、できるキャリアウーマンスタイルをビシツと整え、俺に向き直った。

うん、スタイルいいです。

「自己紹介がまだでしたね。ドールの母、ミヤコです。……先程はすみません。いくら身内とはいえ、朝から起こしに行くのはさすがにやりすぎでしたね。お詫びします。」

「い、いえいえ。気にしていませんから………身内？」

「ええ、ドールちゃんは娘でしょ？そして、ソウジくんはその——」

「おかーさん!？」

「ひやつ！も、もう。冗談じゃないの〜。」

「冗談に聞こえないの!？」

宿「ホエール」の朝ごはんは、大体いつもシヨウウコがうるさくしている。

「おいしいです〜!」「ウチ、ドールちゃんの味噌汁を毎日飲みたいわあ!!」とか何とか言いながら騒がしく食べている。

それに「シヨウウコちゃん？それ言う人、違うよ。」とかよくわからんツツコミをする。ここまでがデフォ。

だが今朝は、お母様のマシンガントークが止まらない。

ドールのお母さん、ドールとは正反対の性格だ。

「…………え、えーっと。ドール？」

「あ、ご、ごめんね、ソウジさん。実は、この時期にお母さん帰ってくるんだ。今年は少し遅れてね。」

「あー…………なるほど。」

この時期に。

…………おそらく、ドールのお父さんの命日のことか。

だとしたら、少し前のことだから確かに遅れてる。

「いつも旦那の命日に間に合わせるんだけど、ごめんねドール。お母さんギルドの仕事、なかなか終わらなかったの…………。」

「そ、それはいいって。気にしないでよ。」

ん？ギルドの仕事？

「ミヤコさんって、ザキミーユシティでギルドの仕事をされているんですか？」

「そうなのよ。これでも偉いほうなのよ？あ、そうそう！ソウジさん！こっちでも少し

話題になったのよく？完全新人でいきなりHR3なんて、前代未聞だし！」
「あ、そうなんですネ。」

やっぱりすごいことなんだよなあ。

うーん、HRは数値として分かりやすいけど、実感がわかない。

そんな時、シヨウコが話に割って入ってきた。

「ミヤコさん……やったっけ？初めまして、ソウジさんのオトモアイルーのシヨウコです。よろしくおねがいます。」

「あらあら……礼儀正しいアイルーちゃんね!!」

ガバツ！

「フギヤツ！」

「うーん、この肌、この耳の毛並み……あなた、いい仕事してるわね……。」

ナデナデ。

スリスリ。

急にシヨウコに抱きつき、触りまくるヒナタさん。

おお、撫でるの上手いな！

だが、シヨウコが固くなっている。

ミヤコさん、それは正解ではない……。

相手が嫌がるナデナデ、それはただのエゴに過ぎない！

「ふにゃー！やめー!!」

「あんっ！」

ほら、シヨウコが飛び退いて俺の後ろに隠れてしまった。

「あらー、つれないアイルーちゃんね。」

「お母さん！シヨウコちゃんに何てことするの!!」

「……スキンシップ？」

「もはやセクハラでしょ!!」

うん。

このお母さんがいると、ドールはツツコミ役に回るんだな。
いい発見をしたぜ！

……冗談は置いといて。

こんなに賑やかな「ホエール」の朝食は初めてかもしれない。

シヨウコがいると賑やかなんだが、1人うるさい感じだもんな。

今日はみんな騒いでいて……何か、うん。

楽しい。

心なしか、終始ブンブンしているドールも、俺には嬉しそうに見える。

気のせいではないだろう。

「ほっほ。やはりミヤコさんが帰ると、家が明るくなるの。」

「ホエールさん。」

「いつも命日には帰ってくるんじゃがの。間に合わなかったところに、遺跡の大発見があったとかで、かなり遅れてしまったそうじゃ。」

「あー……。」

俺が原因だった……。

すまん、ドール。

ホエールさんはいつも通り淡々と食べ終わったあと、他の宿泊客の対応を始めた。
ドールも通常営業に戻る。朝は特に忙しい。

「じゃあ、俺たちもそろそろ行くか。」

「はいー！」

「それじゃ、ミヤコさん。俺たちギルドに行くので。」

ミヤコさん、と呼ぶことにした。

今日はロアルドロスの狩猟だ。朝の騒動でランニングをサボってしまったが、ここから通常営業といこう。

そんなことを考えていると、ミヤコさんが思いがけないことを言い出した。

「あー、ちょっと待ってー！ソウジくん！」

「えっ、何ですか？」

「ギルドでしょ？私も一緒に行くからね。」

「……は？」

思わず失礼な返しをしてしまう。

「えっとね……お仕事なのよ、ソウジ君と一緒にギルドに行くようにって。じゃあドルーお母さん行ってくるわね。」

「うん、わかった。」

「お父さんのお墓参りは、帰ってきてから行こうね。それじゃ、ソウジ君。行きましょう！」

「は、はい。分かりました。」

ミヤコさんは、目の前の朝食をきれいに平らげた後、すぐに出口まで向かっていく。俺とショウウコは慌てて付いていく。

……あ、ドルを撫でてないぞ。

振り返ってドールを見ると、同じように目があった。

ジェスチャーで「行って行って！」と促している……今日はいいのか？

……まあ確かに、親に見られたいものでもないわな。

俺はコクリと頷くと、ミヤコさんとシヨウコを追いかけながら宿を出ていった。

ミヤコさん歩くのはやいな！既に20m近く離されている。

俺は急ぎながら、すっかり慣れてしまった大通りを小走りで進んでいった。

・・*・*・*

ギルド前に着いた時は、既にハンター達で大混雑だった。

朝遅れてしまったな。ハイビスさんを見つけるのも一苦労しそうだ。

ミヤコさんの方を見る。

「ミヤコさん、じゃあ俺達はこれで――」

「ささ、ソウジ君とシヨウコちゃん。シガイアさんのところに行くわよ！」

「えっ!？」

「このギルマスよ?知らない?」

「いやいやいや!知ってますけど、なぜ俺たちも!？」

先程から何か噛み合わないと思っていたが、なんだ?

ミヤコさんは俺の手を掴んで、グイグイと引っ張る。

反対の手はシヨウコを掴んでいる。顔が渋いぞ、シヨウコ。

「ミヤコさん、俺たち今からロアルドロス討伐のクエストを受けるつもりだったんですが。」

「……ごめんね。強引で申し訳ないけど、付いてきてほしいの。」

「は、はあ。」

予定は狂うが仕方ない。

朝もだいたい遅くなってしまっている。むしろ今日を休みにしておいて、明日ロアルドロスを狩るか。

高度な柔軟性をもって臨機応変に対応しよう。

しかし、ミヤコさんが俺たちを強引にギルドマスターの部屋に呼ぶ理由がわからない。

分からないが、ドールのお母さんということ、ギルドのスタッフであるという2点において、俺は付いて行かざるをえない。

まあ、なるようになるか。

・ * * * *

人生二回目となるギルドマスターの部屋の入り口は、前回と変わらず厳かだった。

威厳があるところって、委縮してしまう。初めてやってくるシヨウコも、尻尾を縮こまらせている。

「(ご主人様……ウチら、何か……しました?)」

「(さつきから考えてるんだがなあ……。もしかしたらギフトとかそこら辺の話になるかもしれない。先に伝えておくが、俺の力の事はギルドマスターは知っている。ミヤコさんは知らない。その辺、気を付けてくれ。)」

「(はいっ！ウチしやべらんようにします!)」

ヒソヒソと話す。

いや、しゃべってもいいとは思いますが……シヨウコは黙っていた方がいいかもな。うん。

沈黙は金。

ミヤコさんがドアにノックした。

「ザキミーユ本部より参りました、ミヤコです。」

「どうぞー。」

ガチャツ。

部屋に入ると、立ち上がって歓迎するポーズのシガイアさん。

思いつきり目が合うと、ニツと笑ってきた。

うーん、意図がよく分からんからこっちも笑っておこう。

ナイスミドルと中身おっさんが笑い合うという何とも不思議な時間。

シガイアさんはミヤコさんに向き直ると、話を始めた。

「ミヤコ総務長、お久しぶりです。」

「その呼び方やめてください、シガイアさん。いや、ワサドラ支部ギルドマスター。」

「いやいや、何を言うんですか。その若さで役員クラス。畏まって当然でしょう。」

「本当にやめてください……もうっ、シガイアさんったら。」

二人が開口一番、お互いをヨイショしあっている。

あれだな、こういうのを既視感って言うんだな。

見たことあるもの、こういうのを。前世で。

シガイアさんがこちらに向く。

「ソウジさんも、お久しぶりです。前はわざわざ来てもらってすみませんね。」

「とんでもないです。お世話になってます。」

「ハンター業の方も順調なようですね。」

「お陰様で、なんとかやっています。」

「流石です。下位から上位への間、ソウジさんぐらいが最も難しいところなんですがね。」

期待の新人ですよ。」

「やめてくださいよ、まだまだ実力不足ですから。」

これも既視感。

ああ、大人な付き合いを思い出してしまふな。

謙遜の文化、日本。

どこも似たようなものなんだなあ。

しかし妙な三人が集まってしまった。

ミヤコさん、総務長って言われてなかった……？

名前だけではわからないが、相当いい職についているのでは……。

「ごめんねえ、ソウジくん。強引に連れてきちゃって。……怒ってなあい？」

「いやいや、怒りませんよ。問題ないです。でも、理由を知りたいですね。」

「ええ、勿論よ。シガイアさん、私から説明しても？」

「はい、よろしくおねがいします。」

何やら説明があるとのこと。

なんだろう。雰囲気的に悪いことではないと思うんだが、ちよつと緊張してしまう。

シヨウコはずつとピーンつと尻尾を伸ばして直立不動。

目はアワアワしている。

……うん、緊張ほぐれた。

「えつとね……、ソウジくん。」

「はい。」

間を空けて話し始める。

「……あなたに、ザキミーユ本部所属のハンターになって欲しいんだけど、興味はない？」

ミヤコさんからの言葉は、想像を越えてとんでもないことだった。

51 庄迫面接（二回目）を切り抜けましょう。

「いきなりごめんね、ソウジくん。」

「い、いやいや。ちよつと混乱しちゃつて。」

「いいのよ。当たり前よね。うん、説明するわ。」

ミヤコさんに、首都に興味はないか聞かれた。

理由がわからん。

ミヤコさんは、応接用の椅子に足を向けた。

膝の高さの大きな机は石造り。というかギルドマスターの部屋は、床もピカピカの石造りである。

コツコツと、ヒールの音が響くと、革張りのソファにゆっくりと座るミヤコさん。

続いて、シガイアさんがその横に。俺とシヨウコが対面に座った。

シヨウコは靴を脱いで、なぜかソファに正座をしている。

「まずは、……下位ハンター、HR3、ソウジくん。」

「は、はい。」

急にかしこまった口調で話始めるミヤコさん。

「前代未聞の新人、いきなりのHR3クリア。1日1クエストというとてもない依頼完了スピード、しかもその内6割強がタイム更新。……午前中に大型の討伐を終えて帰ることもしばしば。そして重症履歴は無し。」

「え、ええと——」

「さらに言えば、納品されるアイテムの保全度。損傷も無く9割が完璧な状態。ワサドラでは、ソウジくんが採取したというだけで付加価値が付くようですね。シガイアさん合っていますか？」

え、そうなの？

シガイアさんを見る。

「……ええ、商人が直接私に話を持ち込むほどではありませんね。」

「うん、そこも調査結果と変わらないわね……。」

そうなのか。知らなかった。

アイテムは基本、すぐにポーチに入れるしなあ。そりゃキレイに持って帰れますよ。運搬アイテムが何故ポーチに入らないのか、そこだけが疑問だが。

調査が必要なアイテムも、自分のギフトをお手本にするやり方で、かなり上手くなつたし。

ミヤコさんが続ける。

「………そして最も驚嘆すべきは、大型モンスターの狩猟スピードではなく、その選択。周囲の生態系には慎重に注意を払っているギルドでさえ、大量発生や個体数の減少を把握しハンター達に周知するのに最低二週間はかかる。………にもかかわらず、ソウジくんの狩猟モンスター選択は、常に正しい。それだけモンスターを狩れば、生息数の歪みが出てもおかしくないのだけど……。この辺、シガイアさんが絡んでいると思っっていますか、違いますか？」

「ええ、多少は。ですが、仰る通り、ギルドの調査部にも限界があります。」

「………では、ソウジくんのクエスト選択に、ギルドはほとんど関与していないと？」

「ええ、その通りです。」

……しまった。

俺のギフトのマップ上に現れるモンスタアの点。

縮尺を変えれば、モンスタアの生息数やアイテムの現存数が丸わかりなのだ。

生態系になるべく変化の無いよう、ハイビスさんやヒナタさん、シガイアさん達ギルドの方へ、負担にならない様気をつけてクエストを選んでいたのだが。

ここに来て裏目に出たか。

やりすぎてしまったのかも知れない。

シガイアさんも、まいったなと言う顔をしている。

嘘はつけそうにない。

「ソウジくん、今日はロアルドロスの討伐をするつもりだったのよね。」

「……はい。」

「……最新の調査では、このワサドラ周辺は、ロアルドロスは討伐は慎重を期すべきモンスタア。前年の雨の量は、平年より少なかったため、個体数の減少が懸念されていますからね。……それを何故、今？」

「……。」

慎重に言葉を選ばなければならない。

おそらく、ミヤコさんは、俺を疑っている。

俺の過ぎた力を感じて、本部からやってきたのかもしれない。

教官はその豊富な経験と類まれな能力から、ハイビスさんやシガイアさんはその恐ろ

しいまでの観察眼と研ぎ澄まされた第六感から、俺の正体に迫った。

そしてミヤコさんは、データを集め、分析して、違和感を感じた。

俺の狩猟履歴は、おかしいと。

だから俺を探りに来たのか？

……ミヤコさんを信用していないわけじゃない。

ドールのお母さんだし、別に印象も悪くない。

だが、ここでギフトの話はするべきではない。

ごめんなさい、ミヤコさん。

俺の力があなたやギルド本部とやらに悪用されるかもと疑っているわけじゃない。

……ただこの過ぎた力は、知っている人が少ないほうがいい。

万が一にも、俺のせいでミヤコさんに危険が及んだら、ドールに顔向けできない。

ミヤコさんは、本部ギルドの人間。

少なくとも、このかしこまった口調のミヤコさんは、あちら側の人だ。
真実を隠して、事実を話そう。

「……以前、沼地で毒テングダケを採取した時、違和感を感じたんです。」

「違和感？ どんな？」

「ルドロスを、よく見かけるなって。」

これは嘘ではない。

マップ上で、ルドロスの数が多かったのは事実だ。

それを待たずロアルドロス達に苛ついたらんだけし。

「ロアルドロスも見かけて……そこまで深いエリアでは無かったので、よくいるモンスターなのかな、と。それで、討伐することにしました。」

「なるほど……シガイアさん。近々のロアルドロスの個体数はどうなっていますか？」

「……はい……通常と変わらないとの報告ですが、確かにハンター達の狩猟数は俄に増加してますね……。」

シガイアさんが何か資料を取り出し、確認している。

チラリと俺と目が合う。

「話すなよ？」ってことかな。

うん、大丈夫。言うつもりはない。

でも嘘をつくつもりもない。

「……そこに違和感を感じただけ、ってことかしら？」

「はい。ギルドの話だと、ロアルドロスって2、3頭のハーレムを作るって聞いていたんです。でも俺が見たときは、明らかにそのハーレムに10頭近く雌がいました。」

「そこでソウジくんは危機を感じて、狩猟を——」

「ああいや。違います。単にムカついたんです。」

「……へ？」

キヨトンとするミヤコさん。

でもこれも事実だしなあ。言っちゃえ。

「……そんな大人数のハーレム築くとか、ムカつきませんか？それで、やっちやおう、と。」
「……………」

黙りこくる二人。

「……ハハハハハ！」

シガイアさんが笑う。

「ソウジさん！その通りだ！確かに男として、そんな奴は制裁を加えたくもなるなあ！
ハハハハハ！」

「ですよね？しかも2、3頭ならまだしもですよ？そんな数、イラツとしますよね。」
「ハハハハハ！やはりソウジさん！君は素晴らしいな！」

爆笑のシガイアさん。

その横で呆れ顔のミヤコさん。

すんません、でも事実です。

「……まったくもう、男の人って……。」

「す、すみません。」

「……いいわ、何となく分かりました。ではソウジくんは、ギルドからの情報を元にしつつ、自分で判断して討伐するモンスターを選んでいたのね？」

「ええ、生態系とかよく分かりませんし、まずいなら誰か止めてくれるかなー、程度に考えていました。」

「………ラッキーが続いただけ、と思えばいいのかしらね。」

ちよつとごまかした。

「少しは生態系のことを考えています。でもマップの精度が凄すぎて、調整が行き過ぎました。」が正解だ。

「……ふうー。じゃあ、本題ね、ソウジくん。」

「あ、はい。」

なんとか誤魔化せたかな？

シガイアさんがウインクしてくる。

オツケーです。うまくかわせました。

そして、ここからが本題。

「私は、ギルド本部の総務長をしています。もちろん人事関係の取りまとめも、私なの。だから、これはギルド本部の意向。ソウジくん一応、聞くわね。」

「はい。」

「……将来性に期待し、首都ザキミーユシティのハンターズギルドに招待するわ。HR

3、ソウジさん。」

「……。」

「……一応付け足すけど、これは強制ではないわよ？もう一つ付け足すと……。」

「……付け足すと？」

「……母としては、ドールと離れてほしくは、無いかな？つて。」

公私混同である。

だが、クスッと笑うミヤコさんは、とても魅力的ですらあった。

……うん、ミヤコさんってこういう人なんだろうな。
シガイアさんが突っ込む。

「……ミヤコさん、その発言は危ないですよ？」

「えー、いいじゃないですか。私、総務長である前に、一人の母親ですし？それにほら、ソウジくん。」

「は、はい。」

「あなた、この村。……好きでしょ？」

唐突な質問。

だが、答えなど、決まっている。

「ええ、勿論です。何の身寄りもない俺を、これ以上ないほどに優しくしてくれた。」

「……………」

「俺の実力を買って、お誘いをしてくれるのは嬉しいです。でも、首都に行くつもりは無い。」

「……………ええ。」

「なので、申し訳ないですが、この話お断りします。」

行くわけがない。

右も左も分らない俺を、優しく受け止めてくれたこの村。

ホエールさんにドールさん、ハイビスさんやヒナタさん、シガイアさん、教官、セツヒトさん、シヨウコやオスズ、そこに門番のおじさんや御者の渋いおじさんを加えて。

俺は、ここが、ワザドラが、好きだ。

その恩返しを、俺はまだしていかない。

だから俺は、ワザドラを離れない。

ミヤコさんは微笑むと、断った俺に嫌な顔ひとつせず話し始めた。

「……そうよねー！ やつぱり、自分を受け入れてくれたトコロって、大切よね！」

「ええ。すみません、ミヤコさん。」

「いいのよ。……多分あなたがここを去ると、悲しむ人がいっぱいいるわ。別に死ぬわけでもないんでしょうけど。……ハンターって、偉いから。」

……ミヤコさんが、遠い目をしている。

ミヤコさんも、旦那さんを亡くしているから。

別れる辛さは、多分誰よりもわかっているよな。

「……うん！難しい話は終わりにしましょう！……ソウジくん、最後に一つだけ。」

「はい。」

すっかり朝見た時の顔に戻ったミヤコさん。

チャーミングな笑顔が素敵だ。

「世界は、広いわ。あなたが未だ知らないモンスターが、群雄割拠して、熾烈な生存競争を繰り広げている。その中で私達人間は、弱い存在……でも、生きなければならぬ。」

「……………」

「優秀なハンターを、よりよい環境でより強く立派なハンターにして、各地に送り出す。人間がこの世界で生きるために。それがギルドの大きな目的の一つ。そういうギルド

側の意図も少し汲んでくれると嬉しい。……あなたの活躍、期待してます。」

「……………はい、分かりました。」

「……………うん！よろしい。」

ニコリと笑いかけてくるミヤコさん。

いかんいかん、思わずドキリとしてしまった。

「さーて！私は残りの仕事、とつとと片付けようかしら。」

そう言うと、ミヤコさんはシヨウウコに向き直った。

「シヨウウコちゃん、ごめんね。ご主人さま、勝手にスカウトしちゃって。」

「え、エエですエエです。ウチ、ご主人さまがどこに行こうと付いてくだけですから！」

「ふふっ、そう？じゃあ仲直りのナデナデを——」

「ふわっ!!にやっ！」

サツと俺の後ろに隠れるシヨウウコ。

「フー!!」

「あらあ、嫌われちゃったわねえ……。」

シヨックだろうよ……。可愛いものに否定されるなんて……。

シガイアさんが笑う。

「さ、ミヤコさん。ビジネスの時間ですよ。」

「ええ、シガイアさん。じゃ、ソウジくん! また後でね!」

「はい。それでは失礼します。」

礼をして部屋を出る。

中から「遺跡の権益」とか「ルドロスの間引き」とか、色んな言葉が聞こえる。

聞こえないように早急に去ろう。

……ドアに耳を立てようとするとするシヨウコを引っ張って、俺はギルドを出ることにした。

「ご主人さま、今日はどうしますか？」

「うーん……。」

既に日も高々と上がろうかという時間。

……うん、決めた。

「シヨウコ。」

「はい！」

「明日の休みを繰り上げよう。今日は休み。……また明日から頑張るか。」

「……はい！分かりました！」

いつものルーティンも崩れたし、今日はやめとこう。

沼地のハーレムモンスター、明日まで首を洗って待つてなさい。

そんなことを考えながら、これからどうするか算段を立て始めるのだった。

52 防具を強化しましょう。

日も昇ってきた。

イシザキ亭で昼を済ませ、シヨウコとは一旦解散した。

久々に集落に顔を出すらしい。

ロアルドロスの討伐に向けた準備は昨日済んでいる。

そのため、今やることは特に無いと言っている。

トレーニングに勤しんでもいいが、そこまでやる気も起きない。

「ミヤコさん、仕事になると性格変わるタイプだな……。」

先程までいたギルドマスターの部屋を思い出し、ポツリと漏らす。

仕事モード、とでも言うのか。

ミヤコさんの変わりっぷりが、凄かった。

シガイアさんも、その辺分かりやすかった。まああの人の場合、素がどっちがわから

ないんだけども。

だが、さっきのミヤコさんからの圧迫面接は、上手く切り抜けられた……と、自分では思っている。

……上手くいったよな……？

後で確認したい。

自己採点はアテにならない。

今度会ったら、シガイアさんにこつそり聞いてみよう。

さて、これからどうするか。

「あ、そうだ。」

誰が聞いてるわけでもないのに、独り言を発する。

いや、聞かれてたら恥ずかしいんだけども。

(セツヒトさんに武具関係見てもらうのもアリかもなあ。)

いつでも来てねー、なんて言われてたし。

明日の狩猟に向けての準備にもなる。

休みにはなっていないけど。

(俺にはまだ、仕事モードの切り替えは難しそうだな……。)

「デキる人達の仕事モードの切り替えを羨みながら、俺はセツヒトさんの店に足を向けた。」

* * * * *

「セツヒトさん？入りますよー？」

店に到着した俺は、ドアを開けて中に入る。

アイテムポーチの中に入れていた大きな綿の袋に、装備品の数々を突っ込んでおいた。

ギフトの力を見られないようにしなければ。

大きな袋を抱えながら、受付に向かう。

「セツヒトさん、ソウジです。いますかー？」

「ふあー……いるよー。ちよつと待ってねー。」

大声で尋ねると、返事が聞こえた。

声がかすれてる。

………寝てたな。

「……お休み中なら日を改めますが……。」

「わーわー、待って待ってー。いーまーいーくー……よつと。」

「おわっ!!」

天井からセツヒトさんが落ちてきた。

繰り返し、天井から、セツヒトさんが、落ちてきた。

……いやいや、何してるのあんた。

「セツヒ——」

「せつちゃんー。」

「……せつちゃんさん、仕事サボるのも程々にしたほうがいいですよ？」

「でもでもー。この店主は私だしー？私しかないから、……自由？」

「いや、聞かれても。」

何回か来たことあるこの店。

武具はキレイに整備され、配置も美しい。

なのに店主は、こののんびりのほほんさん。

誰が想像つくだろうか。

そして、その店主が真上から降りてくるなんて、誰が想像つくだろうか。

セツヒトさんは、その長い銀髪を整えながら、話し始めた。

「やー、ソウジー。何日かぶりー。元気ー？」

「元気です。セツ……せつちゃんさんも、お元気そうで。」

「そりゃねー！新しく開発した昼寝部屋がねー！これがまたいいんだよねー！」

「昼寝部屋。」

見上げる。

上にはポツカリと空いた穴……2階に続いているのか……？
思わず覗いてしまう。

「お、何ター？興味津々？」

「いやいや、違います。」

「お姉さんの寝床見てみたいとか……ソウジ、すけべー。」

「違いますって！きよ、今日は装備を見てもらいたくて来たんです！」

「おー？これー？」

俺のでかい袋をヒョイツと片手で持つと、中の装備を作業台に並べ始めるセツヒトさん。
ん。

この細い腕でどうして持ち上げられるのか……興味が尽きない。
いかんいかん、本題へ移ろう。

「明日、ロアルドロスを狩るんですが、装備自体の確認をしてもらったことつて今まで無

く。て。」

「あー、なるへそー?」

「今日はたまたま空いてしまったので、見てもらおうかと。」

「ふんふん……めっちゃキレイだよなー、ソウジの装備って。あ、でも傷はつけーんと、ソウジの匂いもするね。気にならないぐらいだけど。」

そう言いながら、一つ一つ真剣な目で点検し始めたセツヒトさん。

匂い、するよな……。少し恥ずかしい。

……集中しているので、静かにしておこう。

今日もシルバーのロングヘアーが、白い襟付きのシャツによく似合っている。

スキニータイプのジーンズは、スタイルの良さを際立たせていた。

……こうして黙っていれば、男たちが放っておかないのでは、と思う。

20分後。

「おーまたせー。いやーキレイキレイ。あんまり言うことないっすわー。」

「あ、そうですか。それは良かった。」

まあ、綺麗さには自信がある。

ポーチには、自動でキレイにしてくれる機能が備わっている。

ある程度、ではあるのだが。染み付いた匂いとか傷までは対処してくれないらしい。セツヒトさんが続ける。

「ただねー……ちよつと耐性に不安が残るかなー。」

「耐性？」

あまり聞き慣れない言葉。

「そーそー。ロアルドロスでしょー？この装備、水耐性が低いのさー。んでー、ちよつち、不安かな。」

「……ダイミヨウザザミの時も、そう言えばかなり痛かったような……。」

「あー、あの水アタック？うん、あれより痛いかもー。」

「マジですか……うーん……。」

困ったぞ。

ザザミの時は、「今から水出します！」って構えで分かりやすかった為、避けることも何とかなった。

しかしこのロアルドロス、首を振りながら水を乱れ打ちしてくると〈情報画面〉で確認している。

下手したら、1発や2発、食らってしまうかもしれない。

「んー、壊れるってことはないと思うんだけどねー。」

「……耐性を上げることって、可能なんですか？」

「できなくはないよー？でも、装備を変える方が、よっぽど建設的ー。」
「マジすか。」

正直言おう。

俺はこの装備を気に入っている。

まず、なんと言っても使いやすい。とにかく軽いし、素早さが命の双剣使いにとって、小回りがきかないのは致命傷だ。

それに、発動スキルも結構美味しい。

〈見切り〉

〈精霊の加護〉

〈防御〉

〈砥石使用高速化〉

この4つだ。

会心率を上げるスキルである〈見切り〉は、何とというか、こう「ズバツ」としつかり敵に当てることができる確率が上がる……らしい。

〈精霊の加護〉と〈防御〉は、俺の防御力を上げてくれるし、たまに敵の攻撃が全く痛くないときがある。

〈砥石使用高速化〉は、そのまんま砥石の使い方が上手くなる。

……なぜこのようなスキルが発揮されるのか、原理は全くわからん。

この世界の理と言えばそれまでなんだが、不思議でしかない。

それらを踏まえ、イケるところまではこの装備でいきたかつたのだが……ここいらで替え時がやってきたのかもしれない。

「……装備に愛着が湧くの、わかるよー？」

セツヒトさんが話しかけてきた。

「命を預けてきた、相棒だもんねー。……ソウジがこの一式を持ってきたときは、何の因果か、とか思っっちゃったけど。」

「えっ?」

「んー、いやー、こっちの話。」

気になることを言っただ、セツヒトさん。

「……セツ、せつちゃんさんも、この装備使ってたんですか?」

「……おー?女の過去をほじくり返す気かー?ソウジ、よっぽど私の事が気になるみたいだねー。」

「……。」

「……あー、マジトーン?……んー。あんまり人に話したことはないんだけどさー。まー……ソウジならいっかなー?」

セツヒトさんの過去が気にならないと言えば、嘘になる。

教官と何か因縁めいた関係らしいし、明らかにこの人は強い。

いつだか、シガイアさんが『百手』セツヒト』と言っていた。

だから、正直、過去を聞いてみたいとは思っていた。

でも……。

「せつちゃんさん。」

「んー?」

「……俺も、実はとんでもない秘密を持っています。おいそれと人には言えないレベルのやつです。」

「おー……うん。」

「セツヒトさんと対等な立場になりたい。セツヒトさんが過去を俺に教えてくれるのなら、俺だって言うべきだ。それがフェアってもんでしよう。」

「うん……。」

「そして、俺はまだそれを伝えるべき領域には達していない。」

セツヒトさんが言いくいような、過去を聞くのなら。

俺だって、ギフトの事を打ち明けるべきだ。
そして俺は、まだそのことを色々打ち明けられるほど、強くない。

「俺の秘密は、悪い奴らからすれば、喉から手が出るほどほしいようなやつです。」
「……………」

「だから、そんな奴らから、俺がみんなを守るようになるまでは……………」
「……………まではー?」

「……………せつちゃんさんも、打ち明けないでください。いや、めっちゃに気になるんですけどね!教官とのこととか!何でそんなに強いのかとか!」

すっごい気になるけど!

もう俺の野次馬魂が燃えまくってますけど!

セツヒトさんとフェアでいたいと思うから。

打ち明けるときは、俺が強くなった時だ。

「……………ふ、ふふ……………」

「な、何ですか」

「……かつこいいいやーん？ソウジー。」

「うわわっ！」

セツヒトさんが近づいてきたと思ったら、急に抱きついてきた。
繰り返す！抱きつかれた！

「えっ!?ええっ!?」

「うわー、ソウジー顔真っ赤っ赤ー。」

「いやいやいやいや！そりゃ赤くもなります！」

「んー、いやねー。かつこよかったのよー。」

「わ、分かりましたから！分かりましたから！離れて……力強っ!!あいたただただだっ!!」

「んー、よしよし。」

ポンポン。

とんでもない力で抱きしめられて頭をポンポンされた。

……うん、俺女の子ならこの人に惚れている。
なんてたくましいの……。

……で、でもわたくし、男の子ですよ！

セツヒトさんがようやく離れたのは、30秒ほどしてからだった。

心の中では名残惜しかったのだが、そうも言つてられない。

恥ずい。

「いやー。今のは効いたよー。キュンって感じー？」

「は、はあ。」

「……私とフェアとか、そんなこと言うやつ、居なかったからねー。やっぱ、ソウジー。
いいよー、キミ。」

うん、よく分からんが、良かったのかな。

「そしたらさー、その強くなるお手伝い、しよつかー。」

「へ？」

「この装備……ミヨシ村一式。確かに使い心地がいいんだよねー。わかるわかる。だから、装備強化しようかー。」

「装備強化？」

強化とな。

強くできるのか。

「うん。耐性を上げるんじゃないかって、防御の強さをそのまま上げるのさー。」

「な、なるほど……？」

「鎧玉っていうの使って、少し重くなるんだけどねー。」

「重く……。」

「そう。まあソウジなら大丈夫……かな？」

不安だ。

でも強くなるというなら……。

「あと、装飾品も付けるといいよー。」

「装飾品？」

またよく分からん言葉が出てきた。

「そそ、ソウジの装備、装飾品3つ付けられそうだから……耐水珠3つぐらい付けてみたらー？ ロアルドロスなら有効かもー。」

「装飾品って、付けると何ができるんですか？」

「そらあれですよー。好きなスキル……モリモリできちやう。」

「おお……。」

付ければパワーアップ的なやつか。

うーん………やって欲しい。

「せつちゃんさん！」

「はいはいー？」

「是非お願いします！」

「まいどー。……でさー……アイテムとお金、あるー？」

……必要なんですわね！

そりやそうだよ！無料なわけがない！

「お金はまああります。アイテムは何が？」

「んーとねー……水光原珠と、ヨツミワドウの上皮が3つずつにー、鎧玉いっぱい、つてトコかなー。」

「……………」

「お？ある感じ？」

アイテムの確認は、今すぐできる。

俺のギフトは、その辺の管理はめっちゃ楽だ。

だけど、ここでやるわけにはいかない。

セツヒトさんにはまだ打ち明けられてないしな。

そもそもモンスター素材はほぼ全てギルドに預けているし。

ちなみにヨツミワドウとは、バカでかいカエルのモンスターである。

ブニョブニョなのに力がめっっぽう強く、何だかお相撲さんのようであった。

「……承知しました！確認してきますので、少々お待ち下さい！」
「おー。待つ待つー。いつてらー。」

俺は、どつちが店の人かわからなくなる言葉を残し、アイテムを取りに行くため店を飛び出した。

* * * * *

10分後。

「……た、ただ今戻りました！」

「お、早かったねー。んでー？モノはあったー？」

「ありませんでした……。。」

無かったです。

ヨツミワドウの上皮なんて、一つも。

宿に戻って画面とにらめっこすること1時間。

見つからなかった。

あれ？おかしいな。俺ヨツミワドウ2、3回倒しているんだけど。

「……まーやっぱりないよねー。上皮とか水光原珠とか、上位個体由来のものばかりだもんねー。」

「じよ、上位個体？」

「こそ。まだソウジって下位でしょー？上位になると、強いのが居るエリアにも入れるのさ。そのヨツミワドウとか鉱石の採掘で見つかるのよー、そのアイテム。」

「……じゃあハナから無いじゃないですか……。」

「あははー、ゴメンゴメン。もしかしたらソウジならってねー。」

何だ、じゃあ装飾品は諦めるしかないのか。

上位に上がるまでお預けである。

けど、上鎧玉っていうのならけっこうあったぞ。

いろんなクエストを受けている時期に、鉱石を見つけては、ピッケルで掘っていたからな。

「でも、鎧玉？つてやつなら、これだけ。」

ドンツ。ジャラジャラジャラ。

テーブルに予め入れておいた麻袋を置き、鎧玉を見せる。

「おー！すごいすごい、じゅーぶんだよー。さすがソウジー、品質も文句なしだねー。」

「じゃ、じゃあ……。」

「んー、装飾品は、また後日。でも、装備強化はできるねー。」

「おーー！やったー！」

良かった、これで少しは防御が楽になるぞ！

「まーあんまり装備に頼るのも良くないんだけどさー。もうすぐ上位になるし、装備一式初期のままは辛いと思うよー？あとは……お金、足りるー？」

そう言っ指を7本並べるセツヒトさん。

「7000zですか?それくらいならまあ。」

「んー、桁が違うー。」

「……………な、70000zですか?!?!」

「そー。…………ちよつち、キツイかなー?」

「…………いえ、払えます。」

「わお。男前ー。」

この前の遺跡発見でもらったお金はまだ余っている。

命を預ける大事な防具だし、ここはケチるべきではない。

「70000z…………です。」

「…………うん、たしかにー。わーい、臨時収入だー。」

「どうか、よろしくおねがいします。」

「うん、最優先でやらしてもらおうよー。明日の朝、宿に持っていくからねー。」

「えっ!?!明日の朝で間に合うんですか!?!」

セツヒトさんすごいな!

防具の全てに加工を施すつて、かなり大変では!?

「まー、いけるよー。冗談じゃなくねー。……久々の大仕事だー。おまかせー。」
「あ、ありがとうございます!」

正直、超助かる。

二、三日は、インナーでアイテム採取だけやろうかなと考えていた。

「じゃ、早速やるからー。ソウジー?期待して待つててねー?」

「は、はい!」

「出るときー、店の看板、裏返しておいてくれるー?」

「わかりました!」

てことはつまり、俺の防具を本気で最優先にしてやってくれるのだろう。

セツヒトさん、やっぱりあなたすごい人ですね。

「……ソウジ。わたし、ここまでやってあげるのって、初めてだからねー？」

「えっ、ええ。はい。本当にありがとうございます。」

「んー……伝わらないかなー？……まあいいやー。」

「は、はあ。」

な、なんだ？

……よく分かんが、頑張ってくれるってことだろう。

「……んふふー。んじゃ、ソウジ、また明日の朝ねー。」

「は、はいー！よろしくおねがいます！失礼します。」

そう言つて、俺は店を出た。

看板を裏返すのも忘れない。

看板には「おやすみなさーい」の文字。

つまりは、閉店の印。

装備の点検だけのつもりが、思わぬ装備の強化に繋がった。明日からの狩猟が、少し楽しみになった。

明日の受け取り、期待しておこう。

……セツヒトさんが抱きついた記憶がまだ消えない。

多分、一生消えない気がする。

いい匂いがしたなあ……。

……変態か。

物悲しいおっさんの独白を心のなかでつぶやきながら、宿に帰った。

53 倫理観について学びましょう。

宿に戻ると、ちょうど夕方ぐらいだった。

シヨウコは戻るかわからないと言っていたので、久々に一人で過ごす夜だ。

夕飯を食べて、訓練して風呂に行ったら、今日は早めに休むとしよう。

明日は初のロアルドロス戦。万全を期す。

「ただ今戻りましたー。」

いかん、語尾が伸びた。

セツヒト語がうつつてしまった。

「おお、ソウジさん。お帰り。」

「ただいま帰りました、ホエールさん。」

出迎えてくれたのはホエールさん。

ドールの姿はない。

「あれ？ドールはいないんですか？」

「おお、すまんの。伝え忘れておったわ。」

「とうとう？」

「ドールはほれ、ミヤコさんと墓参りに行っておる。」

あ、なるほど。

そういえばそんな事を話していたような。

「ソウジさん、すまんが夕飯が準備できんので。……外で食べてくれるかの？」

「ええ、大丈夫ですよ。……二人、大丈夫ですかね？遅くなるとか。」

「ああ、もうすぐ帰るじやろうて。しかし、ドールも疲れておるじやろ。今日は休ませるわい。」

「なるほど、了解です。」

フランクな会話。

ほぼ家のようなもの、俺も長いことこの住人としてお世話になっている。夕飯は外でとろう。そういう事情なら構わない。

「すまんの、ソウジさん。わしが用意してもいいんじゃないぞ?」「
「いえいえ、ホエールさんの料理も、俺好きですよ?」

実は何度か、ホエールさんのお手製の料理を頂いたことがある。

何というか、すごく豪快な料理だった。

マンガ肉、とでも言えばいいのか、骨付きの肉を炙ったメインに、ポウルいっぱいサラダ。

具材をありったけぶち込んだ味噌仕立てのスープと、ツヤツツヤの大盛りご飯。もちろん料金はいっしょ。

大食いのハンターとしては最高なのだが、ドールは、「宿が続けられなくなる。」と突っ込んでいた。

味は、美味しい。スープなんて、いろんな旨味が染み込んで絶品だった。

ただ、毎日食べるなら、レパートリー豊富なドールに軍配が上がる。

そんな感じ。

「ほっほ。世辞でも嬉しいわい。また食材が余るようなら、作ってやるからの。」
「ええ、楽しみにしてます。」

「それじゃの。明日はロアルドロスの狩猟じやろ？早めに休みなさいよ。」
「はい、それでは。」

受付に戻るホエールさん。

じゃ、予定変更。

訓練、飯、風呂の順で済みますか。

ん？俺、ホエールさんにロアルドロス进行すること言つてたつけ？

ミヤコさんが話したのかな？

……まあいいや。

予定を立てた俺は、特訓から済ませるため、その足で庭に向かった。

・
* * * * *

「あー……きもちいい……。」

銭湯にやってきた俺。

銭湯と言つても、湯船があるようなものではない。

サウナがメインの風呂……と言えいいのか。

湯舟は無い、そして混浴。

脱衣所は流石に男女別だが、意外とカップルとか夫婦家族でやってくる人たちもいる。

俺のルーティンは、まず貯めてあるお湯を桶ですくつて体を洗ったら、すぐサウナ室へ。

その後冷水で汗を洗い流して、火照った体を休ませる。

そしてまたサウナへ。

これを4回繰り返すと、もう何とも気持ちよくなるのである。

前世でこれを知っておけばよかった……。

サウナに通い詰めていた同僚の気持ち、今ならよく理解できる。

訓練の後夕飯食べてからのこれ。最高の贅沢である。

欲を言うなら、湯船が欲しかったな。水風呂。

そうして、超リラックス状態の俺は、完全に気を抜いていた。

「……ソウジ様。」

「ひゃあん!!」

耳元で囁かれてびっくり仰天。

俺は耳が弱い。

「お、驚かせてしまいました。失礼しました。」

「ひ、ヒナタさん!?!」

振り向いたら意外な人物だった。

ギルドのクールな受付嬢、ヒナタさんがそこにいた。

「ど、どうも、ヒナタさん。驚きました。」

「すみません、ソウジ様。奇遇ですね。」

「ええ、変な声を上げてしまって、こちらもすみません。」

ヒナタさん、いつもはビシッと制服を着て、キリッとポニーテールをまとめた、ザ・クレースト・レディって感じなのだが……。今日は違う。

お団子にしてアツプにまとめた髪、いつもとはだいぶ違う印象だ。
湯浴み着もダボツとして、ちよつと可愛い感じになっていた。

「お隣、よろしいですか？」

「はいはい、どうぞどうぞ。」

休憩スペースは数台の大きめの椅子が並ぶ。

隣に座ったヒナタさんは、椅子に背をもたれると「ふうっ」と言つて息を吐いた。
気持ちいいよな、その姿勢。

どこからか取り出したうちわを仰ぎながら、火照つた体を冷ましている。
そのうちわ、アリだな。俺も買つておこう。

「……ソウジ様は、いつもここに？」

「ええ……ここ、いいんですよ。」

「……分かります。この銭湯は素晴らしいですね。」

クールな印象を与えがちなヒナタさんだが、実はそうでもない。

受付嬢を何度ももらってわかってきたことだが、案外お話が好きな子である。

おしゃべり、というわけではないが、こうして会話のキャッチボールをしっかりとつくれる。

オフの姿に遭遇するのは初めてだが、それはあまり変わらないようだ。

「ソウジ様。今日は……。」

「ああ……すみません、同士ヒナタさん。シヨウコは今日はいないんです。」

「そ、そうでしたか。」

「あーそうか、この銭湯は、アイルーOKですからね。」

「はい、そうなんです。控えめに言って……最高です。」

うん、ヒナタさん。その発言は少し危ないですよ。

女性なら許されるのかな。

うーん、男女の格差とはかくも難しい。

「……すみません、同士ソウジ様。気軽にこのようなアイルーへの愛を語れるのは、身近にいないものでして……。」

「えっ、そうなんですか。ハイビスさんは？」

「先輩は、何と言いますか、高貴すぎて……。可愛いものはお好きなのですが、私たちが若手受付嬢の高嶺の花、エースみたいな方ですから……。」

お、ハイビスさんってそんな感じなのか。

割と付き合いのある俺の印象は、仕事がとてもデキる、少しおつちよこちよいなところもある受付嬢だ。

……確かに、ギルドマスターのシガイアさんにもすごくフランクに話していたし、立場的にすごい人なのかもしれない。

しかし、ハイビスさんも相当アイルー好きに見えたが。

じゃあ何だ、猫好き仲間が親しい中にいないってことか。

「同じ趣味で、私の心をよくわかって下さる方は、ソウジ様しかおりません。」

「え、ええ。」

「なので……まともしここでお会いできたら、アイルーへの愛を語り合いましょう。」
「……わかりました。お安い御用ですよ。」

ヒナタさんの目は、至って真剣だった。

同じ趣味の人って、話すだけで楽しいものだ。

俺も趣味友だちが欲しかったし。

「ソウジ様は、これからサウナへ？」

「ええ、俺は何回かサウナへ入って休んでを繰り返すタイプなんです。今日はあと一回入るつもりですが。」

「……ご一緒します。」

「はい、わかり……えっ？」

「サウナでも、語り合いましょう。ええ、そうしましょう。アイルーの可愛い耳の形について、誰かととことん議論したい気分だったので。」

「……今から？」

「はいっ!!」

キャラ変わってるよヒナタさん！

趣味仲間ができるって、まあ確かにうれしいけどさ。

……まあいいか。

俺だって、アイルーをはじめとした猫関係について語り合える人が欲しかった。

更に言えば、こんな美人と一緒にサウナやらなんやら過ごせるなんて、ちよつと嬉しい下心。

「じゃあ……行きましょうか。」

「はい、ソウジ様。」

こうして、俺は新たな仲間と共に、サウナ室の中でたつぷりとアイルーの可愛さについて語り合うことになった。

ちなみに、15分後、のぼせ上がったヒナタさんを介抱する羽目になり、迎えに来てくれたハイビスさんに怒られてしまった。

* * * * *

「ソウジさん！いいですか！この子はちよつと世間知らずなところがあるんです！」

「はい。」

「同じ趣味をお持ちなのはよくわかりましたし、アイルーが可愛すぎるのは私も完全に同意いたしますが！」

「はい。」

「女の子がのぼせるまで語らせるのはダメだと思います！し、しかも！……、混浴のサウナ室で！」

「はい……。」

俺は、きつとサウナで頭がどうかしていたのだ。

いくら混浴とはいえ、女性と語り合うような場ではないことは分かり切ったこと。

だって、湯浴み着一枚の下は裸だよ？

それを、いくら趣味が同じである程度見知った仲の女性とは言え、二人で密室のサウナで過ごすとか。

しかもものぼせ上がるまで一緒にいるとか。

どこの恋人だよ！と、突っ込まれること間違いない。

……はい、正直スケベ心もありましたごめんなさい。

それに、キラキラした目でイルーの耳の形について話すヒナタさんを止められなかった。

「今日は私が迎えに来られたから良かったようなものの！」

「はい。」

「そ、その！サウナで二人きりとか、背中を洗うとか、そういうのは……なんと云いますか！」

「は、はい。」

「ここ、ここ恋人同士でするようなことですよ！」

「は……はい？」

「何ですかその返事は！知らなかったなんて言い訳、通じませんよ！」

ハイビスさんものすごい剣幕。

いや、知らなかった。

そうなの？

混浴はOKなのに、そういうのはタブーなの？

………何だこの世界の倫理観。よくわからん！

「聞いていますか!?!」

「は、はい聞いてます!」

「とにかく!そういうったハレンチな行為は、と、特定の女性と懇意になってからですね!」

「はい……。」

ハイビスさんのお説教は、長く続いた。

銭湯の入り口で繰り広げられたそのお説教タイムは、銭湯利用者の目にたくさん止まっていた。……。

結果、女二人を侍らすいけ好かない野郎のレッテルを貼られてしまう俺なのであった。

理不尽………。

54 余計な発言には気をつけましょう。

ハイビスさんに解放され、ようやく泥のように眠りについた時間は、予定よりだいぶ遅れていた。

若い身空の女性をサウナでのぼせ上がらせ、さらにもう一人の女を侍らすダメ野郎としてのレッテルを貼られた俺。

「俺が悪かったのかなあ……。」

朝、日も昇り切っていない時間。

寝起きの一言目がそれである。

あのハイビスさんを前に何も言い訳はできなかつたため、昨晩は大人しく帰って寝た。

ようやくポルテージが下がったハイビスさんに、「送りましょうか」と、せめてもの紳士らしい態度を示したものの、

「結構です！」

と一刀両断された。

うう……。俺何もしてないって……。

でもまあ分かったことは、「銭湯に女とは行くな。」ということである。

……………倫理観がわかんねえ……………。

だって、前にドールだって、背中を流そうかと言われたことあるし！

シヨウコも平然と俺の背中を洗ってきたし！

……シヨウコはカウントされないか。

シヨウコの場合、よく分かっていない可能性が高いしなあ……。

ドールは……あれ？分かってるんじゃないか？

……………ドールは、そのへん分かっていて、俺の背中を流そうとした……？

何故か……。

つまりドールは——。

コンコン。

「ソウジさん？」

「は、はい！起きてます！」

「あ、起きてるね。朝のランニング、行くんでしょ。」

「わ、わかった！すぐ降りるよ！」

「……何か慌ててる？」

「あ、慌ててない慌ててない！すぐ行くから！」

「うん。それじゃ。」

スタスタスタ……。

お。

おおおおお、ビビった！

なんちゆうタイミングで来るんですかドールさん！

い、いかん！背中を流すかどうかなんて事で、ドールの気持ちを推し量るとか、アホか！

自重しろ……俺のおっさん心……。

気を取り直して両頬を叩くと、普段着に着替えてランニングに行くことにした。

* * * * *

村の周回10周を終え宿に戻る。

水で体を洗ったら、朝食を食べるため食堂へ。

「おはようございます。」

「あー、おはよ……って。何だか元気ないわね、ソウジくん。」

「ええ、色々ありまして……。」

朝一番に会ったミヤコさんに分かるほどか。

ランニングしたら、だいぶスッキリしたんだが。

気合を入れないと、ロアルドロスにやられてしまうな。

よしっ。切り替え切り替え！

「……大丈夫です！元気でですよ！」

言うや否や、いつもの席に座り、朝食を眺める俺。

今日のメニューは純和食。

白ごはんに味噌汁、焼いた白身魚と大根おろしのようなもの、極めつけは醤油と俺の大好きな漬物。

この世界になぜ和食があるのか知らないが、これがまた美味しい。

ドールのこの朝ごはんは、絶品である。

いやー、知らない世界でこれが食べられるって、大変ありがたいことです。

この世界の食の豊かさ、美味さ、幅広さは、現代日本並だ。

口に合わなかったことなど一回もない。
ありがたくいただくこととしよう。

「いただきますー！」

味噌汁をすする。

ああ……元気が出るう……沁みる……。

味わいながら食べる。

「ソウジさん、おはよ……何だかソウジさん、元気ない？」

「おはようドール！そんなことはないぞ！」

「そ、そう？」

空元気でごまかす。

いや、ドールの朝食で元気をもらったから、空元気つてわけでもない。

「ドール、いつもうまい飯をありがとう。」

「ど、どうしたの？急に。」

「いや、こんな美味しい朝食を毎朝食べられるなんて、幸せすぎるよ。」

「うん、ありがとう……。」

「いやあ……俺、毎日この味噌汁を飲みたいなあ。」

……………。

沈黙。

……な、なんだ？なんか俺気まずいこと言っちゃった？

「……ええええええ!!？」

「えっ!？」

「そ、そそそんな急に言われても……!？」

「ど、ドール?」

急に顔を赤くしたドールが、慌てふためいている。

え!?俺なんか言っちゃった!?

「あらあらー!ソウジくんも隅に置けないわねー!」

ミヤコさんがからかい口調で何か言ってる。

……え?本当に意味がわからんのだが。

「わ、私、食器片付けてくるから!」

「あ、ど、ドール!」

スタスタスタスタ!

……行ってしまった。

……何かまずいことしちゃった……??

「ドール、どうしたんでしょうか……?」

ミヤコさんに聞いてみる。

「え？ソウジくん知らないの？」

「何がですか？」

「『毎日この味噌汁を飲みたい』って、プロポーズよ、プ・ロ・ポ・オ・ズ。有名な演劇の言葉じゃない。」

「……は？」

「……あれ!?もしかして本当に知らなかったの!？」

「は、はい。」

何!?

つまり俺はあれか!?

朝起き抜けに元氣無いやつが急にプロポーズをしたことになるのか!?

………やっぱ分かんねえこの世界の倫理観!

倫理観?て言うより常識!?

そんな「月が綺麗ですね」的な言葉とか知らないよ！チクシヨウ！

「ホツホツ、いやーソウジさんは朝から面白いの。」

「ほ、ホエールさん！」

「ミヤコさんや、許してやってほしい。ソウジさんはの、この村に来た時は記憶を喪失してての。」

「あら!? そうなの!？」

「そういつた常識的などころも若干抜けておるんじや。」

「あら……知らなかったわ……ソウジくん。ごめんね。」

「い、いえいえ！ 気にしてませんが……むしろこちらこそ……ドールに変なこと言ってしまったなあ……。」

参った。

弁解のしようもない。

「でもま、いいわよ！ うんうん。結果オーライにしちやいなさい！」

「何を言ってますかミヤコさん……。」

「そりやつまり、責任取ってドールをお嫁さんにしちやえば——」
「お母さん！」

台所からスポンジが飛んできた。

と思つたら、ミヤコさんの目にダイレクトヒット！

「い、痛い痛い痛い!!ど、ドールう！冗談じゃないの！洗剤が！目に！目に！」
「……お母さん？」

いつの間にかミヤコさんの隣に来たドールさんが、とてもいい笑顔でいらつしやる。
ていうかいつの間に。ドール速いな！

「お母さん？」

「な、なに？ドール!?私今日が非常事態のエマージェンシー——」
「言つていい冗談と、悪い冗談が、あるよね？」

怖いよドールさん！目が笑つてないよ！

ミヤコさんが借りてきた猫のように大人しくなる。

「ど、ドール？お母さん、ほんのちよつとだけ、ね？ほんのちよつとだけ、魔が差したと
いうかね？えつと——」

「問答無用。お母さん。朝ごはん抜き。」

「ええええええええええ
!!!!」

おおつと！娘の飯抜き宣言だあ！

これはミヤコさんも絶望の表情!!

……………ミヤコさんが燃え尽きて真っ白になったボクシング選手のようになってい
る……………

うん、このタイミングで合っているか分からんが、ドールに謝っておこう。

「ドール、すまん。変なこと言って。」

「い、いいよ！ソウジさんはわからなかっただけでしょ？わ、私、別に気にしてないか

ら。」

「そ、そうか。でも、ごめん。あと、味噌汁が美味しいこと。これは嘘じゃない。変な意味じゃなく、俺はドールの作るご飯、好きだぞ。」

「……………う、うん。嬉しい。」

「よかった、それは本当にそう思っているからな。」

「……………あ、ありがとう。……………わ、私まだ片付け中だから！それじゃ！」

スタスタスタスタ……………。

行ってしまった。

良かった、変な誤解はとけた。

……………この真っ白になったミヤコさんはひとまず置いて、朝食を食べよう。

「若いのはいいのー。」

ホエールさんがいつものように笑っている。

安心するぜ。

ガチャ。

「おはようございます。ソウジ、居ますかー?」

「おお、おはようさん、セツヒト。何の用じや、こんな時間に。」

「いやー、ソウジに用がありました……あ、いたいたー。ソージー。」

セツヒトさんがやってきた。

そうだった、装備を受け取らなければならなんだった!

「おはようございます、セツヒトさん! わざわざすみま——」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん。わざわざすみません。」

「んー、よろしい。……この真っ白いの、ミヤコさん……?」

「あつ、はい。」

ミヤコさんと面識はあるのか、セツヒトさんはしゃがんで、ミヤコさんの鼻をツンツンしている。

「おー。燃え尽きてるねえ。」

「ええ。真っ白に。」

「んー。よし、放っておこー。」

いいんか。

まあいいや、話が進まないし。

「じゃーん。はい！これが強化した装備でござーいます！」

「おお！ありがとうございます……見た目は変わりませぬね。」

「むむむ。なんか不満げー？」

「いえいえいえ、そうではなく！どこを強化したのか興味がありました。」

「まあ着てみー？分かるから。」

促され、装備をつけることに。

部屋に戻って、装備をつけたまま食堂に戻る。

「どう？変な感じしない？」

「いや、多分大丈夫です。重くなっただんですか、これ。普通に動けますよ？」

「うんうん、よかったー。あ……ちよつとそのままー。胸の辺りが、何か違和感？」

そう言うなり、顔を俺の胸に寄せ、調整を始めるセツヒトさん。

この人、距離感近いんだよなあ……。いや、嫌では無いんですがね？なんと云いますか、おっさんの純情ハートはドギマギしてしまうわけでして。

そんなアホな事を考えていたら、炊事場からドールが戻ってきた。

「せ、セツヒトさん？」

「おおー、ドール、おはよーん。」

「おはよう。……何してるの？」

「ん、よつと。ソウジに装備頼まれてねー。この辺をねー、調整してるのさ。」

「ふ、ふーん。」

ドールがこちらを見ている。

見ているというか……凝視している!?

俺の装備なんて、そんな珍しくも無いだろうに。

「あ、ドールごめん。後ろー、ちよつと持つてもらっていいー?」

「えっ? あ、ここの?」

するとドールが俺の後ろから脇を抱える形でギュっつけてきた。

……何だこの状況。

前方、銀髪美しいセツヒトさん。

後方、今日もエプロン姿のドール。

女性に囲まれている。

ドギマギが止まらない。

「よーし、しゅーりよう。ソウジ、おまたせー。」

「……………」

「ソウジー?」

「……あつ!!すみません!調整ありがとうございました!」

もうこれ以上意識しないように、思念を彼方に飛ばして素数を数えていた。
俺から離れていく女性たち。

あー、何かドギマギした。心臓に悪い。

「……ソウジ、顔真つ赤ー。」

「ええっ!」

「なになにー?美少女に後ろから抱きつかれて、私に前から触られてー?嬉しかったのー?んー?」

何時ものように、ニヤニヤとからかいを受けてしまう。

しかしここでセツヒト対処法。

なるべく普通に、である。

「いーえ、何ともないです。」

「えー、そこは』とつても嬉しかったので、もう一回!』とか言うところじゃーん。」

「リクエストしてどうするんですか!？」

「そしたら、私も前からギューって、やってあげようかー? んー?」

「い、い、いいえ! 大丈夫ですから! ほら、とっととお店にお帰りください!」

「んもー、最近のソウジは冷たいなー。まあいつかー。」

対処成功! ……したのか?

おそらく俺はいつまでもセツヒトさんにかかわれてしまう気がする。

ちらりとドールを見る。

……え!? 何か怒ってらっしやる!?

すみません! 背中でセクハラしてすみません!

ん? 背中でセクハラ?

……と、とにかく! 後ろから触るように言ったのはセツヒトさんです! 訴訟はセツヒトさんの方へ!

「んじゃー、ソウジー。気をつけていつてきてねー?」

待て！原告側！元凶！

……手をヒラヒラさせて、セツヒトさんは帰っていった。
食堂に佇む俺とドール。（＋燃え尽きたミヤコさん。）

……なんか怒っているドールに、弁解をしなければ……。

「ど、ドールさん？いいですか？元凶はそもそもあのセツヒトさ——」

「私に触れられて、何とも無いんだ？」

「へっ？」

「セツヒトさんのこと、せつちゃんって、呼んでるんだ。」

「……お、おお。そう、ですけど。」

「仲良さそうだった。」

「そ、そりやあね、何回か店に足を運んで、フランクに話す仲ですが……。」

「……。」

……何?!沈黙?!一番怖いやつ!

「ソウジさんの……ばか。」

スタスタスタ。
バタン。

「……………な、なぜ……………」

ワサドラ村めっちゃいい子ランキング堂々1位のドールに。
ばかって言われた。

こままでしょうか。

いいえ、俺だけ。

「はっ!?ど、ドール!?私の朝ごはんは!?私のく!」

唐突に復活したミヤコさんなんて気にならないほどには。

俺は打ちひしがれてしまった。

俺も真っ白になりたい……。

* * * * *

……色々あつたけど！

すつごく色々あつたけど！

スキル！もう気にしない！を発動した俺は、とりあえず仕事をすることにした。

うん。忙しくなって忘れてしまおう……。

昨日から女性絡みで失敗続きだ。

ロアルドロスと討伐する前に、ハーレム野郎様から女性の扱い方をご教授願いたいところである。

「あの、ロアルドロスさん。女心がわからないのですが。」

「なんやてソウジ!? ええか!? よく聞けや！」

みたいな。

……。

アホか。

気を引き締めなければ……。

「よー」

両頬をバチンと叩く。

今日何度目かわからない気の引き締めを行った俺は、ギルドの門を開いた。

ひとまずシヨウコを探そう。

……ちつこいので中々見つけれない？

ご冗談を。俺の手にかかれば、簡単に見つけることができる。

猫好き……とは関係ない。

周囲の人を見る。

数人がニコニコしながら、とある一方向を見つめている。

あとはそこを探せば……あくら不思議。

「ご主人さまー！こつちですー！」

「お、シヨウコ。一日ぶり。……オスズさんも、お久しぶりです。」

「お久しぶりですにゃあ。」

ほら、いた。

しかもアイルーがセットで。

シヨウコはここで既にかんりの人気者。

数あるアイルーの中で、愛想もよく、話し方も独特で、最近人気らしい。ヒナタさん情報である。

なので、周囲の視線を観察すれば、自ずと見つかるという寸法である。

ギルドのムードメーカー的な存在にまでなっていると思う。

最近じゃ、ファンクラブみたいなものもあるとかないとか。

……そいつらからしたら、俺って忌み嫌われる対象なんじゃないか……。

……うん、気にしない気にしない。

とにかく、有名人のシヨウコ。

だが本人は全く意図していない。素である。

未恐ろしいとともに、変なあだ名なんて、もう気にしなくてもいい次元に来ているのでは、と思う。

まあこれは本人の気持ちの問題でもある。ゆっくりやっていこう。

「シヨウコ、準備はできて………オスズさんはなぜいるんですか？」

「にや、実はご報告をしたことがありまして……ね、眠いにや……。」

「もうっ、オスズさんは朝弱いんやから……私から言うとか言うたやないですか。」

「いやいや、こういうのは長として、あちしが言わなきゃならんのにや。」

目の前で、アイルーの小さい女の子たちがにやーにやーにやーにやー言っている。

周囲の目を集めるばかりだし、とつとつクエストに行きたいので、要件だけ聞いとこう。

「オスズさん、お話というのは？」

「はいなのにな。この度、イシザキ亭で働くアイルーが決まったので、ご報告するにや。」

「お！決まったんですね！いやー、よかったよかった。」
「にや。ご紹介いただいたソウジさんに、先にご報告にや！ありがとうなのにな！」

そういえばそうだった。

以前イシザキ亭で、オスズとシヨウコとご飯を食べた時、ケイさんに相談されたのだった。

俺もケイさんの頼みは断れない。

そして、どうしようかと思った矢先「アイルーを働かせてみては？」という考えに至った。

そこからはケイさんとオスズの話し合いになったのだが……うまくまとまったみたいだ。

「いやあ、安心しました。」

「アチシも村のお店で働くのは夢だったんだにや。頑張るのにや！」

「ええ、是非お願い……えっ？」

「どうしたのにや？」

「……オスズさんが働くんですか!？」

「そうですねにや?」

……マジかよ。

オスズさんは、集落の長みたいな事をしてっていると聞いていたが……。

「取りまとめ……のお仕事は平気なんですか?」

「その辺は正直適当でしたからにやあ。掛け持ちしてみるのもいいかにや、と。」

「お、おおう。」

……そんなんでいいのか、アイルー集落。

「んじゃ、あちしはこれで。ソウジ様たちも、クエスト頑張ってくださいにや。イシザキ亭にも足を運んでくださると嬉しいにや!」

行ってしまった。

ポカーンとしてしまった。

「…………主人さま、気にせんとつてください。」

シヨウコが、こうなるまでの経緯を教えてくれた。

オスズさんは、ケイさんとの打ち合わせで、一人アイルーを寄越すと約束。ところが集落に戻ると、働き手が軒並みいない。

「その時オスズさんは気付いたみたいです。」

「何に?」

「…………集落でまともに働かんようになってたの、自分ぐらいやということに…………。」

「ああ…………なるほど。」

その後、考えた挙げ句、自分が働けば万事収まると結論。

今日イシザキ亭に行つて、話を付けてくるらしい。

「まあ取りまとめの役と言っても、仕事無いときは無い、ある時はちよつと忙しい、ぐらゐのものやったんです。なので、時間に融通のきくバイトがちよつとよかつたらしいで

すよ?。」

「でも……オスズさんで、大丈夫なのか?」

主に賄いの意味で。

オスズはアホみたいに食べる。

それに、社会に出て働くのも初めてなんじゃないか?

「うーん……店が潰れんとエエですけどねえ……。ウチは止めたんですよ?これでも。」
「んー、本人やる気だし……まあ様子を見てみるか。」

一抹の不安を残しつつ、俺達はクエストボードに向かうのであった。

55クエストを受注しましょう。③

今日の狙いはロアルドロス。

クエストボードには、色々とモンスター狩猟の依頼が貼られている。

ボードには数種類ある。

まずは採取納品系。

○○が欲しい、○○を△△に納品してくれ、といった類のものだ。

商店に行っても手に入らないものや、モンスターの素材といった、ハンターにしか頼めない様なものが多い。

中には、よくわからないモンスターの素材の依頼もある。

「……龍ノ剛角、求ム」とか、何が何やらさっぱりだ。

依頼人の部分もかすれて読めないし。

白……レス……? 何じやこりや。

ずっと貼りっぱなしになっているのだろう、こういった黒ずんでホコリをかぶった依頼文書もある。

一体誰が受けるんだろう、と毎日気にはなっている。

続いてモンスターの撃退や討伐系。

緊急性の高いものはボードの目線に合わせて、それ以外のものはボードの高め低めに貼られている。

これ以上に緊急性の高いもの……例えば村が襲われたとか人命に関わるようなものは、緊急クエストとしてギルドから直接ハンターに声がかかることが多い。

俺は扱ったことは無いが、教官からそういったクエストもあるというのを聞いた。いつか俺も強くなったら、そういったクエストを受ける日が来るのだろうか。

そして、これらのクエストが、下位・上位に分かれて所狭しとボードに貼られているのである。

ちなみに、新人ハンターに紹介されるクエスト、ハンターを指名して直接依頼されるクエスト、ボードにも貼られない超高難度のクエストなど、ここに貼られていない例外も数多く存在する。

これも教官に聞いたことだが、ハンターギルド制度が始まってすぐは、こうした棲み分けが行われていなかったらしい。

せいぜい、簡単・普通・難しい、ぐらいで、自分の力を見誤ったハンターの死が絶えなかったのだとか。

そこでHR制度を設け、新人ハンター保護のために、簡単なクエストはギルドから直接紹介する、という風になったのだそうだ。

クエストにも紆余曲折あり。

教官から聞いて、興味深かった。

閑話休題。

今日はモンスターを限定しての狩猟である。

下位のボードとにらめっこしながら、ロアルドロスの文字を探す。

……。

……見つからない。

あれ？おかしいぞ？確か沼地には大量に発生しているはずなのだが……。

「ご主人さまー！見つけました！」

シヨウコが教えてくれる。

「おお、よく見つけたな。こんな低い位置に……あれ？」

【ロアルドロス1頭の狩猟】と、依頼文書が貼つてある。

それはいい。問題は貼られているボードである。

「……って、上位クエストのボードじゃないか？」

「……シヨウコ、ダメだ。これは上位ハンター向けの依頼だ。」

「えっ、じゃあ無理なんですか？」

「ああ……悔しいが仕方ない。俺はまだHR3だからな。」

「そんなあ……そつちの低位のボードには、ロアルドロスは無かったですよ？」

「そうなんだよなあ……。」

改めて上位のボードに貼られたそのクエストを見てみる。

【クエスト名】ハーレム野郎共に肅清を

【目的地】沼地

【時間】2日以内

【ターゲット】ロアルドロス一頭の狩猟

【報酬金】9350z

【依頼主】ワサドラ支部ギルド

【依頼文】

沼地に大量にロアルドロスが発生している。しかも大量のメスを連れてな！

その頭に来ている男性ハンター諸君！今こそ肅清の時間だ！

立ち上がれ！男共！モテモテ野郎を駆逐してやるのだ！

何だこれ。

アホか。

……依頼主は……ギルドかよ。

ていうかこれ絶対シガイアさんだろ！

俺のハーレム野郎ムカつきますよね発言に、爆笑してたもんなあ。

シヨウコも呆れている。

「何ともアホな内容ですね……。」

「本当にな。」

「……………ご主人様、鏡って見たことありますか？」

「ん？部屋にはあるが……………何でだ？」

「いや、ええんです。失言でした。」

……………？

シヨウコが何を言いたいのかわからんが、しかし困った。

うーん、どうせ依頼はハイビスさんかヒナタさんを通すしか無いしなあ。
直接相談してみるか。

……………ハイビスさん……………もう怒ってないといいなあ……………。

* * * * *

ハイビスさんを探すと、簡単に見つかった。

何故なら、俺がクエストボードを振り返ると、ギルド受付のはじの方から、今日も今日とて下手な隠れ方をしながらこちらを見ていたからだ。

ハイビスさんに駆け寄る。

「ハイビスさん、おはようございます。」

「わわわ！はい！おはようございます！」

急に見つけられて慌てふためくハイビスさん。

いや、バレバレですから……。

「ハイビスさん、昨晩は大変ご迷惑をお掛けしました。」

「え、いえいえ！とんでも無いです……むしろ、何と言いますか……。」

「えっ？」

「こちらこそ、すみませんでした。急にあんなに怒っちゃいました。」

「いやいやいや！こつちも悪いんです。ヒナタさんがあんなになるまで放っておくなんて。失礼しました。」

「いえ、こちらもヒナタに事情を聞いたんです。そしたら、あの子が自分で率先してサウ

ナまで誘っていたなんて……そんなにアグレッシブな姿見たことなく、私てつきり……。」

押し黙るハイビスさん。

でもよかった、誤解は解けたみたいだ。

「ご主人さま……何か昨日やってしもうたんですか？」

「うーん、やってしもうたといえやうてしもうたというか何と申うか。」

シヨウコ、頼むから掘り下げんでくれ。

「……でも、あんなこと、これつきりにしてくださいね。あの子、その辺の理解が足りないと申うか。自分が可愛いことを自覚してないとい申うか……。その、ど、どうしても女性とサウナに行きたいのでしたら……。その、何と言いますか……。」

「は、はい……。」

「わ……きよ、今日はどのような依頼をお探ですか!？」

「へっ!？」

唐突にクエストの話!?

何だ、今日のハイビスさんは。よくわからんぞ。

「え、ええとですね。実は……。」

まあいいや。話が早い。

俺は事情を話した。

ハーレム野郎云々の件は置いといて、ロアルドロスが狩猟をしたいが上位にしかそれらが残っていない事について。

すると、ハイビスさんが理由を教えてくれた。

「……ああ、ロアルドロスの。そうなんです。実は、個体についての判別がまだできていない段階なんです。」

「判別?」

「ええ。詳しい調査がまだできていない、ということですね。」

「そうすると下位ハンターでは難しいんですか？」

「はい、無謀に挑戦するハンターが居ないように、あえてこちらで上位クエストとして一時的に区分してます。何せ、昨日ギルドマスターから直接依頼されたものですから。とは言っても、ロアルドロスなら、上位ハンターであればまず問題なく倒せる部類です。」

「なるほど……。」

「一応は個体強度の未確認事案ということですね。まああるんです、こういうこと。」

勉強になった。

確かに下位ハンターが軽い気持ちでクエストを受けてしまい、まかり間違ってもものすごく強い個体であった場合、大変なことになる。

そう行つた事故を防ぐための、対策なのだろう。

「はあ……。じゃあ諦めるしか無いですね。シヨウコ、練り直した。」

「ん、悔しいけど、しようがないですね、ご主人さま。氣い取り直して、また探しましょう？ クエスト。」

「そうだな。しかしどうするか。」

はあ。

思わずため息が出る。

昨日から準備を重ねていたし、一日伸びちやったしな。

また違うモンスターに照準絞って、計画を立てるしかないか。

「……ソウジさん。」

「あつ、はい。」

ハイビスさんから声がかかる。

「もしよろしければ、受けてみませんか？ ロアルドロスの特選。」

「えっ!？」

「

思わずショウコとハモる。

可能なのか、そんな事。

「このクエスト、HR4以上に相当しますが……ソウジさんはHR3での狩猟歴も十分。上位ハンター昇格試験の一貫として、受けてみるのはいかがでしょう。」

「そんなこと、可能なのですか?」

「今回は、そこまでこのロアルドロスに脅威を感じませんし、狩場も下位ハンターが入れる沼地です。個体数が多いことは気になりますが……。ソウジさんのアレを使えば、敵の数は把握できるのでは?」

「な、なるほど。」

確かにそうだ。

かなりの頻度で沼地には行っている。狩り場の情報だけなら、結構自信はある。

「ちなみに、シヨウコちゃんは『例のこと』はご存知なんでしょうか……?」

「ああ、はい。知ってますよ。流石に。伝えておかないとやっていけませんし。」

「そうですね、良かったです。」

これで俺のギフトとかについて知っているのは4人になる。

マシヨルク教官、ハイビスさんにシガイアさん、そしてシヨウコ。カミングアウトもそこに気をつけないと。周りの人に迷惑はかけたくない。ハイビスさんが続ける。

「それに……昨日ヒナタがご迷惑おかけしたお詫びじゃないですけど、宜しければお礼させてください。」

「そんな、迷惑かけたのは俺です。」

「……ヒナタは、同郷のかわいい後輩なんです。仲間が欲しくて、寂しくしていたのかもしれないのに、気づいてあげられなくて……。よろしければ、またあの子とお話してあげてください。」

なんだ。

ヒナタさん、愛されているじゃないか。

ヒナタさんはハイビスさんに憧れているようだったが、一目置いている感じだった。

何というか、お互いを思うからこそそのすれ違いが感じられる。

……うん、サウナとかじゃなくてもいいなら、力になりたい。

「……………はい。任せてください。」

「……………ありがとうございます。で、でも！サウナ室で二人とかはダメですよ！その、は、ハレンチですから！」

「わ、分かりました！そこは気をつけます！」

うん、やっぱりこの世界の倫理観はわからん。

分かんが、人が人を思う気持ちは、前世と同じだ。

常識の範囲内で、ヒナタさんの趣味仲間として、力になりたい。

「ではクエストを受注いたします。クエスト名、『ハーレム野郎どもに肅清を』。こ、こちらでよろしいですか？」

「ぶっ……………」

思わず吹き出してしまった。

「……………ソウジさん？これも一応受付嬢の決まりなんですから……………」

「す、すみません。つい。ぜひ、そのクエストでよろしくおねがいします。」

文句ならシガイアさんに言っただけいいです！

「はい、武運を。」

「ありがとうございます。お返しのお返しじゃないですけど……ヒナタさんとハイビスさんに有益な情報を一つ。」

「えっ?」

「今日の昼食か夕食、イシザキ亭に行ってみてください。可愛いものが見られるかもしれません。」

「……!?そ、それはどういう——」

「おっと。ここからは言えませんがね。」

「……ふふふ。分かりました。ヒナタに伝えておきますね。」

「よろしくおねがいます。」

「こつちもちよつとだけいい情報をあげておこう。」

「持ちつ持たれつ?っていうのかこれ。」

「まあいいや。」

「では、行ってきますね。」

「はい、気をつけてくださいね。シヨウコちゃんも、ソウジさんをよろしくね。」
「ウチにお任せください！」

マッスルポーズを構えるシヨウコ。

俺とハイビスさんは同時に吹き出し、シヨウコが唇を尖らせるのであった。

56 ハーレム野郎の生態を観察しましょう。

ガーグア車に揺られながら進むことしばらく。

俺とシヨウコは沼地に到着した。

「それじゃ、今日も頑張つてな。ご武運を。」

御者のおじさんは、今日もナイスダンディに去っていった。

声が洩すぎる……。

「さてご主人様、ウチはアイテムボックスをチェックします！」

「ああ、俺は装備の最終確認をする。」

いつもの様に分担し、作業にかかる。

俺は〈情報画面〉で、自分はおろかシヨウコの装備やアイテムの所持まで確認できる。

そのためキャンプ地点では、所持品と装備の最終確認を行うことが多い。

対してショウコは、逆に現場でしかわからない情報を集める。

実はこれはとても重要で、俺よりも五感が優れたショウコが適任だ。

気温、湿度、天気などの天候の情報や、モンスターの鳴き声、キャンプ地のアイテムの確認などをしてくれる。

これが本当にありがたい。

「アイルーが普通にやることですよ？」とショウコは言ってくれるが、人間にはできないことだからありがたいのだ。

この辺を分かっているハンターが多すぎると俺は思う。

俺はマップでモンスターの居所を確認できるが、「鳴き声が何時の方角に何頭分聞える」なんて、人間には離れ業過ぎる。

アイルーの必要性が、クエストを経るたびによく分かってくる。

それに、もしハンターが窮地に陥った時は、素早さと体力に優れるオトモアイルーが緊急の伝達役となってくれるし。

命まで預けられる。ソロ専門になる俺にとっては、そのまんま命綱に等しい。

「ショウコ、こっちは確認OKだ。」

「はい。天候もほぼOKです。曇りですが風はほぼなし、おそらく崩れはしないかと思

います。あと……一つ。」

「ん？どうした？」

「……いえ、気のせいやと思いますが……。フアンゴたち、今日はおとなしなんでしょうか？」

「そういえば……。」

フアンゴとは、人の子どもぐらいの凶体をした、言ってしまったえばイノシシである。

いつもは、一つ岩山の向こうでフゴフゴ言ってる声が聞こえる。

爆睡していることもあるので何とも言えないが。

一応マップで調べてみると、確かに周囲にフアンゴたちはいなかった。

「んー、マップにはいないな。」

「珍しいこともあるもんですねえ。」

「まあいても正直邪魔なだけだ。無視していこう。」

「はいー！」

フアンゴは大型の狩猟中でもお構いなしに突っ込んでくることがあるため、大変邪魔

だ。

いないならいいでありがたい。

と、このように、シヨウコは不思議に思ったことをすぐに言ってくれるので、助かる。

「今日もよろしくな、シヨウコ。」

「はい、お任せください！ご主人様！」

ニコつと笑って返すシヨウコ。

うん、いい笑顔だ。写真を撮れば、ヒナタさん辺りは全力で買う気がする。

シヨウコは、クエストに気負い過ぎなくなってきたと思う。いい傾向だ。

自分がクエストに行くこと不幸を撒き散らすのでは、とトラウマになってるシヨウコ。まだクエスト後に挙動不審になることもあるが、徐々に慣れていって欲しいと思う。

悪い意味で「招き猫」なんていう奴がいたら、ぶん殴るつもりだ。

いい意味で、というなら最高なだけだな。

厄介な呼び名である。

「ご主人様、以前ロアルドロスを見つけたとこまで行きます。」

「ああ、打ち合わせ通りに。」

今日のプランの大筋はこうだ。

沼地の深部、池沼地帯に奴らのねぐらがある。

これは以前毒テングダケの採取の際にわかっていること。

慎重に近寄って確認。単体ならば襲撃、複数なら待つ。

襲撃は2人同時に。その後は臨機応変に。

こんな感じ。

……ぶつちやけて言うのと、初めての敵で、動きが良くわからないと言うのがある。

頼りの〈情報画面〉も、モンスターの攻撃方法や生態などにはめっぽう詳しいのだが、この沼地のどこに移動するとか、どここの場所を好むとか、そんなローカルな情報までは流石にカバーしていない。

仕方がないと諦めて、戦闘中は攻撃2：観察8に徹しよう。

教官の教えである。

* * * * *

「うーん、参ったな。」

「あそこまで多いと、いつそ壮観ですねぇ……。」

ターゲットのポイント近くまでやってきた俺たちは、丘の上の茂みに隠れながら観察を始めた。

それはいいのだが……。

「あいつら、何で一緒にいるの!?!縄張り争いとかしろよ!!」

「めっちゃ仲良いですねえ……。争う気配ゼロや……。」

そうなのだ。

動物は基本、ナワバリ意識が高いもの。

生存本能的に考えれば、至極真つ当なことである。

なのに何だ、ここから見えるロードロス2頭は。

仲良く同じ滝の下で、メスのロードロスたちを侍らせ、水浴びをしているではないか。

「喧嘩とかしてくれないかなあ……。」

「もしかしたら、奴らのセーフエリアなんちゃいますか？こう、水辺では動物たちも一時休戦やー、みたいな。」

「そんな馬鹿な。ならどうして……。」

俺たちが議論していると、ロアルドロスの周りを3〜4頭のルドロスたちが寄つていく。

そしてまあ……何というか……。

「うわあ……。」

「おおお……。」

おつ始めてしまった。

「あ、あいつらアホなんちゃいます!?滝の下で普通します!?」

「いや、そういう生態なのかもしれないぞ。」

「同時に!? 仲良く!? やる意味あります!?」

「……………ないよなあ……………」

お、すごい。ロアルドロスさん、取っ替え引っ替え次々と。

そんな、おお…………。体格違うのに、ルドロスもよくもまあ耐えるものだ…………うわっ、オ
ス同士がぶつかっただぞ!

…………争わんのかい!! そっち優先かい!!

「ご主人様…………何かウチ、アホらしくなってきました…………。」

「いや待って待って、もしかしたら俺たちは、ものすごく貴重な場面に遭遇しているのかもし
れないぞ? あ、ほら見てみる。さっきまで片方に擦り寄っていたメスが、今度はもう一
頭の方と…………。」

「ご主人さま。とりあえずどっか移動せんと、ウチもう見たくないです…………。」

「…………そうね。どっか行こう。」

実はおれもアホらしくなっていたので、一旦離れることにした。

ハーレム野郎は、とんだ性癖のス○ツピング野郎でした! なんて。

ギルドになんて報告すりゃいいんだ。

* * * * *

俺とシヨウコは、近くに敵影がない所に移動。

とりあえず携帯食料（今日はサンドイッチ）を頬張る。

シヨウコは「ウチ、あんまり食欲ないです……。」と言っていたが、ドールお手製と伝えると態度が一変。

「ドールちゃんのなら、そらもう美味しくいただきます！」

元気になった。よかった。

……この戦い。もし勝てたらMVPはドールに決定である。
サンドイッチで戦況を変える勝利の女神、ドール様。

……ホント、今日は朝から色々あった。

……なんで俺、ばかって言われたのよ……。

ちくしよう、ヒナタさんとの銭湯騒動があつてから色々ありすぎて……何だか無性に腹が立ってきた。

いや、ドールやヒナタさんに怒っている訳ではないのだ。

セツヒトさんには若干怒ってるけど！

俺のスキルの低さ、女性の扱いの下手くそ加減に怒っている、と言えばいいのか。

サウナで過ごす男女の関係とか、その辺を事前に知っていればあんなことにはならなかったし？

ハイビスさんにも怒られなかったし？

ドールのことを考えてヤキモキすることも無かつただろうし？

そう言えば朝の騒動もあれだ、俺が女性との話し方とかプロポーズの言葉とかその辺の常識を知っていれば、あんなことにはならなかったはずだ。

それにセツヒトさんにはからかわれ、抱きつかれてセクハラしたせいでドールは怒っちゃって……

余計に何か腹立ってきた。そんな場合じゃないのに！ていうか今はクエストの途中なのに！！

もうヒナタさんとかハイビスさんとかドールとかセツヒトさんとか………！！

「ご、ご主人様？大丈夫ですか？」

いかんいかん！シヨウコにまで心配をかけてしまっているではないか。

落ち着け、落ち着け俺。

今日の獲物、狩猟対象のことを考えろ！

えーつと、今日のモンスターは……

……ハーレムマスター、ロアルドロスさんである。

こっちは女性関係でゴタゴタゴタ色々あって、やっとこさ今日ここに来たのに。
観察してみたら、当の本人？は2頭並んで仲良くス○ツピングで酒池肉林なパラダイ
ス。

さぞ女性の扱い方を心得ていらっしやるんですなー！

……………。

よし。

よし、もうあいつら。

絶対に許さん。

「シヨウコ。」

「フガフガ!!は、はい!!」

「ごめんな食べてる時に。だが、作戦変更だ。」

「へ?」

決めた。

あいつらまとめてぶっ飛ばす。

「……………2頭連続狩猟だ。奴らを分断して、今日2頭狩る……………!!」

「……………、ご主人様……………?」

ここ最近のフラストレーションが爆発した俺は。

柄にもない強気発言で、シヨウコを驚かせてしまうのだった。

57 大きい方を狩りましょう。

自分でも無茶を言っているのはわかる。

今日初見のモンスターを2体狩猟しようというのである。

1頭でさえ危険なのに、2頭の狩猟。

「ご主人さま、流石に無茶ですって！……本気で言ってます……？」

「本気も本気だ。2頭を連続で狩る。連続狩猟だ。」

流石にシヨウコも驚いている。

そうだよなあ。

だが、この案。

実は、俺の中で現実的に可能ではないかと思っていたのだ。

「シヨウコ、何も無茶を言っているわけではないんだ。」

「……あのハーレムモンスターに対して、頭にきとるわけやないですよね？」

「大半はそれだ。」

「ご主人さま……。」

「でもな、残りはイけると踏んだからだぞ。作戦はこうだ。」

「本気ですね……はい、聞きます。」

シヨウコは、オトモとして、今までに何度も大型の狩猟に行っている。

クエストの経験値というか、大型モンスターの狩猟については、俺よりも上。

こう言う時は必ず相談する。

「まず、分断は必要だ。当たり前だが、2頭を完全に同時に相手する訳ではない。」

「それそうですね……そんなんしたら、ご主人さまもウチも命いくらあっても足りません。」

教官はしたことがあるらしい。リオ夫婦相手に完全同時で。

……まあそれぐらいの化け物技量がなければ、難しいということだ。

「で、だ。こいつを使う。」

「けむり玉……ですか？確かに目くらまし程度にはなりますけど……結局どちらにも気づかれてしまいますよ？」

「そこなんだよ。どうもけむり玉の有効な使い方を、みんなよくわかっていないような気がする。シヨウコ、けむり玉ってどんなアイテムだ？」

「え？そら……白い煙がモクモク立ち込めて……モンスターからはこつち、あまり見えなくなる？って感じですよ。」

「だよな。」

シヨウコは別に間違っではない。

けむり玉は、煙が立ち込めて、辺り一帯が霧がかかったように白くなるアイテムだ。

目くらましにはもってこいで、俺がこの世界にやってきたあの日、小型モンスターから逃れるために何度か使用した。

「俺の〈情報画面〉にも、こう書いてあるだけだ。」

そう言って、俺は自分の情報画面をシヨウコに読み上げた。

【名前】けむり玉

【レア度】2

【現在の相場】180z

【説明】着弾地点から、広い範囲に煙を発散する玉。

「……普通ですねぇ。」

「ああ。だがな、俺が命からがらの街にやって来るとき、このけむり玉を使ったことがある。実はこのけむり玉、相手がこつちを意識していないタイミングで使えば、全く気づかれることはない。」

「……えっ?」

「本当なんだ。なぜか分からんが、モンスターから見つかっていないまま、辺りに霧のような煙がかかれば、気づかれないうままやり過ぎることができるんだよ。」

小型モンスター相手に何度も使ってきたからわかる。

敵の視界に入らない、気づかれないところで使えば、このアイテム、かなり有用だ。

「えっ!?で、でもご主人さま。ウチが以前使った時は、めっちゃくちや気づかれましたよ

「？」

「既にこちらが認識していたり、目の前にいたり、触れられたり、何かしらハンターの音を聞いたり……。モンスターが気付かない基準みたいな事は正直わからない。……。別モンスターの咆哮には全く反応しないし、何なんだろうな。」

「……。そういえば、前使った時はめちゃくちゃ足音立ててしもうて……。それが本当やとしたら……。」

「……。先にけむり玉を仕掛けておいて、音をなるべく立てずに忍び寄れば、2体を1体ずつに分断することも可能かもしれない。そしたら、あとは一匹ずつ倒す。」

多分できる。はず。

分断に失敗したら、その時はその時だ。逃げまくろう。

「……。分かりました。もし効果が本物であいつらを分断できるなら、可能かもしれない。ん。」

「ああ、手順を確認するぞ。」

こうして、ロアルドロス殲滅会議を15分ほど行った。

* * * * *

「いました……まっすぐ前方、ロアルドロスです。やっぱり、少し離れて、2頭は近くに
おります。」

「よし、マップどおりだな。じゃあ予定通りに行くぞ。」

「はい。」

俺のマップで確認もできたが、シヨウコの目視も大切。

どうやら2体とも横たわってリラックスしている様子。

周囲のルドロスも同様だ。

しかしやはり、この二体おかしい……。

普通、野生の雄同士、お互いの縄張りを主張するものだと思うが。

張り合うって言葉もあるぐらいだし。

………もしや兄弟なのか!?

アツチの意味でもコツチの意味でも兄弟なのか!?

「…………ご主人さま。何か余計なこと、考えてます?」

「何を言う。そろそろ行くぞ。」

「不安や…………。」

シヨウコに俺の下ネタを見透かされながらも、狩猟を開始する。

「(あつち、多分こちらには気づいてません。)」

「(了解…………けむり玉、出番だぞ…………と。)」

俺とシヨウコは、ロアルドロスに気づかれないよう小声で話す。

けむり玉に着火、ロアルドロス2体の間に、転がすように投げ入れる。

すると、丁度いい位置に止まったけむり玉が、音も無くモクトクと煙を噴出する。

「(…………よし。行くぞ。)」

「(はい…………。)」

抜き足差し足忍び足。

ロアルドロス2頭とルドロスたちは、平然とのんびりしている。けむり玉の煙が見えないのか？

ソロリソロリと一体の後ろに近づく。

狙うのは大きい方の個体だ。

こちらの体力がある内に、強そうな方をやってしまおうという作戦だ。

親指を上げて、シヨウコに合図。

頷くシヨウコ。

（鬼人化……乱舞！）

ザシュザシュ!!ザザザザン!!!

「グアアアアアア!!!」

乱舞をロアルドロスの頭に当てる。

凄まじいまでの咆哮。

思わず耳を塞ぐ。
だが。

「(やつ!)」

シヨウコがいち早くロアルドロスの目に爪撃を当てる。
シヨウコに音攻撃は効きにくい。
威力は無くとも急所を狙う攻撃。
気を引くには充分だ。

「グアっ!!!ガアアアアア!!」

ロアルドロスが、シヨウコ目掛けて前足を横に振るう。

「(はっ!)」

避けるシヨウコ。

回避が本当に巧みだ。

ロアルドロス（大）は、完全にこちらに臨戦態勢。

だが、もう一頭のロアルドロス（小）は、キョロキョロしていてこちらを認識していない。

あの大声聞こえないのかよ!!とツッコみたくなるが、とりあえず後回しだ。

「いけるな！よしっ！そのまま行くぞ！パターン1！」

「はいっ！」

小声ではシヨウコと連携が取りづらい。

なので、事前にハンドサインを決めておいた。

俺が「1」の指を立てれば、そのまま作戦の続行。パターン1。

ちなみに、両者に気づかれた場合は死にもぐるいで撤退。パターン2だ。

今回はどうやらうまく行きそうなので、このまま気を引いて、2体を引き離す。

「（こっちだ！）」

シヨウコに意識が向いている間に、俺が腹部に痛撃を与える。

「グアア！ガアアア!!」

今度は俺に顔を向けるロアルドロス（大）。

急に体を丸め出した。

痛そうな攻撃が来そうな予感……。

尻尾のなぎ払い!?

いや、反動をつけて……体当たりか!!

「あぶねえっ!!」

すかさず後ろに跳ぶ。

直後ロアルドロス（大）は、俺がいた場所に体当たりをかましてきた。

「グルルルル………。」

俺にダメージを与えられず、腹立たしげに呻くロアルドロス（大）。

「（やあっ!!）」

すかさずシヨウコが爪撃を顔に当てる。

気がそちらに向くロアルドロス（大）。

後ろに避けるシヨウコ。

隙ができたなら今度は俺が攻撃。

そして後退、シヨウコにチェンジ。

シヨウコが攻撃、後退、チェンジ、俺が攻撃、後退、チェンジ……………。

この流れを繰り返していく。

「グアっ！ガアア！」

攻撃はすれども、中々当たらないことに苛立つてきたロアルドロス（大）。

気づけば、もう一体のロアルドロス（小）とかなり引き離すことに成功していた。

「一応、もう一つ……」

ロアルドロス（大）の後方に、念の為のけむり玉を、放っておく。

煙が切れば、2頭同時に相手取る必要がある。

効果時間がよく分かっているないので、保険をかけておこう。

今度、時間を測っておくか。

……………。

気づけば、始めに居たエリアからだいぶ離れた。

けむり玉の有効範囲から抜け出たのだろう、視界を遮っていた霧のような煙も晴れている。

「グアアア!!」

まだまだ元気なロアルドロス（大）。

「うおっ!!」

噛みつき攻撃を紙一重で躲す。

「シヨウコ! そろそろ行くぞ!」

「はい!」

かなり離れたし、声を出しても平気だろう。

シヨウコに直接合図を出す。

「さあさあ! ここから本領発揮や!!」

俺とシヨウコが、ロアルドロス（大）の側面を挟む形になる。

ここまでは、相手の気を引く必要があった為、どうしても正面から攻撃を受ける必要があった。

そのため、リスクは上がる。

何度か危ない場面もあったが、一応は無傷だ。

だが、ロアルドロス（大）にも、大したダメージは与えられていない。

しかし、ここからは違う。

もう一体のロアルドロス（小）に気を使う必要も無い。

「シヨウコ！いつもどおりに！」

「はい！」

いつもどおり、とは、俺達のセオリーどおりに、という意味である。

シヨウコも俺も、お互いに回避が主体の戦闘方法をとっている。

俺は双剣というガードができない武器のため、シヨウコは身軽で抜きん出た身体能力を活かすため、同じような戦い方になる。

そのため、攻撃を食らうことはなるべく避ける。片方がダメージを与えている間は、片方は待機。

相手が攻撃をした際は、安全最優先で避ける。その間に片方は、隙を見て安全なところから攻撃を行う。

そうやって相手の気を引き合いながら、攻撃を行っていく。

リスクがだいぶ薄くなる側面方向から挟撃するのが、今の所の俺達の最適解になる。たまにモンスターが周囲全体を薙ぎ払う攻撃を仕掛けてきたり、体液を撒き散らしてきたりするのだが……。

まあ、もうその時はその時で対処するしかない。

「ご主人さま！そつち！」

「任しとけ！」

シヨウコに気を取られ、ガラ空きになった側面を狙う。

斬るのは、ロアルドロスの特徴でもある、その鬣みたいな海綿状の首である。

「よっ！」

特訓の剣の振りを思い出しながら、隙だらけのそこを狙う。

「グアオツ!？」

「よしっ！」

いいのが入った！蠶に傷が入る。
特訓の成果が出ているな。

「グルルルル……………」

ロアルドロス（大）の視線が俺と交わる。

ビシビシと俺に殺意を送る赤い瞳。

コイツ、本気モードだ……………」

「シヨウコ。」

「はい。」

「意識が完全に俺に向いている。でも陣形は崩さずに。回復が必要なときは言う。」

「……………はいっ！」

シヨウコは速い。

アイルーという特性上、とても俊敏で体力もかなりある。

だが致命的に足りないものがある。

それが火力だ。

俺とシヨウコが挟撃をしばらく続けると、モンスターの意識が完全に俺の方に向くようになる。

これは推測でしかないが、おそらくモンスターにとって痛い攻撃を繰り返した方に、より意識を向けやすいのだと思う。

ここまで誘い込むときは、わざと俺は手加減をしていた。

シヨウコと俺、どちらにも意識が向くように。

だが、作戦が変わった今は違う。

こつちも全力だ。

ロアルドロス（大）の怒りや殺意は、完全に俺だけに向けられている。

それでも、陣形は崩さない。

言い換えれば、シヨウコの攻撃できるチャンスでもあるから。

「……来いよ、ハーレム野郎。朝から変なもの見せやがって。」

「グルルル……！」

「うちの子が変な趣味持ったらどうしてくれんじゃコラア!!!」
「ガアアア!!!」

俺とロアルドロス（大）の一騎打ちが始まった。

調子こいて挑発を試してみたが、効果は覷面。

完全に意識をこっちにしか見せていない。

回避を優先しつつ、傷がついた鬘を中心に狙っていく。

立ち回りは、モンスターを中心に、基本時計回り。

シヨウコはその動きを見ながら、挟撃の陣形を保ちつつ、すかさず攻撃をしている。

「…………ガアアアアアアアアアアア!!!」

突如、ロアルドロス（大）が叫びだす。

怒っているときに叫ぶのは…………大技の予感！

すると、海老反りしたロアルドロスが、体をムチのようにしならせて、地面へ体を叩きつけようとする。

(ボディプレス！速っ！間に合わな——)

ドガアツ!!!

「ぐあつ！」

「ご、ご主人さま!!」

しまった、モロに食らった！

……いつてえ………けど、あまり痛く………ない？

「ご、ご主人さま!?!平気ですか?？」

「……ああ！問題ない！」

「よかったあ……。」

「すまんシヨウコ！陣形を直す！俺の対面へ！」

「はっ、はい!!」

体は……問題なく動く……。

防具を強化したおかげか？大したダメージになっていない。

痛いものは痛い、このぐらいなら慣れっこだ。

「このまま斬り崩すぞ！」

「はいっ！」

お返しだ。

ロアルドロスの動きは大体掴んできた。

教官から教わった、観察を怠らない動きを行ってきたからな。

「ショウコ！突進むちやくちや攻撃くるぞ！」

「はいっ！」

「その後ブレス！だと思っ！射程外に避難！」

「はいっ！！」

予想通り水を吐きながら突進してきたロアルドロス（大）は、これまた予想通り、ブ

レスをかまそうと口を天に向けた。

だが俺は怯まない。

ブレスの時間は、双剣使いにとってはむしろチャンスタイムだ。
バサルモスで散々練習してきたからな。

「いよっ……とー！」

「ご主人さま!?!」

シヨウコが驚きの声を上げるが、タイミングはここしか無いと思う。

わずかな時間でロアルドロス（大）の懐に飛び込む。

ブレスが来る瞬間、ギリギリで避ける。

目の前には、ガラ空きの首。

「くらえええええ!!」

双剣は手数で勝負!! 鬼人化……乱舞!!

ザシユ!!ザザザザザザザザザザザン
!!!!!!

「グルアアアアアアアアアア!!!!」

苦しげな声、これは効いているな。

「いよつと!」

鬼人化を解除、スタミナを回復させつつ距離をとる。

無理はしない。

「ご主人さまあ!打ち合わせにない事せんといってください!!心臓止まるか思いました!!」

「すまん、でも無理はしてないぞ。」

「目前でブレス避けるとか、無茶すぎます!」

「す、すまん。でも、いけたぞ。」

2人でロアルドロスを見る。

明らかに疲れている、しかも深い呼吸をしながらその場から動けない様子。

「チャンスタイムだ、シヨウコ！」

「ガッテンです！」

ガッテンで。あの番組、母親が好きだったなあ。

そんなしようもないことを考えるぐらいには、余裕が出てきた。
だが油断はしない。

「ご主人さまあ！最後まで、気を抜いたらあきませんよ!!」

「ああ！」

2人で猛攻撃を仕掛けた。

58小さい方も狩りましょう。

ロアルドロス（大）の狩猟は、無事に終わることができた。

結論を言うと、ロアルドロス自体の強さは、そこまででは無かった。

モンスターの攻撃は大体予備動作があるものだが、ロアルドロスはそれが読みやすい。

噛みつきや前足による薙ぎ払いは、俺もシヨウコも全て回避できた。

だが苦勞したのは、のしかかりとプレス、水弾攻撃である。2、3回被弾してしまっ
た。

プレスが当たった時などは、回復薬を用意してくれたシヨウコに怒られてしまった。

「だ・か・ら！突っ込まんでください!!」

「す、すまん。」

しかし、防具をかなり強化したおかげで、痛みはあるがそこまでのダメージにはなっ
ていない。

セツヒトさんってやつぱりすごい。

ロアルドロスは何度か俺たちから逃げるように撤退を試みたが、俺のマップ表示からは逃れられない。

ちよいちよい休憩を挟みながら、ロアルドロスを追いかけて回した。

「……ご主人さま、もう虫の息です。」

「ああ。」

シビレ罟を設置する俺。麻酔玉を用意するシヨウウコ。

一瞬で罟を仕掛け終えると、ロアルドロス（大）は痺れて動けなくなる。

そこにシヨウウコが捕獲用麻酔玉を投げつけると、ロアルドロス（大）はウソみたいに眠りだした。

「毎回この効き目の凄さに驚かされる……。」

「ウチはもう慣れました……。」

「ネムリ草」と「マヒダケ」の二つのアイテムを組み合わせて、完成するこの捕獲用麻酔玉だが、疲れて罠に掛かったモンスターにのみ効き目がある。

始めは、疲れて虫の息であるモンスターに、やっと効く程度の代物なのだと思っていたが……。

あまりに効きが早すぎる。

2つほど投げつけたら、すぐにスヤスヤ眠りにつく。

「ご主人様の麻酔玉、効きすぎです。ウチ、恐ろしなります……。」

「情報画面で調べるとどうしてもこうなるんだよなあ……。」

しかもこの即効性、どうやら俺が作った捕獲用麻酔玉だけらしい。

雑貨屋で売っているものを使用する時は、事前に麻酔玉や遠距離武器の麻酔弾などを当てておいて、そこから罠にかけて、タコ殴りにするのだとか。

「ま、何にせよ一匹捕獲成功だ。信号弾、打つぞー。」

「はい。ウチ、落とし物が無いか、見ときますね。」

信号弾を上げる。赤い煙幕が上空に向かって広がる。

ちなみに「落とし物」とは、モンスターがたまたま地面に落とすモンスター素材のことである。

狩猟を行なった場所を見回すとたまたまに見つかるのだが、実は俺の「情報画面」の「マップ」では表示されない。

なので、目が良く背も低いショウコが良く見つけてくれるのである。

更にショウコに聞いた話だと、この落とし物拾いを生業にするアイルーがいるのだとか。

落とし物だけで生計を立てるとか、たくましい限りである。

その玄人のアイルーに会ったら、一度話を聞いてみたいものだ。

遠くの方で、青い信号弾が上がるのが確認できた。

回収班の合図だ。

「よし、一旦キャンプに戻るぞー！周囲に敵は……。」

「ど、どうしました？ご主人さま？」

マップで周囲を確認してみると。

ちょうどスタート地点の目の前の水場に。

「うーん……いるなあ、ロアルドロス。」

「えっ?! さっきのやつですか?! どこにあります?」

「いや、驚かせてすまん。近くにいますわけじゃない。スタート地点の目の前。あー……
たまにあの辺ルドロスいるもんなあ。」

「あー、あの水場ですか……。」

「うん。どうしょつか。」

ちよつと参つた、スタート地点に戻って一旦仕切り直すつもりだったからな。

考えられる選択肢は2つ。

① 予定通り、セーフポイントであるキャンプに戻り、休憩する。

② この辺である程度休憩し、スタート地点に戻らないまま狩猟続行。

「シヨウゴ、残りの体力は?」

「全く問題ないです。いつでもいけます。」

「俺もだ。まだいけるではなく、全く問題ない。」

「まだいける」は「もう危ない」。

ハンターたちの間でよく言われる格言である。

まだいけるか？と判断している時点で既に万全ではない。だからあきらめる方が良く、と言う意味だと、俺は解釈している。

だが、残りの体力、シヨウコの返事、ロアルドロス（大）の強さを総合的に考えると……。

おそらくいける。

「シヨウコ、このまま連戦したとして、いけると思うか？」

無闇に攻めるのは良くないとは理解している。

そのために、シヨウコに確認を取る。

「何言ってますの？」主人さま。」

シヨウコがたしなめるように話す。
もしや難しいか？

だが、シヨウコの返事は180。違うものだった。

「断言します。安全マージンをとれば、99%狩猟できますよ。」

「……そっちなか。」

「ええ！ウチとご主人様なら、絶対大丈夫です！」

「じゃあ、やってみるか。本当の連続狩猟を。」

「はい！いきましよう！」

俺とシヨウコは、もう一匹のロアルドロス（小）を狩ることで意見が一致した。
なら迷うことはない。

とつとつやってしまおう。

「あ、でも。」

シヨウコが付け加える。

「もしさつきみたいにブレススレスレ回避するんやったら……ウチ、止めますからね!?」
「だ、大丈夫だ。絶対しない!」

絶対に油断はしない。

2人で村に帰るんだから。

* * * * *

「やああああ!!」

シヨウコが反対方向からロアルドロス(小)を攻撃する。
だがロアルドロス(小)は、既に俺へと視線を向けて離さない。

「シヨウコ!既に俺に向いている!いつも通り頼む!」

「はい!気をつけて……!下さいっ!!」

「ああ！」

ザッ!!

ザシユザザザン!!!

後方に回避しながらシヨウコに合図。

正面に立たないように時計回りに移動しながら斬りつけ、後退。

意識が俺に向いている間、シヨウコは攻撃を繰り返す。

「グアアアアアア!!!」

それでもロアルドロス（小）は、俺に視線を向けたままだ。

俺は、さつきからやたら体の調子がいい。今日は、訓練以上の斬撃をかなり繰り返している。

「はあっ!!」

ザン！ザザ！ジュザン！！

「グアア！」

「シヨウコ！頭部破壊確認！鬣は既に傷付いてる！」

「はい！めちやくちや疲れてます！！いけます！！」

「おっけ！！」

シヨウコと確認。今の言葉はつまり、捕獲可能なところまで、ロアルドロス（小）の体力を削ることができたということだ。

シヨウコは、モンスターへの観察眼がとても優れている。

一度倒したモンスターならば、こうした捕獲のタイミングが分かるのだと言う。

すごいスキルだと思うのだが、これは訓練したアイルーならば誰でもできる芸当らしい。

やっぱりオトモアイルーって有用だなあ、と感じざるを得ない。

「よし！こつち仕掛けた！」

「麻酔玉！用意できてます！！」

「よし！合流！」

俺とショウコが同じ方向に逃げ出す。

追ってくるロアルドロス（小）。だが、その方向は……。

ズドオン!!!

「ガッ!?グウウウウウツ!!」

うめき声か何かよくわからない声を上げるロアルドロス（小）。

うまく落とし穴にかかってくれた。

「麻酔玉！おやすみなさい、や!!」

ショウコがすかさず麻酔玉を当てる。

二つ当てたところで、ロアルドロス（小）は力なく項垂れ、動かなくなつた。

「……目標、沈黙しました……。」

「やったか!？」

「何ですのそのフラグ……。ぐっすりスヤスヤです。」

「だな。」

狩猟はどうやら成功したようだ。

穴から上半身だけ出したロアルドロス、鼻から提灯を出して眠ってしまった。

「ずいぶん間抜けな姿勢だな……。」

「野生やと考えられへん寝方ですね……。」

気持ちよさそうにしてはいるが、これからギルドの回収班がこいつを回収して、解体なり解剖なり、色々やってしまうのだろう。

少し同情してしまう。

今だけでも安らかにお眠り下さい。

信号弾を打ってからしばし、俺とシヨウコはその場に座り込んだ。

「はあー!!しんどかった!!でも、何とかなったな!!!」

「はい!でも、ご主人さま、余裕あつたんちやいます?」

「ああ、今日は何だか、体のキレがとてもいいんだ。」

普段の狩猟では、あまり無い感覚。

連続で狩猟をすることで、昂っていたのかも知れない。

アドレナリンドバドバ状態である。

「集中力が続いたことが、今回の一番の収穫だな。一番欲しい時に、いい斬撃を繰り出すことができた。」

「はい!」

「反省は……。」

「ご主人さま、やっぱり無茶されることが多いです。ここはきつちり、反省してもらいます。」

「アツハイ。」

「今回、何とかなった言うのは結果論です。まあロアルドロス相手に後手は踏まんと思

うてましたし、ご主人様の実力やウチらの連携を考えれば、問題はないとも思うてました。でも、初めての連続狩猟、アクシデントが起きないとも限りません。そんな中で無茶な行いは、即失敗に繋がります。大体ですな……。」

「はい、すみません。はい、反省してます。はい……。」

シヨウコのお説教は、しばらく続くのであった。

* * * * *

日もそろそろ沈み始めようかという時間。シヨウコと共にスタート地点のキャンプへ戻る。

今日の内に2頭仕留められるとは思っていなかった。

ギフトの力を借りているとはいえ、ロアルドロスへの攻撃自体は自分自身の力である。

地力がついてきた、と思う。自信につながる。

まだ体力にも余裕がある。

こうした狩猟を、今後も続けていこう。

まあ流石に、これからもう一頭！となるとキツいかもしれない。お腹もすいたし、ちよつと疲れている。

この状態が「まだいける」なのだろうな。

とつとと帰つて、風呂に入つて、美味しいご飯でも食べよう。

「シヨウコ、大丈夫か？」

「はい！いつも心配かけて……すみません。」

「いや、いいんだ。それに、最近はクエスト終わりに、変に緊張することも無いしな。」

「そ、そうですか？そら良かったです……。ご主人さまの……おかげです。」

シヨウコは、トラウマを抱えている。

運悪く、自分がオトモとして付いていったクエストで、あり得ないアクシデントが立って続けに起きた。

武器を無くす、大型モンスターが乱入する、一緒にいたハンターが死にかける。そんなアクシデントが何度も、何度も。

そうして、心無い一部のハンター達が、シヨウコにつけたあだ名は「招き猫」。

俺がシヨウコを雇用したばかりの頃。

クエスト終わり、もう帰ろうかという時、シヨウコはかなり疑心暗鬼になっていた。クエスト中はあんなに頼りになるのに、終わった後、人が変わったように自信無さげな感じになる。そんな状態。

シヨウコの心の傷は、根深いのだろう。

だから、俺はできるだけシヨウコを安心させたい。

そして、そんな不名誉なあだ名なんて、彼方にやって忘れさせてやりたい。

アイルーの集落で、シヨウコは熱意をもって、俺に懇願してきた。

「ウチを、オトモにしてくださいー」と。

シヨウコにとって、それはとても勇気のいる言葉だったに違いない。

だから、その思いに応えたいと思った。

シヨウコとのクエストも、かなりの数をこなしてきた。

少しずつシヨウコも、クエスト終わりに疑心暗鬼になることは無くなってきたと思う。

単純に、運が悪かっただけなのだ。

よくあるアクシデントである。

「いい傾向だ、シヨウコ。これからも笑って帰ろうな。」

「……………はいつ!!」

いい笑顔だな、と思った。

スタート地点まで、もう少し。

そんな時だった。

キン……………キン……………キン!

変な音が聞こえてきたのだ。

何だこの音……………?まるで金属と金属がぶつかり合うような……………!?

「……………ちよつと待て!シヨウゴ!」

「へ?どうしたんですー!」

身震い。

ゾクツとした。

「伏せろお!!!」

ビュオン!!!

シヨウコを無理矢理押し倒す。

直後、とんでも無い速さの何かが、俺の頭を掠めた。
風が起きて、頬に当たる。

間一髪。

シヨウコを立てせる。

「シヨウコ!無事か!」

「ご、ご主人さま!すみません!!ありがとうー」

「礼は後だ……こいつは……」

立ち上がり、見上げると。

「嘘だろ……」

全身トゲトゲ、体色は青と赤、巨大な体を支える屈強な両足、そして何より、超大型の大剣のような尻尾。

「グルルルル……。」

子どものころ、図鑑の中でしか見たことのない大型の肉食恐竜。そんな大型モンスターが、俺たちの前に立ちはだかっていた。

59強襲に対処しましょう。

突然、見たことも無い大型モンスターに強襲された。

間一髪避けられたが、奇跡としか言いようがない。

視界の端に、キラリと光るものが見えたのだ。そして、明確な殺意を感じた。思わず体が動いた。

目を相手に合わせたまま、シヨウコの様子を見る。

シヨウコに怪我は……無さそうだな。

無事でよかった。

しかし、なぜ接近に気付かなかったのか。

ロアルドロスの連続狩猟に夢中だったから？いや、敵の確認はした。

マップ上には、さつきまでいかなかったはずのモンスターのアイコンが光っている。

……油断していたのか。

連続狩猟が見事に成功し、自分の成長に自惚れていたのか。

油断はしないと心に誓っていたはずなのに。自分が情けない。

切り替える。反省は後だ。
生き残ることだけを考える。

まず、俺たちはこいつを狩れそうか？

答えは、否。

……はつきり言って、すごく強そう。

俺たちが万全だとしても、勝てるのかわからない。

何より俺たちは今、少なからず疲弊している。

次、俺たちはこいつから逃げられそうか？

……わからない。

だが、あの強靱そうな足腰。先程の攻撃は、目に留まらない程であった。

俺たちより遅いと言うことは、まず無いだろう。

希望的観測は、現状しない方がいい。

じゃあ次に考えられるのは……。

うん、一番現実的だな……。

俺たちのどちらかが残り、囀となる。その間片方が救援を要請する。

近くにはそろそろ回収班も来る。

時間的に観測班がこちらを見ているかはわからないが、救援の為、助けにきてくれるハンターもいるかもしれない。

考えを一瞬でまとめる。

ここは俺が囿になって、シヨウコに助けを呼んでもらう方がいい。

……死ぬつもりはないが、シヨウコに呼びにいつてもらった方が、間違いなく早いだろう。

……よし、覚悟を決めろ。

シヨウコに考えを伝え、実行せねばなるまい。

「シヨウコ、目をあいつから離すなよ。今から……シヨウコ？」

「あ……うあああ……。」

「シヨウコ……。」

しまった。

トラウマか。

このタイミングでの、明らかな強敵の急襲。

シヨウコのトラウマをフラッシュバックさせるには、十分過ぎる。

「シヨウコ、深呼吸だ。落ち着いてくれ。」

頭を撫でる。背中をさする。

モンスターとの目線は外さないまま。

外した瞬間、攻撃を仕掛けてきそうな気がする。

「そうだ、大丈夫だ。」

「ふ、ふうふう。はああ……。」

「……どうだ？」

コクン、と頷くシヨウコ。

「よし……シヨウコ、これからやることを言う。実行してくれ。」

コクン。

「……5数えたら、後ろに思いっきり飛び退くぞ。いいか。1、2、3、4……」

カチツ。

「5おっ!!」

バツ!!

2人で同時に後ろに跳ぶ。

その瞬間、俺たちに逃げられると思ったのか、相手モンスターが猛スピードで追いかけてきた。

「そこだ!」

ザザ!ズドン!!!

「ギャアアアアアアアアアア!!!」

モンスターが地面に落ちた。

タネは簡単。ギフトで落とし穴の罠を仕掛けたのだ。

超重量の大型モンスターには、効果覿面。

「シヨウコ、時間が無い。聞いてくれ。」

「……（コクンコクン!）」

「俺がここを引き受ける。助けを呼んできてくれ。」

「……（ブンブンブンブン!!）」

首を振るシヨウコ。

いかん、そろそろ罠の効果時間が切れる!!

「シヨウコ!恐らくこれが最も生き残る可能性が高い!いいから行け!!」

ベキ!!ベキベキ!!……ズン!!

「グアアアアオオオ!!!」

「くっ……!復活はええ! ショウコオ!!目を瞑って走れえ!!」

ビュン!!

閃光玉を投げる。

一瞬の間だけ、猛烈に光るアイテム、閃光玉。

色々と使えるが、こうして一瞬の隙を作るにはちょうどいい。

「ギャオオオ!!!」

一瞬のけぞったかと思うと、無闇矢鱈に攻撃を繰り返す恐竜モンスター。

一瞬だけ情報画面を見る。

モンスターの名前は……デインバルド?

「ショウコ!!こいつの名前はデインバルド!頼んだ!!」

「……はいっ!!」

シヨウコは泣いていた。声が震えていた。でも、猛スピードでキャンプまで駆けていく。流石の速さだ。そして……。

「グアアアア!!!」

「おおっと!!!」

尻尾攻撃がご自慢なのか？ケツを向けたと思つたら、こちら目掛けて尻尾を振り下ろしてきた。

、挙動は速いが、避けられないことはない。

「どうした!?!簡単に避けー」

「ガアア!!!」

「ぐあつ!!!」

油断した。

連続かよ……もろに食らってしまつた。

でも覚えた。尻尾の振り下ろし攻撃は、2回繰り返すことがある。

……痛え……死ぬほど痛い。

骨は……いつてないか。よし。

防具に感謝。

「さーて、お前の情報をもう少し見せてくれ……！」

いわゆる上位クラスのモンスターだろうか。

明らかに雰囲気はやばい。勝てる気がしない。

でも……生き残る！俺は、帰らなければならぬ！

〈情報画面〉、〈ハンターノート〉、〈モンスター情報〉……あつた。

【モンスター名】 デイノバルド

【種族】 獣竜種

【別名】 斬獣

【詳細】

密林や砂漠、火山帯などの高温地域に生息する獣竜種の大型モンスター。肉食性で、性格は至って獰猛。一度狙いを定めた獲物は決して逃さず、執拗に追跡し、多種の大型モンスターと鉢合わせても、積極的に戦いを挑む。濃赤色の鱗と外殻をもち、渦巻く炎のような形状の青い突起が背中に立ち並ぶ。また、全長の半分近くを占める巨大な尻尾が特徴。まるで刀のように尻尾を使って攻撃をすることから、斬竜の異名で呼ばれる。驚異的な運動能力を誇り、重厚な外見とは裏腹に非常に俊敏。素早いステップと踏み込みによって獲物を翻弄しながら、ハンターの身の丈を超えるほどの跳躍とともに攻撃を繰り返す。……………

飛ばし読みしながら、何となく把握。

2人で逃げていたら、間違いなくどちらもやられていたな……。

残忍かつしつこい性格、しかも攻撃も強烈ときたもんだ。

「さて……弱点みたいなのは……？」

教官の言葉を思い出す。

観察、観察、観察。

とにかく、モンスターを見る。特徴を捉える。弱点を見つけるんだ。

「グラアアアアア!!」

「うおつと!!」

頭ごと突つ込んで来た!

寸でのところで躲す。噛みつき攻撃ってやつか……?」

予備動作が遅かったので避けられた。

耳には、ディノバルドの牙と牙がかち合う音が残った。

「グルルルル……」

「怒るなよ……怖すぎんだ、よつと!!」

ステップで後退していく。

いかに身体と尻尾が馬鹿でかいとはいえ、射程の外に出れば安全だ。

……なんて、浅はかだった。

「グウウウ……!!ガア！」

ボン！ボボボン!!

「嘘だろ!?!」

俺が離れたとわかるや否や、今度はあいつ、口から火球を出してきたぞ!!

「回避する……だけなら!!」

デインバルドが発した火球を避ける。

さつきまで俺がいた場所に、火球が着弾した。

「……?火球……じゃない!?!これは……!?!やばい!!」

着弾した火球は霧散すること無く、何故か地面に残っている。

すぐに火球?と距離をとる。

直後、その火球もどきは、爆発した。

「火球じゃない……これもうほぼ、時限爆弾だ。」

原理はわからない。だが、奴は口から時間経過で爆発する何かを吐き出すことができる。

その事実がある。

そしてそれは、遠くに離れてもあまり意味はないと言うこと。

「ガアア!!」

「跳んだ!!!」

火球について考える間もない。

離れていたデイノバルドが跳んだかと思うと、いきなり反転して尻尾を叩きつけてきた。

「のおわっ!!!」

「またも間一髪でよける。」

「……命がいくつあっても足りない気がしてきた。」

「こいつ……一瞬で距離を詰めて、この破壊力の攻撃を繰り出せるのか!?!」

「防戦一方の俺。執拗に俺を狙ってくるディノバルド。」

「情報に偽りなし。……こいつ、しつこい……!!」

「グアアグ……!!」

「キン！」

「……何だ!?!」

「急にディノバルドが自分の尻尾を咥えた……」

「……あの口で尻尾を噛みながら……火花を起こして……」

「……!!やばい!!」

気づいた時にはもう遅かった。

デイノバルドが口から尻尾を離した瞬間。

とんでもない速さで回転した。

思わず飛び退く。目の前に来る刃。

胸を切り裂く寸前、背筋と腹筋を思いっきり使って、スウエーで避ける。

ギリギリ、何とか避けられたと思った時。

デイノバルドはまた尻尾を咥え直すと。

間髪入れず、もう一度尻尾をぶん回してきた。

ドガッ!!

ドン!ゴロゴロゴロ……

「……が!!ぐはっ!!」

また、2回来た。

完全に当たってしまった。

「ぐうう!!……ふうー!ふうー!はあー!!」

無様に転げる俺。

教官から教わった呼吸法を繰り返す。

何故かはわからんが、デインバルドが止まっている。

回復薬グレートがぶ飲み。

右の胸が……これ、骨イってるな……。

腕、足、イケるか……。

頭は、血が止まらないが、多分大した傷じゃない。

出し惜しみはしない。回復薬グレート2本を全身にかける。

「いってえ……防具もか……。」

せつかくセツヒトさんに整備してもらったのに。

防具の腹部は、見事に破けていた。

「グ……グアアアアアアア!!」

「っ！」

耳が壊れるかと思うほどの咆哮。

天に向けて吠える姿は、どこか余裕を感じる。

ムカつくな。

勝利を確信でもしたか？

……おあいにくさま。こちらは諦める気など、毛頭無い。

心のどこかで、あいつには敵わないと冷静に分析しているが……だからなんだ。やってやる。

「悪いが、ギフトをフル活用してでも、勝たせてもらおうぞ!!斬竜ディノバルド!!」

俺は、ポーチに手を触れた。

60 汚く戦いましょう。

圧倒的強者。

凄まじい攻撃の連続。予測不能な動き。獰猛さ、執拗さ。それに見合う力強さ、速さ。斬竜ディノバルドは、今まで出会った中で、間違いなく一番強いモンスターだと思う。今の俺では、多分敵わない。

そして、一度見つけた獲物は執拗に追いかけて、必ず捕らえるという情報から、恐らくは逃げられない。

嫌と言うほど分かった。こいつと俺との差が。

そう、ハンターとしての普通の俺は、多分敵わない。

……じゃあハイソウデスカって諦めるわけにはいかないんだ。

俺は生きて帰る。

教官が教えてくれた。

無様でも、卑怯でもいい。必ず帰って「ただいま」と言う。

これこそが、ハンターにとって最も大切なことだと。

やってやる。

卑怯な手、使ってやろうじゃないか。

ギフトを存分に活用してやる。

「とは言っても……。」

さつきから満身創痍の俺に向かって、「グルルル……。」と言って睨みつけるだけの
デインバルド。

肉食動物は、致命的な傷が付いた敵は深追いせず、じつくりと体力が無くなるまで待
つことがあると聞いたことがある。

今、その状態なのかもしれない。

ありがたい、考える時間が増える。

「まずは切り札一枚目……。」

頭の中で情報画面を起動。

睨めっこをしたまま、〈アイテム一覧〉を確認。

……うん、あるな。

小瓶をポーチから出して、デイノバルドから視線を外さないまま、中身を飲み干す。

(うわ……凄いい効き目。これ、大丈夫なのか。)

いつだか、ケイさんに頂いた「いにしえの秘薬」である。

飲んだらバツチリ、疲れが取れて、体のたるさも消えた。何か、やばい薬なんじゃないかと思ってしまう。

肋骨は……まだ鈍く痛い。

完璧ではない。だが、多少は持ち直した。

「切り札2枚目……。」

〈情報画面〉を操作して、とあるアイテムを仕掛ける。

あとはタイミングだけなんだが……

「グウルルル……ガア!!」

デインバルドが動いた！

こちらにまっすぐ向かってくる！

バックステップで後ろに跳ぶ。無論デインバルドと距離が空けられるわけがない。だが、いい。奴が俺のいた所に来ればいい。

「……かかれ！」

バチバチ！バチイ！

デインバルドが固まる。

「ガア…アア…アアアア！」

「よしー！」

苦しそうな声をあげるデインバルド。

俺は何もしてように見えたのに、なぜ反撃に遭うのか、わからないだろう。

これは俺が今、ギフトの〈調合〉で作った「シビレ罨」である。手持ちの罨は3つあったのだが、使い切ってしまった。

だから、調合して新たに作ったのだ。

罨は嵩張るため、せいぜい二つぐらいしか持てない。

クエストに持ち込めるアイテムの最大数はギルド側が制限してるし、そもそも物理的な問題でそんなに持つことはできない。だから、基本的にハンターは罨を持って行く際、2つ用意する。

じゃあ罨を仕掛けるチャンスは2回しか無いのかというと、それは違う。簡単な話である。

罨を作る為に必要なアイテムも一緒に持っていけばいい。

シビレ罨の場合は「トラップツール」と「雷光虫」、落とし穴の場合は「トラップツール」と「ネット」。

罨二つ、トラップツールも二つはかろうじて持てるため、合計4回はチャンスがあると言ふことになる。

もし罨の使用に失敗してしまった場合、その場で作って使うのだ。

ネットは、作るのには結構時間がかかることだ。俺も練習したが、作るのに2分はかかってしまう。

だが、ギフトの力なら？
はい簡単。1秒で完成だ。

情報画面の〈調査〉から「シビレ罨」または「落とし穴」を選択。以上。
あとは〈アイテム一覧〉からそれを選べば、全自動で仕掛けられる。
オートマテックである。

卑怯だと思う。

自分で時間をかけて作って、自分で穴を掘ってしつかり罨を仕掛けるのが普通だ。
でも形振りなど構っていられない。

罨を作って仕掛けるまでにわずか2秒ほど。
罨にかかっている間はやりたい放題である。

「切り札3枚目。」

苦しそうに呻くデインバルドにすぐに接近。

（〈情報画面〉から〈操作方法〉選択…！）

すぐさまギフトの〈操作方法〉を使って、反撃を行う。

これを実践で使うのは初めてだが……。

迷うな。

憑依状態で攻撃するんだ。

シビレ罫が効く時間は8秒から10秒ほど。

短いが「モンスターが反撃してこない」という保証のある時間は、とんでも無く贅沢である。

（鬼人化、逆手切り、2段斬り、返し、突進連斬、乱舞……）

頭の中で技をプログラム、毎日特訓で見慣れた画面、迷うことは無い。

「くらええええ!!!」

あのからくり蛙を壊す威力。

とくと味わえ。

シユツ。

ザン！ザザザザザン！ザッ！ザシユ！

ザザザザザザザ、ザザン！！

「ギャ、ギャアアアアアアアアアア！！！！」

〈操作方法〉で憑依状態に移行、ディノバルドの脚部を中心に、攻撃を行う。

効いている。と思う。

痺れて呻いているのか、痛くて呻いているのか、よくわからない。

だが、攻撃あるのみ。頼んだ、憑依状態の俺。

「…2…3…4…5…6…7秒！よっ…！！」

なんとなくの体内時計で7秒ぐらい測って、後ろに飛びのく。

ズキイ！！

「ぐうっ！！」

骨が折れたとこだらうか、すごく痛い。

そりゃそうだ、あれだけ激しく動いたんだし。

だが、気にしない。とにかく動け！

双剣の斬れ味の消耗が恐ろしく早い。砥石で研ぐ！

「10……11……12、シビレ終わりか!？」

「ガアア!!……グギャアアアア!!」

ようやくシビレ罨の拘束から解かれ、咆哮をかますディノバルド。

凄い音に思わず耳を塞ぐ。

幸い「砥石使用高速化」のスキルで、3秒もあれば刀は研げる。

それにそこには。

「ギャア!!グアアアア!!」

「次い!!」

ズドオオオン！

「ガアア!!グア!!ギヤアア！」

既に落とし穴を仕掛けてるんだよ、ディノ君。

「スキありいいいい!!」

再び〈操作方法〉で攻撃。

自分ではない自分が、達人の技を叩き込む。

何とも情けないが、今はこの力に頼るしかない。

怒り狂うディノバルド。効いているな。

シビレ罠の時は、二足歩行恐竜のようなディノバルドの足や腿しか狙えなかつた。

だが落とし穴の時は、足から腰にかけて地面に沈むため、顔や喉などの弱点を狙える。

ジタバタ暴れて狙いにくいのだが、シビレ罠の時よりも効いていると思う。

「11…12…!!よつと!!」

落とし罠の効果時間は、モンスターにもよるが、大体15秒ほどだと、情報画面に書いてあった。

デインバルドが落とし穴のトラップを破壊し、地面から這い出てくる。既に後退して双剣を研ぐ俺。

「グウルルルル……。ガアッ！」

仕掛けてくるかと思ったら、自分の尻尾に噛み付いて、巨大な大剣のようなそれを赤色に変化させるデインバルド。

先ほども見たが、これは尻尾を研いでいるのか？

やること一緒だな。

目が赤くギラつき、殺気が凄まじい。

「正々堂々勝負しろや」と言っているようにも見えない。気のせいかな。

悪いが、俺にはまだそんな実力はない。

納刀して回避に集中しても、全くダメだったのだ。

満身創痍で正々堂々なんて挑んだら、まず間違いないで食われる。

睨み合う時間。

恐らく5秒ぐらいしか経っていないのに、とても長く感じられる。

そして……一つまずい事態が発生している。

デイノバルドが中々動けないのは、俺の畏に警戒しているのだろうか……。

(もう、体が限界だな。)

当たり前だ。

全身傷だらけ、骨折もしているだろう。

そんな中で、とんでもない剣速で斬撃を、無理矢理繰り返したのだから。

鈍痛が激痛に変わり、体をもうこれ以上動かすなど、脳が警鐘を鳴らす。

キツイ。

(畏にかかっている間に逃げればよかったのか? いや、こいつの移動速度はとんでもなく早い。それに俺は今、満身に全力で走れない。)

考えてもしようがないのだが、この方法を続けるしかない。

持っている「トラップツール」の数から考えて、罠を仕掛けられるのはあと20回ほど。

罠を仕掛ける。ディノバルドが罠にかかる。憑依状態で攻撃を加える。効果時間が終わる前に後退、次の準備。

これを何回も繰り返し返す。

覚悟しろディノバルド。

俺は、こういうコツコツやる系のことは、大得意なんだ。

* * * * *

「はあ……はあ……はあ……！」

「グアア……!!」

シビレ罠を破壊するディノバルド。もうこれで何回目だっけ……？

相変わらずピンピンしてやがる。

嘘だろ……結構いい攻撃叩き込んでいるんだけどな……。

全く嫌になる。

しかも、罨から復活する時間がだんだんと早くなっている。慣れてきているのか？
でも、やり続けるしかない。

〈情報画面〉を起動、調合で罨を作って……。

ピキツ!!

「いつてえ!」

今までで1番の痛みが、右の肋骨を襲った。

無理して体を動かしてきた代償か。

ってやばい!ルーティンが崩れた!急いで罨を調合!仕掛けて後退!!

「グアアアアアア!!!」

あぶねえ!間に合った!!

突進!そのまま突っ込んでこい!

「いい加減しつこいんだよ！このやろー」

そんなセリフを発した。

次の瞬間だった。

デイノバルドが跳んで、シビレ罨を越えたのだ。

「えっ!?!」

デイノバルドは反転して、着地。

その勢いのまま、赤く鈍く光る尻尾を振り下ろして、

俺に叩きつけてきた。

6 1最後の悪あがきをしましょう。

目の前にデイノバルドの尻尾が迫る。

一瞬のはずなのに、スローモーシヨンの様になる世界。

このスローになる現象って本当なんだな、とか考えてしまった。

脊髄反射で腕を出す。

その瞬間さえ、スローでわかる。

気づけば俺は、迫り来る尻尾を双剣で受け止めていて。

「ぐああ!!!」

吹っ飛ばされていた。

砂が口に入った。唾液と混じって泥になった砂が、切れた口の中に染みる。

痛いとかそんな感覚はもはやあまり無く、むしろ感触が気持ち悪くて唾を吐いた。

真っ赤な唾液だ。

体の様子を確認する。

とんでもない衝撃だった。

まだ冷静な頭は働いている。と言うことは、脳味噌をぶちまけたとかそういうことではなさそうだ。

足は動く。早く立ち上がれ。

腕を地面に置く。

「いっ!?!」

激痛。右腕が猛烈に痛い。

折れているかもな……。

なんとか刀は握れそうだが……そう言っていられるような状況でもないか。

近くに落ちている双剣を手にする。

……マジか、一本曲がつてるな。

双剣「ハリケーン」の片方が、刀身の真ん中から、ぐにやりと曲がつている。

持ち直す。立ち上がる。

それだけの動作で、気を失いそうなほど痛い。

そして目の前には、デインバルドがいる。

(そろそろ詰んだか。)

王手飛車取りって感じか？何なら角もくれてやろうか。
変なことを考えるぐらいには、頭は驚くほど冷静だ。
死ぬ直前って、妙に落ち着くんだな。

「グゴアアアアアアアア!!」

元気だな、デイノバルド。

そもそもお前、暑いところにいるタイプらしいじゃないか。

沼地とかに来るんじゃないよ。

……生きるためなんだな。生活がかかっているんだよな。

奇遇だな、俺もなんだよ。

「お前に何かがあったか知らないが……」

「グアアア!!……ギャア!!」

デインバルドが口を開いて、俺を捕食しようと牙を剥く。

「こつちだつて……生活かかつてんだよ!!」

双剣を構える。

激痛が走る。知らないそんなの。

牙が眼前に迫る。

もう、間に合わない。

〔〈情報画面〉〈操作方法〉「空中回転乱舞」〕

一瞬で選択を終える。

突如動き出す体。痛みとか動けないとか、そんなことをまるつきり無視して、勝手に勝手に体が動き出す。

デインバルドの噛みつき攻撃のタイミングに合わせて、縦に回転する俺の体。憑依状態の俺は、跳躍し、回転の勢いで牙をいなす。

その勢いのままディノバルドの頭部を切り刻んだ。

「グアアアアアア!!」

跳び上がった状態から、今度は斬り下ろし。

幾重もの斬撃を食らわせていく。

着地と同時に、ダメ押しの回転斬り。

「ギアアアア!!」

ボン!

口から何か爆発させながら、ディノバルドが倒れた。

着地した俺は、憑依状態から戻る。

その瞬間、

「~~~~~!!!」

もう声にもならない激痛。
痛すぎる。

「ぐおえええつ……ぐえつ……。」

吐いてしまった。

痛すぎると吐くんだな。

気休めの回復薬グレートをも、無理矢理口に振り込む。

そして全身に、特に右腕に薬をぶっかけながら、デインバルドを見た。

……口の中が爆発して、倒れた？

奴は今、地面をジタバタのたうち回っている。

もう本当に適当に、情報画面から選択した「空中回転乱舞」。

試したことさえない技。

一か八かの賭けだった。

回転した、その力で回避をしつつ攻撃できた……？

何ができたのか、なぜうまくいったのかは分からないが……多分偶然だろう。だつて目の前に来てたよ牙。口。臭いわアイツ。

デインバルドは、それでもなお元気な様子。

こいつ、どうやったら倒せるんだ……。

〈操作方法〉を使った攻撃で、何とか一矢報いることができた、つてところか。

そんなことを考えていたら。

意思に反して、俺の体は横に倒れた。

「あれ……？なんで……。」

何でつて。無理したからだろうな。

本当にどこも動かない。何を念じても、体が一つも言うことを聞かない。かろうじて起こした首でデインバルドを見据える。

「グルルルルル……。」

もう起き上がってらっしゃいますね……。

さつきみたいな偶然は、もう起こせそうにないかな。

「操作方法は……!!」

最後の最後の悪あがきで、〈操作方法〉を選択してみたら、〈情報画面〉自体がブレて、よく見えなくなった。

頭の中で「プツン」と何かが切れたような感覚。〈情報画面〉が出て来なくなった。……ついにギフトも働かなくなったか……。

目の前には、ゆっくりと迫るディノバルド。

かなり疲れているように見える。

顔の皮とか腿の部分とか尻尾とか、所々破壊できているし。

「……痛かったか? ざまあみろ……。」

「グルルルル……。」

これが最後か。

芝居がかった捨て台詞を、ディノバルドにぶつける。

第2の人生、ここまでか……。

女神様、すみません、ご期待に応えられなくて。

ドールごめん、ただいまって言えそうにないよ。

シヨウコ、ごめん。またトラウマになっちゃったよな……。

教官、すみません。命を守ることが、できませんでした。

ハイビスさん、ヒナタさん、後処理面倒そうです。シガイアさんも、すみません。

セツヒトさん、武器も防具もやっちゃいました。ごめんなさい。

ホエールさんの飯、また食いたかったなあ。ケイさんのところの飯も、まだまだ食べたいのに。オスズが働いているところ、見たかったよ……ごめんなさい。

色んな人に、心の中で謝っておく。

食べられる、捕食される。

妙に落ち着いている自分が怖い。

どうか、痛く食べられませんが……。どうも。

目を瞑った。

ガギン！

音がした。

何だ。意外と痛くないもんだな。

……ん？

……なんか様子がおかしい。

「ソウジー、よくやったねー。」

「……………」

「わー、ディノバルドだー。なーんでこんなところにいるのー？」
「えっ……………ええええ？」

力なく声を出す。

心の中は大騒ぎである。

「さすがのソウジも、まだキツかったよねー。でも安心してー？」

「な、何で……………」

「助けに来たよー？」

「セツーーー」

この声は。

この間延びしすぎて力の抜けるこの声は。

「せつちゃん、でしょー？」

「せつちゃんさ……………ゲホオゲホオ！」

「わわわ、あんま喋っちゃだめー。」

なぜ!?

なぜセツヒトさんが!?

鎖帷子というのか、腹部はそれで覆われて、所々露出が激しいでも厳つい装備をしていて……。

デイノバルドと対峙して、双剣を牙に突き立てている!?

あまりの驚きに、目を見開いた。

救援に来てくれたのか!?

セツヒトさんは、俺に話しかけながら、常にデイノバルドと睨み合っていた。

「おーい、デイノバルドー? ちょっとおイタがすぎたかなー?」

ギイン!!

「グウウー!」

双剣を振り切ると、デイノバルドが後退した。

すげえ、圧倒している。カツコ良すぎるだろこの人。

「これ以上、私の大事なソウジをやるようならー？」

「グルルル……。」

「……殺すよ？」

「……グアア!!」

ざつと飛び退いたデイノバルドは、それでもなおこちらを睨みつけている。

「おー、威勢がいいねー。さすがは斬竜。」

ゾクつとした。殺気ってここまでゾクゾクするのか。俺に向けられたわけでもないのに。

「まあいいやー。」

クルツとこちらを向いたセツヒトさんは、しやがみ込んだ。

「ソウジー？大丈夫ー？これ、飲めるー？」

「せ、せつちゃんさん……！今、アイツに背中を向けたら……！」

「あー、問題ないよー？だって……。」

突如。

ズガガガガガガガガガガガガガガガ
!!!!!!

銃弾が当たるような音が、ディノバルドからしてきた。

いや、違う……！

実際に銃弾が当たっている!?

どこから!?!誰が!?!

「チツ……派手にやりやがって。跳弾がこっちきたらどうすんだっつーの。」

セツヒトさんが普段の口調から一変。怖い。

あ、この態度になるってことは。射手はもしかして……。

「……大丈夫、ソウジ。アイツのヘビイボウガンの腕は、ムカつくけど……信頼していい。」

「きよ、教官……?」

「そー。マシヨルク。遠距離から援護してもらってるよ。」

話している間も、銃撃は止まらない。

どこから撃っているのかは分からないが、何故動きまくるディノバルドの頭部にばかり当てられるんだ?

ていうか、教官、ヘビイボウガン使いだったのか!

俺に剣技を叩き込んでくれたのに、メインは近接武器じゃなかったのかよ!?

「……ソウジ、これ、飲んでー。」

いつもの口調に戻ったセツヒトさんが、小瓶を開け、俺の口に入れる。

あ、これ「いにしえの秘薬」だ。
頑張って飲む。

一気に気だるさが抜け、体力が戻ってきた。
やっぱすげえぞこの薬。

「あ、ありがとうございます。せつちゃんさん。」

「わーわー！無—理—し—な—い—！」

折れてない方の手で立ち上がろうとする俺を優しく支えてくれたセツヒトさんは、岩場を背もたれにして、俺を座らせた。

「ソウジー、私、わかるよねー？」

「は、はい。せつちゃんさんです。」

「そう、せつちゃんさんですよー。……よかった。生きてた。」

今まで見たこともないくらい、いい笑顔をしたセツヒトさんは、すくつと立ち上がった。

デインバルドに向き合う。

「ソウジー、じゃー、ちよっくらいつてくるねー。」

「え!?どこにですか!?!」

「アイツだよー。アイツは……殺す。」

「ええ!?!」

俺が驚くや否や、急に走り出したセツヒトさん。

走り出しながら構える武器は双剣。俺と同じだ。

デインバルドの足元に張り付いたセツヒトさんは、脚部を中心に斬り刻み始めた。

デインバルドも応戦するが、その尻尾の攻撃が、悉く読まれている。

一切当たらない。

そして当たりそうになっても。

ズガン!

「ギャア!」

「チツ……いらねえつての。」

マシヨルク教官の狙撃で、デイノバルドの尻尾や牙の攻撃が、弾かれる。まるで見えない何かが殴っているような、そんな感じ。

教官、すごい……。

そしてセツヒトさんは、援護をもらっておいて、めちやくちやしかめつ面。

……何を言ったかわからなかったが……。ただだけ関係性悪いのよあの二人。

すると、急にセツヒトさんが双剣を持ったまま、左指を中空で動かし始めた。

あれは……。

「ハンドサイン……か？」

すると突如、俺の目の前に人影が現れた。

ザッ！

「ソウジくん！生きていて何よりだ！よくぞここまで持ち堪えた！！」

「マシヨルク教官!!」

「見事だ! デイノバルドは2級指定の危険種、まだソウジくんの手には余りあるモンスターだ!」

「教官! ありがとうございます……。でも俺、油断して……。マップのアイツの出どころが分からなくて……。」

「うむ! それは当然とも言える! アレほどのクラスになると、地面を潜行して現れるからな!」

え!?

デイノバルドって地面に潜るの!?

「地面を進めるんですか!?! あのデカブツが!?!」

「ああ! モンスターの中には、長距離移動の際、他種に見つからないように地面を潜航する奴もいるのだ! マップでは、それらが見えなかったのではないかな!?!」

「あー、なるほど……。」

そういうこと……なのか?

確かに以前、小型のカニのようなモンスター、ガミザミを相手にした時。地面に隠れている奴がよく分からなかったことがあった。

あ、でもバサルモスは見えたぞ？

……あいつ隠れるの下手だもんな。比較にもならんか。

「しかしソウジ君！流石としか言えないぞ！頭部、喉、脚部の破壊に成功しているではないか！奴をそこまで破壊するのは、上位ハンターでも骨が折れるぞ！」

「教官、すみません、それはギフトのおかげなんです。」

「……以前も言ったが、それもまた君の実力だと思うぞ！誇っていい！」

「……はい。」

「そしてここに今、君は生きている！よくぞ……よくぞ無事でいてくれた!!」

教官が笑っている。

しつかり笑うの见られるなんて、珍しいかも。

あの時以来かな。

「マシヨルク！そろそろ締めるぞ！」

「何！早いな！さすが『百手』セツヒト！」

「ソウジのおかげ！早くしろ！」

セツヒトさんが大声で教官を呼んだ。

「では、ソウジくん！よく見ておいてほしい！」

「……サー、イエッサー！」

「これが……G級ハンターの狩猟だ！」

教官が一瞬で居なくなる。

向かうのはディノバルドの正面。

なぜそこに移動したのか。多分ダメージが一番稼げるからだだろう。

セツヒトさんは、教官の邪魔にならない位置を取って、ずっと足を削っている。

教官が弾をセツトした……ように見えた。

装填が速すぎて、よく分からなかったが。

「貫通弾！」

教官がデイノバルドの頭部に弾を命中させると、目に見えてデイノバルドが怯んだ。しやがんで撃ち、たまに移動しては撃ち、教官はデイノバルドをその場から動かさない。

セツヒトさんは弾丸の隙間を掻い潜るように、絶えず攻撃を繰り返している。あまりに流れるようなその動きは、まるで舞踊だ。

「マシヨルク!!」

「ああー!」

セツヒトさんの合図で、一旦銃撃を止めた教官。

直後、セツヒトさんが跳んだ。

腹部から喉にかけて、跳んで回転しながら攻撃を繰り返す。堪らず後退するデイノバルド。

もう少しで倒れそうな様子なのだが……………!

その時、デイノバルドは体勢を立て直して、尻尾を噛んだ。

……あの攻撃が来る!

「セツヒトさん！」

頑張って叫ぶ。

あの攻撃はまずい、超強烈な尻尾の回転攻撃がくる！

比較的近くにいる教官を見ると、何故か武器も構えず、腕を組んでセツヒトさんを見ている。

「教官！あの攻撃、やばいんです！」

「ああ、わかっている！……ソウジくん。セツヒトを、よく見ているがいい。」

俺が間拔けな返事をした瞬間。

高威力の尻尾回転攻撃を繰り出すディノバルド。

セツヒトさんが、もろに食らって……。

「あれ!？」

……セツヒトさんは、無傷だった。

それどころか、何故かディノバルドがまた口から何かを爆発させて、倒れた。

「……食らっていない？ていうか、攻撃を返した!？」

「アレがG級のジャスト回避だ！さすがとしか言えないな！」

ジャスト回避!？何その技!？

ハーハツハツハツ!とか笑っている教官は、心から愉快そうだ。

セツヒトさんは、これまた目にも留まらぬ速さで鬼人乱舞を繰り出した。特に力を入れていないように見えるのは、気のせいだろうか。

そのまま倒れ込んだディノバルドにダメージを与えていく。

「……おしまい。じゃあね。」

最後の2段斬りをお見舞いすると、ディノバルドは声も立てずに倒れた。

動かなくなったディノバルド。

……た、倒したのか？

教官たちが来てから、20分ぐらいか？

は、早い……。

これが、一流の……G級ハンターの実力か。

緊張の糸が途切れ、力が抜ける。

横に倒れてしまった。

よかった……生きている。

「ソウジくん!?大丈夫か!？」

教官が心配して抱き起してくれた。

「はい……ホツとしたら、力が抜けちゃいまして……。」

「無理もないな、重傷だ。どれ。」

教官が俺の右腕を持つ。

あ、嫌な予感。

グギョ!!

「いいっ!!」

「すまん、ソウジくん。骨接ぎは早い方がいいからな。もういつちよ!」

「んんっ!~~~~!」

痛みに耐える。

教官、事前に言ってください。

布を用意し、添え木と三角巾を用意した教官は、薬を染み込ませた布を俺の右腕にあてがった。

三角巾をつけられる俺。恥ずかしい。

「うむ!こんなものだろう!」

「あ、ありがとうございます。」

「む……胸の右の辺りもか。どれ、そこも薬布をあてがおう。」

「えっ、いいですよ。大丈夫です。」

「いや、そのままはいかんぞ！すぐに手当だ！」

「いや、マジで、大丈夫——」

「よいしょお!!（スパアン!）」

「いつてええええ!!」

激しく薬布を当てられる俺。

何でこの人、人の言うこと聞かないの!?!いや俺のためなんでしようけどお!!

そういえばこんな人だったわ!!思い出したよ!!

教官にパンツ一枚にされ、地面に横たわった俺は、痛みの走る箇所には軒並み薬布を貼られた。

冷たい布が、患部に心地良い。

でもやっててくれているのはおっさん。俺も中身はおっさん。

……。

「うむ！事情を知らぬ者が見たら！キモいことこの上無いな!!」

「言わんでください!! ううう……。」

人に見られたら恥ずかしすぎる……。

……そういえばセツヒトさんは？

「……ソウジ、顔真つ赤だよー？」

「のわあ! いたんですかセツヒトさん!!」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん!!……助けに来てくださって、本当にありがとうございます。」

「いーよいよよ、気にしないで。信号弾も上げといたからねー。……ソウジ、裸だねー。」

セツヒトさんがジロジロ見てくる。

いや! 何か恥ずかしい!

「パンツは履いてますから! パンツはありますから!!」

「んー……元教官に脱がされ、されるがまま、顔真つ赤のソウジ。……見る人が見たら、

「拗るねー。」

「拗る!?何が!？」

「いやー……妄想?」

力が抜ける。

「マシヨルク、すぐ退却しよう。」

「ああ、それがいいな。ソウジくんもしっかり診てもらった方がいい。」
「ん。」

言うや否や、俺をヒョイツと抱えるセツヒトさん。

米俵の様に持ち上げられる。

「いやいや、歩けますから!」

「んー?わがまま言うのは、誰かなー?」

右の肋骨をツンツンされる。

「いいいい!!」

走る激痛。

「ほらねー、無理しちや、ダメだよー?」

「………はいい。」

「人に心配かけておいて………こんな時は、もうされるがまま、おとなしくしておきな
?」

「………ありがとうございます。」

厚意には、素直に甘えよう。

全身痛いし。

「んー、よろしい。」

ポンポン。

頭を優しく叩かれる。

完全に子ども扱いだ……。

まあいいや、今は早く帰って休みたい……。

右手には、沈む少し前の太陽が見える。

ずいぶん遅くなってしまった。

シヨウコは大丈夫かな。早く会って、ありがとうを伝えたい。

よく呼んでくれた。シヨウコもまた、俺の命の恩人だ。

マシヨルク教官が、緑の信号弾を上げた。

俺はセツヒトさんに担がれ、スタートキャンプに到着。

ワサドラ村に、帰るのだった。

62 治療を受けましょう。

デインバルドを討伐した後。

俺、教官、セツヒトさんは、キャンプで休憩した。

村に戻るためのネコタクは振動が激しく、俺の傷が開くかもしれないと言うことで、ガーグア車を手配することになった。

ガーグア車も揺れることは揺れるのだが、ネコタクのような荒々しい運転ではない。やってくるまでの小一時間、俺は体を休めながら、教官たちにここに来るまでの経緯を聞いた。

* * * * *

シヨウコが運良く回収班を見つけ、そこからギルドに緊急連絡が届いた。

ギルドは大慌てになったという。何せ、近辺にいるはずもない斬竜デインバルドが出現したと言うのだから。

確実に倒せるハンターを探すも、実力も測りかねる相手だけに、難しいところ。

そこで白羽の矢が立ったのが、マシヨルク教官だった。

武具の準備をする為、すぐにセツヒトさんの店に足を運ぶ教官。

すると事情を知ったセツヒトさんは、マシヨルク教官と共に俺を助けに行くと言って聞かなかったらしい。

緊急事態ということ、ディノバルドを屠れる確実な戦力が見込めなかったこと、セツヒトさんの過去の実績から、ギルドは最終的に認可。

というか事情を聞いたシガイアさんがゴリ押しして、二人で救援することになったとか。

……ギルドマスターのシガイアさんがそこまでするんだから、セツヒトさんの実力の程が伺える。

俺が手も足も出なかったディノバルドに完封勝ちしていた二人。底知れないその力に、俺は尊敬と感謝の念しか湧かない。

二人はガーグア車ではなく、より早いファンゴ車で沼地に到着。俺のもとに来てくれたということだった。

色々な人に迷惑をかけてしまったな、と思った。村に着いたら、謝りたい。

* * * * *

俺が村に戻った時には日も落ち切ってしまった。

松明が燃える入り口で、ハイビスさんが待っていた。

「専属担当として、責務を果たすためです！」と言っていたが、目には涙が浮かんでいた。心配をかけてしまったので、からかわないでおこう。

……涙を浮かべるハイビスさんは、とても美しかった。

そして、その後ろにいたのはシヨウコ。

シヨウコは泣きじやくりながら、俺のことを心配してくれた。逆に、こっちが心配になるぐらい憔悴していた。

担架でギルドの医務室に運ばれる俺に付きつきりになりながら、ずっと謝ってくる。

「今ここにいられるのは、シヨウコのおかげなんだ。謝らないでくれ。」

「でも……ウチ……ウチのせい……。」

「シヨウコのせいなもんか。シヨウコはむしろ命の恩人だぞ？ デイノバルドが勝手にやってきたんだ。それに、俺は大丈夫だ。大丈夫。安心してくれ、俺は生きている。」

「ううう……！」

泣いていた。

……泣かせてしまった。

俺の力が弱くて、悔しくて、しようがなかった。

シヨウコは、ハイビスさんが宿まで送ってくれることになった。

……後でちゃんと話そうと思う。

ギルドに着くと、セツヒトさんとマシヨルク教官とは一旦別れることに。

二人ともギルドに報告してくれるらしい。教官にロアルドロス2頭の討伐部位を渡しておく。

「ソウジくんは、とりあえず気にせず、体を癒やすんだ！あとは私に任せておけ！」

と、教官からありがたい言葉を頂いた。

なのでクエスト処理とかやってもらうことにした。

「セツヒトさん、教官、今日はありがとうございました。」

「気にしないでー。こういうのは、持ちつ持たれつー？だからねー。」

「はっ。」

二人には、本当に感謝してもし切れない。
何度目かわからないお礼を述べたあと、二人と別れた。

その後医務室に直行。

白髪交じりのおっさんのお医者さんから、応急処置を受けて、診察。

無理をし過ぎだと、しこたま怒られた。寝ながら怒られるなんて初めての経験だった。

ちよつと小太りなところが、何だか前世の上司を思わせる。

幸い右腕の骨は綺麗にくつつくそうだ。教官、流石である。

肋骨の骨折、更に腹の中まで損傷しているかもしれないとのこと。しばらく安静にすると言われた。

ハンター業はしばらく休業だな……。

何かの薬を塗られた布を負傷した箇所にあてがわれた俺は、医務室横のベッドのある部屋に移動され、寝かされた。

病室の真っ白いベッドに落ち着くと、すぐにシガイアさんが、ヒナタさんと一緒にやってきた。

二人とも焦った顔が安堵に変わった。最悪な状態を想像していたのかもしれない。

2人のそんな顔を見るのは初めてで、新鮮だった。

シガイアさんがふたたび顔を引き締めて、ベッドの近くにやってくる。

「ソウジさん……まずはご無事で何よりです。」

「いえ……ご迷惑をおかけしました。」

「違います。これはギルドの落ち度、申し訳ありません。」

「えっ?」

そうなの?ギルドのせいではないんじゃないか?

「ギルドは悪くないのでは……。」

「他のギルド支部との連絡や観測班からの情報には、斬竜デインバルドの情報はありませんでした。つまり、我々が見落とした、と言うことになります。」

「はあ……。」

「申し訳ありません。」

シガイアさんとヒナタさんが頭を下げる。

「い、いやいやいや、顔を上げてください！確かにちよつとヤバかったですけど……ハンターなんですから！こんな事もあるのでしよう？俺、気にしてませんから。」

「下位の狩場に危険指定種がくることなど、見逃してはいけないことなのですが……そう言つて下さると、大変助かります。ソウジさん、ありがとうございます。」

当然だ。

いくらギルドだつて限界がある。観測していても、その連絡が遅れているのかもしれないし。

誰も悪くない。

その後、色々と後始末があるという事で、シガイアさんは退室した。

ヒナタさんは俺を見ると、

「事務的なお話をしようかと思いましたが、今日はゆつくりお休みください。ソウジ様、

また後日、参ります。」

と言つて、退室していった。

何か……声が震えていたような気がする。

今度、猫的な何かでお詫びしようかな……。

* * * * *

ヒナタさんが退室してしばらくボーっとしていると、今度はドールがやってきた。

「ドール。」

「ソウジさ……。」

俺を見るなり、声に詰まったドール。

その場で泣き出してしまった。

「よ、よかったあ……よかつ……た……うううう……。」

「すまん、ドール。泣かないでくれ。心配かけて、ごめんな。」
「……………ううん、ごめん、ね。……………よかったよお……………」

心配をかけたなあ。ドール。ごめん。

「無事で何よりね、ソウジくん。」

「ミヤコさん。」

「話は少し聞いたわ。……………何であの斬竜が出てきたのか、本当に分からない。ギルドの者として、申し訳なく思います。ごめんね、ソウジくん。」

ミヤコさんも一緒に来ていた。ドールに続いて部屋に入ってくる。

「ははは、平気ですよ。こうやって、四肢もくっついてますし。」

「……………よかったわ。……………もーホント！ギルドの後輩から連絡受けて、デイノバルドって言われて……………心臓止まるかと思っちゃった！頑張ったわね！ソウジくん！」

「はい。死ぬかと思いました。」

「あはは、まあそうよね。私も遠くから見たことあるけど……………怖すぎるわ、あのモンス

ター。」

見たことはあるのか。

ミヤコさんの過去も気になるところだ。

「……ハンターがいなくなる時なんて、いつくるかもわからない。……ギルドで働いている身としては矛盾しているんだけど、大切な人にハンターはしてほしくはない、かな。……そう思うよ。」

……ミヤコさんが言うと、重いな。

「ホントに、ご心配をおかけしました。ドールも、顔をあげてくれ。」

「うん……。ご、ごめんね。取り乱しちゃって……。」

「いや……。変な言い方だけど、嬉しいよ。何だか……。うん。」

「……。う、うん……。」

……。

……何だこの空気。

気恥ずかしい……!!

「すごいわね……お母さん結構重苦しいこと言ったつもりなんだけど、一気に甘酸っぱくなっちゃったわ……。」

「えっ?! いやいやいや!!」

「お母さん!」

「そこは否定するのね……一度二人の頭の中覗いてみたいわ……。」

……ミヤコさんはスルーしよう。

「ど、ドール? 朝はゴメンな。」

「えっ……朝?」

「ほら……ドール、怒ってたろ?」

「……ああ。うん、いいんだ。ソウジさんが無事ならそれで……。おかえり、ソウジさん。」

「ああ……。ただいま。」

無様だけど。

満身創痍だけど。

ドールにただいまと、言うことができた。

今はそれだけで、よしとしよう。

「……私、砂糖吐きそう。」

ミヤコさんが呆れた顔でなんか言っていた。

* * * * *

夜も更けてきた。

ギルド横のこの医務室は、ギルドの喧騒がわずかに聞こえるが、静かなものだ。ベッドこそ4床しかない小さな部屋だが、処置室や診察の部屋は別にある。

そして他のベッドは誰もいない。実質一人部屋のよう。

看護師さんも常駐するらしいが、基本的に一人である。少し寂しい。

実は、講習を受けているときに医務室を利用したことがある。

だが、ベッドに横になるまでの怪我を負ったことはなかった。

この部屋には入ったことも無い。かなり新鮮である。

骨折の部位に貼った湿布は薬効がすごい。痛みは鈍く残るものの、全く無かった食欲が少し回復する迄になった。

そういえば教官の骨折の治りも驚異的だった。

あの人がおかしいと思っていたが、傷の治り具合や薬の効き目は、前世基準で考えてはいけないようだ。

ちなみに夕飯、医務室利用料、その他掛かる費用全てギルド持ちらしい。

そこまでされるほどモンスターの未確認事案は珍しく、デインバルドは強敵だった、ということか……。

それともギルドの思惑的に、俺の力をいつか使いたいが為に、恩を売りたいとかそういうことかも。

……あのシガイアさんなら、有り得ないと言いつ切れないとこである……。

……まあ何にせよ、久しぶりにゆっくりしている。

近頃忙しかったし、強制的に休みができたとプラス思考。

しかも口ハ。いいご身分だ。

……体は動かさないほうがいいが、静かにしていると考えなくてもいいことまで考えてしまう。

先程までのクエストの反省をしよう。

ロアルドロスの狩猟をするまでは良かった。

連続狩猟の選択も、間違っではないなかつたと思う。事実、割と余裕を持って倒せた。

……いや、やはり一度休んで、より余裕を持ってロアルドロスを狩れば、デイノバルドもなんとかなつたのではないか？

体力を温存して、憑依状態をうまく使いながらギフトをフル活用しておけば、デイノバルドも倒せたのでは……。

いや、違うな。

アイツは強かつた。

恐らく、万全で臨んだとしても、到底叶わなかつたろう。

……悔しい。

……リベンジしたい。

ギフトの力を使わず、奴を、自分の力で倒したい。

そう思うのは、おかしいことなのだろうか。

強ければ、せめて逃げ切れる時間を稼ぐくらい……モンスターをダウンさせる力を付ければ……。

モンスターは、ある一定のダメージを受けると、大体はエリアを変えて仕切り直してくる。

今回は俺が弱かったため、デインバルドも猛攻を仕掛けてきた、という予想がつく。

女神様のお願い……命令？を遂行するには、アレを屠れるぐらいに強くなるのがいいと思う。

……恐怖を克服できるか。何よりそこまでの力を身に着けられるか。

そこが鍵だな。

うん、大体の振り返り終了。

俺は、まだまだ強くなりたい。

コンコン。

決意をした瞬間、室内にノックが響いた。

面会は終わりになった為、来るとしたら看護師さんかお医者さんか。

「どうぞー。」

ガチャ。

「お疲れさまです。」

「はい、お疲れさまです……。」

真つ白なワンピースに、キレイなロングストレートの黒髪的女性が入ってきた。

……美人さんだなあ。

身長は俺ぐらいあるかもしれない。女性にしては高め。スタイルもよし。

「えつと……どなたですか？」

「お久しぶりです。初めましてが正しいでしょうか。」

「えっ？」

会ったことがある？でも初めましてってどういう……。

「双治さんの前にこうして現れるのは初めてです。」

「……………えっ。」

確かに、こんな絶世の美女、見たことない。

「絶世の美女……。褒められるのは、存外嬉しいものですね。」

いや、褒めるも何もそこまで整ったお顔立ち、生まれてから今日まで、前世含めて見たことが無いです。

……………ていうかこの人、心の中を読んで……。

「双治さんの周囲には、美しい方や可愛らしい方が多いですね。ハイビスさんという受付嬢の女性、実際に見るのは初めてでしたが神界でもそうそう見ない美しさでした。ドールさんという子は、あのあどけない感じがウケるのですね。ファンクラブが二分し

て掲示板戦争を起こしているのも領けます。」

「……………」

「……………」

「……………えっ!？」

今、何て言った?しんかい?

しんかいって、深い海ではなく、神の世界の神界!?

ていうかその俗っぽい言葉を丁寧な口調で話すあなたはもしや…………。

「もしかして…………女神様あ!？」

「どうも、認識が遅いです。双治さん。」

女神様、現界。

驚きの余り、言葉を失う俺であった。

63 女神様と直で話しましょう。

転生してここまで、いろいろ驚いたことはあった。

モンスターたちとの戦いでは驚きの連続。

そもそも文化さえ違うのだから、驚くことが多いのは当たり前と言えば当たり前だ。

そしてたたいま、絶賛驚き中。

その驚き具合は、史上NO. 1でございます。

目の前に。

目の前に女神様がいるのだ。

「双治さん。このお茶というもの、とてもおいしいです。おかわりを頂いても、よろしいですか。」

「普通に居座るなあ……。」

まあ驚き過ぎて逆に落ち着いてしまったが。

むしろお茶を入れるくらいなら平気になるまで回復している自分に驚きである。

「え、えーと、女神様。」

「はい、何でしょうか双治さん。」

声と一緒に！

何だろうこの「あ！あのキャラとあのキャラの声の人同じだ！」みたいな既視感。散々聞いてきた声の主が、今目の前に。

しかし想像通りと言うか、何というか、完璧なまでの美人さんである。

絶世の美人などと評したが、女神さまには逆に失礼なのではないだろうか。

「あまり褒められると、恥ずかしいです。」

「あ、心の声も聞こえているんですね。」

「ええ、ですが顕現するのも久しぶりなものですから。普通に会話をしていただけるとありがたいです。」

「は、はい。」

いけない、どうにも緊張してしまう。

「ここに人が来たら、まずいですよね？」

「大丈夫です。こちらの世界の神と確認しております。明け方近くまでこの部屋には誰も来ない様です。」

「ああ、よかったです。……誰かに話を聞かれるという恐れは？」

「あり得ません。そもそも、双治さん以外は、私を認知できないようにしています。」

対策はバツチリと言うことか。

「分かりました。では女神様、今日はなぜわざわざ……顕現？をしてまで、こちらに？」

一番気になることを聞いておこう。

「はい。お答えします。」

そこから女神様が、スラスラと話し始めた。

まずは前回の女神さまとの邂逅。

主題は「俺以外のバズりそうなネタ探し」だった。その件に関しては、結論として成功したらしい。

「アイルー猫のショウコさん、さらにオスズさん、非常に愛らしくていらつしやいます。予想通りの伸び具合でした。」

そう言つて、前回見せてくれた「トレンドまとめ折れ線グラフ」を、今回はスケッチブックに手書きにしてまとめて見せてくれた。

……これ全部自分で書いたのかよ！ 定規とか使つて!?

「ちなみに、全てフリーハンドです。」

美大生もびつくりだよ。文字とか完全にレタリングしたみたいだし。

暇なのかな……女神様……。

ま、まあいいや。

今回は二人のアイルーについてまとめたグラフを見せてくれた。

折れ線は、多少の上り下りはあるものの、常にMAXに近い位置を示している。驚異的ではないか。

「出現当初から今日まで、非常に高い位置を保っております。分析するに、当初は従来からのファン層、それが徐々に様々な層に移っていき、高い関心を維持しているのではないかと思います。」

「さすがアイルー、可愛いは正義ですね。」

「ちなみにシヨウコさんがお風呂に向かわれるとき、非常にバズります。」

「変態じゃねえか!!!」

神達に対してのイメージはダダ下がりだったが、ここにきてとんでも変態神達がいるとは。

しかもバズるとか！結構な数変態神がいるんじゃないか!!

「まさか覗かれたりとかしてませんよね?」

「ご安心を。その辺はぼつちりフィルターをかけております。」

「あ、流石です女神さま。」

「ええ。お任せを。」

「……。」

「……。」

「……ちなみに、俺が銭湯に行っている時って——」

「……。」

「無視かよ!!えっ!?!何!?!そんなプライベートまで筒抜けなの!?!?やめてほしい!!」

「ご安心下さい。私しか見てません。」

「……余計嫌だよ!?!なんで!?!」

「ごちそうさまでした。」

「フィルター仕事してえ!」

あきらめよう……。何せ、相手は神である。

目の前の美人が俺の裸を見てごちそうさまとか、しかもその人は女神様とか、もうツツコミどころ満載である。

それに何だこの感覚……。見られていたのか俺の裸。

……。

も、もういいや!気にしすぎると新しい何かに目覚めかねん!!

気を取り直して！

安定のスルーを決め込んだ女神さまが次に見せてくれたのは、俺自身に関するデータだった。

前回から今回の狩猟に至るまでのトレンド具合。

俺の写真とか俺の動画とか……なんか多くない!?

「双治さん。」

「はい。」

「まずは、生きてこちらにいらっしやいますこと、本当に嬉しいです。」

「あ、いえいえ。何とか無事に帰れました。」

「……前回、狩猟の際は気を付けるようにお伝えしましたが。」

「はい、すみません……。」

「……双治さんが身を置く世界は、常に危険が隣り合わせです。だからこそ、戦いを好む神が多い神界で好まれます。」

「はい……だから今回も、デインバルドとの戦いの際のグラフの伸びがすごいんですね。」

グラフを見ると、色々な上下はあるものの、一貫して俺が戦う時、最も伸びがよくなっている。

今回はロアルドロスとの連戦の後、デイノバルド戦。その伸び率は、はつきり言つて異様だ。

「結果として敗北を喫したわけですが、それがまたウケています。双治さんは順調で安定した狩りをつけておりましたから。再戦を望む声が、後を絶ちません。」

「まあ、そうでしょうね。」

「……ですが、双治さん。」

「はい?」

おもむろに女神さまが立ち上がった。

すると、ゆつくりと手を伸ばし、俺の手を取る。

少しひんやりした感触。細くて長い指、女性らしい手だった。

「……今までの私の言動から、これから私がお伝えすることは変に思われるかもしれませんが……誤解を恐れずにお伝えします。」

「は、はい……。」

「私は……私は、双治さんが傷つくことは、本意ではありません。」

「……。」

女神さまが続ける。

「これまで以上の戦いを望む声が多いのは事実。ですが、双治さんの人生は双治さんのもの。こうして顕現したのは、いち存在として、双治さんと顔を合わせて再度確認をすべきだと感じたからです。」

「……。」

「双治さん、改めて問います。この世界で、この弱肉強食の世界で、あなたはこれからもハンターを続けるのですか？」

「……女神様。」

変な事を聞く。

そもそも危険な強敵と戦ってほしいと言ったのは、他ならぬ女神様である。

女神様と目をしっかりと合わせて、答える。

「俺は、奴に再戦したい。強くなりたい。ちつとも心は折れちやいない。」

「双治さん。ですがー」

「ハンターとして、俺は生きます。生きていきます。」

決意表明をする。

今までになく、俺を氣遣ってくれている女神様である。

いつもの強引さは、欠片も感じられない。

顕現した影響なのか？

「……申し訳ありません。確認が取れて、よかったです。」

「いえ、俺も改めて決意出来て、よかったです。」

「……ですが、お気をつけ下さい。再度申し上げますが、双治さんの身に何か起きて
も、私にはどうすることもできません。」

「……はい。」

「どうかくれぐれも、くれぐれも、お気をつけください。」

……結構話してきたからわかる。

この人？神？は、俺のことを心配してくれているのだ。

始めは俺に、神様SNSとやらに一役買ってもらうとか、そんな思いだったのかも
しれない。

ところが予想以上にバズり、引くに引けないところに、今回の俺の怪我。

そこで、自分の考えがブレてしまったんだろう。

……何とも人間臭い神様である。

SNSあるあるだ。

自分が予期せぬところで、投稿したネタが一人歩き。

何とかしようとしても後の祭り。

前世でも、こんな感じのことが、よくネットニュースになっていた気がする。

「女神様。あなたがくれたギフトで、俺は生き残ることができた。」

「双治さん……。」

「それだけじゃありませんよ。そもそもあなたが俺を拾ってくれなかったら、俺は消えている。俺は助けられたんです。命の恩人？恩…神？なんです。」

そう、まずもって俺は元の世界から消されていたはずの存在。
女神様が拾ってくれなかったら、今頃消えていたんだ。

「そんなあなたがくれたチャンス。この世界で一生懸命生きるということ。そこは俺、絶対に達成しますから。」

「……。」

「だから、負い目を感じないで、今まで通り俺たちのこと、じゃんじゃんアピールしてくださいよ。それが……地球のため？になるんですよね？よくわからないけど。前、利益とか収入とか言っていましたし。」

「……はい、それはもう。大変ありがたく。」

「なら、いいじゃないですか。間接的に、俺は地球に残した家族や友人の役に立つんだ。頑張る甲斐もあるってもんです。」

女神様が俺から手を離し、姿勢を正す。

「………双治さん。」

「はい。」

「やはりあなたは、大変素晴らしい人間です。感服いたしました。」

「いやいや。そんなこと。……あ！でも、シヨウコとかハイビスさんとかドールとか、この世界の人間に危害が加わるようなことはやめてくださいね!?! プライバシーの保護もお願いします!」

「はい、そこはもう、抜かりなく。」

「よろしくお願いします。」

「双治さん以外は保証いたします。」

「わかってない!!」

チクシヨウ。

いいよもう。俺の裸とか大事なところとか、晒されればいいんだ。

「既に双治さんの上半身裸体については、結構な人気です。」

「聞きたくないですよ!?!」

「こちらは主婦層からのアンケート結果です。」

「見たくねえよ!?!」

「マシヨルクさんが負傷した双治さんに布をあてがうところ、たいへんな反響です。」

「一番見られたくないところ!!」

「乳首がピン——」

「言わせねえよ!?!」

何てこった。俺は知らぬ間に、神界の素敵なマダムの皆様方にネタを提供しているよ
うだ。

……まあいいや。

女神様とは、こうしてくだらない話題で盛り上がる方がいい。

これからもこのような関係が続けていけたらと思う。

ひと段落したら、女神様がお茶を啜った。

……啜れるんですね。よく外国の人は、啜ること自体が難しいとか聞くけど。

ふう、と息を吐いて、女神様が話を続ける。

「双治さんは、これからどうされるおつもりですか?」

「そうですね……。ひとまずは怪我を治して、特訓をします。」

「……。」

「倒しますよ。やつを。」

当座の目標は決まった。

デインバルドを、この手で、自分自身の力で、倒したい。

「……こちらの神と通信した際、確認をしました。あのモンスターは、かなり強いです。」

「ええ、でしょうね……。」

「それでも、再戦を望んでいますか？」

「すぐってわけにはいかないんですけど……。まあ地道に努力していくつもりです。いつかは手が届くようになればな、と。」

ふむ、と手を顎に当て、考え込む女神様。

仕草がいちいち美しい。

「……これは規約違反なのですが、一つ、私から助言いたします。」

「えっ。」

「顕現を許可した以上、ここの神もこれぐらいは許してくれるでしょう。」

「だ、大丈夫ですか？」

「文句は言えないと思います。私に何かあったら、神界中からブーイングの嵐でしょうし。」

「つ、強い。」

そんなんでいいのか、神達よ。

すると、神様はポケットからスマホを取り出した。

……普通に持っているんですね。もう何しても驚かないけど。

林檎派なんだな、女神様って。

慣れた手つきで操作をしている女神様。

何かを見つけたようで、顔を上げて俺に話しかけてきた。

「……ありました。……双治さん、一度セツヒトさんを訪ねてみて下さい。」

「セツヒトさんですか……？確かに、お礼には行くつもりですが。」

「いえ、そうではなく。セツヒトさんに、特訓をお願いするのです。」

「……はい!？」

「あの方、詳しくは申し上げられませんが、とんでもない方です。師事するのも一つの手

かと。」

「……成程。」

その手があつたか。

いやでも、セツヒトさん……そんなん許してくれるかなあ。

「大丈夫でしょう。あの方は、双治さんのことを……き……から……。」

「女神様!？」

急に女神様の姿がブレます。

テレビのノイズが入ったかのように、女神様の体が消えたり見えたり。

「女神様!?!大丈夫ですか!?!」

「言い過ぎ……ま……様で……。ご心配な……。」

バチン!!ババババ!!

ザー……。

プツン……。

一瞬アナログ放送の砂嵐みたいになったと思つたら、女神様が目の前から消えてしまった。

かろうじて声は聞こえる。

(モードを声のみにしました。やられました。)

「女神様!?!無理しないでくださいね!?!」

(この状態なら大丈夫です。ですが、時間がありませんね。)

「じ、時間?」

この世界に干渉できる時間が決まっているということか?

(とりあえず、私からのお願いは、今後も気をつけてくださいと言うこと、それだけです。特に何かをして、バズらせて欲しいとか、そう言うことはありません。ご安心を。そして、セツヒトさんに会うのを忘れなく。それでは。)

「女神様!?!」

突如、別れの台詞を言つて、いなくなる女神様。

……忙しいなあ。

女神様、大丈夫なのだろうか。無理をしていなければいいが。

パサッ。

すると、ベッドの上に一枚の紙が降つて来た。

くしゃくしゃのそれを広げる。

『追伸。お身体の方、回復能力を限界まで上げておきました。気休め程度ですが、お早い回復をお祈り申し上げます。かみ。』

……あの人、やつばいい人だな。

夜も更け、虫の鳴く声が窓から聞こえてくる。

俺はその紙を丁寧に畳んで、ポーチに入れた。

まずは回復だ。できるだけ安静にして、完治しよう。
それからは特訓だ。

セツヒトさん……お願い、聞いてくれるかなあ……。

少し不安になったが、俺は横になった。

光虫の明かりを消すと、泥のように眠るのだった。

64 退院手続きをしましょう。

朝が来た。

ていうかもう日が高い。寝過ぎて腰が痛い。

だがそれはいい。

安静にして回復をはかる。今俺ができることは、それしかないのだから。

だが。

なぜ。

「なぜこの2人はここにいるんだ……。」

俺の寝るベッドに上半身を預け、スヤスヤと眠る2人。

これがシヨウコとか、まあドールとかなら、百歩譲つて分かる。

シヨウコが深夜、寝ぼけてベッドに潜り込んでくることも、宿では珍しくなかったし。だがここにいるのは。

野郎2人である。

「教官と……なぜイシザキさんがここに……？」

例えば、自分が寝ていたとして。

枕元に、ちよつと気のある幼馴染の女の子が、ベッドに上半身を預け寝ていたとしたら？

それだけで、少し甘酸っぱい気分になるというもの。

そこに「ご、ごめんね。あまりに気持ちよく眠っていたものだから。〇〇君って、寝顔かわいいね。」なんて言われてみたら。

……素敵な話が綴れそうである。

では、ぐつすり眠った起き抜けに、筋骨隆々のおっさん2人が枕元に眠っていたら、どうだろう。

……大抵の人間は、大混乱であろう。

いい話を綴るどころではない。

下手したら110番へテレフォン、即、事案である。

スヤスヤと眠る教官。そしてムキムキのイシザキさん。

……イラツときた。

「……起きろおおおおお!!!」

「のわっ!!」

「……。」

ビクツと体を起こす教官とイシザキさん。

「おお!ソウジ君!起きたか!心配したぞ!」

「心配になるのはこっちですよ!?!何でこんなところで寝ているんですか!?!」

「いや何、昨日イシザキ亭で飲んでいたらな!イシザキ殿と意気投合したのだ!それから……。」

「……。」

「心配になって来てみたのかもしれない!」

「かもって何?!」

「記憶が飛んでいるな!!飲みすぎってしまったようだ!!」

「……何で飲みすぎてここにくる事になったのか、全くもってよくわかりません!」

「いや、私もわからん!!ハーハツハツハツハッハッ!」

力が抜ける。

こっちは怪我人だと言うのに。

「えーと、イシザキさん……?なぜここに……?」

「……。」

「昨日飲みすぎて?」

「……。(コクン)」

「……ここに来てしまった?」

「……。(コクン)」

「……。」

「……。」

「何か喋れよ!!」

何!?!何なのこの2人!?

俺を疲れさせにきたの!?

しかも何か酸っぱい匂いがする!! 酔っ払い2人!!
甘酸っぱいとは程遠い状況に、怪我の治りが遅くなりそう!

コンコン。

ガチャツ。

「ソウジさーん。そろそろ起きて……何をしているんですかあなた達!？」

「おおー看護師の方ではないか! ちようどいい、ソウジ君を診てやってくれ! いや、我が弟子ながら、この回復力、恐れ入る!」

「ま、マシヨルクさん!? いや、そうじゃなくてですね! ここは患者と関係者しか入れません! と言うかどうやって入ったんですか!?! ああ! ドアが壊れている!!」

「そう言えば壊してしまっただかもしれないや、ソウジ君が心配だな!!」
「……出て行って下さい!!!」

そそくさと去る2人。

看護師さんとハモってしまった。

そしてついに一言も発さなかったな、イシザキさん。

「す、すみませんソウジさん。あの2人は一体……。」

「あ、知らない人達です。無視してください。」

「は、はあ……。」

俺の素敵な目覚めをぶち壊した2人には、後退出願う。
朝から疲れた……。

* * * * *

お医者さんに診てもらった。

何でも、驚異的な回復を見せているらしい。

よく見ると、包帯や薬布が新しいものになっている。

とても丁寧に巻かれていた。

お医者さんの話では、昨日看護師が変えた訳ではないという。

……教官か……。

「この薬……秘薬ですよ。一体誰がこんな高いものを……。」「ハハハハハ、誰でしょうねー。」

教官はもしかして、本当に心配して来てくれたのか。

しかも新しい薬を使って包帯を変えてくれていた？

教官の優しさに、目頭が熱くなる……

……そんなワケないわ!!

て言うか何!?俺が寝ている間に服を脱がせてこの処置をしてくれたってこと!?

いや、ありがたいけど、キモいわ!!

「すごいですよ、この薬効……肋骨も、ほぼ問題なくなっております。」

「そ、そうですか……。」

「心配だった内臓の損傷も見当たりませんね。一日経ってから、症状が始めるものですが……おお、腫れもひいている。……うん、退院でいいでしょう。1週間は様子を見て安静になさってください。1週間後、また来てくださいね。」

「ありがとうございます……。」

……しかも効果は靦面で、文句も言うに言えない！

あれかなあ、昔話で小人に靴を作ってもらったおじいさんも、こんな気持ちだったのかな。

子どもながらに「でも、朝起きたら勝手に完璧な靴ができていて、ホラーだよ。」とか思っていたけど。

うん、あの頃の俺よ。お前は正しいぞ。

ちよつと怖いわこれ。

こうしてちよつとしたホラーを味わった俺は、完治とはいかないまでも、歩けるまでになった。

もう少し安静にして、しばらくは宿で過ごすことにするか。

……精神的ダメージと引き換えに、肉体的な回復を手に入れた気分……。

* * * * *

医務室を後にした俺は、ポーチを腰につけ、ゆっくりと歩いた。

怪我した箇所が少し痛む。

まだまだハンター業は難しいだろうが、ちょっとした日常生活なら問題はなさそう
だ。

もしかしたら、女神様から頂いた『回復力を上げる』効果も効いているのかもしれない。
い。

ギルドにいる受付嬢に、退院の手続きなどをするように言われた俺は、受付台の前を
彷徨う。

……退院手続きってどこお……？

上から吊るされた案内板にも、そんな文字は見当たらない。

どこか適当な受付に行けばいいのだろうか。

迷いに迷っていた、その時だった。

「ソウジさん!？」

「あ、ハイビスさん。」

ようやく知った顔を見つけ、ホッとする。

「ソウジさん!?!もう出歩いて大丈夫なんですか!?!」

「ええ、お医者さんからは退院で、しばらく安静に、と。ちよつとした日常生活なら、問題なさそうです。」

「ああ、よかつたあ……。本当に。」

「ご心配おかけしました。」

ハイビスさんは、今日も今日とて受付嬢の制服を身につけている。

昨日女神様が、俺の周りには美人が多いとか何とか言っていたが、確かに、と思う。

女神様は絶世の美女というレベルだったが、ハイビスさんも負けてはいない。

今日も、アツプにまとめた金髪が美しい。ありがとうございます。

「……わ、私の顔に、何かついていませんか？」

「ああいえ、すみません。見つめてしまって。」

「い、いえ。……ソウジさん、もしかして退院の手続きですか？」

「あ、はい。そうなんです。どうすればいいですか？」

「いいですよ、私が案内します。こちらに。」

そう言ってハイビスさんが、端の方の受付に案内してくれた。

ゆつくり座る俺。まだ素早い動きは難しい。

「大丈夫ですか？」

「す、すみません。大丈夫です。」

ゆつくりとした動きの俺を心配するハイビスさん。

「少し待っていて下さいね。」

「はい。」

そう言ってハイビスさんは、ギルド内部に向かっていった。

何かを探している……。

あ、つまずいた……。

……キョロキョロしている。

……何も見えない振りしよう……。

「そ、ソウジ様？」

「は、はい!？」

顔を伏せていると、急に声をかけられた。

思わず顔を上げると、受付台の向こうにヒナタさんがいた。

「ソウジ様? もう大丈夫なのですか?」

「ああ、ええ。先ほど、退院の許可をいただきまして。その手続き? をハイビスさんにやってもらっているところです。」

そうやってヒナタさんがハイビスさんを見る。

すると、すぐに声をかけに行った。

そういえば昨夜、ヒナタさんが事務的な手続きを何とか何とか、言っていたな。朝の衝撃で忘れていた。

2人がこちらに戻ってくる。

「ソウジさん、お待たせしました。」

「いえいえ、ありがとうございます。」

「ヒナタが書類を持っていたのね。探しても見つからないから、焦っちゃって。」

「すみません、ハイビス先輩。ソウジ様、ここをよく見て頂き、サインをお願いします。」

書類に目を通す。

かかった費用の内訳や、退院で間違いないか、費用はギルドが負担する、などの内容が書かれていた。

問題はないので、サインをする。

「お願いします。」

「はい、確かに。」

周囲から何か視線を感じる。

振り返ると、主に男たちの視線が、こちらに集中していた。

あー……この二人、人気あるもんなあ。

……ちがいますよー？ 独占しているわけではないですよー？

「そうだ。ハイビスさん。」

「はい?」

「昨日は、シヨウコのこと、ありがとうございました。」

「ああ、いえ。気にしないでください。……シヨウコちゃん、昨日のことが、とてもシヨックだったみたいです。ソウジさんが帰ってくるまで、自分のせいだつてずっと言っていて……。」

「そう、ですか。」

昨日、ずっと謝っていたシヨウコ。

ハイビスさんに宿に送られてからも、落ち込んだままだったようだ。

……早く会って、シヨウコと話し合おう。

「手続き、ありがとうございました。俺、宿に戻ります。」

「はい、分かりました。……ソウジさん。」

「はい?」

「シヨウコちゃんのこと、よろしく願います。あの子の傷はとても深い……私達も心配してゐるんです。」

「……はい。」

二人を見る。

心底、心配している様子だった。

二人の向こうを見れば、ギルドの職員もちらほら、こちらを気にしている。

……シヨウコのことだが、気になるのだろう。

シヨウコは、太陽みたいな子だ。

最近はギルドに来れば、注目の的。

明るいあの子の姿に、感化された人もいるんだと思う。

振り返ると、笑顔だったり申し訳無さそうな顔をしたりしながら、こちらを見つめるハンター達^がいた。

……皆、この話、聞いてたの？

「……シヨウコは、愛されてるんですね。」

「……当然です。」

ヒナタさんが口を開く。

「シヨウコ様は、いつも一生懸命で……不名誉なあだ名なんて吹き飛ばしてやると、ソウジ様が居ないところで、常に仰っております。」

「……シヨウコ……。」

「空元気だったのかもしれませんが、それでも、そんなシヨウコ様に元気づけられたハンターの方々は少なくないと思います。」

「……。」

「……ソウジ様。よろしくおねがいます。」

……シヨウコは、本当に愛されているなあ。

……うん。元気づける算段はついた。

「ありがとうございます。」

「はい。」

「……ちよつと不躰なんです、一つお願いをしてもいいですか？」

「……はい？」

シヨウコを元気づける。

あの、いつものシヨウコになってもらおう。

だがその為には、俺の気持ちだけじゃちよつと足りない気がする。

「ギルドの皆さんと……後ろにいるハンターの方々に、少しご協力をお願いしたい。」

「……………ソウジさん。何を考えてます?」

「いえいえ、ちよつとした資料の収集ですよ。」

「……………?」

ギルドの皆さんに聞こえるように、少し大きめの声で話しかける。

ちよつと恥ずかしいけど。

「み、みなさん！少しばかり、ご協力をお願いします!!」

「そ、ソウジさん!?!」

前世の新人研修で学んだ綺麗な礼をかまして。

呆れる面前に、笑顔でお願いを始めた。

65 説得のプレゼンをしましょう。

「た、ただいまー……。」

宿「ホエール」に入る。

な、何か昨日涙を流されて別れた手前、妙に気恥ずかしい……。

「おや、おかえり。ソウジさん。」

「のわっ！ホエールさん!？」

ビビった。

いつの間に後ろに!？」

「ほっほっ、わしに気付かんとは、まだまだ本調子じゃないのう。」

「いや、すみません……ただいま帰りました。」

「うむ、お帰り。」

ホエールさん、気配消すのうまいなあ……。何か前にもこんなことがあったような……。まあいिया。

……まあいिया。

「もう、こちらに戻ってよいのかの？」

「はい。安静は必要らしいですが。」

「ハンターさんは流石じやの。……ドールは今買い物に行っておる。ミヤコさんは分かんが、シヨウコ殿は、部屋におけるはずじや。」

「ありがとうございます。」

「シヨウコ殿は、落ち込んでおる……。わしも、あの子が塞ぎ込んどると、調子が出なくての。」

「はい。少し、話し合ってきます。」

「……ほっほ。いい顔しとるの、ソウジさん。……頼んだわい。」

シヨウコはもはや、この宿のムードメーカーだからな。

俺は一言、ホエールさんに礼を言って部屋に向かうことにした。

* * * * *

コンコン。

自分の部屋なのにノックをする。

「シヨウコ、いるか？入ってもいいか？」

「……へ!?!?ご主人様!?!」

「そうだ、ソウジだ。」

「ど、どうぞ?というか、ご主人様の部屋です!」

「……そりやそうなんだけどさ。」

ガチャツ。

「……シヨウコ、元気か？」

「いやいやいや!それ、ウチのセリフですから!」

「すまん。ボケてみた。元気そうだな。」

「ご主人様……分かりにくいです。」

うん、いつもの感じ。よかった。

「シヨウコ、昨日はありがとう。おかげで助かった。」

「いや、ウチも無我夢中でした。ご主人様、もう大丈夫なんですか？」

「いや、安静は必要だ。流石にな。でも、日常生活なら問題なさそうだ。」

「そうですか……。よかったあ……。」

安堵した表情を浮かべるシヨウコ。

心無しか、顔が固い。

「ああ。シヨウコのおかげだ。」

「……ホンマに、そうでしょうか……？」

シヨウコが不穏な言葉を口にした。

「ウチ……めっちゃ落ち込んでしもうて……。ご主人さまを守るのが、オトモアイルーの使命です。でもあの時……ウチは、ご主人さまを、見捨ててしもうた。」

「シヨウコ、それは——」

「仕方なかったのは、分かります。助けを呼ぶのなら、うちの方が適しとる。それは……理屈ではわかるんです。でも、もし……もし、またあんな事になったら……。」

「……………」

「ウチはまた、ご主人さまを置いて、逃げるんちゃうかって。そんなん、オトモアイルー失格やないかって。この、堂々巡りがグルグルしてしまいます。」

見捨てたわけではない。

だが、もしあの場で俺が死んでいたら？

周りは、シヨウコを攻めるのかもしれない。

主人を囿に命を繋いだアイルーとして。

「……あの時、心の中でどこか冷静に、『ああ、またや。』って思ったんです。またウチ、主人を不幸にするんやって……。そんな自分が情けなくて……。そして、取り乱してしもうて……。」

「シヨウコ。ヤツは紛れもなく強敵だった。情けなくなんか無いぞ。」

「……頭では、わかってます。ウチは力不足や。だからしやあないと。」

「……………」

「でも、理屈やないんです。心は納得せえへん……。」

シヨウコが、俺を見つめる。

「ご主人さま……いや、ソウジさん。お願いです。ここで、私を見限って下さい。……ウチはもう、あんな事、したくありません……。」

「……………シヨウコ。」

「……………」

シヨウコは目を落とした。

一晩、考えに考えたんだろう。

俺がいない間、ずっと一人で。

そして出した結論は、別離。

シヨウコは、オトモアイルーとして生きるのを、諦めるといふことだろうか。

あんなにも熱意を持って、頑張ると言っていたのに。

……昨日のことは、それほどまでに辛いものだったんだな。

……だが。

俺は引き下がらない。

「シヨウゴ。俺からも、いいか？」

「は、はい。」

俺は、強い目で見つめ返した。

「……いいから黙って、俺について来い！」

「……ええ!？」

「なーんて言えたら、かつこいいんだろうけどな。スマン、俺もまだまだ強くない。そこまで格好はつけられん。」

「……じゃあ、やっぱり——」

どこか不安そうな目で見つめ返してくるシヨウコ。

「だがな、俺はこれから、強くなる。」

キツパリと宣言する。

シヨウコは、俺のオトモなのだ。

俺の、唯一無二の相棒。

同じ高みを目指すなら、シヨウコしか居ない。

「だが、シヨウコはオトモをやめたいと言う。」

「は、はい。」

「……なので、説得する材料を用意してまいりました。」

「……………へ？」

俺はスケッチブックを取り出す。

「こちらをご覧ください。」

「えっ? えっ!?!」

「こちらは先程、ギルドにいたハンターの方々に聞いたアンケートを集計したものです。」

「……ええ!?!」

困惑するシヨウコ。

そう、女神様のやり方を少し拝借したのだ。

スケブに書かれた下手な字と帯グラフ。出来の差は歴然である。

だが、俺は構わず続ける。

「まず聞いてみたのは、『あなたは今まで、自分にはどうにもならないようなモンスターに遭遇したことはありませんか?』という内容です。」

下手くそな手書きの帯グラフを見せる。

慣れない左手で書いたんだ。

それに表計算ソフトなんて使えない。汚いのは許してほしい。

「こちら、24人中19人が『ある』と回答しております。」

「は、はい。」

「では、『無い』と答えた5人。彼らは新人ハンターさんで、比較的安全な場所での狩りを始められたばかりです。」

「な、なるほど。」

「つまり、ほぼ全てのハンター達が、そうしたどうしようもない事態に遭遇した、と言うことですね。」

ハンターをやっているらればそうしたことは起こりうるようだ。睨んだ通り。

「じゃあ、『ある』と答えた人。その内訳ですが。」

「まだあるんですか!？」

「何を言う。まだ始まったばかりだぞ。」

「ええ……。」

「はい、19人中11人が、『すぐに救援信号を打ち、ギルドに助けを求めた。』、6人が『オトモやパーティーメンバーにギルドに救援を要請してもらった、または自分が行った。』、残りの2人は『なんとか倒せた。』とお答えでした。」

実に半数以上が、ギルドに頼って何とかしたと答えた。

「俺達はこの『オトモやパーティーメンバーにギルドに、救援を要請してもらった、また自分が行った。』に該当するな。」

「そうですねえ……。」

「これは、狩猟をすでに終えていて、救援信号や信号弾自体がなかったパターンがほとんどらしい。俺たちも連続狩猟を終えて、予備の信号弾もなかったしな！」

「はい、もう打ち切つてました。」

「この事から、屈強なモンスターに遭遇することも、オトモや仲間が困りなつて助けを求めれることも、そこまで珍しいことではないということがわかる！そして、信号弾を常に3つ以上持つことが、対策として挙げられるな！」

「お、おおお……。」

シヨウコが少しだけ感心し始めた。

畳み掛ける。

「では、次の資料です。」

「ご、ご主人さま？これいつまで——」

「こちらは、先程ギルドにいた職員18人に聞いた、シヨウコへの印象です。」

「ツツコミもさせてくれん……。……。てか、ウチの印象!?何聞いてるんですかご主人さまー。」

「まあまあ。えー、これによりますと。」

二の句を告げさせない。

悪いが、ずっと俺のターン!!

「『活発で可愛い。』『心のオアシス』『神かわいい。神。』『ペロペロ』『仕事中に来てくれるだけで、力が湧きます』……。ちよつと変なものもあるが、ポジティブな意見しかない!!」

「途中の何やねん!こわいわ!」

「あ、大丈夫だ。左手でゲンコツ食らわしといたから。」

「そういう問題ちやいます!」

シヨウコは、俺を守る。

「そして……まだあるぞ。」

「変なのはもういいです……。」

「えー……『シヨウコちゃんの一生涯懸命な姿は、この職員みんなにとっても良い影響を与えています。頑張ろうと思える。私も、あなたを見ると、頑張らなきゃって。そんな気持ちになります。そんなあなたに、またギルドに来てほしいです。』……だそうだ。」

「……これ……まさか、ハイビスさん？」

「さあな……匿名希望さんだ。ちなみに追伸。『また触らせてください。』だそうだ。」
「やっぱハイビスさんや！」

シヨウコは顔を赤くしている。

恥ずかしかったかな。

……だが俺は自重しない。

「もう一つ。……『シヨウコさんのおかげで、私がギルドで働く理由がもう一つ増えました。一人のファンとして、シヨウコさんを応援しています。あなたは、みんなのアイドルです。また笑顔でギルドにいらしてください。』……だって。」

「これ、ヒナタさんや……!」

「えー、『追伸。耳や尻尾を触らせてくれたら、私は昇天します。』だそうぞ。」

「絶対ヒナタさんや……。」

神に誓っていいが、集計に手は加えていない。

それでは意味がない。

みんなの生の声が、欲しかった。

「どうだ?これだけシヨウコは、みんなを元気にしているんだ。」

「変な意見もありましたが……素直に嬉しいです。ウチ、そんな、全然気にせんと普通
にしていただけやのに……。」

「これだけの人が、シヨウコに笑ってほしいって、望んでいるんだと思うぞ?」
「……はい。」

ちよつと嬉しそう。

だが、俺はまだ用意しているぞ。

「シヨウコ、次だ。」

「まだあるんですか!？」

「……次はハンターたちに聞いた、シヨウコへの印象をまとめてみました。」

「!!」

シヨウコの表情が、少し固くなった。

……「招き猫」なんて言われていたことを、気にしているんだろう。

そうやって呼んでいたのは、一部のハンターたちだ。

だが、この集計結果は、俺の予想を大きく裏切っていた。
いい意味で。

「シヨウコ。大丈夫だ。悪いものじゃない。そして誓ってもいいが、俺は何も手を加えていない。」

「(ゴ)……(ゴ)主人さま。」

身構えるシヨウコ。

ごめんな、怖い思いをさせて。
だが違う。よく聞いていてくれ。

「……『とても応援している。』」

「……え？」

「『私も、シヨウコちゃんみたいなアイルーがオトモに欲しい。』『主人に忠誠を誓って奮闘する姿。尊敬している。』『周りが何と言おうと、俺は君のファンだ。』」

「……………」

「『主人の為に全速力でギルドに来た時、こんなにも素晴らしいアイルーがいるのかと思わされた。凄い。』『落ち込んでいる時に話しかけてくれて、とても元気が出ました。また撫でさせてね。』『主人を変えたい時はいつでも言っしてほしい。君ならどのハンターともうまくやっていける。力になる。』……………」

「……………あ、ああ。」

シヨウコは固まっている。

どちらかというときどきで。

そして、この励ましの言葉の数々が信じられなくて。

「『あのご主人に変なことされたらすぐに言ってください。法的処置も検討します。』『スケベな主人なら、変わった方がいい。俺は君を大切にする。』……この辺は言いたくなかったが、俺が手を加えていない証だと思ってくれ。ちなみにコイツらもゲンコツを入れておいた。」

「ご主人さま……。」

「シヨウコは、俺のオトモアイルーだつてな。」

「……ご、ご主人さま……。」

頭にきたしな。

アンケートにどう答えようが自由だが、俺だつて言いたいことはあるんだ。

……俺そんなにヤバそうなやつに見えるのか？

「よし、俺への精神的ダメージは置いておいて……。」

「置いとくんですか!？」

「まあ今はそこは重要じゃないし……。次……。」

「明らかに元気がなくなつとりますけど!？」

「えー……『招き猫なんて呼んでいた自分を恥じている。謝罪でも何でもするつもりだ。許してほしいとは言わない。君が一生懸命頑張る姿は、みんなを笑顔にしている。君は、幸福を運ぶ招き猫だ。』」

「……!?!」

シヨウコが今日一番に驚いた顔を浮かべる。

……そうだ、シヨウコのことを不名誉なあだ名で呼んでいた、その一人がいたのだ。腹が立ったが、本人がどうしても伝えたいというので、読ませてもらった。

「ご主人さま……これって。」

「ああ。その……『招き猫』なんて呼んでいたやつだ。……しつこいようだが、俺は何も手を加えていない。何ならギルドにいた奴らに聞いてみるといい。」

「そ、そうですか……。」

幸福を運ぶ、招き猫か。

そつちなら、本当に素敵な二つ名だ。

「……ギルドにいた奴らは、みんなシヨウコのことを心配していたぞ。」
「……………」

「目の前に怪我人がいるのにな。まったく。」

「……す、すみません？」

「いや、シヨウコが謝ることじゃないんだけど。」

シヨウコには、伝わっただろうか。

この村のギルドの、みんなの気持ちだ。

じゃあ最後は、俺の番だ。

俺の思いも伝える。

「シヨウコ。」

「は、はい。」

「……さっきの発言だけだな。嘘じゃないぞ。」

「えっ？」

「俺のオトモアイルーは、シヨウコ、お前なんだ。」

「……ご主人さま。」

ハンターに正式に認められてから。

シヨウコとはずっと一緒に過ごしてきた。

「辛いクエストも、嫌になりそうな時も、シヨウコと一緒にだから乗り越えられた。本当にそう思う。」

「……………」

「シヨウコが俺にオトモになりたいと言ってきた時、正直驚いた。はじめは同情だったのかもしれない。でもそんなのすぐに消し飛んだ。シヨウコは死ぬ気で、俺を支えてくれたからな。」

「……………」

「俺はこれから、強くなる。強くなりたい。あのディノバルドにリベンジしたい。まだ道半ばなんだ。シヨウコがそこに、隣にいないのは、何か……駄目だ。」

「……………」

「俺を見捨てた？冗談じゃない。何度も言うが、シヨウコは俺の命の恩人なんだ。あそこ
ここにシヨウコが居なかったら、俺はここに居ない。」

「……………」

必死に、俺の思いを伝える。

シヨウコは、泣いていた。

「だから……。これからも、俺のオトモアイルーとして、そばにいてくれます。……お願いします。」

「……………うううっ!!!」

シヨウコが涙を拭うと。

俺に抱きついてきた。

「……………ご主人さま。」

「お、おう。」

「……………安心する……。このにおいや。ウチ、初めに思ったこと、何で忘れとったんやろ……………」

「……………。」

「集落でご主人さまを見つけた時、この人やって思った。ウチの最後のチャンスやって。」

この人ならって思つて。」

あの時のことを思い出す。

上から飛びこんできた、あのアイルリーの事を。

「^ズご主人さま?」

シヨウコは俺から離れると、しっかりと見つめてきた。

「もう、ズルいです。ただ私を説得するんやなくて、みんなから話聞いて、そんなん作つて……。これでオトモをやめたら、ウチ、ただの嫌な奴やないですか。」

「す、すまん。そんなつもりじゃ。」

「わかつてます、わかつてます。ご主人さまにそんなつもりは無いつて。」
「ああ。」

「……言うところ、コロコロ変わつてすみません。お願いがあります。」
「ああ。」

スツと息を吸うと、シヨウコは笑顔になった。

「もう一度、もう一度だけ、ウチをご主人さまのオトモにして下さい。……お願いします。」

「……ああ！もちろんだ！」

「……ご主人さま……これからも、よろしくお願いします。」

「……ああ。よろしくおねがいします、シヨウコ。」

何だかとても照れくさくて、二人とも笑いあった。

その時間はしばらく続いて。

怪我の痛みとか、そんなの忘れるくらいだった。

おかえり、シヨウコ。

66 バイトの様子を見に行きましよう。

シヨウコと部屋で話した後、外に出かけた。

とにかく腹が減ったのだ。実はもう昼過ぎ。

朝はムキムキ人に起こされ、昼はプレゼン資料の作成（笑）とシヨウコの説得に追われ、全くご飯を食べていない。

なのでシヨウコとイシザキ亭に向かうことにした。

「ご主人様……。あれ、何でしょうか。」

「何って……あの人大かりのことを言っているのか？」

シヨウコが指さす先。

イシザキ亭の前に人だかりができています。

「結構な人がいるな。」

「混んでいるんですかね。」

「かもな。……まあ混んでいたら別の店にしよう。」

「はー！」

気にせず店に向かうことに。

気にせず……。

「さあさあ皆さん！いらつしやいらつしやい！こちら、あの有名な『イシザキ亭』の持ち帰り弁当にや！はい！ありがとうございます！お釣りの200zですにや！はい！B弁当！毎度にや！こちら……あー！売り切れですにやあ……ごめんなさいにやあ。こ、こちらのA弁当はいかがですかにや？え？あ、ありがとうございますにや！！はい！ちようどいただきますにや！袋はサービスにや！ありがとうございます！ありがとうございました〜！」

「……。」

「……。」

何だろう。

あのイシザキ亭と書かれた大きすぎるエプロンを身につけたアイルーは。

地面に付かないよう、安全ピンで止めてあるエプロンは白色、ブラウンヘアーによく

似合っている……。

「なあシヨウコ。」

「何です、ご主人様。」

「あれ……そうだよな。」

「……ええ、ウチの目がおかしなっとなければ、あの方で間違い無いです。」

そう、あの弁当を慣れた手つきで売るその姿は。

「……オスズさん!」

ハモった。息びったりである。

「おー? おやあ!! ソウジさんにシヨウコじゃないかにや!! あれ? ソウジさんケガはもういいのかにや!!」

「お、おお。歩く程度なら問題はないが……。」

「それはよかったにやあ! シヨウコも、クエストお疲れ様だにや!」

「あー、あははははー！」

何だろう。

さっきまでコンビ解消とかオトモやめるやめないとか、そんなちよつとシリアス？
だったのに。

一気に力が抜ける。

「そういえばそうだった。オスズさん、働き出したんでしたね。」

「そうなんだにやあ。お店の手伝いかと思いきや、弁当売りを任せられてにや！どうにや？似合うかにや!？」

エプロンを軽くつまんで一回りするオスズ。

うん。

尊い。

「オスズさん、めっちゃ似合ってますわあ……。何でここで弁当売りしてるのか、わかりませんけど。」

シヨウコがごもつともな意見を口にする。

「それが、あちしもそつちでやりたかつたんだけどにやあ。ケイさんがこつちの方で頑張つて、何て言うもんだからにやあ……。でもでも、あちしはどこでも頑張るんだにや！おや！いらつしやいませ！A弁当最後ですにや！はい、ありがとうございます!!」

どうやら弁当は今ので売り切れたようだ。

しかし、オスズの周りには人だかりが消えない。

「なあ、シヨウコ。」

「はい、ご主人さま。」

「……天職って知ってるか？」

「あ、ウチも同じ事思いました。まさしくソレです。……似合ってますわあ。」

2 回目の褒め言葉をシヨウコが口にする中、「完売ですにやー!」と頭を下げるオスズ。

拍手を贈る周囲のオーデイエンス。

状況がよくわからない俺たちは、一緒になって乾いた拍手を贈るしかできなかつた。
何だこれ。

* * * * *

イシザキ亭に入ることにした。

オスズも店に戻るといので、販売用の立て看板や机を持ってあげることにした。

俺は片手しか使えないので、机を持ってあげることに。

「そ、ソウジさんはいいですよ！怪我人ですよ！！」

「いや、左手は平気なんです。右腕と右の胸から腹にかけてが痛いだけで。」

「そ、そうですかにはや？やっぱソウジさんは神のようなお人にや……。」

「オスズさん。どうやってこれ、運ぶつもりやったんですか……。」

バイトを始めたのは昨日のはずだから、今日は2回目の弁当販売なのだろうか？それとも初めて？

……何にせよ、板についた商売っぷりだった。

確かにテイクアウトとか弁当とか売る店はこの辺には無いから穴場かも知れないが……それにしても、である。

俺は、マーケティングと人員配置の奥深さについて考えながら店に入った。

カランカランカラン。

ドアに付けられた控えめな鐘の音が、店内に響く。

外の混雑の割にテーブルは2つほど空いているようだ。安心して店内に入る。

「はい、いらつしや……ソウジさん!? お帰りなさい! あら……こんな怪我して痛々しい……。もう大丈夫なの!」

「ケイさん、ご心配おかけしました。」

「本当よー全く! 少し頼もしくなったと思ったらこんな大怪我して……でもよかつたよ! 元氣そうじゃないか!」

そう言つて俺の背中をバンバンと叩くケイさん。

「いつてえええ!!」

「あら!?ご、ごめんねソウジさん!!そこも怪我してるのね!」

「い、いえ。大丈夫です……おおう。」

背中を叩かれたまさにそこが重症なんです……。

三角巾の下から左手で患部の下胸部をさする。

ふう……大丈夫だ。

「あらー……本当にごめんね、ソウジさん。この辺かい?」

さすさす。

撫でてくれるケイさん。

おおう。

ちようど俺の右肘が……その、あなたのアレに当たっております。

ふう……。

「ご主人さまー？もう痛くないですよ、ねー？」

「いででででで!!!しょ、シヨウコ!?だ、大丈夫だから!!洒落にならんから!!」

シヨウコも一緒にさすりだす。

さするどころか、シヨウコ！それは圧迫と言うんだ!!!

「ギブ！ギブギブ!!」

「もう、全く……ケイさん、ご主人さまはが・ん・じょ・うなので、平気ですよ。」

「そ、そうかい？申し訳ないことをしたねえ。」

「い、いえ……マジで大丈夫なんで……。」

ふいつと顔を横にするシヨウコ。

な、何だ!?俺の邪な感情がシヨウコにはわかると言うのか!?

さすが相棒だぜ……。

アホなやり取りは置いといて。

「ちようど弁当を売っていたオスズさんを発見したんです。驚きました。」

「あー……なるほどね！そう言うこと……オスズちゃん！お疲れ様！弁当はどうだった？」

「にや！にやにやんと！完売しましたにやあ！」

「まあすごい！よかったわあ。厨房に賄い用意してるから、食べてきて！」

「ほ、本当ですかにや！やったにや！労働とは尊いものだにやあ!!」

まさに「ピューン！」といった感じで走り去っていくオスズ。

「……で、ソウジさん。オスズちゃんのことなんだけど……。」

「……お聞きしましょう。紹介したのは俺ですし。」

「……怪我しているソウジさんに言うのも申し訳ないんだけど……聞いてくれる？」

そこから事情を伺った。

内容はこうだ。

昨日朝、張り切ったオスズが店にやってきた。

まさかオスズ自身が働くとは思っても見なかったケイさんとイシザキさん（兄）。

でも、やる気満々で頑張るというオスズに押される形で、バイトの仮契約期間を設け、様子を見ることに。

うん。ここまでは問題ない。

「一生懸命なオスズちゃんが、本当に可愛くてねえ。兄貴もそれにやられちゃって。」

「あ、お兄さんが。」

「そう。……あつ！今朝迷惑かけた件は、こっ酷く叱つておいたからね！」

「あー、それはどうも……。」

ダブルムキムキ襲来事件の話は、一旦横に置いておく。

それからランチタイムになるまで。

オスズに色々と教えていたケイさんだったが、ここでオスズの本領発揮。

正にやる気が空回り。

何枚も皿は割るわコケて水はこぼすわ、挙句机に頭をぶつけてでかいたんこぶ作るわ。

「そらひどいわ……。」

思わずシヨウコの顔が引きつる。

「で、見るに見かねて、兄貴がテイクアウトの弁当を作って売ってみたらどうだって言ったら、これがもう大成功！」

「なんと……。」

才能とは、どこにあるかわからないものである。

「だから私も、正式雇用でいいかなー、ってね。ホールの仕事は、まあ少しずつ覚えてもらいながら、暫くは昼の弁当販売をがんばってもらおうかなって。」

「いいんじゃないですか？ オスズさん、とても活き活きしていましたし。」

「そう？ よかったあ……実は最初、弁当販売をお願いしたとき、すごく落ち込んでいたから……。」

オスズからしたら、厄介払いされたと思われたんだろうな。

まあ実質そうなんだが。

シヨウコが口を開く。

「……ちなみに賄いつて……オスズさん、大量に食べてはりませんか？」

「そこは……まあお給料から代引ね……。」

「差し引きどれぐらいですか？」

「……トントン、かしらね。」

「おうふ……。」

つまりは弁当販売した分だけ食べるってことかよ。

すげえなオスズ。

「ちなみに、兄貴は『こんなに作りがいがあるのは初めてだ！』ってやる気なのよ。だからまあ、いいかって。」

「食う分は働いてるわけですしね。」

「そうそう。あつ、じゃあそういうことで！はいはい！お待ち下さいね！」

そう言うときケイさんはお客さんに呼ばれ、行ってしまった。

「この忙しさが解消されればいいんだけどな。」

「オスズさんなりに頑張ってるんやと思います。」

「……そうだな。応援しよう。」

オスズに陰ながらエールを送る俺とシヨウコ。

俺たちができるのはここまでだ。

社会人として、頑張れオスズ。

ちなみにその後、俺とシヨウコの定食を持ってきたオスズが転びそうになり、ヒヤヒヤするということがあった。

……頑張れ！オスズ！

* * * * *

昼が遅かったこともあり、俺たちがランチ時間の最後の客となった。

お兄さんとオスズが食器を洗う音が聞こえる。

伝票をカウンターに持っていく。

「じゃあ会計で。」

「はいはい。……ソウジさん！スタンプ10個溜まったから、15%引きね！」

「おお。そういえばその制度があった。」

いつだかのイシザキ亭改革案の一つ、ポイントカードの導入。

俺が提唱したものだ。

「えーつと、ちよいと待ってね……720zにドリンクが2品で……1840zだから

……えーつと？」

ケイさんが頑張って計算してる。

……ダジャレじゃないぞ。

なんて下らないことを考えていたら、ケイさんの後ろからオスズがひよっこり顔を出した。

「ケイさん、1564zだにや。」

「あら、ありがとうオスズちゃん！ソウジさんお待……えっ!？」

「はにや?」

「オスズちゃん!?!計算早くない!?!」

俺も驚いた。

待てよ、720zの定食と200zのドリンクで920z、それが2つで1840z。

その15%引きだと……276z引いて……1564z!?!

……うん、合っている気がする。自信は無いが。

「……ケイさん、多分合っています。」

「うそ!!……スゴいわねオスズちゃん!!」

「にや、にやあ?」

偶然なのか?

試しに俺からも問題。

「……オスズさん、今日の弁当の売上は？」

「えーつと、34000zですにや。」

「内訳は？」

「A弁当800zとB弁当900zが20個ずつですにや。」

「……合っている、かな？」

俺も自信がない。

速い！速いぞオスズ！

「すつごーい！オスズちゃん!!計算得意なのね!?!」

「にや、にやあ。これでも、集落の収支計算をする仕事をしてましたからにや。店の計算

ぐらいなら朝飯前ですにや！」

「本当に!?!じゃ、じゃあ……。」

今度はケイさんが、今日の会計の伝票を取り出す。

「これ、今計算できるかしら!?!」

「は、はいにや!」

「よかったあく。私も兄貴も算術が苦手だね!ランチとディナーは収支別にしてるか
ら、昼に計算締めをしてくれるならとても助か——」

「62795zですにや。お弁当販売分も含めて、にや。」

「「!!」」

俺もケイさんもショウコも、何なら厨房からこちらを覗いていたお兄さんまで驚いて
いる。

オスズがとんでもない力を隠し持っていた。

「お、驚きや……。」

どうやらショウコも知らなかったらしい。

恐るべし、集落の長。

「にや、にやあ?み、皆さん大丈夫ですかにや?」

「……オスズちゃん!」

「ははは、はいにゃ!!」

ケイさんがオスズの手を取る。

「ぜひウチで働いて！お願い！給料は弾むわ！よろしくおねがいます！」
「わ、わかりましたにゃ！全力でがんばりますにゃ!!」

ガシッ。

手を固く取り合う二人。

オスズのイシザキ亭での正式雇用が決まった瞬間であった。

* * * * *

その後、お兄さんを含めた3人で協議し、オスズを弁当販売員兼会計担当として雇うことになったらしい。

オスズもイシザキさん達の役に立てて、心底嬉しかったらしい。

良かったなあ、オスズ。

俺としても、エプロン姿のオスズが今後も見られるならば、無問題である。さらにそこにケイさんのエプロン姿があるならば、尚いいだろう。

「……ご主人さま？鼻の下伸びてます。」

「の、伸びてないぞ！」

「……ウチもウエイトレスやればええんかなあ……。」

「ん？シヨウウコ？なんか言ったか？」

「……いいえ！……ウチは、ご主人さまの唯一無二のオトモですからね！」

「……？その通りだが……。」

当たり前前の事をのたまうシヨウウコ。

まあいい。これからイシザキ亭はますます流行っていくことだろう。

頑張れよ、オスズ。

ちなみに、あまりに繁盛しすぎた為に、新たにバイトを雇うことになり、その給金や税金の計算まで任されていくオスズの活躍が光るのは、もう少し先の話。

人の才能とは、本当にわからないものである。

67 新たな決意を表明しましょう。

宿に戻ってきた。

シヨウコとは途中で別れてきた。

何でもギルドの皆さんにお礼を言いに行ってくるらしい。

「ちよつと恥ずかしいんですけど……優しいみなさんに、お礼を言ってきます。」

そう言うと、意を決してギルドに向かつて行った。

シヨウコとは、また今後について話し合う必要があるが、まあ急がなくていい。

何せ俺は怪我人である。ひとまず1週間後の診察を受けるまでは、安静にしておかねば。

考える時間はかなりある。とにかく体を休めることに専念しよう。

部屋に入る。

「わっ！そそそそそソウジさん!!」

「ドール？どうした？」

「う、ううん。お帰りなさい。おじいちゃんから宿に帰って来たって聞いたから……掃除！掃除をしていたの。」

「そ、そうか。ありがとう。」

えらく慌てている。どうしたんだろう。

後ろに何か持っているような。

「ドール？後ろに持っているのは……？」

「あ、こ、これ？……ソウジさんの枕を………洗おうと思つて。」

「おー、ありがとう。そうなんだ、しばらく横になることが多いだろうから。助かるよ。」

「う、ううん。……じゃあ私、これ洗ってくるから。新しい枕、すぐに持つてくる。」

「ああ、わかつた。」

俺が安静にして過ごすことを見越して枕を洗つてくれるとは。

気が利く子である。

……なぜ今なのか疑問は残るが。

「ソウジさん、体はどんな感じなの？」

「ああ、さつきご飯を食べてきたが、歩いたり少し体を使う分には問題ない。ただ激しい動きとかは無理だな。特にこの辺が痛むんだ。」

そう言つて、三角巾の下、あばら骨辺りを見せる。

「やっぱり動くの大変だよね。私にできることがあつたら、何でも言つてね。」

「早速枕を洗つてくれてるじゃないか。十分だよ。」

「あー……うん。」

「……?。」

ドールにしては菌切れが悪いような。

「そ、それじゃ。私、行くからね。ソウジさん、ちゃんと安静にしていね。」

「あ、ああ。ありがとう。」

ボタン。

……………。

「様子がおかしいよな……………ドール。」

まあいいか。

俺は気にせず、ゴロンとベッドに横になった。

* * * * *

そこから1週間、利き腕が使えない、何とも不便な生活の中。
ドールの様子が、どうにもこうにも変だったのである。

ここ1週間のドールさんの奇行を、簡単にまとめると……

- ・ドールさん、「あーん」押し売り事件
- ・ドール v s ショウコ 銭湯暴走事件
- ・ドールさん、カルシウム夕飯事件

・ドールさん、包帯ヘタクソ事件

……名前だけで何となく察してほしい。

特に銭湯暴走事件は酷かった。おかげで銭湯の人に怒られてしまった。

とにかくこの1週間は安静にすることができた。肉体的には。

精神的？

余計疲れたかもしれない……。

* * * * *

「骨折部分はほぼ回復……：裂傷、損傷部位は全快……：かな。うん、よかったです、安静にされていたようで。」

「ええ。安静にしました。」

「ハンターさんの中には、怪我なんて知ったことかと突っ走るような方も少なくありませんので。しっかり体を休めない……：回復薬の効能も万能ではありませんからね。」

「はははははは。」

体は休まりましたが、ドールやシヨウコのおかげで、心の安静はあまりとることができなかつたのだが。

そんなことは、このお医者さんには関係のないことなので、伏せておこう。心療内科ならともかく、外科医さんみたいだし。

しかし、1週間ぶりにやってきた診療所のお医者さんに、ほぼ完治したと言われてしまった。

うーん、前世なんて、骨折したらそれこそ数ヶ月かかるだろうに……まあこっちの世界だからなあ。

教官なんてポツキリ折れた筈の右腕を使って三日後には腕相撲していたし。

……あの人を基準にしてはいけないんだがな！

「日常生活は普段通りにしていただいて大丈夫ですよ。でも、お仕事はもうしばらくストップしましょう。」

「はい、わかりました。」

「この調子なら……あと2週間もすれば全快でしょう。ハンターはそこまでは我慢ですね。」

異世界の回復力すごい。侮っていた。

そりやそうか、創傷がたちどころに治る薬がその辺に売っているのである。

受けた治療と言えば薬布をあてがわれたぐらいなのだが……恐ろしい。

それでも、ギルドに致命的なケガをしたハンターが運ばれたり、死んだりという話はある。

モンスターがいかに強く、そして人間が非力なのかがわかる。

女神様に、この世界が弱肉強食と呼ばれていたのも頷けるといふものだ。

お医者さんに礼を言つて医務室を出た。

ギルド内にある医務室なので、自然とギルドの受付を通ることになる。

ラッシュの時間は過ぎてはいたが、それでもハンターの数は多い。

この時間になると、朝の時間とはハンター達の種類が少し違う。

例えば、長期間の狩猟を見越したハンターのチームや、特別な許可が必要なモンスターの狩猟をするハンターなど。

いわゆるベテランや凄腕と呼ばれる人達である。

より凄腕……所謂G級と呼ばれる腕になってくると、ギルドや大手の商会、果ては国

家クラスの重鎮などから、直々に依頼をもらってクエストをこなすらしい。

俺もある程度力がついてきたと自惚れていたが……ディノバルドに大きな遅れをとっている様では、そんなレベルには到底追いつけないだろう。

ギルドにいる強者たちを横目に、外に出る。

早く回復して、体を思いつきり動かしたい。

そしてモンスター達を相手にしたい。

……異世界に來た当初から、俺、かなり思考がこちらに染まっているなあ。

「平穩な毎日を」なんて考えていたのが嘘のようだ。

今日もし、お医者さんからある程度動いていいという許可をもらったら、行こうと思っていた場所がある。

そこへ向かうことにしよう。

……向かう先は武具屋。セツヒトさんのところである。

* * * * *

なんとお願いするか考える内に、着いてしまった。

まあいい。まずはお礼を伝えよう。

礼儀を重んじなくては。

「セツヒトさーん？いますか？」

ガチャっ。

何の気無しにドアを開ける。

「開いてるよん」という気の抜ける札が掛かっていたから、いきなり入っても、多分大丈夫だろう。

「入りますよー……セツヒトさーん？」

……返事が無い。

もしかしたら例の昼寝部屋だろうか。

仕事に関してはとんでもない腕を持っているセツヒトさんだが、勤務態度はお察しの

とおりである。

仕方がないのでそのまま待つことに。

.....。

.....10分ほど待った。

居ないのかな.....。

.....意を決して、例の昼寝部屋があるであろう天井をノックすることに。
その辺にあった棒で、トントン、と天井をノック。

「.....。」

『.....んん？』

「あっ！いますか？セツヒトさん。俺です、ソウジです。」

『.....ええ.....ええー！ソウジー？』

「そ、そうです。あなたに命を助けられました、ソウジです。」

天井から聞こえる声と謎の会話。

声からして寝起きであることは明白だ。かすれ声だもの。

「寝ていたんですか？お邪魔してすみません。」

『わー、わー……ちよつと待ってねー……。』

「……セツヒト——」

『せつちゃんー。』

「せつちゃんさん。今取り込み中なら、出直しますけど……。」

『あー、いーのいーの。ちよつと……いま裸だから、待っててー。』

「へ!？」

裸？

もしやセツヒトさんは、寝る時に裸族になるというマイノリティの派閥なのだろうか。

「い、いやいや。急がないでください。」

『だいじょーぶー。……あれ？パンツどこだっけ……。』

「せ、せつちゃんさん!」

『あー、あつたあつたー。』

ガサゴソガサゴソ……………

ガタン！

天井が開く。

ハシゴを降ろしてセツヒトさんが降りてきた…………へ!?

「お待ちせー、ソウジー。」

「せ、せつちゃんさん！ず、ズボンが!!」

「えー？パンツは履いたよー？」

「そういう問題じゃねえ！」

降りてきたセツヒトさんは、パンツにロンTという姿。

あれだ、何かのドラマで見た、同棲中の彼女が彼氏の家でしている格好。

あれだあれ。

彼氏からTシャツ借りるから、ダボダボでワンピースみたいになるんだよなー。うん

うん。

……冷静に分析している場合ではない！

「せつちゃんさん、早く、着替えてきてください。」

「あー、はいはい。寝ぼけててきー。……どこ見てるのー？」

「……どこも見てません。」

目を瞑る。

目が勝手に開く。

視線は、Tシャツがギリギリに隠すその先。白い素足がスラツ伸びている。

「……ソウジって、スケベ心に素直だねー。」

「……すみません……じゃなくて！早くズボンはいてえ！」

「おー、りょー。」

そう言つて工房の中に向かっていくセツヒトさん。

……うむ。白である。

……着替えて来るまでに煩惱を無くさねば……。

* * * * *

「じゃー、気を取り直しましてー。ごめんねー、ソウジー。」

「はい……。」

セツヒトさんが謝ってくる。

色々あったが、やっと本題である。

「セツヒトさん、改めてこの度は、ありがとうございました。」

「おー、うんうん。怪我は良くなったのー?」

「はい、お陰さまで。ハンター業はもう少し待たなきゃですが。」

「良かった良かったー。もう本当に心配したんだよー。ガラにもなく、昔の装備と双剣引っ張り出してきてさー。」

「それは……本当にご迷惑お掛けしました。」

引退したセツヒトさんが、一肌脱いでくれたのだ。
ありがたい他にない。

「ん、いいのいいの。私だって、そういう人達に助けられてきたんだからね。でもさー、ソウジ？」

「はい。」

「……ソロって、本当に危ないんだから……気をつけてー？みんなみんな、心配したんだから。」

「……はい。」

この怪我を癒やすための安静期間。その中で、たくさんの人たちに迷惑をかけたことがわかった。

ドールに泣かれた時なんか、何かこう……生きた心地がしなかったしな……。

「だから俺、強くなりたいです……。今よりも、もつと。」

「……。」

「あのディノバルドを、倒したい。」

「……そうかー、ソウジはこっち側かー。」

「えっ。」

こっち側？

何のことだろう。

「せつちゃんさん。こっち側って言うのはー」

「私も昔、ソウジみたいにコテンパンにやられてねー。それを助けてくれた人に、こう言ったのさー。」

「……。」

「『強くなりたい。今よりもずっと。』ってね。」

「えっ……。」

セツヒトさんにも、そんな時代があつたのか。

「懐かしいねー。まー、その時はキツパリ断られて……。悔しくてねー。そこから頑

張って、せつちゃんさんは強くなったのだよー。」

「はー……。」

「だからー、ソウジは、私と同じ。こっち側ってわけー。敵にやられてもー、むしろ燃え上がるメンタル？みたいなー？……あんまり昔のことは話さないようにしていたんだけどー……ソウジは私と、対等なんだよねー？」

「へ!？」

「だからー、前言ってたよねー？………忘れたー？」

「あ、あーあー!」

思い出した。

俺がセツヒトさんに防具の強化を頼んだ時。

「セツヒトさんの過去を聞くなら、俺の秘密も伝えるべき。だが俺は強くない。だから俺が強くなるまで、話さないで下さい!」とか何とか、口走ってしまった。

我ながらキザである。

恥ずい……。

「いやー、かつこよかったなー、あの時のソウジ。最初はおケツをプリツとして変な顔で

泡吹いて気絶していたんだけどねー。わからないもんだねー。」

「そう言えばその節もお世話になりました……。」

今日はお礼を言いつばなしである。

セツヒトさんが言うのは、俺が調子こいて片手剣と双剣以外の憑依状態も試そうとしたときのことだ。

記憶にはないが、大層面白い格好で気絶していたという。

……恥の多い第二の生涯を送って参りました。

「でさー、私がちよつと話したんだからさー。ソウジもちよつと、教えて欲しいかなー？」

「え!?!何をですか!?!」

「んー……どうやってー、あのディノバルドの体力をー、……あそこまで削ったのー?」
「えっ。」

あそこまでつて……見ての通り、俺はコテンパンだったわけだが。

「だってー、そりゃーもちろん、トドメを刺したのは私たちだけどさー？多分ソウジだけで三分の二は削ってたよー？」

「……ええ!? そうなんですか!？」

「うん。勘だけどねー。あのぐらいの強さのディノバルドでー、私が2年ブランクがあつて、マシヨルクが全開だったからー……うん、三分の二はいったんじゃない？」

驚いた。

ギフトの力を使ってでさえ、ダメージは届いていないと思つていたから。

「あのクラスになるとねー。ダメージ入ったかどうか、分かりにくいんだよねー。」

「……確かに、ディノバルドは最初からずっと全開だったっていうか……俺の攻撃なんて全く意に介してなかったように見えました。」

「さすが野生の強者だよね。敵に弱みは見せないっていうの？すごいよねー。」

「はい、アイツは強かったです……。」

「うん。だからー、まあ失礼な言い方なんだけど……まだソウジには敵わなくて当たり前、なんだー。」

「はい……。」

「……ソウジがどうやってアイツを追い込んだのか。気になるなー、つて。マシヨルクに聞いても、教えてくれないしー。」

「……ギフトの力です！と簡単には言えない。

なるべくこの力については口外しないほうがいい。

ただなあ……セツヒトさんを誤魔化し切れるとも思えないんだよね……。実力の見合わない俺が、そこまでダメージを喰らわせていたのだ。

それを目の当たりにしたセツヒトさんを誤魔化すなんて自信が無い……。

まあそれにセツヒトさんの過去のことも少し教えてもらったんだし。

「……対等にいるための交換条件、か。」

我ながら恥ずかしいことを口走ったものである。

腹を括るか……。

「……わかりました、伝えます。ただ、このことは――」

「他言無用、でしょー？うん、誓うよ。」

「よろしくお願いします。まずですね……。」

こうして俺はセツヒトさんに、カミングアウトを始めた。

68 教えを請いましょう。

セツヒトさんに大体の事を説明する。

俺がこの世界の人間ではない事、神様にギフトをもらって色んなことができる事、そしてディノバルドにどうやって立ち向かったか……。

カミングアウトも三回目になると慣れたものである。

「へえー。じゃあ着替えとか楽じゃんねー。」

……ここまでリアクションが薄いとは予想してなかったが……。

「け、結構なことを俺言ってると思うんですが……リアクション薄くないですか？ いや、俺が言うのも何か変ですが。」

「んー？ いや、だいたい予想してたっていうか……初めてあった時から、なんかこう、ね？ 違うなこの子、って思ってたよー？」

「マジですか。」

「マジマジー。」

やっぱこのクラスの人のになるとわかってしまうもののかなあ。

教官も感じていたみたいだしなあ、最初から。

「でー？その……武器を勝手に操作するやつー？それを使って、デインバルドとやり合えたのー？」

「正確に言うくと、アイテムの〈調査〉で罾を作って仕掛けて斬りつけ、作って仕掛けて斬りつけ……その繰り返しですね。」

「ほほーう……それはすごいねー！それでヤツを追い込むとか、大したもんだよー？」

「そ、そうですか？俺、『そんな力ずるいー』とか、そんな感じの反応を想像してました。」

「うーん、ハンター長いことやつてたからねー。そういう理不尽な存在って、結構いたよー。まあ、流石にそんなめっちゃくちゃな力持った人、知らないけどさー。」

「理不尽な存在……。」

「……あんまり言いたくないけど……マシヨルク達とかねー。いやー初めてみた時は、どんだけ力の差があるのかって思ったもんだよー？うんうん。懐かしいねー。」

俺からしたらお二人ともザ・ベストオブ理不尽なんです。

「ま、この辺の話は追い追いねー。ソウジが話してくれたんだし、いつか私の事も教えるよー。……つまないかもよ?」

「い、いやいやいや!!めっちゃ気になりますって!!」

教官との仲の悪さについては、あれだけ見せられたのだ。

気になるって、セツヒトさん。

だが……今日の本題はそこではない。

「……セツヒトさん、今日の本題は、この話をするためでは無いんです。」

「おー? そうなのー?」

「いや、お礼はもちろんしたかったですけどね。」

「あー、もしかして、武器の修繕?」

「あーそれもあります!……でもその前に、お願いしたいことがあります。」

俺は、強くなりたい。

セツヒトさんが教えてくれるかは分からない。

でも、双剣を操るあの姿。

完璧だった。

俺がデイノバルドを倒せるような力を得るために、力を貸して欲しい。

「セツヒトさん。お願いします。……俺に、剣を教えて欲しいんです。」

「……………」

「勝手なことを言っているのはわかっております。ですが！あの時のセツヒトさんの双剣は、完璧でした！」

「……………」

「お願いします！ぜひ、俺に双剣を教えてください！」

とにかく、思いの丈を言葉にして言ってみた。

全てまじりつけなしの本音である。セツヒトさんの剣技に惚れてしまった、と言ってもいいかもしれない。

だが……セツヒトさんは無言のまま俺を見つめている。

これは……ダメだったか……？

「……あ、あーあー。ビックリしすぎて、息するの忘れちゃったよー！」

「す、すみません。」

「いやー、おつどろいたー。私が、ソウジに、かあ。」

「はい……難しいですかね……。」

「うー……。」

考え込んでいらっしやる。

やはり一度剣を置いた身としては、なかなか応えられないということなのだろうか。

だとしたら、俺が言っていることは非常に勝手なお願いだ。

仮に、セツヒトさんの何らかのトラウマ的なものを刺激してしまっているのであれば。

それは、大変に申し訳ない。

「セツヒトさん、すみません。もし昔の……」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん、すみません。もし昔の何かが関係して教えることが難しいと言う

のであれば、俺は……。」

「へ？いや、そんなん全く無いよー？」

「無いんかい！」

関係なかった。

ザ・杞憂。

「だって引退したのはさー、こここのスジやっちゃったからだしー？実はここから先が……よっ……んー、上がらないんだよねー。ほら。」

そう言つて右腕を上げようとするセツヒトさん。

肩から上に腕が上がっていかない。

「うまく剣を振りかぶれなくてねー。それでー、引退ー。」

「……まさかそんな状態で、ディノバルドを……？」

「そだよー？」

恐るべし、セツヒトさん。

「まああの時はムカついてたしー？マシヨルクもいたからねー。アイツ、本当に言いたくないんだけど、腕だけは確かだから。」

「あー、なるほど……。」

そういえば、セツヒトさん、接地しての攻撃は足ばかり狙っていた。何か理由があるとは思っていたが、これが原因だったのかな。

「でー、教えるのは、全然いいよー？」

「マジですか!？」

「うん。ただねー……。。」

言いよどむセツヒトさん。

「やはり問題がありますか？」

「いやー、ギルド的にも私の仕事の的にも、支障は来さないとと思うんだけどねー。うーん。」

……これだけ悩むということは、やはり無茶なお願いだったのだろうか。

「えーつとねー……。」

しばらく間を開けて、セツヒトさんが予想外のことをのたまった。

「私さー、教えるの、超絶ヘタツピなんだよねー。たはははー。」

「……………へ？」

顔を少し赤らめて言うセツヒトさんに。

肩の力が抜けてしまった。

* * * * *

宿に戻ってきた。

武具屋とは目と鼻の先。

ホエールさんに挨拶をしたあと、部屋に入る。

「見て覚えろつてことかなあ……。」

先程のセツヒトさんとの会話を思い出す。

セツヒトさん曰く、自分が教える力は、全くもって無いということだった。

「何ていうのかなー、ここまで感覚？でやってきたからさー。教えるときに擬音が多くなるんだよねー。それで武器の扱いも武具の加工もやってこれちゃったからねー。」

要は、天才肌、ということなんだろう。

前世にゴルフを習ったことがあるが、得てして上手い人⇨教えるのが上手い人、ではなかった。

言葉がうまいとか、そういう能力も必要なのだろうが、一番わかりやすかったのは、苦労してようやく100を切ってきたような先輩だった。

自分が壁にぶつかって、乗り越えてきたポイントが多ければ多いほど、教えられる引

き出しも増えていくというもの。

名選手が名将になれるわけではない、ということか。

……なんか納得がいく。

器用に何でもこなせる人の教えて、妙に実感が薄いというか。
セツヒトさんは、間違いなくその部類だと思う。

更にセツヒトさんと話をして、とりあえず明日から剣技を見せてもらえることになった。

「明朝、朝ごはん食べたらい、うちに来てー?」

とりあえず、そこで話は終わり。

こう考えると、教官の教え方はものすごく丁寧だった気もする。

いや、めちやくちやスパルタだったし、死ぬほどきつかったけど……「絶対無理い!」
というギリギリのラインをいつも攻めてきた。

教官は数少ない「名選手で名将」なタイプなのかもしれない。

「とりあえず……明日からまた頑張るか！」

怪我が完治したわけではないし、とりあえず見るだけしか、今はできないしな。そういう意味では、この形で良かったかもしれない。

「そうと決まれば、シヨウコが帰ってきたら、飯でも食いに行くか。」

体を少し動かす程度なら問題はなさそうなので、飯を食ったら筋トレとイメトレ、風呂のルーティンは再開しよう。

腕を使わないように気をつけて。

これからの計画をなんとなく考えながら、部屋でゆっくり時間を潰した。

* * * * *

明朝。

久々に再開したランニングで、少し落ちてしまった体力を実感。

10周程度の村の周回が、恐ろしく長く感じた。

「やっぱ体力落ちてんなあ……。鍛え直した……。」

「そ、それに……ついていくのがやつとのウチは……はあつ……はあつ……どうすればええんですか……?」

ちなみにシヨウコもランニングを再開。

10周に頑張つてついでこられた。

「いやいや、これではいけないな。明日からスピードをあげよう。1時間を超えてこの体力では、マズいと思う。」

「普通アイルーのほうが……はあつ……速いもんですけど……ご主人さま、十分化け物です……。」

バタン。

シヨウコが目をクルクルして倒れた。

「きゆうく……。」

「おお……きゆうくって言いながら倒れるもんだな。人って。」

人ではなくアイルーだけど。

まあいいや。

シヨウコをおんぶして、宿まで運ぶ。

朝も早くから、気を失ったアイルーの女の子をおんぶして宿に連れ帰る男……。

道行く人に変な目で見られてしまったが、スキル「気にしない」を発動した俺に、死角はなかった。

スルー能力は鍛えられております。

なお、宿で朝食をとりながら、ドールにプチ怒られしてしまった。

「怪我の治りたてで、シヨウコちゃんが倒れるまで走っちゃ、だめだよ？」

実年齢では娘と言っても差し支えない娘さんに怒られてしまった。
はい、ごめんなさい。

* * * * *

武具屋にやってきた。

今日から、セツヒトさんの特訓？が始まる。

と言つても、まだ見るだけなんだけど。

武具屋のドアには「おやすみなさい☆」の札がしっかりとかかっている。
毎回微妙にセリフが違うのが、セツヒトさんクオリティ。

気にせず、ドアを開ける。

ガチャツ。

「おやすみなさい〜」

第一声は元気よく！

………。

返事がない。

……まだ寝ている可能性は高い。

仕方がないので、武器を見て待つことにする。

約束の時間は特に決めてなかったからなあ。

武器を物色するか。

………。

………。

いや、遅いわ。

起こしに行ってもいいものか……でも、セツヒトさんは寝るとき裸族だし……。

「せ、せつちゃんさーん？」

……………。

返事は無い。

うーん。

しょうがない、悪いが上がらせてもらおう。

べ、別に裸を見たいわけではないんだからねっ！

「お、お邪魔しまー……………ん？」

何か音がする。

微かだけど、風を切るような音。

武器屋の裏手、入り口とは反対側から聞こえる。

これは……………。

「素振りの音……………？」

……もしやと思い、武器屋の中、セツヒトさんの居住スペースを横切つて裏手へ。
そこには……。

「いた……。」

建物の裏に抜けると、小さめの庭のようなスペースが広がっていた。

建物が日を遮り少し暗めのそこは、広さが大体20平米ぐらい。

宿「ホエール」の庭よりは小さい。

そこで、Tシャツにスキニージーンズというラフな格好で、剣を振るう銀髪の女性が一人。

……セツヒトさんである。

「……………フツ。」

息を浅めに吐きながら、両手の双剣を横薙ぎに振るう。

風を切る音はそこまで大きくない。ゴルフや野球のバットの素振りのそれとは違う。

「……………フツ。」

……………とんでもなく速い。

憑依状態の俺でも、こんな剣速、出せるだろうか。

自分のことはよく分からないが、セツヒトさんはその速さを維持しながら、ほぼ全く同じ角度で素振りを行っていた。

「……………フツ。」

しかも一定の間隔で。

見てわかることは、身体の使い方が俺とは全く違う。

見るからに細い腕なのに、剣が振るわれるある一瞬だけ、とんでもない速さに到達する。

力が入っているようには見えない。

「……………ソウジー?」

「はっはい！」

「おはよーん。ちよつち、待っててねー。今、……終わるから………フツ。」

ヒュン！

最後の一振りを終えると、いつものセツヒトさんがこちらを振り向いた。

「……見てたー？」

「へ？」

「だからー、今の素振り。見てたー？」

「ああ、はい。」

もちろん。4回だけだが。

「んーつとねー、素振りするときはこんな感じなんだー。」

「こ、こんな感じ……。」

「うん。」

「……………」

「……………」

「…………え!? 終わりですか!?!」

その説明だけ!?!あの剣速の出し方とかコツとか、そういうのは!?!

「…………あー、言葉にしなくちゃだ。ごめんねー、ホント苦手なんだ…………。」

「い、いえっ! 見て感じます! 見て覚えますよ!」

「ホントー? まあ、初めてだし、そうしようかなー。…………なんか私が言葉にするとー、余計分からなくなるみたいでねー。」

「そ、そうなんですネ。」

うん。

「教えるのが苦手」と言うが、まさに。

だが、観察眼は教官に鍛えられまくった。

どうせ俺の体はまだ万全ではない。

見に徹することにする。

「えーつと、今日はねー……わたた、えつとー……。」

「……………」

慌てながら、何かのメモを取り出すセツヒトさん。

この人のこんな姿、初めて見るぞ!?

「あー、あつたあつた。……今日はねー、私の狩猫を見てもらおうかなつて。」

「……………え!?!狩猫!?!」

「うん。あー、大型じゃないよー? 村の近くの小型を数頭、だねー。」

「は、はあ。」

「やっぱり教えるのつて難しくてさー。実践あるのみー?」

言わんとする事はわかる。

実際にまず手本を見せる。これはどんな教えでも共通すると思うから。

……セツヒトさんレベルの狩猫を見られるなんて、またとない機会であるからして。

ありがたいです。

「じゃあギルドに行こっかー。あ、歩きで行くよー？大丈夫ー？」

「はい！ランニング程度なら問題ないです！」

「んー。よろしいー！……今の、先生っぼい？」

「……はい。」

何だろう。

いつもはのんびりクール？な雰囲気のセツヒトさんだが……どこか楽しんでないか？

ピクニック気分で小型狩猟……。

まあセツヒトさんレベルなら朝飯前なんだろうけども。

とりあえず俺たちは、ギルドに向かい、適当なクエストを選んだ。

場所は村にほど近い草原。

そこで俺の地獄の特訓が始まるとは、この時は知る由もなかった……。

69 本当の訓練を始めましょう。

「ソウジ―? 大丈夫―?」

「はあつ……はあつ……はあつ……まだまだ……いけます……!」
「うーん。もう無理そうだねー。ここまでにしどくかねー。」

体力が早くも限界を迎える。

正直辛い。

体力には自信があつたのだが、この特訓は……きつい……!

一方セツヒトさんは平然といつもの表情。

これほどまでに体力に差があるとは……。

「ソウジ―? 平気―?」

「はいっ!……とりあえず帰る分には……!」

「オツケー。んじやま、走りますかー。」

ビュン。

セツヒトさんが快速で走り出す。

「マジか……。」

俺は足に力を入れ直し、無心で追いかけて始めた。

なぜこのような事態に陥っているのか。

セツヒトさんに訓練をお願いしたところから説明しよう。

* * * * *

最初の一週間は、ただ見るだけだった。
本当に、ただ見るだけ。

ヒュ！………シュパ！！

「よし……こんな感じー！」

少し遠くの方で合図するセツヒトさん。

足元にはジャギイの骸が2つ。

俺が駆け寄ると、セツヒトさんから声がかかる。

「どーだったー？」

「そ、そうですね……。」

ジャギイの亡骸を見つめる。

頭部に傷、首にはキツチリと切り込みが。

「弱点を的確に……狙っています。」

「お、いいねー。」

「あと、セツヒトさんの剣がとにかく速かったです。何か……特に力を入れているようには見えなくて。」

「うんうん、それも正解。」

つらつらと見てわかったことを述べていく。

その一つ一つに、受け答えしてくれるセツヒトさん。

「……こんなところでした。」

「うん、よく見てるよー。ソウジはなかなか良い眼してるねー。」

「あ、ありがとうございます。」

「んじやー、次ねー。」

そう言ってダランと双剣を下げると、殺気を後ろに向けだしたセツヒトさん。

正直に言おう。

……めっちゃ怖い！

セツヒトさんは殺気を放つや否や、ヒュンツと後ろに駆け出し、こちらを覗いていた
ジャギイに一撃。

「ギャアツツ!!」

「よつとー！」

攻撃の後も手が休まることはない。
まるで流れるように2体を仕留めた。

「……よーし。こんなもんかなー。」

「セツヒトさ——」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、今の流れるような剣捌き、心底驚いております。」

「いやー、あははー……ソウジに褒められると、照れるなー。」

「いや、本気ですよ?」

「うん……ありがとー。いやー、見られるだけなのも疲れるよー。どーお?次は何かわかったことはあるー?」

聞かれて言葉にするのは難しい。
考える。

「そうですね……まず、俺とは初速が違いました。」

「しょそくー?」

「そうですね、剣を降り出すときからすでにトップスピードというか、そこから振り抜くまでに更にスピードが上がっていて……でも力が入ってないように見えます。」

「ほうほう。」

「あと、目配せですね。モンスターを見ていないようにも見えるのに、隙無く次の獲物を捉えているようにも見えて……あー、言葉つて難しいですね。」

「うんうん、わかるよー。私も今言われて、確かにーって思ったよ?」

無自覚か。

やっぱりすごいわ、セツヒトさん。

「まだソウジの剣を見てないから、何とも言えないんだよねー。まー、まずは盗むつもりで見ててねー。」

「はいー!」

* * * * *

こうして穏やかな方の訓練は過ぎていった。

その一週間、セツヒトさんには営業開始までの間、小型の狩猟を見せてもらった。クエストの契約料は俺が払う形で。

教えてもらうのだから当たり前だと思うのだが、セツヒトさんは固辞しまくり。

お互いに「いやいや私が」「いやいや俺が」の繰り返し。何とか俺が払うことになった。

「私のほうが先生なのになー。むー。」

申し訳ないが、ここは譲らない。

元日本人で社会人、いやいや勝負は負けません。

ちなみにその間、シヨウコは別のクエストを受注することになった。

何でも、意気投合したオトモ付きのハンターの方と一時的にチームを組んで、クエストに行っているらしい。

シヨウコが非常に申し訳無さそうに俺に弁明していたのだが、そもそも俺が怪我の間

はクエストを受けようにも受けられない。

シヨウコも体がなまってしまう。

俺は二つ返事でオツケーした。

「あんまり変なハンターだったら、ちゃんと言うんだぞ?!ちゃんと言ったか? 昼飯は? トイレも済ませたか? ハンカチとティッシュはあるか?」

「ご主人さま、心配しすぎです……。」

そりゃ心配もする。

シヨウコは俺を守る。

仲の良いアイルーらしく、今度紹介してくれるとか。

ギルドにも顔をちよくちよく出し、今やシヨウコはギルドのアイドルさながららしい。

ヒナタさん情報である。

そしてドールはと言えば「いつもセツヒトさんと一緒だね。」と言われてしまった。

まさか怪我も治ってないのにクエストに行っているなどと言えなかったのだが、3日

でバレてしまった。

「小型の狩猟を見ているだけだから！他は何もしてないぞ！」

「ふーん。」

「危険なことは何もしていな……ドールさん？」

「ふーん………いいけどさ。別に。」

……それ以来、頭を撫でていない。

いや、撫でさせてもらってないみたいない方だと、俺がまるで望んでセクハラをしているように聞こえてしまうけど!!

ミヤコさんとホエールさんは「若いっていいねー（いいのー）」とか言っていた。

助けてくれ。

そしてハイビスさん。

ギルドを通してクエストを受ける傍ら、セツヒトさんに教えてもらっている旨を伝えておいた。

セツヒトさんはどうやら有名な人らしく、心底驚かれた。

「え!? 本当にセツヒトさんが!? ですか!？」

「は、はい。ついこの前から、ですけど。」

「はあああ……。」

まさかこんなに驚かれるとは思ってもよらなかったが。

「いえ、セツヒトさんはその、今までも何度となく、教官へのスカウトを試みてきたもの
ですから……。」

「おお、さすがセツヒトさん。」

「ええ……でも、全て断られてまして……私も諦めていたところに、ソウジさんにはOK
なんですわね……。」

「は、はあ。」

セツヒトさんがなぜ、簡単に引き受けてくれたのかは分からないが。

ありがたい機会なんだな。

これは気合を入れないとな!

「も、もし、ギルドの講習所に来られるようなことを仰ってましたら、私に教えていただけますか？」

「しよ、承知しました。」

ハイビスさん、目の色変わってますけど！

……やっぱりセツヒトさんってすごい人なんだなあと、改めて思わされた。

そんなこんなで。

訓練開始から無事一週間を迎え、お医者さんに完治だと言われた次の日から。俺の地獄が始まった……………。

* * * * *

「へー、じゃあもう大丈夫なのー？」

「はい！お医者さんからもオツケーが出ました！」

「よーしよし。じゃーあ、今日から一緒に訓練しよー。」

「はいー」

いつものようにやってきた、村にほど近い草原。

そこでセツヒトさんに、早い完治のご報告。

命の恩人にこの報告ができるのは、素直に嬉しい。

「じゃあ、今日はソウジの腕前をー！見せてもらおうかなー？」

ニヤニヤしながら俺に近づくセツヒトさん。

あ、これイジる顔だ。

「は、はい。でも具体的に何すればいいですか？」

「んーと。じゃあ今日の目標のファンゴ。ぎふとのまっぷきのう？を使っていいからー、あれを2体ほど仕留めてくれるー？」

「は、はいー」

ふいつと俺から離れるセツヒトさん。

その長い銀髪から、少しいい匂いがした。

……変態か！

自重自重。こんなだからからかわれるんだぞ、俺

今日のクエストは、ファンゴの狩猟である。

この時期、農村部の畑を荒らしに荒らすイノシシモンスター、ファンゴ。

土をほじくり返して根こそぎ食物を探すため、食害に悩まされる農家さんは多い。当然、その駆除のクエストはギルドにたくさんあった。

今日受注したのは、それである。

「じゃあ、やってきますー！」

「はい、無理しないでねー。」

早速俺は草原を見渡しながら、ポーチに触れる。

ギフトの起動。〈マップ〉を選択。

……あつちに2体ほどいるな……。

すぐさま駆け出し、ファンゴを発見。

「はあっ！」

シュザン！

出会い頭に一太刀。慌てだす2体には隙も与えず。

「よっ……とー！」

お得意の突進を難なく避け、再び追撃。

確実に仕留めていく。

3分ほどして、俺の足元にはファンゴの骸が2体横たわっていた。

「こんな感じですが……。」

「おー、やっぱりそのマップ機能？ 見つけるのが早いねー！」

「はい、めっちゃ便利ですよ、これ。」

と言つても見せられないのだが。

「んー……………」

「……………せつちゃんさん？」

セツヒトさんが、手を顎に当てて何やら思案している。
訓練方法でも考えてくれているのだろうか。

「ソウジー？」

「は、はい！何ですか!？」

お叱り？それとも褒め言葉?？」

「んーつとねー。ソウジのその、ギフト?装備もしまえるんだよねー。」

「は、はい。できます。」

セツヒトさんには、つい先日、俺の秘密……ギフトについて、大体を説明している。その、装備の着脱機能のことを言っているのだろうか。

「今、しまえるー?」

「は、はい。」

武器をしまう。

ちなみに双剣は、曲がった刀身を改めて直してもらったものである。

セツヒトさんにやってもらった。

「しまいましたけど……。」

言われたとおり、双剣をしまう。

「あー、ごめんごめん。装備もー、外してー?」

「え!?!は、はい!」

今度は全身の装備を外す。

裸になるわけではないが、草原のど真ん中でインナー一丁になるのは少し気が引ける。

だが、セツヒトさんの命令である。

全て外し終えて、もう一度セツヒトさんに向き直す。

「全部外しましたが……。」

「んー、よし。じゃあねー……。」

何だろう。

新たに装備をつけて特訓をするのだろうか。
めっちゃ重い装備でパワーをつけるとか？

某超有名な漫画の、亀的な仙人さんが実践していたが。

「それでー。もう一回、やってみてー？」

「……………へ？」

思わず変な返事をしてしまう。

「一体だけでいいからねー。」

「……………ちよ、ちよつとまってください、セツヒトさ——」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん！え!? もう一回つて……………つまりどういう事で？」

聞き間違いか？

「だからー、インナーで素手のままー。ファンゴ一体、仕留めてみよつかー。」

「……………本気ですか？」

「えー？本気も本気だよー。素手でー、モンスターを、倒してみよー。」

……………。

.....。

「えええええええ!!」

「よし、じゃあマップを——」

「せつちゃんさん!!? そんなこと不可能に決まってるじゃないですか!!」

「えー?」

何を言い出すんだこの人は。

頭ぶっ飛んでいるのか!?

装備とは、正しく体を守るもの。

武器とは、敵を倒すもの。

だが俺は現在、全くの無防備。

しかも素手で!?! ファンゴを仕留める!?!

「ソウジー。まっぶ? を見てー。」

「は、はい。」

情報画面から「マップ」を選択。

しばらく行つたところに、ファンゴの反応。

しかも数は一体。

「い、一体だけのやつ、いますけど……。」

「よしよし。じゃあ。れつつごー！」

ピューン

「は、はやっ!!!ま、待ってください!!せつちゃんさん!!!」

インナーで身軽とはいえ、とても追いつけない速さ。

しんどくはあるが、なんとか付いていく。

「はい。……おおホントだ。いるねー、ファンゴが一体。」

「はい……。」

「じゃー、やってみよー。」

「……………本気ですね？」

「うん。」

マジか…………。

こりや覚悟を決めるしかない…………。

「まーほんとに危ないときはさー、助けるし？」

「…………やってみます。」

「おー。ソウジ、覚悟決めたねー。じゃーこれー。」

「…………これは…………？」

セツヒトさんからわたされたのは、ぐるぐるキレイに巻かれた包帯？

「うん。流石に最初は、それ拳に巻いて使ってみてー？おいおい、素手に移行するけどー。」

「は、はい…………。」

本気だ……この人は本気で、ファンゴを仕留めろとおっしゃっている。いつもの呑気な口調が怖くなってきた。

素手にテーピングのように、キツめに包帯を巻く。

「じゃ、じゃあ行つてきます……！」

「はい、無理しないで。」

すでに無理がある、と心の中でツツコミつつ、ファンゴの近くまで移動してみた。

ち、違うぞ！いつもと全然違う！

ファンゴはたしかに厄介な敵だが、そういう意味ではなく！

単に恐ろしい！

インナー一本で的に立ち向かうなど、当たり前だが初体験。

恐ろしいという感情しか沸かない。

「ブルツ！ブフォ！」

「うわっ……。」

鼻を鳴らすファンゴ。

思わず後ずさる俺。ちびりそう。

「……ブモオオオ！」

「うわっ！つと!!」

突進を噛ましてきたファンゴを避ける。
か、体が硬い！思うように動かない！

「ソウジー！リラックスリラックスー！」

「は、はい！」

できるか！というツツコミもできない。
だが反撃をしなければ……ジリ貧だ。
覚悟を決める。

次に近づいたときに、拳を入れてやる……！

「ブフォツ……ブフォツ!!」

来た!

構える。

すぐ避けられるように、重心は低く。

攻撃を避けた後に、拳を入れるんだ!

近づいてくるファンゴ。

あと10m……5m……2m!

「よつと!!」

まるで気分は闘牛士だ。

だが、我ながら上手く避けられた!

ギリギリい!こええ!!

間髪入れず、右手に力を入れる!!

「オラあ!!!」

ぼふっ。

「……。」

「……ブフー……。」

「え？何かしたの？」と言う顔をしながら、こちらを見つめるファンゴさん。

……あれだな。

ファンゴって、毛が固いんだな。昔触ったカピバラみたい。

「……ブフオオ!!」

「のわああ!!!」

ファンゴさんが牙を向けてきたので、思わず避ける。

……え？俺の拳、全く効いてないんですけど!!!

避けるのも、恐怖にも、少しは慣れてきた。

だが、こちらがダメージを与えられないのである。
どうにもこうにもいかない。

こうして、俺とファンゴさんの戯れは20分以上続いた。

……………。

……………。

「ソウジー。時間切れー。」

「はあっ……………は、はいい……………。」

間延びしたセツヒトさんからかかる声。

俺の返事を聞いたのかは分からないが、セツヒトさんが双剣を一閃。

俺と決死の戦いを繰り広げていたファンゴさんは、あつという間に死んでしまった。

「せ、……………セツヒト……………さん……………。」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん！」

「はいよー。なにー？」

俺の域は絶え絶え。だが、聞かねばなるまい。

この訓練の意図を……！

「せつちゃんさん。……この、訓練の、意図は……な、なんででしょうか？」

「意図ー？うーん……。」

考え込むセツヒトさん。

訓練中は、よくこの姿を見せてくれる。

「んー……いじわるでも何でもなくてねー……意味を考えることに、意味があるからー

……何も言わないー。」

「……え!？」

「だからー、ソウジには、考えてほしいのさー。私の教えようとしていることをー。」

「は、はあ……。」

「マシヨルクはどうだったかはわかんないけどさ。これは、ソウジが意味を見つけないとに意味があるんだねー。」

「俺が……意味を……。」

「そう。だから、何も言わないー。」

……訓練の意図を、俺自ら考える、か。

なるほど、自分から学ぶ気でいなければ、意味がない。

考えることから意味を持たせ成長につなげる。

アクティブラーニングってやつか。

……この1週間は、セツヒトさんがセツヒトさんらしくないことが多かった。

いつもは余裕綽々で俺のことをからかい、世俗とはどこか一線を画したような雰囲気
を纏っているのに。

俺の訓練を引き受けてくれてからは、カリキュラムを考え、カンペを見ながら、一生
懸命頑張つて俺に教えようとしてくれてる。

だから、若干テンパる姿とかも少し見られて……何というか……いつものギャップ
が少し可愛いのである。

……勿論、殺気を放って剣を振るう姿は怖いんだけど！身震いするんだけど！！
そんなに懸命なセツヒトさんが、「意味を見つけてみて」と俺に課題を出したのだ。
教えを請う者として、その課題を解くのが生徒の努め。

……考えてみようじゃないか。ファンゴを素手で倒そうとさせるその意図を。
きつと、何か俺に習得させたいことがあるのだ。

そしてそれは、今の俺に足りない部分なんだろう。

……やってやる……！！

「せつちゃんさん。」

「んー？」

「……俺、考えてみますよ。この訓練、モノにして見せます。」

「お、おおー。」

感心したような顔を見せつセツヒトさん。

「素手でモンスター、仕留めてやりますよ！」

「んー。その意気だねー！ソウジーかっこいいじゃーん。」

「は、はい、ありがとうございます。」

照れてしまう。

「よし、んじやー次行ってみよつかー。」

「……え!? つぎい!?!」

「そー。次は、ジャギイでー。ソウジー、まつぶまつぶ」

「ま、まじかよ……。」

それから俺は、決着のつかない小型モンスターとの狩猟を続けた。

倒すに倒せず、体力をとにかく消費する。

相手の攻撃が当たれば、絶対に痛い。

そして避けることに集中するあまり、肝心の拳は全く効いていない。

そのまま、訓練時間は終わりを迎える。

そして話は冒頭に戻る。

* * * * *

「がんばったねー、ソウジー。今日はここまで！」

「は、はいい……お疲れさまでしたあ……。」

「んー、キツかったよねー。でもねー、こればかりはねー……。ヒントもあげられないよー。」

「そ、そうですか……。」

村に着くと、ちょうど市中が本格的に動き出す時間。

セツヒトさんはこれから店を開くのだろう。

貴重な朝の時間を割いてもらっている。

無駄にしないようにしたい。

「じゃあセツ……せつちゃんさん。」

「んー。」

「今日はありがとうございました。また明日、お願いします。」

「うむうむー。任されよー。」

ニコニコ笑顔のセツヒトさん。

……えらく機嫌がいいような……。

とにかくセツヒトさんに礼を述べて、宿に帰った。

部屋に入ると、グロッキー状態のまま、ベットにぶつ倒れる。

「も、もう限界……!」

そしてそのまま、泥のように眠ってしまう俺であった。

70 訓練の意図について、考察しましょう。

キツかった。

かなりキツい訓練だった。

双剣があれば、バツタバツタと小型モンスターたちを屠れるのに。

装備が全く無いというだけで、こんなにも違うものか……。

「……もう夕方か……。」

体を起こす。

幸い怪我はない。あるのは少しばかり残る疲労のみ。

相変わらず丈夫なこの体に感謝しつつ、ベッドに座り込んでまどろんでいた。

トントントントント……。

誰かが階段を昇る音がする。

コンコン。

「ご主人さまー？帰ってますー？」

「おお、シヨウコか。ああ、いるぞ？」

「よかった、入りますよー？」

「ああ。」

ガチャツ。

シヨウコが帰ってきた。

例のクエストの帰りなのだろう、オトモ装備を身に着けたまま部屋に入ってくる。

「ただいま帰りました、ご主人さま……だ、大丈夫ですか？」

「ああ、すまん。今起きたところだな。ブーツとしてた。おかえり、シヨウコ。」

「は、はい。ただいまです……。なんかこういうの、初めてですね。」

「確かに……。シヨウコ、今日はどうだったんだ？」

シヨウコのクエストが気になる。

件の、意気投合したというハンターとオトモ。

初めての共同狩猟だ、大丈夫だったんだろうか。

「はい！何とかアオアシラ、倒すことができました！」

「お！大型をやったのか！」

「はい、何でも森を荒らしていたらしくてですね。ウチらが力を合わせて、退治できました。」

「そうか、よかった。……実はちよつと心配してた。」

「え？」

シヨウコがまた、トラウマを引っ張ってくるんじゃないかと、俺としては少し心配してたのだ。

「いや、昔色々あったら？そのところを……ちよつとな。」

「ご主人さま……。」

「い、いやいや！何もなさそうではよかった！安心したよ。」

「……ふふつ。ご主人さま、ウチの装備、外してくれます？」

「へ？あ、ああ。」

情報画面から〈オトモ装備〉を選択。

シヨウコの装備を外して、すぐさま普段着を着せる。

気分は何だか着せ替え人形である。

ちなみに着せ替えの時は、俺は後ろを向く。

マナーマナー。

「どうだ？」

「ありがとうございます、ご主人さま。」

そう言うと、シヨウコは俺の横に座った。

アイルー特有の耳が、ぴくぴくと動き、金色の髪が揺れる。

俺に頭を預けてくると、ニコニコ笑いながら、シヨウコが口を開いた。

「もう、ご主人さまは心配し過ぎです……ちよつと嬉しいですけど。」
「そ、そうか？」

妙に距離が近くてなぜかドキドキしてしまう。

いやいや、相手はシヨウウコだぞ！

……俺は過保護なのか？

「……ご主人様、ウチは幸せもんです。こんなに心配してもらえて。」

「そりゃ、心配もするさ。」

「ふふっ……今日のクエストは、大丈夫でしたよ？ハンターさんも、オトモのトツバも……ま、まあ若干癖のある人らやったけど。なんか、楽しかったです。」

「……ああ。よかった。」

……少し寂しいような……何だこの気持ち。

いやいや、喜ばしいことなんだ。歓迎しなければ。

「……ご主人さま、もしかして……妬いてますか？」

「い、いやいや……なんつーかなあ……うん。」

「ふ、ふふふ。ふーん。ご主人さまー。」

俺の左腕に耳をこすりつけてくるシヨウコ。

……ち、ちくしょう。隙を見せてしまったような……恥ずかしいぞ!!

「と、とにかくだ。シヨウコ。」

少し真面目な顔をして、シヨウコに向き直る。

顔が少し赤いかもしれないが、そんなん知らん!!

「俺も、頑張つて強くなる。シヨウコも、クエストを頑張つてくれ。……いつしよに、ア

イツにリベンジするぞ!」

「……ふふ。はい!ウチも、がんばります!」

多少……いやかなり強引なやり方だが、ごまかした。

だが、言ったことは本音だ。

アイツ、ディノバルドにリベンジするんだ。
シヨウコと一緒に。

「あ。」

唐突にシヨウコが声を上げる。

「そういえば、セツヒトさんとの特訓はどうやったんですか？」

「あー……うん。絶賛悩み中……。」

「え？」

俺はシヨウコに、今日の特訓の話をした。

素手で小型を屠る。

字面にすれば簡単なこの行為を、いったいどうやって達成すればいいのか。

「うわあ……それはキツイですねえ……。」

「ああ。控えめに言っつて、死ぬかと思った。」

「うーん、流石に人間さんにはそれはキツイんちやうかなあ……。」

「そうなんだよ……あれだけ余裕だった小型のファンゴだが、素手となると攻撃が全く効か……。」

ん？

何か引つかる。

「シヨウコ、人間さんにはって……どういう事？」

「へ？」

「いやだから、人間さんにはキツイんちやうかって、今。」

「あー。そらアレです。うちらアイルーはまず、素手で訓練しますからね。でも人間さんは、うちらみたいな爪無いから、大変ちやうかなって……。」

「……そうか。シヨウコはいつも爪のグローブみたいな武器だよな……。」

「ぐるーぶ？つてのはよく分かりませんが……ウチのは手に付けるタイプの武器ですね。やつぱり、これが一番しつくりきます。まあトツバみたいに武器を持つ奴も結構いますけど。」

素手で戦う……まではいなくても、シヨウコはかなり素手に近い戦い方だ。
……これは、チャンスかもしれない。

「シヨウコ。」

「はい？ どうしました？」

俺は思いついたことを口にする。

「俺に、シヨウコの戦い方を、レクチャーしてくれないか？」

「……ええ!？」

* * * * *

宿の庭へ移動。

軽く準備運動をする。

「ご主人さま……本気ですか？」

「ああ、本気も本気だ。さつきも言ったろ？この戦い方を身に付けることが大切なんだって。」

「は、はい。」

なぜセツヒトさんが、俺に武器無しでモンスターに挑ませるのか。

考えてみた。

そして、辿り着いた一つの結論。

俺は武器での戦いに、慣れ過ぎてしまったのではないか、と言うことだ。

俺は、憑依状態になれば、一瞬だけG級並みの剣の使い手になれる。らしい。

もちろん様々な制約は付きまとうが。

だから、その剣の動きを真似して、模倣して、自分自身をある意味での師として、自主訓練に明け暮れていた。

この体はとて優秀だ。体に動きを覚えこませていけば、少しずつモノにできていった。

……それでも、デインバルドには、敵わなかった。

単純に訓練不足、力不足だと言われればそれまでなんだけど。

憑依状態の俺なら、何とかダメージを与えられていたが……ギフトをフル活用して罨

にハメまくって、それでようやく感じて。

……セツヒトさんは、俺に素手での戦い方を会得させることで、最も基本的な戦い方を仕込もうとしているのではないだろうか。

凝り固まった俺の剣の型を、一度ぶち壊そうとしているのではないだろうか。

俺が今までやってきた訓練は、素人が超級のプロの真似をするようなものだったのかもしれない。

まるで、料理もしたことのないような子どもが、一流シェフの調理を真似するような。バスケットをしたこともない人間が、とりあえずNBAの選手のフォームを真似してシュートをするような。

模倣が無駄だとは思わない。

だが基礎の基礎から鍛えていくことしか、得られないモノは必ずある……と思う。

以上が、俺が考え出した結論である。

「一朝一夕で身につくようなものじゃないよな……。だから、ショウゴ。頼む。」
「わ、分かりました。」

シヨウコと向き合う。

これから行うのは、いわゆるステゴロである。

ただ怪我防止の為、ヘッドギア代わりのヘルムをお互いに装着。

拳にも、グローブ代わりの海綿素材を巻き付けた包帯を装着。

故ロアルドロスさんの鬘である。

ザ・有効活用。

急所や弱点の攻撃は寸止めで。

怪我したら元も子もないしな。

……やろうとしていることはかなり野蠻ではあるが……。

実践訓練が一番、効率が良い気がする。

この体は、覚えが早い。丈夫だし、正に実戦向きだろう。

「じゃあ、いきますよー！」

「よし、はい！」

構える。

構え方からしてわからん。

「ご主人さま、利き手で顎、守ったほうがええです。」

「え？こ、こうか？」

「そうです。あと、体は正面ではなく、肩を前に出す感じで……そうです。」
「なるほど。」

人体の弱点である正中線を、なるべく見せないようにするのか。
……まんまボクシングだな。

「ウチも、素手は久しぶりなんで……痛かったらごめんなさい！」

「気にするな！思いつきり来い！」

「では……。」

スウツ。

シヨウコが浅く息を吸う。

「シッ！」

「!!」

物凄い速さで俺の間合いに入ったシヨウコは、ワンツートのリズムでいきなり顔を狙ってきた。

俺の顎を守る右手を弾くと、2発目の拳が同じ箇所をやってくる。

パァン！

「ぐあー！」

きれいに顎にパンチをもらってしまった。

俺の体が開く。

「すみません！」

口では謝りながらも、懐に入ったシヨウコは、俺のボディーにもう一発拳を入れる。

完全に体が開いていた俺は、それをもろに食らってしまった。

「げふー！」

「ご、ご主人さま!!」

orzのポーズでうずくまる俺。カツコ悪い……。

「す、すみません！寸止めがうまくできひんと……。」

「い、いや、いい。気にするな。ゴホッ！ゴホッ！」

痛くなければ、覚えない。

よく言うものだ、二度とこんなのを貰いたくない。

「……ご主人さま、足、止まっています。」

「足？」

「はい、単純ですけど、動いていたら攻撃は中々当たりません。」

「なるほど。……もし避けた先に攻撃が来たら？」

「……そんな時は。」

「……時は？」

「覚悟してください。」

「……がんばります。」

こうしてシヨウコとステゴロの特訓を続けた。

シヨウコがくれるアドバイスは、実に分かりやすい。

言いにくいようなこともズバズバ言ってくれるので、こつちも助かる。
飯も食わずに正直フラフラだが、頑張った。

「ここらで終わりましたようか……ご主人さま、フラフラです……。」

「す、すまん。流石に腹減って腹減って……。」

「とりあえず、銭湯行きましょうか。ウチ、体ベタベタや。」

「俺も。ドロだらけ。」

二人して銭湯に向かうことに。

「ありがとな、シヨウコ。明日も、頼んでいいか？」

「エエですけど、無理はせんでくださいね。怪我、治ったばかりなんですから。」

「ああ、ありがとう。」

大通りを歩きながら、俺は先程までの特訓を振り返っていた。

ちなみに銭湯では完全に別行動。

ヒナタさんと色々あったので、銭湯では自重することにしたのだ。

「ウチは主人さまの体を流すんです！」とシヨウコは不満げだったが、納得してもらえない。

ドールには言っていないが……まあ空気を読んでくれるだろう。

……そもそもドールぐらいの年齢の子が俺の背中を流すのは、結構……危険なのでは無いだろうか……？

ま、まあ、この辺は追々考えよう！

うん！

今はとにかく風呂と飯。

今日も一日頑張りました。

* * * * *

夕飯は宿で食べた。

疲れていたのもあるが、ドールがなんだか最近不機嫌続きなので気になってしまっ
た。

「はい、どうぞ。」

「はい、いただきます。」

「召し上がれ。」

「……………」

……セツヒトさんと訓練を始めてから、ドールはこんな感じ。

つ、冷たくないですか？

いや、ご飯はいつもどおり美味しいんですが。

「ご主人さま……訓練もええですけど、ちよつとそつち方面も鍛えた方がええですよ？」

「そっち方面もって……。」

「ズバリ、女心です。ドールちゃん、むくれてますねえ……。あれ、そのままであええんですか？」

「いや、良くない。何とかしたい。」

「じゃ、ご主人さまができることは何ですか？」

「……謝る？」

「……多分それ、逆効果です……。」

だめなようだ。

シヨウコに教わることは、まだまだたくさんありそうだった。

* * * * *

ベッドに入る。

頭を切り替えていく。セツヒトさんとシヨウコとの訓練を今一度振り返ろう。

まず今の課題は、素手でモンスターを倒すこと。

その為に必要そうなのは、力のある一撃。

シヨウコとやってみて感じたのは、意外と双剣と体の動かし方が似ていることだ。

常に動く。手数でダメージを稼ぐ。体力とスタミナの管理に気をつける。

うん、似ている。

セツヒトさんが意図を持ってこの課題を出したのがわかってきた。

しかし、逆に全く違う問題点も見つかった。

間合いである。

俺の拳が、相手に全く届かないのだ。

届いても、力の乗らない一撃。

単純に近づけばいいのだが、それはこちらが攻撃を食らうリスクもつきまとう。

モンスターは、シヨウコのように手心を加えることはない。

そんなこと構ってくれるわけもない。

「相手の動きを読んで……足を運ぶ必要があるな。」

しかも、とんでもない精度で、だ。

ミスが、一大事を招く。そんな間合いで。

できるなら、装備で体を守りたい……でもインナー一本で勝負をしなければなら
ない。

……そういつたりリスクも込みで、考えろつてことか。
セツヒトさん……ドSだなあ……。

何にせよ、小さな目標ができた。

まずは相手を観察。

次に動きを読んで、間合いをはかる。

できるなら、攻撃に移る。

これだな。

よし、そうと決まれば、イメトレである。

あの憎きイノシシを、猪肉にしてやる。

俺は決意を固め、目を閉じた。

シヨウコにブツブツと独り言を聞かれ、次の朝心配されたのは言うまでもない。

* * * * *

「おはよー、ソウジー。疲れは取れたー?」

「はい! おはようございます! 大丈夫です!」

「んー。よろしー。んじゃー早速、クエスト探そっかー。」

翌朝、ランニングも早々に終えた俺は、朝飯を食ってギルドでセツヒトさんと合流。適当なクエストを選んで、いつもの草原に向かう。

クエストを選ぶときは、ギルドのスタッフが物凄い目をしてこちらを見てくる。

……俺を見ているわけではないよなあ……セツヒトさん、何者なの……?

まあいつか本人が教えてくれるらしいし、気長に待つか。

そんなこんなで草原に到着。

「ソウジー、今日はいきなりやつてもらおうけど、大丈夫ー?」

「はい! 平気です!」

「おお、元気だねー。……きついときは、言うんだよー?」

「はい! 無理はしません!」

マップを起動。

ファンゴを一匹、発見する。

「西に少し行くと、いますね。ファンゴが。」

「おー。じゃーいくよー?」

ヒュンツ。

風のように走り出すセツヒトさん。

速いよ!

* * * * *

ファンゴと対峙。

俺の格好は、もちろんインナーのみ。武器も無い。

やはり恐怖が勝るが……とにかくやってみよう。

「ブルツブフォー！」

こちらに気づいたフアングが起き上がる。

前足を動かし、「今から走ります！」って姿勢でこちらを向く。

そんな感じだから、避けるのは正直簡単である。

回避はいつもの感じで大丈夫だな。余裕をもって避けていこう。

ん……？

余裕を持って避けていくのは……正しいのか？

間合いを詰める必要がある以上、いつものように安全に避けていては……。

「ブモオ!!」

「うわあ!!」

「ソウジ!?!」

しまった!

意識を思考にもって行き過ぎた!!

眼前にファンゴ!!!! やべえ!

「シツ!!」

ドオン!!

発砲音!?

激しい銃声が耳を劈く。

聞こえた瞬間、俺の目の前にいたファンゴが消えた。

いや、消えたのではない。

横を見ると、頭を爆散させて横たわるファンゴの体。

ピクピク動いているが……完全に死んだな、これ。

「ソウジー!!」

「せ、セツヒトさん!?!」

セツヒトさんが、いきなり俺に飛びついてきた。

「今のは……。」

「今のは、私のヘビイボウガンだよー。ソウジー?……駄目だよー?ボーつとしちゃ。」
「す、すいません。」

「ケガはないー?大丈夫ー?」

やたらと心配してくれるセツヒトさん。

ペタペタと俺をさわってくる。

何か子供みたくないな扱いで、はずい……。

「ぶ、無事ですー!そ、それより、ヘビイボウガンって……。」

「あー、ごめんごめん。説明してなかったねー。」

軽々とボウガンを肩に担ぐセツヒトさん。

「私ねー。これでも結構すごいハンターだったのさー。ボウガン弓、チャアクにスラアク、双剣大剣片手剣……大体は、できるよー?」

「もしかして、『百手』……?」

「うわー、それ知ってたのー?……むー、ちよつと驚かせようと思ってたのになー。」

そう言うとき少しむくれ顔を見せながら。

セツヒトさんは、糸目を余計に細めて笑った。

71 コミュニケーションの大切さを学びましょう。

武器を極めるといふのは、伊達ではない。

当たり前だ、一つの武器でさえ四苦八苦するのだ。

誰も好き好んで多くの武器を極めようとは思わない。

それでも、近距離武器と遠距離武器。もしくは扱いが似通った武器種などを選択して。

そうして複数の武器を扱うハンターが居ないわけではない。

パーティーの中でマルチに役割を担えるハンターは、とても重宝されると聞く。

実際、教官は双剣が使えた。ヘビィボウガン使いなのに。

では、今日の前にいるこの人、セツヒトさんはどうか。

何と、全武器種を扱えるのだという。

……少しばかりはセツヒトさんの二つ名を聞いており、何となくの想像はついていたが。

まさか大体の武器OKとは……!!

しかも先ほどのヘビイボウガンの腕前、ハンパなかった。

偶然ではないと思う。スピードに乗って突進するファンゴの、その頭を正確に射抜いていた。

不測の事態にもかかわらず。

「でもさー、この虫みたいなの二つ名は無いよねー。もうちよつと可愛いのもよかったよねー。」

そして本人は、この呑気さ。

滅茶苦茶な実力を持っているのに。

「二つ名って、自分で決められないんですか?」

「んー、なんか勝手に呼ばれたしたらー、もうそれがひとり歩きしちゃうんだよねー。不名誉なあだ名ですなー全く。」

「なるほど……。」

確かに。

シヨウコの場合も、そんな感じだったらしいし。

「それはそうと、ソウジ―？」

「は、はい！」

「油断禁物―。怪我しないで―。これ、命令―。」

「はい……すみませんでした。」

俺は学習しない生き物なのか。

二度と油断はしないって決めてたのに。

……よし、切り替えていく。

先程はなぜ油断したか。

答えは簡単。考え事をしていた。

「よしつ。行きます。」

「はーい、また危なくなったら助けるよ―。」

「はい、よろしくおねがいします。」

へマップ〉を開いて、小型ファンゴを探す。

……いた……北北西の方角。

そこに向かう。

ファンゴは寝ていた。

横たわって鼻提灯を出している。

「うーん、野生とは……。」

「寝ていても訓練にならないし……待つてねー。」

セツヒトさんが、ボウガンを構える。

あまりに軽々と持ち上げるが、確かへビイボウガンって結構な重量があつたはず。
すごい。

「やつ、と。」

ビシイ！

セツヒトさんが撃った弾が、ファンゴの鼻提灯を射抜いた。
直後、怒ったように起き出すファンゴ。
俺を見つけ、足を鳴らしだした。

「よし。じゃあソウジ。ふあいとー。」

「はいー！」

セツヒトさんが離れると同時に、ファンゴが俺めがけて突っ込んできた。

狙いは弱点。

ファンゴの弱点と言えば、その鼻。

しかし突っ込んでくるファンゴのそこを狙うのは、正直難しい。
なので、ギリギリを狙う。

先程少し考えた、余裕を持って避ける方法ではなく、本当にギリギリを見極める。
重心を低く。力を抜いて……………。

倒れるように避けるっ！

「ファゴツ！」

「……………」

間一髪！

真横に避けるのではなく、少し斜め前に倒れ込むイメージ。

そのまま避けた方向に、足を踏ん張る。

拳を鼻に！

「らあっ!!」

バゴツ！

「ブヒイイイ!!」

突っ込んだ勢いそのままに。

俺は拳を振り抜いた。

「……いってえええ!!」

「ブルウツ………ブフウ………!」

拳めつちや痛い。

でもファンゴは……ようし!効いている!

頑張つて立っているように見えるが、フラフラしているのは目に見えて明らか。
チャンスだ!

「おらあ!」

「ブフオ!」

腹部に蹴りをかます。

「そこお!」

「ブヒイ!」

目に拳。

うわあ、痛そう。

でも悪いな。ここでやらなきや、多分先程のような一撃は出ない。
俺がやられる。

数分かけて、タコ殴りにした。

「ブフウ……。」

ズン……。

「倒した……か？」

横たわって動かないファンゴ。

絶命したのか……。

気をつけながら近づいて、脈を測る。
動いてない。

「……………よ……………よしっ。」

手を合わせる。

すまん、ファンゴ。

……………ファンゴに直接攻撃したからか、罪悪感が半端ない。
素手で殺したという生の感覚が、頭にこびりついている。

「おつかれー、ソウジー。」

「は、はは……………何とかできました……………」

「……………うん、辛そうだよねー。苦しかったろうねー。……………ソレは、ソウジが殺したんだ
よー。」

「……………」

セツヒトさんが、俺を見てくる。

まるで心を読もうとしているかのよう。

「ソウジ。忘れちゃダメ。私達は、命の上に立ってる。それを、忘れないでねー。」

「はい……。」

俺は、倒す方法のことばかり頭にあつた。

最初の一撃は、してやったり、という気持ちが強かった。
でも、そこからはただのリンチ。

しかも、素手。

……罪悪感が、拭えない。

「……心の整理、するー?」

「……すみません、少しだけ。」

異世界だから、弱肉強食のこの世界だから。

なんとなくの感覚で、今まで戦えてきた。
自分に納得させてきた。

でも、今俺が抱くこの感情は、少し違う。

確実に命を奪った。

明確にそんな思いが湧く。

湧いてしまう。

しばらくの間、俺はその場に佇んでしまった。

* * * * *

「ソウジ？大丈夫？」

「はい、何とか。」

セツヒトさんは、そのまま待ってくれた。

うろたえて落ち込む俺を、ひたすらに。

ありがたかった。

「……ここまでできたからようやく伝えるけど……。ソウジの始めの狩りを見て、わたしは、どこか遠慮みたいなものを感じたんだよね。」

「遠慮？」

「うん。躊躇、つて言えばいいのかな。明確な意図もない、ただの剣の振り。」

「……………」

「その感情は、ソウジ。……君を、殺すよ？」

「……………」

「私達は、モンスターの命の上に立っている。その覚悟をもって、改めてモンスターに對峙する。……生半可な気持ちじゃー、上級にはなれないかなー。」

「……………」

……俺は、甘かったのか。

モンスターを殺す。生命を奪う。

初めてのその時に、この気持ちに気づくべきだったんだ。

ゲームみたいなこの世界だからこそ、リアルな感覚が失せていた。

だから、セツヒトさんは俺に——。

「……………」
「だから、素手で殺して欲しかったんだー。ソウジ、君は甘いよー。」

「……………」

「……………」
「心構え、できそう？」

「……………」
「わかりません。でも、やってみます。」

「……うんうん。そうだよねー。その返事で良かったよー。悩んで、当たり前。……そこら辺の認識が甘いやつには、ハンターになって欲しくないかなー。」

「……………」

「……………迷っていい、今はいい。そこを乗り越えて尚、残酷に。それがハンターだから。」

セツヒトさんの口調が、いつもと変わる。

寒気がした。

「……………なんてねー、私もその辺甘かったからねー。」

「……………セツヒトさん、俺は——。」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん。……俺は、俺は甘かった。敵をどうやって倒せばいいのか、ただそれだけに考えを集中させていた。」

「うんうん。」

「……………違っただんですね。俺に素手でやれといった意図は。」

「……………うん。ようやくスタートラインに立てたね。ソウジ。」

「……ありがとうございます。」

心持ちを変えよう。

どこか、甘い。指摘されてハツとした。

ハンターとして生きる。この世界で。

リアルなこの世界で、生きていく。

異世界ではないのだ。

ここは、俺が生きる、俺の世界なのだから。

「……よしーじゃー、さっきの振り返り、しよつかー。」

「……はい。」

「すぐには切り替えなくていいんだよー？ ソウジー。少しずつ、分かってくるから
ヤー。」

「……はいー！」

気持ち切り替える。

覚悟とやらはまだ半人前。

でも、やるべきことはやろう。

凹んだときも、違う仕事をこなしていくのだ。

そのへんのマルチなやり方は、前世で随分仕込まれたし。

……社会人って、色々鍛えられていたんだなあ。

「じゃーソウジ。最初の一撃なんだけどー。」

「はいー！」

頭を別の思考に切り替える。

それはそれ、これはこれ、だ。

「よかったよー？ここう、シユンってくるファンゴを、ズビイツと一撃？うんうん。いいカ
ウンターでした。」

「……………はい！」

相変わらず感覚で伝えてくるセツヒトさん。

汲み取るんだ。

何となく、言わんとすることはわかる。ほめてくれているようだ。嬉しかった。

「……………うん、よかったー。」

「はい……………」

「……………」

「……………終わりに!?!」

「え?うーん。……………うん。」

……………そうか。

……………いや。ちよつとまって。

「セツヒトさんはその、今回の素手の戦いで、俺にまず心構えを伝えたかったんですね?」

「そーそー。」

「そして、素手で戦うことによって、俺に足りない戦い方の基本を身に付けさせたかったんですね?」

「……………うん？」

え!? 違うの!?

「その、俺ほら、特殊な訓練方法ばかりしてましたし……武器とは違う間合いとか、避け方とか、そういうのを実践で仕込みたかつたんでは……………」

「……………」

「……………」

「……………そそ、そー、その通りー。さすがソウジだねー。」

「……………今の間は何!?!」

ちよつと待ってほしい。

俺はシヨウコにお願いしてまで、色々と考えてやってみたのに。

せ、セツヒトさん？

「い、いやー。ねー……。ほら、ソウジ鍛えてるしー、ファンゴぐらいなら素手でいけるかなーって。」

「素手の狩猟とか結構決死の覚悟だったんですけど!？」

「えー? うーん。……どんまい?」

「その程度!？」

「あ、ソウジ、さっきの狩猟、最後はお粗末だったよー? だめだめ。」

「そして急なダメ出し!？」

その後も少し話して分かったこと。

セツヒトさんは、どうやら俺に素手で戦わせることで、命を奪うことの残酷さ、ハンターという仕事の覚悟を認識させることが目的だった模様。

つまり、素手で戦う方法を身に付けるとか、あんまり考えてなかったようだった。

……まあでも、間合いとか体の動かし方とか、その辺は無駄にならないだろ……。

「じゃーソウジ? そつち方面も鍛えてみるー?」

「……え?」

意外な言葉を聞いて、セツヒトさんを見る。

「これからー、素手でやってみるよー。ちよつち、モンスター、探してくれるー?」
「わ、分かりました。」

「お手本ー、やってみよーかねー。」

ボキボキと拳を鳴らす姿は、正直少し怖い。

首を回しながら準備運動っぽいことをしている。

えーつと……へマップ内にいる小型モンスターは……。

「あつ、いました。」

「お、どこどこー?」

屈伸をしながら尋ねてくるセツヒトさん。

「ここから南に少し、あの木の向こう側ですね。……2体、ファンゴがいますけど。」

「おつけー……じゃー、よーい……ドン!」

「へ!?!ちよつと待つて……」

ヒュンツ。

速い！

掛け声も早々に南方へと走るセツヒトさん。

追いつけ！

……………。

「はあっ……………はあっ……………」

「おっ。いたいたー、あれかなー？」

遠くを見つめるアクションに、余裕を感じる。

いつか追いつける日が来るのだろうか……………。

この人、2年ブランクがあるって話してたけど……………。

「じゃー、ちよつくらやってくるねー。」

「は、はいー！」

そう言うと、まるで町中を歩くようにファンゴに近づいていくセツヒトさん。
格好は、武器なし。

装備こそつけてはいるが、むしろ重くて、徒手空拳には辛いのではないかと思う。

「……ブルウツ！」

「ブフォ！」

あ、ファンゴが気づいた。

「……………シツ！」

……えっ？

「フゴオ……」

「フゴ……」

ズズン……。

ファンゴが力なくその場に倒れる。
2体とも。

息はしているようだが……動かない。

「……はい、このとーりー。」

フウつと息を吐くセツヒトさん。

……今起こったことを頭の中で整理する。

ファンゴに気づかれたと思った刹那、セツヒトさんがゆらつと動いて。

凄く速くてよく見えなかったけど、おそらく近づいて「シツ」て言って拳を当てて。

その後力なくファンゴ二体が地に伏せて。

……。

……。

「……さー、ソウジもやってみよー。」

「できるかあー！」

無茶振りにも程がありますセツヒトさん。

どこ!?!どこをどうやってどんな強さで叩いたの!?

「えー、ソウジならできるとよー。」

「意味のわからない信頼!!」

「だからー、ファンゴのこの辺りを、こう、シュツと。」

「顎の当たりを的確に一瞬で振り抜く……?」

「そー、それー。」

「できません!」

天才とは、得てして良き師になれるわけではない。

セツヒト語をなんとか汲み取りながら、俺は素手での仕留め方を教えてもらうのだ
た。

言葉つて、難しいんだなあ……。

72あるオトモアイルーの話①

一番幼い頃の記憶は、集落に來たでつかいハンターさんに肩車された時。

高いところから見えた集落はとても小さくて。

こんな狭いところやなくて、もつと広い所で遊びたいと思ったのを、今でも覚えてます。

きっかけはそこやったと思います。

ここを出て、ハンターさんと一緒に、自由に世界を駆け巡りたい。

オトモアイルーの特訓に明け暮れて、気づけばそれなり力を身に付けていました。

自分で言うのも何ですけど、運動能力とか動体視力とか、他のアイルーには負けたことありませんでした。

まあ……なので、調子こいてました。

ウチにふさわしいハンターさんを見つかるんや！と躍起になったのも、その辺からかなあ……。

思い出すだけで恥ずかしいです。

初めてのオトモは、小型の狩猟。

そのクエストの後は、採取、運搬、そして大型……色んなハンターさんを転々として、確実に経験を積み重ねてきました。

時には、親友のトツバと一緒にクエストに出かけて。

……死にかけたこともまあありましたが、素早いことには自信があつたので……。
何とかなりました。

「ねえ、シヨウゴ?」

「んー、なにー?」

その日は二人とも、いつもの様にクエストから帰った後、集落でゴロゴロしてました。月が綺麗な夜だったのを、今でも覚えています。

「……一生着いていくハンターさん、いそう?」

「んー……わからんなあ。トツバは?」

「……私はまだ。ハンマーに振り回されてる内は、見つからない……。」

トツバは、集落でも力がダントツで強いアイルーでした。

黒いショートヘアに眠そうな目。

基本口数が少なくて、ウチより小さい見た目。

とても怪力には見えんですけど……組手の特訓はともかく、腕相撲では敵う気がしません……。

早々にハンマーを武器に携えたトツバは、ハンターさんと共に狩猟をするスタイルを確立してました。

「トツバはええやん、ウチ、速いだけで何にもできひん。」

「シヨウコは……いろいろすごい。」

「いろいろって、何やねん。」

「……早いし、速い。」

「……言葉って難しいわあ……。」

この頃からウチは、その調子乗りの性格がかなり矯正されました。

集落一番や、と自負してた格闘も、ハンターさん達の前では雀の涙ほどの助力しかで

きないんです。

程なくして、アイテムの援護とか、罨とか、索敵とか、そう言うバックアップを主体としたスタイルに切り替えてました。

「トツバが羨ましいわ……ウチにもそのパワーがあればええんやけどなあ。」

「私はシヨウコが羨ましい。私、素早くないし器用でもない。」

二人で、まるで慰め合うように駄弁り合う。

そんな夜が当たり前のようになってました。

* * * * *

ある日。

ギルドで意気投合したハンターさんに、砂漠のクエストの同行を頼まれました。一回のみという契約で、サポートとして。

ハプルボツカの狩猟が何とか終わりそうな、そんな時。

ウチにもパワーがあつたらとか、そんなことばかり考えてポーツとしてました。

だからやと思います。

いつも行うはずの、狩猟後の周囲確認を怠ってしまったのです。

「シヨウコさん！あのモンスターは!？」

「あ、あれは……!？」

完全に、確認不足でした。

モンスターにとどめを刺すときは、事前に周囲を確認して、倒して、信号弾を打って、その間も常に怠らない。

そのオトモの鉄則を、何故かウチはその時忘れていたんです。

だから、上空から猛スピードで迫るモンスターの叫び声を聞くまで、気付かせませんでした。

そのモンスターは、セルレギオス。

最近砂漠で目にするようになった、かなり珍しいモンスターでした。

話だけは聞いていたんです。

その叫び声と飛ぶ時の音は非常に特徴的で、アイルーならまず聞き分けができる、と。

なのに、なのに、気付かせませんでした。

何とか死にもぐるいで逃げ続けて。

幸い近くの上級ハンターと合流。

支援を受けて、逃げ切ることができました。

運がいいのか悪いのか。

「シヨウコさん、気にしなくていいよ。狩場不安定なのを承知の上でこのクエストを受けた私にも責任はあるしね。ぜひ、次もサポートをお願いしたいな。」

「はい……。」

この時組んだハンターさんは、HR2の太刀使い。

人柄も良く、何より絶対にウチを攻めませんでした。

だから、なのか。なのに、なのか。

ガラにもなく、落ち込んでしまいました。

その日の夜の会合は、ひたすらに慰められました。

トツバ、ええやつなんです。

しかし、そこから不運が続きました。

行く先行く先、何故か狩猟中に大型モンスターに乱入されるんです。どこに行っても。

さすがに周囲確認は怠らず、大事には至りませんでした……。ハンターの皆さんからは、次第に距離を置かれるようになりました。当然です。

原因は分からない。

ただ運が悪いだけ。

だから、どんどん契約の依頼が減っていった。

集落の長のオスズさんにも、始めは「昔調子に乗っていたツケにや！」とかからかわれていたのに。

次第に本気で心配されるようになりました。

そんな時、契約の依頼が舞い込みました。

笑顔で契約書を持って来たオスズさんから、内容を見てビックリ。

あのセルレギオスの時のハンターさんでした。

「サポートは完璧、女の子同士、気も合うしね。もう一回、お願いできるかな？」
「……はい！」

とても嬉しかったのを、覚えています。

目的地は、森丘の奥部。ターゲットは、イヤンクツク。

以前にも増して、気合を入れて周囲を確認しました。

でも、不運な招き猫の私は。

この久しぶりのクエストでも……ダメでした。

「……!!フェニクさん!!今すぐこの場を離れてください!!」

「えっ!?!」

まさか、まさかでした。

まだ狩りさえ始めていない、そんな時。

上空から猛スピードで滑空してくる、モンスター。

……はつきり言って、あの時のウチらじゃどうしようもない相手。

「か、火竜……。」

「リオレウスや……。」

大きな翼を広げて、こちらを威嚇する空の王者。

火竜リオレウスが、私達の目の前に現れました。

もう、運が悪いとしか言いようが無くて……。

この時も成す術も無く、死にもものぐるいで逃げました。

でも、リオレウスが放った火球が、ハンターさんに着弾。

救援信号を確認してやってきた近くの上級ハンターさんが、何とか追い払ってくれました。

「フェニクさん……!」

「ショウコさん……不運だったね……でも、あなたのせいじゃないから……。」

そう言って、ギルドの医務室に運び込まれたハンターさん。

怪我が重く、早急に街の病院で見て貰う必要があり、明朝にはザキミーユシティに

行ってしまいました。

やっと、ようやくやっと手に入れた、オトモアイルーとしての最後の糸が。
プツリと切れたような気がしました。

* * * * *

そこからは、自堕落な日々。

オスズさんに心配されたのも最初の内。

「働かざる者食うべからずにや!!せめてハンターさんの受付業務ぐらいやるにや!!」

「オスズさんも、似たようなものやないですか……。」

「にやにを言うか!!このごくつぶしー!!」

オスズさんは、こうは言っても、心の中では本気で私を心配してくれていました。
抜け殻のようになった私を、無理やり外に引っ張り出して、仕事をくれたんです。

……あの人には感謝しか無いです。

しばらく受付業務をする日々が続きました。

でも、少しずつ穏やかな日々を取り戻していく中で。

オトモアイルーとしての自分が、小さい頃から必死に頑張ってきた自分が、心の中で訴えてくるんです。

また、オトモとして、頑張りたいって。

「はああ……ウチ、何やってんねやろ……。」

その日、いつものように昼食後の昼寝。

木の上に作ったご自慢のスペースでゴロゴロと。

「こんなん、昔のウチが見たら、引っ叩かれるわ……。」

グスツ。

泣いてしまいました。

何も踏み出せない自分が情けなくて、勇気が出ない自分が情けなくて。

泣くぐらいなら、いつそ死ぬつもりでオトモをすればいいのに。

何なら、一人でハンターさんの真似事をすればいいのに。

……いや、違う。

オトモは、お供。

ハンターさんたちをサポートし、必要とされる存在であるべき。

「グスツ……うん。泣いててもしやあない。オスズさんとこに謝りに行って……もう一回、オトモとして頑張ってみるって、伝えよう。」

泣いたら、少しスッキリしたんです。

思いっきり鼻をすすって。

そしたら。

うまく言えんけど……ピンときたんです。

本能に訴えかけるような、そんな匂いがしました。

それは、オスズさんがお話しているハンターさんからのものでした。しかも、何だか困っている様子。

「いいですよ、そこまで急ぎじゃありません。また来ますので。」

「……………にや、にやあく。申し訳にやあです。次、優先して案内いたしますので。」

あれは、オトモを紹介できずに困っているオスズさん？

そして……………男のハンターさん？かな？

ピンときたんです。

それしか言えんです。

「あ！この人や！」て。

ウチが鍛えてきた直感とか判断力とか、そんな部分が。

もうピンツピンに、この人を逃したらアカン！って言うんです。

「ちよーっつと待ったああああ!!!」

「えっ!!?」

だから、気づいたらウチは木の上からその人の腕に着地していて。

シユタ！

「う、ウチはいかがですか！」

「しよ、シヨウゴ！」

「ウチを、ウチをあなたのオトモにさせて下さい！」

TPOなんかまるつきり無視して、その人に頭を下げていました。

腕に思いつきり爪を食い込ませて、怪我をさせているとも知らずに。

* * * * *

その人の名前は、ソウジさん。

そこから私は心を入れ替えました。

本当に最後の最後の気持ちで。

この人のオトモアイルーになるんやと、決めたんです。

初めて、ハンターさんと同じ部屋に泊まりました。

初めて、ハンターさんの背中を流しました。

色んな人との交友も増えました。

……はつきり言つて、ご主人さま……ソウジさんのことをそう呼ぶことにしたんです
が……。

モテます。

何でしょう、スキも多くてハンターとしてもまだ初心者。

なのに不思議と温かくて、優しくて、でもどこか見ていてハラハラする感じ。

放っておけないって気分になせられるんでしょうね……。

同じ宿に住むドールさんも、どうやらご主人さまを好きな様子。

色々な策を練つて、事あるごとに焚き付けています。

そんなモテるご主人さまですから、交友も増えていくつてもんです。

そんなご主人さまは、ひたすらに、ただひたすらに優しいんです。

クエストの後は、色々あったウチを氣遣つて、その不思議な力で周囲を確認してくれ

ます。

初めてのクエスト終わりで、

「……ショウコ。モンスターは来る気配がないし、俺が周りを警戒するから。」

「はい……。」

「安心してくれ。もうショウコは、『招き猫』じゃないぞ。」

「……………はいー！」

何やもう……やられてしまいました。

……………ドールさん、すんません。

キュンと来てしまいました。

* * * * *

そんなこんなで、忙しくも楽しい日々は過ぎていきます。

不運がやってくるぞと、クエストの度にヒヤヒヤしていたのに。

ご主人さまの力の前では、そんなの杞憂に終わりました。はつきり言って、ご主人さまの力は、異常です。

うちらアイルーの力でも分からないモンスターの配置まで、正確に当ててくるんです。

何度も何度もクエストを受ける中で、その力への信頼は確たるものになりました。

いろんな大型モンスターをやっつけて。

採種に運搬、いろんなクエストをこなしました。

運搬は、ご主人さまが明らかに嫌がっているので、そんなにやってませんが……。

まあ、確かに面倒くさいですよね……。

ご主人さまはこの世界の人や無いそうです。

でもそんなの、どうだっていいんです。

いつも前向きで、時々抜けていて、なんか放っておけなくて……でもいつも私のことを気遣ってくれるご主人さま。

ああ、やつとウチは、ずっとついていくハンターさんに出会えたんやなって。

そう思っていた頃でした。

あの事件が起きてしまいました。

73あるオトモアイルーの話②

その日も、いつもの様に、狩りに行きました。

相手は、ロアルドロス。

……何やアホっぽいクエスト名でしたが、なんとそのクエストは上位ハンター向け。ご主人さまはまだ下位なので、受けられなくて困っていたら……なんと、ハイビスさんが特例で許可を出されました。

何やかんや言ってますけど、ハイビスさんも、絶対にご主人さまに気があります。以前ハイビスさんにクエストを紹介してもらった時は、そんな感じやなかったんですけど……。

最近になって、「私は専属の受付嬢ですから！」って、よくアピールされるんです。……例によって例のごとく、ご主人さまは全く気づいてませんが。

「……………」ご主人様、鏡って見たことありますか？」

「ん？部屋にはあるが……何でだ？」

「いや、ええんです。失言でした。」

クエストボードの前で、自分がモテモテさんであることを自覚してるのか尋ねてみたんですが……。

ご主人さまは、罪なお方です。

ウチ達はいつもの様にガーグア車に乗って、狩り場に向かいました。

ロアルドロスの狩猟。

はつきり言って、ここ最近のご主人さまの成長は恐ろしいものがあります。

多分、ロアルドロスもいけるでしょう。

あのぎふと……の力、「ひょーい状態」の真似をするという、誰にもできない訓練のおかげなんやと思います。

でもご主人さまは、うちをただのサポートとして働かせはしません。

ウチも、戦いに参加して、一緒に狩るんです。

今回も、いつもの様に、ご主人さまと共闘して。

いつものように挟撃を行いつつ、徐々に削るといふ作戦でした。

うちの力をアテにしてくれている事が、とても嬉しいんです。

何やる……必要とされていることが、身を持って実感できるというか。

まあ、普通のハンターさん、特に上位になってくると、まずそんなことはしません。そういうところも、ウチがご主人さまにメロメロな理由なんですよね……。

ああ。言ってもうた。

そうです。メロメロなんです。

言葉にすると恥ずかしいんですけど、それはもうおかしいくらいに。

だって、いつもウチのことを心配してくれて気にかけてくれて、でも頼りにもしてくれて。

他とは違う扱いを自然にしてくれるんです。

……そんなん、誰でもそうなるに決まってます……。

……う、ウチの叶わぬ想いの話は置いて！

いつものように敵の観察に向かいました。

少し離れたところから、ロアルドロスの動きを見ます。

………しばらくすると、驚きの行動を始めました。

なんというかその……ロアルドロスは二体いて、その取り巻きの雌のルドロスがたく

さんおったんですが……まあ……いたし始めました。

雄と雌の、アレを。

「あ、あいつらアホなんちゃいます!?!滝の下で普通します!?!」

「いや、そういう生態なのかもしれないぞ。」

「同時に!?!仲良く!?!やる意味あります!?!」

「……ないよなあ……。」

「ご主人様……何かウチ、アホらしくなってきました……。」

「いや待て待て、もしかしたら俺たちは、ものすごく貴重な場面に遭遇しているのかもしれないぞ? あ、ほら見てみる。さっきまで片方に擦り寄っていたメスが、今度はもう一頭の方と……。」

「ご主人さま。とりあえずどっか移動せんと、ウチもう見たくないです……。」
「……そうね。どっか行こう。」

ウチは気分が悪くなったフリをしましたが。

内心バツクバクでした。

変な事考えんようにせんとあかん……。

* * * * *

ドールちゃんのサンドイッチを頬張りながら、気分転換。
ホンマに美味しいんです。ドールちゃんのサンドイッチ。

一生食べ続けさせてほしいわあ……。

あ、アカン。これプロポーズの言葉やっつけた……。

そんなアホな事を考えていた時、ご主人さまがとんでもない事を言い出したんです。

「シヨウコ。」

「フガフガ!!は、はい!!」

むせるところでした。

でもご主人さまは構わず続けます。

「ごめんな食べてる時に。だが、作戦変更だ。」

「へ？」

「……………2頭連続狩猟だ。奴らを分断して、今日2頭狩る……!!」

「……………、ご主人様……………」

いつもよりトーン強めで言うご主人さま。

……………連続狩猟？

しかも、ご主人さまが初見の敵を!?

驚かされました。

こんな風は無茶ぶりするなんて。

ただ、ご主人さまが提案した作戦は、まあハマれば理にかなっていて。

それに乗ることにしたんです。

……………結果は大成功でした。

2体のロアルドロスを、狩猟できたんです。

初めて見る相手なのに。

むしろ余裕すら感じられるご主人さまの様子に、ウチは感心しっぱなしでした。

まあ、ブレスをストレスに躲して攻撃するとか、所々危ういところもあったので、そこはオトモといえど苦言を呈させていただきましたけど。

ホンマ無茶するんやから……ご主人さまってば。

そんな大成功の雰囲気でも。

ウチは周囲への警戒を怠ってませんでした。

前みたいに必死にやるわけではないですが、きちんと周囲を確認しました。

敵影、無し。

今日も無事に狩りが終わる。

……なんて思っていたのが、良くなかったんですね。

スタート地点までもうすぐの、そんなところで。

キン……………キン……………キン！

変な音が聞こえてきたと思ったその時。

「…………ちよつと待て！ ショウウゴ！」

「へ？ どうしたんです——」

「伏せろお！！！」

ご主人さまがウチを急に押し倒してきました。
あまりの出来事に反応できなくて。

ビュオン！

(……!? なんや!?)

ご主人さまの頭の上を、恐ろしく早い何かが掠めていきます。
すぐにご主人さまが私を引き起こしてくれます。

「シヨウコ！無事か！」

「ご、ご主人さま！すみません!!ありがとうございますー」

「礼は後だ……こいつは……嘘だろ……。」

「グルルルル……。」

目の前に現れたソレは、見るからに凶悪で。

「シヨウコ、目をあいつから離すなよ。今から……シヨウコ？」

「あ……うあああ……。」

「シヨウコ……。」

ウチは、心が折れそうになりました。

アカン、ウチのせいや。

ウチが調子乗って、ご主人さまのそばにおるから……。

また、招いてしもうた……。

ウチは……不幸を……。

ご主人さまを……。

不幸にするんや。

* * * * *

そこから先は、とにかく必死でした。

不幸やろうが何やろうが、ご主人さまは命を賭けて、ウチを逃してくれた。

助けを呼ばんと。

落ち着いて、今できることをするんや……！

とにかく必死で、スタート地点まで戻りました。

いつものネコタクアイルーのおっちゃんに事情を説明したら、「乗るにや！嬢ちゃん

！回収班を見つけて、救援信号にや！」って言うてくれて。

街までとぼしながら、回収班と連絡が取れたのは、ホンマに幸運でした。

ウチが村のギルド本部に着く頃には、既に救援体制が出来上がっていたらしいです。

「シヨウウコちゃん！」

「ハイビスさん……助けてください……！ウチ、ウチのせい……ご主人さまが！ご主

人さまがあ……！」

「シヨウウコちゃん……。」

ハイビスさんが、ギルド本部に着いたウチを迎えてくれました。

ハイビスさんを見た瞬間、心の中の思いが溢れてしまつて。

ギュッとウチを抱きしめてくれるハイビスさん。

……少しだけ、落ち着きました。

「落ち着いて……大丈夫。もう救援の用意はできています。きっと……きっと大丈夫だから。」

「うっ……うううう。」

涙が止まりませんでした。

「……ハイビスくん、彼女が、ソウジくんのオトモさんかな？」

「はい……マシオルクさん。ショウコさんです。」

「そうか……ショウコ君！よく助けを呼んでくれた！」

「グスツ……えっ……？」

いきなり声をかけられると。

目の前には、厳つい格好をした男の人。

……マシヨルクさんって人、聞いたことある。

ご主人さまの、お師匠さまや……。

「君がデイノバルドだと通達をくれたおかげで、こちらも装備をすぐに整えられた！こんなにもいいオトモが弟子にしていると！嬉しいぞ！」

「あ……ありがとうございます……？」

泣いてきた涙が引っ込むほどには。

その人はキャラが濃すぎました。

そして何より……。

「セツヒト！用意はいいかな!？」

「うるさいよ……大声出すな。」

ジャキン！

シユツ……パチン。

ご主人さまと同じ、双剣を装備する女性ハンターさん。
もしかして……セツヒトさん!?

え!?ハンターさんやっただんですか!?

「……シヨウコちゃん……だったねー。……安心してー。もうすぐファンゴ車が用意できるところさ。」

「は、はい……!」

「あたし達、こう見えても強いんだよー?……まー私、2年ブランクがあるけど。」

「はーはっはっはー!そんなブランクがあるにも関わらず、救援に行くと言って聞かなかったのは、どこの誰だったかな!」

「……本当にうるさい。やっぱ殺す?」

「……………」

「……………」

え?何この雰囲気?

その後すぐに、特急のファンゴ車に乗って、二人は嵐のように行ってしまった。

「シヨウコちゃん……。後は、信じて待ちましょう?」

「……ハイビスさん、ごめんなさい。ウチ、取り乱してしもうて……。」

「いいのいいの。私だって、最初聞いたとき……ちよつとね……。」

「……………」

よく見ると、ハイビスさんの目も、心なしか赤くなっています。

「……大丈夫。ソウジさん、強いからね。マシヨルクさんもセツヒトさんも、心配ないわ。……受付嬢たるもの、待つのも一つの仕事なんだから。」

「……はい。」

宿まで行くように言われましたが、ギルドで待つことを伝えると、「無理はだめだからね。」と言ってハイビスさんはお仕事に戻りました。

ギルドのみんなが、私を見てきました。

今思えば、あれは心配の眼差しやったんでしようけど……その時のウチは、まるで責められているような気がして。

壁を背に、うずくまりました。

ご主人さま……ご主人さま……。

ごめんなさい、ごめんなさい。

……バチが当たったんや。

ウチが……また……どうしようもないモンスターを呼んでしもうた……

ウチは……もう。

ご主人さまと一緒に、おったらいかん。

そんなことばかり考えてました。

* * * * *

ご主人さまは、無事でした。

……大怪我をして、担架で運ばれましたが。

「今ここにいられるのは、シヨウウコのおかげなんだ。謝らないでくれ。」

「でも……ウチ……ウチのせい……。」

「シヨウウコのせいなもんか。シヨウウコはむしろ命の恩人だぞ？ デイノバルドが勝手にやってきたんだ。それに、俺は大丈夫だ。大丈夫。安心してくれ、俺は生きている。」

「ううう……！」

ああ、ご主人さま、生きてた。

良かった……。

痛々しく包帯を纏ったご主人さまは、そのままギルドの医務室に運ばれました。

すみません。ご主人さま。

ウチは、あなたを不幸にする招き猫。

……また、クエストに出かけたら……そしたら、また、きつと……。

悪い方悪い方に、気持ちが悪くなります。

その夜は、ハイビスさんに付き添われて、宿で寝ました。

何も言わず、ドールちゃんが横で寝てくれました。

ドールちゃんも、目が腫れていて。

何だか余計申し訳なくなっただんですけど。

……温かかったです。

* * * * *

起きて何にもする気になれんで、部屋でボーツとしてました。

頭の中はグチャグチャのままです。

こうしている間にも、ご主人さまは怪我で苦しんどるかもしれないのに。

ご飯も食べずに部屋におるから、ドールちゃんもミヤコさんもホエールさんも、みんな心配してくれました。

空元気で返事をします。

「ウチは大丈夫です。……ご主人さまは……。」

「医務室で寝ておるようじゃ。何、心配はいらんよ。」

「あ、ありがとうございます。」

ホエールさんが、ギルドにいるご主人さまのことを教えてくれました。

「……シヨウコ殿。あなたが来てから、宿は本当に明るくなった。」

「え……。」

「ドールも笑顔が増えての……。今シヨウコ殿が何を考えているかはわからんが……この宿にいつまでもおつてええからの。」

「……はい。」

「ホホ。早く帰つてくるといいのお、ソウジくんも。」

「……そう、ですね。」

ご主人さまの容態を、なぜホエールさんが知っているのかはよく分かりませんでした。
が。

ウチを、元気づけてくれているのが分かりました。

ホントにこの宿の人らは、みんなええ人たちです。

ご主人さまが帰ってきたら。

……言うんや。オトモを、辞めさせてくださいって。きつと、ご主人さまは、嫌って言ってくれます。

それでも、ウチは、ご主人さまが大事やから。

……大好きやから。

……言わんと。

コンコン。

「シヨウコ、いるか？入ってもいいか？」

「……へ!?!ご主人さま!?!」

え!?!ご主人さま!?!

何で!?!早すぎひん!?!

「そうだ、ソウジだ。」

「ど、どうぞ?というか、ご主人様の部屋です!」

「……そりゃそうなんだけどさ。」

ガチャツ。

「……シヨウコ、元気か？」

「いやいやいや！それ、ウチのセリフですから！」

「すまん。ボケてみた。元気そうだな。」

「ご主人さま……分かりにくいです。」

いつもの、軽いやり取り。

右腕の三角巾に、ぎこちない歩き方はされてますが、思ったより元気そうです。

「シヨウコ、昨日はありがとう。おかげで助かった。」

「いや、ウチも無我夢中でした……つて！そうやなくて！……ご主人様、もう大丈夫なんですか？」

「いや、安静は必要だ。流石にな。でも、日常生活なら問題なさそうだ。」

「そうですか……。よかったあ……。」

「ああ。シヨウコのおかげだ。」

「……ホンマに、そうでしょうか……？」

そこから、意を決して言いました。

ウチが、今回のクエストで、どれだけ自分の力不足を味わったか。

そして、それがご主人さまを不幸にする。

何よりも、何よりも大切な、ご主人さまを。

だから、ここで、見限って欲しいと。

そう、心の内を、明かしました。

本音を、伝えました。

「ご主人さま……いや、ソウジさん。お願いです。ここで、私を見限って下さい。……ウ

チはもう、あんな事、したくありません……。」

「………シヨウゴ。」

「………。」

ついに言ってしまいました。

……でも、これでええんです。

……楽しくて幸せな日々でした。

………さあ、ご主人さまは、どうやって返して来るんやろうか。

ウチの決意は、早々崩れませ——

「……いいから黙って、俺について来い！」

「……ええ!？」

まさかのオラオラパターン!?

「なーんて言えたら、かつこいいんだろうけどな。スマン、俺もまだまだ強くない。そこまで格好はつけられん。」

「……じゃあ、やつぱり——」

はあ、ビックリした。

グイグイくるご主人さまも、それはそれで……。

………あかんあかん、何を考えとるんや

………やつぱり、ご主人様もウチと同じ気持ちで……

「……なので、説得する材料を用意してまいりました。」

「……………へ？」

……何を言うてはるの？ご主人さま？

と、ツツコミも入れさせてもらえぬまま。

ご主人さまの怒涛の説得が始まりました。

しかも……こう、なんと言えばええんやろ……感情に訴えてくる感じではなかったと言いますか……。

アンケートとかいうのをされて、周りの人の声を集めて、それを私に伝えてきました。スケッチブックに、少し下手なグラフと、文字を添えて。

ギルドの人や、ハンターさん達の、生の声。

特に、ハイビスさんやヒナタさん、何よりもハンターさん達の声には、驚かされました。

ウチは、どうやら、自分が思っていたよりも……自分でいうのも気恥ずかしいんですが……大事に思われてみたいのです。

励ましの言葉の数々。

まるで、ウチの心が、溶かされていくみたいでした。

ウチは、ただ一生懸命に頑張らなくて、そう思ってた働いていただけなんやけど。どうやら、ウチが、周りを笑顔にしているって。

幸運にしているんだって、言ってくれるハンターさんがおって。

そうや……ウチは何を勘違いしとったんやろ……。

決めたやんか。

不幸な招き猫なんて不名誉なあだ名、吹き飛ばしたるって。

このご主人さまとなら、頑張れるって。

そう、決めたんや。

ご主人さまと出会ったあの日から。ご主人さまと過ごしたあの日々の中で。

あの決心は、嘘やない。

あの時の熱い気持ち、一瞬で蘇ってきました。

気がついたら、ご主人さまに飛び付いてました。

「……………ご主人さま。」

「お、おう。」

「……安心する……このにおいや。ウチ、初めに思ったこと、何で忘れとったんやろ……。」

「……………」

「集落でご主人さまを見つけた時、この人やって思った。ウチの最後のチャンスやって。この人ならって思って。」

あの時のことを思い出します。

……はあ、ウチって心弱すぎや……。もう絶対ブレへんって決めたのに。

次は、もう間違えません。

再び、意を決して言います。

内容は、さつきと180度違いますけど。

「もう一度、もう一度だけ、ウチをご主人さまのオトモにして下さい。……お願いします。」

「……ああ！もちろんだ！」

「……………」ご主人さま……これからも、よろしくお願いします。」

「……ああ。よろしくおねがいします、シヨウゴ。」

もう、ウチは絶対離れへん。

この人と一緒に、強くなるんや。

ウチの大切な、このご主人様と一緒に。

それが、ウチの決意やから。

* * * * *

ちなみにその日。

ウチはどうしてもギルドの人たちにお礼がしたくて。

ちよつと恥ずかしかったんですけど、単身、ギルド本部に行きました。

元氣付けてくれて、ありがとうございます。

励ましてくださって、ありがとうございます。

そこにいた、目が合う人たちみんなに、お礼を言いました。

……めつつつつちや恥ずかしかったんですよ!?

それはあつちも同じみたいで。

ギルドの職員さん達も、ハンターさん達も、みんな気恥ずかしそうに、だけど笑ってくれました。

ええ村やなって、ええギルドやなって、もつと頑張らなって気持ちにさせてくれました。

ほんま、ありがとうございます。

余談ですけど、ヒナタさんに少しおふぎけで耳や尻尾をスリスリしたら、固まってました。

ポケーっとして、目だけがグルングルン回してました。
……やりすぎはほどほどに。

* * * * *

ご主人さまは、その後順調に回復。
今はセツヒトさんのところで絶賛修行中です。

ウチはと言うと——

「シヨウコ。おまたせ。」

「おはようさん、トツバ。……それと、フエニクさん……！」

「ふふ、元気そうね、シヨウコさん。」

ザキミーユから戻ってきた、あの時のハンター、フエニクさん。

そしてその人と、新たに組むことになったトツバ。

3人で、クエストを受けまくってます。

ご主人さまが頑張つとる。

ウチも、強くなるんや！

「さ、今日からまた、よろしくね、シヨウコさん。……女3人、姦しくなりそうね。」

「大丈夫。私は無口。」

「自分で言うことちやうやろ……。」

待つとつてください、ご主人さま。

ウチも負けません。

まだまだ強くなって、またご主人さまと一緒に。
大好きなあの人と一緒に。

狩りに行くんや！

74 訓練の日々を過ごしましょう。

セツヒトさんとの本格的な特訓の日々が始まった。

朝はまずランニング。

体力を怪我前の水準まで戻し、更にペースを上げていく。

シヨウコも一緒に俺のペースについてくるものだから、こっちもムキになって、だいぶ体力が伸びたと思う。

「ご、ご主人さまにいつまでも……！ 追いつけへん……！」

「はあっ……はあっ……！ きよ、今日は、50分を……切ったな！」

でも、追いつかれるのも時間の問題かも知れない。
基本アイルーのほうが人間より体力あるらしいし。

その後は宿に戻って朝ご飯。

最近ようやくドールの機嫌も戻ってきた。

実は、シヨウコにドールの機嫌をとるにはどうしたら良いかと相談したのだ。

するとドールと二人で買い物にでも行き、欲しそうなものを買ってあげるといいとアドバイスをいただいた。

師匠の教えは、即実行。

訓練休みの日に、宿の買い出しを手伝うついでに、一緒にブラブラと買い物した。

だが、俺にこういう贈り物のセンスは無い。皆無と言っている。

無難にいきたいのだが、その無難なプレゼントさえ分からない。

女性が喜ぶもの……指輪とか花束とか……でもドールはまだ幼いわけで、というわけで、その辺の雑貨屋に売っていたエプロンをプレゼントした。

「え、いいよ、ソウジさん……。今日誕生日でも何でも無いし。」

「日頃世話になってるし。これからも美味しいご飯作って欲しいからな。」

「そ、そう……。じゃ、じゃあもらおうかな。」

恥ずかしそうにはいたが、栗色の髪を指でクルクルさせながら笑顔を見せていた。

画して、無難プレゼント作戦が功を奏したのか、ドールの機嫌も戻ってきた。

恐らく大怪我をしたのにも関わらず、性懲りも無く特訓を始めた俺に対して怒っていたのでは無いかと……思っていたのだが。

「ご主人さま、ちやいます。ドールちゃんは、そんなことで怒ってません。」

「ち、違うのか!?!」

「…………ご主人さま…………。」

哀れんだ目で俺を見つめてきたシヨウコの顔が、何故か忘れられない。

ま、まあ、ご機嫌取り作戦は無事成功したのだ。

よしとしておこう。

そんなシヨウコは、例のハンター&オトモと一緒にクエストに行くことが多い。

シヨウコの話の中で、その二人の出現率が高いので、名前も覚えてしまった。

ハンターはフェニク、オトモはトツバ、という名前らしい。

いつか挨拶にでも伺えたらと思う。

変な輩なら容赦しないが……オトモの方は昔からの知り合いらしいし、多分大丈夫だ
と思う…………ことにした。

「……………ご主人さま……妬いてます？」

「ややややや妬いてないわ！」

べ、別に嫉妬なんかしてないんだからねっ。

……ちよつともどかしいのは事実ではあるが。

早くクエストに行きたいものである。

そして俺はセツヒトさんの店へ。

「寝ていたら起こしてよー。」とからかわれて、じゃあ本気で起こしに行つてやろうかと思つていたので、ほとんどの日、セツヒトさんは起きています。

裏手の庭で素振りをしながら、俺を待っていることが多い。

おかげでセツヒトさんの寝顔というものは、今の所拝んでいない。

……………期待していなかったと言えは嘘になるんだが……少しホツとしている自分もいる。

「おー、おっはよー、ソウジー。」

「おはようございます、今日もよろしくお願いしますー!」

挨拶もそこそこに、ギルドヘクエストの受注に向かう。

最近増えている小型モンスターの討伐クエストを受注、現地へ向かう。

ちなみに、セツヒトさんに俺のギフトや能力について説明したことについて、ハイビスさんには伝えている。

「ソウジさんの力のことを知っている方って……今のところどれぐらいいらっしゃるでしょうか?」

「そうですね……マシヨルク教官、シガイアさんにハイビスさん、シヨウコとセツヒトさん……5人ですね。」

「……秘密を知る人が増えると……特別感が無いですよね……。」

「特別感?」

「あ、いえいえ! こちらの話です。」

ハイビスさんはどうやら、秘密がバレることによって自分も巻き込まれてしまうことが心配な様子。

シガイアさん共々、機密漏洩については職責を賭けていたからなあ。

「大丈夫ですよ、話した全員、信頼のおける方々です。」

「……それもそうですね。……ですがソウジさん、その件はくれぐれも慎重に、お願いしますね。」

「はい、気をつけます。」

軽い挨拶を終わらせると、クエストへ。

最初の頃はセツヒトさんとのコミュニケーションの難しさから、「やってみよー」「え、マジですか!？」的な無茶振りも多かったのだが、それも慣れてきた。

2週間もすると、だんだん素手でモンスターを倒すのにも時間がかからなくなってきた。

モンスターと対峙する。

間合いを測りながら、絶妙なポジションで拳を構える。

相手が突つ込んでくれば、カウンターを。

そのまま警戒が続くようなら、こちらから一撃を見舞う。

単に殴る、蹴るでは、大したダメージは与えられない。

フアンゴなら顎下か、鼻。ジャギイなら顎下か、その細い首。目や金的ならどちらも有効。

的確に弱点を狙っていく。

セツヒトさんのように、弱点一発、というわけにはいかないが、焦らない。

小型はスタミナも無いので、ヒットアンドアウェイで揺さぶりながら徐々に体力を削っていく。

フラつき始めたら好機。一気に倒していく。

意識するのは、間合いと弱点。

これは、どのモンスターにも共通すると思う。

最近では投げ技も覚えた。

首の長いジャギイなら、一本背負いのように投げ飛ばし、足で顔を潰す。

比較的体高が低いフアンゴは、実は足払いが有効とわかり、積極的に横倒しを狙う。こちらも倒れたら、足で顔を潰す。

「プギアア!!」

「っ……。」

正直、自分の身一つでモンスターを倒す感触にはまだ慣れていない。でも、慣れるしかない。

すまん、セツヒトさんのように、一発で気絶させたら苦しまずに済むのにな。

そんなことを考えながらも、容赦はしない。

気を抜いたら、こちらが大怪我である。

「んー、ソウジー。良くなってきたねー。」

「ありがとうございますー！」

お褒めの言葉を貰うことも多くなってきた。

セツヒトさんは基本褒めて伸ばす方針の様子。

天狗にならないよう、気をつける。

周囲にハンターがいる時は、「何してんのあの人w」と変な目で見られることが多い。そりやそうだ。

武器も装備も持たずに、インナー一本でモンスターを倒すのである。

頭のおかしいやつと思われてもしようがないと思う。

……この周りの目にはいつまでも慣れない気がする。

* * * * *

そうして、セツヒト式訓練を始めて、一ヶ月。

小型モンスターを倒すことが安定してできるようになってきた。

だが流石に一ヶ月も経てば、小型モンスタアの食害は少なくなり、農家も収穫期を終えだす。

すると必然、小型モンスター討伐の依頼も無くなる。

……そう、小型モンスターを相手にした訓練が、やりにくくなってくるのだ。

ただでさえ、小型の討伐はなりたてのハンターが行うことの多い仕事である。

よほどの緊急性や異常性が見られない限りは、初心者ハンターに仕事譲られる。

食いつばぐれないためのギルドの措置である。

なので、小型を相手にした訓練が厳しくなってきた。

ギルドのクエストボードに、小型狩猟の依頼が見当たらないのだ。

と言うか、狩猟系のクエストが軒並み減っているような……。

「せつちゃんさん、小型のクエストがありません。」

「えー、ほんとー？……わー、マジだー。んー……これから寒くなってくるしねー。」
「寒くなるんですか？」

「そー。収穫が終われば、秋も終わりー。そうすると、冬がはじまるんだよねー。」
「季節感があんまりなかったんですが……。」

正直この世界に来て、季節を意識したことが無い。

素晴らしい事なのだが、昼は涼しいし、夜は暖かい。

季節がはつきりしない毎日だったが、冬はきっちり来るらしい。

「んー、もうしばらく、ソウジに格闘を仕込みたかったんだけどねー。」

「これからどうします？」

「んー。んー……。」

腕をわざとらしく組んで考え込むセツヒトさん。

余談だが、セツヒトさんは双剣で狩りに行く時、鎖帷子が入ったいかにも寒そうな格好をしている。

何でも、ナルガクルガというモンスターの装備らしい。

スキルが美味しいらしく、愛用しているのだとか。

なので考え込むポーズのとき、少し視線に困ってしまう。

その……何というか、色々なところが見えてしまっているのである……!

あんまり見つめるのも失礼なので、目をそらそうとした時、セツヒトさんが思いがけないことを言い出した。

「……じゃー、大型。いってみる?」

「……へ?」

間が抜けた返事をした俺に続けて、突拍子もない事を言い出す。

「だからー、小型の狩猟は大体初心者ハンターに回ってるんでしょー? なら、大型を狩るしかないよねー?」

「そ、それはそうですけど……素手で!」

「んー、いやいやいやー、流石に死んじやうからねー。」

「で、ですよね。」

あービックリした。

素手で大型を狩って来いなんて言われたら、これはもう流石にただの自殺である。

「フル装備で、上位ランク。狩ってみようかー？」

「じよ、上位。」

言葉に詰まる。

上位モンスター。

今まで俺は、相手にしたことがない。

「んー。多分できる思うよー？素手であそこまでできるんなら、よゆーよゆー。」

「ほ、本当ですか？」

「うん。……多分。」

「そこは自信をもって言って欲しいんですが……。」

一抹の不安を残しつつ、セツヒトさんは飄々としつつ、受付に向かっていく。

「おいつすー。えーつと……ハイビスさーん！」

「ブフォはいっ！」

お茶を吹き出しながら器用に返事をするハイビスさん。

本部の奥にいたハイビスさんは、急に呼び出されて困惑している様子。

……何かこのシーン、既視感。

「あー、ごめんねー。急に呼び出しちゃってー。」

「い、いえいえいえ!! 気になさらないで下さい！」

「そー? いやー、実はちよつと、お願いがありましたー。」

「お、お願いですか?」

ビクビクしながらも、受け応えするハイビスさん。

2人のやりとりを見るのは初めてではないが、どうもハイビスさんはセツヒトさんを苦手としているようにみえる。

あれかな、俺が初めて大型の狩猟に行く時、セツヒトさんのこわい顔を見ているからかな。

特にマシヨルク教官を相手に話すセツヒトさんは、同じ人とは思えないほど怖いのである。

「実はねー、今日行こうと思っていた小型のクエストが軒並みなくてねー。」

「は、はい。そうですね。時期が時期ですし……。お二人が頑張ってくれたおかげで、今年は食害が本当に少ないです。」

「そういうことかー。しようがないかなー。」

「……あ、もしかして小型の狩猟を斡旋して欲しいとかですか？……ヒナタに聞けば、融通してくれるかも知れませんが……。」

「あー、いやいやー。違うの違うのー。それはちゃんと、新人達に回してー？」

言ってしまうえば、俺も新人なのだが。

「そ、それでは、お願いというのは。」

「うん、ソウジと一緒にー、上位の大型、狩らせてくれないー？」

「……じよ、上位の大型、ですか？」

「そー。できるならー、3級危険種辺りを。」

「こ、この時期でその強さとなると……セツヒトさん。この周辺には……。」
「んーつとねー、そこも込みでー、お願いしたいんだよー。……だめー？」
「……しよ、少々お待ち下さいね……。」

受付台の下から分厚い冊子を取り出したハイビスさん。

何やらクエストを探している様子。

「一分ほど待つと、「すみません、少し相談してきます。」と言つて、本部から出ていった。」

「……セツヒトさん。」

「……せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、本当に大型を狩るんですか？しかも上位タイプ。」

「うん、そだよー？」

「……大丈夫ですかね、俺、あの日以来、大型を相手にしていないんですが。」

「それは大丈夫ー。私がいるからー。」

「……確かに。」

なんとも頼もしい言葉である。

そうか、ハンター試験の時と違い、セツヒトさんと一緒なのだ。
なら、いけるかな？

「おまたせしました、セツヒトさん、ソウジさん。」

「お、ありがとー。どんな感じー？」

ハイビスさんが戻ってきた。

顔付きが少し険しいような……。

「……えーつと、セツヒトさん、ソウジさん。申し訳ありませんが、ギルドマスターの部屋までいらしてください。」

「……え？」

「……ギルドマスターから、直接話がしたいとのことでした……。」

何で？

俺は頭に「？」が浮かぶ。

ただセツヒトさんは全く動じていない。

「……おー、なるほどー。そっちのほうの話早いかもねー。おっけー。」

「……?」

意味深なセリフを聞きつつ、俺たちはハイビスさんに連れられて、部屋まで行くことになった。

* * * * *

「これはこれは、ようこそ、ソウジさん、セツヒト。体調はいかがですか?」

「あ、いえ。おかげさまですっかり良くなりました。」

「ははは、セツヒトと特訓をしている話は聞いていますよ。もうギルド中で話題ですからね。」

「そ、そうなんですネ……。」

シガイアさんの部屋に通されてから、ハイビスさんは早々に立ち去っていった。

そそくさと。

……逃げるかのようなだったな……。

しかし、セツヒトさんとクエストを受けるときに感じたあの視線は、やはり気の所為ではなかった。

話題になっていたから、あんなにジロジロ見られたんだな。

「セツヒトは言わずもがな。ソウジさんも、かなり有名ですからね。ディノバルドからソロで生き残った新人がいると、ね。」

「は、ははは。」

「更にはオトモを励ますために、怪我をしている中、何やらアンケートまでしたとか。いやー、ソウジさんもやりますねえ。」

「おー？なにになにー？なんだか楽しそうなことしてるねー。」

「二人ともやめて下さい……。」

二人からイジリを喰らう。

あの時の俺は、とにかくシヨウコを励まそうと躍起になっていたのだ。

若気の至りとして、許してほしい。

……中身はおっさんですけど。

「それで、ハイビスさんから話は聞いたが……セツヒト、大型の狩猟をしたいということ
で、間違いないのか？」

「はい、シガイアさん。できたらー、3級……くらいがー、ありがたいっすー。」

「ふむ……。少し待っていてくれ。」

シガイアさん、常に口調が丁寧な人だけど、セツヒトさんにはタメ口なんだな。

二人の関係性が気になってしまう。

逆にセツヒトさんの敬語も、初めて聞いた気がする。

二人が話を進めていく。

「……クエストの形は？」

「ぶっちゃけ言うところ、遠方泊まり込み？……ソウジに、あそこのツワモノを当ててみた
い。」

「ふむ……。」

何やら不穏な会話が聞こえる。

……………黙って聞いていよう。

「同行は、わたしー。店は何とかなります。」

「……………セツヒト、本気で言ってるな？」

「……………ええ、本気ですよー？というか、今この時期に受けられるって言ったら、アレしか無いですよねー？」

「それはそうなんだが……………」

「……………お願いします。ソウジは、多分強くなります。私や……………あいつらよりもね。」

「……………そうか……………」

二人しかわからない内容である。

だが、物騒なことを言っているのはわかる。

……………俺を強くするために、セツヒトさんがシガイアさんに無理を言っているように聞こえてしまう。

……………気のせいかな？

「……昔の傷は、もういいのか？」

「いーえ？ 治ってません。……それは、シガイアさんもよくご存知でしょう？」

「……ソウジさんに、この話は？」

「これから話します……あの村のことも、言ってないです。」

「……少し考えさせてくれ……。」

資料を開き、黙りこくるシガイアさん。

どうやら二人は、何かしら過去にあつたっぽい。

傷とか、あの村とか、よくわからないワードが飛び出してくる。

俺は黙って聞くしかない。

「……ソウジさん。」

「は、はい！」

急にシガイアさんに話しかけられ、驚く。

何だろう。

「すみません、私達しかわからないように話を進めてしまいました。」

「い、いえいえ。大丈夫です。」

セツヒトさんもシガイアさんも、俺を見る。

嫌が応にも緊張してしまう。

「……ソウジさん、一つ提案なのですが……これからしばらく、遠方に行ってみませんか？」

「え、遠方？」

遠方って、遠くの方って意味の、遠方？

なぜ？

「これからの季節、この辺は狩猟のクエストが極端に減ります。大型、小型に関わらず、です。そのへんは、ご存知でしたか？」

「い、いえ。初耳です。」

「そうでしたか……セツヒトが言うのは、ソウジさん、あなたをより強いモンスターと戦わせることです。」

「は、はい。」

「……うってつけの村があるんですよ。これからモンスターが増える、そんな狩り場の近くにね。」

「はあ……。」

いまいち飲み込めない。

セツヒトさんは、どうやらそこに、俺を出張特訓に行かせたいようだけど。

いや、同行とかなんとか聞こえたから、一緒に行くのかな？

すると、セツヒトさんがゆっくりと口を開いた。

「……ソウジ、そこはね？私がハンターを引退することになった、村なんだ。」

「えっ？」

「うん……これから雪深くなる山合いの村。一山越えれば、信じられないくらいでつかい氷山とかもある、海が広がっててね。これからの季節、モンスターが増えてくるのさ。だから、そこに行こうかなーって。」

「……そ、その、セツヒトさんも一緒に？」

「せつちゃんだってー。……そう、私の禊も兼ねてね。」

「禊……。」

「……その村の名前は、ミヨシ村。……ソウジ、君のその装備が作られた村だよー？」

聞いたことのある名前が急にできて。

俺は少し、ドキリとしてしまった。

75 お世話になった人に、挨拶をしましょう。

頭の中の〈マップ〉を広げる。

縮尺を、うんと広くしてみる。

北西の方に位置を合わせると、高い山の向こうに、大きな町がある。

タオカカという町。

その少し北、山脈をなぞるように行くところがあるのが、ミヨシ村。

マップ画面だと、雪深さとかそういう情報までは分からないが……ここからそこまで離れていないように見える。

「ソウジュー？……だいじよぶ？」

「あつ、はい。すみません。少しギフトの〈マップ〉を見ました……。」

「おー、そつかそつか。村の位置とかわかるんだねー？」

いかんいかん。

俺の力は人に見せることはできない。

ギフトを見ている時、俺はまるでブーツとじているようになってしまふ。

「……ギフトで確認しました。……思っていたよりは、結構近い位置にあるんですね。」

「そののー？ ガーグア車で5日ってことしか分からないからねー。」

「……ここに、今から向かうんですか？」

「いやいやー。準備があるからねー。もしソウジがよかつたら、だけどー？」

急な話ではある。

だがまあ……断る理由も特に無い。

ただ、時間は少し欲しい。

「期間は……どれぐらい？」

「んー、季節を一巡り……。モンスター達が落ち着くまで……。3ヶ月ぐらい？」

「なるほど……。セツヒトさんも来るということ……。ですよね。お店は……？」

「んー。基本冬は暇になるしねー。だいじょーぶ。」

なるほど、本当に期間限定のクエスト……ではなく、訓練を行うっていうイメージだ

ろう。

あとは、この街を出た事のない俺が、急に違う村なんかに行つて大丈夫なのか、ということだが……。

「その村？に行く事自体は、俺は全く問題ないです。ただ……シガイアさん。俺って、ワサドラ以外で活動しても大丈夫なものでしょうか？」

「そうですね……身分証は、ハンターライセンスがありますからね。大陸を跨ぐわけでも、何か商売を行うわけでも無いですし……まず大丈夫でしょう。」

「そうですか。よかったです……。」

シガイアさんに、一応確認してみる。

その他、通貨や言語なども、大陸の中では一貫しているようだ。

……というか、大陸の外にも世界があるのか。

……。

〈マップ〉で確認しようとしたが、何度やっても大陸の外にはいけない。

仕様か？

まあ、そこはいいや。

大事なのは、今から準備を進め、違う町まで行かなければならないということ。そう、もう肚は決めた。

強くなりたい。

そこは、ブレたくない。

「……セツヒトさん。」

「……せつちゃん。」

「せつちゃんさん。俺、行きますよ。その村に。」

「……ん。ソウジなら、そう言うと思ってたよー。」

「はい。」

まあ、また戻ってくるわけだし。

雪に覆われた場所というのも、ちよつと興味がある。

「では、その方向で話を進めましょうか。ソウジさん、くれぐれも、あなたの力については、内密をお願いしますね。」

「了解です。ここで外部に漏れたら、俺にとつてもそちらにとつても、都合が悪そうで

す。」

「いやはや、おつしやる通りで。……ソウジさん、ハンターおやめになったら、ギルドで働きませんか？」

「いやいや、まだ考えられませんよ。……最近カミングアウトしすぎなので、ちよつと自重しようと思つています。」

「ええ、慎重な方がいいです。……私の方でも、少し手は回しておきます。」

「……よろしくお願いします。」

手を回しておくって……嫌な予感しかしないが。

シガイアさんからは悪意は感じられないんだけど、気をつけないと、えらい目に合いそうな予感が拭えないんだよねー。

……まあ、気にしても仕方のないことなので、スルーしておく。

「せつちゃんさん。」

「んー？」

「よろしくおねがいます。準備って、何かしておくことはありますか？」

「んー。そーだねー。」

そう言うと、セツヒトさんが急に近づき、俺のポーチを触ってくる。

「この中のソウジの装備をー、ちよつち借りてもいいかなー？」

「へ？いいですけど……。」

何か加工でもしてくれるのだろうか？

「店で渡してもらえたら……そーだねー、出発は3日後。それまでにー、寒冷地仕様にして上げておくよー。」

「わ、分かりました。」

言われるがままに、装備を預けることになった。

「だから、しばしのお別れをできてー？ドールちゃんにー、ハイビスさん、ヒナタさん……ミヤコさんとホエールさん。他にはー……。」

「シヨウコとオスズ……イシザキ亭のケイさんとか、ですかね。」

「む……ソウジの周り……女の子多いねー。」

「あ、あと教官もー」

「アイツはいい。」

「はい……。」

言われると思った。

だが確かに、言われてみれば、俺の親しい人と言えば、女性が圧倒的多数。男性達のキャラが濃すぎて気づかなかった。

「……なーんかムカつくー……。」

「へ!?何ですか!?!」

「なんでもー。……何だろー、腹立ってきたよー?」

「えええ……。そんなんでしょうもないですよ……。」

「……決めた。訓練に冬山雪中行軍も追加してやるー。」

なんだか物騒な訓練を取り入れられてしまった。

字面からして恐ろしい……。

来るべき恐ろしい訓練を想像して震えていると、神妙な面持ちをしたシガイアさんから声がかかった。

「ソウジさん。」

「な、何でしようか、シガイアさん。」

「……暗い夜道にお気をつけください。」

「なぜ急に物騒な言葉を!?!」

シガイアさんがよくわからないことを言つて、この場は終いになった。

この二人のことは、とりあえずいいや。

まずはドールやシヨウコ達に、話をしなければならぬ。

どうやつてし話をしようとか考えながら、セツヒトさんと俺は部屋を後にするのだった。

* * * * *

「ただいまー、かえりましたー。」

すっかりセツヒト語がうつった俺は、宿に戻ってきた。
今日はクエストも訓練も無し。

3日後の出版に向けて、色々準備をしなければならぬ。

「まずは……。」

宿の中を見回す。

この世界にやって来てから今日まで、この宿で寝泊まりしてきたわけで、もはや俺にとつての家は、ここである。

シヨウコはクエスト、ドールは買い物かな？

ホエールさんは……姿が見えないから、裏手だろうか。

「……誰から打ち明けたもんかなあ。」

「何を？」

「のわあ！」

ドールがいつの間にか、帰ってきていた。

いつものパーカーに、エプロン姿。買い物袋に大量の食材を抱えている。

「ご、ごめんね。びつくりした?」

「す、すまん。」

「ううん。こつちこそ。……ソウジさん。何か、打ち明けるの?」

「へ?」

「だって、さつき。」

「あ、ああ。」

ドールが心配そうな目で俺を見てくる。

今まで散々心配かけてきたからなあ。

今回もとんでもないことを言い出すのではと、不安になるのかもしれないよな。

「ドール、俺が遠いところに行くなんて言ったら、驚くか?」

「え……。」

「ああ、すまん。言い方が悪かった。実は冬の間、訓練を兼ねて北の方の村に行こうと

思っつな。」

「あ、ああ。何だ……。びっくりしたよ、もう。」

「すまん。どこかに消えてしまうわけではないから、安心してくれ。」

言い方が悪かったな。

まるで前の世界に戻ってしまふような、そんなニュアンスになってしまふところだった。

「うん、わかった。いってらっしゃい。気を付けて、行って来てね。」

「……お、おう。」

「……? どうしたの?」

「い、いやー、何と言いますか……。随分とあっさりとしているなあ、と。」

「え? あ、えーつとね……。違うよ?」

何と何が違うのかよくわからん。

もうちよつと、引き留めるまではないものの、何かしら寂しがられるかと思つていた。

……恥ずかしくなつてきたぞ。

「ち、違うのソウジさん！さ、さ、……寂しいんだよ？ソウジさんが遠くに行くなんて。」
「お、おお……。そうか……。」

何だろう、期待していた返事をもらつたら。

それはそれで、余計に恥ずかしくなってくる。

「え、えーつとね。……ほら、私ずっと宿屋にいるから、ハンターさんが冬にどこか行つてしまつて、よくあることなんだ。」

「ああ。そういうえば、冬はクエストが少なくなるって……。」

シガイアさんが言っていた気がする。

「だから、ソウジさんが、一時的にどこかに行くのは……さ、寂しいんだけど、大丈夫だよ。」

「そうか。確かにハンターたちって、一か所に留まるとは限らないもんなあ。」

「うん。移動するハンターさんって、結構いるよ。昔キャラバンでやってきたハンター

さんたちもいたんだ。……ごほん、大変だったなあ……。」

ドールさんが珍しく遠い目をしてらっしゃる。

辛い経験を思い出させてしまったようだ。

しかし、ドールも感情が豊かになったものである。

この前まで怒っていたと思ったら、今は普通に話しているし。
更に……。」

「じゃ、じゃあさ、ソウジさん。行く前に……その。……ん。」

「……撫でるのでしょうか？」

「……ん。」

「は、はい。わかりました。」

俺が頭を撫でるとか、俺を起こしにくるとか、とにかくそういうことになると、やけに積極的になるのである。

感情表現や意思表示が、豊かになったなあ、と思う。

そういえば頭などで、最近とんとご無沙汰だったなあ。

出発前に撫でておけ、ということだろうか。

……いつか俺はセクハラで捕まる気がする……。

ドールの栗色の髪の毛に、手のひらを乗せる。

ナデナデ。

「……。」

「んっ……。」

ナデナデ。

「……。」

「……ん……。」

気分は、お寺にある霊験あらたかな撫で地藏をさする感覚。

無事に帰ってこられますように。無事に帰ってこられますように。

「……………こ、こんなところか？」

「んっ……………うん、ありがと。」

「いや、お礼なんて。」

「……………何だか、お祈りされた気がする……………」

ドールさん、鋭い。

ドールは俺にとつて勝利の女神である。

無事に帰って、「ただいま」という相手。

この宿で待つ、ドールに伝えるのだ。

この子を泣かせるようなことは、したくない。

「無事に帰ってこられますようにって、お願いしたんだ。」

「……………私、お祈りの像なんかじゃないんだけど……………もう。」

少しむくれたドールに謝りつつ。

これからの遠征、気を付けていこうと、引き締まった俺だった。

* * * * *

次にシヨウコ。

宿でクエスト帰りのシヨウコと合流し、俺が北の方で訓練を行う旨を伝えた。返ってきた言葉は、これまた意外なものだった。

「ウチも行きたいところですけど、我慢します。……多分、セツヒトさんは、ご主人さま一人のレベルアップを想定しとると思います。」

「そうだよなあ。」

「……ウチかて今、クエスト受けまくってます。実力つけて、少しでもご主人さまのリベンジの力になりたいんです。」

「……ああ。」

「ちよつと寂しいですけど、行ってきてください、ご主人さま。……冬明け、帰って来たらまた、一緒にクエスト行きましょう！」

シヨウコはいつになく明るく俺を送り出してくれた。

シヨウコとともに冬山の特訓というのも考えていたのだが、おそらくセツヒトさんの

意図はそこには無い気がする。

それに……何と言うか、言うのは少しばかり悔しいのだが……シヨウコは最近楽しそうなのである。

恐らく今一緒にクエストをこなしている、ハンターとお友達のオトモアイルーのおかげなのだろう。

……なぜ俺は悔しがっているのか。

「ご主人さま……やっぱり、妬いてますよね？」

「やややや妬いてないわ！」

そしてそれを見透かされてシヨウコにいじられる始末である。

「もう……そんな顔、見せんと……本気にさせんでください……。」

「へ？本気？」

「……な、何でもありません……とりあえず！ご主人さまはいろんな人に挨拶があるんですよね？はい、行ってきてください！」

なぜか顔を赤くしたシヨウコに、宿を追い出されてしまった。
……まあいいか。次は誰に報告しようか……。

* * * * *

夕方。

腹も減ったので、次に向かったのはイシザキ亭。

ケイさんにお兄さん、オスズにも挨拶ができて一石三鳥である。

……ところがここで予想外の事態が。

「おお！ソウジ君では無いか！すっかり怪我の様子はいいようだな！」

「え?!教官!」

教官が酒をあおりながら、酒を呑んでいたのだ。

教官は俺を半ば強引に席まで引っ張り、その場で俺の快気祝い&壮行会が始まった。

……まあいいか。

残り3日、やることといえば挨拶回りぐらいだし。もう夜だし。

久々に教官と飲み交わす。

ちよつとだけ雪山のモンスターの話聞いたところ、ポポというモンスターの肉は絶品だから絶対に食べておけ、ということだった。

いや、そういうこと聞きたいんじゃないんだが。

本格的に酔っ払う前に、ケイさんとオスズにも挨拶しておく。

「はにゃ!? ショウコは一緒に行かないのかにゃ!？」

「は、はい、オスズさん。今日ショウコには話をしました。お互い冬の間レベルアップして、また冬が明けてから契約を結ぶ事にしました。」

「そ、そうですかにゃ……! ショウコ、大丈夫かにゃあ……。」

「そ、そんなに心配ですか?」

「……いや、ソウジ様も強くなるために行くんだにゃ。むしろ泣き言言ってたら、アチシが気合いを入れてやりますにゃ!」

「あ、ありがとうございます。」

よくわからんが、これでショウコが寂しくなると言うこともないだろう。

オスズさんは最近、この店でバイトとして、より精を出して働いているとのこと。今日も大きめの白いエプロンが、金髪とそのちっこい体格によく似合っている。

……賄いと弁当でその給与がほぼ相殺されていることも含めて、恐ろしい人物である。

「ソウジさん……寂しくなるねえ！」

「ケイさん。」

今まで挨拶をしてきた中で一番寂しそうにしてくれたのは、意外にもケイさんだった。

「ホント、寂しくなるよ……ソウジさん、またいつでも店に来てね！これが今生の別れてわけでも無いんだしさ！」

「……ケイさん？」

「いやあ……短い付き合いだっただけど、たくさん世話になったからねえ……。」

「あの一、ケイさん？」

「ほらこれ、持って置いておくれよ！ウチ特製のモグモガーリックソースの瓶詰め！ポ

ポノタンにもきつと合うからさ！」

「ケイさん……。」

あかん。

ケイさん、多分、完全に俺が戻ってこない前提で話をしている。

うーん。

「遠方に行くことになりました。」なんて中途半端な言い方をしたのがいけなかったのか。

「ケイさん、違います。」

「え？な、何がだい!?このソースじゃお気に召さなかったのかい!?ソウジさん、大好物だったじゃないの!」

「いえ、そうではなく。俺、冬の間だけです。遠方に行くの。」

「……え!?」

「ええ、ですからその……寂しがつて下さるのはとても嬉しいのですが……多分100日位したら帰ってきます。」

「……えええ!?あらら、そうなの!?アタシてつきり住む場所を変えるもんだと思って

……ああ、よかったあ……!」

一番寂しがってくれたケイさんも、ただの勘違いでした。

そこから、なぜかやくそになったケイさんも加わり、大宴会が始まった。

教官が脱いで下ネタを吐き、ケイさんがぶつ倒れ、俺が説教し、オスズが宴会芸を披露して。

実に楽しい夜になった。

* * * * *

深夜店を出ようとすると、イシザキさん（兄）に肩を叩かれた。

トントン。

「……。 (スツ。)」

「……。 い、イシザキさん、これは……。 いにしえの秘薬!? まさか、これを俺に……。?」

「……。 (ニコツ)」

「……………」

「……………」

「なんか喋れよ!!」

ありがたくも、餞別を頂いた。大事に使わせていただこう。

……………もちろん、ハンターの道具として、である。

アチラの方で使う予定はない……………。

何とも人恋しい思いをしながら、宿に帰って行く俺であった。

76 神様世界の近況報告を聞きましよう。

明くる朝。

ガンガンと頭の中で響く、昨晚の痛飲の名残。

「……………つ!!!」

……………急いで毒消しを服用し、何とか落ち着く。

この体でも、酒には強くなったと思っただが……………昨日は飲みすぎた……………。

なぜ酒とは、もう二度と飲むか!と思うのに、また飲まれてしまうのか。

不思議なものである。

「神界の歴史上でも、吞まれすぎた者はたくさんいます。」

「……………。」

「宴会で主神を誘い出す、なんていうお話もあります。……………元日本人の双治さんは、ご存知かと思えます。」

「……さて、今日はギルドの方に顔を出すか……。ランニングの用意をー」。

「おや、こんな所にシヨウコさんにスリスリされてドキドキしてしまう自分に悶々とする双治さんの独白が。」

「おおおはようございます！女神さまあ!!」

「はい、おはようございます、双治さん。お元気そうで何よりです。」

何!?

何なのこの神様!?

プライベートが筒抜けなのは百も承知だけど!!

俺のそういう独白は黙っておいて欲しい!!

「いきなりの顕現、申し訳ありません。驚かれましたか?」

「驚くわ!!寝起きに枕元に美女がいたらそら心臓止まりそうにもなるわ!!」

「起きてから既に気づかれているのに、自然と私をスルーするもので。」

起き抜けにベッドの横で女神さまが座っていたら。

想像してみしてほしい。

心臓止まるかと思った。

「無視してすみません。その……気分を落ち着けようとしたら、ついいつものルーティンになってしまいました。」

「無視されるのは、存外寂しいものです。」

「す、すみません。」

「気持ちよくもありました。」

「何言ってるんのこの神!?!」

なんかこの女神さま、会うたびにダメになっていくような……。

「あれ？シヨウコは？」

「シヨウコさんでしたら、つい先程出かけられました。」

「そうですか。」

どうしたんだろう。

いつも朝が早く、俺を起こしてくれるのだが、今日はいない。

「なのでそのスキにこちらに来ました。部屋の周囲に人払いのまじないをかけています。ご心配なく。」

「対策はバッチリですね……で、今日はどのような御用で？」

女神様と会うのは確か……：デインバルド戦で負傷して医務室で眠ろうとした時。めちやくちや美人がいきなり入ってきて、その時も驚いたものであるが……。今回の登場もまた心臓に悪い。

「本日は……。」

「本日は……?」

「遊びに来ました。」

「何ですと。」

意外すぎて普通の返しをしてしまった。

「案外、驚かれないものですね。普通、神が遊びに来たとすると、もはや宗教のトップの

レベルかと。」

「その辺はだいたい鍛えられていますので。」

「……。」

「……今、『つまらねえなあ』とか、思ってますん？」

「いいえ、思っておりません。」

「なぜ誤魔化すんですか……。」

女神さまは文字通り神出鬼没。

大体は現状報告をしてくれる。

だが今回は何だ、ただ遊びに来ただけなのか。

「とは言っても、顕現できるのはこの世界で言うところの、30分程です。」

「めっちゃ短いですね……。」

「仕方ありません。この世界の神をだま……交渉して、何とか時間を得ましたので。」

「今めっちゃ不穏な言葉が聞こえましたけど!？」

「酒を入れたら楽勝でした。」

「一服盛ったな……。」

……この女神さまが破天荒なのは、今に始まったことではない。
俺も本当に、慣れたものである。

「では本題です。」

「本題？」

「双治さんに関わる、SNSを始めとした話題の量が、安定してきました。」

「ああ、そつちの話ですね。」

俺……というより、俺を中心としたこの世界はどうやら、神界で大流行り中らしい。
らしい、というのは、まあ別に実際に見た訳では無いからだ。

願っても行けないだろうし、そんな世界。

「安定といっても、人気は高い水準を保っています。双治さんの成長を見守りたい層、周囲の方々の固定ファン層、もう何でも良いから萌え萌えしたい層など、あらゆるファン層が絡み合い、もはや私も何が何やらです。」

「最後のファン層は一体……。」

「はい、この何でも良いから〇〇したい層は、今やこのコンテンツに欠かせない大事なファン層です。若者が中心となつて、欲望のままに画像や映像を漁っています。」

「完全にやばい奴らじゃ無いですか……。」

『『何でも良いから双治さんとマシヨルクさんのカップリングが見たいのよ層』は、主婦層が中心です。よかつたですね、モテモテです。』

「完全にやばい奴らじゃねえか!!」

だから、何でこの女神様から聞く神様たちって、こんなに残念なの!?

おっさん同士の絡みのどこに需要があるのか!?

……ありました、奥様方に。

「なんか気分が悪くなってきました……。」

「二日酔いでしよう。次の報告に参ります。」

「冷たいな!!」

軽くあしらわれて、今度は女神さまが空中に指を向ける。

四角く空間を切り取るように指を動かすと、いきなり画面が浮き出てきた。

「おおお………！」

正しく、近未来。空中に画面が浮かんだ。

その中には、宇宙から見た美しい地球の映像が流れている。

S F 映画とかでしか見たことの無いような状況に、思わずため息をつく。

「前回、スケッチブックも双治さんにご好評いただいたのですが……パクられてしまいましたので、こちらの手法に変更しました。」

「パクられた………あー、あの時。」

元気を無くしてしまったシヨウウコを説得するために、アンケート結果をスケッチブックに書いたんだが……。

あれをパクリなどと言われては困る。

出来に関しては、その辺の小学生が作った方が、よほど上手いと思う。

「なので、この最新投影機を、ネットで購入しました。」

「神界にもネット販売とかあるんですね……。」

「高かったです、良い買い物だと思います。」

「……別にこんな機械を買わなくても、俺の情報画面に映して見せれば良いんじゃないですか？前も確か、そうされてましたよね？」

「……。」

「……。」

「……完全に忘れておりました。」

「ええ!？」

「双治さんの前に顕現できることの嬉しさに、ちよつとはしゃいで衝動買いしました。」

「どれだけ楽しみにしてるんですか……。」

人間臭い部分が見え隠れする女神様。

神様なんて、人間の目の前に顕現するなど滅多に無いことなのだろう。

それを2回続けてできるとなれば、はっちゃけちゃうものなのかも知れない。

「まあ気を取り直して。こちらの表をご覧ください。」

「は、はい。」

顔色ひとつ変えずに、女神さまは何やら操作を始めた。
表が映し出される。

「セツヒトさんに関するトレンドの勢いが、すごいことになっています。」

「この……検証スレって、何ですか？」

俺はその中の一つの表題について、疑問を投げかける。

「はい。私はセツヒトさんの素性について大体を把握しているのですが、情報はきっちり漏らさないようにしております。」

「……セツヒトさんのよく分からないところを、そのままボカして、敢えて検証させているってことですか？」

「はい、相変わらず察しが良くて助かります。……それで、そのようにしましたところ……このような感じに。」

スツスツ。

空中に浮かんだタッチパネルを操作するように、指を動かす女神さま。

……心なしかドヤ顔に見えるのは気の所為ではないと思う。

見せたかったんだな、これ。

「こちらです。」

ネットの掲示板のようなものが映し出される。

スレッドタイトル……スレ順……IDに日付に時間……。

……うん、これ完全に○ちゃんねる的なやつだわ。

「細部までお見せすることはできませんが、基本的にセツヒトさんの素性を考察している方、それにレスをつける方で二分されています。」

「へえ……。」

「今のところ、検証の中で有力なのは『実力をつけた孤高のソロハンターが何かしらの大決戦の後、引退。』説です。」

「……まあ、妥当ですね。」

「その『何かしら』についても検証が多数あり、細分化は難しいです。……また他には『ポツと出の超天才が調子こいた』説、『実は転生者』説、『ギルドの裏切り者』説、色々あります。」

よくもまあ、こんなに暇なことをしている神たちがいたものである。

「俺にその内容を話してもいいんですか？」

「問題ないかと。あくまで『推察されたもの』であり、事実とは限りません。」

「はあ。」

「大事なものは、このスレのあるコテハンが暴走し、この世界に現界しようと企んだことです。」

「あぶねえなあー！」

ちよつと待て。

この世界には干渉しないことがルールだったのでは。

「ルールは破られるものですから。」

「そのセリフを神様が言っちゃあおしまいでしょう……。」

「ご心配なく。アク禁と神格の凍結、並びに指名手配がかかりましたから。」

「結構キツイな!!」

「はい、それはもう。……アク禁前のこのコテハンと住民のレスバは、見ていて笑えませんでした。」

「止めてくださいよ……。」

「ウチのSNSとは何の関係も無い事ですし。」

結構ドライである。

何にせよ、この世界が平穏に済むなら何よりである。

と言うか、違う神様が首を突っ込むなんて、正直恐ろしいとしか言えない。

「あとはこの『セツヒトさん観察スレ』は、今のところ part 68までいく、人気のスレです。」

「パートスレってやつですね……ん？観察？」

「はい。主に双治さんが朝起こしに行くとき、大変な盛り上がりを見せます。」

「……………つまり？」

「裸が見たいだけ、ですね。」

「もう驚かない自分が怖い。」

セツヒトさんは、あの伝説の、寝るとき裸族。

普段の様子からあまり分からないかもしれないが、結構なスタイルの良さと、間違いなく美人顔の部類である。

……俺だつて若干期待してたし！

最近の装備にちよつとドキドキしてるし！

「ちなみに。このスレの方々は基本的に双治さんに好意的です。」

「え!? 何ですか!?!」

自分が好きな人の近くにいる奴なんて、邪魔でしかないと思うのだが。

「毎回クレクレ厨に裸を見るチャンスを与えてくれる双治さんは、ある意味崇められてるんです。」

「……神様たちに?」

「はい。」

「俺が？」

「はい。」

「崇められてる？」

「アホしかいませぬね。」

「おっしやる通りだよチクシヨウ！」

……その後も女神様のSNSよもやま話は続いた。

カップリング投票というよく分からん企画では、並みいる組み合わせを抑えて、見事「俺×教官」がトップに。

ちなみに2位は「教官×俺」になった辺り、本当に救いがない。

また、各ファンクラブの掲示板抗争はヒートアップの一途を辿っているという。中でもシヨウコとドールに関してはその勢いが凄まじいとか。

「○リコンしかいねえ！」

「双治さんはご存じないかと思いますが……実はお二人、顔を赤らめながら一緒に寝たことがありません。」

「え？何ですかそれ!？」

「前回私が顕現した時のことです。」

「あ！あの時か……。」

ドールもショウコも、俺を心配して泣いてくれたあの夜か。

「どうやら、お二人で、同じベッドに眠ったようです。」

「それは……。」

「その時はもう。ファンの心の叫びが凄まじく。」

「ああ……なるほど？」

「おかげであんなにいがみ合っていた両者が落ち着いてしまうという、珍事が起きました。」

「二人は仲良しですからね。」

『俺この光景だけでご飯三杯いける。』『尊すぎワロタ。』『俺この枕に転生して神格失うんだ……。』『ふう……。』など、大変な好評を博しました。」

「やっぱ○リコンしかいねえよ!!」

二人の寝顔によって、神界（ネットの）に平和が訪れたとかいういい話かと思つたら、やっぱり変態話だったよ!!

「ご心配なく。『ケイさんに挟まれたい』という〇リコンではないファン層も、まだ根強いです。」

「結局変態しかいないよ……。」

「ええ本当に。世も末かと。」

「神の言葉じゃないですソレ。救いなさいよ女神さま。」

こうして俺は、ランニングが始まるまでの30分間、女神様のとんでも神界話を聞かされる羽目になった。

罰当たりな方々だが、罰を与える側が罰当たりなことをしているわけで、もう手に負えない。

* * * * *

「……それでは、そろそろ現界の限界ですので。」

「……まさかそれが言いたいが為に、顕現したわけでは無いですよね？」

「……………」

「……………」

「失礼します。双治さん、北の地はモンスターがお強いそうです。お気をつけて。」

「……凶星か……………ご忠告ありがとうございます。」

「では……………」

露骨に話を切ると、スーツと消えていなくなる女神さま。

後には何事もなかったのように、ガランと静まり返る部屋。

「……………気にし過ぎたら負けだ。……………ランニング行こう。」

俺は部屋を出て、一緒にランニングに行くシヨウコを探し始めた。

* * * * *

「はいソウジさん、召し上がれ。」

ドールが朝食をテーブルに綺麗に並べる。

ランニングから帰ってきて、いつも通りのドールの食事。

今日は洋風。

白いフワフワのパンにバターが添えてあり、野菜がゴロゴロ入ったポトフからは湯気が立ち上る。

黒色でプルプルしたデザートは、ホエルさんお手製のコーヒーゼリーだという。

ミルクをかけていただく。

「はぁ……おいしい……。」

以前、二日酔い明けに食べたおかゆも絶品だったが……やわらかいパンにスープも悪くない。

コーヒーゼリーは甘さ控えめで、超俺好み。

ミルクに最高に合う。

「この毎日の幸せな食卓も、明日からしおばらくお別れなんだよなあ……。」

「だ、大丈夫だよ。また、帰ってきたら食べられるから。」

「……それもそうだな!……存分に今楽しむ!!」

「ふふ……あ、そんなに急いだら……ほら、ゼリーがほっぺに。」

「お、すまん。」

「あーだめだよ、服なんかで拭いたら。ほら。」

ドールが手拭いで俺のほっぺを拭いてくれる。

……なんかめっちゃ恥ずかしいぞこれ。

「あ、ありがとう、ドール。」

「う、ううん。……うん、綺麗になったよ。」

心なしかドールも恥ずかしそう。

「……私が目の前にいるっていうのに、二人は相変わらずねー!」

「ミヤコさん、朝から元気ですね。」

「そりゃ起き抜けにこんなシーンを見せられたらね。目も覚めます。」

「す、すいません。」

なぜか謝る俺。

ドールはいじられる空気を察して、水場に引つ込んでしまった。

逃げ足が速い!!

「まあいいんだけどね。そんなことよりソウジくん。聞いたわよ? 明日にもミヨシ村に
出発するんですって?」

「え? あ、ああはい。ミヤコさんにもちゃんと言わないと思うていたんですが、タイミ
ングがなく。すみません。」

「いいのよいいのよ、初め聞いたときは少し驚いちゃったけど、春には帰ってくるって話
だしね。」

今朝会えなかったら、ギルドに行くタイミングで伝えようと思っていた。

タイミングが合ってよかった。

「実は私も、そろそろザキミーユに戻らないといけなくてね……。」

「え？そんなんですか!？」

「そうなの……実はあんまり居心地がいいものだから長くいたんだけど……とつとと帰って来いって上司に通告くらっちゃってね。」

「そうなんですか……。」

「そうなの。ねえドール？私もソウジ君もいなくなっちゃ、寂しいでしょー？お母さん、ドールがどうしてもっていうならもうちよつとだけいようかなー？」

ミヤコさんが大声で水場にいるドールに声をかける。

タオルで手を拭きながら、ドールがこちらにやってきた。

「娘を口実にしないで、お母さん。ちゃんと仕事してきてください。」

「娘が反抗期!？」

いやいや、反抗期って、あなた。

ドールが言うことはごもつともものだが、まあミヤコさんがショックを受けるのもうなずける。

ドールは本当に、品行方正な超絶いい子なのだ。

「お母さん……ち、違うよ？寂しいは寂しいんだけど……ソウジさんもお母さんも頑張っているから、私も頑張ろうって思えるとか……。この宿を、しっかり切り盛りしないといけないから。おじいちゃんと、一緒に。」

「ど、ドール……！」

あ、ミヤコさんの目がウルウルしている。

ガバツ！

「ひゃっ!!」

「もう！どうやったたら私とあの人の間にこんないい娘が生まれるのかしら！神様ありがとうございますう！」

「お、お母さん……。」

急に抱き着かれたドールは、困りつつも少し嬉しそう。

うんうん、美しき哉、親子愛。

……神様に感謝の部分については、いろいろあった俺としては、微妙に同意しかねるが……。

「ソウジ君！こうなったらもう、ドールのお婿さんになれますチケットの相場は、跳ね上がりよー！」

「何を言ってるんですか急に!？」

「こない子嫁に出す母の気持ち……ああ！やつぱりドールかわいい！そう簡単にドールは嫁にはあげないわ！どうしても言うならまず、ドールを私から奪い取って見せなさい！そしてそのまま熱い口づけを……。」

暴走ミヤコさん。

こうなったらもう手は付けられない。

この人、仕事中はすごいバリバリキャリアウーマンなのになあ。今も格好は黒のスーツ姿だし。

プライベートはたまにこうやって暴走超特急になる。

そしてこうなると大抵。

この宿の看板娘が、この暴走車両を緊急停止してくれる。

「お母さん……?」

「へ?ど、ドール!?急に怖い顔してどうしたの!」

「む、娘を捕まえてソウジさんに奪い取るとか、く、口づけとか……。」

「あ、あらら?……お母さん、またやっちゃった?」

こつちを向いて確認してくるミヤコさん。

俺はゆつくりと頷く。

はい、またやっちゃいましたね。

「そ、ソウジ君!こうなったらもう公然の事実を作るのよ!今すぐ抱きしめて奪い取っちゃつて!そうしたら私も助かるー!」

「お母さん?」

「は、はい?な、なあに?ドール?」

おお、すごい。

完全に蛇に睨まれた蛙。

リオレウスに睨まれたアプトノス。

「もう知らない。おかあさん。夕飯も抜き。」

「えええ!? 『も』つて何!?! 朝ごはんは!?! 朝ごはんー!」

「当然、ありません。」

「そ、そんな……。」

チーン。

真っ白になるミヤコさん。

うんうん。このうまい飯を今日一日もう食べないなんて、そりやそうなるよな。

……まあ完全に自業自得なので、俺は何も言わずに最後のコーヒーゼリーを口に入れた。

ちなみにこの絶品ゼリーを作ったホエールさんが

「この愉快なやりとりも、しばらく見られんのー。」

と、呑気に笑っていた。
うーん、様式美。落ち着くぜ。

……アホなこと言っていないで、シヨウコを探しに行くか。
実は朝も、この朝食時も、シヨウコとは会えていない。
ランニングもしておらず、少し気になる。

「ドール、今日は夕飯もお願いできるか？」

「あ、わかった。じゃあ、用意しておくね。……あ、ごめん……ソウジさん、シヨウコちゃんから伝言があつたんだった。」

「え？そんなのか？」

「うん。今朝早く、宿を出ていく時にね。『ギルドに来てください』って。言ってたよ？」
「そうか……わかった、ありがとう、ドール。」

ギルドに行けば会えるのか？

うーん、何があるのだろうか。

気になる。とつとつと行くか。

「それじゃ、ドール、ホエールさん。行ってきま……。」

「……。」

「……。」

「……ん。」

「す、すまん。忘れてた。」

頭を差し出ししながら、上目遣いで見つめてくるドール。

断るのも怖いので、撫でさせてもらおう。

この場にドールの近親者がいるのだが……あまり気にしなくなってきたなあ。まあミヤコさんは真っ白だし、ホエールさんはいつも通りだし、いつか。

日課の頭ナデナデをしながら、今日一日の無事を祈願する俺であった。

77 残りの方にも、挨拶をしましょう。

朝のギルドは相変わらず混んでいた。

とは言っても、軽装のハンターも多い。

討伐や捕獲のクエスト量が減るに従って、比例してハンターの格好も変わってきているのが分かる。

採取や運搬のクエストは、人が生活を送る限り消えることは無いようで、ラフな格好に大きな荷物を持った連中がそこかしこに屯っている。

いつものガチガチの装備に身を包んだハンターがいる景色と比べると、まるで紅葉のようである。

ギルドの壁側に移動し、シヨウコを探す。

……いつもならあの子に熱い視線を送る輩がいるので、それを迎ればすぐに分かるのだが……いない。

まだ着いていないのだろうか。

キヨロキヨロしていたら、シヨウコではなく、違う人物に声をかけられた。

「ソウジさん、おはようございます。」

「あつ、ハイビスさん。おはようございます。」

ハイビスさんである。

今日もアツプのブロンドヘアーに、受付嬢の制服が似合っている。

「……ソウジさん、やたら不審な動きをされていましたが、どうかしましたか？」

「うっ……いや、それはすみません……実はショウコを探してまして。」

「ショウコさんですか？ 私の知る限りでは、今日はまだいらしてないと思いますが……。」

どうやら不審がられて声をかけられてようだ。

……申し訳ない限りである。

しかし……ショウコは来ていない？

だとしたら、ショウコが俺をここに呼び出したのは何故だろう。

うーん……。

……考えてもわからん。

「……あ、そ、そういえば。」

ハイビスさんが何かを思い出したかのように声を出す。

「ソウジさん、ミヨシ村に行かれるんですよね？」

「……ええ。そうなんです。シガイアさんに聞きましたか？」

「え、ええ。まあ、そんなところ……です。」

「……………」

何だろう。

歯切れが悪い。

「ソウジさん、と、遠くの地に行かれるのは初めてですよね？」

「は。はい。」

「その……お一人だと、中々分らないことも多そうですよね？」

「ま、まあ、そうですね。何せこの村……町？ 以外の方が住む場所なんて、行ったことが

ありませんし……。」

転生してからバサルモスに襲われ、何とかこのワサドラにたどり着いた。

そこから寝泊まりは、殆どが宿『ホエール』である。

俺は外の世界を全く知らない。

一度ミヤコさん、というか首都ザキミーユのギルドにスカウトを受けたことがあるが、丁重にお断りさせて貰ったし。

クエストで村の外に行くことはあつたが、違う村や街に行った事はない。

「わかります……ふ、不安になりますよね！」

「でも……このギフトもありますし、セツヒトさんも同行してくれるんで、多分大丈夫ですよ?。」

「そうですね……で、ででもですね!……こう……近くに頼りになる人がいたら……心強いですよね!。」

「は、はい、そうですね。」

「例えば、腕利きのハンターとか……知り合いのギルド関係者とかいたら!……頼もしいですよね!。」

「お、おっしやる通りかと。」

鼻息が荒い！

何だ？今日のハイビスさんはいつにもなく必死な感じがする！

その整いすぎたご尊顔が近い！美人だな！

「じゃあ！その……頼もしく力になる人が一緒に行ってくれるとなると、嬉しいですね！」

「は、はい。俺なんかに着いてきてきくれる方がいるなら、そりやありがたいですけど。」

「で、ですよね！そうですよね！よし……。」

「……………？」

ガッツポーズをしながら、ニコニコ顔でいらっしやるハイビスさん。
もしかして、誰かついてきてくれる人でもいるんだろうか。

「……………どなたかご紹介してくださいませんか？」

「へ!？」

素っ頓狂な返事をするハイビスさん。

普段はこんな姿は見ないので、新鮮である。

「いや、だから……話の流れ的に、俺にどなたか着いてきてくださるって言うことでは……?」

「あ、あーあー、はいそうですね……そういうことになるよう……私の方で手配をしておきますので……!」

「……?じゃ、じゃあどなたになるんで——」

「あーいけない! 私そろそろギルドの方に行かなくては! それではソウジさん? 出発は明日ですよね? ご準備などもあるでしょうし、私は失礼しますね。」

「え!? は、はい、分かりました。」

確かにギルドは忙しそうなんだが……ハイビスさんの話の切り方が強引すぎる。

「よーし……それでは、しし失礼しまふ!」

そう言うと、ハイビスさんはピューンと仕事に戻っていった。

……最後囁んだな……。

でも、俺のことをサポートするような方が、なぜ付くのか。

言っってしまったば、まだまだペーパーの俺である。

……逆か？新人の頼りない俺だからこそ、ついて来る人が必要ってことか。

……うん、そっちの方がしっくりくる。

こう言っちなやなんだが、セツヒトさんは頼りになるものの、普段の生活に関しては微妙によく分かんというか。

だからかな、まあよくわからんけど。

……あれ？あつちの生活って、セツヒトさんと一緒なんだよな？

まさか宿の部屋は……？

……。

……。

スキル! 気にしない!

よし、問題は何も解決していないが、時の流れに身を任そう。

邪なことを考えないようにしつつ、俺は壁にもたれながらシヨウコを待つことになった。

* * * * *

「結局昼だな……。」

時刻はもうすぐ正午。

シヨウコは現れない。

さすがに腹の虫が鳴ってきたので、ギルド内のバルで軽食をとることにした。

ギルドの喧騒はすっかり止み、一番人がいない時間。

そんな中、寂しく飯を食う男が一人。

傍から見たら完全に仕事にあづけたものには見えなと思う。

……あれ? 今俺ってニート状態?

いやいやいや、確かにクエストこそ受けてはいないが、ハンターとして登録されてい

る訳であつて。

でも待てよ……なにかしらの職業免許を持っていても、職につけない人はそれこそ沢山いる。

訓練中……あ、ニートのTってトレニングで、俺は職業訓練中の扱いだから……。

よしよし、ニートじゃない、俺はニートじゃないぞ。

……でも待てよ……俺は今税金を払っていない事になる……ハンターは、狩猟の成果から税金など天引きされるシステムだったはずだから、世間的にはやはりニートに属するの……？

はいはいいや、これからその世間に貢献するために訓練をしているわけであつてそれは——

「ご主人さま！おまたせしました！」

「うわあお！」

ガタガタ！

くだらないことを考えていたら、急に声をかけられてビックリしてしまった。

「しよ、シヨウコ!？」

「ご、ご主人さま!すみません驚かせて!そしてお待ちさせてしまつて本当にすみませ
ん!堪忍です!」

「い、いや、油断していた俺が悪い……シヨウコ、おはよう。」

「ははは……完全にもう昼ですけどね……。」

俺のテーブルには軽食の跡とコップが2つ。

ずっと待っていましたと言わんばかりの主張具合である。

「いや、大丈夫だ。時間はあるしな。」

「すみません……その……これの加工に時間がかかりまして……。」

「加工?」

「はい……ご主人さま、どうぞ。」

そう言うと、シヨウコは何やらゴツゴツした輪つかを俺に差し出した。
長さ7センチメートルぐらいの……おそらく腕輪だろう。

ガラス玉のようなものが数個くつついており、鈍く輝いているのがわかる。

「それ、持っていてください。」

「え……………」

「その…………何の力にもなれんかもしれませんが、それを付けると、ハンターのスキルが身につきやすくなるらしいです。」

「ま、まさかシヨウゴ…………これを、俺の為に用意してくれたのか!？」

「え、えーつと、そうですね…………なーんて、胸張つて言えたら良かったんですが…………ちやうんです。実は…………。」

シヨウゴが事情を説明してくれた。

俺と別行動していたこの期間、件のハンターとそのオトモアイルと様々な場所に行っていた。

何日間か宿に戻らずにクエストをこなす、なんていう日もあった。

ある時、北西に位置する岩山の近くで、良質な護石の元になる鉱石が取れる場所があると聞き、三人でその場所へ行ってみたらしい。

「それで、その辺の鉱石を掘ってみたんですが……ただ……。」

「ただ?」

「ウチ、超絶運が無いというか……。ホンマにそういう運、無いみたいで……。」

「運?」

何でもこの鉱石掘り、全く見分けがつかない鉱脈をピッケルで掘っては移動し、掘っては移動しを繰り返すもの。

掘った時点では、見た目には全く分からないただの鈍く光る石。

これを装飾品や加工を行う専門店に持っていき、査定してもらおう。

査定の結果、良質なもの、つまりスキルが身につきやすくなる効果のあるものは「良おま」、ものすごく効果の高いものは「神おま」なんて呼ばれるらしい。

結果は専門の高価な器具を使わないと分からず、多くの査定を頼むと費用もそれなりに値段もかかるとの事。

そうして売られた鉱石は、加工屋などの手によって加工され、ハンターたちが身につける商品になるのだとか。

値段もピンキリで。

ここまで聞いて思った。

これはまさに運任せ。完全にギャンブルである。その「神おま」というのが、一つで何をするのかは分からないが……。

「シヨウコの運がなかったってことは、つまり……。」

「ええ……ウチの掘った中に、スキルが付きそうなものは一つも無かったです……逆に珍しいと、店のおっちゃんにも驚かれました……。」

シヨウコはその日頑張って20個、鉱石を採掘してみたが、その尽くがハズレ。費用対効果が悪すぎる……と言うかシヨウコの運が悪すぎるのか。

「で、でも、この腕輪は効果があるんじゃないか?……ちよつと見てみるか。」

「え?ご主人さま、スキルの効果とか見られるんですか?」

「わからんが、ギフトを使えば……。」

試しに腕輪を装着。ギフトを起動してみる。

〈装備〉から〈護石装備〉を選択してみると……あ、やっぱり見られる。

何々……回避距離Lv. 1……弱点特効Lv. 2……それにその文字列の下に○が

2つ……この〇は何だ？

「うん……よく分からないが、スキル名がわかるぞ。」

「す、すごいですご主人さま。それって普通、器具を通さんとわからんようなものですよ？」

「らしいな……。シヨウゴ、これ本当にもらつてもいいのか？もしかしたら結構な高値で売れるかも知れないぞ？」

「えつと……実はそれ、フェニクさんから頂いた鉱石を鑑定した護石が元なんです。ウチがたくさん採掘しとるのを見て、足しにしてつて渡してくれて。そしたらその鉱石だけやたら効果が高いもので、お店のおっちゃんも興奮しました。」

「例のハンターから貰ったものか。」

「はい。うちの石はヒドイもんでしたが……。なので、今更お返しするのも気が引けますし、何よりご主人さまに役立ててほしいので。あ、ちなみにウチらアイルーは装備できませんよ？」

「そうか……。で、でも費用は？」

「プレゼントですし……ぶっちゃけますと、持ち込みなので加工代金だけでした。」

「そうか……。」

頂くことにした。

「シヨウゴ、ありがとう。俺のためにこんなもの用意してくれて……。」

「いやいやいや！いつもお世話になってますし……ご主人さまが遠方に行くとか関係なく、用意しようと思ってましたから。」

「……うん、大切にするよ。」

付くスキルとか、値段とか運とか、正直なところどうでも良い。

こうしてシヨウゴが頑張って、俺にプレゼントをくれたことが嬉しかった。

まあ、せつかく頂いたものだから、スキルの確認とかは後でやろう。

もしかしたらセツヒトさんとか詳しいかもしれないし。

「でも、ウチ、その岩山に驚かされました。」

「ん？そんなに珍しいところだったのか？」

唐突にシヨウウコが言う。

「ウチとフェニクさんとトツバは、まあ和気あいあいと楽しく鉱石を探しておったんですけど……。なんか周りの人らのピツケル振るう顔が……。死に物狂い？ いや、目が死んでいる？ 感じでした。」

「そりや……。当たればデカいんだろうから、一攫千金でも狙っていたんじゃないか？」

「みなさん『おま……。』『かみおま……。』とかブツブツつぶやきながら、ずつとピツケル振ってるんです。……。憑りつかれているかのように。」

「怖いな……。」

ギャンブルに取り憑かれた者達なのだろうか。

見てみなければ真偽はわからないが。

「いや、嬉しい。嬉しいよ、シヨウウコ。」

「あ、ありがとうございます。ご主人さま。」

「何でシヨウウコが礼を言うんだ。こつちがありがとう、だよ。うん。」

「はい……。」

照れているのか、モジモジしているシヨウコ。

「良かったあ、ウチ、贈り物とか初めてで、喜んでくれるか心配やったんです。ホンマに。」

「何を言う。シヨウコのくれるものなら何でも嬉しいのに、こんな実用的なもの。……
ありがたく使わせてもらおうよ。」

「はい！北の狩り場で、存分に使ってください！」

「ああ！わかった！」

シヨウコとはそこで別れた。

これからまた泊まり込みでクエストに行くらしい。

「気をつけるんだぞ、シヨウコ。あと、フェニクさんと……トツバ、だったか。よろしく伝えておいてほしい。」

「はい！ウチも……強くなって、ご主人さまの役に立ちたいですから。」

「ああ。それじゃ、またな！」

「はー」

ギルドを出ていくシヨウコ。

足早な姿に、照れている様子が見て取れた。

なんとも微笑ましい。

俺はシヨウコがいなくなるまで、手を振り続けるのだった。

78 出発しましょう。

いよいよミヨシ村に出発する朝。

日課のランニングと朝食を終え、集合場所のガーグア車乗り場に着く。

頬に当たる風はまだ暖かく、これから冬本番を迎えるなど微塵も感じさせない陽気である。

でも、ガーグアの毛が心なしかフサフサになっていたり、遠くの山々の色づきが明らかになっていたり、季節の移ろいを視覚的に感じる。

「これから冬山かあ。」

あちらはすでに寒いのだろうか。

ガーグア車で5日ばかりの距離のところそんな寒いとも思えないのだが、一応冬の支度は整えてきた。

とは言え、装備はセツヒトさん任せである。

寒冷地仕様と言っていたけど、実際どうなんだろうな。

……まあ、プロにおまかせしよう。

ちなみに今は、ギフトのポーチにたんまりと食料とか衣服を詰め合わせている。

「このポーチで良かったなあ……本格的に用意したら、バック2つじやすまなかつただらうし。」

昨日はギルドでシウウコと別れた後、服とか食べ物とか、必需品を買い込んだ。

結構な量だったが、俺の荷物はポーチ一つで済んでしまう。

怪しまれないよう、ダミーで何個かバッグを常に用意しているが、身軽なのはとてもありがたい。

おそらく大荷物で来るであろうセツヒトさんのことを思いながら、朝の騒がしいガーグア車乗り場を眺めて待つ。

「しかし朝は大変だったな……。」

結局ミヤコさんも、同じタイミングで宿を出ることになった。

それはまあいいとして、そこで色々あった。

事の流れとしては

2人もいなくなることになったので、ミヤコさんがドールを心配する

↓そんなミヤコさんにドールが淡々と大丈夫と返事

↓強がらないでいいのよと、過剰に抱きつくミヤコさん

↓嫌がりつつも照れるドール

↓スキんシツプがエスカレートするミヤコさん

↓流石にやめて欲しいとドール

↓いつもの暴走特急ミヤコ号

↓ドール、叱る

↓鈍行列車となったミヤコさん、ギルドまでトボトボと歩く

こんな感じ。

なんちゆう分かれ方をするんだあの親子は。

ちなみに俺は、宿の入口で頭ナデナデを強要された。

流石にやめとくかと思っていたら、無言で頭を差し出すものだから、俺もセクハラ野郎のレットルを貼られる覚悟を決めた。

宿の入口の前で、色んな人の目があったのだが、まあ人の噂は七十五日とか言うし

……。

気にしないことにした。

そして今に至る。

「……セツヒトさん、まだかなあ。」

そんなに長くは待っていないのだが、思い出して恥ずかしくなり、気持ちを吹っ切るように独り言ちた。

村の中心部の方から、やたら大荷物でこちらに来る人たち。

あの人達も、どこか遠くに行くんだらうなあ。

ほら、あの金髪の人も……ひと……んん!?

「は、ハイビスさん!」

「あ……おはようございます! ソウジさん。」

美人がこつちにやってくるなあと思ったら、知ってる顔だった。

いつもの制服とは違う格好で、気づくのが遅れた。

「お、おはようございます……その大荷物は……?」

「え、えーつとですね……説明すると長くなると言いますか……。」
「は、はい。」

「……………ソウジさんの遠征で……私がついていくことになりました。」

「……………終わり？」

「……………(コクン)。」

「いや、説明短い！」

でかいポストンバッグを二つ、一生懸命に抱えてやってきたハイビスさん。

……………え？何で？ハイビスさん？

そう言えば昨日言っていたついてくるかも知れないスタッフって……。

「ハイビスさんが着いてきて下さるんですか!？」

そういえば昨日ギルドに行った時、そんな話をしたような。

いかん、ショウコからのプレゼントが嬉しすぎて忘れていた。

「い、いやー、…………その、何と言いますか、こうなりましたハイ。」

「は、はあ……。」

「で、でもでも、安心してください！私いっぱい予習してきましたから！それに、ギルド関係のお仕事は一通りできますし……な、何よりソウジさんのことをよく知る仲ですしね！」

「……確かに、それは大事なポイントです。」

「そうなんです。ギルドマスターも、その辺の機密漏洩については心配してまして。そこで、専属受付嬢の私が行くことになった、という次第です。」

「なるほど……納得です。」

専属の部分を、やたら主張するハイビスさん。

予習とか言う辺り、かなり気合が感じられる。

でもまあ確かに、あちらで何かしらのクエストを受けたりギフトに関わる話をしたりする時はどうしようかと思っていた。

ギルドに1人、事情を知る人がいるなら、なんとも心強い。

「いや、でも驚きました。ワサドラのギルドは大丈夫なんですか？その、仕事というか、人手とか、色々。」

「実は私がどうしても行きた……ではなく、シガイアから出張の命令が出まして、それであることに。ですからこれも業務の一つです。ご心配なく。」

「そうですか。……でも、よかったです。色々ご存知なハイビスさんが一緒なら、助かります。」

「え、ええ。お力になれると良いんですが……。実は違う仕事も何件か任されています。並行して、ソウジさんのサポートをさせていただくことになります。よろしく願いますね。」

「はい、よろしくお願いいたします。」

笑顔が眩しい。

うん。

驚きはしたが、確かに納得の人選。

シガイアさんが言っていた「手を打つ」って、この事だったのかな？

こんなペーパーの新人に、ありがたい限りである。

……能力を絶対に漏らさないという強い意志も感じられる……。

あの人には逆らってはいけない気がする。うん。

「それですね、ソウジさん。不躰ながら、お願いがありました。」
「はい、何でしょう。」

ハキハキと話す、いつものハイビスさんに戻ってきた。

相変わらず美しいご尊顔に目を奪われてしまうが、そこは中身おっさん。

心は平を保つ。

ちなみにハイビスさんの今日の格好は、長旅を想定してか、いつもの受付嬢制服ではない。

厚手の灰色セーターに、下は長い丈のパンツスタイル。

焦茶色のムートンブーツは、ふくらはぎまでの高さがある。

さらには右手にフード付きの白い上着まで用意している。

防寒は完璧そうだが、今現在は非常に暑そうだ。

「この格好でもまだ寒いと先輩に忠告されて、一応上着も何着か用意したんですが……
その、荷物が大変なことになってしまつて。」

「ああ、そうですね。確かに重そうだ。」

地面に下ろしたバッグ類も合わせると、結構な量である。

さすが女の子。ファッションも機能性も考えていくと、服だけでもかなりの量になりそうだ。

「本当に失礼なお願いになるんですが……ソウジさんのポーチに入ったりしませんか？」

「え？俺のポーチに？」

「はい、例のアレに。……す、すみませんいきなりこんなこと。」

「い、いやいや。良いんですよ。……試してみますけど……すみません、多分無理かと。」

「え!?!そ、そうですか……。」

少し肩を落としてしまうハイビスさん。

うーん……。

試しにハイビスさんの荷物を一つ拝借。

だが、どうしようもない。俺の所有物として、ギフトが認識しないのだから。

「うん、無理っぽいですね。どうやら俺の所有物として認識されないといけないみたい

で……。」

「しよ、所有物……。」

「はい、それができたら、街中で窃盗とか簡単にできちゃうんでしようけど、まあ無理でしよう。」

人の物まで簡単にポーチに入れられたら、俺は世紀の大怪盗になれるだろう。
まあしないけど。

「シヨウコの物は預かれたんだけどなあ……。オトモだからかな。」

「……私の物が、ソウジさんの物になれば良いんですね？」

「ま、まあそうなりますかね。やってみないとわかりませんけど。」

「じゃあ……はい、『私のものは全て双治さんのものです。』……どうでしょう。」

「……面白いですね、見てみます。」

もう一度ポーチに触れてギフトを起動。

バッグを触ってみる。

ス……。

「!?!」

バッグが消えた……。

試しに〈アイテム〉から一覧を開くと……あつたよ……〈ポストンバッグ〉。

「あ、ありました……できましたよ、ハイビスさん。」

「す、すごいですーうわぁ……手品でも見ているようでした……。」

「でもこれで、ハイビスさんの荷物も預かれますね。今しまいます。……あ、ダミーにつぐらいいは大きな荷物を持っておくと良いですよ。」

「な、なるほど。これで誤魔化すわけですね。」

「はい。結構大事な事なんで。」

そう言いながら、ハイビスさんの荷物を、周囲に見えないようにギフトにしまつていく。

俺の物として認識されたからしまえるんだろうが……基準はそんなに曖昧で良いの

か？

うーん、こればかりは仕様としか言えないからなあ。俺にもどうしようもできないわけ。

今度女神様に会ったら聞いてみよう。

アイテム一覧に荷物が入っているか確認する。

お、あるある……。〈ポストンバッグ1〉〈ポストンバッグ2〉と、同様のものは番号までふられている。

結構柔軟にできているんだな、このギフト。

ふと、その〈ポストンバッグ2〉を選択する。

すると、その中身まで一覧が出てきた。

……。

「……………ぶっ!!」

「え!? どうされました!? ソウジさん!」

「い、いえ、何でもありません。」

「そ、そうですか？もし無理されているようでしたら、やはり荷物は……。」

「い、いやいや、ただむせただけですから。ご心配なく。」

「は、はあ。」

……うまく誤魔化せただろうか。

……忘れていた。ショウコの荷物を預かるときも似たような事で一悶着あったのだが……。

このへポストンバッグ2の中身は、どうやら下着類や化粧品など、女性が使うようなものが詰まっているようである。

なのでその……見えてしまった。へブラジャー（白1）とかへパンティ（黒2）とか。他にも色々。

……もはや見てしまったものは仕方がない。

俺はアイテム一覧をそつと閉じ、その中身は見ないことに決めた。

「……？」

心配そうにハイビスさんがこちらを除いてくる。

すみません……あなたの下着の種類を見てしまいました。

黒系は二種類用意しているんですね……。

……やめやめ!! 完全に思考がスケベオヤジだぞ!!

俺は素数を数えながら、不思議がるハイビスさんを横目に、セツヒトさんを待つことにした。

早く来て……セツヒトさん……。

* * * * *

待つこと10分程。

ようやく宿の方面から、片手にバカでかいスーツケースと風呂敷を抱えた人物が一人。

あの長い銀髪は間違いない。

セツヒトさんである。

「おーまたせー。ごめんソウジー。待ったー?」

「待ちました。遅いです。」

「おお……そんなにはつきり言うソウジも珍しー。ごめんねー、遅れちゃってー。」

軽々と荷物を地面に置くセツヒトさん。

その様子とは裏腹に、荷物を置く音はドスンと重く響いた。

「……めっちゃ重そうですね……その荷物。」

「そーなんだよー。結構な量になっちゃってねー……あれ?……もしかして、ハイビスさん?」

セツヒトさんが、俺の後ろにいた人物に気がつく。

「ど、どうも。ギルドからミヨシ村に一時派遣されることになりました、ハイビスですー。」

「わっ、それはそれはー。そっかー、シガイアさんが言ってたのって、こう言うことかー。うん、よろしくねー。」

「はいー!」

呑み込みが早いセツヒトさん。

すると、挨拶もそこそこに、ハイビスさんが一通の手紙を取り出した。

「これを、シガイアから、預かっております。」

「おー？なんだろうー？」

「私も中身までは……。ただ、セツヒトさんに見せるようにと仰せつかっております。」
「りよーかい。どれ……。ふんふん……。」

セツヒトさんが手紙を読み始める。

10秒ほどで読み終えて顔を上げると、少し笑っていた。

「……ふふーん、そう言うことー。」

「?？」

俺とハイビスさん、二人して頭に「？」が浮かぶ。

……何て書いてあったのだろうか。

尋ねてみる。

「セツヒトさん、何か重要なことですか？」

「いやいやー、ちよーくだらないこと。ふふーん、面白くなりそうだねー。」

「は、はあ……。」

相変わらずのセツヒト語、主語も目的格もない言いぶりからは、内容が全く読み取れない。

「ま、気にしないでよー。それよりソウジー？」

「はい、何でしょう?」

早々に話を切り上げて、セツヒトさんが俺に近づいてくる。

「ほらー、目の前のか弱い女性がー、おっきな荷物を持っているよー?」

「はい、そうですね。」

か弱いとはどう言うことか。

と、突っ込んではいけない。恐ろしすぎる。

「だからー、荷物。持ってくれるー？」

「え!? いや、持てるっちゃ持てますが……。」

「じゃー、よろしくー。」

ポイ。

重そうなスーツケースを、いとも最も簡単に放ってくるセツヒトさん。

ガシッ。

ズン!

重っ!! こ、これ重いわ!!!

「おお……何が入ってるんですか……これ……!?!」

「えー?色々ー。いやーんソウジ、そんなこと聞いちやうのー?」

「ち、違いますよ!?!あと……預かるにもコツがいると言うか……。」

「へ?コツー?」

「せ、セツヒトさん。」

ハイビスさんが助け舟を出してくれる。

「ソウジさんの例のアレを使うには、荷物を『ソウジさんの所有物です』と宣言しなければならぬんです。」

「えー?そうなのー?」

「はい、私もそれで、持っていたいています。」

「そつかー。じゃー……『私はソウジのモノー』……これで良いー?」

「ちよつと……ニュアンスが違う!!」

それじゃ完全に俺がセツヒトさんのご主人様になつてしまう!!

いや、そうじゃねえ……!

だめだ、腕が痺れてきた。

「せ、セセツヒトさん！それではちよつと意味が変わってしまいます……！」
「ハイビスさん顔真つ赤ー。ちよつとからかったただけだよー。じゃー……『私の荷物はソウジのものー』……これでいいー？」

言うや否や、ギフトを起動。

たちまち、超重量のスーツケースがスツと消える。

「はあっ……重かった……。」

「おおー、すごいねー……これは初めて見たけど、ソウジこれだけで食っていけるんじゃない？」

「そ、そうですね。……ソウジさん、大丈夫ですか？」

「は、はい。ご心配なく……。」

めつちや重かった。何が入っていたんだアレ。

「ごめんねー、からかつちやつて。」

「い、いえいえ……ブフォツ!!」

「そ、ソウジさん？本当に大丈夫ですか!？」

ハイビスさんが、吹き出した俺を再び心配してくれる。

吹き出した理由はただ一つ。

セツヒトさんの荷物の中身を、見てしまったのである。

〈携帯食料〉とか〈ネット〉とかまあその辺は良いとして、例によって下着まで一覽で見えてしまった。

すぐさまギフトを切ったが、一瞬だけ見えた。

「大人の」とか「紐」とか……「スケルトン」って……。

「大丈夫です……同じ過ちを繰り返したただけですから……。」

「は、はあ。無理はされなくてくださいね。」

とんでもないものを見てしまった。

これから数ヶ月、生活を共にする相手の下着の種類を見てしまった。

……忘れてしまおう。

やっていることは、大変失礼なことであるからして。

黙ってよう……。

「あ、そーだ、ソウジー。これも、返すねー。」

「あ、はい！」

セツヒトさんが、もう一つの荷物の風呂敷を渡してくる。

中には俺の装備が入っていた。

「内側にポポの皮膜、関節部には毛皮とかー、とにかく寒くないようにしてみましたよー。」

「あっち着いたら、試してみよー？」

「は、はい！ありがとうございますー！」

動きやすい感じはそのままに、暖かそうな装備に変わっている。

〈装備〉の方にしまってみると、〈ミヨシ村一式（寒冷地仕様）〉と変化していた。

柔軟なギフトである。

「この場でも装備できるんだらうけどー……人目がない方がいいよねー。まーあつち着いてからで良いよー。」

「はい。本当に、ありがとうございます。お代は……。」

「んー。じゃーその分は、荷物持ち、よろしくねー？ハイビスさんと私とー。」

「も、もちろん。お安い御用……です……。」

お安い御用だ。

なのだが。

「……ソウジさん、顔赤くないですか？」

「いやいや！そんなことはないですよ!？」

お安いどころか。

むしろ持っていて良いのか。

一部の殿方にはむしろ褒美じゃないのか。

……絶対に見ないようにしよう。

そしてあつちに着いたらすぐ引き渡そう。

くそ、なんというパンドラの箱。

だって念じたらすぐに持ち物が見られるとか、しかも下着系とか。

絶対に、絶対に見ないようにしよう。

「よし、じゃーそろそろいきますかー。」

「はい、よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします……。」

精神的に摩耗した俺とは反対に、荷物も少なくなりルンルンの女性二人。

俺はパンドラの箱を開かないように気をつけながら、幌付きのガーグア車に乗り込んだ。
だ。

ここから5日の場所にあるという村。

何も起きなければ良いなあ。

79 道中気をつけましょう。

ガーグア車に揺られながら進む俺たち。

村からはすっかり離れ、いつもの狩場になっている草原も通り過ぎた。

ガーグアは、スピードではファンゴに劣るし、力はアプトノスやポポといったモンスターに軍配が上がるが、持久力とスピードを併せ持っている。

小走り程度のスピードしか出ないものの、一定のペースを保ちながら進んでいる。

ここまでは非常に順調。御者のおじさんも「今日はとつても進みがいいよ。」と言っていた。

多分理由は一つ。

「うーん、やっぱり幌の上は気持ちがいいねー！」

セツヒトさんが幌の上で見張ってくれているからであろう。

出発早々幌の上に登ったセツヒトさん。

何をするつもりなのかと思ったが、周囲の見張りをやってくれているのだ。

「おじさーん！次の別れ道ー、右側なんか嫌な感じー！」

「は、はいよ！少し迂回するぞ！」

「はーいー！」

大声で連絡を取り合うセツヒトさんとおじさん。

おじさんも戸惑いつつ、指示に従って手綱を操る。

おかげでモンスターに出会うことは全くない。

……な、なぜわかるんだ……？

俺も周囲をマップで警戒しているのだが……セツヒトさんの指示は、ほとんどの確で
ある。

改めてこの人の凄まじさを味わっている。

「おそらく、今までの経験則と……凄まじいまでの勘、でしょうね。」
「勘。」

ハイビスさんが俺の横でつぶやく。

「私も実際に目にするのは初めてですが……G級にもなると、大型の狩猟に集中するために、常に周囲の小型や別の大型モンスターを避けていくそうです。中には殺気を放つてモンスターを寄せ付けられない方もいらつしやるようですが……。」

「なるほど……さつきから少し離れた所にいるモンスターが逃げていくんですが、それは……。」

「……人間技とは思えませんね……さすが、セツヒトさんです。G級は、伊達じゃないですね。」

「すげえ……。」

かっこいいいとしか言えない。

こんな芸当もできるとか、やはり上の人は凄まじい。

やろうと思えば、俺も似たようなことはできるかもしれないが、それは俺の力というよりギフトの力。

やはりギフトに頼りすぎるのは良くないと思わされる、そんな一幕であった。

* * * * *

「いやあ、こんなに順調に進んだのは初めてだよ。流石、一流のハンターさんは違うねえ！」

「いやいやー、それほどでもー。」

「ほら、こいつはお礼だ。護衛も見張りもいらないうちで、初めは何の冗談かと思つたが、どうやら本当に大丈夫みたいだな！」

「やつたー！こんがり肉ー！夜の見張りも、お任せくださいー。」

そう言つて御者のおじさんはホロの中に入つていく。

ニコニコ笑顔のおじさんに食料を譲ってもらい、セツヒトさんも上機嫌。

今日は、途中の宿泊できる場所には辿り着けず、野宿になつた。

とは言つても、かなりのハイスピードで来ているそうで、もしかしたら日程が短縮できるとも思はないとのこと。

おじさんが俺たちのテントを設営してくれる間、そんなことを言つていた。

「いやー、お肉ももらえるしー、ソウジがホカホカのご飯持っているしー、こんなに快適な野宿は初めてだよー。」

「私も初めてです……まさかお外でこんなに美味しいご飯が食べられるなんて。普通乾燥肉とか野菜の缶詰とかで終わりですよ。まさかイシザキ亭の味をここで楽しめるとは。」

「よかったです、お二人に喜んでもらえて。」

実はポーチの中に、イシザキ亭の弁当を詰め込んでいたのである。

イシザキさん（兄）の一級品の腕前で作られ、オスズが手渡してくれたこのお弁当を、外でいただく。

ホカホカのおかずが食べられるこの状況は、どうやら異常らしい。

二人もニコニコで夕飯を食べている。よかったよかった。

念のため十日分ほど詰め込んできたが、この旅のペースなら余りそうな勢いだな。

ギフトと女神様に感謝。

「ソウジー、じゃあ私と順番で、夜の見張り、やろうねー。」

「はい、もちろんです。」

「多分私がいるからモンスターも寄ってこないと思うけどー、何かあったら呼ぶんだよー？ソウジー。」

「おお……了解です。」

平然と言つてのけるセツヒトさんが、なんとも頼もしい。
見張りの分担を決める。

今日は俺が先に、夜の見張りをやることに。

「すみませんお二人とも……私、お力になれそうになく……。」

「ハイビスちゃんは気にしないで良いんだよー？こう言うのはー、適材適所？」

「はい！村では、絶対にお力になりますから！」

ハイビスさんも御者のおじさんも完全に一般人であるため、ここは俺とセツヒトさんが頑張らねば。

さらに言うのとセツヒトさんは昼間も見張りをやってくれている。
なのに疲れている様子は微塵も見せない。

かっこいいぜ……。

俺もやれることをやろう。

「じゃーおやすみー。」

「おやすみなさい、ソウジさん。よろしくお願いします。」
「はい、お二人とも。おやすみなさい。」

二人にお休みの挨拶をし、焚き火を弱める。

一応周囲には、おじさんがモンスターを寄せ付けないお香を炊いてくれているが、「あんまり頼りにはなりやしねえよ。」と言っていた。

気をつけよう。昼間たつぷり寝ているしな。

セツヒトさんの真似事をしたい所だが、俺にはあの勘というものが全く働かない。

……嫌な予感、つていうのはなんとなく分かるが、強者を前にした時のあの感覚を、周囲全体に張り巡らすなど、かなり難しい。

多分、超疲れる。

なのでここは大事をとって、ギフトパワーを存分に使わせていただく。

〈マップ〉を見ながら、敵影を探していく。

……一応周囲には何も無いようだが、デインバルドのように、感知もさせずにでてるモンスターだっている。

まああんなのがそこかしこに出てきたら、野宿などしていられないわけで。

気を抜かないようにしないと。

こうして俺は、明け方近くまで見張りを続けた。

* * * * *

「ふああ……眠い……。」

少しの睡眠の後、目を覚ます。

水で濡らしたタオルで顔を洗う。

水が冷たい……おじさんが近くの川で組んできてくれた水である。

「そろそろ野宿も、きつい季節になってくるなあ。」

そうおじさんが言うぐらいには、本格的な寒さが近づいているのだろう。

ちなみに昨晩は、全くモンスターの姿は確認できなかった。

「うーん、おはよー、ソウジー、ハイビスちゃん。」

「おはようございます。」

「お、おはようございます。」

二人がテントから出てくる。

男の俺とは別のテントで用意してもらい、そこで寝ていたハイビスさん。

寝起きの姿を見るなど、初めてである。

少し恥ずかしそうにしながら、桶の水を手につつとテントにすぐに引つ込んでいく。

まあ、寝起きの姿など、普通は男性に見られたいものではないよなあ。

俺としてはむしろ、普段と違う寝起きの姿に、ドギマギしてしまうのだが。

「うーん、女の子ですなー。」

「セツヒトさんも女性ですが。」

「私はほら、ナチュラル系だからー。」

「ナチュラル？」

「……化粧とか、めんどくさい系、とも言うー。」

「な、なるほど。」

セツヒトさんは、まあ確かにいう通り、そんなに朝の支度には手間取らない様子。

見張りの交代のタイミングでも、いつもの同じようにテントから出てきた。

ちなみに、テントの中は覗かない。

俺は紳士であるからして。

楽しみにしている神々の皆様には、我慢いただくことにする。

というか覗く機会など与えないがな!!

プライバシーは遵守!!

「お?どーしたのソウジ?鼻の下伸ばしてー。」

「の、伸ばしてませんよ!」

「敏感に反応するってことはー……変なこと考えてたー?」

「考えてません!」

「……ハイビスさんの寝姿、可愛かったなー。」

「そそそそですか。」

「むー、ソウジつままないー。」

今日はイジリ対決に勝ったぜ。

* * * * *

俺の虚しい勝利などどこ吹く風。

順調にガーグアは進む。

こいつらの体力は底無しか。

こんなにアホっぽい顔をして、ずっと走りっぱなしなのである。

これはガーグアさんと言わざるを得ない。

「どうだ！俺の自慢のガーグアは！なかなかのもんだろう！」

「本当に、そうですね。」

「私も……なんだか可愛く見えてきました……。」

おじさんが休憩中に自慢してきた。

自慢したくもなるだろう、本当に優秀な奴らである。

「この子達、名前とかあるんですか？」

ハイビスさんが尋ねる。

「名前？そんなもん、つけねえよ。」

「え？そんなんですか？」

「おう、なんせ衰えたら食肉に毛皮に羽に、余すところなく有効活用つてな！まあこいつらはこれからが働き時、稼いでもらうぜえ！」

「……。」

絶句するハイビスさん。

うーん、人間の都合で利用されるガーグアさんたち。

「……もうしばらく、よろしくね。ガーちゃん、グーちゃん。」

「は、ハイビスさん……。」

名前をつけ始めていた。

……止めはしない。

うん、旅の間、可愛がるぐらいしようがないだろう。
情が湧いても知らないけど。

「グエエ……。」

「グア!!」

濁音混じりの返事をしながら、呑気に草を食べるガーグアさん達。
せめて少しでも長く活躍されることを願うばかりである。

* * * * *

三日目。

今日は、中継の村で一休みできるそうだ。

見張りで寝不足の俺としては、大変ありがたい限りである。

幌の上の見張りも、セツヒトさんと代わって俺も受け持つことにした。

「そっかー、ソウジもあれ使えばできるじゃんねー。」と言うと、セツヒトさんは幌の中に移動。

ハイビスさんのお膝に頭を預け、スヤスヤと眠り始めた。

……疲れを見せないが、頑張ってくれていたんだと実感。俺も頑張らねば。

「こ、ここはテントじゃありませんからね？ 脱いじゃダメですよ？ セツヒトさん？」
「んん……わかつてるよーん……はあ、ハイビスちゃんやーらかーい……。」

……なんか聞こえたが、スルーしとこう。

幌の上にスタンバイした俺は、マップを見ながら御者のおじさんと連絡を取り合う。

この日もモンスターは現れなかった。

順調順調。

* * * * *

四日目。

昨晩は久しぶりのベッドで、ぐっすり眠ることができた。

おかげでバッキバキだった体もスツキリ。

この体、やっぱり若いわ。

前世だったら今頃、ガチガチの体に四苦八苦していたことだろう。

「おはよーソウジ。いっぱい眠れてよかったねー。」

「そうですね、いい宿でよかったです。」

「んー！さ、今日も張り切って見張りましょー！」

「おー。」

セツヒト語で返事。

慣れたものである。

「そういえば、ハイビスさんは？」

「あー何か、『グーちゃんガーちゃんに朝の挨拶してきますね！』とか言つて、外に行つたよー？」

「そ、そうですねか……。」

入れ込みすぎではないか。

いや、俺に止める権利はないか……。

まるで今時の学校の道徳の授業である。

一生懸命育てた豚さんを、食用にするか否か、話し合い。

非常にセンシティブな内容だが……人がそれらの命を頂くこと以上は、絶対に深く考
えるべき命題である。

命の上に立つ。

ハンターは、そういう職業だ。

……セツヒトさんの教えを思い出した。

「ハイビスさん、大丈夫でしょうか。」

「大丈夫じゃないかなー。昨日の夕食でバクバク鶏肉食べてたしー。」

「……た、確かに。」

全員が全員、俺のようにナイーブでは無いよな。

というか、俺が平和な世界から来たからこそ、この問題に引つかかっているのだ。

そっだよなあ、この世界に生まれて生きてきたら、そりゃ命に対する考え方も深くな
るよなあ。

「それはそれ、これはこれってねー。」

「……なるほど。」

最高の答えを貰った気がする。

しばらくすると、ホクホク笑顔のハイビスさんが、服に羽毛をつけて戻ってきた。可愛がつてあげたのかな。

確かにあのアホ顔は、今見ると非常に愛着が湧くものである。

「さーて！お三人さん、準備はいいかー!？」

「はいー!」

「はい。」

「ようし、出発するぞー!」

おじさんの元気のいい掛け声とともに出発。

今日は行程的にいくと、村に着くという。

もうすぐそこだというおじさんの口調は、非常に上機嫌である。

すっかり肌寒い気候に変わり、俺もセツヒトさんも寒冷地仕様の装備を身につけてい
る。

今日も一日しっかり見張ろう。

命を預かるハンターとしての仕事を、プロとして遂行するのだ。

「今日も何にもなければいいねー。」

セツヒトさんが寒い風に両腕を押さえながら、不安になることを話していた。

* * * * *

「ソウジさーん! どうだー!? モンスターはいそうかー!？」

「大丈夫でーす! そのまま行ってくださーい!!」

「あいよー!」

道のりがうんと険しくなってきた。

昨晚マップで確認した限りでは、そんなに距離はないと思っていたが、この勾配では

確かに時間がかかる。

馬力でポポに劣るガーグアも、一生懸命である。

「がんばってー！ガーちゃん！グーちゃん！」

「がんばれー、ガーグー。」

名前を付け、すっかり愛着の沸いてしまった二人は、幌の中から応援を続けている。

従順に頑張る姿は、確かに応援したくもなる。

俺だって心の中で応援している。

〈マップ〉内に、一応モンスターの姿は無い。

ゆつくりとだが、確実に進んでいる。

……オオ……

「！！」

ゾクっとした。

〈マップ〉を凝視。

……モンスターの姿は無いが……。

確かに、聞こえた。

「セツヒトさん!!」

「うん!」

「……嫌な感じがします!!」

「よくわかったねー! ソウジー!! やっぱり簡単にはいかないねー、この山道はー!!」

「じゃあ! これは!!」

「うん! くるよー!! ……大型がねー!!」

「マジですかー!?!」

「大マジー!!!」

話を聞いたおじさんは、しかし顔色を変えず、ガーグアを進める。

さすがプロ。一度進みを止めてしまったら、ガーグアも怖気付いて逃げ回ってしま
う。

恐らくガーグアも強者の気配を感じていることだろう。

それがモンスターの勘というものである。

おじさんとガーグア、両者の信頼関係がしっかりあるからこそ、進むことができている。

……オオオオン……。

山にこだまして、近づいている声。

急いで幌の中に戻る。

青ざめているハイビスさん。

コートの襟を強く握りしめている。

「ダイジョーブだよーハイビスちゃん。私達がついてるー。」

「は、はい。」

セツヒトさんがハイビスさんを励ましている。

本当に頼りになる人である。

「とりあえず……おじさん、ハイビスさん！大型が現れたら、先に行ってください！」
「お、おうわかった。道はわかるか!?大丈夫か!？」

おじさんが心配してくれる。

ガーグアの手綱を握り、しつかり2匹に指示を伝えながらも、尚、
実にかっこいい。

「おじさん、大丈夫だよ。……私達、結構強いからさー。」

「道も、事情は言えませんが、俺が知っています。安心してください！」

「……わかった！二人を信じる！……嬢ちゃん！」

「は、はい!!」

おじさんがハイビスさんと呼ぶ。

「二人になったら、こいつらを励ましてやってくれ!!あんたが声をかけると、安心するみたいだ！」

「は……はい！わかりました！お任せください！」

「ああ、頼んだぞ！」

おじさんマジかつこいいわ。

ハイビスさんにやることを与えて、ある意味安心させることに成功している。

「グオオオオオオン!!!」

とんでもなくでかい遠吠えと、後方に光る雷鳴。

天気は雲こそあれど、晴天。

もう驚くしかない。

久々に聞いた雷鳴。前世の嵐を思い出す。

ジャカ!!

「ソウジー!!敵は後方!!」

「はい!!」

ジャキン!!

セツヒトさんがヘビイボウガンを、俺が双剣を取り出す。

幌の後方に移動。

後ろから近づくモンスター。

〈マップ〉で見えるが、とんでもない移動速度で近づいて来る。

狙いは俺たち……で間違いなさそうだ。

後方に目を向けながら、セツヒトさんが言う。

「ソウジ―!この感覚、覚えときな―!」

「は、はい!」

「……間違いないねー。アイツ、ガ―グア大好きなんだよー。」

「……ガ―グア好きなモンスター、ですか!?!」

「そー!いるんだよ、そんな厄介な奴が、さ……ッ!!」

ジャキ!

ダダダダダン!!

セツヒトさんが仕掛ける。

その瞬間、後方の道向こうから姿を表すモンスター。

ビシビシビシ!!!

「アオオオオオオン!!」

遠すぎてよく見えないが、恐らく弾が命中したのだろう、苦しそうなモンスターの声がした。

……というか平然と当てるとは! この不安定な車の上から!!
セツヒトさんすごいな! やっぱり!

「ハイビスちゃん! 村のギルドに報告よろしくー!」

「は、はい!」

「ソウジー! 行くよー!!」

「はい!!」

「お二人とも!!ご武運を!」

ハイビスさんの言葉を背に、車の上から飛び降りる。
離れていくガーグア車。

だが、振り向くことはできない。
着地の間も、気は抜けない。

「……ソウジ!上!」

「はい!!」

それぞれの方向に転げて避ける。

ズドン!!

「グウウウ……。」

不機嫌そうな唸り声。

全身トゲトゲ。薄暗い山に映える、青緑と黄色の体色。

力強い尻尾と前脚は、強者の雰囲気存分に纏っている。

「こいつは……?」

「雷狼竜……無双の狩人……いろんな言い方があるけどー。」

「……。」

「ジンオウガ。この辺では、最強の一角。そして、最終目標。ソウジに倒してもらおう予定の、モンスターだよー。」

「ま、マジっすか……。」

こんな強そうなのを……。

「……傷が疼くねー……あの時の獄狼じゃなくて、ちょっと安心……。」

あの時って、どの時だろうか……。

ごくろう……?」

「ソウジ―！私が援護するから―！まずは見^{けん}！！慣れてきたら、一気に叩くよー！」
「は、はい！」

「だいじょーぶ！こいつのパターンは読みやすいしー……フツ！！」

ダダダダダダ
!!!

「グア！！ガアア！！」

怯むジンオウガ。

「私が付いてるからさー！」

「はい！！」

「目標は撤退！高望みはしない！」

「はい！！」

「いくよー！！」

セツヒトさんの気合の入った声と共に。
俺は双剣を力強く握り直した。

80 撤退させましょう。

クエストには、クリア条件というものがある。

数を集める採取、数を倒す小型の狩猟などは分かりやすい。

ただ、大型の狩猟となると達成条件が色々変わる。

捕まえることが前提の捕獲、完全に仕留める討伐、そのどちらでも良い狩猟……。

そして今回、セツヒトさんが示した目標は、撤退。

文字通り、相手モンスターを怯ませ、その場から立ち去らせることが目標である。

俺は、そんなクエストは受けたことがない。

なぜなら、そういう種類のクエストは、倒すことが非常に難しい危険なモンスターか

ら一時的に危機を逃れるためにある。

なので撤退を目的としたクエストは、裏を返せば、討伐や狩猟、捕獲と比べて少し難

易度が下がると言えるかもしれない。

……だが、俺にできるだろうか。

目の前の、この凶悪なモンスターを、撤退させるなんて。

「グルルルルル……。」

警戒し、こちらを睨みつけてくるジンオウガ。

はつきり言おう、敵う気がしない。

俺の双剣が、ヤツに効く気がしない。

デインバルトにも感じた感覚。

怖い。

だが。

ジャキン！

「ソウジー！ビビったら負けだよー！だいじょーぶー！私がついてるからー！」

「グツ………ウオオオオオン！」

明らかに気迫負けしている様子のジンオウガ。

そう、俺の後ろにはセツヒトさんがいる。

何とも情けないが、仕方ない。

俺は実力不足だ。

頼りにさせてもらおう。

「……来るよー！」

「はいー！」

セツヒトさんが叫ぶ。

その瞬間、前衛の俺に飛びかかってくるジンオウガ。

「よっ……とぉー！」

前足の攻撃……！

だが、モーシヨンは甘い。

余裕で避ける。

「もーいつかい！」

「え!？」

と思つたら、今度は攻撃した前脚を軸に、反対の前脚を繰り出してきた。
あぶねえ!!

「うおつとお!!」

間一髪で避ける。

ズガガガガガガガ!

「グアア！」

後ずさるジンオウガ。

セツヒトさんの援護射撃だ。

「ソーソー、その感じー！いいじゃんソウジー！」

「はいー！」

タイミングは掴んだ。

油断はしないが、これぐらいの速さでくると覚えておく。

「ソウジー！反撃はいいからー！まずは落ち着いて見ていこー！」

「了解です！」

姿勢を低く、すぐに動けるようにする。

寒冷地仕様の装備に対応できるか不安だったが、問題はなさそうだ。

むしろ厚めの仕様に、少し安心している自分がいる。

ここ最近、装備もなしにモンスターに挑んでいたわけで。

余裕が生まれている。

「……アオオオオオン！」

突如、ジンオウガが光を放ちながら、空に向かって雄叫びを上げ始めた。
何度も、繰り返し。

え!? 何だ!?

「ごめーんソウジー! 予定急変更!!」

「ええ!？」

「今、全力で頭やつちやってー!」

「は、はい!!!」

すぐさま動き出す。

こう言われるってことはつまり、反撃のチャンスなんだな!

すぐさまジンオウガの頭部に近づく。

「鬼神化……乱舞……!!!」

ズサン!

ザシユ!ズザザザザザン!

「そのままー！」

ジャキ！

ズガガガガガガ!!!

俺が乱舞しているにも関わらず、その隙間を縫って頭に銃撃を与えるセツヒトさん。俺も無我夢中だが、これかなり高等技術なのでは……？

俺とセツヒトさんが猛攻をかけているのに、歯牙にもかけず、吠えまくるジンオウガ。バリバリと体全体から電撃を発し続ける姿は、何とも神々しい。

いや、恐ろしいんだけど。

「ソウジー！飛び退いてー!!さーん！にー！いーち！」

バツ!!

返事もできず、言われた通りに後方に飛び退く。

後ろに行き過ぎたか？と思うほどには離れられた。
その直後、

「ウオオオオオオオオオオオオン！！！！」

凄まじい叫び声が響く。

思わず耳をふさぐ。

すごい声……だがヤツから目を背けはしない。

ジンオウガは光り輝いていた。

雷を身に纏っているような。

……まるで別の生き物だ。

全身バチバチと音を立て、前足や尻尾はより猛々しく感じられるほど。
その姿は神々しいと思う程であった。

「完全にスーパーなサ○ヤ人じゃねえか……！」

やべえ、ちょっとかつこいいとか思ってしまった。

モンスターにこんなこと思うのは初めてである。

「……セツヒトさん！」

「うん！強いよー！そいつー！」

ジャギ！

ズガガガガガガガガン！

セツヒトさんが、銃撃をお見舞いする。

効いてはいると思うのだが、意に介しないジンオウガ。
俺を睨みつけてくる。

オシッコチビリそう。

「ソウジー！また、見^{けん}でー！さつきより速いよー！」

「はい！」

見逃さない。

やつの一挙手一投足を
見逃さ——

「ソウジ！右い!!」

「えっ。」

ジンオウガが、消えた。

消えるわけない。

つまり見逃した。

右。

やべえ。

イチかバチか！

「うおおっと!!」

前方に全力で転げる!

緊・急・回・避い!!

その直後、俺のいた場所から、「ドガン!」という音。

「マジかよっ!」

「体勢、立て直して!!」

「はい!!」

どう動いたのか分からなかった。

とんでもない超スピードで動いたのだろうか、いつの間にか俺の右に動いただろうジ
ンオウガは、俺のいた場所に尻尾を叩きつけていた。

右に動いて直後に後方宙返りをして尻尾を叩きつけた………ってことか!?

何たる運動神経……!!

「よく避けたねー！ソウジー！」

ズガガガガガガガガン!!!

「グルルルル……」

「チツ……厄介……」

セツヒトさんが舌打ちしている。

多分、今ジンオウガは、攻撃を食らっても効いていない。

いや、効いていないのではない。食らっても気にしてないのだろう。

まさか俺の気にしないスキルを、実践レベルで習得しているモンスターがいるとは。恐れ入る。

「いいねーソウジー、余裕あるじゃーん！」

「いやいやいや！目一杯です、よ！」

飛び跳ねたかと思うと、まるでいがぐりの殻のような背中を見せ、体ごと俺を押しつぶそうとしてくるジンオウガ。

だが、分かる。

飛んだ瞬間に俺に向かうのだから、今いる場所から避ければいい。

断定はしない。油断もしない。

今は見る。見るに徹する。

余裕をもつて、右に飛び退く。

直後、背中を突き刺すかのように、空からジンオウガが降ってきた。

トゲが地面に突き刺さっている。

ゾツとするわ……ムチャクチャだなコイツ……。

「チャーンズソウジー！」

「はい！」

行け、ということだろう。

背中から落ちたからか、若干もがいているジンオウガ。

頭部めがけて突っ込む。

セツヒトさんの動きを真似て……。

脱力……振り抜く感覚……!!

振り抜いて尚、動きは止めない!

剣に身を任せ、勢いをつけ続ける。

「おらああああ!!」

ザシユ!!

ザザザザザシユ!ズザン!

よし!いい手応え!

「オツケー!離れる!」

「はい!!」

ムクリと体を起こすジンオウガ。

「グルルルルル………!!!」

顔が怒りに満ちている……こええ……。

双剣もそろそろ研ぎたい。

攻撃が通らなくなる前に――

「……！ソウジい！飛んで――」

「へっ――」

一瞬の出来事だった。

急に間合いを詰めてきたジンオウガが、ノーモーションで全身をぶつけてきた。

回避も防御も取れず。

「ぐへアアアア
!!!!!!」

俺はふっ飛ばされた。

「チイツ!!」

セツヒトさんの舌打ちが聞こえる。

早く動かなきゃ。

早く。

「ぐあっ！ガッ……ああ……！」

体が動かない！

いや、動けない!!

何だ……っ！クソっ……クソっ！動け！俺!!

「グルルル……ガアア!!」

目の前に迫るジンオウガ。

……食われる!!

「……………はああああああ
!!!!」

ズガン!!

「ギャアアアアアアア!!!」

ジンオウガに食われると思った、まさにその瞬間。
セツヒトさんが、いつの間にかやってきて。

「おらあ!」

「グアツ!」

「ごらあ!」

「ガア!」

殴っていた。

…………ヘビィボウガンで。

嘘だろ……………。

「私のー、ソウジにー……。」

「……………ガアアア……………」

「何してんのコラア!!!」

ドゴオン!

人の出す音じゃねえ!!

「……………グツ……………グアツ!」

バツ!

「グルルル……………」

クルツ。

ダダッ

ドスンドスンドスン……………。

い、居なくなった……………？

「せ、セツヒトさん……………？」

「フウ……………フウ……………フウ……………。」

「……………。」

とても話しかけられる雰囲気ではない。

あと、俺も体が痺れていて、それどころではない。

何とか体を起こす。

「……………いつてえ！」

「……………！ソウジ！！」

シユタツと俺のもとにやって来るセツヒトさん。

「ケガはどう!?どこが痛い!?まず……これ、飲んで。」

何かの実が、俺の口の中に入れられる。

「ムグ……んん!ぐへえ!ゲホッ!ゲホッ!」

「あー……不味いよねー、ウチケシの実……。どーお?」

「あ……痺れが……消えました……。」

「よかったー……。ソウジー!」

ギユツ。

抱きしめられる。

優しく。

「ごめんね……無理、させすぎたねー……モロに食らつてたの、こーこー?」

「は、はい！大丈夫です！大丈夫ですから!!」

胸の辺りを触られて、ドギマギしてしまった。

ち、近いです！セツヒトさん!!

「胸の……この辺りですが……多分大丈夫です。……す、すみません。とんだ失態を……。」

「そんなことないよー……アイツ、無双の狩人はねー……強いよー。間違いなく。」

「そうですか……。」

「最後のアレはねー、体当たり。一瞬で来るから、その一つ前のモーションを盗んでおくと、避けられるよー。」

「な、なるほど。」

簡単に言うが、初見で出来たらそれはもう神業である。

セツヒトさんは、きつと戦ったことがあるのだろうか。

「あと、動けなくなっただんですが、それは……。」

「痺れてたんだねー。いや、あれ食らっちゃうともう動けないのさー。……ソロハンターには、ちよいと致命的ー。」

「マジですか。」

「うん。だからウチケシの実を常に口の中にいれて戦うハンターもいるよー？ソロでー。」

「マジですか……。」

あんなまずいものを四六時中口に入れてなどおけない。

正気の沙汰ではない。

でもまあ、正気とか狂気とか、そういう次元ではない極限の戦いであれば、そうした戦い方もアリなのかもしれないが。

言いながら深呼吸。

……うん、骨まではないってないと思う。

「村で、しっかり見てもらおーねー。ソウジー。」

「はい。本当にすみません……悔しいです……。」

「……うんうん。くやしーよねー。わかるよー。」

「はい……でも、セツヒトさんの援護付きでアレですから……。修行のし直しです。」

「まー、そのためにここに来たんだしさー。……私だって、来たのは、禊のためだし。」

「……。」

まただ。

セツヒトさんが言う、禊とは、何なのだろう。

ジンオウガを相手にして、「こくろうとはちがう。」と言っていたが、こくろう、とは何なのだろう。

……セツヒトさんの過去が、気になってしまう。

「……セツヒトさん。」

「んー？ちよつと待ってねー……今、救援信号を出すからー……。よつ、と……。」

セツヒトさんが、緑の信号弾を上げた。

そのうち、ギルドからの救援がやってくるだろう。

「ん。お待たせー、ソウジー。もうゆつくり休んでいいからねー。……どしたのー？」
「……聞かせてくれませんか？……村に着く前に……セツヒトさんの、話を。」

「……。」

「すみません……でも、ミヨシ村は、セツヒトさんと何か因縁のあるところなんですよね。……それを知らないで、何でしょう……、先に進めない気がして……。」

「……あははー、氣、遣わせちゃったねー……。うん。話すよー。ソウジに、話すつもりだったしねー。」

「……。」

「んー。どこから話せばいいのかなー。」

救援を待つ、しばしの間。

俺は、セツヒトさんの過去について聞くことにした。

81あるソロハンターの話①

「はっ……はっ……はっ……はっ……!!」

走る。

ここは勝手知ったる道。

山の中は散々駆け巡ってきたから、抜け道山道獣道、何でも行ける。
でも……でも……。

「何あれ……聞いてない……」。

ブーーーーー!!!

後ろから虫が来てる。

でも、ただの虫じゃない。

とんでもなくでかい虫が、すごい羽音で私を追いかけ回してくる。

「うう……怖い……！」

村の人からは、感情のない子だつて言われるけど。

そんなことはない。

私だつて、嬉しかったら笑うし、怖かったら泣く。

皆みたいにな、たくさんたくさん表情は作れないけど。

「うっ……うっ……。」

ブーーーーー!!

羽音が近くなってきた。

近くにいるんだ。

こわい……こわい……。

「誰か……誰かあ！」

自分史上、一番の大声で叫ぶ。

でも、誰も来るはずない。

だってここは山の中。

絶対に一人では行くなと言われた、山。

アヤの村は、人が少ない。

お医者さんもない。

おじいちゃんの薬草を探していたら……なんでこんな目に……。

「……………うあつ!!」

コケる。

痛い。怖い。

「ううっ……………!」

ブーーーーーン!!

虫が、目の前に迫る。

もうダメだ。私はここで、このおっきな虫に、殺されるんだ。

「……………!!」

目を瞑る。

「……………フン！」

バゴォーン
!!!!!!!

「ピギュツ！」

ブチョツ。

……………?

静かになった。

「……嬢ちゃん……ここに入るなって、村で教わらなかつたか？」

「なあに！仕方あるまい！子どもとは行くと言われたら行くものだからな！」

「そりやおめえだけだろ！つたく……ほら、嬢ちゃん。立てるか。」

「……………は、はい……………」

あれ？

虫は？

……………アレかな……………立派な角がひしやげて、緑色の液体があたりに散らばっている。

「ハツハツハツ！お嬢さん！救われたな！コイツのハンマーの一撃は、マカライト鉱石をも砕く！」

「何でおめえが自慢気なんだよ……。まあ、嬢ちゃん。こいつがありえねえ視力で、嬢ちゃんこのモンスターを見つけたんだ。礼なら、こいつにも頼むわ。」

「あ、あ、ああああ……………」

助かった。

助かったんだ。

何だか頭がツルツルのおじさんと、ツンツン頭のお兄さんに。

助けられた。

どつと、力が抜ける。

「う……うわあああああん!!」

「お、おいおい!泣き出しちまったぞ!!」

「案ずることはない!お嬢さん!君はアヤ村の子だろう?私達が連れて行ってやろう
!」

ヒヨイツ

軽々と抱えられて。

私は。

「うっ……うわあああああん!!!」

これまた自分史上最高に、泣き出してしまった。

「余計泣いてんじやねえか!このバカマシヨルク!」

「何?!ハスガ!私は間違えてしまったのか!?!」

「あーもう……俺たちはこれだから……こんなことならムルトとウミを連れてくるんだった……。じよ、嬢ちゃん。俺ら悪い奴らじやねえからな!すぐ!今すぐ!村に連れて行くからよ!だから……!」

「うっ……うっ……うえええええん……!」

「泣き止んでくれよ……!」

おつきな虫、アルセルタスに襲われて。

二人のハンターに助けられた。

これが、私と彼等との、出会い。

* * * * *

「本当に……なんとお礼を言えばいいものか……ほらっ！アンタもいつまでも泣いてないで！頭を下げる！セツヒト！」

「うっ……うっ……ありがとう……ございましたあ……。」

「気にしないでほしい！母君！あなたの娘さんは大変素晴らしい脚をお持ちだ！あのアルセルタスから逃げる速さ！ハンター向きと言わざるを得ない！！」

「あ、脚ですか……？ま、まあこの子は運動に関しちやピカイチなんですけどねえ……。」

村に帰ると、待っていたのは、母のお説教だった。

とても厳しい母。

私が死ぬところだったっていうのに、叱りつけてくる。

おかげで助けてくれたツルツル頭のおじさん……ハスガさんも、ツンツン頭のお兄さん……マシヨルクさんも、引いていた。

その日は、礼を言ってから、家に返された。

そしたら家に入った瞬間、母に抱きしめられた。

「このっ……大バカセツヒト！……心配させるんじゃないよ……!!」
「おかしさん……ご、ごめんなさい……うう……。」

母は、いつまでも、優しく頭を撫でてくれた。

急いで帰ってきた父も、抱きしめてくれた。

祖父は、泣きながら私の無事を喜んでいた。

この日から私は、色々考えを改めた。

私は、別に無表情でも無感情でもない。

たくさん笑って、たくさん泣ける。

母も父も祖父も、たくさんたくさん、私を愛してくれている。

私がかつていなかっただけ。

色んなことが、いいことになって。

それは、私の心次第だったんだって。

それがわかって、よかったなって、思えた。

* * * * *

銀髪は、母譲り。

そして山の走りを教えてくれたのは、父。

山菜とか山の幸とか、色んなアイテムのことは、祖父が教えてくれた。

毎日の薪割りも、水運びも、競争して他の子に負けたことなんてなかった。

自分でも、なかなかやるなって、思っている。

「……………こんにちは……………」

「おや、セツヒト。いらっしやい。」

「こ、こんにちは、ムルトさん、…………ウミさん。」

「キヤー!!セツヒトちゃん!!いらっしやーい!!何々?おねーさんたちに会いに来てくれたのー!!」

「は、はい。遊びに来ました。」

「いやーん!うれしー!」

ウミさんに、ギュッと抱きしめられる。

「ウミ……………それはやりすぎだよ。」

「えーだってだってー。セツヒトちゃん、めっちゃ可愛いんだもん！」

「はあ……セツヒト、許してやって欲しい。ウミも悪気はないから。」

「は、はい。私も。嬉しいです。」

「やーん！も、かわいいー！」

眠たそうな目で、マイペースな男性がムルトさん。

やたらハイテンションで、私のことを可愛がってくれる女性が、ウミさん。

この所、彼らに会いに行くのが、日課になっている。

彼らとは、このアヤ村にやってきたハンターさんたちのこと。

リーダーで、ツルツル頭のハンマー使い、ハスガさん。とにかく、パワーがすごい。

ツンツンのマシヨルクさんは射撃が得意。この人が的を外すを見ることがない。

のほほんとしたムルトさんは、戦いになると豹変する。近接の武器が得意で、縦横無尽に狩り場を斬り回る。

唯一の女性、ウミさんとはとても器用。感覚も鋭くて、索敵にサポートに、時には猟虫や笛を持ち出して、味方を援護する。

彼等は自分たちを、一つのチームだと言っていた。

名前は「カホ・チータ」。

隣のミヨシ村との間にある山にやって来る、たくさんのモンスターを狩りに来ているようだった。

このアヤ村を拠点にして。

滞在期間は、本人たちもわからないらしい。

数年になるとか言っていたけど。

ちなみに、ムルトさんとウミさんは、恋人同士らしかった。

いつも二人、一緒にいるので、怪しいなあって思っていたけど案の定だった。

私は、そんな彼等の訓練の様子を見るのが好きだった。

「どうだ！ 試しにお嬢さんも、武器を持ってみないか!？」

「……え?」

「えー!? マシヨルクー! セツヒトちゃんにそんなこと教えないでよー!」

ある日、いつものように訓練を見ていたら、マシヨルクさんから誘われた。

武器を使ってみないかと。

「いや! 私の勘では、彼女は筋がいい! 気がする!」

「本当に勘なのね……。セツヒトちゃん、ちよつとやってみる？」
「……じゃ、じゃあ……。」

おっかなびつくり、片手剣を手にしてみる。

とりあえず、見様見真似で、ムルトさんの動きをやってみた。

「!?」
「!!」

確か、こんな感じ。

力は極力抜いて。

体重を使つて、回転、勢い、振り抜く、続けて。

見てきたことを真似して、目標の木の木製のモンスターの模型を斬りつけてみた。

バキィ!

……壊れてしまった。

「……………ま、マシヨルク……………私、驚いた……………。」

「あ、ああ！これは、彼女は、化けるぞ……………！」

「……………？」

真似をしてみただけなんだけど。

二人はとても驚いていた。

「お嬢さん！どうだろう！私達と一緒に訓練してみないか!？」

「……………いいけど……………セツヒト。」

「ん？」

「私の名前、セツヒト。」

「……………ははははは!!す、すまん……………改めて、セツヒト！よろしくな!」
「うん。」

一緒に、武器を振るうのを見てもらうことになった。

ウミさんもニコニコしていて。

マシヨルクにもようやく名前でも呼んでもらえて。

私も嬉しかった。

* * * * *

いつも見てもらえたわけじゃないけど、カホ・チータの皆は、暇があれば私に色々教えてくれた。

ムルトさんは、剣術を。マシヨルクさんは、射撃を。

ウミさんは、私と一緒に狩り場に行つては、採集や採掘、その他ハンターに必要な色々な事を教えてくれた。

唯一ハスガさんだけは、

「俺のやつてる事つて、ハンマーぶん回してるだけだからなあ……。」

と、あまり教えてくれなかった。

「すまん、セツヒト。」なんて言っていたけど、ハスガさんはこのチームのまとめ役。

何よりその頼れるパワーで、どんな敵も粉碎してきたらしい。

私はコツソリハスガさんの筋トレの仕方を盗んで、毎日トレーニングに励んだ。

どうやら私は、呑み込みがいらしい。
教えてもらったことは、簡単にできた。
でも私は満足しなかった。

あの人たちに届くには、まだまだ技術が必要。
毎日毎日、反復練習をした。

ある日、

「……セツヒト、あなた、ハンターになるつもり？」

「え!？」

「最近よく鍛えてるし、よくわからない武器をたくさん使っているみたいだし……。それに、楽しそうだしね。」

母に指摘されて、初めて気がついた。

私は、ハンターになりたいんだと。

あの時、私を助けてくれたあのハンターのように、なりたいたのだ、と。

「……おかーさん。」

「……止めやしないさ。あんなに引つ込み思案だった子が、『カホ・チータ』の方々が来てからとつても楽しそうだし。……難しいねえ、お母さんとしては、危ない事はして欲しくないんだけどね……。」

「……………」

「あなたも、そろそろ独り立ちの時かね。」

「……………うん。」

ハンターになりたいたい。

できるなら、カホ・チータのみんなと一緒に。

あの頃は本気で、そう思っていた。

* * * * *

数年が経ち。

カホ・チータの皆は、村を離れることになった。

盛大な宴会が開かれた。

周辺の村々を、大型モンスターの脅威から、何度も何度も救って。

今やこの辺でカホ・チータの名前を知らぬ者はいない。首都から、お呼びがかかったらしい。

そんなことを、ウミさんが教えてくれた。

四人が仲良くお酒を酌み交わす中に、私は飛び込んだ。

「あら！セツヒトちゃん……本当に……お世話になったね！ありがとう。」

「本当に。……セツヒトと離れるのは、寂しいよ。」

ウミさんとムルトさんが、別れの挨拶をしてくれる。

「セツヒトくん！君は素質がある。個人的には、立派なハンターになって、ここを守ってほしいと感じている！」

「バカマシヨルク、そんなのセツヒトが決めることだろーが！勝手にオメエが決めるんじゃないええ！……セツヒト、世話になったな。なんつーか、その……なあ。」

ツルツル頭まで真っ赤にしているハスガさん。

いつもの調子のマシヨルクさん。

「……ありがとよ。カホ・チータを代表して、礼を言う。この数年、お前と過ごす時間は、皆楽しかったと思うぞ。……元気でやれよ！」

四人はこれから、より難易度の高いクエストを受けていくという。

だから、無理かもしれないけど。

言いたかった。

「みんな……みんなと、私、一緒に行きたい。一緒に、ハンターになって、活躍したい。」

「セツヒトちゃん……。」

「……。」

ウミさんが泣いていた。

マシヨルクさんは無言のまま、立ち上がる。

「……セツヒト。」

「……はい。」

「……君は、ハンターになって、どうしたいんだ？」

「えっ……。」

言葉に詰まった。

「……君は、君の素質は大変素晴らしい。我々も負けるつもりはないが、いつか同じステージに登れるだろう。」

「……。」

「だが！ハンターになってどうする？……常に命を賭け、他の命を奪い、生きていくのが我々だ。……ただの憧れでは無いのか？漠然とただ、今の状況を脱したく、ハンターになりたいだけではないのか？」

「ちよつと！マシヨルク！」

ウミさんがマシヨルクさんを止める。

「何も別れの席で、そんなこと言うものじゃないわよ！」

「……今だから言うのだ！セツヒトくんは真剣だ！真剣に、我々と共に来たいと言っている！だからこそ！我々がどんなに汚い仕事をしているか！数々の命と責任を背負って生きているか！伝えなければならぬ！」

「……………マシヨルク。」

ムルトさんが割って入ってきた。

「……………その辺にしておくんだ。……………セツヒト、悪いが、僕も同意見だ。それに君は、まだ若い。若すぎる。……………落ち着いて、ハンターになりたいのはなぜか、考えてみるといい。」

「……………ムルトさん。」

「すまない。こんなことしか言えなくて。」

「……………いえ、いいんです。正直、分かってましたから。」

無理やり笑顔を作って、言葉を紡ぐ。

「皆さんと居ると、どんどん強くなる自分が嬉しくて……………憧れとか、そういう感情ばっか

りで、ハンターになりたいって、思っていました。マシヨルクさんの言う通りです。」

分かっていた。

私は、カホ・チータにはなれないって。

でも、伝えなかった。

あなた達のようにになりたい、あなた達と共に行きたいという、思いだけは。

「……………俺は連れて行ってもいいと思うがな。」

ハスガさんが、野太い声で話し出す。

「なあに、小難しく考えることじゃねえ。嬢ちゃんが強くなる。間違いない。それによ………楽しかったじゃねえか。親もいねえ、頼れる人も家もねえ。そんなオレたちを、この村は、セツヒトは、本当に暖かく迎えてくれた。」

「……………」

「だからよ、連れて行って、また楽しくやれたらな、つてよ。思っちゃったよ……。いけねえ、リーダー失格だ。」

ハスガさんが立ち上がる。

私の倍はあろう体格に見下ろされる。

でも、怖くない。今は全く。

初め見たときは怖くて仕方なかったけど。

とても優しい目をしていた。

ハスガさんは、膝を曲げた。

私と同じ目線。

「嬢ちゃん……いや、セツヒト。世話になった。言ってることコロコロ変わってわりいな。やっぱり連れて行くのは無理だ。俺たちはこれから、命を賭して、戦いに行く。」

「……………」

「おめえにや、家族がいるよ。優しい村の人もな。……どうか強くなって、守ってやってほしい。おめえなら、できるさ。」

「……………はい。」

こうして、カホ・チータは首都へ行つた。

翌日の見送りの際、髪の毛がよく生えるという薬草を煎じたものを、ハスガさんにプレセントした。

何とも言えない微妙な顔をするハスガさん、周りの三人は爆笑していた。明るい別れになった。

「わたしも、強くならないと。……なるんだ、みんなを守る、ハンターに。」

私の、一人の修行の日々が、ここから始まった。

82あるソロハンターの話②

「これで、終わりー！」

ズガガガガガガガ！

「ギャアアアアア……………」

ズウン……………。

「イヤンガルルガ……………だっけー？討伐完了ーっと。」

クエストを完了する。

ポーチから信号弾を取り出す。

バシユツ！

信号弾が空に弾ける。

じきに、タオカカのギルドから回収班がやってくることだろう。

「んー……強かったねー。」

振り返る。

黒狼鳥イヤンガルガ。

黒紫の体色、禍々しいまでに棘が生えた羽と尻尾。

その尻尾には毒があり、まず避けないと話にならない。

切断してもお構いなし、怯ませてもお構いなし、果ては見つけたイヤンクツクにまで

襲いかかる始末。

おかげで双剣での討伐は諦め、ボウガンに変更。

ジワジワと削る作戦に変更した。

落とし穴にも気付くし、激情型かと思つたら冷静に罠を破壊したり閃光玉を食らつて

も普通に反撃してきたり……。

やりにくすぎて笑えてきた。

イヤックツク討伐と聞いてやってきたハンター達が、軒並みやられたのもうなずける。

似てはいるけど……全く違うよ？このモンスター。

コイツはどこからやってきたのか……少なくともイヤングアルガなんてこの辺で見ただことは無い。

「ギルドから緊急要請受けてきたけど……うん、納得だねー。これはキツイでしよー。」

まあ、何とかしたけどさ。

* * * * *

アヤ村を出て3年。

出たと言っても、周辺の村……タオカカやミヨシ、タケキヨ、ノタ……それぞれの村を飛び回っては、トラブルに対処する生活を続けている。

だからまあ、家にも頻繁に帰る。

家族は、たまに顔を出すから安心してゐるみたい。

「みんなを守れている……かな。」

あの時の、カホ・チータとの別れ話を思い出す。

みんなを、守るハンターになる。

私なりの答えは出た。

「どんなハンターになりたいか」と今、ムルトさんに聞かれれば、胸を張って言える。

「みんなを守る、ハンターになる。」って。

カホ・チータのみんなとは、今でも連絡をとりあっている。

首都ギルドに舞い込む案件は、困難を極めるものばかりらしい。

でも、壮絶な強さを誇るモンスター相手に、連戦連勝。

疲れるけど、充実していると、ウミさんから手紙が来ていた。

首都で筆頭ハンターチームになったカホ・チータは、今やこの大陸で知らない人はいない。

なんだか遠くに行ってしまった感じがする。

でも、繋がりには消えない。

「私は、私の手が届く範囲でがんばるよー……。ふふ、ウミさん。幸せそーだったなー。」

手紙には、ムルトさんと一緒に暮らし始めたというノロケ話も追記されていた。

近々、結婚も考えているという。

なんとも幸せな話だ。

「ごちそうさまですー……。フフツ。」

思わず笑みが溢れる。

とりあえず、タオカカのギルドに帰るかな。

シガイアさんも待つているだろうし。

* * * * *

タオカカのギルドは、中々に大きい。

他の大きな街のギルドと比べても、遜色ないと思う。

一度だけ首都のギルドを見たことがあるけど……あれと、比べちゃだめだよねー

……。

デカすぎ、荘厳すぎ、どこかの遺跡の神殿みたいだった。

それと比べれば、この前行ったワザドラのギルドは可愛いものだった。

ここから五日ぐらいの距離のところにある、村のような街のような……微妙な大きさの町。

少し厳つい石造りの建物の中は、とっても賑やかだったのを覚えている。

タオカカは、ガツツリ木造の巨大ログハウスみたいなつくり。

……自然に近いと言われれば聞こえはいいけど……田舎臭いよねー。

ま、私は大好きなんだけど、ねー。

ちなみに、この周辺にはギルドはここ、タオカカにしかない。

私の故郷のアヤも、隣村のミヨシも、このギルドに頼りっぱなし。

だから私が飛び回ることになってるんだけどさ。

自分の故郷の周りを守るなら、それでいい。

私の本懐だ。

ソロで飛び回るのは、この辺を本拠地にするハンターが少ないから。

冬にどつとハンターがやってきて、春も半ばになると閑散とする。

パーティを組んでやることもあるけど……一人の方が気楽なんだよねー。
のんびりと自分のペースで。

遂には口調までこんなになってしまった。

こう話していると、自分が落ち着くんだよねー。

冷静になれる。

……私って、頭にきたら意外と激情型らしいからねー……。

未熟未熟。

「シガイアさーん。入りますよー。」

ガチャ。

「こんにちはです……あれ、なんですかー？その顔ー。」

「セツヒト……ノックをするのを忘れただろ。」

「あ、やばー。……まー、許してくださいよー。例のやつ、倒せましたのでー。」

「ああ、報告は聞いている。……本当に助かった……。」

「いえいえー。……大丈夫ですか？」

シガイアさんは、タオカカギルドのギルドマスターだ。

数年前にタオカカにやってきてから、この周辺の生活は俄かに上向いてきた。

アヤ村からカホ・チータがいなくなった後、周辺の狩り場事情は一変した。

首都に引つ張られたカホ・チータの代わりが、どこにもいなかったからだ。

その時にはすでにタオカカのギルドマスターになっていたシガイアさんもてんてん舞い。

首都ザキミーユに、ハンター補充の陳情を出しに行っても、暖簾に腕押しだったらしい。

……首都ばかり戦力集めて、どうすんだっつーの……。

私も死物狂いでがんばった。

そして、ハンターになった。

自分で言うのもなんだけど、才能があつたみたいで。

……多分全武器種、使えるんじゃないかなー。

生まれてから、あの山で育って、カホ・チータのみんなに鍛えられて、自分で特訓しまくって。

気付いたら、こんな感じ。

いやー、がんばったんだよ？わたし。

本意な二つ名には、いささか不満だけどさ。

何よ、『百手』って。

「セツヒト……頼ってばかりで済まない。」

「いいですよー。……で、今回の原因は、何ですか？」

おかしいのだ。

こここのところ。

見たことのないモンスターばかりを相手にしている。

真冬の時期に、強いモンスターが湧くこの辺だけど、今のあったかいこの季節にあんな強力なやつ、出たことなんてない。

この辺で生活していた私が言うんだから、間違いない。

「……仮説の域は出ないが……。」

「はい。教えて下さい。」

疲れが見えるシガイアさんが、ゆっくりと口を開ける。

「……スタンピード、かもしれん。」

「すたんぴーど？」

聞いたことない。なにそれ？

「強力過ぎるモンスターが出現し、ありとあらゆるモンスターたちが、その生息域を大幅に変える。縄張りを侵され、立ち向かうこともできず、逃げ出す。そう言う連鎖的な現象を指す。」

「……逃げたって……今日のヤツ、そうとうヤバイやつでしたよ？」

「……だから……そのモンスターでさえ、歯が立たぬ様なモンスター、と言うことだ。」
「……マジっすかー……。」

シガイアさんは、かなりできる人。

疲れを見せるなんて、あり得ない。

そして、嘘を付く人でも、ましてや信憑性の薄い説をバカみたいに公言する人でもない。
い。

つまり。

これは、マジだ。

「どーすればいいですか？」

「……濟まないが、これまで以上のペースで、狩猟を頼むことになる。原因はこちらで究明する。……セツヒト、すまん……。」

「……………シガイアさん。」

「……………」

シガイアさんが、心底苦しそうな顔をしている。

「私は、守るためにいる。みんなを、みんなが住む場所を、その営みを。……苦になんかならないですよー？お任せください！」

「……………ああ。」

……ダダダダダ!

コンコン!

「開いている。誰だ?」

ノックの音が、部屋の中に響く。

ガチャツ!

「ぎ、ギルドマスター! またやられました! ハンター2名負傷! 内1名は瀕死! 場所はミヨシ! 相手は……電竜! ライゼクスです!」

「……………わかった。すぐに行く。」

「はい!」

バタン!

ダダダダダ……。

ギルドの人が入ってきたと思ったら、とんでもないことを言って、出て行った。ライゼクス？以前山脈の向こうにしかないようなモンスターが……ここに？

「セツヒト……………」

「だからー、そんな顔しないでくださいよー。……行ってきますねー。」

「……………武運を祈る。」

「はーい。」

部屋を出る。

『クソツ……………!!異常事態だ……………首都は何をしているんだ……………!!』

シガイアさん……………。

首都からやって来たって聞いたけど、タオカカ周辺の発展とハンターの育成に、とてもがんばってくれているギルドマスター。

本当に、尊敬している。

……がんばりますよー！

ライゼクス、か。

まだ知っているだけマシかなー。

さーて、いっちょやりますかー。

首を洗って待ってなー、電竜ー！

………。

その日から、大変な日々が続く。

毎日毎日、強力な大型の相手。

私しかないのかって言うぐらい、がんばっていたけど。

他のハンターも、それぞれが相手できるモンスターを倒していた。

……疲れていたけど、弱音なんて吐けない。

カホ・チータのみんなも、こんな感じで頑張ってるのかな？

そう思うと、不思議と力が湧いてくるようだった。

* * * * *

その日もつつがなく討伐完了。

忙しさも極めれば波に乗ってくるもので、最近はずっとした大型じゃ、私の相手にはならなかった。

自分でも、恐ろしい速度で成長しているのがわかる。

大型狩猟の達成難易度、速さ、数……凄まじい程の記録になっていた。

様々な条件を加味し、ギルドが私にG級の称号を与えた。

首都から称号付与の手紙が来た時、なんの冗談かと思った。

どれだけ周辺のハンターやギルドスタツフ達が苦心して、生活を守ってきたか。

そんなことなど知ったことかと、手紙にはこう書かれてあった。

「首都ザキミーユギルドへ招聘する。」

その手紙は、粉々にして破り捨てたあと、灰になるまで燃やし尽くした。

思い出すだけでも腹が立つ。

討伐を完了したりオレイアの亡骸を前に、変なことを思い出してしまった。

関係ない。

私は、ここで守る為に生まれ、ここで死ぬんだ。

例えフリーのハンターになっても、それは変わらない。

……ギルドに帰ろう。

信号弾を打とうとした。

その時だった。

ーゾクウツ!!

寒気が襲った。

恐ろしい何かがいる。

山の中腹に目を向ける。

私じやなきや、一瞬すぎて見逃すような、そんな光が見えた。

あれは稲光だったのだろうか。

しかも、色は赤黒かった。
見逃すわけには行かない。

しばらくしてやってきた回収班に事情を伝え、その場所に向かう。
近づけば近づくほど、本能が告げる。

「近づくな、無事では済まない。」と。

それでも、歩みを止めるわけには行かない。

木々が生い茂るミヨシの山。

その中腹に、ヤツはいた。

(な、なーんだ……ジンオウガか……。)

感覚はとつくに麻痺している。

この時期に、こいつがいる事自体が異常。

だが、最近のこの辺は、事情が違う。

イヤンガルルガにライゼクス……他にも、普段目にしないようなモンスターをたくさ
ん見てきた。

普通のジンオウガなら、珍しくもない。

そう、普通のジンオウガなら。

(……いや、なに……? あれ……?)

違う。

明らかに通常個体とは違う。

見た目は確かにジンオウガ。

だが、毛並みや体色が、まるで違う。

普通ジンオウガは、黄色や水色、白の入り混じる美しい印象だが、こいつはドス黒い。
赤い光……飢えた眼光……。

そして見た目なんかより。

私の本能が言った。

「勝てない」と。

……………。

すぐさまギルドに報告に戻った。

観測班が見逃すとは思えなかった。

「さて……………確認のみの報告に……………あつた、ジンオウガだ。」

「場所は……………？」

「ミヨシとアヤの間……………山一つ向こうに見つけているが、確認のみ。現状危険性なし、との報告だな……………」

「シガイアさん、それは……………」

「ああ、わかつている。セツヒト、お前が直接見たんだ……………こいつが今回のスタンピードの原因かもしれない……………」

「……………」

ありのままに報告した。

体高や色といった特徴。

そして、現状の認識。

私でも、敵うとは思えない、と。

「……………」

「……………」

沈黙。

そりやそうだ。

現状……自分で言うのもなんだけど、この周辺の最強戦力である私が、謙遜も奢りもなく、率直に「敵わない」と言っているのだ。

打つ手は、限られる。

「……………首都に、報を飛ばす。」

それしか……………ないよね。

「セツヒト並の……いや、それ以上の戦力など覚えはないが……それでも、やるしかない。」

私に匹敵するハンター。

メンバーが揃えば、撤退程度ならいける。

だが、撤退させてどうする？

あんな突然変異のような个体を、野放しにするのか。

いつ来るともしれない不安を抱かせながら、みんなに生活を送れと、言えるのか。

答えは「No」だ。

討伐。

やるしか、ない。

シガイアさんも、その辺は十分に理解していた。

* * * * *

観測班からの情報が揃い、そのジンオウガには二つ名ができた。

獄狼竜。

ジンオウガ亜種。

第一級竜災指定。

いつ来るともしれない、獄狼竜の襲来に備え、アヤ、ミヨシ、全住民の避難命令が出た。

ただ、村を離れない人もたくさんいた。

頭を下げて、「俺たちはここで骨を埋める」と、覚悟を決めていた。

……あの時、無理やりにも引っ張っていけばよかったと思う。

首都から返信が来た。

ギルド自慢の竜便を使って、1日半でやってきた返事。

そこにはこう書いてあった。

『首都、モンスター襲来につき、対処できず。

そちらで対処せよ。』

シガイアさんは憤慨した。

「後にも先にも、この人が怒ったのを見たのは、この1回だけだ。私だって、頭に來たけどさ。」

「首都にも、存亡の危機が迫っていると、そういうことらしい。」
「……首都にもー？どんなモンスターですかー？」

それは、カホ・チータの人たちが、歯が立たないほどのモンスターなのか。首都ご自慢の強力なハンター達でも敵わないほどの。

「……リオ夫婦、通常個体種だと。」

「……はー？……舐めてんの？」

余裕じゃんそんなの。

ハンター舐めんな。

「……首都の評議会の老いた連中の力かもな……よほど自分たちの命が大事と見える。」

そりや大型モンスターを見たことさえ無いような都会の連中は、リオ夫婦なんて見たら卒倒するだろうけど。

対処さえ誤らなければ、私一人でもいけるわ。

「……カホ・チータのみんなは？」

「……聞いたら……セツヒト。余計怒ると思うぞ。」

「うん、言ってる。」

『多くの人命の救助を、最優先とする。』……だそうだ。」

「……………」

わかってる。

カホ・チータは、そこに住む人の命を最優先に動いていた。

でも……みんながやれば、すぐにリオ討伐なんて終わらせて、こっちにやって来られるでしょ？

なんで……？

こっちのみんなの命だって危ういんだよ？

首都の人たちが、そっちの方が、大切だっていうの？

私が、私が憧れたハンターは……。

そんな程度だったの？

……。

シガイアさんを始めとしたギルド関係者は、首都のギルドを完全に敵対視した。

私も、もう考えないようにした。

私の1番の憧れだった、カホ・チータのみんなは……あの人たちは、もう関係ない。

私は、私のできることをする。

覚悟を決めて、山中に身を潜めていた、その時。

突如として、獄狼竜が村を襲った。

83あるソロハンターの話③

ドガアアアアアアン……………。

聞いたこともないような大きな音だった。

夜半過ぎ、前線で見張っていたはずの獄狼竜が消えた。

「大型は、とてつもない跳躍や地面を掘るなどして、大移動をすることがある！」

マシヨルクから教わったことだろうか。

もう覚えていない。

とにかく、私の視認できる中に、獄狼竜はおらず。

背後の村から、轟音が響いたのだった。

「チイツー！」

バシユバシユツ!

赤い信号弾を放つ。

2 回続けるのは、「最悪」の知らせ。

獄狼竜が村を襲った。

まずい。

まずいまずいまずい。

「落ち着けー……落ち着け私ー……。」

山を下る。

木々の間から、ミヨシの集落が見える。

獄狼竜が集落を襲っている。

「とどけえええええ!!」

ヘビィボウガンを取り出す。

走りながら、届くかどうかギリギリの射程。

集中する。

ズガガガガガガガガ
!!!!

ビシビシビシイ!!!

「ガアアアアアア!!」

着弾、確認。

続いて……

ヘビィボウガンをその場に投げ捨て、大剣に持ち変える。

タイミングを合わせて……3……2……1……!!

ザン!!!

「グアアア!」

タイミンググバッチリ……うわー……効いてなさそー……。

前線に持ってってきた武器は3つ。

ヘビィボウガン、大剣、双剣。

流石の私も、これ以上は重くて無理。

勘で持ってきた武器だけど。

やっぱこいつかなー。

ジャキン！

双剣を手にして、ジンオウガ亜種……獄狼竜と対峙する。

「あんたに遠距離勝負とかー、ちまい事やっても、絶対いつまでも勝てないっしょー。」

「……グルルルルル……」

「全力でいかせて——」

「……ウオオオオオオオオオオオオオン！」

すでに体が温まっていたのか。

それとも私を前にして本気を出すことにしたのか。

今でもわからないけど。

獄狼竜が放電状態に入った。

「……クソっ。」

放電状態。

ある意味チャンスタイム。

無防備になる時間帯とも言えるが、完全な放電を行えば。

大量の雷光虫が寄り、手がつけれない状態になる。

止めなければ。

こんな村のど真ん中で、あの状態になられたら、周囲の被害は免れない。

一瞬で思考を終える。

突っ込む。

全力の全力を、ご自慢の角に、叩き込んでいく。

「うらうらうらうらああああああ!!」

「ウオオオオオオオオオオオン!!」

意に介さない獄狼竜。

くそっ!間に合わないっ……!!

ジンオウガとは違う、赤くて黒い、不気味な光。
これは雷光虫などではない。明らかに異質な色。

「……離脱っ!」

放電待機の間には怯ませることは、かなわず。

獄狼竜は——

「ウオオオオオオオオオオオン
!!!!!!」

凄まじい雄叫びの後、周囲を焦がす大放電を行った。

バチツ！バチバチツ！
ドゴオン！！

ドオオオオオオン……………！！

ふっ飛ばされて、転げる私。

目一杯踏ん張って顔を上げた直後。

ヤツの周りには、瓦礫と化した家屋が広がっていた。

「うそ……でしょ……。」

ジンオウガは、放電待機の状態、つまりタコ殴りにできる時間がある。

しかし。それを過ぎれば、パワーアップした状態に変化する。

その変わる瞬間の放電は、たしかに凄まじいものだが。

獄狼竜の大放電は、ケタが違っていた。

放電などではない、異質な力の解放。

「威力が、強すぎる……」

その後は、ひどいものだった。

獄狼竜の力は、それはもう全く別の次元になっていて。

ミヨシの村の人達が一生懸命作り上げた集落が、その努力が崩れ去るのに、さほど時間がかからなかった。

攻撃を避けようにも遮蔽物が多すぎる。

それは獄狼竜にとっても同じよう。

目に入る全ての邪魔な家屋など、獄狼竜の脚の一振りですべて全壊した。

私を狙うのではなく、まずは狩場を整える。

さも当然のように、村を破壊し尽くす獄狼竜。

反撃を試みるも、意に介さず、すべてを蹂躪していく。
数分ほどすれば。

「……………アオオオオオン!!!」

村は、その村としての体を、失っていた。

「ふうー……ふうー……。」

誘いにもおびき出しにも乗ってこない。

焦る私の気持ちを、逆に誘い出すように。

ヤツは全てを壊し、雄叫びを上げた。

「……………グルルルル……………。」

「くそっ……………くそっ！」

泣きたいと思う気持ちはいつぶりだろう。

おそらく、倒壊した建物の中には避難しなかった住民が多数いたはず。

竜災害において、住民が被害を受ける際、直接このモンスターに攻撃を食らって亡くなることは、実はあまりない。

モンスターのとんでもない力で、家屋が倒壊されたり山を崩されたり水害が起きたり……そしてそれに巻き込まれるパターンが多い。

亡くなった人が見える。

ウソみたいに動かなくなったその人たち。

頭が潰れたり、あらぬ方向に手足が曲がっていたり。

見知った顔も居た。

服でしか判断できないような状態だが。

「ふう————……。。」

今すべきは何か。

……ひとまず、安全な場所への誘い出し。

私しかない。

これ以上、被害を出すわけには——

グツ。

獄狼竜が構えた。

背筋が凍る。

攻撃を行う前のモーシヨン。

普通の狩り場なら、避ければいい。

だが。

ここは村の中。

避けないと、タダでは済まない。

だが、避ければ村にさらなる被害が。

でも、避けないと。

けど避けたら村が。

でも――

「…………ガアア！」

クルンと回った獄狼竜は、その勢いのまま、右脚を振り下ろす。

私の取った選択は…………回避。

凄まじい速度で連続して振り下ろし。

これも回避。

潰される家屋。

蹂躪されるミヨシの人たち。
構うことなどできなかった。

おびき出すなど、不可能。

そして獄狼竜は、さらに。

回転しながら突進してきた。

いや、突進、では無い。

ボウガンで撃たれた弾のように、私めがけて突っ込んできた。

「ふんっ!!!」

私も体を思い切り回転させる。

卓越した双剣使いにだけ許された、ジャスト回避&斬り返し。

タイミングは合っていた。

なのに。

「ぐああっ!!!」

私はふっ飛ばされた。

「ぐっ………あぁっ!!」

痛い。久しぶりの、痛み。

避けるか否かの判断が遅れた。

ジャスト回避はうまくいったと思ったのに。

精度が甘かった。

……すぐに立ち上がる。

「うぁっ………!!」

右腕の腱が、やられた。

全身の裂傷と、上がらない腕。

骨も………いつてるな、これ。

「……グルルルル……」

獄狼竜が、唸る。

勝ち誇った顔を、するんじやない。
私はまだ、負けていない。

「……………舐めんなああああ!!」

脱力。

力が抜けてドロドロ口になった体を、
一瞬で獄狼竜と間合いをつめる。
倒れ込むようにして、加速。

「鬼神化……………!」

狙うは、ヤツの頭部。

油断しているヤツの、ご自慢の角。

「おらああああああ!!」

ザン!ザシユ!!ズザン!!!
ヒュバツ……ズザン!!!!

バキン!!

「グオオオオオ!!」

「どうだコラア!!」

折ってやった。

倒れ込む獄狼竜。

チャンス。

「オラオラオラオラオラオラオラ!!!」
「グアツ!ガツ……!ガアア!!!」

ありつたけを、叩き込んだ。

今殺してやる。

今、ここで、お前を絶対に、殺す。

よくも……よくも村の人達を……!!

「うらあつ!!」

「ギャウン!!」

自分でも体がどう動いているのか、分からない。

だが、死んでもいい。

こいつを、こいつだけは、必ず! 必ず!!

ザン!!

「ガアアア!」

忌々しそうにこちらを見つめる獄狼竜。

くそっ……倒しきれなかった……!!

「グルルルル……。」

起き上がった獄狼竜は、こちらを睨みつけ。

クルッ。

ダダッ。

ドスンドスンドスンドスン……。

山の向こうに消えていった。

「待て——」

私は、追いかけることもできずに。

ドサっ……………。

その場に倒れ込んでしまった。

* * * * *

「……………!?!」

パチッ。

目を覚ます。

意識が戻った。

知らない場所で寝ていた。

「……………ッ!」

体を起こそうとするも、できない。

「いたい……………」

包帯が巻かれた、全身。

腕も脚も、固定されていた。

動かそうとすると、強烈な痛みが走る。

「ぐ、獄狼竜は……………」

声を絞り出す。

ガチャツ！

「セツヒト!!」

「あ…………シガイアさん……………」

「……………良かった……………ああ、良かった……………」

「……………シガイアさん……………今、獄狼竜は……………」

「……………ああ、無理に話すな。ヤツは、去った。」

去った……………？

いなくなつたつてこと……………？

「覚えていないか……………観測班からの報告でしかないが……………対象は遠く山を離れ、北東の霊峰近くまで逃げたと。そう、報告があつた。」

「……………そう、ですか……………」

「ああ……………それが、二日前の報告だ……………当面の危機は去つたと言つていい。」

「……………はい。」

シガイアさんが色々教えてくれた。

あの後、応援に駆けつけたタオカカのハンターたちが見たのは、崩壊したミヨシ村と、その震源地らしきところに寝転ぶ私。

息をしていなかったらしい。

すぐに住民の救助が始まり、私はタオカカの医務室まで運ばれた。

息を吹き返し尚、危険な状態だったとか。

「ミヨシは……ミヨシは……？」

「……落ちていて聞け、セツヒト。」

「……。」

「……村は全壊。避難拒否の村民35人の内、当時屋内に身を潜めていた25人が被害……死者、16名。生存者のうち3名は重体、意識は戻っていない。」

「……。」

「……アヤ村にも被害が出ている。」

「えっ!？」

思わず首を起こす。

ビキツと全身が痛んだ。

「……!!」

「動くな！お前も、何故生きているかわからないと言われたんだぞ……!」

「……はい……。」

「……………続けるぞ。」

放電を撒き散らしながら、ミヨシを去った獄狼竜は、まるでその憂さを晴らすかのよう
うにアヤ村を襲撃。

一瞬の出来事に、避難拒否の住民もなすすべなく、被害を受けた。

「……………アヤは……………アヤの村は……………？」

「……………全壊は免れたようだ。……………セツヒト、お前の家族はもちろん無事だ。安心し
ろ。」

「……………そんなこと……………言っただって……………！」

少し安心してしまった自分が、憎い。

私の家族は全員避難していたから、そりゃ無事だろうけど……………。

……………私の村まで……………。

「……………被害を受けたのは7名、死亡者2名だ。一瞬で立ち去ったらしく、ミヨシほどの被害は出ていない。」

「……………2名は……………」

「ああ……………死んだ。獄狼竜の手によってな。」

「……………」

「勇敢なハンターの二人だ。下位とはいえ、村民が山に逃げるまで、体を張って時間を稼いだそうだ。」

「……………そう、ですか……………」

ハンターの仕事。

村を、みんなを、守る。

その人たちは命を使って、仕事をやってのけた。

私は……………私は……………」

「あつ……………あああああああああ
!!!!!!
……………」

動かない体。

唯一使える、声を振り絞り。

「あああああああ……………」

「……………」

私は、悔しさをぶつけた。

私自身に。

「……………セツヒト、お前は守った。」

「……………」

「お前がいなければ、これ以上の被害が出ていた……………間違いなく、な。ここに強者がいるとわかれば、モンスターもおいそれと手出しはすまい。モンスターたちのスタンピードも、パタリとなくなつたしな……………。だから……………ギルドマスターとして、礼を言う。……………ありがとう。」

「……………」

「……………かなりの大怪我だ。一度、しっかりと体を見てもらえ……………私は仕事に戻る。」

ザツザツザツ……。

バタン。

シガイアさんがいなくなってから。

私は、泣いた。

* * * * *

涙も出なくなつた頃、病室に色んな人が訪れた。

アヤやミヨシの人たちが、たくさんたくさん、礼を言つてくれた。ろくな返事もできないまま、私は頷くだけ。

母と父も来た。

よくやつたねと、労つてくれた。

よくやつた？

誰が？

私が？

沢山の人を、村を、守れなかった私が……？

みんなが立ち去った後、私はまた、自分に怒りをぶつけ続けた。

次の日。

来客がようやく落ち着いた頃。

コンコン。

ガチャツ。

「……セツヒト、元気か？」

「……え……？」

意外な人間がやってきた。

「……久しぶりだな……生きていて、良かった。」

「……マシヨルク？……なんで……？」

……今頃……？

「首都の防衛もそこそこに、すつ飛んできた。……間に合わなかったようだがな。」

「……カホ・チータの、みんなは……？」

「いない。私一人だ。」

「……そう。」

何故、今頃？

首都の防衛が済んで来たって。

「……首都は何とかなるおそらくな。リオ夫婦は、両方ともハスガ達が仕留めるだろう。……ここに来る途中に村も、見た……。」

「……。」

「ひどいものだった……。私達を受け入れてくれた場所が、こうも壊されていてはな。」

「……それで？私を笑いに来たの？」

「違うー……………よく守った。セツヒト。」

「……………何で？」

そんな労いの言葉などいらぬ。

私が聞きたいのは、そういうことではない。

「何で……………何ですぐに来れなかつた!? そんなに首都が大事か!? あんたの……………あんたたちの力を、村の人達がどれだけ欲していたか! わかるか!？」

「……………。」

「みんな言っていた! あんたたちがいればって!……………私じゃ……………私だけじゃ……………ダメだったんだ!! 人が……………!!」

「……………。」

「人が……………たくさん死んだんだ……………。」

思わず叫んでしまった。

だが、止まらない。

感情が、思いが、あふれる。

「なぜ!?なぜ、知らせを聞いてすぐ来られなかった!?もしかしたら、もしかしたら間に合ったかも知れないのに!!何で……………」

「セツヒト……………」

「……………」

マシヨルクが、口を開けた。

「私は…………私達は、間違った選択は、していないと思っている。」

「……………え?」

聞き間違いか?

何を、何を言っているんだ?

「私達の活動理念は、『より多くの人間を守る』ことにある。首都だけではない。世界を救う。私達の根底は、そこにある。」

「マシヨルク…………?」

「首都にリオ夫婦が襲来した。正確には、夜間に突如襲来し、被害を出しては帰っていく……卑怯な奴らだ。首都の民衆は恐怖に陥った。我々は、ザキミーユの筆頭だ。頼りの我々が居なくなれば、どうか。」

「……………」

「私達は話し合った。……………結論は『首都の防衛を最優先。タオカカ周辺への助力をその後行う』ことになった。」

つまり……………?

こいつらは、人間の数を判断の基準にしたのか?

この……山あいの村落の集まりで。

頼りにするものも少ない、そんなか弱い私達。

対して潤沢な設備も、優秀なハンターも揃っている首都。

天秤にかけて。

首都の方が、優先すべき、と。

「……………だから、私達は間違っていない。より良い方法はあったとは思えない。」

「……………ふざけるな。」

「……………」
「ふざけるなあ!!」

ようやく動くようになった右腕を、ベッドに叩きつける。
軋んだ音がした。

「『カホ・チータ』の力があれば！亡くなる人もいなかった!!」

「首都の防衛を優先することこそが、我々の理念であり、結論だったのだ！」

「あんたらは、人間を数で考えただけだ!!」

「違う！」

「違う！首都の……よくわからない権力に飲まれ、どうにもならない自分たちの行いを正当化したいだけだろ！」

「違うぞセツヒト！首都の人間は脆い！モンスターなど見たことも無いようなものが殆どだ！だからこそ、そんな弱き民衆を——」

「この集落の人間の方が、強いって!?!だからそっち優先ってこと!?!ふざけている!!私……私達がどれだけ……!」

「……………」

「頼るものも無く、日々を過ごしてきたか………！分かってるだろ!? あんたらだつて………ここにいたんだよ!!」

「セツヒト……。」

「あんたらの……あんたらのいた場所は……もうボロボロだよ………。」

「……………」

私は泣いた。

もう、流す涙も無いかと思っていたのに。
崩れ落ちてしまった。

* * * * *

マシヨルクは、すぐに帰っていった。

私は、カホ・チータが許せなくなっていた。

程なくして、私は首都の病院に行った。

一向に良くならない腕を診てもらうためだ。

首都での人々の話題は、カホ・チータ一色だった。

彼等は、リオ夫婦から首都を救ったヒーローとして、もてはやされていた。胸糞が、悪かった。

カホ・チータは、英雄か。

………こここの住人で、あの村で起こった惨劇を知っている人はどれだけいるのだろうか。

益々、カホ・チータが憎らしくなった。

* * * * *

「引退する？」

「はい。」

「………そこまで、怪我はひどかったか……？」

「まー動けなくは無いですけどね……上がらないですよねー、腕。はははー。」

「………私もここを離れることになった。」

「え!？」

「………ここからしばらく行ったところにある、ワサドラへ異動だ。安心しろ、次来るやつ

は首都には染まっていない、俺の友人だ。……………俺なんかより、よっぽど向いている。」

「そうですか…………。」

首都で、私の腕は以前のように上がらないと診断された。

リハビリを続ければ、日常生活を送るには問題のないレベルまでいけるらしい。だが、肉体を酷使するハンターは、難しいかもしれないと言われた。

「……………私も、ついて行っていいですかー？」

「ワサドラにか？」

「はい……………私も……………もうここには居たくないんですよねー。」

「……………お前の故郷が、すぐそこにあるんだぞ？」

「……………帰るべきところなんて、もうありませんよー。」

「……………そうか。分かった。」

シガイアさんはそれ以上何も聞かなかった。

私は、逃げるようにワサドラへ向かった。

父と母も祖父も、何も言わなかった。

ただ、笑顔で、「行ってらっしゃい」と言ってくれた。

ワサドラに着いたら、どうしようかな。

まずは仕事を探さないとね。

私ができる仕事………何だろ？

得意なこと………なんでも武器を扱えます？

武器屋とか開いてみるかなー。

そんなことを呑気に考えながら、車に揺られる。

もう、戦いに身を置くことはしないなど、ぼんやりと考えながら。

なるようになるか、と独り言ちた。

84 タオカカに泊まりましょう。

セツヒトさんから、昔の話を聞いた。

「……………とまあ、こんな感じー。」

「……………」

二の句が継げない。

「は、はい……………教えていただき、ありがとうございました。」

「いやいや、それほどでもー。」

セツヒトさんが、過去に何があつたのか、教えてくれた。

それは、想像以上に重く、そしてセツヒトさんとその周りの関係性を理解するには、十分な内容だった。

「ソウジ？ 体は大丈夫？」

「はい、それは、まあ。」

「無理はしないでねー……怪我って、長引くこともあるからさー。」

「はい……。」

セツヒトさんが言うと、説得力が違う。

先程、ジンオウガから攻撃を受けたところをさすってみる。

多分大丈夫だと思うけど……。

「その後は……どうなったんですか？」

俺は、続きを聞こうと話しかけた。

「……ワサドラに来てからは、ソウジも知っている通り……。カホ・チータはその後也大活躍さー。」

他人事のように話し始めるセツヒトさん。

実際他人事なんだけど。

「それじゃ、教官が村に来た経緯とかは……?」

「……知らないよー……ただ……。」

「…………ただ?」

「……その二年後、かな……大陸中に名を馳せた『カホ・チータ』が活動を停止。結構なニューズだったねー。」

「それは……。」

何故なのだろう。

解散後、マシヨルクさんがワサドラにやってきたというのはわかるが。

「…………死んじゃったんだ、二人。ムルトさんと、ウミさん。」

「え!?!」

「…………古龍討伐。古龍って聞いたこと、あるでしょー?」

「古龍…………。」

通常のモンスターとは一線を画すモンスター、古龍。

話でしか知らないが、その辺の大型モンスターとは、生態も形態もまるで違う。解明されていないことが多すぎる、異質のモンスター。

その強さも異次元級。

国を滅ぼしたこともあるという昔話を、ホエルさんから聞いたことがあるが……。

確か、教官は古龍撃退スコアを持つと聞いたことがある。

その時は「本当にすごい人だな……。」と思うだけだった。

「私も話を聞いたただけだけど……。あの時の一連のモンスターのスタンピード現象。その元の大元が、その古龍だったらしいねー……。」

「……………」

黙って、頷く。

「首都への危険が予測される中、『カホ・チータ』はその討伐命令を受けた。結果、その二人の犠牲もあり、何とか撃退に成功。南に向かつて消えたのを最後に、古龍は観測されていらない、つてさー。この辺、演劇にもなっている有名な話だねー。」

「……その後は『カホ・チータ』どうなったんでしょうか。」

「……まあマシヨルクは知つての通り。ハスガは……分らないねー。」

「そうですか……。」

経緯をおさらい。

まず、セツヒトさんの生まれ故郷はアヤ村。そこは、これから向かうミヨシ村と近い。

周辺を管轄するギルドはタオカカ……村？町？……にあつた。

アヤ村にカホ・チータが拠点を置いて……彼らは数年で首都へ行つた。

そこから力をつけたセツヒトさんは、一帯の筆頭ハンターとして名を馳せた……。

その頃、タオカカのギルドマスターとして、シガイアさんが居たわけだ。

ジンオウガ亜種……つまり獄狼竜。スタンピード……とかいう現象の原因。

突如現れ、ミヨシ村を全壊、その討伐に行つたセツヒトさんが負傷。

アヤ村も、次いで被害に遭つた。こっちは……半壊ぐらい。

その後、入院したセツヒトさんのところに、教官が訪れたわけだ。

……？

何か、引つかかる。

「……首都の防衛に関しては、『カホ・チータ』の皆さんがあたっていたわけですよね？」
「そうだねー。……過剰な戦力だと思うけど。」

「……何故首都ばかりに戦力を集めていたんでしょうか……？」

「そりゃー、偉い人も多いし、ダントツで人口も多いしねー……私も呼ばれたわけだし。無視したけど。」

「……………」

そこがまず引つかかる。

何故そこまで戦力を集中する必要があったんだろう。

そもそも、野生の大型モンスターが、そんなに人の多いところにわざわざ赴くものだろうか。

そりゃ首都に舞い込む案件の中には、凶悪なモンスターの類も多いんだろうけど。

疑問が尽きない。

それにもう一つ。

「……………マシヨルクさんは、何故わざわざセツヒトさんのところに来たんでしょう

……………」

「……………さあてね。まるで私と喧嘩するためにやってきたとしか思えなかったよ……………。それほど、あの時のタオカカギルドの首都に対する不信任は強かった……………『カホ・チータ』も同様にね……………」

「……………うーん。」

教官が、わざわざ来た理由？

セツヒトさんに、カホ・チータの行動の正当性を伝えるため？

……………いや、直接こんなところまで赴いたのだ。

言い訳がましいし、いくら教官だってそんな考えなしに、自分たちのことを不審に思う場所に赴くとは思えない。

わざわざセツヒトさんを訪ねる理由があつたんじやないか……………？

……………だめだ、分かん。

考えるためのピースが足りない。

……………ただ、俺の尊敬するマシヨルク教官とセツヒトさんがいみ合っているのは……………

まあ見慣れてしまった感はあるが、ちよつと嫌だし。

仲良くできないものかなあ……。

「……単純にアイツ苦手なんだよー。……ペースが全く合わない。」

過去のことを抜きにしても、仲良くさせるのは、難しいかも……。よし、今は話を変えよう。

「セツヒトさんはー」

「せつちゃんー。もう真面目な話は終わりなのー。」

「は、はい。せつちゃんさん。最後に……一つだけ！」

「ええー。」

あからさまに嫌そうな顔をしている。

だが、構わず続ける！

「……せつちゃんさんは、ハンターは終わりって話してましたけど……なんで俺なんかの訓練を引き受けてくれたんですか？」

「あー、そっちの話ー？んー……育てないと、って思ってたねー。」

「育てる？」

「そーそー……いいハンターを育てるのが、私にできることなのかなーって。」

「あ……。」

そうか。

引退しても、モンスターの脅威が去るわけではない。

「それにまー、全くもって動けないってわけでもないしー……それにー。」

「それに？」

「他ならぬソウジの頼みだからねー。」

「……は、はあ。」

「……んー、その反応は、そうじゃないよー？ソウジー。」

「え!?俺なんか間違えました!?!」

「あははー、まあいいやー。これから長いしねー……こつちはゆつくり、討伐しようかなー？」

「……?」

ワケがわからん。

やはりセツヒト語。ディスコミュニケーション。

しばらくして、タオカカのギルドのポポ車が到着して。

俺たちはようやく、村への行程を再開することができたのだった。

* * * * *

「ソウジさん！セツヒトさん！」

「あー、ハイビスちゃん。おまたせー。」

「お、お怪我はありませんか!? ああ、ソウジさん！ やっぱり怪我しています!! す、すぐに医務室へー！」

「だ、大丈夫ですよ、ハイビスさん。そこまでの怪我ではないです……。」

「だ、だって！ ジンオウガですよ!! ジンオウガ!! 雷狼竜なんて言ったら私、扱ったことさえ無いような……ああ、そんなことはいいです！ 早くこちらへー！」

ハイビスさんが、タオカカの入り口で待っていてくれた。
名前もこんなことあったような。

でもまあ、今は自分で歩けるし、そこまでの怪我ではないし。

……………心配してくださるのはありがたいから、素直にここは従おう。

俺は医務室まで歩きながら、ぴったり連れ添うハイビスさんに感謝するのだった。

「……………ソウジー？鼻の下伸びてないー？」

「伸びておりません。」

ちよつと嘘をついた。

……………。

医務室で治療をしてもらった。

ジンオウガから受けた体当たりは全身に痛みを与えていたが、骨や皮膚へのダメージは大了こと無かった。

むしろ全身の麻痺が多少残っていることが問題らしい。

ウチケシの実を煎じた薬を処方された。
しばらく麻痺が残ることを、セツヒトさんに話した。

「酷い時は、クセになるらしいよー？」

「後遺症つてことですか？」

それはイヤだな。

生活に支障が出なければ良いが。

「いやー、えつとねー……あのシビレをもう一度喰らいたっていうやつもいるんだよねー。」

「……は？」

「……………クセになる、らしいよー。」

……………。

人間の業は深いなあと思ひ知らされた。

変態は神だけじゃないよね、そうだよね。

うん、もういいや。多分その人たちとは人生において接点は無いだろうし。考えないことにしよう。

「おー！ソウジさん！……良かった、元気そうで。」

「おじさん。」

気を取り直していると、ガーグア車のおじさんが来てくれた。

「セツヒトさんも！いやあ、無事で何よりだよ！あんたらはやっぱ凄腕なんだな！」

「いやー、俺は怪我してますけど……。」

「何を言うんだ！おかげで俺も、あの受付嬢の姉ちゃんも、うちのガーグアも無事に済んだ！ありがたえ事だ！礼を言うぜ！」

「いえいえ……撤退させたのは、ほぼセツヒトさんのおかげですよ。」

おじさんに礼を言われるが、俺は全く何もできなかった。

セツヒトさんが居なければ、今頃あの爪の餌食になっていたことだろう。

「ソウジ―？」

「はい。」

「さつきも言ったけどー、アイツが今回の最終目標。……ジンオウガはこの冬山によく出るんだよねー。」

「はい……。」

うーん……倒せるビジョンが全く浮かばん。

……特訓して特訓して、強くなるしかないな！

ショウコにたくましくなった俺を見てもらおう。

セツヒトさんが、山の向こうを見つめている。

あの先に、ミヨシ村があるのだろうか。

「おじさーん、今日はここで一泊してー、明日またミヨシ村まで頼んでいーい？ お金払うからさー。」

「金なんて！ よしてくれ、セツヒトさん！ あんたたちは恩人なんだ。俺も道中だしな。任してくれ！」

「やったねー、よろしくお願いしまーすー！」

ミヨシにつくのは明日、か。

……セツヒトさんでも、守り切れなかった村、ミヨシ。

村の人たちの気持ちはどんなものなんだろう。

あれから数年……。

……もし、セツヒトさんを攻めるような人がいたら、俺が守ろう。

セツヒトさんは頑張ったんだ。……たった一人で。

セツヒトさんは、胸を張っていいんだ。

「ソウジさん、セツヒトさん、今日の宿が取れましたよー！」

「は……ハイビスさん……あ、ありがとうございます。」

ガーグアの羽を服につけたハイビスさんが、いつの間にか宿を取ってくれていた。ありがたいのだが……ハイビスさん、いつの間に厩舎に行ったんだろう……。

「あそこまで愛情を注げば、そりゃガーグア達も懐くわなあ。」

おじさんも、俺と同じ驚いた顔をしながら、そんなことを言っていた。

* * * * *

タオカカカの町は、ワサドラと規模は似ている。

だが、やはり全く違う町だ。

医務室に行ったときにギルドを見たが、大きな山小屋のような木造りで暖かみがあった。

そういう意味では、ワザドラの完全な石造りとは違っている。

それに、周辺の地理はまるで違う。

畑や草原が周りに広がるワサドラとは違い、南側以外の三方は完全に山に囲まれている。

更にその稜線の向こう、大きな山脈に、既に白い雪化粧が見える。

もう雪が降っているのか。

山に日が沈む。

真っ赤な色に染まる山々とその雪が、何とも美しい。

……だと言うのに。

……これは一体どういう状況なんだ。

「えー……セツヒトさん？確かに私は二部屋しか取れず、申し訳なかったと思いますが……。」

「でしょー？だからー、私がこっちで寝ればー、オツケー？」

「いやいやいやいや！」

ハイビスさんとハモる。何かデジヤビユ。

ハイビスさんが部屋を取ったまではよかった。

二部屋だった。それしか取れなかったらしい。

うん、まあそこもいい。

問題は、そこで何かアホなことを言い出したセツヒトさんである。

「えー、だってー、ソウジはけが人だよー？一人で部屋は、ちよつちかわいそうかなーっ

てねー?」

「だ、だからって……そのー、だ、男女同室っていうのは……は、ハレンチだと思います
!」

ハレンチで。

久しぶりに聞いたよ。

……いや、ヒナタさんとの銭湯騒動で言われたな……。

「えー……じゃー……ハイビスちゃん、ソウジと一緒にの部屋ー?」

「えっ!?!」

「私じゃ駄目ならー、ハイビスちゃん?」

「えっ!?! えっ、えっ!?!」

「何テンパってるんですかハイビスさん! しっかり拒否して!」

よく分からんセツヒト理論に惑わされなくてください! ハイビスさん!
ていうか俺大丈夫ですから!

「せつちゃんさん、違いますよ……申し訳ないですが、俺が一人で部屋を使えばすべて解決します。」

「おー。」

「お二人には……すみませんが、一部屋使っていただく方向で。」

「なるなるー。……でもソウジー。」

すべて丸く収まるベスト意見。
文句なんてあるのか？

「私がい、そつちの人だったらー……どーなるー？」

「……そつちー？」

「だからー、夜のー、双剣使い？」

「……………」

夜の双剣。

下的な意味で、2つイケる。

つまりどつちもオツケー的な。

「何を言ってるんですか!!?!!」

「またもハイビスさんとハモった。」

本日2回目。

「ほらほらー、そうなること、ハイビスちゃんが大変なことになっちゃうかもねー?」
「え、えええ!!?いや、それはちよつと!」

「でもでもー、そしたらー、私を一人にしないといけないからー……ソウジとハイビスちゃん相部屋ー?」

「そ、それは、ちよつとまだ!まだ!」

「まだってなんですかハイビスさん。」

「顔が真っ赤ですけど。」

「んじゃーやつぱりー、私と一緒に寝るー?しよーがないねーハイビスちゃん……今夜は……寝かさないよー?」

「わ……わた……私！一部屋いただきます!!」

ピューー!

バタン!

シーン……。

「……セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「………せつちゃんさん……完全に今、からかってましたね?」

「……いやー、楽しいねー、ハイビスちゃんいじりー。」

「反省の色がない!!」

この人はあれか、人をイジらないと生きていけない人種なのか。

「……私って昔から、そつち側によく見られるんだよねー。」

「あー……それは何か分かります。」

「あー、安心してねー。私はー、ノーマルだよー?」

「……とりあえず、ハイビスさんに謝ってきなさい。」

「はーい。」

そこは素直なセツヒトさん。ハイビスさんのところに行き、弁解。

二人で仲良く寝るようである。

……あれ、俺セツヒトさんと寝てたら、就寝裸族の生態を観察するチャンスだったのでは……??

……。

よし!

もう飯食って風呂行って寝よ。

怪我もしたことだし、早く寝るに限る。

一人でも寂しくなんてないんだから。

85ミヨシ村での生活を始めましょう。

完全に余談だが、俺の日本での出身は南の方だ。

冬は寒いと言えば寒いだが、日本全体から見れば暖かい方である。

なので俺の住む町に、雪が積もった記憶などない。

ついでに言うと、スキーやスノーボードなんてやったこともない。

学生の頃、遠方に行こうと企画したものの、当日に風邪を引いてドタキャン。

それ以来、「あ、俺は雪とは縁がない生き物なんだ」と諦めていた。

けど。

「すげー……一面真っ白だ……。」

タオカカの村で宿を取った翌朝、外が一面の雪景色に変わっていた。

部屋がやたらと寒いなど外を見たら、真っ白。

雪が見慣れない俺としては、少々ハイテンションになってしまう。

「うわ……すげー！すげーぞ！」

我慢できずに宿の外に出る。

試しに手に取ると、少しベチャベチャしていた。

「あー、雪つてもっとフワフワなのかと思っていたわー！でも雪だー！」

雪玉を作る。

冷たい！すごい！

バシツ！

「いてえ!!」

頭になにか衝撃が。

振り返ると、数人の子どもたちがゲラゲラ笑っていた。

雪玉を当てられたらしい。

「……よくもやったなー!!」

「きゃーー!!!」

やっべえ楽しい。

子どもと雪合戦をして楽しんだ。

……。

* * * * *

「なにをされていたんですか？ソウジさん？」

「ぶえつくしよい!!……え、えーつと……その……。」

「……。」

「タオカカの子どもたちと、交流を兼ねたレクリエーションを……。」

「思いつきり自分から楽しんでましたよね？」

「はい……。」

「怪我しているのに。」

「い、いや、起きたらだいぶ良かったんで……。」

「しかもインナー一丁で。」

「はい……。」

「そりゃ風邪ひきますよ!!」

「ぶえつくしよい!!」

はい。

雪の冷たさも知らぬアホが一人。

はしやぎ過ぎて風邪っぽくなってしまいました。

ハイビスさんからプンスカ怒られる。

「ソウジさん、体調管理も、ハンターの重要な資質ですよ!？」

「ズズツ……はい……。」

「ほら、鼻水も……もう。」

ハイビスさんがちり紙を取ってくれた。

鼻をかむ。

チーン！

「はーい、ソウジ。これ飲んでー？」

「な、何ですかこれ。」

「シナトマトとホットドリンク混ぜたスープ。んまいよー？」

「いただきます……………ああああ、なにこれうまあ……………」

セツヒトさんがマグカップを手渡してくれた。

めっちゃ温かい。

飲むと、体の芯から温まってくる。

「熱はなさそうだしー、鼻風邪かなー？ いやー、まさかソウジが雪ではしやぐ人だとはねー。」

「すみません……………」

「いやー、可愛いところもあるよねー、ソウジ。何だっけ…………『くらえ！俺の雪玉ハ

リケーン!』だっけー?」

「いやーやめて!童心に帰った俺をいじらないで!」

『やるな……この俺に一撃加えるとは!ここからは本気で行くぞ!』だっけー?」

「何で一字一句覚えてるの!?!」

厨二病全開。

中身おっさんが、である。

恥ずかしいったらありやしない。

「とにかく!ソウジさんが良くなるまで!体調管理は、今後専属受付嬢である私も気を
つけますので!」

「は、はい。」

「で……どうしましょう、セツヒトさん。」

「うーん……ガーちゃんグーちゃん達も厳しいよねー、こりや。」

そうなのだ。

俺が風邪を引いたのもそうなのだが、急な大雪に見舞われたせいで、足止めを食らっ

てしまった。

雪道にガーグアはちよつと厳しいらしい。

「まーソウジの風邪はいいとしてもー。」

いいんか。

「……ポポに、乗ってみるー?」

「……え?」

* * * * *

「いやあ……あんた達とは短い間だったけど……楽しかったよ。命の恩人だしな! またいつでも頼ってくれ!」

「はい、おじさんも、お元気で。」

「おじさん、また冬が明けたらお願いしますねー!」

「はいよ! 任してくれ!……そりやそうと……。」

おじさんが振り向いた先。

ハイビスさんがガーグア2頭を優しく撫でながら泣いていた。

「うん……うん……ガーちゃんもグーちゃんも……元気でね？またいつか、会えるからね？」

「グアー。」

「ガー。」

感動的な場面である。

あるのだが。

ガーグアのアホ面のせいでなんかコメディちつく。

「いやあ、アイツらがあそこまで他の人に慣れるのは見たことねえなあ。すげえや、あの姉ちゃん。」

うん。

全然感動的ではないなんて、無粋なツツコミはやめておこう。
沈黙は金。

「ガーグアの顔アホっぽくて感動しないねー。」

……台無しにするセツヒトさんであった。

……。

雪道を進むため、俺たちはガーグア車のおじさんと別れた。

おじさんは足止めを食らってしまったので、このまま春になるまでタオカカに滞留するという。

ご自慢のガーグア達も、この雪ではただの大飯食らい。

しばらくは雪の田畑をゆっくり歩かせながら、フンと脚で地面を耕す仕事をするらしい。

たくましい話だが、雪が深くなって仕事が無くなったら、コイツらはどうなってしまうのか。

……よし、次のことを考えよう。

俺たちはポポ車の御者さんと交渉。

急な雪でもポポは問題ないらしく、すぐに出発できるとのことだった。すごいな、当日でOKなんて。ありがたい限りだ。

「グオオ……。」

「うおっ！」

ポポはでかかった。

見た目は完全に前世の凶鑑で見たマンモス。毛深くて大きな象。

立派なツノが反り返っており、当たったらめちやくちや痛そうである。

ツノの先の方が削ってあり、家畜として飼い慣らされている感じがする。

「セツヒトさん、これってー」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、こいつ、どうやって車を引くんですか？」

そもそも雪道で車なんて引けるのか？

「あー違う違うー。これはー、乗るのさー。」

「……乗る!？」

「そーなの。まあやたら重い荷物はソリで引いたりするけどねー。今回はソリなしー。ソウジのおかげー。」

「あ、俺がアレで荷物を持っているから……」

「うん。ありがとねー、おかげですぐにポポに乗れたよー。」

なるほど、人を運ぶだけであれば、当日OKも出やすいわな。

「きゃー!きゃー!!」

「お、お客さん!動かないください!!危ないですよ!!」

「すすすすすいません!!これ……高くて……キャー……!!!!」

ハイビスさんがポポに乗ると、膝を曲げていたポポが立ち上がった。

下から見ている分にはそこまで高くは見えないが……あれだ、数mぐらいが一番リア

ルで怖いって言うやつだ。

俺も高いところ苦手なんだよなあ……。

「ソウジ、キヤーキヤー言っているのは、ああいう可愛い子だけだよー？」

「俺は言いませんよー！」

「おー。がんばー。」

結局ポポに乗る時、俺は絶叫してしまった。

爆笑するセツヒトさんとハイビスさんの顔が忘れられない。

ちくしょう、荷物の中身、大声で全部読み上げてやろうか。

……虚しいからやめておこう……。

* * * * *

「ハイビスさん、ポポに乗るのは初めてですか？」

「はい……慣れてくると、楽しいですね、これ。」

「そうですね。目線も高くて、気分がいいです。」

「ソウジさん？風邪が悪化しないように、気をつけてくださいね？」
「は、はい。毛布はしっかりとしております。」

ポポの上は、慣れたらとても気持ちいい。

白い山々を見ながらゆつくりと進むのは、何だかのんびり旅気分である。寒いけど。
とは言っても周囲の警戒はしておく。

常時〈マップ〉を見ながらモンスターの警戒にあたる。

「私がかげ張ってるから、小型とかは多分大丈夫だよー？」

「ありがとうございます……すごいですね、その殺気を放つ技？……って言えばいいんですか？」

「ねー。なんで自分でも出来るのか、わからないんだよねー。」

セツヒトさんは間違いなく天才の部類に入るタイプの人間である。

殺気を意識的に放つとか、もう完全に人間を辞めていると思えない。

何だこの人。サ○ヤ人か？

しかし、のんびりしているので、会話も花開く。

さらには眠ってしまうと凍傷やら落下の原因になってしまうので、起きるためにも会話を続ける。

「セツヒトさん、そう言えば。」

「んー？何ー？」

「昨日ジンオウガはガーグアが好きとか言っていましたけど……このポポは何か狙われたりしないんですか？」

「あー……いい質問をしてくるねーソウジ。」

「え？」

「いるよー？ポポが大好物の、とんでもない奴が。」

「マジですか？どんな奴ですか？」

気になる。

だって昨日みたいに襲われたら洒落にならん。

「んー、ティガレックスってやつー。轟竜、って呼ばれてるねー。」

「ゴウリュウ？」

「そー、絶対強者、轟竜ティガレックス。よく野生のポポを狩っているねー。」

「どんなやつなんですか？」

「んー……説明めんどいー。」

「いやいやいや。これも勉強ですって。」

教えて欲しい。

絶対強者で。かつこよすぎる&恐ろしすぎる。

「んー、とにかくでかい口、強靱な尻尾を持つ、すごく凶暴な竜らしい竜かなー……地べたを這う感じは竜っぽくないかなー……でも、はじまりの竜って言われているから竜なんだよねー。」

「……。」

「……………うん。」

「……………絶対今飽きたでしょ。」

「だってー。お尻痛くて疲れたー。」

「……………もういいです……………また教えて下さいね。」

「んー……………善処する……………。」

寝てしまった。

ゴロンと、不安定なポポの上で。

なぜ寝られるんだ。バランス感覚が半端ない。

そして寝たらまずいんじゃないか……まあいいか、セツヒトさんだし。

「そう言えば……ハイビスさん。」

「はい？」

ハイビスさんに話しかける。

ハイビスさんは、上下完全にモッコモコの格好である。

頭にはニツト、雪焼け防止なのでかいゴーグル、見た目はスノーボーダーっぽい。

……やたら可愛く見えるのはあれだな、スキー場効果ってやつかもしれない。

聞いたことしかないけど。

「ミヨシってギルドが無いって聞いたんですけど、ハイビスさんはどうするんですか？」

「あ、そこですか。説明してませんでしたね。」

ハイビスさんが説明をしてくれる。

「タオカカのギルドの出張所のような場所が、各地にできるみたいなんです。この辺は冬、雪に閉ざされますから。……何でも数年前、このギルドマスターがそのようにしたみたいですよ？ 私はその受付業務……というより業務全般を行うことになりましたね。」

「全般？」

「はい、受付だけでなく、観測班からの情報をもとにモンスターを分析したり、クエストやハンターさんたちを管理したり……あれですね。自分で言っというて何ですけど……忙しそうですね……。」

ハイビスさんが遠い目をしている。

……ギルドの人って、多分この世界で一番働いている気がする……。

うーん、ブラック。

「お、俺も手伝えるときは手伝いますからね！」

「それは嬉しいですけど……シガイアからは『ギフトは極力使わせないように』と厳命を受けてますから……。」

「そ、そうですね……。」

さすがシガイアさん、先回りしてくるなあ。

伊達に各地のギルドマスターを歴任していない。

俺の〈マップ〉のギフトを使えば、モンスターの管理とか楽勝だと思うのだが。

……悪用されて酷使される未来しか見えない。

やめとこい。

「シガイアさん、すごいですね……タオカカのギルマスだったんですね。」

「え？ そうなんですか？」

「そうらしいですよ。昨日、セツヒトさんに教えてもらって。」

「なるほど……そういうことなんです……。」

何がるほどなのかはわからんが、ハイビスさんはうんうん頷いている。

「ソウジさんは、これから向かうミヨシの事は……。」

「あ、聞きました。大体。」

「そうですか……ならお分かりかと思いますが。」

ハイビスさんが口調を少し真面目にして、続ける。

「ミヨシ村は、あの竜災から復興し立ち上がった『再生の村』と言われてます。元々良質な木材が採れるのと、冬の地場産業として防具加工が盛んで……その辺を足がかりにして。」

「数年で……すごい早さだ。」

「ええ、なので土地の開発も盛んで……それも相まって、モンスターとの衝突も数多いと……聞いてます。」

「……へえ。」

なるほど。

モンスターを狩る側には、嬉しくもある話だ。

「ギルドの業務も多忙になり、ハンターも数が心許ない……なので、モンスターが増える冬の間、一時的に私達がお手伝いをする形です。」

「なるほど。」

結構打算的というか、セツヒトさんもただの思いつきで言っていたのではないのかな、とわかった。

ハイビスさんもセツヒトさんも、その職では超有能だ。
俺も足手まといにならないように頑張ろう。

ヒュー……

冷たい風が吹く。

雪はまだ、舞い上がるほどではない。

ベチャ雪、というらしい。まともに歩いたら、足を取られる。

ポポは、そんな足場を物ともせず、ゆっくりと、だが確実に進む。

「おっ……。」

峠を越えると、眼下に集落が見えた。

「見えたぞー！もう少しだー！」

先頭を行く御者のお兄さんが、声をかける。

モゾモゾと動くセツヒトさん。

目を覚ましたかな？

「……あー、懐かしいねー……あの頃の面影はないけど。」

セツヒトさんが、呑気な口調とは裏腹に、険しい顔で集落を見つめている。

「ソウジー、ハイビスちゃん。……あれが、ミヨシ村、だよー。……私が守れなかった村。」

眩くように話すセツヒトさん。

なのに何故か、その声が妙に耳に残るのだった。

* * * * *

「いやー、お久しぶりですー。」

「ああ！セツヒトさん！久しぶりですね！！……いや、来てくださるとは思ってませんでしたので……嬉しいですよー！」

「はははー、また、お世話になりますー。」

村に着くなり、セツヒトさんは色んな人に囲まれてしまった。

今話している人は、少しお腹の出ている恰幅のいいおじさんである。

村の長的な人だろうか。

囲む人たちはみんな笑顔。ニコニコである。

その後ろには、何か四角い厚紙を持った女性がチラホラ。

………セツヒトさんにサインをねだっている様子。

セツヒトさんも書き慣れた様子で、応対している。

「セツヒトさん、すごい人気ですね……。」

「そりやそうですよ。この辺であの方の名前を知らない人なんて、居ないんじゃないですか？」

「へ、へえ……。」

「周囲一帯を守った英雄ですからね。あの人気も領けます！流石です！」

ハイビスさんも、何故か誇らしげ。

それはいいとして。

そのサインをねだる方々の視線がこちらを向いている。

……気のせいかな、俺に向ける視線はちよつと……なんか怖いような……。

「やー、おまたせおまたせー。参ったねーこりや。」

「せつちゃんさん、すごい人気じゃないですか。」

「うん……まー複雑だけど……何かすごく美化されちゃつてるんだよねー、私と獄狼竜の対決が。」

「あー。」

憧れのハンターと、凶悪なモンスターの一騎打ち。

まあ、男心をくすぐるには十分な要素である。

女性人気のほうが高そうだけど。

ていうか……。

「せつちゃんさん？」

「はいはいー？」

「……気のせいか、女性の方の俺への視線が怖いんですが……それは。」

少し恐ろしい。

「あー……私の連れって言ったら、あんな感じー。」

「連れ、って。」

「えー？別に間違っていないでしょー？」

「それはそうですけど……。」

俺の精神安定上、あの方々とは触れ合わないほうがいい気がする。

あ、あの人「チツ」て舌打ちしたような。
帰っていった……。

「さーて、宿に行こうかー。」

「何にもなかったように話進めないでください。」

「貸し切りのログハウスがあるんだってー。楽しみだねー。」

「反省ゼロですね……。」

女神様とのやりとりを思い出す。

はいはい、俺が精神削ればいいんですねわかります。

軽口を叩きながら、ログハウスへ。

しかし、もしセツヒトさんを悪く言う人がいたら、なんて考えていたが、今の所杞憂に終わりそうだ。

当たり前か。

セツヒトさんがもしいなかったら、なんて仮定したら、この一帯に人が住んでいることはまず無いだろう。

セツヒトさんが発見し、避難を呼びかけて撃退したからこそ、今ここに生活が成り立つわけだし。

そんなことを考えていたら、宿についた。

「おー……ここらしいよー？すごいねー。」

「宿じゃないですねこれ……もはや家だ。」

「わー……。」

3人で声を上げる。

特にハイビスさんは驚かされていた。

全部木でできた、温かみのある家。

木材が豊富な地方ならでは。

基礎や煙突こそ石でできているが、殆どは木材だ。

ログハウスの入り口には、No. 3と書いてあった。

3つ目のログハウスって意味なのかな。

そういう周辺にも、似たような家が数件あった。

季節冬になると増えるというハンターたちの、仮の住まいなのかもしれないな。

「ここで寝泊まりするんですね。」

「そーだよー、ハイビスちゃん。部屋は2つだけど、一人がリビングに寝れば大丈夫かなー。」

「は、はい……。」

早速中に入って部屋割りを始める。

昨日のことを思い出したのか、ハイビスさんは顔を赤くしている。

「じゃあ俺がリビングに寝ますよ。」

「いやいやいや！肉体労働のお二人は、きちんとベッドに休んでください！」

「いやいやー、雪国に慣れてるからー、私がリビングに寝るよー。」

「セツヒトさんはだめです！」

「えー。」

リビングに、朝、裸の女性がいるとか。

明らかにまずいでしようよ！

話し合いの結果、俺がリビングに寝ることに。
女性には快適に休んでいただく。譲らないぜ。

「ソウジさんは、よく分からないところで強情です。」

「男を見せたねー、ソウジー。」

「なんと言われようと俺がここに寝ます。ほら、二人の荷物、部屋に置きに行きますよ。」

「はーい。」

セツヒト語でハモる二人。

仲良くなったもんだ。

ここで寝泊まりしながら、俺は特訓を始める。

数カ月後、春の雪解けとともに、ワサドラに帰る。

3人での、短い生活が始まった。

86 雪玉の名人に会いに行きましょう。

雪山の朝は暗い。

意識していなかったが、山合いの集落であるここミヨシは、日の昇りは遅く、日の入りは早い。

特にこの季節は日が短いようで、増々顕著になる。

「……………いつてきまーす……………」

まだみんなが寝静まっている時間。

厚着をして、外に出る。

雪は降っていないようだが、辺りは一面の真っ白。

薄暗くても分かる。

目の前の息も、真っ白だ。

「やて……………」

暗い中だが、そろそろ走り込みをしておきたい。

ずーっと座って移動や寝泊まりの日々だったので、体がなまってしょうがない。特訓を始めるに当たり、ランニングはしておこうと思いついたのだ。

「その前に……。」

ちよつとワクワクする心が抑えられず、俺は徐に、ログハウス入り口の手すりに乗っていた雪を拾う。

「おお……すごい、全然ベチョってしてない。」

これだよ、思い描いていた雪は。

雪を知らない男が想像していた、理想の雪。

ふわふわで優しい感触。

「よーし……じゃあまず……。」

「昨日は怪我をして、昨日は鼻風邪を引いていた男は。」

「うわー……雪だるまっでこうやるのかな……おお、すげえ。くつつくんだな!!よしっ
！」

もはややるべきことも忘れて、雪だるま作りに没頭するのだった。

* * * * *

「……ソウジさあん？」

「は、はい……。」

「………一体何をしているんですかあ？」

「え、えーつと……そ、創作活動を一つ。」

「そうですかあ……随分と熱心にされていましたねえ……？」

「い、いやー。ちよつと気合が入りまして……。」

アカン。

見つかってしまった。

立派な雪だるまを作っている姿を、よりにもよってハイビスさんに。笑顔が美しい。

完璧な営業スマイルに冷や汗が止まらない。

「ソウジさん、昨日は確か……お風邪を召してましたよねえ……。」

ゴゴゴゴゴゴ……。

おかしいな。

冬なのにハイビスさんの背後に熱い何かを感じる……。

「え、ええ、そうですね。」

「たしか一昨日は怪我也されましたよねえ……！」

「は、はい！怪我しました！」

イエス！マム！

「……………なーんでこんな寒い中……………一時間も外に出て雪遊びしてるんですか—————
!!!」

「は、はいい！」

「体調管理つて！わかりますか!?!ソウジさん!?!」

「わ、分かります。知っております。」

「じゃあなんで外にいるの!!」

何で？

何でだっけ。

あつ。

「ランニングを、しようど。」

「しようど?」

「……………しようとしたところですね、その、雪が私を離してくれず……………」

「……………。(ニコッ)」

「……………。(ニコツ)」

「言い訳はいいです!!とつとと部屋に入って暖まってください!!」

「は、はいいい!!!」

何でつて聞いたの、ハイビスさんですよ!

こええ……。

まるで母ちゃんのような。

「なんか今変なこと考えてませんか!？」

「いえ!何にも!!」

恐ろしい勘!!

すぐさま暖炉の前に行き、温まる俺。

濡れたズボンと手袋を見ながら「もう!まったく!」と言っているハイビスさん。
んー、やってしまった。

雪の魔力を思い知った朝であった。

* * * * *

「雪の中のランニング？ソウジ死ぬ気ー？」

「いやいや、大真面目なんですが……。」

「もつと言つてやって下さい！セツヒトさん！」

朝怒られた件をセツヒトさんにチクられた。

セツヒトさんは笑つて流すかと思つたら、意外や死ぬ気かと突つ込まれた。死ぬ気はないんですけど。

「ソウジー、ちよつと反省しなさい。」

「いてっ。」

優しくチヨツプをされた。

「あのねー、道もわからないのに雪の中走るとかー、危ないんだよー。」

「は、はい。」

「まあ鍛えようという気持ちはわからなくもないけどさー。」

「……………セツヒトさんセツヒトさん、しかもソウジさん、走ってないんです。」

「なにー。」

今日はチクリ魔なハイビスさん。

何だこの、女性が徒党を組む感じ。

「なんと、雪だるまを作っていたんです！」

「ソウジー…………おねーさんは悲しいぞー。」

家族ごっこが始まってしまっている。

何だこのノリ。

「よし、そんなに雪だるまが好きならー。」

「す、好きなら？」

「名人に、会いに行こうかー。」

「……………へ？」

以上。

新しい朝が来た、ログハウスの様子でした。

* * * * *

3人で一緒に、早朝の集会所へ。

集会所とは、村の人達が集まって会議をしたり、周囲の村の偉い人たちが集まったり、時には緊急の避難所となったりするところ。

この季節は使用の頻度が減るため、ギルドの仮設出張所として、ここが使われるということらしい。

建物は、また木造だ。

左右対称な三角屋根が美しい、でもどこか懐かしい。

屋根の勾配がきつく、雪国仕様であることがわかる。

屋根の下には「落雪注意!!」の看板が。

違う場所に来たな、と改めて実感する。

ギルドの横には、湯気が立ち上るこれまた木造の家屋がある。

ギルドより大きい、左右非対称な屋根の建物。

ここは、屋根に雪が乗っていない。

「こっちはねー、温泉があるんだってー。」

「お、温泉!?!」

マジですか!?

温泉!?

「集会所の改築工事の時、真下からお湯が湧いたらしいよー? すごいよねー。」

「温泉……温泉……!」

湯に浸かるとか、しばらくしていない俺。

ワサドラでは、サウナで汗をかき、汲み置きのお湯で体を洗うぐらいだ。もしくは水浴び。

雪国に温泉とか、日本人の俺は嫌が応にもテンションが上がる。

「……ソウジー、また鼻息荒いよー?」

「え!？」

「本当です……今度は温泉でのぼせて倒れるとか、そんなことしそうです。」
「ハイビスさんまで!？」

し、失礼な!

いくら俺でも、そんな子どもじみたこと!

……うーん。否定できない。

「とにかくここはー、クエストの後の楽しみにしておこーねー。」

「は、はい……ん!?クエストに行くんですか?」

「うん。」

「今から!？」

「まー、あれば、だけど。」

「おお……。」

早速か。

気合を入れねば。

「……おや！セツヒトさん！今から狩りですか？」

「んー？あー村長さん。」

気合を入れようとしたら、ギルドの入り口から出てきた人に声をかけられた。

昨日セツヒトさんに挨拶していた人だ。

恰幅のいい男性で、鼻の下のヒゲが似合っている。

「どうも、私、ミヨシ村の村長兼、ここの取りまとめをしております、アワキと申します。」

「どうも、お世話になります。」

「いやー、昨日は挨拶もせずに申し訳ない！よろしくお願いします！」

簡単な挨拶を交わす。

どうやらセツヒトさんとはお知り合いらしい。

年齢は、前世の俺の上司くらいだろうか。

いかにも村長さんって感じの貫禄である。

「こつちがハイビスさんでー、ワサドラギルドの敏腕受付嬢です。んでー、こつちはソウジ。ワサドラ期待の新人ハンターです。」

「び、びんわ……!?!」

「これはこれは！よろしくお願いいたします！とても、助かりますよ。」

「よ、よろしくおねがいます。ワサドラより参りました、ハイビスです。……こちら、シガイアから預かりました、書面です。」

「これはどうも……後ほど拝見いたします。」

何やらビジネス会話？が始まっている。

全く入っていない俺。バリバリサラリーマンだったんだけどなあ。

「シガイアさんは、お元気でしょうか？」

「元気ですよー、タオカカにいた頃よりも腹黒くなってますー。」

「ははは、それはそれは。」

「はははー。」

昔話に花を咲かせているセツヒトさんと村長のアワキさん。

アワキさんは、笑う度にドンと出たお腹をポヨンと揺らしている。

……………ヨツミワドウ……………。

「……………あなたが、ソウジさんですね！」

「は、はい！」

なんて失礼な事を考えていたら、急に名前を呼ばれた。

「既に上位の腕前だと言うことで、心強いです。ミヨシの冬山は強者揃い！どうか、良い狩猟をお願いします。」

「い、いえ。まだまだですが、よろしくおねがいます。」

「それでは、ハイビスさん。こちらへお願いします。早速見ていただきたい仕事があります……………。」

「わ、分かりました！では、ソウジさん、セツヒトさん、また後ほど！」

嵐のように去っていった。

何というか、勢いのある人だ。

「……いやー、話し込んだねー。」

「シガイアさんと一緒に働いていた方ですか？」

「そー。タオカカでー。いやーまさか、ミヨシの村長とは知らなかったなー。」

取引先で仲良くなった人が、久しぶりに会ったら大出世していたような気持ちだろうか。

セツヒトさんが、俺の肩をツンツンとしてきた。

「ほらー、じゃークエストボード見に行くよー？」

「わ、分かりました！」

「あいつのクエストがあるといいねー。」

「あいつ？」

「……雪だるまのー、名人ー。」

どんなモンスターだろう？

雪山は初めてだし、あんまり強いのは御免被りたいのだが。

そんな弱気なことを考えながら、俺はクエストボードに向かった。

* * * * *

山は、歩きにくかった。

ちやんと踏み固められたり、雪掻きされている村とは違い、積もったまんま放置の雪。そんなに深くはないのがせめてもの救いだが、かなりツライ。

あんなにはしゃいでいたのが、今はもうこんなに憎らしい。

「セツヒトさん……!」

「せつちゃん。どしたのー?」

「せつちゃんさん……歩きにくいです!」

「そりゃー雪道だからねー。慣れるしかないよー。」

「は、はい!」

雪は見る分にはいいんだけどな……。

「ソウジー？ウルクススはいそー？」

「北に反応がありますっ！」

「よっしゃ、じゃー走っていくよー。」

「ええっ!?走るんですか!?!」

「そりゃそーだよー、雪に慣れなきやー。……私の足跡なぞるんだよー。」

「マジですか……。」

ザツクザツクと進む事自体はできる。

ただ、いつもより足に力を込めなければいけない。

すると必然、疲れてきてしまう。

村で体力をつけていなければ、とっくに諦めていただろう。

セツヒトさんはこんな環境で育ったのか。

狩猟中のあの動きの速さも、うなずけるといふものだ。

めっちゃ辛いこれ。

……。

「居ました……洞窟を抜けた先、開けたところを……ノシノシ歩いています。」

「ホントだー……おっけー。じゃ、行つてらっしゃーい。」

「……俺一人、ですよね。」

「もち。」

「……。」

「ごー、ソウジー。」

何とも気の抜けた挨拶に押され、俺は初見のウルクススの前に向かった。

ウルクススは、後ろから見るとずんぐりむっくりとした体格。

雪の中のラングロトラみたいな感じだろうか。

耳が生えていて、もしキュートなお顔だったらやりにくいなあと思つていたけど。

「……グルルルルル……。」

あ、気づいた。

……顔怖っ！全然かわいくない！

ウサミミは可愛いとかそんな先入観は、たった今ガラガラと音を立てて崩れ去った。

ジャキン！

双剣を構える。

あのセツヒトさんが一言「ごー」だけで済ませた相手。

恐らく、ジンオウガ並みに強いとか、そんなことは無いはずだ。

無い……よね？

まだ間合いは遠い。

雪の中を、ゆっくりと近づいていく。

「……グアアアアア!!!」

両手を広げて声を上げ、威嚇してくる。

そんなに大きな声ではない。怯まずに済んだ。

「グア!!」

振りかぶるモーション……! 爪の攻撃!

バツとバックステップで躲す。

連続でくる気配がしたので、少し余裕を持って。

「グア! ガア!!」

やっぱり、連続の攻撃だった。

しかも3回、めっちゃ大振りだけど、当たると痛そうだ。

ジンオウガも連続攻撃だったからなあ。

まずは安全にいこう。

「グルルル……グルア!!」

何だ? 雪に両手を突っ込んで……?

……モゾモゾしている……?

と思ったその時。

「グアー！」

両手を振り上げたウルクスス。

下から「そおーつれっ」って感じで。

遠い位置にいた俺めがけて、雪玉が飛んできた。

……え!?なにそれ!?そんなのアリ!?!

「うおおおつとお!!」

避ける。

驚いた。雪玉づくりの名人とは、このことだったのか!

謎が判明。

「もう一回……来るよねえ!!」

すかさず二回目の雪玉攻撃を繰り返すウルクスス。

これも避ける。

……当たつたらなんか嫌な予感がする。絶対避けよう。

さてお次は……？

「グルルル……ガアッ！」

うおっ!! 飛んだぞ!!?

俺めがけてケツから落ちてくる!!

「よっ……とお!!」

ズウン!

プレスする機械のように、俺を潰そうとしてきた。

地面が衝撃で揺れて、少し足を取られる。
あぶねえ……つと!?

ゴロンゴロン

更に前回り!?

「連続技……多いなっ!!」

こっちだって、負けないぞ。

負けじとゴロンと横に転げる俺。

回避に成功。

「ちよつと技が厄介だ……なあ!!」

転げた後、あまりにもスキが多かったので、ケツのあたりを切り刻む。

ザシユザシユザシユ!!

「ギャアアアア!!」

普通に通るな……良かった、強靱な硬さのケツとかじやなくて。

おっと、ケツからはすぐに退避。

アオアシラのように、尻攻撃をして来ないとも限らない。

「……グルウ。」

だいぶ離れてしまった。

また雪玉でも飛ばしてくるのか？

ん?……身を低くして——

シャーーーーー!!!

「!？」

雪玉が来るか来るかと考えていたら。
何とウルクススは、スノーモービルの様に俺めがけて突っ込んで来る。
モーシヨンが殆ど無いので分からなかった。

ドゴオ！

「ぶへえー！」

体当たりをぶちかまされて、転げる俺。

すぐに体勢を立て直すも、再度スノーモービルウルクススが突っ込んできた。

「なるほど……!!」

今度は間一髪で避ける。

ドゴオ!!!

岩に激突するウルクスス。

………動かないぞ？

とりあえず自分のダメージの確認……うん、全身痛いけど、平気そう。

ジンオウガと比べれば、大したことない。

アイツのは痛かったなあ……。

よし。

「チャンスっ！」

速攻でウルクススに駆け寄る。

岩山に当たったのが相当効いたのか、フラフラしている様子。

これを逃す手はない。

「おらあ!!」

ザン！

「鬼神化……!!」

ザン！ザシユツザシユザシユ!!ザザザザサン!!!

「うらあ!!!」

脱力。

力を抜いて、ある一瞬のタイミングだけ全力を込める。
繰り返し繰り返し、双剣の連続性の良さを失わないように。
乱舞を、繰り返す。

ザシユ!!

「ギヤアアアア!!」

よし、忌々しいウサミミ破壊！
体勢を立て直したウルクスス。こちらもバックステップで間合いをとる。

「…………グオオ……………」

クルツ。

シャーーーーー……………。

「…………あれ？」

俺を一瞥したかと思ったら、振り向いて居なくなってしまった。
スノーモービルのように滑りつつ、雪山の向こうに消えていく。

「場所を変えたのかな…………？」

モンスターはある程度ダメージを食らうと、場所を変えて仕切り直してくる。

多分さっきのウルクススもそんな感じだろう。

「ひとまず……研いでおくか。」

砥石を出し、双剣を研ぐ。

〈砥石使用高速化〉のスキルがある俺は、すぐに研ぎ終える。

……：：：～
帰ったら早速聞いてみよう。

「つと……いかにいかに。」

〈マップ〉で周辺を確認。

シヨウコが居ないので、こういうこともマメにやらないとな。

「敵影無し……小型はまあ、無視しよう。……移動するか。」

〈アイテム〉から、ホットドリンクを選んで飲んだ俺は、ウルクススを追いかけて、走り

出した。

* * * * *

結論から言おうと。

ウルクスス、狩猟できました。

あの後、すでに見切った攻撃を繰り返してきたウルクススは、俺に攻撃を当てられず。ジリ貧でクタクタになったところを、俺が攻撃。

疲労困憊の様子でスノーモービルを繰り返してきたが、直線的な動きを避けるのは慣れている。

散々バサルモスビームで練習したあの動き。

過去の経験が生かされた。

『主人さまは無茶が過ぎます!!』

舐めてかかると、頭の中のシヨウウコから説教を食らう気がする。

油断するな。

……とは思っていたのだが、クタクタのウルクススは、突進を避けるとそのまま地面に伏せてしまった。

何か申し訳なくなりそうになったが、そんな感情は持つてはいけない。

命を狩る者として、全力でウルクススを仕留める。

結果、一時間半ほどでウルクススの討伐に成功。

「……………うらー！」

「グアアアアアア……………」

ズウン……………。

両手を上げて威嚇してきたスキに、頭部に二段斬りをお見舞いすると、ウルクススは音を立てて倒れた。

「ふうー……………。やった……………かな？」

息をしていないウルクスス。

亡くなったものにこんなことを言うのは良くないと思うのだが……。

「ウサミミは……もつと可愛いやつが付けるべきだな……。」

すまん、ウルクスス。

雪山での動き、勉強になった。

ありがとうございます。

バシユツ！

信号弾を打つ。

回収班への連絡を済ませると、周囲を確認。

……うん、向こうに何か小型がいるが、問題はないだろう。

「……お疲れー、ソウジー。」

「あ、せ……せつちゃんさん。お疲れさまです。」

「いやー、見事見事。初見のウルクススにここまでやるとはねー。おねーさん、鼻が高い

高いー。」

「あ、ありがとうございます。」

「ご褒美にー、頭、撫でようかー？」

「それは遠慮します。」

「ハグはー？」

「ぶっ！……それも！遠慮、しますー！」

アホなことを言わない！セツヒトさん！

「むー……ソウジのイジリも倦怠期ですか。……まー冗談は置いてー。」

「置いとくんですね。」

「おー？何々ソウジー？ハグに興味津々??掘り下げよっかー？」

「いいえ！だ、大丈夫ですから！」

「んふふー……でもソウジ？」

「は、はい。」

セツヒトさんが少し真面目な顔をした。

この人のこの顔には、俺は弱い。

「強く、なってるね。かつこいいよ。」

「……………」

素で照れてしまった。

こうしてセツヒトさんと合流した俺は、周りの落とし物に注意しながら帰路についた。

顔を赤くしてしまった俺を、その道中何度もイジってくるセツヒトさん。

でも何だか嬉しそうで。

俺も久々に、たつぷりとイジられてあげることにしたのだった。

87冬山の狩りをこなしましょう。

「ではー！これからー！雪中行軍を始めるー！」

「さ、さーいえつさあ。」

「こらー！気合が足らんぞー！気合がー！」

「さーいえつさー。」

「よーし、まずは……あれ？何だっけ……とりあえず、付いてきてねー！」

「せめてちゃんとやってくださいよ……。」

「……あれー？」

ウルクススを倒した翌朝。

俺とセツヒトさんは朝のランニングをするべく、村の入口までやって来た。

セツヒトさんが「私も何か師匠っぽいことしたーい」と言い出し、今こんなことになっている。

「何と言うか、力が、抜けます……。」

「そー?……こらー!ソウジー!しゃんとしなさい!」
「……さ、さあいえつさあー。」

だ、ダメだ。気合いが全く入らない。

本職のマシヨルク教官は、やはり教官だったんだなと実感する。

だって嫌でも気合いが入ったもの、あの人の掛け声。

対してこちらは、嫌でも気が抜ける掛け声。

ある意味、超絶対称的な二人である。

「んー、難しいねー、これ!」

「楽しそうですね。」

「いやー、やったことないのさ、こういうのー。弟子をびしばしー!つとやるやつ。憧れー?」

「いや、聞かれても……ていうかまんま、マシヨルク教官ですよ、ソレ。」

「……………え?」

「いや、だから、口調こそ違いますけど、常にピシバシってやるスタイル。教官と似てます。」

「……………」

「……………」

「……………やめるー。」

「諦め早っ!!」

すげえぞ。

つい今の今までやる気満々だったのに。

恐ろしや、教官。

「……………アイツの話聞いて……………何かイラってした。」

「ぞ、そうですか。失礼しました。」

むしろ今のセツヒトさんの口調のほうが、気合が入る。

めっちゃ怖いよ！目が！声色が!!

「……………気を取り直してー。」

「はい……………」

「これから雪国ランニングを始めます。」

「……………よろしくおねがいます!!」

実は昨夜、ランニングをやってみたいとお願いしたのだ。

体力面が落ちるのが心配で、トレーニングの一環として、朝のランニングは継続したい。

すると、セツヒトさんがルートを教えくれることになったのだ。

ちなみにハイビスさんにその事を伝えると、

「ソウジさんが、少しずつ化け物さんの側に……………」

なんて事を言っていた。

そんな化け物じみたトレーニングをするつもりはないのだが。

「ソウジ、一応今日は安全なルートを教えるからさー。」

「はい。」

「……………明日から、一人でがんばって……………」

「今日だけで覚えろと!？」

「だってー、ねむいー。」

無茶を仰るセツヒトさん。

そりや、最終的には一人で頑張るつもりだったけど。

「ちなみにー、沢とか雪崩ポイントとか、そういうところも教えてあげるからー……気を付けてねー。」

「りよ、了解です。」

「おー、いいねーその返事。……弟子っぽいー。」

……よく分からん。

その後はコースを教わった。

と言っても、基本的には村の周回。

アツプダウンがかなり激しく、更に雪に足を取られて思うように進まない。

だが、ウルクスス戦で何となく雪の歩き方を掴んだ俺は、何とかセツヒトさんに付いていくことができた。

「いやー、私も体力落ちたなー。」

「はあっ！……はあっ！……ま、全く……疲れて……いるようには……見えませんが!!」
「そーお？うーん、2割つてとこかなー。」

2割つて……。

ちなみに俺は限界。

セツヒトさんはケロツとしている。

「慣れだよー、慣れ。」

「慣れ……。」

よかろう。そういうコツコツ系は、結構得意だ。
考えながら走りをマスターしてやる。

* * * * *

そんなこんなで、ミヨシ村に来てからしばらく経った。

朝はランニングを欠かしていない。

雪の降りしきる中でも構わず走る。

ご近所の方に「え？あの人が何で走ってるの？バカなの？」みたいな目で見られるが、気にしないようにしている。

だって……モンスターを相手にしているときに吹雪いたら最悪だし。

ある程度の悪条件にも慣れておかないと。

「ぶえーつくしよい!!」

「ソウジさあん……体調管理い、……ハンターの資質う……」

「お、温泉！走り終わったら温泉に入りますから！ね!？」

「……風邪ひいたらあ……承知しませんよお……」

ハイビスさんは、俺の体調管理に厳しい。

完全に身から出た錆であるが、俺への信頼が薄い。

柱から半身出して、半笑いで言うものだから余計怖い。

妖怪か。

と言うわけで、走り終わったら温泉へ直行することにした。
汗で冷えないよう、しっかりと体を温めてから、一度宿に帰る。
くしゃみが出ることも無くなった。

宿では、ハイビスさんが朝食を作ってくれている。

正直プロのイシザキさんやドールには敵わないが、これが結構うまかった。

「私全くできないからなー、ハイビスちゃんありがとー。」

「俺もです。助かります。美味しいですよ、これ。」

「い、いえいえ！これぐらい朝飯前ですから！」

鼻歌交じりでごきげんなハイビスさん。

褒められたことが嬉しいのかな？

良かった、俺も料理なんて大したことできないから、やる気になっていただけなら
大変ありがたい。

ちなみに、朝食を作るのが朝飯前というややこしい返事はスルーしておいた。

その後は3人でギルドへ。

ハイビスさんは業務、俺たちは狩りに出かける。

余談だが、素材報酬などは、相変わらず一括してギルドに預けてある。

銀行の預金のように、各地のギルドで素材の受け取りが可能だということらしい。

ある程度のストックをギルドで管理し、必要な時だけ受け取るシステム。

前も思ったが、このやり方を考えた人ってすごい。

何よりパソコンも無しに、これだけのハンターの素材を管理しているギルドの凄さに驚かされる。

「この辺のモンスターの素材は、ワザドラにも数はありませんから……。帰る際には、あの程度持って行ったほうがいいかも知れませんね。」

「なるほど。」

ギルド職員らしい助言をしながら、バリバリとするハイビスさん。

その手腕の甲斐もあってか、ここの臨時ギルドはすごく回転が良くなった。らしい。

村長のアワキさんから聞いた話である。

素材の管理や物流とか、ハンター達の人の流れとか、クエストの承認や事前事後の処

理とか、集会所内の案内板とか……とにかく色んなことについて細かく提案、調整してくれた、とのこと。

「自分がやりやすいように変えてみようと言ったら……思いの外通ってしまいました……。大丈夫ですかね、私。外から来た調子に乗った奴みたいになってませんか……。」

「大丈夫でしょう。むしろ皆さんありがとうございますと思っていますよ？」
「だったらいいんですが……。」

すごいぜハイビスさん。

この短い間に、ここまでやりやすくシステムを再構築するとは。

セツヒトさんの敏腕という言い方も、あながち間違っていないと感じた。

こういう方がいるから、俺たちも安心してクエストに出かけられるというものだ。

クエストを受注したら、狩り場へ。

セツヒトさんは基本的に、見守るスタイルである。

その装備は、毎回違う。

武器も多彩で、モンスターに合わせて調整しているのだと思う。

以前、どうして装備まで毎回違うものになっているのか聞いてみたら、

「いやー、本命の討伐対象の弱点が気になってねー。」

「?」

「これもあまり視線を感じないしー……やっぱりスケスケあみあみのナルガ装備にするかー……明らかに見てくるしねー。」

「??何の話ですか??」

「んー?いや、こつちの話ー。」

この会話を最後に、毎日変わっていた装備は、ナルガクルガというモンスターの素材でできた装備に統一された。

武器もヘビィボウガンではなく、俺と同じ双剣。

教えるために俺と同じ武器に変えてくれるとか、ありがたやありがたや。

「うう……さーむーいー。ホットドリンクホットドリンク……。」

そしてこんな寒さにも関わらず、そんなアミアミ装備にして下さって、眼福眼福。ありがたやありがたや。

「どーお？結構イケてるでしょー。」

「そうですね。」

イジリ対策に塩対応も忘れない。

セツヒトさんは不満げな顔だが、スルーしておこう。

モンスターの狩猟について。

これは、かなりの数を倒してきた。

大体一日1〜2匹のペース。

ウルクススを始め、雪山には見たことのないモンスターがウヨウヨしていた。

冬眠とকাশないのかと思っていたが、むしろ奴らにとっては冬が一番ホットな季節のようだ。

まずウルクスス……は割愛。

ウサミミかわいいという概念を吹き飛ばしてくれたモンスター、とだけ。

お次はドドブランゴ。

なんと、こいつは「雪獅子」と呼ばれるモンスター。

正真正銘、雪の中でのみ戦うモンスターである。

獅子というからジンオウガの親戚みたいなものかと思っていたが、これが完全にゴリラだった。

繰り返すが、ゴリラだった。

始めは挙動が読めず、ボツコボコにされた。

回復薬も飲みまくりである。

セツヒトさんも「ヒヤヒヤしたよー」と評したほどである。嫌いだわこのモンスター。急接近して力づくでぶん殴ってきたり、口から冷たいブレスを吐いてきたり、距離のあるバックステップから急に飛びついてきて両手で殺しに來たり……何というかゴリラ押しのモンスターだった。

動きが読めてからは安全に交わしつつちびちび削っていった。そこまでが大変だったけど。

お尻もウルクススと違って硬かった。

できればあまり相手にしたくない。

ちなみに、このモンスターで初めて「乗り」に成功した。

「乗り」とは、文字通り、モンスターに乗ることである。

一定のダメージを与えると転げるモンスターに無理矢理騎乗し、背中にダメージを与えて再び転げさす。

大きなスキができるし、セツヒトさんも得意とするらしく、珍しく積極的に教えてくれた。

「だからー、二段斬りの勢いをこうビュツと相手にのせてー、自分が飛び上がるでしょー？」

「……………」

「そのまま回転をかけてー、こう、顔のあたりをザザザザーってやると、ボタンって倒れるからー。」

「……………」

「……………乗る。」

「……………その後は……………？」

「ナイフでー、背中斬りまくってー、たまに振り落とされないようにがんばるんだよー。」

「……………」

「簡単でしょー？」

「できるかあ!!」

その後は何度も乗る練習。

なんとか、三体目のドドブランゴでようやく「乗り」に成功。

斬撃を与えつつ、空中から連続技につなげるやり方も学べたので、良しとしよう。

この体の軽さと動きの良さに改めて気付かされた。

ドドブランゴの次に討伐目標にしたのは、氷牙竜ベリオロス。

もう名前からしてかっこよかった。

だが、ウルクスス、ドドブランゴと、中々に期待を裏切る2体であったため、期待はしていないかったのだが……。

何と、名前の通りかっこよかった。

サーベルタイガーの様に伸びた牙、当たるとタダでは済まなそうな長い尻尾。

翼も発達していて、飛び立つときは垂直に「ダン！」と飛ぶものだから、テンションが上がった。

シヨウコ辺りに言ったら、「油断せんといってください!!」と説教を食らいそうである。更に翼から後方に伸びる棘は、当たると痛い。

……そう。

俺は始め、めちやくちや攻撃を食らってしまった。

そんなモンスターに怒ったセツヒトさんが、尻尾を切断する事態に。油断しちやったよ、シヨウコ……すまん……。

モーシヨンの少ないぶちかまし？体当たり？も、非常に痛かった。

「ソウジ、双剣は防御なんかできないからね？避けるんだよ。」

マジトーンのセツヒトさんはちよつと怖かった。

それでも何とか大怪我は免れ、5体目でようやく安全に狩ることができた。

回復薬グレートを飲みまくらずに倒せるようになったので、まあ良しとしよう。

ベリオロス、強い……。

ちなみに狩猟後、お詫びも兼ねてセツヒトさんに酒を奢った。

「大吟醸・龍ころし」という少し高めの酒をグラスで頼んだら……まあ飲むわ飲むわ。

結局ボトルを頼んでしまった。

その後、ベロンベロンのセツヒトさんと一杯でほろ酔いになった俺が、調子こいて木

刀で模擬戦を開始。

2秒で剣を粉碎され、サバ折りという名のハグを食らった俺は、そこから記憶がない。起きたらプンスカ怒っているハイビスさんがいた。

セツヒトさんと正座で並んで説教された。

飲み過ぎ、ダメ、絶対。

最後に、外せないのがガムート。

一言でいうと、とにかくデカイマンモス。

多分俺が見てきたモンスターの中で、一番デカかった。

初めて遠くから見たときは、「え？あんなの倒せるの？」というのが感想だった。

まず刃が、弱点と思しき顔周辺に届かなそう。

それにあの強靱そうな脚。その一本だけ集中して狙ったとしても、バランスを崩せるのか、自信がない。

「ビビったら負け……って前いったけど……あいつは論外だねー。でかすぎるしー。」

「あれ……倒せるんですか？」

「そりゃーいけるよー。てかー、いけないなら来ないってー。」

「それはそうなんですが……。」

はつきり言つて、倒せるビジョンが全く浮かばない。

と言うわけで、セツヒトさんからアドバイスをもらった。

「前教えた『乗り』を上手く使うんだよー。」

「ええ!?あのデカさで乗れるんですか!?!」

「いけるいけるー。まずは、足の雪を剥がしてー。」

「剥がす。」

「何か若干低くなるからー。」

「若干。」

「クルクルピヨーンと。」

「……………」

「さあいつてみよー。」

「なんとなく分かった自分がいます。」

意思疎通も少しは慣れた。

ガムートの攻撃はとにかく強烈無比の一言。

そりやああれだけ重いのだ。当たればただでは済まない。

後ろ足で立って、俺に狙いをつけて前足をプレスした時は、流石に死んだと思った。

とっさに避けていなければ、今頃俺は雪の下で押しつぶされていたと思う。

更に雪も厄介だ。足を取られるし、雪がガムートの鼻で舞い上がり、身体にべとつく。

放っておくと動きにくくなるため、消散剤というアイテムが欠かせない。

慣れてきたと思つたら、今度は頭を地面にこすりつけて突進してくる。

2回ほどキレイに吹き飛ばされた。

セツヒトさんは難なく避けられるようだが、俺は無理。

なので後方から足を削る作戦に出たのだが……。

「ソウジー！避けてー!!」

「うおっ!!!」

バックステップで避けると、俺のいた場所にガムートが後方突進。

真後ろもだめみたいだ。

なので後方左右から、雪をばらまいたり鼻で俺を吸い込もうとしたりするスキを狙つ

て攻撃する方法が確立した。

「図体はデカいののに技が多彩で、「後方なんか取らせねえよ？」とさも言いたげな身のこなし。恐れ入る。」

「乗り」には数回成功。

自分でも驚いている。

故ドドブランゴ先生に鍛えられたからかもしれない。

振り落とされないようにするのにコツが必要だったが、相手の呼吸を読んでしまえば、意外といけた。

これはセツヒトさんも、珍しく驚いてくれた。

だが問題は火力。

後から聞いた話では、ガムートは例のティガレックスの噛みつきにも耐えるほどの分厚い外皮と毛が生えているらしく、もうチマチマ削るしかなかった。

何度か狩猟に成功するも、毎回夕方までかかっている。

セツヒトさんの助言とフォローがあつてこれである。

「うーん、武器を変えてみよつかー。」

「武器？強化するんですか？」

「この辺に出てくるのはー、軒並み火属性に弱いんだよねー。だから、武器の交換？」
「武器を変えれば、狩猟も楽になりますか？」

「んー……技術が追いつけばねー。それにガムートは雪が剥がれちゃうとそこまで……
そか、先に技やろつか。うん、標的でかいし、いけるいけるー。」

「??？」

クエスチョンマークしか浮かばない。

とりあえず、技術を習得してから、武器の変更を考えるってことだろうか。

しかし、その技術とは。

「ヘルプでこの村にやってきたからさー、モンスターを実際に狩ってやってみるのが理想的なだけどー……やる？」

「やります。」

二つ返事。

特訓は冬の間だけなのだ。やるしかない。

「そっかー。……よし。」

やけにニンマリするセツヒトさんに。

やっぱり即答は不味かったかと、少し後悔し始めた俺であった。

88一人でも特訓してみましよう。

「んあ……。」

目を覚ます。

ログハウスのリビングの天井も見慣れてきた。

木でできたこのログハウスは、夏は涼しく冬は暖かいらしい。

断熱が効いているのか、凍えるほどまでは冷え込まないし、暖炉で暖まった室内は中々冷えない。

でもまあ、寒いものは寒い。

完璧な施工がされた現代日本の建築ならまだしも、ここは異世界。

むしろこの冷え込みにおさまっている事自体がすごいことだと思う。

「すげえ雪……。」

外は深々と降り積もる雪で、相変わらずの白い景色。

吹雪いてこそいないものの、昨日の夜から続く雪で窓から見える景色は真つ白である。

朝で薄暗くとも分かるほど。

正直に言おう。

……この景色ちよつとだけ飽きてきた！

ごめんなさい！

「雪すーいー」とかはしゃいでましたが、ごめんなさい！

雪だるまとかに夢中になっていた自分が遠い昔のよう！

この一ヶ月、延々と雪の中クエストに出かけていたんです……イヤになるのもしようがないじゃない……。

……まあだが、雪の中の足運びも、かなり上手くなったと思う。

深い雪を踏みしめ、なるべく大きく動く。

動作のスキも大きくなるので、モンスターへの挙動も今まで以上に気をつけて読まねばならない。

おかげで体力と観察力は、相当伸びた気がする。

それに、ワサドラでやっていた徒手空拳での訓練。

小型モンスターばかり相手をしていて、力になるのかと不安だったが、あれが、ここに来てかなり効いている。

一撃さえもらうことは許されない、そんなシビアな環境である雪山。

そんなモンスターと肉薄する機会の多いここで、あの武器なしの訓練は非常に役立っている。

主に度胸の面で。

双剣は接近しなければ当たらない。

突っ込めば、モンスターにもよるが、あちの攻撃も当たりやすい。

回避と攻撃の両立。そこに怯えという感情は邪魔になる。

危険を未然に察知して動く。

セツヒトさんのレベルにはまだまだかも知れないが、かなり自信はついた。

そして、セツヒトさんに課題を一つ与えられた。

……空中での攻撃である。

「セツヒトさんレベルをマスターするのは……骨が折れそう……。」

とりあえずランニングを始めるため、俺は外に出ることにした。

* * * * *

女性二人は、部屋で寝ている。
起こさぬように玄関を閉める。

「さむう……。」

白い息が、まるで湯気のように眼前に立ち上る。

その向こうに見える村の家並み。

幻想的な風景。

今朝、とある夢を見た。

夢というか思い出を振り返るような内容。

それは、ディノバルドから殺されかけた、あの時。

セツヒトさんとマシヨルク教官が、まるでヒーローのように助けてくれた、あの日の夢である。

セツヒトさんは、デイノバルドの攻撃を物ともしていなかった……ように見えた。動きを極限まで正確に読んで、回避、攻撃。今でも鮮明に思い出せる。夢に見るほど。

「……………よう。」

雪を踏みしめて、走り始める。

走る間は、特に何も考えないようにしているが、今朝はあの時のことを思い出しながら走ることにした。

セツヒトさんの剣撃。

繰り出した攻撃には、特に驚かされたことが2つあった。

まず、空中に飛び上がりながらも連撃を繰り出す、あの技。

体を回転させながら斬り刻んで、その勢いで更に相手の頭上に位置どる。

そこから落下の力も加えて更に連撃。地面に落ちてもなお、回転の力で連続して斬り続ける。

恐ろしいほどの手数を稼いでいたし、ダメージはかなりのものだったと思う。

続いて、教官が口走っていた「ジャスト回避」なる技。技なのか何なのかはわからない。

ただ、デインバルドの強烈な尻尾攻撃を簡単にいなしていた。当たっているのに当たっていないような。そんな不思議な避け方。

「あれどうやってやるんだろうな……。」

とかなんとか言いつつも。

実は、俺はヒントを得ている。

あの時。

デインバルドに一矢報いようと、満身創痍で選んだ〈憑依状態〉での「操作方法」の技。

とにかく必死で、適当に選んだ「空中回転乱舞」。

何故かデインバルドの攻撃を避け、ダメージを食らわすことができた。

激痛で記憶も朦朧としていたが、確かに「空中回転乱舞」を選んだ。

うん、そこは覚えている。

「……………よし。」

徐に「マップ」を起動。

山を少し登った開けた土地に、小型のモンスターが2体。

試してみよう、とふと思った。

* * * * *

そこにいたのはファンゴ。

ゆっくりと歩いて、雪の中に鼻を突っ込んで、フガフガやっている。

確かギルドのクエストボードに、討伐対象として挙がっていた。

相手としては、丁度いい。

〔「装備」……………〕

いつものミヨシ村一式装備を、一瞬で装着。

武器は変わらず、双剣。

(……………今だ！)

2体が完全に後ろを向いたそのタイミングで、一瞬で間を詰めていく。

「プギイ！」

「フゴォ！」

こちらに気づくが、構わない。

既にそこは間合い。

(「操作方法」…………「空中回転乱舞」！)

走り寄りながら、ためらわずに選択。

突如、自由が効かなくなる。

〈憑依状態〉に入った。

(……だ……ここを覚えろ……うおっ!?)

跳躍した俺は、ファンゴの頭に両の剣の切っ先を当てる。

そのタイミングで体が捻られる。

勝手に動く。

でも思考はできる。

(覚えろ……覚えろ……!)

ひねられた肉体は、そのままクルクルと回り、空中に飛び上がる。

ファンゴに幾多のダメージが入る。

だが、そんなことには構わず、落下に入る俺の体。

落下のスピードをそのまま回転に加え、ファンゴに剣の追撃。

「ブフォッ!」

ふっ飛ばされるファンゴ。

それを追いかけてようにも、まだ体の自由は効かない。
着地してもなお、対象が剣の届かぬ向こうにいるにも関わらず、回転斬りを行う。
空振りのそれは、見るからにとてつもない威力で振るわれた。

(……よく目を回さないもんだ……キツイなこれ……。)

ふっと体の自由が戻る。

その向こうには、横たわってのたうち回るファンゴ。

(再現……!)

覚えたことを元に、今度はいつもの自分でもう一度。

倒れているファンゴに向けて跳躍。

切っ先を当てて……空中へ……!!

「のわっ!!」

劍を当てることには成功。

だがそのまま飛び上がろうとしたら、ファンゴに引つかかった劍先を支点に、投石機のように吹っ飛んでしまった。

ポフツ。

雪の上に背中から着地。

痛くは……ない。

(……やり方は合っていると思うんだけど、劍が振り抜けなかったな……勢いが足りなかったか。)

ウルクススやガムートの時も、一応空中攻撃後の「乗り」には成功している。

だがあれば、単にジャンプして攻撃して、倒れたところに乗っただけ。

華麗に空中攻撃のコンボを決められたわけではない。

「フゴッ！」

起き上がってくるフアング。

(よし……もう一丁！)

再び跳躍して斬りかかる。

今度はしっかり振り抜くことを意識して……。

「ブフォッ！」

(!!)

しまった！

フアングも突進してきた！

あ、飛んで気づいた。

これ避けられないわ。

「ブオ!!」

「っー！」

蛙のような声を出して、攻撃を食らってしまおう。

だが……力押し！

ええい!!このままいつてしまえ!!

「やあああああ!!!」

「フゴォー！」

突進の勢いを食らってなお、俺は回転を止めずに。

そのまま高く跳躍に成功。

2撃、3撃と剣を当てる。

(このまま……！落下しながら……！)

クルクル回りながらも、ファンゴのいる位置をイメージ。

別のカメラで自分を見る様に。

落ちるタイミングで、再び剣撃をお見舞いする。

「おらあああ!!」

「プギイ!!!」

ファンゴを吹っ飛ばした。

俺は膝から着地。

ボフツ。

「はあっ……はあっ……!!」

すぐに立ち上がる。

ファンゴは2〜3 m先で倒れていた。

多分死んでいる。

(成功!……最後は膝をついたけど!!)

安心してはいられない。
もう一体の方を探す。

「どつちだ——」

「ブモオー!!」

ヤバい！既に近くに來ている！

(突進………！避………無………なら………!!)

一瞬の思考。

冷静な自分。

徒手空拳で無数の小型を相手にした経験が、肝を座らせる。
選んだ攻撃は。

(短めに………跳躍………!!)

ステップぐらいの、小さな跳躍。

クルツと回りながら、背中から回し斬りの要領で……剣を当てる!!

「ふん!!」

「フゴォ!!」

よし!なぜか知らんが、うまくいった!!

そのまま切っ先に体重を乗せて、飛び上がり……。

「フゴォ!!」

落下しながら……斬り続けて……!

「ブモォ!ブホッ!」

着地後に更に……回転斬り!!

「ヴァッ……！」

ズダン!!ゴロゴロ……。

まるで蹴られた石ころのように転がったファンゴ。

「……。」

そこから、全く動かなくなった。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……。」

つ、疲れた。

だが、何とか掴めた気がする。

(すまん。ファンゴ。踏み台にして。)

動かないフアングたちを見つめる。

こいつらにとっては、俺はただの殺戮者だな。

……割り切れと言っても、やっぱり俺は割り切れない。

……でも、割り切れないままやっていこうと思う。

この気持ちは、無くそうとしても無くならない気持ちだと思うし……失ったらなんかヤバイやつになってしまいそうで……怖いし。

収穫は多かった。

空中回転乱舞を……完コピしたとは言い難いが、実際の敵を相手に繰り出すことができた。

勢いは小さいし、成功率もまだ低いだろうし、大型を前にした時にできるかどうか分からないし……色々課題はあるけど。

セツヒトさんにも色々聞いてみながら、完成形に近づけていこう。

〈憑依状態〉を用いた訓練は、やはりいい。

俺にしか許されない、この訓練方法。

……だが、小型だから何とかあったけど、やはり大型に使うのは危ない。

一度繰り出したら止められないのが、この状態の最大の弱点。隙が多すぎる。

……もう一つのセツヒトさんの技。

「ジャスト回避」については、まだよくわからないけど。

「とりあえず、空中回転乱舞をまず習得していこう。」

俺は「マップ」を起動し、他のモンスターに会わないように村に戻ることにしたのだつた。

* * * * *

「あ、おはようございます。ソウジさん。」

「ハイビスさん、おはようございます……どうしたんですか、その格好？」

ログハウスに戻ってきた俺。

もちろん温泉に浸かってきている。

ハイビスさんに怒られてはかなわないからな。

こんな大雪の中、一人で訓練していたなどと知られたら何を言われるか分からないので、何事も無かったかのように帰ってきたのだが……。

ハイビスさんがエプロンを着けていた。

「ええ、お料理が制服にはねるといけませんので、買ってみたんですけど……へ、変ですか?」

「いやいやいやいや!!変じゃないです変じゃないです!」

「そ、そうですか?よかったです。」

「は、はい。」

何だろう。

エプロンをつけただけなんだけど……だけなんだけども。

こう……受付嬢の制服にエプロンを身につけただけで……何だこの破壊力は!

「そ、ソウジさん?」

「……えっ！はい！」

「いや、ぼーつと見つめて……どうされました？……まさか風邪を!？」

「違います！もうめっちゃ元気です!!」

「それならいいのですが……。」

危ない危ない……風邪だなんて誤解されたら、ハイビスさんが一転して恐怖の体調管理妖怪に変化してしまう。

美人って、怒ると怖い。

……ハイビスさんって、美人だよなあ……。

エプロン制服姿を後ろから見つめる。

ブロンドヘアをまとめてアップにしているので、うなじが色っぽい。

……。

いかんいかん、完全に思考がスケベ親父である。

自重せねば。

「ソウジー、ああいう感じが好みなのー？」

「ほうあつ!!」

急に耳元で囁かれて、変な声を出してしまった。

「せ、セツヒトさん！おはようございます！きゅ、急にやめてください！」

「せつちゃんー。あと、おはよー、スケベソウジー。」

「すすすすすすスケベちゃうわ。」

「えー？だつてー、ここからー、こうやって穴が開くほどジーツとー」

「あーあーあー!!今日はいい天気ですねー!!」

「誤魔化し方が下手だよー、ソウジー。大雪だしー。」

「……何が望みですか……？」

「……ブレスワインー……ボトルでー……」

「ぼ、ボトル……わかりました……」

俺のスケベ心は、高いお酒代を代償として招いてしまった。

ハイビスさんが美人すぎるのが悪い。

……。

「いただきます。」

「いただきます。」

「はい、お口に合うか分かりませんが……。」

食卓に並ぶのはいつもの朝食。

ハムとチーズが乗った食パン、サラダ、そしてハイビスさんお手製のカボチャのポタージュスープ。

昨晚のうちに仕込んだとか。偉すぎる。

オレンジ……のようなグレープフルーツのような柑橘系の果物も、テーブル中央にセット。好きな人は食べていいと言うスタイルらしい。

「あ、ほらセツヒトさん。パンくずが。」

「あー、ありがとー。……ハイビスちゃん、お母さんみたいだねー。」

「お、お母さん!?!」

「じよーだんだよー?こんな可愛いお母さんいたら、私泣いて喜んじやうよー。」
「か、可愛い……。」

ハイビスさんが顔を赤くしている。

この人あれだな、ストレートな褒め言葉に弱いんだな。

セツヒトさんは本心から言っているのがわかるし。

……からかいも半分あるかもしれないけど。

「あー、ハイビスちゃん、そういえばー。」

「はい?」

「ソウジがエプロン姿のハイビスちゃんに見惚れてたよー?」

「ブーーーーー!!!」

「わー。きたない。」

おい。

おい、せつちゃんこのやろう、ちよつと待て。

「せ、せつちゃんさん!？」

「あー、いけない。これじゃワインもらえないやー。……まあいいかー。」

「よくねえよ!!何チクつてんですかアンタって人は!!」

いかん。

これでは俺が完全にスケベ親父認定されてしまう。

「えっ?ええっ?!……わ、わわ私のええええエプロン姿……!？」

わかりやすくテンパらないでくださいハイビスさん。

逆に俺は落ち着いてしまったではないか。

もうこうなったら正直に言おう。

ここで変に取り繕うのは逆効果だろう。

いや、別に「あなたの制服&エプロン姿にめっちゃグツときてはあはあしてました」とかそんなこと言うわけではなく。

はあはあなんてしてないし。

してないし。

こう……波風立たぬように、褒める方向で。

「……すみませんハイビスさん、本当なんです。」

「……え？」

「見惚れていたのは事実です……その、エプロン姿がとても似合っていて、つい見つめてしまいました。」

「え？ええ!？」

「ハイビスさんはとても美人なので、申し訳ありません、つい。」

「び、びじ、へ、へええええ……。」

「いつも制服姿も美しいと思っていました。お気を悪くされたならすみません。ですが、事実なんです。」

「ふ、ふうふう……。」

嘘偽らず、気持ち悪くないように、言葉を選んで、誠実に。

多分できた。知らんけど。

……真っ赤になっているハイビスさんは……何か動かないぞ。

「ソウジ、ソウジ。」

「な、何ですか、せつちゃんさん？」

「その辺にしときなー？……ほらー。」

「へ？」

セツヒトさんがほつぺたをツンツンする。

反応なし。

顔を真っ赤にして完つ全に固まっている。

「ソウジ。ハイビスちゃんはストレートな褒め言葉に弱いんだからー、ほどほどにしないとー。」

「……………気絶してるのかこれ……………？」

プシュー。

なんて擬音を、今にも出しそうな感じ。

顔が真っ赤なまま固まってしまっている。

まるでラングロトラである。

俺は制服とエプロンの相乗効果について頭の中で論じながら、ハイビスさんの回復を待つことにした。

「ソウジはー……自覚が足りなさすぎるねー……。」

「何の話ですか？」

「んー……こりゃ討伐には苦勞するわー……私もハイビスちゃんも。」
「??？」

やることもなく仕方が無いので、柑橘系の果物を口に運ぶ俺。

……めちやくちや酸っぱかった。

89村のピンチを救いましょう。①

セツヒトさんとハイビスさんが、雪道の中二人並んでギルドに向かっていく。俺は後ろからついていく。

「いやー、あの温泉の打たせ湯つてのがー、肩に効くんだよねー。」

「わかりますー！疲れが飛んでいくんですよねー！」

「そーそー。」

二人はとても仲良くなった。

最初は、ハイビスさんは完全に萎縮していたし、セツヒトさんはマイペース。

お世辞にも仲が良いとは言えなかったのだが……。

野宿を数回、村での生活も一ヶ月。

お互いの気心も知れようというもの。

セツヒトさんがハイビスさんをイジリ、それが二人のコミュニケーションに繋がっていった。

ハイビスさんも少しずつ打ち解けて、今やガールズトーク……なのか分らんが、そういうのを二人でよく話している。

俺がランニングに出かけているときはどんな話をしているんだろうか。

まあ、仲良くなって何よりである。

「ソウジ。遅いよー。」

「ソウジさーん！早く行きましょー！」

「は、はいはい。」

ハイビスさん、心なしかセツヒトさんに影響受けてない？

働きたくないでござるの根性まで、影響を受けなければいいのだが。

「うーん……今度の私達の狩り休みの時、ハイビスさんもサボつちやえぼー？」

「いいえ！お二人は肉体的疲労を癒やす、必要な休息なんですから。私は働きますので
！」

前言撤回。

ハイビスさんはハイビスさんだった。
偉いわ、マジで。

「うーん……偉いねーハイビスちゃん。」

「わっ……そ、そんな……ありがとうございます。」

頭を撫でるセツヒトさん。

満更でもない感じで撫でられるハイビスさん。

うーん、仲良き事は美しき哉。

まるで姉妹のようである。

「今日も何事もなく、狩りが終わるといいねー。」

「そうですねー。」

すっかりのんびり口調がうつったハイビスさんの返答を聞きながら。
俺たちはギルドに辿り着いた。

* * * * *

「え!? クエスト受注一時停止?」

「は、はい。すみません、ソウジさん、セツヒトさん。い、今確認してきますので!」

タツタツタツ……。

焦った様子のハイビスさん。

受付業務を行う机の向こうにかけていった。

ギルドに着くなり大変そうだ。

「何かあったんでしょね……。」

「うーん……まあ、不測の事態だろうね。」

この集会所は、臨時のギルドである。

ハイビスさんのお陰で、ミヨシ村臨時ギルドはとても利用しやすくなった。

案内の看板が分かりやすく置かれ、少ないメンバーで回るように部署も分割された。

それに伴い、人員配置もやりやすくなった。

だが、圧倒的に人が足りない。

なので臨時のスタッフが増える。

必然、連絡も報告も滞る。

人がいつペんに増えると、様々なことでそういった自体が起こりうる。

その辺はハイビスさんの管轄では無い。管理職の仕事だ。

臨時の村長さんは、この少ない人員をよく回していると思う。

さすが以前ギルドで働いていただけはあるなあ。

多分、俺ならパンクする。

クエスト受注の一時停止。

その原因が分かるまで、俺たち二人は即席のテーブルと椅子に座って待つことにした。

「……セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、受注停止って聞いたこと無いんですけど、あるんですね。知らなかつたです。」

「んー？……んー。ソウジはシガイアさんの管理するワサドラギルドのハンターだったからねー。多分経験ないよねー、こういうの。」

「そうですね、初めてです。」

「……ワサドラはいいギルドだよー。間違いなくねー。職員もハンターも、あんまり不満は聞かないよねー。」

「なるほど。」

「普通ギルドなんて、ギスギスしてるもんだよー？人の命が懸かっているわけだしねー……そういう不和があるギルドは……まあこういうこともよくあるかなー？」

「……でもこのギルドは——」

「うん、違うねー。みんな仲もいいしー、悪い意味での馴れ合いも新参者ばかりだから起こり得ないしー……まあ普通の非常事態かなー。」

「普通の非常事態って何ですかそれ。」

ワサドラのギルドの盛況ぶりは、正直とんでもない。

いや、他のギルドを見たことなどないのだが、見るからに職員が忙しそうだった。

それでもきつちり2日の休みを取らせて運営を続けているらしい。

シガイアさん、やはり優秀な上司である。

対して、ここミヨシのギルドはハンターの数が比較的少なめ。それに、昨日今日やって来た新しい顔なども珍しくない。

俺たちのように、冬の間だけやって来るハンターがほとんどだ。

だから、ギルドとハンターの連携には時間がかかってしまう。

ワサドラで当たり前だと思っていたことは、当たり前じゃないんだな。

認識を改めなきゃ。

「お待たせしました、ソウジさん、セツヒトさん。」

「ハイビスさん。」

10分ほどしてハイビスさんがやってきた。

顔つきは若干険しい。

「村長さんが直接話をされたいそうです。こちらへ。」

「……………分かりました。」

俺とセツヒトさんは立ち上がり、ハイビスさんに付いていく。

集会所の脇の方の長机。

同じく険しい顔をした村長さんが、俺たちを待っていた。

「……………おはようございます、セツヒトさん、ソウジさん。」

「アワキさん、おはようございます。」

「おはようございますー。」

「お呼びだてして申し訳ありません。ご相談したいことがあります。」

いつもにこやかな村長さんが、今日は別人のように真面目な顔をしている。

格好はいつもの茶色のジャケットに、少しお腹の出たワイシャツ。

愉快に笑うことの多い人だけに心配だな。

何かあったんだろうな。

「急に申し訳ない……………実は、村の一大事でございます。」

「何があったんですか？」

「……………タオカカとの道が、モンスターによって塞がれてしまいました……………」

「え!？」

「タオカカ方面からの道で、うちの生命線です……アヤ村から迂回すればひとまずは何とかなるんですが、参りました……。」

村長さんが状況を説明してくれる。

「モンスターが、道を塞いでいるってことですか？」

「そうなんです……正確には、道中に何度も確認されるため、通行止めにはせざるを得ない状況にあります。念の為、クエストの受注も一時停止しました。……観測班の方々の情報では……ゴシヤハギ、と。」

「うーわー、マジかー……。」

「?。」

初めて聞く名前である。

見るとハイビスさんも知らない様子。

セツヒトさんに聴いてみる。

「セツヒトさん、そんなにやばいんですか？そのモンスター。」

「うーん……人にもよるけど……ジンオウガとどっちが強いかなー。相性かなー。」
「……とりあえずジンオウガとかそれ並に強いつてことですね。」

「接近戦ならむしろソウジは……いやでも、あいつの攻撃キツツイからな……んー
……いい勝負かなー？」

セツヒトさんが悩んでいる。

頭の中で強さ比べでもしているんだろうか。

「村長さん……少し質問があります。」

「は、はいはい！何でしょう！」

ビシツと気をつけをする村長さん。

ずつと気になっていたことを告げる。

「その緊急クエスト、俺受けていいんですか？」

「え!?も、もちろん！ソウジさんでもできましたら、ぜひお願いしたいんですが……。」

「俺、下位ハンターですけど……お力になれるかどうか。」

「……………え!？」

「!!……………あ、そ、それは……………」

俺が村長さんに尋ねてみると、横でハイビスさんが狼狽えている。

「やっべえ」って顔してる。何だろう。

村長さんはすごく驚いているし。

「そ、ソウジさんは……………下位のハンターなんですか!？」

「は、はい、そうです。」

「し、しかし！セツヒトさんが近くにいたとは言え！ウルクススの上位個体やベリオロス、果てはガムートまでソロ討伐をされているのに……………!!」

「あ、あのー……………」

おずおずとハイビスさんが手を挙げる。

「私です……………私がやりました……………」

探偵の漫画の犯人のように話し始めるハイビスさん。

「つい……出来心だったんです……。」

2時間のサスペンスドラマのごとし。

やたら深刻に話すが……まあ話を要約するところだ。

以前、俺がデイノバルドにやられた時、本当の用は、ロアルドロスの討伐であった。

だが、そのクエストは上位相当。

じゃあなぜその時受けられたのかと言うと、ハイビスさんが、上位ハンター昇格試験として特例で受けられるように配慮してくれたからだ。

そして昇格云々なんて話は、俺が大怪我してきたもんだから、そのまま有耶無耶になっちゃった。

そして今に至る。

「……つまり俺は、まだ下位なんですよね。」

「はい。ですが、いつもG級のセツヒトさんも同行しますし、体としては上位昇格試験期間中として扱っております……。」

「ガムートやベリオロスの討伐クエストは……。」

「上位相当です……。」

「おお……。」

昇格試験……というもののシステムがよく分からないが、これはいいのだろうか。

特例として認められることを、何度も何度も許可しては、それはもう特例ではなくなるのでは。

「すみません……何せ上位のハンターさんたちが少ないものでして……。クエストはどんどん舞い込みますし、上位相当のものも回らせていただきました……。」

「なるほど。」

「お二人それぞれで活動していただくことも考えたんですが、それだとソウジさんは上位相当のクエストを受けられませんし……万が一セツヒトさんのケガが悪くなってしまう時、ソウジさんがそばにいれば安心ですし……それで。」

まあ、臨機応変に動いてくれた、と考えれば済む話だと思う。

ギルドが回らなくなったら、それこそお終いであるわけ。

「まー固いことはいいんじゃない？」

セツヒトさんが入ってくる。

「気にしないでいいよー、ハイビスちゃん。必要な処置でしょー。それに要はー、その雪鬼獸をやっちゃえばいいんでしょー？……ハイビスちゃん、シガイアさんにすぐ郵便飛ばせるー？」

「は、はい。天気が良くなれば、すぐにでも。」

「じゃーそこに書いておいてー。『昇格試験期間である下位ハンターソウジを、上位クラスとして認定。G級ハンターセツヒト』って。」

「ええ!？」

「二枚目の手紙にはー、『報告書とかは後でお願いします。ミヨシ村村長確認済み。』って。」

「え、えええ……。」

村長さんまで巻き込んだ。

すつげえ強引。

巻き込まれた方は「マジすか。」みたいな顔している。
いいのか。

「実際ソウジ、明らかに下位じゃないよー。ガムートほぼソロでイケるって、HR5ぐら
いは楽にいくんじやない?」

「そ、そうなんですか?」

「そうだよー。自信持つてー。」

「は、はい。」

驚いた。

俺上位クラスなのか。

「そ、それでは……いろんな特例はあるようですが、お二人にゴシヤハギ討伐の緊急クエ
ストを依頼させていただいて、よろしいでしょうか。」

「せ、せつちゃんさん……よろしいでしょうか。」

「おっけーです。」

「ありがとうございます……ハイビスさん……色々すみませんが、よろしくお願いしますね……。」

「はい……アワキ村長。」

がんばれ、村長、ハイビスさん。

俺も、がんばってきます。

「ゴシヤハギカー。ソウジはいけるかなー。」

セツヒトさんが不安になることを言うものだから。

思わず身震いしてしまった。

* * * * *

雪の中を歩く。

眼前には、ギフト画面。

〈マップ〉を開いて、例のモンスターを探しながら進んでいく。

「ふう……。」

ホットドリンクを飲んだ。

幸い雪は止んでいる。風も少なく、体を感じる寒さはそれほどではない。

「うー、さーむーいー。」

「はい、ホットドリンクどうぞ。」

「ありがとー……。うー、あつたまりますな……。」

セツヒトさんの格好は、例のナルガクルガの装備である。

お腹から胸の下までアミアミスケスケ。

男の俺としては大変ありがたい限りなのだが、見ているだけで寒い。

足も見えてるし。

「寒いと気合が入るんだよねー……。研ぎ澄まされる?」

「いや、聞かれても。でも寒い方が頭が回る気がします。」

「そーそー、お腹ポツカポツカだと逆に……ソウジ、そろそろ?」
「……そうですね、視認できる範囲ギリギリに……いました。」

くだらない世間話をしていたら、セツヒトさんの目つきが少し変わった。
気配だけで視認範囲が分かったのか。
さすである。

「見えたー?あれが、ゴシヤハギー。」

「見えます………ウルクススみたいな……いや、体毛は厚いですね。顔は……よくわかりませんが、絶対厳ついです。」

二つ名を、雪鬼獣。

これで顔が可愛かったら、いよいよギルドのネーミングセンスを疑うところである。

「よく見えるね……よっし。特徴をおさらいしとこっかー。」
「はい。よろしくおねがいます。」

ここに来るまでに、セツヒトさんにゴシャハギの特徴を教えてもらった。
雪鬼獸、ゴシャハギ。

二足歩行でも歩ける、牙獸種らしい。

その強さは、かなりのもの。

セツヒトさんを派遣するほどなんだから、そうなんだろう。

見た目通りのパワー、殴られたら結構痛い。

遠距離にいても、ブレスを吐いたり氷塊を投げつけたり、地面を叩きつけてこちらに

氷の地面ビームをバーつとやってくる。

接近戦でも、距離を置いてもやっかいさん。

更に恐ろしいのが、剣を装備する。

氷で両手に剣のような尖った刀を作りだし、それを使って強烈な殴り斬りをバゴーンとかましてくる。

避けても対の剣で連撃を狙ったり、回転斬りもグルグルつとしてきたり。

剣士のような感じとパワー、スキがなくてヤーになるという。

後方を位置取っても、硬い背中にダメージは通りにくい。

定石がなかなか通じない上、ギリ貧になってきたら翔んで中距離から氷地面ビームをバー。

やーになるよねー。

……………以上が何とか俺が意識して汲み取った、セツヒト語の全てである。

どうだ、これが1ヶ月生活を共にした成果だぞ。

「セツヒト語翻訳」なんてスキルがあつたら、多分レベルはいいトコいつてるだろうな。

……………よく分からないところもあつたので、こつそりギフトを起動し、情報を確かめておこう。

【モンスター名】ゴシヤハギ

【種族】牙獣種

【別名】雪鬼獣

【詳細】

主に氷雪地帯に生息する大型の牙獣種。

大柄な体格で、威圧的な顔と鋭い鉤爪をもつ。

胴体を覆う分厚い毛皮と、太い強靱な四肢が特徴。

食料に対しての執凄まじく、僅かな物音にも敏感に反応し、凄まじい運動能力で襲い掛かる。

基本的にはその前脚や鉤爪を主たる武器として振り回す。

腕力だけでなく脚力も相当発達しており、自分の体高以上の高さまで跳躍し、相手の頭上を跳び越えてその背後や死角に着地してから襲い掛かる。

状況によっては両腕に氷の刃を作り出したり、丸みを帯びた形状の氷塊を生成して鈍器のように扱ったり、地面に叩きつけて自ら破壊し、その破片を投げつけるように打ち出す。

纏った氷塊は意外に外的な衝撃には脆く、集中的に攻撃を受けると砕け散ってしま
う。……………

相変わらず詳細かつ長々しい情報画面である。

……セツヒトさんごめんなさい。こっちの方が、一般の方にはわかると思っています。

そんな俺の心の中の謝罪を知ってか知らずか、セツヒトさんが変な質問をしてきた。

「……ソウジー、課題の空中戦。どーお？」

「え？れ、例の空中での連撃ですか？」

「うん、それー。」

「あー……実はですね、朝ファンゴに向けて試しました。」

「……お？ 小型に成功したのー？」

「はい……でも、まだ実践レベルではないかと。」

「………そっかー………小型に当てられた……。よーし。」

何が良し、なのか。

………嫌な予感がするぞ。

「ソウジー、多分ねー……アイツはソウジと相性がいい。多分、ねー。」

「………え？」

「……ソウジの回避は結構いい線いってるよー。それに目もいいしねー……課題は攻撃力だけどー……空中斬りと回転斬りの手数で押すならー……多分いけると思うんだよねー。アイツ少し小さめだしー。」

「………そ、それは………つまり？」

ちよつと待って。

聞きたくないこと言われそうだぞ？

「……ゴシヤハギ、ソロでいってみようかー。もちろんサポートはバツチりするよー。」

「……………マジすか。」

「……………大マジー。」

見たこともない、ジンオウガにも勝りそうな初見の敵を相手に。
セツヒトさんが、とんでもないことを言い出した。

90 雪の鬼を分析しましょう。

ミヨシとタオカカを結ぶ道が、とあるモンスターの出現により通行止めになってしまった。

そのモンスターの名前は、雪鬼獣ゴシヤハギ。

今、そのゴシヤハギが見える位置にまでやって来ている。

ヒグマのようなずんぐりむっくりとした体格。

上半身は白くて深い体毛に覆われているが、その前脚と後ろ脚はゴツゴツとした地肌のまま。

厳つい顔の上、頭からは角が生え、「鬼」という名も納得である。

やはりクマのように、二足歩行と四足歩行を使い分けるのだろう。

今は両後ろ脚で立ち上がり、辺りを警戒している様子だ。

ここから見てもよく分からないが、周辺の木の大きさと比較すると、まあウルクススより小さいなんてことは無いだろう。

セツヒトさんの話では「小さめ」なんて言われてたけど。

そんなセツヒトさんが、とんでもないことを言い出した。

「ソウジ一人で討伐してみよう」と。

当たり前だが、初見である。

情報は頭に入れたが、イメージと実際が違うなんてよくある。

俺の解釈とのズレ。

まずはそこを修正していこう。

教官の教え、まずはよく見る！

そして生きて帰る！

そこは忘れない。

その上で改めて考えてみよう。

俺はアイツに敵いそうかどうか。

「……セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、あいつの強さって、他のモンスターと比べるとどんなもんですか？」

「んー……ギルド的には、ディノバルドやジンオウガと同レベルかそれ以上、つてとこか

なー。攻撃力半端ないし、技の種類も豊富だしー……倒し方っていうのを心得てる頭の

いいやつだよー。」

「……………俺がソロでいけるっていう根拠は？」

「んー……………相性。」

「……………」

そこだ。そこがよく分からない。

今までいろんなモンスターを倒してきたが、いずれも今出てきたモンスターは含まれない。

デインバルドもジンオウガも、俺はコテンパンにやられた。

「相性つてのは……………」

「んー……………説明が難しいんだけど……………ソウジは引き際が分かっているから、かな。」

「引き際？」

「そー。あ、だからって意識はしないで。今のままで丁度いいからー。」

「はあ。」

いまいちピンとこない。

「ゴシヤハギは、賢い。相手に合わせて戦法を変えてくる。……今回ソウジが接近戦で挑むなら、やつは接近戦で応えてくると思うよー？……但し、拘らない。アイツはアイツで、状況に応じてブレスを使ったり地面割ってきたり……。上手いんだよね。……だからこそ、ソウジはイケると思う。」

「……………」

「ソウジに戦法が読みにくいよう頭を使ってくるからこそ、読みやすい、つてこと。説明が難しいねー。……ついでに言うけど、空中回転乱舞がうまく決まらないようなら、私と共闘するよ。いくら避けられても、攻撃しなきゃ討伐はできない。それに命の危機を少しでも感じたら、助けに入る……いいーい？」

「はい、それはもちろん。」

むしろお願いしたい。

安心は、ほしい。

「おけー……さーて、準備はいいーい？」

「……行きましょう。……ヤバいときはお願いしますね。」

「そりゃーもう。気楽に行こうねー。」

気楽に、か。

いけたらいいんだけどな。

まあ深くは考えず、いつもどおりの自分＋空中での攻撃を主体にしろと、そういう事かな。

無理にああしろこうしろ、じゃない分……気楽に行けるだろう。

視界の中のコシヤハギが、移動を始めた。

開けたエリア……湖が凍っているその場所を目指しそうだ。

街道沿いの湖……ここを生活エリアに定めたのなら、確かに人々の往来に支障が出るな。

「……移動します。行きましょう！」

「よーしー」

いずれにせよ、強敵。

細心の注意を払っていこう。

* * * * *

移動した先、一つ予想外の事態が起きた。

「あれは……デカいですね……。」

「まさかいるとはね……気配もしなかったのにな。」

湖の奥にある山の中へ続く洞窟から、ゴシヤハギよりも大きいモンスターが這い出てきた。

「ヨツミワドウ……ですよね？」

「そーだね……洞窟に縄張りがあったんだらうね。」

ヨツミワドウ、でかい蛙のモンスター。

ワサドラの修練場のからくり蛙のモデル。

討伐したことはあるが、そのブヨブヨでパワーのある肉体に、苦戦させられたことを

思い出す。

「……………2体、睨み合ってますよ…………？」

「…………多分、やるねー、これ。」

「戦い始めるってことですか？」

「うん…………お互いの殺気がビンビンに伝わるよー。」

セツヒトさんの予想は的中。

2体は、山に響く大きな雄叫びを上げたあと、ぶつかりあった。

「グアアアアア!!」

「ギャアアアアア!!」

バゴオーン!

ヨツミワドウの巨体が、ゴシヤハギにぶつかった。

しかし、一方のゴシヤハギが怯む様子はない。

それどころか、両手を振りかぶり、ヨツミワドウの頭部にハンマーのように拳を叩きつけた。

ドガア！

「ギヤアアア！」

たまらず後退するヨツミワドウ。

チャンスと見たか、四つ足で突進するゴシヤハギ。

だが、そんなゴシヤハギの動きを読んでいたのか、ヨツミワドウは巨体を反らせる。

「ブオツ！ブオツツ！！」

ヨツミワドウの口から出される液体。

あれは当たると痛い……のだが。

「！！」

「……あれだよー……あれは、初見だとキツイよねー……。」

驚かされた。

だってゴシヤハギ、跳躍してヨツミワドウを越えたと思ったら、その後方から拳を地面に叩きつけたのだから。

叩きつけられた氷の地面が隆起。

その隆起した氷が、まるで地を這うようにヨツミワドウに向かって……。

ドガツ！ドガツ！ドガアン！

「ギヤアアア!!」

その巨体に直撃した。

その場に転げるヨツミワドウ。

背中に氷をモロに食らった。フラフラしている。

「うわー……すげー……。」

「あれは意外と避けられるよー?……当たると痛いけど。」
「……………」

こええよ。

好機と見たゴシヤハギは、そこから猛攻。
ブレスを当て、更に弱ったヨツミワドウを殴る殴る。
最後は何と馬乗りになって、ポッコポコ。
たまらずヨツミワドウは洞窟の方に逃げていった。

「……………あれ、俺がやるんですよね。」

「うん。」

「……………」

いけるのかなあ……果たして敵うのか俺。

「基本はいつもと同じだよー?回避主体でリズムを掴んでー、攻撃。攻撃前のモーシヨ

ンも大きいから、分かりやすいってー。」

「……もし当たったら？」

「……考えちゃだめー。」

そうですね。

モロに食らったら、恐らくセツヒトさんが一発召喚である。

キレた状態で。

二人が戦うのを見てみたい気もするが……。

「じゃあまー、ソウジー？」

「はい。」

「ご武運をー！」

「はい……。」

セツヒトさんは、考え無しに俺を送り出すわけがない。そう信じて、ゴシヤハギの所に向かうことにした。

* * * * *

俺は、ゴシヤハギに近づいていく。

特に気配を消しているわけでも無いので、すぐに気づかれた。

耳がいいんだな。30mは離れているのに、既に臨戦態勢に入っている。

「……よし、ゴシヤハギ……。」

「グウウウ……。」

「胸を……お借りします!」

「……………グアアアアアアア
!!!!!!」

鼓膜が破れそうなほど痛い咆哮と共に。

俺とゴシヤハギの戦いが始まった。

開幕直後、いきなり跳躍するゴシヤハギ。

「いやはええな!!」

さつき見た、地面をガーツとやるビーム（セツヒト命名）を繰り出してくるゴシヤハギ。

動きは直線的だし、遅い。

「よっ……と。」

冷静に避ける。

あれだな、逆に遅いからテンポ狂わされそうだ。

気をつけねば。

そして恐らく次も……。

「グアア!!」

ドガア!!ガガガガガガ!!

地面が隆起。

二回目の跳躍をしたゴシヤハギが、再度地面をガーツとやるビーム（セツヒト（ry））を行ってくる。

二度目も当たらん！

難なく避ける。

「グアア！」

今度は、避けた俺に向かって近づいてくるゴシヤハギ。
大きく右の拳を振り上げた。

（殴りつけてくる……位置的に……ここ！）

大体の間合いを掴んで、後退。

直後、目の前に何度も空を切るゴシヤハギの拳。

その連撃を、後退し続けて躲す。

（間合いを取りすぎたけど……まずはこんなもんか。）

接近しないと攻撃は当たらない。

だが、まずは見^{けん}に徹する。

「グオオオ……！」

(!!)

大きく息を吸い込んだ！

口には白い氷が見える……ブレス！

「ぬおおつとお!!」

俺めがけて、氷のブレスが吐かれる。

しかも、避ける俺をしつかり見つめ、当たるように調整しながら吐かれる。

一度出されたブレスは、地面にめり込み、ゴシヤハギが顔を上げると、同時に上空に
までに放たれた。

角度で言えば、マイナス5。ぐらいから一気に垂直へ。

「あぶねえ!!」

間一髪、避けることに成功。

(……次も来る!!)

安心するのはまだ早い。

首を振ったゴシヤハギが、今度は右を向く。

そして首振り機能のついた扇風機のように、右から左へ一面、ブレスを放ってきた。

(どうしようもねえ!……一か八か!!)

首を振る動作の寸前、避けきれないことを悟った俺は、ゴシヤハギに突っ込む。

全速力。

ゴシヤハギの懐に……飛び込め!!

(間に合ええええ!!)

スライディング。

下が氷で良かった、めっちゃ滑る。

「……………あぶねえよ……………」

何とかビームを避けることに成功。

灯台下暗し回避、ビーム中はむしろ近くの方が避けやすい。

故バサルモス先生からの教えである。

そして学習。ブレスは縦に放たれたら横一面にもやってくる。

当たるところだった……。

「グアアアア!!!」

すかさずゴシヤハギ、今度は両手を上げて威嚇するようなポーズをとった。

大型のクマのような姿勢。

そこから繰り出されるのは。

(多分……前脚で攻撃!!)

正面に立つのはまずいと本能で分かる。

ゴシヤハギの脇に回り込むように事前に回避。

その直後、メチャクチャな前脚ブンブン攻撃を繰り出してした。

空振りするゴシヤハギ。

「あれ当たったら痛いよなあ……。」

「グアアアアア!!」

怒っている？

元の顔が怖すぎてよくわからん。

いや……顔が赤くなっているような。

「オオオオオオ……グアアア!!」

パキパキパキ……バキン!!

「うえっ!？」

思わず変な声が出た。

ゴシヤハギが少し息を吐いたと思ったら。

「マジか……。」

右腕に、氷の剣ができていた。

白い氷の刀身。

切れ味が良くはなさそうだが、多分斬るためにあるんじゃないかなさそう。

どちらかと言えば……ぶん殴るための鈍器としての役割が強いらさう。

でも、見た目はやっぱり刀。

正直……ちよつとかつこいいとか思ってしまった。

今まで、体の一部をまるで武器のように使ってくるモンスターはいた。

デイノバルドは、尻尾が完全に刀。

切れ味も抜群だった。

ドボルベルグというモンスターは、尻尾が棍棒のようになっているらしい。

聞いたことしかないけど。

だが今日の前のこいつは違う。

体の一部に、武器を装備させた。

モンスター情報では、これを壊せばチャンスになるらしいけど……。

「オオオオ……。」

「!？」

とか何とか思っていたら。

ゴシヤハギが更に氷の息を吐きだした。

まさか……。

まさか……！

パキパキ……バキン!!

「マジっすか……。」

ゴシヤハギ。いや、ゴシヤハギさんが。

両手に氷の剣を装備した。

双剣。

あれは、私と同じ、双剣ではないですか……。

「かつこええ……。」

「……グアアアア!!!」

「……やつべえ!!」

ちよつとかつこいいか思っただけじゃないですかゴシヤハギさん!!

剣を横に振りかぶったゴシヤハギさんは、剣先からキラキラした氷の破片を飛ばして

きた。

何度も。

「マジか……よ!!……いつてえ!!」

油断大敵。

左の太ももに、氷の破片が掠めた。
血が流れてきてしまっている。

「グアアアア!!」

俺に攻撃を当てても満足しないゴシヤハギさん。

今度は両手の剣を構え、俺を狙って振りかぶってきた。

「型も何も……!ない……な!」

「グアアアア!!」

だが、剣を振り回すだけ……?

じゃあ。

先程の殴り攻撃を避ける要領で、ゴシヤハギさんに近づいて……。

「グア！ガア！グアア!!」

「よっ！ほっ……うおつと！」

「グアアアア!!」

正面に立たないように、体の周りを回りながら避けていく。

スキはかなり大きいな。

多分剣としてではなく、やはり鈍器として使っているんだろう。

バツ！

ズザア!!

急に後退したゴシヤハギさんが、今度は右腕をおおきく振りかぶってきた。
ジャンプしながら。

「グアアアアア!!」

雄叫びとともに、地面に氷の剣を叩きつけてくる。
俺はゴロンと転がって避けた。

「あつぶねえ……んん?」

刀が突き刺さって抜けない様子のゴシヤハギさん。

「グアアア!!!」

ズボツ。

あ、抜けた。

「グルルルルル……。」

中々攻撃が当たらないことにイライラがピークなご様子。すみません、こちらも痛い思いは嫌でして……。

……だがまあ、そろそろいいか？

避け続けていても、意味はない。

攻撃のモーションは、大体分かった。

こいつは一発一発にとんでもない攻撃力があるが、隙が多いし避け易くはある。その隙を狙おう。

チマチマと。

そういうの得意。

「ゴシヤハギさん……そろそろ反撃させてもらいますよ!!」
「ゴアア!!」

返事なのかどうかは分からない。

ただ、俺に呼応したように、ゴシヤハギさんは声を上げた。

9 1 雪の鬼を倒しましょう。

討伐開始からしばらく。

俺は、ゴシャハギ……改めゴシャハギさんの攻撃を、ずっと避け続けていた。

気づいたことが一つ。

確かに攻撃力は凄まじい。

先程刀身から放たれた氷の破片は、少し掠っただけなのに結構な出血になっている。

それに、パワーも半端ない。

多分あの氷の刀……だと思っただが、それを頭部をガツンと食らってしまったら、俺は死ぬ気がする。

それぐらい、感じるパワーは凄まじいものがある。

だが、動作のスキは大きい。

回避に専念すれば……おそらく自惚れでも何でもなく、避け続けられると思う。

動きが分かかってきたから、余計に。

「とは言っても……なっ！」

ゴシヤハギさんの双剣の上段からのブチかましを、横に避ける。
右に右に、たまに左に。

基本は反時計回りで、たまに左。

基本の避けるための立ち回りはこうだ。

目も慣れてきた。

「……………やってみるか。」

決心をして。

ジャキン——

俺はようやく剣を抜いた。

「グルルルルル……………」

動きを止めるゴシヤハギさん。

そうなんです、偶然ですね。

俺も双剣なんです。

まあ……。

「はっ！」

ギン！

「グア……。」

威力は全く違いますけど……。

「……………グアアアアア!!」

舐めんな貧弱野郎、と言わんばかりに。

ゴシヤハギさんが襲いかかってきた。

「ふっ！」

まともにかち合ったら、もちろん勝ち目はない。

パワーで勝てる人なんて、いるのだろうか。

……セツヒトさんや教官とかなら、やってしまいそうではあるが。

まずは基本。

避けて、いなして、スキを見て攻撃する。

狙う場所は。

「やっぱりそこだよ……なっ!!」

ギキン！ギン！

「グアアア！」

ゴシヤハギさんの武器である氷の双剣。

そのどちらかに狙いを定める。
必ずある、スキを見つける。

攻撃と攻撃の間。

息をつく瞬間を狙って、攻撃。

第一優先は、左腕の氷剣。

次に右腕。

弱点であろう顔の周辺は届かなそう。

無理はしない、まずは届くところ。

「ふっ……ふっ……。」

「……………グアアアア!!」

ギン！ガシユ！

ギン!!

コツコツと、左の氷剣を削る。

「うらっ!!」

ガキン!!

ビキッ!

大振りに構えたゴシヤハギさんの横斬りを交わした俺は、少しふらついたスキを逃さなかつた。

いい一撃が入った!

ビビが入った!よし、もう少しで……!!

ピキ……ピキピキピキ……。

「……………マジか……。」

頑張つて頑張つてビビを入れた氷剣は、何でも無かつたかのように元に戻ってしまつた。

ゴシヤハギさんが修復したのだろうか。

「ガアアアア……………」

白い息を吐き出しながら、剣先を口元にやるゴシヤハギさん。
そう何度も直されてはかなわない。
これを壊せば、ダウンをとれると、情報画面には書いてあったのに……。

「グルウウウウ……………」

ダンツ！

ドシンドシンドシンドシン……。

「あ……………」

ゴシヤハギさんは、その身を翻すと、街道方面に向けて走り出した。
逃げた……………？いや、体勢を立て直すんだらう。

致命傷を与えられずに苛ついたのかな。

……まあいいか。無理して追いかけることもない。

俺の双剣もそろそろ研いでおきたかったし、ホットドリンクも切れそうだ。こいつが切れたら、寒くてかなわない。

シャキン！

シャツ……シャツ……。

ザツ……ザツ……ザツ……。

砥石の音が辺りに響く。

静かな一帯に聞こえるのは、俺が刀を研ぐ音と……近づいてくる足音。

セツヒトさんだ。

「……ソウジー、お疲れー。」

「セツ……せつちゃんさん。」

「いやー、うまくいったのにねー。これから反撃ーって感じだったのにー。」

「いや、完全にのまれてましたよ。あいつ怖すぎです……。」

終始ビビりっぱなしだった。

何なら攻撃が効いた感じは全くしない。

「怪我は平気ー?」

「はい、そんなには。避けるだけなら……まあ何とかかなりそうです。問題は攻撃ですね。全然効いてないです。」

「いやー?あの氷の剣には、結構いい感じだったよー?もうちょつとで割れてたよ、あれ。」

「ビビは見えたんですけどね……。」

より強い攻撃か、またはより手数を増やすか。

強い一撃は、双剣の目指すところではない。

そうすると、やはり手数を増やす方向だろう。

「……………次は、空中回転斬り、やってみます。」

「……気負わずにねー。後ろ、私もいるからー。」
「はー。」

セツヒトさんの頼もしい言葉。

今は、頼りにさせていただきます。

待つてろ、ゴシヤハギさん。

* * * * *

街道沿いには、雪の山奥らしい針葉樹林が立ち並ぶ。

湖から街道方面に向かうと、その林にぶつかると。

モンスターを倒す際に遮蔽物となるその木々は、邪魔なときもあれば有効活用できる
ときもある。

今回は広く狩り場を使いたい。

「いきました……。」

「おけー。すぐフオローでできるようにしておくー。」

そう言うとセツヒトさんは、木々の上に飛び乗った。
音もしない、まるで忍者。
すげえなあ……。

(ゴシヤハギさんは……街道のど真ん中……強者の風格バリバリだな……。)

件のゴシヤハギさん、街道の真ん中を悠然と闊歩していた。

人の気配でモンスターは縄張りを変えていくと聞いたが、それは弱いモンスターのみに適用されるようだ。

ゴシヤハギさんには関係ないらしい。

「さて……。」

朝のことを思い出す。

標的としてはかなり小さい、ファンゴ。

奴らに「空中回転乱舞」を当てることはできた。

完全に成功したのは一回だけだけど。

(標的は大きい。当ててることはできるだろうな……問題はその後だ。)

「空中回転乱舞」は、確かにたくさんさんの剣撃を食らわすことができるが、その分スキも大きい。

気をつけねば。

(……落ち着け……よし。)

「…………ふうー。」

ゆっくりと、息を吐く。

体と心を再度整える。

ゴシヤハギさんの両腕に、例の双剣は無い。

解除したのかな。

自在にできるとか、俺のギフトみたいだ。

「……………シッ！」

短く息を吐くと、俺はゴシヤハギさんに接近した。

「グアア！」

気づいたゴシヤハギさん。

体をゆっくりとこちらに向ける。

(……………イケる！)

体をこちらに向けるゴシヤハギさんに合わせて、俺は進行方向を少し右に。

狙うは、左腕。

「……………うらあつ！」

戦い始め。

ゴシャハギさんも体勢が整っていない。
チャンス。

(……………後ろから回転……………！)

両の剣を後ろ手に向け、俺は跳躍した。

高さはいらぬ。

クルツと空中で回って。

振り向きざま、切っ先を当てる。

回し蹴りの要領で回転を力に変え……………。

(当てる！)

ズザン！

「グアアアア！」

成功。

両手に力を込め、更に飛び上がる。

顔の高さまで、クルクルと跳躍した俺は。

「ふんっ！」

「ゲア!!」

ズザザザザザザン!!

ザシユ!!

低く素早く回転しながら、ゴシヤハギさんの体をなぞるように剣を当て。

ザザン!

「ギヤアアア！」

着地。

回転斬りもお見舞いする。

ザザザザン!!

「グアアア!!!」

たまらず後退するゴシヤハギさん。

俺も、その動きを確認して後退。

俺のスキを、相手に与えてはならない。

(いけた!!成功!!)

まだ氷剣を生成していない左腕。

そこを中心に、左半身の全体的にダメージを与えられたように思う。

(ダメージは……わからん!だが、押し切る!)

次。

雄叫びをあげられそうな気配。

構わず突っ込む！

ゴシヤハギさんの右に右に位置を取る。

「……………グア——」

ここ！

跳躍。

縦に回転。

切っ先を再び左腕に当てる！

ザシユザシユ！

「——アアアア……………」

ゴシヤハギさんの声は力なく霧散。
叫び声は響くことなく。

「らああああ!!」

グルングルンと回る視界の中、回転して斬る意識を保つ。
飛び過ぎはしない、浅い跳躍からの回転斬り。

ザザザザン!!

「……らああ!!」

着地、剣を振り抜く。

「……グア!!」

よろめくゴシヤハギさん。

だが、目は死んでない。

(……来る！)

数瞬の間。

体勢を一気に立て直したゴシヤハギさんは、大きく振りかぶり。
俺に右前脚の鉤爪を向けた。

ヒュオン!!

(あぶねえ!!)

スウエー、鼻先を氷剣が掠める。

すぐにバックステップ。

間一髪!

「ガア………グルルルル………」

力任せの右前脚の引つかきを、何とか避けられた。

危なかった。

モーシヨンを学習していたからこそ、避けられたが……。

(ヨツミワドウとの戦いを見ていなかったら……ヤバかったな。)

ツ……。

頭から汗が垂れる。

寒いのに。

(……一瞬も、気は抜けない……。)

「……………」

「……………」

睨み合う俺たち。

ゴシヤハギさんの顔つきは、心なしか先程より険しく見える。
怖さ2倍増し。

(少しは敵と認められたか……?)

捕食する弱い生き物から、倒すべき強者に認識が変わった……なら嬉しいんだけど。

バツ！

(……!!)

動いた！

両手を振り上げるモーシヨン！

メチャクチャなぶん殴りが来る！

「グアアアアア!!」

(こえええ!!)

とんでもない形相をしていたと思う。

良くは見えていないけど。

俺は、避けるのに必死だったから。

ゴロンゴロン。

バツ!

右足の力を抜き、そのまま倒れ込むように転げる。

すぐ横を、腕をブンブン振りながらゴシヤハギさんが通り過ぎる。

俺はすぐに体勢を立て直し、起き上がった。

「グアッ!!」

ダンッ!

(飛び上が……地面バキバキか!!)

もう攻撃の名前などどうでもいい。

とにかく、後ろに大きく跳躍したゴシヤハギさんは、地面に両拳を叩きつけた。

ドガァン!!

バキバキバキバキ!!

(よっ……と。)

あんまりスピードは無い、余裕で避ける。

ゴシヤハギさんまでは……遠い。

(近づいて攻撃を……またか!)

猛攻は続く。

続けて、口に見える白い何か。

(ブレス!!)

白い雪の光線が、舞い上がる。

(悠長に避けてる場合じゃねえ！)

ブレスの向こう、ゴシヤハギさんに近づく。

急げ！急げ！！

(鬼神化……!!)

鬼神化を行うと、動きが格段に速くなる。

スタミナは激しく消耗するけど。

「よっ………と!!」

滑り込むようにゴシヤハギさんの足元にスライディング。ゴシヤハギさんは、前方にブレスを吐いたままである。

(チャンス!)

ダンツ!

ザシユザシユ!!ザザザザザン!

ザン!

ザザン!!

クルクルと、空中回転斬り。

ブレスをしているゴシヤハギさんの背中から後頭部にかけて、斬り刻む。

(鬼神化中だと………キッツいな!!)

より重く、速い連撃。

その分、体力の消耗も激しい。

ズザザザザザン!!!

着地と同時に追撃！

「グアア!!」

「うらあ!!」

ズザン！

「ガッ……。」

厳つい顔が離れる。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

「グルル……」

疲れた……！

でも、追撃含め、完璧だった気が……する。

これでも倒れないゴシヤハギさん。恐れ入ります。

それもそうか。

だって……。

「……ハアアアア……」

パキパキパキ……バキン！

（来たか……。）

本気は、これから。

両手に氷の剣を作り出すゴシヤハギさん。

口から出てくるのは冷気なのだろうか。
とんでもない速さで氷剣が形作られる。

(……………ん?)

左手は剣ではない……もつと無骨な、氷の棍棒が作られている。
いやアレはアレで、なぐられたらタダでは済まなそうな感じはある。
双剣使いゴシヤハギさんは、新たに片手剣&棍棒使いに進化。
多彩でクリエイティブ、またまた恐れ入ります。

「……………ガアアツ!!」

気合を入れ直すかのように、両の剣……ではなく、剣と氷の塊を構えるゴシヤハギさん。
ん。

……………怖すぎるって。

* * * * *

「グア!!」

飛んで垂直に剣を振り下ろすゴシヤハギさん。

「よっ。」

避けてから……。

ザン!ザン!ザザン!

「グアアアアア!!」

斬る。

再びの追撃。

今度は……三連かな?

「よっ……と……おわっ!!」

何とか避ける。

地面に剣が突き刺さった。そのスキに……。

「うらあ!!」

鬼神化、乱舞。

「グア……!!」

ビキッ!

バキン!!

壊れる氷剣と棍棒。

そしてダウン。

転げるゴシヤハギさん。

逃すものか。

「きじんかあ!!乱舞!!」

ズザン!!ズザザザザザン!

ザシユ!ザザザン!!

「ついでにい……い!」

ダン!!

跳躍。

後ろから剣を回し斬り。

からの回転斬り、振り下ろし、着地後の回転斬り。

ザザン!!

「らあ！」

「グアアツ……………」

バツ。

後退する。

追撃は一回まで。

ゴシヤハギさんの立て直しは、早い。

「グアア……………」

立ち上がったゴシヤハギさんは、まっすぐこちらを睨みつけてくる。

(……………すげえ体力……………)

氷の片手剣と棍棒を装備したゴシヤハギさんは、そこから猛攻を始めた。が、俺も大体のモーションは分かった。

数度ダメージは受けたが、問題なし。

回復薬グレートをそのたびに服用。

持ち直している。

罌も使い、砥石を使う時間も確保。

無理はしない。

「グアっ!!」

「おわっとお!!」

両腕を振り上げ、地面に叩きつけるゴシヤハギさん。

だが、地面バキバキビームは飛んでこない。

……おそらく疲れている。

攻撃と攻撃の感覚も、緩慢になってきた。

(一番気を抜いてはいけない時間帯……今まで通りに!)

「シッ!」

「ガッ!？」

駆け寄る。

肉薄。

拳が振り上げられる。

知ったことか。

小さく、跳躍。

——空中回転乱舞!!

ズザザザザザン!

「グアア!!」

「もう一丁!」

ザシユザシユ!ザザン!!

「グア…………。」

ズウン…………。

「グルツ！ガア！…………グルル…………ガア！」

地面にひれ伏して、もがくゴシヤハギさん。

「……………」

スチャツ。

俺は、シビレ罨を仕掛けた。

「グオ!?グゴオオオオオオオ
!!!?」

困惑している。

(麻醉玉……………。)

ボフツボフン……………。

2発の麻醉玉を、地面に叩きつけると。

「ガアアアア……………。」

ゴシヤハギさんは、動かなくなつた。

「……………。」

スヤスヤと寝ている。

これで、捕獲成功……………かな。

「……………つふうう……………よおしつ！」

ジャキン！

双剣をしまおう。

「ゴシヤハギ……捕獲完了！」

いつもショウウコに頼っていた、捕獲のタイミング。

ミヨシにやってきてから、それがだんだん分かるようになってきた。

要は、相当にダメージを与えていればいいのだ。

……まだショウウコのように、バツチリ分かるわけではないけど……。

今回は足も引きずっていたし、呼吸もおかしかった。

おそらくあのままやっていたら、討伐していたと思う。

「……ただのエゴだけだな……。」

せめてもの、敬意。

似たような武器を操る者として。
今回は捕獲、ということの一つ。

「強かったあ……。」

一撃の重さは、はつきり言つて俺が遭つたモンスター史上最強クラス。
デインバルドの尻尾のような強烈な感じではないが、それに匹敵する重い攻撃を、常に繰り出してくる。

避ければいい、というのは、避けきれなかつたら終わりなわけで。

そういう意味では、回避主体の俺とは、確かに相性は良かった。

スキは大きかつたし。

それに、セツヒトさんが後ろに控えているという安心感。

狩猟の前にヨツミワドウとの戦いを見られたという幸運。

この辺が、気持ち的に少し楽になった要因だ。

「……………強くなっているぞ……………俺。」

モンスターを倒した達成感は、何物にも代えがたい。

……倒したというか、捕獲したんですけど。

セツヒトさんは、何て言うだろう。

冷酷にやらなきやー、ソウジー、なんて言うだろうか。

いずれにせよ、回収班へ連絡しよう。

セツヒトさんとの反省会はその後だ。

バシユツ……。

俺はポーチから取り出した信号弾を上空に放った。

山にこだまする音。

毎回、勝利の後に打つその音は、心から安心する。

村の人に被害が無くて、よかったと安堵する俺であった。

* * * * *

「やっぱり甘いつてー。」

「はい、すみません……。」

信号弾を撃つて少し。

やたらセクシーな装備を纏った女性が、こちらに駆け寄ってきた。

怪我のことをまずはとにかく心配された。

だが血は止まっているし、何度か受けた攻撃も、そこまで痛くはない。

「完勝だねー……。でもソウジィ？」

そこから、俺は反省。

甘い、討伐しなきゃいけない案件だよ、と。

そうですよね……。敬意とか払っている場合じゃなかったですね……。

……。でも仕方がない。と割り切る。

俺はまだまだ覚悟が足りない。

命を屠るという覚悟。

セツヒトさんに教えられたその覚悟は、まだまだできていない。

「まー……そういうところも……いいんだけどねー……。」

「へ？」

「んーんー、こつちの話ー。とにかくさー、ソウジー？」

「は、はい。」

何だ、まだ反省点でも――。

「――狩猟、お疲れ様。よかったよ、とても。」

「……………っ。」

素直に褒められ、俺は。

照れてしまった。

「あー、ソウジはこういうのに弱いんだねー。」

「よ、弱いつて何ですか!？」

「んー……攻略の糸口が見えてきたというか……やつと射程範囲ー？」

「聞かれてもワケ分かんないっす！」

「あははー……。」

笑顔のセツヒトさん。

いつもの含んだ笑いでは無い、普通の笑顔。

「じゃーソウジー、帰ろっかー？」

「……はい！」

今日の狩猟も無事、終了。

想定外の敵だったが、何とかクリアした。

「ソウジー、顔真っ赤だよー？」

「ホットドリンク飲みすぎました。」

笑顔にやられましたとは言えない。

そんなん言ったら、恐らく今夜遅くまでイジられコース確定である。

92 飲み会をしましょう。

ミヨシの村に、娯楽は少ない。

ワサドラは、多少の娯楽があつた。

居酒屋が軒を連ね、その日の気分によつて場所を変える。

酒を呑むため、呑まれるため、歌うため、喧嘩をするためにあるような殺伐とした飲み屋まである。

最近じゃ、プロのダンサーや歌い手が集い、お金を払つて見る場所まで出店されてい

る。
そう言えば……若い女の子の店員だらけのあのレストランは、まだあるのだろうか……。

イシザキ亭が繁盛したあおりで、経営が傾いていると聞いたが……。

……ま、まあとにかく、発展著しい楽しい町だ。

では対して、このミヨシには何があるか。

僅かばかりの居酒屋、そして温泉。

以上。

だから、ここにやってくるハンターも商人も、夜は酒を飲んで寝るばかり。娯楽に飢えている。

まあつまりその………村の一大事が何とかなったということ………。

「酒持ってきたぞー！」

「おー、商店の！雪の中のスマンな！」

「おーい！こつちにも売ってくれー！」

「お料理でーす！」

「こつちにも酒とメシー！頼んだー！！」

飛び交う声、集まる酒と料理。

老若男女関係なく、そこらにテーブルと椅子を置いて大宴会。

一番でかい机に、俺とセツヒトさんは座っているだけなのに、どんどんテーブルの上
が酒と料理で埋まっていく。

「はい！じゃあいまグラスを持っている方だけでとりあえず……乾杯！」

「乾杯！」

村で一番でかい屋内。

つまりは集会所の中。

アワキ村長の乾杯の声から、大宴会が始まった。

楽しさを求めて、来るわ来るわ村中の人、人、人。

こんなにいたのか。

おかげで集会所は満員御礼。

早朝のワサドラギルドさながらである。

「いやー！セツヒトさんにソウジさん！今日は村の奢りですから！飲んでいってくださいよー！」

「ど、どうも。ありがとうございます——」

「わーい！ブレスワインだー！」

「おっ！セツヒトさん！イケる口でしたね！私もご相伴に……。」

「これは、私のー！」

「そ、そんな!!セツヒトさん！それ私の蔵から出したんですよ!!」

「せっちゃんさん……。」

村長さんとセツヒトさんとのやり取り。

まだ呑んでないのに、酔っぱらい同士の絡みさながらである。

ボトルを抱きしめて離さないセツヒトさん。

……何故こんなことになったか、経緯を話そう……。

* * * * *

村に徒歩で帰ってきた俺たち。

日は暮れかけ。

暗くなるのが早い山間の村とはいえ、時間がかかってしまった。

その足で集会所に到着。

その入り口に入った……その瞬間。

怒号のような歓声。

そして拍手。

「な、なんの騒ぎですか？」

「おー……すごいねー。分かんないけどー……この村にとってすごいことしたからじゃなーい？」

「おお……。」

ワサドラでもこんな事無かった。

そんだけ強かったんだな、ゴシヤハギさん。

「ソ、ソウジさん！セツヒトさん！お怪我はありませんか!？」

「ハイビスさん。」

駆け寄ってくる、正式な受付嬢制服を着た女性。

ハイビスさんである。

「ああ！ソウジさん！こんなに血が!!」

「だ、大丈夫です！大した怪我じゃないですよ!」

「そうですか……良かったです……セツヒトさんは無傷ですね！流石です!」

「んー？そりゃーねー。」

周囲の一同が、こちらを見ている。

なんか恥ずかしい。

いや、歓迎してくれるのは嬉しいんだけども。

「ソウジ一人でー、やつつけたんだよー？ゴシヤハギ。」

「……………え？」

「……………」

ピタッと止む周りの声。

「え？今なんて言った？」「あの男性のハンター一人で？」「いやいやまさか。」みたいな
ヒソヒソ声が聞こえる。

……………マジなんですけど。

「だからー、私は本当にー、何にもしてないのー。ほら、無傷だし、剣も綺麗でしょー？」

「……………えっ!?!ソウジさん、本当ですか!?!」

「は、はい。ソロで、何とか。」

「……………えー……えー……!?!」

直後、周囲の歓声が再び上がった。

「マジで!?あの人一人で雪鬼獣やったの!?え?!一人!?!」

「ソロでゴシヤハギとか聞いたことないよ!自殺未遂じゃん!」

「あの人吹雪の中ランニングする頭おかしい人じゃなかったんだ……。」

「セツヒトさん好きい!」

「もげればいいのに。」

「信じられない!」

鳴り止まない歓声と拍手。

すげえ、こんなに褒められるとか思っていなかった。

なんか変な声も複数聞こえた気がするが。

めっちゃ恥ずい。

「ソウジさん！セツヒトさん！狩猟お疲れさまでした!!ど、どうぞこちらへ!!」
「村長さん。」

「おー、アワキさん、助けてー。」

「は、はい！こちらに！早く！」

歓声が収まると同時に周囲の人が集まりそうな気配。

セツヒトさんの人気も相まって、もみくちやにされそうな予感。

そんな中、村長さんが助け舟を出してくれた。

ハイビスさんも伴って、臨時のギルド長の部屋に駆け込んだ。

『み、みなさんー！とりあえずクエスト完了報告を受けますのでー！こちらには集まらないで下さーい!!』

扉の向こうで、ハイビスさんとは違う受付の方の大声が響く。

すみません、よろしくおねがいします。

そのまま俺たちは、ほとぼりが冷めるまで村長さんと話をすることにした。

.....。

「いやはや……ソロで雪鬼獣を討伐とは……信じられません……。」

「観測班にでも聞いてみてください。ガチでー。ソロでしたよー？ソウジはー。」

「い、いえいえ！疑っているわけでは！いやあしかし、驚かされましたよソウジさん。」

「いや、セツヒトさんが後ろにいてくれたからですよ。本当の本当に一人、ではありませんんでしたし、幸運でした。」

「いえいえ！ご謙遜されず！我々としては、ヤツを捕獲してくれただけでもう、十分に十分すぎますのでー！」

「いやいや、あ、ありがとうございます。」

「いえいえ！お礼を言うのはこちらです！ありがとうございます！」

「いやいや……。」

「いえいえ！」

「……いつまでやってんのー？」

セツヒトさんが止めてくれた。

元現代日本社会人vs腰の低い村長、アワキさん。

いつまでも続くであろういやいやいやいえいえ対決は、決着もつくことなくお流れに。

「……では、私が討伐完了報告を進めてもよろしいですか？」

「ええハイビスさん！お願ひします！」

村長さんの声とともに、ハイビスさんが手に持っていた資料を机に広げ、胸ポケットからペンを取り出す。

お、そのペン、ワサドラで人気の、猫肉球柄ですね。

俺も持っていますよ！

……とは言わず、淡々と事務作業を進める。

その脇では、村長さんとセツヒトさんが話をしている。

「いやー、冬の間だけとはいえ、このミヨシにお三方がいらっしやること、大変ありがたいです。」

「ソウジもレベルアップできてますしー、ハイビスちゃんもがんばってくれていてー。こつちもこつちで嬉しいですよー。」

「しかし、ソウジさんはセツヒトさんにも迫る腕前ですなあ……セツヒトさんもウカウカしていられないのでは？」

「まだまだ負けませんってー。でも……私は一度引退しましたしねー。ソウジにはまだまだ強くなってもらいますよー。」

「いやあ、頼もしいですな！ハツハツハツ！」

ポヨン。

アワキさんの腹が揺れる。

ヨツミワドウ……………。

「………ジさん？ソウジさん？こちらもよろしいですか？」

「は、はい！」

いかんいかん、また失礼なことを考えてしまった。

おれはペンをお借りし、素材の預かり証にサインをする。

手続きの大体は、これで済んだと思う。

「……………はい、ありがとうございます……………狩猟、たいへんお疲れさまでした。これで一通り終わりです。」

「いえ、いつもありがとうございます。」

「いえ……………それより……………これからどうされますか?」

「……………? どうというのは?」

「これから?」

「これからなんて……………風呂入って装備の整備をして飯食って寝るだけだが。」

「風呂入って装備の整備をして飯食って寝るだけ……………なんて考えてないよねー、ソウジー?」

「なんでわかるんですか!?!」

ピッタリ言い当てられてしまった。

「だめだめー、今日はもう、飲むんだよー? せっかくソウジが格上を倒せたんだからー。」

さつきまで下位だったハンターがゴシヤハギ狩猟とかい、聞いたこと無いってー。」
「は、はあ。」

宴会&反省会ってことかな？

それは全くもって構わないんですけど。

「そんちよー！……お酒って、ありますー？」

「……………セツヒトさん、いいのがありますよ？」

「おー？マジでー？」

「それは……………ゴニヨゴニヨ。」

「ふんふん……………おーなるほどー！いいねー！」

何やら企むセツヒトさんとアワキ村長。

何かが起ころうとしている……………。

「ハイビスさん、どういうことですかね。」

「……………まあ恐らく、村を上げての宴会を計画されているのでは無いかと……………」

「む……村あ!？」

え？村を上げて？

何でそうなるの!？」

「ソウジさん……あのですね、このような小さい村に、あんな恐ろしく強いモンスターが出てくるなんて、首都に古龍が現れた!ぐらいの一大事なんですよ?」

「は、はい……。」

「それに娯楽も何も無い環境……更にはさつきまで下位ハンターだった方が、それを成し遂げたという話題……今日はソウジさん、痛飲をご覚悟くださいね。」

「……………マジですか。」

「大マジです。毎冬現れるジンオウガが狩猟されたら、大宴会を開くそうですよ?この村。……さー!私も飲みますよ!!退屈してたんですから!!」

「おおお……。」

こうして、集会所に村中の酒と肴と人が集まり、大宴会が開かれる運びとなった。

* * * * *

というわけである。

回想終了。

人は増え、喧騒が増すばかりの集会所。

仮のギルドとして運営は大丈夫なのか!?

ただでさえ少ないスタッフにも酒が入ってますけど!?

「いやいや、ソウジさん。まままま……。」

「あ、これはこれは村長さん……とととと……。」

白く濁った酒を、俺の盃に入れてくるアワキ村長。

ぷわんと甘く漂う香り。

いいお酒だろうな、これ。

「アワキさんも……まままま……。」

「おおっと……すみませんな主賓に……とととと……」

なんだこれ。

日本の企業の新年会とやってること変わらないわ。

「改めまして……狩猟、お疲れさまでした。」

「いやー、ありがとうございます……アワキさん、だ、大丈夫ですかね？」

「え？何がです？」

「その、ギルドとして。ここが機能しなくなったら大変じゃ……」

「あー！それはそうですね！ハッハッハッ！」

ボヨンボヨヨン。

腹太鼓が音を立てて震える。

うーん立派。

ヨツミワドウ。

「たまには、まあこういうことをするんですよ。この村では。」

「そうなんですか？」

「はい……何せ何も無い村ですから。みんなで助け合って生きていかななくてはならない。幸い温泉も出たおかげで、村の経済は発展してきていますが……冬の間は気持ちも塞がりますからねえ。」

「……なるほど。息抜き、ですか。」

「そうです、そう。ソウジさんはきつちり周りを見てますなあ！流石ゴシヤハギを狩る猛者でいらつしやる！ハツハツハツ!!」

「あ、あははは。」

村長さん。

顔つきも言動も、もう完全に酔っぱらいである。

だが、なんとなく分かった。

この人は、村長として村の全員の気持ちに塞がらないようにしているのだ。

もちろん、ミヨシ村にとってめでたいことがあった時に開催する、という体なのだろうが。

村長さんが酒をチビりと飲むと、ゆっくりと話し始めた。

「……この村は、まだまだ復興途中の『再生の村』です……。頑張りすぎたり、まだ心に大きなキズを負っていたりする方もいる……。村長としてできることは少ないですが、まあ、これくらいなら、とですね。」

「……いや、そのお考え、素敵だと思います。……俺の故郷にも、災害があつたら共に悲しみ、嬉しいことがあつたら皆で盛り上がる。そういうことがありました。……だから……なんかわかります。」

そこから男二人、酒を酌み交わしながら駄弁つた。

村長さんは、セツヒトさんから少し聞いていたが、タオカカのギルドの元職員さんだ。

ミヨシ村全壊の際にも、色々と尽力されたらしい。

人に歴史あり。

「ソウジさんは、どこか達観していらつしやいますなあ……。見たところ相当にお若いのに、かなりの苦勞をされてきたのでは？」

「い、いやいや！そんなことは！」

鋭い。

人生経験と言うなら、結構なことをしてきている。

まさか「第二の人生中なんです」と言うわけにもいかず、口ごもる俺。

「ハンターさんは、この世界の要。我々の生活に欠かせない方々です。……命を賭けて我々を守るその姿は、本当に素晴らしいと思いますよ。……ぜひ、これからも頑張ってください！」

「は、はい！」

実際の歳は近いはずなのに、貫禄がそれを上回る。

若い男のムーブを決め込む俺、なんか恥ずかしい。

でも、やる気にはなる。

「それでは、また……私は席を外しますが、ゆっくりされていってくださいね！」

「ありがとうございます！このような席を設けていただいて。」

「しつこいようですが、お礼を言うのは我々ですぞ！堂々とされていってください。それでは！」

礼をしたアワキ村長は、商人が集まっている場所に向かつていった。
風格あるなあ……。

……ハンターもすごいかもしれないが、それを支えていくくださる方も、それはそれはすごいわけで。

自分の仕事が一番辛いと思うやつにはならない。

前世で好きだった歌のフレーズをふと思いつき出し、俺は気を引き締めることにした。

まあ今夜は楽しむけど。

ワークライフバランス。

* * * * *

その後は結構大変だった。

顔しか知らないようなハンターの方々に囲まれ、どうやって雪鬼獣を倒したのか根掘り葉掘り聞かれた。

別に隠すこともないので、ギフトのところには触れないようにしながら情報提供。酔っ払いながらもメモを取って真剣に聞く様子は、プロとしての根性を感じさせた。

「なるほど……その、空中回転……ですか？それはそんなにダメージが増えるものですか？」

「ええ。双剣に限らず、空中からの攻撃は様々な武器で応用できるかと思えます。モンスターも、予想外の動きには対処が難しい。」

「大剣や斧なんかも？」

「私は扱えないので自信はないのですが……自分より小さい敵が、目線以上の高さから攻撃するなんて、意外という他ないんじゃないかなーつと。……手数が増える利点は、確かに双剣ならではだとは思いますが。」

「なるほどなるほど……。」

「あと、スキも大きい。ここぞというときがわかるまでは、慎重に行きましょう。ゴシヤハギさ……雪鬼獣も、まずは私、避けることだけ考えてましたから。」

「ふむ、ふむ……（カリカリ）」

その中でも、一際熱心に話を聞いてくる女性のハンターさんが一人。

恐らく武器は近接だろう、先程握手をした時、手のひらからは相当な力を感じた。

それに、手の平はゴツゴツしていた。

ぱっと見た感じでは、ボブ気味の茶色いショートヘアーに大きな目をしていて、その

辺のかわいい大学生みたいな印象を受けるのに。

この若さでハンターとして身を立てて、更に向上しようと頑張っている。偉いなあ……。

まだ下位の方らしいが、腕の筋肉の付きや防具の傷跡からは、努力が感じられる。ゴシヤハギに限らず、冬の間、ミヨシのモンスターは増える。

お金もそうだが、名声やスキルアップを求めてこの村にやってくる手合いは多い。そんな一人だろう。

話も弾む中、もう一人の主賓がこちらにやってきた。

「うわー、勉強熱心ー……ソウジー、ちよつとは忘れて楽しみなよー？」

「セツヒトさ——」

「せつちゃんー。」

「せつちゃんさん、どこ行ってたんですか？」

「どこって……あそこー。」

セツヒトさんが目線を向ける先。

俺もそこを見る。

何やら熱い視線がこちらに注がれている……。

5、6人の女性。村に着いたときに俺を睨みつけてきた方々である。

「……あー、なるほど……。」

「うん。お酒くれたから一緒にいたけどー、ソウジが気になってこつち来ちゃったー。」

「……あー……。」

それであの視線か。

うん。

怖い。

スルースルー。

「……せ、せ、せ、セツヒトさん！」

「おわー。なにー?」

「わ、私、下位ハンターのハンズと申します！せ、セツヒトさんのお噂はか、かねがね！」

「おー、おちついてー。」

「は、はいいい!!」

俺に色々聞いてきたハンズさん。

突如、舞い上がるかのような声色で、セツヒトさんに話しかけ始めた。

「わ、わたひはー！セツヒトさんに憧れてこちらに来ましたー！」

「……うん。」

ハンズさんが語尾を伸ばす。

……セツヒト語を真似しているのか!?

何故!?

セツヒトさんも若干引いているけど……。

「まーまー、普通に話してよー。」

「は、はい……それでその、ま、まさかこの村にいらっしやるとは思ってもよらず……！
も、もしよろしければ！」

「ばー？」

「私と、ぜひ！手合わせをお願いしたきゅ!!」

ガリツ。

おお、すげえ。

舌嚙んだ音がここまで響いた。

「~~~~!!」

「あーあーあー……もー、そんなに言うほどの人間じゃないって……ソウジーごめん。水ー。」

「……承知しました。」

近くのテーブルにあつたグラスに水を注ぐ。

舌を嚙んだハンスさんは、痛いのか恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしてグラスを受け取った。

ゴクツゴクツ……。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……すみません、ソウジさん……。」

「いえいえ。」

落ち着いた様子のハンズさん。

ふうつと息を吐いて、顔を上げた。

「セツヒトさん……不躰で申し訳ありませんでした……。」

「いーよいよよ、どんまい？うん。」

「は、はい！」

「しかしねー、手合わせねー。」

考え込むセツヒトさん。

……何か企んでいる顔である。

「……………今からやるー？手合わせー。」

「……………へ？」

やっぱりな……。

ろくなことじゃないと思った。

「ソウジ。何かいいの無い？怪我しないような武器みたいな。」

「そんなないですよ……あ、ロアルドロスのためがみで作った防具なら有りますけど。」

「……なにそれー？何でそんなのあるのー？」

以前、シヨウコに素手での戦い方をレクチャーして欲しいと頼んだ時に使ったやつだ。

ポーチの肥やしになっていたのを思い出した。

ゴソゴソ。

「……………これですよ。」

「おー……………いいね、これ分解していい？」

「構いませんけど……何企んでます?」

「ふふー。ひみつー。」

隠しながら出した、その防具を見つめながらニヤツと笑うセツヒトさん。
置いてけぼりの俺と、熱心なハンター、ハンズさん。

何やらゴソゴソし始めるセツヒトさんを、不安げに見つめるのだった。

93 宴を盛り上げましょう。

セツヒトさんの本職？は武器屋である。

様々な武器に精通し、天才的に器用である為、もう天職と言えるだろう。

そしてその才能を遺憾なく発揮して、たった今作り上げられた作品がこちら。

「はーい、かんせーい。」

「これは……？」

「うーん、命名……ロアル剣！」

「……まんまですね。」

「ろーあーるーけーん。」

セツヒト語にかかれれば、もはやドラ○もん調に聞こえてしまう。

俺はその剣を受け取り、試しに振ってみた。

ブオン！

おお。

竹刀なんて持ったこともないが、それぐらい軽い気はする。
短時間で急に作ったとは思えないクオリティ。

「竹をベースに、細かく縛って強度を調整してみました。」

「あ……これすごいですね。全然痛くなさそう。……丈夫なのに。」

よく見ると、麻の様な繊維で刀身にロアルドロスの鬣が巻きつけられている。

その巻きつけられた紐はきれいな柄にも見えるよう工夫されている。実用性も高そう。

……見た目もいいし……これ、売れるんじゃないか？

「でしょー。これなら怪我しないねー……えーっと、バンズさん？だっけー？」

「は、バンズです！でもバンズでもいいです！もはや！」

「いやいやいや。」

危うく肉を挟むアレになるところである。
どんだけこの人、セツヒトさん好きなんだ。

「じゃーこれー……ろーあーるーけーん。」

「気に入ったんですね、その言い方……。」

ポイツと手渡すセツヒトさん。

ハンズさんは、全長70cmぐらいのそれを受け取ると、ペタペタ触り始めた。

「で、伝説のセツヒトさんが作られた武器……はああ……。」

……もはや変態っぼいぞ……。

「んじゃー、私も手に取ってー……その辺借りよつかー。」

二人は集会所の中央、少し広くなっているスペースに進んでいった。

周囲の人もこちらを見ていたようで、机や椅子を移動している。

一瞬で人垣の即席リングが出来上がった。

「お？何か始まるのか？」

「剣持ってね？」

「え？あの娘、今から一騎打ち？ヤバくない？」

「お！決闘か!？」

「いいぞー！やれやれー!!ほら、そこ場所開けろって！」

迷惑極まりないと思ったのも束の間、完全に歓迎ムード。

やはりこの村の人、娯楽に飢えているな……。

……セツヒトさんの剣技を生で見られるのだ、そりや盛り上がって当たり前か。
セツヒトさん、この辺りじゃ超絶有名人らしいし。

「あー、みなさーん、ごめんなさーい。ちよつと場所借りますよー。」

一応の挨拶を済ますセツヒトさん。

うん。前にもこんなことあった。

酔った勢いで俺と模擬戦を行い、俺の首を完全にキメたあの日。
強かったなあ、セツヒトさん。

「そんじゃー、ハンズ？用意はいーい？」

「は、はい！………よろしくおねがいます。」

おっ。

ハンズさんの表情が変わった。

一呼吸置いたあと、凛々しい顔付きに。

とても先程までセツヒト製ロアル剣にハアハアしていた人には見えない。

「ソウジー！」

「は、はい！」

「開始の合図、頼んだー！」

「わ、わかりましたあー！」

いきなりセツヒトさんに呼ばれ、ビビった。

俺が言うのか!?

この聴衆の前で!?

なんか恥ずかしい!

「えー。……いきますよー?」

「……………」

「……………」

ジリッ。

二人の足に力が入っていくのが分かる。

「用意………始め!!」

「やああ——」

「……………」

スパァン!!!

「あ……………れ……………？」

ボタン。

力なく倒れるハンズさん。

「……………。」

見守っていた観衆も、静まり返っていた。
しばらくして。

「……………す、すげえ!!」

若い男性ハンターの声を皮切りに。

「うおおお!!一瞬だ!」

「やっぱ……見えなかった……!!」

「え? えええ!? 終わったあ!? 何で!？」

「セツヒトさん素敵ー!!」

「キヤーー!!」

うおおおおお、と。

オーデイエンスからの大喝采が起こった。

当の本人は。

「……………ほらー、意識あるー?」

ペチペチ。

まるで王子様のように片膝でハンスさんを支え、優しく頬をタッチ。
絵になるなあ……。

「あ……だめ……私もう無理……。」

「鼻血出そう。」

その様子、一部の方々には大好評の様である。

「つ、次！俺も!!」

「あ！ずりいぞ！俺も！」

「私もお願ひします!!」

次々に来るわ来るわ、立ち会いたいハンター達。

血気盛んな若い人たちが中心である。

逆に玄人臭のする渋いオジサマハンター達は、睨みつける勢いでセツヒトさんを見ている。

「……おい、見えたか？」

「かろうじてな……あれが生きる伝説か……。」

「……顎の下にキレイに入れてたな。」

「すげえなお前、見えたのか。」

セツヒトさんの剣が見えていたらしく、分析を始めている。
こちらはこちらで、とても勉強熱心だ。

ちなみに、俺も見えていた。

「始め」の声の瞬間、セツヒトさんは2歩、踏み込んでいた。

ダラリと構えた下段から、顎の下に一発、掠めた。

一瞬でキレイにキメたなあ。

だからって防げる自信はないが。

「ソウジ、ごめーん、この子いいい？」

「はいはい……よつと。」

気絶しているハンズさんを介護するため、お姫様抱つこの要領で抱き上げる。

………変なことは考えてないからな。

ハイビスさんを探して、ベッドを借りよう。

……どこにもいない。

仕方がないので、その辺にあつた机に布を敷いてベッド代わりに横に寝かせて気道は確保して……。

「こんなもんかな……おい。ハンズさーん……だめか。」

幸せそうな寝顔でスヤスヤと息を立てるハンズさん。

セクハラにならないよう、肩を叩くも、反応なし。

……このまま寝かしとくか。

セツヒトさんは……。

「うおおお!!」

スパアン!

「ぐえ!!」

「んー……次ー。」

次々と倒してらっしやる……。

周囲の盛り上がりも凄いことに。

そら楽しいわなあ、一流の剣技がすぐそばで見られるんだから。

トントン。

「ん……あつ。」

「探しました、ソウジさん。お隣よろしいですか？」

「え、ええどうぞ。」

ブーツとセツヒトさんの剣を見ていたら、後ろから声をかけられた。

我らが敏腕受付嬢、ハイビスさんである。

よく見る制服の格好なのに、お酒を持って顔も赤い。

いつもとは少し雰囲気も違う。

そんなハイビスさんは、俺が座る長椅子のすぐ隣に腰掛けた。

正面には人ばかり、その向こうにセツヒトさん。後ろの机には、スヤスヤとのびているハンスさん。

そして右隣、肩の当たる距離にハイビスさん。

……近い。

「ソウジさん？ 飲んでます？」

「ああ、はい。まあボチボチ。」

「主賓なんですから、もっと飲まなきゃですね。これ、どうぞ。」

「あ、どうも。」

瓶に入ったビールを差し出してきた。

ありがたくいただく。

「いや、ありがとうございます。本格的に飲もうとしても中々話がこんでしまつて。」

「チラチラソウジさんを見てましたけど……熱心にハンターさんとお話されてたので。あんまり飲んでないのかなー、と。」

気を利かせてくれたのか……ありがたいです。

ハイビスさんは後ろ、ハンズさんに目を下ろす。

幸せそうに寝る寝顔を真顔で見つめている……何だ？

「ソウジさんの周りには女性が多いですね……。」

「え？」

「い、いえいえ、こちらの話です。………こんなにすぐ次の方を………しかも可愛いし

………気をつけないと……!!」

「？」

よく分からないことをブツブツ言っているハイビスさん。

「す、すみません。こちらの話です。」

「は、はあ。」

ハイビスさんは少し気恥ずかしそうにしながら、今度は喧騒の先、セツヒトさんを見ている。

視線をやると、セツヒトさんはすでに4人ぐらいをのしていた。息も上がっていない。流石だ。

「……流石ですね……。」

ハイビスさんも同じ感想。

「ええ、本当にあの人は……追いつける気がしないです。」

「ソウジさんは……いつか追いつけますよ。」

「どうでしょうね……。でも、目標にはしますよ。憧れます、あの強さ。」

瓶をあおる。

冷たいビールが喉を濡らす。

……ちよつと酔つてきたのか、クサイことを言ってしまった……。

「私は……ハンターさんじゃありません。」

「……………」

「でも、受付嬢という、ハンターさんを支える自分の仕事に、誇りを持っています……いえ、そんなに誇りはもってなかったんですけど……ソウジさんに出会えて、本当にそう思えるようになりました。」

「は、はい。」

真面目なムード。

緊張してしまう。

「……感謝しています。ソウジさん……あなたはいつも一生懸命で、だから目が離せないくて……こんなところまで来ちゃいました。」

「……はい……。」

「私をこんな風に仕事熱心にしちやっただんですから……責任、取って下さい。」
「せ、責任？」

んな大げさな。

……とはツツコまない。多分真面目に言っているぞ。ハイビスさんは。

「ええ……私が専属で受け待つハンターさんは、きっとセツヒトさんよりもすごい人になるんです……初め見たときは……正直全然頼りなかったですけど……ソウジさんはすごい人になるって……予感がしたんです。」

「は、はい。」

あの時か。

……考えたら、俺のハンター人生は、この人から始まったんだよな。

ハイビスさんにハンター登録の受付をしてもらって、明らかに幻滅されて、でもハイビスさんは投げやりにもならず、俺を初心者講習に誘ってくれた。

感謝している。

「予感……というよりも確信したんです！だから……そ……その！ソウジさん！」

「は、はい！」

力強い目で見つめられる。

まつ毛長い！というか近い！そしてやっぱりやっぱり美人だなこの人！！

「……………絶対！ぜったい！！この大陸に名を馳せるようなハンターさんになって下さいね！……………いつも近くで見ている私が、これからもずっと、応援しますから！！……………や、や、やや約束！……………ですよ？」

「……………」

顔が真っ赤だ。

でも、真面目に、大真面目に言ってくれているのが分かる。

この飲み席の席、皆が皆、褒めてくれた。

嬉しかった、誇らしかった。

自分がやってきた今までの事は、決して無駄じゃなかったと。

でも、ここまでなのか、と。

邪推してしまった。

俺は、ギフトの力を大いに活用して、ここまでやってこれたけど……………あの人垣の向こうにいる凄腕のハンターのようにやれるのかと、そう自問自答が止まらなかった。

みんなが褒めてくれる度に。

捻くれているな、と、自分でも思う。

……………でも、ハイビスさんは違った。

俺はここまでじゃない。

これからも頑張るんだと。頑張れるんだと。

ハイビスさんが、俺をずっと見てくれていたこの人が、そう教えてくれている。励ましてくれている。

神様がくれたこの命、それを最初にハンターとして結びつけてくれたこの人が。

ありがとう。

ゴシヤハギさんを倒して尚、俺は強くなる。

強くなれる。

なりたい。

「……………」

再びセツヒトさんを見る。

周りが盛り上がる中、チラチラとこちらを見ている。

「ソウジはー？」と、俺を呼んでいる気がした。

「ハイビスさん。」

「は、はい！」

「感謝します。……目が覚めた……いや、もう一度やる気になりました。」

「……………それは……………ふふっ、良かったです。」

「……………はい。」

ハイビスさんの笑顔から顔を外す。

セツヒトさんが、こちらを見ながら右手を上げた。

人差し指で、クイクイっと俺を招いている。

視線が、俺に集まる。

「ハイビスさん……………マシヨルク教官に俺、教えられたんです。」

「……………何をですか？」

「『無様でもいい、卑怯でもいい、生きて帰ることこそが、ハンターにとって一番の資質だ』って。」

「……………」

「行つてきます……無様でも何でも、あの人に少しでも足掻いてみます!!」
「……ふふ……はいつ!」武運を!!」

真つ直ぐセツヒトさんの元に向かう。
人垣が、道を作ってくれた。

ポイポイツ。

パシツ、パシツ。

セツヒトさんが、二つのロアル剣を無造作に放つてきた。
軽くキャツチ、握りを確かめる。

俺は双剣で来いつてことか。……よし。

「……やーつと来たねー……親玉登場?」

「誰が親玉ですか……敵でも何でもないですよ。」

「じゃー、何ー?」

チャツ。

セツヒトさんが構えた。

スツ。

俺もいつもの姿勢で双剣を構える。

「何でしょう……挑戦者、でお願いします。」

「ふふー……ハイビスちゃんに何言われたか知らないけど……いい顔してるよー、ソウジー。」

「ありがとうございます……合図は？」

「いいよ、動いて。合わせるから。」

ハンデか、それともカウンター狙いか。

……両方だな。

「いきます。」

「はい……………全力で来い、ソウジ。」

「……………っ!!」

セツヒトさんが殺気を放ったと同時。

俺は右足を踏み込んだ。

スパアン！スパパン!!

高い音が響く。

剣を握る手がビリビリと痺れる。

セツヒトさんの攻撃は、とにかく重い。

そして速い。

だが、何とか間に合った。

「……………。」

観衆が、しんと静まりかえっている。

「……お、おおお!!あの兄ちゃん!倒れてねえぞ!!」

「マジか!?流石だな!!」

「ゴシヤハギやった話、やっぱ本当なんだ!」

「今まで全員一発だったのに!すごいぞ兄ちゃん!いや、ソウジー!」

ザワザワ。

歓声というより、驚きの声が上がっている。

「……ソウジー?よく防いだね!」

「はい……腕痺れてますけど……。」

セツヒトさんは、本気で来るといった。

だから、本気で来ると思った。

セツヒトさんは優しい人だ。

初心者ハンターだろうと何だろうと、挑んできた人たちには全力で応えていた。それが礼儀だと言わんばかりに。

弱点を一発。

それで終わり。

じゃあ、一発で気絶させるような弱点とはどこか。

……顔だ。

ヤマを張った。

絶対顔の近くに剣を向けると。

動きは見えている。

下から構えたセツヒトさんの剣は、実はギリギリまで上がっていない。

脅威の速さで二歩踏み込んだ後、膝腰肩腕剣の順に捻転。

周りには超加速したような速さで、最後の最後に剣を振り上げ、顎に一閃。

それが狙いだ。

わかっているなら話は早い。

俺は、両の刀で攻撃を防ぐ。

タイミングはシビアだが、その瞬間右半身を捻る。

斬り上げの一撃を双剣で防いでいなし、勢いを闘牛士のように後ろへ逸らす。

つまり、俺は一切、攻撃していない。
防ぎ切っただけである。

「……………うまーく回避したねー、ソウジー。」

「どうも……………次通用するかは知りませんが……………」

「うーん……………じゃー一撃狙いはやめとくよ……………行くよ。」

「はい……………」

再びの殺気。

静まる観衆。

よく見ろ、集中……………!

動き出しの足、手の握り、重心、その全てを、全体的に見る!!

(……………左!)

スパアン!

消えたように見えたセツヒトさんだが、その直前の重心を若干左に傾けていた。だから、またヤマをはる。

(防げた！回れ！勢いにやられるな！)

剣でいなす。

俺は駒のように右回転。

そのまま……。

(届け！)

切っ先をセツヒトさんへ向ける。

回転の力をそのまま伝えながら……！

スパパァン！

「ん……………」

……………向けた双剣は、だが届かず。

セツヒトさんは剣を片手に受け切った。

グ……………グググ……………！！

(片手かよ！ま、全く動かねえ！！力……………強すぎ……………!!!)

「……………いいねー、ソウジ……………ここまでやるとは……………ねっ!!」

「のわっ!!」

剣ごと押された俺は、無様に転げてしまった。

どこにそんな力があるのか全く分からん……………まるで岩に押されたかのようにだった。

スツ……………。

セツヒトさんが剣先を俺の鼻に向ける。

「……はい、私の勝ちー。」

「……参りました。」

結果は、セツヒトさんに力負けした俺の降参。

負けである。

「力強すぎますよ、セツヒトさん……。」

「せつちゃんー。あと女の子に力が強いは失礼だよー。」

「す、すいませんせつちゃんさん……。」

「……んふふー、いいねーソウジー。やっぱりいいよー。強くなってる。」

認めたくはないが、負けである。

剣自体では負けたわけではないと強がれるが、腕力の差は壮絶な壁があるなあ……。鍛え直した。

「おおお……すげえもん見たなあ……。」

「ああ、達人同士、って感じがした。」

「キヤー!!セツヒトさーん!!かっこいいー!!」

「そのままやつつけちやえー!!」

「よくやったぞー!ゴシヤハギ倒した奴……名前わからんけど凄かったぞー!!」

パチパチパチパチ。

拍手を頂いてしまった。

一部の方からは余計に反感を食らってしまったようだが。

「あ、あはは、どうもどうも。」

ペコリペコリ。

お辞儀をしまくる俺。

この世界にきてお辞儀なんでほとんど見たことないのだが……許して欲しい。染み

付いた習慣、というやつだ。

「ソウジー？」

「あ、はい！」

セツヒトさんに呼ばれて振り返る。

するとセツヒトさんは、小声で俺に話し始めた。

(ソウジー……ちょっと例の奴、やってみー？あの、「ひよーいじよーたい」ってやつー。)

(……えええ!?)

(せっかくだしさー、受けてみたいんだよねー、例の剣技。)

(だ、ダメですよ！マシヨルク教官だつて吹っ飛ばしたんですよ？これ。怪我したら……。)

(……何？あいつは良くて私はダメなの？)

ひいっ！

(そ、そういうわけでは……!!)
(じゃ、かもーん。)

チャツ。

構えるセツヒトさん。

……え!?!マジでやるの!?!

「……………(コクコク)。」

無言で頷くセツヒトさん。

マジか……。

「お、おいおい!セツヒトさんがもう一度構えたぞ!!」

「男の方のリベンジってやつか!いいぞ!!」

「今度こそ完璧に倒してー!セツヒトさーん!!」

「おーい、ソウジって方ー!死ぬなよー!」

どうやら周囲は、またやることに反対はない模様。

むしろやれやつちまえムード全開。

……………しようがない……………腹を決めよう。

……………セツヒトさんなら大丈夫だろ、多分。

「じゃ、じゃあ行きますよ?」

「……………。(コクン)」

しんと静まり返る場。

俺はポーチに触れた。

表示される項目から、〈操作方法〉、「鬼人突進連斬」を選択。

突如、自分の意識とは関係なく、動き出す体。

動き出すは語弊がある。膝の力を一瞬抜き、倒れ込むように前へ前へ。

ちようど二歩踏み出す感じで加速。

こんな剣技、やったこともない。

前教官とやったときはまた違う動き。

相手に向かって回転しながら横一閃を食らわすこの技、前回とはまるで勢いが違う。速さが、勢いが、目に映るものに伝わるもの全てが、違う。

俺はもう、自分でも訳のわからないほどの速さで体をクルクルと回転させながら剣を振り抜き。

「うえ——」

気が付いたら、セツヒトさんを。

あの、セツヒトさんの顎下を。

スパァン
!!!!

振り抜いていた。

「わ、わ……。」

ドスン。

このロアル剣のおかげなのか、セツヒトさんが上手く避けたのかは分からない。とりあえずセツヒトさんは、以前の教官のようにふっ飛ばされてはいなかった。……なのだが、とにかく俺は双剣を振り抜いていて。

「……………ソウジ―……………すごいじゃん……………。」

一応無事なセツヒトさんは、しりもちをつく形でおれを見上げていて。ポーツと、俺を見つめていた。

「……………。」

俺もポーツとなっていて……。

しばらくの間の後。

「……………うおおおおおおお
!!!!!!
「」

観衆の大声で、我に返ったのだった。

マジか。

94 新たな武器を探しましょう。

飲み会は続いた。

俺にやられたというのにめちやくちやごきげんなセツヒトさん。

その後も飲むわ飲むわ酒の神の如し。

早々にコテンと床で寝てしまった。

可愛く猫のように寝るものだから、例のセツヒトさん大好きガールズたちの鼻血出血祭り。

「あ、尊過ぎ……。」「セツヒトさんしか勝たん……。」「とか言つてバタバタ倒れる子もいたりして。

……………俺はいつかこの方々に殺される気がする。

(この村に来て二度目の確信。)

俺の方は、セツヒトさんを下してからもう質問攻めの嵐。

何をやったんだ、どんな心境だった、あのひそひそ話は何を言っていたんだ、等の問いかけに何とか応えた。

ハイビスさんが止めてくれなかったら、恐らく未明まで帰してくれなかったと思う。

「……ソウジさん、とりあえず宿に戻りましょうか。」

「そうですね。」

宴もたけなわな所で、アワキ村長に一言断りを入れて、宿に戻ることになった。

「いやあ素晴らしかったですぞ！お二人の勇姿！酒も料理もすすみましたなあ！！ハッハッハッハッ！」

ボヨヨンボヨヨン。

ヨツミワドウ……………。

村長さんのウエスト周りに、これからも健康が末永く続くことを祈りつつ。俺はセツヒトさんを担いで宿に戻ることにした。

「……………。」

実に恨めしそうに俺を見つめる女性達は、おそらくは俺のことを「○ね!」とか思っていることだろう。

スルースルー。

さわらぬ神に祟りなし。

「……………寒っ!!」

「わぁ……………気をつけて帰りましょうね。」

当たり前だが外は寒い。

酒が入っているとは言え、真冬も近い。

ハイビスさんも酒が入っているからか、結構ハイテンション。

先程のセツヒトさんとの模擬戦を話題にしながら帰った。

背中のセツヒトさんは、可愛らしく寝息を立てている。

「すー……………すー……………んー、ソウジ……………そっちはちがうよお……………」

「……………なんの夢見てるんでしようね……………」

「俺が何かを間違えた夢でしようね……。」

気になる夢の中身を知るとは終ぞ無く。

宿に帰った俺達は、寝支度も早々に、就寝と相なった。

ちなみにセツヒトさんの部屋で、ハイビスさんが一緒に寝てくれた。

「何かあったらいけませんから……ソウジさんはしっかり休んでくださいね！」

「は、はい。よろしくおねがいます。」

「では……お休みなさい。」

「はい、お休みです。」

「……………あ、あの、ソウジさん。」

「はい?。」

「先程は……………かつこよかったですよ? 凄く。」

先程。

あの模擬戦のことか。

「いやいや、あれは完全にギフトの力ですよ。俺の実力じゃ——」

「いえ、そこじゃなくて……その前です。」

「前？」

「………無様かもしれないですけど、って言ってたじゃないですか。あそこ………か、かつこよかったですよ？」

「………そ、そうですか？」

………かつこいいのか？

よく分からんが。

「じゃ、じゃあ今度こそ、おやすみなさいませ。」

「あ、はい。お休みなさい。」

バタン。

………どこかカッコいいところがあったのだろうか。

まあ本人がカッコいいと言うなら、まあありがたくお言葉を頂いておこう。

兎にも角にも、今日は疲れた。

アルコールはそんなに摂取していないが、体はいつも以上に疲弊している。
俺は、リビングのソファァーに体を預け、一瞬で眠りに誘われた。
おやすみなさーい。

* * * * *

翌朝。

ランニングは今日はお休み。

『もうっ！服は着てから起きてください!!セツヒトさん!』

『うーん……服を斬るー……。』

『バスン!』

『斬つてどうするんですか!!着るんです!着る!ソウジさんに嫌われますよ!!』

『えー、それは困るよー……。』

『じゃあ……その裸はおしまいにして、はい服です!どうぞ!』

……………何やら女性陣が部屋の中でワーワー言っている。

主な原因は、セツヒトさんの脱ぎグセにあるのだが……………。

こんな朝も聞き慣れてきた。

セツヒトさんは朝に弱いのだ。このやり取りは珍しくはない。

……………。

二人が起きて、3人で朝食をとる。

今日はやっぱり休みにします、と二人に伝えると、「え?働くつもりだったの?」という顔をされた。

ニホンジン、ハタラキスギー。

前世でいつぞやの外資系の金髪イケメンに言われたセリフを思い出した。

「休むと言っても、アイテムの補充とか装備の手入れとか色々やるつもりですけど……あ、そうだ。セツヒトさん、一緒に武器、見に行きませんか？」

「武器……？……あー、ソウジ、そう言えばそのままだったねー。いいかもー。」

「ですよ。そろそろ強化しといて、ジンオウガに備えないと……。」

「そーいえばー、属性武器……これ教えて無かったねー。」

「属性？」

急に魔法的なことを言うセツヒトさん。

食後の珈琲を口にすると、話し始めた。

「あー……こーひーうまー……属性って言ってねー、モンスターによつてはー、苦手な属性があるんだよー。」

「苦手な属性……剣よりもハンマーとか、ボウガンとかのがいいとか？」

「まーそれもあるんだけど……例えば昨日のゴシャハギ、火属性が苦手なんだー。」

「……………え？」

ん？

なんか聞き捨てならない言葉を聞いたぞ。

「なんですかそれ、聞いてないです。」

「言つてないしー。」

「……………ちなみにどれくらい違うもんですか?」

「んー……………体感1・2倍増し位かな…………。」

「めっちゃすごいやんそれ。」

思わずショウコみたいなことを言ってしまった。

え?なんでそんな有利なこと教えてくれなかったの?

「属性武器はねー、基本の動きを身につけてから手にしてもらわないと……………何ていうか、ちやんとしなくなるー?」

「……………えーつと、つまり、基本が出来てないうちから手を出すと、良くないということでしょうか。」

「そーそー。ヒドイやつなんか、モンスターが苦手な属性弾をライトボウガンでバババーツてやつちやつて、それで『勝った』みたいなの…………。」

「ああ……。」

なるほど。

「そういう手合いを知らないわけではない。

パーティー4人、全員遠距離武器を用いて遠くから「ハメ殺し」なるものを行うというのを、聞いたことがある。」

「そういう人たちは……本当に強いヤツが現れたら、あつけなくやられちゃう。必要なのは、生きる力……生き残る力、だからね。」

「……………」

「ソウジのいろんな動きを見ているとわかるよー。ムカつくけど、マシヨルクが徹底してたんだねー。『死なない』ことを教えていたつてのが、ビシバシ伝わるよー。」

「……教官には、そこは本当に、口を酸っぱくして教えられました……。」

まあなるほど。

確かにその属性武器とやらを使って「俺強いわ！」って増長でもしてみたとして。

……調子乗って死ぬかもなあ。俺アホだし。

俺がそれを使ってこれなかったことの原因は分かった。

「じゃあ……いつ頃ハンターって属性武器使っていていいんですかね。」

「まあ人にも武器にもよるけどー、上位いける実力があるならいいと思うよー？だからソウジもー、おっけー。」

「ど、どうも。」

どうやら俺は合格らしい。良かった。

「私はギルドに行きますが……セツヒトさん、ちよ、ちよつと……。」

「んー？なにー？」

ハイビスさんが出かける前、セツヒトさんと呼んで、なにやらひそひそ話している。何だろうか。

「……あははー。そんなことないってー。」

「でもでも！一応あちらから誘われた訳ですから！」

「まー……………そういう感じでは……………」

二人してこっちを見る。

白いモコモコのコートを着ているハイビスさんと、完全部屋着のセツヒトさん。

……………な、何だ。

「……………そういう感じじゃ、無いっしょー？」

「そうですね……………ソウジさんですから……………」

「そーそー。ソウジだからさー。」

……………よく分からんが、何やら失礼なことを言われている気がする。

「それでは、言つて参ります！」

「はーい、気をつけてねー。」

「……………お気をつけて。」

バタン。

『さむう!!』

……………何だったんだ。

「……………何話してたんですか？」

「ん？女の子同士のひみつー。ふふー……………気になるー？」

「……………やめときます……………」

「おー？賢明だねー。」

触らぬ神に祟りなし。

やめておこう……………。

「じゃー私は着替えてくるけど……………覗かないでねー。」

「はいはい。」

ここの辺はいつものやり取りなんだが。

……なんだろう、この宿で二人きりというのも初めてである。

……。

………考えないようにしよう、よし。

* * * * *

「あんまりいいの、無かったねー。」

「うーん………そうですねー。」

二人で雪の中訪れた武具屋は、一応の品揃えはあったものの、双剣は少なかった。属性武器もあるにはあったが、数が少ない。

雪山のモンスターに強いという火属性の武器となると、これまた数が少なくなり……。

「まーまー、ソウジ。私が打ったその武器もー、中々いいやつだしさー。」

「そうですよね……ちなみに、この武器を強化するのって……。」
「んー、できなくはないねー。」

この村には一応の鍛冶場がある。

セツヒトさんも興味があつたのか、道中そこを覗いだ

たが、なかなか本格的な造り……のように見えた。

流石、武器加工の村。

「……ただねー、そのソウジが使ってるハリケーン……その強化派生はサイクロンって
言うんだけどさー。」

「サイクロン……。」

ハリケーンの次はサイクロンか。

世代的に、レッツでゴーな兄弟を想起させてくれる名前だ。

懐かしい……。

「素材が厳しいかなー……。火山の鉱石を取りに行かなきゃならないしー、すぐには難

しいかもよー?」

「そうですか……。」

「いい鍛冶場があつたしー、貸してもらえたら私やってもいいんだけどねー。」

少し詳しく聞くと、その必要な鉱石とは「獄炎石」というもの。

5つほどあれば足りるが、何とその鉱石、火山のさらに中の溶岩に近い場所しか採掘できない代物だという。

ポーチを一応確認してみたが、無い。

詰んだ。

「はああ……。」

「まーまー、落ち込まないでよー。ハリケーンを強化しても、属性がつくわけでもないしさー。」

「そうですね……最終目標のジンオウガに届く武器ができたらなあ、って期待してたんです。」

「そーだ……ねー……あれ?」

セツヒトさんが突如止まった。
考え込むポーズ。

今日のセツヒトさんのファッションは、面倒くさいからとジーパンにモッコモコの茶色のコート。

めっちゃ似合っているのだが、フードをかぶり考え込む姿は少し怪しい。
何だ？

「どうしました？セツヒトさん。」

「……………ソウジィ。問題。」

「……………は？」

何だ急に。

「ジンオウガの弱点属性って、何でしょーか？」

「へ？そりゃ……………雪山に居るってんなら……………火属性なんじゃないですか？」

「んー、半分正解ー。」

半分？

どゆこと？

「……………ごめんねーソウジー、私抜けてるわー……………うーん、武具屋失格ー。」

「……………どういふことですか？」

よく分からんので、その真意を聞いてみる。

「……………ジンオウガはねー、苦手な属性がー、氷なのさー。」

「……………は？」

「だからー、氷ー。」

いやいやいや。

何を仰る。

「……………え!? 何でそんな氷に弱いやつが、こんな雪山に現れるんですか!?!」

「それはこつちが聞きたいよー……………でもねー、ギルドの資料的にも、私の経験的にも、ア

イツは氷属性に弱いよー？」
「……………マジっすか。」

俺はすぐさまポーチに触れる。

情報画面起動、〈モンスター情報〉を確認してみる。

【モンスター名】ジンオウガ

【種族】牙竜種

【別名】雷狼竜、無双の狩人

【詳細】

山岳地帯の奥地に生息する牙竜種の大型モンスター。

青緑の鱗、頭部や背面、腕部などに立ち並ぶ黄色の甲殻、そして腹部や首回りなどを中心に生え揃った白色の体毛が特徴。

甲殻は「蓄電殻」、体毛は「帯電毛」と呼ばれ、戦闘の際にはこれらを利用して発生させた電気エネルギーを全身に纏う。

険しい山間部での移動を可能とするため、強靱に発達した四肢を持つ。特に前脚は著しく強靱な筋肉を備え、尋常ではない膂力を持っている。爪も極めて鋭利な形状をして

おり……………

長いよ！

部位の弱点とかは、背中や脚、頭部と書かれてはいるが、属性の弱点は書いてないし！

どういうこと!?

「……………セツヒトさん、一応俺のギフトのモンスターの記述みたいなどころを見たんですが……………書いてないです。」

「えー？マジでー？」

「マジです。……………あ、あります！ありました！」

「おー、何てー？」

傍から見たら、目線を地面に落としながら何やらブツブツ言っている男と、それに應對する女性。

完全に変な奴らである。

気にせず画面を見ると……………。

『……………弱点の属性は氷、続いて火や水に弱い。属性耐久力は高く、物理攻撃力の高い武器でも有効。』

有効。

物理でもいい。

……………うーん。

「せつ……………せつちゃんさん。属性は氷で正解みたいです。」

「おー。やっぱりねー。」

「でも、攻撃力の高い武器でもいいとあります。」

「あ、ホントー? ……んー、でも作って見たらー?」

「そうですか?」

「うん。双剣ってさー、手数の武器だしー? 属性の力がそれだけかかる武器なのさー。

馬鹿にできないよー?マジで。」

「な、なるほど。」

それは何か納得。

多分全近接武器の中で、一番手数が多いのって双剣だし。

一発のどでかいダメージっていうより、小さいダメージを蓄積させていく感じだもんな。

よし、方向性は決まった。

火属性武器はとりあえず置いといて、まずは氷属性だ。

ジンオウガを倒すために。

「じゃあセツヒトさん、もう一度武具屋に——」

「ソウジー、ちよつとまってー。」

腕を引っ張られ、引き戻される俺。

な、何だ!?

「ど、どうしたんですか? セツヒトさん。」

「まーまー焦らないでよー? ……ソウジー、ここで大先輩せつちゃんさんからの耳寄り情報でーす。」

「……………何でしょう。」

ふざけている感じではない。

むしろなんかニヤニヤして、今にも俺を弄り倒しそうないたずら顔である。

「……………氷属性の、私がおすすめる双剣は2つあるんだけどさー……………必要な素材は何でしょう？」

「……………素材か……………！それを忘れていた。」

武器の加工にはモンスターの素材を使うことが多い。

モンスターの帯びる性質や特別な素材の特性を生かして、武器加工の職人たちの手により作られる。

セツヒトさんはそのエキスパートである。

「氷武器の素材なんですから……………まさか……………!？」

「おー？気づいたー？」

「またもニヤニヤしているセツヒトさん。

「だが、まさか、まさか。

「もしかして。」

「……………ゴシヤハギさんの素材が使えるってことですか!？」

「ピンポーン。だいせいかい。」

「マジですか!？」

「ついでに言うところ、そのおすすめのうちの一つは、ベリオロスの素材も必要です。」

「……………狩ってますよ!?!俺!!」

「そーなのー。」

「何そのちようどいい感じ!？」

「ピタゴラ○イツチみたいに気持ちいい感じ!」

「いやー、ごめんねー? 私も盲点だったよー。雪山にいるせいか、ジンオウガにも弱点は火属性だーって固定観念に囚われていたけど……………思い出せてよかったー。」

「じゃ、じゃあ、氷属性武器に必要な素材は、もしかしたら…………。」

「もうあるかも、知れないねー。」

「これは嬉しい。」

「……………ソウジ、よかつたらさー、私に打たせてよ、その武器ー。」

「……………ええ!？」

「この職人さん見てたら、加工したい欲求が滾って滾ってさー。めっちゃすごいんだよー?あのおじさん達ー。」

「おお、流石武器加工の盛んなミヨシですね。……………いいんですか?」

セツヒトさんが武器を打ってくれるなら、こんなに嬉しいことはない。

頑固そうな鍛冶屋の職人さんが、自分の仕事を簡単に貸すとは思えないが。

「まー頼んでみてー、無理ならもうその人に丸投げしちやおうよー。ソウジはとりあえずー、必要な素材があるか確認してみてー。」

「は、はい。」

「ちなみにこれから言うのはー、『ベルゲルブリザード』っていう双剣に必要なやつねー

？」

俺はセツヒトさんの言う素材をメモすることに。

急いでアイテム画面と照合しよう！

「オサイズチの刃尾でしょー？ベリオロスの毛皮と上毛皮あればあるだけー、甲殻に堅殻、棘と牙と鋭牙もいっぱいでしょー？あとは鋭爪が少しにー、ゴシヤハギの剛毛でしよー？あと竜玉ー。多分これがあればいけるよー。」

「ちよちよちよ、ちよつとお待ち下さい。」

口頭で伝えられるよくわからん素材名に四苦八苦しながら。

おれは銀行員さながらの照合作業を行う。

素材が揃えば、武器を作れる。

あのジンオウガに届き得る武器が。

俺はそのまま雪の中、一生懸命に素材を探し続けるのであった。

95ある受付嬢の話⑤

「はぁー、寒っ……。」

こんにちは、ハイビスです。

私は今、山奥のそのまた山奥、ミヨシ村という所に来ています。

もう辺りは雪です！雪！

これでもか、っていうくらい雪！

私は雪は嫌いではありません、むしろ一面の銀世界なんて憧れてました。

こう雪の中を、厚手のコートを着て歩くって……何だかとても、ロマンチックですよ
ねえ。

ソウジさんみたいにはしやぎはしませんけど……。

だってあの方、雪を見たら子どもみたいにはしやぐんですよ？

タオカカで子どもと本気の雪合戦をしている時なんて、多分私の知る中で一番の笑顔

でした。

かわいい一面もあるんですね……………。

……………いやいやいや。違います。

私はソウジさんの専属受付嬢としてここにやってきたんです。

部屋着で雪合戦なんて、そりやもう全力で止めましたよ。

だって鼻水ズルズルでくしゃみをして、完全に風邪ひいているんですから!!

止めたときに「えー、まだやりたいのにー。」みたいな顔しないで欲しいです！
体調管理も立派な仕事なんですから！

……………というわけで、なんの因果か、こんな辺鄙なところまで来てしまいました。
ソウジさんを追って。

……………順を追って、お話しますね。

* * * * *

話は少し前に遡ります。

ソウジさんは、ハンターとして本格的に仕事を始めました。

そのペースは、もう異常でした。

いくらオトモのショウウコちゃんがいるとはいえ、とんでもないハイペースでクエストを完了していくんです。

あんまり多くのクエストに、私も毎日毎日仕事仕事。

キツかったです……正直。

そこで、上司が気を利かせて、後輩のヒナタを私の補佐につけてくれました。

ヒナタは新人とは思えないぐらいに仕事をこなしてくれます。

おかげで週休2日も復活です！

……そんなことより心配なのはソウジさんです。

例のギフト？とやらの力を、うっかりこぼしてしまうんじゃないかって、気が気じゃありませんでした。

それにヒナタは、とても可愛いんです。

ハンターさんから指名で受付に入ることなんてザラですし。

………ソウジさん、ヒナタに惹かれていないかなあ………そうだったら………何だか

なあ………。

そんなモヤモヤが続いていたある日。

ある事件が起こりました。

ヒナタが、銭湯でぶっ倒れたというんです！

しかもそばにいたのはソウジさん！

……………え!?!二人の関係ってそこまで進んだの!?

完全に予想外でした。

だ、だって、二人でサウナにのぼせるまで一緒にいるなんて…………。

……………ハレンチです！ハレンチ！

銭湯の入口で、それはもう大説教をかましてやりましたよ！

うちの可愛いヒナタになんてことするんですか！つて！

しかも、しかもですよ!?

とぼけやがるんですソウジさん！

「え？俺なんか悪いことしました？」みたいな!!

もう許しません！

私を差し置いて、後輩のヒナタと、楽しく二人で、その、サウナに行っているなんて

!

……………あれ？何か怒るとこずれてきましたね…………。

と、とにかく！ハレンチなことをしたのに変わりはないんですから！
反省してもらおうことにしました。

……………。

大失敗でした…………。

あとから聞いた話では、どうやらサウナに誘ったのはヒナタの方だったらしく。

「ええ!?そんなアグレッシブな肉食系女子!?」なんて思ったのも束の間。

二人共、サウナに入ること自体全く意識していなかったことが発覚。

……………これじゃ私がただの耳年増みたいじゃないですか…………。

うう…………。

次の日、ギルドにやってきたソウジさんとシヨウコちゃん。

ギルドの柱の影で私がモジモジしていたら、ソウジさんにすぐに見つけられました。

ソウジさん、私の完璧な隠れ方を見抜くとは……確実にハンターとしてレベルアップしていますね。

あんまり申し訳なかったのもあり、上位のクエストを特別に受諾。

ソウジさんは上位ハンター候補でしたし、相手はロアルドロス。

未確認とはいえ、ソウジさんが遅れをとるとは思えません。

「このクエスト、HR4以上に相当しますが……ソウジさんはHR3での狩猟歴も十分。上位ハンター昇格試験の一貫として、受けてみるのはいかがでしょう。」

「そんなこと、可能なのですか？」

「今回は、そこまでこのロアルドロスに脅威を感じませんし、狩場も下位ハンターが入れる沼地です。個体数が多いことは気になります……。ソウジさんのアレを使えば、敵の数は把握できるのでは？それに……昨日ヒナタがご迷惑おかけしたお詫びじゃないですけど、宜しければお礼させてください。」

「そんな、迷惑かけたのは俺です。」

「……ヒナタは、同郷のかわいい後輩なんです。仲間が欲しくて、寂しくしていたのかも。しれないのに、気づいてあげられなくて……。よろしければ、またあの子とお話してあげてください。」

ヒナタはかなりモテる子なのに、自分に自信がないのか中々友達ができないみたいですし……。

私も忙しくて、ヒナタの話を聞いてあげられませんでした。

せめてもの罪滅ぼしじゃないですけど、このクエストを受けられるようにしてあげましょう。

「……………はい。任せてください。」

「……………ありがとうございます。で、でも！サウナ室で二人とかはダメですよ！その、は、ハレンチですから！」

「わ、分かりました！そこは気をつけます！」

一応釘は刺して起きますけどね！

ハレンチダメ！絶対！

……………何か、若い子の逢瀬を邪魔する年増みたいな感じになってしまいました……………。
悲しくなってきましたよ……………うう。

そんなこんなで出発していったソウジさん達。

……………こんな軽い気持ちでいたからですね。

とんでもない事件が起こってしまいました。

初めに知らせてくれたのは、ギルドの回収班でした。

「ソウジさんが!？」

「はいっ！クエスト完了の報告を確認後、狩猟地に移動、スタートキャンプの側で、そのオトモと名乗る者から聞きました！確証はありませんが……モンスターは、ぎ、斬竜
ディノバルド!!」

「……………!!」

息を呑みました。

斬竜ディノバルド。

間違いなく、超強力、二級指定の危険種。

トップハンターでも討伐には骨が折れる様なモンスターです。

「そ、ソウジさんの状態は!？」

「わかりません……とにかく、急いで報告に、と！」

「……………」

「は、ハイビスさん……。」

そばに居たヒナタが青い顔をしています。

分かります。

相手が相手。

正直ソウジさんの手にはあまりあるモンスター。

冷静に。

判断しましょう。

いま必要なことはなにか。

頭を……止めない!!

「ヒナタ！ギルドマスターに報告!!」

「は、はい！」

「急いで！……本部！至急救援ハンターを要請！緊急クエストを発動します!!」
「し、しかしだね、ハイビスくん！ディノバルドに敵うハンターなど、そこらには——」
「マシヨルクさん!!」

おそらくこの時間、他の訓練生をボロボロにして帰り終わったマシヨルクさんがいるはず！

「マシヨルクさん!!!」

「ああ!!ここにいるぞ!!」

「よかった!!至急、ギルドより要請します！緊急クエスト、ディノバルド一頭の討伐です！」

「あいわかった！5分時間をくれ!!」

「はい!!」

その後はもう目まぐるしく動きました。

観測班の信号からディノバルドの位置を割り出しました。

5分後にはマシヨルクさんもやって来ました。

何故かセツヒトさんも一緒に討伐に参加してくれると言います。完璧です。

そんなときでした。

バタン！

「はあっ……はあっ……!!」

「シヨウコちゃん！」

シヨウコちゃんが、帰ってきたんです。

もう、ボロボロになって。

「ハイビスさん……助けてください……！ウチ、ウチのせい……！ご主人さまが！ご主人さまが……！」

「シヨウコちゃん……。」

ギユツ。

落ち着かせるために、抱きしめました。
その時はもう、体が勝手に動きましたよ。

「落ち着いて……大丈夫。もう救援の用意はできています。きつと……きつと大丈夫だから。」

「うっ……うううう。」

涙を流すシヨウコちゃんをなだめます。

がんばったね。がんばったね、シヨウコちゃん。

その後色々りましたが、救援の二人はすぐに出発。

あとはもう、信じるしかありません。

「シヨウコちゃん……。後は、信じて待ちましょう？」

「……ハイビスさん、ごめんなさい。ウチ、取り乱してしもうて……。」

「いいのいいの。私だって、最初聞いたとき……ちよつとね……。」

「……………」

シヨウコちゃんを見ながら、私も涙腺が緩んでしまいました。
だ、だめです。

ソウジさんが、きつと帰ってくるんです。

それに、やることはまだいっぱいあります。

「……大丈夫。ソウジさん、強いからね。マシヨルクさんもセツヒトさんも、心配ないわ。……受付嬢たるもの、待つのも一つの仕事なんだから。」

「……はい。」

「……シヨウコちゃん、疲れがひどいでしょう？宿まで送るわ。」

「え、ええです……ウチも、ここで待ちます。」

この時ばかりは、私も何も言えず。

「無理はしないで。」と言って、仕事に戻りました。

ごめんね、シヨウコちゃん。

でも、任せて。

ギルドは、こういうときのためにあるんだから！

私は、ワサドラギルド、本部受付嬢、ハイビスなんです。くじけません。

* * * * *

シガイアギルドマスターに呼ばれ、状況の説明をします。

と言つても、どの情報も既に掴んでいたものばかりだったらしく。

クエスト受注の経緯を伝えると、「落ち度はない。君を攻めることなど、できないですよ。」と言われてしまいました。

私のせいです。

上位クエストを承認したのは、私。

「責任は私にあります。」

「どこにあると言うんです？ 言うなれば観測班がそれに当たるんでしょうが……大型は神出鬼没。分かっているでしょう？」

「……………」

「とにかく、今は吉報を待ちましょう。……ハイビスさん、よろしいですね？」

「……………」

「……………ハイビスさん。」

悔しいです。

あの時私が止めていれば、こんなことには。

そんな気持ちばかりが先行します。

「……………わかりました。」

ギルマスが立ち上がります。

「貸しイチ、ということでしょうか？確かに貴方にもわずかばかりの責任はある。

今後何かあった際、貴方にも少しばかり、責任を取ってもらう。」

「わかりました。」

「……………全く、強情ですねえ。」

少し笑ったギルマスは、いつもの貼り付けたような笑顔ではなく。

不思議と自然に見えました。

「……………業務に戻ります。

「はい。そうしてください……………無事を祈りましょう。」

「はい……………」

ギルドマスター室を後にし、私は本部に戻りました。
責めてほしかったです。

「お前は何をしているんだー」と、一喝してほしかった。

……………これは、私のわがままなんでしょうか。

ソウジさん……………。

* * * * *

結論から言うと、ソウジさんは無事でした。

無事……は少し違いますね。

大怪我をしていました。

数カ所の骨折、内臓の損傷……後遺症は免れないような怪我ばかりでした。

シヨウコちゃんを連れ、私は彼女を宿まで送りました。

宿「ホエール」。

ソウジさんが寝泊まりする宿です。

「……どうも、すみませんでした……。」

「シヨウコちゃん。こんなこと言うのも何だけど……元氣を出してね。私、あなたに……。」

「……すみません……もう、休みます。ありがとうございました。」

「シヨウコちゃん……。」

シヨウコちゃんは部屋に行ってしまいました。

……ようやくあの子の顔にも光が差してきたと思っていたのに……。

神様は、残酷です……。

「……………ハイビスさん。」

「ホエールさん。」

何もできない自分が悔しくて俯いていると、横から声をかけられました。
宿の主、ホエールさんです。

「事情は聞いたわい…………。直に孫も帰ってくるからの…………様子を見させる。あとはこちらに任せい。」

「あ、ありがとうございます。」

「…………お前さんは悪くない…………この言葉は逆に、残酷かの？」

「……………」

「気を悪くせんでくれ。あのギルドには、シヨウコ殿の笑顔も、お前さんの笑顔も必要じゃて…………元気を出して、じゃったかの？」

「……………はい。」

まるで何もかも分かっているかのように論してくださいました。

……………そうです、クヨクヨなんかしていられません。

ソウジさんは無事に帰ってきたんです。
私にできることは、いっぱいあります。
それはもう、山程。

「ありがとうございます……ホエールさん、あとをよろしくおねがいします。」

「ホツホツ、承知仕った。まあわしが何かせんでも、あやつがなんとかするじやろ。」

「……………」

「いや、こつちの話じや。それではの？」

「はい、お休みなさいませ。」

不思議な方です。

ですが、気持ちは少し晴れました。

後処理はいっぱいあるんです。

私も休んで……明日からまた頑張りましょう！

……ソウジさん、おかえりなさい。

* * * * *

次の日。

驚きました。

ええ、それはもう驚きました。

ギルドに出勤してしばらくしたら、何やらキョロキョロしながらオタオタする男性を
発見。

それが、ソウジさんだったんですから。

「ソ、ソウジさん!？」

「あ、ハイビスさん。おはようございます。」

ふ、普通に歩いていらっしやる!?

どんな魔法を使っただんでしようか……いや、そこはもういいです。

この方に驚かされるのは、なんと言いますか、慣れてしまいました……。

聞けばもう退院でいいと言われたということでした。

そんなわけ無いでしょ!?!というツツコミもできないほど、目の前のソウジさんは普通です。

腕に三角巾はつけてますけど。

……………考えるのはやめましょう。

おそらくは、無駄です。

その後は退院手続き。

ヒナタが持つていてあるわけもない書類を必死に探し、ずっこけるくんだりもありつつ、とりあえず退院は完了です。

気にかかっていることがありました。

……………シヨウコちゃんです。

とても落ち込んでいました。私では、どうにもできなかつた。ソウジさんをお願いをしました。

「……………ソウジさん。」

「はい?」

「シヨウコちゃんのこと、よろしく願います。あの子の傷はとても深い……………私達も

心配してゐるんです。」

「……はい。」

横にいるヒナタからも、声が上がりました。

多分、このギルドにいる皆、同じ気持ちなはずです。

あの子の笑顔に、一生懸命さに、心動かされた人は多い。
確信してます。

だって私も、その一人ですから。

「……………」

ソウジさんは黙って辺りを見回すと。

急に変なことを言い出しました。

「……ちよつと不躰なんです、一つお願いをしてもいいですか？」

「……はい？」

何をするかと思えばソウジさん、その辺に居たギルド関係者に、続々と質問をしていったんです。

それを手早くまとめていきます。

データをまとめる手早さとか、見ていてあっけにとられるほどでした。

前世は何のお仕事をされていたんでしょう……。

左手でかいたからか、絵や字が個性的でしたが。

「……ご協力ありがとうございました！これから、説得のプレゼンに行ってまいります
！」

バタン！

嵐のように去っていったソウジさん。

その意図が分かったのは、しばらくしてから。

シヨウコちゃんがギルドに駆け込んできて、みんなにお礼を言い始めたんです。

こちらは気恥ずかしいやら嬉しいやらです。

……元気になって良かったですね、シヨウコちゃん。

素直に嬉しいです。

しかし、シヨウコちゃん……ソウジさんに愛されていますね。

……ま、まさかソウジさんはそっちの専門の方なのでは……？

……うーん、否定ができないのが怖いです……。

と、とりあえず邪推はやめておきましょう。

今は、シヨウコちゃんの笑顔がギルドに戻ってきたことをお祝いしたいと思います。
本当に、良かったですね。シヨウコちゃん。

* * * * *

しばらくして。

ソウジさんが復調してきた頃。

ワサドラギルドも少しずつ様変わりしてきました。

冬を目の前に控えたこの時期、このワサドラの周辺モンスターは少なくなり、

ギルドにやってくるハンターさんたちも、格好が変わっていきます。

大型を狩る装備の方が少なくなり、軽装で採取・運搬に向かう方が増えていくんです。それに、ワサドラを出て違う町や村に向かう方々も少なくありません。

冬に向けて、少しずつ業務も変わっていきます。

と言つても、暇になるわけではありません。

一年間の狩猟成果のまとめ、資材倉庫・素材倉庫の照合点検、更にはギルド関係者の春以降の人事など……やることは山積みです。

私も、ハンターさんのクエスト完了報告書をまとめたり、来歴を更新したりと、普段時間がないときにはできないような仕事をこなしていきます。

……本当に、暇な時期がない仕事ですねえ……。

ちなみに、寿退社の先輩方が増えるのもこの時期。

素敵なイケメンハンターさんとともにお引越しをされる方々が、今年もいらつしやいました。

憧れますけど……今は私、この仕事に熱中しております。

こんな風に、受付嬢の仕事に前向きになれるなんて、思っても見ませんでした。

……あの方のせいですね。

あの方が現れて、頼りないから放っておけないなんて思つて、色々頑張っていたら、いつの間にか、こんなにやりがいを感じ始めて……。しようがないです！

こうなつたらもう行けるところまでがんばりますよ！
専属受付嬢として、がんばるのです！

気合を入れて、お茶を飲み干そうとした。
まさにその時でした。

「ハイビスさーん！」

「ブフォはい！」

予想外の人物から、大声で声をかけられました。
意外な人物。それは。

「あー、ごめんねー。急に呼び出しちゃってー。」

「い、いえいえいえ!! 気になさらないで下さい！」

「そー？いやー、実はちよつと、お願いがありましたー。」
「お、お願いですか？」

この村の武具屋の主。

そして、生ける伝説のハンターの一人。

「百手」孤高のソロハンター、セツヒトさんでした。

96ある受付嬢の話⑥

ギルドにやって来た意外な人物。

それは、セツヒトさんでした。

………実は私、この方がちよつと苦手です……。

以前、ソウジさんのハンター昇格試験クエストを見送りに行ったとき。

マシヨルクさんと、もう一触即発。

だ、だっついていきなり殴りかかったんですよ？

それ以来……少し怖いなあ、つと。

普段はのんびりされた優しい方なんですけどね。

まあその話はおいておいて……。

セツヒトさんが、要件を告げ始めました。

「実はねー、今日行こうと思っていた小型のクエストが軒並みなくてねー。」

「は、はい。そうですね。時期が時期ですし……。お二人が頑張ってくれたおかげで、今

年は食害が本当に少ないです。」

「そういうことかー。しょうがないかなー。」

最近、ソウジさんはセツヒトさんとともにクエストに行きます。

特に小型の駆除を中心に、精力的に狩りに出かけていきます。

その話で、ギルドは持ちきりです。

付き合い始めたのか、なんていう下世話な想像をされるハンターさんもいらっしやいます。……多分それは違いますね。

お二人の仲はよくわかりませんが……何だか師弟関係のような感じがします。

クエストを受けては、ボロボロになって帰ってくるソウジさん。

小型のクエストでなぜあれだけボロボロになるんでしょう……？

そんなセツヒトさんのお願い……一体何でしょうか。

「そ、それでは、お願いというのは。」

「うん、ソウジと一緒にー、上位の大型、狩らせてくれないー？」

「……じよ、上位の大型、ですか？」

「そー。できるならー、3級危険種辺りを。」

「こ、この時期でその強さとなると……セツヒトさん。この周辺には……。」

「んーつとねー、そこも込みでー、お願いしたいんだよー。……だめー?」

「……しよ、少々お待ち下さいね……。」

待つて下さい……。

つまりセツヒトさんが言うのは……。「ワサドラ周辺ではない、どこか遠方のクエストは無いか。」ということ……ですよね?」

うーん。

……ソウジさんもセツヒトさんも絡んでますし。

これ、完全に私の手には収まらない話ですよ……。

しょうがないです。

ここはギルドマスターに報告、相談しましょう。

下手に遠くの地のクエストを許可なんてして事故を起こしてほしくありません。

前回のディノバルドだって、ほど近い狩猟場だったからこそ、救援が間に合ったんです。

「すみません、少し相談してきます。」

一言断りを入れて、私はギルマスの部屋に向かいました。

.....。

コンコン。

「はい、開いてますよ。」

「ギルドマスター、ハイビスです。」

「おや、どうしました？」

ガチャ。

「失礼いたします。ソウジさんに関することです。」

「ほう、聞きましょう。」

「最近、武具屋のセツヒトさんと一緒にクエストを受けている、というのはご存知ですか？」

「ああ、はい。それはもう。様々な方面から伺っておりますが。」

それはそうですよね。

この話でギルドは持ちきりですし。

お二人をお待たせしています。要件は手短にいきましょう。

「簡潔に申し上げますと……そのセツヒトさんが、3級以上の大型モンスターを狩猟したい、と。」

「この時期にですか？」

「はい。」

「……ソウジさんも共に？」

「はい。」

「……。」

考える様子のギルマス。

この方、とっても仕事のできる方です。

特に、どんな案件も即断即決。地頭の良さもさることながら、経験が違います。

結構考え込む様子は中々珍しいです。
と言つても、10秒ぐらいでその様子は終わりましたが。

「……分かりました。ハイビスさん。」

「は、はい。」

何がわかったと言うのでしょうか……。

私にはさっぱりなんですけど！

「お二人を、こちらに連れてきてくれませんか？直接私が話をしたいと言っていると、伝えてもらえると。」

「わ、分かりました。……よろしいのですか？」

「ええ、構いません。よく私にこの話をもつてきましたね、ハイビスさん。」

「い、いえ。責任の所在がよくわからなかったものですから。」

「その辺を見極めるのつてとても難しいですからねえ……。ハイビスさん、よかつたら

「この後の話も——」

「そ、それでは呼んでまいります!!」

ピュー！

バタン。

ふう。

危ない危ない！また巻き込まれるところでした！

ギルマスが直接ハンターと話すなど、厄介ごとぐらいしか無いと相場は決まっています！

あのタヌキさん、油断するとんでもない仕事を被せてきますからね！

戦略的撤退です！

……いけません、急ぎましょう。

お二人がお待ちです。

私は足早にギルド本部に戻りました。

* * * * *

お二人を案内した後は、足早に業務に戻ります。

私の危険を感知する本能が教えるんです。

「いやこの話は聞いてちゃだめですよー」って。

そんなこんなで昼食をとって。

いつもより少しのんびり目に仕事を進めているときでした。

「あ、ハイビスくん。ギルマスがお呼びだよ?」

「……………へ?」

今日二度目の呼び出し。

上司経由で、です。

もうイヤーな予感しませんが…………。

仕方ありません。私は単なる平の受付嬢。

あちらはギルドのトップ。

私は恐る恐る、ギルマスの部屋に向かうのでした。

.....。

「お伝えすることがありまして。すみませんね、ハイビスさん。」

「いえ……ど、どのような要件でしょうか？」

さつきの今ですから、十中八九、ソウジさんやセツヒトさんに関連することで間違いなさそうです。

心して聞くとしましょう。

「ええ、では簡潔に。まず、ソウジさん並びにセツヒトさん。三日後にこのワサドラを出ます。」

「……は、はい。そうですか。」

ここは予想済みです。

お二人……というよりセツヒトさんが狩猟を望むような大型は、この季節滅多に現れませんからね。

「はい。以上です。」

「……………え!？」

「ん?ですから、以上です。」

「……………?」

お、終わりですか?

なんか拍子抜けというか、もつとんでもないことを言われると覚悟していましたの
に。

「何か、気にかかることでも?」

「い、いえ! 承知しました!」

「はい、ですので当分は、ソウジさん関連の業務はなくなるかと思えます。私への定期報
告も、しばらくは大丈夫ですので。」

「……………了解いたしました。」

や、やけに話がスムーズに進みます。

……嫌な予感がしますよ……。

「そ、それでは私は戻っても……？」

「はい。よろしくおねがいます。」

ほ、本当に終わりなんでしょうか!?
帰りますよ!?!私、戻りますからね!?

クルツ。

「あー、そういえば。」

「!!」

……実にわざとらしい声が、ギルマスから上がりました。

やはり何かあるんですね……!

ギルマスが、演技がかかった口調で話し始めます。

「いやー。もう一つ忘れていました。実は、今から彼らが向かう村……ミヨシ村と言う

んですけどね？実はそこ、冬季に人手を募集しているらしく……。」

「……募集？ですか？」

「ええ。そこは冬季だけ、臨時のギルドが置かれるんです。いやー、そこからヘルプが欲しいと毎年要請が来るんですよ……失念していましたねえ。」

「臨時……。」

聞いたことはありません。

ワサドラや、ここに匹敵するような規模の町や村には、ギルドが置かれています。

ですが、僻地の村や集落にはそんな立派な施設などはないです。

でも季節ごとに出てくるモンスターが違う……特に雪山などは、強力なモンスターがわんさか湧いてきます。

そういったところに、臨時のギルドが置かれることがある、と。

大変な業務、仕事の内容もワサドラギルドのようにオートメーション化されているわけもなく。

多忙を極めると、聞いたことがあります。

おそらくは、私をそこに派遣したいのでは……？

「いやー、どうしましょうか……若くて体力のある、それでいて有能な若手……。」

でもでも……これってチャンスではないですか？

その……ソウジさんの周りって、素敵な女性が多いですし、多少なりとも寿退社リタイアを夢見てきた身としては、結構あります。

結構どころか、割とまあ……ええ。

……自分で言うのも恥ずかしいですけど。

これを機にお近づきになれたら、こう、いい感じに二人は……。

そ、それに！

セツヒトさんとふたりきりなんて、いくらあのにぶちんのソウジさんでも！

間違いが無いとは言いませんし！

チャンスですし、ピンチを回避もできます！

これチャンスですよ！！

「困りましたねえ……。」

チラチラとこちらを見てくるギルマス。

……完全に誘ってますね。

乗りますよ！その提案！

私、専属受付嬢である、このハイビスが！

「あ、あのー？……も、もしお困りでしたら……専属の受付嬢なんて、いかがで——」

「え？……あーあー！それ、いいですね！確かに、有能で若手、しかもソウジさんのクエ
スト処理もこなしている！」

「で、ですよね！それでしたら早速——」

「ヒナタさんがいましたね！」

………へ？

「失念していましたねえ。彼女は有能ですし……いつだか、ソウジさんとは銭湯も共に
する仲だと。趣味も似ていると聞き及んでいます。」

「あ、あのー！」

「これからのギルドを支える若い担い手として、成長も見込める……いやあ、素晴らしい。」

「いやいやいや！ちよつとお待ち下さい！」

「え？」

ひ、ヒナタ！

ヒナタが居ました！

まずいですよ！ヒナタはただでさえソウジさんに心惹かれているようですし！何より可愛いんです！

セツヒトさんとは違うタイプで、これまたまずいですよ！

「え、えとですね……ひ、ヒナタはまだまだ新人です！雪山の臨時ギルドなんて、忙殺されないか心配です！」

「なるほど……確かにそうですね。」

「そ、それに！ギフト！ソウジさんのあの力をまだ知らないんです……そ、そしたら……それを知っている人の方が、こう、適任ではないかと！」

「ほう！ですが……そんなにピッタリの人選がありますか？」

「わ、私なんていかががでしょうか？」

ちよ、ちよつと苦しいですかね？

でも！押し切らないと！

私の素敵な彼氏さん計画が！

「ハイビスさん……ですか！なるほど！それはいいですねえ。」

「で、ですよね！ですよね！」

「ええ……ですが、大丈夫ですか？」

「へ？」

大丈夫、とは……どういうことでしょうか？

「いえ、ハイビスさん。お言葉は大変嬉しいのですが、出発は三日後の明朝。今任されているお仕事は、大丈夫ですか？」

「え、えーつと……お、終わらせませます！死ぬ気で！」

「各種報告書作成、ハンターの来歴の更新と整理、それから来季に向けてのギルド受付周

りの環境刷新……それらを？」

「うっ……はい！」

「終わらせる？」

「はい！も、もちろんです！」

できるわけ……あります！

やってやりますよ！

「いやあ！そうですかそうですか！……本当にそこが心配だったんですね……。〔ほそつ〕」

「え？」

「いや、こちらの話です。……そこまでしていただけるのでしたらぜひ、ハイビスさんにミヨシ村派遣をお願いしたいです。」

「ほ、本当ですか？……ああ、良かったあ。」

「ええ、途中のタオカカ村への書簡やミヨシ臨時ギルドの業務全般のスリム化、可視化、効率化もお願いしようと思っていきましたので……助かりますよ！」

「……………ん？」

今、何かドカンと仕事が増えたような……。

「あ……でも一つだけ懸念が……。」

「え!?!」

何何何!?!

まだクリアできていないことがあるんですか!?!

「実は先程、『私の方でも手を打つ』と、ソウジさんに伝えてしまったんですよ……。」

「そ、それはヒナタのことでしょうか!?!」

「……………」

「わ、分かりました!ソウジさんに確認を取ってまいります!」

「おや、本当ですか?」

「はい!」

「助かりますよ、それではソウジさんの許可が取れ次第、正式に長期出張をお願いしますので。」

「はいー」

ガチャ。

ボタン。

よしつ。

長期出張、ソウジさんとの遠出……ゲットです！

何か仕事がおかしいぐらいに増えた気がしますけど……。

と、とりあえず今はソウジさんを探しましょう！

ギルドに来てくれればいいんですが……。

* * * * *

結論から言うと、ソウジさんの許可。

取れました！

いえ、私が着いていくとは言っていないんですが……私が力をお貸しする形で、了承い

たできました！

よし……あとはギルマスに報告して……。

ワサドラで貯まった仕事を片付けて……。

あちらで新たに受ける仕事も確認しておいて……旅支度もしなきゃいけませんね
……。

……。

あれ？

何か私、めちやくちや忙しくなってますか？

………何か、うまいこと嵌められているような……。

コンコン。

とりあえずギルマスに報告です。

「はい、どうぞ。」

「失礼します。」

ガチャ。

「ギルドマスター、お待たせしました。」

「おお、ハイビスさん。お早いですね。」

「はい。」

「それで？ソウジさんの方はいかがでしたか？」

「はい、ギルド側から、ソウジさん事情を知る職員が派遣されるという形で、了承いただきました。ききました。」

「おお、それは良かったです。それでは……………」

そう言うと、ギルマス、後ろに置いてあったファイルをドサツと私に渡してきました。す、すごい量ですね……………。

「こちらをお願いします。」

「こ、これは？」

「全て、ミヨシで行ってほしい業務になっています。すみませんねえ、こんなことまでお願いすることになってしまつて。」

「は、はあ。」

とりあえずファイルを机に置きます。

……………しかし……………だんだん私……………分かつてきましたよ……………？

ギルマス……………私を嵌めましたね……………？

「ギルドマスター？」

「はい、何でしょう？」

「……………もしかしたら、初めから私を派遣するご予定だったのでは……………？」

「ん？何のことです？」

「で、ですから、私を派遣するのは決まつていて……………ですが、私が居ないと滞る仕事も多数あります。」

「そうですねえ。ですから、残りの期間でやっていただけると言つてもらえて、良かったですよ。」

「……………はめましたね？」

「ですから、何のことですか？」

ニヤニヤと笑うギルマス。

……………タヌキオヤジ……………。

「……………。」

「……………ははは、まああまり睨みつけなくてください。根拠はありません。」

「根拠？」

「まず、あなたがいなくなるこのワサドラギルドの損失、これは大きい。逆に言えば、ミヨシの臨時ギルドの補充、これに最適な人材はハイビスさん、あなたしかいません。」

「……………。」

一応、黙って聞いてみます。

「そこで、業務はなるべく終わらせていただいて、そのファイルにある仕事、それをあちらでもやっていたら……不可能ではないでしょうか？ハイビスさんなら。」

「そ、それはそうですが。」

そうなんですよね……フル稼働で頑張れば、終わらない量ではないです。
……残業は確定ですが！

「それに……あなたにとつても、有益なのではないですか？」

「……………」

「セツヒトは、ああ見えて奥手ですが……今回はソウジさんに、本気です。」

「！」

「……………私としては、どちらも応援したいんですよえ……？」

「ぐ……………ぐぐ……………」

「いかがです。」

だめです。

この人、初めから分かっていたんですね……………！

私がソウジさんという餌にまんまと釣られることを！

そして私から望んだという言葉質も取って、ギルドの損失を最小限に！

しかも期待されているという本音までオマケでつけて！

……………断る理由は、ありません。

ただど……………納得できないというか！

まんまとしてやられた感じがどうにも腹が立ちます！

「……………わ、分かりました。」

「……………本当に、すみません。良い人材に限って、早々に寿退社していく受付嬢という仕事柄……………あなたのような有能な方は、貴重なんです。」

「……………あ、ありがとうございます……………」

「無理を通した手前……………以前の貸しは、今回でチャラにしましょう。どうです？」

「……………はい。」

貸しの話までされたら、もうチェックメイトですね……………。

この方に敵う気が致しません……………。

「よかったです……………それでは、業務の方、どうぞよろしくおねがいます。……………ああ、それともう一つ。」

「はい？」

「これを、セツヒトに渡してください。」

渡されたのは、封筒。

簡単な封をされています。

「出発の際に、渡してください。ハイビスさんがついていく経緯など、簡単にまとめておきますので。」

「わ、わかりました。」

忘れないようにしないといけませんね。

……………まあ、とにかく頑張って仕事終わらせましょう。

やってやりますよ！もう！

「そ、それでは！失礼いたします！」

「はい。よろしくおねがいます。」

スタスタスタスタ。

ボタン。

………もうこうなったら、ヤケです。

ワサドラに仕事を残さないように、精一杯やってやります！

任された仕事は確かに多いですけど、ギルマスの言うようにやってやれないことはないです。

残業確定ですけどね……。

やってやりますよ！

97ある受付嬢の話⑦

ガーグア車に揺られて、二日。

だんだんと、この振動にも慣れてきました。

ガーグア車に乗る時、護衛も見張りも雇わないと聞いて唾然としましたが、今では納得です。

モンスターが、全く寄ってこないんです。

少なくともこの二日間、影も形もありません。

セツヒトさんのおかげですね……。

ソウジさんとお話しているのを聞いた限りだと、殺気を放つとか何とか言っていました。

そんな芸当、人間に可能なのかと思いましたが……さすがG級ハンターさんは違いますね。

ソウジさんでさえ、驚いていました。

いや、あなたのそのギフトの力も大概ですけどね。

突っ込むのはやめておきましょう。不毛な気が致します。

この旅の間、私は一つの大きな出会いをしました。

この車を引いてくれている、ガーグアの2頭です。

もう……なんといいかですね……可愛いんです！

素直に従順に、一生懸命に頑張る姿。なのにごどこか抜けた顔。

可愛いんですよ……本当に癒されます。

旅の間、可愛がらせていただくことにしました。

名前は、ガーちゃんグーちゃん。

まんまですが、これぐらいストレートな方が言いやすいですし、愛着も湧きますよね。

一度御者の方に、この2頭の名前をソウジさんが聞いたら、こんなことをおっしゃってました。

「名前？そんなもん、つけねえよ。」

「え？そんなんですか？」

「おう、なんせ衰えたら食肉に毛皮に羽に、余すところなく有効活用つてな！まあこいつらはこれからが働き時、稼いでもらうぜえ！」

「……。」

……生きとし生けるもの、その命をいただいております。

御者の方も、ただ生きるため、この2頭を飼っているに過ぎないんです。

この世界の摂理、命の上に私たちは立っているんですよ。

……でもそれはそれ。

ガーちゃん、グーちゃん、一緒にいる間だけでも、精一杯可愛がらせてくださいね！

* * * * *

旅自体は、非常に快適でした。

ソウジさんに荷物を持っていただいていますし、そこから取り出されるご飯もホカホカ。

不思議な力ですよねえ……大変ありがたいです。

そして、何気が一番気にしていた、セツヒトさんとの生活。

初めは怖かったんですけど……一緒に過ごしていけば、そんな垣根も無くなつてしまいました。

セツヒトさん、ハンターさんをやられる時は、それはもう恐ろしいぐらいにお強いんですけど……。

私生活はとにかく抜けてらっしやいました。

特に寝起き。すごいんです。

……ぬ、脱ぐんです。

下着一丁です。

初めてテントでご一緒した日の夜。

その下着姿のまま抱きしめられて、それはもう驚きました。

力強く裸で抱きしめてくるんです……華奢でスタイルも素敵な大人の女性に抱きし

められて。

私、もう自分がよくわからなくなるぐらいには、ドキドキしてしまいました。

見張りの交代でソウジさんが来てくださらなかつたら、一体どうなっていたんでしょ

う……。

「んく……ねむーい……。」

「せ、セツヒトさん、もう朝ですよ……起きてください。」

「はあーい……。」

モゾモゾ。

シユル……シユツ……。

何でしょう。

目の前で着替える女性……はあ……スタイルいいですねえ……。

「……ハイビスちゃん？もしもーし？」

「……は、はいい!!」

「だいじょーぶ？もうちよつとねるー？」

「すみません！……だ、大丈夫です！」

「そーお？」

いけませんいけません！

魅入ってしまいました！

ていうかハイビスちゃんって！ちゃんって！

「じゃー出るからねー。」

ヒラヒラ。

手の平を振りながら、颯爽とテントから出ていくセツヒトさん。

……これは、女性のファンが多いのも領けますね……。

……よし、気を改めましょう。

しかし、これから数日、こんな感じが続くんでしょうか……。

……不安です……！

* * * * *

もうすぐタオカカ村、というところで。

事件が起きました。

ジンオウガに襲われたのです。

覚悟はしていたんですが、モンスターに急襲されるなんて初めての経験です。

恐怖で足が震えます、声も出ません。

冷静に頭が働きません。

ソウジさんとセツヒトさんは冷静です。

段取りをして、御者の方に指示を出しています。流石ハンターさんですね。

お二人で対応するから、先に行っておいてほしいと言われました。

……正直、私、何の力にもなれません。

お二人がその指示を出すよ。

「……わかった！二人を信じる！……嬢ちゃん！」

「は、はい!!」

「二人になったら、こいつらを励ましてやってくれ!!あんたが声をかけると、安心するみたいだ!」

「は……はい!わかりました!お任せください!」

「ああ、頼んだぞ!」

御者の方が、私に指示を下さいました。

ありがたいです、私にもできることがあります。

ソウジさんとセツヒトさんが車から降りて行きます。

武運を祈る他、ありません。

「くっ!!」

御者の方が苦しい声を上げました。

見ると、ガーちゃんもグーちゃんも、どこか慌てているように見えます。

「大丈夫ですよ！ガーちゃん！グーちゃん！後ろにいるのは、とんでもなく強いお二人です！安心してください！」

「ガー！」

「グアー！」

「そうです！上手ですよ！」

声掛けなんて、どうやったらいいかも分かりませんが……励ましてみました。

「お……すげえや嬢ちゃん……一気に落ち着いたぜ。……愛って伝わるもんだなあ……。」

「そ、そうですか？」

確かに……心無しか、表情も落ち着いたように見えます。

「さあ！急ぐぞ嬢ちゃん！タオカカに報告だ！」

「は、はい！ガーちゃん！グーちゃん！ファイトですよ！」

「グアー——！」

まるで返事でもするかのように、声を上げる2頭。

何ともたくましい姿です。

ソウジさんもセツヒトさんも、ガーちゃんグーちゃんも、御者の方も……頑張ってください！

私もできることを頑張ります！

* * * * *

「ソウジさん！セツヒトさん！」

「あー、ハイビスちゃん。おまたせー。」

「お、お怪我はありませんか!? ああ、ソウジさん！ やっぱり怪我しています!! す、すぐに医務室へー！」

「だ、大丈夫ですよ、ハイビスさん。そこまでの怪我ではないです……。」

「だ、だって！ ジンオウガですよ!! ジンオウガ!! 雷狼竜なんて言ったら私、扱ったことさえ無いような……ああ、そんなことはいいです！ 早くこちらへー！」

お二人は無事でした。

いや、ソウジさんは怪我をされましたけど……平気な顔をしていらつしやいます。ハンターさんってどうしてこう、御自分を顧みない方が多いんでしょうか。

無理矢理にでも腕を掴んで、医務室まで引つ張りました。

診察の結果は、大きな怪我などではないようでした。

安心です……。

………ところが、安心していたのも束の間。

次なる事件が。

いや、事件というより、私のミスが発覚しました。

私がタオカ力で急いで取った宿。

二部屋しか取れてなかったんです。

え？……私、3部屋でつて言いましたよね!?

部屋割りで揉めてしまいました。

揉めた……とは違います。

流れとしては……。

セツヒトさんがソウジさんと同じ部屋に泊まると、提案。

↓いやいやいや。

↓私とソウジさんが、同じ部屋で。

↓いやいやいや!

↓私とセツヒトさんが同じ部屋、ただし何もしないという保証は無い。

↓……いやいやいやいや!

ただでさえ野宿のときドキドキした思い出が消えないんです!

セツヒトさんがそちらの人だったら……もう大変です!

私はどうにかされてしまうのではと、そのときは思い込んでしまい……。

「んじゃーやつぱりー、私と一緒に寝るー？しよーがないねーハイビスちゃん……今夜はー……寝かさないよー？」

「わ……わた……私！一部屋いただきます!!」

一目散に部屋の一つに逃げ込んでしまいました。

私どうなっちゃうのって、逃げちゃいました……。

すぐ後にセツヒトさんが謝りに来ました。

からかわれてたんですね……私。

結局その日、私とセツヒトさんは、一緒に部屋で寝ることで落ち着きました。

「……ハイビスちゃん……起きてるー？」

「あ……はい。どうかされましたか？」

ベッドに入り、眠りにつこうかというところ。

隣のセツヒトさんが話しかけてきました。

「さつきはごめんねー……ハイビスちゃん、可愛いもんでー。」
「か、かわ……!」

「あーごめんごめん……変な意味じゃなくてさー。」
「す、すみません。」

色々あったから、可愛いなんて言われたら……私も警戒してしまいます。

「安心してよー。私、本当にノーマルだからさー。」

「は、はい。」

「うーん……ハイビスちゃんさー……。」

「はい?」

すっかり私はちゃん付けです。
仲良くなりましたね。

「……………ソウジのこと、好きー?」

「ブーーーーー!」

「わー。つば飛んだー。」

「す、すみません！」

いきなりなんてこと聞くんですか！

驚いて吹き出してしまいましたよ！

「せ、セツヒトさん？いきなり何を——」

「私は……本気だよー？」

「……………え？」

「……………だからー……本気ー。」

とつてもストレートに話すセツヒトさん。

心の中では、さつきよりも驚いています。

「なんにも知らないのにさー、一生懸命で、自分の力をガッツリ使えば絶対楽して生きられるのに……絶対強くなってやるって、気持ちさがさー。」

「……………。」

「……かつこいいんだよねー。そりやまだ、私にはかなわないけどさー？」

「………はい。」

「………おー？ハイビスちゃんも、認める感じー？」

ここまで言ってくれさったんですから……私もお伝えしましょうか。

私の本音を。

「………はい、認めます。あの方は……ソウジさんは、素敵な方です。最初はもう………本当に頼りなくて、よくわからなくて………気になるだけの方でしたけど。………まっすぐ前を向いて、自分の力をひけらかさずに、コツコツと頑張っていっしょにやります………そんな姿を見続けていたら………もういつの間にか、ですね。」

「………おー。言ったねー。」

「………ふふ、はい。言っちゃいました。」

言つてしまいました。

明言はしてませんが………恥ずかしいですし。

でも………何でしょう。

遠く、伝説の方だと思っていたセツヒトさんでしたけど。

一緒に生活してみたら、1つどころか2つも3つも4つ抜けているところがあつて。人間味もあつて。

何より同じ人を……つて。

「ふ、ふふふ。」

「んー……気恥ずかしいねー……。」

同じベッドの中で。

笑い合つてしまいました。

「……ホントー……あんなにぶちんのどこがいいんだらうねー……。」

「そうですね……私、結構頑張つてアピールしているつもりなんですけど……。」

「あー、無理無理ー。私もグイグイやってるけど、こんな顔するよー？」

「えっ……ぷっ、あはははは！その顔！その顔します！」

「『え？何か言いました？』」

「あ、似てます！その言い方！イラッとしますよね！」

「伝わってないんかい！みたいだねー。」

夜も更けていきます。

タオカカの夜はやたら冷え込みますが……私たちは暑いぐらいでした。超至近距離でのガールズトークは大盛り上がり。

とつても大きな共通の話題があつたから、でしょうね。とてもとても楽しくて。

セツヒトさんとは、いいお友達になれそうです。

「あーそうなんだー。じゃーハイビスちゃん、同い年ぐらいだねー。」

「……ええええええ!？」

一つ、意外な事実も判明しましたが……。

これからの冬山での生活が、楽しみになりました。

* * * * *

ミヨシでの生活は、多忙を極めます。

臨時ギルド。

先輩から聞いていた話は本当でした。

これ物凄い仕事です。

依頼されるクエストの量は、まあワサドラよりは少ないです。

問題は、業務と人手。

ギルドのクエスト依頼から完了までの流れに、無駄が多すぎるんです。

一つのクエストの処理にかかる時間が長すぎます。

ただでさえ人手が少ないのに、この辺を効率良く行わないと、ギルドそのものが潰れてしまいます。

これは他の街からいらしたヘルプの職員も感じていたらしく。

私はすぐさま、ギルドの長であり尊重も兼任されているアワキさんに進言しました。

そしたら、「ハイビスさんの好きになさってください！」と言われました。

……丸投げですね……。

いいです、なんとかしてやりましょう。

臨時ギルドとして使われているこの集会所。

急場しのぎで作られた場所ということで、作りは完全にただの事務所。

これはいけません。ギルドはあくまでハンターさんが働きやすくするためのお手伝いの機関なんです。

ソウジさん達が、一日一狩りのペースで頑張つてらっしゃいますし。

ギルドマスターから仰せつかった業務の一つでもありますし。

私、頑張ります！

* * * * *

一ヶ月ほど経ちました。

この臨時ギルドも、他の職員さんのお手伝いもあり、働きやすくなってきたと思います。

それぞれが専門とする仕事があつたのに、やってきた当初はそれが分けられていませんでした。

私も初めてやる仕事も多くてなんてこ舞い。

いい経験にはなりましたね。

とは言つても、その細分化と効率化は急務。

急いで村長さんに振り分けをお願いしました。

……結果は上々でした。

それぞれがそれぞれ、詳しく知る部門に振り分けられたことで、業務の処理速度が格段に上がりました。

村長さん、こういう差配がお得意なんですね。

流石、ギルドマスターの元で管理職をやっていただけはありません。

おかげで増え続けるハンターさんの受け入れもスムーズに進みました。
よかったです。

そして、ソウジさんと言うと……。

「『……以下……特例として、下位ハンター……ソウジを……上位に認定するものである……ミヨシ村村長……アワキ……確認済み』……つと。……よし。」

慎重に文を書きます。

内容は、セツヒトさんと村長の承諾の元、上位認定を仮に認める、というものです。
今更感はありませんが……。

そうなんです。

ソウジさんとセツヒトさんは今、とある大型モンスターの狩猟に向かっています。相手は、雪鬼獣ゴシヤハギ。

タオカカとつながる唯一の街道に居座って、流通も滞ってしようがないといいます。調べたところ、恐ろしく力の強い、名前負けしないモンスターであるとか。

間違いない、上位……それもトップクラスのモンスターです。

……ソウジさんは大丈夫なのかと心配にはなりましたが……まあセツヒトさんもいますし、大事に至るなんてことはないでしょう。

それほどまでに、ソウジさんはレベルアップされています。

雪山のモンスターなんて話にしか聞いたことないですが、そんな凶悪なモンスターたちを次々に屠ってきたんです。

ソウジさんが。

ほぼソロで。

本人は自覚がないですが……これって、ものすごいことですよ……。

だって、ちよつと前まで新人にも満たないような、ただの男性でしたのに。

………恐るべきは、あの吸収力ですね。

マシヨルクさん、そしてセツヒトさんと、次元の違うお二人に直接指導を受けられて

きたんです。

音も上げず。

コツコツと。

……かっこいいですよねえ……。

………いけませんいけません、私情は置いておきましょう……。

私とはとにかく、お帰りを待つのみです。

どうか、ご無事に。

* * * * *

夕方。

お二人は何事もなかったかのように帰ってきました。

雪鬼獣ゴシヤハギは、無事捕獲。

強烈なモンスターがわんさか増えるこの周辺でも、ここまでの大物はなかなか無いということで。

宴会が開かれることになりました。

「乾杯!!!」

参加者は、ソウジさん達はもちろん、村の関係者やハンターさんたち。

見たことのない村人までいました。

どうやら、ソウジさんやセツヒトさんを称える……というよりも、村の方々の日ごろの労をねぎらう意味合いが強いようです。

村長さんの狙いはそこみたいです。

それに、私見なんです。

ソウジさん達がクエストに向かった後、こっそり酒を用意する村長さんを。

村の一大事に悲観していたはずなのですが……もしかしてあれは演技だったのでしようか。

「いやー！セツヒトさんにソウジさん！今日は村の奢りですから！飲んでいただく
いよー！」

愉快そうに笑いながら、お酒を進めるアワキ村長。

………お腹もそうですけど……結構な大物さんですね……この方。

そしてそして、やはり驚かされたのはソウジさん。

セツヒトさんと二人で捕獲したと思っていたのですが……なんと驚き、全てソロでやりきったというのです。

この辺、お二人が嘘を付く性格でも無いことから、本当のようです。

観測班からの報告とも一致しますし……。

ソウジさん………ついにあなたも化け物クラスに足を踏み込んだんですね。

とにかくおめでたいことだらけです。

私も、明日の仕事に差し障りのない程度に飲むことにしました。

……お酒大好き！

………。

しばらく後。

私はやっぱりソウジさんが気になってしまっ

その行動を目で追ってしまいました。

「ハイビスさん……お仲間さん、女性に絡まれているのが気になるの？」
「えっ!?!いい、いや!すみません!」

私は、ギルドにヘルプでやってきた受付嬢の先輩と飲んでいたんですが、チラチラと見ている私に気づいたんでしよう、声をかけてきました。

「行つといでよ……あんない男、すーぐ肉食な子に取られちゃうよ?」
「……に、肉食……。」

思い当たるフシは……ありますねえ……。

主にセツヒトさんですが。

肉食かどうかはともかく、あの方が本気を出したら……ソウジさんなんてパクつと食べられてしまうでしょうね……。

そのセツヒトさんが、ソウジさんのところに行きました。

あれは……何をしているんでしょう。

何か棒のようなものを作つてらっしゃいますが……。

「行つてきなつて。こつち、気にしないからさ。」

「は、はい！ありがとうございます！」

気を遣つて頂いて、私はソウジさんのところに向かうことにしました。

……………。

人混みの中、ソウジさんのところにたどり着きました。

セツヒトさんは、何やらソウジさんと仲良くされていた女性ハンターさんと一騎打ちを始めていました。

そしてすぐ終わりました。

……やっぱりすごい人ですね……一瞬でしたよ。一瞬。

何が起こったのか、もうさっぱりでした。

ソウジさんがその女性を介抱したタイミングで、私も話しかけます。

トントン。

「ん……あつ。」

「探しました、ソウジさん。お隣よろしいですか？」

「え、ええどうぞ。」

「ソウジさん？飲んでます？」

「ああ、はい。まあボチボチ。」

「主賓なんですから、もつと飲まなきゃですね。これ、どうぞ。」

「あ、どうも。」

手に持ってきていたビールをお渡しします。

「いや、ありがとうございます。本格的に飲もうとしても中々話がこんでしまつて。」

「チラチラソウジさんを見ましたけど……熱心にハンターさんとお話されてたので。」

「あんまり飲んでないのかなー、と。……ソウジさんの周りには女性が多いですね。」

「……。」

「え？」

「い、いえいえ、こちらの話です。……こんなにすぐ次の方を……しかも可愛いし……気をつけないと……!!」

「？」

本当に……すぐ新しい女性の方と仲良くなるんですから……。

私もここはお酒の力を借りて……大胆に距離を詰めます。

アピールアピール！

「……流石ですね……。」

「ええ、本当にあの人は……追いつける気がしないです。」

セツヒトさんを見ながら、二人で話します。

……ソウジさん、あのゴシヤハギを倒したというのに、どこか自信なさげですね。

「ソウジさんは……いつか追いつけますよ。」

「どうでしょうね……。でも、目標にはしますよ。憧れます、あの強さ。」

「私は……ハンターさんじゃありません。……でも、受付嬢という、ハンターさんを支える自分の仕事に、誇りを持っています……いえ、そんなに誇りはもってなかったんですけど……ソウジさんに出会って、本当にそう思えるようになりました。」

「は、はい。」

もつとお酒の力を借りて……！

本音を話しましょう！

……ソウジさん。あなたのせいで……あなたのおかげで、私、とつても前向きになれたんですから！

「……感謝しています。ソウジさん……あなたはいつも一生懸命で、だから目が離せなくて……こんなところまで来ちゃいました。」

「……はい……。」

「私をこんな風に仕事熱心にしちやっただんですから……責任、取って下さい。」

「せ、責任？」

「……ええ……私が専属で受け待つハンターさんは、きつとセツヒトさんよりもすごい人になるんです……初め見たときは……正直全然頼りなかつたですけど……ソウジさんはすごい人になるって……予感がしたんです。」

「は、はい。」

「予感……というよりも確信したんです！だから……そ……その！ソウジさん！」

「は、はい！」

「……………絶対！ぜったい！！この大陸に名を馳せるようなハンターさんになって下さいね！……………いつも近くで見えていた私が、これからもずっと、応援しますから！！……………や、や、やや約束！……………ですよ？」

言っちゃいました。

告白しちゃいました。

…………好きとかどうか、そんなんじゃないくなりましたけど…………。
あなたをこれだけ思っている私がいるって…………伝えられたでしょうか。

「ハイビスさん。」

「は、はい！」

何でしょう!?

私、もう顔が真っ赤ですね！

恥ずかしいですけど…………お返事を聞きます！

「感謝します。……目が覚めた……いや、もう一度やる気になりました。」

「……………それは……………ふふっ、良かったです。」

「……………はい。」

一緒にいたいって……………ちゃんとさえ言えたら、どんな返事をもらえてたんでしょか。

……………でも、今日のところは、このお返事で十分です。

ソウジさんの、こういうところが私……………。

好きになっちゃったんですから。

「行ってきました……………無様でも何でも、あの人に少しでも足掻いてみます!!」

「……………ふふ……………はいっ！(´▽`*)武運を!!」

そう言って、ソウジさんは堂々と、セツヒトさんのところに向かいました。

見送ります。

いつの間にかとても大きくなった、その背中を見ながら。

……………ソウジさんの専属受付嬢として。

* * * * *

「さむっ！」

冬山の朝は寒いです。

昨日は、お酒の勢いで……何だかすごい事まで言っちゃいましたね……。ソウジさんに、少しは思いが伝わったでしょうか。銀世界の中、臨時ギルドの集会所に向かいます。

とつても冷たくて、息も凍りそうなほど冷えるこの村で。私は何だかポカポカした気分で、歩みを進めました。

「さーて……今日も頑張りましょうね！」

自分を鼓舞しながら、雪を踏みしめます。

昨日のあの方の背中を思い出しながら。

大切に、大切に思い出しながら。

98 助けましょう。

前世、俺はあまり男の子的な趣味を持っていない方では無かった。

ロボットに対してロマンを感じる方でもないし、車やバイクに金をかける趣味も持ち合わせていなかった。

付き合い程度のゴルフ……は男の子的な趣味ではないし。

どちらかというと、おっさんの趣味だ。

だから、武器やモンスターに対して「かっこいい」と思う自分が、意外ではあったのだ。

そして今回。

新しい双剣が作られ。

震えてしまった……。

カッコよすぎて。

「おお……。」

「どーお？それが氷属性双剣……ベルゲルブリザードだよー。」

「いや……か、かつこいいです……。」

「うーん……刀身の美しさというよりは機能美を感じるよねー。ベリオロス素材を存分に使ってデザインは凝ってみただけどさー。双剣って普通対^{たい}なんだけど、こういうふうには片方ずつ見た目を変えてみるってのも楽しいしー、そこが魅力だよねー、まー人によつては二刀がきつちり同じデザインこそ至高！なんて言う人もいるんだけどさー。んでねー？この片方のトゲトゲは回転乱舞とか空中技で威力を発揮するんだー、引っかけりをうまく使つてねー……。」

セツヒトさんに、新たな双剣を見せられる。

と、同時に喋りだすセツヒトさん。

もうその語りが、止まらない止まらない。

武具屋……というより武器マニア、といった方がしっくりくるな……。

あのセツヒトさんが熱く語る姿なんてあんまり見ない。

「……つてわけー。ソウジー？聞いているー？」

「は、はい！聞いてますよー？」

「ほんとにー？……あ、おじさーん、ありがとうございましたー。加工、うまくいきまし

たー。」

「おーおー！どれ、ちよいと見せてみな！」

セツヒトさんが、鍛冶屋のおじさんに礼を言いに行つた。

仲良く談笑している。

というより、武器話で最高に盛り上がっていらつしやる。

……やはり共通の趣味……いや、生業を持つ者同士、通じ合うものがあるのだろう。

新しく手に入った双剣。

作成、加工に必要な素材をアイテム一覧から探してみたところ、ほとんどのものは揃っていた。

ただ、足りない素材が一つあった。

ベリオロスの鋭爪である。

そんな訳で、クエストボードに張り付いて、ベリオロスの素材を手に入れるためのクエスト探し。

無事にベリオロスを討伐したのはその次の日。

運良くクエストが見つかって良かった。

素材も手に入ったし。

ハイビスさんに言つて、預けている素材を必要な分だけもらう。

そのままセツヒトさんが職人さんと交渉しているところに直行したのである。

鍛冶場のおやつさんは、快く場所を貸してくれた。

もちろん謝礼はするが、それ以上にセツヒトさんの腕をその目で見てみたいという。

「あのセツヒトが武器作成に加工したあ……驚いたぜ！」

「ちよつと、見られるの恥ずかしいですから……お手柔らかにねー？」

「なーを言つてんだ！こちとらおめえが下位の時から見えたんだぞ!?はずかしがる仲でもあるめえ！」

「だからだよー……もー……。」

恥ずかしがるセツヒトさん。

不覚にも、可愛かった。

ギヤツプとは、かくも恐ろしき。

おやつさんとセツヒトさんは、ハンターになつてすぐの頃からの知り合いらしい。

やたら話がスムーズに進むと思つた。

「ウルクススの突進に、ひいこら言つてたあのセツヒトが、あれよあれよと伝説なんてなあ……嬉しいやら悲しいやら。」

「はーずーかーしーいー!」

「おつ!?何だおめえ!照れてんのか!?すかしてすました態度もいいけどなあ!そつちの方が俺に取っちゃセツヒトだつてんだ!ハッハッハッハ!」

「もー……。」

何だこのセツヒトさん。

タジタジである。

か、可愛いぞ?!

………こういうのを萌えつて言うのか!?

………いや、しらんけど。

と、とにかく……セツヒトさんが無事剣を打てるということ、ありがたくもそれを待つことになった。

2日で仕上げるといふから、驚きである。

翌々日、双剣ベルゲルブリザードは無事完成。

命名に一悶着あつたようだが、俺の新しい双剣が完成した。

「いやー、つつかれたー。」

「おつかれ様です……今日はもうお休みください。」

「うん、そーするー……ソウジー。」

「はい？」

いつも以上に眠たげな目。

セツヒトさん、頑張ってくれたんだな。

「……ジンオウガ、絶対倒そうねー。」

「……はいー！」

ここまで頑張ってくれたのだ。

これに応えなきや、男がすたる。

セツヒトさんを宿に送ると、セツヒトさんは倒れ込むように寝てしまった。俺の剣のために、頑張ってくれたのだと思うと、感謝しかない。

……頑張んなきゃな。

俺はおもむろにログハウスの外に出て、新しい双剣の素振りを始めた。

セツヒトさんの思いに報いるために。

精一杯、頑張ろうと思う。

* * * * *

そこから一ヶ月ほど。

再びクエスト漬けの毎日が再開。

ゴシャハギさんを討伐したとはいえ、俺はまだまだ未熟。

目下の目標は、空中回転乱舞の精度を上げること、回避である。

セツヒトさんに一定の評価はもらっているものの、モンスター相手の回避は俺の生命線。

鍛えていきたい。

回避と言っても、避ければいってんでもない。

モンスターの挙動を読んで、次の手につながるように行う必要がある。

これを意識するかしないかで、狩りの時間がガラリと変わる。

つまりは、効率化を目指せるのだ。

命を取るのに効率とか、そんな考えはどうかと思うが。

村やその周辺の人達の生活を守るために、割り切るしかない。

空中回転乱舞も、通常の攻撃よりも強く手数も多いので、効率が良いといえれば良い。

しかし、体力が減るわ減るわ。

鍛え続けていて良かったと実感した。

おかげで、一応疲れ果ててリタイア、という事は一度もなかった。

コツコツランニングをしてきてよかった。

これからも続けよう。

ちなみに空中回転乱舞を、一度憑依状態で行ったあと、真似をしてもう一度、という

荒業も試してみた。

大型を相手に。

だが、あまりに術後のスキが大きく、非常に危険であることがわかった。

予想の範疇であったが、実戦向きとは言えない。

「ソウジ。その憑依状態ってのー？それは、最後の切り札にしたほうがいいねー。」
「ですよね……。」

セツヒトさんからもストップがかかったので、やめておこう。

デイノバルドに使ったときも、あつちが偶然ダウンしたから良かったようなものだ。
手痛い反撃を喰らうのは、目に見えている。

………そういえばあの時、デイノバルドの攻撃を受けながらも反撃することができた
なあ。

「セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん……俺、以前デイノバルドと対峙したとき、空中回転乱舞で攻撃を
避けられたんですけど……何ですかね？」

「おー？どゆことー？」

「えーつと……こう、無我夢中で憑依状態で空中回転乱舞を行ったら……なんて言うか、
攻撃をいなしながら？反撃できたんです。」

「ふんふん。」

「よくわからないんですけど……その時なぜかできたんですよ……。」
「……………んー。」

セツヒトさんが、いつもの考えるポーズをとる。

回答を待とう。

「……………ジャスト回避……つてのがあるんだけど……それに近いのかなあ……いやでも、反撃できたつてのがなー……………」

「……………」

「……………ちよつち、考えてみるー。」

「わ、分かりました。でもそこまで考えてくださらなくてもいいですよ？そもそもできるかどうかも分かりませんし。」

「りよー。」

その時は、ここまでで終わった。

まさかこの思いつきのような技が、俺の切り札になるとは。

このときは予想していなかったんだけど。

* * * * *

更に一ヶ月。

クエスト漬けの毎日。

モンスターへの動きも雪山の移動にも慣れ、攻撃を食らうことも少なくなってきた。

雪山も徐々に日が長くなり、もうしばらくすれば雪解けが始まるという。

ワサドラに帰る日も近い。

……だが。

「ハイビスさん、現れませんか？」

「そうですね……いつもならもう出現してもおかしくないんですけど……。」

「そうですね……あの時は偶然襲われただけ、だったんですかね。」

「タオカカ西部で一体、氷海で一体、討伐記録があります。もしかしたら倒されているのかもしれないね……。」

「あー……。」

ヤツが、なかなか現れない。

そう、今回の俺の最終目標である、雷狼竜。

ジンオウガである。

「あの時の個体にこだわっているわけではないんですけどね。」

「私としては、出てくれない方が安心なんですけどね……いや、ソウジさんの腕を信用していないというわけではありませんよ？」

「ええ、大丈夫です。でも、準備を重ねてきましたし……もしジンオウガ関連の話があったら、また教えて下さい。」

「はい。承知しました。」

「では、行ってきます。」

「はい、ご武運を！」

クエストに向かう前にハイビスさんに逐一確認しては、溜息を吐く毎日。

いや、相手にしなくていいんならそれはそれで安心なだけだ。

ここに来る道中、タオカカの目前というところで襲来したジンオウガ。

奴への恐怖はまだ拭えない。
セツヒトさんに現状を報告する。

「セ……せつちゃんさん。今日も無いみたいです。」

「まじかー。……んー、まあこういう年も無くは無かったしなー。」

「そうなんですか?」

「うん。だって、近隣に2体は出てきているんでしょー? まーあの時の個体はやられちゃったんじゃない?」

「あー……。」

確かに。

タオカ力で倒されたというジンオウガが、そいつである可能性は高い。

「まーそれにさー。あんな厄介で強いやつ、出ない方がいいよねー……ソウジの目標にして私が言うのもなんだけどー。」

「……それもそうですね。」

「……よーし、それじゃ、氷海に行こうかー。」

「はい、そうしましょう。」

今日の相手はザボアザギル。

氷の海に潜って攻撃してくるといふ、でかいサメみたいなやつである。

どうやってやっているのかも分からないが、ヨツミワドウよろしく、自身の形態を変化させて攻撃することもある。

ブヨブヨのブクブクに膨らむ姿は、少し面白い。

「前みたいにも、奴の真下に居座らないようにしてねー？ソウジ。」

「が、合点承知です。」

以前も狩ったことのある、このモンスター。

初めてのの際は、氷の下から突き上げる攻撃を食らってしまった。

双剣で攻撃を防いだとはいえ、中々の衝撃だった。

高く突き上げられたときは、心底驚いたものだ。

まあその落ちる勢いを利用して斬り刻んでやったけど。

「……ソウジの成長には、ほんとに驚かされるよ！……。(ボソリ)」

「え？なんか言いました？」

「んーん。こつちの話ー。さー、れつつごー。」

よくわからないが、まあいいか。

2回目とはいえ、油断しないようにしないと。

慣れた頃が一番危ないっていうし。

俺はハイビスさんに再度挨拶をすると、セツヒトさんについていった。

* * * * *

「いるねー、ザボアザギル。」

「はい、いますね……。」

「いつも通りソウジにやってもらおうかと思ったけど……どーするー？」

「うーん……あの状況じゃ……。」

「……そーだねー。」

二人にしか聞こえない位の声で話す。

二百メートル程先に見えるのは、今回の標的ザボアザギル。

平べったいサメのようなフォルムなのに、四本脚で吠えている。

そこまでは前回と一緒。

偶然狩り場も同じ。

それはいい。

だが。

「……………あの子……………何やってんのー？ここ上位の狩り場だよねー？」

「えーつと……………ハンズさん、でしたね……………」

「うん……………一人でやってるのはまあいいとして……………」

「……………」

「……………うわっ、危なー。」

「そうですね……………」

前回と違う点。

それは、いつかの飲み会でお話した女性ハンター、ハンズさんがいたことだ。でかい刀を構え、ザボアザギルと対峙している。

そこはまあいい。

問題は、その理由である。

クエスト被り……ということは考えにくい。

ミヨシに来た当初はそうしたこともままあったが、ハイビスさんを始めとしたヘルプの人材が増えたことで、解消されたと聞く。

だがその可能性も捨てきれない……。

「ソウジ、ハンズって子で、間違いない？」

「はい……傷は多少ありますが……しっかり立っていますね。……動きも軽やかです。」

「そっかー。」

「あれは、太刀、ですよね？」

「うん、多分ねー。……ソウジ、よく見えるねー。」

「あ、はい。目はいい方……みたいです。」

「私よりいい人あんまりいないんだけど……あつ。」

「あつ。」

ザボアザギルの動きが突如として変わった。

飛び上がったかと思うと、氷の下に潜り込んだのだ。

背ビレだけ出してハンズさんを追う姿は、完全に映画のアレである。

「うまく逃げてるねー……救援信号は出そう？」

「そんな様子は無さそうですね……どうしましょうか。」

こちらの標的は、まずあそこにいるザボアザギルで間違いない。

俺のギフトのマップに、それ以外は見当たらないからだ。

だがここで変にしやしやり出て共闘したとして。

ちよつと厄介なことになる。

まず万が一にもクエスト被りだった場合。

ハンターの一人頭の分け前は、当たり前ながら減る。

それを良しとしないハンターは大勢いる。

まあギルドが悪いならその補償はどこかで行われるのだが、こちらに責を問われたら、たまったものではない。

だが、単なる遭遇だった場合。

これは直ちに助けに行かねばなるまい。

予期せぬモンスターの襲来など、準備もない中対応するわけだから、危険である。

信号弾で救援を出したら、すぐに駆けつけられるのだが……。

今の所それはない。

……わからん！どっちだ!?

「……………セツヒトさん。」

「……………うん。……………どーする?」

「……………行きましょう！仮にギルドのクエスト被りであったとしても、セツヒトさんのファンであるハンズさんなら、大事にはならないでしょう。」

「うーん、そうねー。打算的だけど、ウチら悪くないし……いこっかー。」

「はいー!」

ジャキン!

双剣を構える。

セツヒトさんは納刀のまま。

どうせ臨戦態勢なのだから、見つかるかどうかなどどうでもいい。
むしろ見つかって、こっちに気を引いた方がいい。

氷と雪の地面を、全力で走る。

慣れた物だ。おそらく村についての当初だったら、すっ転んでいた。

雪質は硬め。ほぼ氷。

滑りやすいが、もはや滑ったらそのまま進む勢いで走った。

ザボアザギルはこちらに気づく様子もなく、ハNZズさんの方を見てる。
背中を見せた。

チャンス！

残り数メートルというところで、更に加速。

バツ!!

俺は勢いをつけて跳躍して。

(……………ハッ!!)

刃を引つ掛けるように、空中回転乱舞を繰り出した。

ザシユ！ザザザザン！！

ズバツ！！

重力に身を任せつつ、落下の勢いで追撃。

「ギャアアア！」

完全に不意をつかれたザボアザギルは、そのまますっ転んだ。
本来ならここが攻め時。

だが、今回は事情が違う。

「ハンズさん！」

「そ、ソウジさん!?それにセツヒト様!?!」

「やほー………てゆーか、様って。」

余裕はない。

ジタバタもがくザボアザギルを横目に、話を進める。

「すみません！私達はザボアザギルの討伐クエストを受けてきました！ハンズさんは
!?!」

「わ、私、このモンスターではないです！」

「え!?!」

「違うクエストで帰還途中に襲われて……パーティーメンバーもいつの間にかいなくて

……。」

「……………」

遭遇パターンであった。

しかも、割と最悪の。

「あー……置いてかれたー？」

「うっ……………」

ストレートに聞いちゃうセツヒトさん。

心理的なダメージを受けて、気まずそうなハンズさん。
とにかくこれ以上は時間がない。

仕切り直そう。

「一旦離脱します！セツヒトさん！」

「せっちゃんだつてー……ハンズ？だっけ？こつちおいで！」

「わ、わわわ！」

腕を引つ張られ、後退するハンズさん。

状況がつかめないのか、困惑している様子。

まあそんなことはどうでもいいか。

まずはこいつを足止めだ。

(シビレ畏……………！)

ザボアザギルのもがく横にすぐさま罠を設置。

俺も一目散費離脱する。

また後でな、ザボアザギル。

ここは一旦……。

「痺れておいてくれ。」

バチツ!!バチバチバチ!!

「ギャー!ツギヤアアア……!!」

おー苦しそう苦しそう。

だがかまってはられない。

「よしっ。」

そう言いながら。

俺も戦線を離脱した。

* * * * *

「はあつ……はあつ……！」

「だ、大丈夫ですか？」

「は、はい……危ないところを……ありがとうございます……。」

とりあえず俺たちは、風の少ない洞窟の中に避難してきた。

ハングさんは、息も絶え絶えである。

まだ余裕のある俺達とは違って、先程まで一人で大型を相手にしていたのだ。

それにさっきのザボアザギルは、大きさからおそらくは上位個体。

ハングさんは下位ハンターである。

無理もない。

以前集会所でお会した時の明るいイメージは、鳴りを潜めている。

似合っていたブラウンのポブカットは、めちやくちやになっていた。

「ハンズさん、事情をお伺いしても大丈夫ですか？」

「は、はい……。」

「そーそー。なんで仲間に見捨てられたのー？」

「うっ……。」

「せつちゃんさん、ストレートすぎます。」

何か事情があるのかもしれない。

どんな事情かは知らないが。

「実は……。」

ハンズさんが髪を整えながら話を始めた。

まずハンズさんは、以前の宴会でとあるハンター二人組の男女と意気投合した。

何度かクエストに行ったという。

「その……初めは良かったんですけど……お二人が何と言いますか……仲良くなれまして。」

「……仲良くつていうのは……？」

「……その……男女の仲に。」

「わー。あるあるー。」

セツヒトさんが大きく頷く。

あるあるなんだな。

クエストの同行を男性に頼まれ、断れない人のいいハンズさん。

それをよく思わないながらも、表面では仲良く接してくれたという女性。

……うわー。女って……。

「それで気まづくなつて……これが最後のクエストかなーって思っていたんですけど……。」

「運悪く、ザボアザギルに襲われてしまった、と。」

「は……。」

突如として現れたザボアザギルに、恋人ハンターたちはパニック。

結果、ハンズさんを置いていった……のかも知れない。

「せつちゃんさん、これって……。」

「うん、わからないねー。その二人の言い分も聞かないとだしー？……まあなんとなく察しはつくけどー。」

「……。」

うん。

多分二人で助かろうとして置いて行ったパターンだろう。

……一番可哀想なのはハンズさんである。

その二人から救援要請が出ているかも知れないが、見捨てられたことに変わりはないわけ。

「……お二人とも、本当にありがとうございます。とにかく……村に戻って、無事を報告します。」

「また何かと遭ったらどうすんのー？」

「その時は……もう、そういう命だったと諦めます……。」

「いやいやいやいや。」

自暴自棄になっていらつしやる。

……放っておけないよな。

「ハンズさん。」

「はい？」

「俺たちこれからザボアザギルを倒すんですが……見に来ますか？」

「え？」

「身の安全は保証し兼ねますし……もしよかったら、ですけど。」

ポカンとしている不幸なハンズさんを見ながら。

変な提案をする俺であつた。

99人間関係の難しさと紳士らしさについて考えましょう。

「ソウジー！潜るよー！」

「はい！」

バキバキッ！

ズボッ。

氷の下に潜ったザボアザギルが、背ビレだけを出す。

隠せばいいのに……おかげで位置は丸わかりである。

まあ出している方が逆に恐怖を煽っていいのかもしれない。

氷の下を、恐ろしい速さで進むザボアザギル。

標的は……。

「……ハズさん！」

「は、はい!!」

言われてすぐ横にすつ転ぶハンスさん。
見事な緊急回避。

バキバキッ!

バゴオン!!

「ギャオオオ!!」

直後、氷の下から垂直に飛び出すザボアザギル。

「ひっ……!!」

「落ち着いて! 後退!」

「は、はい!」

「ごっちは任せて!」

逃げるハンズさんをかばうように前に出たセツヒトさん。

ザボアザギルの顎が、セツヒトさんを襲う。

だが……。

「よっ……。」

何の力みもなく、それを下に避けるセツヒトさん。

(ジャスト回避……？いや、ただ避けただけか？)

違いはわからない。

だが数ミリレベルの世界で攻撃を避けたセツヒトさんは、双剣を斬り上げた。

ザン！

「ギヤアアア！」

すげえ……パワーが違う。

一撃でこれかよ。

セツヒトさんは、堪らず後退するザボアザギルに追撃を行っていく。

「うらっ！よっ……。」

ザン！ザザン！

「ハンズさん！こっちー！」

「はいっー！」

俺は安全な場所にハンズさんを誘導。

距離を離しすぎると庇いきれないし、かと言って近づきすぎると手痛い攻撃を食らう。

付かず離れずの位置でいること。

ハンズさんはその約束を、きっちり守っていた。

「怪我はないですか？」

「は、はい！大丈夫です！」

「良かった……一応、これ回復薬です……あと、これも。」

「えっ？」

ポーチから回復薬グレートと信号弾を取り出す。

「し、信号弾ですか？」

「はい。……多分、もうすぐ終わります。……それでは、行ってきますので。」

「えっ？えっ!？」

戸惑うハンズさんを置いて、セツヒトさんの加勢に向かう。

「ソウジー！背中ガラ空きー！」

「はいっ！」

合図と共に、俺は跳躍。

背中を切り刻みながら、空中回転乱舞をお見舞いする。

ザシユ！ザザン！ザザザザン！

「おー！いいねー！」

「まだまだ……っ！」

着地してなお、攻撃をやめない。

続けて回転乱舞を食らわす。

ようやくこちらを向くザボアザギル。

だが、それは悪手だ。

「——終わりだよ。」

ザン！

「ギャアアア………。」

ズウン。

セツヒトさんが終の一撃を食らわす。

……俺で仕留め切れると思ったのだが、ちよつと足りなかったな……。

「んー……私も入ると、早いねー。」

「そうですね。」

基本、俺の狩猟はソロ。

セツヒトさんはバックアップ。

二人で共闘する機会は、実はここまであまりなかった。

それでも、中々いいチームワークだったと思う。

「時間はー？」

「多分昼過ぎです……結構早いんじゃないですか？」

「よーし。無事いっちゃあがりー。……ハンズー？信号弾いーい？」

「は、はーいー！」

セツヒトさんの声を聞いて、慌てて信号弾をセツトするハンズさん。
モタモタしながらも、数秒後に信号弾が上がった。

「お二人共……大変勉強になりました！」

「怪我とかはないですか？」

「はいー！というか狩猟中も気を遣って頂いて……ありがとうございました。」
「いやいや。無事で良かったです。」

始めは遠巻きに見ておく予定だった。

セツヒトさんが「ハンターの勉強になるから」と、中距離での共闘を提案した。
「勉強」というのは、ハンズさんばかりではない。

俺も勉強になった。

モンスターにもハンズさんにもセツヒトさんにも目を向けつつ、動く。
結構疲れた。

それぐらいには、勉強になった。

「ハンズー。私達の見えて、どうだったー？」

「えっ……はい。そうですね……。」

相変わらず主語が抜けたセツヒト語。

だが、ハンズさんはしつかり解説して答える。

「セツヒトさんは、とにかくすごかったとしか……。一撃一撃が、とても双剣とは思えませんでした。モンスターもセツヒトさんに集中せざるを得なかったと思います。」

「ふんふん。」

「ソウジさんは、セツヒトさんには確かに一撃は劣りますが……。私もセツヒトさんもモンスターも見ながら、指示を丁寧に出されてました。あんなの、私にはまだ無理です。的確で、分かりやすかったです。」

「そ、それはどうも、ありがとうございます。」

「いやいや！私の言葉なんて……。勉強になりました。」

ハンズさんも、しつかり振り返りができていると思う。

これが出るかどうかは、大きいよな。
評価をきちんと下すからこそ、改善点や成果が分かるというものだ。

「ソウジはー?」

セツヒトさんが俺にも振ってきた。

「そうですね……まず、セツヒトさん。……手、抜いてましたね?」
「えっ!?!」

ハNZさんの驚きの声。

まあ普通はわからないよな。

「おー。分かったー?」

「そりやもう。何回一緒にクエスト行っただと思ってるんですか。」

「セツヒトさんは本気じゃなかった……。」

目を丸くするハンスさん。

「多分、半分も力、出してないんじゃないですかね。」

「は、半分!？」

「そーねー。そんぐらいー。」

「わあ……。」

驚きの目から羨望の眼差しに変わるハンスさん。

すごいよなあ……俺懸命に動いたんだけど。

「俺の勉強のため、ですよね?」

「……………つまりー?」

「奔放に動く前衛。守るべき対象。それらをしっかり見ながらも、モンスターを相手取る。その、勉強になりました。凄く。」

「おー、100点満点ー。……しっかり学べたみたいだねー。」

「はい。」

セツヒトさんは、明らかに自由に動きすぎていた。
手も抜いていたし。

この結論を導くのは、そこまで難しくはない。

「……………護衛する対象を抱えてなお、全力を出すって……………なかなか難しいんだよねー。
いや、ハンズもよく避けてたよー？でも、その辺の視野も後々大切になるからさー。い
い勉強に、なったでしょー？二人共。」

「はこ。」

「は、はこー！」

ザボアザギルには失礼だが、たいへん勉強になった。

亡骸に、礼を言わせてもらおう。

……………。

そのまま俺たちは、ギルドへの帰路についた。

道中ハンズさんと色々話したが、まずは置いていかれた件について、話し合うべきだ

と伝えた。

それはハンズさんも分かっていたようで、頷いていた。

「俺たち、同席しましょうか？」

「いえ……元から今回がパーティの最後のつもりでしたので、3人で話し合ってみます。」

「りよー。」

「分かりました。」

それ以上俺たちは、特に突っ込まないことにした。

* * * * *

ギルドに着いたのは、夕方にもなりきららない時分。

日が長くなってきた。

山あいのこの村にも、少しずつ日が当たる時間が伸びている。

春も近いと実感。

ハンズさんとは、ギルド前で別れた。

最後まで、何度も礼を言われ、気恥ずかしかった。

報酬については、ハンズさんが頑なに固辞。

なので、俺たちでもらうことに。

申し訳ないので、多少は素材を分配させてもらおうことにしよう。

「ソウジさん！セツヒトさん！」

「戻りました……色々あります。」

「はい、こちらも把握しておりますが……ハンズさんはご一緒されては……。」

「あ、クエスト処理は俺たちでやります。ハンズさんには先にパーティーメンバーのところ……えっと、無事を伝えるに。」

「あ、なるほど……。ご無事なんですよね？」

「はい。全員無事です。」

ハイビスさんに報告しておく。

ハンズさんたちの事情については、知る限りを話す。

と言っても、真実は知らない。

見たり聞いたりした情報だけ。

「ザボアザギルの狩猟、お疲れさまでした。」

ハイビスさんから聞いた話では、そのカップル二人はギルドに駆け込んできて、すぐに救援要請を出したらしい。

だが、観測班からの報告で俺たちが既に救援に入ったことが判明。

ザボアザギルが狩猟対象としてクエスト登録されていたこともあり、救援要請がそのまま俺たちのクエストに紐づいた。

カップルは二人とも下位ハンター。

逃げ出してしまふのはしょうがないとしても……。

「事前に打ち合わせもなし、ハンズが『囿になる』って言ったわけでもなし……。和解は無理かもねー。」

「……難しいですかね。」

「そりやそうでしょー。……しょうがないとはいえ、自分を見捨てた人たちと、ソウジはもう一回手を組めるー?」

「んー……。」

まあ、無理かなあ……。

すごく難しい話だと思った。

ソロはソロで大変だけど、パーティー組むのも大変なんだなあ……。

とりあえずクエスト完了報告を済ませた俺たちは、ログハウスに帰ることにした。

* * * * *

「ただいま帰りました。」

「あ、おかえりー、ハイビスちやーん。」

「おかえりなさい。夕飯できてますよ。」

「あ、ありがとうございます……。お二人とも狩猟でお疲れですのに……。」

「いえいえ、今日は楽な方でしたし……。」

バサッ。

「……料理も、テイクアウトです。」

「ごめんねー、先に食べちゃったー。」

「いいえ、助かります！用意をしますね！」

パタパタ。

パタン。

机の上の料理を確認しつつ、自室に戻るハイビスさん。

今日も遅くまで、お疲れさまです。

基本、ハイビスさんが朝夕ともにご飯を作ってくれている。

俺たちはそれに甘えていたのだが、ハイビスさんはかなりの激務。

しかし、俺もセツヒトさんも、作れるのは男飯。

……いや、言い換えよう。

材料の無駄。そして味も……まあお察しレベルだ。

なのでこうやって、ハイビスさんの帰りが遅くなりそうな時は、テイクアウトで済ませることにしている。

夕飯は7割方、こうだ。

最近はいびスさんも多忙を極めており、ほぼ毎食テイクアウト。

近場の酒屋にお願いして、夕飯を詰めて持ち帰るのだ。

栄養が偏らないようメニューは選んでいるが……店の味には、正直飽きが来てしまった。

はいびスさんの手料理も望めぬ今、死ぬほどドールの飯が恋しい。

というかわサドラの飯が恋しい。

俺が持ってきたイシザキ亭の飯は……いわば秘密兵器である。

帰りの道中、美味しくいただきたい。

「……ワサドラのご飯が恋しいねー。」

「雪山育ちのセツヒ……せつちゃんさんもそうですか？」

「うーん、何だろうねー。ワサドラで舌が肥えちゃったんだろうねー。」

「あー。」

異世界に来てからこつち、ご飯がまずいと思ったことがない。

これはすごいことだと思う。

前世、日本から海外に出張などをした仕事仲間からは、ご飯が一番たいへんな問題だったと聞いた。

ひどいやつなんか、毎食胃薬を服用していたとか。

……そういう事態になったことがないわけだから、こちらの食事レベルは異様に高い。

この雪に囲まれたミヨシ村であっても、それは同じ。

だが、味の良さと料理のレパートリーは、ワサドラに軍配が上がる。

「……ワサドラのご飯が、恋しいですね……。」

「ねー。」

フォローするわけではないが、ハイビスさんの朝食、夕飯も中々美味である。

多分、材料とかそういう問題だろうな。

……いかに、話していたら無性にワサドラが恋しくなってきたぞ。

バタン。

パタパタ。

「お待たせしました……わあ、ありがとうございます。用意までしていただいて。」
「どうぞ、お茶です。」

「もう……すみません。最近遅くて……。」

「気にしないでください。」

「ハイビスちゃん、最近忙しいねー。もしかしてー、引き継ぎー?」

セツヒトさんがハイビスさんに尋ねる。

部屋着でリラックスしているセツヒトさん。

お気に入りのパジャマの薄茶色の七分丈を、今日も上下身につけている。

……寒くないのか。

「はい……いただきます……モグモグ……うんつ、おいしい……。えーつと、そろそろハ
ンターさんたちの冬季の逗留も終わりが近づいていますし、引き継ぎの他にも、業務の締
め作業に、他ギルドへの連絡に……まあ色々ですね。」

「あー、なるほどねー。そりゃ大変だー。」

なるほど、引き継ぎとはそういうことか。

ゴクンとご飯を飲み込んでから、ハイビスさんが続ける。

「私達もそろそろ、ワサドラへの帰還の時期を考えた方がいいかもしれませんね。」

「そーねー。……モンスターの出現数はー？」

「例年よりも……モグモグ……ゴクン。……早いです。大型の餌となるモンスターの移動が始まりましたと、夕方の連絡で判明しました。」

「あー、もうかー。……こりゃージンオウガも出てこないかなー。」

「……………」

そうか、大型もそろそろいなくなる時期か……。

小型が減れば、当然それを捕食する大型もいなくなる。

餌が少なくなれば、待っているのはその餌を巡る大型同士の衝突。

モンスターも、無謀なことはいない。

より強いモンスターだけが残り、より弱いモンスターは移動を始める。

……ミヨシを含めた雪山周辺に、そろそろ春がやってくるんだな。

「雪崩の報告も上がっています。そこまでの規模では無いですが。」

「雪崩。」

「はい。とは言っても、人の生息圏の話ではないですが……モグモグ。」

話しながら器用に食事を進めるハイビスさん。

小動物のように小さく、しかしモリモリ食べている。

……受付嬢の性だろうな……飯食つてるときも仕事しているイメージ。

「……………ちよつとー、二人にお願いがあるんだけどさー。」

「どうしました?」

セツヒトさんが、寝転んでいたソファから身を起こす。

あぐらを掻いて、頭をポリポリしている。

……何か……照れている?

「……………家族に会いに行ってきたもいーい?」

「へ？」

「いやー、だからねー？」

セツヒトさんの話。

要約すると、アヤ村に顔を出したいとのことだった。

せつかく近くにいるんだし、それ自体は何の問題もない……と思う。

照れてお願いするセツヒトさんなんか初めて見るし、遠方に住む家族なんてなかなか会えないのだから。

むしろ会いに行つてきて欲しいぐらいだ。

「ご家族に会いに行かれるんですね。……私はいいと思えますよ？せつかく近くに来たんですから……ソウジさんはどうですか？モグモグ。」

「反対する理由なんて……特に無いですけど。」

「おー？マジでー？ホントにいいのー？」

「？」

改めて聞き返してくるセツヒトさん。

俺とハイビスさんは、頭にクエスチョンマーク。

「何かまずいですかね……あ、俺のソロのクエストですか？」

「いやー、それは全然心配してないよー。行くのも二日ぐらいだしー、ソウジなら無茶しなきや平気だよー。大型のクエストも減ってきているしー、ソウジの腕は保証するつてー。」

「それじゃ何が……。」

更に首を傾げる俺。

ハイビスさんはご飯を食べ終わり、お茶を啜っている。

……食べるの早いな！

「だからー、2日はここを空けるけどー……二人つきりだよー？」

「……………」

「ブーー!!!」

何を言い出すんだセツヒトさん。

「な、何を言い出すんですかセツヒトさん!？」

お、ハイビスさんも同じ意見。

吹き出したお茶をキレイにしながら話すハイビスさんの能力の高さ。

吹き出し慣れし過ぎではなかるうか。

「だからー、今まではほらー、3人でいたでしょー?それが若い2人になったらー……

ねー?」

「ね、ねー?じゃありません!」

うーん。

確かに今日まで3人で過ごしてきた。

例えば明日からさあ、ハイビスさんと二人だ!と言われたら。

………お?………何か………イケない気がしてきたぞ!?

「若いつて、セツヒトさんも殆ど年変わらなかつたですよね!？」

「あー、それオフレコー。」

「あ、す、すみません……じゃなくて！」

……セツヒトさんとハイビスさん年変わらないの!?

そっちの方が衝撃!!

「大体!セツヒトさんとソウジさんも狩猟中二人つきりですよね!」

「いやー、モンスター狩るときにそんな気分にはならないって……。……うん、ならないよねー?」

「何で俺に聞くんですか!」

「いやー、ソウジはどうかのかなーつと。狩り中に気持ち盛上がる人種もいるのさー。」

「そんな特殊な方々と一緒にしないでください。」

生存本能が刺激されるとムラムラするような話を、どこかで聞いた気がするが……。俺はむしろシユンってなるタイプである。

「せつちゃんさん、安心してください。まさかない間に俺が襲うとでも？」
「お、襲う……。」

顔真っ赤にしてうつむかんといして下さい、ハイビスさん。
ちくしょう、可愛い。

「……だつてソウジさー、ハイビスちゃんに鼻の下伸ばしたことがあるでしょー？」

「うえっ!？」

「えっ!？」

な、なぜわかる!？」

そしてハイビスさん！聞かないで！耳塞いで!!

「いつだったかなー……確かタオカカに怪我しながら着いたときー、腕掴まれてデレデレしてたじゃーん。」

「んなつ……。」

「あ、あの時……。」

思い出す。

デレデレなんて……していた、かなあ。

……していたなあ……。

「そ、それでもですね。」

「デレデレは認めるー?」

「み、認めます!それはもう、俺も男ですし。けどですね、それとこれとは話が違うと言いますか……そんな俺が襲うような男に見えますか!」

「……。」

「なぜ二人とも黙る!」

見えるのか!俺が襲つちやうのような輩に見えるのか!?

激しく心外なんですけど!?

「いや、ソウジさんはしませんね……。」

「むしろしないことが問題なんだよね……。」

「二人とも？何の話してます？」

「……ハイビスちゃん、こうなったらアレだよ……むしろ、頑張つてー？」

「……ですね……少しでもこう、目を向かせるだけでも……。」

「そーそー、それだけでもめつけもんだよこの狩猟対象はさー。」

「もしもーし？二人ともー？」

二人して、壁に向かってヒソヒソ話を始めないでほしい。

あれか!?俺が襲つちやうような輩つてことで、その対策を練っているのか!?

「よーし。がんばつてーハイビスちゃん。」

「わ、わかりました……!……!……!自信はありませんが!精一杯、やってみます!」

「上手くいっいたら私もがんばるー。」

「わかりま……え!?セツヒトさんも!?!」

「い、いやー、ここまで何にもないとさー……焦るよねー。」

「あー……。」

よく分からんが、ひそひそ話がヒートアップしている。

いつの間にか蚊帳の外の俺。

……俺に襲われないように、セツヒトさんがハイビスさんに対策を教えたのだろうか。

だとしたら、「問題ない！」と言わせてもらおう。

俺は、何せ中身おっさん。

紳士であるからして。

……セツヒトさん数日居ないのか……。

……いかにいかに、やらしいことを考えるな！紳士！紳士だソウジ！！

* * * * *

善は急げ、ということだ。

次の日の朝、セツヒトさんはアヤ村に旅立った。

朝食も食べずに。

明後日には戻るらしい。

手を振って、セツヒトさんを見送る。

「気をつけて行ってきたくださいねー！」

「はーい！……ハイビスちゃん！がんばってねー！」

「は、はーい！がんばりますからー！セツヒトさんも、お気をつけてー！」

本人の前でなんて失礼な方々だろう。

ジェントルメンの俺に、そんな心配をしないでほしい。

「………そ、ソウジさん!!」

「は、はい！」

セツヒトさんが見えなくなるまで手を振った後、ハイビスさんが話しかけてきた。

……やたらと気合が入っている。

「きよ、今日と明日！よろしくお願いしますね！」

「わ、わかりました！」

……何をよろしくすればいいのか！

……むしろ、よろしくしちやいけないんじゃないのか!?
あーもう頭がこんがらがってきた。

「と、とにかく、朝ごはん、食べましょうか！」

「そ、そうですね！」

訳のわからぬハイテンションのまま。

俺は味のしない朝食を掻き込むことにしたのだった。

100村のピンチを救いましょう。②

セツヒトさんが帰郷した。

とは言っても近くにある村、アヤ村にだけど。

セツヒトさんは歩いて向かうそうだ。

何でも山道を突き抜けたほうが早く行けるのだとか。

……そんな裏技ができるのはあなただけですよ!!

とは言わなかった。

そう、俺は女性を傷つけない人間。

ジェントルメン。

残された俺たち……俺とハイビスさんは、それはもうギクシヤクしてしまっている。

何故かって？

……セツヒトさんの爆弾発言のせいだよ!!

『二人つきりだよー?』

『だよー？』

『だよー？』

これである。

頭の中でエコーで繰り返し返される声。

……意識すると言われても。

目の前にいるのだ。

女性が。

超絶美人さんが。

ワサドラじゃ人気ナンバーワンの花形受付嬢、ハイビスさんが。

今日だって、受付嬢の制服の上に白いモッコモッコのコート。

白い布地に金髪が、最高に映えていらっしやる。

こんなどんな男でも余裕でイチコロだろう……。

……だが！

俺は女性を傷つけない人間。

ジエントルメエン。

「そ、ソウジさん。それでは、行きましようか。」

「は、はい。いきましようね!!」

オレたちは、それはもうウルトラギクシヤクしながら、ログハウスを出た。ギルドに向かうだけなのに、やたらと緊張してしまう。

「そ、ソウジさん! きよ、今日もいい天気ですね!」

「そうですね! ……すごい曇ってますけど……。」

「ええ!?! ……あ、ホントだ……。」

すごい顔をして空を見上げるハイビスさん。

思わず笑ってしまう。

「……ふっ……ははははは!」

「えっ!?! えっ!?!」

ハイビスさんが俺以上にテンパっていたからか。

……なんか少し落ち着いてきた。

「はー笑った……ハイビスさん。」

「は、はい!？」

「……やめましょう、これじゃ俺たち、疲れるだけです。いつも通り、やりましょうよ。」

「……それも……そうですね。」

「はい……それに俺、紳士なので。……信じてはもらえないかも知れませんが。」

「いえ……信じますよ。むしろ、信じ切れるからこそ、ダメだというか……?」

「ダメなんですか!？」

「い、いえ!……とととにかく!ギルドに行きましようね!」

雪道の中、いつもと違う二人だけの出勤。

俺もハイビスさんも、そこからはいつも通りに話すことにした。

セツヒトさんがいなくても、なんとかなるかなあ……などと。

考えていたのが甘かった。

事件は夜に起こった。

* * * * *

今日はセツヒトさんもないということで、小型のクエストを受けることにした。野生のポポの肉を納品するというものである。

とは言っても、やることはただの討伐。

俺はポポを狩猟し、回収班が肉体をそのままギルドまで輸送するのである。

いつだか、疲労困憊の中、アオアシラを解体した思い出が蘇る。

すっごく大変だったなあ……。

というわけで、慎重にクエストを選んでみた、というわけである。

結果は上々。午後までに目標の100体を倒すことができた。

野生のポポは、比較的大人しい性格である。

狩ること自体はそこまで難しくない。

群れで移動していることが多いのだが、一頭を仕留める間に他のポポは逃げてしま
う。

なので、追いかけてこになるのだが……注意点が一つ。

実はたまたま、ポポの中にガムートの子供が紛れ込んでいる事がある。

間違えてその群れを襲ってみたらどうなるか。

答えは簡単。

怒り狂った巨体のガムートが、「うちの子に何しとんじゃコラア!!」と突っ込んでくるのである。

これは怖い。

群れを遠くから観察し、慎重に狩猟対象を見極めなければならぬ。

……万が一を考えると、上位クエストに分類されているのも領ける内容である。

今回は何とかなったが、できればやりたくないクエストだな……と狩猟中に思ってしまった。

やり切ったけど。

ギルドに完了報告をしたら、いつものように素材の分配の話に。

これまたいつものようにハイビスさんをお願いしていると。

いつもとは違うことが起きた。

「ソウジさん……ポポノタンが余っているそうですよ……!」

「な、なんですって!?!」

「シッ! 小さい声で! ……先ほど回収班の方から聞きました……狩猟したソウジさんに

少し分けてはどうかと言われまして……………！」

「ま、マジっすか……………！」

ひそひそ声で話す、俺とハイビスさん。

それもそのはず、ポポノタンは超希少部位の肉。文字通り、ポポの舌。

一回だけ、村長さんのお裾分けをもらったことがあるが……………まあうまかった。

美味かった。マジで。

タレとか塩とかいららない。

そのままいけた。

タレ付きの肉を先に網に乗せるとかされたら殺意が湧くレベルで、美味かった。

それが本日、頂けるのかもしれない、というのだ。

……………つ是非！いただきたい！！

「ハイビスさん……………ぜひ、お願いします……………！」

「はいっ……………！伝えておきますね……………！」

「今日は焼肉です……………！」

「……………！（ニッコリ）」

超満面の笑み。

……美人のいい笑顔って、すげえわ。破壊力。

ひそひそ声で、話を続ける。

「でも……何でポポノ……例のお肉が余ったんですか？」

「何でも、ポポの狩猟クエストを受けた方が今日は多かつたらしいですよ？それでダダ余りになっても仕方がないよな、って……回収班と解体班の方かおっしやっております。」

「なるほど……美味しいお肉にありつけるなら、ありがたいですねえ……。」

「ええ……今夜が楽しみです……！」

今夜が楽しみとか、変な意味ではないことは理解している。

……邪推してはいけない。俺はジエントルメエン。

「それでは、よろしくお願ひします……！」

「はいっ……！」

軽やかに返事をしたハイビスさんは、ニコニコで業務に戻っていった。

よし、今日は焼肉だ。

万全の準備をしよう。

部屋の中……暖炉で炙るといふ手もあるな……。

……いかん、涎が止まらない。

夜を待とう。

食材の買い出しをして……ログハウスで装備の整備と、訓練でもするか……。
俺はルンルン気分です、ログハウスまでの道を歩いて行つた。

* * * * *

「よし……準備完了。」

今日は焼肉である。

だが、ポポノタン様だけではいけない。

少し高めのお肉と新鮮野菜を買い集めてきた。

流石に野菜を切るぐらいはできるので、準備を終わらせた。

「あとはハイビスさんを待つばかりだな……。」

そういえば。

焼肉と一緒に食べるカップルは、かなりの深い仲であると、何かで見たことある。

根拠は知らんが。

安易に焼肉と言わない方が良かったかも。

ただでさえ二人きりの夜のなのである。

……俺が意識してどうする。

そもそもこの世界にそんな概念なんかないだろうし。

……でもなあ……サウナでハレンチとか言われる倫理観だしなあ……よくわからん。慎重に夕飯を食べるとしよう。

ザッザッザッ。

お、外から足音が聞こえてきた。

雪を踏みしめる音……なのだが……ハイビスさんにしてはちよつと重い？感じがする。

ドンドンドン！

「ソウジさん！いますか!?ソウジさん！」

「は、はいはい！ただいま！」

この声は……いや誰!?

女性みたいだが……分かん、とりあえず出よう。

ガチャツ。

「はい、どなたでー」

「ああよかった！すみません！私、ハンズです！」

「ハンズさん！どうしました？」

玄関を開けてそこにいたのはハンズさんだった。

昨日、ザボアザギルから助けた女性。

息を切らしながら、青い顔をしている。

……ただごとではないな。

「……緊急事態ですか!？」

「は、はい!……す、すみません!とにかく、ギルドへ来てください!」

「わ、分かりました!」

「あ……そ、装備もお願いします!」

「装備!」

……流れがマズい。

これは、おそらく。

「はい、出たんです。ヤツが……。」

「ヤツ……。」

「ご、轟竜……ティガレックスが!」

「!?わ、分かりました!先に行っていてください!すぐに向かいます!」
「はい!分かりました!」

バタン!

ザッザッザッ……

よりもよってセツヒトさんがいなくなったこの日に。

最悪の事態が起きてしまった。

轟竜ティガレックス。

話には聞いていた、あの怪物が。

出てしまったのだった。

しかしなぜハンスさんが?

……疑問は尽きないが、とにかく急ごう。

* * * * *

「お待たせしました！」

「あっ！ソウジさん！」

「お待ちしておりました！こちらへ！」

ポーチで一瞬で着替え、暖炉を消してすぐにギルドにやってきた。

早速ハイビスさんとアワキ村長に呼ばれ、集会所の隅の長机に並ぶ。

慌てた様子の村長さんが、話し始める。

「急なお呼び出し、申し訳ありません……何せもう、ソウジさんしか頼れる方がおらず……。」

「気にしないでください。それより、ティガレックスは……。」

「それは……私から説明します。」

ハンズさんから説明を聞く。

ハンズさんは第一発見者だという……今日は俺と同じ、ポポの討伐に出かけていたらしい。

「私が狩場について、群れを確認していた時……ヤツが山上から突っ込んできました。」

ハンズさんがポポの群れを確認している時、ティガレックスが奇襲。

観測されてもないモンスターの急な出現。

それは驚いたことだろう。

「それで、すぐにギルドに報告しなきゃやって思っていたら……今度はガムートがティガレックスに突っ込んできて……。」

「うわぁ……。」

「怪物同士の大決戦だな……。」

顔を顰めるハイビスさん。

恐ろしい戦いが繰り広げられたのだろう。

「私もそこからはよく見てないんですが……一人でしたし。とにかく安全第一で戻ってきたんです。そしたら……。」

「あつ、そこからは私から説明します。」

ハイビスさんが手を挙げる。

「観測班も完全に見落としていたのだと思います。全く出現の話はありませんでしたから。申し訳ありません。」

「いやいや、大型は本当に分からないですから。」

「……すみません。それで慌てた観測班からの報告では……ガムートに追われたティガレックスが、タオカカとミヨシを結ぶ街道のすぐ横に居座っている、と……人里をすぐに襲つてもおかしくないような場所です。」

「……。」

「ソウジさん。」

今度はアワキ村長さんが話し始めた。

「現在、ミヨシにいる上位ハンターは4名……逗留を終えて村を出る方が増えて、その影響で……そのうちティガレックスと交戦経験がある猛者は一人も……。唯一、セツヒトさんがいました……。」

「セツヒトさんは今、ここにはー」

「はい、ハイビスさんから聞きました。」

知っていたか。

「……それで、俺っていうわけですね。」

「はい……そしてさらに悪いことに……。」

「……まだ何かあるんですか？」

「アヤとミヨシを結ぶ街道が、雪崩で堰き止められておりました。」

「……。」

驚きすぎて言葉もない。

それじゃ、アヤ村に救援を呼ぶ……もといセツヒトさんと呼ぶことができない。

あの人単体が来るだけなら、山道をすっ飛んでくるかもしれないが……。

「明日朝になれば、報を飛ばして、アヤ、タオカカ両ギルドに連絡することは可能です。」

ハイビスさんが話し始める。

「ですが、相性の悪いガムートのいる群れに突っ込むほどの空腹であるティガレックスが、この村の目と鼻の先にいます……ポポ車のポポを狙ってこないとも限りませんし、時は一刻を争います。」

「……。」

「最近のポポの狩猟ペースは異常でした。正直に申し上げますが……生態系を制御できなかったギルドの落ち度です。それで、餌が減ったティガレックスが、ここまでやって来たのではないかと。」

「なるほど……。」

「近年の記録では、周辺にこの時期、ティガレックスがやってきたことはありません。厳冬なら、一昨年にも一頭撃退していますが……ハンターさんたちが減るこの時期に来るのは、初めてです。」

なんともまあ、最悪の条件が揃ったな。

強敵、轟竜ティガレックスの襲来。

村の近くに潜んで、いつ襲われるかもわからない。

アヤ村に救援を出したいが、雪崩。

タオカカへ結ぶ道は、ティガレックスが潜む。

セツヒトさんは、不在。

タオカカとアヤに連絡は取れるが、それは明日の朝。

夜間にヤツに襲われたら、こんな小さな村、ひとたまりもないだろう。

話に聞くティガレックスの強さは、ゴシャハギさんに匹敵するか、それ以上だと言うし。

……ここまで状況が悪いと、逆に笑えてくる。

そして頼れるのは、俺しかない、と。

「……村長さん、俺は……。」

「ソウジさん……無理にとは言いません。万が一にも襲われるかもしれない、ということですよ。」

「万が一、でいいんですか？村の近くにいるんですよ？」

「……え、ええ。ですが、明日の朝になれば、周辺のギルドに知らせることは……」

「しかも空腹。村のポポを狙われたら、防ぐ手立ては俺しかない。」

「はい……。」

村長さんの大きな体が、とても小さく見える。

ヨツミワドウなんて例えていたのが申し訳ないと思うぐらいには、縮んでしまっている。

「ソウジさん……ティガレックス1頭の狩猟、お願いできますか？」

ハイビスさんが聞いてくる。

少し前の俺なら、これは単なる自殺行為。

でも、今は違う。

ゴシヤハギに敵ったという自信が、今まで冬の間頑張ってきたという自負が、ある。

この村に今、俺しかない。

なら、やるしかない。

「……受けます。打って出しましょう。やってみますよ、そのクエスト。」

「そ、ソウジさん……！」

ガタツ。

村長さんが立ち上がる。

止めようとしてくれている。

スツ。

だが、それをハイビスさんが手で制した。

「アワキ村長、ソウジさんを、信じてください。ゴシヤハギを倒したのは、まぐれでも何でもありません……ソウジさんの実力です。」

力強い目で訴えるハイビスさん。

村長さんもいい人だ。

そりや俺を無碍に殺したくはないだろうしな。

……だが、俺しかいないのだ。

村を、この数ヶ月過ごさせてもらった村を、守る。

やる理由としては、十分に十分すぎる。

先に動いて、ティガレックスを叩く。

この村に自分より強いものがあると分かれば、おいそれと手出しはしないだろう。

「ハイビスさん、ありがとうございます。俺、行つてきます。」

「はい！あつ……場所はこちらです！」

ペラッ。

地図が描かれた紙を渡される。

まあ俺のギフトを使えば、相手の位置なんて丸わかりなんだが。

ハイビスさん。気遣い、恐れ入ります。

「……………武運を。」

「はい……………戻ってきたら、アレ、一緒に食べましょうね。」

「……………ハイっ！」

さて、行くか。

夜の狩りなんて、久しぶりだけど。

まあ、なんとかなるだろう。

やるしかないのだ。

やってやる。

待ってろ、轟竜ティガレックス。

101 轟竜を狩猟しましょう。

春が近いとはいえ、寒いものは寒い。

ホットドリンクを飲み、狩りに備える。

狩猟対象は、轟竜ティガレックス。

……勝てるかなんて分からないが、やるだけやってみよう。

目標は、支援のハンターが来るまでに、村を守ること。

無理なことはしない。

できるなら討伐したいところだが、いかんせん、こちらは初見である。

できる、などとはとても言えない。

でも、やるしかない。

村を、この集落一帯を、守る。

「マップ」を開いて、現状の確認を行う。

……ハイビスさんから受け取った資料よりも、更に村に近づいているな……。

やはり打って出て正解だった。

村を背にギリギリの戦いを長時間など、正直言つて自信がない。

できるだけ村から離れさせて……安全圏で、やる。

これが今の所のプランだ。

……プランなんて立てられたものではないが。

……………。

村を出て半刻ほどで、視認できる距離にまで接近できた。

(ヤツは……あそこか……。)

木の陰に隠れながら、ノソノソと歩く巨体。

月明かりでよく見える。

おそらく狩り自体に問題はなさそうだ。

一応照明弾……一定時間辺りを照らす弾は、ありつたけ持ってきた。

というか、ポーチに入っていた。

だが、使わないに越したことはない。

余計な動きを一つ入れるだけで、使う頭が増える。

天候が変わったり月が沈んだりしない限りは、使わないようにしておこう。

(しかし……四つん這いで歩く竜、か……。)

遠くから見えるティガレックスは、明らかに強者の風格だ。

飛ぶためには向かなそうな翼。

しかし、それを支える腕と爪は、明らかに強靱。

尻尾も厳ついが……一番気になるのは、その顎。

大きく開きそうなそれは、獲物を食いちぎるのに特化しましたと言わんばかりである。

(……情報の確認……。)

徐にポーチに触れる。

【モンスター名】ティガレックス

【種族】

飛竜種

【別名】轟竜、絶対強者

【詳細】

原始的な骨格構造を色濃く残したまま進化を遂げた大型の飛竜種。

黄色の外殻に青い縞模様 の 体 軀 と、歩 行 に 適 した 形 状 に 発 達 した 前 脚 が 外 見 的 特 徴 で、飛 竜 種 で あ り な が ら 飛 行 を 苦 手 と す る 反 面、陸 上 で の 運 動 能 力 に 徹 底 的 に 特 化 し て いる。

性質は極めて獰猛。

生態系の頂点に立つ飛竜の一種であり、「絶対強者」や「大地の暴君」などの異名で知られる。

ティガレックスを象徴する最大の特徴として、轟々たる大音量の咆哮が挙げられる。暴力的なまでの膨大な音量を誇る咆哮は、放たれた瞬間に衝撃波のように周辺の物体を破壊してしまうほどの威力を誇る。

かなり離れた位置からも耳に届くその咆哮から、《轟竜》とも呼ばれる。

寒冷地域での活動に有利となる肉体的特徴は特に見受けられないが、これはティガレックスがポポの肉を好物としており、そのポポを捕食するために自ら積極的に寒冷地に出向いているためと考えられている。

ただ自らの本能にのみ従って様々な地方に出没するため、突如として予想外の地域に襲来し、大きな被害をもたらす事例も多々確認されている。
脅威となるのは速度だけではなく……………

……………。

ポポが好物、か………そういうばセツヒトさん言つてたなあ。

ポポを好む、と。

あそこまでのモンスターになると、ポポを狩るなど容易いことだろう。

親ガムートには追われたみたいだけど。

……………ガムートのほうが強いというなら、俺にもチャンスはあるかもしれない。

だが、狙いを村の家畜のポポに変えて、少しずつ接近しているのかもしれない。

そういうしたたかな個体だったら、やだなあ……………。

(行くか。時間は無いぞ。)

ノソノソと歩くティガレックスは、確実に村に近づこうとしている。

木々を抜けようとするその先、開いたところに出てくるタイミングで。

(……………行くぞ！)

俺は、狩猟を始めることにした。

ザッザッザッザッ。

足音を殺すことは、この雪の地面では厳しい。

だが、今回は逆手に取る。

村の反対方向から周り、敢えてテイガレックスを誘う。

(……………！気づいたな！)

「……………グルルル……………！」

「うっわ、こええ……………」

距離にして30mほどまで接近。

ティガレックスは、完全に気づいた。
警戒しているのか、喉を唸らせながらこちらを睨みつけている。

「……後ろに逃げるなよ？……こつちだぞ。」

「……………グギヤアアアアアアアア!!!」

「!!」

物凄い咆哮。

空気がビリビリと震える。

この距離でこの振動。近くで聞いたら……まずいだろうな、これ。

情報画面によれば、叫び声だけでふっ飛ばされることもあるという。

声デカすぎだろ……………!!

「くっ！……………こつちだ！ティガレックス……………お前の相手は、俺だ！」
「グガアアアア！」

ズン！

更に身を低く構えたティガレックス。

地面に爪を立てる。

両翼が逆ハの字に向いて、威圧感が半端ない。

「来いっ!!」

「グアアアアア!!」

次の瞬間、いきなりティガレックスは口を開け。

ドドドドド!!

(突進!?)

俺めがけて一心不乱に突進してきた。

迫りくる巨体。

まるで工事中の音。

雪などお構いなしに、地を踏み鳴らす、轟竜の足。
何とか横飛びで避ける。

「……大きめに避けないと踏み潰されるな。」

ゾつとする。

だが、間合いを測ることはできた。

『まずは、見！』

教官の言葉が頭に響く。

(サーイエツサー!!)

落ち着け、そうだ。

まずは見る。避けるに徹する。

こちらの狙いは、まずは助けが来るまでこの場をもたせること。
焦るな。

「グギャアアアア!!」

再度吠えるティガレックス。

あまりの大きな声は、強烈の一言である。

(離れているのに………っ！)

この距離で耳が痛いぐらいだ。

山中に響いているのではないだろうか。

「……ギャアアアア!!」

「またかよ!?!」

再び突進をしてくるティガレックス。

念の為間合いに余裕を取りながら避ける。

(正面に立たなければ……いける！)

思ったより冷静な自分。

まだ双剣を構えず、避けるに徹しているからだろうか。

「グアアア!!」

(また引き返して……………。)

無理矢理身を翻して、またも突っ込んでくる。

それも、回避。

だが。

「グアア!!」

「3回!?!」

しつこいぐらいに突進を繰り返すティガレックス。
……………技のレパートリーが少ないのか？

「よっ…………と。」

「グアアアアオ!!」

闘牛士のように突進を回避。

何回も繰り返したからか、間合いをしつかり掴んできた。

(右に大きく3歩ほど…………。)

「グギヤアア!」

ギリギリに避けてみる。

躲す。

「グアアアア!!」

(……………こっ!)

ギリギリに避ける。

躲す。

……………何回やるんだこれ!?

「グウウウウ……………」

執拗に突進ばかり繰り返すティガレックス。

固まっている。

「まるでバカの二つ覚えだ……………なっ!？」

ザツ!

ズウン……………。

初めて違う動きをした。

もう一回突っ込んでくると思ったら、いきなり後ろに飛び退いたのだ。

(何だ？何をしてくる？)

「……………グアアア!!」

右前脚を振りかぶったティガレックス。

突如、地面を殴った。

「岩っ!?!」

その瞬間。

俺の体の半分は有ろうかという岩が、目の前に。

「マジか!速っ…………。」

思うより早く、体は右に倒れる。

左肩を掠める岩石。

チツ、という音とともに、その岩が遙か後方にとんでいった。

スドオン!!

「……………あぶねえ……………」

とんでもない速度で過ぎていった岩が、木に激突。

幹に深く食い込んでいる。

昔バツティングセンターで見た、高速ストレートより速かった……………と思う。

「当たったらやばいな……………って!？」

「グアアアア!!!」

心のスキをつくように、再び突進をしてくるティガレックス。

(間に合ええ!!)

バツ!!

ズザッ!!

横っ飛び。

形振り構わず避けたため、ゴロゴロと雪原を転がる。

「グアアア!!」

吠える轟竜。

(2回目は!?!……無いか。)

流石に疲れたのか、思惑が外れて次の攻撃に移ろうとしているのか。とにかく、ティガレックスは止まった。

(岩石飛ばしと突進のコンビネーション……厄介だな……!)

ティガレックスが、仕掛けてきた。

間合いを取って岩を飛ばし、動揺したところに防御不能な突進。

昔見た格闘ゲームのうまい友人をふと思いつく。

牽制の飛び道具。接近して必殺技。

回避後はどうしても体が止まる。一瞬だけ。

そのスキを突かれた。

(コイツ……………。)

ティガレックスというモンスターの「普通」など分からないが……………。

(……………頭がいいんじゃないか?)

大きく口を開けて愚直に何度も突進する姿。

もがきながら地面をえぐって方向転換する姿。

正直、頭の良いモンスターには見えなかった。

だが、やはり流石、大型モンスター。

戦うことに慣れている。

頭も使っている、と見ていい。

それほどまでに、先ほどの攻撃のコンビネーションは、厄介だった。

「……グアアアアア!!」

「っ!?!」

なんて考えている場合じゃない!

次の動きを始めるティガレックス。

ドドドドド……!!

また突進をして……。

……いや、違う! 姿勢が高い!

俺めがけて……。

(……噛みつき攻撃!)

「ガア！」

「うおおい!!」

ガキン!!

空振りした噛みつき、牙と牙がぶつかり合う音。
聞きたくもない、恐ろしいほどの噛みつき音。

「くっ!!」

「グウウウ……ガア!!」

噛みつきが終わったと思ったら、次は……。

(わからん！けど！絶対何かしてくる!!)

バツ!!

距離をとった。

その後。

「グアッ！」

ブオン!!

一回転。

その巨体を軽々と振り回し、尻尾の横薙ぎを行うティガレックス。間一髪のところ、避けることができた。

(風が来たぞ……。)

風圧が、その威力を物語る。

とつさに後退して正解だった。

その巨体の周りを、回転しながら攻撃してきた。

避けるには、これしか無かった。

(距離をとつても岩飛ばし……こつちがジリ貧になったら突進……近づけば嘯みつき、尻尾の回転攻撃……。)

距離を問わない、技のレパートリー。

技が少ないとか言つてすんません。

すごいよ、このモンスター……。

(……つつ……。)

当たっていないはずだが、尻尾の攻撃の余波なのか。

頬には、わずかだが血が流れていた。

(間合いとつてこれかよ……。)

威力もさることながら、攻撃の範囲も大きい。

咆哮の威力も考えると、正面にいることは得策ではないということはある。

分かるのだが……。

(……教官……見に徹していて尚、こいつのスキが……見当たりません……！)

感じる。

絶望してはいけない。

だが、感じる。

こいつに敵う、術が……隙が……。

「見当たらない……！」

* * * * *

小一時間ほど経つただろうか。

少しずつ村から引き離すことには成功している。

裏を返せば。

俺はこいつ……轟竜ティガレックスの攻撃を、ずっと避け続けているわけである。

キツイ。

気を抜いたら、一気に畳み込まれる。

間違はなく、致命傷を食らってしまふ。

敵う術が見当たらないまま、時間だけが過ぎていく。

俺にとって、その時間は永遠に感じられた。

(頭は冷静……ケガもない……だけど……っ!!)

「グアアアア!!」

跳躍したティガレックスが、俺めがけて爪を立てる。

「くっ……!!」

寸でのところで回避。

直後。

「ギャオアアアア!!」

「…………!!」

突進攻撃。

牙を? き出しにしながら、迫る轟音。

休む暇もない。

「よっ…………とお!!」

ドドドドドド!!

俺のすぐ脇を、凄まじいほどの速さで駆け抜けていく。

…………間違いない。

こいつ…………さつきよりも…………。

(速くなっている…………!!)

戦いはじめよりも、突進のスピード、噛みつきスピードが、徐々に上がってきている。

筋肉が温まり始めたのか、それとも緩急をつけて翻弄しようとしているのか。

とにかく、攻撃がやむことがない。

文字通り、波状攻撃。

寄せては返し、寄せては返し。

その間隔も威力も、徐々に上がってきている。

(厄介どころじゃねえ……!!)

なぜ自分がここまで避け切れているのか、分からない。

体力も上がった、訓練も続けた。

初見の敵も、何とか倒し続けてきた。

その成果だとは思う。

だが、ティガレックスは、明らかに今までの敵とは違う。

グラビモスのように、重く。

トップスピードは、ジンオウガの攻撃にも匹敵する。

ゴシャハギのように、一撃を食らってしまえば最後、そんな強さ。そして、デインバルドのように、怒涛の攻撃を繰り返してくる。これまで出会ってきたモンスターたちの、総決算。

「グアアアアア!!」

またしても、突進攻撃。

(またか………よ!!)

もう一度、回避を試みようとして。

ズリっ。

「!？」

右足が、滑った。

注意してきたはずの、足運び。

村に来て当初から、鍛えてきたはずの、雪山での動き。
それが。

「グアアア!!」

「ぐおっ!!」

ドガア!!

失敗した。

吹っ飛ばされる。

景色が回る。

咄嗟に受け身をとった。

転げまわる自分が、止まらない。

(「くなくそっ……!!」)

体は……動く！

落ち着け！

「ふんっ!!」

右足を伸ばし、手をつき、体制を立て直す。
滑りながら、自分の体を止めた。

(いてえっ……!!)

腕……足……腹……。

(動くか……。)

一瞬で体全体の無事を確認する。

『顔を下げない。常に相手を確認!!』

頭の中の教官が、櫛を飛ばす。
そうだ！すぐにティガレックスを……。

(あれ……?)

いない!?

見失った!?

……いや!!

違う違う違う!!そんなわけないだろう!!

(緊急回避いいいい!!!)

咄嗟に左後方に、転げまわる。

「グアアアアア!!!」

ズドオオン！

直後、俺のいた場所に爪を立てて、ティガレックスが落ちてきた。
いや、落ちたのではない。

俺の死角から、跳躍して攻撃してきたのだ。

(こいつ……俺の見えないところに移動して……！)

モンスターを見失う。

これほど恐ろしいことは無い。

一瞬の判断が、功を奏した。

回避する方向が前方であつたら、おそらくそのまま引き裂かれていた。

右後方に、何か嫌な予感がした。

だから、左後方に避けた。

「お前……頭いいな……。」

思わず口に出してしまった。

「グルルルルル……。」

唸るティガレックス。

反撃の術が、無い。

「マジで……どうしよう……。」

俺は、いつまでたっても。

双剣を構えることができなかつた。

102賢いモンスターを、相手取りましょう。

モンスターに対しての相性。

これは、絶対的に存在する。

極端な話、遅くて鈍い、遠距離攻撃を持たないようなモンスター。

これはもう、ボウガンの出番だ。

じっくりと料理するかのように、少しずつダメージを蓄積していけばよい。

まあそんな簡単な話では済まないのが、大型モンスターなのだが。

今、俺の目の前にいるモンスター。

絶対強者、轟竜ティガレックス。

……はつきり言おう。

双剣、めっちゃ相性悪い気がする。

俺はこれしかできないからしようがないとして。

選択肢があつたら、もう少し間合いの取れる武器。

防御できる武器を選ぶと思う。

「……グアアア!!」

「やべっ!!」

ズドン!

凄まじい音。

ティガレックスが、その右の爪を振り下ろしてきた。
咄嗟に飛び退いたが、威力が凄まじい。

(もし急所に命中したら。)

戦いに、たられれば話など、意味はない。

残るのは結果だけ。

だが、仮定してみる。

頭……胸……金的……。

……致命傷になるのは間違いない。

先程、足運びに失敗し、突進を食らった。

幸い牙には当たらず、両腕でガードできた。

ふっ飛ばされたけど。

……まだ、腕が痛い。

折れてはいない。

だが、その力を存分に味わってしまった。

「グアツ！ギャア!!」

「くっ！ふっ!!」

避ける。避ける。

とにかく転げて、跳んで。

何とか攻撃を躲していく。

「はあっ……はあっ……!」

「グルルル……。」

まずい。

息が上がってきた。

このままでは、ジリ貧。

削られて、削られて。

その先は……………。

(やべえな……………。)

今まで何度となく、命の危機に見舞われてきた。

……………今回も、そんな予感がしてくる。

本能で感じる。

自分の死を。

「グアアア!!」

「くっそ……………!!」

突進攻撃。

明らかに、はじめより速い。

ぎりぎりです。余裕がない。

ティガレックスのスピードが上がり、俺のパフォーマンスは下がっている。そんな余裕は、とうに消えている。

(だめだ！考えろ……！考えろ……！)

躲し続けながら、考える。

どうすればよいか。

生き残るには、コイツを狩るには、どうすればよいか。

当たり前だが、死ぬわけにはいかない。

俺が死んだら、村はどうなる？

壊される。

蹂躪される。

人も死ぬかもしれない。

守る。

みんなを。

これからも、ずっと。

ハンターとして、守り続けたい。

そして……………勝ちたい。

俺は、強くなった。

そんな自分を誇っている。

コイツに……………勝ちたい!!!

「……………よう、ティガレックス。」

「グルルルル……………」

絶対強者なんて、たいへん名誉な名前をもらっているモンスターに。

俺は呼びかけた。

「当たらないや、勝てないぞ?」

「……………ギヤアアア!!」

咆哮。

だが、慣れた。

この音、多少距離を離せば、耐えられないことはない。

……体は竦んでしまうけども。

「っ……………そんなに吠えて、余裕がないのか？」

「グルルル……………」

ジャキン……………!

双剣を取り出す。

勇気を出せ。

振り絞れ。

相手はおそらく、俺史上最強。

だが、やらなければ、やられる。

このままだと、ジリ貧。

なら、やれることをやる。

「ほら、来い。」

正直言つて、めっちゃ怖い。

だけど、そんなこと言つてられない。

意を決して、ティガレックスを呼ぶ。

……頭を回せ。

まずは……。

「グアアア!!」

——卑怯な手を使うぞ。

ドドドド!!

挑発に乗ったティガレックス。

狙い通りの、突進。

だが、今度は避けない。

カチン。

仕掛けた後、バックステップ。

——した直後。

ストオン!

「ガア……………グアツ!!」

「っし!!おらああああ!!」

一目散にティガレックスに、近寄る。

狙いは、その後自慢の牙。

穴にハマった、その顔めがけて、目一杯を。

(叩き込む!!)

ザン！ザシユ！ザザザザン！！

「グアアアアア！！」

落とし穴にハマり、もがくテイガレックス。

頭は激しく左右に振られる。

その動きを読んで、的確に牙を狙う。

ギン！ガギン！！

ザシユ！！ザザザザン！

「グアアアア……！！」

激しく爪を立て、必死に落とし穴から抜け出ようとするティガレックス。
おそろくあと5……………4……………3……………2……………1……………!

(……………退避!!)

「ガアアアア!!!」

ズウン……………。

ズル……………。

穴からようやく抜け出したティガレックス。

(……………上手くハマってくれたな。)

卑怯な手。

そう、落とし穴を使った。

ギフトで。

俺のギフトは、アイテムを選べば、即使用が可能。

ポントと選べばハイ不思議。

設置完了である。

目の前にいながら、何もしていないのに落とし穴ができていて、ティガレックスは困惑したことだろう。

……卑怯な手だ。俺にしか使えない手。

だがすまん。

このやり方しか、思い浮かばなかった。

「悪いな……ティガレックス。お前は強い。」

「……………グルルルル！」

「だから……………」

「……………ガアツ!!」

牙を立て、もう一度突進するティガレックス。

カチン。

ボックスステップ。

ビリビリ!!

「グアアアアアア?!」

今度は、シビレ罨。

罨ハメ、つてやつだ。

デイノバルトにやった、この戦法。

卑怯というほか、あるまい。

「うらあ!!」

ザシユ!

「グアアア!!」

「鬼人化……!!」

ザン!

ザシュ! ザザザザザ! ザザン!

「ギャア!!」

シビレ罨の効力が切れる前に、離脱。

目一杯を、叩き込んだ。

「グルルルル……!!」

「怒るよな……そりゃ。」

唸り声に、怒気がこもっている。

「こいつ、何しやがった?」 って感じ。

はい、卑怯なことをしました。

神のギフトってやつです。
すんません。

「悪いな、こんなやり方しかできなくて。だが……。」

「……………グルルル……………」

ティガレックスは、二の足を踏んでいる。
困惑。

目の前の小さな存在が、何もしていないのに自分を2度も罨にはめた。

そう思っていることだろう。

すると、次は中々踏み込めない。

また何かされるのでは。

落とされるか、痺れさせるか。

はたまた違う手か。

「そして、賢いお前なら……………」

「……………グアッ！」

バツ。

後方に下がるティガレックス。

「距離を取るよな。そして……。」

「ガアアアアアアア!!!」

ズサッ!

ティガレックスが跳躍。

俺めがけて、爪を立ててくる。

(そう来るよな。)

地面になにかある。

なら、そこを飛び越えて、攻撃すればいい。

……賢いこいつなら、そう来ると思っていた。

(……………いっ！)

だが、動きがわかるなら、単純。

着地後に起きる、その技後硬直を狙って……。

「……………ふっ！」

ザッ。

俺はギリギリのタイミングでバックステップ。

そして。

(空中回転乱舞……!!)

着地後のティガレックス、その頭めがけて。

跳躍した。

「……………うらあああ!!」

「グアアア!!」

ザシユ! ザザザザン!

ズザツ! ザザザン!

「よつと……………!」

バツ。

攻撃後、すぐに距離を取る。

追撃は、しない。

「……………ガアアアア!!」

「つゝ!!」

凄まじい咆哮。

距離を取ってよかった。

近かったらあれ、鼓膜やられるぞ……。

「……………はあっ……………はあっ……………」

「……………グル、グルルル……………」

心なしか、ティガレックスも疲れているように見える。

攻撃が、効いている。

良かった、これでノーダメージとかだったら、心が折れるぞ。

「ふう……………」

「……………グアッ!!」

短く吠えるティガレックス。

だが、そこから動かない。

罨を仕掛けたら、絶対に地面を警戒すると思った。

ならば、ヤツの次の動きは何か。

おそらくは……跳躍して、俺に最短距離で攻撃してくる。

そう、読んだ。

罨が怖いなら、翔べばいい。

そう考えてくると思った。

賢い、こいつなら。

だから、その動きの裏をついた。

相手が着地する、そのタイミングを狙って、攻撃。

爪を避けながら、攻撃できる手段。

そう、俺も跳べばいい。

空中回転乱舞で。

「グアアア!!」

「そしたら次は、……そう来るよなっ!!」

バツ。

再び後退したティガレックス。
間髪入れずに、繰り出す攻撃は。

(多分！岩飛ばし!!)

突進してもダメ。

跳躍してもダメ。

なら次は？

……遠距離攻撃だろう。

では、俺がやることは？

簡単な話。

(岩を飛ばす前に……近づく!!)

「鬼人化……!」

スピードを上げる。

少しでも速く、少しでも早く、ヤツの懐へ。

振り上げた爪が、地面を抉る前に。

「ガアッ!!」

狙い通り、地に向けて爪を立てようとするティガレックス。

だが、遅い。

動きは、読んでいる。

「……………あああああ!!」

「グアアアア!!」

爪を振り下ろすその目の前に、辿り着いた俺は。

（回転……………!）

その振り下ろされる爪を掻い潜るように、前へ、前へ。
見上げれば、ティガレックスの顔。
それに、めがけて。

「…………ふっ!!」

(空中回転乱舞!!)

ズザン!

ザシユ!ザザザザザン!

ザザン!

回転しながら跳躍して、落下し始める体。

正面には、着地したくない。

ならば。

(このまま……背中を……!!)

「グアアア!!」

急襲して来た俺に、声を上げるティガレックス。
その顔を確認する間もなく。

「ぬあああ!!」

ザシユ！ザザザザザザザン！

ズザン！

ティガレックスの山の尾根を下った。
背中を転がるように、斬撃を与え。

ズザン！

「ギャア！」

着地。

場所は、ティガレックスの後方。

(……………うまくいった!!)

バツ！

距離を取る。

「……………グル、ガアツ……………！」

「はあっ……………はあっ……………はあっ……………」

息を短く吐いて、呼吸を整える。

ティガレックスは、こちらに向き直る。

……………ティガレックスの動きが、遅い……………？

明らかに、ダメージを食らって辛そうにしている……ように見える。

(初めてやったが……うまくいったな。)

空中回転乱舞。

この技の最も怖いところは、技の後の硬直。

正面にいたままそれが起きては、致命傷を喰らいかねない。

だから、試した。

ティガレックスを見下ろしながら、何とかヤツの後方に着地する。

どうしたらいいか。

……背中を伝って行けばいい。

アホな発想だと思ったが、必死だった。

回転を上げ、坂を下る歯車のように、斬撃。

着地したのは、ティガレックスの後方。

狙いが、うまくいった。

(これ……もう一度やれって言われて……できるかなあ……?)

敵しいと思う。

どうやってやったのか、自分事ながら何となくしか分からない。
分からないが……。

「グルルルル……。」

ティガレックスの、絶対強者の戸惑いを引き出すのには、十分な攻撃だったようだ。
威圧的な目をしながらも、ティガレックスは固まっている。

迷え、迷え。

そして、攻撃してこい。

俺は、その全てを。

「……受け切ってやる。」

* * * * *

「ふっ！はっ！！」

「ギャア！！グアア！！」

避ける。

仕掛ける。

動きを読んで。

あるいは、誘導して。

後の先を取る。

「……はっ！！」

カチッ。

バリバリバリバリ！！

「グアアアアア！！」

シビレ罨が発動する。

急いで砥石を使用。

双剣の斬れ味を戻す。

(落ち着け……落ち着け……。)

罨にかかっているとはいえ、モンスターの前で研ぐのは怖い。

それがティガレックスなら、尚の事。

何度も何度も繰り返してきた動きなのに、体がこわばる。

「ふうー……。」

深く息を吐いて、慎重に、素早く研いだ。

(3……………2……………1……………。)

「グアアアアア!!」

「くっ!!」

ダツ!

後退する。

刀は、研げた。

「何とか間に合ったな……。」

「グルルルル……。」

ギリギリのところ、研磨が完了。

危なかった。

(シビレ罨の効力が、少しずつ短くなっている……耐性がついてきたか。)

体感、毎回1秒弱ほど、シビレ罨の効果時間が短くなってきた。

その計算に合わせて、カウントをしているが……。

(今までに使った罨は、シビレ罨3回、落とし穴4回……効果がどんどん薄くなってきたるな……。)

罨を使った戦法は、いつまでも通じるわけではない。

モンスターも、慣れてくるのだ。

これは、教官から教わったこと。

そもそもモンスターの中でも最強と呼ばれる部類は、罨が効きにくかったり、或いは効果がなかったりするらしい。

この戦法も、潮時というわけだ。

(研ぐ時間ぐらいは、あと2、3回は稼げるかな……?)

冷静に考えて、研ぐ時間を確保できそうなのは、あと2、3回。

怒涛のように攻撃をしてくるこいつは、研いでいる暇など与えてくれない。

罨が効きそうな残りの回数的に考えて、それぐらいだと計算する。

「……グルルル……。」

「またか……？何なんだ……？？」

先ほどから、ティガレックスの挙動が、少しおかしい。

俺の攻撃を受け、ダメージを負ったと思ったら、一瞬だけ目が空を向くのだ。

こんな動き、他のモンスターには見られなかった。

何を考えている……？

スツ……。

考えても仕方のないことは、頭の片隅に一応置いておいて。

眼前のティガレックスに集中し、双剣を構える。

……動きを読んで、避けて、攻撃して。

かなりの数の斬撃を叩き込んできた。

牙の片方を破壊、尻尾の方も、恐らくもうすぐ斬れる。

なんとなくだけど、分かる。

そんな予感が、する。

……だが、違和感がぬぐえない。

先ほどから、ティガレックスがおかしい。

まるで、俺の攻撃を読んできているような。

何かを待っているかのような、そんな予感がするのだ。

「何を仕掛けてくる気だ……?」

「……グルルルル……ガアア……。」

突如、ティガレックスが伏せた。

いや、元から4足歩行なのだが、さらにその身を低くした。
攻撃の構え。

(……絶対に、避ける。技後硬直を、狙う。)

そんな考えを持った。

その直後。

フツ。

「!？」

ティガレックスが、消えた。

(何!?!どこだ!?!どこにいる!?!)

落ち着けば分かることだった。

消えたのでは無かった。

ティガレックスは。

「グアアアアアアアアアア!!」

「なっ!?!」

ただ俺に向かって。

ドガア!!

「ぐうああ!!」

ドンッ……ドン!

ゴロゴロゴロゴロ……。

ドン!

木にぶつかる俺。

ティガレックスは突っ込んできたただけだった。

(じゃあ何故見失った!?……一瞬消えた……いや!!)

全身痛む体を、起こす。

体中にまとわりついた雪は、無視。

とにかく、視認できる態勢に……。

……マジかよ……。

ティガレックスは、そこにいた。

だが、見えにくくなっていた。

どういうことか。

「月か……!!」

「……グルルルル……。」

今までの戦いで、月明りを頼りに戦っていた俺。

だが、目の端にとらえた月は、雲に隠れてしまっていた。

雲など、無かったはずだが……発生したのか。

(雲に月が隠れる、その瞬間を利用したのか……?)

だとすれば、こいつ、賢いなんてもんじゃないぞ。

……自然の状況をしつかり見極め、攻撃してきたというのか。

頭良すぎるだろ。

効果覲面だよチクシヨウ。

「ぐうつ?!」

ズキイ!!

もろにやられた。

双剣で受ける余裕もなかった。

呼吸の度に、両わき腹が激しく痛む。

(肋骨が、イカれた…!!)

腕も足も腹も頭も、すべてが痛い。

だが、耐えられないほどではない。

問題は、肋骨。

折れてる。めっちゃ痛い。

「ぐっ………いつてえ………」

思わず口に出すほどの、激痛。

あまり苦しい顔をしてはいけない。

モンスターに、隙があると思われるから。

だが………あまりにも強烈だった。

おれは、こんな一撃を、今まで避け続けていたのか。

強いなんてもんじゃない。

刻まれる、ティガレックスの恐ろしさ。

恐怖。

だが。

「………でもな………」

「グルルルル………」

こんな痛み、こんなケガ。

「初めてじゃないんだよ。……こちとら、耐えることには定評のある、元日本人でね。」

デイノバルトの強烈な、あの一撃に比べれば。

セツヒトさんや教官の、アホみたいな速さに比べれば。

「……楽勝だ!!!」

「グアアアア!!」

俺を見て、好機と捉えたか。

そこから、ティガレックスの更なる猛攻が始まった。

「グアアアアア!!!」

咆哮。

「ギアア!!グアア!!」

後退してからの、跳躍攻撃。

「ガアア!!」

からの、尻尾回転攻撃。

その全ての攻撃を、見切って避ける。
避ける。

「ガアアアア!!」

爪!

「ふんっ!!」

シユン！

目の前を、ティガレックスの爪が通過する。
スウエーで避ける。

間一髪!!

「あぶねえ!!……あでで……。」

「グアアア!!!」

腹部が痛み、声を上げる俺。

同じく、苛立たし気に声を上げるティガレックス。

お前の攻撃、大体は分かった。

もう、遅れは取らない。

攻撃を、避け続ける。

双剣は構えたまま。

いつか、隙ができたなら、反撃に転じたい。

しかし。

「グア！グアア！！ガア！！」

「ふっ……うおおっ！！」

避け続けていては、ジリ貧。

話が、また戻ってしまった。

息を吹き返したかのように、怒涛の攻撃を繰り返すテイガレックス。
罨ももう、あまり効かないだろう。

（くそっ！…どうしたら……い！）

とにかく避けて、後退し続けながら。

「グアアアアアアアア！！！！」

俺は、ただひたすらに、チャンスを待ち続けた。

103 編み出しましょう。

ティガレックスの狩猟を始めて、何時間経っただろうか。

東の山、ほんのりと空が白み始めてきている。

明けて朝が来れば、近隣の町に支援を求めることができる。

おそらく支援のハンターが来るまで、あと数時間。

それまで、この場を持たせる。

……できるかどうかは、分からないが。

やるしかないのだ。

「ふん！……うおおつと!?!」

「グアア！ガアア!!」

先ほどからティガレックスの攻撃を避けながら、その隙に反撃できないか試みてい

る。

ティガレックスが跳躍してからの振り下ろしを、後退し、空中回転乱舞で反撃することはできた。

すでに4回成功している。

だがそれ以降、跳躍攻撃はしてこなくなった。

警戒されてしまったのだろう。

そして今、攻撃の主体は、近距離の格闘になっている。

まるでインファイトボクサーのように、俺を捉えて離さないティガレックス。方や俺は、避けるに避け続け、逃げながらも隙を見て反撃している。

「くっ…!!」

バツ!

バックステップ。

(回復薬グレート……。)

ゴクン。

飲み干した、その直後。

「ギャアアア!!」

「アイテムなんぞ使ってんじゃねえ!!」と突っ込むかの如く、突進してくるティガレックス。

(緊急回避い!!)

バツ!

ゴロゴロ。

「……つたく!!ろくに回復もできない……な!!」

削られた体力を戻すための回復薬は、飲んだ後に安静にすることで、最も効力を発揮

する。

逆に、今のように飲んだ後急に動いてしまうと、その効果は激減する。

俺は反則技とも言うべき「アイテムポーチ」から、瞬時に回復薬を選択して回復することができる。

だが、ティガレックスがすぐに突っ込んでくるのだ。

体力を回復する隙を与えてくれない。

まるで、アイテムの効力をかき消そうとするかのごとく、である。

(正直……結構ヤバいな……。)

消耗が激しい。

スタミナも体力も、底をつきそうだ。

回復も許してくれないほどの、攻撃の連続。

先ほどは罨で勢いを止め、そこから相手の動きを読んで、反撃に転じることができた。だが今、その戦法は通じにくいだろう。

根拠は2つ。

一つは、罨の効果時間が少なくなってきたからだ。

これ以上罨を使えば、恐らく武器を研ぐ時間の確保さえままならないだろう。研磨ができなくなれば、双剣使いは終わり。

大切に使いたい。

それに、本当に本当のピンチが起きた時の為に、切り札は取っておきたい。もう一つは、ティガレックスの動きが、変化してきているということ。

恐ろしい話だが、フェイントを混ぜた攻撃をしてくるようになってきた。

跳躍攻撃から爪で切り裂くかと思いきや、尻尾で回転攻撃に転じたり。

噛みつき攻撃を行うかと思ったら、キャンセルして咆哮をあげたり。

おかげで何度か攻撃を受けてしまっている。

直撃は免れたが、そんなフェイントをしてくること自体が、衝撃であった。

……やはり、このティガレックス。賢い。

罨を仕掛けようにも、動きを読むのが難しくなってきた。

空振りですわってしまう可能性も、0では無い。

「はあっ……はあっ……ふうー。」

「グルルル……。」

互いに疲れている。

ティガレックスも、苦しい顔をしている……ように見える。

だが、攻撃は依然として苛烈。

むしろ、その威力は増すばかりである。

「ガアアア!!」

「ぐっ……ちくしょっ……!!」

バツ!

ズザン!

何度目か分からない、ティガレックスの突進。

速い。

横方向に飛び退いて、反撃。

だが、無理な態勢での斬撃は、力が乗らない。

怯ませることすらままならない。

「ギャアオオオオ!!」

「ふんっ!.....ってあぶねえ!」

ビュオン!

バツ!

今度は.....噛みつき攻撃!

バックステップで回避。

「気抜いたら.....死ぬな.....。」

「グルルル.....!」

ずっと、一進一退。

いや、押されているのは、俺。

再びのジリ貧。

(考えろ……考えろ……!!)

このままでは、まずい。

回避しながら、頭をマルチにフル回転させる。

何か攻撃できる手立ては無いか。

避け続けているだけではダメなのだ。その結果が、今なのだから。

攻撃の連続。

反撃の暇は、その切れ目にしか……。

………?

攻撃の切れ目……。

………何か、引つかかる。

そういえば以前……セツヒトさんに相談した……。

.....。

『……俺、以前ディノバルドと対峙したとき、空中回転乱舞で攻撃を避けられたんですけど……何でですかね?』

『おー?どゆことー?』

『えーつと……こう、無我夢中で憑依状態で空中回転乱舞を行ったら……なんて言うか、攻撃をいなしながら?反撃できたんです。』

『ふんふん。』

『よくわからないんですけど……その時なぜかできたんですよ……。』

『……んー。……ジャスト回避……つてのがあるんだけど……それに近いのかなあ……いやでも、反撃できたつてのがな……。』

『……。』

『……ちよつち、考えてみるー。』

『わ、分かりました。でもそこまで考えてくださらなくてもいいですよ?そもそもできるかどうかも分かりませんし。』

.....。

……あの時は明確な答えは分からなかったけど。
ディノバルドに一撃を見舞うことができた、その理由。
全くわからなくて……セツヒトさんに相談して……。

「グアオオオオ！」

「やべっ!!」

横にすっ転ぶ。

直後、爪を立てて、先程まで俺がいた地面を抉るティガレックス。

(考えている暇が、無い……ならっ……!!)

アイテムポーチに手を伸ばす。

掴んだのは、閃光玉。

ブン!

ピカア!!

「ギャアオオオオ?!」

炸裂する光に、怯んだティガレックス。

2、3歩後退すると。

「ガアアア!ガアアア!!」

混乱しながら、辺りを無作為に攻撃し始めた。

(距離を取って……。)

なるべく音を立てないように、俺もその場を離れる。

距離にして、15m程。

その向こうでは、ティガレックスがめちやくちやに攻撃をしている。

(よしっ……。)

視界を奪うことに成功した。

ティガレックスは、俺がどこにいるかもわからず、無茶苦茶に動いている。

まあ、ほんの十数秒ほどだろうけど。

だが、考えをまとめるには十分。

思い出せ。

デインバルトの時は、俺はどうしたか。

確か、あの時は満身創痍。

ろくに力も入らないまま、憑依状態に移行。

折れた骨など知ったことかと、まだ未習得の空中回転乱舞を繰り出した。

目の前には、デインバルトの牙が迫っていた。

明らかに、致命傷は免れないようなタイミング。

なのに、縦に回転した俺の体は、攻撃を避けた。

そして、その牙めがけて、一閃。

気づいたら、デインバルトは倒れていて……。

……ダメだ。思い出せるのはそこだけ。

分かるのは、あのありえないタイミングで繰り出した攻撃が、効いたということ。俺にはデインバルトの牙が届かなかった……いや、届いていたのに無効化できた。

………今、それを再現できるか？

………やってみないとわからない。

あの時とは、状況も違う。

タイミングを間違えれば、おそらく終わり。

俺の、命の。

そんな賭けに出られるのか？

このままギリ貧を続ければ、助けが来るかもしれない。

空は明るくなってきた。

救援を待つのも、一つ。

だが………。

「……………やりたいよな……………」

……………悔しいのだ。

ギフトに頼って、罨を張り、アイテムを使つて。

自分の力とは胸を張つて言えない、そんな戦いでここまで来れた。

……………マシヨルク教官に、セツヒトさんに追いつけるのか。

そんなやり方で。

……………到底無理だろう。

なら。

「……………やるか。」

スウツ。

息を、深く吸う。

ハアー。

吐く。

脱力。

多分あの時、俺の体は力など入っていなかったから。
怪我のせいで。

再現する。

あの時の状況を。

思いだせ。

「……………」

「ガアアア……………グアツ!!」

ようやく視界が戻ったティガレックス。

俺を見据え、態勢を整える。

「……………グルルル……………」

突進をするか。

それとも嘯みつきか。

いずれにせよ、攻撃をギリギリまで引き付ける必要がある。

あの時も、ありえないぐらいのタイミングだった。

もう、寸前というレベル。

そんな一瞬を。

(……………読み切る！)

「グアア!!!」

突如、ティガレックスが走り出す。

俺めがけて、殺しにかかる。

ここまで、こいつの行動を穴が空くほど見てきた。

……首が入っている。

このモーションは、おそらく。

(噛みつき。)

ヤマを張る。

多分、閃光玉のおかげで、ティガレックスは怒り狂っている。
そんな時ほど、モンスターの動きは単調になる。
単なる俺の経験則だけ。

ドスン!

ドドドドド!!

重機のような音を立てて、俺に迫るティガレックス。
強張るな。力を抜け。

直前まで。

ヤツが肉薄する、その直前まで。

(集中……。)

フウー。

息を吐きながら、ダランと構える。

ティガレックスは何を思うか。

或いは、何も思っていないか。

こんな隙だらけの俺を見て。

「グアッ！」

声を上げると同時に、大きく口を開けるティガレックス。

やはり、嘔みつき。

しかも、特大の。

「絶対に食いちぎってやる」という意思を感じる。

(まだ……。)

スローになる世界。

集中が、研ぎ澄まされている。

本来の回避タイミングは、過ぎた。

ここからは、未知の領域。

傍から見れば、ただの自殺にしか見えないだろう。

そんな、嘘みたいなタイミングで。

(……………今っ!!)

倒れ込むように、前へ。

瞬間、鬼神化。

加速。

右足を、地につけ。

(空中回転乱舞……!!)

避けられるわけもない、そんなタイミングで。

俺は、攻撃を繰り出した。

高速に縦に回転する。

あのと時と同じ。

肉薄するティガレックスの牙。

捻転を駆使して、更に回転を上げる。

確か、こんな感じだったと思うから。

「…………ぬあああああ!!!」

モーターでも付いてるのかと思うほどに、体をひねり、回して。

ザン!

俺は、跳躍した。

跳べた。

肩には、痛みが残る。

おそらく、ティガレックスの牙に当たった。

だが、それ以外にダメージはない。

そのまま俺は、斬撃を返して。

「グアアアア!?!」

ヤツの攻撃をいなした。

否、いなして、反撃した。

ザン！ザシユツ!!

……ストン。

ティガレックスの左側に着地。

(成功した!? ヤツは!?)

振り向く。

「……………グアアア……………!」

ティガレックスが、苦悶の表情を上げていた。
憎々しげに、こちらを睨みつける。

その口には、血。

(反撃……………できた……………!)

ポタポタと滴る、ティガレックスの血が見える。

……………どうやら、威力は十分だったらしい。

不意に口を開けたティガレックスの牙は、数本欠けていた。

……………鬼人化し、回転して、攻撃をいなす。

おそらく、このカウンター技に大事なものは、そこ。

その回転に必要なのは、脱力。

そして何より、タイミング。

もはや、当たるために回避をしているかのような。

言葉は矛盾しているが……やっていることは、そうなのだ。

事実、俺はティガレックスの牙を折った。

「……いける！」

ダッ！

近づく。

狙うは、弱ったティガレックス。

「グアアアア!!」

負けじと右脚を上げ、牙を振り下ろしてくる。

(タイミング!!)

再び、鬼人化、回転。

次は、跳躍を低く。

脱力。

捻転。

「ふんっ！」

ギイン!

双剣で爪を受ける。

そのまま……。

(縦回転!)

振り下ろされるティガレックスの前脚。

その勢いを受け、再び空中に剣を放る。力を、利用して。

激しく回る。

(これ……きつつい……！)

両腕に来る圧が半端ない。

出来得る限り脱力して、ムチのようにしなる肩から先。

コントロールが難しい。

だが、ティガレックスの振り下ろしは、俺をかすめて地に刺さり。

一方の俺の斬撃は、ティガレックスの右足から翼にかけて深く抉りこまれた。

ズサ！ズザザン！

手応え、あり。

「ギャオオオ!!」

苦しげな声を上げるティガレックス。

俺の方は……肩の痛みと、肋骨の激しい痛み。

そして、顔に裂傷を食らった。

頬から顎にかけて滴る血。

だが、問題ない。

直撃を免れ、相手には深くダメージを与えられる。

この技……いける!!

「ぬああああ!!!」

「ガアアアアア!!」

激しく攻撃を繰り返すティガレックス。

その手が止むことは無い。

俺は、そのほぼ全てに対して。

(カウンター!!)

タイミングをきっちり合わせ、反撃を食らわせた。

* * * * *

「はあっ……はあっ……。」

「グルル……ガアアア……。」

俺が反撃を試みてから、またしばらく。

ティガレックスの息が浅く、力もない。

空は完全に明るくなり、陽光が眩しく辺りを照らし始めた。

眼前には、傷だらけの轟竜。

そして、傷だらけの俺。

(浅い傷だが……繰り返すとかなりキツイ……。)

ジリ貧の中、編み出したカウンター技。

強烈な回転を何度も何度も繰り返したため、体の側部から末端が痺れている。血液が、偏っているのか。

それに、タイミングがシビアで、精神的な消耗も激しい。

疲れ切ったところに、俺はアイテムを口にした。

イシザキさんからもらった、秘薬。

体力がもどり、意識がクリアになった。

それでもなお、ティガレックスの攻撃は苛烈。

秘薬を飲んだとはいえ、体の状態が万全になったわけではない。

猛攻を避け、いなし、反撃し。

カウンター技で、追い詰めた。

「……………グアアア……………」

「……………」

目に見えて苦しそうな、ティガレックス。

「お前は、何でここに来たんだ……?」
「グルルル……。」

返ってくるわけもない、問いかけ。
それでも俺は、続ける。

「まあ、生きるため……ただそれだけ……なんだよな?」
「……………グアアアア!!!」

咆哮。

だが、力はない。

怯まされることも、無い。

「ガアッ!!」

すっかり折れた爪を立て、なおも攻撃するティガレックス。

ヒュッ。

短く息を吸って、双剣を繰り出す。

ザン！ザシユ！！

「ギヤアアアオ!!!……………グア!!!」

「……………」

俺は、ハンター。

命の上に、立たせてもらっている、ただのハンター。

ティガレックス。

お前は強かった。

何度も追い詰められた。

でも、諦めるわけにはいかなかった。

「俺も、生きるためなんだ。俺が生きるため、俺の周りの人たちを守る。その営みを、守

る。それが……俺なんだ。」

「……グルルルル。」

「許さなくていい。」

「……ガアアアア!!!」

「……恨んでくれ。」

短く跳躍。

既に牙の折れた、その噛みつき目掛けて。

(鬼人化……!!)

タイミングを図った、回避。

まるで攻撃に突っ込むように回転斬りを繰り返す。

ザシュ!!ザザザザン!!

「グアッ!!」

ザザザザザン!!ザン!!

「グアアアア……。」

スタツ。

俺が着地すると同時に。

ズウン……。

音を立てて、ティガレックスが崩れ落ちた。

「ガ……ガアアア……。」

地にひれ伏してなお、目は俺を睨みつけている。

「お前は……強かった……。」

「グウウウ……。」

「……っ!!!」

ヒュッ!!

ザン
!!!!!!

その脳天目掛けて、俺は双剣を振り下ろした。

「ガア………。」

………。

* * * * *

ボシユッ!

シューウウウウ……。

「……………おお……………飛んだ飛んだ……………」

テイガレックスの亡骸の横。

俺は信号弾を飛ばした。

「あ……………しんどい……………」

ボスツ。

雪に身を預ける。

フカフカの雪ではない。

水気を孕んだ、少しシャーベット状の雪。

「冷つてえ……………ああ……………生きてるわ、俺。」

頭が冷えてきた。

今更、自分が行った狩猟のアホさ加減に、反省している。
モンスターへの攻撃を避ける。

それはまあいい。

だが、自ら当たりに行くアホが、どこにいるというのだ。

しかも、それをいなしして反撃を試みるアホなど、どこにいるというのだ。

……ここにいるんだよなあ……。

何とも恐ろしいことをしたと思う。

だって……あんな怖いヤツの攻撃、受けに行くんだぞ？

おっそろしい。

……もう一度、ティガレックスの亡骸を見る。

……口から下をデロンと出して、横たわる巨体。

いや、怖い。

よく集中が続いたと思う。

死んだ姿を見て怖いのだ。

生きている姿なんて、もう心底怖かったのに。

……どこかスイッチが入ったんだと思う。

人が変わったように、集中できた。

次の狩猟からは、この集中力を持続して……あのカウンター技を磨くことにしよう。強敵を屠ることができた。

……100%自分の力、とは言えないが。

5割ぐらいはギフトに頼らず、頑張れたと思う。

「……ハイビスさんと、ポポノタン食べなきゃな。」

昨夜の約束を思い出す。

そういえば、ティガレックスの好物もポポだった。

……死闘を繰り広げた相手の好物を食べるなんて……何か罰当たりな感じもする。

だが、俺もポポが好きだ。

ティガレックス、お前の代わりに食べることにするぞ。

だって、うまいんだもん。

ポポノタン。

「……ーい。おーい!!」

「お？」

遠くから聞こえる人の声。

「おーい!!生きてるかー!!」

「あー!!大丈夫だー!!」

遠く、タオカカ方面から人がやってくる。

敵つい装備をしたでかい男……多分ハンターだな。

俺は大きく手を振り。

「ふうー。」

深く、息を吐いた。

白く濁る吐息が、朝日を受けて立ち昇る。

見上げると、快晴の空が広がっていた。

104完了報告をしましょう。

徹夜明け。

学生時代は、飲みや麻雀などの付き合いで朝まで、なんてこともしばしばあった。

変なテンションになるわ、次の日最悪のコンディションだわで、いい思い出はあまりない。

ティガレックスの狩猟は、夜に始まり朝終わった。

久々の徹夜明け。

考えたら、こつちに来てからは初めてかもしれない。

だが、今朝は少し気持ちがいい。

ポポ車に揺られ、ゆっくりと進むその道のり。

なんとかやり遂げたという達成感が、ちよつとだけ徹夜明けの体を元気にしてくれる。

……まあ、体は疲労困憊。

小さな傷や打撲は数えたらキリが無い程。

そんな状態なんだけど。

御者の方や救援のハンター達には、いたく心配された。

「こんな傷だらけで、よく無事だったな……。」と、若干引かれた。うん、自分でもそう思う。

編み出した技。

仮に……回避攻撃と名付けよう。

その回避攻撃の弊害の一つが、この傷だらけの体かもしれない。骨折や重度の裂傷こそ負っていないが、小さい傷が無数につく。

攻撃を受けながら躲すのだから、まあ当たり前といえど当たり前だ。むしろこれだけで済んで、良かった。

シヨウコあたりに言ったら、こっぴどく叱られそうな技である。切り札……として考えておこう。

長時間傷ついたままで戦闘に臨むのは、おそらくキツイ何より、周りに引かれるし。

……頼むからジロジロ見ないでくれませんか……。

救援に来てくれたハンターたちは、3人。

いずれも、タオカカでもトップランカーの方々……らしい。

……名前は知らないが、御者の方がそう言っていた。

ティガレックスを倒すための、編成なのだろうが……その方々からジロジロと見られている気がする。

……スキル、気にしないを発動した俺は、ポポ車の振動に何とか眠らないよう踏ん張りながら、ミヨシまで帰っていくのであった。

* * * * *

「よう、若いの。」

「あ、はい。俺ですか?」

ミヨシに着いて礼を言い、ギルドに向かおうとした時、野太い声に呼び止められた。

救援に来てくれたハンターの一人。

おそらくその中でも、リーダー格の人だと思う。

「……………おめえ、名はなんだ。」

「あ、ソウジ、です。」

「武器と、ハンターランクは？」

「双剣で……多分4とかです」

「……はあああ!?!」

まるでキレたように返してくるリーダー格のハンター。

……なんか悪いことしたか!?

「……ハンター歴は？」

「へ？」

「だから、ハンター歴だよ。双剣を握って、どれぐらいだ。」

「……ええつと……おそらく、一年弱ぐらい……ですかね。」

「はあああああ!?!」

またキレられた。

ハンター全員に。

キレてるよ。

だつて青筋立ってるもん。

「……………と、討伐歴は!? 今まで何していた!？」

「え、えーつと……………」

「まあまあ、リーダー!!」

「落ち着いてください!!ビビってるじゃないですか!!」

周りの男性二人が押さえる。

やはりリーダーだったのか、この男の人。

丸太のように太い腕。

武器は馬鹿でかいヘビイボウガン……………だと思ふ。

大剣とかハンマーとか似合いそうだけど。

取り巻きのような二人は、完全にイケメン。

顎に髭を生やしたワイルドな感じのイケメンと、アイドルみたいな顔つきの可愛い感じのイケメン君。

……………怖い人、ワイルドさん、アイドルさんと覚えておこう。

……………なんてバランスの悪い組み合わせなんだ。

眠いので、何となくこれまでの経緯を伝えていった。

やはり俺ぐらいのやつがティガレックスを狩るなど、ありえないことなんだろうな……。

いや、よくやったよ、俺。

………。

ひとまず、彼らは宿をとって、明日にはタオカカに帰るということだった。

俺がティガレックスにやられていたら、助けに入るその姿が見られたかもしれない。

だが、その実力を見ることなく、別れた。

まあ、またどこかで会うこともあるだろう。

そんなこんなで、ようやく俺はギルドにたどり着いた。

多分、時刻は昼前。

狩猟にだいぶ掛かってしまったな。

急いで報告しなくては。

グイイ……。

ギルドの扉を開けた。

「「うおー……!!」」

その瞬間。

物凄い歓声。

人々の沸き立つ大音量。

「ソウジュー!! あんたすげえよ!!」

「あの轟竜やったのか!? 本当か!？」

「今日も祝いだ!!」

ワーワーと囃し立てられる。

……いやらしい話だが、まあ想像はしていた。

褒められるかなー、位には。

だが、これは想像以上。

……気恥ずかしい。

「ど、どうも。あ、どうも。お、す、すみません。」

あ、とか、お、とか、言葉一つ置いて話してしまうのは、日本人の癖なんだろう。

拍手をされ、握手を求められ、それに応じながら、どうしても日本式のお辞儀を
してしまう。

だが、周りはそんなのお構いなし。

もみくちやにされながら、俺は受付に向かっていく。

「ソウジさん!!」

「あ、ハイビスさん。」

ようやく見知った顔に出会えた。

いや、今までの人たちもなんとなく顔は覚えているんだが……名前と一致していない

し、そもそも知らない人もいたし。

ちよつと安心。

「す、すみません。遅くなりましたが、ティガレックスの討伐、完了です。」

「はいっ！………ほ、本当に………おがえりなさいですう………うう………!!」

「えっ!? な、なんで泣くんですか!? ハイビスさん!」

「だって………傷だらけで………帰ってきてくれただけでもうれじいのに………ううう………!!」

おいおい。

参った。

ハイビスさん、仕事に関してはめちやくちや優秀なものだから。

泣くなんて、想像もしてなかった。

「お、落ち着いてください………! ほら、俺、ピンピンしてますよ! 見た目傷だらけですけど………大丈夫ですつて!」

「グズツ………はいっ!………よくぞ、ご無事で!………グズツ。」

鼻をすするハイビスさん。

……………美人が台無しかと思いきや、これまた絵になる美しさ。

これだから美人は得である。

だつて可愛いんだもの。

「はい……………ただいま帰りました。」

「……………はい。……………すうつ……………おかえりなさい、ソウジさん！」

一息おいて、いつもの顔を見せてくれたハイビスさん。

良かった。仕事モードに切り替わったか。

「……………。」

「……………うつ……………うえええええん……………！」

「切り替わってない!？」

ハイビスさんが本当にいつも通りになるまで。

俺は、あたふたするばかりであった。

* * * * *

「……で、では！気を取り直しまして！」

「はい。」

「く、クエストの完了報告を承らせていただきます！」

「はい。」

あれから大変だった。

あんまりハイビスさんが泣くものだから、俺も困惑。

実は一緒に生活していると誰かが話し始めたものだからさあ大変。
有る事無い事、話が盛りに盛られていき。

「あの二人……できてんじゃねえの？」

と、邪推が遙か彼方まで進むところで、アワキ村長が登場。

助かった……と思ったら。

村長さんまで男泣きしだすもんだから、更に大変。

「あの二人もできてんじゃないのか!？」

話が宇宙の遙か彼方まで放り投げられていく。

……………冷静に考えて、ありえねえよ!!

冷静に考えなくても、ねえわ!!

と、心の中でツツコミ。

おかげで場を収めるまでしばらくかかり。

今、集会所の臨時ギルド長室に駆け込んだ次第である。

『み、みなさーん!!とりあえず事の真相は、また今度!今度で!!』

扉の向こうで、どなたかギルド職員が大声で観衆を静止している。

真相ってなんだ。

アホか。

「い、いやあ、すみませんなあ。取り乱してしまいました。」

「い、いえ。」

部屋の中には3人。

俺、ハイビスさん、村長さん。

「た、大変失礼いたしました……。。」

ハイビスさんが顔を赤くして謝っている。

村長さんも、何故か顔を赤くして謝ってくる。

……………アワキさん、あなたまで顔赤くする必要ないんですよ……………。

まあいいや。

スキル、気にしない。発動。

「それじゃ、ティガレックスの件を簡単に話しますね。」

「あ、はい。」

「よ、よろしくおねがいます。」

二人の気まずさをバツサリ断ち切って、俺は話を始めた。

村を出てすぐ、ティガレックスと対峙したこと。

紛れもなく強敵だったこと、何度も追い詰められたこと。

そして、屠るまでの経緯まで。

思い出せることを、全て話した。

村長さんもいるので、ギフトの部分はぼかしたけど。

「ソウジさんは、本当にお強いですなあ……いえ、疑っていたわけではなく、むしろより信頼が増しましたぞ。」

「いやいや、正直死ぬかと思いました。何度も。」

嘘ではない。

実際、ギリギリだった。

村を守るという目標が無ければ、とっくにリタイアしていたと思う。

「ソウジさん……村を代表して、心から感謝申し上げます。」

ガタツ。

「本当に、ありがとうございます。」

深々とお辞儀をする村長さん。

……何だ、こっちの世界にも、お辞儀の文化はあるのか。
知らなかった。

いや、そこは問題ではない。

「いやいや！顔をお上げください！本当に！」

「いえ、誠意を示すことが、私にできる最大の礼ですので。」

真剣な目をして訴えるアワキ村長。

……この人やつぱり、いい人なんだな。

だって普通泣かないだろ、知り合って間もないハンターが死ぬ目に遭ったぐらいで。

「ソウジさん。」

「あ、はい。」

村長さんの言葉から少し間を置いて、ハイビスさんが話し始める。

「本当に……本当に、お疲れ様でした。」

「あ……ありがとうございます。」

「信じては……いました。ソウジさんならきつと、討伐してくれるって。……でも、不安で……不安で。また、私のせいで、ソウジさんが大変な目に遭っているんだって思うと……取り乱してしまいました。申し訳ありません。」

「ハイビスさん……。」

「……。」

こちらにも真剣な目をして、俺を見つめてくる。

……いつだか、自分がディノバルドに出逢わせてしまったと、ハイビスさんは悔いていると言っていた。

だが、今回は違う。

一つの緊急クエストを俺が受け、俺は仕事を全うしただけだ。

「ハイビスさん、あの時とは違いますよ。」

「ですが、今回クエストを受けられるか迫ったのは私です……あの強敵に挑むことを、ソウジさんは拒むとは思えませんでした。……だから、本当に、本当に生きていて……よかったです。」

「……。」

「……す、すみません！完了報告でしたね！……そ、それではこちらの確認をお願いいたしますー！」

「……はい。」

業務をこなしていくハイビスさん。

さすがプロ、そこからはテキパキと仕事を進めていった。

……涙を流すハイビスさんも、それはそれでよかったけど。
やっぱり、この姿だよな。

俺にとつての受付嬢は、やはりこの人だ。

……………。

「はい、ありがとうございます。……以上で、報告完了です。……あ、そういえば……………」
「え？」

ハイビスさんが不意に声をあげる。

何かあるのか？

「アヤ村に出した救援の要請……………セツヒトさんのお呼び出しを、したままでした……………」
「えっ？」

「す、すみません、ついうつかりして……………」

「じゃあ……………セツヒトさんは、今こちらに向かっている可能性が高い、と？」

「は、はい……………」

……まあ、しようがないか。

強敵に立ち向かった俺の救援のため、周辺で最強のハンターを招集する。

普通の話である。

「それじゃあ、お手数なんですけど、今一度討伐完了の報を出して頂いても、いいですか？」
「はい。すぐに取り掛かりま——」

なんてハイビスさんが話しました。

その瞬間。

バタン！

「ソウジ——！！」

「うえっ!？」

激しい扉の音とともに、件の人物が現れた。

セツヒトさんだった。

……………え!?!早くね!?!

「ソウジ!?!……………あれ、いる……………」

「あ……………はい。いますよ。」

「あ……………よかったああああ……………」

ペタン。

その場に座り込むセツヒトさん。

ポカンとした顔をしながら、見つめられる。

「いや……………びつくらこいて急いで来てみたら……………あ、ティガレックスは!?!」

「や、やりましたよ。」

「……………やったって……………ソウジが?」

「そうです。」

「……………マジで?」

「大マジです。」

「……………おとおお……………」

セツヒトさんの百面相。

珍しい。

村にいるファンの方々にも見せてやりたいものだ。

「……………ソウジ……………やるじゃんね……………うん。よかった……………」

「は、ははは。ありがとうございます。」

「……………あー！怪我はー!?その傷は平気なのー!?」

「あ、あんまりないです。小さい傷は……………まあ、理由がありまして。また、後ほど。」

「おお……………そっかー……………いやー、驚きだねー。」

いつもの顔に戻ったセツヒトさん。

……………いや、あなたが戻ってくる早さに驚きですよ。

「いやー、山の中雪崩を避けて走ってきたよー。でも……………良かった良かったー。ソウ

ジー。頑張ったねー。」

「あははは……どうも。」

立ち上がり、頭を撫でてくる。

完全に姉によしよしされる弟である。

「アワキ村長……アヤ村からここまで、どれぐらいかかりますか？」

「はい、ハイビスさん……歩いたら一日はかかりますかな……。」

「そうですか……。」

ハイビスさんが遠い目をしている。

そりやそうだ。

セツヒトさんの規格外過ぎるご登場に、こちらが呆気にとられる一幕であった。

* * * * *

「じゃー何ー？結構やばかったんだー。」

「いや、やばいってもんじゃないですよ。いくらギフト使っても、結局追い詰められて。」
「でもー、その……回避攻撃？で倒せんたんでしょー？」

「そうなんですけど……通じるかどうかの技を繰り返す時点でどうなのかと。」

その日は結局、宿……ログハウスに帰ってきた。

村長さんが気を利かせて、集会所の裏口から出させてくれた。

「おそらく質問攻めに合うでしょうし……お三方ともお疲れでしょうからな。」とは、ア
ワキ村長の談。

お言葉に甘えて帰ってくると、俺が昨夜準備しっぱなしの夕飯……もとい、食材が。

3人で話し、ちよいと遅めの昼食を取ることと相成った。

だが、セツヒトさんがどこからか酒を持ち出し。

ハイビスさんも調子よくポポノタンを持って来ていて。

急遽、大焼肉大会が開かれることになった。

ちなみに俺は怪我もあるため、酒は控えておいた。

回復薬を塗りたいくった湿布を体に貼り付けたが、肋骨はまだ鈍く痛む。

明日にも痛みが引かないようなら、医者に見てもらおうと思う。

「それも実力ー。ねー、ハイビスちゃん。」

「そうれす！ソウジさんはギフトも大いに活用されてー……もう大陸イチのハンターになられてくらさい!!」

……………そうして、酔っぱらいが二人、完成。

よくもまあ怪我人の前でこれだけ飲めるものである。

それだけお祝いたいということなのだろうし、悪い気はしないけど。

ハイビスさんも、徹夜したらしい。

そりゃ酔いも早いか。

セツヒトさんも、いつにも増してハイペース。

……………怪我人の俺が、介抱する立場になりそうである。

「ねー。私だって、集会所で模擬戦やったときは、本気だったよー？まさか倒されるなんてさー。ソウジはー、強いよー。」

「いや、あの時は憑依状態に……。」

「それー。つまりさー、それって……。」

グビグビグビ。

言いかけて、ジョッキをあおるセツヒトさん。

既に瓶が4本空いているが、大丈夫なのかこの人達。

特にセツヒトさんは、アヤ村から超速で走ってきたとは思えない飲みっぷりである。

「ぶはあー……憑依状態つてのはー、ソウジの潜在能力なんじゃないのー?」

「潜在能力?」

どういふことだろう。

酔っぱらいの戯言だと、聞き逃すことはしない。

セツヒトさんは、酔いつぶれるまでは完全に普通の状態を保てる、根っからの吞兵衛であるからして。

「つまりさー、ソウジの持つ力を余すことなく使ったらー、それぐらいできるってことだよー。」

「あ……なるほど。」

「そーそー。」

つまりセツヒトさんが言いたいのはこのことか。

憑依状態になって物凄い力が使えるようになったとして。

それは俺がその時の身体能力で、限界まで技を極めた状態ということではないかと、と。そういう仮説か。

「……………確かにそうかもしれないです。」

「でしょー。あー、ポポノタンうまーい。」

今まで、訓練含め、憑依状態は幾度となく経験している。

確かに、筋力や柔軟性といった身体能力の向上と共に、憑依状態の強さも格段に上がった。

元々の体が強かった為に気付かなかったが……そういうことなのか？

「だからー、もうギフトの力とかめちやくちやに使っちゃえばいいんだよー。」

「いや、それはどうかと。」

「えー。だめなのー。」

しなだれかかってくるセツヒトさん。

いかん、酔ってらっしやる。

おそらく酔いつぶれる一歩手前。

「ソウジさんはー！遠慮し過ぎなんですー！存分に力を奮ってくださいあい!!」

呂律の回ってない酔っ払いハイビスさん。

この人もそろそろ落ちそうである。

まだ日も高いというのに、ベロンベロンのお二人。

「ですからあ……ハンターとしてもそうですけど……わ、私達にもですわねえ……遠慮なく！どうぞ遠慮なく！ど、どうぞお！」

「は、ハイビスさん!?!」

「おー、ハイビスちゃん。いいねー。」

右肩に寄つかかるセツヒトさん。

左側にしなだれかかかってきたハイビスさん。

「大体ソウジはさー……。」

「ちよつと聞いてますかあ？ソウジしゃん！」

完成した酔っぱらい？2。

俺に説教をするかの如く、絡みに絡んでくる。

適当に相槌を打ち、15分程。

二人は同時に潰れた。

俺に頭を預けながら。

俺怪我人なんですけど……。

「まあ……いいか。」

右にセツヒトさん、左にハイビスさんを持ち上げる。

そのまま二人を抱え、それぞれの部屋に連れて行くことにした。

部屋に入るのは初めてだが……まあ、怒られはしないだろう。
寝てるし。

スヤスヤと寝息を立てるお二人をベッドに寝かしたあと、片付けも早々に、俺も寝る
ことにした。

体は限界である。

眠すぎる……………。

おやすみなさい……………。

ぐう。

105 美味しい朝ごはんを食べましょう。

トントントントン……………。

ああ……………いい音だ……………。

実家を思い出す、まな板のあの音。

グツグツグツグツ……………。

柔らかく聞こえるのは煮炊きの音だな。

朝目覚めの時に飯の音がするって幸せだよなあ……………。

パカッ。

炊飯器を開ける音もする。

噴出口に手をおいて火傷をしたなあ、あれ。

実家じゃ母親にこっぴどく叱られたっけ。
母親の手柄理……懐かし……。

……ちよつと待て。

ピッピッ……ピッ。

ブオーー。

……操作音がする。

電子レンジの、操作音が。

ここしばらく、トンと耳にすることの無かった音。

「……ええ!？」

ガバッと起きる。

もしや元の世界に戻ってきたのか!?

だってこの世界では聞くことの無いであろう音まで……。

「あ、おはようございます。双治さん。」

「……………えっ？」

「リビングと台所が繋がっているの、起こしてしまうかと思いましたが、すみません。お体はまだ痛むかと思えます。どうぞ、まだお休みにいられていて下さい。」

「は、はい。どうも…………。」

カチャ。

チツチツチツチツ。

ガスコンロをつける音。

……………いやいやいや！

「ちよつと待てえええ!!」

「おはようございます。双治さん。」

「2回目!じゃなくて!!」

あばら骨は痛むし、無数の傷はまだ残っているし。

それに寝起きの頭でツツコミをかますほど、俺は朝に強くないし。

……だけど。

この状況はちよつと突つ込まざるを得ない。

台所を見渡す。

所狭しと、ありとあらゆる台所用電化製品が並ぶ。

電子レンジはしっかりとターントーテーブルを回して動いているし、ガスコンロからは青い炎が安定して出ているし……。

そして何より何より。

「何してるんですか女神様!!」

「おはようございます、双治さん。」

「3回目え!!いや、違う!そうじゃなくて!」

ようやく頭が冴えてくる。

何してんのこの神様!?

何で白い割烹着に三角巾つけてんの!?

「朝ごはんを作っておりました。」

「ええ……………」

「手ずからに作るというのも、何とも難しいものですね。ですが、これは楽しいです……創造するということは、何分久しぶりなものでして。」

「は、はあ……………」

理解が追いつかない。

だが、目の前にはいつものログハウスのリビング……そして電化製品に蹂躪された、いつも通りではない台所。

黒いロングストレートをアップにまとめた見目麗しい女性が、白い割烹着と三角巾をつけ、右手には包丁を持っている。

まな板には……何でたくあんが？

「お漬物が好物と。」

「いや、そうですけど……マジで何してんすか、女神様。」

「もちろん、新妻ごっこです。」

「何言ってるの!？」

「この後はお目覚めのチューをかまして、照れる旦那様を机へと座らせ、アーンなどをしようかと。」

「ば、バカじゃないの!？」

「ご心配なく。味の保証は致します。」

「そういうことじゃねえから!!」

いつもと違う格好にちよつとドキドキしてしまった。

割烹着とうなじの破壊力、恐るべし。

もう神とか何だとかもはやどうでも良くなるぐらいには、俺は混乱してしまっていた。

もう不敬とかどうでもいいや。

マジで何してるのこの神。

* * * * *

「いや、そろそろお出ましになるかとは思ってましたが……意外過ぎです。」

「はい、すみません。」

「……………やけに素直に謝りますね。」

「新妻ですから。旦那様。」

「その設定も終わりましょう!?!」

かなり寝てしまったらしい。

昨日寝たのは夕方とかだった気がするが……………疲れていたんだな。

既に朝。

目覚めたら、絶世の美女が台所で朝食を作っていた。

その女性は女神様だった。

……………何だろう、字面にするといよいよもって訳がわからない。

「混乱を招きまして、申し訳ありません。」

「いえ……………大体は飲み込みました。」

「流石です。」

「いや、褒められてもですね……………。こちらの世界への干渉は、駄目だったんじゃないですか?」

「ええ、そこは何とかいたしました。」

「……………」

「……………」

「……………まさかまた一服盛りました？」

「また、とは何でしょうか。」

「前回も確か、こちらの世界の神に一服盛ってやってきたっぽかったよなあ……………」

「ですから、こちらの神に何と言って来たのかと。」

「新妻ごっこがしたいと、正直に話しました。」

「……………本当に？」

「ええ。その際に多少交渉がしやすいよう、山吹色のアレを少しばかりお渡ししました。」

「完全に買取やんけ……………」

「おかしいなあ、確か相互不干渉がどうこういう話だった気がするのだが。」

……………今更だ。

もう考えるのやめよう。

とりあえず、色々聞いてみることにする。

「隣の部屋でハイビスさんやセツヒトさんが寝ているんですが。」

「そこは問題ありません。まだ起きないようです。音も遮断してますし、私も認識できないようにしております。」

「抜かりなし、と。」

「はい。」

その辺は流石である。

顕現するのも慣れたものだな、この神様。

「ちなみに、その電化製品は……。」

気になっていたことを聞いてみる。

明らかにこの世界から浮いているそれら。

電気やガスで動く、正真正銘の文明の利器である。

「ソウジさんのいらっしやった世界の物を再現したのです。お懐かしいのでは？」
「そうですけど……これ、揃えたんですか？」

「はい。今日に向けて、ネットで購入いたしました。」

「気合い入りまくりですね……。」

「ご飯を作るなど、滅多にできないことですから。」

そう言って、炊飯器を開ける女神様。

底をしゃもじですくって天地返し……すげえ、神様が炊飯器の天地返ししてる。
炊きたてツヤツヤのご飯が、机に置かれる。

「では双治さん、どうぞ。」

「へ？」

「ですから、どうぞ。」

「た、食べるんですか？」

「はい。」

有無を言わさぬ物言いに、ただただ従うばかり。
仕方なく席につき、朝食の準備を待つ。

「お口に合うか分かりませんが、味噌は双治さんの地元の物を使用しています。お醤油も。」

「え!? 本物ですか!?!」

「はい、本物です。買いました。」

「はああ……ああ、この匂い、早〇味噌だわ。」

「よく銘柄までお分かりになりますね。」

子どもの頃から毎日のように口にしていたのだ。
そりゃ分かるとも。

「いただきます。」

「はい。」

神様が作った飯を食う。

……罰当たりなのか何なのかさっぱりわからん。

……まあいいや。飯に罪はない。

意を決して、口に運ぶ。

「モグモグ……あ、うまいです。マジで。」

「そうですか。それは良かったです。」

「ダシもいいですね……この味噌汁。」

「いりこの煮干しです。」

「そこまで俺の地元に合わせたんですか。」

何から何まで地元の味である。

凄まじいまでの、『これだよ、これ!』感。

地球の日本が懐かしくなってしまった。

「……女神様は食べないんですか?」

「ええ。人の食べるものを口にするのは、あまり良くないので。」

そう言いながら、お茶をすすする女神さま。

言ってることとやってることがあべこべである。

……………基準がよくわからんが、まあ本人が言うからそうなんだろうな。
すごくうまそうに茶をすすする女神様には、違和感しかないけども。

「しかし……何かできること増えてませんか？女神様。」

「そうですね、神格が上がりましたから。」

「そうですか……え?!神格?!」

「はい。」

神格って……そんな簡単に上がっていいものなのか!?

「ポイントが溜まりました、顕現してできることが増えました。」

「神様ってポイント制なんですね……。」

「はい。一部例外はありますが、まあ大体はそんなものです。」

「すつごく俗っぽいです。」

「はい。神世界も、所詮ポイントが物を言います。」

「世知辛え……。」

あんまり聞きたくないことを聞いた気がする。

まあ俺の中で、神の世の無茶苦茶っぷりはたくさん聞いてきたからな。

今更か。

「双治さん、早速ですが。」

「はいはい。なんででしょう。」

「ティガレックスの狩猟、大変お疲れさまでした。」

「あ、ありがとうございます。」

素直に労われた。

これは単純に嬉しい。

「今までの狩猟と違い、完全に単独での狩猟。しかも相手はかなりの強敵。SNSでは絶賛の嵐です。」

「そ、そんなに。」

「ええ。単純に、とても盛り上がっています。ここに来て、古参の双治さんのファンが新参のファンを弄り倒す始末です。」

「普通に盛り上がれないのかお前らは。」

もはやお前ら呼ばわりである。

馴れ馴れしくしても全く悪い気が起きない。

「しかし、大変なことが二つ起こっています。」

「何ですか?……またどこぞの神様が暴走したとかですか?」

「それはすでに数件起きています。」

「マジですか……。」

「まあ私たちのSNSには一切関係のないことですし、事態はすぐに収拾されます。ご安心を。」

神様つてちよくちよく暴走するの?!

なんとも恐ろしい話ではある。

だが、そんなことより大変なことって何だろう。

「まず一つ目。端的にいうと、ワサドラにいらっしやる方々……ドールさんやシヨウコさんを始めたとした方々のファン層が、ここに来てプラスチックシヨンが溜まっていきます。」

「……どういうことですか？」

「双治さんを主観とした周辺の観測が、私が発信するSNSの主情報です。ここまではよろしいですか？」

「はあ……つまり、俺がミヨシ村に来たことによつて……。」

「そうです。察しが良くて助かります。あの方々が全く姿を現さなくなった事により、暴走寸前です。」

そうか、ワサドラにいるドールたちとは、当たり前だが全く会えてないからな。

『【悲報】俺氏、ドールちゃんの笑顔を見るまで神格凍結を決意する。』『シヨウコたん成分不足し過ぎて現世界破壊しそうな奴の数↓(○)』などと、某掲示板にアホなスレまで立つ始末です。」

「少なくともそいつらは状況楽しんでると思いますけど……。」

そんなアホな神様方は放っておくとして……。

そろそろ雪どけの季節を迎える。

ワサドラに帰るのも、考えていいかもしれないな。

「とはいえ、そちらは双治さんがお帰りになれば問題ないかと。もう一つが大変です。」
「嫌な予感しかしません……。」

「数あるファンクラブの中でも、力の強い2つ、『ハイビス様親衛隊』『せつちゃんに語尾伸ばされ隊』なのですが。」

「そんな当たり前のように言われても。」

「そういえばお伝えしてませんでしたね。まあ、そういう頭のおかしい神々がいると認識されれば大丈夫です。」

「認識したくねえつす……。」

「ファンクラブ界限では、現在筆頭の二大勢力です。」

「いらぬ補足情報ありがとうございます。」

数あるファンクラブって時点で、他にもやばい神々がいるってことだよな。

……………深くは考えまい。

「で、その二大勢力がどうされました？」

「破産いたしました。」

「……………へ？」

「ですから、破産いたしました。」

「……………いや、やっぱり分からないんですけど!？」

その集まりがどういう体系なのかも分からない。

破産ってことは、金がなくなった……………ってこと？

「お二方のプライバシーはきっちりとお守りしております。」

「はい、そこはお願いします。」

「その上で、お二人の朝食を食べる姿、ハイビスさんの一日のルーティン、セツヒトさんが飲酒をされる姿などを有料限定配信にしたところ、非常に好評でした。」

「プライバシーはどうした。」

「更にはプレミアム会員限定有料追徴課金方式PPV寝顔拝聴プランで、もうウツハウハでした。」

「プラン名長すぎでしょう……ん!?寝顔!？」

「はい、昨晚の事です。」

「あれ見せたんですか!？」

酔いつぶれた二人に寄っかかれて、そのまま寝床まで連れて行ったけど。

「双治さんがお二人にしなだれかかれた時の収入が、それはもう。」

「まさかその時に……。」

「はい、二大勢力が競うように資金を注ぎ込みまして。メンバーの中には借金をした神もいたとか。」

「うわあ……。」

「おかげでこっちはもう、うつはうはです。」

「うわあ……。」

やってることは銭ゲバである。

ああ……日本でも確かにそんな風に儲けるような人たちもいたなあ。

「その方式を真似してみたところ、かなりの収入がありましたので、ご報告を。」

「……………その2大勢力とやらは、どんだけ金をつぎ込んだんですか。」

「説明が難しいですが……私の神格が上がるほど、とだけ。」

「……………」

神様世界のポイント制とか神格の条件とかは分からんけども。

女神様が明言を避けるほどには、儲けたんだな。

「地球もだいぶ潤いました。」

「まあ、前も言いましたけど、間接的にそこに貢献できるなら文句はないですが。」

「各地の砂漠化が止められるとは思いませんでした。」

「すごい規模の話だ……。」

その破産した2団体には申し訳ないが、自業自得ではあるしなあ……。

「その二大勢力とやらが、逆襲に出るとかは無いですよね。」

「どうぞしよう。『また金ためて寝顔見ような！な！』『本望。』『我が生涯に一片の悔い無し。』というコメントは残されてました。」

「男らしい……。」

まあ色々報告をもらいはしたが、正直俺には関係のない話だしなあ。

女神様が更に銭ゲバになって、よりエグい商売を始めたとして、俺に止める力はないわけ。

……ハイビスさんとセツヒトさんの人気に驚くばかりである。

* * * * *

朝食もそこそこにずっと話を聞いていたため、味噌汁やご飯が冷めてしまった。もつたないことをしたと思つたが、神様がまた温め直してくれた。

「ぜひお二人にも召し上がっていただきたいです」とは、女神様の談である。

手をふつとかざすと、ほかほかご飯と湯気の立つ味噌汁に戻った。

「電子レンジとか使わないんですね。」

「面倒になりました。」

「せっかく買ったのに……。」

「私の顕現が終わり次第、これらオーバーテクノロジーの品々は回収していきますので。」

「それはそうですね……味噌とか醤油とかは。」

「それらも回収いたします。ですが、朝食はぜひ召し上がっていただきたいです。その辺はお礼ということまで。」

「いいのか。」

「いよいよもって、神様の干渉禁止の線引きがわからなくなってきました。」

「女神様のできるごことが増えている、ということなのだと思うが。」

「その朝食には、私の加護も多少入っております。怪我の治りが良くなりますように。」

「あ、それはどうも。」

「決して一服盛ってはおりませんので。」

「……なぜわざわざ言うんですか!？」

「ハイビスさんとセツヒトさんには盛っておりませんので。」

「俺は!?! ねえ俺は!?!」

「……………さて、私はそろそろ失礼いたします。ワサドラへの道中、どうかお気を付けてください。」

「スルーですかそうですね。かちクショウ!!」

朝食抜いてやろうか……ダメだ、既に口になっている。

「毒を食らわば皿までと言いますし。」

「毒って言った!?! いま毒って!!」

「そういうえば、一つお伝えし忘れておりました。」

「露骨に話題変えないで!?!」

もう俺は女神様の言うとおりにするしかないのである。

……………食らってやろう、最後の一口まで。

「ティガレックスを倒した今、さらなる強敵に対峙することになるかと思いますが。」

「はあ……まあ、いずれはそうですね。そこを目標にしないとですね。」

「……………無理は、禁物です。」

「……………え？」

「ですから、無理はされなくてください。……………そこだけ、お伝えしておきます。」

「はあ……………」

随分真剣な眼差しで伝えてくる女神様。

多分マジなんだろう。

……………気をつけていこう。

「SNS 関連の方は、お任せください。しばらくは、大人しくするつもりです。」

「わかりました……………ご忠告、痛み入ります。」

「次の儲け話は既に考えております。」

「……………大人しくしといて下さいよ？」

「はい。」

信用できないけど……まあもう後の祭りである。

「それでは。」

そう言うと、あつさり消えていく女神様。いつの間にか、各電化製品も消えている。目の前には、未だに湯気の立ち昇る朝食。

ガチャツ。

「うう……おはようございますう……ソウジさん。」

「ああ、おはようございます。ハイビスさん。」

女神様が立ち去つてすぐ、ハイビスさんが部屋から出てくる。

二日酔いかな。調子が悪そうである。

「あら、この香り……ソウジさん、朝ごはんを作ってくださいたんですか？」

「ええと……そうです。」

「それは……ありがとうございます！いい香り……頭痛も気のせいかな、無くなってきた様な……私、セツヒトさん起こしてきますね！」

「あ、はい。よろしくおねがいます。」

嘘をついてしまった。

だって他になんて言えばいいんだ。

『あ、先程までいた女神様が作ってくださいました。』

……完全に頭のおかしいヤツである。

まあ二人は俺の事情を知っているから、そんな事は言わないだろうけど。

その後、何とかベッドから起きてきたセツヒトさんと3人で朝食を食べた。寝ぼけ眼のセツヒトさんが一瞬で起きるほどには、美味かったようである。

まさか神様お手製であるとは、ついで告げられず。

そのままバッチリ平らげてしまった。

お二人も、俺も。

「ふ、二人とも、何かお腹痛いとかありませんか!？」

「えっ!？」

「えー、大丈夫だよー。めつちや美味かったしー。ソウジー、料理得意なんじゃーん。」

「本当ですよ!このお味噌汁なんて、何杯でもいけちゃうぐらいの味でしたよ!」

「そ、それは……ありがとうございます。」

女神様、良かったですね。

褒められましたよ、あなたの朝食。

「やー、昨日はごめんねー、ソウジー。」

「えっ?」

セツヒトさんがいきなり謝罪してくる。

「昨日って……ああ、酔いつぶれた事ですか?」

「そーそー、もう記憶なくてさー。……ベッドまで連れて行ってくれたのー?」

「え?! い、いや! セツヒトさんは一人で部屋に向かいました!」

「あーそうなのー。……ハイビスちゃんはー?」

「は、ハイビスさんもです! いやー、二人とも覚えてないんですね!」

「ハイビスちゃん、覚えてるー?」

「いえ……私もいつの間にかやら部屋で寝ていたので……。」

危ない危ない。

俺が部屋まで運んで寝かせたとバレるところであつた。

いや、バレても問題は……ないよな?

「ふーん……いや何かねー? 寝ているときに誰かに見られているような感じがしてさー。……気の所為だよねー。」

「………そ、そうですね。……俺見てませんよ?」

「いやー、ソウジだったらソウジの気配って分かるからさー。なんだろう……幽霊? 的な? 何かやばい感じがしたんだよねー。」

「そ、そうですね。」

……………えっ？

セツヒトさんまさか、神様方の気配感じたの？

……………いやいやいやいや、ありえないでしょ。

だって相手は神だし。

「朝も何かこつちで変な気配したんだよねー。ソウジー、何かあったー？」

「いえ!? 何も!？」

「だよねー。……………何だろー。」

セツヒトさんすげえ。気づいてる。

人の理超えてきたよ。

「幽霊とかやめてくださいよー、セツヒトさん。」

「ごめんねーハイビスちゃん。驚かせるつもりは無いんだよー。でもさー、変な気配感じたら教えてねー。……………ソウジじゃなかったら、やるからさー。」

本当にやってしまいそうだから恐ろしい。

そして本気で幽霊を疑うハイビスさんの一般人ぶりに、癒やされた。

女神様とセツヒトさんの末恐ろしさを感じた、慌ただしい朝の一幕であった。

106ミヨシ村にさよならしましょう。

「これとこれとー……あとこれー。」

「ちよ……せ、せつちゃんさん！流石に買いすぎですよー！」

「んー？ソウジはー、私にー、文句をー？」

「言いません。」

「んー、よろしー。……あー、おぼさーん。このミヨシ漬けてやつもー、お願いしま
すー。」

「あいよー！毎度ー！」

俺は今、買い物に来てる。

とは言っても、やってることは荷物持ち。

主にセツヒトさんとハイビスさんの、である。

朝、女神様が朝ごはんを作ってくれた。

そこで聞かされた、セツヒトさんハイビスさん寝顔生中継の話。

プライバシーどこ行ったという話だが、まあ今更である。

そこはまあいいとして、問題はセツヒトさん。

なんとこの方、寝ていても意識のどこかが起きているらしく、感覚も鋭敏。

神様にちよつとしか見られていないはずなのに、その気配に気づいた。

……いや、すごすぎじゃない？

なんで分かるの？

俺気づいたこともねえよ？

そんな挙動不審な俺は、尋問を受けた。

ソウジが何かしらやったんじやないかと。

まさか俺も「神様が覗きやるんすよー。」なんて信じてもらえない真実を話すわけにも
いかず。

素直にお二方をベッドまでお連れした話を吐露。

自白。

「ソウジも男だねー。」とニヤニヤと笑って、ほつぺたをツンツンされてしまった。

いや、何もしてないんですが。

その事がもちろんハイビスさんにもバレる。

「わた、私のお部屋に入られたんですね……。ええつと……。」

そんなことを言いながら、何故か服の襟元を開けて、上から覗いているハイビスさん。
「いやいや！何も！してませんから！」

……とはいえ、女性たちに嘘をついた事実は事実。

そんなわけで、罪滅ぼしではないが、ワサドラに持ち帰るお土産の荷物持ちを俺がする
ることに。

……これって、言ってしまうえば神様たちの尻拭いを俺がしたことになるんじゃない
……。

なんか虚しい。

「ハイビスちゃん、ソウジまだイケるよー？」

「あつ、じゃあソウジさん！これもお願いします！」

「は、はいはい。」

どんだけ買うんだこの人たち。

こうして、ミヨシにあるセツヒトさん御用達の商店から、たくさんのお土産を購入した俺たち。

最後の最後に、ミヨシの経済を潤して、ワサドラに帰還することにした。

* * * * *

「いやあ、寂しくなりますなあ……。」

「また機会があつたら来ますってー。来年とかー？」

「ええ、それはぜひ！お待ちしています！」

集会所にやって来た。

村長さんに、ワサドラに帰ることを伝える。

ティガレックスの討伐が終わって早5日。

ミヨシの雪はまだまだ残っているが、気候は明らかに暖かくなってきた。

春は目の前である。

ハイビスさんの話では、ティガレックスの登場を最後に、大型のモンスターの数がと

んと減ったという。

こうなると、この冬山のギルドの業務は、急激に少なくなる。

ハイビスさんも以前から進めていた引き継ぎ業務を終えるという。

「来年、また来てくださる方々が楽できるようにしておきませんと。」

そう言って、様々な引き継ぎ報告書を書き上げていた。

この方、抜けているところもあるが、本当に有能である。

その間、俺とセツヒトさんは、集会所でボーツと過ごした。

まず俺は怪我をしているため、休業。

セツヒトさんも「私も休むー。」と、怠け者の本領発揮。

二人して用もないのに集会所に入り浸った。

授業もないのに食堂に居座る大学生の如く。

ティガレックスの討伐直後こそ、様々なハンターたちと話し、情報交換……もとい、宴会を開いていたが。

ここ最近ハンターの数も更に激減。

季節労働者の様に、いなくなってしまった。

俺にティガレックスの出現を教えてくれたハンズさんも、挨拶に来てくれた。

「寂しくなります……ソウジさん、どうかお元気で！また、狩猟のお話を聞かせてくださいね！」

「は、はい。また、どこかで。」

「はい……失礼いたします！」

超が付くほど真面目な性格の様に、会う人会う人にしつかり挨拶をして、どこかに向かつて旅立っていった。

宴会ではずっと俺の横で酌をしながら、狩猟トークを繰り広げていた。

女子大生のような若くて可愛い女性にお酒を継いでもらう。

距離感が近くて、少しドキドキしたのは秘密である。

「あちゃー……また増えちゃったかな……。これだから肉食系は。ごめんねー、ハイビスちゃん。」

「私もノーマークでした……セツヒトさん、お互い油断しないようにしましょう。」

「そうねー。……ワサドラ帰ってもがんばろー。」

「はいっ！」

「むしろそこが、頭痛の種だよねー……。」

「そうですね……。」

なんていう話を、女性二人がしていたが。

何の話なんだろうか。

よく分からん。

そして話は村長さんのところに戻る。

「ソウジさん、あなたのおかげでこの村は救われたようなものです。ありがとうございます。ありがとうございました。」

「いやいや！もう本当に、何回礼を言うんですか。」

「そのお強さもそうですが、ソウジさん。あなたは人格が素晴らしい。どうか、精進されて下さい。くれぐれもお元気で。」

「……はい、村長さんこそ。」

宴会の度に礼を言われてしまうので、もうこちらは申し訳ない気持ちでいっぱいである。

アワキ村長……本当にいい人だった。

シガイアさんとはタイプが違うけど、こういう人もまた、トップに必要な人だと思う。ぶつちやけ上司なら、シガイアさんよりアワキさんのほうがいいかな。

「飲み過ぎ食べすぎには、気をつけてくださいね……。」

「はっはっはっ！ 愚問ですな！ 私、どれだけ食べても腹を壊したことなどありませんぞ！」

ボヨンツ。

腹太鼓を叩いて自慢げなアワキ村長。

いや、そういう心配ではないのだが。

元気で居てもらえたらいいけど。

ヨツミワドウ。

そんな失礼なことを考えつつ、ギルドを後にした。

出立は明日、朝。

ハイビスさんも、今日で仕事納めらしい。

その日は、もうしばらくは浸かることの無いであろう温泉をゆつくり堪能してから、ログハウスに帰っていった。

* * * * *

夜。

荷物をまとめる。

セツヒトさんとハイビスさんも、今頃は自室で荷物をまとめている頃だろう。

二人には夕飯の時、ポーチに入れておく荷物があつたらまとめておいてほしい旨、伝えておいた。

セツヒトさんとか、お土産入れたらかなりの量なんじゃないだろうか。

……まあ、入るだろうし、いいけど。

『自分の荷物はソウジのもの』と、某国民的アニメのガキ大将よろしく宣言すれば、俺の

ギフトのポーチに荷物を入れることができる。

裏技みたいなものだ。

「よしっ……こんなもんかな。」

ポーン。

ポーチを軽く叩く。

自分の荷物の整理を終えた。

まあどンドンポーチに入れるだけでいいんだから、すぐに終わるのだが。

不意にポーチに触れたため、目の前に情報画面が起動する。

……情報画面。

女神様からもらった、俺の武器の一つ。

アイテムもそうだが、装備に様々な情報に、これ一つでかなり楽させてもらっている。ありがたい話だ。

徐にカーソルを「モンスター情報」に合わせる。

ズラツと出てくるモンスターの名前。

バサルモス……懐かしいな……こいつから始まったなあ、俺のこっちの人生。
アオアシラ……解体の大変さが身に沁みたわ……未だにトラウマ。
プケプケ……は思い出したくない。キモい。
フルフル……以下同文。
キモい敵も多かったなあ……。

「あ……。」

思わず口に出してしまった。

ディノバルド。

リベンジすべき、筆頭候補である。

「あいつに……あの技、通用するかどうかだな。」

あの技とは、ティガレックス戦で編み出した、回避攻撃のことである。

ディノバルドの超速尻尾攻撃に、使えるかどうか。

試す方法など、一つしかない。

「やるしか、無いな。」

決意を新たにした。

首を洗って待っている、デインバルド。

どこにいるのかは知らんけども。

モンスターの一覧は、かなりの数が揃ってきた。

一つ一つ確認していく。

まだ「???」となっている箇所も多いが、懐かしい名前から、聞くのも恐ろしい名前ま

で、色々あった。

頑張って狩猟してしてきたなあと、実感。

まあこの中には、見ただけで狩ったことの無いモンスターもいるわけだが。

デインバルドやジンオウガなんかはそうだ。

逆に、「えっ?こんなモンスターいたっけ?」みたいな名前もチラホラ見える。

ギアノス……ドボルベルグ……?いたっけ?こんなの……シウグンギザミ……リ

オレウスにリオレイア……。

リオレウスとリオレイアはよく話は聞くけど……討伐したことはない。

あれかな。卵運搬クエストとかで空を飛んでいるのを見たからかも。

一瞬でも見たことのあるモンスターならば、登録されるんだな。

他にもアンジヤナフ……ラージャン……名前だけでも強そうな奴らが見える。

詳細は……わからないか。

細かい情報はしつかり対峙しないとわからないのか……？

基準がよくわからん。

「ん？」

またも思わず声を上げてしまう。

情報画面のモンスターの名前がズラリと並んだ中に、変な名前を見つけた。

「なんだこれ……ミ……？」

一覧の更に下の方。

〈ミ？#%&、＼みたいな文字化けが起きてしまっている箇所を見つける。

初めの1文字はおそらく「ミ」であっているんだけど……。

「あ。」

じつと見ようとすると、消えてしまった。

表記も〈??〉に戻ってしまっている。

……なんかよくわからんが……ギフトを作ったのは女神様だしなあ。

今度聞いてみるか。

とりあえず気にしないようにしよう。

ガチャツ。

「おー？ソウジ？どしたの、変な顔して。」

「あ、いえ……ギフトを見ています。」

「あー、そういうことー。中空を見つめてぼーっとしているから、変な人にしか見えなかったよー？」

「失礼しました。」

そう言って、セツヒトさんの荷物を預かる。

「私はソウジのものー。」とかよくわからんボケをかましてくるセツヒトさんを華麗にスルー。

イジリにも慣れたものである。

なぜかむくれるセツヒトさんは放っておこう。

「あ、あのー……ソウジさん？」

「あ、どうしました？ハイビスさ……。」

後ろから声をかけられ振り向いたら、ハイビスさんがいた。

その後ろには……。

「この荷物は……？」

「あー……えつとですね、実は……。」

「大体が仕事の書類と、あとお土産なんだってー。すごい量だよねー。」

「……これ全部ですか？」

「お願い……できればと！す、すみませんソウジさん！」

ハイビスさんの後ろにあった荷物。

行きにもあった、ポストンバッグ、お土産の入った袋数個……はいいとして。

ファイリングされた書類が山のように積んである。

「うわー。ハイビスちゃん、仕事しすぎだよー。」

「いえいえ……大体はミヨシに数年間保管されていたものです。今回、この資料を持ち帰るのも業務の一つになっていまして……ソウジさん、お願いできますか？」

「多分……大丈夫かと思いますが……すごい量ですね、これ。」

「はい……何でも、ハンターズギルドに必要なものだ……シガイアギルドマスターが。」

「はあ。」

と言われてもなあ。

まあ入れることは問題ないと思うけど。

一応書類をポーチに入れようとしてみたが、反応はなし。

そこで、ハイビスさんが「ソウジさんに一時的に、ワサドラに着くまで譲渡します。」

と言うと、すんなり入った。

「おー。」と二人から声上がる。

……これだけモノ入るんだろうな……。

今度試してみようか。

……いや、やめとくか。試す方法もわからんし。

……。

荷物を預かった後も、なぜか中々部屋に帰ろうとしない二人。

「だってさー、三人で過ごす最後の夜だしー、なんかさーみーしーいー。」

「子どもですか。」

「いえ……本当に楽しかったですよ……ここで過ごす、皆さんとの日々は。」

ハイビスさんが、とても素敵なことをおっしゃる。

……それは確かに。

ここにやってきて、セツヒトさんファンに睨まれて、まさかの三人一緒の生活が始

まって、毎日が狩りと特訓三昧で……。

たくさんのモンスターを倒した。

村のピンチも、救うことができた。

我ながら、結構強くなった。

……冬山で過ごした日々が思い起こされて、ちよっとおセンチな気分になってしま
う。

「そうですね……楽しかったです。さみしいと言えば、さみしいですね。」

「はい……ソウジさん、セツヒトさん。ありがとうございます。私……単純に今、楽し
かったって思えます。本当に、色々ありましたけど。」

本当に色々あったもんな。

機会があつたら、また来たいと思うほどには、いい村であつた。

みんなで、少ししんみりした感じになってしまう。

「私は単純にー、仕事に戻りたくないのー。」

……約1名を除いて。

「雪よー。また降り積もつてー。あと1週間はいさせてー。」

窓に向かつて、呪うように言うセツヒトさん。

台無しであった。

* * * * *

「それでは！お元気で！！」

「また来いよー！！待ってるぞー！！」

アワキ村長や商店のおばちゃんに鍛冶屋のおっちゃん、その他いろんな村の人に見送られ、俺たちはミヨシ村を後にした。

「みなさんも、お元気でー！！」

俺もハイビスさんもセツヒトさんも、後ろを振り向きながら手を振る。ポポの上も慣れたものだ。

行きにこんなことしたら、多分バランスを崩している。

「タオカカからはー、ガーグアでいけるかもねー。この雪だとー。」

「ほ、本当ですか!？」

ハイビスさんが大声をあげてセツヒトさんに返す。

……ああ、ガーちゃんグーちゃんか。

ガーちゃんとグーちゃん。

ワサドラから遠くタオカカまで、俺たちを運んでくれた恩人……恩モンスターである。

飼い慣らされており、特にハイビスさんにはとても懐いていた。

御者のおじさんも、冬が明けるまではタオカカに滞留すると言っていたし。

みんな元気だといいいけど。

「良かったですね、ハイビスさん。また会えるかもしれませんよ?」

「はい！これでワサドラまでの長旅も、楽しみになります!!」

張り切るハイビスさん。

「ねーねーソウジー。」

「え？なんですか？」

セツヒトさんが、俺にしか聞こえない大ききさで声をかけてきた。

「無事だといいいねー。」

「え？あ、俺たちの道中ですか？」

「違う違うー。ガーちゃんとグーちゃん。」

「ああ……。」

……まあガーグア達も、言っってしまったえば御者のおじさんの家畜な訳で。

冬の間、餌をただただ消耗するだけの存在なら、いつそ……ということもある。

というか、それが普通だと聞いた。

村長さんから。

「……ソウジー、慰めてあげてねー。」

「いや、そうと決まったわけではありませんし。」

「ガーグアのこんがり肉、私好きなんだよねー。」

「セツヒトさん……。」

命を頂く。

この辺の死生観というか感覚は、こつちの世界の人の方がよっぽど割り切っていると
思う。

現代日本に生きてきた俺は、生き物の命の上に立つという考えが、中々浸透しなかつ
た。

ていうか今でも、納得し切れていないことはある。

俺はこのままでいいと、セツヒトさんはいつだか言っていたけど。

「♪」

綺麗な鼻歌を鳴らしながらポポに揺られるハイビスさん。

今日も白いモッコモココートとニット帽が、たいへんお似合いです。

「じゃあソウジ、頼んだからねー。」

「はい……。」

ハイビスさんを慰めるという大役を仰せつかった俺は。

タオカカまでの道中、ため息を10回ほど吐くのであった。

107ワサドラに帰りましょう。

ミヨシ村を出て、ポポ車に揺られ、数時間。

下り道ということもあつてか、行きよりもだいぶ早くタオカカ村に到着した。

村の中は、結構混雑していた。

ハンターに商人っぽい人……周辺の村々からやつてきた人々で、ごった返していたのだ。

これは俺も予想外。

「うわあ……混んでいますねえ……。」

ハイビスさんの声が、ため息とともに吐き出される。

ずっと山奥の辺鄙な村にいたからか、人酔いしそうだ。

「あー……この季節、増えるんだったー。忘れてたなー。」

「それにしても、多くないですか?」

「タオカカはこの辺一体の中心地だからねー。村の規模はそれほどでもないけどー、季

節によっちゃー人が増えるんだよねー。」

なるほど。

タオカ力は、街と言うには少し小さいが、村にしては大きい。ワサドラよりは規模も小さいが、その建物の数も結構なもの。

そしてここら一帯の中心地であり、今が人が集まるその季節、というわけか。

「す、すぐに宿をとりましたよ。」

「……ソウジとハイビスちゃん、お願いしてもいいかなー?」

「え? セツヒトさんは行かないんですか?」

宿取りを俺たちに任せて、セツヒトさんはどこかに行こうとする。

「ちよいと野暮用があつてねー。宿、もし取れなかったらギルドに集合でー。」

「は、はい。」

そう言って、どこかに消えてしまった。

「……………自由な人だ。」

「そうですね……………あ、ほら、ソウジさん！行きましょう！まだ宿、取れるかもしれませんよー！」

「は、はい！そうですね！」

慌てて村の大通りを進む。

しかし人が多いな。

歩けない……………なんてことは無いが、気をつけて進まないとぶつかってしまう。

実際、色んな人を避けながら、時には避けてもらいながら歩いた。

ドンツ。

「あつ……………す、すいません。」

「いいえ、こちらこそ。」

頭までローブをかぶった人にぶつかってしまった。

こういう時すぐさま謝るのは、日本人の悲しい習性。
……いや、俺が小心者なだけだな。

「お怪我はありませんか？」

「あ……い、いえ。大丈夫です。」

「そうですか……それでは、失礼します。」

スツとあるき出すローブの人。

声色からして女性だったけど……所作に隙がないな。

多分ハンター……それもかなりの腕前だろう。

「ソウジサーン!!どこですかあー!？」

「あー、ハイビスさん!ここです。すみません!」

態勢を立て直し、立ち尽くすハイビスさんのもとに向かう。

「すみません……人とぶつかってしまつて……。」

「これだけ多いと迷いそうですね……ソ、ソウジさん、はい、どうぞ。」
「……………へ？」

「で、ですから。はぐれると、い、いけませんからね！」

ギユツ。

手を握られる。

こういうのって男性側からエスコートするものなのだろうが、しっかり握られた手に慌ててしまう。

「す、すみません。俺、手が汚いかも……。」

「だ、大丈夫ですから！ 気になさらず！」

ギユツ。

しっかりと握り直してくるハイビスさん。

冷えたのか、少し冷たい感触。

でも、女性の柔らかさを感じる。

……。

いかんいかん。これはあくまで俺の迷子対策。

俺は紳士。

「……………い、行きましょうか。」

「は、はい。」

ハイビスさんの返事とともに、宿まで歩き出す俺たちであった。

……。

宿は軒並み満室であった。

手をつなぎながら宿を探すなど、あんまりにも恥ずかしかったが、四の五の言つてられない状況。

そんな中、運良く空いている宿屋を発見。

……結構お高めの宿だが、この際いいだろう。

「それでは、一部屋ご用意いたします。」

「ひ、一部屋!？」

「えっ?」

宿の受付の男性は、おそらく俺たちをどこぞのカップルと思ったのだろう。

手繋いでるし。

間違われることに対して、俺はむしろ光栄であるが、ハイビスさんには失礼だろう。

こんな男。

悪い印象を与えないよう、ゆっくり手を離す。

事情を伝えて、二部屋空いてないか尋ねてみた。

「あいにくですが……現在ご用意できるのは一部屋まででございます……。」

「……そうですか……実は連れがもう一人おりました……。」

「左様でございますか……。申し訳ありませんが、今日ご案内できるのはこの部屋のみです。」

「うーん……どうします? ハイビスさん?」

ハイビスさんを見る。

……………何か顔を真っ赤にしてうつむいていらつしやる。

……………カッフルと間違えられたことが恥ずかしかったのだろうか。

「……………ハイビスさん？」

「あっ！は、はい！一部屋！お願いしましょう！」

「えっ!？」

「あっ！違います違います！一部屋ではマズイのです。その、いろいろと!!」

「そ、そうですね。参ったなあ…………。」

ほとほと困り果てる。

残りの宿は満室だし、打つ手が無い。

宿の受付の人も、困った顔をしている。

そんな時だった。

「……………あれ!?ソウジさんと受付嬢の…………ハイビスさんか!？」

「あっ……。」

大きな声をかけられて驚く。

振り向くと、そこには懐かしい顔があった。

「いやー！久しぶりだなあ！ソウジさん！元気にやっていたようで何よりだよ！ティガレックスやゴシヤハギの狩猟の話は、こつちにも届いていてなあ！」

「いやあ……お久しぶりです、おじさん。」

「……どうしたんだ？なんか元気がねえが……。」

「いや、実は……。」

懐かしい顔。

それは、ワサドラから、ここタオカカまでガーグア車を引いてくれた御者のおじさんであった。

心配をかけてしまったため、事情を説明。

……。

「なんだ！なら、ソウジさん。俺の部屋に泊まればいい！俺もこの宿なんだよ！」
「えっ?! いいんですか?!」

「おうよ！命の恩人だからよ！遠慮すんなって！そしたら嬢ちゃんもセツヒトさんがもう一部屋で……万事解決じゃねえか？」

「……………お、おお。」

正直藁にも縋る思いである。

お言葉に甘えることにした。

ナイスタイミング、おじさん。

* * * * *

「いやー！こんなに楽しい酒は久しぶりだ！さき！セツヒトさんも飲んでくれ！」
「わー、すみませんおじさん。どもどもー。」

セツヒトさんとも合流し、タオカカで一番賑わっていた食事処に入った。

部屋のお礼も兼ねて、おじさんも一緒に。

四人で食事を取るのも、野宿以来久しぶりである。

ちなみにセツヒトさんに何の用だったのか聞いてみたところ、

「野暮用の中身を聞くのはー、野暮ー?」

「それはそうですけど。なぜ疑問形なんですか。」

「まーせつちゃんにも色々あるのさー。」

と、はぐらかされてしまった。

そんなことはもう忘れて、四人で酒を飲み交わすことにした。

「おじさーん、良かったらまたー、ワサドラまで送ってくれるー?」

「おお! そいつは俺も願ったり叶ったりだ! こっちが頼みたいぐらいだよ! いいのかい!?!」

「いいも何もー、私たちも安心っていうか? ねー、ソウジー?」

「はい。おじさんが乗せて行ってくれるなら、とてもありがたいです。」

「よし! ちょうどそろそろ、ワサドラ辺りに戻ろうかと思っていたところよ! 出立は明日でいいのか!?!」

「いやーおじさん。話が早いねー。ぜひぜひー。」

トントン拍子に話が進んでいく。

おじさんがいたら、元から頼むつもりであったが、運がいい。

宿もゲットできたし、ワサドラまでの足も手に入れた。

ありがたい限りである。

「あ、ガーちゃんとグーちゃんは元気ですか？」

ハイビスさんが両手に持ったビールジョッキを机に置き、尋ねる。

片手でグイグイ飲むセツヒトさんとは違って、女性らしい飲み方である。

しかし、そこを聞くか。

大丈夫か。

「ああ……あいつらはなあ……。」

「えっ。」

言葉を詰まらせるおじさん。

……まさか。

少し物憂げな顔をしたおじさんは、食卓に並んだ特大の鳥の唐揚げをフォークで刺す。

持ち上げると、口でむしり取るように齧った。

「モグモグ……あいつらは……もう、な。」

「そ、そんな……。」

言葉を失うハイビスさん。

そうか、食肉になったか……。

いい奴らだったな。

「じゃ、じゃあ、ガーちゃんグーちゃん達はもう……。」

「ああ、すまねえな。冬の間、どうしても行き場もなくてなあ……。」

仕方のない話だろう。

おじさんだって、商売でやっているのだ。

責めることなんて、とてもできることではない。

ハイビスさんはそれはもう哀しげな顔。

今にも泣き出しそうなのを堪えているように見える。

再会、楽しみにしていたからなあ。

「あれー?」

ふと、セツヒトさんが声を上げる。

「でもさーおじさん。さっきあの子達は元気にやっているって言ってなかったー?」

「えっ!?!」

「……だはははは!!ばれちゃあしうがねえなあ!!はははははは!!」

「えっ?えっ!?!」

ど
う
し
や
い
い
ん
ど
?

「いやあ、すまねえ！ハイビスの嬢ちゃんを試してみたくてな！やっぱりアンタの愛は本物だよ！」

「え!?ということは、つまり……。」

「ああ、ちゃんというよ！言ったじゃねえか！これからが稼ぎ時の奴らだつてな！」

「よ……良かったああ……！」

おじさんがハイビスさんを試したつてことか。

中々にいやらしいことをするではないか。

「すまねえな！いや、実はな、少しそれも考えたんだけどよ……。」

「……………」

おじさんが話し始める。

「ソウジさんとセツヒトさんが、ゴシャハギを倒したつて聞いてよ。嬢ちゃんだつて、臨時ギルドで頑張つてたんだろ?……あんたらが頑張つて、俺たちを守ろうとしているつてわかつたら……こう、なんかよ……?こいつらを殺すのは、違うよなあつてなつて

な。」

「俺たちが……。」

「おう、噂は大したもんだったぜ。しかも後から聞いた話じゃ、セツヒトさんは有名な凄腕のハンターで、ソウジさんはそんなセツヒトさん差し置いて、ソロで強敵を撃破していったっていうじゃねえか。……もう感動しちまってなあ!!」

「そ、それはどうも。」

おじさんの話は続いた。

早い話が、俺たちの狩猟の話はこちらタオカカまで聞こえてきていたらしく、それを聞いてガーグー達を殺すのをやめたらしい。

なんでも、俺たちとの絆であるガーグア達を、蔑ろにしたく無かったとか。

「ハイビスの嬢ちゃん、また明日にでも、あいづら撫でてやってくれ!喜ぶと思うぜ!」
「は、はいっ!ぜび、やらせて下さい!」

今にも飛び出しそうなハイビスさんを抑えつつ、宴は続いた。

嬉しそうなハイビスさん。マイペースに酒を飲みつつ、俺に絡むセツヒトさん。

そして豪快に笑うおじさん。

帰りの道中も、楽しいものになりそうだ。

「そういやああんたら！男女関係に進展はあったのか!？」

「「ブーーーーー!!!」」

おじさんの爆弾投下に、全員が吹き出す一幕もありつつ。
その場はお開きになった。

* * * * *

ガラガラガラガラ……。

荷台の中で、車に揺られる。

「あつ……ヤバいです。」

「えっ!？」

「何い!?!じよ、嬢ちゃん!車の中ではやめてくれよ!?!大事な荷台なんだ!」

「だ、大丈夫です……。」

「おじさん。前に嫌な感じするから休憩しよー?」

「お、そうか……じゃあ近くにきれいな川があるからよ。そこ、行くわ。」

「わかりました。」

ハイビスさんは、大変にお辛そうである。

寝たらどうかと進言すると「寝ると戻しそうで……。」と、どうしようもない返事を頂いた。

なのでずっと座って荷台に揺られているが、それでも辛そう。

原因は簡単。

昨夜の痛飲である。

おじさんの爆弾発言のあと、何故かハイビスさんとセツヒトさんのペースがアップ。人間ってこれだけ飲めるのかと思わされた。

しかも2日続けての宴会である。

「もうお酒は飲みません……。」

弱々しくか細い声で休む姿も、これまた絵になるハイビスさん。
おいたわしや。

「あー……私も休むー……。」

そう言うと、セツヒトさんもハイビスさんの隣に行つて、ゴロンと寝た。

「ソウジー……周辺確認……交代でー……。」

「は、はい。お任せください。」

一応マツプを開いておく。

周りには……反応なし。よかった。

セツヒトさんもタオカカ力を出るときは平気な顔をしていたが……やはり乗り物に揺られるとキツイんだな。

二日酔いを何とかしようと思毒消しを渡したが、あまり効かなかつたらしい。

俺達は、今朝タオカカを出発し、もうすぐ昼を迎えようというところ。全5日ほどの行程を進み始めたばかりだ。

「まさか旅の初日からこうなるとはなあ……。」

「すみません……警戒は俺が引き継ぐので。」

「ソウジさんが見てくれるなら大丈夫だな！何とか今日中に中継の村まで行きかけたか？が……今日はやっぱり辞めといたほうが良かったんじゃないか？」

「そうですね……。」

一応俺たち男性陣は、辛そうな女性二人に出発を遅らせることを勧めたのだが。「迷惑はかけられないので。」と、一点張り。

……この状況が迷惑じゃないかと言われれば、まあ迷惑なんだけど。しょうがないよな。

ハイビスさんだって、毎日毎日過酷な業務をこなしてきたのだ。

セツヒトさんも、帰郷の最中とんぼ返りしてきたわけで。

はっちゃけて飲むのも、仕方がない。

「……………ソウジさん……………あんた、自覚はないのかい？」

「え？じ、自覚？」

「いや……………無さそうだな……………。俺はソウジさんが一番すげえと思うぞ。」

「……………？」

「いやいや！気にしないでくれ！こう言うのは、他人がどうこう言うもんじゃねえやな！すまんすまん！」

そう言うと二人に水を渡しに行くおじさん。

よく分からんが……………まあ長い旅路だ。

ゆっくり行こう。

* * * * *

旅の四日目。

下り道ということもあり、初日こそ色々あつてまごついたが、その後は順調に行程が進んだ。

周囲の景色も山道からすっかり草原に変わり、まばらな木々や林が目立つようになってくる。

こうなると、ワザドラも近くなってきたと感じる。

このまま行けば、明日の早くにも着くらしい。

行きよりも早い。

「凄腕二人がいるからよ！モンスターも全然出ねえわ！はっはっはっ！」

大きな声で笑うおじさん。

ガーグアも力強く、その足を踏みしめている。

「ほんとよかったー……初日はどうなることかと思っただよー……。」

「すみません……私、ご迷惑を……。」

「いやいやーハイビスちゃん……私も結構やばかったんだー……。ごめんねー、おじさん、ソウジー。」

女性二人は、事あるごとに謝ってくる。

「いやいやいや。二人とも、気にしないでください。そもそもこの旅、俺の特訓の為に行くようなものでしたし。」

「うーん、申し訳ない。……あー、ソウジ。見張り番代わるよー。」

「えっ。いいんですか。」

「うん。罪滅ぼしつてやつー。」

いいのか。

こんな殊勝なセツヒトさんも珍しい。

荷台の上、幌から降りてセツヒトさんは逆に登る。

ヒョヒョイツという身のこなしは流石である。

今日のセツヒトさんの出で立ち、いつものナルガ装備。

「流石に寒冷地仕様も暑くなってきたねー。」と胸元をパタパタさせていた。

色々見えるその装備、ありがとうございます。

……変態思考のアホな俺は置いといて。

俺も流石に寒冷地装備は暑く感じるようになってきた。低地に降りてきたからか、気候はガラリと変わる。ついこの前まで、雪に囲まれた世界にいたのになあ。

「雪……また見たいですね。」

ハイビスさんが、荷台の後ろを見てつぶやく。

視線の先には、俺たちがいた山々が見える。

あの山の一つ向こうが、確かミヨシだったはず。

遠くに行っていたもんだなと感じた。

後ろを見つめるハイビスさんに話しかける。

「……また行きましょうよ。ミヨシ村。」

「えっ。」

「今度は……観光目的で。ゆっくり温泉でも楽しみましょう。」

「あつ……それは、いいですね。」

ニツコリ笑うハイビスさん。

よかった、この所笑顔が少なかったから、心配だったのだ。

「今度は、シヨウコやドールも連れて……みんなで行けるといいですね。」

「あー………そ、そうですね。」

「………俺なんか変なこと言いました?」

「い、いえいえ! いいと思います。……みんなで行ったらきつと、楽しいですよね!」

「は、はい。」

様子がおかしい様な……気のせいかな?

ゴトン!

荷台が大きく揺れる。

「わわっ。」

「おっと。」

態勢を崩すハイビスさん。
思わず手で抱きとめる。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……すみません。」

「いえ。」

顔が赤いような……。

「あ、あの！ソウジさん！」

「は、はい？」

「わ、私……みんなでミヨシに行くのもいいですけど……。」

「は、はい……。」

どこか真剣な物言いに、こっちも姿勢を正してしまう。

「私は……ソウジさんと二人で、ゆっくり行きたいです。」

「……へ？」

「も、もしよかったら……こ、今度、私と——」

「——ソウジ——」

ハイビスさんの声を遮るように、荷台の上からセツヒトさんの声がかかった。

「す、すみません、ハイビスさん。」

「あつ……い、いえ。」

「何ですか!? セツヒトさん。」

ハイビスさんの発言に、少しドギマギしている。

えっ? 今なんて言った? 俺と? 二人?

……いやいやいや、とりあえずセツヒトさんの方が先だ。

省エネ生活がモットーのあの方が大声を上げる。

緊急事態だ。

「セツヒトさん！どうしました!？」

「ソウジー！ごめん！例のやつで、あの辺り、どう!？」

「は、はい！今すぐ!！」

言うやいなや、情報画面を起動。

「な、何だ!?セツヒトさん！モンスターか!？」

「信号弾が見えたような気がしてねー……赤かったんだよー。」

「赤ってことは……救援信号か!！」

おじさんが手綱を握りながら、心配する。

無理もない。

赤い信号弾は、基本緊急事態を示す。

俺の視力なら判別できたかもしれないが、マップを見た方が早い。

縮尺を合わせて……ん？

「……セツヒトさん、当たりです……結構遠いですけど、よく分かりましたね。」

「標的はー？」

「大型……だと思えます。詳細は分かりませんが……。」

「そ、ソウジさん!? あんた、分かるのか!？」

「……俺、目が良くてですね。……それより、あっちです!」

危ない危ない。

ギフトとバレるわけには行かない。

それに、本当に救援信号なら、行ったほうがいいだろう。

俺も幾度となく、先輩ハンターに助けられてきた。

恩返し of 連鎖だ。

「セツヒトさん! 行きましょう!」

「私はオツケー。……おじさんとハイビスちゃんはー?」

「おうよ! 嬢ちゃんさえ良ければ、すぐに向かうぜ!」

「わ、私も賛成です! ギルド職員としても、助かります!」

全員一致。

息がぴったりだ。

「じゃあ向かうぜ！」

「はい！よろしくおねがいます！」

おじさんが手綱を操る。

すぐに方向を転換したガーグア達は、今までと変わらぬ速さで草原を突っ切っていく。

「がんばってー！ガーちゃん！グーちゃん！」

「ガー！」

「グアー！」

気合いの入った……とは言い難いが、しつかりハイビスさんに返事をする2頭。頭がいいなあ。よく懐いているし。

向かうは南西、モンスターの反応がある場所。

俺とセツヒトさんは、急いで装備の点検を始めた。

108 救援に向かいました。

ワサドラに帰る道中、到着まで後一日というところで、セツヒトさんが救援信号を見つけた。

方向は南西。

南東に向かう予定だったから少し遠回りになるが、俺達はそこに向かうことにした。

信号弾。

ハンターは、クエストに出る際、必ずそれを持つ。

これはギルドから支給されるもので、どんなハンターでも必ず携帯することが義務付けられている。

ちゃんと持っていないと怒られるので、俺もクエストに出る際はポーチに入れずに、わざと腰につけることにしている。

それぐらい大事なものを。

ハンターにとつての命綱に等しい。

狩りが終わった時に上げる、緑の信号弾。

これは、モンスターの素材の回収や観測班への合図のためのもの。

そして、それとは別にある赤い信号弾。

緊急事態を知らせるものだ。

これが上がったのを確認したら、近隣のハンター……上位やG級に限られるが、救援に向かうのが一般的だ。

助けられる可能性の低い下位ハンターも、ギルドに報告するのが決まりである。

詳細な位置が分からないときは、彼らの証言が頼りになる。

なのでハンターにとっては、この赤い信号弾は命を守る重要なものだ。

まあペアやパーティーを組む者がある時は、その者たちが知らせればいい。

俺がデインバルドを相手にした時はそのパターンだった。

ミヨシ村で出会ったハンズさんも、カップルハンターが救援を求めていたし。

とにかく、それだけこの赤い色の意味は強い。

急いで行かないと。

しかし近づいていっても、信号弾の残す赤い煙は見当たらない。

マップでは確実にモンスターに近づいているが……どういうことだ。

「ソウジ、モンスターはいるー？」

「……………あ！いました！正面に……………見たことないやつですね……………」

「んー？……………あのぼやつと見えるやつか……………よく分かるねー、ソウジ。」

「いや、俺もかろうじて、ですけど。」

冬山で鍛えられたのか、元々の体が素晴らしいのかわからんが、俺はかなり視力がいい。

セツヒトさんもかなりいい方だが、数少ないセツヒトさんに勝る俺の長所と言える。

「だめだなあ……………俺にやあ全く見えねえぞ……………」

「おふたりともすごいですね……………私も全く。」

荷車にしがみついたハイビスさんも、全く見えないらしい。
見晴らしがいい草原だから、視力の違いが如実に分かるな。

「でもオツケー……………おじさん。この辺で私達、おりまーす。」

「お！？いい、いいのか！？」

「一応モンスターよけのお香、使ってくださいねー？あとこれー。」

ヒョイツ。

ポス。

「こ、これは何だ？セツヒトさん。」

「救援信号用の信号弾ー。ハイビスちゃん、使い方、分かるよねー？」

「あつ、はい！わかります！」

「オツケー。……んじやーソウジー。競争しよつかー。」

「きよ、競争!？」

……あのモンスターの位置まで走るってことか。

臨むところだ。

……追いつける気は全くしないが。

「それじゃー、行つてきますー。」

「おじさん、ハイビスさん。もし危ない目にあつたら、それ、使ってくださいね。」

「は、はい！」

「セツヒトさんにソウジさん！ 気をつけてな！ まああんたらなら問題ないだろうけどよ！」

「はい！ 行つてきます！」

ダツ。

スタツ。

荷車から降りる。

ハイビスさんたちに先にワサドラに行つてもらうことも考えたが、まだ遠い。

二人だけで野宿は、モンスターに襲われる可能性もゼロではない。ちよいと危険だ。俺達とは付かず離れずの位置にいてもらおう。

「ソウジー！ いくよー！」

「はいー！」

ダツ！！

「……やっぱはええな!!」

セツヒトさんの全速力。

ホントに2年のブランクがあるのかこの人。

追いつける気がしない。

なんて考えても仕方のないことなので、俺も本気で走ること。

「……よしっ。」

ダッ。

頑張つて、追いつけたらいいな、ぐらいの考えで。

俺も走り出した。

「(武運を——)」

ハイビスさんの声が遠くに聞こえる。

救援要請のあったという、そのモンスターのいるところ。

そこまで、全力で走った。

.....。

「はあっ.....おまたせしました.....。」

「ソウジー.....あれ。」

息が上がる俺と、涼しい顔をしているセツヒトさん。

何とか追いついたが、まだまだこの人とは、体力的な隔たりがある。

セツヒトさんが不意に指を差す。

その先。

(あれは.....!?)

近くの岩に身を隠しながら、モンスターのいる所を見る。

モンスターの方は初見。

一瞬ティガレックスかと思ったが、近くで見ると明らかに違う。

頭部、鼻の先端から生えた角。

両翼は広く、尻尾も長い。

四足歩行で、遠目からはティガレックスと似ていたが、全く違う。

全身がまるで松ぼっくりのような鱗に覆われている。

トゲトゲしていて痛そうだ。

そんなモンスターが、目の前を睨みつけている。

その視線の先。

驚いた。

「……………はあつ……………はあつ……………」

(……………シヨウコ!?)

シヨウコともう一人のアイルー……………確かトツバ、だったか。

シヨウコよりも更に小柄なアイルーが、シヨウコの傍らで横になっている。

腹を押さえて……出血か!?

地面には血が流れているように見える。

その横には、血で赤く濡れた信号弾が落ちていた。

トツバをかばうようにして、シヨウコが爪を立て、モンスターと向き合う。

更にその二人を庇うようにして、大剣を構える長身の女性ハンター。

状況の推測。

おそらくあのモンスターが出現し、あのちっこいトツバというアイルーが信号弾を発射。

だが、おそらく失敗。

深手を負った。

そこからどういいう流れでかは分からないが、現在の状況。

セツヒトさんが確認したという信号弾は、多分あれだろう。

満足に信号弾を射出できなかったのかも知れない。

むしろそれを視認できたセツヒトさんが凄い。

確認終了。

一足先に走るセツヒトさんは、既にライトボウガンを構えて臨戦態勢。

滑り込むように停止すると、モンスターの頭めがけて、弾を撃ち出した。

ダン！ダダダダダン！

「ギャオオオオ!!」

のけぞるモンスター。

視線がこちらを向く。

シヨウコたちも、ようやく俺たちに気づいた。

「えっ!?ご、ご主人様!」

だが、返事はしない。

モンスターにスキを与えてはいけない。

少なくとも今は、俺たちに意識を引き付けなければ。

「ソウジ！合わせて！」

「はい！」

ジャキン!!

ダラララララ!!

連続する射出音。

セツヒトさんの弾が当たった直後。

「……………ふっ！」

少し息を吐き出し、俺は跳躍。

怯んだ一瞬のスキを逃すわけにはいかない。

双剣の攻撃を、その翼に合わせる。

ズザン！ザシユ！ザザザザン！

ザン！

「ギャオオオ!!」

回転乱舞が綺麗に入った。

確実な手応え……なのだが、あんまり効いてないのか？

……いや、堪えているだろう。

俺はともかく、セツヒトさんの弱点を効果的に狙った射撃は痛いはず。

「グウウウウ……!」

よし。

とりあえず第一目標、意識を向ける事はクリア。

続いて。

「よつと。」

バックステップをして後退。

怪我をしているトツバとやらから、引き離す。

「ショウコ!!」

「は、はいっ!」

「後退だ!あとは請け負う!」

「……………は、はい!!」

「北東にハイビスさんたちがいる!そこで治療を!厳しいならそのままワサドラへ!」
「了解です!!」

ショウコと通じ合う。

返事をしながら、ショウコ達は後退を始めた。

「ほらっ……………こっち!」

ダン!ダラララララ!!

ビシイ!!ビシビシビシイ!!

「グアアアア!!」

セツヒトさんが、目にも留まらぬ装填を行い、連続の射撃。
……すべて喉元に命中している……ここが弱点ということか。
分かりやすい。

「うらっ！」

ザシユ！ザン！

モンスターがダメージを食らう。

急襲にたじろぐ今がチャンス。

畳み込む！

ザン！！ザザザザザン！

ザシユ！！

ダララララララ！

ダララララララ！

「ギャア!!ギャアアア!!」

怯むことも許されぬほどの猛攻。

このまま押し切りたいが……そうはいかないのが大型モンスター。

態勢を変え、低い姿勢になった。

両前脚に力を入れている。

「ソウジっ!」

「はいっ!!」

セツヒトさんが叫んだ瞬間、モンスターが飛んだ。

2、3回羽ばたいた後、一瞬の間が開く。

「尻尾!来るよ!」

「……………!」

集中しろ。

観察。

尻尾。

タイミング。

直前。

……………ここ！

「……………ッ！」

鬼人化。

トンツ。

跳躍。

クルツ。

回転を始め。

ヒュゴツツ!!

猛烈な音を出すモンスターの攻撃を、寸前で躲す。

そのまま……。

ズザザザザザザン!!

「ソウジっ!?!」

「……………つと……………」

回避しながら、攻撃した。

……………ところが。

「ギャアアア!!」

2回目。

だが、来ると思っていた。

なら、もう一度、合わせる。

天空から振り下ろされる尻尾を、双剣でいなす。

(多分、この辺……。)

心は落ち着いている。

攻撃が、よく見える。

集中すれば、いける。

(双剣は……右に跳躍、刀の切っ先を合わせて……。)

俺は、モンスターから振り下ろされた攻撃を、急回転で躲して。

「ふんっ!!!」

「ギャアアアア!!」

ズザザザザ!

ザシユツ!

2回目の回避攻撃に成功した。

「ギャアアア!!」

ダラララララ!!

俺が着地して、間髪入れずにセツヒトさんの援護射撃。

「グウウウ……!!」

バツ!!

ヒユツ!

……………。

モンスターは一瞬で天高く飛び、南東の方角に向かっていった。

「……………あつさり引きましたね……………」

「そーだね……………ソウジー？」

「は、はい？」

モンスターが飛び立って直後、どこか怒っているようなセツヒトさん。

……………あ、危なかっただろうか。

初見のモンスター相手に、習得したばかりの技は。

何でやったかと言われれば、試してみたかった、としか。

「……………今の技、なにー？」

「あ……………あれが、回避攻撃、です。」

「……………ティガレックスに使ったってやつー？」

「そ、そうです。……………す、すみません。」

何故か頭を下げたしまう俺。

「なんで謝るのさー。」

「いや、危なかったかなー…………と。」

「うーん、回避のタイミングが遅すぎてヒヤツとしたけど…………回転で間に合わせている…………感じだよねー?…………うん、すごかったー。」

「えっ!?!」

「だからー、すごかったー。私できるかなー、あれー。」

「…………ま、マジすか。」

素直にセツヒトさんに凄いとされた。

しかも自分にできるかな、なんて。

やばい、嬉しい。

「回避攻撃?の後はー、スキも少ないし…………タイミングさえ合えばー、かなり使える

ねー、それー。」

「はい……セツヒトさんがバックにいて、多少安心して踏み込めました。」
「なる。……それも込みかー。やるじゃんねー、ソウジー？」

ニヤニヤ顔で、満悦なセツヒトさん。

「でもー……悔しいから私もやるー。」

「えっ!？」

「双剣今度使うときやってみるからー、教えてねー。」

「は、はい。」

……セツヒトさんなら一瞬で覚えそうだ。

天才だからな、この人。

「あつ。」

そう言えばと思い出し、急いでマップを確認。

北東にマップを向ける。

「一応……ハイビスさん達の周りにモンスターはいなさそうです……。」

「そかそかー。よかったー。……ソウジー、ちよいと中途半端だけど、まずは帰ろうかー。」

「……そうですね。撃退はできたわけですし。」

「うん……それにさー、アイツがこんな所に現れるって……ちよいとおかしいんだよねー。」

「あのモンスターですか？」

「うん。普通こんなところにはー、いないんだよー。」

そうなのか。

俺はポーチに触れ、情報画面を起動。

モンスター情報は……。

「あ、これかな？……千刃竜……セルレギオス？」

「そーそー。やっぱソウジのそれいいねー。なんて書いてあるー？」

「えーつと……。」

【モンスター名】セルレギオス

【種族】飛竜種

【別名】千刃獣

【詳細】

砂漠などの乾燥帯を中心とした地域で目撃されることので多い大型の飛竜種。「刃鱗」と呼ばれる刃物のように鋭い金色の鱗に身を包むその姿から「千刃竜」の異名をとる。発達を遂げた翼や後脚、鼻先から後方に向けて伸びる角が特徴。縄張り意識と闘争心が非常に強い。特筆すべき飛行能力で、「天上最大の実力者」とも。飛行の制御力と瞬間的な速度は、全モンスターでもトップクラス。戦闘の際には全身の刃鱗を発射、距離を置いた獲物に対しても攻撃を仕掛け……

「……暑いところに現れる、とありますね。あと、飛行能力が半端ない、ということが分かります。」

「そーそー。鬱陶しいんだよー、アイツの攻撃……セルレギオスはー。」
「確かに、動きが独特でしたね。」

俺が回避攻撃に成功した、上空に一瞬ホバリングしてからの連続攻撃。集中していたからこそよく覚えているが、間の取り方が独特だった。

攻撃のリズムを大切にするハンターは多い。

自分の狩猟のやり方を崩されるのは、誰でも嫌なものだ。

「しかもさつきは無かったけど……飛ぶ鱗が痛いんだよねー。一回食らうとずっと痛みがズクズク疼いてさー。」

「ず、ズクズク……。」

「なんて言うのー？痛みがしつこいっていうか、とにかく続くのさー。できれば近接は避けたいねー。」

「……俺さつきまでめっちゃ至近距離いましたけど……。」

「うーん。勇気があるねー、ソウジー。男らしー。」

「は、ははは。」

よし。

次からは中距離から様子を見て攻撃に移ろう。

「とりあえずー……怪我したあの子が気になるからー、車に戻ろっかー。」

「そうですね。シヨウコともろくに話してませんし。」

「よーし。よーい、ドン！」

「あつーちよつー！」

一瞬で先に進むセツヒトさん。

……徒競争しないといけない体質か何かなのか。

とりあえず、行くか……。

* * * * *

「あつー！ご主人様!!」

「シヨウコ！久しぶり……と言いたいところだけど……その、さっきの連れの子は？」

「トツバは、とりあえず寝かしてます……無茶してくれて……でも、助かりました。セツ

ヒトさん、危ないところを、ありがとうございました。」

「んー？気にしないでー。シヨウコちゃん、だっけー？」

「は、はいっ！ご、ご主人様が、お世話になってます！」

「……おお……ハイビスちゃん、これが、萌えつてやつー？」

「いや……私に聞かれても……。」

この世界に「萌え」なんて言葉があるのか。

……多分日本語的にそういう翻訳の仕方なのかもしれない。

いまだにこの世界での俺の言語状況がよくわからん。

いや、読めるし、話せるし、書けるんだけども。

「ハイビスさん、大丈夫でしたか？」

「はい、大丈夫でした。ガーちゃんどグーちゃんも、大人しく待っていましたし。」

「おう、ソウジさん、お疲れさんだな！モンスターは、どうだった!？」

おじさんが興味深げに聞いてくる。

「撃退はできました。……あつちが勝手に場所を変えただけですけど。……シヨウコ、状況を説明してくれるか？」

「わかりました。荷台にフェニクさんとツバが居ますんで、そこでもええですか？」
「ああ、わかった。」

俺たちは、荷台に集まって話を聞くことにした。

……………。

荷台には、話にあつた通りトツバが寝込んでいた。

先ほどよりは顔色もよく、寝顔も安らかだ。

安心安心。

それと、その隣にいるハンター。

フェニクさん……だったか。以前からショウコとパーティーを組んでいたというハンターだが。

「セツヒトさんにソウジさん……だったね。救援、本当に助かったよ。礼を言う。ショウコさんとパーティーを組んでいる、フェニクという。」

「あ、どうも。ショウコの……何だろう、まあ主人？ じゃなくて、元オトモ……まあいい

や。ソウジと言います。」

「ドーもー。セツヒトです。」

「名高いお二人と出会えて、とても嬉しいよ。」

「いや、そんな。」

フェニクさん。

長い金髪を後ろに大きく三つ編みで縛り、防具はガチガチの近接用。

全身、鎧のような金属の防具でガードしてあり、回避主体の俺には縁のない格好をしている。

下の防具はシェードランプのような形状のスカート型。

……座るのには、少し大変そうだ。

立て掛けてある武器は大剣……以前シヨウコから太刀使いと聞いていたが、変更したのだろうか。

口調は……フランクなのか畏まっているのかよく分からん。

話す様と格好からは……どこかの騎士みたいな威風を感じる。

凜として、只者では無い印象を受けるな。

……所々、言葉のイントネーションがおかしいような。

気のせいかな？

「じゃあ、話は荷台の中で聞くとして……一度、出発しましょうか。おじさん、お願いします。」

「おう！全員乗ったな？出発するぞ！」

ガーグア車がゆつくりを動き始めた。

いきなり人が三人も増えて大丈夫かと思っただが、ガーちゃんグーちゃん達は変わらずに荷台を弾き続ける。

体力すごいな。

「じゃあショウコ……何があつたか、教えてくれるか？」

「は、はい。……こんな人数の前で、緊張しますけど……。」

わかるわ。

めつちや大人数よりも、これぐらいの人数の方がドキドキするよな。

少人数のプレゼンとか、色々突っ込まれるんじゃないかとヒヤヒヤしたもんだ。

前世を思い出した。

「とりあえず、まずは俺と話す感じで、リラックスして。気持ちはすごくわかるぞ、シヨウコ。」

「は、はい。変なところあったら、教えてくださいね？」

シヨウコはゆっくりと話し始め。

俺たちは車に揺られながら、耳を傾けるのだった。

109経緯を聞きましょう。

ワサドラに帰る途中、セツヒトさんが救援信号を見つけ、ヘルプに向かった。そこに居たのは、俺のオトモ、シヨウコだった。

ひとまずシヨウコ達から事情を聞き、この後について考えてみたいと思う。

「え、えーつとですね……ま、まず、ウチらは普通にクエストを受けまして……。」

緊張しているのか、おっかなびっくり話し始めたシヨウコ。

説明をまとめるところだ。

いつもの様に今朝早く、クエストを受注。

気候も暖かくなり、ワサドラでは大型モンスターの討伐クエストが少しずつ増えてきた。

だが、彼らは近頃あまり大型を相手にしていなかったらしい。

肩慣らしも兼ねて、ドスジャギイの狩猟を行おうとしたようだ。

だが。

「ウチらアイルー二人で探し回ったんですけど……ドスジャギイなんかひとつもいませんでした。」

モンスターがいなかったという。

小型さえ。

こつそりマップを見る。

……確かに周辺にはいないが……あ、岩山の向こうに一体……。

「何か強力なモンスターがいたんじゃないかと。」

「ウチらもそう思って、警戒を強めたんです。そしたら、例のセルレギオスが出てきて

……。」

「なるほど。」

セルレギオスにいち早く気づいていた周辺のモンスターは、どこかに雲隠れ。

そこに突如現れたセルレギオス。

そういうことか？

「あいつらホント奇襲が好きだよねー。」

「そうなんです……実は、ウチとフェニクさんは、セルレギオスは初めてではなくて……。」

「そうなのか？」

「……………そこからは、私が説明するよ。」

フェニクさんが割って入ってくる。

「……………実はシヨウウコさんとは、ソウジさんと出会う前から懇意にさせてもらっていてね。」

「そうだったのか。」

「すみません、言うてなくて。」

「その時に、一度ヤツから奇襲を受けたんだ……この辺じや目にすることは殆ど無いモンスターと知ったのは、しばらく後だったけどね。」

ガシヤ……。

上を見上げるフェニクさん。

防具の鎧が、音をたてる。

「あの時は何とか救援が間に合い無事に済んだが……まさか二度もあるとは思わなかったよ。」

「すみません……ウチ、引きが悪くて。」

「いやいや、そういうことじゃないさ。これは誰にでも起こりうる事だしね。」

フォローをきつちりと入れるフェニクさん。

……俺と出会う以前、か。

シヨウコが「招き猫」と呼ばれ、周りから距離を置かれていた時期だ。

……この人、いい人なんだろうな。

「とにかく、警戒はしていたんだ。だが、突然空から飛来し、猛攻を仕掛けてきて……トツバはいち早く気づいていた。そして救援信号を出そうと素早く用意した時……。」

「……セルレギオスに、狙われた。」

「そういうこと。後は見ての通りだよ。大剣で何とか追い返そうとしたんだが、私では力不足だった。」

自分の力が不足していたと言い切るフェニクさん。

立ち居振舞や所作を見たところ、腕はかなりのものだと思うのだが……見間違いだっただか？

「私は元兵隊なんだ。対人には自信があるのだが、どうもモンスターは勝手が違うね。……トツバとシヨウウコさんには、迷惑をかけている。」

「いやいや、ウチもいつも助かってますから。」

「ふふ……ありがとう。」

そう言ってトツバの髪を撫でるフェニクさん。

トツバの容態は落ち着いているように見える。

応急処置が良かったのかな。

流石ハイビスさん。

「しかしヤツを一蹴するとは……さすが、ワサドラでも有名なお二人だね。本当に助かったよ。……改めて、感謝する。」

手を膝に置き、一礼するフェニクさん。

様になっているなあ……実力者であるというのが伝わる。

「まあさー、無事だったんだしー？それでいいよねー。……それより気になるのは、セルレギオスの動向だねー。」

「……撃退したのではないのかい？」

「うーん、そうなんだけどねー？」

そう言うと、ちらりと俺の方を見るセツヒトさん。

………マップを確認しろということか。

すでに起動している情報画面から、マップを見る。

……やはり、ワサドラ方面に飛んでいるな。

「……逃げた方向が、ワサドラ方面、南東の方角でした。このまま行けば途中でかちあう

「かもしれません。」

「そーだよねー。どうするかなー。」

どうするとはつまり、やつをこのままにしておいていいのか、という話だ。

……………。

沈黙。

俺も考えてみる。

まず戦力。ここは申し分ないだろう。

おそらくセツヒトさん一人でも何とかしてしまっただろうし、俺にフェニクさん、シヨウコもいる。

ただし、それ以外……ハイビスさんや御者のおじさん、何よりトツバを考えるべきだ。

トツバは今の所容態は安定しているが……どんなに急いでもワサドラまではあと半日はかかるだろう。

その間に容態が急変するかもしれないし、仮に野宿をするならばその護衛は必須だ。

戦力を振り分ける必要がある。

「……分散しましょう。」

「……そうだねー、それがいいかなー。」

「俺の考えとしては……まずは全員でこのままワサドラに帰還。最も良いのはこれです。だけど、途中でセルレギオスにかち合う可能性もある。最悪の可能性を想定したい。」

俺の案は、分散。

仮にセルレギオスに襲われた際、打って出るのは俺かセツヒトさん＋シヨウコだろう。

どちらかがセルレギオスに対応し、どちらかがワサドラに急ぎ連絡。

厳しいことを言うようだが、フェニクさんには荷台の方に回ってもらおう。

「俺としては、モンスターもそうですけど、野盗とかその辺が怖いです。」

「ああ、なら私が適任だね。捕縛なら任せてくれ。」

「私は人間相手はちよつとなー……。」

セツヒトさんが言い淀む。

何で？セツヒトさんなら、その辺の人間など問題にならないだろうに。

「どうしてですか？」

「……………やりすぎるかもー。」

「ああ…………。」

なるほど。

それはちよつとマズいか。

「じゃあ、こうしましょう。仮にセルレギオス等強力なモンスターに襲われた際は、俺とシヨウコ、二人で行きます。」

「えっ!?ウチとですか!？」

「ああ。」

「ご主人さまとセツヒトさん、お二人の方が簡単やと思うんですけど…………。」

「俺たちがいなくなったこの車に、万が一にも新手が出たときは…………モンスターならセツヒトさん、人間ならフェニクさんに対応してもらおう。むしろ、ガーグア車に残る方が

重要だ。怪我人もいるし、戦えない人間を守る人が欲しい。」
「な、なるほど……。」

簡単に分散の方法を提案した。

一応、皆も異存は無いようだ。

「いいんじゃない？ 私とシヨウコちゃんやんが組むよりも、ソウジとシヨウコちゃんやんが組んだほうがいいよー。黄金コンビでしょー？」

「お、黄金？」

「お互いわかってる方が、動きやすいだろうしねー。それにー、シヨウコちゃん。」
「は、はい！」

シヨウコが元気良く返事をする。

……もしかしてセツヒトさんが苦手なのか？

「ソウジならー、多分セルレギオス、問題ないよー。私が保証しまーす。」
「えっ？」

「多分じゃなくてー、確信。……確定？」

「俺は一生懸命やるだけですよ。……シヨウコ、万一の時は、頼むぞ。久々だけど、大丈夫だよな？」

「は、はい！むしろよろしくおねがいます！……強くなったご主人さま、見てみたいですよ！」

よし。

方針は固まった。

まあセルレギオスに襲われれば、の話だが。

「おじさん、ハイビスさん、そういう感じで、よろしくおねがいます。」

「おうよ！分かったぜ！」

「何も無い事を願いますが、その際は、ソウジさん。シヨウコちゃん。ご武運を。」

ガーグア車に残る二人にも、確認しておく。

「しかしよ、門外漢の俺が口をだすのもアレだが……。」

おじさんが俺に問いかけてきた。

「はい、何でしょう。」

「思い切つてよ、ワサドラへの道を外れて、迂回するつてのはどうなんだ？このまま行きやあ、コイツらならそれでも明日までにはワサドラに着くだろうしな。」

おじさんが、ガーグアたちを首で差す。

「それもいいんですけど、あのセルレギオス、俺たちを覚えましたからね……。」

「おっ？……それはヤバいのか？」

「ヤツの性格は執拗、且つ奇襲が目立つ。飛行能力もかなり長けています。……迂回しようとも、襲われるなら一瞬。なら、いつそまっすぐ向かったほうがいいでしょう。……こちらには一人、負傷した者がいますしね。急ぐに越したことは無いです。」

「なるほどなあ……ソウジさん、考えたなあ……。」

執拗に攻めてくる性格のモンスター、そして移動スピードもかなり速い……そこを考

えれば、迂回しようと思わらないだろう。

なら、急いだほうがいい。

トツバも、心配だ。

「承知した！余計な口を挟んですまねえな！」

「いやいや、そういうアイディアが活路を見出すこともありますし、ぜひ言ってください。」

「ははは！了解、つと！」

ピシイッ。

手綱を握り直したおじさんは、笑いながら俺に返事をした。

うーん、仕事人って感じで、かっこいいなあ。

「シヨウコ、簡単に打ち合わせしておこう。まあ……やることは変わらないだろうけど。」

「はいっ！よろしくおねがいます！」

「ふふっ……ダメだな、妬けてしまうよ。」

フェニクさんが笑顔で言うと、その腕を組んだ。
灼ける、とは？

「いや、出会いこそ私の方が早い……見てわかるよ。君たちは最高のペアだろうってね。」

「さ、最高のペア……。」

シヨウコ、何故顔を赤くする。

「ええ……多分ですけど、シヨウコと俺なら、大丈夫です。俺の、唯一無二のオトモなんです。」

「ご主人さま……ちよつと……は、恥ずかしいです……。」

「そ、そうか？ すまん。」

「いや、謝るのはおかしいですよ、ご主人さま。」

「えっ!? じゃ、じゃあどうすればいい!?!」

「その辺は変わってないようで安心しました……。」

何だ？なんか間違ったのか俺？

「シヨウコちゃん……あなたのご主人さまは強くなっただですよ……その辺はまっつつつつつたく変わっておりませんが。」

「ああ……ですよねえ……。」

「おー？その話ー、私も混ぜてー。」

打ち合わせをするはずが、ハイビスさんを皮切りに、突如ガールズトークを繰り広げだす女性陣。

怪我人もいるのに。

「まあ、後でいいか……。」

とりあえず、方針は決まったわけだし、俺とシヨウコなら打ち合わせ何もいらないうらう。

現場に出れば、シヨウコならいくらでも合わせてくれる。
信頼感が違う。

「よっ、と……。」

幌の後ろからその上に飛び乗った俺は、周辺の監視をすることにした。

「おじさん！何か居たらすぐ言いますから！」

「おう！よろしく頼んだ！」

とかなんとか言いつつ、こっそりマップを起動。

「……………」

一応、周辺には敵影無し。

このまま何事も無く、事が過ぎればいいけど。

ゴソ。

水筒を取り出し、一服する。

そこから夕方まで、周囲の監視を続けた。

* * * * *

夜。

日も沈み、今日はこの辺で野営をする事にした。

ワサドラまでは、もう目と鼻の先……とまではいかないが、かなり近づいた。

草原にまばらに生える大きな木を抛り所に、川の近くでキャンプを張る。

人員総出でやったら、準備はすぐに終わった。

「……………ん……………」

「……………トツバ？」

シヨウコが声を上げる。

「……………ここは……………」

「トツバ、起きたね。……………体はどう？無理に起きなくていいよ。」

「フェニクとシヨウコ……………それに……………誰？」

「ああ、私達を助けてくれたみなさんだ。」

フェニクさんが俺たちを紹介してくれた。

「……………どうも、ありがとう。私は、トツバ。」

「ソウジだ。体の方は平気か？」

「大丈夫……………そう、あなたが……………」

「ああ、シヨウコと組んでいる、ハンターだ。」

トツバが起きた。

と言つても、態勢は横たわったまま。

腹に大きな裂傷を受けていたのだ。無理もない。

「……私は失敗した。」

「失敗などではない。いち早く知らせてくれたおかげで、お前以外は全員無事だ。ありがとう、トツバ。」

「礼はいい。体が勝手に動いただけ。」

「ああ。そう言うと思ったよ。」

トツバとフェニクさんが話をするのを聞いていると、二人の関係性が何となくわかってきた。

分かりあっている、そんな印象を受けた。

「どれぐらい、経ったの？」

「ウチらが襲われて、その日の夕方や。ほんまもう……無茶しすぎ、トツバ。」

「シヨウコも無事なら、問題無い。」

「問題大アリや……でも助かったから……ありがとうな、トツバ。」
「ん。」

トツバはシヨウコよりも小さい。

黒のショートヘア、猫耳も黒く、クリっとした目、いかにもアイルー系の亜人という印象だ。

装備は外してラフな格好になっているが、荷台に積んであった獲物はハンマーだった。

……アイルーなのに、力が強いんだろうな。

「セツヒトさん、ソウジさん……知ってる。有名。ありがとう。感謝してもしきれない。」

「気にしないでー、こういうのはー、持ちっ持たれっー。」

「ありがとう。ハイビスさんも、久しぶり。」

「トツバちゃん……良かった、目を覚まして。」

ハイビスさんとは知り合いなのか。

そりやそうか、ワサドラのハンターやオトモで、この人を知らない人はいないだろう。

「もう一人の……おじさん。ハンター？」

「いや、俺は違うぜ、アイルーの嬢ちゃん。安心しな。俺が責任持って、ワサドラまで連

れてくからよ!」

「この車の……そう。」

皆が心配してゾロゾロと集まってきた。

野宮も一通り終わり、夕飯時。

……腹減ったな。

「……………そろそろご飯にしようと思うけど……………シヨウコ達は、何か持ってるか?」

「携帯食料ならありますけど。」

「なるほど。」

俺のポーチには、人数分の食糧が十分に入っている。

弁当は昨晚で食い尽くしたけど。

……ワサドラ帰ったらお礼を言いに行こう。美味かった。

トツバは、食欲はあるというので交代で夕飯を取った。

思ったより元気そうで良かった。

「アイルーは体力や俊敏さもそうですけど、復活も早いんです。」

「そうなのか？」

「はい……まあご主人さまは異常やと思いますけど……。」

「……………」

何も返せない。

ティガレックスの時に負った肋骨の負傷も、既にそこまで痛みはない。

……………女神様の朝食のおかげなのだろうか。

ありがとうございます、女神様。

「だからー、私とソウジは外で寝るってー。見張りもしなきゃだしー。」

「いや、ここは私が見張りをしよう。シヨウコとソウジさん、セツヒトさんには体力を温存してもらわないとね。」

「あ、あのー、私は荷車にいるだけですから、テントでなくても……。」

「ウチは平気ですよ？何ならご主人さまと寝泊まりなんて、毎日のことでしたし。」

「「えっ……？」」

どこで寝るか、誰が見張りをするのかで譲り合いが止まらない。
そしてシヨウコがいらぬことを言い出し、場は混乱を極めてきた。

「そーいやシヨウコちゃんは一、ソウジと同じ部屋で毎日寝泊まりしてたんだよねー。」

「そ、そーなのか……？ 私はてつきり同じ宿で2つ部屋を取っていたものだ……。」

「……………シヨウコちゃん、ちよつと私とお話しましょう？ ね？」

「ぐ、ぐ主人さまあ…………。」

穏便で平和な話し合いの結果、俺、セツヒトさん、フエニクさんが一人ずつ交代で見張りをすることに。

俺はおじさんと荷車で仮眠。

他の女性陣は2つのテントで寝ることに。

「さあシヨウコちゃん。こっちのテントにいらっしやい？」

「ぐ、ぐ主人さまあ…………。」

ズルズルズルズル…………。

ハイビスさんに引きずられ、トツバのいるテントに入っていくシヨウコ。
何故かフェニクさんもセツヒトさんも一緒に。

……………。

いやー穩便に済んで良かった良かった。
寝よ。

「ソウジさん、俺はガッツリ寝るが……大丈夫かい？」

「ええ、構いませんよ。護衛と見張りは俺たちの領分ですし。」

「いや……大丈夫つてのはそつちじゃねえんだが……。まあいいわ。よろしく頼む。」

「はい。おやすみなさいです。」

「お、おう。」

おじさんが物凄い目でこちらを見た後、毛布を被った。

何かあったのだろうか。

……不安が無いよう、きっちりと見張りをしよう。

「よっ、と。」

音を立てないように慎重に幌の上に登る。

毛布を取り出して、防寒態勢。

そこからしばらく、俺は辺りを警戒するのであった。

110 急襲に備えましょう。

明くる朝。

空は曇天。

そこまで冷え込みは無かったが、毛布が無ければ厳しかった。

その位の気温。

辺りは明るみ始めてきている。

「おはようございます、フエニクさん。」

「……ああ、おはよう。よく眠れたかい？」

「お陰様で、ありがとうございます。……モンスターは？」

「特に気配はなかったよ。……セツヒトさんが常に殺気を放っているからだろうね。おかげで楽なものだったよ。」

「あ、分かるんですね。」

セツヒトさんのとんでも能力は今に始まったことではないが、やはり凄い。

寝ているはず……何なら脱いでいるはずなのに。

そしてその殺気を察知しているフェニクさんも凄いわ。

「兵役に就いていた頃は、モンスターよりも悪意に満ちた人間の雰囲気は常にあてられていたからね……。見張りは得意なんだ。セツヒトさんの周囲を警戒する空気は、分かりやすいよ。」

「ああ、なるほど。」

モンスターの殺気って、分かりやすいんだな。

まあ俺でも分かるぐらいだし、単純なんだろう。

フェニクさんは相変わらず、凜とした佇まい。

背筋をピンと張る姿、かっこいい。

「……君は、そういう悪意などは、全く感じないな。」

「え？そ、そうですか？」

「ああ。人間、少なからずそういった気配はあるものだが……ソウジさんからは、何も。」

「それはハンターとしてどうなんでしょうね……。」

「モンスター相手なら関係ないんじゃないかな？ 美徳だと思っようよ。」
「そうですかね……なら良かったです。」

不思議な雰囲気の人だ。

ミステリアス……というのか。

セツヒトさんはミステリアスというより……素だもんなあ。

「さて……そろそろみんな起きてくる頃かな。準備をしようか。」

「そうですね。俺、水汲んできますよ。」

「ああ、ありがとう。」

フェニクさんはよく分からないけど……そういう人なんだろう。

若干イントネーションがおかしいところも含めて。

俺は頭を切り替えて、近くの川に向かった。

* * * * *

朝食を簡単に済ませる。

今日はおそらく、ワサドラに着ける。

今の所、セルレギオスの影はない。

「トツバ、調子はどうなん？」

「おなかいたい。シヨウゴ、おんぶして。」

「……ホンマに痛いん？」

「立つのは辛い。我慢すれば大丈夫。」

「しゃあないなあ……。」

トツバもよく眠れたのか、昨日よりも顔色がいい。

朝食も普通に食べられていた。

一応体調の確認をしておく。

「トツバ……でいいか？」

「いい。敬語は、苦手。」

「そうか。じゃあトツバ。調子はどうだ？」

「すこぶるグッド。」

「す、すこぶる、か。……今日はワサドラに着くと思う。安静にしていってくれ。何かあったら、俺とシヨウコが行くから。」

「助かる。……シヨウコをよろしく。」

返しに笑いかけてしまった。

トツバは、シヨウコとはアイルーの里にいた頃からの幼馴染だということだった。

仲の良い、気の置かない様子からも、その関係性は伺えた。

「シヨウコは事あることにあなたの話をしてくる。おかげで、今は有名人に出会えた気分。」

「ちよっ！トツバ！何言うてんの!?!」

『あんな出会い、もう二度とない。』『ウチは、あの人に追いつきたい。頑張るでー!』
……全部、シヨウコの言葉。」

「わー！わー！もう行くでー！トツバ!!」

グイグイ。

「痛い……。」

トツバ達は、忙しくなくガーグア車の方に向かっていった。
シヨウコも嬉しいことを言ってくれる。
頑張らないとな。

「ソウジさん。」

「あ、ハイビスさん。どうされました？」

「いえ、今日も何も無いといいな、と思いで。……もし、セルレギオスが出てきた時は、よろしくおねがいます。」

「もちろん。……これは予感ですけど、出ますね。」

「えっ!？」

「何か……そんな気がするんですよ。それにもし無事にワサドラに着いても、アイツは俺が仕留めたいです。人間に脅威を感じた個体なら、なおさら早く。」

「そうですか……。ソウジさんもついにその次元に……。」

「次元？」

答えながらハイビスさんの格好に目を向ける。

おそらくそのままギルドに行くつもりなのだろう、受付嬢の制服に見を包んでいる。久しぶりに見る姿は、どこか安心する。

「……達人は、そういった雰囲気には敏感です。ソウジさんも、そういう次元に到達されたのだなあ、と。」

「い、いやいや。勘ですよ？勘。当たるかも分からない。」

「ソウジー、私も同意見だよー？」

「セツヒ……せつちゃんさん。」

ハイビスさんの後ろからやって来たセツヒトさんが、俺と同じ意見だと口を挟んできた。

ハイビスさんの両肩に後ろから腕を置き、ダランともたれかかる。

「せ、セツヒトさん!？」

「はあ、ハイビスちゃん温かいねー。安心するー。」

「そそそ、それはありがとうござい……じゃなくて！」

「ごめんねー。でもねー、これは仕方のないことなのでー。」

「せ、セツヒトさん……。」

セツヒトさんが寒がっている理由。

それは、装備を変えたからだ。

例の寒冷地仕様の装備はライトボウガンに向かないとかで、昨夜の警備の交代の際、荷物から出してくれと頼まれた。

野外で着替えだしたので、慌てて後ろを向いたのを覚えている。

「インナー着ているから大丈夫だよー？」などと抜かしていたが、そういう問題ではない。

ドキドキした。

そして寒いからと今度はハイビスさんに後ろから抱きよる始末。

うーん……自由だ。

そして百合的な雰囲気を感じてしまう。

「ソウジ、多分くるね、これ。」

「あ、やっぱりそうですか？」

少しだけ真剣な口調に変わったセツヒトさんが、俺と同じ考えを口にした。いまいち真剣味に欠けるのは、ハイビスさんを抱きしめているからだろう。

早く離れなさい。

「シヨウコちゃんにも話しておいてー。いざという時はー、行つてらっしゃーい。」

「承知しました。気をつけます。」

「うん、気をつけてー。アイツは強いけど……ソウジとの相性は抜群じゃないかなー。油断はしないよーに。」

「はいっ！」

「あ、あの、セツヒトさんそろそろ……。」

「んー、はあ、暖かかったー。」

二人も荷台に向かつていった。

随分仲良くなったよなあ、あの二人。

数ヶ月前、ワサドラを出発する時はハイビスさんがビクビクしていたのに。

共通の話題を見つけたとか何とか言ってたけど。
何だろう。

「ソウジさん！準備いいぞー!!」

「あつ！すみません！今行きます！」

走ってガーグア車に向かい、荷台に乗る。

シヨウコと簡単に打ち合わせしておこう。

……多分、ヤツはくる。

動き出すガーグア車。

俺は装備を確認し、シヨウコと話し合いを始めた。

* * * * *

「おーし、このままいきやあ、あと一刻もすりやあ着くな！」

「あれえ……？」

結局セルレギオスは来ない。

……………朝あんなに意気込んでおいて、結局空振りか？

情報画面を起動し、マップを眺める。

……………モンスターの影も形もない。

……………まあ来ないに越したことはないけど。

無いんだけども。

……………ちよつと恥ずかしいです。

「ソウジさん。」

「あ、フェニクさん。」

俺がいる荷台の上、幌の屋根に登ってきたのはフェニクさんだった。

「モンスターは、どうかな。」

「いえ……………恥ずかしいんですが、来そうで来ないと言うか、アテが外れたというか。」

昨日マップから反応が消えてからは、音沙汰なし。

大型は神出鬼没、油断はしないが……もうちよつと早く出ると思ったんだがなあ。

「ははは、いいことじゃないか。落ち込んでいるのかい？」

「いやいや、昨日も言いましたように、全員で帰還するのが最も良いと思っていますよ。……ただ、意気込んでいた自分が……。」

「……恥ずかしい？」

「……うっ……そ、そうです。」

「ふ、ふふふ……はははははは！」

「そ、そんなに笑わんといして下さい……。」

なんかツボに入ったのか、笑いが止まらない様子のフェニクさん。

「い、いや。すまない。……ソウジ君は、面白いな。シヨウコさんやセツヒトさん達が放っておかないわけだ。」

「放っておかないのかどうかは分かりませんが……このまま行くなら行くで、越したことは無いんです。……ただなあ……。」

「ああ、ガツカリしているな。隠さなくてもいいぞ。その気持ち、分かるよ。」

「そ、そうですか？」

「ああ……いや、全く。久しぶりにこんなに笑ったよ……君は、人を惹き込ませる魅力がある。」

「褒められているのか……？」

「は、ははははは！」

若干小馬鹿にされているような……でも何だろう、このお姉さんの人にちよつとばかりいじられる感じは。

……………。

い、いや違うぞ?!何か心地よいか思っていないぞ!?

「……まあでも、君やセツヒトさんぐらいの強者が『出る』と言ったんだ。警戒は怠らないようにしよう。」

「ですね……いや、油断するつもりは一切——」

ヒュッ……………。

「!!」

「ん? どうし……来たのか!？」

「……分かりませんが……せつちゃんさん!」

「はーい……よつと!」

俺が呼ぶより早く、幌の上に登ってきたセツヒトさん。

予感がした。

アイツの。

「……例のアレには反応はないですが……来ます!」

「おー、ソウジー……いいねー。私も全く……同意見!!」

ジャキン!

明後日の方向にボウガンを構えるセツヒトさんは、しかしどこかを狙いすましてい
る。

そつちか……かなり……上?

「おじさん！」

「おう！来たんだな！コイツらも……ちよつとばかり様子が変だわ！」

「大丈夫ですか!？」

「なあに！問題ねえ！何とかすらあ！それより、このまま向かっていいんだな！」

「はい！打ち合わせ通りに！」

「はいよ!!」

おじさんと連絡。

ガーグア達は、いつもと変わらず車を引いているようにしか見えないが、おじさんには伝わるんだろう。

流石だ。

「シヨウゴ！」

「はいっ！」

「用意は!？」

「いつでも！」

「よし……では、せつちゃんさん、フェニクさん。護衛、よろしくおねがいします。」

「はい、いつてらー。」

「ソウジさん！よろしく頼む！」

「はい！」

バツ。

合図もしないで幌から飛び降りる俺。

同じタイミングで飛び出すシヨウコ。

きれいに二人で着地する。

息びつたりだ。

「ソウジー！視認できたー！」

「はい！見えます！」

「ソウジさん！シヨウコちゃん！ご武運を！」

「はいっ！」

シヨウコの元気な声が響く。

ガラガラガラガラ………。

遠くに消えていくガーグア車の音。

……さあ、ここからだ。

「……シヨウコ、よろしくな。」

「はいっ！ご主人さま！」

「………来るぞっ!!」

ピュオオオン！

上空からほぼ垂直に落下してくる物体。
とんでもない速度だ。

ズウン……。

「ギャアアア!!!」

超速で降りてきたのに、着地の音はそこまで響かない。

飛ぶのが上手いんだな。情報通りだ。

するとようやくやくマップに、目の前のモンスター、セルレギオスが感知された。遅いわ。

「よう。1日ぶりだな、セルレギオス。」

「グウウウウウ……。」

俺たちの目の前、5メートルほど空けて、ヤツが唸っている。

昨日対峙した個体と同じ奴だろう。

俺とセツヒトさんがつけた傷が残っていた。

「間違っても、よそに行くんじゃないぞ……?」

「グウウウ…………!」

「相手は、俺たちだ!!」

「ギャアアアアア!」

セルレギオスの咆哮と共に。

戦いの火蓋が切って落とされた。

「まずは10分集中! 凌ぐぞ!」

「はいっ!!」

やることは変わらない。

まずは、見る。

昨日は特殊な状況だったから突っ込んだけど、今日は慎重に。

……セツヒトさんが言っていた、飛ぶ鱗、というのも気になる。

「ギャア!!」

グアア!!

音を立てて翼を広げ、後退したセルレギオス。
翼が動くと同時に、何かを射出した。

(これか！)

まさかいきなり出してくるとは。

飛ぶ鱗。

翼から出してくるのか。

……いや、あの松ぼっくりみたいなゴツゴツが飛び出してきた。
あれ見える箇所……体全体、どこから出すかわからん。

「散！」

「はいっ！」

ザッ！

危なげなく、左右に回避する俺たち。

当たるとズクズク痛いらしい。

怖っ。

「今のが例のやつだ！」

「了解です！」

打ち合わせで伝えておいた、飛んでくる鱗。

早めに確認できて良かった。

「ガアアア!!」

着地して、距離を詰めてくるようだが……これは……。

「尻尾! 2回!」

「はいっ!」

その長い尾を振り回し、薙ぎ払ってくるセルレギオス。
バックステップで避ける。

深めに回避し、二回目も避けていく。

「ご主人さま！」

「まだっ！咆哮！」

「はいっ！」

技の直後、スキだらけのセルレギオス。
攻撃しようとシヨウコが動くのを静止。

「ギャアアアアアアア!!」

「……………っ！」

モンスターの咆哮は、ティガレックスのような攻撃能力を備えたものもあるが、基本無害だ。

だが、動物的な本能で体がすくんでしまう。

そのスキを狙われたら、危険だ。
叫ぶだろうなと思つたら叫んだ。
読みやすいやつである。

「シヨウゴ、焦らずいこう。」

「は、はいっ！すんません！」

「よしっ！……左っ！」

「はいっ！」

また飛んで、今度は俺たちの左に着地するセルレギオス。

よく飛ぶ。

視野を縦にも横にも広げないと、動きに対応できない。

ティガレックスは、殆どの攻撃が直線的であつたのに対し、セルレギオスは縦横無尽な感じ。

「ギイア!!」

ゆっくり首を捻りだすセルレギオス。
……………何かを出そうとしている？

「シヨウコ！バツク！」

「はいっ！……………え!？」

シヨウコに、後退を指示。

だが、俺は前進する。

セルレギオスが何かを出そうとしている。

なら、その首元は？

「ガラ空きだ。」

シュツ。

ザシュ！ザン！ザザン！

「えええ!？」

ダツ。

離脱。

「ギャオオオオオ!!」

ヒュオン!

(翼っ!)

「よっ……と!」

シヨウコを驚かせてしまっただろうか。

いける、と踏んで動いたんだけど。

首を捻る動作。

力の溜め具合からして、おそらくは遠距離攻撃をしてくると思った。

バサルモスのようなビームなのか、ラングロトラのような長い舌なのかは分からないが、これはチャンス。

今までに幾度となく試してきた、急接近からの至近距離での攻撃。うまくいった。

その後の翼を振り下ろす攻撃を避け、シヨウコのいる場所まで戻る。

「ご主人さま……言うてることちやいますやん……。」

「す、すまん。隙だらけで、つい。」

「焦らんでいいって言うたやないですか!!」

「す、すまん。」

人に注意しておいて自分がやるとは。

最低である。

「ほ、ほら！次来るぞ！」

「えっ!?も、もうっ!!」

ちよつと怒っているシヨウコ。
間髪入れず、セルレギオスが尻尾を振り回してきた。
大きく回避する俺たち。

「……………後で話しましょう……………」

説教確定。

そりゃそうか……………。

……………気を取り直して。

「グウウウウウ……………！」

セルレギオスの攻撃は、範囲が広い。

特に飛んだあとの翼や尻尾の振り回しは、脅威だ。

だが、俺とシヨウコの避けられる範囲を甘く見てもらっては困る。
避けることに関しては、俺たち、自信があるぞ。

「……………ギャア!!」

バサツ……。

また飛んだ。

どうやっているのかは分かんが、2、3回羽ばたくだけでホバリングしている。
……物理法則とか関係ないな……すげえ……。

「ご主人さま！アレです！」

「アレか！じゃあ2回！警戒!!」

「はいっ!!」

アレとは何か。

シヨウコとの打ち合わせで確認した、トツバに重症を負わせたという、空中からの滑
空攻撃のことだ。

これは怖い。

アイルーとはいえ、トツバの防具の上から切り裂く威力がある。

避けられれば御の字だろう。
だが。

「シヨウゴ！すまん！やるわ！」

「え、ええっ!?!」

……この攻撃は、昨日味わった。

確かに速いし、威力も凄まじい。

だが、ティガレックスほどの力は感じない。

ティノバルドみたいな、超速のものでもない。

集中する。

まるで居合斬りをする刀の達人のごとく、低く身構える。

ヒュゴツツ!!

振り下ろされる尻尾。

(……………!!)

鬼人化。

回避。

回転。

世界が回る。

だが、俺の双剣は、セルレギオスの尾を撫でるように切り裂き。

ズバツ!!ザシュ!!

ザザザザン!

「ギャオオオオ!!」

空中の姿勢を、叩き落とした。

「よしっ! ショウコ、チャンス!」

「ご主人さま!?! 今の何ですか!?!」

「説明は後！」

「は、はい!!」

空から落とされたセルレギオスは、地面でもがいている。
弱点である喉元に、二人一斉に斬りかかった。

「……………後退！」

「はいっ！」

ザッ。

「……………グウウウウウ！」

「おー……………怒ってる怒ってる。」

「ご主人さま……………今、避けたのに攻撃しました……………？」

「ああ、そういう技だ。……………次も合わせるから、頼んだぞ。」

「は、はい！」

シヨウコに説明するほどの時間を、セルレギオスは与えてくれない。現に、既に態勢を立て直し、咆哮をしようと首を捻っている。

「ギャアアアア!!」

「うっ……!!」

「……ふっ!!」

見え見えの咆哮に、シヨウコが怯む。

だが、俺は動いた。

実は旅の帰りの間、ずっと考えていた。

大声に怯んでしまうなら、その直前に回避攻撃を加えればいいのではないか。

まるで憑依状態のように、先に体に指示を出し、回転、攻撃。

空中乱舞を、繰り出す。

息を浅く吐き出し、体に活を入れて。

「————ヤアアア!!」

叫び続けるセルレギオス。
だが、俺の体は止められない。

ザシユ！ザザザザン！

「ギャア!!」

たじろぐセルレギオス。

よし、咆哮中の回避攻撃、成功。

「ご主人さま！今のも！」

「ああ！できた！」

「できたって……やりすぎです！」

「す、すまん！でも確証はあつたぞ!?!」

ヒントは、憑依状態。

心が無になり、ひたすらに体が動いてしまう、あの状態。

それそのものを、再現した。
うん、やっぱりできたな。

「……………お説教2つ目です。」

わあ怖い。

息びったりだなあ。

* * * * *

「シヨウコー！」

「はいっ！」

声をかける。

同時に飛び退く。

ズウン！

「ギャアアア!!」

空中からその後ろ脚を勢いよく降ろしてきたセルレギオス。

特徴的な、その猛禽類のような爪。

おそらくは、獲物を捕まえるために進化したのだろう。

当たるとかなり厄介だと思う。

だが。

「散!」

「はいっ!」

バツ!

俺達のいた場所に、足の爪を立てて降りるセルレギオス。

だが、避けてしまえばスキが生まれる。

左右から挟んで、両翼を攻撃。

前脚に生えた翼を、重点的に攻めていく。

「スキあり！シヨウコ！」

「はいっ！」

キン！ザシユ！

ザン！ザザン！ザザザン！！

「グア……！！」

バツ！！

バサツ！バサツ！

苦しげな顔から、再び飛ぶセルレギオス。

だが、翼を重点的に叩いたおかげで、少しぎこちない。

「ギャアアア！！」

「振り下ろし！」

「後退します！」

空中からの尻尾攻撃に備え、シヨウコは急いで後退する。

だが、俺はそのまま前進。

姿勢を低く構える。

意識を、研ぎ澄ます。

ヒュオン!!

(……………今！)

振り下ろしに合わせて、回避攻撃。

双剣を一瞬だけ当て、相手の力をそのままに。

回転乱舞を繰り出し。

俺は、セルレギオスの尻尾からその付け根にかけて、斬り裂いた。

ザシユ！ザザザザザザン！

「ギヤアアア……!!」

ズウン……。

「チャンス！」

「はいっ！……ご主人さま！いけます！」

「おっ!?!……はいよ!!」

倒れたセルレギオスに突っ込むと、シヨウコの合図がかかる。

これは、捕獲可能というサイン。

アイルーであるシヨウコには分かるという、モンスターの体力の残り具合。

……流石シヨウコ！

急いでポーチに触れ、アイテム一覧を起動。

シビレ罫を選択する。

カチツ。

ビリビリビリビリ!!

「グギャアアアア……ア……ア……ア……アア！」

「シヨウゴ！」

「はいっ!!」

痺れながら、苦しげに声を上げるセルレギオス。
シヨウゴが手に持つ麻酔玉を当てる。

ボツ、ボフツ!

それを2発食らったのち、セルレギオスの体は揺らぎ。

「ガ……ガア……」

ズウン……。

事切れたかのように、その巨体を横たえた。

「……………グオオ……………グオオ……………」

「ね、寝てる……………よな……………?」

「はい……………や、やかましいですね……………イビキ。」

角が邪魔しているのか、鼻が詰まっているのかは知らんが、イビキがすごい。
父親を思い出した。

「ご主人さま……………お疲れさまでした。」

「ああ。……………おっと、そうだ。」

信号弾を放つ。

今回は、緑色。

よく見えるように天高く飛ばした。

空を見上げ、ようやく一息つく。

「ふう……シヨウコも、お疲れさま。」

「いいえ……ご主人さま、色々と言いたいことはありますが……まずは！」
「お、おう。」

思い返す。

……反省の多い狩猟であった。

ザ・独りよがり。

別にシヨウコの前でいいところを見せようとしていた訳ではないんだが……。

……調子に乗って、突っ込んでしまった。

重い一撃は喰らわなかったが、回避攻撃はまだ開発段階。

……できる、と思っただけだ。

そのことをシヨウコに怒られるだろうな、と推測して肩をすくめる。

……ところが、シヨウコの言葉は意外なものだった。

「……おかえりなさい、です。ご主人さま。」

「……………へ？」

「い、いや、ですから……二人つきりになったら、言おう言おう思て……まさかこんな夕
イミングになるとは……ですけど。」

「あ、そういやそうか……。」

シヨウコに、お帰りとは言われてなかったな。

「……ああ、ただいま。シヨウコ。」

「………はい。おかえりなさいです。………みんな、みんな待ってましたよ？早く
ワサドラに帰って、言うたって下さいね？」

「ああ、まかせろ。」

そうだな。

早く帰ろう、ワサドラへ。

色んな人に、ただいまって言おう。

「………それはそうとご主人さま。」

「ん？どうした？」

「言いたいことが山程あります！……ええですか？まず始め遠距離攻撃に合わせた突っ込み！あれは……見慣れたものですが、見てるこっちはヒヤヒヤします！それに、何ですかあの技！あの避けながら攻撃するあれは！もう死ににいつとるようなもんです！しかも平気な顔しとるし！」

「ご、ごめんなさい……。」

「まさかあつちでも、そんな無茶してませんか!？」

「し、しました。」

「ご主人さま……！一体何を相手にしたらそんな技身につけられるんですか!！」

「テイ、テイガレックスと少々……。」

「テイ、テイ、テイガレックスう!？」

シヨウコの猛追は止まらず。

まさにテイガレックスの如し。

「ホンマにもう……無茶しすぎです!！」

「す、すみません！仕方なかったんです!！」

帰ってきたなあ、と実感。

心配で言ってくれてるのが分かるので、どこかホツとして、顔がニヤけてしまった。

「……………笑うてませんか？」

「ワ、ワラツテナイデスヨ。」

笑みの理由は終ぞ話すことなく。

結局、ギルドの回収班が来るまで、その場で俺は謝り続けるのだった。

た、ただいま。シヨウゴ。

111 ただいまをしましょう。①

小さい頃の話。

遠くに出かけたその帰り、車から見知った景色が見えるとホツとした経験がある。動物的な本能なのか何なのかは分からない。

だが、ワサドラに着いた時、同じような気持ちを抱いた。

もはや俺にとって故郷だな、ここは。

セルレギオスを無事討伐した俺達。

回収班の皆さんに、ワサドラまで送ってもらった。

眠りこけるセルレギオスは、この後すぐに解体班の下に送られるらしい。

「よつと……ふう、半年ぶりかな……？」

ワサドラの入り口で、そんなことを言ってしまった。

長い間、ミヨシにいた気がする。

それだけ、あちらでの生活は濃いものだった。

「シヨウコ……このままギルドに行くが、いいか？」

「はい。みんなも心配しているかも、ですしね。」

「ああ。トツバの容態も気になる。早く確認したい。まあ、無事捕獲したことは、情報伝わってるだろうけどな。」

ギルドの連絡網の速さは凄まじい。

恐らく既に、ギルドでは俺たちがセルレギオスの狩猟を終えたことが伝わっていることだろう。

携帯電話どころか、電信を用いた通信手段すら無いこの世界にあつて、これは凄いとである。

まあ日本でもその昔、中国からの使者が来た際はすぐに連絡できるよう、海から太宰府まで狼煙リレーでつないで伝えたと言うし。

その時代時代で、通信というものは最速を求め続けてきたんだろうな。

……情報伝達の発展について考えるのはまあ置いておこう。

シヨウコとともに、久しぶりのワサドラギルドへたどり着いた。

懐かしい。

石造りの、厳つい建物。

ミヨシの集会所は、温かみのある木造であったため、余計に懐かしく感じてしまう。

ギイツ。

扉を開けて、中に入る。

ザワザワザワザワ……。

「おお……。」

「どうしたんです？ご主人様。」

「いや、人の多さに少し圧倒されただけだ。」

「……そんなにミヨシは人が少なかつたんですか？」

「まあな。山間の村だし……ハンターの数はそれなりにいたんだけど。」

それでも、ワサドラの賑わいはかなりのものだ。

今日何度目かわからない、帰ってきたなあという実感。

「お……ハイビスさん。」

「あ、ソウジさん！狩猟、お疲れ様でした！」

「はい。無事、捕獲しました。」

「はい、すでに連絡は。シヨウコちゃんも、お疲れさま！どうだった？」

「ご主人様が……強くなっていました。」

受付ではなく、入口に入ってすぐのロビーでハイビスさんを見つけ、声をかける。

しかし何だシヨウコ、その感想は。

嬉しいじゃないか。

「ふふふ。ソウジさんは、かなりレベルアップしましたからね。……ソウジさん、私は違う業務で席を外します。狩猟完了報告については、ヒナタにお願いしていますが、よろしいですか？」

「あ、はい。俺は大丈夫です。」

「では、よろしくお願ひします。……あ、例の書類の山……そっちは明日でもよろしいで

すか?」

「承知しました。俺はいつでもいいですよ?」

「ありがとうございます。では。」

スタスタスタ。

ハイビスさんが早足で受付奥の方に向かっていった。

帰ってきたばかりなのに、忙しいな。

……やはり受付嬢、というかギルド職員って、ブラックだよなあ。

「……ご主人様とハイビスさん、仲良うなってませんか?」

「そ、そうか? まあ、一緒に生活したからな。数か月。」

「……一緒にログハウスで寝泊まりしたと、昨日聞きましたけど。」

「ああ。宿も殆ど無いような辺境の村だな。俺たちのような季節限定の滞在者には、そういう場所を案内されるんだ。」

「……………ウチの方が先やもん。」

「ん? 何か言ったか?」

「い、いいえ!?! それよりご主人さま! ヒナタさんとこ、行きましょう?」

「あ、ああ。」

シヨウコに押されて、受付に向かう。

その間、結構な視線が俺たちに集まっていた。

シヨウコは人気だし、俺も久々だ。

少しは視線も集まるか。

「次の方、どうぞ。」

「あ、お願いします。」

「はい……って、そ、ソウジ様！」

「どうも、お久しぶりです。」

一番並んでいた行列に並ぶこと十数分ほど。

ようやくたどり着いた受付にいたヒナタさんに、挨拶をする。

「お久しぶりです、同志、ソウジ様。ミヨシはいかがでしたか？」

「色々ありました……長くなるので詳細は省きますが、まあ、いろいろ。」

「こちらのギルドにも、ゴシャハギやティガレックスの討伐のお話は届いております。……ギルド中が、騒ぎになりました。」

「そ、そうなんですか？」

そこまで話題になったのだろうか。

恥ずかしいぞ。

「ソウジ様は、そもそも下位に登録されておりました。それが一報ですぐに仮上位認定され、ゴシャハギを捕獲、さらには完全ソロでティガレックスの討伐。……控えめに言って、大騒ぎでございました。」

「そ、そうですか……。」

そりゃこつちでは見えないようなモンスターばかりだけど。

……だからさつき、色んなハンターやギルド職員にジロジロ見られていたのか？

あんまり目立つのは、ちよつと、恥ずかしい。

「あ、あんまり話題になるのはちよつと……。」

「ご安心ください。ひとまずは私と、ハイビスせんぱ……ハイビスが受付を専属のまま、担当いたします。お手数ですが、私かハイビス限定で、お話を下さいますよう、お願いします。」

「ああ、よかったです。今までと同じようにしていただくと、ありがたいです。」
「はい。」

ヒナタさんは相変わらずの人気だった。

他の受付もあるのに、ヒナタさんの受付には若い男性ハンターを中心とした列ができていた。

黒いロングの髪型、力のある目つきがまさにクールビューティーといった感じ。今日は髪を下ろしていて、少し印象が違うけども、これはこれで。

「ご主人様、どこ見てるんですか?」

「い、いや!?どこも見てないぞ!?!」

「ふーん……怪しいですねえ……。」

「な、何を言うか。」

はいすみません。眺めてました。目の前の美人さんを。だつて久しぶりだったし。

おっさんの癖は、中々に業が深い。

「それでは……狩猟完了報告でよろしいでしょうか。」

「あ、はい。正規のクエスト報告ではないですけど……。」

「その辺はハイビスから承っております……セルレギオスとは、珍しいですね。シヨウコ様も、本当にお疲れ様です……。」

「あ、はい。ヒナタさん、ありがとうございます。」

……ヒナタさんは通常を装っているが、俺には分かる。

恐らくは、ヒナタさんの目には今、シヨウコのその猫耳からブロンドの髪、尻尾、八重歯に至るまで、すべてがインプットされ、脳内フォルダに保管されていることだろう。目つきが違う。

そしてそれを本能的に察してか、若干シヨウコがたじろいだ。

ヒナタさんを見つめてしまった俺、シヨウコを見つめるヒナタさん。たじろぐシヨウコ。

何だこの三すくみ。

「……まずは、こちらにサインをお願いします。」

「あ、はい。」

アホなことは考えないで、とつと報告を済ませよう。

後ろにはまた、行列ができているし。

……………。

「はい、お疲れさまでした。これで終わりです。」

「ありがとうございます。」

「長旅でお疲れかと思いますが、まだお伝えすることがございました。よろしいですか？」

「あ、はい。どうぞ。」

何だろう。

……もしや帰ってきてすぐにシガイアさんから呼び出しか？

「まず、救援していただいたトツバさんですが、今は医務室にいらつしやいます。」
「医務室。」

「はい。とは言っても、急を要するような状態ではありません。ご安心ください。」

よかった。

お医者さんに診てもらってそれなら、安心だ。

終わったから見に行くことにしよう。

シヨウコも気になっているだろうし。

「次に。伝言をお預かりしております。セツヒト様からです。」

「セツヒトさん？」

『今日はー、宴会だからねー。みんな連れてイシザキ亭だよー。……とのことです。』

「ど、どうも。」

急な物真似で、ヒナタさんがセツヒト語を操った。

かなり似ていて驚いた。

「うわあ……ヒナタさん、めっちゃ似てます！すごいです！」

「そ、そんな……恐れ入ります……。」

シヨウコが感心するほど。

……意外な特技だなあ。

「そ、そして最後にもう一つですが……。」

微妙に顔を赤くしたヒナタさんが、話し出す。

「シガイアより、明日の朝、セツヒト様と部屋まで来てほしいと、承っております。」

「明日の朝。」

「はい。」

……シガイアさんは物真似しないんだな。

上司の物真似をする部下とか、前世の新年会を思い出した。しかし、さすがに今日は呼び出されなかったか。

……確かに、帰ってきて早々に呼び出しなんかしたら、セツヒトさんあたりはブルー言いそうである。

恐らく既に飲む気満々だろうし。

「以上です。お引止めしまして、申し訳ありませんでした。」

「いやいや、お手間取らせまして、こちらこそ。」

「……また、ミヨシの話など、お聞かせくださいね。」

「あ、はい。もちろんです。」

「それでは……。次の方、どうぞ。」

そういうと、また次のハンターを呼ぶヒナタさん。

相も変わらず、行列は続いている。まだまだ忙しそうだ。

そういえばここは新人ハンターの受付ではないが……配置換えでもあったのだろうか。

ヒナタさん有能な人だろうしなあ。

「ご主人様。早くドールちゃんやホエールさんところに行きたいでしょうけど……先に医務室、寄つてもええですか？」

「ああ、行こう。俺もそのつもりだ。」

「すんません。したら、行きましょう。」

ヒナタさんへセルレギオスの狩猟報告を終えた俺たちは、今度はギルドの医務室に向かうことにした。

* * * * *

医務室。

基本的に、ハンターやそのオトモ、ギルド関係者が応急処置をしたり、入院をしたりする施設である。

ギルドに付随していて、お医者さんも常駐している。

俺もデイノバルトの一件では、とてもお世話になった。

……女神さまが初顕現したのも、この医務室の入院部屋だったなあ……。

この扉から超絶美人が入ってきたものだから、ケガの痛みなど吹っ飛んでしまったのを覚えている。

懐かしい。

コンコン。

「トツバー？ ショウウコやけどー。」

「ああ。どうぞ。」

トツバではない、女性の声。

恐らくフェニクさんだろう。

一緒にいたんだな。

ガチャツ。

入院室は、トツバのベッド以外誰もいなかった。

俺の時もそうだったな。

もはや長期入院とか必要な患者は、いつまでもここにおらず、病院に行くのだろう。

「シヨウコ、ソウジ。狩猟お疲れ様。」

「トツバ。お医者さんに診てもらったん？何処か悪いところ、あつた？」

「特に無い。回復薬をしつかり付けて、安静にしていればいい。」

「そか……よかつたあ……。」

安心してベッドに頭を預けるシヨウコ。

……不安だったんだな。

「ソウジさん、シヨウコさん、セルレギオスの狩猟、お疲れ様だね。」

「フェニクさん、ありがとうございます。」

「ワサドラに無事着いて、すぐにギルドに報告をしたんだ。けどセツヒトさんが、そんなに心配しなくてもいいというものだね。……しばらくしたら、セルレギオスの狩猟完了報告が舞い込んできたんだ。あまりの早さに、とても驚かされたよ。」

「そうでしたか……シヨウコといましたからね。やつぱりやりやすかつたです。」

「シヨウコさんも、お疲れ様だね。久しぶりの二人での狩猟は、どうだったかい？」

「ご主人様が強くなりすぎでした……。」

「ほう……興味があるね。聞かせてもらえるかな。」

「私も聞きたい。ソウジの双剣は、シヨウコの爪との組み合わせが悪いとずっと思っていた。気になる。」

フェニクさんとトツバが、俺たちの狩猟話に食いついてきた。

「そ、そんなん、普通やって。むしろ、ご主人様の指示ばっか聞いて、何もせんと勝って……。」

「シヨウコ、そんなことないぞ。双剣はスタミナや切れ味の管理が難しいんだ。持ち直す間、何度も引き付けてくれたじゃないか。安心感が違ったぞ。」

「ご、ご主人様……。」

何もしていないと言いかけるので、そこは止める。

シヨウコの存在は、最高にありがたいのだから。

実際、ティガレックスのソロ討伐の際は、もう何とか無理やり刀を研いで、際の際ギリギリまで時間を削って回復薬を飲んで……忙しいことこの上無かった。

「セルレギオスは、空中に跳ぶ……いや、飛行する、が正しいか。本当にその力に長けていたんです。毎回飛んでは攻撃、飛んでは攻撃、忘れた頃に噛みつきや薙ぎ払い……リズムも独特でした。」

「捌め手……というわけではないんだろうが、そういう敵は厄介だね。」

「ええ。なので最初は見ると……つもりだったんですが……私が突っ込んでしまいました……。」

「へえ……ソウジさん案外むちやするタイプかい？」

「そうなんです！ご主人様はいつもいつもそうやって私をハラハラさせるんです！」

「わ、悪かったって……でも、できると思ったことしかやらないぞ？」

「そればかりですよん……。」

今日は謝りっぱなしだな。

「……ソウジは、シヨウコを必要としている。逆も同じ。」

「ああ、いいコンビだな。」

「そ、それはどうも。」

ハモる。

「ほら、息もぴったりだね。」

「お似合い。」

「と、トツバ！からかつとるやるろ!？」

「客観的事実を言っただけ。私もフェニクとはそういう風になりたい。」

「その為には、怪我をしつかり治して、特訓しないと。二人に並ぶにはまだまだかかりそうだけどね。ふふ。」

「い、いやあ、どうも。」

……やはりからかわれているような、そうでもないような。

まあいいか。

とにかくトツバは無事だった。

それでよしとしよう。

しばらく話をした後、俺達は入院室を後にした。

* * * * *

宿「ホエール」に向かう。

何故か緊張している自分がいる。

……………何で？自分でもよくわからん。

何もやましいことは無いのに。

「ご主人様、ええですか？セツヒトさんやハイビスさんと一緒に暮らしとったこと、
ぜつつつたいたいに話したらあきませんよ！」

「お、おお。」

「これはもう、ぜつつたいです！ドールちゃんの前では言うたらあきません！」
「は、はい。」

何度も何度もショウコが話す。

耳にタコができてしまうほど。

遅かれ早かれバレるものだし、そもそもバレても大丈夫なのでは？と言ったのだが、

「世の中には知らん方がええこともあるんです！」

と、シヨウコさんは一点張り。

素直に従おうとは思うが……余計に緊張が増してしまった。

とりあえずお土産を出しておいて……ただいまを第一声……。

頭の中でリハーサル終了。

いざい。

ガチャ。

「た、ただいま……。」

「あつ。」

「あつ。」

開けたら目の前。

すぐそこにドールがいた。

「わ。ぶ。つ……！ど、どうしたんです？…ご主人様？」

俺が入ろうとしたら急に止まったものだから、シヨウコが背中に当たる。

「うわっ。」

「えっ……。」

シヨウコに押され、バランスを崩す俺。

思わずドールを抱きしめるような姿勢になってしまう。

「あ、あああ、わ、悪い！ドール！わざとではないんだ！」

「そ、そそそソウジさん!？」

いかん。

すぐに離れる。

「……………い、いきなりごめん、ドール。」

「……………う、うん。」

二人して変な雰囲気になってしまう。

何だコレ。

「……………え、えーつと……………た、ただいま帰りました。」

「う、うん。おかえりなさい、ソウジさん。」

とりあえず挨拶は完了。

よし、このまま何事も無かったかのように……………。

「おや、ソウジさん。お帰りなさい。そろそろかと、思っとなつたぞ。」

「あ、ホエールさん。」

「……………出会い頭に抱擁とは……………ソウジさんもだいぶ上手になつたのお……………。」

「ち、違いますよ!?!ホエールさん!」

「お、おじいちゃん! 違うよ!?!」

「ほっほっほっ。若い若い。」

何事もなく、などとてもできずに。

俺もドールもあたふたしてしまう。

「……ウチ、ナイスアシストしてもうた？」

何を言ってるんだ、シヨウゴ。

……

……

コトツ。

「とりあえずお帰り、ソウジさん。」

「ああ。コーヒーありがとう。」

「シヨウコちゃんも、お帰り。」

「おおきに……ドールちゃんの淹れたコーヒーは世界一やあ……。」

ズズズズ……。

茶をしばく老人のごとく、音を立ててコーヒーを飲むシヨウコ。

お行儀悪いぞ。

「ソウジさん、いきなり過ぎだよ。帰ってくるならお便りくれても良かったのに。」

「すまん、色々あつて。……ホエールさんも、急にすみません。」

「ほっほっ。気にせんでいいぞ、ソウジさん。部屋の方は一旦片付けたが、少し前から空けておる。またここで過ごすということ、いいかの？」

「はい！是非お願いしたいです！」

「あいわかつたわい。……それじゃドール、しばらくここでもてなしておいてくれ。わしは準備をするわい。」

「え？おじいちゃん、私やるよ？」

「ええ、ええ。積もる話もあるじゃろ？お前もゆつくりしなさい。」

「う、うん。ありがとう。」

「シヨウコ殿も、同じ部屋でいいかの？」

「は、はい！よろしくおねがいます！」

「うむ。元気でよろしい。それでは。」

2階に歩きだすホエールさん。

お変わり無いように見える。元気そうで良かった。

部屋も空けてもらって、嬉しいとしか言いようがない。

ありがたいなあ。

「……ドールにホエールさんに、二人とも元気だったか？」

「うん、それはもう。むしろお客さんが少なかったから、暇だったよ？」

「そうか。あー……冬はお客さんが少ないんだな。」

「うん。そう。シヨウコちゃんはずっといたし、たまにマシヨルクさんも夕飯食べに来てくれたんだ。」

「え!?!教官が!?!」

「うん。」

「へ、へえ。」

教官の話が久々に聞いたからか、驚いてしまった。

この宿に何の用だったんだろう。

いや、ご飯を食べに来たんだろうけど。

「多分だけどね？ 私とおじいちゃんを心配してきてくれたんだと思うよ？……あの、
すごく優しいね。」

「や、優しい……？」

まあ悪い人では無い。

だが、優しい人なのかと言われるれば、クエスチョンマークが付く。

や、優しいねえ……ちよつとベクトルが違う気がする。

「そうか……教官にあつたら話してみるよ、その辺。」

「うん。ありがとう。お客さん、たくさん連れてきて飲み食いしてくれたんだ。おかげ
で助かったんだよ？」

「そうだったのか。」

教官は謎の人脈があるしな。

イシザキ亭にも、よく分からないお偉方を連れて行ってたようだし。

「ソウジさんは、元気だった？」

「ああ、ミヨシ村で何とかやれたよ。ドールを撫でたお陰かな。」

「……私、ご利益の神様じゃ無いんだけど。」

「い、いやいや、そういう意味ではなくて……何とか、思い出して頑張れたんだ。」

「そ、そう……。」

「う、うん……。」

「……な、何だ!？」

何か妙に緊張するぞ!？」

どうして!？」

「ご主人様、何で緊張されてるんですか?？」

「シヨウコには分かるか……いや、よく分からんが、久々に帰ってきたからかな。緊張している。」

「……………ソウジさん、平気だよ？帰ってきてくれて、また前の『ホエール』に戻ってきた感じがする。」

「そうか？……………まあ、徐々に前みたいに戻っていくと思うから。」

「うん。分かった。」

ドキドキの理由は分からないが、まあなるようになるか。

何せここは俺の故郷だし。

実家みたいなものだし。

「あ！そうです、ご主人様！この後の飲み会、ドールちゃんも連れて行きませんか？」

「えっ？ドールを？」

「そうです。ね、ドールちゃん、今日の仕事はいつまで？」

「えっ……………？多分ソウジさんのお部屋の準備が終わったら……………後はソウジさんの夕飯次第、かな。」

「じゃあ一緒に夕飯食べへん？うちも一緒や！いいですよね？ご主人様？」

「ああ、こっちは全く構わないぞ？人が増えたほうが楽しいしな。」

「えっ、えっ……えーつと——」

「行つてきなさい、ドール。」

シヨウコが今晚の飲み会に参加しないと提案。

迷うドールに、戻つてきたホエールさんが声をかけた。

「こっちは気にせんでええぞ？今日は泊まる客も少ないの？」

「おじいちゃん……。」

「宴の帰りも、ソウジさんにシヨウコ殿も付いておるしの。安心じゃわい。……ソウジさんもセツヒトも、せっかく帰つてきたんじや。色々話しておいで。」

「う、うん。……おじいちゃん、ありがとう。」

「ほっほっ。その言葉だけで報われたわい。」

急遽、ドールが夜の飲み会に参加することに。

………いい、いいのか？

「わ、よろしくね、ソウジさん。……あ、何着ていけばいいのかな。」
「いつもの格好でいいと思うぞ？むしろ問題なのは……。」

中学生や高校生にしか見えない、その見た目なのだが……。
こつちの世界の飲酒制限は何歳なんだろうか。
そもそもそんな基準はあるのか？

「ドールちゃんと飲み会！楽しみやなあ！」

「シヨウコちゃん……私、お酒、飲めないからね？年齢的にはクリアしてるけど。」

「ええんや！雰囲気を楽しむもんやし、ウチも一緒におる！」

「う、うん。よろしくね。」

年齢的にはOKなのか。

……まあ、よりちつちやいシヨウコもいるし、今更だ。

さらに小さい、暴食アイルー店員も働いているのだ。

誰も止めようがない。

ウキウキしている二人。
保護者として、宴会ではしっかりしようと心に決めた俺であった。

112 ただいまをしましよ。②

行きつけの飲み屋に行く。

学生の時分には憧れていたものだが、やることは大したことではない。酒を飲んで、話し相手がいるなら愚痴って、愚痴を聞いて、慰め合う。

だが、そんな場所だからこそ、おっさんは足繁く通うのだ。

おっさんとは家族のカースト底辺。

吐き出す場所も欲しい。

俺も前世、よく行っていた居酒屋があつた。

そして現世も、よく通う店がある。

ワサドラで話題の食事処、イシザキ亭である。

なぜ通うのか。

1つ目、まず飯がうまい。

現代日本で肥えた舌を持つ俺が言うのだから、間違いない。

まあ大した食経験などないんだけど……。

2つ目、店員さんが魅力的。

ケイさんは美人でスタイルも抜群。

その上、下ネタにはめっぽう弱いほどの純粹さん。

いつだかマシヨルク教官がとんでも下ネタを発したとき、恥ずかしすぎて倒れたという逸話を持つ。

それに、気さくで親しみやすい女性なのだ。

多分ファンは多いと思う。

3つ目、これは義理が入ってしまうが……。

このお店の再建に携わったから、気になってしまおうという理由だ。

飯もうまく美人若女将もいるのに、かつてこの店は立地の関係か閑古鳥が鳴いていた。

現代知識を利用し、俺はアイデアを量産。

………現代知識を活かすなんてだいそれた事を言ったが、大したことはしていない。

集客さえすれば、ここは繁盛する下地があったのだ。

ただそれだけである。

以上の理由から、俺が足繁く通う店になった、ここイシザキ亭。

だが、今夜は少し勝手が違う。

「ドールちゃんは、食べ物、何が好きなん？」

「えつと……何でも食べるよ？お肉とか好きかなあ。」

「ここのアンモミートとかリノプロシユートのシエラスコ、めつちやうまいで！」

「シヨウコちゃん詳しいね……。」

「ウチも飲むときは飲むんや……。」

ドールとシヨウコ。

この幼い二人の保護者として、責任のある立場にあるのだ。

……まあシヨウコは一人でも飲みに出かけるらしいし、あんまり心配してないけど。

絵面が良くない。

アイルー系の亜人は見た目完全に小学生であるからして。

そんな子がジョッキでゴクゴクビールをあおるのだから、まあ面白いといえば面白いんだけど。

ドールは、夜に町中を出歩くという経験は少ないだろう。

楽しい経験にしてみらいたい。

願わくば酔っ払いの生態を目の当たりにして、ドン引きするみたいな経験はしてほしい。

くない。

吐瀉物の処理をするとか……本当にそんな辛いことはしてほしくないのだ……。

「ご主人様？入りましたよう？」

「あ、ああ、すまん。行こう。」

前世の大変な経験を思い出し、若干落ち込んでしまった。
切り替えよう。

「セツヒトさん、先に来てますかねえ。」

「……シヨウコ、やたらテンション高いな。」

「えっ？だって……ドールちゃんと飲めると思うと、嬉しくて……。あ、無理には飲ませませんよ？」

「ああ、そうしてくれ。楽しい食事にしてやってほしい。」

「はいっ！」

酔ったシヨウコの姿って、そう言えば見たことないなあ。

でも、今話した感じだと、大丈夫だろう。

ガチャ。

カランカラン。

ザワザワザワ……。

中に入ると、控えめな鐘の音が鳴った。

喧騒が広がる店内。

飲む時って、声が大きくなるよなあ。

「あー！ソウジー！こっちー！」

「あ、いた。」

店の一番奥のテーブルに、セツヒトさんが一人。
手にはジョッキ……先に始めていたか。

「遅いよーソウジー。先に飲んじやったー。」

「すみません、お待たせしました。」

「お、おじやまします……。」

「あれー？ドール？もしや……お酒デビュー!？」

「ちがうよ。ソウジさんについてきたんだ。お酒は……まだ怖いし。」

「なーんだー。なーでもでもー、だい、かんげーい。」

手を広げるセツヒトさん。

完全に○しざんまい。

デジャブ。

……出来上がってるなあ。

「ほらほらー、シヨウコちゃんもソウジも座ってー。何飲むのー？」

「あ、じゃあウチもビールで！」

「わわ、こういう時って何頼むのかな。」

「とりあえずジュースとか……林檎王のノンアルコールカクテルとかどうだ？」

「あ、美味しそう。じゃあそれ。」

飲み会が始まる時の、この雰囲気は楽しい。
強要する上司がないなら尚更である。

「ケイさーん。おねがーい！」

「はいはい……あら！ソウジさん!!お帰りなさい！もう、急なんだから！」

「ははは、いや、すみません。」

「ご無事で何より……ね！よかったわあ。いないはずのセツヒトさんが急に来るものだからビックリしちゃって！何の用意もしてないわよ？」

「いえ、いいんですよ。それより、注文いいですか？」

「はいはい！もう今日はいっぱい頼んでいってね！」

「はい。えつとまず……。」

キッチンにいたケイさんがホールにやって来た。

変わらず元気そうで安心。

今日はロングスカートにエプロンスタイル。

エプロンには『イシザキ亭』と書かれている。

まあその……例のアレが大きすぎて、その字はほぼほぼ隠れてしまっているが。

すげえ。

.....。

いかん！

今日は俺は責任ある大人！

『ハレンチはいけません！』

.....よし。

ハイビスさんの怒った顔を思い出して、落ち着いた。

「.....以上をお願いします。」

「はいよー！」

「.....ソウジ？目線って、女は分かるよー？」

「なななな何のことでしょう？」

セツヒトさんよく見てるわあ……。

カランカランカラン……。

「はーい！いらつしやーい！」

「こんにちは、ケイさん。」

「あらー！ハイビスちゃん！久しぶりねー！」

ぬおっ。

噂をすれば。

俺の理性の恩人、登場である。

「ハイビスさん！こっちです！」

「あ、ショウコちゃん！……セツヒトさんにソウジさん、お待たせしました……あれ?!?ドールちゃん!？」

「あ、こんにちは、ハイビスさん。」

「久しぶりだね？元気にしてた？」

「うん。」

二人は知り合いなのか。
親しげである。

「ハイビスちゃん聞いてよー、さつきソウジがケイさんの——」
「さ、さあハイビスさん！何飲みます!？」

「えっ!？え、えーつと……きよ、今日はノンアルコールにします。」

「……えっ!？」

あのお酒をクピクピと飲むでお馴染みのハイビスさんが!
セツヒトさんと俺で、揃って驚いてしまう。

「そういう気分でして……はい。」

「じゃあ、私と同じにする?」

「あ、ドールちゃんも?何頼んだの?」

「何だっけ。林檎王?のカクテルだよ?ノンアルコールの。」

「あ、美味しそう。じゃあ……お揃いにしようかな？」
「うん。」

チラリと俺を見るドール。

そうか、まだ店員さんと呼べるほど度胸はないか。
店員さんと呼ぶって、妙に緊張するよな。

「すいませーん！」

俺は大きな声で追加の注文をした。

飲み席に居るのは、俺、ドール、シヨウコ、セツヒトさんにハイビスさん。
結構な大所帯である。
まあいいんだけど。

「ソウジー、私の話を遮るとはー、やるじゃーん。」

「……何の事でしょうか。」

隠し通すぜ。

* * * * *

テーブルに料理や飲み物が並び、宴は進む。

運んでくれたのは、初めて見る給仕の女性。

新しく雇ったんだろう、手慣れた様子でにこやかに料理や飲み物を運んでいた。

俺たちの話題はそれぞれに飛び、今はドールが話している。

内容は、暇な時期のホエールで何をしていたのかというもの。

……聞けば聞くほど、ドールの宿への献身が分かり、その健気さにおっさんの俺

は胸を打たれてしまう。

ドールはええ子やでえ……。

「……んでもさー、ドールー。何か違うことしたいとかー、無いのー？」

「え？違うこと？」

「そーそー。例えばー、やってみたいこととかー、就きたい仕事とかー……そういうのー

「？」

「……………考えたこと、無かった。」

ドールの話にちよいちよい教官の話が出るものだから、セツヒトさんも不機嫌になるかと思いきや。

意外や普通。

安心した。

そして話は、ドールのやりたいことについて。

……………確かになあ。

「例えばー、シヨウコちゃんはハンターのオトモになりたくてなったのー？」

「そうですー……………狭っ苦しい里から出たくて、というのもありますけどー！」

「お、いいねー。……………ハイビスちゃんは首都の学校を主席で卒業でー、就職でしょー？」

「は、はい。」

ハイビスさん、首都の出身だったのか。

そして、主席!?

……この人、もしかや一番底が知れないかもしれない……。

「ソウジはー……まあいいとしてー。」

「いいんか。」

「まーまー。んでさー？ドールは何かしたいとか、無いのー？」

「そうだね……。」

少し考えるドール。

難しいよなあ、ドールぐらいの頃……大体15、6歳ぐらい？

……俺、何も考えてなかったなあ。

「……………あ、あった。」

「お、なにになにー？」

「えつとね。笑わない？」

「笑わないよー。そういう夢を語るのもー、飲み会の醍醐味ー？」

「じゃ、じゃあ……。」

ドールのやりたいこと、か。
ちよつと興味がある。

少し言い淀んだ後、ドールが話し始める。

「えつとね……お嫁さん。」

「……………ふえ？」

「お嫁さん……宿のお仕事、私嫌いじゃないし……お料理も好きだよ？だから、それを続けながらやるなら、お嫁さんかなあつて。」

「……………お、おとお。」

セツヒトさんが見たことのない顔をしている。

笑っているわけではない。

無いのだが。

何かに圧倒されているような。

「わー！素敵な夢や！ええな！ドールちゃん！」

「そ、そうかな。」

「女の子の憧れやー!」

シヨウコが実に女の子らしい反応をしている。

対して……。

「ハイビスちゃん……私は汚れてしまったんだね……。」

「セツヒトさん……私も自分が何だか恥ずかしくなってしまうて……。」

大人の女性二人は、グラスを手に俯いてしまった。

……汚れたとか……まだそんな年齢でもないだろうに。

「……と、というか、ドールちゃん? その、お、お相手はいるのかしら?」

「お相手?」

「ほ、ほら、お嫁さんということは、旦那さんもいるわけであってね?」

「……あ……。」

ポフッ。

音を立てて赤くなるドール。

今頃気が付いたのか!?

「そ、そういえばそうだね。考えて、無かった。」

「あ、そ、そうなの! いいのよ? そんな無理して考えなくて!」

「そ、そーそー! そういうのはー、頑張って探すものでもないしねー!」

何故か声が大きくなるハイビスさんとセツヒトさん。

どこか焦っているような。

「あ、でも……。」

「で、でも!?!」

「……そうなたらいいな、っていう人なら……いるよ?」

「え、ええええええええつと!?!それは今言ってもいいのかしらいやよくないかしら!!」

「落ち着いてーハイビスちゃん! ていうか言わせちゃダメな気がするよー!」

「うん。言わない方がいいよね。」

「ホッ……」

「今はまだ。」

「まだあ!？」

ギャーギャー。

うーん。

飲みの席、騒がしくなるかと思つたが、まあ予想通り。
でもドールも話が弾んでいるし、何よりである。

「ソウジさん。」

「ん?どうした?」

ドールが、顔を赤くしてこちらを向いた。

酒も入っていないが、今日は饒舌な気がする。

恐るべし、宴の雰囲気。

「……飲み会って、楽しいね。」

「……ああ、そう思ってくれたなら、今日連れてきてよかったよ。」

「うん。よかった。」

「ああ。」

その後もセツヒトさんとハイビスさんは、「汚れてしまったねー……。」「やはり強敵ですよね……。若いし。」とか何とか言って、酒のペースを上げていった。

ていうかハイビスさん。あなた飲まないんじゃないやなかつたんですか。

それ結構度数高いやつですよ。

いつの間に……。？

「私も！お嫁さんになりたいと！漠然と思っていたあの頃に戻りたいです!!」

「おー！いいぞー！ハイビスちゃん！」

……後の祭りか。

ひどく酔っていたら、送っていきこう……。

* * * * *

宴も半ば。

それはもうベロンベロンになったハイビスさんが撃沈。
椅子に寝転んでセツヒトさんの膝枕に頭を載せている。

「散々私も膝借りたからねー。お返しー?」

「自覚はあつたんですね……。」

顔を赤くしてちっちゃく寝るハイビスさん。

幸せそうな寝顔である。

……………今日もとんぼ返りですぐ仕事だったのだ、寝かせてあげよう。

俺は席を立ち、厨房へ顔を出しに向かう。

イシザキさんにお礼をするためである。

「お疲れさまです。」

「あら、どしたの? ソウジさん。」

「お兄さんに挨拶をしようと思ひまして……ってそう言えば、オスズが居ないですね。」

今の今まで忘れてた。

「オスズちゃんは、夕方までよー？ほら、新しく入った子がいたでしょ？その子と交代でね。」

「あー、なるほど。」

弁当とランチ専門になったか。

「ま、まあ……お弁当と会計だけ、お願いしてる感じねえ……。」

「な、なるほど。」

前言撤回。

弁当と会計専門か。

「で、でもね！稼ぎの方はすごいなのよ!?オスズちゃんたら、何十食も毎日売り切るものだ

から、兄貴もてんてこ舞いでね！」

「それはすごいですね。」

「それに会計はもう言うこと無しね！ 授業員が増えたから、雇用調整とか税金とか諸々あつただけけど……その申手続きをほとんどやってくれたの！」

「……………それ、もはや事務員さんでは……………」

というか、まんま事務員である。

『里でやっていた事ですから、わかりますニヤ！』とか言つてたから任せてみたら……ほんと、いい子雇えたわー。」

「オスズさん、すごいなあ……………」

オスズは、皿を割るわ注文を間違えるわで、初め予定していた接客はからつきしダメだった。

だが、元はアイルーの里の取りまとめをする結構すごい人。

本職の経験を活かし、バリバリ事務仕事&弁当販売を請け負っている。

適材適所、素晴らしい。

「あ、兄貴だったわね！ちよつとまっててね！」

「あ、すみません。」

スタスタスタ……。

厨房に消えていくケイさん。

うーん、オズズは心配だったが、どうやらうまく？やっているようだ。
今度また、昼にお邪魔してみよう。

「ソウジさん、こつちこつち。入っていいわよー？」

「えっ!?中、いいんですか!？」

「いいわよー!」

厨房まで俺を連れてくると、ケイさんはホールに戻ってしまった。

目の前にいるのは、筋肉ムキムキのたくましい男性。

怒っているように見えるが、これがデフォである。

「ど、どうも。急にすみません。」

「……………」

「イシザキさんに頂いた秘薬のおかげで……ティガレックスというモンスターに勝てました。」

「……………」 (コクン)

「その、お礼に来ました。」

「……………」 (ニコ！)

「……………」

「……………」

「……………何か喋れよ！」

ダメだ。

思わず突っ込んでしまった。

……………何故かご満悦な顔をするイシザキさん。

ウンウンとうなずいている。

「……………そ、それだけです。本当に、助かりました。」

「……………」

「……………」

「……………秘薬は……………」

「うわあ!!喋ったあ!?!」

「……………」

「いやいやいや!すみません!いきなりで驚いちやつて!すみません、続きを!」

「……………秘薬は……………その使い所が肝要だ。……………役に立って、良かった。」

「はい。本当に助かりました。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、終わりなんですわね……………」

会話、終了。

普段どんなコミュニケーションを取っているんだろうか。

見当もつかない。

ひとまず礼は言えた。

初めて会話らしい会話もできた。

それでよしとするか。

「それでは、失礼しますね。」

「……………」。(コクン)

俺が厨房を出ると、イシザキさんはまた忙しなく動き始めた。

教官はこの人と意気投合したというが、一体どうやって……………？

……………まあいいか。

俺はシヨウコたちのいるテーブルまで戻っていった。

* * * * *

イシザキ亭はまだまだこれから混雑する、といった時間帯。

だが今夜はドールもいるということで、宴を早めにお開きにした。

健康的である。

「うう……セツヒトさあん……………」

「ハイビスちゃん、とりあえず私がお持ち帰りしちゃうねー。」

「はい、よろしくおねがいます。」

早めに切り上げたはずなのに、泥酔してしまっているハイビスさん。

途中からペースが早すぎた。

セツヒトさんが家に連れて帰るらしい。

助かる。

セツヒトさんの店まで辿り着く。

この武具屋と、宿「ホエール」は近い。

「じゃーまたー。」

「あつ、せつちゃんさん。明日朝、ギルドに集合ですよ?」

「わかってるよー。シガイアさんも人使い荒いよねー。おやすみー。」

「はい、おやすみなさいです。」

ガチャ。

鍵もかけていないドアを開けて、中に入っていく。

……防犯上、鍵はかけましょう……。

「ご主人様。ご主人様。」

「ん？どうした？シヨウコ。」

「ウチ、今日はドールちゃんと休んでもええですか？」

「ん？いいぞ？……というか別に許可は取らなくても。ドールもいいか？」

「うん。シヨウコちゃんと寝るの、久しぶり。」

どこかポーツとしているドール。

酔ってはいないと思うのだが……飲み屋の雰囲気当てられたか？

「ウチ、一緒にいますね。」

「ああ、助かる。」

シヨウコは心配して言ってくれたのか。
相変わらず気の利くオトモである。

……………。

シヨウコたちと別れ、ベッドに入る。

今日は色々あった。

正直、セルレギオスをあそこまで早く狩猟できるとは思わなかった。

冬山特訓の成果は、確実に出ているな。

宴会も楽しかったし、新たな出会いもあった。

フェニクさんとトツバ。

個性的な二人だが、いい奴らだ。

親交を深められたらと思う。

「おお……………眠い……………」

ベッドにインするなり、強烈な眠気が襲ってきた。

明日はシガイアさんのところ行って話を聞いて……。

……ダメだ。頭が働かない。

久々に帰ってきた、俺の第二の実家、ホエール。

フカフカのベッドに包まれる。

ああ、ただいま。ワサドラ。

温かな感触に負けるように、俺は深い眠りについた。

113 色んな裏を知りましょう。

「えっ!?じゃあハイビスさん、朝すぐにギルドに出勤したんですか!」

「そーそー。有休使えばいいのにさー、準備があるからって聞かないでねー。」

ワサドラに帰ってきた夜、飲み会の明くる朝、俺はセツヒトさんと合流。

ギルドに向かおうとしたところ、ハイビスさんの姿はなし。

どうやら俺たちより早く出発してしまっただらしい。

あんなに酔っていたし、休めばいいのに。

「ちよつとハイビスちゃん、オーバーワーク?」

「そうですね……少し心配です。」

「私みたいに休み休みやればいいのにー。」

「セツヒ……せつちゃんさんはサボりすぎでは……。」

「何をー。私はライフワークバランスを考えてるのー。」

随分とライフに偏ったバランスである。

今朝のこと。

久しぶりにドールさんの朝食を頂いた。

何てこと無い、普通の朝食。

何かの焼き魚に大根おろし、俺の好きな漬物数種、ツヤツツヤの白ごはん、豆腐と海藻の味噌汁。

……………それはもう美味かった。

繰り返すが、美味かった。

さすがドールさんである。

食べた瞬間、「あ、これだ。」という感じ。しっくり来た。

思わず「むおおお!!」とか唸ってしまった、ホエルさんにもドールにもシヨウコにも心配されてしまった。

恥ずかしかった……。

その後は朝食を褒めに褒めてしまったので、ドールが顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

やりすぎたが、マジで美味かったんだからしょうがない。」

俺があげたエプロンをギョツと握りしめて恥じらう様子が、やたら可愛く見えたのは内緒である。

その後、セツヒトさんのところに行った次第である。

頭ナデナデはしていない。

忘れていた。

多分ドールも。

「シガイアさんの話って何でしょうね。」

「そーねー。まあ報告とー……ソウジに聞いてほしい話でもあるんでしょー。」

「俺に聞いてほしい話？」

「だってー、ソウジ一応下位……じゃなくてー、仮の上位でしょー？ テイガレックスの討伐とか普通はー、ありえないー？」

「な、なるほど。」

他人事のように聞いているが、これは自分のこと。

今思い返しても、よくやったなあと思うし……もう一度やれと言われれば、謹んでお

断り申し上げたい。

「……………逃げては行けない状況で……………無我夢中でしたからね……………」

「あー、それは分かるよー？命を大事にー、でも切った張ったしなきやいけない感じー？……………久しくやってないなー。」

セツヒトさんがそんなことをする状況など、来てほしくはないが。

そんなことを駄弁りながら、ギルドに到着。

割と遅めの朝だが、ハンター達が実入りのいいクエストを狙って、今日も混雑していた。

ミヨシには無かったこの光景。

懐かしい。

「ハイビスちゃんは……………あー、いたいたー。」

セツヒトさんが指差した先、受付の奥にハイビスさんを見つける。

上司……と思しき男性と、何か話しているな。

今日も制服。やはりとてもお似合いである。

すぐ見つかるな。美人さんは遠目でもよくわかる。

「ハイビスちゃん、おまたせー。」

「あ、セツヒトさん、ソウジさん。」

男性に会釈をしたあと、トコトコとこちらにやって来るハイビスさん。

「昨日はどうも、ありがとうございました。」

「おはようございます……ハイビスさん、体調は大丈夫ですか？……働きすぎじゃないですか？」

「……今、そのことを上司にも言われまして……。明日から少しお休みをとったらどうか、と。」

「えー、良かったじゃーん。」

「でも、お休みって、何すればいいのか分からないんですよ……。」

うーん……ザ・ワーカホリックでブラック従業員な発言。

本当に倒れないか心配だ。

それが続くのは若いうちですよ……。

とは思いつつも、とりあえず3人でシガイアさんのもとに。

ハイビスさんも呼び出されたらしい。

久々に訪れるそこは、相変わらず重苦しい門に閉ざされていた。

偉い人の部屋って、やっぱり入りにくいよなあ……。

コンコン。

「ハイビスです。セツヒトさん、ソウジさん、お二人を連れて参りました。」

『どうぞ。』

「失礼します。」

慣れた手つきでドアを開き、俺たちを先に入れるハイビスさん。

「失礼します。」

「失礼しまーす。」

緊張している様子のかけらもないセツヒトさんが、今ばかりは羨ましい。
つくづく小物だなあ、俺。

「いやー、どうもどうも！お疲れの中お呼び立てして申し訳ありません。どうぞ、お座りください。」

「シガイアさーん。呼ぶの早すぎますよー。」

「セツヒトも元氣そうだな、良かったよ。ソウジさんも、どうぞどうぞ。」

「あ、はい。失礼します。」

開口一番文句をつけるセツヒトさんすげえ。

ハイビスさんは即座にお茶の用意を始めている。

……………言われるがままに座ろう。

「改めて、お帰りなさいませ、皆さん。」

「はい、ありがとうございます。」

「ありがとうございますー。あー……お茶おいしー。」

「セツヒトは本当に元気そうだな……でも良かったよ。……さて、二人の活躍は聞いていますよ。ソウジさん、強敵を相手に、ものすごい立ち回りだったと聞いてます。」

「いやいや、もう何がなんだかでしたよ。それに、ティガレックスの狩猟以外は、セツヒトさんも居ましたし。」

「ですが、ティガレックスは完全にソロだと聞いてますが？」

「はい……死ぬかと思いました。」

「ははは、でもこうしてワサドラに帰ってきてます。……素晴らしい猟果じゃないですか。」

「あ、ありがとうございます。」

何かの書類を片手にして話し出すシガイアさん。

すぐさま持ち上げてくるだろうなど邪推していたら、やはり褒められた。

このあととんでもない事を言われるのではと身構えてしまう。

「ハイビスさんも、こちらにお座りください。お三方にそれぞれ、お伝えしたいことがあります。」

「は、はい。失礼します。」

「では……。」

ジャケットを正すと、シガイアさんはソファに浅く腰掛け、俺に向き直った。
俺も同じように浅く腰掛け、構える。

「……まず、ソウジさん。本当にお疲れさまでした。」

「は、はい。」

「ははは、そう身構えないでください。……ギルドでは、今回のソウジさんの狩猟成果を鑑み、特別に対応することに致しました……全く、規格外な方です。私もこんなことは初めてですよ。」

スツ。

そう言うと、一通の封筒を俺に差し出してくる。

「は、拝見します。」

な、何だろう。

まさか金一封とか……んなわけ無いか。

えーつと……。

………マジか。

「………ソウジ？何もらったのー？もしかしてお金ー？」

「いや、違います。……シガイアさん、これ本当ですか？」

「ええ、本当です。ソウジさん、あなたを——」

紙にはシンプルに、こう書かれてあった。

『ワサドラギルド所属 ソウジ HR7に昇格とする。』

「——HR7。これに認めます。」

シガイアさんの声が静かに響いた。

「……………うわあおー……………」

「わあ……………」

セツヒトさんもハイビスさんも、驚いているのかあまり言葉を発さない。

多分すごいことなんだろう。

なんだろうけど。

「……………す、すみません。理解が追いつかず。」

「ええ、そういう反応をされると思っておりました。」

「あ、そうですか。」

俺の反応を読んでいたとは。

流石シガイアさん。

「セツヒトのフォローがあつたとはいえ、ソロでの大型モンスター狩猟多数。ベリオロス、ガムート、ザボアザギル……………いずれも上位ハンターが相手取るべき強力な大型。更

に強力な雪鬼獣、ゴシヤハギ。そして何より轟竜ティガレックスの完全単独討伐
……………セルレギオスの狩猟のおまけ付きです。」

「……………」

「認められるのに、さほど時間はかかりませんでしたよ。」

H R、すなわちハンターランク。

1 から始まり、そのハンターの狩猟の成果を見ながら、下位はH R 3まで、上位は4
〜7まで。そこから先はG級と呼ばれる、ハンターの最高峰。

すなわち、H R 7とは、上位ハンターの最高ランクに位置する。

……………え？俺が？

「……………まだ飲み込めてないようですが、ひとまず承認を願いたいです。……………タオカ
カ周辺の長クラス、役員全員の推薦もありますし、その辺との関係性を悪化させたくな
い。」

「は、はあ……………」

何だろう。イマイチ実感が湧かないというか。

「ソウジ、私が言うのも何だけど、すごい事だよ？ HR7になるのって、私も結構時間かかったのさ。この天才、セツヒトさんがだよ？」

「……………」

「すごいことだつてー、これー…………うわー、シガイアさん、思い切りましたねー。」

「反対する役員など、いなかったな。」

「…………おお…………それはそれですごーい…………。」

HR7。

意味するところは分かったが、じゃあこれから先どうなるかと言うと、分からん。

「…………シガイアさん、この認定を受けて…………俺つてどうなります？」

「そうですね…………私の個人的な意見を言わせてもらえれば…………厄介かもしれませぬ。悪い意味で早過ぎですぬ。」

「おー？ どういうことー？」

セツヒトさんが疑問を投げかける。

だが、シガイアさんの意図したことが分かったのか、すぐにセツヒトさんは納得した様子に変わった。

「……………あー……………確かにめんどいかも……………」

「ああ。分かるか、セツヒト。……………少し、な。」

「……………説明をしていただいてもよろしいですか？」

どうやら手放しに喜んでいいような状況ではないようだ。

真剣に話を聞く。

「……………ハイビスさん。HR7のハンターについて、概要を説明して頂いてもよろしいですか？」

「は、はい……………。まず、上位ランクでも一部しか認められていない狩猟域……………火山地帯の奥地の溶岩洞や、禁足地周辺といったところへ立ち入ることが許可されます。それに付随したクエストももちろんです。……………難易度が高いクエスト……………街や国単位での依頼や、王族や貴族からの変則的な直接依頼もあります。なので……………あ……………」

「……………ハイビスさんも、気づかれましたね。」

気づく、とは。

黙って聞く。

話を挟めるような空気ではない。

「……………ソウジさんのその力が、公になるリスクが上がった。そういうことです。」

「……………マジですか……………？」

「マジも大マジですよ、ソウジさん。……………私の力の及ぶ範囲で、ソウジさんの力はひた隠しにしてきました。……………今だからこそ言いますが、すでに何件かもみ消してますよ？」

「えっ!？」

「心当たりはありませんか？身近なところでは……………このギルドの職員、ヒナタや解体班の方々、怪しんでいるフシがありました。」

「……………。」

「何とかしましたがね。それに、今回の旅で同行されたガーグア車の御者の男性。彼も同様に、ソウジさんのただならぬ力に気づかれました。」

「え……………」

「まあ彼は問題ないでしょう。例えバレたとしても、ソウジさんやセツヒト、ハイビスさんに対してとても友好的でしたからね。」

マジか。おじさんにも……。

まあそりやなあ。

目の前で2日前のホカホカ弁当を出したり、遠出をするのに軽装だったり、超遠距離のモンスターの察知なんかしたりしたら、怪しまれもするか。

しかし既におじさんとコンタクトを取っていたのか。

シガイアさんの仕事の速さに、驚いてしまう。

「……すみません、軽率でした。」

「いえ、仕方がありませんよ。大体のケースは、人命救助を優先すべき事態でしたしね。……まあアイテムの取り出しなどは、今後もう少し慎重にすべきでしょう。」

「はい……。」

何してるんだ俺……。

反省。

「……………危惧している様な状況は、まだ起こっていません。ただ、これからソウジさんにはオフィシャルな依頼……………ギルド本部や政治の中心に近い人間からの依頼が増えるでしょう。……………私の力も、流石に及びません。」

「……………」

「今回のHR7の認定も、どこかキナ臭い。すんなり行き過ぎです。おそらくは、私のソウジさんへの優遇を訝しんだ連中が仕組んだか……………これまで以上に、最新の注意を払ってください、ソウジさん。……………首都にいる腹の黒い奴らに、ソウジさんの力が悪用される未来は……………見たくありませんからね。」

「……………はい、分かりました。」

「……………まあここまで言いましたが……………これはあくまで可能性の一つです。これまで通り、ソウジさんは伸び伸びと狩猟をして欲しい。その、ギフト、という力の使い方について気をつけていただければ、と。」

「は……………」

強さには責任を伴う、か。

何かの漫画で昔見た気がする。

気をつけていこう。

「ハイビスさん、これまで通り、ソウジさんのフォローをよろしくおねがいます。……
本当に申し訳ありません。巻き込む形になります。」

「……はい、承りました。」

「セツヒトも、できる時には助力を頼むぞ。まだ現役で、全然イケるじゃないか。」

「だからー、それはソウジだから……じゃなくて……まー、やりますよー？そりゃー。」

「そうか……。助かるよ、本当に。」

俺は、強くなった。

HR7と認められたことは、本当に嬉しい。

だが、面倒なことも付いてきた。

……仕方ないよな、この力が無ければ俺はここまで来られなかった。

ギフトが無かったら、多分バサルモスに潰されるかデイノバルドに瞬殺されるか……

そんな感じで人生終わっていただろう。

俺自身を守る為。

俺の周りの人たちを守る為。

俺の力を知り、それでも助けてくれるこの人たちを守る為。
頑張つていこう。

「……シガイアさん、ありがとうございます。色々考えていただいて。」

「いえいえ、助かっている部分の方が多いんですよ？ ミヨシであんなに活躍していただいたおかげで、私の中央での発言力も増えましたし、コネクションも太くなりましたからね。」

「は、ははは……。」

乾いた笑いしか出てこない。

この人、マジで底が知れねえ……。

「……まあでも、そこまで明け透けに俺に言うぐらいには、心を開いてくれているだろう。」

そう解釈しておく。

「それに……ハイビスさん。例のアレはありますか？」

「あつ、はい！……あの、ソウジさん。」

「は、はい？」

「その……ミヨシを出る際にお願ひした荷物を……その、頂きたいのですが……。」

「あ、あー！すみません！持ちっぱなしで！」

俺はポーチに触れてアイテム画面を起動。

……する前に、一応周りを確認する。

「多分大丈夫だよー？人もモンスターの気配も無いからー。」

「あ、ありがとうございます。」

慎重になってしまう。

壁に耳あり障子に目あり。

俺はポーチから、預かった書類を取り出した。

ドン！ドサ！ドサドサ！バサ！

「おお……。」

「多分これで全部ですね……『ハイビスさんに返します。』……多分、これでいいと思います。」

ギルドマスターであるシガイアさんの部屋、その中央部分に書類を取り出す。

ミヨシで見た時も多いとは思ったが、やっぱりすごいな。

「この量を軽々と持ち運んだんですね……。ソウジさん、やはりその力、ひた隠しになさってください……。」

「は、はい。本当に気をつけます。」

セツヒトさんもう見慣れてしまったのか、そこまで驚いてはいない。

ハイビスさんはいそいそと書類の山を整理し始めた。

「……あ、ありました。ギルドマスター。この辺にある書類が、それになります。」

「ありがとうございます、ハイビスさん。……長年持ち出せないかと、苦心していたんです。」

「シガイアさん……それは？」

シガイアさんが俺を使ってまで持ち出したかったもの。
一体何か、気になった。

「ソウジさんには、聞く権利があります。……これらのほとんどは、ミヨシやタオカカに私が残してきた、元々は私の所有していた書類です。……あの近辺のモンスターの出現履歴、狩猟記録、職員の履歴書や人の出入りまで、細かく私がまとめたものです。」

「え……じゃあこの大量の書類は元々……。」

「はい、ほとんどは私のものです。……セツヒトも、ご苦労だったな。」

「マジでさー、私一線退いたっていうのにー、人使い荒いですよー。」

「すまないな。報酬は弾むぞ？」

「……いいですよー。シガイアさんの頼みならー。」

「……プレスワイン。46年もの。」

「……やったー！」

何かなんだか分からないが、セツヒトさんが飛び跳ねそうな勢いで喜んでいる。

……セツヒトさんも、何かやっていたのか？

「実はこの中には、持ち出し禁止のものや、閲覧さえ禁止されているものもあります。」
「えっ!?!」

「周辺一帯をまとめるタオカカの村長に権限が一任されていてましてね……。それを――」

「私が許可もらつてきたつてわけー。ワサドラ出る時にシガイアさんに頼まれたからねー。……。あのタオカカの村長さん、めっちゃいい人でしたよー?」

「そりやお前の大ファンなんだから、当然だろう。」

「そーなんだけどさー。……。一応お金も渡しておいたからねー。」

「ああ。本当に助かった。」

セツヒトさん……。確かワサドラを出発する時、シガイアさんからの書類を受け取っていたなあ。

帰りのタオカカでも、どこかに行っていたし。

……。整理すると、つまりこういうことか?

シガイアさんは、これらの書類が必要だった。何にかは知らんが。

するとセツヒトさんや俺が、冬の間ミヨシに行くことになった。

渡りに船と、セツヒトさんとハイビスさん、そして俺の力を使って、これらの書類の収集及び運搬に成功。

今に至る、と。

……何か利用された気分。

いや、利用されたんだけど。

「隠していて、申し訳ありません。ソウジさん、ハイビスさん。」

「い、いえいえ。」

「お二人は何も知らないまま、これらの運搬をお願いする必要がありました。……その、隠し事などは、お二人ともあまり得意ではないでしょう?」

「……。」

「……。」

二人して黙り込む。

はい。

その通りです。

ハイビスさんも、腹芸が得意なタイプでは無いです。

むしろ俺達なんて、シガイアさんみたいな誰でもできる人の手の平の上で踊らされるタイプの人間である。

「……利用されたみたいで、あまりいい気分ではないですが。」

「ははは、本当に、申し訳ありません。……引き続き、ソウジさんが良い環境で狩猟ができるよう、ワサドラギルドとしてバックアップを続けていきます。私たちは、一蓮托生です。」

「……はい。」

ダメだ。

マジでこの人には敵う気がしない。

何だろう、見ているところとか考えている先が違うというか。

頭の良さがまるで敵わない。

……上司になったら、ちよつと怖いぞ。

「それに、ハイビスさん。」

「は、はい！」

「本当に重要な任務。よく分からないままに頑張っていただけで、ありがとうございます。ありがとうございました。」

「い、いえ、とんでもありません。」

「ミヨシでも激務だったと聞いております。……誓って、他意はありませんので、数日お休みを取ってください。」

「え?!」

「いえ、本当に他意は無いですよ? 体を休めて下さい。働き過ぎです、本心から心配しています。」

「ほ、本当ですか?」

「ええ、本当です。」

ニツコリ。

シガイアさんが笑う。

……笑顔に何か含まれている気がしてならない。

……ハイビスさんもめっちゃ複雑な顔をしている。

「……シガイアさん、それじゃ余計疑われるだけですってー。怖いってその顔ー。」
「な……本気で言ってるんだぞ？セツヒト。」

「分からないってー……そういうところの計算は下手くそなんだよねー昔から。……ハ
イビスちゃん、シガイアさん、マジで言ってるよー？安心して休みなー？」

「え、そ、そうですか。」

「うん。わつかりにくいよねー、このキツネ顔ー。」

「……セツヒト、ブレスワインはやめておくか？」

「いやー、マジかつこいいですー。もうイケオジ過ぎてー、職員もファンいっぱいいます
よー？」

「変わり身の早いやつだ……。ま、まあというわけです。安心して、休みをとってください
い。部長にも伝えておいたので。」

「は、はい。ありがたく、頂戴いたします。」

シガイアさんが超珍しくたじろいだぞ……？

貴重なものを見た。

セツヒトさんとシガイアさん。

タオカカギルドにいた頃からの付き合い。

あんな死線を潜ってきただけあるなあ。

「三人にお伝えすることは、以上になります。ご足労いただき、ありがとうございます。ありがとうございました。」

「はい……ありがとうございます。」

「ソウジさん。こんな私を信用しろというのも難しい話でしょうが……一人の男として、あなたの快進撃は聞いていて、何というか、ワクワクしますよ。一人のファンとして純粹に、応援しています。」

「あ、ありがとうございます。」

「先程の件、くれぐれもよろしくお願いしますね。……それでは。」

ガチャツ。

バタン。

シガイアさんに入入り口まで見送られ、部屋を出る。

「……………ふう……………」

「あー、ソウジー、とりあえずまあ……昇格おめでとー、だねー？」

「ありがとうございます。……素直に喜べない事情も判明しましたが……。」

「ソウジさん、ひとまずは喜んでいいと思いますよ？……私もギルドに勤めてから、こんな昇格聞いたことがありません……そ、その、非常にか、かつこいいと、お、思いますよ？」

「ハイビスさん。」

ありがとうございます。

あなたみたいな女性にかつこいいとか言われるなんて、嬉しゅうございます。

「よーし、飲みいこうかー。」

「行きませんよ！まだ昼にもなってませんって！」

「えー。」

ブーブー言うセツヒトさんはさておき。

HR7になった。

だから何だと思ったが、色々あるらしい。
具体的に大変になるのはこれからだろうなと漠然と考えながら。
今は素直に、昇格を喜ぼうと思った。

この時の俺はまだ知らなかった。
上位ハンターの最高ランク、HR7。
これが招く、とんでもない事態なんて。

114 休みを満喫しましょう。

シガイアさんとの話も終わり、ギルドを後にした俺たち。

そのままなんとなく解散して、なんとなく部屋に戻ってきてしまった。

ハイビスさんに働きすぎだと言いはしたが、俺も負けてはいない。

休みの日、何をしているかと言われれば、トレーニングかアイテムの補充か装備の点検か……いずれにせよ、ハンターに関することである。

体は休まっているが……これは良くない。

うーん……改善しないとなあ。

「……………明日からどうするかなあ。」

独り言ちる。

目下の目標は、デインバルドの狩猟。

リベンジしたい、それだけである。

だがその先は？

(……オフィシャルな依頼って……どんなやつだろう……。)

シガイアさんやハイビスさんから聞いた、何か偉い方から来るかもしれないという依頼。

……おそらくは強敵が待ち構えていることだろう。

HRも上がり、その辺との戦いも増えてくる……のかな。

……分かんが、当面はそうしたクエストをこなしていくことになりそうだ。

(……すると、今のままの防具や武器でいいのか?)

必然、こう考えてしまう。

だって死にたくない。

世の中には痛いほうが良いという稀有な方もいるにはいるらしいが、俺は至ってノーマル。

痛いのは嫌である。

(そうと決まれば、早速武具屋に――)

コンコン。

今日も今日とて、休みを仕事で消化しようと決めかけたその時。
部屋にノックの音が響いた。

「はい。」

『おおソウジさん。ワシじや。入っていいかの?』

「ホエールさん。どうぞ?」

ガチャ。

「すまんの、お休みのところ。」

「いえ、暇してましたし。なんのご用ですか?」

ホエールさんが訪ねてくるとは珍しい。

「用というわけでは無いがの。……ソウジさん、しばらくは休みなんじゃろ？」
「は、はい。ハンター業はもう少ししてから再開しようかと。」

シヨウコと昨日少し話した事。

フェニクさん達との雇用契約はまだ少しだけ続いているらしい。

とは言ってもトツバは怪我で動けない。

トツバに気を使わせないように、フェニクさんと二人でもう数日ほどクエストを受けた
いとのこと。

断る理由も無く、そもそも契約なのだから履行するのが当たり前。

なので、シヨウコが働き終えるまで数日は、のんびりするつもりだったが……。

「休む時は、しっかり休むんじゃぞ？」

「うっ……。」

「……まさかとは思いますが、せつかくの休み、仕事をしようと思っていなかったのではないか
の？」

「そ……その通りです……。」

「ほっほ。正直じゃわい。」

笑うホエールさん。

「……………ソウジさん、噂は聞いておるよ。強敵を何体も屠った、とんでも無い遠征だったのじゃろう？……………しばらくは、体も心も休まれたほうがええ。」

「い、いやー……………その通りですよね……………」

「分かっておるのなら、わしからは以上じや。……………根を詰めすぎて破綻するハンターなど、たくさん見てきたからの。……………おおかた、今後に向けて装備を整え直そうとか、その辺じゃろ？」

「うっ……………」

凶星を突かれる。

大正解です。

「当たり前じゃな……………。何も考えないほうが、かえって考えられるようになる。これは持論での。」

「はい……………」

「まあ……………世の中には休むことばかり考える輩もおるがの……………そういう奴に限って長生きするもんじゃ。」

それはわかる。

前世でも、オフの為に効率よく仕事しているような同僚が、結局辞めずに残っていた。俺はダラダラ仕事したいタイプ。

……………早死にする方かな……………。

「休む時は、全力で、の?」

「は、はい。」

「ではの。」

バタン。

出ていった。

……………あれだけを伝えるために、わざわざ来てくれたのか。

……確かになあ。その通りですよ。

ハイビスさんの社畜っぷりに心配をしつつも、俺は俺で働きすぎだ。

「全力で休む、か。」

しかし、何をすればいいのだ。

………あ、何もしなければいいのか。

簡単である。

「……………出かけるか。」

何もしない、をする。

矛盾するが、仕方ない。

だって、休むとはそういうことであるからして。

宛もなくブラブラ街を歩いてみるか。

街ブラというやつである。

特に目的も立てず、俺は宿を出ていった。

「夕飯までには帰るかもしれません」などと、実に曖昧な言葉をホエールさんに伝えると、「それでいいわい。」と笑われた。

まあ予定が無いんだから、どうなるかも分からん。

なるようになるか。

* * * * *

2時間ほど街をうろついた。

このまま走ればトレーニングになるんじゃないかと思つたが、それは無し。

ダメだ……まだ頭は完全に仕事モードだ……。

本来怠け者であると思つていたが……この世界に来てからは、とにかく一生懸命にやることしか考えなかつたからなあ。

いつの間にか、勤勉な人間になってしまつていたらしい。

らしいって。

自分の事なのに。

「はーい!!安いよ安いよ!!どれも採れたて新鮮だよー!!」

「こちらアヤ直送のポポ肉だよー!シチューに炒め物に、夕飯は決まりだよー!!」

気が付いたら市場に着いていた。

出店の店主たちの大声が飛び交う中を、用も無く歩く。

もうしばらく行くと飲食店の出店が並ぶのだが、この辺はどうやら食品そのものを取り扱うような店の多いエリアらしい。

色とりどりの野菜や旨そうな肉を所狭しと並べ、色んな掛け声で客を呼び込んでい

る。
じっくりと見たことは無かったが、結構な賑わいだ。

活気が溢れている。

(こういうのも新しい発見か。)

特に買うつもりもないが、掛け声につられる。

あ、あれは……アオアシラの肉って書いてあるけど。

こういうところに卸されるのか。

新発見。

よく見れば、至るところにモンスター肉や、採取されたと思われる薬草などの類が並ぶ。

ハンターの仕事は人々の生活に繋がっているんだな、と実感させられた。
小学生の社会科じゃないが、勉強になる。

……………。

「断りきれなかったな……………」

ただブーツと歩いていたせいとか、肉の串焼きを買わされた。

美味そうだったのでじーっと見ていたら、「食べていくかい!」とおばちゃんに言われた。

そうしたら最後、様々な文句で言い負かされ、結局お買い上げ。

おばちゃんの「勝った」と言いたげ顔が忘れられない。

……………まあまあそうだからいいか。

ノーと言えない男です。
すみません。

市場の抜けた先のベンチに腰掛けて、頂くことにする。

串4、5本は入っている包み。

多すぎだよ、おばちゃん。

「ハンターさんならこれくらいはいかないとね！」と言い切られてしまった。
食いきれねえって……。

「……よし……いただきま……ん？……あれは……。」

肉だけの昼食にしようかと意を決して串を持ち上げた時、視界に入った人。

……あれは……ハイビスさんか？

同じ広場の向かいにあるベンチで腰を下ろし、何かの包みをゴソゴソしている。

……中身は……パニーニみたいな……野菜やら何やらを挟んだパンとか。

それを取り出して、食べようともせず……溜息をついている。

まさか……。

近づいてみる。

「はああ……こんなに食べられませんよお……おじさん……。」

「……………ハイビスさん？」

「ふえ……………へ!? そ、ソウジさん!？」

「ど、どうも。」

「ど、どうも……………」

驚き顔のハイビスさん。

完全に私服。

春らしい淡いピンクのセーターに黒いミドル丈のスカートが、非常に女性らしい。

私服姿はミヨシで少なからず見てきたが、新鮮である。

……………あれ? さつきまでギルドで受付嬢の制服を着ていたはずでは?

「……………そ、ソウジさんもお買い物ですか?」

「え、ええ。まあ……………いや、嘘です。」

「え?」

「……………武器や防具を見てみようとしたら、ある方に『休む時は休まないといけない』と言われまして。……なので、街をぶらついていて、が正しいです。」

「そ、そうですか。」

ハイビスさんに正直に話す。

隠すことでもない。

「ハイビスさんは？」

「……………私も似たようなものです。あの後、もう帰るように言われて……………。休みに何をしていたかわからず、とりあえず、散歩を……………」

「……………それで、それを押し売りされた、と。」

「うっ……………その通りです。……………ソウジさんも？」

「は、はい……………。食べきれないほどの肉の串焼きを……………」

「……………」

「……………」

「ふ、ふふふ。」

「ちよっ、笑わないでくださいよ……………」

「い、いえ……すみません。……似た者同士だなあ、と。」

確かになあ。

休みに何をすればいいかわからず、街ブラしていたらたくさんのメシを買わされ、場にとりあえず腰を落ち着け、溜息をはき……。

全く同じではないか。

「……………俺と行動が同じ過ぎて、ビックリですよ。」

「本当ですね。あ、隣、どうですか？……一緒に食べませんか？」

ハイビスさんからの誘い。

是非も無い。

こんな美人さんからの申し出を断る男など、この世にはいないと思う。
とりあえずお互いに交換し、食べることに。

「……………ふふ、なんか嬉しいです。」

「嬉しい？」

ハイビスさんが変なことを言う。

「あ、いえ。……私だけじゃなかったんだな、と。休日は何したらいいか分からないなんて……ちよつと落ち込んでたんです。」

「……それどころか行動まで同じですよ……ほら、こんなに買わされて。」

言いながら、串焼きが入った包みを持ち上げる。

「ブツ……ちよ、ちよつとソウジさん……笑わせないで下さい……。」

「あ、ああすみません……いや、でも、これすごい偶然ですよ?」

「ふふ……そうですね。本当に、昨日も今日も会っていますし。」

「……仲いいですね、俺たち。」

「ふえっ!?……そ、そうですね! な、仲いいですね……。」

俯いて黙ってしまうハイビスさん。

何かマズい事を言ってしまっただろうか……?

「……………そ、ソウジさん！」

「うえっ!? は、はい！」

とか考えていたら急に大声で話しかけられた。

緩急がすごい。

「こ、この後良かったら、どこかお出かけしませんか？」

「へ!？」

「い、いえ。これも何かの縁ですし……………お買い物などあれば、一緒にどうか、と。」

「……………分かりました、行きましょう。」

「え!?! いいんですか!？」

ハイビスさんと一緒にいるなら、それはもういつもの日常とは違う訳であって。

立派な休日の過ごし方と言えるのではないだろうか。

それに。

「むしろハイビスさんの様な女性と一緒にいられるなんて、光栄ですよ。」
「ふえっ!？」

「エスコートの仕方なんぞ全く分かりませんが……まあ一緒に買い物行くぐらいなら、大丈夫かと。よろしくおねがいます。」

「よ、よよよろしくお願ひします!」

思わぬところで予定をゲット。

ハイビスさんと街ブラである。

……いかん。少しワクワクしている。

……………。

そこからハイビスさんと過ごした。

極力仕事の話はせず、お互いの服を見たり、用もないのにまた市場をぶらついたたり。

あれ?これってデートだ。

と気付いた頃には、既に日が傾き始めていた。

.....。

「ふう……満喫しましたね……俺たち。」

「ええ……。乗り切りましたね……。」

まるで一狩り行ったあとのハンター同士の会話である。

「俺はこの後、銭湯にでも行こうかと思いますが……流石にそこはご一緒じゃないほうがいいですよね。」

「あ……そ、そうですね。」

なぜ寂しそうな顔をする。

確かこの世界では、銭湯に一緒に行くのはハレンチ行為だったはず。

それを教えてくれた張本人が目の前にいるわけで。

「……遠慮しておきます……。」

「は、はあ。」

どこか悔しそうに見えるのは気のせいか……？

「俺、今日、楽しかったです。とても。」

「わ、私もです。」

「……あー、これでまた、ハンター業がんばれそうです。」

「あ、明日からですか？」

「いえ、シヨウコがまだ忙しいみたいで……。明日は装備を見直そうかと。」

「結局仕事になってません？」

「あー……難しいなあ……。」

「……ふふ。頑張って休んでくださいね！」

「はい、気をつけます。」

笑い合う。

……なんだろう、冬山で一緒に過ごしたからか、自然と笑えている気がする。

ハイビスさんと二人きりとか、以前ならドキドキしまくっていたと思うのだが。

本当に仲良くなったものである。

「それじゃあソウジさん……ぜひまた、何したらいいか分からなくなったら……誘ってくださいね。」

「は、はい。」

「では、失礼しますね。」

去っていくハイビスさん。

な、何だ。やはり最後はドキドキしてしまったぞ……。

……完全にデートであった。

もう、完全に。

しかも楽しんでしまった。

……いや、別に悪いことなんてしていないんだけど。

……。

よし！気を取り直して？

……銭湯でも行くか……。

そうして俺は、たまの休日を楽しんだ。

その後、俺とハイビスさんの目撃情報が市場のおばちゃんによつて色んな人にもたらされた。

その凶悪なおばちゃんネットワークは、拡散力も凄まじく。

銭湯に入っている間に既にドールの耳にも入ったようで、「は、ハイビスさんとは……ただならぬ仲だつて聞いたんだけど……？」と恐る恐る聞かれてしまった。

尾ひれが付きすぎたその噂の誤解は何とか解いたが……さすがハイビスさん、もはやこの街のアイドルである。

銭湯一緒に行かんで良かった……。

行動に気をつけて休日を通り過ぎなければならぬと肝に銘じた、休日であった。

115人それぞれの趣味を学びましょう。

ハンターの装備の世界は、非常に奥が深い。

武器一つとっても、かなりの幅がある。

俺が扱う双剣は、いわゆる近接武器。

モンスターに接近して攻撃を繰り返すため、怪我を伴うリスクも大きい反面、大ダメージを与えられる可能性が高い。

片手剣や大剣、太刀やハンマーなど、その種類もたくさん。

ダメージを少しでも減らすため、防御力を高めたゴツゴツの装備をするのが一般的だ。

また、遠距離から攻撃できる武器も存在する。

俺は扱えないが、ライトボウガンやヘイボウガン、弓などがそれにあたる。

こちらは習得にかなりの技術を要するが、安定した狩りが可能になるという大きなメリットがある。

単純に遠い為、怪我のリスクは格段に低くなる。

近接武器を扱うハンターの装備に比べ、見た目も軽い装備が多い。

ちなみにこれはあくまで俺の主観であり、基本的な話だ。全身ガチガチに固めたヘビィボウガン使いだっているし、何だったら俺の装備は防御というよりも回避に特化しているため、かなり身軽なものである。人それぞれ、という答えが最もしっくりくる。

「……という訳で、装備や武器を見直してみようかな、と。」
「なるほどねー。せつちゃんりょうかい。」

休日2日目。

結局俺はやることもなく、ホエールさんの教えを破り、セツヒトさんの武具屋に来てしまった。

もはや休日が何だと気にしすぎる方が体に悪いと思い、思いつくままに行動した結果がこれである。

いいんだ。俺は仕事に生きるのだ。

セツヒトさんは、相変わらずのんびりと仕事をしていた、

何度かここに来るお客さんに会ったことがあるが、セツヒトさんのそののんびり対応にも慣れたものであった。

仕事にも、自分の生き方を反映している。

ちよつぴり羨ましい。

今日は無人であつた為、セツヒトさんが椅子を出してくれた。

二人で受付を挟んで駄弁る形に。

「そういやさー、ソウジつてー、スキル気にしてるー?」

「スキルは……一応今、砥石研ぐのが速くなつたり、弱点に効くスキルとか……あと、回避距離が上がるスキルを使つてます。」

「おー、なるなるー。いい感じじゃなーい?」

「そうなんですよね。どれも使い勝手がいいというか……。」

スキルが付く理屈については、少し不思議なことが多い。

例えばショウコからプレゼントで貰つたお守り。

これには〈弱点特効〉と〈回避距離〉というスキルが付いていた。

前者は何というか、モンスターの弱点に攻撃が入ったとき、こうズバツといい感じに当たるといふ。

そんな感じ。

後者は、攻撃を避けるモーションに入るとき、その回避の方向に力が入りやすくなる……気がする。

結果回避の距離が伸びる……ような。

……ファイリングでしか説明ができないのがもどかしいが、確かに効果はあるのだ。

だが、なぜその力が作用するのかについては、未だに全くわからない。

「……………セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん。……スキルって、どうやって身につくんですかね?」

「お?どゆことー?」

「だから、スキルが身につく理由というか……装備したりお守りを持つだけで力を発揮できるとか、おかしくないですか?」

前々から不思議だったことを口にしてみる。

この世界、結構ファンタジーな要素が少ない。

魔法らしい魔法なんてお目にかかった事などないし、ハンターは体力や技術を鍛え上

げてモンスターに立ち向かう。

この世界はこの世界なりに、結構リアルなのだ。

「いや、スキルだけじゃなくて……俺のいた世界と比べると、色々ぶっ飛んだことはありますよ？ 例えば……。」

だが、回復薬の効き目のおかしさや、モンスターの物理法則を無視した動き、他にもハンターの体力や生命力のおかしさ……ファンタジーというか、よく分からん部分が多々あるのは事実。

色々とセツヒトさんに聞いてみることに。

「んー……考えたことも無かったなー、そんなのー。」

「そうですか……。」

「あ、でもでもー。ソウジのそのギフト？の力がー、一番おかしいってー。うん、ありえないー。」

「ま、まあそれはそうなんですけど……。」

やはりこの世界の人にとって、当たり前のことなんだよな。

万有引力に気づいたあの偉人はマジで凄いなと思う。

目の前の当たり前に疑問を持つというのは、とても難しいことだ。

リングゴが落ちた所で、俺なんて「へー。」で終わる自信がある。

「何か昔ー、そういうのを本で読んだようなー……確かー、モンスターの素材とか鉱石とかその物に力が秘められていてー、身につけることでその力を発揮できるとか……そんな話ー。」

「うーん……。」

それは何だろう、理屈ではあるが、根拠が全くないワケで。

「……まあでも、実際力は発揮されるワケですしね。」

「そーそー。そういう難しいことはいいのさー。……そんなことより、ソウジー……もちつとモンスター、狩ってみたらー？」

「も、モンスター、ですか？」

急に提案された。

そりやそろそろ本格的に狩りに出かける予定だけでも。

「んーつとねー、ソウジが目指すスタイルっていうのー？それを考えるとー、ちよつと素材が足りないんだよねー。」

「えっ。それは……。」

「私なりに考えてみたんだけどー、ソウジってガッツリ回避主体でしょー？しかも、カウンターが結構うまいしー。その辺、どーお？」

「そうですね……。」

セツヒトさんが言いたいことはだいたいわかる。

つまりは、自分がどういう狩りのスタイルで行くか、ということだろう。

装備というのは、千差万別。

俺自身が目指す形、か。

「……………回避はやっぱり外せないです。」

「……………うんうん、それでー？」

カリカリ。

セツヒトさんが受付台に肘をつけてメモを取り始める。

銀髪が台にかかり、真剣な表情。

うーん、この人、こういう時は本当に美しい人なんだけど。

……見惚れている場合ではない。

話を戻す。

「それに……攻撃力強化は必須ですね。これから強敵を相手にしていくとなると、そこも外せません。弱点を的確に狙うことについては……自分で言うのも何ですけど、結構得意なんです……そこを生かせるといいかな、と。」

「ふん、ふん。」

「あとは、剣の切れ味管理……これも厄介です。ティガレックスを相手にした時、この大切さがよくわかりました。ここを何とか出来れば、より効率的に狩猟を進められる……気がします。」

「なるなる……つと。……他にはー？」

「……これはわがままかも知れないんですけど……窮地に立たされた時こそ、研ぎ澄まされていく……気がするんです、俺。……いや、誰でもそうだとは思うんですけど……何というか、ピンチで集中力が増すというか。そこを生かせたらいいですね。」

「……オツケー……うん。自己分析もできてるんじゃない？」

「逆に不安なのは、防御ですね。打たれ弱いつてわけではないと思うんですけど、双剣2本で攻撃を防ぐのは、これから結構厳しくなると思います。……危ない橋を渡るなど、ショウゴに前回怒られました……。」

「あー……ソウジ、そういうところあるもんねー。」

「はい……。」

謙遜も隠し事も無し。

恥ずかしいが、これが俺なりの自己分析&自分の理想とするスタイル。

回避主体、攻撃力強化を含めた効率の良い狩猟、その為の切れ味の持続……できればいざという時の集中力を活かせるような。

そんな感じ。

理想が高過ぎか。

「要素盛り過ぎですね……。」

「いやー……イケると思うよー？ちよつと待ってねー？」

「……え？」

言うや否や、セツヒトさんがメモを手に真剣に考え始めた。

何やらブツブツ言っている。

「攻撃強化……リオレウスとアンジヤナフの装備でまかなうとして……効率重視……
要は会心攻撃、カウンター主体……弱点狙うとかソウジならいけるでしょー？……なら
弱点特攻のお守り生かしてー……あ、アイツかー……アイツはキツツイよねー……流石
に私も持っていないかもー……でもこれが揃ったら力の解放もつくし……この際回避は
捨ててー……ソウジ本人に頑張ってもらおうかなー……目もいいしイケるでしょー
……あ、だめだ、切れ味切れ味……。」

「……。」

独り言を結構なボリュームで話しているセツヒトさん。

な、なんか……趣味に没頭しているマニアックな方々のような口ぶり……。

セツヒトさん、実はこういうの考えるの大好きとか……？

「……研ぐの速くするか持続させるか……あー、武器から考えればいいのか……ティガの双剣は……会心率がなあ……あ、ナルガクルガ！……そうだ、こいつがいた……。」

カリカリ!!

カリカリカリカリ!!

……めっちゃや高速で鉛筆を動かすセツヒトさん。

……正直に言おう。

少し不気味。

「あー……いい感じー……でもモンスターきつついよねー……ま、当面はこれを作るのに集中して貰えば……。」

「……あ、あのー？せつちゃんさん……？」

たまたまセツヒトさんに声をかけてみる。

「ん？……あーあー、ごめんねー、ちよつとトリップしてたー。はははー。」

ちよつと？

……ま、まあいいや。

「その……今日答えを出さなくてもいいんですよ？その、休日の時間潰しに店に寄ったっていうのもありますし……。」

「いやいやー、いいのいいのー。こう言うの考えるのー……好きなんだよねー。」

「は、はあ。」

「まー、趣味の一つでねー。……で、今の所の結論としてー。」

セツヒトさんが好きな物。

酒とイジリが好きなのは知っていたが、こういうことを考えるのも好きなんだな。

意外、では無いけど。

だって武具屋を開いているぐらいなんだし。

セツヒトさんが少し咳払いをして、話し始めた。

「攻撃力の強化とー、会心……こう、ズバツといく感じのアレねー？アレを強化して、切れ味確保の砥石使用高速化、業物つていう……武器の切れ味が強化されるスキルもつけてみてー、ソウジの集中力を生かした力の解放つていうスキルもつく……そういうスキルの構成が可能だよー？」

「ま、マジですか。」

すげえ。

俺の要望丸々クリア。

恐ろしい。

……ん？

「か、回避は……？」

「んー。回避距離とかそういうものの強化も考えたんだけど、そのお守りについては回避距離つていうスキル？それで十分だと思っよう？ソウジ、単純に避けるの上手いしー。……そのお守り、すごいやつだよー？大事にしてねー？」

「お、おお……。」

シヨウコはそんなにいいものを俺に……。

ありがとうシヨウコ……これからも大切にします……。

……元はフェニクさんが発掘したんだっけ。

フェニクさんもありがとう……。

「ただね……結構キツツイこと言うよー?」

「は、はい。」

「素材が足りないと思うんだよねー。ソウジ……オロミドロ、リオレウス、アンジャナフ、ラージャン……この辺のモンスター、相手にしたことあるー?」

「い……いえ、無いと思います。」

「なるほどね……ジンオウガもなんだよねー……。こいつらの素材が必要なのさー。わー、ソウジ大変ー。」

「……そいつらは、正直に言ってほしいんですけど……俺は勝てますか?」

素材を集めるのはいい。

クエストにあるかは分からないが……そいつらを見つけて狩ればいいのだから。

問題は、俺が敵うかどうかである。

「……正直言うよー?」

「は、はい。」

緊張する。

まあ敵わないとしても、俺が強くなるしかないんだけども。

「……大体は、いけるっしょー。」

「……え?」

「だからー、大体はイけるってー。オロミドロとかちよーめんどいんだけどー、まーソウジならイけるイけるー。リオレウスは閃光玉でハメちやってー……アンジヤナフはソウジめつちや相性いいでしょー?……ジンオウガは、まあ頑張ってー?」

「は、はあ。」

もつとキツイこと言われるかと思つたが。

「まだソウジには早いかなー」なんて。

「……でも、ラージャン。……こいつは別格ー。」

「……強いですか？」

「……私の主観だけどー……ティガレックスが可愛く見える……かなー？」
「うわあ……。」

俺が必死こいてようやく倒したティガレックスが可愛く見えるとか。
なんの冗談だ。

「……どーするー？ソウジー？……やるー？」

「……。」

……まあでも。

強くなりたいたいんだから。

……これから、そういつた強敵を相手にしていくんだから。
それくらいの試練、乗り越えないとな。

「……やりますよ。俺。」

「……おー。」

「いや、絶対倒すなんて大口は叩けませんけどね。……やってみます。死なない程度に。」

「うんうん……ソウジ、やつぱ良いよ、君はー。」

「あ、ありがとうございます。」

礼を述べておく。

天狗にはなりたくない。

「しかし、あれですね。……強敵を倒すための装備を作るために強敵に立ち向かうとか、笑えませんよね……。」

「んー……ソウジにこんな言葉を送ろうかなー。」

「へ？」

セツヒトさんがすうつと息を吸い込む。

「……ようこそー、修羅の道へー。」

修羅の道。

茨の道。

これから目指す俺の理想。

それは修羅の道のりであると聞いて。

「は、はは……。」

……俺は、乾いた笑いしか、出てこないのであった。

* * * * *

セツヒトさんの武具屋で過ごしたその日の夕方。

しこたまアイテムを買い漁り、わざわざ部屋に持ち帰ってからポーチに収納した。おおっぴらにポーチにしまえたら楽なのだが、そういうわけにもいかない。

「……トレーニングして、銭湯行って、飯食いに行くか……。」

理想の休日の過ごし方を、今日はことごとく破ってしまっている。

ならもういつそ、通常運転でいこうと思う。

俺は服を着替え、トレーニングに勤しむことにした。

中庭を借りて、筋トレと素振り。

……全く疲れなくなったなあと、実感。

雪山のランニングは、スタミナの面でも相当な効果があったらしい。

明日の朝は、ワサドラの外周をランニングしてみよう。

どれだけ速くなったか、楽しみである。

トレーニングを終えると、俺は銭湯に直行した。

……。

銭湯。

ほぼほぼ毎日通っていたここだが、先日久々に帰ってきたものだから、番台のおじさ

んに大きな声で挨拶されてしまった。

目立つのは少し恥ずかしいので、若干居心地が悪くなってしまうた。

……まあ気にしないことにする。

湯浴み着に着替えてサウナ室に入ると、幾人かのハンターと思しき輩に、ジロジロ見られた。

……何だかよく分かんが、スキル、気にしないを発動。

堂々と汗をかく。

しばらくしたら汗を流して水風呂へ。

クールダウンしたら、備え付けのベンチで一休み。

再びサウナ。

水風呂。

ベンチ。

3回ほど繰り返し返せば、なんとまあ、心地良い。

と、ととのう……。

恍惚の時間、最高の瞬間である。

「ソウジ様。」

「へあ!？」

だ、誰!？」

めつちや変な声出ちやつたよ!？」

某宇宙からやってきた光の巨人みたいな!!

「わ、私です、ヒナタです。……急に申し訳ありません。」

「あ、ヒナタさん!これは、すみません。驚かせてしまつて……。」

「それはこちらのセリフです。急にお呼びして、申し訳ありません。」

謝り合う俺たち。

俺のことを様付けで呼ぶ人なんて、ヒナタさんぐらいなのに。

反応できなかった。

最高のヒーリングタイム中で、隙だらけだったな。

「いえいえ、気にしないで下さい。ヒナタさんは、今日はお休みですか?」

「はい、ソウジさんがお休みなので、それに合わせました。」

「あ、なるほど。」

ヒナタさんは、ハイビスさんと同様に俺のクエストの受付業務を専属でやってもらっている。

新人ながらもとても有能であると、ハイビスさんからはよく聞いている。

凛とした佇まい。フェニクさんとも違う、大和撫子のようなイメージ。

湯浴み着を着て、髪はアップに束ねて、タオルを頭に巻いている。

髪が長いと大変だなあ……って。

そういえば……。

「……まずいですかね……俺たち、以前一緒にいて、ハイビスさんに怒られましたし……。」

「あ……そ、その節は、ご迷惑をおかけしました。」

「い、いえいえ。その辺事情に疎いもので。こちらこそご迷惑を。」

「……その、サウナ室と一緒に入らなければ、大丈夫かと思えます。……男女のそういった関係の方は……そ、その、一緒に入るそうですが……。」

「あ、な、なるほど。」

うーん。

やはりよく分からん、こっちの世界の貞操観念。

そしてヒナタさん、急にしどろもどろにならないでほしい。

ギャップというのか……しっかりとした女性が弱みを見せるのは、男性にとってかなりのダメージを与える。

今、俺の心にクリティカルヒットしてしまった。

おっさんハートよ、落ち着くのだ。

「……で、ひ、ヒナタさんは、お元気でしたか？」

何でもない会話で緊急回避。

話題転換の技、発動。

……若干囁んだけども。

「あ、はい。ハイビス先輩がいなかったもので、少し寂しかったのですが……新しい友人もでき、楽しく過ごしております。」

「新しい友人。」

話しながら、俺の横に腰掛けるヒナタさん。

若干の距離を取って座るのは、致し方無かろう。

距離感。これ大事。

今日はうちわは持ってないのか。

俺も忘れたけど。

確かハイビスさんは、ヒナタさんは友人が少ないとか何とか……そんなことを心配していた様な。

同郷で可愛い後輩……あ、ヒナタさんも首都出身でことか。

ヒナタさんはクールに見えて、結構おしゃべりが好きな女性である。

話すのは、中々に楽しい人だ。

美人だし、友達を作ろうと思えばすぐにできると思っていたが。

良かった良かった。

「こう、空気が合うと言いますか。一緒に過ごしていて、とても楽なんです。ハンターの方なのですが、不思議と。」

「ほ、ほお……。」

これは……彼氏ができたとか、そういう話か……？

もしくはそれに近いような方が現れたとか、そういう……。

ま、まあ、邪推はしないようにしましょう。

大変失礼なことである。

聞くに徹する。

「それは良かったですね。」

「はい。休日も一緒に過ごすことが多いです。その友人のオトモアイルーも、それはもう可愛らしく……。」

あ、目の色変わった。

……さすが、アイルー好きのヒナタさん。

俺は知っている。

この人はもう、俺なんか目じやないレベルで猫……アイルー好きな人であるということを。

最近はなんかもう隠す気もあまり感じられないけども。
まあいい傾向……なのか？

「割と無口と言いますか、クールなアイルーで……それがもう、私としてはたまらないという次第です、同志。」

「それは……重ねて、よかったですね。」

「はい、いい出会いをしました。ものすごく。」

素敵な男性ハンターと出会い、アイルーも愛でられる。

いい話である。

……多分。

「同志、ソウジ様も、ご一緒してそう思われませんでしたか？」

「……はい？」

ヒナタさんお友達できてよかったね、なんて思っていたら、ヒナタさんが不思議なことを言い出した。

「一緒に一緒? どういうことだ?

「ですから、そのアイルーです。……ソウジ様の琴線には触れませんでしたか?」

「え、ええと……話の流れが読めないのですが。」

「その、トツバ様です。」

「……へ!？」

「私の新しい友人はフェニク様で、クールなアイルーというのがトツバ様です。」

「……あ、あー、なるほど……。」

……あの二人のことかよ!!

……とは突っ込まない。

男性ハンターへの淡い恋心とか、そんな少女漫画ちつくなことを想像したのは、俺である。

アホか。

しかし、トツバか。

……確かに、シヨウコのブロンドの髪と猫耳とは違って、トツバは黒髪黒耳黒尻尾。黒猫アイルー好きには、たまらないだろう。

「トツバは……とんでもないポテンシャルを秘めています。」

「やはり……！同志もそう思われますか……。」

「あの黒耳が……。」

「しかし口調も……。」

ボソボソ。

ゴニョゴニョ。

二人のアイルー談義……もといアイルーこそ話はずまるどころを知らず。

かなりの時間、ベンチで愛を語りまくってしまった。

トツバから話題はショウゴ、そしてオスズに飛び。

オスズの弁当をほぼ毎日購入しては、萌えに萌えているというヒナタさんの話まで及んで。

非常に充実した時間となった。

ちなみに。

「ですから!!どうして風邪を引くまで二人で過ごすことがあるんですか!!」

「ぶ、ぶえつくしよい!!……す、すみません……でも、一緒にサウナは入っていませー」

「そそそ、そういうことではありません!!ソウジさん!!あれだけ冬山で体調管理について話しましたけど!」

「は、はい……。」

体調を崩したヒナタさんに異変を感じたハイビスさんが、ギルドで俺に説教を食らわすのは、また別の話。

趣味の話も、程々に。

116リベンジの下調べをしましょう。

俺には、倒すべき宿敵がいる。

斬竜、ディノバルド。

以前ボッコボコにされた相手である。

ボッコボコにされたとまではいかないが、もう一つ。

雷狼竜、ジンオウガ。

雪山に向かう際襲われて、ほとんど何もできなかった。

セツヒトさんに救われたけど……あの麻痺は厄介だ。

そして一昨日、セツヒトさんに素材を集めると約束したモンスター。

アンジヤナフ……リオレウス……オロミドロ……。

そして何より、ラージャン。

セツヒトさんをして、ティガレックスよりやばいと言わしめたモンスター。

……。

マジかあ……。

だが……やる前から怖気付いてもしようがない。

というわけで、強くなるためにも。

昨日からトレーニングを再開した。

そして今朝は村……町の外周ランニングも再開。

ワサドラはもう町でいいだろ……。

ランニング後は汗を流し、朝食。

ドールの作ってくれたご飯を、ありがたく頂いた。

「どう？今日はパンにして見たけど。」

「……これ、自家製。パンか？」

「う、うん。頑張っちゃった。」

「うめえ……うめえよ……。」

「そ、そうかな……。」

パン食も絶品。

もう俺は、ドールの飯から離れられない。

その後、ギルドへ。

とはいっても、クエストを受注するわけでは無い。

シヨウコはまだ、フェニクスさん達との契約中。

寝泊まりは同じ部屋だが、今朝も早くから出かけていった。

今日が最後の契約の日。忙しいのかな。

シヨウコと狩りを行うと決めた以上、俺一人でクエストには行けない。

今できることは、専ら情報収集である。

(ディノバルドは……無いか。リオレウスは、あるな……。アンジャナフ……ある。ジ
ンオウガ……無いな……。オロミドロ……めっちゃある……。何で!?)

件のモンスター達のクエストを探してみる。

クエストボードの前には、今日も今日とて数々のハンターが群がっていた。

何とか後ろからボードを観察……こういう時は、目が良くて良かったと思う。

様々なモンスターのクエストがある中で、ジンオウガとディノバルドは無かった。

珍しいのだろうか。

そして最も警戒すべきラージャン。

ヤツの名もない。

(……まさか、ボードには貼り付けられないレベル、つてこと……か?)

上位ハンター向けのボードをいくら探しても、ラージヤンの名は無かった。

……あまり強すぎるモンスターはボードには貼られず、ギルドからの紹介でのみ受付されると聞いたけど……。

それか?

受付の方に目をやる。

ハイビスさんは……いない。ヒナタさんも、見当たらない。

二人とも休みだろうか。

……まあこの際誰でもいいか。

「あの一。」

「はい、どうされました?」

ギルドの受付にいた若い男性に声をかける。

ハイビスさんより若いだろうか。こっちの俺と似たような年頃だろう。

黒い短髪にメガネをかけた、イケメンさんである。

俳優さんみたい。知的。

「モンスターのクエストの事で、少し質問が。」

「あ……申し訳ありません。そういった質問は順番にお並びいただいております……よろしいですか？」

「は、はい。すみません。並びますね。」

「ありがとうございます。」

お兄さんの横を見ると、結構な列ができていた。

見落とした。すみません。

横入りしようとしたわけではないですよ……。

最後に並ぶ。

……しかしまあ、女性ばかりの列である。

イケメンさんにもなると、こうなるのか。

あっちの受付嬢の方は男ばかりだし。

……んー、分かりやすい。

まあいいや、とりあえず待って、大人しくしとこう。

気のせいかな、列に並ぶ女性方にジロジロ見られている気がするし。

……………。

「次の方、どうぞ。」

「あ、はい。よろしくおねがいします。」

ようやく呼ばれ、知的イケメンのお兄さんの前に座る。

にこやかで爽やか。こらモテるわ。

「はい、よろしくおねがいします。並び直していただいて、ありがとうございますソウジさん。今日のご用向は？」

「え、えーつとですね。」

名前を覚えられていたのか。

「とあるモンスターのクエストを探してしまして。」

「なるほど。クエストの確認ですね。……失礼ながら、HR7の内容まで参照するのに少しお時間をいただきますが、よろしいですか。」

「はい。」

「討伐対象のモンスターは？」

「ラージャンと、ジンオウガ、デインバルドです。その3体のやつが、あるかどうか。」「……………か、かしこまりました。」

爽やかスマイルが引きつったものに変わる。

……………変なことを聞いただろうか。

「少々お待ち下さい…………。」

「はい。」

知的イケメン君は、言うなり受付の奥へ。

……何やら上司と思しき人に相談している。

こちらをチラチラと見ながら、何か話をしているが……何だろう。気にかけていないフリをして、堂々としていよう。

……あ、帰ってきた。

「お待ちせしました。」

「いえ。」

何かの書類を手に、こちらに戻ってきた知的イケメン君。

すると、眉を顰めながら話を始め出した。

「……3体ともに、ごさいます。」

「おつ、そうですか。」

「はい……上位ランク、その中でも認められた方しかご紹介はできかねますが、ソウジさんは大丈夫です。……ち、ちなみになんですが、今日は受注をされていきますか？」

「あ、いえ。確認だけです。準備を整え次第、また来ますので。」

「あ……わかりました。では、そのように。」

「は、はい……。」

イケメン君の顔が、どこかホツとしたような顔になる。

……受注すると、あまり良くないことでもあるんだろうな。

「では、内容のみお伝えします。」

「はい、よろしくお願いします。」

知的イケメン君が数枚の用紙を提示してきた。

どれどれ……。

【クエスト名】 火山に潜む斬竜

【目的地】 火山地帯 採掘場近辺

【時間】 なるべく早く

【ターゲット】 デイノバルド一体の狩猟

【報酬金】 95,500z

【依頼主】

採掘場管理責任者

採掘場管理組合 組合員一同

【依頼文】

採掘場を荒らしまわる斬竜が現れました。傷あり、強個体の可能性あり。即座に討伐をお願いしたいです。

※高難易度、紹介はHR6以上推奨※

【クエスト名】雷鳴絶歌

【目的地】ワサドラ北東部丘陵地帯

【時間】無制限

【ターゲット】ジンオウガ一体の狩猟

【報酬金】100,500z

【依頼主】ワサドラギルド本部

【依頼文】

ジンオウガ一体、北東部丘陵地帯にて発見。

咆哮により、家畜放牧が困難な状況。

至急、対応されたし。

※高難易度、紹介はH R 6以上推奨※

【クエスト名】 暴れん坊を捕まえて

【目的地】 南部森林地帯

【時間】 無制限

【ターゲット】 ラージャン一体の捕獲

【報酬金】 24,2000z

【依頼主】 南部農家主 キタバの娘 イパス

【依頼文】

初めて見るモンスターです。父も長く農家をしているが、見たことがないと言っておりました。

腕利きのハンターさんをお願いします。

※現状被害なし。要生態等確認。捕獲推奨。 ワサドラギルド観測班主任

※ザキミーユ本部との重複の可能性あり。要確認。 ワサドラギルド本部長シガイ

ア

※※※高難易度、H R 7以上推奨※※※

デインバルド、ジンオウガ、ラージャン。いずれも、クエストボードには無かったが……言ってみるものである。

そりやあそこに無いわけだ、推奨HRが高い。

ラージャンに至っては、HR7以上ときたもんだ。

おっそろしい……。

しかし、クエスト……というか、モンスターの出現自体は確認されているということが分かった。

安心。

同時に不安。

こいつらを……俺は無事に狩れるのだろうか……。

「あ、あのー……。」

「あ、すみません。見すぎましたね。どうぞ、お返しします。」

「あ、いえいえ、それは差し上げます……ソウジさん、で……お間違い無いですよね。」

「は、はい。そうですか……。」

紙と睨めっこして難しい顔をしていたら、イケメン君に声をかけられた。

何だ？

「……不躰で申し訳ないのですが、ソウジさんの活躍は、伺っております。」

「は、はあ。」

「ハンターになられてから短期間での成長っぷり。男として、とてもかっこいいと思っております。」

「あ、ありがとうございます。」

「ぜひ頑張ってくださいね……応援してます！」

キラッ。

擬音が付きそうな、爽やかすぎる笑顔で挨拶された。

うーん、イケメンさんにそんなことを言われるとは。

存外嬉しいものである。

「また、お越し下さい。」

「はい、ありがとうございます。」

挨拶をして、席を去った。

* * * * *

「ご主人様、そのクエスト、受けるんですよね。」

「ああ。そのつもりだが。」

「じゃあ狙いはまず……。」

「当然、デイノバルドだな。」

ギルドから宿に帰ってしばらく。

ダラダラしていたらシヨウコが帰ってきたので、夕飯を食いにイシザキ亭に出かけた。

シヨウコは無事、フェニクさんとの契約を満了。

その報告を受け、明後日から遂に俺たちの通常営業を始めることにした。

明日も休みにしたのは、シヨウコが疲れているだろうと思ったから。

本人は明日からやる気満々だったが、トツバ不在のクエストを二人でこなし、疲労もあるだろうと思ったのだ。

無理はいけないよ、無理は。

「ご主人様に言われたく無いです。」と厳しいお言葉を頂いたが、
ディスプレイコミュニケーション。

「その……正直に言いますね。」

「ああ、何だ？」

「不安です。」

シヨウコがらしからぬことを言う。

先程まで「明日からまたがんばりましょう！」と意気込んでいたというのに。

「……まあ、気持ちにはわかる。一度ボコボコにやられた相手だしな。」

「はい……。」

「……だが、クエストの内容。これを見てほしい。」

「……緊急性は、高そうですね。」

「だろ？採掘場が使えないとなると、そこで働く人たちやその家族、周囲の人達の営みが
回らなくなるということだ。」

「……。」

「何とかしてあげたい。」

これは一応本音である。

ハンターは、人間の生活を守る存在だから。

「……………まあ、リベンジしたいという気持ちも、もちろんある。」

「……………それが本音ですか？」

「どちらも本音だぞ。嘘じゃない。」

「……………ふふ、ご主人様らしい答えですね。」

「そうか？」

思えばゆっくりリショウコと二人で過ごすのも久々だ。

俺は右手に持つビールをゆっくりとおおった。

……………んまい。

イシザキ亭は、今日も満員御礼。

カウンター席に何とか腰を据えられたが、ここも空いてなければどこかのテイクアウトを買う予定だった。

幸運である。

「ソウジさん！おまたせー！はい、リノプロスのステーキと……サービスの春野菜のサラダだよ！」

「わ、ありがとうございます、ケイさん。」

「わー！ウチこれめっちゃ好きなんです！」

「シヨウコちゃんが喜ぶからって、兄貴が作ったんだよ！遠慮なく食べてね！」

「はい！」

「ありがとうございます。」

既に常連中の常連の俺達。

ケイさんがサービスと、大盛りのサラダボウルを持ってきてくれた。ありがたい。

どうしても野菜って不足しがちなあ。

そして今日もケイさんはナイスバディ。

バルルンと、音を立てて揺れる。

重ね重ね、ありがとうございます。

「ご主人様！はよ食べましょ！」

「あ、ああ。食べようか。」

「どうかしました？」

「いや、すまん。あまりの大ききにな。」

「大きいですよー、このサラダ。ウチ草食やから、助かるわー！いただきます！」

……………そつちの大ききではないんだけどな！

……………はい、オヤジは自重します。

……………。

食べ進みながら、話は先程の話題へ。

「モグモグ……………受注すること自体は、別に問題ないです。……………ウチも、強くなつたんですよ？まあご主人様には……………遠く及ばんかも知れませんが。」

「いや、楽しみにしているよ。セルレギオス戦のシヨウコの動きは、かなり良かったし

な。」

「ホンマですか!?!……いやあ、嬉しいわあ……。」

フオークを更に突き立ててクルクルするシヨウコ。

褒めるとすぐに照れるので、分かりやすい。

この辺の性格は、とても可愛いと思う。

厳しい時は厳しいけど……それはそれで助かる。

「……………」ご主人様が無理せんように、ウチがブレーキになりますからね!」

「ああ、頼む。シヨウコがオトモだと、どうしても安心してしまうんだ。」

「そ、そんなこと言うて……だ、騙されませんよ!」

いや、超本音なんだが。

暴走する俺を止めてくれる存在。

これは大きい。

「頼りにしてるぞ、シヨウコ。」

「はいっ！」

シヨウコは少食ながら、サラダと肉をもぐもぐと食べ進めている。

俺もつまみながら、ビールをゴクゴク。

ああ……たまりませんなあ。

「ソウジ君！久しぶりだな!!」

Bannon!!

「ブフォ!!!」

「おや！すまない！驚かせてしまったな！」

「ゴホツ!!ゴホツ!!……きよ、教官!!?」

「ハツハツハツハツ!!今のを避けられないとは、腕が落ちたか？ソウジ君！」

「避けようが無いわ！てか飲んでる時に思いつき背中を叩くとかありえまんって

!!」

「うむ！すまない！」

「……………」

「以上だ！」

「謝って終わりなんですわね……………」

叩かれた瞬間、誰だか分かった。

こんな非常識なことを、悪気も何もなくする存在を、俺は一人しか知らない。

マシヨルク教官、登場。

* * * * *

教官の登場に驚かされてしばらく。

俺とシヨウコは、席を変えて教官と飲むことにした。

運良く後ろのテーブルが空いたところに、ケイさんが気を利かせてくれた。

「マシヨルクさんは、何飲まれますか？」

「何!?これはこれは、気が利くアイルーさんだ!シヨウコ君……………だったかな!ビールを

頼む！」

「はい！」

「シヨウコ、ありがとう。……教官、本当にお久しぶりです。」

教官と飲むのは、いつ以来だったか。

久しぶり過ぎて忘れてしまったぞ。

「さてソウジ君！積もりに積もった話がいくつもあるぞ！」

「俺もです、教官。とりあえず……ワサドラに無事に戻れました。」

「うむ！色々と噂は聞いているぞ！シヨウコ君も、ディノバルドの時以来かな！元気にしていたようで何より！」

「あ、ありがとうございます。」

元気だなあ。

そうそう、こういう人だった。

「さて……。」

ゴクゴク。

ドン。

ビールをグツとあおって、飲み干す教官。

早いな！

「……ソウジ君！ティガレックスの討伐をしたそうじゃないか！恐ろしいまでの成長速度だ！感服したぞ！」

「あ、ありがとうございます。」

「それに、HRも上位トップにたどり着いたと聞いた！素晴らしい！」

「あはは……いやあ。」

「照れるところではないぞ！むしろ誇ってほしい！弟子がここまで成長したのだ！……
「こんなに嬉しいことはない！」

ゴクゴク。

ドン！

追加のビールをまたもや飲み干すと、教官は心底嬉しそうに笑った。

……何だろうなあ……やっぱりの人に褒められるのが、一番嬉しい……。俺の下地を作ってくれた、恩人だから。

「……………ご主人様、めっちゃ嬉しそうです。」

「そ、そうか？……シヨウコの前で恥ずかしい……。」

「ハツハツハツハツ！」

何だか急に温かい雰囲気になってしまった。

……まあこれ以上飲んだら、教官は下ネタゲス野郎に成り下がってしまう。こんな雰囲気も、確かに今しかないだろう。

「次の目標は……やはりデイノバルドかな！」

「あ、そうなんです。そこを今シヨウコと話していて。」

「ティガレックスを屠れるなら、問題はあるまい！油断だけはしないように！いいな！」
「さ、サーイエツサー!!」

おおう。

脊髄反射してしまった。

シヨウコも俺のいきなりの大声にビックリしている。

「話は聞いてましたが……マシオルクさんの鍛え方は凄いですねえ……。」

「シヨウコ君もぜひ訓練所に来るといい！鍛えてやろう！」

「う……でもご主人様のためなら……！」

「い、行くな！シヨウコ！キツイってもんじゃないぞ！」

そこからは俺の訓練時代の話やシヨウコの狩りの話になった。

教官の飲むペースは早い、まだ下ネタ変身はしていない。

少しは大人になったんだろうか。

いや、いい大人なんだけど。

……。

夜も更け、イシザキ亭で飲むのはお開きにした。

シヨウコは「お二人で積もる話もありますよね！」と、気を利かせてくれた。

……教官の飲み癖の悪さは俺から聞いていたので、逃げた可能性もある。

……とりあえず、店を変えることにしよう。

だが、その前に。

確認したいことが、一つ。

「……………教官。」

「おーどうした!」

「一つ、聞きたいことがあります。」

意を決して、聞くことにした。

雰囲気を探してか、酔いながら真顔になる教官。

「……………セツヒトのことかな。」

「……はい。せつちや……セツヒトさんから聞きました。色々。……どうして、教官……教官達は、あの時助けに来られなかったんですか？」

ミヨシ村の壊滅。

シガイアさんたちは、再三再四、首都に救援を求めていた。

教官達がいた、カホ・チータにも。

だが、返事はノー。

……理由が知りたいと、部外者ながら思ったのだ。

「………分かった！丁度いい機会だしな！」

「……え、いいんですか?！」

教えられないなどと言われるかと思ったのに。

「伝えても構わないと思うのだが!………言い訳がましくてな!………セツヒトにも、村の人たちにも顔向けができません!」

「……時効………とは言いませんけど、お二人はすっかり話し合われた方がいいかと思

ます。」

「そ、そうか。……ありがとう、ソウジ君。」

二人が仲が悪いのは、どちらとも懇意にさせてもらっている俺としては、正直あまり見たいものではない。

まあ単純に馬が合わないというのものもあるかもしれないが……アヤ村に滞在している時は、二人仲よかつたんだし。

修復可能なのではと、勝手に思っている。

だがその為には、不明になっている事を紐解いて、腹を割って話す必要があるだろう。

……………。

あまり人に聴かれたくない話だと教官が言うので、俺たちは近くのバーに入ることにした。

静かな雰囲気。

込み入った話をするにはもってこいの場所だ。

教官は、珍しく度数の高い蒸留酒をロックで頼んだ。

よく分かんので、俺も同じものを頼むことにした。

「あの時の話を人にするのは、初めてだな……。」

いつもの元氣は鳴りを潜め、教官がゆっくりと語り出した。

「どこから話せばよいか……首都にやって来たのは、リオ夫婦、その亜種。……ひどい物だった。どういうわけか、民衆が寝静まった夜に襲来。上空から炎を撒き散らして帰っていく。被害も甚大だった。……首都の民衆は恐怖の底に叩き落とされた。パニックを起こした暴徒が街を破壊。混乱の極みだった。」

「……………」

「まるで首都を破壊するためだけに現れたモンスターとしか思えなかった。それを治められるのは、私たちしかいなかった……。信じられないかもしれないが、あの首都のギルドでさえ逼迫するほど、周囲のモンスター出現状況は、おかしかった。」

「……セツヒトさんのところも、異常だったと聞きました。」

「ああ……。後でわかったことだが、似たようなことが各地で起こっていたらしい。

……あの天変地異とも言うべき事態に、私たちは不眠不休で解決に当たった。……タオ

カカから救援要請が来た時、既にザキミーユには人手が無かった。……あれだけ戦力をかき集めていたのに、だ。」

「……………」

セツヒトさんも、G級の昇格の際、首都に招聘されたという。
蹴つたらしいけど。

「……後々、文献で色々調べたが……セツヒトの方も中々のモンスターの量であつたらしいな……あいつはアレを、一人で倒して回つたのだと思うと……正直敬意しか湧かない。」

「……ザキミーユの方は、モンスターの量は……？」

「約5倍だ。」

「(ぎ)……………!?!」

「……それだけ、ザキミーユギルドがカバーする範囲は広いのだ……既に周囲の村や町に向かったものも合わせれば、5倍ではきかんだろう。……あの時は完全に異常だったのだ。」

恐ろしい数である。

……教官達は、それでもなお……。

「リオ夫婦に、ついに大ダメージを喰らわせることができた、その時。タオカカギルドから一報が入った。獄狼竜、襲来とな。」

「セツヒトさんが、見つけた時のこと……。」

「私は、ギルドの静止を振り切って走った。ファンゴより速く行く自信はあったからな。」

「……めっちゃ行動力高いです……。」

「まあな。……必死だったのだ。だがまあ、着いた時には遅かった。ミヨシ村は壊滅、アヤ村にも甚大な被害が出た。……セツヒトの方に顔を出したのも、その時だった。」

「……。」

「……そこであつたことは……セツヒトから聴いているだろう？……再三にわたって救援を無視し続けたザキミーユギルドにも責任はあると思うが……はつきり言つて、あの時は首都はその機能を果たすことなどできなかつただろう。……そして、また踵を返して戻った時には、既にハスガ達がリオ夫婦亜種に引導を渡していた。」

「……教官は、リオレウス達を倒す前にこちらに来たんですね。」

「ああ。だが、それは言い訳にしかならん。結局どちらにも間に合わなかった、中途半端で馬鹿な男だ。」

セツヒトさん……教官はやっぱり、動いてくれていましたよ。

動き出すのが遅すぎたのも、理由がありました。

……あのスタンピードは、どうやらかなりの規模で起こっていたようです。

……シガイアさんは、事情を知っていただけ……ああ、事情を知っているからこそ、そこまでマシヨルク教官に恨みつらみは感じていないということかな。

シガイアさんの教官への対応も普通だったし。

セツヒトさんは、故郷やその隣村を守りきれなかった悔しさと恨みが、そのまま教官達に向いた形だ。

……どちらも、仕方がないといえば仕方の無いこと。

納得できるかは、全く別の話。

うーん……。

「……ソウジ君。私は、あの時の一連の流れに、どこか違和感しか感じられなかった。」

「違和感、ですか。」

「はかったような大型モンスターの大発生、生態系の大変動、リオ亜種が首都に夜間のみやって来るといっておかしさ、そして観測などされたこともない超強力個体の獄狼竜の発生……それらを同時に起こす、何かがあつたと思つている。」

「……それは……確かに。恣意性を感じてしまいます。」

「……優良なハンターの育成は急務。私がここにやってきたのは、ソウジ君のようなハンターをたくさん育て上げるためだ……カホ・チータも、終わってしまったしな……。」

カラン。

グラスが、音を立てる。

「……今日の所は、ここまでにしよう。死んだ者の話など、これからを生きるソウジ君の為にはならんだろうしな！」

教官が組んでいたパーティーチーム。

カホ・チータ。

二人のメンバーが亡くなり、結果解散を余儀なくされた、とは聞いたが。

……この辺の話は、また今度にしよう。

今回、ミヨシ村壊滅の事情の裏をたくさん聞くことができた。

……今日はそれでいい。

「……ソウジ君！今日は飲むぞ！」

「いや、既に飲んでますって！」

「何を言う！明日は休みなのだろう！師匠に付き合うのもまた、弟子の仕事だぞ!!」

「普通にパワハラ!!」

「私もそろそろ下ネタを言いたい！」

「自覚してんのかよ！」

そこから教官は一転、下ネタおじさんにジョブチェンジ。

店にいた女性たちにナンパさながらの相席を始め、さらにヒートアップ。

……さつきまでの真剣な雰囲気は完全に消え去ってしまった。

まあ、いいか。

とりあえず、今の話で教官が嘘をついているとは思えなかった。

……すれ違いでセツヒトさんと教官が仲違いしているのであれば、何とかしたい。

だが、この飲み癖の悪さは……おそらくマイナスポイントだろう……。

今日も周囲に謝り倒して終わる、教官との飲み会であった。

1 1 7 慎重に採掘場を進みましょう。

教官との飲み会から2日後。

いよいよシヨウコとクエストに出かける日になった。

昨日は二日酔いを堪えながら、装備とアイテムの点検。

そしてシヨウコと打ち合わせを行った。

寝る部屋も同じ。

一緒に起きて、一緒に朝食を食べることに。

ドールとホエールさんには、デイノバルドを再び相手にすることを伝えてある。

「何の心配もしとらんで。」とは、ホエールさんの談。

若干不安そうなドールも、その言葉で少しだけ笑顔になった。

「ドール、多分大丈夫だ。頑張ってくる。」

「ご主人様はウチを守る！ドールちゃん！安心しいや！」

「……うん。信じて、待ってる。」

ドールが頭を差し出す。

久々の上目遣い。

心を込めて、撫でさせてもらおう。

……ご利益ご利益。

「ソウジさん。何か、失礼なこと、考えてない？」

「考えてませんよ、ドール様。」

「絶対考えてる……。」

だって、俺たちの勝利の女神なのだ。

許して欲しい。

シヨウコもドールの頭を撫でようとしたのだが、「だ、だめ。これは、ソウジさんの専用……。」と言っていた。

俺専用の頭つて、どういうことだ。

宿を出てからは、ギルドへ直行。

今日はランニングをせずに早めにギルドへやってきた。

混むのは嫌だし。

ギルドに到着してすぐ、ハイビスさんを発見。
挨拶をする。

「お、おはようございます、ハイビスさん……。」

「はい、おはようございます、ソウジさん、シヨウコさん。」

「あ、あの、ヒナタさんの体調は……。」

「ヒナタは今日もお休みをとっております。……湯冷めして風邪をひいておりますので。」

「うっ……。」

昨日、ギルドに顔を出したところ、ハイビスさんに怒られてしまった。

理由は、先日銭湯内のベンチでヒナタさんとアイルー談義で盛り上がってしまい、風邪をひかせてしまったからだ。

申し訳ないと言えない。

「もういいんですよ？怒ってませんので。」

プイツ。

擬音付きで横を向くハイビスさん。

ああ、まだ怒ってらっしやる……。

その、同性が見たらイラツとしそうなりアクションは辞めたほうがいいですよ！

「あ、あのー……ハイビスさん、今日はこのデイノバルドの狩猟クエストを受注できれば
と思つて来たんですが……。」

「……拝見します。」

横目でチラリ。

知的イケメン君にもらつたクエスト内容が書かれた紙を手渡す。

流石にハイビスさんも、これには冷静に対応している。

仕事モードのこの人はとても有能だ。

「……承知致しました。すぐに手配します。」

「ありがとうございます。」

「……………ディノバルド、ですね。……………シヨウコちゃん、大丈夫？」

「大丈夫です！……………ちよつと怖いですけど、頑張れます！」

「……………ふふ、正直でいいわね。……………分かりました。ソウジさんも、くれぐれも気を付けて下さいね。ご武運を。」

「はい、ありがとうございます。」

普通に受付終了。

さて、火山地帯へ向かうとしよう。

ようやくリベンジ。

あれから半年以上空いて臨む相手。
全く同じ個体では無いけど。

「よし……………シヨウコ、行こう。」

「はいっ！」

元氣よくガーグア車に乗車。

向かうは火山地帯の一角。

車で大体4、5時間、といったところだろう。

少し不安だが、それぐらいでいい。

慢心はしたくない。

初めて会う御者の方に挨拶をして、俺達は街道を進んでいった。

* * * * *

「ようやく着いたか。」

「あー……ウチ、腰が痛いです……。」

道が悪かった。

道中小型のモンスターに運悪く出くわし、少し時間を食ってしまったが、一応は時間通り。

……大型に襲われるという最悪の事態は免れた。

「クエストの期間……3日はここにおりますので。」

「はい、ありがとうございます。よろしくおねがいします。」

御者のお兄さんは、このままこの採掘場横の宿に滞在するらしい。

火山カクラニ。

ミヨシやアヤ、タオカカなどを含む山岳地帯とは別の火山帯に位置する。

タオカカには無かった、ゴツゴツの岩場や茶色く剥き出しになった地面が見える。

比較的新しい火山なのだろう。山頂からは噴煙が出ていて、周囲も硫黄のような独特の匂いに包まれていた。

「ウチは、フェニクさん達と採掘しに来たとき以来です。」

「ああ、あの時の。」

以前シヨウコからもらったお守り。

シヨウコ達がわざわざ採掘して手に入れてくれたものである。

ここで掘ったのか。

「あの目がおかしかった人たち……おるんですかね……。」

「さてなあ……とりあえず、依頼主に話を聞きに行こう。」

時刻はもう昼前。

早くにワサドラを出たとはいえ、今日町に帰ることは厳しいだろう。

デイノバルドがどこにいるのかも分からんし。

マップに反応もないし。

……どこかポンコツなんだよなあ……このマップ。

採掘場で働く人たちの集落と思しき場所。

小屋が数多く立ち並ぶ。

その中心に、唯一2階建ての石造りの小屋を見えた。

近づくると看板に「採掘場管理本部」と書かれてある。

多分ここだろう。

「入るぞ、シヨウコ。」

「はい。」

コンコン。

ガラガラ。

引き戸になつてゐる入り口を、ノックして開ける。

「い、い、こんにちは……。」

開けた瞬間、すこし驚いてしまった。

身長は低いが、筋肉隆々の男たち数名に、一斉に睨まれたからだ。

「あ、あの。こちらの責任者の方はいらつしやいますでしょうか。」

「……………あそこだ。」

クイツ。

あごで示された先。

新聞を顔に載せ、イビキをかいて寝ている御仁が一人。
あの人が……一番偉い人？

「あ……ありがとうございます。」

「……………」

ぶっきらぼうな態度。

……………怖っ!!

止まっても仕方がないので、一路その責任者の元へ。

「ご主人様……起こしますか？」

「……………起こさないと何もできないしなあ……。あ、あの……………」

「……………んっ?……………んん?!」

顔の上に載った新聞を手を取ったその人は、眠そうな目で俺を睨んできた。

……………いや、眠いから目つきが悪いだけか？

……………わからん。

ただ、機嫌がいいとはとても言えないような顔。

「……おめえらは……。」

「こ、こんにちは。ワサドラギルドより参りました、ソウジと申します。」

「お……おー！そうかそうか！いやあすまねえな！気づくのが遅くつてよ！……お
い！茶あ出してくれ!!」

「へいっ！」

部下の様な人に命令するおじさん。

「あ、お構いなく。話を聞きに来ただけですの。」

「何だ、やけに腰が低いじゃねえか。……ハンターってのはもつとふてぶてしい奴が来
ると思っていたがよ！」

「い、いえいえ。依頼主にそういう態度では、仕事をする上で良くないでしょう？」

「…………おめえ、本当にハンターか？」

「え、ええ。一応は。」

「ほーん……まあいい！よく来てくれた！……採掘に来ているハンターたちが、裸足で

逃げ出すようなモンスターが現れちゃってよ……おかげでこっちも仕事がばったりよ。何とか、討伐を頼む！……ああ、遅れたな。俺はノジリ。この責任者だ。」

「よろしくおねがいます。改めて、ワサドラギルドのハンター、ソウジと言います。こっちは……。」

「オトモアイルーのシヨウコです！よろしくおねがいます！」

「おう、シヨウコか！元気がいいな！」

立派なヒゲに身長は低い。

頭にタオルを巻いて、クリームパンみたいな手でシヨウコの頭をワシワシしている。

「にや、ニヤアアア!!」

「よろしくな！ちっこいの！」

丸太のような腕とグローブのような手。

力仕事を常とする男、って感じ。

身長は俺よりは低いけど、体格がいい。

そんな人に頭をグリグリされて、シヨウコは驚きの声を上げていた。

「早速なんですけど、モンスターに着いてお話を聞いてもよろしいですか？」

「おうわかった！……これが地図だ。俺の部下が見つけたのは大体この辺だな。」

壁に張り出された採掘場の全体図。

その上の方に目一杯手を伸ばして、指を差すノジリさん。

なるほど……。

……いや、分かん。

まあその辺……採掘場の奥地に現れたってことなんだろう。

「ありがとうございます。早速、行ってみます。」

「おう、もう地図を覚えたのか？さすがハンターだな。」

迷路のように……とまではいかないが、入り組んだ坑道。

だがまあギフトを使えば問題はない。

問題はないが……。

「確かにそうですね。地図を一つ、頂いてもよろしいですか？」

「おう、構わねえ。ちゃんと返してくれば大丈夫だ。」

「ありがとうございます。」

道がわからないという体でなければいけない。

変に疑いをかけられないようにしないと。

「それでは、行ってきます。」

「お、おう！気を付けてな！」

どこか不安そうな顔。

まあ多分、俺の腕を疑う……とまではいかににしても、大丈夫か心配してくれていてるんだろう。

デイノバルドに敵うかどうかは分からないが、不安にもさせたくない。

「ご主人様は強いです！ノジリさん、大船に乗ったつもりでおってくださいね！」

「嬢ちゃんがそこまで言うのか！そりやありがてえや！」

シヨウコ、ナイスフォロー。

笑い合う二人を横目に、こつそりマップを起動してみる。

……………反応はなし。だが多分どこかにやつは潜んでいる。

奇襲が大好きなモンスターだ。

慎重にこう。

* * * * *

「ふわぁ……………暑いですねぇ……………」

「クーラードリンクを飲んでこれか……………体力の管理は気をつけないとな。」

採掘場に入ると、熱気がムワツと俺たちを包んだ。

自然にできた洞窟では無い。人の手で掘り進めた穴。

入り口は木枠で覆われて四角い形、人工で造られたことがよく分かる。

木枠の横には、工事現場でよく見るような安全標語がたくさん貼られていた。

「安全第一」……………「足元確認」……………「クーラー5つ、命は一つ。クーラードリンクは必ず

携帯しましょう。」……前世の工事現場さながらである。

「ご主人様、ここから先、狭くなりますけど……しばらく行くと急に開けてくるんです。」

「ああ、マップでもそれは確認できるが……。」

「今歩いてる道は、人工の道です。でも、ここを抜けると……ほら。」

「おお……。」

シヨウコの先導の元穴を進んでいくと、突如開けた場所に出た。

「()は……。」

「ここから火山の一带は、空洞になってるんです。ウチらも、そういつた場所で採掘をしてました。」

「なるほど、そういうことか。」

溶岩や水流で自然にできた洞穴が既に存在し、それを外から繋げて、半天然の採掘場にしていくわけか。

周囲には、明らかに自然にできたであろうゴツゴツの岩や、鍾乳石のような尖った形

の岩が見えた。

足元には、予想していたような採掘場とは違い、水が流れていた。

「これ、よう滑るんです……気をつけてくださいね。」

「ああ。狩猟中に滑りましたとか、洒落にもならん。」

ちよつとした学校の体育館くらいに広い場所。

マップを見れば、そんな場所がいくつも存在している。

蟻の巣みたいだ。

シヨウコがある道の前で止まるった。

「この先は、ウチらも行かんようにと念押しされた、溶岩洞があるそうです。」

「ああ……確かハイビスさんから、HR7になったら立ち入りの許可がもらえると聞いたけど。」

「クエストがスムーズに受けられたのも、それが理由でしょうね。ウチらの時なんて、

『絶対行くなよ！いいか！絶対だぞ！』ってめっちゃ念押しされましたよ。」

「それは逆効果じゃないのか……。」

強力な個体が潜んでいるのだろうか。

マツプには、何も反応がないけど。

「そろそろ警戒しておこう。……ヤツはいきなり来るぞ。」

「はい……気を付けましょう。」

一層気を引き締めて、歩き進むことにした。

一路、溶岩洞とは反対の、目撃情報があった奥地へ向かう。

途中地中から突如現れた小型のモンスターに驚かされるハプニングもあった。

口から真つ赤な液体を出してきて、めっちゃ熱かった。

溶岩……だよなあれ。体どうなってるんだ……。

「ウロコトル、と言うモンスターみたいだな……。」

「トカゲみたいなやつでしたね。」

そこまで強くなかったので、余裕を持って倒せた。

地面にも気をつけていこう。

* * * * *

「もうすぐ目撃地点だ。」

「完全に火山の目の前ですね……。」

目の前には、ついこの前まで溶岩でしたよと言わんばかりに熱を帯びた地面が、ドス黒く広がっている。

踏むと異様に熱かったため、すぐにどいた。

この上でモンスターと戦ったら、かなり危険だな……。

雪山でも思ったが、フィールドの特性を掴むことは大切。

暑さ寒さもそうだし、こうした地面の状況もしっかりと把握しておかなければ。

ティガレックス戦では、思わず雪に足を滑らせ、攻撃を食らってしまった。

用心用心。

「……………ん……………？」

足元が震えている。

……………くるな。

「ショウゴ。」

「は、はい！」

「下だ。」

「えっ。」

ボゴオ！

地面から出てくるウロコトルを警戒していたからか、早く気づけた。
地面から出てくるな、と。

ボゴツ！ドガツ！

地面から這い出してくる何か。

ウロコトルの比ではない大きさ。

間違いなく、大型モンスター。

ドゴツ……。

ズン………。

全身を使って地面から出てきたそれは、俺たちを視認するや否や、睨みつけてきた。足元にあつた瓦礫をもともせず、一蹴りしてどかしてもなお俺たちを目から離さない。

「……………グルルルルル……………。」

「あんまり睨まないでくれ。顔怖いわ。」

「ご、ご主人様……………よく分かりましたね……………ウチ、全然気づけませんでした。」

「足元が震えた気がしてな。それより……………来るぞ。」

半年前、俺達はこいつと対峙した。

俺は、負けた。

それはもう、コテンパンに。

……………リベンジを誓っていた存在が、また、俺達の前に現れた。

「今回は奇襲じゃ無いんだな……………あの時とはまあ、違うやつなんだけど。……………今日は負けない。」

「グルルルルル……………」

「……………来いっ！」

「……………ギヤアアアアアアアアア!!!」

物凄い咆哮が辺りに響き。

「シヨウコ！」

「はいっ！」

戦闘の態勢に。

地面から出てきた相手は、斬竜テイノバルド。

2422 117 慎重に採掘場を進みましょう。

戦いが始まった。

118リベンジを果たしましょう。

デインバルドが地中から現れた。

マツプにもようやく反応が現れる。

もうちよつと精度なんとかならないのかとか、思わなくもない。

贅沢は禁物だな。

普通は無いんだし、コレ。

「ショウコー！」

「はいっ！」

左右に分かれる。

斬竜デインバルドは、その苛烈な攻撃が特徴。

足場も悪いこの状況、まずはスピードに慣らさせてもらう。

「ギヤアツ!!」

「ぬおっ……と！」

ガキン！

牙と牙がかちあい、生き物のそれとは思えないほどの甲高い音が響く。

噛みつき攻撃。

……食らったら致命傷は免れないな。

余裕をもって避けていこう。

「予備動作は分かりやすいぞ！そのまま態勢保持で！」

「はい！」

「ほらっ！こっちだ！」

ジャキン！

双剣を構える。

だが、これは気を引くためのパフォーマンス。

まずは見に徹する。

「グルルル……ギャア！」

ダン！

（上っ！）

「ふっ！」

ズドオン！

浅く跳躍したディノバルドがその身を翻し、尻尾を俺に叩きつける。
回避。

（もう一回！）

「ギャアア!!」

ズドオン!!

体を半回転させ、もう一発振り下ろしの尻尾攻撃。
このパターンは、経験している。

(左に2歩……。)

尻尾を振り下ろす連続攻撃。

個体としては前回より大きいだろうか。

だが、間合いは掴めた。

「2連尻尾は間合い2歩横!」

「はいっ!」

情報の共有。

まあショウコなら軽く避けられるだろうけど。

「グウウ……。」

攻撃を読まれたと知ってか知らずか、恐ろしい顔つきで唸るデイノバルド。
いや、元から怖いんだけど。

「ギャア!!」

ガギン!

ギリギリギリギリ………!!

デイノバルドが自分の尻尾に噛みつく。

あの牙で噛んだら、普通はただでは済まない。

だがヤツの尻尾は特別製。

まるで炉に入れた鉄の様に、その尻尾は赤みを帯び始めた。

「(づ)主人様!」

「いや、攻撃じゃない！……自分の武器を、強化してるんだ。」

「言うてましたけど……嘸んで……強化……？」

「……意味分かんないよなあ。」

いや、意味はわかるんだけど。

そのとんでももつぷりに、シヨウコが引いている。

ギイン！

「……グアアアアアア……。」

牙から解放された尻尾は、赤黒く光る。

口に見える赤い炎。

態勢を整えたようだ。

「もつと攻撃が苛烈になるぞ。」

「うわあ……怖いわあ……。」

「逃げ出すか？」

「いえ、ご主人様おりますし……頑張れそうです。」

「なら良かった。」

気負いの無い返事。

いい感じだ。

あの時とは違う。

今は二人。

この世で最も頼りになる相方がいる。
十分だ。

「……………いくぞー！」

「はいっ！」

気合を入れる。

その瞬間、デインバルドが叫ぶモーションを入れた。

少しだけ上体を逸らす、その動きを。

(見切るっ！)

「ギアアアアアアアアア!!!」

吠えた瞬間。

俺は回った。

キャンセルの効かない、回避行動。

そこに斬撃を加える。

その開いた口に、俺は突っ込んだ。

「ふっ!!」

ザシュ! ザザザザザ!

ザザン!

「ギアア!」

咆哮を上げるその間に反撃を食らうとは思わなかったのだろう。

よろめくディノバルド。

だが、攻撃の手は止めない。

「シヨウコは背後！尻尾を最警戒！」

「はいっ！」

素早くディノバルドの背後に回ったシヨウコは、早速後ろ脚を切り裂き始める。

一撃は弱いが、確実に効いてくるその攻撃。

だがそれを意に介さず、ディノバルドは俺を睨みつけて離さない。

（ダメージ量的に、俺を最も警戒すべきと悟ったか。）

大型モンスターとはいえど、複数の相手を器用にこなすほどの頭はない。

ならば、どうするか。

一番強力なヤツを狙う。

これが基本だ。

事実、ディノバルドは俺を見据え、攻撃を繰り返そうとしている。

(なら……。)

スツ。

動き出す俺。

狙うは首元、本来なら双剣には届かない場所。

だが、取っ掛かりがあれば、俺には十分。

「おらあー！」

ダン！

跳躍して、足の付根に斬りかかる。

そのまま後ろ向きに回転して、更に上部を狙う。

ザシュ！ザザザン！！

「グアア！」

空中回転乱舞。

もはや慣れ親しんだ、俺の一番大きなダメージソース。
デインバルドも負けじと、俺が着地したスキを狙ってくる。

（噛みつきっ！）

ガギイ！

双剣で牙を受け止める。

……そのままに力を利用する。

（回避攻撃……！）

「ふっ………！」

軽く息を吐き出して脱力。

高速で回る周囲の景色。

双剣を逸らし、ディノバルドの頭を……。

(斬るッ!!)

ザン!!ザザザザン!!

「グラアアアアアアアア！」

「わっ！」

グラつくディノバルドの足に、シヨウコが驚く。

タッ。

俺はようやく地に足をつけ、シヨウコを見やる。

「シヨウコ！大丈夫か!？」

「平気です！ウチ、まるで相手にされとりません！このままいきましよう！」

「よしっ！」

たじろいだディノバルドだったが、すぐに足に力を込め、再び尻尾を俺に振り下ろしてくる。

「くっ………!」

何度も連続して回避攻撃は繰り出せない。

集中力は続くが、流石にスタミナがもたない。

ズドオン！

「ぐ主人様!」

「大丈夫だ！」

だが、避けるだけならいける。

俺は左側に倒れ込むように体を傾け、すんでのところで回避した。

(2連は……ないか。)

デインバルドも、俺を警戒してかその苛烈さは少し無くなった。

忌々しそうに俺を見つめる。

だが、関係ない。

体がまだ温まっていない今こそ、攻撃を叩き込むチャンス。

「次っ！」

「はい！」

斬撃を続けるショウゴ。

尻尾での後ろへの攻撃も、難なく避けている。

上手くなつたなあ……。
感心してばかりいられない。
俺も強くなつたんだ。

「ギャア！」

「ふん！」

尻尾を大剣のように操り、俺を何度も狙ってくるディノバルド。
だが、当たらない。

絶対に、避けてやる。

そして、隙を見つけては……。

「うらあ！」

ザシユ！ザザン！！

「よっー！」

ザン！ザシユツ！

何度も何度も、剣を見舞う。

俺の武器は、手数が命。

そつちが攻撃を止めないのなら、こつちだつて同じことをするまでだ。
……………スタミナなら、絶対に！

（負けないっ!!）

ズザザザン！

バキィ！

「グアアアア!!!」

手応えあり。

回転乱舞が、ディノバルトの頭上に連続でクリーンヒットした。そのトゲトゲしたところを、切ってやった。

「グリアアアア……………」

口から赤い吐息を吐き出して怒っているディノバルト。

どういう原理で赤い息を出しているのか、皆目検討もつかない。何度も攻撃を食らわす。

後ろから、前から、その体力を削っていく。

やがて焦れたディノバルトは、「もうお前ら許さん」と言わんばかりに姿勢を低くした。

これ、やばいやつかも。

「ギャアツ!!」

「!!シヨウゴー!」

「はいー!」

瞬間、いきなり尻尾を振り回してきた。
同時にバックステップで後退する俺たち。

「これが厄介なんだよ……。」

「モーションが無いですね……。」

長い尻尾を活かし、周囲一帯を攻撃する技。

正直食らってもそこまでダメージはない。

だが、食らえば大きなスキになる。

「ご主人様。」

「ああ、コイツの薙ぎ払いはこれじゃない。もつとすごいのが………これだ！来るぞっ！」

「……グアウ！」

尻尾を振り回したディノバルドが、再び自分の尻尾に噛みつく。

ギリギリギリギリ………！！

力を溜め、俺を見据えて狙いを定めている。

これだ、この攻撃。

一帯を薙ぎ払う、超高速の尻尾回転攻撃。

地を這うように繰り出されるそれは、強烈無比の一言。

……これを食らって、前回俺は意識が飛びそうになった。

「シヨウウコ！コイツは引き受ける！」

「はいっ！下がります！」

シュツと後ろに飛び退くシヨウウコ。

さすがの判断だな。

そして、俺はというと。

「ふう——……。」

息を吐き出して、極限まで力を抜く。
意識を研ぎ澄ませ。

対応しろ。

モーションとかそういう話ではない。

繰り出される、その刹那。

そこで、力を解放する。

ギリギリギリギリ……！

時間にして4、5秒。

だが、その短い時間が俺にはとてつもなく長く感じる。

………高めろ。

「グア——」

（今っ！）

デイノバルドが尻尾を牙から離す。
その瞬間。

まるでマグナム弾のように突っ込みながら、体をひねる。

「ふっ!!」

「——アアア!!!」

高速で迫る尻尾。

あの時とは違う。

……見える。

ギーン!

俺とデイノバルドの剣がかち合う。

その勢いを利用して……。

(喰らえ。)

ザザザザザザザザザザシユ!!

尻尾を振り回しながら、迫りくる巨体。

コマの中心を狙うかのように。

俺は、回転乱舞を見舞った。

「ギャアアア!!」

食らってもなお、再び尻尾に噛みつくデイノバルド。

(もう一回!!)

「グアアア!!!」

またも薙ぎ払いを繰り返してきた。

2連。

周囲を無差別に滅するその攻撃を。

(いなして！回避攻撃！)

集中力は途切れていない。

スタミナも十分。

迫りくる尻尾に呼応するように、双剣を繰り出した俺は。

「あああああ!!」

ザザザザザザザザザザ!!ザシユ!!!

「ギャアアアアアア！」

デインバルドの、その体躯の中心を、抉った。

トツ。

着地。

「……………はあっ……………はあっ。」

「……………グルルル……………。」

流石に無茶し過ぎた。

息が乱れる。

「すうう……………はああああああ。」

呼吸法で無理矢理息を整える。

デインバルドの方は……………？

「……………。」

ドスン。

ドスンドスンドスン……………。

「……………行つたか……………」

「……………みたいですね……………ご主人様、今の攻撃……………回避攻撃、つてやつですよね？」

「ああセルレギオスの時にもやった、アレだよ。」

「……………デインバルドのあの薙ぎ払いは、とんでも無い速さでした。それにも対応できる
とか……………凄いです、ご主人様。」

「ありがとう。……………何と言うか、集中力を高めるんだ。そしたら見える。何度か見た
技つていうのも大きい……………まあ、弱点はあるんだけどな。」

回避攻撃の弱点。

まずはスタミナの管理。

鬼人化して、身体能力を上げる。

頭もフル回転。

単純に、疲れやすい。

更に、術後のスキが大きい。

すべての技に言えることだが、攻撃終わりにスタミナが切れたらシヤレにならない。

防がれてしまったら、手痛い反撃を食らう。

ここに気を付けなければいけないと、事前にシヨウコには伝えている。

逆に言えば、シヨウコがいるというある意味での保証があるからこそ、あそこまで攻撃できる。

ここは大きい。

「……シヨウコのおかげだ。」

「ウチ、何にもしとりませんけどね。」

「何を言う。アイツ、足にかなりのダメージが来てたぞ？十分に削れていたじゃないか。」

「そ、そうですか？」

「ああ、動きが明らかに緩慢になっていったぞ。嘘じゃない。」

「う、嬉しいです……。」

シヨウコも確実にレベルアップしている。

避け方も間合いのとり方も、めっちゃ上手かった。

この半年は、無駄じゃなかった。

「武器の方は、大丈夫か？」

「平気です。ご主人様の双剣みたいにシビアな管理が必要なのがお楽しみです。……ご主人様のは、研いだほうがいいですね。」

「だな……セツヒトさんにも相談したけど、武器の強化……というか、斬れ味を良くするのは、急務だな。」

「……ご主人様も、口で囁んで強くしてみたらええやないですか？」
「アホか。」

いきなりボケをかまされる。

……余裕があるな。いい証拠だ。

「……………整えたら、いこう。できたら日が暮れるまでに倒したい。」
「はいっ！いきましよう！」

そこから、武器の研ぎ直しと一応怪我や装備の点検を行った。

……問題なし。体調も万全。

あの時は、ヤツは引き下がらなかつた。

だが、今日は後退した。

俺たちを脅威と感じたのだ。

……強く、なつたな。

うん。実感した。

「よし、行きましょう！」

「……ああ！」

ディノバルドが逃げた方向に、走り出す。

今度は、俺たちが追う側。

リベンジ完了までは、気を抜かない。

シヨウコと俺は、改めて気を引き締めて奴に挑む。

* * * * *

「おりました……けど……。」

「あいつ……何してんだ……？」

辺りはゴツゴツとした岩場地帯。

身を隠すところには困らない。

丁度いい岩の陰に隠れ、デイノバルドを視認。

したのはいいのだが……。

「溶岩に……尻尾を浸して……うわ、研いだ。」

「もはや生き物には見えませんねえ……。」

岩場の先、ドロドロの溶岩が剥き出しになったところ。

真っ赤な池の、そのほとりで。

デイノバルドは、尻尾をつけては研ぎ、つけては研いでいた。

「あんな生態、あつたんですね……。」

「いや、情報画面にもそんなのないぞ……うわ、また溶岩に突っ込んだ。」

「……………火怖くないんでしょかね……………」

「恐ろしいな。熱くないのか……………」

溶岩つて確か数千度とかそんな常識外れの温度だった気がするのだが…………。

うーん、ファンタジー。

…………まあ、今更だな。

「…………おつ、終わった。」

「ピンピンしてますね……………あつ。」

「…………いや、シヨウコの攻撃した足、結構キテるみたいだぞ。」

「ホンマや……………」

やたらと足を気にしている。

下を向いては足を上げ、自身の歩み具合を確認している様子が伺えた。

「強くなったな……………シヨウコ。」

「…………ウチも頑張りましたから。」

「ああ。」

「でも、それでもなおご主人様に意識を向けざるを得なかった、つてことですよね？」

「そうなるな。」

「ウチら、強うなりましたね……。」

「本当にな。」

少し気恥ずかしい。

だが、相手は以前コテンパンにやられた相手。

レベルアップしたことが実感できる。

「……用意はいいか？」

「はいっ。いつでも。」

「よし。真正面から、行くぞ。」

「はいっ！後ろに回ります！」

簡単に確認を済ませる。

走って向かうは、ヤツの正面。

あの怖い顔の面前。

「……………ギヤアアアアアア!!」

「くっ……………いきなりだな……………っ！」

急な咆哮。

しまった。分からなかった。

「グアアア!!」

「うおっ!」

すぐの嘯みつき。

咄嗟に後ろに飛んで回避。

ヒヤツとした。

……………油断しないって決めたのに。

(シヨウコは……………?)

「はあああ！」

ザン！ザザン！

（よし……挟撃態勢OK。）

既に背後から足を削り出している。
さすがの速さだな。

ジャキン！

「デイノバルド！こつちだ！」

「……………グルルル……………!!」

俺を見るや、ガンを飛ばしてくるデイノバルド。

おお……………怖い顔。

「さあ、来いっ！」

「グアアア!!」

気を引く。

思惑通り、こつちに突っ込んできた。

「グアア！」

グルン。

尻尾を地につけ、這わせながら一回転。

「あぶねっ！」

バツ！

バックステップでかわす。
たちこめる、焼け焦げた臭い。

(岩が焼けてるよ……。)

先ほどより、尻尾の熱さが上がっているのか？

……攻撃を食らったら、不味いな。

「グアア!!」

今度はその身を翻し、尻尾の振り下ろしを繰り返す。
ケツが見えたそのタイミングで避ける。

(……だ!)

振り下ろし攻撃が終わった直後、更に追撃をかけようと、もう一度尻尾を振り上げる
デインバルド。

そのスキに、足元に移動する。

シヨウコは……後退して様子を見ている。うん、それでいい。今は見ていてくれ。

(安全地帯は、むしろ……)

「おらあ!!」

ザシュ!!ザザザン!!

足元に、斬撃を食らわせる。

デイノバルドは再び尻尾を振り下ろすが、狙いは大外れだ。俺がいるのは、お前の足元だぞ。

「もう一丁……!」

ザン!ズザザザン!

「ギャアアア!!」

攻撃の途中に俺が消え、足元に攻撃を食らう。

そんな風に見えていたのだろうな。

死角をうまく使って、攻撃できた。

尻尾の振り下ろしは、その特性上、後ろを振り向く。

俺が見えない一瞬がある。

それが、ケツが見えた時。

あとは、ヤツの足元に素早く動けばいい。

避ける必要もない、安全地帯。

「シヨウコ!振り下ろしは隙が大きいぞ!ここに張り付けば安全だ!」

「は、はいっ……ってそんなん、ご主人様しかできませんって!!」

「イケるイケる!あんまり足元見えてないぞ、コイツ!」

「や、やってみます!!」

シヨウコに情報を伝える。

モンスターに張り付くというのは、正直めっちゃくちゃ怖い。

だがデインバルドの場合、その自慢の尻尾攻撃を主体とした攻撃。

クルクルと回るため、死角はできやすい。

そこを突けばいい。

「態勢を変える！俺は正面！シヨウコは足元!!」

「が、頑張ります！」

シヨウコは小さい。

何よりも素早い。

デインバルドの動きにも問題なく対応して、何ならきっちりダメージも与えている。

絶対、シヨウコなら大丈夫だ。

「頼んだ！……デインバルド！こつちだ!!」

ジャキン！

わざとらしく双剣を大きく構え、アピールしてみる。

「グリアアアアア!!」

おー、怒ってる怒ってる。

もつと、怒れ。

さつきから、動きが拙いぞ。

足にきているのか、怒りで周りが見えて無いのか知らんが。隙だらけだ。

「ガアツ!!」

「うおつと。」

噛みつき……からの。

「ギャオオオ!!」

(尻尾の一回転。)

グオン!

バツ。

跳躍して躲す。

「うらっ!」

ザシユ!ザザザン!!

「ギャアア!!」

跳んで躲して、そのまま頭に回転攻撃。

トゲトゲが折れているその頭上に、俺の双剣が当たる。
傷口を、更に抉った。

(シヨウコは……よし、できてる。流石。)

一連の攻撃の間、シヨウコは足元に張り付いている。

回転攻撃も、コマの軸にいれば攻撃が当たることは無い。

「シヨウコ！そろそろ来るかも!!」

「はいっ!!離れます!!」

バツ！

すぐさまバックステップでかなりの距離を取るシヨウコ。

……すごい速さだ。一瞬のスピードなら、セツヒトさんレベルじゃないか？
さすがアイルー。

ていうかアイルー並みに素早いあの人じゃババいな……。

「グアッ！」

ガギン！

引きちぎらんばかりに、牙で尻尾を挟んだディノバルド。
また薙ぎ払いだな。

(鬼人化……集中……!!)

息を吐いて、集中力を高める。

ギリギリギリギリ……!!

限界まで力をためていくディノバルド。

「ガアアアア」

(今っ!!)

ジャストタイミング。

そこしか無い、そんな瞬間。
狙う。

「シッ！」

「アアアアア!!」

迫り来る、デインバルドの刃。

振り回し、全てを薙ぎ払うその攻撃。

だが、見える。

双剣の切っ先を下に向け、体を捻る。

デインバルドの攻撃を、敢えて受ける。

その力、使わせてもらう。

キン！

剣と剣がかち合う。

受け流し、跳躍した体は更なる回転を始め。

ザザザザザザザザザザザザン!!

「ーらあっ!!」

「ギャア!!」

デインバルドの喉元を、削った。

ボガン!

「アアアア……………」

ズウン…………。

倒れ伏せたデインバルド。

転倒。

逃す手はない。

「シヨウコ！」

「はい！」

打ち合わせておいたこと。

デインバルドは、喉元が弱点。

口から噴煙を吐いて倒れる。

そしたら、総攻撃。

「ふっ！」

「やあ!!」

ザシュ！ザン！ザザン!!

シュツ！ザン！

「……グア！……グア!!」

倒れる時間は、個体差はあるかもしれないが大体10秒弱くらい。

シヨウコは攻撃を継続。

俺は……。

「シヨウコ！俺は仕掛ける！」

「はい！ウチは続けます！」

カチツ。

作動したのは、シビレ罠。

ビリビリビリビリ!!!

「ガア!?……アアア!……アアア……アアア……。」

苦しそうに呻くデイノバルド。

チャンス時間の継続。

「うらあ！」

「やああ！」

再びの総攻撃。

フクロだ。

前回は、罨を使ってハメ続けた。

あの時は必死に何度も何度も仕掛けて仕掛けて。

モンスターには、罨に耐性ができると知ったのもあの時だった。

今回は、そんなことはしない。

しないけど。

一回ぐらいなら、いいよな。

「ショウゴ！時間！」

「はいっ！」

シュタツ！

俺とシヨウコは、揃って背後に飛ぶ。

「…………グアアアアアア…………。」

心なしか、力の無い声をあげるデイノバルド。
効いている。

「畳み込むぞ!!」

「はいっ!」

シヨウコの返事とともに。

俺たちは態勢を整え、再び斬竜に対峙した。

* * * * *

「ギャア…………グアツ…………。」

「……………」

ダツ。

噛みつき攻撃を回避。

デイノバルドは、俺でもわかるほどの虫の息。口からはよだれが垂れ落ち、足には無数の傷。更には、尻尾が短くなっている。

「デイノバルド。……………終わらせる。」

シヨウコから、捕獲のタイミングであると先程聞いた。既に捕獲はできる状況にある。

だが、しなかつた。

奴は、ここで、俺たちの手で、屠りたかつた。命を天秤にかけるほど、偉い人間ではない。ハンターとは、そんな崇高な仕事ではない。

これは、俺のわがまま。ただそれだけだ。

「……じゃあな。」

「グア……。」

双剣を突き立て喉元を抉る。

対の切っ先が、赤黒い皮を切り裂いた。

ズバツ！

「アア……。」

ズウン……。

力なく倒れたデイノバルド。

しばらくは首を上げ、尚も戦おうという意志を見せたが、頭を地に置き、それっきり動かなくなった。

巨体が倒れると、その大きさがよくわかる。

「うわあ……この背中えつぐう……。」

「絶対に乗りたくないモンスター第一位だな……。」

目の前に横たわるゴツゴツの背中。

こんなん、座ったら死ぬ。

「……ふう……シヨウコ、お疲れ様。」

「は、はい……あ、あれ……?」

「どうした!?!」

急にポロポロと涙が出てくるシヨウコ。

本人もよく分からないように、戸惑っている。

え!?!何!?!怪我していた!?!えっ!?!

俺も戸惑う。

「す、すみません……あれ、なんでやろ……ウチ……あれ？」

「しよ、シヨウコ!?大丈夫か!?傷でもできたか!？」

「い、いや、そんなん違くて……安心したら感動してもうて……うわあ……こ、こんなん、
恥ずう……。」

「あ、ああ……良かった。」

シヨウコも、強くリベンジを誓った。

二人で絶対に倒そうと決めた相手。

感動しちやっただな。

俺だって、安心した。

……殺すことを選んだ自分に少し戸惑って、感動は薄れてしまったんだけど。

「す、すみません。落ち着きました。」

慌てながら涙を拭くと、何でもなかったかのように真顔になるシヨウコ。

いや、真顔は逆に面白いぞ。

「そ、それより、あれ、どうしましょう！」

「ん？あ、あれか。」

恥ずかしさを取り繕うかのように、話題を変えてくるシヨウゴ。

うん、乗ってやろう。

ふと横を見る。

シヨウゴの言うアレとは、デインバルドの倒れ伏した、その20mほど後方にあるモノの事。

デインバルドの切れた尻尾が見える。

見えるのだが……。

「すごいですね……。」

「何かのモニュメントみたいだな……。」

デインバルドのその強靱な尻尾を切り落とした。

それにより、一層こちらが優勢になったのだが。

あまりに尻尾が鋭利だからか、溶岩だらけの岩場に、ガツチリ突き刺さってしまった。
いる。

長さもすごい。俺より高いぞ……。

「……ま、まあ回収班がなんとかしてくるだろう。」

「めっちゃ深く突き刺さってますけど……。」

深く考えないことにしよう。

「とりあえず、行こうかシヨウコ。ここじゃ信号弾撃てないし。」

「回収班の人ってどんなやろう……。」

多分とんでもないプロフェツシヨナル集団だと思うぞ。

こんな採掘場の中に入ってまで、モンスターを回収するんだから。

……あの人たちといい、観測班といい……ギルドの底が知れない。

……とにかく、ここは洞窟内。入り口で信号を上げる必要がある。急ごう。

感謝しているぞ、デイノバルド。

自分を殺した相手に言われても嬉しくないだろうが。

俺が、改めて強くなるうと心に決めた、その最たるきっかけ。

ありがとうと心の中で言う、俺たちは準備もそこそこに出口に向かって歩き出した。

リベンジ、完了。

119報告をしましょう。

デインバルド討伐を終えたその日。

夕暮れに戻ってきた俺たちは、まず採掘場管理本部に顔を出した。

時間の感覚がよくわからなかったのだが、日が落ちるかどうかのところで戻れてよかった。

建物に入った瞬間、中に居た男たち数名に一斉に驚かれた。

「は？こいつ何？逃げて帰ってきたの？」みたいな顔の人もいれば「え？もう終わったの？」みたいにポカーンとする人まで。

「……んお!!何だ、どうしたお前ら!!」

そんな中、すぐにおかしな空気に気付いて、責任者のノジリさんが駆け寄ってきた。

「あ、ノジリさん。すみません。」

「おう、デインバルドは……やっぱり難しかったか……。」

「いえ、倒しまして。」

「……は？」

「えーつと……地図で言う……この辺りで横たわっていると思います。」

「……ほ、本当か!？」

「え、ええ。」

「……おい!!確認!!急げ!!」

「へ、へい!!」

ガラガラ!

声を上げ、人をそこにやるノジリさん。

部下みたいな人達が、飛び上がって入り口の戸を開け、すぐに向かっていた。

……い、今から!?

多分回収班もじきに現れると思うけど!?

「す、すまねえな。まさかこんなに早く帰ってくるとは思わなんだ……いやよ?ギルドの知り合いから、場所の難しさもあるし、少なくとも3日は見ろと言われていたもんだ

からよ……。う、疑うわけじゃねえぞ!」

「い、いえ!大丈夫ですよ? 気にしてませんので。」

そこからはもうてんやわんやだった。

まずは俺の撃った信号弾に反応してやってきた回収班が、立ち入りの許可をもらいにここまでやってきて。

かと思つたらノジリさんの部下数名が「お、オヤジ! 間違いねえ! ヤツは死んでいた!」なんて言つて飛び込むように帰つてきた。

そこから回収班は仕事に戻り、ノジリさんからは「よくやつてくれたあ!」と背中をバシンバシン叩かれた。

痛い。

そして今日は遅いからと宿に案内され、そこでノジリさんや採掘場で働く皆さんの奥さん方から大量の飯と酒を振る舞われた。

大宴会の始まり。

あれよあれよと始まったものだから、止めることもできなかつた。

ちなみにシヨウコは、奥様方集団にもみくちやにされていた。

ここではアイルーは珍しいのか、かわいいかわいいの大合唱。

「ご主人様あく……。」とか何とか言いながら、力強い女性達に次々と頭を撫でられていた。

仕方ないぞ、シヨウコ。俺にもそれは止められん。

可愛いのも時としては考えものだな、と言うと「にや、にやああああ。」と真つ赤な顔をしていた。

「……よう、ソウジさん！飲んでるか!？」

「あ、ノジリさん。ありがとうございます、こんな宴会まで開いてもらって。」

「いいってことよ！仕事もできず、下の奴らみんな腐ってたんだ。まるで息を吹き返したようだぜ！礼を言うのは、こっちだ！」

「いえいえ……。」

「おめえ……凄いいハンターだったんだな。回収班？の奴らから聞いたぜ？急にトツプランカーになった、今一番勢いのあるハンターだってな。」

「そ、そんな。」

そう言う風に言われているのか。

一番勢い……あるかなあ。どうなんだろう。

分かん。

「最初見たときは、生つちよろいやつが来たなあと思つてたもんだが……まさか一日足らずで倒して、帰つてきちまうんだもんな。」

「初めての相手……ではなかったですからね。何とか耐えました。」

「お？ 何だ、倒したことがあるのか？」

「……いえ、逆です。以前、コテンパンにやられました。」

ノジリさんに、簡単な経緯を話す。

ワサドラにやってきたばかりの新人だったこと。

少し力がついたと思つたら、デイノバルドにボッコボコにされたこと。

今回はリベンジを誓つた相手との戦いであつたこと、など。

ノジリさんは、手に持つたグラスをあおると、「そうか……。」と急に神妙な顔つきに変つた。

ビールの泡がついた立派なヒゲを袖で拭つている。

宿の中心、みんなが集うその場所を見つめて、ポツリと話し始めた。

「……………ここにいる連中は、まあ、色んな事情を抱えた奴が多くてな。……………街で事業に失敗した者、食い詰めてここにやってきた田舎村の出稼ぎ連中、一度罪を犯して捕まったような奴もいる。まあ、ゴロツキ集団だよ。」

「……………」

「そう言う奴らを束ねて、時には叱咤して、時には肩組んで……………全員家族みたいになっちゃった。おかげで本当に家族になっちゃった奴らも多くてな。ほら、あいつなんか子どもが生まれたばかりなんだ。」

ノジリさんが指差す先、随分と顔の怖い方々と笑いながら酒を酌み交わすスキンヘッドの男性。

失礼ながら、とても堅気の人間には見えないんだけど……………いい笑顔だった。

ここで伴侶を得て、家庭を築いたってことか。

いい話だ。

「採掘場奥の溶岩洞からモンスターがやってくることは、まあたまにはあつたんだがな？ あんなデカくて強そうなやつあ、見たことも聞いたことも無かった。すぐに溶岩洞に帰るかと思ったら、居座りやがって……………。採掘場にいたハンターの奴らも、挑みはして

くれたんだがな。」

「あ、倒そうとはしたんですね。」

「おうよ。でも、ダメだった。ハンターってのは、モンスターを狩るプロの奴らだ。そんな奴らが裸足で逃げ出すようなモンスターなんて……もう終わった、なんて諦めている者もいた。だからよ、俺達の生活を守ってくれて、感謝している。……最初は何かヒョロいやつが来たと思ったが……いや、今はもうそんなこと思ってたねえぞ!?!」

取り繕うように言うノジリさん。

正直な人なんだろう、顔は厳ついが、どこか人を惹きつける魅力にあふれている。

さすがこんな連中を束ねてきただけはある。

頼りがいのある、いいおじさんだな、と思った。

「大型モンスターが出てくるのは、珍しいんですか?」

ふと気になったことを俺は聞いてみた。

「アグナコトルっていう溶岩のバケモンが出てくることはあったんだがよ。基本、採掘

場にはエサになるモンスターも食い物もねえ。現れてもすぐに溶岩洞に帰っていつちまうんだ。」

「ああ、なるほど。」

「まさかあそこにあんなに居座られるとはな。本当に途方に暮れてたんだ。ありがとうなんてもんじゃないぜ。」

何度目か分からない礼を言われる。

慣れていないのでこっちも戸惑ってしまいが、どういたしましての気持ちを含めて頭を下げた。

「ソウジ……だったか？おめえ、若いのにどこかおっさんみたいだなあ……。」

「え!?そ、そうですか!？」

「いや、だつてよ……それぐらいの歳だつたら、こう、もつと天狗になつてもいいと思うぜ?酒の飲み方も、どこか大人しいしよ。」

「い、いやあ……色々あります……。そういう風に見えるのかもしれないね。」

「そうか……苦労してきたんだなあ。」

グビリとビールを流し込むノジリさん。

俺もチビリ、と。

……すんません。

中身はまごうことなきおっさんです。

……所作でバレるもんだな。気をつけなきや。

そこからノジリさんと飲み交わし、いろんな話を聞いた。

モンスターの生態の話は面白かった。

小型モンスターであるウロコトルが、ノジリさんの尻に激突し、逆にウロコトルが気絶してしまった下りは笑ってしまった。

盛り上がる中、顔の怖い男たちが続々と集まってきて、「俺なんて……。」と、次々にモンスター話を始めた。

どれもこれも面白くて、手を叩いて大笑いしてしまった。

その中で一番興味が湧いたのは、溶岩洞の奥に凶悪なモンスターがうようよ潜んでいるという話だった。

「お？さすがハンターだな！目の色が変わったぜ！」「あんたなら狩れるんじゃないか!?」と言われってしまった。

だって気になるだろう。

その数々のモンスターの中に、炎戈竜なんて呼ばれるモンスターがいると聞いたら、モンスターの名前は、先程ノジリさんとの話にも出てきた、アグナコトル。

(そうか、まだまだ強いやつはいるんだな……。)

無意識に双剣に触れている自分に気がついた。

ウズウズしている。

……俺ってこんな好戦的だったのか……。

「そ、ソウジさん……あんた結構やべえやつだな。」

「へっ!?!」

どうやらその滾る気持ちが漏れてしまっていたらしい。

周囲をビビらせてしまった。

俺は頭を下げ、謝っておいた。

「どっちがモンスターかわかんねえよ！」

「はははっ！ちげえねえ!!」

ドツ。

周りを笑い声が包んだ。

うん、洒落にならん。

自重自重。

* * * * *

「もみくちやにされましたあ……。」

「お、おう。お疲れさまです、シヨウコさん。」

「うう……ご主人様は助けてくれへんし……ウチはもう、お嫁に行けへん……。」

「な、何をおっしゃいます。」

ボロボロになってシヨウコが部屋に入ってくる。

宴は終わり、俺は宿の部屋に戻ったが、中々シヨウコが帰ってこなかった。

しばらく部屋で待っていると、ヨロヨロと帰ってきたシヨウコ。

……俺がバカ話で盛り上がっている間、何があったんだろう……。

「奥さん達に……頭を撫でられたまでは良かったんですけど……。」

「けど……？」

「次から次に私をペットの様に撫でくりまわすもんで……うう……力強すぎですよ……。」

本心から可愛がってくれたからか、断りづらかったんだろうな。

ノーと言えないシヨウコである。

……な、何だろうこの気持ち。

唯一無二の相手であるオトモが、今日初めて出会った方々にもみくちやにされていたズタボロで帰ってきて、「もう嫁に行けない」なんて言っている。

このプチ寝取られ感。

いや、寝取られてはないんだけども。

前にもこんなことがあったような。

あ、ハイビスさんがシヨウコを撫でくり回した時だ。

「す、すまん……助けに行つてやれなくて。」

「ええです……ご主人様が来てたら、多分もつと大変でしたから……。」

「そ、そうか？」

「奥様方に大人気でしたよ？ご主人様。モテモテでした。」

モテモテなのはシヨウコの方だろう、と言うのは自重しておこう。

奥様方、若い女性ばかりだったからなあ。

シヨウコのマスコットの可愛さに、女の子的感性が刺激されてしまったのでは無いかと推測できる。

ヤンママというか、強面の男性の奥さんってみんな若い気がする。

……これは俺の完全な偏見である。

「とりあえず、今日はお疲れさま。……明日朝には、ワサドラに帰ろう。」

「……そうしましょう。奥さん方にご主人様がおみくちやにされちゃかありません。」

憔悴しきつたシヨウウコは、ベッドに入るなり爆睡し始めた。

疲れているなあ……まあそれもそうか。

数時間移動して、そこからすぐに狩猟だったし。

お疲れ様、シヨウウコ。

これからも、がんばろうな。

俺は心の中でシヨウウコの労をねぎらい、寝ることにした。

………今度ここに來るときは、あの溶岩洞にいるという、炎戈竜アグナコトルの狩
猟かもしれない。

目を瞑り、体の力を抜く。

頭が冴えて、中々寝付くことができなかつた。

* * * * *

「それでは、皆さんお元気で。」

「おうっ！本当に助かったぜ！また遊びに来いよ！シヨウコもよ！」

「は、はい……次はお手柔らかに……。」

「……ソウジよ……シヨウコ、何か疲れてねえか？」

「色々あつたみたいです……シヨウコ、行こうか。」

たった一晩なのに、ノジリさんやその他の方々と随分と仲良くなった気がする。始めは顔が怖くて仲良くなるなんて想像もしてなかったが……酒の力、恐るべし。

「また来いよー！」

「次は尻尾触らせてねー！」

色んな別れ言葉を聞きながら、手を振って返事をした。

……いいところだったな。

狩猟云々抜きにして、遊びに来てみたいと思った。

「夜の飲み会だけは……ウチは遠慮したいです……。」

……別れ方は、人それぞれ。

……。

……。

御者のお兄さんに礼を言い、俺達はギルドに向かった。
ワサドラに着いたら、既に昼。

帰りはそこまで腰は痛くならなかった。

なぜなら、横になって寝ていたから。

「ご主人様、車の中でずっと寝てましたねえ。」

「昨日は中々寝付けなくてな……。」

シヨウコはずっと、周囲を警戒してくれていたらしい。
ありがたいことである。

ギルドに着くと、さすがに人は閑散としていた。

昼間は一番ハンターが少ない時間。

今頃、それぞれの猟場で頑張っているのだろう。

俺達はむしろ終わった側。

報告を済ませよう。

「わっ……そ、ソウジさん……？」

「あ、ハイビスさん。お疲れさまです。クエスト、完了したので、報告しにきました。」
「回収班から連絡は来てましたけど……もはや驚きもしませんよ……。ご無事で良かったです、ソウジさん、シヨウコちゃん。」

「ウチら、やつぱ早かったですか？」

「予想通りといえば予想通りね……シヨウコちゃん、怪我はない？ソウジさんに何かさ
れなかった？」

「な、何かってなんですか？」

「え、えつと……それはあ……と、とにかく、こちらにどうぞ！」

今はぐらかしたな。

俺がショウゴに何かするわけないだろう……。
……しないよ？

「ご主人様、行きましょう？……どうしました？」

俺の手を引くショウゴ。

変なタイミングで握られ、ドキリとしてしまった。

「……いや、何でもない。行こうか。」

言えるわけなんてない！

……この気持ちは墓場まで持っていこう……。

……。

「……はい、以上で終わりになります。お疲れさまでした。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございますー！」

元氣よく礼を言うシヨウコ。

これを受けてハイビスさんも笑った。

さすがシヨウコ、雰囲気明るくしてくれる。

「ハイビスさん、ついでにもう一つ、お願いしたいことがあります。」

「はい、何でしょう。」

普通に應對してくれるハイビスさん。

昨日は怒っていたから心配していたが、良かった。普通だ。

「明日もクエストを受けようと思います。」

「ええと……以前相談されていたという、例のクエストですか？」

「はい。」

デインバルドと戦う前に、受付の知的イケメンお兄さんに確認したクエスト。

それを受けようと思いついた。

「もちろんシヨウコさえ良ければ、だけど。」

「愚問です！ウチも臨むところですよ！」

「ありがとう、シヨウコ。それじゃ、ハイビスさん。」

「は、はい。」

「……アンジャナフ、ジンオウガ、リオレウス、オロミドロ、そして……ラージャン。この辺で緊急性が高いクエストはありますか？」

「………はい、あります。」

「良かった。モンスターは？」

「………。」

何故か押し黙るハイビスさん。

………何かヤバいのか？

「す、すみません、特に沈黙に意図はないですよ？……ソウジさん、強くなったなあと………こう、モンスターの名前を見て感慨深くなりました……。」

「あ、ありがとうございます。」

確かに。

一年前の俺だったら、こんなこと言い出したらハイビスさんにキレられてるだろう。自殺でもするのかと疑われるレベル。

「そうですね……まず、ジンオウガ。雷狼竜と呼ばれる大型モンスターです。」
「あいつか……。」

俺のギフトの情報画面。

「モンスター一覧」の中にその名前はある。

雪山に向かう途中にやられかけた、そいつ。

リベンジを誓うもう一つのモンスターである。

「そこが一番、ギルドとしては狩猟をお願いしたい対象です。放牧地帯の広い範囲で出没が確認され、手を焼いています。」

「なるほど。」

「次に……優劣はつけられませんが、リオレウスとオロミドロはできるだけ早いほうがいいですね。アンジヤナフは、そこまでは。……そして最後の、ラージャンですが。」

「はい……。」

俺が挙げたモンスターの中で、最も警戒すべき相手。

ラージャン。

何故か俺のモンスター一覧にも名前が載っている存在。

理由はよくわからんが、どこかで見かけたんだらうか。

「……このモンスターの狩猟は、許可できません。」

「……………」

「ソウジさんとシヨウコちゃんの腕を疑うわけではありません……ただ、これはもう、次元が違うんです。凶暴性、強さ、賢さも含め……おそらくこの大陸に出るモンスターでも最強と言つていい存在です……。」

「お、おお……。」

あのセツヒトさんがヤバイと言うもんだから覚悟はしていたが……これは相当に強

そうだ。

……………何故か笑えてくる。

「ご、ご主人様？なんで笑うとるんですか？」

「あ、いや。すまん。……俺達は頑張ってきた。なのに、それすら簡単に凌駕する存在がいることが……ちよつと面白くて。」

「お、面白いですか？」

「……………変だよな。すまん、忘れてくれ。」

この世界って、広いなあ。

まだまだ知らないことだらけ。

案外その最強というラージャンさえ凌ぐモンスターもいるのかも知れないし。

……敵うかどうかは別にして、一度刃を交えたいと。

そう思ってしまった。

「……………このクエストは、首都ギルドに依頼する予定です。その、素材が必要でしたら……………」

「はい、別の方法を考えてみます。」

「はい。……すみません、以前のようなことは……もう、嫌なんです。」

俺が大怪我して帰ってきた、最初のディノバルド戦のことを言っているのかな。

「あれは……俺の実力不足ですよ。それだけです。」

「ソウジさん……。」

「とりあえずそのジンオウガのクエスト、受けたいと思います。」

「……分かりました。……明日の朝、出発でよろしいですか?」

「はい。」

「では、そのように。……気を付けてくださいね、お二人とも。」

ジンオウガだって、強敵に違いない。

また明日もリベンジ戦だな。

俺達はハイビスさんに礼を言った後、ギルドを後にした。

数人のハンターがこちらを見ている気がしたが……まあ気にしないことにしよう。

「シヨウコ。昼飯を食ったら、ジンオウガに備えて用意をしよう。」

「はいっ！……何が必要です？」

「とりあえずウチケシの実かなあ……。」

「うわ……ウチ、あれ嫌いです……。」

「俺はいいとして、シヨウコは最悪の場合、口に加えながら戦ってもらう事になるけど……。」

「絶対嫌です！」

「だよなあ……。」

昨日はディノバルド、明日はジンオウガ。

ハイビスさんの言う通り、モンスターの名前を並べると恐ろしい限りだ。

だが、頑張っていこう。

装備……というか素材の相談もしないとなあ。

俺とシヨウコは明日の話をしながら、ゆっくりと町の中を歩き出した。

120 ストーキング行為は自重しましょう。

現世日本で、俺は一度職質を受けたことがある。

冬の深夜に、自転車に乗ってコンビニに行っている途中、いきなり脇から出てきた警官に止められた。

防犯登録番号などを伝え、持ち物検査をされ……まあいい気分ではなかった。

見た目が怪しかった。

寒くてフードを被り、壊れかけのライトを使っていたのも良くなかった。

今となってはいい思い出である。

なぜそんなことを今になって思い出したのか。

「…………主人様…………あの方、何されてるんですかね…………。」

「……………何をしてるんだろうなあ…………。」

ディノバルドを討伐してワサドラに帰ってきたその日。

シヨウコと昼飯を食って宿に帰る途中。

怪しい人物を見つけてしまったのである。

宿「ホエール」の目と鼻の先、通りの向こうで、建物の影に隠れながらコソコソしている。

目深に被った薄茶色のフード。

ローブのような服は、太ももの所までの長さがある。

怪しいことこの上ない。

「しかも……ウチらの宿を見つめてませんか!？」

「……………うーん、角度的にはそうかなあ……………」

何かをジロジロと眺めては、メモをとる姿。

まさか……………ドールのストーリーカーっていうやつか!？」

ストーリーカーは昔の小説じゃ純愛とか痴情の纏れとか、素敵?な表現がなされていたが……………。

現代日本では、単なる迷惑行為の一つである。

昔は可愛い呼び名だったかもしれないが、やられる方としてはたまったものではない。

「……ご主人様……ど、どうします？」

「……ドールを狙っているなら、証拠を押さえて、捕まえて憲兵に突き出す。」

「し、証拠なんてどうやって？」

「それなんだよなあ……。」

ストーカーが一番めんどくさいのは、事件性が疑われるような行為に及ばない限りは警察は動かないというところにある。

嫌がらせですね、の一言で片付けられれば、それで終わり。

嚴重注意で釈放、また繰り返し返すのが関の山である。

以上は俺のただの知識でしかなく、実際は知らん。

ただこの世界では……。

「とつとつとつ捕まえて、吐かせましょう！」

「物騒だからやめておけ、シヨウコ……。」

多少の暴力的解決も許されてしまうかもしれないのである。

ドールを狙ったストーカーなら、純愛だろうが何だろうが、捨て置けない。

あんないい子を変な目で見やがってみろ。
殺意が湧くぞ。

「…………ご主人様も…………殺気、抑えてください…………。」

「あ、ああ、すまん。」

思わず殺気を放っていたらしい。

…………自重しよう。

俺がモンスターになつてどうする。

「……………まあでも、話を聞けばいいんじゃないか？あのまま放つといたら、多分他の人が怪しんで捕まえるかもしれないぞ。」

「そうですね…………あいつホンマ、何しとるんでしようか…………。」

よく見るとその不審人物、歩き出そうとして二の足を踏んでは建物の影に引つ込む、
という行為をずっと繰り返している。

……………ドールが心配とかそんな事は置いておいても、怪し過ぎる。

いかにも「俺、不審者だけど。」みたいな恰好なんだもの。
アホか。

「……………ウチがとつ捕まえます。ご主人様はフォローを。」
「お、おう。」

シヨウコが躍起になって言う。

……………まあ、いいか。

「行きます……………っ！」

瞬間、目にも留まらぬ速さで走り始めたシヨウコ。
フードを被った不審人物まで、一直線。

「何しとるんやー！」

「ひっ!?!」

……速い。

ものの2秒くらいじゃないか？

不審人物の横にたどり着いたシヨウコが、肩を叩いて要件を聞いている。

「何をしとるんか聞いとるんや！次第によっちゃ、ただやおかんで！」

「わ、わわわ、す、すすすすすみません!!」

「謝るってことは……やましい事があるんやな!!」

「ち、ちちち違います！わ、私はただ……あれ？」

「お？」

「あ、あなたは……そ、ソウジさん!？」

「何で俺を知って……ああ!!」

フードを被った人物。

それは、雪山で見知った人だった。

「ハンズさん!?!」

「お、お久しぶりです！ハンズです！」

「え!?」主人さま、お知り合いですか!？」

宿の向かいでストーキングをしていた人物。

それは、雪深いミヨシ村で出会った、あの可哀想なハンター、ハンズさんであった。

* * * * *

「……………見つけたのが俺たちで良かったですね。町の人間に見つかったら、面倒だったかもしれないよ?」

「うう……………そんなに私、怪しかったですか?」

「ハッキリ言いますが、ストーカーにしか見えませんでした。」

「す、すと!?……………うう……………」

とりあえず、ドールを狙った人間ではないとわかり、一安心。

宿の食堂を借り、話を聞くことにした。

ハンズさん。

ミヨシ村で出会った、下位ハンターの女性。

ブラウンのボブカットの髪型、可愛い女子大生みたいな容姿だが、性格は至って真面目。

ゴシャハギ討伐後の宴会で、熱心に俺の話をメモっていたのを覚えている。

その後、その宴会で出会った男女二人組とパーティーを組むも、クエストで偶然遭遇したザボアザギルを前に囷として勝手に置いていかれ。

それが元でパーティーは解散したらしい。

更に野生のポポをソロ討伐する折、今度は突如ティガレックスが急襲。

ケガこそなかったものの……まあ実に運のない人である。

以上の経緯をシヨウコに説明。

「何や……ウチ、めっちゃシンパシー感じます……。」

先程まで聞いたことも無いような怒声で迫っていたシヨウコが、今度は同情を禁じえない様子。

………まあシヨウコも色々と苦労した側だからなあ。

「そ、それで……雪山を後にして今度はワサドラに行こうと考えまして……。」

「それは……セツヒトさんがいるからですか？」

「う……はい……。そ、それに、若手の育成機関があると言う噂も聞きました……。」

ハンズさんは、かなりのセツヒトさんファンである。

ミヨシでセツヒトさんと出会った時は、緊張しまくっていた。

あの憧れの人が目の前に！みたいなの。

「まずワサドラギルドに向かいましたが、あいにく訓練所は一時休業中と聞きまして……それで途方に暮れていた時、セツヒト様がやっているという武器屋を思い出して……。」

「……セツヒトさんを見張っていた？」

「うっ……。」

「……フード被ってメモ取って？」

「うう……はい……。」

そして俺たちに声をかけられた、と。

完全にやってることストーカーさんじゃないですか。

しかしなるほど、角度的に分かりづらかったが、ドールではなくて、宿の先の武器屋を見ていたのか。

そして訓練所は休業中？

……教官がどこかに行ってるんだらうか。

「タイミングが悪かったですね……。少なくとも、教官……訓練所が休みになったって、俺聞いたこと無いですよ？」

「え？そ、そうなんですか？」

「はい……。」

「うう……やっぱり運無い……。」

頑張ってたどり着いたミヨシでなんとか仲間を得たと思ったら見捨てられ。

再起してソロで頑張ろうとしたら轟竜ティガレックスに襲われ。

仕方なく憧れの人と訓練所を求めてワサドラまで来たら、訓練所は休業中。

うーん……。

「ま、まあ無事にこうしてワサドラに辿り着いたわけだし、良かったじゃないか。」

「そ、そうですね。本当に、ガーグア車を乗り間違えた時はどうしようかと思いましたが。」

「え!?!」

「え?」

「ま、間違えた?」

「は、はい。間違えて、ザキミーユ行きに乗ってしまいました……。発覚した瞬間に青ざめてしまいましたけど、お金はお支払いして、途中から歩いてここまで……。そして先程、着いた感じですよ。」

「おお……。」

不幸にうつかりさん体質も追加。

この人、大丈夫かなあ……。

「…………ご主人様…………!」

「わ!な、何だシヨウコ!?!」

「ウチ、何だかこの人放っておけません!」

「そ、そうだな。」

「この方からは……どこか、私と同じニオイがします!」

「えっ!? 私から……えええ?」

鼻を鳴らして腕をクンクンしだすハンスさん。

……そういう意味ではないですよ。

「セツヒトさんに会ってもらいましょう、ご主人様!」

「まあ、別に全く知らない同士ではないわけだしな。」

「ついでに、ハイビスさんに話通して、訓練所も通えるように!」

「シヨウコ……。」

やけにヤル気である。

シンパシーでも感じたのか。

「シヨ、シヨウコさん……でしたっけ? ありがとう……でも、そこまでいいただかなくても……。」

「宿は？」

「へっ？」

「宿は……取ってはるんですか？」

「い、いえ！まだですが……。」

「……ウチにお任せ下さい！」

タツタツタツ……。

行ってしまったシヨウゴ。

二人取り残される。

……まさかホエールの空き部屋でも確認しに行ったのだろうか。

「あ、あの、ソウジさん。」

「は、はい。何でしょう。」

「……私、昔からこう、要領が良くないと言うか、運もなくて……ハンターになるのも、大反対されました。」

「そ、そうなんですネ。」

返答しにくい！

「でも……私、がんばります！ここでソウジさん達に見つけてもらえたのも何かの縁！
精一杯、ハンターをがんばります！」

「……………ええ、いいと思います。」

何だろう。

シヨウコはシヨウコでシンパシーを感じていたけど。

俺だってそうだな。

ワケもわからんままこの世界に放り出され、何とか死にもぐるいでここまでやってきた。

この娘にも、そういう良い運の向きが来ればいいと。

そう願わずにはいられなかった。

しばらくしてホクホク笑顔のシヨウコが戻ってきた。

ホエールさんを連れて。

どうやら部屋も取ることができたらしい。
しかもたまたま空きが出たという事である。

「ほら、不幸なんか無いですよ！」

「うん！ ショウコさん！ ありがとう！」

若い二人の笑顔を見て、なんかこういうのいいなあと思うのだった。

「お主はちと精神年齢が高すぎるのお。」

ホエールさんにツッコまれた。

* * * * *

「それでー？ ご用向きはー？」

「あ、え、えーつと、ぶ、武器です！ 武器を探しに！」

「はいよー。んー、確かハンズは太刀使いだよねー？ そしたらー……。」

「あ……覚えていてくれるなんて……。」

所変わって、やってきたのはセツヒトさんの武器屋。

まさか「この人、ストーリーカーです。」なんて言うわけにもいかず、その辺で偶然出会ったことにした。

まあ問題はないだろう。

ハンズさんは、受け答えこそ普通になっているものの、セツヒトさんを見る目が完全にファンそのものである。

この目に俺は覚えがある。

そう、ミヨシ村で見たセツヒトさんのファンの方々と同じ目だ。

「これとかどーお？ 使い勝手の良さはお墨付きだよー？」

「ヒドウンサーベル……ね、値段は？」

「素材コミコミで……28万ぐらいかなー。」

「にっ!?!……う、わ、分かりまし——」

「ハ、ハンズさん！ よく考えてください！」

慌てて、セツヒトさんの言われるがままに即決しようとするハンスさんを止める。
フアンの根性の一端を見た……。

「まー、たつかいよねー。もちつと上達してからにしようかー。」

「は、はい！」

「なら勧めないでくださいよ……。」

「ごめんごめんー。ほら、目標があつた方が、燃えるー？」

「なぜ疑問形。」

確かにそうだけでも。

そのヒドウンサーベルという太刀は、ナルガクルガ素材由来のものらしく、鈍く光る青黒い刀身は、あの迅竜を彷彿とさせる。

ハンスさんはとりあえず今回は保留とした。

まあ顔合わせが今回の目的だし。

……そういえば俺も武器で相談があつた。

「セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「セツヒトさん。」

「えー？何で呼んでくれないのー？」

「いやだって、ファンの前ですし。」

「……………」

「……………」

「……………」

「せ、せつちゃんさん。」

「んー？何ー？」

意地でも呼ばせる気か。

何のこだわりだよ……………。

「シヨ、シヨウコさん……………お二人ってその……………」

「あー、安心してください。まだそんなじゃないらしいです。」

ハンズさんとシヨウウコの二人が何やら話している。
放っておこう。

「せつちゃんさん、例の武具のことなんです。」

「あー、あれねー。集められそうー?」

「……実は、ラージャン素材は厳しくなりそうなんです。」

「……あー、やっぱりー?」

「はい。どうやら俺ではまだ実力不足らしく。」

「そっかー。まー、しょうがないねー。……素材をかうって手もあるんだけど……高

いよー?」

「ですよね……。」

予想はしていたけど……。

セツヒトさんがメモを持ってサラサラと何かを書いている。

必要な素材と、その値段の相場。

………軽く六桁は越えそうである。

「……何とか、してみます。」

「私も知り合い当たってみるよー。」

「はい。よろしくおねがいします。」

「オツケーオツケー。ちなみに明日は何に行くのー?」

「ジンオウガです。」

「……………おー。遂にかー。」

「はい。……あ、以前作ってくれた双剣。あれでやってみようと思います。」

ミヨシ村に滞在中にセツヒトさんが打ってくれた双剣。

ベルケルブリザード。

氷属性のそれは、多少ジンオウガに有効と言うことで作られたが……そのまま使わず
じまいだった。

「おー、あの氷双剣ねー。うんうん、やってみー?」

「はい、そうします。」

「んー、順調だねー。ハンズはー?」

「えっ!?!」

急に話を振られて素っ頓狂な返事をするハンスさん。

セツヒトさんの話題の振り方はいつも急である。

慣れていくしかないんですよ、ハンスさん。

「わ、私は……このあと、ギルドの育成機関に紹介して下さる事になりました……。」

「ウチがお連れします！」

「……シヨウコちゃん、やる気満々だねー。」

「はいっ！」

気合の入った返事。

シヨウコが世話焼きさんモードに入っている。

「若い人はいいねー。シヨウコちゃん、よろしくねー。ハンスは、伸びるよー。」

「えっ!? そ、そそそそうですか!？」

「うん。真面目だし……あんまり言いたくはないけどー、マシヨルクとは気が合うんじゃないかなー。」

「や、やった……。」

おお、ハンズさんめっちゃ嬉しそう。

まあ憧れの人にそう言われては、気合も入るといふもの。
良かったですね。

俺達はそこで話を終え、セツヒトさんに別れを告げた。

「私は寝るー。」と訳のわからんことをのたまってから、屋根裏に上がるセツヒトさん。
……仕事はいいのかとか思わんでもないが、今更である。

武具屋を後にして、次の目的地に向かうことにした。

おっと。

「よいしょっ……と。」

「何してるんですか？ご主人様？」

「いや、札をひっくり返しておこうと。」

カラン。

武具屋の入り口に掛かっている札をひっくり返す。

「おやすみなさい。」と書かれたその札に、ガクツと力を抜かれる。

「……………経営とか、大丈夫なんですかね……………」

「……………セツヒトさんの生計事情は、俺にも分からん。まあ……………大丈夫なんだろう。」
「ええ……………」

仕事に邁進する俺たち。

のんびりワーキングのセツヒトさん。

そのギャップに、何も言えないまま、俺達はギルドに向かっていった。

1 2 1 ジンオウガを待ちましょう。

ミヨシ村であった薄幸の女性ハンスさんを、ワサドラの町中で偶然取り押さえた。

……否、話を聞いた。

すると、何とも不幸な生い立ちにシヨウコが共感。

事情を聞き、宿を押さえ、更に訓練所登録まで手伝うというのだから、シヨウコもなかなか世話焼きさんである。

まあ応援したくなる気持ちはわかる。

というわけで、俺、シヨウコ、ハンスさんの3人で、今日二回目のギルドにやつてきた。

……のはいいのだが……。

「教官が休暇を？」

「はい。私も先程確認したら、そのようでした……。」

ハイビスさんに話をすると、とんでもないことを聞いた。

訓練所が休業中なんて初めて聞いた為、もしやとは思ったが……まさか教官が居なくなっているとは。

「教官がいらないとなると……。」

「あ、ご安心下さい。シガイアは存じ上げておりました、代わりの教官は既に。」

「あ、そうなんですネ。」

これを聞いてハンズさんもシヨウコも安心した様子。

……だが、俺としては何か引っかかる。

…………まあ教官も休みたい時はあるんだろうけど……。

ま、いいか。

俺たちにできるのはここまでだ。

さすがにこれからの生活の送り方や金銭面の工面まではしてやれない。

ハンズさんだって大人なんだし。

こつちの成人年齢がいくつなのか知らんけど。

「では、ハンズさん。こちらに記入を……代筆は必要ですか？」
「あ、いえ。大丈夫です。」

サラサラとペンを走らせるハンズさん。

……左利きなんだな。

「……はい。これで訓練所の登録は終わりになります。ついでにワサドラギルドのハンター登録もしていきましょう。」

「は、はい。」

「こちらに記入をお願いします。」

こつちもサラサラと、止まることなく情報を書いていくハンズさん。

……へえ、ソロでドス系の大型モンスターや、パーティーでのドボルベルク狩猟歴があるのか……。

……あんまり見ないほうがいいな。

俺は目線を逸らし、ギルドの入口の方を見る。

クエスト帰りと思われるハンターたちが、続々と入り口から入ってくる場所であつ

た。

もう少し遅かったら、混み始めていたな。

運がいい。

「……ハイビスさん。」

「はい？なんでしょう？ソウジさん。」

記入も終わり、書類をトントンとまとめるハイビスさんに声をかけた。

「教官って、どこに向かったのかとかは分かりますか？」

「確か……首都に向かわれたと聞きましたが……。」

「首都。」

「はい。あんまりこういう事を伝えるのは良くないんですけど……まあ、ソウジさんですし。」

「……ありがとうございます。」

いきなりだなあ、教官も。

一言ぐらいあってもいいと思うのだが。

前飲んだときは……そんな様子、別になかったけどな。

何か言ってたっけ……。

* * *

『……ソウジ君。私は、あの時の一連の流れに、どこか違和感しか感じられなかった。』

『違和感、ですか。』

『はかったような大型モンスターの大量発生、生態系の大変動、リオ亜種が首都に夜間のみやって来るといっておかしさ、そして観測などされたこともない超強力個体の獄狼竜の発生……それらを同時に起こす、何かがあったと思っている。』

『……それは……確かに。恣意性を感じてしまいます。』

『……優良なハンターの育成は急務。私がここにやってきたのは、ソウジ君のようなハンターをたくさん育て上げるためだ……カホ・チータも、終わってしまったしな……。』

* * *

……とか何とか言ってたのに。

育成が滞っているではないか。

……まあ考えてもよくわからんな。

教官のことだから、首都にあるというピンクな街に遊びに行つたのかも知れないし。

……やべえ、考えておきながら、その可能性を否定できない。

「シヨウコさん、ありがとう。おかげでなんとかかなりそうです！」

「良かったです！同じ宿同士、いつでも頼ってください！」

「えへへ、ありがとう！……ソウジさんも、ありがとうございます。」

「いえいえ、俺は何もしてませんよ。」

「その……敬語、いいですよ？ソウジさんの方がハンターランク上ですし。」

「そ、そういうものですかね……じゃあ、普通にする。これからもよろしく、ハンズさん。」

「さん付け……。」

「は、ハンズ。」

「……はいっ!!」

こうして、薄幸うつかり一生懸命さんのハンズが、宿の仲間入りをした。

シヨウコのお姉さんの様である。タイプも似てる。

身長と髪の色は全く違うけど。

朝とか顔を合わせる機会も増えるだろうし、仲良くやっついていこう。

「……ああ！アカン!!」

「ど、どうしたの!? シヨウコちゃん?」

「も、もしかしてウチ、ご主人様の包囲網増やしたんちやいます……?」

「……そ、それは……否定できない……!!」

ギヤーギヤー話しているシヨウコとハイビスさんは置いといて、俺はハンズに、ワサドラの美味い飯処や雑貨屋など教えてあげた。

世話をかけすぎるとも良くないけど、まあこれくらいはいいよな。

「ソウジさんって、優しいですね。」

「いや、放っておけないだけだよ……。」

本人がうっかりの自覚があるのかないのかわからんが、がんばってほしいと、思った。

……………。

その後宿に戻り、ドールとハンズが顔合わせ。

こちらは髪の色が似ていて本当の姉妹みたいだった。

身長も近いし。

夕飯はハンズの歓迎会も兼ねて、ご馳走が振る舞われた。

ハンズが飯を炊くのを手伝ったら「ハンズさん、すごく手際がいいよ。」と褒められていた。

親御さんがしっかりしていたんだろうなあ……。

パリーン！

「ああつ！すみませんすみません！」

「だ、大丈夫だよ。ホウキホウキ……。」

……前言撤回。

ドジっ子も追加で。

* * * * *

「よしつ、10周、ハイスピードで行ってみようか！」

「はいっ！よろしくお願ひします!!」

「ご、ご主人様？ハンズさんも同じペースで？」

「まあやれるとこまでやってみよう！」

「はいっ！」

「ご主人様……。」

シヨウコが止めるが、一度ハンズの体力を見ておきたい。
教官の時も、確かこんなだったな。懐かしい。

「出発！」

「はいっ……っつて、は、はや!？」

「最初置いてかれるとキツイですよ!急いでハンズさん!!」

「は、はい!!」

さて、どこまでいけるか。

もちろん負けるつもりは毛頭ない!

……………。

「ゼエ……ゼエ……はあ……」。

「ふう……はあ……」。

「まだ5周なんだけど……」。

「ウチはまだいけますけど……」。

「わ、私もお……うへえ……」。

「む、無理はやめておこう、ハンズ。」

「無理させたのはご主人様です……」。

早朝のランニング。

ジンオウガのクエストに行く前に体を温めておこうと、ペース早めにしてみた。バンズも走るといので連れてきたけど……。

「教官みたいにギリギリを攻めるのは難しいなあ。」

「今日のところはここまでにしときましょう?」

「……俺まだ温まってすらないんだが。」

「ご主人様は化け物の領域なんです……ちよつと自重して下さい。」
「はいごめんなさい。」

ヨロヨロのハンズを連れ帰った。

そしたらドールに怒られた。

「あんまり無理させちゃ、だめだよ?」

「ごめんなさい。」

「……ドールちゃん、ご主人様にはもつとキツク言わんと、わからんで?」

シヨック。

* * * * *

ガラガラガラガラ……。

「……さて、一応武器の点検は終わったわけだが……。」
「人っ子一人居ませんねえ……。」

ギルドでクエストを受けて出発した俺たち。

今日はジンオウガの狩猟だ。

ガーグア車に揺られながら、シヨウコと打ち合わせ。

……一応「マップ」を開いて周囲を確認しているが……小型以外の反応がない。
縮尺を変えると明後日の方向に何か大型は居るんだけど……まあコイツじゃないよな。

このマップ、精度はまあいいとして、反応の基準のようなものがよくわからん所がある。

いや、便利なただけ。

「ただっ広い草原やなあ……何回か来ましたけど、街道沿いに誰もおらんのは……初めです。」

シヨウコは以前来たことがある様だった。

ワサドラの北、タオカカに向かう道とは東にそれる街道沿いは、低い草原地帯が広がっている。

シヨウコが言うには、いつもなら街道沿いに少しは人間がいるらしい。

道走る車とすれ違ったり、放牧をする人が遠くに見えたりするのだが……。

誰もいない。

とりあえず御者のおじさんには、移動して放牧する人達を見つけてほしいとお願いをした。

そんな無茶振りなんて、普通の御者なら二つ返事でお断りである。

……だが、今回の御者のおじさんは、あの人である。

「おっ!? 多分この辺だ!」

「おじさん、詳しいですね。助かりますよ、本当に。」

「他ならぬソウジさんの頼みだしな！まったく最近の御者連中と来たら、腰抜けばっかりよー！」

「ジンオウガと聞いてガーグア出してくれるって、おじさんぐらいちやいます？」

「ははは！シヨウコの嬢ちゃん、それはちげえねえ！」

愉快そうに笑うおじさん。

だが、事実そうだった。

今回は、放牧地帯に現れたという雷狼竜ジンオウガの狩獵。

覚悟はしていたが、便利なガーグア車を出してくれる御者は無いかと思つ危惧していた。

そんな折、たまたま見つけたおじさんが二つ返事で快諾。

移動して暮らす放牧地帯の人々のルートまでなんとなく分かるというのだから、有り難いことである。

「ガーグア達も元気そうですね。」

「グアっ！」

「ガッ！」

「コイツら元氣過ぎてなあ……厩舎で隣のメスに発情した時はどうしようかと思っ
たも
んよ。」

「……………」

そういう時はどんな補償をすればいいのか。

ていうかオスメス一緒の厩舎つてそもそもまずいんじや。

おじさんは「そんなときはそんなときよ！」と笑った。

うーん、ベテラン。

……………。

「おつ、見えたぜ！あれが移動集落だ！」

「おお……本当だ。よく分かりましたね。」

「北のジンオウガに追われてるんならこの辺か、つてな。当たりだ。」

「……………モンゴルみたいだ……………」

「?もんごるつてなんです?ご主人様。」

「……あのテントみたいなのに近い物を、本で見たことがあるんだ。」
「へえ……ご主人様って物知りですねえ。」

前世の知識だが。

確かゲルとか言ってたっけな。

小6の頃、社会科の資料集で見た気がする。

「あのテントは一つ一つ移動できるんだ。ガーグアやムーファっていう家畜を引いてな。」

「ムーファ？」

「何だソウジさん、知らねえのか？毛の服が有名で……チーズが絶品だぜ？」

「チーズ……。」

言われて辺りを見回す。

想像通りのゲルのような形をしたテント。

その向こうに、何か耳の長い羊のような生き物がいた。

「うおお……か、かわええ……。」

「うわあ……子ムーファですねえ……むっちやかわええ……。」

親のムーファだろうか、その後をちよこちよこ歩くちっちやい子どものムーファが見えた。

これハイビスさんとか居たら大変だったな。

あの人かわいいの好きだし。

「ちっちやいのは柔らかくてウメエぞー！」

おじさんはどちらかというとセツヒトさん側だな……。

……。

ようやく集落を見つけたが、既に昼は過ぎていた。

おじさんは知り合いの行商と一緒にテントを張って、寝床にするらしい。

もし泊まる場所がなければ、お邪魔しよう。

とりあえず話を聞こうとその辺の人に訪ねたら、移動集落の中で少し大きめのテントに案内された。

ノック……はできないな、この入り口。

何かの皮でできている。

「す、すいませーん！ワサドラギルドより来ました、ハンターですが！」

『入ってくれ。鍵は無い。』

「は、はい。失礼します。」

バサ……。

ゆっくり入り口？を開けて、シヨウコと入った。

返事をしたと思われるその人は、四角い帽子を取り、立ち上がった。

おお……身長が高い……。

そしてイケメンだなあ……アジア系の俳優さんみたいな、凛々しい顔立ち。

チャイナ服……とは違うが、全身をスラツと包むように上下薄い青の服。

足も長いし……何だろうなあ、カッコいい。

(大丈夫です、ご主人さまも負けてませんよ！)

小さい声で何を言うか、シヨウコ。

とうか言う必要があるのか。無いだろチクシヨウ。

「……失礼。私が族長、ハンザだ。よろしく。」

「は、はい。よろしくおねがいます。」

「よろしくおねがいます！」

ハンザさんか。

名前が近いハンズさんと混同しそうである。

ややこしいけど……まあ気にしないようにしましょう。

しかし、イケメンだからか？シヨウコ。

テンション高くない？

「ギルドに要請を出したばかりだが。すぐに来てもらって、助かる。」

「いえいえ、緊急性が高いということ。早速、話を聞かせてもらえますか。」
「わかった。」

シヨウコと俺は案内されて、ハンザさんの正面に座った。

椅子は無い、絨毯の上で座るスタイル。

正座しようかとも思ったが「楽にしてくれ。」というイケメン族長のイケボに甘えることにした。

堂々と座るその姿、まさにこの集落の長つて感じ。

若そうなのに……すごいなあ。

シヨウコは地面に座ることに戸惑っている。

……そうか、そういう習慣って、ワサドラとかにはないもんな。

「話を始める。」

「あ、はい。」

日本人の悲しい性、「あ、」からの返事。

何かもう男として負けた気分。

……勝負にすらならないからまあいいや。

「半月ほど前、我々はより北東の豊かな牧草地帯に居た。」

「はい。」

「次の移動をしようとして、一匹のムーファを殺した。我々は移動の度に、その無事を祈って子ムーファを仕留める。……血の匂いが漂い、皆がささやかな宴を楽しみにしていた。そんな夜だった。」

「……………」

「雷狼竜の音が、静寂を破った。私と男衆でガーグアで走らせ、女と子供は夜の移動の準備を急いだ。……ヤツは、目と鼻の先に居た。」

「……大ききなどは。」

「遠目だが、このテントよりは大ききだろう。」

「……………」

ジンオウガの個体は、あの雪山で出遭った一体しか知らないが、それよりも大きい気がする。

強そうだな……………」

「……とにかく急いだ。我々に対抗する手段などない。先祖の教えを守り、毒を仕込んだムーファとガーグアの肉を置いた。ヤツの居た反対、南に下り、この場所に着いた。……ギルドには、族長依頼でクエストを発注した。」

「……………なるほど。」

ハンザさんの淡々とした言い方に、重みを感じる。

毒を仕込んだ肉、というのはジンオウガの気を引きつつ、人間の持つ食料は美味しくないと学習させるためだろう。

先人の知恵ってやつか。

クエストにも、色んな種類がある。

討伐や捕獲などの達成条件が違うもの他に、依頼主による違いというものがある。

個人で依頼されるもの、団体など何かしら集団を代表して依頼されるもの、そして部落や町から依頼されるもの……様々だ。

基本的に自治体を代表するようなのはギルド預かりとなる。

依頼文書の中の依頼主がハンザさんではなかったのは、そういうことか。

「北の方に、ジンオウガがいるということですね。」

「少なくとも、私がギルドから聞いている限りは、だが。」

「ちなみに最後の報告はいつでしたか？」

「……今朝だ。観測班から報告を受けた。」

「……ありがとうございます。」

早朝に北方にいたのは確認済みか。

「放牧にはルートがある。……このまま居座られれば、我々の生活が立ち行かない。今も、家畜たちの動きを極力制限している。怯えながらの放牧は……辛い。……どうか、ヤツに引導を。」

「……はい。分かりました。やってみます。」

「ウチも、がんばります！」

「……ありがとう、ソウジ殿。アイルールの少女。」

かすかに微笑む族長さん。

……ぬおお、やばい、破壊力がすごい。

めつちやかつこいい。いかん。

「…………ご主人さま、何で顔赤くしてるんですか？」

「えっ!? いやいや…………い、行こうか! ショウゴ! それでは失礼します!」

「え!? ご、ご主人さま!? な、何やの!?!」

簡単に礼をして、早々に現場に向かうことにした。

うん、緊急性が高いクエストだ!

急ごう!

「…………ご主人様…………まさかイケメンに弱いとか!?!」

「なななにをいうか。…………いや、あの人は反則だろ! 流石にかっこよすぎだ! だ、だから何というか、こう、不意を突かれたの!」

「…………こ、こらあかんでえ…………帰ったらみんなに報告や…………。」

誰に何を報告するとかの。

…………マジでやめて、ショウゴ。

* * * * *

「さて気を取り直しましてシヨウウコさん。」
「何ででしょうか疑惑の主人様。」

徒歩でやってきたのは草原の北部。

ここに来るまでは徒歩。

簡単に最終打ち合わせをしておいた。

……話もそこそこに、シヨウウコから様々な疑問が飛んできたけど。

「ご主人様はどちらなんですか?」「攻めるのと守るのはどちらが好きですか?」「イケメンやったらいいとかそういうことですか?」なんて質問が飛んできた。

「ノーマルです。」「質問の意味がわからん。」「そういうことではないです。」「とそれぞれに返事をおいた。

……シヨウウコの疑惑の目が続いているが、知ったことではない。

政治家のようにコメントを差し控えないだけ、むしろ褒めてほしいぐらいである。

そんなこんなで、一応現場に到着。
真面目な雰囲気などぶち壊しである。

「……………シウコさん。そろそろちゃんとしましょう。」
「そうですね……………いやこつちも死活問題なんですけどね。」

目印となるものが少ない草原だが、だだっ広い丘の真上に行くと3本の低い木がある、と言われた。

そこから北の辺りが出現ポイントということらしい。
……………はつきり言わせてもらおう。

「これ、絶対対いないな……………」
「広すぎますねえ……………」

遠くに山が見えたり、ちょこちょこ低木は生えていたりはするのだが、申し訳程度。見晴らしがいいだけに、見渡してもジンオウガがいないことが丸わかりである。

「どこに居るのかも分からんし……ここで張り込むか。」

「私達が餌になるってことですね。」

「まあ大人しく餌になるつもりはないけどな。」

しばらく待つことにした。

……………。

30分ほどした時、「マップ」に動きがあった。

少し気になっていた、小型モンスターの集団。

おそらく野生のガーグアか何かだと思われるそれらが、激しい動きを見せた。

「シヨウコ……もしかしたら、来るかも。」

「えっ!? 分かりました!?!」

「いや、確実では無いが……小型が逃げ惑っているみたいだ……。」

「ありえますね……用心しましょう。」

「ああ。」

辺りを警戒して、集中を研ぎ澄ませながら。
俺達は、雷狼竜の出現を待ち続けた。

だが。

ついぞジンオウガが出てくることは無かった。

1 2 2 もう一度見つけましょう。

ジンオウガの狩猟にやってきて初日。

広大な草原の中、その姿を見つけることはできず。

その日はこのこと、放牧の民の移動集落に帰ってきてしまった。

そのことを族長のハンザさんに報告。

「なるほど。いや、すぐに見つかるとは思っていない。寝食の世話はさせてもらう。どうか、搜索を続けてほしい。」

「もちろんです。……すぐに狩猟を終えたかったです。お心遣い、痛み入ります。」

対象を見つけられないクエストというのも、中々無い経験だったものだから、どう報告したものかと迷っていたが。

正直に伝えることにした。

嘘つく必要も無いし。

マジでどこにいるのか分からなかったし。

族長と同じテントで休んでほしいと言われたので、そのままお言葉に甘えることにした。

「ご主人さま？イケメンさんと同じテントで大丈夫ですか？」
「お前は俺を何だと思ってるんだ。」

シヨウコの疑念は尽きない様子。

いや、ノーマルだって言ってるじゃないですか。

* * * * *

夕飯時。

ハンザさんの指示に従って、やたら豪華な飯が出てきた。

腸詰めにチーズを使ったフォンデュの様なものまで、肉系が中心の温かい料理が眼前に揃う。

めっちゃ美味そうだけど……。

「は、ハンザさん。こんな豪華な食事、いいんですか？」

「どうか、食べてくれ。我々の生活を、命を賭けて守るといふ者が目の前にいる。もてなさずして、どうするといふのだ。」

「そ、それはありがたいお言葉ですが……。」

「……………では、こうしよう。気にせず、食べるといい。我々も打算的にこの食事を用意した、と考えればいいだろう。頑張ってくれという思惑のもと、な。」

「は……………はい……………」

集落の人達が精一杯心を込めて作ってくれた食事。

打算的だろうが何だろうが……俺は美味しく食す。

そして、雷狼竜を屠る。

これが俺の仕事なんだ。

そう割り切って、食べることにした。

ていうか、めつちや美味そうで我慢できなかつた。

心弱いなあ俺……。

「……ありがたく、いただきます。」

「いただきます！」

「ああ。存分に食べてくれ。」

「この方々も生活が厳しくなってくる頃だろうに。」

「……是が非でも頑張んなきゃな。」

ムシャムシャと、食べ進める俺とシヨウコ。

「そういえば、普段モンスターが出てきた時ってどうしとるんですか？」

「基本的には、我々で追い返す。無論、敵わなそうな相手はすぐに逃げる。」

シヨウコがハンザさんに唐突に質問した。

多分俺とハンザさん二人とかだと……ずっと黙りっぱなしで辛かっただろう。

「こう言う時、シヨウコがいると助かる。」

「逃げるって言うのは……。」

「そのままの意味だ。我々は移動して牧畜に草をやり、成長を享受して暮らす民。動く

「ことには慣れてる。……無論、雷狼竜には慣れていないが。」
「なるほど。」

ハンザさんの口調は常に淡々と、しかししつかりとしている。
言動の責任を意識してるんだろな。
族長ともなると、色んなもの背負ってるんだろな。

「一人、一際強い者が居た。」

「え？それは……ハンターよりもですか？」

「分かんが……私は体術で勝ったことはない。」

「へえ。そんなに。」

見た目めっちゃ強そうだけどな、ハンザさん。

「今ここにはいない。ある者に憧れ、その……聖地巡礼、と言っていたか。それを行う
からと、居なくなった。」

「それは……奔放な方ですね。」

「真面目で素直で可愛い、私の妹だ。」

「い、妹!？」

「ああ。真面目で素直で可愛く愛くるしい、私の妹だ。」

「……………」

よっぽど妹さんのことが可愛いんだろうな。

というか……ハンザさんの様子がちよつと変わった?

何か……表情が違うというか……心なしか微妙にデレデレしているというか……。

……もしやとは思うが……シスコンというやつか?

いや、こんなイケメンの方に限ってそんな。

「妹は可愛い子だ。小さい頃は私にべつたりでな。私が長男として厳しく育てられたのに対し、妹は皆に愛された。無論、私もな。」

「そ、そんなに素敵な子がいるんですね!」

シスコン空気を察したのだろう。シヨウコが当たり障りなく返事をする。

「ああ。ハンターになり、大型モンスターも何体が倒したとは聞いた。流石私の妹だ。……近頃連絡が無く、心配している。」

「ちなみにお名前は？」

「ハンズ、と言う。」

「ブーラー!!」

思いつきりお茶を吹き出す。

ええ!?

ハンズってハンザさんの妹だったの!?

ま、まあ生い立ちなんて聞いたこと無かったけど……。

「我々の部族は、父の名前から自身の名前を引き継ぐ。私とハンズは、父の『ハン』の名をそれぞれもらった。……妹と名前が似ているというだけで、誇らしい。」

「そ、それは……いいですねえ!」

「そうだろう。それだけで私は生きていける。」

「へ、へー。」

やばい。

こらしスコンだわ。

だつて違うもの。

ハンスの話をする時の目が。

キラツキラしている。

さつきまであんなに凛々しかった、キラツとした切れ目が。

少女漫画みたいだもの。

「今はどこで何をしているのかは分からない。……ハンスは可愛すぎる。心配している。」

ど、どーしよ。

……これ、言うべき？

『あなたの妹さん、その憧れの人のストーキングしてましたよー。』つて!?

それとも言わない方がいい!?

どっち!?

いかん、選択を間違えると大変なことになりそう……。

そ、そうだ！しよ、シヨウコはどうする!?

「……あ、ウチちよつと失礼しますねえ……。」

トトト。

あ！逃げやがった!!

まって！シヨウコ！行かないで！

バサツ。

虚しく響く、入り口の布の音。

……トイレに行く振りして消えるとか、お前合コン中の女子大生かよ！

「厠は、外だ。もしソウジ殿も催したら、使うといい。」

「あ、じゃあ行ってきますね！」

ラッキー！

スタコラサツサ。

バサツ。

出た瞬間、聞き耳を立てていたシヨウコをとつ捕まえた。

「……シヨウコ……？」

「わ、わー！す、すんません！もうウチ、耐えきれんなつて！」

「だからって置いてくくな！ちよつとこのやろう！」

「わー！耳は！耳はやめてくださいいい！！」

だめ、やめてやらん。

俺をあんなに濃いシスコン空間に置いていきやがつて。

一通りシヨウコの耳いじりを終え、お仕置き終了。

「……はあ……いや、あんな感じとは思ってもよらず……ギャップあり過ぎです、あの

人。悪い意味で。」

「……………言うべきか、言わざるべきか。」

「……………言わん方がええんちやいます？ハンズさん、冬山に行くまでの経緯とかは、あまり話されてなかったですし……………。何か事情があるんかと思えますけど…………。」

「……………あのお兄さんから逃げたとか…………。」

「……………あり得なくもない話ですね…………。」

とりあえずシヨウコと話した後テントに戻り、ハンズさんと残りの夕飯を平らげた。

シヨウコがうまい感じに話を変えてくれて助かった。

さすが相棒。

ちなみにハンズさんは、ハンズが出ていった理由がとんとわからない、ということだった。

「しつかり者の私の自慢の妹だ。きつとこの集落の為になると、精進しようとしてくれているのだろう。」と、非常にポジティブな見解を述べていた。

……………本人がそれでいいなら、まあいいか。

そこで夕飯は終い。

ハンザハンズ問題は柵に上げ、早々に俺たちは床についた。

明日も狩猟だしな。

気にしないスキルを発動しよう。

明日は見つかるといいなあ……。

* * * * *

ゴソゴソ。

眠りもそろそろ深くなるうかと言う頃合い、シヨウコが何やら枕元にやってきた。
なんだ？

(……………主人さま……………)

(……………何だ？ハンザさんも寝ているんだから、俺達も早く寝よう。)

小声で話しかけてくるシヨウコ。

修学旅行の夜を思い出す。

(その、外の見張りとか、せんでもええんですか?)

(ああ、そのことか。……一応見張りは立てているらしいぞ? 集落内の男たちで、当番で回していると聞いたけど。)

(あ、そうなんですな……。)

(見つけ次第、俺たちに報告をくれる。……今は、休もう。)

(はい……おやすみなさいです。ご主人様。)

(ああ。おやすみ。)

移動疲れもあり、ぐっすり眠れそうだ。

……眠い……。

……。

……。

……オ……。

「!!」

ガバツ!!

……今、明らかに……!!

「……シヨウゴ！起きろ！」

「ふあつ、ふえつ!？」

「来た！ヤツだ！多分！」

「えっ……わ、わかりました！」

寝に入ってしばらく。

確かに聞こえた。

かすかだつたけど……。

あの冬山で聞いた、雷狼竜の雄叫びが。

「ソウジ殿。」

「ハンザさん……俺の杞憂でしたら、後で謝ります……。とりあえず、皆さんを起こして下さい。嫌な予感がしました。」

「……わかった。すぐに行動に移る。……誰か！すぐに支度を！」

俺のことを信頼してくれているのかどうかは分からないが、そこからのハンザさんたちの動きは早かった。

静かに、だが迅速に、月明かりの元荷物をもとめるハンザさんたち。

移動に慣れている、というのは、どうやら本当らしい。

ハンザさんの指揮の元、素早く動き出す人々。

………これで勘違いだったら、本当に申し訳ない。

だが、嫌な予感がする。

咆哮も、かすかだが聞こえた。

「ご、ご主人様?! ウチには何も——」

「わからん。確証は無いんだ。だけど……。」

何か、心が焦ってしまおう。

意識とは別の、俺の本能的な何かが、動けとうるさいのだ。

「マップ」を起動しても、見張りの担当に聞いても、ジンオウガの影も形もない。

だが……わかる。

ハイビスさんがいつか言っていた、達人の感覚。

そういうものなのかどうかは分からないが……絶対に、いる。

「シヨウコー！北北東、何か分かるか!？」

「……………あ……………分かります……………空気が、違う……………」

「よし……………打って出る。準備はいいか!？」

「愚問です!？」

ハンザさんたちに大体の方角を告げ、すぐさまそこに走ることにした。

放牧の民たちを巻き込みたくない。

少しでも離れたところで、戦う必要がある。

「ソウジさん！出たのか!？」

ガーグア車のおじさんが、血相変えてこちらにやってくる。

「勘違いだったら、すみません。ただ……あの時と同じような声がありました。」

「そうか……ソウジさんが言うんなら間違いねえ！俺にや何もできねえが……頼んだ
！」

「はいっ。」

おじさんもさすが、準備が早い。

既にガーグア達を待機させ、すぐにでも出られそうだ。

移動集落の人たちにも声をかけ、荷物を載せてあげている。

助かるよ、おじさん。

「武運を祈る!」

「ソウジさん達！無茶すんじゃねえぞ!」

ハンザさんと御者のおじさんの声。

返事をして手を振り、俺達は一目散に走った。

狙うは、雷狼竜。

そこで待ってろ、動くんじゃないぞ。

* * * * *

「アアオオオオオオン!!!」

バチツ……バチバチ!

バチイイイイ!!!

視認できた。

というか、わかり易すぎた。

月明かりの下、優しく風が抜ける草原の、その上に。

光り輝く大型モンスターが、鎮座していた。

「ご主人様……あれが？」

「ああ、ジンオウガだ……。」

「うわあ、わかりやす……めっちゃ光ってますね……。」

帯電状態……と表現していいのか、ジンオウガはその身を光り輝かせ、雄叫びをあげた。

顔の向きを上から正面へと移し、鋭い瞳で俺たちを射殺さんとしてくる。

「……………グウウウウ……………」

「……自己紹介は、いらないみたいだな。」

「あつちもウチらが来ること、分かっつたんですかね。」

「さてな……おい、ジンオウガ。」

ジャキン！

双剣を取り出す。

気を引くことができれば、御の字。

……………俺たちの後ろに向かわせるわけには、いかない。

「俺たちが生きるため、みんなが生きるため……お前を、殺す。」

「……………グウウウウ!!」

「……………来いっ!」

「ガアアアアアアアア!!!」

辺りに何もない、ただただ草原が広がるそのど真ん中。

俺達とジンオウガの、戦いが始まった。

「ガア!!」

グルン!

ドン!

グルン!

ドンッ!

「雷球！曲がるぞー！」

「はー！」

開始してすぐ、飛び道具を使ってきた。

巨体をクルツと回し、軽々とした着地と同時に、光り輝く何かを射出してくる。

ジンオウガは、その身にまとった雷の力を使って、多彩な攻撃を繰り出してくる。

その一つが、雷球。

距離のある相手に放つ、飛び道具。

ぶつちやけ、あんまり速くない。

……だからこそ、厄介。

タイムラグがあるので、注意を払う時間が長い。

それに、曲がる。

散漫になってしまうのだ。

(この間に……来るな。)

雷球を丁寧に避ける寸前、ジンオウガが突進を始める。
やはりだ。

同時に仕掛けてきた。

「シヨウゴ！後ろ、取れるか!？」

「やってみます！」

気負いのない返事。

いいな、余裕がある。

「ガアアア!!」

右腕を振り上げるモーシヨン。

鋭い爪が襲う。

俺はそれを、寸前で避ける。

ズドオン！

(まだ。二回目……。)

鬼人化、身体能力を上げる。

……集中!!

「グアア！」

(来たっ！)

次の一手、左腕の振り降ろし攻撃。

俺は極限まで力を抜き、対の二刀の切っ先を、合わせる。

ディノバルドよりは、遅い。

「ふっ……っ！」

ギキン!!

爪とかち合う、俺の双剣。

セツヒトさんが打ってくれた、ベルケルブリザード。

空中回転乱舞をお見舞いする。

剣先をジンオウガの爪から腕に走らせ、その勢いを受け切り。

俺の体は、無数の攻撃を当てた後、浮いた。

ズザザザザザサン！

「アオオ……。」

「しゃっ！」

スタツ。

着地を、こちらも軽やかに。

……いきなりだが、上手くいったな。

その爪の振り下ろしは、見たことがある。

冬山では、避けるしかなかったけど。

今は、反撃の術がある。

「ナイスです！ご主人さま！」

ヒュパ！

シュザン！ザン！

言いながら、後ろ脚と尻尾にダメージを加えていくシヨウコ。

「シヨウコもナイスだ！このまま挟撃態勢！尻尾に気をつけてな！」

「はいっ!!」

ブオン！

指摘されて腹が立ったのか、尻尾を振り回してきた。

(……尻尾……あいつの方が数枚上手だな！)

デインバルドよりも、数段遅い。

回避攻撃をするまでもない。

跳躍して尻尾を避け、その攻撃の中心に剣を向ける。

「つらあ!!」

ズザン！ザシユ！ザン！

「クオオ……!!」

体をぐらつかせるジンオウガ。

回るコマは、その軸こそが弱点。

……カウンターの餌食だ。

「シヨウウコ！叩き込め！」

「はいっ!!」

ザシユ! ザザザザザン!!

ザザン!!

ヒユパツ! ザシユザシユ!

スキが生まれたジンオウガ。

一斉に攻撃を行う。

だが。

(……………?……………様子何か違う……………!?)

「やべえ!! 離れろ! ショウゴ!」

「えっ——」

余裕を持つことと油断することは、そこまでの過程が全く違う。
努力は、強さに繋がる。

強さは、余裕を生む。

余裕は、視野を広くする。

油断は、逆。

根拠のない自信。

それは視野を狭める。

ハンターにとって、視野は生命線。

「グア——」

離れたと同時に、放電を始めようと構えたジンオウガ。

かすかなモーシヨン。

だが、俺には分かった。

ジンオウガが、必殺の攻撃をしてくることを。

そして、シヨウコがまずい状況にあることも。

(シヨウ……間に合……これしか……！)

一瞬の思考。

放電にシヨウコが巻き込まれる。

少しかだけ反応が遅れている。

あの一撃は、まずい。

「——おおお!!」

「うえっ!？」

俺は、半秒にも満たない時間で判断し。

シヨウコを。

ドガッ。

「ぐうっ!!」

蹴った。

苦しげなシヨウコの声。

(すまん！)

頭の中で謝った、その瞬間。

「グオオオオオオンン!!!」

バチバチバチバチバチバチヂヂヂヂ
!!!!

「ぐあああああああ!!」

「ご、ご主人様あ!!」

俺は、シヨウコを蹴り飛ばし、避けることはかなわず。

咆哮と共に放たれた雷撃に、直撃した。

1 2 3 痛みをこらえて戦いましょう。

頭が働かない。

考えようとしても、痺れる。

「ぐあつ……！……がっ……ああつ……！……！」

ジンオウガの雷撃に、直撃してしまった。

油断した。

シヨウコが、危なかった。

だから庇った。

庇うような段階に行くまで、攻撃をするべきではなかった。
後悔は先に立たないけど。

「ふっ……ぐっ！……うう……！」

思考が戻ってくる。

だが、足が踏ん張れない。

ようやく立つ体。

……よろよろと揺らぐ足に、何とか活を入れる。

(やばいーやばいやばいやばい!!)

常に対象から視線は逸らさない。

基本中の基本なのに。

できない。

視界が揺らいで、目が言うことを聞いてくれない。

体は……分かん。

痛いという感覚は鈍くあるが、それさえ判断がつかない。

立てたということは、おそらく足は無事。

武器は……手放してない。

ピリッピリッと不規則に体がしびれる。

「グオオオ!!」

一瞬の思考。

すぐ後、雄叫びに、意識が覚醒してきた。

マジかよ。

あいつ、振り向きざまに尻尾攻撃してくるわ。

……………当たって、たまるか。

「ぐうつ……………!」

ズドオン!!

俺の左横に、いかついジンオウガの尻尾が落ちてきた。

いや、振り下ろされた。

急に後ろを向いたと思ったら、次の瞬間、バク転して尻尾を地面に叩きつけた。咄嗟に体が動いた。

感覚の戻りつつある右足の膝を抜いた。

そしてそのまま転がっただけ。

……なんとか回避は成功。

だが、膝を地に着いてしまった。

「ご主人様あ!!」

ダダッ。

こちらに向かってくるショウゴ。

「ご主人様!!」

「ショウ……俺の右手……ポーチ……!」

「は、はいっ!!」

言うことの聞かない右腕を、シヨウコを使って、無理矢理にポーチに触れさせる。

(アイテム一覧……ウチケシの……っ！……もう一回！……アイテム一覧……ウチケシの実……！)

情報画面の選択がうまくいかない！

ガリッ。

口の中に突如として存在し始めた、何かの塊。

多分これがウチケシの実……！

………嘔む！

ボリ！ゴクン……。

「………おお………いってえ………」

効果は靦面だった。

全身のしびれから、肉体が解放されていく。

嘘みたくにクリアーになる思考。

それと同時に。

俺は激痛に襲われた。

(っ……!!……体全体が……痛い……。)

一瞬で自分の体の負傷部位の確認を終える。

雷撃は、俺の体全てにダメージを与えたようだった。

筋肉痛とは比較にならないほどの鈍痛が、ありとあらゆる部位に響いている。

「ガアアアア!!」

「……! ショウゴ!」

「避けます!」

バツ!!

二人揃って、大きくバックステップ。

「ガアッ!!」

タツクルを、何とか避けた。

モーションが分かりやすい攻撃で良かった。

そして。

カチ。

ズドオン!!

「グアアアアアアアア!!?」

ついでに落とし穴を仕掛けて、ハメた。

時間はない。

未だ万全とは言えない体。

回復薬グレートを飲み干し、全身にぶっかける。

「グアツ！ガアツ！……………ギヤアアオ!!」

「ふうー……………」

ジンオウガは、穴の中でもがき、暴れている。
呼吸法で息を整える。

……………うっし、少しは戻った。

「ご主人様、すみません！」

「俺もすまん、シヨウコ。指示が遅れた。」

「……………もう、喰らいません。」

「ああ。油断はしないと決めたのにな。」

どこか、慢心していた。

ディノバルドと比べ、雷球も尻尾も、その攻撃は遅かった。反撃の術などないと、頭の何処かで決めつけていたのかもしれない。

「呂律も戻った。口の中はすごく苦いけど……体も動く。」

「……リタイア、しますか？」

「駄目だ。……来るぞっ。」

会話を打ち切り、剣を構える。

俺たちの後ろには、移動集落がある。

ここで取り逃がせば……万が一の可能性がある。

引くことは、できない。

「挟撃は一端中止！集落の反対側に誘導！」

「はいっ！」

正直言うと、立つのも辛い。

痛みは徐々に引いてはいるが、全快とは程遠い。

「回避優先！意識を俺に向ける！」

「はいっ!!」

チャツ。

だがここでやらねば、被害が出る。

かもしれない。

武器を構え、ジンオウガを見据える。

「……グアアアア!!」

「くっ……。」

重い体に活を入れ、無理矢理動かす。

右の爪を振り上げ、俺を殺しに来るジンオウガ。

……トドメを刺しやすい俺を狙うよな、そりや。

ドガアツ!!

地を抉る音。

それが真横で響くのだから、恐ろしいという他ない。
しかも体が重い。

(予見するんだ……次は、次はなんだ?)

体は重いが、頭は働く。

ならば、先を読む。

それしかない。

「ガアツ!」

「うおっ!」

「ガアウツ!!」

「ぬおおっ!!」

余裕を持つなど程遠い。

攻撃を見てからでは間に合わない。

ただただジンオウガの攻撃を読み、寸前で避ける。

あまりに危なっかしいからか、シヨウコがチラチラと俺の方を見ている。

……大丈夫だ、何とか動きはできるから。

間一髪だけど……。

ジンオウガの猛攻。

文字通り、猛り狂って俺を猛追してくる。

俺はその尽くを。

(左!!)

ドガアッ!

(後ろっ!!)

「ガアツツツ!!」

ドオン!

避けに避けていった。

モンスターは必ず予備動作がある。

しかも、俺を仕留めようと必殺の攻撃を繰り出してくる。

モーションが大きい。

「よっ………と。」

「グアアアア!!!」

ズガアア!!

地を砕き、尻尾を振り回して、爪を立て。

その全てに、俺は対応した。

「……す、すごいです！……主人様！」

シヨウコから声が聞こえる。

反応はできない。

そこまでの余裕は、無い。

だが、体のしびれは徐々に取れ、痛みも……多分慢性化して来た。
時間をかけて、自身の回復を狙った。

……………。

「シヨウコ……この辺で！」

「は、はいっ!!」

草原の更に奥。

相前に、移動集落から引き離す事に成功した。

依然としてジンオウガの猛攻は続いていたが、その全てを避ける。

回避に専念すれば、なんとか耐えられる。

(問題は……俺の方の攻撃だな。)

まだ動かしていない、両手に構えた双剣。
これが言うことを聞くのか。

(上腕……腕……握力……多分いける……。)

全身の、主に攻撃で激しく使用する部位を再確認する。

「シヨウコ！10秒いいか!？」

「はいっ！ほらっ！こつちや!!」

「グアアア!!」

シヨウコが気を引いて、自身に攻撃を向けさせた。

そのスキに、双剣を研磨する。

……準備は多分、いい。

「……………交代！」

「はいっ！」

シヨウコと瞬間的にスイッチする。

いきなり眼前に現れた俺に、敵意をむき出しにするジンオウガ。

「ガアア!!」

両脚を踏ん張り、攻撃態勢。

俺も、構える。

(いけるか……………!?)

鬼人化。

そして脱力、集中。

大型犬が飛びつく様に、俺にのしかかってくるジンオウガ。
見える。

ゆつくりと、動きが読める。

今度は、避けない。

迎撃する。

「……ふっ！」

「グアアア——」

ジンオウガの足が、俺の体を抉る。

その寸前。

(バック……跳ぶ！)

距離を完璧に読んで、後退。

後ろに着地したその瞬間、足を踏ん張って。

「はああああ!!」

「——アアアアアア!!?」

俺は跳躍した。

ギリギリのタイミング。

目の前には、ジンオウガの顔。

立派な角に、刃を立て。

相手の勢いを利用し。

(空中回転乱舞!!)

宙に舞う。

ズザザザザサン!!

切り裂く音。

だが、終わらない。

このまま着地すれば、ヤツの餌食。

(ハッ)(ッ)……!!)

再び回転の力を利用して、ジンオウガの頭に双剣を一閃。
体を更に捻って。

「……あああああ!!!」

ズザン！ズザザザザザシユ！

「ガアアアア！」

ジンオウガの背中を伝って、ヤツの尻尾まで。

余すところなく、回転の斬撃を見舞う。

「……………つと！」

ズザアツ。

体を止める。

足を踏ん張って、なんとか着地。

「……………グルルルル……………」

「何をした？」とお怒り顔の雷狼竜。

テイガレックス戦で行った、頭から尻尾までの山下り。

頭に当てた切っ先を始点として、背中を伝い尻尾まで。

弱点では無いが、相手の後ろを取るには有効な技だ。

……失敗するかもしれないという最大のリスクに目を潰れば、だけど。

うまくいって良かった。

「グアウ——」

ジンオウガが、後ろを取られまいと俺に振り向く。
両の脚をこちらに向けて、地につけた……その瞬間。
チャンス。

(そー!!)

その爪の隙間を狙って。

ザシユ！ザザン！ザン！

双剣で、斬りつける。

「ギャアアア!!」

「ここが弱点なんだよな、コイツ。」

情報画面を信じれば、だけど。

「……………グルルルル……………」

ザッ！

ボックスステップで後退するジンオウガ。

本当に身軽なモンスターだ。

跳躍、突進、爪、尻尾、どの攻撃もティガレックスやディノバルドには及ばない。

だが、すべてのバランスが、いい。

さすが、無双の狩人と呼ばれるだけはある。

更に……………。

「……………ウウオオオオオオン!!」

遠吠えのような咆哮。

その声を皮切りに、身に纏う雷光虫は発光を強くしていく。
そして身に纏うは――。

バチイ!!バリバリバリ!!

「……………グルルルル……………」

……これだ。

雷の力を身に纏い、敵を屠る。

こうなると、速さも攻撃の威力も跳ね上がる。

バランスの良さが売りのジンオウガが、更に強力になる。

「ご主人様っ!!」

「ああ!……………集中!更に来るぞっ!!」

「りよ、了解!!」

今までの攻撃を、危なげなく回避できていたシヨウコ。

だが、今から来るのは、次元が違う。

「避けきれ！」

「はいっ！」

「グオオオオ!!」

更に力を増したジンオウガ。

受け切る。

受け切ってやる。

* * * * *

「グアアアア!!」

「ぐっ……!!」

ズドオン!!

ズドオオン!!

連続の爪撃を避ける。

「ご主人様!!」

「大……丈夫だ!!」

ヒュッ。

前脚の着撃に合わせて、双剣を食らわす。

ザシユ！ザザン！

「ギヤアアア!!」

「!!雷撃!!」

「はいっ!!」

バツ!!

バックステップ。

直後、落ちてくる雷撃。

当たったらと思うと、冷や汗が止まらない。

「次っ!!」

「は、はいっー!」

一応俺とシヨウコは無事。

……………無事といえば聞こえはいいが、摩耗は激しい。

ジンオウガが雷をまとって強化してから、一刻ばかり。

常に激しく、実に多彩な攻撃に悪戦苦闘しながら。

俺達は焦らずに対応していた。

(雷撃が怖いというのもあるが……………少しずつ呼吸が読めてきた。)

ジンオウガの相変わらずの怒涛の攻撃。

ティガレックスの様に突進してきたかと思えば、ありえないほどの急旋回で尻尾を振り回して。

戸惑う俺達に、爪や尻尾のトドメを差してくる。

その全てに対応し、避け切ったり、受け流したり。

時には回避攻撃で反撃を試みたり。

傍から見たら、俺達は完璧に劣勢に映るだろう。

シヨウコは、完全に反撃を諦めた。

それでいい。

雷を纏った状態のジンオウガは、通常時とは比較にならない程、強力。

スキを見つけれられないのなら、いつそ俺に攻撃を任せ、自分は陽動に回る。

良い判断だ。

最適解と言える。

事実、俺は全身の痛みを差し引いても、完全に避け切れている。

何なら、わずかながらチマチマと反撃も。

ギリ貧だが、今できることはこれしかない。

……万全なら、回避攻撃の連続でジンオウガを怯ませ、スキをつくという戦法も取れた。

だが、今の俺の状態から考えれば、リスクがでかい。

少しずつ、少しずつ、ヤツを削る。

派手な手などは、いらぬ。

できない、というのもあるけど。

「グアウ……。」

(まただ……3回目?)

先程から、ジンオウガの呼吸がほんの少しだけ乱れてきている。

きつと前の俺なら、気づかなかったであろう変化。

ジンオウガだって、生き物。

雷を使って攻撃するなどファンタジー極まりないが、生きている。

呼吸もするし、脚で地を駆ける、動物なのだ。

そして、雷を纏った強化、言わばドーピング状態。

……いつまでも続くわけがない。

「……………グアアアア!!」

(遅いつ!!)

明らかに前脚を振り上げるモーションが、遅い。

ズガアン!

草原に生える草を根っこからえぐり取る、そんな一撃だが。

俺には、弱く見える。

弱まってきたと、思える。

「……………シヨウゴ!」

「はいつ!」

「体力は!」

「いけますっ！」

「……次の攻撃に、狙う！反撃の準備！」

「……待ってましたあ!!」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ガアアアアア!!!」

「ダダッ！」

「グルッ！」

（体を捻って……後方回転の尻尾攻撃！）

来た。

狙い通りの、攻撃。

おそらくシヨウコにも、ジンオウガの動きが緩慢になっていることが分かっているの
だろう。

だからこそその「待ってました」の返事。

(鬼人化……集中………!!)

万全であれば、連続使用も問題なくなってきた回避攻撃。

だが、今は一回一回でくる体の負担がすごい。

連続では、使えない。

(なら……これしかない!!)

「ガアアアア!!!」

ヒュツ。

背を見せるジンオウガ。

その巨体をどうコントロールしているのか、そう思えるほどの身体能力。身を縦に翻し、尻尾が天から降ってくる。

その、一瞬にも満たない、刹那。

(……………今っ!!!
!!!)

俺は全てを解放し。

跳躍した。

キンツ!!

左の剣にかする尻尾。

半歩だけ、右に移動した俺は、瞬間飛び上がる。

「おおおおおお!!」

世界が回る。

ヤツの尻尾の真ん中めがけて、双剣を当て。

ズザザザザザザザザザザザザザザザザ!!

振り下ろされる力を利用し、痛む体を捻りに捻って。
ありえないほどの回転を加え、剣を入れる。

ブチツ!!

「ギイイヤアアアアア!!」

ドンツ……ドツ……!!

(おお……多分……史上最高回転……。)

……成功した。

ジンオウガの尻尾切断に。

切れた尻尾は音を立て、地に転がっていった。

「たたみ込め!!」

「はいっ!!」

悠長にはいられない。

俺は、ジンオウガの前脚を。

シヨウコは後方から。

……それぞれに、攻撃を叩き込む!!

「うらああ!!」

「やああああ!!」

ザシュ！ザザザザザザザン！ズザザザザ！

ヒュパッ！シユツ……ザン！ザシユ！ザシユツ！

「グアウ……ガアツ……グアア!!」

ジンオウガは反撃を試みようとするが、俺達の猛攻は続く。そりや自分の尻尾を切られたら、たまらないだろう。

「うらああああ!!!」

目標を変更、頭の角に目掛けて攻撃。

ザン！ズガア!!

バキィ!!

「っし!!」

角を斬りつけ、折る。

だが攻撃はやめない。
止めてやらない。

「うらあ!!」

ザシユツ！ザザザザザン！

ベキイ！

「グアアアア……！」

右前脚、爪の破壊を確認。

「ガアアアア……。」

ズン……。

倒れ伏せるジンオウガ。

その瞬間、纏った雷の光は霧散、元の状態に戻った。

「まだまだあ!!いくぞ!!」

「はいっ!!」

仕留める!

絶対に!ここで!

お前を、倒す!!

ズザザザザサン!!ザシユツ!!!

(空中回転乱舞……。)

トンツ……。

ズザン！ザシユ！ズザザザザザン!!!
バキィ!!

(背中破壊！確認！だけど……！)

「……………後退！」

「はいっ！」

倒し切れなかった……けど……。

「……………グルルルルル……………グアアア……………。」

ようやく立ち上がったジンオウガは、しかし満身創痕。
これ以上は、反撃が怖い。
判断は間違いたくない。

「結構やりましたけど……。」

「コイツ……………」

「グルルル……………ガアツ……………」

ヒヨコツ……………ヒヨコツ……………。

明らかに足取りがおかしい。

「ご主人様!!チャンスじゃ!?!」

「いや……………いい。」

「えっ!?!」

「グルル……………。」

なおも立ち向かってくるジンオウガ。

目の色がおかしい。

充血し、真っ赤に染まるそれは、見ているだけで痛々しい。

「ジンオウガ。」

「……………グルル……………」
「……………じゃあな!!」

ザッ!

ビュッ!!

その赤い目を目掛けて、一閃。
双剣を、振り抜いた。

「グオツ……………!!……………」

ユラツ……………。

ズウン……………。

無尽蔵に思えたその体力を使い果たしたのか。

または単純にダメージがデカかったのかはわからない。
とにかく、ジンオウガはその巨大を横たえ。

「……………」

沈黙した。

124強さを自覚しましょう。

ようやくジンオウガを屠った。

「し、死んでます……よね……？」

「……多分。」

さっきまでピンピンしていたモンスターが、無言で倒れている。
ジワジワと削ってはいたが……。

恐る恐る近づくとシヨウゴ。

「……多分、死んでますね……。」

「良かった……いのでで……!!」

「ご、ご主人様!？」

「すまん、ホツとしたら急に……全身、痛いわ。」

「や、休んどってください!ウチ、後処理やとくんぞ!」

「ありがとう……。」

寄りかかるものもなく、とりあえず地面に腰を下ろして落ち着く。

どっと疲れがきた。

疲れ……もあるが、それよりも痛み。

鈍く重い痛みが、全身にくまなく走る。

(雷撃の直撃は……かなりきつい……！)

……反省の多い狩猟であった。

油断が招いた被弾。

そこから完全に崩された。

ソロであれば、死んでいたのはこちらだった。

シヨウコのカバーがあり、何とか生きながらえたけど。

(反省はまたするとして……最後は妙だったな。)

雷を纏った、ジンオウガの強化状態。

正直、あの状態をキープしながら一刻ばかり、常に猛攻は続いた。

撤退もせずに、とにかく激しい攻撃の連続。

俺達は、よく耐えられたと思う。

そして最後。

ようやく強化状態を振り切ったかと思えば、結構あつけなく死んだ。

あの目……。

あの血走った、得も言われぬ不気味な赤い目。

あれは果たして、正常な状態だったのだろうか。

無尽蔵とも思える体力。

身体能力や攻撃の威力は、まあ前回の個体といい勝負だったと思う。

ただ、そのスタミナは異常だった。

(ギルドに、一応報告しておくか。)

これまでも、モンスターが撤退せずに苦しめられた戦いはあった。

例えば、初めてのデインバルド戦。

いつまでもも続くかと思うほどの猛攻に、死ぬ寸前まで追い詰められた。だが、あれは俺が弱かったこと、デインバルドのしつこいまでに敵を倒さんとする性格。

そこを考えれば、まあ納得できる。

ティガレックス戦も、そうだった。

いつまでも続きそうな戦い、スキも見えない相手に、とても苦しめられた。

だが、あれはティガレックスも追い詰められていた。

少なくとも、子ガムートのいる群れを襲うほどには、ヤツは飢えていた。

生きるために、俺を倒そうとする。

そんな必死さが感じられた。

だが、今回のジンオウガは違う。

確かに、俺はとちった。

そのせいで、ジリ貧になるまで追い込まれた。

だが、攻めきれていなかったのはあちらも同じ。

無双の狩人、と呼ばれるには、引き際も心得ていると勝手に思いこんでいたけど。

前回は、セツヒトさんのヘビイボウガンのタコ殴りに、たまらずすぐ撤退したわけだし。

「……ご主人様ー!!信号弾、オツケーです!!」

「あー!ありがとう!」

……まあ、とりあえず考えるのは後にしよう。

お互いに生きている。

今はそれでいい。

白み始めた空に、高く舞い上がる信号弾を確認して。

俺はシヨウコとともに、移動集落のある方向に歩き始めた。

* * * * *

「……多分、こつちだな。」

「分かりますか?ご主人様。」

「ああ……ギフトの力だけ。」

「その力、ホンマ色んな人らに広めるのやめた方がええですねえ……。」

「そうだなあ……。」

シヨウコと何気ない会話をしながら、草原を歩く。

小高い丘を目指し、そこから周囲を見回しても、一面の草っ原。

遠くに山が見える、そして所々に低木や岩。

以上。

……俺は早々に諦めて、マップを頼りに歩くことにした。

移動集落の場所は分からないと思っていたが、ムーファの群れがいたことを思い出す。

それを感知したマップを見て、辿ればいい。

初めからこうすりゃ良かった。

無闇矢鱈に使うことはやめておこうと決めはしたが、誰が見ているわけでもないし。

「お……シヨウコ、見えたぞ。」

「あ、ホンマや！あー……ようやくですねえ……朝やのに疲れました……。」

「疲れているとこ悪いが……着いたら、報告と振り返りをしよう。ハンザさん達も心配しているかも知れない。」

「了解です！」

移動集落に近づくと、向こうからガーグアの引つ張る御者が見えた。
おじさんだ。

「おーい!!無事かー!!」

「無事でーす！」

「あー!よかったー!!」

オジサンの顔を見るのが久々な気がする。

つい昨晩には話したのにな。

内容の濃い狩猟だった。

「いやあ!さすがソウジさん達だ!信号弾を見るまではハラハラしたが、良かったぜ!!」
「いえ、お迎えありがとうございます。」

「すまねえな、信号弾を見た瞬間に走り出そうとしたんだけどよ。商人仲間に止められちまつてなあ。確かに、こんなただっ広い草原じゃ、見失うかもしれねえしな。」

「確かに、大変だと思えます。」

「そしたら村の見張りのやつがやたら目がいいもんで、ソウジさんたちを見つけてないやあ、安心したぜ！」

俺たちも安心した。

おじさんの笑顔で、少しホッとする。

「……ソウジさん!?何か、焦げてねえか!？」

「ははは……雷撃にやられまして……。」

「うわあ……考えたくもねえわ……よく無事でいたなあ……。」

俺もそう思います……。

……。

……。

「失礼します、ハンザさん。」

「失礼します！」

「ああ、入って楽にしてくれ。本当にご苦労だった。」

御者のおじさんに車に乗せてもらい、集落まで直行できた。

車に揺られるのが、意外と辛かった。

全身を動かされ、体中の痛みが強くなってしまった。

おかげで着いた頃にはなかなか歩き出せず。

御者の周りに集まっていた人々にたくさん心配されてしまった。

面目ない。

「辛そうだが、平気か？」

「あ、大丈夫です。外傷自体は殆ど無いです。」

「傷を甘く見ないほうがいい。よかつたらもう一泊していくといい。出来得る限りのもてなはしよう。」

「お言葉に甘えたいんですが……ギルドにすぐに報告したいこともありまして。今日、発ちます。」

「……………そうか。わかった。」

意外や、残念そうな顔を浮かべるハンザさん。

少し憂いを帯びた顔がまたかっこいい。

イケメンは何してもイケメンである。

「……………ここから北に……………どれだけかはちよつと分かりにくいんですが、ジンオウガが倒れていると思います。」

挨拶もそこそこに、報告に移る。

「おそらく、既に回収班が向かっているかと。」

「誘導などが必要だろうか。」

「多分必要ないと思います。あの人たち、そういうのを探すプロですから。」

「わかった。では、ギルドからの報告を待とう。……………ムーファたちも、新しい草を食べさせなければならぬ。すぐにでも、移動を始める。」

昨日……というか昨晚移動して、もうすぐには、か。せわしない。

なんて俺が心配顔だったからか、ハンザさんが話し始めた。

「……心配には及ばない。我々は放牧の民。移動には慣れている。それに、ソウジ殿、ショウウコ殿が、あの雷狼竜を屠った。安心してまた生活できるというだけで、ありがたい。……礼を。」

「い、いやいや、ウチはそんな……。」

顔を赤くして手を。パタパタとするショウウコ。

イケメンパワー、炸裂。

芸能人を前にした主婦のごとし。

「……また、凶悪なヤツが出たら、教えて下さい。……ハンターが、必ず力になります。」

「ああ。ワサドラギルドにも礼を伝えよう。素晴らしいハンターの派遣に、な。」

「あ、ありがとうございます。」

「……なぜソウジ殿が礼を言うのだ。……面白い。」

笑うハンザさん。

ニコツと笑顔。

いや、これでシスコンなんだから、神様もなかなかバランスを取っている。

……そういえば最近女神様とコンタクトしていないな。

いや、別にしたいわけではないけど。

「朝食を用意する。しばしの間だが、ゆっくり休むといい。」

「ありがとうございます。」

シヨウコと礼を言い、そこからはしばらく歓談しながら朝食を食べた。

肉料理をメインにかなりの量を出してきて、正直言うときつかった。

集落の人々が代わる代わる差し入れを持ってくるので、無下に断るわけにもいかなかった。

こうして俺とシヨウコは、満腹で御者に乗り込むのだった。

恐るべし、放牧の民。

* * * * *

ガラガラガラガラ……。

「辺りを警戒しますが、とりあえず最短距離で行きましょう。」
「おうよ！任しとけ！」

ガーグア車の中で、俺とシヨウコがゆったりと座る。
だめだ、もう食えない。

「ものすごい量の食事でしたね……。」
「シヨウコは少食だもんな……。」

結局食べきれない食事は、持ち帰ることになった。

スープ系は無理だとして、様々な肉料理……ムーファの腸詰めや骨付きのこんがり肉、根菜を甘辛く炒めたものまで、包んでくれた。

帰ったらまた美味しくいただくでしょう。

今は無理だけど。

腹がいつぱい。

「でも……あの族長さんのお願い、どうしましょうかね……。」

「ああ……あれか。」

食事を取りながら、ハンザさんにとあるお願いをされた。

「もしハンズを見かけたら、一度こちらまで顔を出すよう伝えてほしい。」と伝言を頼まれたのだ。

もし見かけるも何も、おそらく今日中には顔を合わせるんだろうけど……。

「とりあえず……帰ったらハンズに事情を聞いてみるか。」

「そうですね。何か言いにくい事があるかも分かりませんし。」

「じゃあ、シヨウコ。ジンオウガの狩猟の振り返りをおこう。」

「はいっ!」

そこからひとまず頼まれごとを忘れ、シヨウコとジンオウガ戦の反省を始めた。

成果としては、明確なピンチに陥ったが、勝つことができたということ。

そして対応を早くすることで、移動集落の人たちへの直接の被害がなかったことが挙げられた。

課題としては、まずやはり油断。

そんなつもりは無くても、俺たち二人で何処か「ディノバルドよりは遅いな」などと考えていた。

そして指示が遅れ、シヨウウコの回避が遅れ、俺の負傷に繋がった。

慢心……しないと言っていた、してしまった。

これは大いに反省である。

「……すんません。ウチ、足引つ張つてもうて……。」

「そんなことはないぞ。シヨウウコが居なかつたら、そもそも俺は死んでいる。狩りの際の動きは、そこ以外は完璧だったしな。」

そうなのだ。

シヨウウコは、今回、ダメーヅらしいダメーヅを食らっていない。

回避だけなら、正直セツヒトさんとかその辺りの領域にいる。

身体能力が高く、更に技術や読む力も付いてきた。
これはいい傾向だ。

「これからも、よろしくおねがいます、シヨウコ。」

「いやいや、ウチこそ……。」

いや、本当にすごかったんだもん。

そりゃ褒めるよ。

「最後に……ウチから一つ、ええですか？」

「ああ、いいぞ。おじさん、まだ時間ありますよね？」

「ああ！ペースは早いが、まだあと3時間ってところだな！」

充分すぎる。

「ありがとうございます……で、シヨウコの話は？」

「ええと……これは勘……なんかなあ。外れてたら申し訳ないんですけど……。」

「いいぞ、そういう意見も大切だと思う。」

「じゃあ……ジンオウガ、何か今回、切羽詰まってきました？」

「……………ああ。確かに。俺にも、そう見えた。」

シヨウコも同じことを思ったか。

うん、ちよつとおかしかった。

「うまく言えないんですけど……今までのウチの経験からして……大型って、こつちを舐めてかかってくるんです。ウチ、ちつこいし、力も無い。こう、こつちをもてあそぶ？みたいな。余裕……ともちゃうんですが。何か、そんなが無かった、です。」

「……………こつちをただ捕食する対象にしかない、そんな雰囲気では無かったな。」

「そう！そうです！……始めから本気やったというか……ここでウチらを絶対に倒さんといかん！みたいな。そんな感じでした。」

「うーん……………」

理由を考えても分からない。

分からないが、違和感を感じる。

今までの狩猟の経験。

バサルモス……ティガレックス……ディノバルド……色んなモンスターを屠つてきたが、ジンオウガはその中でも賢い方だと思う。

なぜ撤退を選ばなかったのか。

そんな余裕は無かった……？

いやでもなあ。いくらでも出来ただろうに。

もちろん逃しはしないけど。

「……俺から、いいか？」

「あ、おじさん。どうぞ。」

二人で考え込んでいると、手綱を握るおじさんが会話に参加してきた。
何か予想がつくのだろうか。

「いやな？……ジンオウガの気持ちになってみちやどうかなんて思つてよ。」

「雷狼竜の？」

「ああ。」

モンスターの、気持ち。

考えたことも無かったけど。

「夜に現れたる？ソウジさんのモンスターを見つける力は大したもんなのに、それを掻い潜って昼間は潜伏してたんだ。」

「はい。」

「相当慎重で、狡猾なやつだと思っていいよな。何せ、無双の狩人なんて呼ばれるやつだしな。」

「……………」

俺もショウコも、黙って耳を傾ける。

「俺ら素人からしたら、ソウジさんやセツヒトさんみたいなハンターなんて、どんだけ強えか予想もつかねえが……誇り高い狡猾なモンスターならよ、そんなハンターを目の前にして……どう思うかってな。」

「……………ウチなら、逃げ出しますかねえ……。」

「だろ？ だけどジンオウガは自負がある。『俺が最強のモンスターだ！』 ってな。」
「……………」

「ソウジさんを見て、『ここでやらねえといけねえ！』 って思ったんじゃないの？ 俺は仕事柄、世間の色んな話を聞いてきたが……ティガレックスをソロで殺れるなんてヤツ、見たことも聞いたこともねえぞ？」

なるほど。

おじさんが言いたいことは分かった。

相手は誇り高い無双の狩人、雷狼竜ジンオウガ。

だが生きるため、周到に夜間を選び、奇襲を試みようとした。

しかしそこに突如としてやってきた強者。

初めから本気を出す理由にはなるか。

俺がそんな強者として認識されたなら、 فقط。

「…………俺、そんな強くないですよ？」

「……………」

「えっ!? 何? ふたりとも黙って。」

急に静かにならないでほしい。

「シヨウコの嬢ちゃん……おめえの主は、とことん鈍いのなあ。」

「ウチ、その辺もう諦めてます……。」

「何の話をしてるの二人で。」

蚊帳の外感。

二人で話を進めないでほしい。

……寂しくなっちゃうだろ！

「いいか、ソウジさん。この際だからはつきり言うけどよ。おめえもうちつと自覚したほうがいい！強えに決まってんだろ！このストトコドツコイ！！ソロでテイガレックスやゴシヤハギに挑むのはな、世間一般では自殺って言うんだよ！自殺！……それを、そんな平気な顔してやってのけるのは、強え以外何者でもねえっーの！！」

「は、はあ……。」

「あんたは明らかに強者！まちがいねえ！それに周りをよく見てみろ！！……そんなやつ

を放っておくわけねえだろうが！」

シヨウコが照れている。

何だよ。

「ウチも、強くなったつもりです。でも、それはオトモとして、できる限りの強さですよ？……アイツの猛攻を負傷しながら避けまくる……何ならカウンターもかまして……そんなん出来る人、まずおらんですつて！……かつこよすぎます……（ボソツ）」

最後に何を言ったか分からなかったが。

そうか。

俺も強くなったんだな……。

「だからよ、そんなソウジさんを前にして、ジンオウガも必死こいちまったんじゃねえかってな。あれだろ？倒れてからは割とあっさりトドメまでさせたんだろ？」

「はい……そ、そうです。」

「ならそういうことじゃねえか？……いやー、致命傷まで食らわせておいて、ジンオウガ

も悔しかったろうなー……つと、素人ながらに予想したわけだ。」
「なるほど……。」

筋は通る。

……まあ、今回はそんな所で落ち着こう。

これ以上は、何か褒められ過ぎて、むず痒い。

「シヨウコの嬢ちゃんも、もつとグイグイ行かねえとな!!」

「ちよ、ちよっとおじさん!!なにゆうて——」

「コイツに問題あるかと思っただが、おめえらもアレだ!もつと積極的に——」

「も、もうっ、うっさい!!」

「わっ!!何するんだこら!!や、やめっ……ひ、ひひひひひ!!」

シヨウコが何故かおじさんに飛びつき、コチヨコチヨし始めた。

何か照れ隠しのようにも見える。

「ガ—」

「グアー。」

ガーグー達が鳴く。

それは……慌てているのか？

……まあ、平和で何より。

その後、おじさんの手綱が大変なことになり、ガーグーたちが混乱する一幕もあったが。

無事にワサドラに帰り着くことができた。

眠いけど、これからギルドに報告に行こう。

もう一つ気になる事。

あの、赤い目。

……不気味だった。報告するに越したことはない。

俺とシヨウコはおじさんに礼を言い、ギルドに向かうのだった。

125 家族の事情を知りましょう。

時刻はもう昼過ぎ。

飯も食わず寝てもおらずフラフラだが、ジンオウガ討伐の報告までは終わらせておきたい。

何かキリ悪いし。

俺って仕事熱心だなあと思わなくもない。

付き合ってもらおうシヨウコには申し訳ない限りである。

「あ、ハイビスさんおりましたよ！」

「お、ホントだ。」

とは言っても元気なシヨウコ。

すぐにハイビスさんを見つけてくれた。

もう少しすると人が増えてくる時間帯。

まだ今は、ギルド内はハンターの数は少ない。

とはいえちらほら見かけるハンター達の格好は、相変わらず無骨。

見た目なら完全にあちらの方が強い。

多分ハンターランクだけで言うなら、俺の方が上かもしれないけど……やっぱり見た目って大事だよなあ。

「……俺もムキムキのゴツゴツ装備に変えてみようかなあ。」

「……ご主人様は絶対似合いません。ウチが保証します。」

「……………だよなあ。」

ま、まあ見た目とか関係ないし！

……族長さんのスラツとした、かつ胸板の厚い感じは、とてもかつこよかつたからな

……。

いかん、あてられている。

とつとと受付に行こう。

「……………はい、狩猟、お疲れさまでした。次の方……あつ、ソウジさん！」

「どうも、今戻りました。」

「お疲れさまでした！ジンオウガの討伐、報が届いております……シヨウコちゃんも、お疲れさま！」

「はい、ただいまです！」

元気だなあ、シヨウコ。

正直俺は、早く寝たい。

「……………ソウジさんは、お体大丈夫ですか？」

「いやあ、ジンオウガの雷にやられました。あれすごいですね。意識飛びそうでしたよ。」

「えっ!？」

「えっ。」

固まるハイビスさん。

振り返ると俺の報告を聞こうとしているのか、ハンター達が20人ぐらい囲っているのだが……。

何か全員固まっているような。

一瞬の静寂の後、ハイビスさんが俺に問い正してくる。

「ジ、ジンオウガの雷撃を食らったんですか!？」

「は、はい。こう、ビリビリドガツ、と。」

「な、なんで無事なんですか!？」

「何でと言われても……すぐにウチケシの実を飲んで、回復薬で、こう、何とか。」

「えええ……。」

頬が引きつるハイビスさん。

「やっぱりご主人様すごいんや……。」とシヨウウコが呟く。

周りのハンター達も、ヒソヒソ声が止まらない。

なして？

「……ソウジさん、いえ、私も文献でしか見たことが無いですが……ジンオウガの雷撃を食らって無事に帰られた方は、殆どおりません。」

「えっ!?!……じゃ、じゃあ俺なんで無事なんですか?？」

「私が聞きたいです!もう……驚かされることなんて無いと思っていたのに……。立つ

てみてください。」

「は、はい。」

言われるがままに、その場に立つ。

ハイビスさんが受付台をぐるっと迂回して、俺の目の前にやってきた。

サワサワ。

ぺたぺた。

……何で触られてるの俺。

「なるほど……外傷はないようですね……骨は？」

「いや、そういう痛みでは無いような……とにかく筋肉ですね。全身の筋肉痛が、ひどいです。」

「この辺ですか？」

「いでっあふん。」

変な声出た。
恥ずかしい。

「す、すみません……あ、その辺めっちゃ痛い。」

「……後で一応医務室で診てもらいましょう。……無事で良かったです……。」

そこから聞いた話では、ジンオウガの雷撃を食らった場合は、よほど面子に余裕がない限りは撤退推奨らしい。

俺とシヨウコに撤退の余裕は無かったし、そもそもするわけにはいかなかったわけ
で。

「前代未聞です。」

「はい。」

何で怒られている風なの俺。

「……ご主人様、強い敵と戦いすぎて肉体がおかしくなったんとちやいますか？」

「そんな人をモンスターみたいに言うな……怖くなってきたわ。」

「ま、まあ、あのセツヒトさんも、獄狼竜……ジンオウガの強化亜種の雷撃を食らって無事でしたし……ありえない話では無いでしょうね……。」

「ご主人様……バケモンクラスのハンターになってますよ……。」

「シヨウコの回避具合も控えめに言っておかしいと思うがな。」

お互いを化け物扱い。

いやーつよくなったなーおれたち。

「……詳しい話をお聞きしたいので、場所を変えましょう。……はい！ハンターの皆さん！どいて下さーい！」

「ええー。ソウジさんの話聞きたかったのにー！」

「あの人があの噂の……。」

「マジでいたのか……狩り場変えてよかったー！」

取り巻きのように俺の座る後ろにたむろしていたハンター達がザワザワしだす。

それをハイビスさんが一声で解散させる。

おお、ハイビスさん牧羊犬みたい。

「では、シヨウコちゃん、ソウジさん、こちらへ。」

「はい。」

「はーいー！」

ハイビスさんに連れられ、個室へ向かう。

「ソウジさん！後でサイン下さい！」

「ジンオウガの話を！後でぜひ！」

「あー！私もー！！」

ハンター達が叫ぶのが聞こえる。

なんか、有名人なのか？俺。

……とりあえず個室に駆け込んだ。

……………。

.....。

部屋に入って一段落。

しかし何だったんだあの人たち。

「何で俺の報告の後ろに人だかりができてたんですかね？」

「.....ソウジさんのファンの方々ですよ？あれ。」

「あ、そうなんですわね.....ええ!?ファン!？」

「はい.....どうやらティガレックスの討伐の話がここに来て段々と広まってきまして.....。数日前から結構な数の方々が『ソウジさんというハンターはいますか』って、聞いてくるんです。」

「マジですか.....。」

「マジです.....。」

なんてこった。

これは予想外。

「シヨウコちゃんの方々は、こう、節度があると言いますか……扱いも楽なんです。ですがソウジさんの方は……何か怖いんです。」

「こ、怖い？」

「ええ……私達が情報を絞りに絞っていたからか……こう、謎の存在として逆に注目を浴びているようです……コアでマニアックな方が多い印象、ですね。」

「はあ……。」

「どういふことだろう。」

「……いや、何かわかるぞ。」

「前世の頃も、様々な芸能人やアーティストのファンはいた。」

「それはこちらでも同じ。」

「セツヒトさんやシヨウコ、何なら神様方も含めて、そういう人？たちはいる。」

「ところが俺の場合、シガイアさんを始めとするギルド全体で、俺の力を秘密にしていた。」

「ギルドの後処理も基本、ハイビスさんかヒナタさん。」

「二人が俺の情報をおいそれと漏らすわけではない。」

それだけ優秀な方々だ。

そしてファンというのは少しでも情報が欲しいもの。

遂にはワサドラにまでやってきて、ギルドに質問までかましてきた、ということか。あれだな。

俺も高校時代、そういう秘密めいたアーティスト……周囲は中々知らないようなその人たちのファンの子がいた。

偏見かもしれないけど……コアでマニアックだった。

一度話し出したら止まらなかった。

ついでに言うと、その子は私服の時、アイシャドウが異様に深かった。

「……………気をつけます。」

「はい、それがいいと思います……。シウウコちゃんも、気を付けてね？すごい人なんか、ソウジさんの事をたくさんメモにして、シウウコちゃんの里にまで現れたらしいわよ……………」

「うわあ……………ウチ関係無いですよん……………」

「いや、大いに関係あるぞ。俺の相棒だからな……………これは俺の前世の経験だが、そういう系のファンの人って、何でも知りたいんだよ。ギルドが完璧に俺達の事を秘匿してくれ

たからこそ、こんな感じになったのかも。」

下手したら、モンスターよりも恐ろしい話を聞いてしまった。
気を付けていこう。

「あつ……そういえば、宿は大丈夫ですかね……？」

「そうなんです。そこも心配で……最近新しい方が入られたそうで、一応満室らしいんですけど。夕飯時は人がたくさん来ますよね？」

「はい、一応夜は飯屋もやっていますからね、あそこ。」

新しい方とは、多分ハンズのことだろう。

宿「ホエール」は、夜は一応食事処としても営業している。

教官は、俺がいない間度々お金を落としてくれていたらしいし。

それはありがたかったんだが……。

「……ホエールさんには伝えておきました。変なのが来たら、柔らかく追い返してください、って。」

「ありがとうございます……ドールを傷つけるようなヤツが居たら、俺、どうなるかわかりません。」

「おお……愛や……。」

そりやそうだろ。あんないい子、普通そこらにいないぞ。

「まあファンの方ならそこまでは無いと思いたいですけどね。お気をつけください。」
「はい。」

まあ不特定多数の人々なんて、警戒してもしようがないんだが。

俺はいいとして、ギルドや宿の迷惑にならないようにしないと。

宿は変えたくないんだよなあ……でもホエールさんたちに迷惑かけたくないし。

……少し考えるか。

……………。

「これにて報告は終わりですね。お二人とも、本当にお疲れ様でした！」

「はいー」

「ありがとうございます、ハイビスさん。」

お似合いの受付嬢の制服をビシツと決め、挨拶をしてくれるハイビスさん。そういえばこの人にもかなりのファンの人がいるはずだ。

……神様連中みたいにファン同士の抗争とかないよな……。

いや、無いと信じよう。

「あ、そういえばハイビスさん。一つだけ。」

「は、はい。何でしょうか？」

気になったことを伝えるのを忘れていた。

「いや、そのジンオウガなんですけど、ちよっとおかしかったんです。」

「おかしい？ どういうところがですか？」

「さつき言ったように、狩猟中一度も撤退する姿勢を見せませんでした。まあ、無くは無いですけど。それに、様子が変でした。」

「様子？」

「はい……ジンオウガとは2回しか対峙したことないですけど……目が、真つ赤で。」

「真つ赤……。」

「充血なら、極度の興奮状態であるとか説明はつくんですけど……そんなことって、あるんですか？」

「……………」

右手を口に当て、考え込むハイビスさん。

こめかみに少し力が入り、真剣そのもの。

少し間を開けて、ハイビスさんが話し始めた。

「狩猟中、ずっと、ですか？」

「あ、いや……どうだったかな……例の雷撃で視界がブレることがあって……でも、比較的狩猟の最後らへんだけかな……シヨウコ、どうだ？」

そういえばシヨウコに聞くのを忘れていた。

シヨウコの方を見る。

だが、シヨウコの返事は完全に予想外のものではあつた。

「……ウチ、目が赤いなんて、気づきませんでしたよ?」

「へ!?!」

どゆこと?

「い、いや、赤かつただろ!?!最後の……倒れる寸前とか、特に。」

「ええ!?!……いや、後ろにばつかおつたからかもですけど……目には特に違和感、感じませんでしたね……。」

「んん……?」

俺とシヨウコの言い分が食い違っている。

これではハイビスさんも判断がつかない。

「……分かりました。一応、私の方でも調べてみます……他に思い出したことがあれば、また教えてくださいね。」

「りよ、了解です。」

「す、すんません。目、赤かったかなあ……。」

とりあえずここで報告は終わりになった。

……と思つたら。

「あー！ハイビスさん!!ウチからも報告があります!!」

「しよ、シヨウウコちゃんからも?な、何かしら。」

「その前に……ご主人様は出て行ってください!!」

「え!?何で!?何の報告!？」

「それが言えんから出て行って欲しいんです!!」

「ええええ……。」

何かシヨック……。

とぼとぼと個室を出て行く。

出た瞬間、ギルドにいたハンターの人たちに取り囲まれた。

コアな方々かと警戒はしたが、どうやら狩猟のことを聞きたいということで、立ち話

で対応した。

ジンオウガの雷撃をどう食らって回復したのか、そこについて質問が相次いだ。

ギフトで何とかかなりましたなんて正直に言うわけもなく、シヨウコにウチケシの実を食ばさせてもらったと誤魔化しておいた。

受け答えしながら、シヨウコ達は一体何の話をしているのかめっちゃ気になった。

どうするか……こうなったら、くすぐりの刑でもシヨウコにかまして、根掘り葉掘り聞いてやろうか……。

『えー！?!?!ソソソウジさんが、い、イケメン好き!!?!?』

『しいー！?!?!声が大きいです!!!』

個室から響く、ハイビスさんの大音量の声。

……丸聞こえである。

前言撤回。

シヨウコに聞いたただすのはやめておこう……。

今の発言を聞いてか知らんが、取り巻きの方々もそくさと俺から離れていく。

ちよつと待つて。誤解、誤解なんです。

……え、何でその男性は目を逸らして逃げていくの!?

しばらくして出てきたシヨウコとハイビスさん。

ハイビスさんは何故か放心状態。

……シヨウコ、あとでお説教な。

* * * * *

「うう……耳があ……耳が痛いです……。」

「自業自得だ。こんちくしょう。」

「いやあれは報告せないかんことでした……。」

医務室に寄つて体を診てもらい、ギルドを後にした俺たちは、その辺で昼食を買つた。お医者さんからは、ウチケシの実を煎じた薬を処方された。

宿で適当に食べて、薬飲んで、早々に寝てしまおう。

うん、そうしよう。

ついでにシヨウコへのお説教&お耳ピンピンの刑も執行しておいた。

おかげでこっちは男色野郎一直線である。

いや、そういう方々を否定しているわけではない。

愛の形はそれぞれだし、別に偏見があるわけでもない。

ただ、そういうセンチティブなことをペラペラと話すその根性。

これは教育である。

「うう……ごめんなさい……ご主人様……。」

「分かればよろしい。俺はノーマル。あの時は……イケメン過ぎるあの人が悪いんだ。」

「ハンザさんですか？」

「そう。ハンザ族長。シヨウコもちよつとときめいていただろ？」

「そ、そんなことありません！ウチは……ご主人様一直線です!!」

「はいはい。」

「う、ウチの二世一代の告白が……。」

何か言ってるが、知らん。

「だがまあ……コアなファンの方々が、この噂を聞いて俺から離れてくれるなら……」

まあいいのかも知れないけどな。」

「そ、そうですね！ウチはそれを狙ってたんです！」

「……………嘘をつけ！この！」

「ひゃーや、やめて下さいいいい！じよ、冗談！や、やあん！ひひひひひひ！！」

再びの耳ピンピン脇コチョコチョコの刑。

公衆の面前だが、構うものか。

シヨウコはわざとらしく、地面に女の子座りでヘナヘナしていた。

「うう…………ウチ、もうお嫁にいけへん…………。」

「…………ほら、アホやってないで宿に帰るぞ。ハンザさんとハンズのこともあるし、考えることも多いんだから。」

「私がかしましたか？」

「のわあ！！」

突然後ろから声をかけられて、二人して驚いた。

…………え!?ハンズ!?

「は、ハンズ!？」

「い、いえ、宿の外が騒がしいなあと出てみたら、ソウジさん達がいたもので……。そ、それに今、兄の名前が聞こえたんですけど……。」

「あ、ああ……。」

ナイス&バッドタイミング。

イケメン族長の愛する妹君が、宿の前に現れた。

* * * * *

「そうですか……移動集落に行かれたんですね……。」

「ああ。まさかハンズがそこ出身とは思ってもよらなかったけど。」

「ちなみにご主人様は、ハンズさんのお兄さんにときめいてました!」

「まだ言うか。」

もう怒る気にもならん。

「……………兄と話してみて、どうでしたか？」

「うーん……………若いのに族長というだけあって、かなりの威厳を感じた。」

「そうなんですよね……………傍から見るとそのように映りますよね……………」

「……………あと、ハンズのことを相当大切な様だった。その、なんとというか……………結構な具合で。」

「そうなんですよね……………」

遠い目をしているハンズ。

……………やはり集落から出てきた原因はそこなんだろうか。

「兄の私への溺愛ぶりは……………私が言うのも何ですけど、異常だと思えます。いえ、嬉しいんですけど……………あそこを出てきたのは、それが理由の一つです。」

「やっぱりそうやった……………」

「一応伝えておくと、ハンザさんは一度顔を見せて帰ってきてほしいそうだ。」

「……………分かりました。」

大きな目を細め、真剣な表情で頷くハNZ。

今日の格好は、ハーフパンツにTシャツというラフなスタイル。

たしかによく見れば、鼻筋とかお兄さんそっくりである。

……とにかく伝えるだけ伝えた。

本人がどうするかは分からないが。

そんなハNZは、ふう、とため息をつく、ここに来るまでの経緯を話し始めた。

「……兄ときたら、私が嫁に行くまでは絶対に結婚しないと言うもので……私もその辺ちよつとまずいなあとと思って……それに、小さい集落に閉じこもるのも、少し嫌で。腕には自信があつたので、ハンターになろうと。」

「……なるほど。」

族長のシステムがどういふものなのかは分からないけど、世襲と言うなら、結婚の話題は付きまとうもの。

そこに妹が理由で拒むとか、あつてはならないだろう。

今の所、ハンザさんの株はストップ安である。

「兄はあんな感じですから、引く手は数多あります。」

「確かに……演劇業界とか進出したら、いい線いくだろうなあ。」

「はい、めっちゃイケメンさんでした。」

「ええ、モテるんです。それは、もう。……私も自分が集落の邪魔になっっているんじゃないかなにかって思つて……。いえ、集落の人はとても優しいんですけどね。」

大体の事情は飲み込めた。

大方予想通りだったな。

家族の事情に、これ以上首を突っ込むのもアレだし。

ハNZは近々、集落に顔を出すとのことだった。

話をつけて、兄には祝言をあげてもらおうという。

「私のことはいいですから。とつとと結婚してください。」とでも言うのだろうか。
………どんなリアクションをするのか、少し気になった。

「めっちゃ泣いても、それはそれでかっこいいんでしょうねえ……。」

イケメンはイケメンである。
シヨウコの言葉がしっくりとくる俺であった。

126 夢の中で逢いましょう。

明晰夢というものがある。

夢の中で自分の意識をはっきりと持つことができる、という状態だ。

俺も何回か経験があるが、あんまり上手くいかないことが多い。

何でもやりたい放題かと思いきや、意外と不自由。

そんな感じ。

「……………これは明晰夢だと思っただけどなあ……………」

そして今、俺はその状態である。

昨日ハンズと話した後、遅めの昼食をとり、薬も飲んでから就寝。

……………だが、目を覚ましたらまだ夢の中。

意識としては、完璧に起きているのだが。

夢の場所は、ワサドラギルド内。

石造りの無骨な建物の中、受付やクエストボード、向こうに見える酒場まで、いつも見る光景である。

だが、誰もいない。

異様だ。

ちなみに、空を自由に飛びたいなど願ったら、頭に例の竹トンボ的な不思議道具が付けられ天井にぶつかかった。

痛くはなかったので……夢だな、コレ。

自分をコントロールしにくいということも含めて。

さて、この状況。

一体どういふことか。

………まあ大体察しは付くんですけど。

「……………女神様？いますっ？」

もうかれこれ一年以上の付き合いになる。

あの方のぶつ飛び具合はもう慣れに慣れているので、こんなもんじやあ驚かない。

多分あの女神様の仕業じゃないかなーと踏んでいる。
そして俺の予想は的中した。

「女神様?……いないなら勝手に起きますよー。」

「そんな殺生な。」

「のわあ!!……い、いたんですか!?!」

「驚かないと言われ、ムツとしたもので。」

「やるのが小学生レベルですよ……。」

周囲を眺めていたら急に後ろから声をかけられたので、驚いてしまった。

「驚かせてしまいましたして申し訳ありません。今回は現世に顕現することが難しく、夢の中にお邪魔いたしました。」

「いえ……それはいいんですけど……その格好、何ですか……?」

女神様は、大体白いワンピースに黒髪ロングストレートという……まあ男の俗な理想そのままの姿をしていることが多い。

美人だし似合い過ぎで、正直直視できないほどである。

前回は割烹着に三角巾を頭に付けて、純和風美人という出で立ちだったのだけど、
ところが今目の前にいる女神様。

……何ちゆう格好だよ……。

「……何で怪獣の形した服着てるんですか？」

「双治さんに見て頂きたく、このように。いかがでしょう。」

「いや、奇抜すぎて突っ込めないというか……ていうか、え!? これ……デイノバルドですか!？」

「はい。可愛くデフォルメしてみました。」

「はあ……。」

顔から下。全身デイノバルドを模したバジヤマのような服。

素材は……柔らかそうだし、着やすそうである。

フードあり、その周りにはヒラヒラした牙がギザギザについており、被るとデイノバルドの頭のようになる作りだろう。

そしてデイノバルドの最大の特徴である尻尾は、モッフモッフな作りに変貌。

ぴよこぴよこと生き物のように動いていて……その、何というか……。

「どうぞでしよう。」

クルツ。

「むう……。」

悔しい。悔しいが……。

めっちゃかわいい。

凛々しい女性がガッツリかわいい格好でハズしに来る感じ。

学校の真面目系で気になってた女の子が、ズレた私服着てきた感じ。

「お褒めいただきありがとうございます。開発した甲斐がありました。」

「へ!?!開発!?!」

「最近商品展開もはじめまして。これはパジャマです。」

「ただ手広げるんですか。」

商売もそこそこにしないと、そろそろ俗っぽ過ぎて神様の威厳とか無くなりそうですよ？

「新たな金もう……双治さんのお力になれることは無いかと模索した結果、このようなグッズの展開をすることに致しました。」

「今金儲けつて言いかけましたよね？」

「正しくはポイント稼ぎでした。」

「どっちも変わりませんよ……。」

「双治さんの狩猟の様子が、神様SNSで大々的に拡散されて。実は、モンスターの方も非常に人気が高まっております。」

「あ、そうなんですか。」

ちよつと気になる。

モンスターも、神様達からしたら可愛いものなのだろうし。

「今のところ人気なのは、このデイノバルド。そしてティガレックスです。このパジャ

「マは限定販売ですが、2分で完売いたしました。」

「2分で。すごいですね。」

「プレミアが付いており、転売も横行しそうです。」

「うわあ……。」

神様世界にも転売とかあるのか。

随分と俗っぽい話である。

「ですが、アカウントと製造番号を紐づけております。神様SNSのアカウントは簡単に発行できるものではありません。」

「あ、対策はしているんですね。」

「転売厨は○ねばいいと思ってています。」

「発言に気をつけて!?!」

仮にも神様でしょう!?

……仮じゃねえや。この人神だったわ。

もうフランクを通り越して親友の様ですらあるけども。

「更に、このようなものも作ってみました。」

ゴソゴソ。

女神様が、デイノバルドパジャマを胸元から掴んだと思ったら、いきなり。
脱ぎ出した。

「ちよっ!?えっ!?何してるんですか!!?」

「いえ、もう一つの格好を見て貰おうかと。」

「いや、スパツと替えられるでしょう!?神でしょアナタ!!俺のギフトみたいにやっつけてく
ださい!!」

「双治さんの戸惑う姿が見たくて。」

「確信犯かよ!!」

ゴソゴソ。

俺の前で下着一丁になって、再び何かの服を着出す女神様。

女神様の公開お着替え見たことのある奴なんて、後にも先にも俺ぐらいなもんだろうな……。

……ちなみに、俺は目を覆ったり後ろを振り向いたりなどはしていない。

あまりにも美しいので、魅入ってしまった。

「やはりむつつりスケベですね、双治さん。」

「……すいません……。」

「謝られても。……はい、お待たせしました。」

「お、おお……これは……。」

着替え完了。

目の前には、ハイビスさんがよく着ているギルド受付嬢の制服を着こなす女神様がいた。

……え!?これ作ったの!?

「夢中になりすぎまして。細部まで再現するのは大変でした。」

「一から作っただんですか!？」

「資料が映像だけというのは、中々骨が折れました。」

「すげえ……。」

裁縫の技術や縫製の仕方なんて俺にはよく分からないが……かなり完成度が高いんじゃないか?この服。

少なくとも俺には、粗などは見当たらない。

「どうでしょう。」

「ど、どうと言われても……。」

「……………」

「あっ!やめて下さい!心読まないで!!」

「……やはりスケベですね、双治さん。」

「のわああああ!!」

どんなことを考え、何を想像してしまったのか。

これはとても言えない。

言えるのは、女神様が格好似合い過ぎで、かつハイビスさんやヒナタさんのそれより、スカートの裾がかなり短めであった……ということだけ。

……俺は男だな、どこまでも。

「……さて、スケベ双治さんのスケベ妄想は置いておきまして、本題に入りましょう。」
「もうどうにでもして……。」

心の中を読まれ、辱められた気分。

もう何でもいいや……。

「双治さん、狩猟、お疲れ様でした。」

「あ、ありがとうございます。」

「雷狼竜ジンオウガ、こちらで大変人気の高いモンスターです。それを倒した双治さんが、またバズりました。」

「あ、そうなんです。」

「ですが。以前、申し上げた筈です。無理は禁物、と。」

「は、はい……。」

前回朝飯をご馳走になった時、言われたこと。
今回はどこか油断していた。

「お気を付けください。私でさえこの先、何が起こるか読めません。」
「へ？」

「その辺を含めてお話しておきます。」

そう言うと、いつもハイビスさんやヒナタさんが座る受付嬢の椅子に腰掛け、俺を手招きする女神様。

……受付台越しに話をしようと言うわけか。

わかりましたよ、女神様。

「お付き合いただき、ありがとうございます。」

「いえ。ここじゃないとできない話なんですか？」

「いえ、私がつてみたかったです。」

「そうですか……。」

「では、話を。」

ペラツ、ペラツ。

数枚の紙を受付台の上に並べる女神様。

これって、ギルドでよく使う用紙と一緒にじゃないか。

夢とは言え、凝ってるなあ。

「まず一枚目、こちらは今回の狩猟における各種データです。」

「なるほど。」

「狩猟の時間は言わずもがな、伸びております。」

「それはいいんですけど……何か、そこ以外も数値高くないですか？」

示されたのは狩猟前後三日間の数値。

この数値は、SNSで拡散された数だけでなく、閲覧数や検索数などを元に女神様が独自に編み出した値だ。

毎回その緻密さに驚かされるが……どういう訳か、狩猟中以外の数値も軒並み高い。

特に移動集落に着いた時など、下手したらジンオウガとの戦いの時よりも伸びがすごい。

「……ここ、何かありましたっけ。」

「その族长、ハンザさんが現れたときです。」

「あ、あー……。」

「久々のイケメンの登場に、女性層が食いついた模様です。」

「さすがイケメンだなあ……。」

神にまでそのイケメンさは通用するのか。

恐るべし、ハンザ族长。

「『私もこの世界に行きたい。』『シヨウコちゃん、そこ代わって。』というコメントが多数あります。」

「流石神様たちです。」

「『受肉してとつとつといてこまわしたいわあ。』『この絨毯になつて静かに眺められたら本望ですぞ。』という、理解が難しいコメントも、多数です。……見ますか?」

「いえ、結構です。」

「まずこの方のコメントなんですが。」

「俺いいって言いましたよね!？」

半強制的に、そのコメントやらを見せられた。

精神衛生上見たくもなかったが、あるわあるわ女性層の末期的な発言。声に出すのも憚られるような内容もたくさん。

「どうしてこう変態的な方ばかりなんでしょう。」

「それは俺が聞きたいです。」

「そしてもう一つ。」

「……………聞きましょう。」

「ソウジさんとハンザさんとのカップリング論争が、現在も尚ヒートアップしております。」

「だと思ったよチクショウ!!」

予想はしていた。

だって教官と俺をくつつつけて妄想を繰り広げるような連中である。

「今回はソウジさんも満更でもない様子が、更に拍車をかけています。」

「満更でもなくないです！」

「本当に？」

「はい！」

「……………」

「な、何ですかその間!? え!? ……まさか心読もうとしてます!? ……もうや、やめ、読まないでー!」

「なるほど。そういうお気持ちでしたか。」

「いやああああ!!!」

心の奥底まで読まれるなんて。

もう辱めどころではない。

「あまりのイケメンぶりに『俺もこうなれたらいいのになあ……………かつこいいなあ……………』
と思ひ、『ていうかイケメンすぎじゃない!? かつこいい!』となって、キョトンとしてし

まった、と。」

「言語化しないでえええ……。」

「……………ソウジさんは女性が好きなんですよね。」

「はい！それはもう！」

「おスケベですか？」

「す、スケベです！」

「……………そうですか。」

「聞いただけかよ！！もう何だちくしょう！」

完全に弄ばれてしまった。

もうやだ。

* * * * *

「落ち着かれましたか？」

「……………はい。取り乱してしまい、すみません。」

「良かったです。一時はどうなることかと。」

「ほぼアンタのせいだよ。」

もうアンタ呼ばわりである。

恩？

ヤツは旅に出たよ。

「最初のお願いをここまでお守りいただきで、こちらとしては助かります。」

「最初の約束……。」

「モンスターを、狩って頂きたいというものです。」

「ああ、あれ。」

久しく忘れていたけど。

懐かしいなあ……。

「こう見えて、感謝の気持ちはあります。」

「そ、そうなんですか。」

「もしかしたらお茶目でチャーミングなイタズラ女神っ子の様に映ってるかもしれませ

んが。」

「何だろう、ニュアンスがかなり捻じ曲げられているような……。」

「恩を返したいとは、常々。」

そう言うと、椅子の背もたれに深々ともたれかかる女神様。

足を組んで、かなりセクシーである。

「……ここからの話は世界干渉になる可能性があるのですが。」

「今更ですよ……どこまでが干渉か、俺にはまるでわかりません。」

「未来に触れることは基本タブーです。……最近、何が異変に気づきませんか？」

「異変？」

異変といえば、そりやたくさんあるけど。

例のジンオウガの赤い目。

そういえばマップの調子も良くわからない所がある。

「言えるところギリギリまで言います。まず、先程申し上げましたように、私とこの世界

の神をもつてしても、先が読めないところがあります。」

「先?」

「はい。基本的に、神とは観測者です。創造したり、世に触れたりするのは、極めて稀です。」

「……………朝ごはん作ったり人の夢に突撃したりしてくるのは。」

「ソウジさんが面白いからです。」

「あつさり認めたなあ…………。」

まあ興味本位であるところは分かっていたけど。

この女神様、ものすごく可愛いわい方をすれば、お茶目でチャーミングなイタズラ女神っ子であるからして。

「そんなお茶目な私ですが、大体40億通り程の予見が可能です。」

「よ、よんじゅ!?!」

「はい。ですが…………不確定要素が多く、先が見通せない状況です。ここまでは、私がお伝えできるお話です。」

.....?

よくわからない。

.....今までの女神様のパターンを振り返ってみる。

突拍子もない出現。

破天荒な商売ぶり。

ゲスつぶりも極まる一部の神様方の報告。

最後に俺にちよつとしたアドバイスをして去っていく。

毎回こんな感じ。

だが今回は.....ラストのアドバイスの部分が不透明、ということか？

「.....俺から質問をして答えてもらうのは、アリですか？」

「.....内容による、としか。」

「.....分かりました。」

多分だけど、女神様は何かを知っている。

そりゃ、神だし。

だが俺にそれを伝えるのはご法度。

さすがの暴れん坊も、そこばかりはどうしようもないわけか。

「じゃあ質問をします……それは、俺や俺の周りに危険なことが起きる、ということでしょうか。」

「お答えできかねます。」

「この先、モンスターへの動きに気をつけたほうが良いということですか?」

「お答えできかねます。」

「……………俺ってスケベですよ。」

「お答えできかねます。」

……………多分だけど、この返事……肯定だ。

さつきからスケベスケベ言われてここだけ否定なわけ無いし。

「俺って人間の女性ですか?」

「何のことでしょう。」

「女神様ってこの世界の神ですよ?」

「何のことでしょう。」

否定はこの返事つてことか。

……………だんだんルールが分かってきた。

「分かりました……では。ジンオウガの赤い目は、良くない兆候ですか？」
「お答えできかねます。」

「……………ジンオウガに限らず、今後も異変が起こるかもしれませんか？」
「お答えできかねます。」

「というか既に起きている？」

「お答えできかねます。」

「すぐにも解決したほうが良い問題ですか？」

「何のことでしょう。」

「……………マップの不調………たまに大型のモンスターを補足できない事があるんですが、それは関係ありますか？」

「一部何のことでしょう。ですが、大体はお答えできかねます。」

日本語が変。

だが、2つの返事を肯定否定と取れば、意味は通じる。

マツプの不調……先のジンオウガが感知できなかったり、大型の補足が難しくなったりしているのは、何かしらの異常が関係しているということか。

「えーつと、赤い目をしたモンスターを見つけたら、倒したほうがいいということですか？」

「お答えできかねます。」

「捕獲よりは討伐ですよね。」

「お答えできかねます。」

「……んーつと……俺しか赤い目が見られないのは、そういう仕様ですか？」

「お答えできかねます。」

マジか。

俺しかわからないのか。

多分女神様としては、この世界に起きた異変を何とかしたい。

だが、それを直接俺に言うことはできないわけだ。

俺一人……俺や話せる範囲の人たちに頼って、何とかその赤い目のモンスターを倒さなければならぬってこと？

……これは骨が折れるぞ。

「原因は……答えられないんですよね。」

「はい。教えられません。」

「……原因となっているのは、人間ですか。」

「何のことでしょう。」

「それともモンスターですか？」

「お答えできかねます。」

「……………」

……モンスターの異変の原因がモンスター。

大元を倒せばいいわけか。

「……………分かりました。ひとまずは赤い目のモンスターを探して、そこから原因を突き止めてみます。」

「なんの事か私にはサツパリ分かりませんが、よろしくおねがいします。」
「はい。」

俺に何とかできるとは思えないけど。
やれるだけやってみよう。

「俺が周囲を頼つてこの話をするのは、その、神様たちの規定に反します?」
「何も知らないソウジさんが何かをしようとして、私達に止める権利はありません。どうぞ、今までの様に狩猟を続けてください。」

最後の部分を強調するかのように、ゆっくりと話す女神様。

オツケーだ。だいたい飲み込めた。

かなり急を要する話ではないようだ。

とりあえずは今までの様にクエストを受けて、異変のあるモンスターを倒して
いこう。

話はそこから。

あとはモンスターの動向を探って、原因を断つ。

……うーん、考えてはみたものの、これってすごいお願いなのでは？

「すみません。このようなことをお願いすることになってしまってます。」

「……………女神様は何もお願ひしてませんよ？これは俺が勝手にやることなんで。」

「……………そうですね。お気遣い、痛み入ります。」

そう言ったところで、ギルドの内装が徐々に白み始める。

まるで夢の中にいるよう。

あ、夢だったわこれ。

「そろそろ明け方ですね。ソウジさん、どうかお気をつけ下さい。次はまた、顕現してお会いしたいです。」

「ええ、承知しました。」

「お伝えし忘れましたが、様々な神からの怨念がソウジさんに向けられております。」

「ええ、分かり……………ええ!?! 怨念!?!」

「『いい加減にしろよこの鈍感野郎。』『憎しみで異世界に呪詛を送れたらいいのに。』『も

げろ、爆発しろ。そして”ピー”『”ピー”が”ピー”して”ピー”ねばいいのに。』
……これらコメントが多数。」

「ええ!?今なんて!」

「おそらくは害はないかと思えます。」

「ほ、本当ですか!?俺赤い目とかなんかよりやばい目に遭うんじや。」

「多分大丈夫でしょう。それでは、また。」

「多分て!!ちよつとま——」

フツ。

* * * * *

チュンチュン。

「……………」

上に見えるは、見慣れた天井。

……宿の部屋である。

「えっ……最後の、なに？」

起き上がり、既に覚醒している頭で振り返る。

女神様からのシークレットなお願い。

そして俺への呪いの言葉の数々。

夢から覚醒する瞬間、すこしだけ口をニヤツとさせた女神様がいた気がする。

あの神……。

駄女神とも呼んでやろうか。

ヒラッ。

ポスッ。

どこからともなく落ちてきた紙。

『不敬は許しません。』

「……………聞こえてんのかよ……………」

誰もいない部屋に虚しく響く俺の声。

ここまでできるんなら、この世界の異変とやらもなんとかしてほしいものである。

「……………まあ、その力を使っても何とかできないってことなんだろうな。」

飄々としていて、掴みづらい女神様の性格。

だが、俺と問答している時の顔。

あれはマジだった。

本気が目だった。

「……………何とかしてみるか……………」

とは言っても、できることは限られるわけで。

……………あの人を頼ってみるか。

こつちから貸しを作るのが怖い存在ではあるが……まあ、怖い人ではない。言うだけ言ってみよう。

多分時刻は朝。

寝すぎてよくわからないが、シヨウコも居ないし、いい時間なのだろう。

ある人の事を考えながら、ポーチに触れて装備画面を起動。

素早く着替え、朝食を食べに行くのであった。

1 2 7頼れる人に相談しましょう。

神様との夢の中での邂逅。

そこから起きたら既に朝食時であった。

……頭は完全に覚めているので、なんか変な気分。

だが、腹は減っている。

「メシ……先に済ませるか……。」

シヨウコはいるかな。

下手したら、ハンズとトレーニングにでも向かっているかもしれない。

昨日二人で話していたしな。

……今日は俺はやめておこう。

体はもうあまり痛くないけど、一応けが人だし。

「おはようございます。」

「あ、ソウジさん。おはよう。」

「ドール。なんかしばらくぶり。」

「うん。ジンオウガ、倒したんだってね。……怪我は平気？」

「ああ、もうあんまり痛くない。さすがに走るのはやめておくけど。」

「うん、そうした方がいいよ。ショウコちゃん、ご主人様が悪くなるといけないからって、ハンズさんとランニングに行ってた。」

「そうか。」

ハンズは、まあ修練場の特訓を受けがてら、時期を見て帰るんだろう。

俺もトレーニングに付き合いたかったが、今日は休養日。

明日辺りから考えよう。

「朝ごはん、食べる？ 食欲ある？」

「ああ、大丈夫だ。腹減った。」

「待っててね。」という返事のあと、水場に向かうドール。

慣れ親しんだ宿の食堂での朝。

やっぱり落ち着くなあ。

ミヨシでの生活からしばらく、段々とこちらでの生活に戻ってきた。

ようやく感じる、日常のありがたみ。

女神様の言う異変とやらが気になる。

この幸せを壊したくないものである。

……。

……。

「はい、お待ちどお様。」

「ありが……おほ……。」

「な、なにかな。嫌いなものでも、あった？」

「いや……完璧すぎて……。」

文字通り、言葉を失う。

白飯、豆腐と青菜のスープ、同じく青菜と大根みたいな野菜の漬物、フルーツ、そして焼き魚。

至ってシンプルな内容。

……………ドールよ、お前は何てよくわかる子なんだ。

そしてこの魚……………懐かしの……………。

「いいキレアジが入ったから、前ソウジさんが言ってた……………ヒラキ？やってみたんだ。」
「覚えていてくれたのか。」

「うん。冬と春は、魚って中々食べられないから。お酒のお供にも好評なんだ。」

「……………うん……………うまい……………塩味が効いて……………ご飯めっちゃ食える。」

「良かった。……………ソウジさんには食べてもらってなかったよね。……………うん。」

今日初めての笑顔を見せたドール。

心底嬉しそうだ。

エプロンを握りしめて、ガッツポーズ。

「いや、まんま故郷の味だよ。……………それ超えてるかも。」

お世辞ではない。

キレアジは正直生食には向かない。

身が締まりすぎて固く、どちらかというと狩猟道具の一つである。

一度持った時、砥石の代用として使えるとアイテム情報で分かったときは、驚いたものだ。

だが、一度焼いたときの旨味は格別だった。

これを活かす料理はないか、魚好きの俺のハートに火が付き、ドールに相談&料理を伝授。

作ったこともなかったが、イメージだけでここまでバッチリとは。

ドールの料理上手さには恐れ入る。

「なめろうはどうだった？」

「やってみただけど、一部のおじさんに好評だよ？お酒のツマミとして出してるんだ。」

「……………それ。今度食べていいか？」

「うん！もちろん……………いい、いいよ。」

思わず大きな声が出てしまったのか、急に恥ずかしかるドール。そんな俺にうまい飯を食わせたいのか……ええ子や……。

* * * * *

ドールの朝食を頂き腹を満たした俺は、薬を飲んでギルドに向かうことにした。ちなみにドールの頭は、今日は盛大にナデナデした。

セクハラとかもう気にしなくていいぞという俺。

気にしたほうがいいぞと自制を促す俺。

そんなアホ悪魔とアホ天使に挟まれながら、今日は前者に軍配が上がった。

アジの開きの感謝も込めて、それはもう丁寧に撫でさせてもらった。

当のドールには「今日は撫で方が雑……。」と言われた。

シヨック。

気持ちとは、言わなければ通じないものだ。と実感した次第である……。

さて。

ギルドにやってきた俺。

とは言っても、例の人には会えるかどうかさえわからん。忙しそうだし。

誰かに取り次いでもらう必要があるのだが、それさえ難しいほど受付は混雑している。

ハイビスさん……いるけど、長蛇の列だ。

ヒナタさんも……同じだな……。

参った……まあ、急ぎでも無し。

気長に待つか。

クエストボードでも眺めてよう。

「……………ん？」

クエストボードを見る人だけ。

その中に、異色を放つ見知った顔ぶれを発見。

「おはようございます、フェニクさん、トツバ。」

「ああ、おはよう。ソウジさんか。」

「ええ、急に話しかけてすみません。トツバも、元気か。」

「ぼつちりぐー。」

「そ、そうか。」

まあ、良好ということだろう。

あえて流した。

「ソウジさんも、クエスト探しかい？」

「いえ、俺は別の用があつてギルドに來ただけです。お二人は……狩猟、ですよな？」

「ああ、仕事だよ。」

フェニクさんとトツバ。

俺が冬山に籠もつていた際、ワサドラに残つたシヨウコとパーティーを組んでいた二人。

ミヨシからの帰り道、不運にもセルレギオスに襲われていたのを手助けした。

トツバは、決死の覚悟で信号弾を発射したスキを突かれ、腹部を負傷した。

回復の様子が気になつてはいたが、よかつた。

復帰できたんだな。

「とは言っても、大型はまだやめておくよ。トツバも、慣らしが必要だ。」

「私は平気。よゆう。」

「今日は実入りのいい採取辺りを狙おう。」

「余裕なのに。」

「無理はしない。」

トツバの口調は相変わらず。

常に眠たげな目、無表情なものも相まって、読みづらいところがある。

……まあフェニクさんとは以心伝心な様子。

いいペアだと思う。

フェニクさんの格好は、以前のガチガチの鎧ではない。

スラツとした身長と長いポニーテールの金髪によく似合う、黒のロングパンツ。

薄い藍色のウインドブレーカー、下にはボーダーのTシャツ。

ラフな格好だが、スタイルがいいので似合っていると思う。

俺が着たら若干ダサイんだろうけど……。

トツバは相変わらず小さい。

長い靴下にハーフパンツにTシャツと、まあ大型狩猟に向かうにはちよつと厳しい。

腰にポーチを付け、背中にはでつかいハンマーがあるためオトモアイルーとわかるが

……見た目が完全にその辺の小学生である。

この体のどこにそんなパワーが隠れているのか……。

「……ソウジに見つめられている。」

「うえっ!？」

しまった。

まじまじと見過ぎた。

「恥ずかしい。」

「す、すまん。そんなよく見るつもりじゃ。」

「見えない？それはシヨック。」

「どうすりゃいいんだ……。。」

トツバに突っ込まれて狼狽えてしまった。

見ても見なくてもいけけないという、難しい乙女心である。

「ははは、相変わらずソウジさんは面白いな。」

「からかわんといってください。」

「いや、他意はないんだ。気を悪くしないでほしい。まあトツバはからかう気満々なよ
うだけどね。」

「フェニク、それを言ったらダメ。面白くない。」

「面白くないって……トツバ、俺はそんなに面白い人間ではないぞ?」

「あのシヨウコがあそこまで気に入ったハンター。面白くないわけがない。」

「あのなあ……。」

「……ははははは! す、すまない! やはり笑ってしまうな。」

……何故かトツバは俺をイジりに来る。

セツヒトさんにもいつだか、俺はいじりがいがあると云われた。

………終いには泣くぞ。

まあこんな感じで軽く会話を交わした後、二人は一枚のクエストを剥ぎ取って受付に向かっていた。

元氣そうで何よりだった。

アイルーは回復が早いと言うけど、心配だったし。

……さて、俺の方も用を済ませよう。

受付、早く空かないかな。

* * * * *

それからしばらく後。

行列も無くなった頃合いを見て、ハイビスさんに声をかけることにした。

「……………ふう。」

息をつくハイビスさん。

声をかけるのも申し訳ないけど……致し方ない。

「ハイビスさん。」

「あ、ソウジさん。すみません、お待たせして。」

「いえ。こちらこそ忙しいときにすみません。」

「御用は何でしょう?」

ハイビスさんも俺がウロウロしていたのが見えていたんだろう。

逆に謝られてしまった。

「えっと……ちよつと、相談したいことがあります……。」

「相談、ですか?」

「はい。シガイアさんに直接、なんですけど。お取次ぎ願えますか?」

「……………重要な案件……………ということですよね。」

小声で話すハイビスさん。

俺に顔を近づけ、眉を顰める。

近い……。そして相変わらずの美人さんである。

「はい、重要……かもしれない。」

「……分かりました、確認してきますね！」

そう言うのと、後ろの職員に何かを伝えて、颯爽とどこかに向かつていったハイビスさん。

シガイアさんのところに行っただろう。
ちよつと待つか。

* * * * *

コンコン。

「失礼します。」

『はい、どうぞ。』

ガチャ。

相変わらず厳ついドアを開ける。

ハイビスさんに直接部屋に向かっているといいと言われ、単独でギルドマスター室に向かうことになった。

案内とか無い辺り、ギルドの忙しさがうかがえる。

まあ俺も子どもではないし、信頼の証と受け取ろう。

迷うことなく部屋にやってこられた。

「どうもすみません。お時間いただきいて。」

「いえいえ！ソウジさんの頼みなら、いつでも時間を取らせていただきますよ！」

軽い挨拶。

相変わらず腰の低いお方だ。

そう、俺が相談しようとしていた人物はシガイアさんだ。

モンスターの異常やワサドラ以外の情報にも長け、且つ頼りになる人物。

この人しか思い浮かばなかった。

「私からも、ソウジさんにお話したいことがありますし。丁度良かったです。」

「あ、そうなんですネ。……………俺から話しても大丈夫ですか？」

「はい。伺いましょう。」

シガイアさんには、早い段階で俺のギフトや出自などについて打ち明けている。数少ない、俺の事情を知る人間である。

若干食えないところがある人だけど……………まあ悪い人ではない。と思う。

「えつと……………長くなりますが。」

「大丈夫ですよ。午前の残り一杯は、時間が取れます。」

「お気遣いある言葉、助かります。」

俺は、シガイアさんに、夢での女神様との会話の内容を伝えることにした。

「変なことを聞くんですが、最近のモンスターの動向って、どんな感じですか？」

「どんな……………と言いますと？」

「例えば……急な襲来が多かったり、異常のある個体が見つかったりとか。」
「……………それは、ソウジさんがそう感じられたから聞く、ということでしょうか。」
「はい。昨日ジンオウガを討伐しまして……。個体として、何か違和感が拭えないところがありました。」

俺は、ジンオウガの違和感について簡単に話した。

夜間の突然の襲来から、討伐直前の赤い目まで。

話を聞くシガイアさんの様子が、段々と真剣なものに変わってくる。

「赤い目……ですか。……あまり聞いたことはありませんね……。」

「そうですか。……実はこの件に関して、ある筋から情報を得まして。」

「……………ある筋?」

「……………頭おかしいと思われてもしょうがないんですけど……神からです。」

「……………は?」

「ええと、ですから。神。神様からです。」

キョトンとするシガイアさん。

そらそうだ。

俺だつて逆の立場なら「何言ってるんだこの人」ってリアクションするもの。そして頭に良い病院を紹介して、回れ右、である。

「その、神というのは……ソウジさんにギフトを与えたという、あの？」

「はい、その神様、です。」

「……どのように聞いたとか……その辺をお伺いしても？」

「はい。」

内容をかいつまんで話す事にした。

……。

……。

「なるほど……これは信じざるを得ませんね。」

「えっ!？」

「ん？どうしました？」

「いや、その……簡単に信じてくれるんだなあ、と。」

「ははは……。ソウジさん……。私としては、あなたがそこまで話してくれたことに關して、嬉しい限りですよ。私はあまり信頼されていないと思っていましたから。」

「いや、それは……。」

「ははは。いえ、いいんです。私の……。これは性格ですね。どうしても慎重になり過ぎしてしまう。……ですが、信じます。モンスターに、異変が起きているかもしれない、と。」

シガイアさんが一呼吸おいて、机の後ろにあるファイルを取り出した。

「持ち出し禁止」と書かれたそれは、結構な厚みと、重さがありそうな代物。

パラパラと中身を見ながら、シガイアさんが話し始める。

「……………実は、以前持ち帰ってきてくれた資料の分析が終わりました。」

「あ、そうなんですね。」

「ええ。今一度振り返ってみると、新たな発見が多いもので……。で、今回の話と関係あるかもしれない話が、二点。」

「はあ。」

資料とは、俺とセツヒトさん、ハイビスさんで雪山に行った際、俺のギフトを利用して持ち帰ったものだ。

元々タオカカギルドのギルドマスターをしていたシガイアさんが持っていたものである。

その分析が終わったというのは……何だろうか。
襟を正して、聞くことにする。

「まず一つ目。セツヒトから聞いているかもしれませんが、数年前のスタンピードについてです。またいずれ、そのようなことがあった際に適切に対処できるようにと、分析を試みたところ……モンスターの異常な活性化が一つ、兆候として現れていました。」
「活性化……。」

「言ってしまうえば、出現の頻度が多くなってきた、ということですよ。少しずつ……ですが確実に増加の一途を辿っていく。……これです。」

そう言っただけで差し出された資料を見る。

これは……大型狩猟の数と、達成数を数値で表に示したものかな？

女神様のグラフ……とまではいかないが、わかりやすくまとめである。

「……確かに、少しずつ増えているように見えますね……。」

「でしょう？この日を境に、毎日……という訳では無いのですが、増えては減って、また増えて……1年後には、大変な数になっていました。」

「なるほど……。」

「いや、あの時も気付いていたんですがね。こう、改めて見ると、実におかしい。モンスターの出現が増えるのは、あの地方では冬と相場が決まっていますが……季節関係なく、少しずつ増えている。」

「……これが、今回の俺の相談と関係している、ということですか？」

だとすれば、今度はスタンピードとやらがワサドラに迫っている、ということになるが。

……それはまずいぞ。

「……申し訳ありません、判断が、出来かねる、としか。」

「へ？」

「当時の状況と照らしあわせようにも、比較する絶対数が多すぎるんですよ、このワサドラの場合。あの雪山地方は、雪の無い時期にモンスターが出現するという異常でしたから、すぐにわかりましたがね。」

「じゃ、じゃあこの話をなぜ？」

関係あるんじゃないのか。

「……問題は、現在ワサドラ近郊に現れているモンスターの種類なんです。」

「……種類？」

「ええ。近々のモンスターの出現数……これは、ここ数年と比べてもやや増加している程度。誤差の範囲です。ですが、出てくるモンスターが、少しおかしい。」

「……………」

「ソウジさんが関わってきただけでも、セルレギオス、ジンオウガ……この2体はつきり言つて珍しすぎます。」

「なるほど……………」

「互いに主生息域を砂漠や山間部に置く大型です。ワサドラ周辺の草原や岩山地帯に来ることは、あまりありません。」

フェニクさんが言っていた、ここらでは珍しいというセルレギオス。
そして、だだっ広い草原に襲来したジンオウガ。

……なんだかきな臭くなってきた。

「他にも珍しい大型モンスター……オロミドロやアンジャナフのクエスト依頼が舞い込んでいます。更に、強力な個体……リオ夫婦や、あのラージャンまで出現している。まあラージャンについては、以前からクエストとして受注はされいましたが、人間の生息域に出てくることは無かった……少しおかしいとは思いませんか？」

「はい……なんか、怖くなってきました。」

「ええ……そして今回のソウジさんのご相談……近辺では珍しいと言えるモンスター、雷狼竜ジンオウガの異常。……信じるには十分過ぎる材料かと思えます。」

「……………問題は、そのモンスター自身の異常の判断が、俺にしかできないということなんです。」

「そうですね……………」

女神様との奇妙な問答で確認したのは、あの赤い目は俺しか分からないということ

だった。

まさか今出て来たモンスターが、全て異常を有するものではないだろうか……。俺だけで対処するわけにもいくまい。

「……一度話を変えましょう。もう一つ、関係あるかもしれない件についてです。」
「は、はい。」

手元にあるグラスとポットを持って、水を淹れるシガイアさん。
俺に差し出してきた。

「あ、どうもすみません。」

「いえいえ。なかなか難しい話ですからね。」

ずっと話していたからか、喉がカラカラだった。
ありがたく頂く。

「……もう一つというのは……マシヨルクについてです。」

「え？教官？」

教官の話がなぜ出てくる？

「マシヨルクが今、休暇を取って首都に行っているのはご存知ですか？」

「あ、はい。知り合いが修練場に行こうにも行けなくて、困っていましたから。知っています。」

「ああ……それは悪いことをしましたね……実は、首都に行くよう命じたのは、私なんです。」

「え!?シガイアさんが!？」

「はい。休暇ではなく、極秘に。ザキミーユギルドの本部に探りを入れて行ってもらっています。」

「さ、探りですか？」

な、何だ？

モンスターがどうか、そんな話では無くなってきたぞ？

「ギルドナイトと言いました……まあその辺のギルドの暗部も、ソウジさんならお話しして大丈夫でしょう。」

「え？ えっ？ ギルドナイト？」

「簡単に言うと、対人用ギルド専属ハンター、とでも表現すればいいでしょうか。」

「た、対人……。」

「ええ、これは他言無用でお願いしますね。そうですね、今回持つて来て頂いたお話とイーブンということにしましょう。」

な、何かさり気なく超でっかい秘密を聞いてしまったぞ!?

……この人、秘密ををあえて俺に伝えているんじゃない……。

「そのギルドの暗部であるギルドナイトの仕事は、多岐に渡ります。超級のハンターにしか頼めない且つ極秘裏に進める必要のある強力なモンスターの討伐。更に違法ハンターの捕縛、粛清……そして諜報活動などです。……今回のマシヨルクはそれに当たりますね。」

「あ、あのー、それって俺聞いてもいい話なんですか？」

「何を言うんですか。むしろ聞いて欲しいんですよ……ソウジさんの将来も含めて、

ね。」

「うあー……。」

確定。

この人、あえて俺に重荷を背負わせやがった。

互いに秘密を知っている関係、これって強力……。

やっぱり食えない人だわ……。

「マシヨルクにギルドナイトとかその辺の意識は無いようですがね。アレは私が知る中でも最強の部類なので、まあいいでしょう。」

「は、はあ……。」

「話を戻しましょう……私もマシヨルクも、首都ギルドの動きには懐疑的です。……数年前の対応、あれは何か裏があるとしたか思えなかった。当時そこにいたマシヨルクも同様に、そう感じていたようです。」

「……………」

「マシヨルクも間が悪い男でしてね……首都の民衆のために立ち上がった矢先、飛び込んできた獄狼竜の襲来の際。セツヒトの救援に向かうため、亜種リオ夫婦狩猟を中

断してミヨシ村に直行しました。……まあ、結果は知つての通りですがね。」
「ああ……。」

セツヒトさんから聞いた話。

結局教官は、ミヨシ村壊滅の折、間に合わなかった。

バーで教官から、後悔していると聞いたけど。

「セツヒトは悔やんでも悔やみ切れないでしょうが、私としてはマシオルクが必死になつて急いだという事実が分かりましたからね。納得しましたし、怒りは湧きません。……まあセツヒトは、許しはしないようですけど……。」

「……見るなり斬り掛かりそうな雰囲気を出しますもんね……。」

「ええ。その辺は、当事者同士で話をつけていただけでしょう。……さてソウジさん……以前首都に招かれたこと、覚えておられますか？」

「首都に？……ああ、はい。あの時ですね。」

以前、ドールのお母さんであり、ザキミーユギルドの総務長を務めるミヤコさんに「首都に来ない？」と誘われたことがある。

あの時は断ったし、今でも行く気はないけど。

「現在、ザキミーユギルド本部が、優秀なハンターを集めようとしている動きがあります。」

「えっ?」

「そういう極秘の報告を、マシヨルクが届けてくれました。集めているハンターの数は、結構なものだそうです。……あの時と、状況が似ています。」

「あの時……。」

ミヨシ村壊滅のカウントダウンが始まり出した時。

幾度の救援要請にも応じなかった首都ギルド本部。

教官の話では、首都近郊にもモンスターの出現が異様に多くなり、集めに集めたハンターたちが処理に当たってさえ、対応しきれなかったという話だ。

「……首都近郊に、モンスターが増えている……またはその兆候を何かしら首都ギルド本部は掴んでいるのでは……と考えられます。」

「首都の周辺に……。」

「はい。」

首都にハンターを集める理由。

セツヒトさんもその辺が全く納得いっていなかった様子だったけど……。

「……さて、ここまでの話を整理します。まず我々の町、ワサドラ周辺に出ているモンスター、これに異常が起きている。ここはソウジさんの話……その神様からの情報から確定と見ていい。」

「はい……。」

「そしてマシヨルクからの報告では、首都ギルド本部で、地方の優秀なハンターの青田刈り……収集が始まっている。」

「は、はい……。」

「その状況は、数年前のケースと酷似している。」

「……………」

「……申し上げておいて何ですが……これはかなりまずい状況なのかも知れないと、推測できます。」

さらりと話すシガイアさん。

数年前の惨状。

それが繰り返されるのでは、という憶測。

そんなシガイアさんの話に。

俺は唾を飲むことしかできなかつた。

128 翁を倒しに行きましよう。

ワサドラのギルドマスターの部屋は、ギルドの外観にそぐわぬ石造り。冷たい石の地面が、その雰囲気より重くしてくれる。

今俺がいるその部屋は、ちよつと重い雰囲気に含まれていた。

まだ推測でしかないが、ワサドラやその周辺、または首都にかけて……その規模はわからないが、危機が迫ってきているかも知れない。

しかも、確度は高い。

「シガイアさん……どうにか、先に手を打てないでしょうか。」

足りない脳みそで考える。

シガイアさんほど頭が回るわけではないが、どうにかして最悪の事態は避けたい。

「無くは、無いです。」

「……………」

「と申しますか、ソウジさんもお分かりかと思えます。何故、その女神とやらが、ソウジさんに願いを託されたのか。」

「……………はい。」

分かりきっている。

俺に、何とかする力があるからだ。

少なくとも、赤い目の異常というのは、どうやら俺には分かる。

なぜかは知らんけど。

「ソウジさんのお力……………判別能力とでも言い換えましょうか。それをもって、まず周辺のモンスターを狩る。」

「はい。」

「異常のある個体が分かれば、そのモンスターの足跡をたどる……………この辺は我々の領分ですね。」

「……………」

「そして、総力を上げて原因を断つ。……………非常にシンプルな話です。」

確かに、言うだけなら簡単な話。

今言われたように、俺が今までの様に狩猟を行う過程で、異常を見つけ出す。モンスターは何かしらの影響で赤い目をしてしていると仮定して。

伝染するものなのか、それとも自然発生するものかは分からないが……そうしていればいずれ、原因とやらが分かってくるだろう。

「ポジティブに考えれば……おっしやる通り、我々は先手を打つことができる、ということですよ。」

「……そうですね。普通神からの情報なんて、手に入りませんし。」

「ええ。全く、私も有り難い関係を得たものです。ソウジさん、このワサドラギルドにいて頂いて感謝しますよ。」

「いやいや、俺なんて、ただ偶然この町にたどり着いただけですよ?」

「ソウジさんが言っていることが真実であり、且つ我々の仮定が正しかった場合……通常ではありえない程早く手を打つことができます、ということになります。」

「は、はい。」

「いやはや……あなたがいていただいて、よかった。これは本音ですよ?」

シガイアさんは、あの雪山の地で、スタンピードの危機に晒された。

対策の陣頭指揮を取っていた訳だ。

セツヒトさんの活躍もあり、死人も出たが、あれだけの被害で済んだのだと俺は思っている。

あのような惨事をもう起こしたくないと、色々考えていたのだろう。

あれだけの資料を大量に持ち帰らせたわけだし。

仮に例の獄狼竜とやらがワサドラに急襲したとしよう。

ギルドもある訳だし、ハンターも多い。

総力を上げれば、何とかなるかも知れない。

だが万一対応が遅れが出れば、おそらくは……。

「ソウジさん。今から伝える事は、このギルドマスターからの依頼……とさせて下さい。」

「は、はい。」

少し緊張する。

「……ワサドラギルド所属……HR7、ソウジさん。あなたに、異変の起きているモンスターの確認、及び討伐をお願いします。」

「……………」

「期間は……あまりこういう言い方は好きではないのですが、なるべく早く。情報は逐一伝えてください。ハイビズさんやヒナタさんを通してで結構です。」

「……………はいっ。」

「……………ソウジさん、私は一人の人間として、このような依頼をするのは間違っていると思います。」

後ろを向き、窓から外を眺めるシガイアさん。

その向こうには、微かにミヨシ、タオカカのある山々が見える。

「あの時……セツヒトには多大な負担を強いた。あのような事態にはすまいと、今日まで準備を進めてきました。」

「……………」

「ソウジさんを始めとした、かなりの戦力が揃った。セツヒトも手伝ってくれれば、相応

の防衛は可能でしょう。あの時とは違う。」

「……………そうですね。」

「更に、あなたの存在は大きい。現に、有益すぎる情報をもたらしてくれた……………しつこいようですが、感謝申し上げます。」

「……………はい。」

素直に感謝を受け取ることにする。

まあ俺の力っていうより、神様の力、なんだけども。

「さて、打つ手は打っておきましょう。私も色々と動きますね。」

「どうも時間を取ってもらって、ありがとうございます。」

「いやいや、こちらこそ、です。」

「いやいや……………あ、そういえば。」

社会人おっさん同士のいやいや合戦が始まるのかという時、あることを思い出した。

「シガイアさんが話したかったことって、何だったんですか？」

「ああ、その件ですね。いえ、ちょっとソウジさんにも首都に行って頂こうとお願いを。」

「そうですか、首都に……へっ!?首都!？」

「はい。」

ぶっ飛んだ話じゃなきやいいんだけど。

「将来を見越して、マシヨルクのいる内にその辺の仕事を覚えていただこうかと。」

「ええ!?仕事!？」

「ゆくゆくは有望なギルドナイトとして私の右腕になっていただき——」

「いやいやいやいや!？」

「ははは、冗談ですよ。」

心臓に悪い話である。

な、なーんだ、冗談だったのかー。

……………本当に？

「いえ、首都に行っていたかどうかという話は本当なんですがね?」

「へっ？な、何ですか？」

「マシヨルクが心配でして……。」

「……教官が？」

「はい……ほら、酒飲むとあの人、とんでもないことになるでしょう？下手に目立つと最悪ですからね……。」

「……………」

「コントロールできる人物……ソウジさんが適役でしたから。」

俺だってコントロールできるわけではないが。

たくさん酒の入った教官は、ある意味世界一厄介である。

「それにまあ……不思議とモテるんですよ……。心配です。女性関係が。」

「ああ……。」

「とはいえ、そこは別の者に任せることにします。マシヨルクの中央とのコネクションは相当に強い。悪い言い方ですが、利用させて頂いております。」

教官はいつぞや、ケイさんのお店にも偉い人を連れてきていたらしいし。

人脈……凄そうだなあ。

「ソウジさんは、先程の件もあります。まあこの話は保留としましょう。……では、どうぞよろしくおねがいします。」

「は、はい。それでは……。」

「はい、どうか、ご武運を。」

スタスタスタ……。

ガチャ。

ギルドマスターの部屋を抜けて一段落。

「ふう……。」

思わず息をついてしまう。

やるべきことの大きさに、少しだけプレッシャーを感じている。

そんな自分が分かる。

「まあ……こういうときはアレだな。」

とにかく前にあるやるべきことを片付ける。

大目標は、異変の元凶を断つこと。

その為にやること、これは言うだけなら簡単。

今までの様に、モンスターを狩っていく。

そしたら自ずと、異変のあるモンスターにも当たるだろう。

「……………やることを、やるだけだ。」

こちらら元現代日本の社会人。

理不尽なことにも、それに対応するための心持ちも分かっている。

やりやいいんだ。

おっさんを、なめんなよ。

俺は意気込んで、ギルドの受付のところへ戻ることにした。

めぼしいクエスト……前回からの目標であるところの、装備を整えるためのモンスター討伐を進めていこう。

やってみるか。

そのぐらいの気持ちで。

よし、そうしよう。

* * * * *

そこからはやることは単純。

まずはハイビスさんに、ギルドマスターへの取り次ぎの礼を言い、話した内容も合わせて伝えておいた。

「ソウジさん……それって体よくとんでもない事を引き受けてしまったのでは無いですか

……？」

「そうですよねー。」

ハイビスさんが心配しながらそう言ってきた。

まあその通りである。

ただ……報告したのは俺であるわけだし、異変が俺にしか分からないのだから仕方ない。

割り切つていこう。

……。

その後、明日行かう予定のクエストの選定。

オロミドロの討伐を頑張ることにした。

ギルドを出たら、商店に顔を出した。

そこで回復系アイテムなどを買い足しておいた。

「泥を扱うモンスター」と聞いていたので、消散剤を買いおうか迷ったが、オロミドロには必要ないと店主に言われた。

え？なんで？ボルボロスでは必須でしたよ？と思つたが、俺だつて見たこともないモンスターである。

うーん……。

……。

そして明朝。

「泥を扱うモンスター……ウチ、正直イヤです。」

「そう言うなって……確かに後で装備洗ったりするの面倒だけどさ。」

日付が変わって次の日。

シヨウコと、オロミドロの討伐に向けて、ガーグア車に乗り込んだ。

目指す場所は沼地。

最近オロミドロのクエストが頻発しているらしい。

異変の兆候か？とも思ったが、数年に一回はよくあることとの事だった。

大発生という規模でもないとの事。

ハイビスさんが言うのだから、まあ間違いないだろう。

「それで……モンスタアの目がおかしななってたら、ギルドに報告するんですよ？」

「ああ、そうだ。シガイアさんからの別途の依頼だな。」

「ジンオウガはやっぱり変やったんですね……目まではウチ、分かりませんでしたけど。」

「それも俺しか分からないらしいからなあ……分かったら、すぐに伝える。よろしくな、

シヨウコ。」

「はいっ!!」

シヨウコの元気の良い返事を聞き、安心する。

昨日は俺の変なファンに、少し引いていた様子。

一応ワサドラのアイルーの里にも顔を出して、自分の様子を見に来たヤツはいないか確認しに行っていたらしい。

俺のファンねえ……いまいちピンとこないけど。

まあ、いるんだろうな。

その程度。

宿では少し元気が無かったが、ここまではさすがにファンとやらも付いて来られないだろう。

シヨウコの安心も良く分かるというものである。

ちなみに宿の方は、セツヒトさんがたまに見に行ってくれるらしい。

「変なやつが来たら私に任せろー。」と、シャドーボクシングを披露してくれた。

恐ろしい拳速だった。

むしろファンの方々が心配である。

俺も安心したところで、ドールの頭を撫でて必勝祈願、宿を後にした次第である。

「しかし、このクエストの文章、すごいよな。」

「そうですねえ……恨みというか……気持ちが悪かった文面ですよねえ……。」

ガーグア者に揺られながら、クエストの依頼文書を広げる。

中身はこんな感じである。

【クエスト名】調子乗りすぎ髭泥野郎に鉄槌を!!

【目的地】沼地

【時間】2日以内

【ターゲット】オロミドロ一頭の討伐

【報酬金】84,200z

【依頼主】ワサドラギルド下位ハンター 男性

【依頼文】

私の昇格試験を邪魔した、あの憎き髭泥野郎を抹殺して下さい。

討伐の暁には、生首を見て酒を飲む所存です。

捕獲じゃなく、抹殺……討伐です。

どうか私の代わりに、鉄槌を下してください。

絶対に許せない。

「……………」

「……………」

内容を確認して、二人で黙ってしまおう。

非常に恨みがこもった内容。

ちよつと怖い。

シヨウコが沈黙を破つて話だ。

「……自分でやつたる！みたいな気概は無いんですかね……。」

確かに。

この文面を見たら、まず思うところはそこだ。

「下位ハンター……だからかなあ。一応名前が伏せてあるのは、その辺の配慮かもしれん。名前が割れたら、その人の信頼に関わるからな。」

「ああ、なるほど。」

「今は討伐が難しい……だが、腸は煮えくり返っている。とにかくこの憎しみを今すぐにでも何とかしたい……つてところか？」

「よほど腹に据えかねてるんですね……。」

オロミドロって、そんなに大変な敵なのか……？

確かセツヒトさんは、『オロミドロとかちよーめんどいんだけどー、まーソウジならイケるー。』とか言ってた。

……うん、心してかかろう。

何せ初見だ。

警戒して何も損はない。

「お兄さん、あとどんくらいです?」

「ああ、もう一時間ほどで着くと思いますよ? スタート地点は泥が多いので、その手前で降ろさせてもらいますけど……よろしいですか?」

「はい、大丈夫ですよ。ギルドから聞いてますので。」

今日の御者の人は、いつものおじさんではない。

見た目は若い、20とかそこらの年齢だろう、お兄さん。

精悍……というよりは、どこか可愛いような印象を受ける。

手綱さばきは詳しくはないが、上手だと思う。

「有名なお二人に乗ってもらえて、嬉しいですよ。」

「あ、ご存知でしたか。」

「御者仲間じゃ有名ですよ? とつても低姿勢なのに、あの轟竜を赤子の手をひねる様に

倒してしまう猛者がいる、と。いやあ、感動していますよ。」

「その話。めちやくちや尾ヒレ付いてますよ!?!」

「美女を数人侍らして暮らしてるって聞いて嫌な感じがしてたんですが、悪い噂はアテになりませんね。」

「何だその話!?!」

俺はその後「マップ」でこっそり周囲を警戒しつつ、お兄さんの誤解を解くことになった。

こんな噂、誰が広めたんだ……。

………御者のおじさんかな。

………。

………。

沼地にたどり着いた。

お兄さんは話通り、池沼地帯の手前で俺たちを降ろし、帰っていった。

変な噂を鵜呑みにしないよう、リテラシーというものを懇懇と説いてあげた。全く、誰が美女を侍らせてるっていうんだ。

「……………ご主人様。」

「ん？なんだ、シヨウゴ。」

「火のないところに煙は立たないって言いますよ？」

「な、何を仰る。」

「自覚はあるようですね…………。」

……………。

確かに俺の周りに女性が多いけど。

おっさんも多いぞ。

教官にホエールさん、シガイアさん、イシザキさんに…………ハンザさんという超絶イケメンも追加されたのだ。

「男女問わず、知り合いが多くなってきただけ——」

「ウチとトツバにフェニクさん、ドールちゃんにハイビスさんにセツヒトさん、ヒナタさ

ん、ハンズさん……。」

「さ、さあ。行きましようシヨウコさん。」

「ちよつと自覚はあるんや……いや、これはむしろいい傾向かもしれん……。」

何かブツブツとシヨウコが話しているが、気にしない事にする。

徐にポーチに触れる。

辺りは大型などいない……と「マップ」では分かるが、正直コイツはアテにはならん。
気を引き締めて行こう。

……。

……。

辺りは水の音以外、静かなものだ。

とは言え、俺たちの進むその足音は、嫌な音を立てる。

グチヨ、グチヨ、グチヨ。

うーん……帰ったら即、足を洗いたい。

そんなどうでもいいことを考えている時だった。

……………グア……………！

遠くから、大型モンスターの声が聞こえた。

「ご主人様、今の……………？」

「ああ、聞こえたか？」

「はい……………うちにもバッチリです……………多分この先やと思います……………」

「よし。」

息を潜め、声が出たその場所に近づく。

沼地は、何も沼ばかりの場所では無い。

起伏に富んだ凸凹……………というよりも崖と滝がたくさんある場所……………と言えばいいのか。

切り立った崖は迂回すれば登ることができるとは、そこは別にぬかるんではない。高い土地は乾いていて、沼のある崖の下とは植生もまるで違う。

崖下の沼は……まあ、ビチャビチャの地面。

くるぶしの上まで水に浸かるため、そこを進むたびにシヨウコが嫌な顔をしている。念の為「マップ」を開く。

………しっかりと大型のモンスターの位置が分かる。

場所は、やっぱり沼。

………何だ、ちゃんとマップ動いているじゃないか。

「マップにも付いている………あれ？」

「どうしました？ご主人様？」

マップを見て変なことに気づく。

「大型が………2体、居るぞ？」

「へ？………オロミドロがたくさんおるってこと………ですか？」

「いや、分からん………ちよつと遠くから見してみるか。」

「はい。」

方向転換。

向かう先を崖上に変更して、観察を行うことにした。

山道を登り、崖の上へ。

「ふう……ここなら見え……る……。」

「どうしましたご主……ふえ!？」

二人して驚く。

俺たちが今いるのは、切り立った崖の上。

眼下に見える沼地、その中央に鎮座するのはおそらくオロミドロ。

茶色い全身、骨格は海竜種のそれ。

情報通りのヒゲ、頭から背にかけてヒレのような突起が生えている。

かなり長く、尻尾が巨大な体の半分はありそうだ。

沼に全身を横たえ、リラックスモード……まあそれはいい。

問題はその周囲。

泥翁竜オロミドロの周りを、ゆつくりと移動する巨体があった。
優雅にさえ見えるその動きは、オロミドロに対しての敵意などは微塵も感じられな
い。

「ご主人様……あれって？」

「分かん。ちよつと待て……。」

初めて見るモンスター。

息を潜めながらポーチに触れ、ギフトを起動。

モンスター情報を照合する。

「姿形は何となく海竜種だと思っただけど……あつた、これか？」

中空に浮く情報画面を、頭の中で操作する。

事情の知らない奴からしたら、頭のおかしいやつに映るだろう。

「泡狐竜……タマミツネ……？」

「ほうこりゆう？」

見下ろす崖の下。

聞いたこともないモンスターの出現に。

俺たちは頭を悩ませてしまった。

129 泡狐竜と相對しましょう。

泡狐竜タママミツネ。

初めて聞くモンスターの名前。

そいつが今、泥翁竜オロミドロの周りを優雅に泳いでいる。

グルグル。

グルグルグル。

「……………キレイですねえ。」

「……………本当な。」

ギルドでは、オロミドロはかなりの嫌われものであった。

あまり受注する人がいないと、ハイビスさんも嘆いていた。

今回のクエスト依頼者も、怨みのこもった依頼文をしたためていたし。

ところが今、目の前のこの光景。

細長い2体が、仲よさげにしている。

水の音も相まって、どこか風流でさえあった。

この様子だけ切り取るなら、人気も出そうな感じがする。

「……………主人様、どうします？」

「うーん……………ちよつと考えていいか？」

当たり前だが、狩猟は行う。

幸か不幸か、両方とも赤い目はしていない。

まあ討伐間際に変色する可能性はあるけど。

ジンオウガの時みたいに。

ここでの問題は、いかに2体を引き離すかということ。

同時狩猟は大変なことだ。

これはいつぞやセツヒトさんに聞いた話。

2体同時狩猟は、難易度が一気に跳ね上がる。

「ロアルドロスの際は、けむり玉使ったんだけどなあ。」

「……あの2体、引き離せますかね。」

どうなんだろう。

タマミツネとやらと、オロミドロの両者を見る。

お互いを意識して……どこか仲睦まじい感じがするのは気のせいかな？

「………何か……仲良さそうですよね……。」

「………うん……。」

そうなのだ。

これでは仮に引き離せたとして、引き離されたどちらかがどちらかを連れていきそうな予感がする。

「あつ。」

「む……。」

シヨウコと俺、二人して声を上げる。

眼下のモンスター達。

連れ立って何処かに行く……………あ、滝の方に向かって行った。

「ははは。」「うふふ。」みたいな。

……………イチャイチャしているようにしか見えん。

しかも一方はひげのおっさん、一方は流麗な女性みたいな。

白と薄紫の着物を羽織った美しい令嬢に手を引かれ、老獪な紳士がついていく、みた
いな。

「……………引き離せますかねえ……………」

「……………よし、こうしよう。」

けむり玉作戦はやめよう。

何かダメな気がしてきた。

「シヨウコ。作戦を伝える。」

「あ、はい。」

「いいか？まず……………」

「……………ええ!?ウチが!？」

「イけるイける。で、その後……………」

「ふんふん……………」

今回の作戦を伝える。

シヨウコにだいぶ頼る形だけど、まあ大丈夫だろう。

滝に向かう2体を崖沿いに見下ろしながら、入念に打ち合わせを行った。
うまくいくといいなあ。

* * * * *

「クオオオ……………」

「グルル……………」

コミュニケーションをとる、タマミツネとオロミドロ。

何とも言えない光景だが、狩猟はさせてもらう。

先程、2体のモンスター情報を見てみた。

【モンスター名】 オロミドロ

【種族】 海竜種

【別名】

泥翁竜、泥土の隠者

【詳細】

泥濘地帯に生息する大型海竜種。

個体によつては30m前後の全長を誇る。

その特徴は、鱗と尻尾から分泌される黄金色の液体、大量の泥が重なり合つて形成された鈍色の外殻、顔に生えた赤い髭、尻尾の側面に生え揃う体毛のようなヒレ。

長い尻尾は、先端に向かうにつれて太く発達し、外敵との戦闘では相手を正面に捉えながら、この尻尾をもう一つの頭のようにもたげた独特な体勢を取り、尻尾を主要な武器として自在に振り回して攻撃を仕掛ける。

泥の扱いに長け、足元の泥を波のように流動させて押し流したり、泥の塊を隆起させて敵の視界や行動を物理的に制限するなど、特異な戦法をとる……………。

【モンスター名】

タマミツネ

【種族】海竜種

【別名】泡狐竜

【詳細】

水の豊かな地に生息する海竜種の大型モンスター。

その流麗な様子からは幻想的な雰囲気があり、ギルドからは泡狐竜と呼ばれる。

花を彷彿とさせる白と薄紫が美しい鱗、胴体や尻尾などを覆う濃紫色の体毛、そして頭部や背中から生える花卉のような大振りなヒレが特徴。

成熟した雄の個体は基本的に単独で行動しており、一般的に目撃されるのも大多数が雄個体である。雌の個体は幼体と共に群れを形成して暮らしており、人里に姿を見せる事はほとんど無い。

………：最大の特徴は、全身から分泌する特殊な体液と体毛を擦り合わせる事で大量の泡を作り出す能力。

タマミツネの体液によつて生み出された泡は非常によく滑り、喰らえばまともに動けなくなる。

泡を利用したタマミツネは雷狼竜ゾンオウガの連続攻撃もまるで寄せ付けないほど。その動きは『妖艶なる舞』とも評される。………

オロミドロはともかく、もう一体のタマミツネとやら……こいつかなり強いんじゃないか？

というか雌の個体はほとんど見かけないって……じゃあ何か、アイツらが仲いい様子は、こう男女のそれっていうよりは……信長と蘭丸的な話か？

……いや、そういう薔薇模様の分析はいいか。

うん、考えすぎは良くない。

ともかくこの情報からも、素早く手強そうなのはタマミツネ。となると、今回の作戦的に……タマミツネを先に倒そう。

「シヨウコ、手筈通りに。」

「りよ、了解です。」

「大丈夫だ、シヨウコの回避はぶつちやけ俺が知る中でも一番すごい。頼んだぞ。」

「……はいっ!!」

自信無さげな顔を浮かべるシヨウコに発破をかける。

お世辞でも何でもなく、シヨウコは凄い。

そしてこの作戦はシヨウコにかかっている。

「……………行きます！」

「ああ！」

パチャツ。

小さい水しぶきとともに。

シヨウコが駆け出した。

俺はと言えば…………。

(狙いは…………タママミツネ！)

俺は、初見のモンスターである泡狐竜タママミツネに狙いを定める。

そしてシヨウコは、オロミドロの正面に回って気をひく。

そう今回の作戦は、作戦でも何でも無いただの分断である。

シヨウコがうまくオロミドロの気をひけるかがカギだ。

どちらも初見のモンスター、しかも片方は面倒くさいと評判の泥翁竜オロミドロ。

正直言って回避だけなら俺よりもシヨウコの方が上手だし、俺は先を読む力を存分に使つての回避が主体。

純粋な身体能力で比較すれば、完全にシヨウコの方が速い。

シヨウコには、気を引けばいいと言うことを伝えてある。

流石に倒せ、までは虫が良すぎる。

「さて……。」

崖の上で拾っておいた石ころを手にする。

硬球ぐらいのそれを持って、投手のように構える。

……懐かしいな。

バサルモスへの爆弾着火も、こうやったっけ。

狙いは、タマミツネ。

振りかぶって……。

「……………ふんっ！」

「やああああ!!」

シヨウコが大声を出すと同時に、俺の投げた石ころがタマミツネに向かう。

ビシイ!

ストライク。

そしてシヨウコは……………?

「ギヤアアアアア!!」

「ごっちや!!」

よし、気を引いてる。

ジャキン!!

俺も武器を取り出す。

「タマミツネ!!こつちだ!!」

パチャツ。

水しぶきを大げさにあげ、近づく。

両腕の筋肉は弛緩させ、双剣をダランと下に。

「クオオ……。」

タマミツネがこちらを向いて、咆哮の構え。
なら……! !

(鬼人化……跳躍……!!)

意識を、意識的に無意識へ。

ここからは、俺は俺を止められない。

ダツ！

跳躍。

「ギヤアアアアアア!!!」

咆哮が上がる。

だが、無視。

いかに声を上げようと、止まらない。

既に跳躍を決めた俺は、無意識下で双剣をコントロールし。

ズザザザザザザザン!!

「ギヤアアア……!!」

ジャボツ!

ぬかるんだ地面に着地した。

(よし! 咆哮無視、成功!!)

賭けだった。

正直ここまで上手くいくとは思っていなかった。

最悪攻撃がかすりもせず、地面に転がる未来も考えていたけど。

良かった……。

(シヨウコは……むっ!?)

目線をタマミツネに合わせながら、見ないようにシヨウコの方を見る。
驚いた。

いい意味で。

「グオオオオオ！」

「やあああ!!」

叫び声を上げて、何かに怒るオロミドロ。

その尻尾が、高速で薙ぎ払われる。

だが、その攻撃を華麗に避けるシヨウコ。

……………上手いなあ！

ちよつと悔しい。

回避は俺の専売特許……………とまでは言わないが、俺も自信がある方。

でもなあ……………あれ、全部完全に初見だよなあ……………。

凄いで、シヨウコ。

「ギヤアアア!!」

「のわっ!!!」

バシヤアアア!!

ドザン!!

「あつぶねえ……すまん、タマミツネ。お前の相手は俺だ。」

尻尾を翻して、自分はここだと主張するかのようにな攻撃してくるタマミツネ。
そんなの俺の主観でしかないわけだが。

恨みがましそうに声を上げている。

「クルルルル……。」

「大好きなオロミドロは、俺の連れが相手するよ……お前の相手は……俺だ!!」

「ギヤアアアアア!!」

そこから、タマミツネを誘導しながらの戦いが始まった。

シヨウコはどうやら、オロミドロの意識を自分に向ける事には成功している。

だが、オロミドロも自分の戦いやすい場所があるのだろう。

その場所を離れずに、シヨウコに攻撃を向けている。

シヨウコはその周りで避けながら、何とか俺とは反対方向に誘導しようとしているけ

ど。

あのままでは、誘導は難しいだろう。

ボクサーのインファイターとアウトボクサーのようだ。

ならば、俺が引き離しにかかろう。

こいつは陸戦主体。

移動なら、かなりの速度だ。

シュシュ!!

体を蛇のようにならせて、俺へと間合いを詰めるタマミツネ。

「そうだ！そのまま来い！」

「キシヤアアアア!!」

タマミツネはうまいこと俺の誘導に引かれ。

気づけばオロミドロも視認できない場所に来ることができた。

(もう少し……。)

「ギャアアア!!」

ザシユ!

軽い一閃を、タマミツネに当てる。

その後、すぐに離脱。

タイミングはだいたいわかってきた。

このまま誘導していこう。

「クアアアア……。」

ポ^ンポ^ンポ^ン……。。

空中に水玉を作り出すタマミツネ。

情報画面が教えてくれた通り、この玉が相手の動きを奪うという例のアレか。

「よつと……。」

遅い弾速。

難なく避けられるが……。

（これは……ブラフ？）

「キシヤアアアアア!!!」

ズドン!!

（ですよねー! あつぶねええ……!）

一対一。

真正面に対して、ようやく分かる。

こいつは、タイマンでこそ、真価を發揮するみたいだ。

飛び道具の有効活用、そして追い込みをかける様に陸上を移動しての連続攻撃。コイツ、本当に海竜種なのか？と思うほど、陸の上で流れるように動く。

しかも、動きが独特。

せつかく水のないところまで誘導したのに。

タイミングははかれた、とは言っても、かなりの安全マージンを取っている。まだ際の際……回避攻撃を繰り返すには至れない。

「キシヤアア!!」

その滑らかな体を、地に滑らせ突進するタマミツネ。

「ぬおっ!!」

「ギャア!!」

更に尻尾!?

「ふんっ!!」

ダツ!!

「グウウウ……………」

おー苛立ってる苛立ってる。

……………うん、大体わかった

弱点は頭と背びれ。

情報画面通りならば、そこだ。

だが、頭を狙おうと真正面かち合えば……………。

「ギャア!!」

「くっ!!」

これだ。

首から上が、縦横無尽に動く。

蛇みたい、とは評したが……これでは完全にそのものである。
そして背びれは……。

(無理矢理空中回転乱舞で当ててもいいけど……。)

……動きが激しい。

回避のタイミングが徐々に合ってはきている。

……が、焦りは禁物。

弱点を重点的に狙つての攻撃は、早々に諦めることにした。

ちなみに目はきれいな青。

真つ赤に染まればすぐにわかる。

(よし……小さな事からコツコツと。)

前世でのあのフレーズを思い出す。

狩猟では本当に、その通りだと思う。

(弱点は諦めて……側部に回って攻撃、後退。)

ザシユ！ザザン！！

「キシヤアアア!!!」

「おっと。」

ダツ。

横っ飛びで避ける。

今のはギリギリだった。

狙ってたけど。

このまま継続していこう。

いくらでも攻撃してい、タマミツネ。

全部……。

「見切つてやる！」

「キシヤアアアアア!!!」

* * * * *

そんなカツコいいことをのたまつて五分後。
俺は窮地に陥つていた。

「マジか……よっ!!」

「ギャアアア!!」

キュイイイイ……。

ズドオン!!

「うわっ……ととー……くっ!!」

おそらく食らつたら致命傷になるであろう、タマミツネの尻尾の振り下ろし。

耳を裂くような高い音がする。
絶対痛い。

サツと避けたい。

………できない。

アカン。

めっちゃ滑る。

ツルンツルンとそれはもう凄く。

経緯を説明すると。

- ① ポンポンポン泡がウザいので、試しに剣で割ってみる。
- ② 剣が泡まみれ。どういう訳か俺も泡まみれ。
- ③ 意味がわからん！と、動き出そうとするとヌルヌルで動くに動けない。
- ④ これを機と見たか、タマミツネ怒涛の攻撃。

「うぉおおっ!!」

ズドオン！

「キシヤアアアアア!!」

何とか避けている自分を褒めたい。

今の上半身を持ち上げてのボディプレスのような技。
のしかかりと言えはいいのか。

（危なかった……！）

横っ飛びで、擬音で表すならば「ズドーン！」といった感じで避けることはできる。
形振りなど構ってられない。

油断した俺をぶん殴ってやりたい。
おかげで全身泥と泡まみれである。

（何かアイテム……あ！消散剤！）

情報画面を起動し、アイテム一覧を見る。

消散剤……3個だけか。

使えるのか分らないが……確かモンスター情報に、泡を弾く効果が期待できるとか何とか書いてあつた気がする。

俺はすぐさまアイテムを選択した。

パシユツ。

(おお……効果覲面！)

体にまとわりついた泡と泥が、ほとんど弾かれて消え去った。

原理はわからんが……このつぶつぶが弾けて体の表面の泡を飛ばしてくれたんだな。もつと買っておけばよかった。

「ギヤアアア!!」

「待たせたな！もう喰らわないぞ！」

グルンとその場で体をくねらせて、再び泡を放出するタマミツネ。
もう当たらない。

めっちゃ嫌だこの泡。

(スケートとか上手いやつは、逆に利用できたりしてな。)

そんなことを考えるほどには、余裕ができた。

しつかりと足がつける……なんと素晴らしいことか。

「ギヤアアア！」

「ほっ。」

ズドオオン！

「シャア!!」

「よっど。」

シュバツ。

のしかかり、足のひっかかり攻撃、いずれもスレスレで避ける。
よし、いけるな。

(反撃!!)

次の攻撃に転じようと身構えるタマミツネ。

全身をくねらせ、右に移動しようという、そんな独特な動き。

(見切ってるよ。)

ザツ。

一足先に、そこに移動する。

タマミツネが動いた、まさにそのすぐ横。

動きを読まれ、驚く様子のタマミツネ。

「うらあ!!」

ザザザザザン! ザシユ!

目の前に来たスキだらけの頭部に、斬撃を入れる。

「グウウウ……!」

「もう一丁!」

バツ。

(空中回転乱舞……尻尾まで!)

ザシユ!ズザザザザザザザン!

(うわ……長いなあコイツ……!)

頭に当たった空中攻撃を皮切りに、その長い尻尾の先まで余すこと無く斬撃を加える。
頭から背、尾まで伝うように。

長い、と感想を持てるほどには、この攻撃にも慣れてきた。

ジユボツ。

「……つと。」

沼に足を取られそうになるが、踏ん張って着地した。

雪山での経験が活かされている。

あそこで鍛えてよかった。

バランス感覚がかなり養われたと思う。

「グウウウウウ……!!」

忌々しげに俺を見つめるタマミツネ。

「……………」

「……………」

数秒ほど睨み合った後。

ザッ！

シユルシユル……………。

タマミツネが谷の方へ向かって行ってしまった。

「逃げた……………か？」

向かう方向は、シヨウコ達がいるであろう方向とは正反対。

一応「マップ」を確認したが、シヨウコは最初の位置から動いていないようだ。

滝の前のエリアから、オロミドロの反応が変わっていない。

(……………さて、どうするか。)

ジャキン！

シュツ……………シュツ……………。

双剣を研ぎつつ考える。

このままタマミツネを追いかけてもいいが、シヨウコが少し心配である。気を引き続ければ良い訳だし、シヨウコの回避能力はかなり高い。

だが、大したダメージは与えられていないだろう。オロミドロの強さもよく分かっていない。

(……………決めた、作戦変更。合流しよう。)

様子を見て、シヨウコと共闘してさつさとオロミドロを倒してしまおう。

シヨウコを信用していない訳ではないが、タマミツネもかなり向こうの方まで行ってしまう。

谷の上……何であんなところに行ったんだ？

とりあえず位置が分かりやすいシヨウコの方に向かおう。

「よし……！」

決まれば、急ごう。

ジャボツ……！

俺は沼地を突っ切って、滝の方まで走り始めた。

130 オトモを絶賛しましょう。

避けるという行為は、防御とは少し違う。

当たり前だが、攻撃に当たってはいけない。

相手の動きを見て、先を常に取り続ける。

次の避け方、自分が動きやすい且つ敵の攻撃に即座に対応できる位置取り。

それを常に考えなければいけない。

回避し続けるということは、かなり頭を使い続けなければならないわけだ。

シールドなどを使った防御なら或いは、攻撃を見てからでも間に合うかも知れない。

だが、回避はそうはいかない。

ノーダメージというリターンを得るためには、それなりのリスクが付きまとう。

「いやあ……すごいわ。」

なので、シヨウコとオロミドロの様子を見て思った感想は、それ。

まず、オロミドロの動き。

これがアホみたいに凄い。

どうやってるのか皆目検討もつかないが、地面から泥を抉り出し、次々とシヨウコにドロドロの塊を繰り出している。

何というか……ちよつと気持ち悪い。

更にその長い尻尾を駆使して叩きつけたり、タマミツネのようにグルツと回つて変なタイミングでまた泥を繰り出したり。

終いには地面に半身を潜り込ませ、頭と尻尾だけを出して……何かもう訳わからん。

あれは嫌われるわ。

ハンターのみんなが嫌がるのもわかる気がする。

そして何よりすごいと思ったのがシヨウコ。

その全てを避けきっているのである。

繰り返すが、避けているのである。

だって体に泥とかついていないもの。

俺と違って。

俺と言えば、変な好奇心？からタマミツネに泡を食らい、水と泥の地面にダイブし

まくったわけで。

装備はもうそれはそれは汚れ切っている。

恥ずかしい……。

「グアオオア………!!」

(オロミドロの動きが……?)

グネグネと動き始めたと思ったら、突如明後日の方を向き。

グジャ、グジャ、グジャ。

汚い音を立てて、どこかに行ってしまった。

「……………」

参戦しようと思ったら、これである。

何も言えない……。

……。

とりあえずシヨウコと合流しよう……。

……。

「シヨウコ。」

「あつ！ご主人様……ケガとか無いですか？」

「ああ、泥だらけだけど、平気だ。シヨウコは？」

「とりあえず避けきりましたが……あいつ無茶苦茶です！もう、汚れんで良かった……。」

シヨウコ、それ結構すごいことだと思っぞ。

「途中から見てた。タマミツネもどつか行つちやつてな。凄いぞシヨウコ。いや、マジ

で。」

「み、見とつたんですか!?!うわ、恥ずい……。」

「いや、恥ずかしくなんかないぞ。凄かった。俺にはあの芸当はできん。」

「いやあ、ははー……。」

はにかむシヨウコ。

身体能力の凄まじさ、まさにそれだ。

避けるために必要な予見。それがシヨウコにはいらぬ。

見ながら、避けられる。

そこがすごいと思う。

「俺が相手したら……多分もつと汚れているな……。」

「いや、うちも泥被つとらんだだけでビッチョビッチョですよ?。」

「本当だ。……あ、そうか。」

「へ?。」

忘れていた。

俺のギフト、便利な使い道を見つけた。

えーっと……情報画面から装備を外して……。

スッ。

「うえっ!?!どうしたんです?!?ご主人様!?!」

「いや、俺のギフトってそういえば……。」

インナー一丁で間抜けな格好になる俺。

だが、ストーリーキング趣味など俺には無い。

ましてや狩猟中になって、どんだけマニアックな話だ。

「このまま……。」

スッ。

再び同じ装備を取り付ける。

「あつ……うわあ、一瞬や……。」

「おお、できた。これは便利だ。」

俺のギフトの一つ、早着替え。

とても便利で毎朝お世話になっているが、こいつは自動で装備をキレイにしてくれる機能も備えている。

上手くいくか不安だったが、良かった。

出かける前と同じ綺麗さに戻っている。

「それめっちゃ便利ですね！……それってウチもできるもんですか？」

「ああ。待つてな。」

スツ。

「ふあつ!!？」

「あつ!!」

オトモであるシヨウコの装備は、何故か俺も変更することが可能である。
シヨウコの装備もキレイにしようとやってみたら……シヨウコもインナー一丁になるのをすっかり忘れていた……。

「ご、ご主人様！は、早く!!」

「は、はいはい！」

急いで装備をつけ直す。

シヨウコの装備も、キレイになった。

「……………」

「……………」

何だこの空気。

見ちゃったなあ……シヨウコのインナー姿。

というか下着姿。

「……………ご主人様にならまあ見られてもウチはええんですけど……その、野外っていう趣味はありません……。」

「いやいやいや!!俺も無いからね!ていうか見られたことに反応して!」「は、はい……。」

顔を赤くしてモジモジしだすシヨウコ。

さつきまで華麗にオロミドロの攻撃を避けていたアイルーとは思えない。

「ず、すまんかった、シヨウコ。」

「い、いや!ウチもすんません!」

二人して、場を取り繕うのに少し時間を要した。

「……………さて。」

「何事も無かったかのようにされてるご主人様って、すごいですよね……。」

「面の皮は厚い方だと、自覚はしている。」

気を取り直して、これからのことを話し合う。

オロミドロを追うか、タマミツネを追うか。

「シヨウコはどう思う?」

「そうですね……面倒な方を先に倒した方がええと思います。と言つても、ウチ片方しか見てませんけど。」

「あ、そりゃそうか。」

シヨウコはタマミツネを見ていないんだつた。

ということは、両方とも見ている俺が判断した方がいいよな。

「うーん……面倒臭い方………オロミドロ、かなあ。」

「やっぱりですか……。」

「うん。面倒、という表現があれば似合うモンスターもいないと思うぞ。泥を扱うつだけでもう嫌なのに、それを飛ばすわその辺に散らばらせるわ地中に潜るわ爺さんくさいわで最悪だ。」

「最後はようわかりませんが……。」

「シヨウウコが今無事でいられること自体がすごい。いや、できるとは思っていたけどな。……俺たちのクエストはあくまでオロミドロの討伐だ。履き違えないようにしないと。」

「はい。タマミツネとかいう方は、大丈夫ですか？」

「ああ、今のところ捕捉できている。谷の上、かなり向こうの方まで行ってしまっているからな。心配ないだろ。」

面倒な方を先に狩猟する。

つまり、オロミドロを先に追うことにした。

* * * * *

結論から言おう。

オロミドロは、何とか狩猟することができた。

だが……。

「……………こいつ、め、面倒だったな……………」

「は、はい……………」

俺は命を頂いて生きている、ハンター。

だから、このような表現をしてしまうのは非常に気が引けるのだが……………言わずにはいられない。

「な、何なんだあの攻撃！泥のビル建てて、どこの建設現場かと思ったぞ!!」

「そのビルっているのがよう分かりませんが……………あれはビビりました。」

「面倒とかそういうの通り越して……………何かよく分からんままに倒してしまった……………」

「ホンマ、ようわかりませんでしたねえ……………」

途中から独特の動きに慣れ、徐々に俺たちのペースになった。

泥を出したりクネクネ回転したり……………正直、先に相手をしたシヨウコのアドバイスが無かったら、泥または手痛い反撃を喰らっていたと思う。

始めはそれぐらい苦労した。

そして、そのリズムにも慣れてきたら思っていたその時。

急に距離を離れたオロミドロが、泥のビル群を作ってきた。

……言っている意味が分からないと思う。

だがそれ以外に表現しようが無い。

地中から、突然、俺とオロミドロの間に泥ビルが生えてきたのだ。

行く手を遮ってくるわ足を取られるわでもう心底嫌になった。

幸いシヨウコは後方に位置していたため、容赦なくタコ殴りにしていた。

俺ももうヤケクソ。

「むしろこのビル登ればいいんじゃないやね？」というアホみたいな発想の元、ドロドロになりながら泥のビルをよじ登り、空中から頭に目掛けてドカンと一発。

髭を叩き切ってやった。

その後尻尾をモロに食らって、ちよつとやばかった。

ダメージを重ねていくと、釣られた魚のようにビタンビタン地上で跳ね回るので、そこからはもう好き勝手にやらせてもらった。

恨みを込めて。

「……少し冷静さを欠いていた……。」

「ご主人様らしく無かったです。……落ち着いていけば。ご主人様なら避けられました

よ?。」

「反省します……。」

チャツ。

スツ。

言いながら装備を出し入れして、ある程度綺麗にする。

インナーの中にまで泥水が染み込んで非常に気持ち悪いが、これは流石に着替えられないわけで。

……この面倒さ……ハンター連中から嫌われるわけだわ。

「信号弾、撃ちますね?。」

「ああ、頼む。」

一応はクエスト達成なので、シヨウコに狩猟達成の信号弾をお願いする。
非常に疲れてしまった……。

「さて、もう一匹いる訳だが……シヨウコは体力はどうだ？」

「まだいける、って感じですよ！……なので……。」

「……ああ、もうやめておこうか。」

初見のモンスター、それをずっと避け続けていたわけだ。

シヨウコの疲れも納得である。

悔いは残るが……仕方がない。

「まだいける」は「もう危ない」である。

……タマミツネの方はギルドに報告して、他の上位ハンターにやってもらおうか。

無理は禁物。

「……よし！じゃあ、戻るか。」

「そうですね。賛成です。……結局赤い目のモンスター、いませんでしたね。」

「ああ、オロミドロも最後まで変化は無かったしな。」

「ご主人様が言うならそうなんでしょうね。」

「まあ気長に行くしか……？……？」

二人で狩猟後の何でもない会話をしていた。
その時だった。

(どっだ……?)

誰かから見られているような、そんな感じがする。
一応「マップ」を確認。

……大型の反応は無い……が。

「シヨウコ、警戒。」

「……はい。」

トーンの低い声で、大体を察してくれたのだろう。
シヨウコは俺の背中に周り、死角を無くしてくれた。
流石のコンビネーションである。

「……どっですか?」

「分かん。俺の力でも、反応は無い。だが……。」
「……分かります。……なんか、ザワザワしてきました……。」

そうなのだ。

嫌な予感というか、鳥肌が思わず立つような、というか。

そんな不気味な雰囲気、嫌が応にも感じてしまう。

この辺り、死角が多い。

谷に遮られているし、その上から俺たちを見ているということも考えられる。

どこかに、いる。

得体の知れない、何か。

どこだ？

どこにいます？

「……ご主人様！あそこ！」

「いたか!？」

振り向いてすぐ、シヨウウコの指差す方向。

谷の上に向けられた指が示す先。

(あれはタママミツネ……か?)

先程まで俺と戦っていた大型モンスター、タママミツネ。

一瞬、そいつがオロミドロの敵討ちにでもやってきたのかと思った。

良かった、あいつだったのか、と。

少しだけ安心したその時、目に入ったのは。

「あいつ……目が赤い。」

「えっ!？」

「真っ赤だ……どうして、さっきまでは綺麗な青色だったような……。」

「……ウチ、青にしか見えませんが……。」

「そうか……。」

やはり俺にしか赤い目は分からないみたいだ。

発見。

アイツは、例のヤツだ。

「グウウウウウウ……。」

唸る声が、ここまで聞こえる。

周囲の滝の音、水の弾かれる音、その中に混じって尚、鮮明に。

その鳴き声は……先程まで相対していたヤツのモノとは全く違う。

「……シヨウウコ、いけるか？」

「はい、いけます。」

「よし。簡単に言うぞ。アイツの名前はタママツネ、海竜種だがオロミドロとは全く動きが違う。注意してくれ。あと、空中に泡を出してくる。触れると面倒だぞ。気をつけて。それから……。」

シヨウウコに簡単に特徴を伝えておく。

ジツとこちらを睨みつけたままのタママツネ。

すぐに襲いかかってこようとはしない。

だが、確実にこちらのスキを突こうとしているのがわかる。
目は、離せない。

「グウウウウウ………ギヤアアアアアアアアアア!!!」

「ツ!!!」

「~~~~!!!」

唸り声が叫び声に変わった。

滝の前の沼地帯に響き渡る絶叫。

………とんでもない大きさだ。

やっぱり、様子が違うな。

だが、驚くのはまだ早かった。

バツ。

谷からこちらにめがけて、一直線に飛び込んできたタマミツネ。

「!!シヨウコ!!」

「はいっ!!」

すでに予知していたのか、シヨウコの反応は速かった。
余裕を持って後退する。

バシヤアアアン!!

激しく沼地に飛び降りたタマミツネは、だが動かない。
……………どこか苦しげ……………?

俺と戦っていた時の流麗さはいまだ見当たらない。

そんなことを思っていた。

次の瞬間だった。

「ガア……ガ………グアアアアアアアア!!」

「!?」

「う、うわ!なんやのこれ!」

思わず声を上げるシヨウコ。

無理もない。

なぜならタマミツネが苦しげに声を上げた瞬間。

その身から、ドス黒い何かを放出し始めたのだ。

まるで排気ガス……いや、それよりも黒い。

粒子状の黒い粒が混じっているような……。

そんな煙のようなものが、タマミツネの体から発散されていく。

………これ、吸い込んだらまずいのでは?

「シヨウコ!」

「は、はいっ!」

「異常個体!こいつはこんなモンスターじゃない!……急いでギルドに報告!」

「えっ!?で、でも、ご主人様は!」

「安心しろ！……あの時とは違う!!」

「ギャアアアアアア!!」

ズドオン!!

振り下ろされた尻尾。

だが、避ける。

その動きは、見えている。

「……シヨウコ！余裕だ！こんなやつ。」

「で、でも……。」

「安心しろ！必ず仕留める！」

「………はいっ!!」

タタツ。

シヨウコが後方に向けて走り出す。

……ディノバルドの時を思い出すな。

だが、あの時とは違う。

俺は、確実に強くなった。

そう簡単にやられはしない。

何なら、討伐してやるさ。

「……グウアアアア!!」

「来いっ！タマミツネ！」

タマミツネの耳を刺すような咆哮とともに。

本日2回目の狩猟が始まった。

131 怒り狂うモンスターと戦いましょう。

「ギャアアア!!」

「ぬおっ!!」

ドガア!!

谷肌の岩に思い切り突進してぶつかるとたまにツネ。すんでのところで、まるで闘牛士のように避ける。コイツ……こんな直線的な動きだったか？

「グウウウ………ガアアツ!!グアアアア!!」

「くっ………そ!!」

首を振り回し、体を捻り、尻尾を叩きつけ……。

無茶苦茶だ。

あの流麗な動きは、見る影もない。

ただ俺を殺すために。

形振りなど構っていない。

そんな攻撃。

「ギャアアア!!」

「ま……じか!!」

ギイン!!

シュバツ!!ズザン!!

「ギャア!!……グウウウ……」

振り向きざまにのしかかってきたタマミツネに、何とか回避攻撃を入れる。
一応の反撃を試みたが……効いている様子は微塵もない。

「……………どうしたんだよ、お前。」

答えるわけもない質問を投げかけてみるも、もちろん返答は無かった。

……………。

タマミツネとの戦闘が始まってすぐ。

パターンとして、まずは咆哮。

そしてグルグルと回ってからの泡放出……と読んだ。

だがタマミツネは、一心不乱に突進をかましてきた。

予想外の事態だったが、ギリギリのところまで回避。

その後も予想外は続いた。

泡狐竜の名前が疑わしくなるほどには、ヤツは全く泡を吐かなかった。

まるでティガレックスの様に、猪突猛進なモンスターになっていた。

……………赤い目の影響、なのかもしれないな。

動きが単純になっただけならまだ良い。

……………明らかに、タマミツネの攻撃力が増していた。

水しぶきの上がり方、周囲の破壊具合……さつきやりあつた時とは、全く違う。強くなっている。

賢くなっている、とか、俺との戦いに慣れてきている、という訳ではなく。単純なパワーが上がっている。

(……別のモンスターとして狩猟した方がいい……。)

俺の中で読み切っていた、タマミツネの動きや攻撃パターン。一旦リセットした。

興奮し、我を失っているような、そんな様子。

……あの黒い霧？ 煙？ が原因なのだと思う。

何となくだけど。

何故なら。

(あの煙吸ってから……調子が悪い……!!)

俺も、霧を吸ってから体が重い。

何度か接近した時、吸い込んでしまった。

体が重くなり、体力も無くなってきている気がする。

毒か何かの類だろうか。

タマミツネも、苦しんでいるのかもしれない。

何故かアイツはパワーアップしているわけだけど。

「グアウ!!」

「やべっ!!」

ガキン!!

その顎先を開き、噛みついてくるタマミツネ。

思わず双剣で防ぐ。

ギギギギギギギギ……………!!

「グウウウウウ!!!」

「ぬっ……うあああああ!!」

ギャン!!

ズザン!!

「ギャアアアアアア!!」

「……よつと……。」

バツ。

牙と剣との鏝迫り合い。

勝ったのは、俺の方。

はつきり言って、大型にパワーで勝つなんて無理も無理。
なので、いなした。

剣先を地に向けて、相手の力をわざと受ける。

その後、刀を返して、目を狙った。

そして、バックステップで退避。

タマミツネの赤いその目からは、血がダラダラと流れている。

「グアアアア……………」

「くっ……………」

また放出される、黒い霧。

先程の罅迫り合いで、かなり吸い込んでしまった。

俺の体は大丈夫……………ではない。

うまく力も入らないし、今回避攻撃をしろと言われたら、正直しんどい。

風邪を引いたかのようにだるい。

そんな感じ。

（熱が出てても出社を命じられた頃を思い出す……………。）

どうでもいいことを考えてしまった。

あのクソ上司は、元気にしているだろうか。

是非ともこの霧を吸い込んで、寝込んでもらいたいものである。

閑話休題。

……タマミツネは、とても苦しげだ。

あの、どこか華麗な姿は、今は全く感じられない。
やっぱお前もキツイんだな……。

……早く楽にしてやろう。

「……………つあああああ!!!」

「グアアアツ!!」

タマミツネの爪先を狙う。

フリをして。

(狙いはこつち!!)

ズザン!!

「ギャアツ!!!」

前脚を狙って、タマミツネの首元に入り込む。

突然の俺の攻撃に、片脚を上げて避けるタマミツネ。

だが、それはフェイント。

俺はタマミツネの首から切りつけつつ、回転、跳躍した。

「うらあっ!!」

ズザザザザザザザザン!!

ザシュツ!!

「グアアアア………!!」

跳んだ後、頭部から背中、尻尾にかけて蹂躪。

背骨を渡るように、タマミツネを切り刻む。

基本、俺の攻撃はカウンタースタイル。

今のように自分から仕掛けることは、特に序盤ではあまりない。

だが、今のタマミツネは先程とは違う。

猛攻に次ぐ猛攻を仕掛けてくる。

猛攻を防ぐためには。

………俺から行くしかない。

だるい体。

回避攻撃は正直自信がない。

「ガアッ!!」

ズドオン!

タマミツネが上半身を持ち上げて、巨体を沼地に叩きつける。

だが、遅い。

いや、先程より速度は上がってはいるのだが。

(動きを読んで……!!)

ズザン！ザシユツ！
ズザザザザザン！！

（鬼人化……乱舞！！）

「ギヤアアアアア！！」

のしかかりを仕掛けて、スキだらけの側部。
そこに、渾身の力を込めて剣撃を叩き込む。

「……………グウウウ……………」

「効いてないなあ……………」

バシヤツ。

バックステップで距離を取る。

……力が乗り切っていない。

タマミツネに反応することはできている。

かなり速度は上がっているが、反応は可能。

集中を高めれば、おそらくは討伐できる。

……だが、肝心のパワーが乗らない。

俺が、弱くなっている気がする。

「グアアアア………！」

ブワツ……。

(アレか……。)

黒い霧。

もはやタマミツネの体どころか、周囲一帯までその霧は広がりにつつある。

俺も、ぶつちやけ吸い込みまくっていると思う。

……何とか打開しなければ。

再び仕掛けようと、右足を踏み出した。
その時。

ガクツ。

(あれ……?)

バシヤツ。

膝を付きそうになり、慌てて姿勢を立て直す。

(ち、力が……抜けて……!?)

意識すればするほど、自分が思うように動かない。

(ヤバい！ヤバイヤバイヤバイ!!!)

タマミツネが迫ってくる。

その巨体を大きく振り上げ、押し潰してくる。

「こなくそつ………!!」

「グアアアアア!!」

タマミツネのそれとは思えないほどの叫び声を下に聞きながら。

ドガア!!

「ぐあ!!!」

ドン!バシヤツ!!

バシヤバシヤ………ドン!!

俺は吹っ飛ばされ、谷の壁にぶち当たった。

「ぐはっ……ゲホッ！ゲホッ！……つつう……！」

背中をモロに壁に当て、呼吸がままならない。

回らない頭を必死に使って、状況の確認を行う。

（双剣……無い……怪我……足……よし……腕……右……いかれた……！）

思わず頭をかばって振り上げた双剣。

そしてそれを支えた腕。

そのうち、右腕が、おそらく折れた。

（呼吸……！！）

「ひゅうう！！はあああああ……。」

教官に習った呼吸法で、無理矢理息を整える。

こんな苦しき、教官の鳩尾パンチよりは楽だ。

多少痛むが……大丈夫だ。

(双剣は……?)

一瞬で状況判断を終え、息を整えつつ、目を配る。
タマミツネの後方に落ちている俺の武器。
二本とも仲良く地面に突き刺さっていた。

「グアアアアアア……。」

そんな俺の様子を見て、なおも攻撃を続けようとするタマミツネ。
……絶体絶命……という状況に追い込まれてしまった。
……何だ、すごく落ち着いているな、俺。
これぐらいのピンチ、いくらでもあつたからなあ。
腕までいかれたのは、久々だけだ。

「……タマミツネ……すまないが、まだ終わってない。」

「グウウウウウ……。」

「ハンターつてのは……しぶといんだよ!!」

バツ!!

振り向いた後、全力ダツシユ。

足は無事だ。

だが、こんな鈍足ではすぐタマミツネに追いつかれてしまう。

「ギャアアアアアア!!」

ザバアツ!!

地に体を付け、蛇のように俺を追いかけるタマミツネ。

……よし。

カチツ。

バリイ!!ビリビリビリイ!!!

「ギャアアアアアアアア?」

「おっけー……いつてえ……!」

伝家の宝刀!!ノーマーシヨントラップ!!

……我ながらダサイネーミングと技である……。

だが、効果は靦面だ。

引っ掛からなかったモンスターなど、いない。

(武器武器……。)

痛む体と右腕を庇いながらも、素早く武器を回収する。

シュツ……シュツ……。

ペタペタ……バシヤツ……。

(さて……)

さつと双剣の切れ味を戻し、回復薬を貼ってぶっかける。

我ながら手慣れたものである。

シビレ罨はあと7秒ぐらいか？

……一瞬でいい。

考えろ。

この状態でこいつに敵うのか。

いや。敵うかどうか、ではない。

多分だけど、ここでやらないといけない気がする。

この黒い霧。

ここで断ち切らないといけない。

そんな気がする。

女神様が言っていたのは……多分そういうことなんだろう。

だから、この状態で戦う。

これは確定。

(よりにもよって右手とか、笑えん。)

笑えないはずなのに。

なぜこんなにも冷静なのだろうか。

(……やるものが決まっているからか。)

肚を決める。

決めた。

「ギャアア!!……グアアアアアアアアアアア!!」

怒りの咆哮が聞こえる。

ついに罠の効力が切れたか。

「……怒ってるよな?……だろうなあ。さて……。」

「グウウウウウ……。」

「……いくぞ。」

ジャキン！

左手はしつかりと。

右手はやんわりと。

体に力はあまり入らない。

激痛が走る中、双剣を握る。

「折れた腕でどこまでやれるか分からんが……やるか。」

「ギアアアアアア!!!」

怒るタマミツネを正面に捉え。

俺はダランと双剣を構えたのだった。

132 挽回しましょう。

今まで、様々なピンチに直面してきた。

思えば一番ヤバかったのは、やはりデイノバルド戦。

腕もまだまだ未熟だった。

骨を折り、裂傷を喰らい……結局あの時は、教官とセツヒトさんに助けられた。

感謝してもし切れない。

初めてこの世界に来た時のバサルモスも中々ヤバかった。

何せなんの知識もない中、放り込まれていきなり、である。

未熟とかそういうレベルの話ではない。

違法臭い方法で何とか逃げ延びることができたが……あれもよく考えたら、相当に命の危機だった気がする。

ペリオロス……ガムート……ゴシャハギさん……雪山でも結構ギリギリの連続だった。

ティガレックス戦は特にきつかった。

セツヒトさんという極力なバックアップがない中で、まあよくやれたと思う。

そして現在。

多分自分史上最高にヤバい。

タマミツネ……おそらくだが、コンデイションさえ良ければ、普通に狩ることができると思う。

その位の強さ……だと思う。

だが、今日の前にしているコイツは……ちよつと凄い。

「ギヤアアアアアア!!!」

「よっ……!!いってえ……!!」

ズドオ!ズア!!

避けるので精一杯。

上手く剣が握れない。

右腕が振れないので、体も中々自由がきかない。

痛みも走る。

……そう、ただのタマミツネではない。

少なくとも、狩猟始めに俺が相手した個体と同じとは思えない。

挙動も鳴き声も……何だったら見た目も違う。

体色は全体的に黒みがかかり、口から漏れる唾液は紫色。

気持ち悪い。

そして何より……強い。

一発一発が、致命傷レベル。

多分ティガレックスとかデインバルドの尻尾とか……それぐらいの力はあると思う。

痛かったもんなあ……さっきののしかかり。

死んだかと思った。

(装備のおかげか……体が丈夫になったか……。)

バシヤツ!!

動きは止めない。

タマミツネに標的にされないように、常に走り続ける。

骨は痛むが、走れないほどではない。

回避に専念すればイける、と樂觀視したい……が。
できない。

懸念がもう一つ。

「グアアアアアア………。」

(またこの霧……。)

俺が攻撃を喰らってしまった、一つの原因とも言える。

この黒い霧？煙？のようなもの。

タマミツネのどこから発生しているのかは知らんが、多分これを吸い込んだらやばい。

というか、やばかった。

体の自由が、効かなくなってしまった。

自由が効かない、とは表現が少し違う。

かなり疲れて、体が異様に重くなった……その様な状態になってしまう。

現在も体はだるい。

また体が動かなくなるようなことがあれば、今度こそ……。

(なのになあ……何でだろう。)

「ギイヤアアアアア!!」

「ふっ!」

ザバン!!ズドン!!

体スレスレに、タマミツネの尾の先端が振り回される。

ギリギリで避けて、タマミツネを見据える。

状況は最悪。

このタマミツネ、かなり強いし……訳の分からん煙で俺は弱いし。

果ては骨折、避けるしかできない。

いつかはギリ貧。

そんなザマなのに。

(よく、見える。)

心が、落ち着いている。

腕は痛む。うまく双剣が握れない。

体は……まあ動くけど、万全ではない。

だけど、とても冷静だし、タマミツネの攻撃がよく見える。

「ふんっ!!」

ズザー!ザシユ!!

「グアアアア……。」

僅かなスキを見ては、タマミツネにカウンターを入れる。
左手だけで。

攻撃力は半減だが、何もしないよりはましだろう。

「グオオオ……!」

「……!?よっ……と。」

突然首を伸ばしたと思ったら、タマミツネはその場でグルンと横に回った。布団の上で転がるかのごとく、俺に向かって。充分に距離を取り、攻撃を避ける。

「ふんっ!!」

ザン!ザシユ!!

ズザザザ!

「ギャアアア!!」

「……いつてえ……。」

攻撃後のスキを見つけては、一撃、二撃。

それを繰り返す。

軋んで痛む体は、この際気にしないことにする。

はつきり言って、左だけでは大したダメージにはなっていない。

このまま続けてもあまり意味は無いだろう。

……だが、やるしかない。

どうせジリ貧なら、少しでもコイツにダメージを入れる。
体力なら負けない。

さあ、タマミツネ。

「やれるところまで、やろうか。」

「……………グアアアア……………！」

それは返事なのか。

正気を保たぬモンスター。

傷を負ったハンター。

俺たちの泥沼の殺し合いが、再び始まった。

* * * * *

「ふっ……はあっ!!」

ザン! ザシユ! ズザザン!!

「グア……ギャアアアア!!」

「ぐっ!!」

ドガア!!

バシヤア!!

……。

タマミツネの攻撃を避けては一撃、避けては二撃。重い体に鞭を打ち、攻撃を入れていった。何度か判断を誤り、吹っ飛ばされている。

文字通りの、泥まみれ。

何度も何度も転がされ、体中ビチャビチャ。

幸い、致命傷は食らってはいない。

が、小さなダメージがコツコツと累積している。

……だが、それはタマミツネも同じだ。

先程から、動きが鈍い。

流石にスタミナ切れしたのだと思っっている。

そして、変化したことが一つ。

（体が軽くなってきた……。）

俺の方は、徐々に回復してきている。

酷い風邪をひいたかのような様にだるかった体が、だんだん微熱程度のそれまでにおさまってきた。

理由はわからんが……まあいい兆候だ。

（回復薬グレート。）

スツ。

ポーチに触れ、回復薬グレートを即座に2つ選択。

2本のうち、1本を飲み干し、もう1本は体にぶっかける。

(薬の効き目がすごいのか……俺の体がおかしくなったのか……。)

骨折の方の痛みは相変わらずだが、スキル気にしないを発動しているので何ともない。

……嘘です。

めっちゃ痛いのを我慢してます。

(ま、まあ……ディノバルドの時よりは数段マシか。)

辛い基準があるから耐えられる。

ブラックな社畜のような考え方だが、今ばかりは社会人経験に感謝である。

「グウウウウウウ……。」

恨めしそうに俺を見つめるタママミツネ。
相変わらず苦しそうな表情だ。

「ガアアアアアア!!!」

「しっ!!」

ドガア!!

ヒュツ……。

(うまくいった!!)

ザシュツ!ズザザザザン!!

「ギャアツ!!」

馬鹿の一つ覚えのようにのしかかりを繰り返してくるタママミツネ。その疲れ様も込みで、攻撃範囲は読み切っている。右腕を庇いつつ、左の双剣で回転斬り。カウンターが綺麗に入った。

(よしっ！)

ビキッ！

「いいっ??
!!??」

強烈な痛みが右腕に走る。

……調子に乗るとこれである。

アホか。

(慎重にいかないと。)

右腕をカバーしながら左手で双剣を振り回す。

当て木でもしたいが、そんな悠長なこととはしてられない。

俺の見た目はもう片手剣である。

「ギャアアアア……!!」

「ん……?」

ダツ。

急に間合いを取ったと思ったら、タマミツネが咆哮をあげる。

顔を上げて口の周りに小さな泡……ビームか？

「やらせるか……!」

パシヤツ!

無事な両足で、急いでタマミツネに近づく。

ブレスや長い咆哮の時間は、チャンスタイムだ。

タマミツネは、細長い水のビームを扇状に繰り出してくる。

その扇の要が、狙い目だ。

右側面に回り込みながら、近づき。

「うらあ!!」

ザシュ！ザザザザザン!!

左だけの鬼人化乱舞を入れる。

「ギヤア!!」

ゴロン！ゴロゴロ……。

タマミツネが派手に転んだ。

チャンスだ。

(頭部!!)

転んだタイミングと体勢を見て、最も頭部に近くなるだろう位置に、先に回り込む。左手でしか攻撃ができない。

少しでもダメージを多く大きくしたいのなら、こちらは頭を使うしかない。左手で剣を振るその瞬間、ちょうどタマミツネの頭部が目の前にやってきた。

(タイミングバツチリ……!)

「ふっ……!」

ザシュツ! ザザザザザン!!

ズザン! ザシュ!!

二段斬り、ならぬ一段斬り。

それを皮切りに、左手一本の攻撃を入れていく。
焦れたい。

いつそ右手も使ってしまいたい。

でもできない。

だって折れてるし。

焦りは禁物なのだが、欲張ってしまう。

(慎重に……今は少しずつ……。)

「うらあ!!」

「ギヤオオオオ……!!グウウウ……!」

らしからぬ声を上げ、ようやく立ち上がるタママツネ。

……ようやくダメージが入ってきたか。

「おまけえ!!」

「グア……!!」

負傷しているその赤い右目に、もう一閃。

……入れたのだが。

ヒュパッ！

「!!」

「ギャアア!!!?」

たった一撃。

それだけなのだが。

「グアッ……ガア……グウウウ……!!」

身をよじり、痛みをこらえる様子のタマミツネ。

今のは……。

「……………ガアツ!!」

「うおっ!？」

ズガガガガガ!!

蛇がその身を動かすように、突如突進してきた。沼を挟りながら進むのを、ギリギリで避ける。

(危なかった…………。)

突進に、爪撃を混ぜて攻撃してきた。

喰らえば致命傷だった。

考え事をしながら戦うと良くないんだが…………。

先程の一撃。

感触が違った。

いつもの攻撃ではない。

軽い一撃が…………とてもきれいに入った。

(もう一回……。)

タマミツネを見据える。

さつき当てたところは、右目。

狙うには、ちよつとリスクは高い。

見極めて……。

「グア——」

(……今っ！)

バシヤツ。

その巨体を捻らせ、俺の左に位置取ろうとするタマミツネ。

その動きはもはや見飽きた。

移動先を読む。

(こっつ!!)

ヒュパツ!

ザン!

「グアアアア!!」

(また入った……。)

「入った」という表現が、一番しつくりくる。

タマミツネの動きを読んで先に回り、合わせる形で入れた左の剣。

まるで切っ先に何も当たっていないかの様であった。

軽く透き通るような、でも手応えは充分の一撃。

これは……。

(……考えてもわからん。)

深く考えるのは辞める。

とりあえず、弱点である目に、いい感じの攻撃を入れることができる。
そこまでは確実。

……………確実、に持っていくまでが大変なんだけども。

「グアアアア!!」

「よっ。」

ヒュパッ。

「ギイヤアアア!!」

「ほっ。」

ヒュン！ヒュパッ！

ザザン！

(すげえ。入る。)

タマミツネの動きを読み、カウンターを合わせる。
狙うのは顔ばかり。

その数撃全てが、入る。

かなりの集中力を要するが、回避攻撃のタイミング合わせよりは楽だ。

(先を読んで……。)

ヒュパッ!

ズザザン!!

「グアアアア!!……………グウウウ……………」

「おお……………」

自分でも驚き。

かなりのダメージが入っている。

タマミツネに、反撃らしい反撃ができています。

心無しか、体も軽い。

先程から体の重さは少しずつ無くなり、膝をついていた時が嘘のようである。

(……何が起きているのかわからんが……チャンス。)

集中力の持続。

自信のある体力。

剣は一本しか使えていないが。

(このまま……押す!!)

左手の剣を再び強く握りしめ。

俺はタマミツネに猛攻を仕掛けた。

* * * * *

「グアア……ガア……。」

「……………」

それから一刻ほど。

入る一撃を、繰り返し繰り返し続けてきた甲斐もあつてか。タママツネは見るからに消耗していた。

「……………やつ！」

ヒュパツ！

ザン！！

「グアアアア……………！」

ドン……………ダンツ……………。

「尻尾、切れたか……………」

タマミツネのその自慢の尻尾を、体から切り離すことに成功した。
変色したその尻尾が、沼地に転がる。

「グウウウ……。」

「……辛いよな……今、やるから。」

バシヤアツ。

沼地を蹴り、一瞬で間合いを詰める。

目の前に来て尚、タマミツネは動かない。

（限界か……。）

ヒュパツ!!

ズザン!!

首の付け根に、再び剣を入れる。

この感触、忘れたくない。

「ギヤアアアアアア……グオオオオ……」

「……じゃあな。」

ヒュン！

ズザン！

「ガア……」

ズン……。

「……ふう……」

「……」

「倒した……か……？」

沼地にその身を横たえたタママツネ。

……そのまま動き出すことは、終ぞ無かった。

「はあっ……………しんど……………」

バシヤン！

水などお構いなしに、地面に尻をつく。

じんわりと冷たい感触が下半身に広がるが、正直動きたくない。

「……………正気のお前と、最後までやりたかったよ。」

タマミツネの骸に、返りもしない言葉を投げかける。

分かっているても、声をかけてしまう。

自分の心の整理のため。

(勝ったぞー！って……………そこまで思えないわ。)

追い詰められて、死にかけて……。

何故かは分からないが回復して来て。

左手一本しか使えないという状況で、何とか倒すことができた。

「……………お前は、何でそうなったんだ？」

タマミツネの目を見る。

青く鈍い色をした眼球。

先程まで赤く妖しく光っていた目から、元に戻っている。

……………どういう理屈なんだ。

……………だが、何かの外的要因でこうなったとしたら。

それを仕向けた……何かがあるとしたら。

「……………許せないな。」

最初の頃のタマミツネの流麗な様。

オロミドロと2体で、仲睦まじげにしていた、あの姿。

一変してしまった。

荒々しい攻撃、耳をつんざくような苦しげな叫び声。

そして、赤い目……。

それを仕向けた第三者がいるというのなら。

許すことは、できない。

ジャボ……。

「……とりあえず信号弾打って、ギルドに戻って報告——」

立ち上がり、ふと目を落とした。

水面に映るのは、俺の顔。

ギョツとした。

「……………はっ。」

確かに、間違いなく。

「今……俺の目……。」

赤く光っている。

妖しく、自分の目なのに、恐ろしくもあつた。

「……………」

俺は意味もわからず、ジッと水面を見つめた。

1333 マスター？に報告しましょう。

タマミツネを倒した。

様子のおかしさ、強さ……どう見ても普通の個体ではなかった。

その強さを見誤って負傷はしたものの、なんとか倒すことはできたが……。

「この目……治るのかなあ……。」

正直めっちゃ不安。

スタート地点までトボトボと歩く。

気分はあんまり良くない。

せつかく強敵を倒したというのに。

右腕も痛いし。

「……………おっ。」

癖になってしまった独り言を吐き出しながら、ようやく沼地のスタート地点まで戻ってきた。

あまりに泥だらけだったので、道中、崖の窪みで全身着替えた。

狩猟地で一瞬スッポンポンになるという稀有な体験をした。

インナーまで染み込んだ泥をある程度落とすことができたので、よしとしよう。

ついでに右手にも添え木をしておいた。

見た目腫れているが、骨が完全にイッているわけではなさそうだ。

素人判断でくつつけるのはやめておこう……。

怖すぎる。

スタート地点でしばらく待つと迎えのネコタクがやってきた。

普通に乗り込み、ワサドラまで帰ることにした。

ギルドにはなんて報告したもんかなあと、荒い運転に揺られながら考えるのであった。

* * * * *

報告の前に、ギルドの医務室に寄った。

シヨウコが心配しているかも知れないとも思ったが、ネコタクの振動で右腕が痛む痛む。

申し訳ないが、ここは治療を優先させてもらおう。

「ポツキリ……ではなさそうですね。」

「いてえっ!?……あ、そうですね。」

「患部にこれ、貼つときましましょう。……ソウジさんならすぐ治るでしょう。」

「はあ……。」

「あなたの回復力はアイルー並みですからな……とは言っても、数日は様子を見てください。」

お医者さんとは知らない仲ではない。

別に懇意の仲というわけでもないが。

医者と仲良しとか、ハンターとして笑えない気がする。

まさか名前まで覚えられているとは思わなかったけど。

看護師さんに包帯を巻かれ、三角巾をつけられた。

「ありがとうございます。」

「はい、お大事に。」

こんな怪我よく見てきた、と言わんばかりにあっさりとした対応であった。

……………。

ギルドに戻り、報告を行うことにした。

時刻はもう夕方。

予定ではもう少し早く帰るつもりだったが、ギルド内は人でごった返していた。

「うわぁ……………これは無理そう……………」

どの受付も長蛇の列。

その先頭には、ニヤニヤした男性ハンターとそれを対応するハイビスさんの姿が見えた。

後ろには早くしろよとイラつき顔の男たち。

……流石、人気ナンバーワンの受付嬢である。

「待つしかないか……。」

その辺の壁にもたれかかり、周囲を見渡す。

……人が多すぎて、ちっこいシヨウコがどこにいるのやら。

「ご主人様!!」

「のわっ!!」

急に下から話しかけられて驚いてしまった。

なんてことは無い。

シヨウコがそこに居たのだ。

「び、びつくりした……シヨウコ。いたのか。」

「いたのか、ちやいます！ちょうどギルドへの報告を終えて、そちらに飛んでいこうとしていたところです！う、腕が……！」

「ああ、折っちゃった。」

「そ、そんな……。」

青ざめるシヨウコ。

そこまでのことではないのだが。

「安心してくれ、大したことじゃ無い。」

「で、でも！例のタマミツネ、かなりの強さやった……言うことですよね!!」

「あ、ああ。正直良く勝てたと思う。」

「ああ……すんません。報告が長引いてしまつて……。」

「いや、いいんだ。気にしないでくれ。それより……。」

人混みでわちゃわちゃしているギルドを再び見渡す。

「誰に報告したんだ？」

「あ、えつと……あつちです。」

「あつちつて……え？」

シヨウコが指差す先。

受付台が並ぶ方とは反対方向の、ギルド内の酒場がある方。

……………誰よ。

「で、ですから。あの、バーテンさんです。」

「バーテン……………?」

よく目を凝らして見てみる。

……………あ。なるほど。

いや、なるほどじゃないわ。

何してんだあの人。

「……………とりあえず、行こう。」

「はいっ。」

酒場はバーカウンターと十数台の机から構成される、まあ結構な規模のものである。

その中で、一際異様を放つカウンター内の人物。

「何してるんですか、こんなところで。」

「おや、ソウジさん!ご無事ですか!？」

「無事……ではないですけど……シガイアさんの出で立ちに比べれば、なんてこと無いです……。」

「いやはや……申し訳ない。私の趣味でしてね。………あ、すみません。お待ちせしましたとお伝え下さい。」

手際よくドリンクを作ると、給仕の男性に渡すシガイアさん。

………何してんだこの人。

遠目から見たときは吹き出しそうになったぞ。

かなり板についた様子のシガイアさんは、横にいたもう一人の男性に何かを話している。

その男性は、サツとどこかに行ってしまった。

……ギルドになにか報告しに行ったのかな。

「いや、すみません。一応救援の準備を進めていたのですが、必要なくなったものでして。今、キャンセルしましたので。」

「あ、ありがとうございます。」

「ソウジさんの事ですから、すぐ戻るとは思っておりましたが、まさか負傷して帰られるとは思わず……腕の方は大丈夫ですか？」

「折れてます。数日は様子を見るようにと言われました。……大したことは無さそうです。」

「はっはっは。腕を折って大したことないとは……師匠に似てきましたねえ、ソウジさん。」

「うっ……。」

軽口を叩きながら、スツと俺にミルクを差し出してくるシガイアさん。

……本職じゃなかるうか。めっちゃ似合っている。

ダンディなマスター、と言われれば、うんそうだね、と返すほどには。

「……………報告をお受けしても？」

「えっ？ここにですか？」

「ええ、とりあえずバーテンの真似事は終わりにします。……ソウジさんが怪我をされるほどのモンスター、そちらの方が急務でしょう。」

「は、はあ。」

まるで飲み屋に愚痴を言いに来たハンターのようであるが……まあいいか。
ギルドのトップが、ここでいいと言うんだから。

「じゃあ……まず、今回のクエストの狩猟対象であるオロミドロ……コイツは普通に倒せました。」

「ええ。そちらはシヨウコさんから伺っております。」

「その後……聞いているかもですけど、泡狐竜……タマミツネが現れました。」

「……………ふむ。」

「初見でしたし、確定はできませんけど……目が、例の感じでした。」

「……………様子は？」

身をカウンターに少し乗り出し、声を落として話しかけてくるシガイアさん。

発言に気をつけろということか。

「その前に……タマミツネというのは、珍しいモンスターですか？」

「出現報告は、この辺ではほとんどありません。……首都に行けば、東方の湿地帯に居るというの、聞いたことがありますね。」

「そうですか。」

やっぱり珍しいんだな。

聞いたことの無いモンスターであつた為、確認がしたかつた。

「……めちやくちや強かつたです。攻撃力で言えば、ティガレックスやディノバルドの力に匹敵するかと。」

「……………間違いなさそうですね。」

俺の腕を見やり、頷く。

自分で言いたくは無いが、これでも一応俺はHR7のハンターである。
よっぽどだと、伝わったと思う。

「続けます。」

「はい、ゆっくりで結構ですよ。」

メモを取りながら、俺の話を書くシガイアさん。

そこから、俺はタマミツネの様子を細かに伝えた。

狩猟の流れ、攻撃の仕方、反撃、そして俺の体調の変化まで。

酒場の喧騒は一段と増していく。

その雰囲気盛り上がりとは裏腹に、シガイアさんの表情は険しくなる一方であった。

「……………こんな感じですよ。その後は信号弾を上げて、ネコタクで戻って医務室へ直行しました。」

「……………ありがとうございます。狩猟お疲れさまでした。その、黒い霧の影響はいかがですか?」

「……………。」

遠くの窓に映る自分の姿を確認する。

三角巾を付けた俺の目は、未だ赤く妖しく光っていた。

「……………まだ、赤いままですね。シヨウコ、どうだ？俺の目。」

「えっ？……………いや、ウチには、普通に見えます。」

「私も、いつものソウジさんに見えますねえ……………」

「なるほど……………やっぱ俺にしか見えないのかなあ……………」

モンスターにしか起こらないと思っていた現象。

それが俺にも起こっている。

……………正直不気味以外の何者でもない。

「体は何ともないです。むしろこう……………集中力が増しているというか、頭が冴えている感じがします。」

「不思議なものですね……………実は、今回の件で一つ思い当たることがあります。」

「えっ？」

そう言うときガイアさんは、カウンターの下から書類の束を取り出してきた。

数十枚のそれは、紐で固く縛ってまとめられている。端が変色し、随分古そうだけど……。

「シヨウコさんの報告を聞いてもしやと思い、取り出してきたのですが……これではないかと踏んでいます。どうぞ。」

「……拝見します。」

「う、ウチも見えていいですか？」

「もちろんです。」

シヨウコにも見えるように、差し出された書類を見る。

「ご主人様……この症状……。」

「……ああ。多分……そうかも。」

書類に書かれていた内容。

ところどころインクが滲んで見えにくい……。

『……………モンスターの狂竜化について……………バサルモスがひれ伏したと同時に、その巨体を取り巻くように黒い霧が出現……………バサルモスは我を失ったかのように暴れ回り、その体色も青黒く変……………パーティーメンバーと協力し、罾を仕掛けながら何とか倒すことが……………私はこの現象を「狂竜化」と名付けることにした。影響はハンターにまで及び……………』

ページはここで途切れている。

だが、今回の狩猟と合致するところはいくつもある。

狂竜化……………

俺が唾を飲み込むと、シガイアさんがページをめくっていく。

「……………これは二十年程前、黒く変色した異様なバサルモスを倒したあるハンターの手記です。」

「二十年……………」

「ええ……………そしてこのページには……………そのハンターもまた、様子が変わってしまったと書かれてあります。」

「えっ!？」

「ああ、ご安心ください。ウチケシの実を飲んで、落ち着いたようです。……ここです。」
「……………あ、ホントだ。」

シガイアさんが指し示したところを見ると、確かにそう書かれてあった。
少し安心したけど……………危惧すべきは他にある、よな。

「……………問題はここでは無いですね。」

「……………ええ、そうなんです。」

「えっ?」主人様もウチケシ飲めばええんちやいます?」

シヨウコが疑問を投げかけてくる。

まあそれはいいんだけど。

「シヨウコ、例えばその辺のハンターがふらつと狩猟にでかけたとして……………対象のマスターが規格外に強力になっていたら。どうだ?」

「あ……………」

「どうやらわかったようだ。」

「そいつはウチケシの実で対処できるともわからず、俺と同じように力が無くなって……。」

「うわぁ……。」

「ええ……非常にまずい状況になりますね。」

ギルドは、そのハンターランクに応じて厳密にクエストの対象を決定している。

安全に狩りを進めるために、それは必要不可欠な要素だ。

もし、黒い霧……狂竜化したモンスターが蔓延しているというのなら……それが根底から覆される。

ギルドの信用とか以前に、ハンターの命が危ない。

「……ソウジさんが力を失ったあと、再び調子が戻った……いや、それ以上に良くなった。……ウチケシの実は？」

「いや、飲んでないです。」

「……ソウジさんは狂竜化の影響を受けたと見ていいでしょう。そしてそれを克服した。その要因が、負傷してもなお攻撃し続けたということでしたら……ちよつとその辺の方には真似できない芸当ですよね……。」

「そ、そうですね……。」

「ご主人様は猪突猛進やから……。」

若干呆れ顔のショウゴ。

……何も言い返せない自分が恥ずい。

「…………すぐにクエスト受注基準の一時的な見直しを図ります。ハンターたちにも注意を払ってもらおう。幸い、黒い霧というのはソウジさんでなくても視認できるようですからね。救援体制も増強、無闇矢鱈にモンスターに立ち向かうのを辞めてもらう他無いでしょう。」

「そうですね。」

「いやはや……ソウジさんが負傷してまで持つてきてくださったこの情報……ありがたいです。」

「少なくとも無謀な真似はしないようにと通達しなくては」と言い残し、シガイアさんは書類をまとめ始めた。

「ソウジさん。まずはお体を治しましょう。急を要する状況ですが、ワサドラのハンター層は厚い。ゆつくり休まれてください。」

「はい、ありがとうございます。」

「シヨウコさんも、いい機会です。一緒にゆつくりなさって下さいね。」

「安静にするよう、ご主人様を監視します！」

「ははは、それは大切な役目ですね。よろしくおねがいします。……それでは。」

コツコツと足音を立て、ギルド本部に向かうシガイアさんを見送る。

……立ち振る舞いがダンディだとは思っていたけど、バーテンの格好が似合いすぎだろ。

「……俺もああいう大人になるべきなんだろうなあ。」

「ご主人様はタイプが違う気がします……。」

シヨウコから大変失礼な返事を頂いた。

精神的にも少しだけダメージを負った俺は、大人しく宿に向かうのであった。

* * * * *

宿ではちよつと騒ぎになった。

まず、俺が帰ると同時にドールにめっちゃ心配された。

「せっかく私の頭撫でたのに……。」とか何とか言っていた。

あれ?ドールさん、頭ナデナデ幸福のおまじない否定派でしたよね?

そこから俺にクエスト禁止令なるものが発布された。

「身の回りの世話も私がするから、大人しくしててね。」

「ドールちゃん?お世話はウチがやるで?宿の仕事、大変やろ?」

「ううん。私がやる。」

「いや、ウチが。」

「いやいや。」

「いやいや。」

……社会人みたいなやりとりをする二人は放って、とつと部屋に戻ろう。
でも確かに安静にはしないとなあ。

「ソウジさん、あの二人を放っておいていいのなの？」

「いやあ、仲が良くていいことですね。」

「お前さんも大概じゃのお……。」

ホエールさんが珍しく感心していた。
なぜ？

……。

夕飯をとって部屋に戻ってからは、泥だらけの装備の掃除を始めた。
ちなみに夕飯時也大変であった。

右手が使えないからと言って、別に飯を食えなくなったわけでもなし。

ありとあらゆる方法で、ドールとシヨウゴが俺に食わせようとしてきたのだが、丁重

にお断りをして、左手で食べた。

「そうか。食べにくいものにすればよかったんだ。」

「ドールちゃん！明日の朝は左手じや食べられんようなもの、お願い！」

「う、うん。わかった。やってみるね！」

「君たちは何の相談をしているんですかね。」

そんなに俺に食わせたいのか。

ありがたいことではあるが……ドール、そういうのを本末転倒と言うんだぞ？

そんなこんなで、落ち着かない夕飯を終え、部屋に戻ってきた次第である。

装備の方。

ギフトのおかげでほとんど綺麗になってはいるが、細かいところまでは砂が入り込んでいて汚れていた。

この際装備の一新も兼ねて、セツヒトさんの所に行くのもいいかもしれない。

……そういえば、スキル関連のパワーアップの為に装備を変えるんだった。

その辺も相談しに行こう。

足りない素材は……アンジャンフ……リオレウス……あとラージャンか。どれもこれも強敵である。

特にラージャンとか、ハイビスさんに行かないよう釘を刺されたモンスターである。……あの素材だけは、狩猟以外の方法で何とかしないとなあ。

「……ご主人様ご主人様。」

「ん？何だ？」

あぐらをかいて両足で装備を固定しながら綺麗にしていた俺。

そんな俺の様子を見ながら、シヨウコが話しかけてきた。

「……整備、ウチやりましょうか？」

「ああ、ありがとう。でも大丈夫だ。大した汚れでもないし、こういうの好きなんだ。」

「わ、分かりました……。」

「……どうした？」

……シヨウコが何か言い淀んでいる。

「何か言いたいことがあるなら、遠慮なく言って欲しい。俺とシヨウコの仲だろ?」
「……あ、ありがとうございます。……その……。」

……かつこいいことを言ったが、何か俺に対する不満があるのかと思うと、ちよつと心配。

こういうのは手つ取り早く聞いて、改善していくに限る。
コミュニケーションの齟齬は、俺たちの場合命に関わる。

「……」主人様が以前ここのでウチを説得されたこと……覚えていますか?」
「ああ、あの時か。」

デイノバルドに叩きのめされた時、シヨウコは自分のせいだと落ち込んで塞ぎ込んでしまっていた。

辞めると言い出した時は、内心ドキドキだったんだよなあ。
女神様を真似して、プレゼン作戦で何とかしたけど。

「あの時……ウチ、めちやくちや嬉しかったです。今更ですけど。ご主人様に、一生付いていこうって、今でも本気で思っています。」

「お、おう。」

面と向かつて話されると恥ずかしい。

そんな俺の顔を見ながら、シヨウコは言いにくそうに心の内を吐露し始めた。

「……やから、今更ウチがお荷物ちやうかとか、そんなん、思いません。意地でも強くなって、ご主人様に追いついて見せます。……でも、今回のタマミツネで……やっぱりウチ、足引つ張つとるんちやうかって、思ってしまった。」

「……………」

「で、でも！がんばります！もうウジウジしたくないんです！ご主人様に回避上手で褒められて、ウチめっちゃ嬉しかったです！頑張ってきた甲斐があつたって、そう思いました……。ご主人様は……ウチの事……これからも頼りにしてくれますか？」

「……………何を言うか。」

タマミツネ。

何とか倒したが、あの強さは完全に誤算だった。

万が一の可能性も考慮して、シヨウコにはギルドに走ってもらったけど。

俺がまるで、シヨウコを邪魔だと思ったと……そう不安に感じたんだな。

……全力で否定させてもらう。

「シヨウコ、沼地でも言ったけど……セツヒトさんとか教官とか……俺がとても敵わないと思うあの化け物クラス。その辺と比べてもシヨウコの回避具合は、凄まじかったんだぞ?」

「は、はい。」

「そんなオトモが俺についてきて、フオローに回ってくれるって……どんだ俺は恵まれているんだ?とっているよ。」

「……。」

「頼りにしている。それが俺の答え。タマミツネの報告にギルドまで走らせたのも、結果アイツを倒せそうなのは俺だったからに過ぎない。シヨウコはパワーが足りないしな。」

「うっ……。」

「まあそこは適材適所。ギフトの力を明かさなないようにしなければならぬ以上、俺が

パーティーを組むことは難しい。……もう一度言うけど……頼りにしまくってるよ。うん、本当に。」

「ご主人様。」

偽りなき本音。

ここまで献身的に俺について来てくれて、時には無茶すぎと叱ってくれる。本当にありがたい存在なのだ。

「……な、なんか恥ずかしくなってきたから、この辺にしよう！ね、寝るぞ！」

「あーご主人様、顔赤くなってます！」

「ううううううううのさい。なってへんなってへん！」

「ふふ……何でウチみたいに喋るんですか。」

あああめつちや恥ずい。

テキパキと装備をポーチにしまい、とつとと寝るに限る。

「ご主人様？」

「あ、ああ。どうした?」

「……きよ、今日は、そつちで寝てもええですか?」

「……好きにきなさい。」

「………はいっ!!!」

ちつこいシヨウコが毛布を持って俺のベッドに並ぶ。

……まあたまにはいいか。

右腕はまだ折れているし、赤い目の症状はよく分からんし。

不安なことはたくさんあるけど……今夜ばかりは忘れて、眠ろう。

俺とシヨウコは狩りの疲れもあり、そこからすぐに眠りにつくのであった。

おやすみなさい……。

134 わがママを言いましょ。

思春期の頃。

まだ子どもがケータイを持つことが珍しかった、そんな時代。

好きな子に告白と言えば、やはり直接伝えることが多かった。

今ではメッセージアプリとか、メールとか……若い子のやり方は知らんけど、その時はそうだった。

そしてその次に多かったのは、ラブレターである。

俺も書いたことがある。

だが、終ぞ渡したことは無かった。

なぜなら、夜中にしたためた文章なんぞ、次の日の朝には赤面必至の内容と化すからである。

数回ほど自分のアホさ加減に恥ずかしくなり、ゴミ箱に突っ込む。そんな経験をしてきた。

夜中のテンションとはかくも恐ろしい。

以上、中身おっさんの回顧エピソードでした。

そして現在。

「……やってしまった……。」

「すう……すう……。」

朝目覚めたら、隣にシヨウコの顔があつた。

……一応、シヨウコはアイルー系の亜人である。

体格は、小柄。下手したら小学生とかその辺の部類。

見た目は可愛い。さらに言えば、猫耳に尻尾なんぞ俺の趣味にどストライクではある。

だが。

そういう目で見てはいけない。

……いけないのですが。

「こ、この状況は……。」

同じベッドで一晩過ごしてしまった。

……………誤解無きよう。

俺は何もしていない。していないぞ。

字面にすると完全に「お前やったな?」とか思われそうだが、断じて無い。

なぜ昨晚の俺は、一緒に寝るのを許可してしまったのか。

なぜあんなかつこつけて「好きにしろ」なんて言っちゃったのか。

疲れてたし、夜のテンションってば、恐ろしいわあ…………。

いかんいかん。考えろ。

…………この世界でアイルーに何かしらやましい事をしようものなら、アイルーを親愛の対象とする恐ろしい方々からの私刑は免れない。

…………過ぎたことは、言っけていても仕方がない。

ここから最善を尽くすのみである。

「と、とりあえず…………誰にも見られないように…………。」

『ソウジ?』

「ぶふおっ!!」

『んー? だいじよぶー? おっはよー。お見舞いにきたよー。』

間。
スヤスヤ眠るシヨウコを起こさぬよう、ゆっくりベッドから降りていこうとした瞬間。

呑気な声がドア越しに聞こえ、思わず吹いてしまった。
な、なぜセツヒトさんが!?

『……ソウジー? 入ってもいいー?』

「ちよ、ちよっとお待ちください……。」

『えー? なにー? 聞こえない。』

シヨウコを起こさないように小声で返事すれば、セツヒトさんに聞こえない。

かといって大声を出せばシヨウコが起きる恐れが。

急いでドアまで行って、すぐに誤魔化すしかない!

………なんて言う俺の浅はかな考えは、無慈悲にもドアの音によって、意味のないものとなってしまった。

ガチャツ。

「失礼しまー……………」

「……………」

状況。

ベッドに腰掛ける俺。

横に眠るシヨウコ。

それを見て固まるセツヒトさん。

……………以上。

「……………これはー……………」

「せ、セツヒトさん……………あのですね……………」

「……………」

「……………」

「……………お楽しみー？」

「ち、違います!!」

「ここは何が何でも否定させてもらおう！」

「な、何もしてませんから！」

「……この状況でー?」

「そうです!もちのろんです!」

必死過ぎて逆に怪しくなりそう。

いやいや!今は否定していくぞ!

とか何とか声量も考えずに話してしまい、シヨウコがもぞもぞ動き出した。

「……う、うーん……?」

「あ、シヨウコちゃん?おはよー?」

「え?……セツヒトさん……おはようございます……。」

「お、おはよう、シヨウコ。」

「あ、ご主人様……。」

まだ寝ぼけているのか、トロンとした目でこちらを見て、少し頬を赤らめるシヨウココ。
いや、シヨウココさん、まずいんですよその反応。

余計に怪しくなるじゃないですか。

とか何とか思ってたなら、シヨウココから爆弾発言が落とされた。

「き、昨日は……ありがとうございます……。改めて、嬉しかったです……。」

「……シヨ、シヨウココ？その発言は完全に誤解を招くから——」

「い、一緒に寝てくれて、ありがとうございます。」

「ちよつと待つてストツプシヨウココオオ!!」

「うわー。これはギルティー。」

セツヒトさんが引いている。

何がどう転んでもまずい状況。

寝ぼけるシヨウココを起こし、セツヒトさんに何とか説明し。

事なきを得るまでに、しばらく時間を要するのであった。

* * * * *

何とかセツヒトさんへの説明を終えて、そのまま宿の食堂に向かった。今日も白ごはんに味噌汁と焼き魚という、スタンダードなメニュー。

世界で一番落ち着くこの宿で、俺が大好きな最高の献立。

ここまではいい。

ここまではいいのだけれど。

「はい、ソウジさん。口開けて。」

「あの？ドールさん？俺、自分で食べられますよ？」

「だめ。せつかく食べにくい焼き魚にしたんだから。はい。」

「ど、ドールちゃん？ウチも……。」

「シヨウコちゃんはダメ。今日は私。一緒に寝たんだから、我慢だよ？」

「う、うう……。」

朝食が並んだと思ったら、俺の箸がなかった。

フォークもスプーンもない。

……と思つたら、ちよつと怒つてゐる風のドールから箸を向けられて、口を開けるよ
う要求される。

これどんな状況だよ。

「いやー、私も一緒になんてー。すみませんねーホエールさんにドールー。」

「ほつほつ。また自堕落に生活しとるんじやろ？たまにはドールの飯を食いに来るとええ。」

「うっ……わ、分かります？いやー気をつけてはいるんですけどねー。」

向かいにはホエールさんと会話を交わすセツヒトさん。

ドールに、俺とシヨウコが添い寝したことをチクつた張本人である。

……何食わぬ顔で白米を口に運んでは、ホエールさんと盛り上がっている。

食堂で一緒に机を囲むのは、俺とドール、セツヒトさんとホエールさん、シヨウコ。
ハンスは居ないけど、修練所に向かつたのだろうか。

「ソウジさん？はい、ご飯。」

「い、イエスマム。」

言うことを聞くしかない。

何かプレッシャーが凄い。

以前デイノバルドによつて負傷した際、ドールはやたら俺の看護に張り切っていた覚えがある。

今回もそれかな……。

俺はこの子に、完全に胃袋と寝床がお世話になつていく訳であつて。

ある意味、一番怒らせてはいけない人物である。

……よし、もうこの際開き直つてガンガンいただいでしまおう。

うんそうしよう。

まるで雛鳥の様に言われるがままに食べる。

重症患者でもないのに。

恥ずかしいのを我慢していたら、ニヤニヤしながらセツヒトさんがこちらを見てきた。

イジリの予感！

……よし、塩対応で流そう。

「……ソウジー、良かったねー。こんな可愛い子にあーんされてー。」

「はい、よかったです。」

「私もあーんしてあげようかー?」

「い、いえ、丁重にお断り申し上げます。モグモグ。」

「……ちよつと言いだねー。……想像したんでしょ?」

「な、何のことやら!」

ドールに食わされ、セツヒトさんにからかわれ。

シヨウコは朝から赤面のまま。ホエールさんは「ホツホツ」と笑って。

自分史上最高ランクに落ち着かない朝食であつた。

味がしない……。

* * * * *

「……で、せつちゃんさんは何のご用だったんですか?」

「あーごめんごめんー。」

ようやく朝食を食べ終え、ドールからも解放され。

お茶を飲んで落ち着いた時には、もう朝とは呼べないような時間に差し掛かかっていた。

……結構寝てしまったんだな、と睡眠時間を逆算していると、セツヒトさんが話し始める。

「いやー、ベッドに寝転んでいるシヨウコちゃんを見て全部吹っ飛んじやったよー。

……シヨウコちゃん本当に何にもされてないー？」

「は、はい。大丈夫です。」

「何かあったらすぐ言っただけ？」

「い、いやウチはまあ……はい。」

「シヨウコ、何だその微妙な返事は。」

セツヒトさんも失礼な方である。

「あー。で、用っただけはねー？」

「あ、はい。」

話の内容がコロコロと変わる。

セツヒトさんとの会話は常にこんな感じであるため、慣れっこである。

「まず、ソウジが怪我したって聞いてー、お見舞いにきたのさー。うちの店の前で偶然ハ
ンズに会ってねー？教えてくれたよー。」

「ハンズが？」

「そー。『今朝も会えていなくて……心配です……』って言ってたよー。」

妙に似ているモノマネをしながら、経緯を話してくれるセツヒトさん。

この人、形態模写上手いんだよな。

器用な方である。

しかしハンズにまで心配をかけてしまった。

昨日は会えていない。

俺の怪我のことか、ドール辺りから聞いたのだろう。

「あとー、どうせ暇になるだろうと思ってー、前話した装備のこと、相談しとこうと思っ
てねー。」

「あ、それ、俺も話したかったんです。」

「うんうん。多分、それ装備すればー、ソウジ相当戦えるようになるのになーって。」

「でも素材がないんですよ……。」

無いものは作れない。

それはもうしょうがないことである。

「それなんだけどさー……シガイアさんから話に来ててねー？」

「シガイアさん？」

なぜあの人の名前が出てくるんだ？

セツヒトさんは、話のトーンを少し落とした。

「……現状、聞いたよー？結構やばいことになってるよねー。」

「……そうなんです。」

「昔ちよつと聞いたことあるんだけどさー。狂竜化……ちよつち珍しいよねー。」
「はい。」

「で、その対処の最前線、ソウジに立つてもらうしかないのに、つてさー。シガイアさん、割と必死だったよー？」

「え？ そうなんですか？」

昨日、バーテンの格好をしたギルドマスター……つまりはシガイアさんからは、そんな様子は感じられなかったけど。

そう言うと、セツヒトさんは机の上湯呑みを持って、口に運んだ。

「ズズズ………ふう………。ドールちゃん、お茶の腕あげたねー……あー、それでねー？」

「はい。」

「……ソウジの素材、用意できるよー？」

「うえっ!？」

「ラージャン以外は、まあうちにあつたのさー。」

「い、いえ、そうではなくて。……用意………していいものなんですか？」

「え？うん、問題ないよ？もちろん……コレは頂くけどねー。」

と言いつつ、指で輪っかを作るセツヒトさん。

いや、払えるもんはもちろん払いますけど……。

「正直全く実力ないハンターが同じことしたら、まあ非難ごーごーだろーけどさー？
……ソウジはもうかなり強いほうだしー？いーんじやない？」

「うーん……。」

「緊急？みたいだしさー。ほらー、前も言ったよねー？あの時……属性武器の話をした
時ー。装備に頼るようなハンターはよくないってさー。……でも、ソウジはとつくにそ
の段階ではないしー？……HR7の装備としてはー、それ、結構弱めー？」

「いや、聞かれても。」

……だかまあ、セツヒトさんの言うことは分かる。

要は今の装備は、俺の強さに比例していないっていうか。

いや、自分で言うのも何だが。

……正直新しい装備は欲しい。

それにとつと腕を治して、今起きているモンスター異常の調査を再開したい。だけど。

仰ることは分かるんだけど。

……これは俺のワガママ。

「セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん……。素材はその、ありがたいんですけど……。できたら、自分で倒したモンスター達の力をモノにしたいと言うか。」

「……………」

「ラージヤンはやめるように言われているんですけどね……。ですがその、わがままなんですけど。残りの素材も、頑張って集めたいと言うか。」

「……………ふんふん。」

「…………ハンターになつて……。やつぱり俺はまだ甘い。どこか、命をとることに対して臆病なんです。これは、この世界の人間ではないことが関係しています。だから……。何と言うか、自分の装備だけは、きちんと自分の手で倒したモンスターの物を使いたい。」

俺が言ってることは、正直矛盾していると思う。

だって、食べている物とか、使っているアイテムとか、知らないモンスター由来のものばかりである。

言い出したらきりがないほど。

命を大切に頂きたいなんて言うなら、ベジタリアンにでもなって、ハンターなど辞めるべきである。

……だけど、俺はハンター。

せめてハンターとして生きる為の、自分の装備だけは、自分で何とかしたい。

作ったり加工するのは俺じゃないんだけども。

………やっぱわがままだわ、と自分でも思う。
でも。

倒したモンスター達への敬意というか、思いだけは忘れたくない。

俺がいなければ、死ぬこともなかったかもしれない命。

それを断ち切った、せめてもの償いというか。

モンスター側からしたら、何言ってるんだって話だよなあ……。

俺の正直な思いを伝えると、セツヒトさんはニヤニヤしながら顎を手に乗せた。
……この人のこういう顔は、よく知っている。
機嫌がいい時だ。

「……………いーねー。やっぱいいよー、ソウジー。」

「……………いや、すみません。急を要するって時に……………」

「いやー、男を見たねー。気持ちはわかるよー? うん。」

「……………ありがとうございます。」

褒められている、と思っておこう。

まるで子どもが駄々をこねる様な感じで、ひどく申し訳ないけど。

「まー、ラージヤンはキツイだろうから……………その時は私が組んでもいいよー?」

「えっ!?! 本当ですか!?!」

「うん。お力になれるかは分かりませんがー。」

いや、アナタが力にならなかつたら、それはもうどうしようも無いでしょう。俺が心の中で突っ込んでいると、シヨウコから質問が上がった。

「……実際、ご主人様の右腕、どれぐらいのもんですか？」

「ん？どれぐらい、つてのは？」

「えつと、ほら、ご主人様の怪我の治り具合つて、はつきり言つて異常やないですか。ウチらアイルー並というか、それ以上やし。今、腕の具合はどんなもんかな、と。」

「ん——……。」

ドールの勢いに押され、起きてから朝食まで全く右手を使つてなかつた。試しに優しく右手を握つたり、腕を押さえたりしながら確認する。

……痛みは殆ど無いな。

三角巾の下は包帯でよく分からないが、昨日夜熱かつた幹部は、腫れが引いていると思う。

「……まあ無茶は禁物だろうけど、多分治つてきてると思うぞ？ちよつと痛いから、安静にするけど。」

「普通腕折つたら、一週間は痛いですよ?……でも、良かったです。引き続き無茶せんよ
う、ウチが様子を見ますからね!」

「は、はい。」

まるでおかんである。

「うーん、ソウジ。尻に敷かれてるねー。」

「これは尻に敷かれるとは言いません。」

「じゃー……夫婦漫才?」

「誰が夫婦か(ですか)!?」

「いやー、一緒に寝るぐらいだしー?」

息ぴつたりのツツコミである。

その話、いつまで引きずるんだ。

* * * * *

片腕でもリオレウスを狩ったことのあるセツヒトさんの逸話を話聞いたり、一緒に寝ていたことを散々いじられたりした後、セツヒトさんは帰っていった。

「無茶は禁物だよー？」なんて言いながら。

どの口が言うんだ。どの口が。

「さて……シヨウコさん。一つお願いがありました……。」

「……………一応聞きますけど、ランニングしたいとか筋トレしたいとか、そんなんだめですからね？」

「……………」

「凶星ですね……。絶対ダメですよ！」

「うう……………」

「ついでお酒もだめです！怪我人なんやから、大人しくして下さい！」

「い、イエスマム。」

本日2回目のイエスマム。

いつまでもシヨウコには勝てない気がする。

その後、あまりに暇を持て余した為、俺がギルドにでかけることを提案。「絶対安静！」と釘を差された後、なんとか解放された。

ホツとしている自分が情けない。

「いろいろな情報収集しないとな。」

相変わらず癖になってしまった独り言を吐きながら、ワサドラギルド本部に向かうことにした。

そういやハイビスさんに何の報告もしてないし。

今ならまだ人は少ないだろう。

時刻は昼前。

町中の喧騒を抜けつつ、俺は昨日ぶりのギルドに顔を出しに行くのであった。

135 新たな情報を収集しましょう。

昼前のギルドは、昨日の夕方の盛況ぶりとは打って変わって、静かなものであった。石造りの扉を抜けると、受付には人もまばら。

チラホラと重装備のハンター達がいる程度である。

やってきたのは、情報収集……もとい暇潰しの為である。

ハンター達の動向を知るのも大切だ。

あまり誉められたことではないが……一つの集団に、遠くから耳を立ててみた。

「ザシユー、確認終わったぞ。」

「そうか。では、行こう。」

「禁足地の近くに行くのは初めてだな……。」

「まずは移動だ。護衛もいるから、気楽なものだ。」

「それもそうだな。車の中で打ち合わせをおこよう。」

……どうやら遠方に長期間をかけて狩猟に行くようであった。

四人組で一人は女性。あとはむさい男達。

顔を見たことがある程度である。

あの人の名前なんて言つたつげな……などと考えていると、リーダー格の男性と目が合ってしまった。

会釈を返しておく。

俺はいつもソロ……シヨウコとばかりクエストに行くため、あの様に仲良くパーティーで狩りに向かうのは、実は少し羨ましい。

すると、その目があった男性が仲間には断りを入れ、俺に向かってくる。

……えっ？

何か俺やってしまった？

「………ソウジさん、ですか？」

「あ、はい。」

返事にどうしても「あ、」が入ってしまう。

悲しいかな、日本人おっさんの性である。

「……………自分は、HR5で双剣使いのロー」

「ザシューさん、ですよ？ 確か以前ギルドでお話しました。」

「あ、はい。」

ギロリと怖い目つきで睨んでくるザシューさん。

なんで覚えているかって、めっちゃくちゃ怖いのである、この人。

まるでプロレスラーの様な体格。

双剣を使うなんて聞いて度肝を抜かれたのを、今でも覚えている。

だって明らかにハンマーとか大剣とか、その辺の武器を扱いそうな感じなのに。

「……………お、覚えていてくれたんですね。」

「え、ええ。それは、まあ。」

「……………嬉しいです……………」

「……………」

会話が途切れる。

えっ、何？

やばい、ガンくれやがって、的な話になるなら、完全に非は俺にあるわけですけど……。

ぶつちやけちよつと怖い……。

「……お、同じ双剣使いとして、尊敬しています。」

「そ、それは……どうもありがとうございます。」

「その低い姿勢も、見習っています。……お時間頂戴して、すみませんでした。失礼します……。」

ドスツ、ドスツ……。

でかい足音を立てて去っていくザシユーさん。

……あー怖かった。

あんな人に睨まれたら誰でも怖いに決まっている。

しかし、尊敬か……俺何かしたっけ？

……まあいいか。

悪い感情を持たれていなかっただけでも、よしとしよう。

うーん……モンスター相手なら慣れてきたけど、やっぱりガチンコのハンターさんは未だに怖い。

パーティーを頻繁に組めば克服できるのだろうか。

……でもなあ、ギフトとか秘密を隠したまま過ごす自信がないし。

そもそもそんなのシガイアさん辺りはまだ許してくれないと思うし。

「うーん……。」

「ソウジさん、どうかされましたか？」

「おわっ!!……は、ハイビスさん。」

「そ、そんなに驚かれなくても。」

「すみません……考え事をしていました。」

「考え事？」

突然ハイビスさんに声をかけられて驚いてしまった。

声のした方を振り向くと、今日も今日とて、受付嬢の制服がよくお似合いのハイビスさんがいた。

手には小さなバッグを持っている……これから外出するところだろうか。

ハイビスさんに、先程あつた事の顛末を話す。

ザシユーさんについてだ。

「ああ、ザシユーさん、ですね。」

「はい。急に声をかけられてビビり倒してしまつて……。」

「あの方、とても強面ですけどとてもいい人ですよ？クエストの報告とかも非常に好印象ですし。」

「ああ……。」

以前冬山でハイビスさんと生活していた時。

たまに出る愚痴の中に、報告するハンターさんでふざける人がいて困る、という内容のものがあつた。

「付き合つてください」とからかわれたり、終始ニヤニヤしていたり、と。

ハイビスさんが美人さんだからだよなあ……なんて思いつつ、聞いていたけど。

「仕事をきっちりやってくださる方、ですね。……あ、そう言えば。」

何かを思い出したようで、上を見上げるハイビスさん。

……よく見ると口の下に何か食べ物のカスがついている。

これは言うべきか言わざるべきか。

……黙っておこう。

「ザシユーさんが以前尊敬している方がいる、と仰っていました……ソウジさんのことなんでしょうね。」

「えっ?」

「いえ、双剣使いに轉身した、というので何故か尋ねたらそう仰っていて……。」

「へ、へえ。」

少し身構えてしまう。

だって以前、俺の熱狂的なファンがいると聞いていたから。

……そんな俺の空気を察してか、ハイビスさんが補足してくれた。

「間違いなく、悪意のある方ではありませんから。安心してくださいね。」

「……………す、すみません。疑心暗鬼になっちゃって…………。」

「お気持ちはわかります…………私もよくわからない手紙とか花束とか受け取って、どうして良いかわからない時がありますから…………。」

すげえなこの人。

アイドルさながらである。

「それで、今日はギルドにどんな御用ですか？」

話題を変えてくるハイビスさん。

とつとと建設的な会話に戻ろう。

「実は右腕を折りました。」

「ええ、聞いてます。」

「そんなに大きなけがでは無いんですけどね。それで、昨日のクエストのことについて

はシガイアさんに報告しました。……ハイビスさんは、どこまで聞いてます？」「え、えつと……。」

少し思案顔のハイビスさん。

顔を近づけて俺に耳打ちしてきた。

………近い！まつげ長い！

「……その、色々聞いてます……大変なことになっていきますね……。」

「え、ええ……そのことで、モンスターに異常が無いか自分なりに調べようと思いましたが、腕も折ってちゃ、クエストにも行けませんし。」

「なるほど……。」

そう言うのと顔を離して、何か考え込むハイビスさん。

一体何をお考えかはさておき、やはりこの人美人さんである。

さつきファンレター？やら花束やら、色々貰っているって話していたけど……。

この人、彼氏さんとかいるのだろうか。

………いや、いないな。

冬山で散々セツヒトさんに愚痴つてたし。

「婚期が遅れるう〜とか何とか、酔って話していたなあ……。」

……もちろんこの話は墓場まで持っていく所存であります。はい。

「……ソウジさん、わ、私今から外出する用事がありました……。」

「あ、はい。」

「その件について、お、お伝えしたいことがあるんですが、何分込み入った話になりそうで……。」

「……は、はい。」

急にテンパリだすハイビスさん。

先程までとの落差がすごいな。

仕事モードが急にしどろもどろになっている。

ギャップがあるなあ……。

「そ、その、ソウジさんさえよろしければ……お、お食事でも取りながら、その件のお話をし、しませんか？」

「食事って……ランチってことですかね？」

「そ、そうです！ランチデー……ちゆ、昼食を取りながらなら、お話もまあ長くてもいいかなあ？」と。

「なるほど……。」

特に断る理由もないよな。

暇なんだし。

そもそもそういう情報集めの為にギルドに来たわけだし。

「はい、いいですよ。喜んで。」

「は、はい。それでは……インザキ亭に昼、でどうでしょう？」

「分かりました。……俺、左手で不器用な食べ方するかもしれませんが。その辺はご容赦願えたらと。」

「い、いいです！いいです！何なら私が……な、何でも無いです！」

「……………？」

焦っているように見えるけど……まあとりあえず飯を食いながら話そうっていうこ

とだろう。

俺の発言に嘘は無い、喜んで、である。

「で、ではまた！」

「はい。それでは。」

スタスタスタ……。

ギイイ……。

ギルドの入り口を開けて、颯爽と出ていくハイビスさん。

いや、なんか足取りがギクシャクしているような。

……まあいいか。

一先ずは、やるべきことをやろう。

そう思い立った俺は、ギルドの中央、クエストボードに貼られた依頼を見えることにした。

この中に異常が感じられる様な依頼があれば、ちよつと職員さんに聞いてみよう。

今はハンターが少ない。

チラホラとクエストボードとにらめっこしている人はいるけど、依頼がよく見える。

(大量発生……ジャギイにクンチュウ……そんなに異常って感じではなさそうだな……あ、オロミドロの依頼が減ってる……結構倒されたのかな？……リオレウスにリオレイア……アンジヤナフもあるな……アオアシラ？しかも撤退要請？ぎゃ、逆に難しいんじゃない……)

さまざまなクエストの依頼内容を見ては、考えを巡らす。

とは言っても、異常な内容というのは見当たらない。

そういったクエスト依頼は、多分ギルドの方で預かっているのかもしれない。

だが一つ、いつもとは違うところがある。

クエストボードの中央下、でかでかと紙が貼り出されていた。

こう言うものの大体はハンターに対する注意事項が書かれていることが多い。

・モンスター乱入案件が多数。

原因はギルドで現在調査中。

異変を感じた場合、早期撤退推奨。

(キャンセル料無し)

・異常個体発見には報奨金が渡されず。

別途相談を。

ワサドラギルド　ギルドマスター　シガイア

(……なるほど、こうなったか。)

昨日から一晩開けて今日。

おそらくシガイアさんが動いてくれたのだろう、ハンターに向けての注意事項が貼り出されていた。

相変わらず仕事が早い。

クエストに向かうこと自体を禁止するのは厳しいだろう。

ハンターも生活がかかっている。

異常を持つ個体の報告が沢山出てきたのであれば話は別だが……昨日の話ぶりでは、そのような様子は見受けられなかった。

こういう注意書きをして、ハンターたちに喚起するに留めたんだろうな。

その後、一応クエスト依頼文をひと通り見てみた。
だが、どう見てもいつも通りにしか、俺には見えない。
これ以上の情報は、クエストボードからはわからないだろう。

(まあ、この後ハイビスさんに聞けばいいか。)

二人で話せる時間を取ってくれるとは、大変ありがたい。
もしかしたら、色々人前で話せないこともあつてか、気を使ってくれたのかも……。
ランチ代ぐらいいは出させてもらおう。

……あれ？

これっていわゆる……ランチデートってやつじゃ……。

ま、まあいいか。
深くは考えまい。

俺はその後もなんとなくギルドの人並みを眺めて、時間を潰した。
なにせ暇である。

三角巾をつけた男がただただギルドでブラブラしているなんて、怪しいだけ。
視線を感じるような……。

俺はしばらく後、コソコソとギルドを退散した。

* * * * *

時刻は昼前。

イシザキ亭の昼は混む。

いや、夜も混むんだけど。

早めに席を取っておくことにした俺は、大通りから外れた路地に入り、店の前まで
やってきた。

カランカラン……。

ドアを開けると、心地よい鐘の音が鳴る。

久々に来たが、懐かしい……というよりは帰ってきた感じ。

「いらつしや……あー！ソウジさんにや！」

「あ、オスズさん。ご無沙汰してます。」

イシザキ亭。

俺がこの町に来て、最初に常連になった飲食店である。

来店当時は閑古鳥が鳴く、ひっそりとした店だったのだが……俺なりにアイデアを提案して、繁盛するようになった。

ちなみに、今出迎えてくれたのはオスズさん。

この町のアイルー集落の取りまとめをする、実は結構偉い人である。

見た目は完全に小学生。

猫耳に尻尾が完璧に似合う御仁。

「しばらく来ないから、死んじゃったかと思ったにや！おかえりなさいにや！」

「シャレになってませんって。でも、久しぶりです。バイトの方はいかがですか？」

完全にノリがメイド喫茶のそれである。

このオスズ、かなりのドジっ子さん。

皿を割るわ注文を間違えるわ、人手不足を解消するために紹介した俺が責任を感じるほどのドジっ子ぶりだったのだが……。

誰にでも取り柄はある。

事務作業……特にお店の収支や経費、税金の計算に関しては滅法強いことが判明した。

更に可愛らしい見た目と愛嬌で、弁当売りとしてちよつとこの界限では有名であるらしい。

まあ店員として……というよりは、裏方として頑張っているようである。

「わわ！お怪我されているにや！平気ですかにや!？」

「大丈夫ですよ。そこまで大きなものでは無いです。ご安心ください。」

「よ、よかったにや……無理はしないようにしてくださいにや……それで、今日はお一人ですかにや？」

俺が色々な経緯を思い出していると、オスズから声がかかった。そうだった。とつとと席に着こう。

「あ、いえ。待ち合わせをしまして。……まだ連れはないようですので、先に座って待っていてよろしいですか？」

「あー……も、申し訳ないですよ。実は今日のランチ、テーブルが全部予約済みなんです。……」

「あ、そ、そうなんですか。」

あらら。

目論見が外れた。

……どうしよう。

「か、カウンターならご案内できますよ！ どうしますかによ？」

「本当ですか？ あ、じゃあカウンターでお願いします。」

「はいにや！ 一応お連れさんが来たら教えて下さいによ。テーブルが空いたら優先してご案内しますよあ！」

「ありがとうございます。」

……完全にしつかりした店員さんである。

素晴らしい。

成長したなあ、オスズ。

席に俺を案内すると、ピコピコと猫耳を動かして厨房に入っていく。

尻尾もピンと立って、猫好きにはたまらない後ろ姿である。

ヒナタさんとか居たら、食い入るように見つめているに違いない。

「あらー、いらつしやいソウジさん！お怪我されてるじゃない！大丈夫？」

「ええ平気です。すぐ治してみせますよ。」

「ハンターさんって強いのねえ……あ、ごめんなさいね。今日は特に盛況で……カウンターでよかったかしら？」

「大丈夫ですよ。むしろ、忙しい時にすみません。」

「いいのよー！それで……お連れさんはやっぱり女性？」

「や、やっぱりってなんですかやっぱりって。」

店の看板娘？のケイさんが、カウンター越しに話しかけてきた。なるほど、カウンターは店の人とお話ができる。

一人なら断然ありだな。

しかし、俺がいつも女性連れで来ているみたいない方である。遊び人みたいない方は心外だ。

「……まあ、女性となんですけど。」

「ほらやつぱりー！……もしかしてハイビスさんかしら？」

「えっ、アタリです。よくわかりましたね。」

「女の勘つてやつよー！もう、隅に置けないわねえソウジさんも。この町のアイドルとラUNCHデートなんて！」

「いやいや、仕事ですよ？仕事。」

「そうなの？それでもハイビスちゃんと仲良いなんて、ここにくるお客さんたちが聞いたら、羨ましがるわよー！」

「そ、それは光栄な事です。」

「それじゃ、ゆっくりしていつてね！兄貴が腕を振るうから！」

そう言うなり二の腕をポンツと叩くケイさん。

腕を振るうのはお兄さんであるが。

まあそれはいい。

問題は、その衝撃で揺れる、ケイさんのマーベラスでグラマラスな2つの武器である。

バルルン！

……もし俺が思春期の中学生男子なら、凝視して鼻血ものである。

しかし、俺は中身おっさん。

見ないように心がけるぜ。

「あら、ソウジさん……お連れさん、いらっしやったわよ？」

「へ？」

アホなことを考えていた為、気づかなかった。

後ろを振り向くと、見慣れた制服を着こなした金髪の美人さんがいた。

「……………ソウジさん。お待たせしました。」

「い、いえ、ハイビスさん。俺も今来たところですよ。」

セリフが完全にデート始めの男女のそれである。

いかん、ランチデートなんて言われて、意識してしまった。

しかし少し浮き足立つ俺とは裏腹に、ハイビスさんはどこかムスツとした顔をしていた。

「……………そうですか。席を取ってくださいって、ありがとうございます。」

「は、はい。」

「それじゃあ、注文決まったら呼んでちょうだいねー!」

そう言うと、スタコラサツサとケイさんが足早に厨房に消えていった。

……………ハイビスさん、何か怒っている?

も、もしやテーブルをご所望だった?

「……す、すみません。どうやらカウンターしか空いていない様でして……。」

「いえ。大丈夫です。私、カウンター席は好きなので。」

「は、はい。」

……。

あれ？空気が重い？

き、気のせい？

俺が不安になっていると、ハイビスさんがとんでもない爆弾発言を投下してきた。

「……………お、お胸！」

「えっ!？」

「……………ソウジさんはお胸は大きい方が好きなんですか!？」

「……………へ!？」

ちよつと待て。

なんでそんな話になるの!？」

「ちよちよちよいお待ち下さい？ 質問の意図が——」

「そ、その！ 先程ケイさんの、その……お胸を、よく見てらしたので……。」

「ふあ!？」

……バレとるやんけ!!

いや見てなんかないけど!!

………しまった、もしかしたら無意識にデレデレしてしまっていたのかもしれない。

ふ、不覚……!!

……下手に取り繕うとだめなパターンだな、これ。

よし……諦めよう。

俺は正直に伝えることにした。

「見ていた……わけではないのですが、その、男として意識はしておりました。す、すみません。」

「い、いえ、謝られる事では……じゃ、じゃあそれでですね!」

「は、はい!」

早急に話を変えるつもりなのか、大きめの声で仕切り直すハイビスさん。良かった……男の精神衛生上、この胸に関する話題はあまりよろしくない。とつとトークテーマを変えて頂いたほうが――

「ソウジさんは大きなお胸が、その、好きということですよ、よろしいですか!?」
「あれ!? 話が変わってない!!」

「わ、私もケイさんほどではありませんが! その、結構いい線いつてる方だと!」
「何言っちゃってんの!?!」

「そ、ソウジさんの理想の女性像に近づくためにも、ぜ、ぜひソウジさんの趣味嗜好を――」
「ちよつと! ストップ! ストップですハイビスさん!」

まるで酒に酔った時の様に暴走しまくるハイビスさんをなだめる。何の騒ぎかとやってきたケイさんにもその話の流れ弾が当たり。

イシザキ亭は混乱を極めるのであった。

「ほ、ほら！ やつぱりケイさんのお胸を見えます！」

「み、見てませんよ！」

「でもさつき興味があるって——」

「きよきよきよきよきようみい!?!」

「い、いやケイさん、誤解ですよ!?! 男は何と言うか、どうしようも無いところがありました！」

「……………きゆうううう。」

「ケイさん!?!」

下ネタ耐性ゼロのケイさんが再起動するまで。

オスズも加わり、俺たちは介抱を続ける羽目になった。

勘弁してえ……………。

136ランチデート?を楽しみましょう。

大きなお胸の話を大きな声で話したら、大きなケイさんが倒れてしまった。

……自分でも言ってる意味が分からないが、実際そうなのであって。

「……………」

「は、ハイビスさん。大丈夫ですか?」

「……穴があつたら入りたいです……。」

「は、ははは。」

乾いた笑いしか出てこない。

ハイビスさんはどうやら俺がケイさんのお胸に興味津々なのを見て、ムスツとしてしまったらしい。

さすがハレンチ禁止受付嬢である。

俺にも非はあるため、責めることなどできない。

顔を真っ赤にして俯いてしまわれている。

すみません……。

ちなみにケイさんは、厨房の更にあるお住まいへ。

お兄さんが運んでくれたのだが、「耐性が無さすぎる……。」と渋い声で漏らしていた。それは確かになあ。

失礼ながら結構いいお年だと思うのだが、下ネタに対する耐性は小学生並である。

夜も営業する居酒屋的な側面も併せ持つこの店。

お客さんから冷やかされることもあるだろうに。

兎にも角にもケイさんにはお休みいただき、俺とハイビスさんはカウンターに戻ってきた。

そして今、なんともいたたまれない空気に包まれている、というわけである。

「……………とりあえず注文しますか?」

「そ、そうですね。」

「じゃ、じゃあオスズさん!」

「はいにや!承りますにや!」

オスズが元気よく駆け寄ってくる。

ランチを2つ、注文した。

これから一人でホールを回すのかと心配だったが、元々予約も多く、オスズは弁当の販売があるため、もう一人のバイトさんがすぐ来る手筈らしい。

そこは安心したが、ハイビスさんは相変わらず少し落ち込んでいた。

「ケイさんに悪いことしました……。」

「ま、まあ大丈夫でしょう。それに、俺も悪かったです。女性と食事だというのに、何の配慮もなく。」

「い、いえ……。」

「……………」

「……………」

二人して、カウンターに座り、無言の時間が続く。

カランカランとなる鐘の音と共に、背後では徐々に客でテーブルが埋まっていく。

ザワザワと店内が騒がしくなってきた。

肩と肩が触れ合うかどうかの距離で黙り合う俺たち。

………何だろう、緊張してきた。

「………あ、あのー、ハイビスさん。」

「ひやつ、ひゃい！何でしょう！」

「とりあえずさっきの事は忘れて………その、例の話をしてもよろしいですか？」

「あ、ああはい！そ、そういえばそうでした。」

「？」

不思議なことを言うハイビスさん。

そういうえばそうも何も、そもそもがそういう約束だったわけで。

「え、えつとですね………まず、私がギルマスから聞いたことから確認してもよろしいですか？」

「はい、その辺のすり合わせから始めましょう。」

料理を待ちながら、ハイビスさんの話に耳を傾ける。

とうやら伝達内容の過不足は無いようであった。

何でも、昨晚シガイアさんに直接呼び出され、話を聞いたらしい。

骨折したことについてはとても心配されたようだ。

優しい人である。

「今現在、ギルドに異常個体が現れた、という報告は今の所来ていません。」

「あつ、本当ですか。」

「はい。少なくとも、私がギルドを出るまではそのような話はありませんでした。……

これからが心配ですね。」

「ええ。もし獯猛で強化された個体が増えたら……ハンター……しいてはそれに付随するすべての人の生活が激変してしまう。」

「はい……。」

「俺は、そこが一番心配です。何とかしたい……。骨折なんて早く治して、とつとと狩りというか、調査に出たいです。」

「ソウジさん……。」

強さには、責任が伴う。

ハンターランクが上がった時に、意識し始めたこと。

俺にできることなら、このお世話になった町、ワサドラに恩返しをしたい、
できることなんて、まあ限られてくるんだらうけど。

とにかく今は、腕をさっさと治したい。

俺が本音を言うと、ハイビスさんがにっこり笑った。

「ソウジさんは、やっぱり前向きですね。」

「そうですか?」

「私、腕を折ったなんてなったら……多分家に引きこもっちゃいますよ?」

「まあ、こんな仕事ですからね。骨を折るなんてまあ……よくあることでしょう? 実際、
骨折も初めてじゃないですし。」

「デインバルドの時はもっとひどかったしなあ。」

「だとすれば、今回の治りはもうちよつと早くなりそうだけでも。」

「ソウジさんのそういうところ、き、きらいじゃないですよ?」

「シヨウコには怒られてばかりですけどね。『無茶はせんといってください!』って。」

「その役目も大変なんですから、甘んじて受け入れてください。無茶という言葉、ソウジ

さんにぴったりです！」

「は、……………」

「……………」

何も言い返せない。

笑って言ってくれたが、無茶は沢山してきたわけで。

常々、ご心配をおかけしております。

そうこうしていると、いつの間にか出勤していた新しいバイトさんが料理を持ってきた。

外を見ると、いつものようにオスズが元気よく弁当売りを始めていた。

結構な人ばかり……順調なんだな。

よかった。

カウンター越しに並べられたランチに目を落とす。

今日のランチは、チーズをふんだんにつかったアツアツハツのグラタンと、砲丸レタ

スのサラダ。

サラダにはレアガーリックという、にんにくみたいな食材がチツプになって入っていた。

グラタンからは湯気が立ち上り、グツグツと音が鳴って食欲をそそる。肉の匂いと、焦げたチーズの香り。

チーズはムーファのものだろうか……ハンズの故郷で頂いた味を思い出す。移動集落のご飯、おいしかったなあ……。

「冷めないうちに、いただきますでしょうか。」

「そうですね。……ソウジさん、食べられそうですか?」

「スプーンとフォークなので……多分いけます。」

左手だが、まあ大丈夫だろう。

「いただきます……あっちい!!」

「わわ!!そ、ソウジさん!」

スプーンならいけるとか油断した俺。

恥ずかしい……。

* * * * *

「骨折も心配ですが、それよりもその……赤い目の症状が気になります。平気なんですか？」

口と舌をやけどした後、いたくハイビスさんに心配されてしまった。

実に不甲斐ない。

まあ骨折してるし、大目に見てほしい。

そんなこんなでようやく食べ頃になってきたグラタンを頬張っていると、ハイビスさんが俺の目の症状を心配してきた。

「んー……正直わからない、としか言えないです。」

「まだ目は赤いままなんですか？」

「えっと……。」

「あ、これ。どうぞ。」

そうやってハイビスさんが小さな手鏡を渡してくれた。

常に携帯しているなんて、実に女性らしい。

猫柄の絵が書かれたそれをお借りし、じっと自分の目を見てみる。

………変化はない。赤いままだ。

「………赤いですね。瞳が嫌な感じで光ってます。」

手鏡を丁重にお返しする。

いい気分はしないが………体調などは全く変わっていない気がする。

脱力とか変に高揚するとか、そういう変化は感じられない。

「私には………普通に見えます………」

「そ、そうですか？」

ハイビスさんが俺を覗き込んできた。

目と目が合う。

……キレイな人だ。

瞳が青く、透き通っているのまでよくわかる。

まっげ長い。

……変態か。

自重自重。

「……とにかく、なにかおかしいところがあつたら、すぐ教えて下さいね？心配です……。」

「……はい。ありがとうございます。」

ハイビスさんが、本気で心配してくれている。

この街に来て、最初にハンターとしての俺の面倒を見てくれた人。

まさかここまで深い付き合いになるとは思っていなかったけど。

仕事ができてカッコいいところもあれば、ドジなところも多々あつて……。

容姿以外の部分も、とても魅力的な人である。

(……………いかん。意識したらドキドキしてきた。)

女性と二人でランチをいただく。

まあ傍目から見れば、完全にこれデートな訳で。

以前、偶然町中で会って、デートっぽいことをしたが………こんな美人さんと飯を食う機会などそうそうあることでは無い。

「おいしいですね、アツアツハツのグラタン。」

「ハイビスさん、チーズ好きなんですね。」

「トロトロのチーズが嫌いな女子はいないかと……。」

「そーいやシヨウコもガツガツ食べてたなあ……。」

ジンオウガ討伐の際に、放牧の民であるハンザさんたちに食事を提供してもらった。

俺もだが、シヨウコはとにかくチーズの料理を気に入っていた。

このメニューがあること、帰ったら教えてあげよう。

「ソウジさんは、安静になさっている間はお暇なんですよね？」

「まあ多分……そーうですね。装備の話も……今の所どん詰まりですし、アイテムは常に

揃えていますし。」

「……それなら、修練場に足を運んでみませんか？」

「え？ギルドの修練場ですか？」

骨折している人に訓練をさせようとか、そういうこと？

いやいや、ハイビスさんがそんな教官みたいな事、言うわけない。

案の定、すぐに否定してハイビスさんが話を続けた。

「あ、いえ、ソウジさんが鍛えるわけではないですよ？ただ、最近ソウジさんに訓練を見てもらいたいってお声がありました……。ほら、例のフアンの方々です。」

「お、俺が見るんですか？」

「教えていただく必要はないんですよ？それにほら、ギルド内にいるのなら、何かしらの異常があつた際はすぐにお伝えできますし。シガイアも訓練所の方を心配してまして。」

「俺に伝えられることなんて、無いかもですけど……。」

「そんなことありませんよ！やっているトレーニング方法とか、攻撃の避け方とか回避攻撃の話とか……そういう情報共有の場って、中々無いじゃないですか。ソウジさんが

良ければ、ですけど。」

「そうですね……。」

メリツトは多いよな。

ギルドの近くに日中いれば、モンスターの異常とかいろいろな情報をすぐに教えてもらえるだろう。

俺が教えるなんておこがましいが……まあ、技術は専有ばかりしては良くない。ワサドラギルドで頑張るハンターたち全体のスキルアップにつながるかもしれないし、何なら俺の方が勉強になることもあるだろう。

激しく動くことはできないが、口頭でなら全く問題ないし。ギフトのことは内緒にして。

「……分かりました。俺で良ければ、力になります。」

「わあ、良かったです！実は、初心者講習の方もグレードアップしたくて……いろんなハンターさんが来ていただいて情報共有すれば、いいんじゃないかなって。」

俺も初心者の頃……と言っても一年ちよつと前でしかないが、大変世話になったし。

これも一つの恩返しだろう。

しかしハイビスさん、仕事熱心というか……そこまで考えて動いてらっしゃるとは。やはり、すごい人だなあと感心してしまった。

「……………近くにいれば、また誘える……………」

「へ？なんか言いました？」

「い、いえいえ。あ……………また、こうやってお食事、お誘いできたら嬉しいなー、な、なんて……………」

「あ、全然いいですよ？」

「ほ、本当ですか!？」

「え、ええ。ハイビスさんが嫌じゃなければ。」

「いいいい嫌だなんて!そ、それじゃあ明日またいかがですか!？」

「わ、わかりました。俺で良ければ。」

「……………はいっ!」

……………ニコニコしながら、サラダを頬張るハイビスさん。

そ、そんなに喜んでもらえるとは……………。

.....

あれ？

もしや俺、で、デートに誘われた!?

ていうか、今現在もそういえばデート……。

「どうかしましたか？ソウジさん？」

「い、いえ。冷めないうちに、食べきつちやおうと。」

「そうですね！ほんと、この店があつてよかったです。そういえばお弁当も美味しくてですね……。」

その後、イシザキ亭をかなり利用している話や、ちよつとした愚痴を言い合いながら、ランチは進んだ。

おっさんなのに、デートとか意識した途端、何か動悸が早くなつてしまった。

.....赤い目の影響か？

いや、違うな。

「あ、会計は俺が。」

「だ、だめですよ！ここはしつかり割りましょう！」

「いえ。俺が払っちゃいます。」

社会人同士の会計お支払い合戦は俺に軍配。

ハイビスさんを意識してしまっている自分に気がついたから。

ドキドキしちゃったんだな。

……こんな美人さんとデートだなんて考えたら、男なら誰でも意識しちゃうでしょうよ。

そんな思春期の男子みたいな悶々とした気持ちを抱えながら、ハイビスさんとギルド前で別れた。

明日、修練場に顔を出す約束をして。

「……まだまだ未熟だなあ、俺。」

大通路を戻って、宿に足を向ける。

……………いや。

ちよつと遠回りするか。

市場や道具屋を冷やかしつつ、ゆっくり宿に帰ることにしよう。

何だかまつすぐ帰る気にならん。

何でかは知らんが。

……まあこういう一日もいいだろう。

こうして俺は、時間をかけて「ホエール」に戻るのであった。

* * * * *

ちなみに。

「こんな沢山、どうするんですか!？」

「い、いや、市場のおっさんに勧められたら断れなくて……ほ、ほら。この野菜とかうまいぞ?何でも首都の方で最近作られるようになったベルナスっていう……。」

「あかん……次からはウチ呼んでください!ええカモになつてるやないですか!!」

市場でしこたま食材を買い込んだ……もとい買い込まされた俺は、シヨウコに説教を

食らってしまった。

それら食材は、殆どをドールに渡すことに。

俺に街ブラは難しいと、改めて自覚するのであった。

未熟だなあ、俺。

137復帰しましょう。

タマミツネ討伐から10日ほど経過した。

怪我の治癒の経過は順調。

医者からも「あなた人間ですか。」と太鼓判を押されたほどであった。

3日開けてもう一度診察に来るように言われたが、日常生活に支障はないらしい。

シヨウコに三角巾が取れたことを伝えると、化け物を見るような目で見られた。

「ご主人様はやっぱおかしいわ……。」と言われた。

褒め言葉と受け取っておこう。

だつて治りが早くて悪いことなんてないし。

というかこの世界の回復薬の効き目がエグすぎるんだと思う。

目の方は、未だに赤いままである。

だがそもそも、これのせいで体調に異変をきたしているわけでもない。

プラスもないがマイナスもない。

つまり普通。

そのまま自己流で経過観察することにした。

俺しか分からないわけで、医者に相談しようにもできないし。

また、骨折したままであるが、ハイビスさんに誘われた訓練場の見学？も行った。

……………見学と言えば聞こえはいいが、完全に教えに行つたようなものであった。

まず訓練所に入ると、周囲がざわついた。

「あれが例の……………」
「マジかよ……………」
「みたいな反応。

腫れ物を扱うかのようにベンチに案内された俺は、とりあえず初心者ハンターたちを観察した。

常に視線は感じていたが、スキル「気にしない」を発動した俺には問題はなかった。

そんなハンターたちの中の一人、双剣を扱う一人の女性ハンターを発見。

ハンズであった。

あれ？太刀とか大剣使ってなかったっけ？と思つたが、結構色々やるタイプらしい。

迷惑かとも思つたが、近くに行つて観察した。

……………なるほど。

力任せに訓練所名物のからくり蛙を斬つては刃をボロボロに。

そして、また研いでは斬りつけて……………の繰り返し。

大変そうである。

人に教えられるほど偉いわけではないが、多少アドバイス程度ならできらるだろうと、声をかけた。

「あ、ハンズ。ちよつといいか。」

「は、はい!!」

「少し見ていたが……力が入り過ぎだと思う。」

「力が……?」

「うん。その武器の斬れ味だと、この蛙には刃が立たないだろ? きつちりクリティカルに当てて必要がある。」

「く、クリティカル……。」

「言葉では難しいんだけど……。」

そう言って、訓練所に備え付けの安い双剣を手にする。

……懐かしいなあ。俺もこれを何本もダメにしては、「刃こぼれがしなくなるまで斬りつけるんだ!!」って教官に言われたっけ……。

言われた当時は意味がわからなかった。

いや、今も意味がわからんけど。

斬りつけたら刃はこぼれるわけで。

なんて楯突いたら、滝登り＋地獄の装備ランニングが追加された。

いい思い出である。

とにかく、目の前でやってみることにした。

「一回やってみるわ。」

「えっ!? そ、ソウジさん怪我してますよ!?!」

「いやまあ、左手でやるだけだし。無茶したら相棒シヨウウコに怒られるし、手は抜くよ。」

「は、はあ……。」

「じゃあ……。」

返事もそこそこに集中し、片手による連撃を見舞った。

からくり蛙は、そのまんまモンスターを模している。

ヨツミワドウの弱点そのまま、頭部や前脚、首や胴回りが柔らかい。

双剣が狙うなら、前足の特に先端……爪の間とか、腹部の中心から少し外れた左右の

2cmぐらいのところとか……。

まあ狙ってもなかなか難しい部分を捉える必要がある。

そこを分かりやすく、丁寧に斬ってみることにした。

ザザザザン！ザシユ！ザン！

ガタガタ！……ボン！！

………シユ………。

俺の左手の連撃で、壊れたかのようにうなだれるからくり蛙。

ある一定のダメージを与えると起こるリアクション。

これができるかどうか、教官との訓練の目安であった。

久々だったし左手一本で不安だったものの、何とかお手本を見せることに成功した。

「……あー、よかった。アドバイスしといてできないとかかつこ悪すぎる……。とまあ

こんなふうにな——」

「す、すごい!!」

「へ？」

ハンズが目をキラキラさせて俺を見てきた。

そこからは大変だった。

どうやってやったのか、クリティカルとは何か、弱点はどう攻撃すればいいのか、などなど。

両手が使えないものの、身振り手振りも交えて教えてあげた。

そういえばハンズは非常に熱心な子だった。

力み過ぎれば、腕つぶしばかりが太くなるばかりである。

兄のハンズさんに殺されかねない。

それに、女性として太い腕いかなものかと思うので、できる限り俺が大切にすることを伝えるために伝えてあげた。

「……………こんな感じかな。また明日も来るから、頑張つて。」

「はい！ありがとうございます！！」

お礼を言われて照れくさかった。

相当飲み込みはいい。

すぐできるだろう。

そしてハンズを教えた後、来るわ来るわ「見てほしい」の嵐。

俺は双剣以外は専門外だと始めに断りを入れたのだが、「じゃあ双剣を見てほしいです！」と言われ、5、6人程にアドバイスを送った。

じゃあ、つて何だよ……とは思ったが、ツツコミはしなかった。

初日はそんな感じで終わり、その後二日目、三日目と同じようにハンターたちと交流した。

仲良くなってきてからは、クエストの細かい話や俺に関する話題も増えてきた。

「いつもランチに行くハイビスさんとはどういうご関係なんですか!？」と言うハンズの質問には、思わず吹き出してしまった。

そのタイミングでハイビスさんが俺を呼びに来たものだから、あの人も間の悪いことである。

その場は適当にはぐらかし、昼食に向かった。

そりやまあ毎日毎日一緒に飯食ってたら、そんな邪推も飛び出すわな……。

……。

ハイビスさんとは、あの日以降お昼を共にした。

イシザキ亭だけでなく、色んな所を回ってみたが、最終的にはやっぱりイシザキ亭に落ち着いてしまった。

まあおかげでこの町のランチ事情には、少し詳しくなった。

「訓練所の方々と仲良くされているようで、何よりです。」

「ギフトのこととか、色々伝えられないこともあるので気をつけてますが……俺もいい勉強になってます。」

「ええ。皆さん、ソウジさんに会いたがってました。ソウジさんも勉強になったのなら何よりです。」

ハイビスさんから教えてもらった話では、俺はかなりの速さでハンターランクをあげた急成長株として注目されているらしい。

「今更知ったんですか!?!」というハイビスさんの驚き顔は忘れられない。

「ちなみに……訓練所に……へ、変な方とかいらつしやいませんでしたよね?」

「あー……コアなファンの方……みたいなのはいなかったと思います。」

「よかったです……。」

「ハンズなんて、めちやくちや覚えが早くて、教えていて楽しかったですよ。」

「あの子は地力がありませんからね。上達も早いでしょう。」

お兄さんのハンザさんが、体術で敵うものはいなかったとか言っていたことを思い出した。

見た目は完全にその辺？の女子大生なのだが。

ハンターの強さと見た目は、ぶつちやけ比例していない気がする。

セツヒトさんは細くてスタイルいいし、アイルーのトツバなんて、ちっこいのに、俺でも持つのに苦労しそうなハンマーを持っていた。

そんなハンターと力の関係を考察する時間もあるほどには、暇な毎日であった。

* * * * *

ザシユ！ザザン！

「ギヤアアアアア!!」

「シヨウコ！」

「いけます！」

「よしっ！……………つと。」

カチツ。

ビリビリビリビリイ！

「ギャア……………ガア……………グアア！！」

「ほれ！眠り！」

俺が仕掛けたシビレ罠にかかるリオレウス。

シヨウコが麻酔玉を投げる。

たった2発で、モンスターは嘘のように眠り始めた。

「グオ……………zzz。」

「……………相変わらずすごい効き目だな……………」

「眠ってます……………よね？」

「……………ああ、多分大丈夫だ。」

「リオレウスが、その巨体を横たえてスヤスヤと眠り始めた。

あんなに敵つかつた顔も、こう見ると少し愛らしく見えてくる。

……………いや、尻を焼かれたし、愛らしくは見えないな。

「ご主人様、信号弾打ちますよー!」

「ああ!頼む!」

シヨウコが手際よく、クエスト終了の合図を発射する。

これでクエスト完了である。

あれからまた一週間ほど。

すっかり腕も良くなった俺は、リハビリ代わりにクエストに行くことにした。

採取や小型モンスターの討伐など、所謂低ランクのクエストである。

右腕も問題はなかったの、ようやくシヨウコの許可も降り、大型モンスターの狩猟に行くことができた。

「アンジヤナフにリオレウス……これで一応、装備に必要な素材まであと一体……ですね。」

「まあその一体が問題だけだな。」

シヨウコと二人で行った2つのクエスト。

いずれも俺の新しい装備に必要な素材……モンスターの狩猟である。

アンジヤナフにリオレウス……いずれも顔がめっちゃ怖かったが、無事に討伐できた。

アンジヤナフは、見た目が完全に恐竜であった。

大型のモンスターは、大体別名が付いている。

火竜、斬竜、轟竜、泡狐竜……必ず最後に「竜」が付くので、なんとなく恐竜っぽいな、とは思っていたが。

アンジヤナフの恐竜らしさは、もうそのまんまであった。

幼い頃に親に連れて行ってもらった博物館にアンジヤナフの復元模型があったら、違和感があんまりなさそうである。

背中には羽、情報画面によればこれは飛ぶためのものではなく、体温調節したり威嚇に使ったりするものらしい。

そういう生態にも、爬虫類らしさを感じてしまった。

とはいえ、この世界のモンスターらしく、若干ファンタジーな部分も持ち合わせていた。

蛮顎竜という名前の通り、顎の力が凄まじく、本気を出すと口から炎のようなものが見えた。

実際の恐竜に火を扱うやつなんていないはずである。ファンタジー。

鼻の上に何かコブのようなものが現れたり、体色が赤く変化したり……まあこの世界のモンスターらしいモンスターだった。

そして、正直言つて俺と相性が良かった。

奇抜な攻め方をするにはほとんど無かったからである。

体の側面タツクルや頭を地面に押し付けての突進、尻尾の薙ぎ払いや噛みつきなど。

今までのモンスターを思い出せば、結構ゴリ押しで倒せたと思う。

実際、シヨウコと俺は、アンジャナフからほとんど距離をとらなかつた。

シビレ罠にハマて眠らせるまでにかかった時間は3時間半ほど。

いい感じに狩猟ができたと思う。

こんな言い方、アンジヤナフに失礼だと思うけど。

そしてリオレウス。

こいつがもう何というか、ザ・モンスターという感じだった。

羽を使って飛び、火球を飛ばし、空中で尻尾をサマーソルトし……。

「えっ？飛び過ぎじゃない？」と思うほどであった。

飛んでいれば、ぶっちゃけ双剣使いの俺にできることはない。

と、何も知らない俺ならば諦めていたかもしれない。

ところがどっこい、このクエストに行く前に、セツヒトさんからとあるアドバイスを頂いていた。

「閃光玉。とんでいるリオの、顔の前で炸裂させてみー？」と言われていたのだ。

試しにやってみたら、これがもう効果覷面。

申し訳ないと思えるほどに、リオレウスが空中から墜落するわするわ。

おかげでタコ殴りにさせてもらった。

流石に5〜6個ほど食らった後、地に落ちることは無くなったが、それまでに翼を徹底的に破壊した。

長時間飛ぶことが難しくなったりリオレウスの体力を徐々に削り、捕獲に至ったという

のが大体の流れである。

しかし俺は一つ失敗した。

リオレウスの火球を避けたはいいが、お尻にその炎が付いてしまったのである。

あんまり熱いものだから、プチパニツクになったが……その場で尻もちをつけて事なきを得た。

その間リオレウスの気を引いてくれていたシヨウコには、感謝しか無い。

「お尻に火がついた瞬間、笑いをこらえながらリオレウスの正面に行つたウチを褒めてください。」

「はい、ありがとうございます。」

何ともアホな話であるが、少しでも火球がズレていたら、怪我していたかもしれない。火竜恐るべし。

ちなみに、その2体を討伐したのはカクラニ火山。
以前行つた採掘場の近くである。

* * * * *

シヨウコと俺はギルドに報告を済ませ、帰路についた。

途中セツヒトさんのところに寄り、閃光玉ハメのお札を申し上げた。

お尻を焼かれた話をしたら、たいそう喜んでくれた。

ちくしょう。

そして宿では、ドールにいたく心配された。

「おしりにお薬塗ろうか？」

「いやいやいや!!自分で塗るから!!」

「ホント？」

「だってドール……自分が逆の立場になって俺に薬塗られたらどうする？」

「……………すごく恥ずかしい。」

「だろ？」

「でもソウジさんは大丈夫だよね？」

「いやいやいや!意味がわからん！」

ドールさんのハチャメチャ理論と格闘しながら、なんとかお尻は死守した。
中高生ぐらいの女の子に、尻に薬を塗ってもらおうとか、恥ずかしいにもほどがあるだ
ろう。

ちなみにシヨウコが「ウチが塗ります！」と言ってきたのは、スルーしておいた。

「ウチ、オトモやのに……。」などと意気消沈していたが、知ったことではない。
ぬりぬり。

さて。

俺の装備に必要なモンスターは、あと一体。

最難関……金獅子、ラージャンである。

138 金獅子クエストを受けましょう。

「ふっ……………ふっ……………」

「ひい……………ひい……………」

「ふええええ……………ま、まだ走りますかあ……………?」

「喋つとると余計辛くなるで! ハンズさん!」

「……………ふあ……………ふあい……………!」

眼前に広がる景色。

向かって右側は畑。随分と向こうまで広がっている。

何とものどかな風景だが、ここがこの町の食糧の生命線。

モンスターの糞を定期的に農家に納入する様になってから、その生産が爆発的に増えたという。

比例して人口や人の流れも増加。

経済的にも潤ったという。

その施策を提案したのはシガイアさんらしい。

需要のあまりないものにスポットを当て、農家と初心者ハンターに需要供給の関係を築く。

新しい商売を始めるときの基本と言えるが、そのシステムをきつちりと作り上げた手腕は流石である。

「ふっ……………ふっ……………」

「うわっ……………またペース上がった……………」

「……………ふ、ふええ……………」

その畑とは反対側、向かって左。

急成長を遂げる町、ワサドラがある。

俺もここに来てたかだか一年と少したが、その間だけでもたくさんのお店や家が増えた。

無造作に増えていくと、町並みが汚くなったりインフラが混乱したりするものだが……………その辺はあまり気になったことがない。

詳しくはないが、町の中心とその外側、それぞれに住宅用地と店舗用地を分け、一定の場所に広場や公園を設置して……………

まあ所謂都市計画みたいなものが、きちんとしているんだと思う。

「も、もう……私だめですう……………」

「あ、あとちよつとやから！入り口まで頑張ってくださいー！」

「……………うええ……………」

町の外周ランニングをすると、あらゆるところでシガイアさんの凄さがわかる。

左回りにグルッと外周して、再びスタート地点である町の入口側へ。

その一帯は何もない土地がキレイに整備されている。

ここも近々、大開発が行われるらしい。

町中の商店街通りを延伸して、そこに付随した店舗を作り上げ、住宅を建てられる土地も作るとか。

その計画を提案したのもシガイアさん。

……………あの人、もはや町の長と言っても差し支えないんじゃないんじや……………。

町長さんとか見たことないし。

そう言えば冬に行ったミヨシ村も、臨時ギルドを運営している長は村長さんであった。

ヨツミワドウのからくり蛙を見る度に、アワキ村長を思い出す。
元気にしているだろうか。

「はあっ……！はあっ……！！」

「うええええ……！！」

「ん……！！」

考え事をしながら町の入口に到着。

10周まであと2周か。

「よしっ……シヨウゴ、ハンズ、あと2周頑張つて……だ、大丈夫か？ふたりとも。」

「ぜ、全然、大丈夫……はあっ……はあっ……ちやいますう！」

「私もう……うう。」

バタン。

「は、ハンズさん!？」

「ハンズ！ど、どうした!？」

「どうした？ちやいます!!明らかにご主人様のペースがおかしかったんです!」

「えっ!?!マジか!？」

「ほらっ、ハンズさん運びますよ!」

「は、はいはい!」

倒れ込んだハンズを、宿までおんぶして運んだ。

まさか倒れ込むとは……と思ったが、どうやらかなりのハイペースで走っていたようだ。

考え事をしながら走るのは良くない。

「ご主人様……大丈夫ですか？なんかいつもとちやいますよ?」

「そ、そうか?」

「自覚はありそうですね……。まさか、今日のクエストに向けて緊張しているとか……。」

「……………シヨウコに隠し事はできないな。実は……少し緊張している。」

ハンズの介抱をした後、シヨウコに心配された。

そう、今日はいつものクエストとは違う。

相手は、あの金獅子ラージャン。

いつも通りにしているといわれても、ちよつと無理。

「そら、お偉い人にプレッシャーかけられたら緊張もしますよねえ……。」

「……まあなあ……。」

なぜ俺がこんなに緊張しているのか。

それは昨日ギルドであつた出来事に由来する。

* * * * *

カクラニ火山から帰ってきて次の日は、休みを取つた。

と言つても、完全な休日ではない。

次に受けようとしている、金獅子ラージャンの狩猟。

その依頼の受注とか用意とか……その辺を済ませようとしたのだ。

「自分の装備は自分で用意したい。」とセツヒトさんに啖呵を切った手前、やっぱ無理とは言えない。

いや、自分で用意したいのは確かなのだが。

そもそも以前クエストを受けようとしたら、ハイビスさんに止められた。

俺も強くなったと自負はしているが、それでも認められないほどには、相手は強いということである。

とは言っても、何もしなければ始まらない。

まずは、ギルド本部に行って、ハイビスさんに掛け合ってみようと思った次第だ。

いつものように石造りの建物に入り、ハイビスさんを探してみた。

ところが、事態は急展開を迎えた。

入るなりいきなり「ナイスタイミングです。ソウジさん、その、こちらへ。」とハイビスさんに手を引かれ、あれよあれよとギルドマスターの部屋まで通されたのだ。

わけもわからず部屋に入ると、そこには二人の人間。

ギルドマスターのシガイアさんとセツヒトさんがいた。

「いきなり申し訳ありません、ソウジさん。そしていいタイミングで来てくださいます

た。」

「おー、やつほーソウジー。」

「シガイアさんに……セツヒトさん？」

「とりあえずお話を……こちらにおかけください。」

ハイビスさんとともに部屋に入り、四人で机を囲む。

相変わらず高そうな革張りのソファーに腰を下ろすと、セツヒトさんが俺のすぐ隣に座った。

………近くない？

「ソウジー、せつちゃんー。」

「あ、すんません。せつちゃんさん。」

「んー………よろしい!」

何がよろしいなのか。

「そ、その……セツヒトさん？ソウジさんと、ち、近くありませんか？」

「えー？そりやー久しぶりだしー？弟子の調子を見ようかねー？」

「そ、それにしても……。」

「……………二人でランチ行つてた……………（ボソツ）」

「うっ……………。」

二人が何か話している。

ランチ？何の話題だ？

「……………きよ、今日のところは、どうぞ。」

「そー？悪いねーハイビスちゃん。」

良く分からないが、席の配置はこれでいいようだ。

なぜハイビスさんが恨めしく俺を見つめるのかはわからんが……。

「……………さて、ソウジさん。私からよろしいですか？」

「はい。」

よく分からないまま話が始まった。

「さて……。まずは怪我の完治、及び復帰、おめでとうございます。早く驚かされましたよ。」

「いやあ、薬の効き目がすごくて……。」

「そのセリフ……。よくセツヒトからも聞きましたよ。セツヒトはセツヒトで、回復が半端なかつたですから……。」

「シガイアさん、人を化け物みたいに言わないですよ。」

「お前は腕をポツキリいったままクエストに行っているから……。化け物以外何と云えばいいんだ？」

「あははー……。あれは若気の至りと言いますかー……。」

「お前といいマシヨルクといい、どうなっているんだ……。一度、王立研究所にでも行って、体を隅から隅まで見てもらおうといい。……。ああ、すみませんソウジさん。というわけなので、その回復力も、あまり驚かされなかつたと言いますか。」

「は、はあ。」

確かにマシヨルク教官も、俺に折られた腕なんぞその晩には気にせずガブガブ酒を

煽っていたなあ……。

「で、本題なのですが。」

「あ、はい。」

ペラッ。

場を仕切り直したシガイアさんが、一枚の紙を机に広げた。
内容は、ある一つのクエスト。

【クエスト名】 暴れん坊を捕まえて

【目的地】 南部森林地帯

【時間】 無制限

【ターゲット】 ラージャン一体の捕獲

【報酬金】 24,2000z

【依頼主】 南部農家主 キタバの娘 イパス

【依頼文】

初めて見るモンスターです。父も長く農家をしているが、見たことがないと言っておりました。

腕利きのハンターさんをお願いします。

※現状被害なし。要生態等確認。捕獲推奨。　ワサドラギルド観測班主任

※ザキミーユ本部との重複の可能性あり。要確認。　ワサドラギルド本部長シガイ

ア

※※※高難易度、HR7以上推奨※※※

「これは……。」

見たことある。

いつか、装備を整えようと丁度いいクエストを探していた時。

ギルド職員である知的イケメン君が見せてくれた、クエストの依頼文書である。

確かハイビスさんに確認して……俺の手には負えないからと、首都ギルドに依頼を回すという話だったような。

「……実は、セツヒトから以前、ソウジさんが装備を整えるための素材を求めていると聞

きました。」

「はい。」

「そして、その素材集めは順調……私からお話している例の件、そこと並行して進められているようですね。」

「そ、そうですね。」

俺が次にラージャンを狙っていることがバレて……その説教をしようというのだからか。

力不足、的な？

いやでも、ならなぜセツヒトさんがここにいる？

「ラージャンは、希少なモンスターです。よっぽどのことが無い限りは、討伐などしない。」

「そ、そうなんですな。」

「ええ、はつきり言いますと、下手な古龍よりも強い。間違いなく。」

「……………」

シガイアさんの目が、真剣味を帯びてくる。

「……………そんな生態系の頂点中の頂点にいるモンスターを討伐すれば……………地域のモンスター情勢は大きく変わる。これは分かりますか？」

「え、ええ。何となく。前世の知識ですけど。」

前世の知識。

ある天敵がない島で、人間の手で放されたウサギが超繁殖。

ところが、餌が食い尽くされ、ウサギたちは急増のあと急減。

島の豊かな植生は傾き、たくさんの糞尿で汚染された土地が元に戻るには、かなりの時間を要する。

そんな話を思い出した。

モンスターの生態系のバランスを取る。

これもまた、ギルドの仕事だ。

「ご理解が早く、助かります。そしてこの依頼……………首都ザキミーユとウチの管轄の、丁度真ん中辺りのエリアでしてね……………。これが、厄介なんです。」

「そ、そうなんですか？」

シガイアさんが珍しく顔を顰める。

ハイビスさんやセツヒトさんも、同じ顔をしている。

え？何で？ワサドラかザキミーユか、どつちかが倒せば、それで終わりなんじゃないの？

「ハイビスさん。厄介な理由について説明できますか？」

「は、はい。えーつと……ソウジさん、まず今回の相手は、超希少かつ超強力なモンスター、ラージャンです。」

「は、はい。」

ハイビスさんが丁寧に説明してくれる。

俺の右にはその話を聞きながら、うんうんと頷くセツヒトさん。

「ギルドは、その運営は寄付や税金だけではとてもまかないきれません。その多くは、モンスターの素材を管理して、金銭のように運用しながら、需要と供給のバランスを見て

利益を出して……そういう風にして、予算を捻出しています。」

「ちよつとピンハネしすぎだけどねー。」

「セツヒトは静かにな。」

「むー。」

シガイアさんに黙らされるセツヒトさん。

確かにセツヒトさんの言うこともわかる。

結構な素材を取られ、ハンターの手元に戻ってくるものは少ない。ぶつちやけ。

本来、倒したモンスターの素材は全て自分のものなのに。

だが、そこには理由が存在する。

クエストの工程を全て完了するためには、様々な人員や設備、資材が必要である。

すなわち、金。

それらギルドの費用をまかなうためのシステムが、素材の運用なんだよな。

うん。

その話なら、ちよつと前に考えたことがあるし、分かるぞ。

「……まではよろしいですか？」

「あ、大丈夫です。続きを。」

ハイビスさんが確認を取ってくれる。

俺、一応異世界人だしな。

その辺配慮して、話をしてくれているんだろう。

ありがたいです。

「それですね……今回のラージャンの素材、これはかなりの大金になります。ですが、素材を得ようにも生態系のバランスを崩してまで手を出しては本末転倒。そもそも倒せるような大きなハンターチームを組む、そんなお金を捻出しては、結局経費と素材のお金でトントン。」

「は、はい。」

「そんな折、人間の住む領域までラージャンが現れました。地域の生態に属しない、倒しても良い対象として。しかもその領域というのが、南部農家主……すなわち、首都やワサドラ、その周辺に食材を供給する一帯の権力者、キタバさん。その方から、ギルドに直接依頼があったんです。」

「お、おお。」

「……………ここまで……大丈夫ですか？」

「ちよ、ちよつと整理しますね。」

考えてみる。

物凄く金になる、けどめっちゃ強いラージャン。

それを倒すことには、とりあえず問題はなさそう。

だが、倒す為には本末転倒ながら、経費がかかる。

それがワサドラと首都の丁度真ん中辺りに現れた。

しかも依頼したのは、なんか偉い人。

生態系を考えるとか以前に、人々の生活を守るために、ギルドは動かなきゃならない

よな？

税金もらってるわけだし。

ある意味、公共機関であるわけで。

……………あれ？何かきな臭くなってきたぞ？

結構ヤバイ話をしようとしてる？

「大変そうな話、というのは分かってきましたけど……。」

「はい。そして、ここからがもつと大変なんです……。」

ハイビスさんが、丁寧な話を続ける。

「まず、今回の依頼はあくまでワサドラ預かりです。緊急、というほどでもないですが、すぐにでも対応しなければならぬ事態です。私達は協議の結果、すぐに首都に報告しました。」

「こういうのは、独り占めしようとするだけ損ですからね。すぐに報告連絡相談。これに尽きます。」

（社会人の基本……。）

前世の新人研修のようなセリフを、シガイアさんが補足してくれた。

じゃあ既にこの件に関しては、首都のギルドも知っているわけだな。

ハイビスさんが続ける。

「首都ギルドも慌てたらしいです。さすがにあそこも、ラージャンにすぐ対応できそうなハンターはそうそういません。チームの編成等を行う時間も考えると、期間が必要な

んだと思います。」

「そ、それで首都の返答は？」

「……………こちらにまかせる、とのことでした。」

「へ？」

「うっわ……………」

思いつきり嫌な顔をするセツヒトさん。

セツヒトさんの色々な嫌な思い出と、被るものがあつたんだろうな。

だが、丸投げしていいのか？

首都がやってしまえば、素材をゲットするチャンスじゃないのか？

そう考えていると、シガイアさんが俺の頭を読んだかのように話してくれた。

「……………どうやらラージャン討伐の為の経費も準備期間も足りないかと判断したようですね。十人以上のチーム……………旅団レベルの話だ。首都は、こういう迅速さには弱い。」

「……………大きすぎる、ということですか。」

「はい。首都も、一枚岩ではありません。中央以外にも、東西南北それぞれに支部ギルドがあり、それぞれがしのぎを削っている。あちらの内部の混乱を避けるため、こちらに

丸投げした……のかも知れませんがね。」

そしてシガイアさんは快くその話を受けた、というわけか。

「対してこちらは……悲しい話、ギルドはそこまでの規模ではありません。ですが、戦力は十分。ハンターの生ける伝説、G級の百手セツヒト。それに、ティガレックスもソロで倒す超級の新人、HR7のソウジさんがいらつしやいます。いやあ、ソウジさんがハンターランクを上げていてよかったです。……また、ソウジさんがラージャンの素材を必要としているのは聞いていました。」

「は、はあ。」

「そこで、セツヒトも同行して、ラージャン討伐に向かってほしいのです。いいな、セツヒト。」

「がってーん。」

気の抜ける返事が、セツヒトさんから上がる。

どうやら了承と言うことらしい。

……すると、首都から突っ返されたクエスト依頼を、俺と俺のオトモのシヨウコ、セ

ツヒトさん、それでクリアしろというわけだな？

まあ俺としてはラージャンに挑みたかったわけで、渡りに船である。

「俺としても助かります。ラージャンに挑めるかどうかさえ、分からないまま今日ここに来たので。」

「いえいえ。こちららも、勝手に話を進めて申し訳ありません……ですが、私としてもギルドとしてもメリットが大きいんです。」

「へ？」

「首都が突き返したような案件を、こちららが少数精鋭でクリアする。しかもワサドラ南部農村地帯の権力者、キタバの信頼を得られる。さらには、ラージャン素材を手に入れられる。……ワサドラとして、首都に大きな意欲返しができます。鼻を明かすことができます……ははは、これは楽しくなってきました。」

「……………」

「うわー、シガイアさん悪い顔してるー。」

ニッコニコの笑顔でとんでもない事を嬉しそうに話すシガイアさん。

心底愉快そうである。

「……ソウジさん、気になるのは、首都の動きです。」

「首都？」

「ええ。先程話しましたように、首都も一枚岩ではない。今回の判断は首都の……おそろく中央が下したんでしょう。だが、他の支部は不満でしょうね。」

「確かに……そうでしょうね。」

「ええ。……ですから、何らかの妨害があっても不思議ではない。」

「ぼ、妨害。」

「はい。マシヨルクからの報告待ちですが……いやあ、私も敵が多いものでしてね。」

「「あー……。」」

全員が納得してしまう。

仕事ができる人って、それだけで疎まれるものだろうしなあ。

「……………ご納得いただけて、何よりです。」

「い、いえ。すみません。」

「ですので……警戒として、御者に護衛をつけます。」

「護衛？」

「はい。ハイビスさん、あの方々にお話は？」

「はい、既に伝えております。」

「素晴らしい。流石です。」

「……………」

あの方？

どなた？

なんて顔をしていると、ハイビスさんが付け足してくれた。

「フェニクさんです、ソウジさん。」

「……………」

「更にガーグア車には、あのおじさんが。」

「な、なるほど。」

フェニクさん。

一時期ショウコとパーティーを組んでいたあの人。

雰囲気からして只者では無いと思っていたら、首都で警備の仕事をしていた過去をお持ちだった。

対人戦なら相当な腕前らしい。

……………ハンターとしては、まだまだらしいけど。

「セルレギオスの一件の恩を返したいと、快く引き受けてくださいました。トツバちゃんもおじさんも、二つ返事です。」

「ありがたいことです……………」

こんな危険なクエストに同行してくれるとか、3人とも、ありがたい限りである。

「ソウジの人柄のおかげだよねー。」

「へ？」

「ソウジさー、いい人だもん。それに頑張っていて一生懸命で……………みんな、ソウジのそんな姿に、惹かれているんだよー？」

「そ、そうですかね。」

「ふつーないってー。あんなハチャメチャな敵にー、得体のしれない人間同士のドロド

口にー、巻き込まれたくないよー？ふつー。」

「……………ありがたい限りです。」

セツヒトさんがなんだかむず痒いことをおっしやる。

いや、嬉しいんですけどね。

「私とシヨウコちゃんとソウジでラージャンの狩猟ー。ガーグア車のおじさんが車載せてくれてー、対人はフェニクさんの護衛付きー。……………うーん、イけるイけるー。」

とつても樂觀的な事を言うセツヒトさん。

……………まあ、言葉にすれば単純な話だ。

……………やっつてやる。

そんなやる気に満ちている俺に冷水を打つように、シガイアさんがあることを尋ねてきた。

「……………ソウジさん、例の赤い目……………どうですか？」

「えっ？いや、特になんともないですけど……。」

「まだ赤いままなんですよね？」

「はい。」

「……………くれぐれも用心なさってください。あなたを失っては、このギルド、いや、ハインター界全体の大きな打撃になる。」

「は、はい。」

「今回も、セツヒト一人では中々行かせられないところに、ソウジさんという強力なカードがあつて、初めて成り立つ話です。警戒するに越したことはない。」

「……………」

「個人的にもあなたのファンですから。くれぐれも、お気をつけください。」

「……………はいっ！わかりました！」

俺は、期待に応えようと、元気よく返事を返した。

* * * * *

……………までが、昨日あつた話。

だが家に帰ってよくよく考えてみると、段々と緊張してきてしまった。
ラージャンとか妨害とか。

色々なことが頭の中を渦巻いている。

「ご主人様。まずは、みなさんと合流しましょう。」

「……………そうだな。」

考えていても仕方がない。

俺達は朝食を手早く済ませ、待ち合わせのガーグア車乗り場に向かうことにした。

139 ご挨拶申し上げましょう。

今日はクエストの日。

相手は、超強敵、金獅子ラージャン。

シガイアさん曰く、下手な古龍よりも強い、とか。

もちろん古龍なんぞ見たこともないが……俺史上最も強敵になることは間違いないだろう。

そして心配事もある。

昨日シガイアさん達から聞いた、首都ザキミーユギルドとのあれこれ。

今回の依頼の形としては、紆余曲折あつて、結局俺の所属するワサドラギルドに丸投げしたと言うもの。

だが、それを疎ましく思う人も少なくないのでは、ということであつた。

(妨害などもあり得る、か。)

ハンターランクが7まで上がったときに忠告された、気をつけろという話。

それを思い出す。

ただ俺は、ハンターとして生活していければそれで良かったはずなのに。どうしてこうも、人はいがみ合うのか。

……………いや、違うな。

俺が首を突っ込んでるのだろう。

俺は、俺の周りを守りたい。

人々の営みを、生活を、その命を。

その為に、強くなりたい。

そうしたら縁ができて、しがらみも増えて…………。

そんなところだろうな。

「ご主人様？大丈夫ですか？緊張してます？」

「ああ、大丈夫だ。これでも、人生経験は豊富なんだ。何せ、中身は結構な年だしな。」

「そら……………よかったです。」

少し寂しそうな顔をするシヨウゴ。

「ああ、シヨウコ。今日も頼りにしているぞ。……俺が暴走しそうなときは頼んだ。」
「……………はいっ!!」

寂しそうな顔の真意は分からない。

だが、俺は自分一人で何でもできる人間ではない。

本音を、そのままシヨウコに伝えた。

シヨウコは以前、自分がちゃんと力になれているのか、不安だったみたいだし。

きちんと言葉にして、頼りにしていると言うことを伝えておきたかった。

そういえば、今朝、宿の出かけ。

日課のドールの頭を撫でる時、「今日は念入りにね?」と言われた。

もはやご利益を願う信者のごとく、それはもう丁寧にやらせてもらった。

困ったときの、ドール頼み。

俺には、ドール様がついている。

更にシヨウコもいる。

しかもしかも、今回は俺だけではない。

道の向こう、ガーグア車乗り場の近く。

4人が、俺を待ち構えていた。

「おー……おっはよー、ソウジー。」

「おうっ！ソウジさん！今回もよろしくな!!」

「ソウジさん、おはよう。ほら、トツバ。挨拶。」

「……眠い。」

頼りになる方々が、勢揃い。

まあ約一名、眠そうな顔をしているアイルーがいるけど……。

先程までの不安と緊張も、一気になくなった。

ありがたい。

「みなさん、おはようございます。……おじさん、今回も危険な道程になりますが、よろしくおねがいます。」

「おうよーなーに、ギルドからの依頼だ。コレも、結構頂いたからよ！気にしねえで、頼つてくれ！」

「はい。それはもう、めっちゃ頼りにしますので。」

「ははは！まあ運んでやるだけしかできねえけどな！」

ガーグア車のおじさんが、指で円を作りなが笑い飛ばす。

俺がセツヒトさんとハイビスさんと共に冬山に向かったとき、そして帰るとき、お世話になった人物。

ジンオウガの時も、危険を顧みず運び役をやっていた。

その仕事ぶりからも、俺はひそかに尊敬している。

「ソウジさん、今回はよろしく頼むよ。」

「フェニクさん、おはようございます。よろしくお願いします。あの、ギルドの方から話は……。」

「ああ、聞いている。今回は、ハンターと言うよりも護衛として頑張らせてもらおうよ。」

「ありがとうございます。」

「何、元本職だ。安心して狩猟に備えていてくれ。むしろ、勉強させてもらおう。」

「はい。改めてよろしくお願いします。」

フェニクさん。

シヨウコと結構昔からの付き合いがある、ハンターである。

ミステリアスな印象を受けるが、これで結構よく笑う方だ。

凜とした佇まい、ブロンドをきつちり三つ編みにして、銀に青色が混じった鎧を見に纏っている。

すごく似合っていると思う。

「おー？フェニクー？今日はクロムメタルコイルー？青と銀色……発色もコーデもいいねー、似合うねー。」

「セツヒトさん。またあなたとご一緒できて、光栄だ。よろしく頼む。」

「よろしくねー。……うーん、いい仕事してますな……。」

セツヒトさんが、ジロジロとフェニクさんの装備を見ている。

マニア魂に火がついたのだろうか……？目が怖いぞ。

「セツ……せつちゃんさん、その辺で。フェニクさんが珍しく狼狽えます。」

「おー？あー……ごめんごめん、趣味というか仕事というかさー。」

「いや、気にしないでほしい。セツヒトさんには世話になっているしな。」

よくわからないところが多分にある人たちなので、二人の会話は聞いていて新鮮である。

すぐ横に目をやると、トツバとシヨウコが何かを話している様子。

さすが、幼馴染は仲がいい。

「シヨウコ、正直に言う。」

「……一応聞くわ……何？」

「……ねむい。」

「聞くだけ損やったわ……ほら！行くで！！」

「あー、引つ張らないでー。」

ズルズルズル。

……仲がいい……んだよな？

ま、まあ気の置けない関係と捉えよう。

シヨウコに引つ張られて、荷台に乗り込まされるトツバ。

相変わらずよくわからない子である。

「しかしまあ……ソウジさんよ。不思議なメンツが集まったもんだなあ。」
「おじさん。確かにそうですね……。」

ミステリアスなフェニクさん。

よくわからんツツバ。

長い付き合いなのにやはりよく分からないセツヒトさん。

うーん……ある意味似た者同士が集まったのか？

「ま、とりあえず車出すわ！とつとと乗ってくれ！」

「は、はい。」

おじさんにせっつかれて、俺たちは荷台に続々と乗り込んだ。

今日は大所帯。

打ち合わせもしつかり行わないと。

「お前たちも、よろしくな。」

「ガー。」

「グー。」

車を引く二頭、ガーグー達に挨拶する。

相変わらずの、のんびりした顔。

安心するぜ。

* * * * *

「それじゃ、打ち合わせをしておきましょう。」

この声を皮切りに、荷台にいたみんなが俺を見てきた。

やっぱり不思議なメンツだが、まあ慣れるだろう。

「今回は……まあみなさん聞いての通り、結構色々めんどくさいクエストになります。

その辺の理解は、大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。その辺は、我々も聞いている。」
「おっけー。問題ない。」

返事をくれるフェニクさんとトツバ。

二人が事情を知っていれば、とりあえず問題はないだろう。

「よかったです。と言うわけで、ラージャンの狩猟は、俺とシヨウコ、セツヒトさん、3人で行います。そして森林狩猟地域のスタート地点に、おじさんとガーグー……この車
が待機。護衛にフェニクさんとトツバに残ってもらう形です。……ここまで大丈夫で
しょうか?」

「あー、ソウジ。私からいーいー?」

「あ、はい。」

片膝を上げて座っていたセツヒトさんから、声が上がった。

セツヒトさんは、ロアルドrossの胸当てをつけているものの肩とおへそは丸出し。

胴回りはカムライという、腰から足首まである長布をロングスカートのようにつけて
いる。

……スカートというか、脚の前面は完全に開いており、その御御足はしつかりと見えているのだが。

ショートパンツの下、足にハンターグリーブを付けていなかったら、もう痴女の部類に入るのでは無いかと思えるほど。

見ないようにするのが大変である。

……何故こんなに防具の名称に詳しいかって、荷台に乗り込んですぐ、フェニクさんと二人で防具談義で盛り上がっていたからである。

決して俺は女性装備マニアでは無い。

繰り返すが、マニアではない。

……大事なことなので！

……さて。

セツヒトさんが言いたいことは、フェニクさんの配置についてであった。

「行きと帰りの道中は、まあいいとしてさー。クエスト中はそれでいいのー？」

「へっ？」

「おじさんの護衛は確かに必要だけどさー。私がもし邪魔をするなら、クエスト中に

やるかなー。」

「……………あー。」

セツヒトさんの言いたいことが、なんとなくわかった。

フェニクさんを車に残すとして、クエスト中に俺たち側に何かあった際、対応が難しいってことか。

「確かに……………どうしましょうか。」

「んー、難しいねー。おじさんの安全は最優先だからさー、さっきの分配でいくしかないかなーとも思うんだけどー。」

「い、いやー！気にしなくていいぞ!?何かあったら逃げちまうからよー！」

「それはだめ。」

俺とセツヒトさんが考え込み、おじさんが気にするなと言うと、思わぬ人物から声が上がった。

眠そうな目はそのままの、トツバである。

「ガーグーおじさんがいなくなったら、私達を運ぶ車も無くなる。今回、ワサドラからの迎えはこれ一本。いなくなったら、困る。」

「そ、それはそうだけだよお……。」

おじさんがトツバに言い返そうとする。

手綱を握りながら、自分がクエストの邪魔になっていると思っ言ってくれているんだらう。

おじさんは、そういう人だ。

確かに今回、めんどくさいクエストの手前、送迎はおじさんに任せる形である。

おじさんに何かあれば、大変なことになる。

だが、トツバは違う提案をしてきた。

「私が、この車を守る。」

「……えっ!?!」

「私なら、平気。」

「……………ほ、本当に?」

いきなりの提案。

セツヒトさんも、どう話していいかわからないって顔をしている。

「……トツバは、護衛とかできるのか？」

「む。ソウジは失礼。私は、その辺のハンターには負けない。」

「す、すまん。」

「……ソウジさん。多分大丈夫だ。」

「フェニクさん。」

フェニクさんが、補足を入れてくれる。

「トツバは……まあこう見えて力が強い。私よりもな。その辺のハンターなら、まず相手にならんだろう。」

「ま、まあハンマーを使うってんなら、そうでしょうね。」

「ああ。それに、素早く動く、というタイプでもない。むしろ、車に張り付いて護衛するというなら、向いているかもしれない。そう思うよ。」

「……なるほど。」

シヨウコがスピードタイプなら、トツバはパワー特化ということか。何だろう、レーシングゲームの車選びみたい。すると、そのスピードタイプのシヨウコが話し始めた。

「うちも、ええと思います。トツバの提案。コイツ、力は凄いです。おまけに目も凄くて。落とし物とか、めっちゃくちや見つけてきよるんですよ。」

「あの、たまに地面に落ちている、モンスターの落とし物をか？」

「はい。それだけで飯食えるんちゃうかなあ……いや、分かりませんがね。」

「私は強い。安心して。」

ぐつと力の入った目で俺を見つめるトツバ。

「……………分かった。おじさんとガーグー達を頼んだぞ、トツバ。」

「がってんしようち。」

「よ、よし。」

じゃあそうすると……。

「それじゃあ、フェニクさん。危険なところですが、俺達と同行して、万一の時の為に、対人の護衛をお願いします。」

「ああ、任された。セツヒトさんほどでは無いが、そういうのは得意だ。頑張ってみるよ。」

「はい。……ラージャンが出てきたら、すぐ離れてくださいね。」

「ははは、言われなくてもそうするさ。」

よし。

だいたい固まってきた。

狩猟は俺とシヨウコ、セツヒトさん。

クエストについてくる形で、人間的な警戒と警護をフェニクさん。

スタート地点におじさんとトツバ、そしてガーグー達。

こんな感じか。

「………うん、いーんじゃないー？警戒し過ぎな気もするけどー、あれだけシガイアさ

んが気にかけてたしねー。やりすぎる位がいいと思うよー。」
「はい。万全を期していきましよう。」

6人+2頭の配置は決まった。

あとは狩猟についてだな。

「じゃあシヨウコ、このままラージヤンについて情報共有といこう。」

「はいっ、ご主人様！」

「セツヒトさんも、よろしくおねがいます。」

「はいよー、りようかーい。」

そのまま俺たちは幌の上に登り、辺りを警戒しながら、ラージヤン討伐について打ち合わせをした。

何でわざわざ登ったかって、俺のギフトの話をせざるを得ないからである。

セツヒトさんの狩猟経験、そして俺のモンスター情報の内容を照らし合わせながら、対策を練ることにした。

「私も倒したわけじゃないんだよねー……一人だと、正直キツイかもー。いやー、あの時どっか行ってくれて助かったよー。」

いや、狩猟経験がある事自体すごい。

セツヒトさんへの尊敬の念が深くなった、俺とシヨウコであった。

* * * * *

「よーし、そろそろ着くぞー！」

「ありがとうございます、おじさん。お疲れさまです。」

「いいってことよ！今日はここに宿泊でいいんだよね？」

「はい。ゆつくり休んでください。」

おじさんと予定を確認しながら、たどり着いた村を見渡す。

名前はチダイ村。

村という名前の通り、ここに住む人間はそう多くない。

だが、ここは大陸南部の一大農産地の中心。

依頼主はイパスという人。

依頼文からは、この地主さん？村長さん？の娘ということだけど……。

農家主って何だよ。

……とつても偉い人の娘さんだから、礼儀正しくしよう。

俺は目上の人にはとても弱い人間である。

ここまでの行程は、大体一日半。

整備された街道沿いを進むだけだったので、距離としては離れていても、そこまで遠い印象は受けなかった。

心配していた妨害も影形なく、安心。

ワサドラと首都を結ぶ道を進んできたが、タオカカや移動集落を結ぶ道よりもかなり楽だった。

あちこち筋肉が固まって痛いけど。

「あーケツ痛い……。それじゃ、俺はイパスさんとお話してきます。皆さんは……。」

「あー、宿とか無いかいちおー見てみるー。無かったら野宿でー。」

「はい、分かりました。よろしくお願いします。……じゃ、シヨウゴ。」

「はいっ。」

シヨウコを呼んで、二人で挨拶に行くことに。
残りのメンツには宿を探してもらおう。

……………。

シヨウコと二人で村の中を歩く。

ハンターの姿は珍しくないのか、特に視線を感じたり、かと言って無視されたりということも無い。

村の、おそらくメインストリート。

そこかしこに商店はあるが、基本的には住居と倉庫のような建物ばかりが建ち並ぶ。

だが、人々が元気よく働いている姿を見ると、中々に栄えている様子が伺える。

途中にあった学校のような大きめの建物では、子どもたちが大きな声で騒いでいる様子が見られた。

すげえ、普通教育も行えているのか。

「ウチ初めて来ましたけど……………こんな村なんですなね。」

「ああ。俺はもう少し規模が小さい村を想像していたぞ。」

「そうですねえ。ここは首都と北部を結ぶ中継地としての役割もありますから。ウチも聞いた話ですけど。」

「なるほどなあ。勉強になる。」

「……………ご主人様は、その力で何でもわかるかと思っていました。」

「村の規模とか地理的なこととか……………その辺の子どもより知らないかもしれないぞ?」

ギフトのマップはたしかに便利であるが、詳細な情報を教えてくれるわけではない。

唯一素晴らしいと思っていたモンスターの配置を教えてくれる機能も、こここの所反応が微妙だし。

「だから、こうやってシヨウコが教えてくれると助かる……………おつ。」

「あ、ありましたね。」

しばらく行くと、『集会所』と書かれた看板を発見。

周りの建物よりも大きい木造の建物。

だが、ミヨシで見たようなログハウスのな作りではなく、木材をきっちり加工して建

てられている。

屋根の勾配もキツくない。雪とか無縁の土地つてことかな。

「じゃ、じゃあ入るぞ。」

「ご主人様、フアイトです。」

「……いざというときは頼んだ。」

「偉い人と話す時はいつもこうなんやから……。」

仕方ない。

俺は元現代日本人。

保守的かつ長いものには巻かれる人間なのである。

コンコン。

ギイイ……。

「し、失礼します……。」

「ん？あ、入っていいですよー？」

「あ、すみません。」

中にいた、おそらく村の人であろう女性に返事を頂いた。頭を下げて、恐る恐る入室。

「恐れ入ります。ワサドラギルドより参りました、ソウジと申します。依頼を受けて、参りました。」

「オトモのシヨウコです！」

「あら、これはこれはご丁寧に。どうぞ、こちらに。話は伺っています。」

「はい、失礼します。」

手で示されたテーブルに向かう。

集会所の建物の中は、想像通りやはり木製。

所々に柱が建ち、中央に広く取られたスペースにはたくさんの机と椅子が並んでいた。

更にその奥は、バーカウンターと数席の椅子。

右手には書類をまとめる職員さんの姿が数人見える。

役所兼集会所兼酒場、といった感じだろうか。

村の中心を担う場所なんだろうな。

キヨロキヨロしていると、案内の女性から声がかかった。

「あらあら、すみませんね。珍しい造りですよね。お客様は、いつもそういった反応です。」

「い、いえいえ。すみません、失礼な真似を。」

「あらあら………礼儀正しい方なのですね。お話とは違って、安心しました。」

応対してくれているこの女性………受付か何かの方だろうか。

濃い茶色の長い頭髪を後ろで編んで、白のロングスカートと細めの青と白のストライプシャツを着こなしている。

襟の立ったシャツの奥は、控えめなネックレス。

丸淵の眼鏡の奥は、青い瞳。

農家の人、というよりは、都会にいそうな上品な女性という印象であった。

フェニクさんよりも年上だろうな………なんか優雅な大人の女性って感じがする。

……失礼な目線は控えよう。

今は話に集中集中。

「どうぞ。今、お茶を入れますからね。」

「いやいや、お構いなく。すぐに話は終わりますので。」

「まあまあ、そう言わず。……お噂に聞いたハンターさんとお話できるんですもの。お茶ぐらい入れさせてください。」

「で、では遠慮なく。」

「はい。」

ニコリと微笑むと、ゆっくりとした足取りで事務所のような場所へ向かう。

優雅で……ともすれば、のんびりした方だなあ。

「……御主人様？鼻の下伸びてませんか？」

「な、何を言うか。濡れ衣だ。」

「ウチ知つとる……このパターン、ハンザさんの時と同じや……！」

アホ言ってるシヨウウコは無視しておこう。

そんなやりとりをしていると、奥から先程の女性が戻ってきた。

「どうぞ？ 私達自慢のお茶です。」

「あ、どうも。ありがとうございます。」

「ふふふ……本当に、噂とはあてになりませんね。」

「え？」

「いえ。ティガレックスやジンオウガをいとも簡単に狩猟した凄腕の新人ハンター……なんて聞いたものですから。」

「いやいや。私は普通ですよ。普通。」

「ご主人様は自覚が足りないんです！ 強いので安心してくださいー！」

「うふふ……オトモの……シヨウコさん、でしたっけ？ 可愛らしいのに、腕前は超一流と伺っています。……ああ、噂のお二人を前にして、緊張してしまいますわ。」

随分と持ち上げてくれるが……正直な話、とつとと依頼について話をしたい。

いや、ありがたい話ではあるんだけども。

俺たちの噂って……きつとあることないこと尾ひれに背びれに色々ついて回っているんだらうな。

人の伝聞なんて、得てしてそういうものだ。

「……………」

「……………」

「……………あ、あのー。そろそろ、その、依頼を下さったイパスさん……………農家主の娘様だと思
うのですが、その方とお話をしたいのですが。」

「……………あ、あらあらあら。申し訳ありませんね。私としたことが……………」

よかった。

この女性のまったりとした雅な雰囲気にならされてしまうところであった。
というか流された。

一瞬、何も話さないというよくわからん時間が流れたぞ。

「紹介が遅れまして……………私です。」

「……………えっ。」

「すみません……………こうしてのんびりしている性格なものですから、父にもよく注意され
ております……………」

「……し、失礼ながら、お名前をお伺いしても……。」

「はい。申し遅れました。私、当村で村長、及び首都北部農家連合長代理を務めさせて頂いております、イパスと申します。どうぞ、お見知りおきを。」

「……えっ。」

シヨウコと二人で言葉を失う。

え？

この人が？

……マジで？

140 森の奥まで行きましょう。

毎度毎度誤字報告すみません……なぜあんなにも見直して間違えるのか……。
とてもありがたいです。感謝申し上げます。

農家の人、と言われて。

まず俺が想像するのは、前世の祖父である。

茶色いズボンに黒い長靴、夏はランニングシャツ、冬は正直ダサイブルゾンを着こな
し。

何とも言えないデザイン帽子をかぶり、首にはタオル。

トラクターや軽トラをブンブン乗り回し、汗と泥にまみれた手はシワシワ。

芋焼酎をかつくろうように飲む、とにかくせっかちな農家のおじいちゃん。

それが俺の祖父であり、農家の人のイメージでもあった。

今回のクエストの依頼文にあった依頼主は、南部農家主の娘、とだけ。だから、多分農家の女性、というイメージが強く先行していたのだろう。正直まだ、目の前の女性と農村というイメージが結びつかない。

「あらあら、驚かせてしまいましたかしら……申し訳ありません。最初に名乗ればよかったですね。」

「いえいえいえ!!滅相もない!すみません、こちらこそ全く気づかず!」

「あらあらあら、頭を上げてくださいいな。ふふふ、面白い方ですね、ソウジさん。」

ふんわりと笑う女性。

フアツシヨナブルな格好を颯爽と着こなす都会的な姿と、眼鏡をかけた知的な印象が、どうしても依頼主の方とは結びつかなかった。

まさか、この方がイパスさんだとは。

「……重ねて、申し訳ありませんでした。気付かずに、取り乱してしまいました……。」
「とんでも無いです。ええ、自己紹介が遅れましたね。」

なるほど、だからずっと俺たちの相手をしていたのか。

あちらからしたら、どうして話をしないのだろう、と不思議に思っていたのだろう。

……自己紹介、これ大事。

「……で、では、依頼についてお話を聞いてもよろしいですか？」

「はい。それでは……どこからお話しましょうか……。」

少し思案顔のイパスさん。

美人で知的で大変おモテになるのでは、と推測できる。

思い込みはいけないよ、俺。

反省しましょう。

「少し長くなりますが、よろしいでしょうか。」

「はい。」

「では……私の父、キタバは、根っからの農夫でして。我々連合は合議制をとっているのですが、全会一致で長に指名されたにも関わらず、全てを私に一任してしまいました……。」

「……………」

な、何の話だ？

ま、まあいいや。黙って聞こう。

「父は、この一帯では有名でして。農地改革や品種改良まで手ずから行い、ここ首都北部農産地を更に発展させました。そちらでは南部農産地、と言うんでしたね。……体も丈夫では無い私に、何かお手伝いできることがあるならと、こちらの業務に携わる毎日を送っておりました。父は変わらず、農作業に精を出し、たまに私にアドバイスをする程度。……そんな日々を長らく送ってまいりました。」

「は、はあ。」

「そして一月ほど前……父が倒れました。」

「えっ。」

よくわからん話が、急にシリアスになった。

………どういう展開になるんだこれ。

「……原因は、その時は不明でした。ただお医者様の話では……凶悪すぎるモンスターを見て、自我を保てなくなったハンターの症状に似ている、と……。」

「……。」

なるほど。

聞いたことはある。

狩猟中、狩場に強力なモンスターが乱入。

命は助かったものの、それがトラウマになってハンターを引退する、という話。

俺だって、初めてバサルモスやディノバルドと対峙した時なんて、どれだけ怖かったか。

すこし目を潤ませて話す様子は、ちよつとだけ辛そうだ。

俺が心配そうに見つめていると、イパスさんはそれを察した。

「あ……すみません。……幸い、父は回復には向かっております。ご安心くださいね？」

……おそらく、以前のように仕事をするのは難しいでしょうけど……。」

「……命があつてこそ、です。モンスターに出遭つてしまった、というのなら、そこをま
ず喜ぶべきかと。」

「……ええ、そうですね。ありがとうございます。……本題に入りますね？」

ゆつくりと、だがはつきりと、今回の話の前置きを話してくれたイパスさん。

のんびりした様子の中にも、平穩ではいられなかった様子が見てとれた。

俺の励ましにもならない言葉に、感謝を返してくれた。

「「ここにも、一応下位ながら、村付きのハンターがおります。お願いして、父がいた農地の奥、大森林の入り口に調査をお願いしました。」

「……もしかして、そこに？」

「……はい。金獅子、ラージャンの姿があった、と。」

「……なるほど。……よくラージャンだと分かりましたね。」

「首都から派遣されてきた方に、確認をとりました。間違いないということでした。」

「そうですか……。」

……ん？

ちよつとおかしくないか？

すると……首都ギルドは、先にラージャンの情報を掴んでいた、ということになるの

では？

……駄目だ、判断する材料が足りない。

もう少し話を聞くことにする。

「色々対策を考えましたが、私も父でさえも見たことも聞いたこともないようなモンスターでした。どうしようもなく、私も困り果てている時に……あるお噂を思い出しました。」

「……俺とシヨウウコのことですか？」

「はい。ワサドラに、とても強いハンターさんとそのオトモがいる、と。」

「な、なるほど。」

面と向かって言われると、正直恥ずかしいものがある。

「それで一筆書きまとめ、ワサドラのギルドに依頼をお願いした、という次第です。」

「……経緯は大体わかりました。ありがとうございます。」

「……ご主人様。」

「ああ……少し考える。」

心配そうに俺を見つめるシヨウコ。
ありがとな。

……話を整理しよう。

ラージヤンは、どうやらこの辺にはいないようなモンスター。

いわゆる、その土地に昔からいるような、ヌシのような存在ではないようだ。

キタバさんが、見たことがないと言うぐらいなのだから、まあ間違いないだろう。

問題は、俺たち……というよりもワサドラがクエスト依頼を受ける前に、首都ギルドの方がラージヤンの存在を認識していた、ということだ。

「首都から派遣されてきた方」という存在が、気にかかる。

……イパスさんが、まあありがたいことに俺達の名声を聞いて、ワサドラに依頼をかける……。

首都はラージヤン討伐に躍起になっているところに、肩透かしを食らった形に……なるのではないか。

あれ、すつごく嫌な感じがしてきた……。

首都にラージヤンの確認とか頼ってにおいて、ワサドラに狩猟依頼を出すとか……イパ

スさんも厄介なことをしてくれちゃってますけども。

その理由が、俺の噂を聞いて、って……。

……あー！すつごくヤな予感がする！！

……仕方がない。

ここまで来たのだ。

そのために、あのメンツを揃えた。

ラージャンを倒す。

……ここの人達の生活を守るため。

イパスさんの父、キタバさんも、狩猟すれば体調が良くなるかもしれない。

俺は、狩る。

狩るんだ。

「……イパスさん、お話、ありがとうございます。話しくいお話もありましたよね。

……早速、明朝その森林に足を運んで、ラージャンを探してみます。」

「……ええ！ありがとうございます！」

「いえいえ。」

「本当に、ワサドラにお話を持って行って良かったです。……首都の方、少し感じが悪かったですよね。ソウジさんみたいにかっこよくて礼儀正しい方なら、そのまま首都にお願いしましたのに……。」

「あ、あはは。」

「気分で依頼先を決めた、ということか!?

「お、おそろしい……。」

「そんなことを思っただけに愛想笑いをしたら、急にイパスさんの雰囲気が変わった。のんびりとした様子が一変、キリツとした顔つきに。」

「ソウジさん。」

「は、はい。」

「……我々は、この大陸の食の一大生産地の民です。食は、営みの源。……ギルドの思惑は色々あるかもしれませんが、うまくバランスを取らせていただいで、平穩無事に過ごさせてもらっております。」

「……あ、な、なるほどー。」

「ですから、ご迷惑をおかけしたことは、申し訳ありません。どうか、お気を悪くなさ

ないでくださいいね？」

冷やかな口調で意味深なことを言うイパスさん。
確定。

この人、頭のいい人だ……。

しかも、シガイアさんみたいにしたたかなタイプ。

「あら……そういうえばソウジさん。お泊りになる場所は、お決めになられてますか？」
「い、いえ。今一緒に来た狩り仲間が、探してくれてるはずです。」

「そうですか……。よろしければ、集会所横の宿をご利用ください。おそらく皆様は、そちらに案内されているはずですよ。」

「……………え？」

「……………村に着く前から、もちろんご用意させていただいております。」
「……………。」

お、俺はまだ皆のことを紹介していないぞ!?

宿を探していることなんぞ、話した覚えもない……。

どこからどこまで知っているんだこの人。

「セツヒトさん……あの伝説の方とお会いできるのですね……。今日は何ていい日なんでしょう。ソウジさん、シヨウコさん、今夜は色々なお話をお聞かせくださいね？ 楽しみです！」

「は、はい……。」

最初の優しいのんびりとした様子で話すイパスさん。

もちろんセツヒトさんが同行する話もしていない。

全て知っていたのか……。

イパスさんの未恐ろしさを垣間見て、もうしどろもどろになる他ない。

……やっぱり、この一帯を取り仕切る人なだけはある。

人間として、完全に負けたわ。

* * * * *

「多分あの人、最初自己紹介せんかったの、わざとですね。」

「え、そうなの!？」

「んー、多分そうだろうねー。それにー、途中挟んだ涙ちよちよ切れ話もー、ちよつと演技入ってたのかもよー?」

「ええ!?! そうなんですか!?!」

「いや、分かりませんけどね。本音6割に演技4割みたいな感じやないですか?」

「女の涙は意外に軽いもんだよー、ソウジ? 勉強になつた?」

イパスさんとの話が終わり、言われたとおり隣宿に入ると、何と全員……ガア車のおじさんを除いた3人が勢揃いしていた。

宿の部屋を3つ取り、その内の一つに全員が集まった後、話の経緯を伝えた。

すると、女性陣から出るわ出るわ、イパスさんへのあれやこれや。

ひそひそ話をしているようで申し訳ないが、ちよつと強烈過ぎた。

しかもシヨウコやセツヒトさんの言う通り、始めから徹頭徹尾計算ずくだつたとして
……。

……怖つ!

「先に我々が来るタイミングを掴んで、この宿に招待して……今の話を総合するに、中々

の傑物ではないかな、その人。」

「ソウジ、これから気をつける。べき。」

「は、はい……。」

フェニクさんやトツバまで、同じ感想である。

女性同士、色々わかることがあるんだろう。

俺って鈍いんだなあ……全然わかんなかったぞ。

「……ソウジはー、そのままでもいいよー？」

「そうです、ご主人様。そういう所は、そのまま置いて下さいねー！」

気をつけつつそのままでは、どうすればいいんだ。

……なんて俺の心の中のツツコミは、俺の口から発されること無く。

権謀術数の数多など、俺には全くもって使えないことがよく分かった。

……俺って、アホで鈍いのかもなあ……。

* * * * *

次の日、早朝。

俺たちはおじさんのガーグア車に乗って、西の大森林の入り口に向けて出発。昼前には、件の大森林の入り口までたどり着いた。

昨晚は大変だった。

イパスさんに招かれての、夕飯。

新鮮なお野菜がカラフルに並ぶ食卓は、なるほどこの土地ならではの料理が並んでいた。

だが、俺が多分に苦手意識を持ってしまった。

イパスさんに。

「ソウジさんは、今までどのようなモンスターをお相手にされたのですか？」

「え!? えーつと……ま、まあ色々です。」

「お噂ではバサルモスにデイノバルド、ジンオウガにティガレックス……様々な狩猟歴があるようですが……。」

「あ……概ねその通りです。」

「まあーうふふ、素敵ですね……冬山では、どのように過ごされていたのですか？」
「え!? そんなことまで知っているんですか!？」

何だろう。

質問を返そうにも、俺以上に俺のことを知っている感じ。

話を続ける度に、そんな不気味な感じがして、まあ料理の味がしないしない。

こういう時に頼りになるシウコは、とつと俺たちのいるテーブルから退散して
た。

セツヒトさんもフェニクさんもトツバも、簡単な挨拶を済ませてとつといなくなっ
ていた。

おじさんは「堅苦しいのは苦手だからよ!」と、そもそも来ていない。

危険察知能力が凄まじい。

みんなひどい。

夕飯が終わる頃には、狩りに行くよりも疲れている自分がいた。

「昨日は大変だった……。」

「お、お疲れさまです、ご主人様……。」

「……シヨウコ、俺を置いて逃げたな？」
「……にや、にやー。」

何だその誤魔化し方。

俺の猫好きな本能に訴えているのか。

騙されんぞ。

……気を取り直して。

「じゃあ皆さん、手筈通りをお願いします。」

「りよーかーい。」

「分かった。」

「トツバ、氣いつけてな？危ないときは信号弾で、頼むで？」

「任せて。」

それぞれが返事をして、俺たちは以前話し合った形で分かれることにした。
ラージャンの狩猟に俺とシヨウコ、セツヒトさん。
付いてくる形で、フェニクさん。

車に残るおじさんとトツバ。

そんな感じ。

トツバには前もって、黄色い信号弾を渡してある。

ガーグア車に危険が迫った際には、有無を言わずに発射するよう伝えておいた。

「おじさん、トツバ、よろしくおねがいます。」

「おう。まあこつちは気にせずよ、存分に狩って来てくれ！」

「はい、ありがとうございます。」

「私がここを守る。安心して。」

若干不安だが、狩猟地としてこのスタート地点は整備されている。

滅多なことではモンスターはここには現れない。

なので、トツバの放つ信号弾が見えたら……それは妨害が来たと考えていいだろう。

「それじゃ、出発しましょう。」

「気をつけてな——！」

「はい——おじさんも——！」

セツヒトさんが元気よくおじさんに返事をした。

少しテンション高めである。

……強敵を前にワクワクしているのだろうか。

「セツヒトさんは凄いな……私は少し緊張しているよ。」

「んー？何かねー、ちよつとウキウキしているんだよねー。……あの時逃がしてもらったラージャンに、また挑むってのがさー。」

「……やはり相当に強いんだな。」

「まーそりやねー？多分今の私だと、一人でやるのは……ちよつち辛いかもー。」

「……………」

セツヒトさんとフェニクさんが話している。

……俺たちの中で最強のセツヒトさんがこう言うぐらいである。

呑気な口調ではあるものの、俺たちはより緊張を高めていった。

金獅子、ラージャン。

一体どんなやつなのか。

………。

「しかし……植生が全く違うな……。」

歩き始めてしばらく。

思わず呟いた。

車で送ってもらった森の入口。

遠目からは鬱蒼とした森林が、見渡す限りに広がっていた。

奥に見える山々までそれが続いているから、相当な規模だ。

だが、近くに來たら、まあそこまで密に木々が生えているわけでは無かった。

だが、畑ばかりの平地が広がっていた先程とは違う。

「大森林……だからねー。……よつと。」

ヒョイツ。

軽々と倒木を飛び越えるセツヒトさんが、俺の独り言に伝えてくれた。

「タオカカから南西に連なる山脈群の南だからねー。雨雲もできやすいし、こんなに大きい木がー……フッ！」

ヒュバツ!!

……………バキッ……………!

ズウン……………。

「……………育つんだってさー。」

「……………軽く大木を真つ二つにしながら言わんでください。」

横倒しになっている木を今度は斬りつけ、俺たちが通りやすいようにしてくれるセツヒトさん。

今日持っている武器は太刀。

刀身の長さ、斬れ味の鋭さは、今見た通りだ。

恐ろしい剣速である。

本当に何でも使えるよなあ……。

「ごめんごめん……でも、いるねー。」

「えっ!? ラージャンですか!?!」

不穏な事を言われ、思わずマップを見たり辺りの雰囲気を探ったりする。

………なんの反応もないけど。

「いやいやー、そういうんじゃないよ。……ほら、見てみー? この木。………明らか
に自然に倒れた感じじゃないでしょー?」

「………本当ですね。無理矢理倒された感じがします。」

セツヒトさんが斬った巨木を見る。

直径がショウコの身長位の幹。

その根元は抉れ、倒れたというよりも倒されたような痕跡が見受けられる。

「これがラージャンの……?」

「んー、いやーどうだろうねー。そこまではわかんないかなー。」

「……比較的新しいめです。用心していきましよう。」

「オツケー。」

抉れた土の水分からして、そんなに前のものとは思えない。

注意して歩くに、越したことは無いだろう。

「……………む？ 濟まない。ちよつといいかい？」

「あ、はい。どうしました？」

木にばかり気を取られていたところ、フェニクさんの声がかかる。

フェニクさんの見つめる先、地面に目をやる。

……………何だ？

「これは……………人の足跡だな。」

「うえっ!? マジですか!？」

「ああ。木の葉がここだけ異様に凹んで……………それが規則的に並んでいる。二人……………か

な。」

「おお……探偵みたい。」

「ははは。そのような仕事をしていたからね。……私達が歩く獣道をわざわざ避けて歩く、そんな理由があるのだろう。しかもかなり真新しい。」

「……………妨害、ですか?」

「そこまではわからないさ。まあ、ソウジさんの言うように、用心に越したことは無い、ということだね。」

「……………」

フェニクさんのミステリアスな顔つきは表情が読みにくい。

だが、言っていることは本当である。

すげえなこの人。

付いてきてもらって良かった。

「おー……ホントだー。フェニクー、よくわかったねー。」

「ホンマや……言われんと気づかんかった……。」

他の二人も感心しきりである。

「足元は、基本だ。ソウジさんもシヨウコさんも、気を配った方がいい。セツヒトさんは……言うまでもないか。」

「いやー……私も歩き方は雑な方で……フェニクすごいねー。前から只者じゃないとは思っていたけどー。」

「セツヒトさんにそう言われるとは、光栄だ。」

シヨウコと俺はお互い顔を見合った後、一緒に互いの視線を下に向ける。

足元か……んー……。

「き、気いつけます……。」

「俺も……。」

ハンターとして必要なスキル。

まだまだ色々あるんだなあ……。

* * * * *

昼食は軽めに取ることにした。

時間をもつたいたいという理由もあるが、煮炊きをしてモンスターとかに刺激を与えたくなかった。

俺のギフトにも一応食い物はあるが、フェニクさんの手前、控えておいた。

腹も少し膨れて落ち着いたあと、再びラージャンの搜索を開始。

「やまかーん。」とか言いながらズンズン先頭を歩くセツヒトさんについて行った。

何を根拠にしているのかは分からんが、来た道を迂回する様に進路を取っている。

「……………セツヒトさん、この先……………」

「んー?」

俺のマツプ上には、この先に池みたいなのが映っている。

小声で伝えると、「じゃーそこ行こー。」とのんきな返事が返ってきた。

それでいいのか。

「わー……きれいですねえ！」

「波打つてなくて……鏡みたいだな。」

シヨウコが声を上げ、池を見つめる。

そこは、木々に囲まれていた今までと違い、空が開けて気持ちのいい場所であった。池というか……もはや湖だな、これは。

「……ちよいまち。」

「は、はい。」

「へっ。」

セツヒトさんから声がかかり、すっかり進路を湖に向けていた俺たちは立ち止まる。シヨウコから気の抜けた返事が上がった。

「水場はねー、モンスターが寄ってくるんだよねー……。一旦ここで張つてみよー。」

「は、張るって。」

「いや、セツヒトさんの言うとおりで。休息も兼ねて、ここで落ち着こう。」

タイプの違うミステリアス、熟練者の二人にそう言われれば、俺から言うことはない。木の幹に体を隠し、しばらく湖を観察することにした。

「ソウジ……何か見えるー?」

「いや……俺にも何も……あ、そういうことですか。」

湖に目を凝らしていると、セツヒトさんから声がかかる。

多分、マップを見ろと言いたいのだろう。

ギフトを起動し、辺りを探る。

……湖の向こうに何かいるけど……。

顔を上げて目を凝らすと、小さく小型モンスターの姿があった。

かなり遠く、視認は厳しいけど。

俺なら見える。

「……小さいやつが一匹……水飲んでますね……。」

「そ、ソウジさん……すごい目だな……。」

「ご主人様の目は半端ないんですよ……ウチにはまーったく見えません。」
「私もー。目には自信あるんだけどなー。」

みんなで目を細めて湖の向こうを見つめる。
が、誰もかしかも、見えていないらしい。

全く、いい身体能力を得たものである。

この体、すこぶる軽しい動体視力も半端ない。
視力もいいし。

視力矯正に悩まされ、ちよつと走れば息を切らしてた前世とは大違いである。

「いや、見えますよ。えつと、あの三角の形した木の左下辺り。……あ、いなくなつた。」

「説明を受けても何がなんだか、だな。ははは。」

「す、すみませ……。」

フエニクさんに突つ込まれ謝ろうとした。

その時。

ズキ……。

「!？」

「んー？……ソウジ？どうしたの？」

「………す、すみません………。」

その視力の凄さに感謝していた目が、痛んだ。

両目とも。特に右目が痛む。

……ズキイ！

「っ……!!」

「ご、ご主人様!？」

「だ、大丈夫かい？ソウジさん。」

みんなが心配しながら、うずくまる俺を囲む。

一番痛む右目を押さえ、心配掛けまいと顔を上げて、ふと湖が目に入った。その向こう。

……………何だ……………あれは……………？

「すみません……………」

「えっ!? ご主人様!?!」

シヨウコの心配の声をよそに、立ち上がる。

集中して、目を凝らす。

その先、さっきのモンスターが居たところの少し右。

……………異質なヤツが居た。

(黒い……………?)

遠すぎて完璧には捉えきれない。

だけど、分かる。

あれは、あれは……どこかおかしい。

全身真っ黒な、飛竜の様相を呈しているその体。

翼は下を向き、折りたたまれて見えているように見える。

だがそんなことよりも。

俺の目が、体が、アレはヤバイと告げている。

俺は棒立ちのまま、ソレに釘付けになり。

「……………」

みんなに声をかけられるまで、目を離すことができなかつた。

141 警戒しながら進みましょう。

体が熱い。

暑い、ではなく熱い。

目を中心に頭が熱を帯びている。

ブーツとしてはこない。

むしろ、逆。

怒りとも興奮ともつかない感情が、膨れてくる。

ズキン、ズキンと痛む度に。

ヤツを見ていると、そんな気分になる。

「……………すうつ……………ふう……………」。

深呼吸をして落ち着く。

大丈夫だ。

おそらく、あちらはこつちを視認できていない。

「ソウジ……？平気？」

「あつ……すみません。ご心配を……。セツヒトさん、あそこ、見えますか？」

「あそこって……どこ？」

「いや、湖の向こう……木々の間、少し黒っぽいやつが見えませんか？」

「……うわあ……分かった。あれ、モンスターなんだね……。」

いつもののんきな口調が無くなり、真剣に湖の奥を見つめるセツヒトさん。

「……うん、はつきりとは分からないけど……何かあれ、ヤバいやつだ。……勘だけどー。」

「……俺としては、とてつもなくやばく見えます。」

「……ソウジ、どうするー？」

「どうしま……あつ。」

俺が声を上げたのは、その黒っぽいモンスターが、翼を広げて飛び立ったからだ。

一気に跳躍すると、大きな翼を広げて、悠々と去っていく。

流石に空に浮かぶその姿は視認できたようで、シヨウコもフェニクさんも小さく声を上げていた。

「……良く分からないが、ここから見てあの大きさ。相当に、大きいね。」

「ウチ……少し怖かったです。」

「ああ、俺もだ。……皆さん、その、心配をおかけして……。もう大丈夫です。」

俺がいつもの様子に戻ったのを見て、三人はホツとした様子であった。

申し訳ない。

だが、結構痛かったのだ。

それに……ゾクゾクとする変な予感が、止まらなかった。

俺の目。

あのモンスターの出現。

……無関係ではないだろう。

だっていなくなったら、元通りになったわけだし。

「…………心配しました…………ご主人様。」

「うん、すまんかった。」

「とりあえず後で報告だねー。…………ソウジの例のやつと、関係ありそうだしー。」

「例のやつ、とは…………何かな？」

フェニクさんが疑問の声を上げる。

「実は俺、前回怪我を追ったクエストの後、目が赤いんです。」

「ああ、それは聞いているが…………いつもと変わらない様子なので、気にしないことにしていた。」

「すみません、俺にしかわからないみたいで…………。」

「奇怪な症状だな…………私には普通に見えるが…………。」

フェニクさんが俺の顔を覗き込む。

ち、近い。

「……………」

「……………」

「……………フェ、フェニクさん、その辺で。」

「ああ、済まない。…………ふふ、こうして見ると、普通の男子だな、君は。中々興味深いよ。」
「きよ、興味って。」

先ほどとは別の意味で顔が熱い。

免疫とかその辺全然ない中身おっさんであるからして、こういう不意打ちは全く弱い。

勘弁してほしい。

フェニクさんって凜々しい顔してる割に、可愛い目してるんだなあ…………。

「ソウジー、お楽しみみの所悪いんだけどさー。」

「お、お楽しみ!?!いやいや、からかわんといて下さい!」

「からかいたいのには山々なんだけどさー…………なーんか、やな感じしなーい?」
「……………」

セツヒトさんに言われ、辺りを見回す。

……確かに、鳥の声や木々のざわめきが……。

それに……空気が変わった……？

少し……先ほどまでのピリツとした感じが、ザワザワした感じになったというか……。

「……分かります。同じ森なのに、少し……ざわつき始めたというか。」

「そー。……さっきの黒いモンスターがいなくなっただからかな……。影響を与えていたのかもねー。」

「……強力なモンスターの出現に、森の生態が大人しくなっていた、と言うことですか？」

「そー、そう言うことー。……全員警戒しよー。」

一気に空気が変わった森の中。

マツプをすぐに確認すると、先ほどまで反応が無かった大型のアイコンが、ちらほらと見え出した。

……いや、ちらほらなんてもんじゃない。

すげえ数いるぞ……この森、とんでもない……。

「うわ……辺り一帯、すごいモンスターです。」

「わ、分かるのか、ソウジさん？」

「え、ええ、雰囲気で、まあ。」

「一流とは凄いな……そこまで分かるとは。……ギルドが確認していない狩猟地だから。環境不安定というだけはある。」

環境不安定。

モンスターの狩猟地は、ギルドが調査・分析し、環境を把握してからハンターに紹介する。

だが、強敵や未知のモンスターのいる狩猟地、人々が入って来ないような場所は、当たり前だがそういった調査が進まない。

そうなると、「環境不安定」としてギルドで処理される。

開拓地……人々が入植して間もない土地は、狩猟地の整備が行われていない。

その為、強いモンスターの乱入や思わぬ事故につながることが多い。

ハンターにとっては、未知のモンスターの討伐など一度は夢見る事。

珍しいモンスターの討伐は金になる。

最前線に行く勇敢な人は、絶えることがないと聞いたことがある。教官が教えてくれた。

今回のケースは、例の黒いモンスターが何かしらの影響を周囲に与え、他のモンスターが現れなかった。

そういうことではないかと、セツヒトさんは言いたいのだと思う。

「来たことあんまり無い場所で、環境不安定で、変なモンスター出てきて、いなくなっただけと思ったら嫌な感じして。うーん、まとめるとこんな感じ？」

「言葉にするとすごくやばい感じしますね……。」

「まー、このメンツなら大丈夫だよ……。ソウジー、大体ラージャン、どの辺だと思っうー？」

「そうですね……。恐らく、この湖の北側……。だと思えます。」

「おー、私の勘と一緒。よしよし、そっち目指してみよー！」

ピクニック感覚で話すセツヒトさんに、なぜか少し安心する。

「セツヒトさんは余裕やなあ……。ウチ、怖くなってきました。」

「シヨウコちゃん、こう言うのは、慣れだよー？慣れー。」
「あ、あんまり慣れたく無い感覚ですわあ……。」

……安心してしまった俺は、慣れてしまったのだろうか。

徐々にセツヒトさんたち化け物クラスに近づいてきた感じがするなあ……。

* * * * *

ザツザツザツ……。

パキツ……。パキツ……。

湖畔から少し離れた森の中を歩く。

小枝を割る音、それぞれの足音、そして周囲の木々の音、遠く聞こえるモンスターの
声……。

様々な音を、耳が拾う。

周囲を警戒しながら、全員無言で歩みを進めていった。

ふと、先頭に行くセツヒトさんが、右手を上げた。
ハンドサイン。

一旦停止、という意味である。

全員が身を低くして応じると、セツヒトさんが小さい声で話し始めた。

「……この先……いるねー。」

「ま、マジっすか。……あー……。」

「お、おります? ご主人様。」

「いる。ラージャンなのは分からんけども。」

マップのこの先、確かに大型の反応がある。

フェニクさんの手前、雰囲気を感じ取った達人みたいになってしまったけど。

「お二人ともすごいな……私も見習わなくては……。」

フェニクさんが驚嘆の声を小さく出す。

いや、すんません。真にすごいのはこの人セツヒトさんの方です。

おいらはインチキギフトのおかげでやんす。

「突っ込んでもいいけど……どうするー?」

「……行きましょう。せつかく見つけたんだ。無駄にしたくないです。」

「お、言うねー。……よし、じゃ、やろつかー。」

「はい、よろしくお願いします。……フェニクさん、ラージヤンだった場合、遠距離攻撃に注意してください。」

「……ソウジさんは色々知っているな。見たこともないのだろうか?」

「あつ……えーつと、ギルドの書類で確認したんです。はい。」

「ふふふ……いいよ、色々秘密にしていることは、私も分かる。深くは聞くまい。」

「うう……。」

あかん、バレとる。

……まあ、一緒にクエストに行っている時点で、バレる可能性はあったよな……。

えらく察しがいいし、フェニクさん。

「ミステリアスな人だ……本当に面白いよ。」

くつくつと小さく笑いながら、俺を見つめるフェニクさん。
ザ・ミステリアスな人にそんな事を言われても。
と、とにかく、行くか。

「シヨウゴ、セツヒトさん、行きましょう。」

「はいっ！」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん、行きましょう。」

セツヒトさんの名前を呼び直して、俺たちは真っ直ぐモンスターに向かっていった。
いや、もうこの際呼び方はいいじゃない。
何だそのこだわり。

.....。

「いました.....。」

「……えー、あれー？」

「……何や……あの格好。」

ラージヤンは、いた。

前情報通り、見た目は完全にゴリラとか猿とか、そつち系の骨格。

黒い体毛に、かわいい感じの尻尾。

希少で超強力なモンスター。

そいつが、いた。

……俺たちに尻を曝け出して、爆睡していたけど。

「ガッツリ寝とる……。」

「……あ、腹搔いて……おならした。」

「うわー……デリカシーのない奴だねー。緊張感もなさすぎー。」

普段から緊張感のないセツヒトさんに、緊張感がないと言われるラージヤン。最強のモンスターの名が、形無しである。

だが、それも仕方がないだろう。

鼻提灯を出しながら腹とケツを曝け出して仰向けに爆睡する姿。

まさに休日の昼下がりに畳で居眠りするおっさんそのもの。

……シンパシーを感じてしまうのは、俺だけだろうか。

「……やりましょうか。フェニクさんは、後ろに。」

「おっけー。」

「はいっ。」

「承知した。」

それぞれが配置につく。

今回の打ち合わせでは、俺が作戦の要。

まず、古傷を負うセツヒトさんは、太刀やボウガンを入れ替わり立ち替わり装備し、状況を見ながらフォローに回る。

その片方の装備は、俺が一時的に預かっている。

シヨウコは、ラージャンの後ろを常にとりつつ、回避優先で安全に攻撃。強くなったシヨウコなら、できるだろう。

そして俺は正面および側面を担当する。

……一番危険な役目であるが、俺がやりたかったクエストなのだから、これぐらいは頑張りたい。

セツヒトさんもフォローしてくれるし、シヨウコもいる。
滅多なことにはならないと願いたい。

「……行きます。」

「はい……。」

ジャキ!

俺は双剣を取り出す。

まずは、このおっさん……ラージャンを叩き起こさないとな。

(シヨウコは……回り込んだな……セツヒトさん……見なくても分かる……殺気がピンピンだ……フェニクさ……っ!?)

全員の準備ができたかどうか。

最終確認をしていた時に、異変に気付いた。

フェニクさんが、何故かラージヤンを見ずに、右に顔を向けていた。その一瞬の後、フェニクさんの声が上がった。

「避けるお!!ソウジさん!!」

「えー」

「っ!!ソウジ!!」

ヒュッ!!

ドスッ!

「ぐあっっ!!」

「せっちゃんさん!!」

「セツヒトさん!」

一瞬だった。

フェニクさんを確認しようと後ろを見たら、あらぬ方向を見て、見たこともないよう

な顔をしていた。

驚愕、といった顔。

まさか、と俺もその方向を見た。

人影がいた。

木の上、明らかに人間。

と、認識した瞬間、そこから飛んでいたのは、矢。

凄まじい速度で、俺の腹に向けて。

避けるとかそういう次元じゃない。

既に目の前にあった。

その一瞬に、セツヒトさんが割り込んだ。

……俺の代わりに、矢を受けた。

「セツヒトさん!!」

「ぐう……あー……痛すぎー……!」

「セツヒトさん! す、すまない! 私としたことが!!」

「だいじょーぶ……フェニク!!」

「!! あ、ああ!」

バツ！

セツヒトさんが、顎を使って方向を示し、フェニクさんに呼びかける。
フェニクさんは返事をする、すぐさま矢を射った人影の方へ向かった。
そうか、追撃があるかもしれない。

「……ちいっ!!」

「……!? 待て!!」

射手と思われる人物の舌打ちが聞こえた。

そしてそれを追いかけるフェニクさんの声。

「セツヒトさん!」

シヨウコも心配の声をあげて飛んできた。

矢は、右肩に命中している。

血が漏れだし、白い肌が赤く濡れていた。

「いやー、やっちったねー……ぐ……んー!!」

グジュ……ジュバツ……。

セツヒトさんが、自分で矢を抜き取る。

余りに痛々しい。

しかも……これ、モンスター用の毒矢じゃないか？

「うーわ、毒テングダケのやつかー……キツツイわけだよー……。」

「す、すみません……俺を庇って……今、解毒薬と回復薬を出します。……撤退しましよ
う。」

「うん……ありがとー……ソウジ？気にしないでー。ソウジを守れたなら、本望だ
よー。」

「セツヒトさん……。」

「……好きな人を守れたんだ……私もうれしー」

「グアアアアアアア」
「「!?」」
!!!!!!!

セツヒトさんの容態を確認していた。
そんな時。

凄まじい咆哮が、一帯に響き渡った。

空気が震え、怒りが伝わる。

最悪だ。

一番、最悪なパターンだ。

セツヒトさんが手負い。

状況も整っていないどころか、把握もできていない。

そんな中。

「くそっ!!」

「グウウウ……。」

ラージャンが、目覚めてしまった。

「……シヨウコ!!」

「は、はい!!」

考える。

けど、できることは限られる。

……まずは……。

「……セツヒトさん最優先!一緒に逃げろ!」

「いやっ、でもー」

「シヨウコ!!今はこれしかない!!俺も隙を見て逃げる!」

セツヒトさんは、どうやら起き上がるのがやっと。

毒のせいかな、立ち回りには期待できない。

「ソウジーーー」

「二人とも！早く！」

「……………っ!!はい！セツヒトさん！はよう！」

「シヨウコちゃん…………ソウジイ！」

「グアアアアア!!」

「っ!？」

胸をドラミングした後、寝床から立ち上がったラージヤンは、後方に飛んだ。

あれは…………アイツ、岩を…………!!

「くそっ…………おらー！こっちだ!!」

「グアアアアア!!」

とんでもない大きさの岩を片手で持ち上げたラージヤン。

挑発した甲斐もあって、横に移動する俺めがけて、それを投げてきた。

(いやいやいやいや!!)

物理法則的にありえないだろ!!

なんだその持ち方!!

サイ○人かよ!!

ドガアアアア!!

凄まじい音を響かせて、木に当たる大岩。

バキバキイ……ズドオン!!

木は薙ぎ倒され、またも大きな音が響く。

しかし、俺はそちらを視認できない。

……目の前のモンスターから、目が離せない。

(……コイツ……強い……!!!)

今までの経験から、分かる。

自分の事ながら、頑張ってきたんだ。

色んなモンスターを倒し、鍛え、強くなってきた。

自信がある。

でも、目の前のコイツ。

金獅子ラージャン。

……勝てるのか？俺に。

狩れるのか？

そんな疑問が尽きない。

倒すイメージが、全く湧かない。

「グルルルル………。」

怒りに打ち震え、歯を剥き出しにし、鬼の様な顔で俺を睨みつけるラージャン。

……とにかく、セツヒトさんとシヨウコが逃げるまで。

……時間を稼ぐ！

（二人は……行つたか？）

視線は逸らさずに、二人のいた方向を見る。

……どうやら、行つてくれた様だ。

「……ガアアアアア!!」

「~!!」

再び、凄まじいまでの叫び声が響く。

森の木々が、震えている。

声デカすぎだよ、ラージヤン。

「ガアツ!!」

「のわっ!!」

腕を振り上げてブン回したと思ったら、突如俺に襲いかかってきた。

この距離を一瞬で!?

「っ!!」

「ガアッ!」

ドガア!!

寸での所で避けた俺。

空振りに終わったラージャンの拳は、地を抉っていた。

(……そうか、この拳か。)

森に入った時に見つけた、大きな倒木。

その根元の抉られた地面と似ている。

とんでもないパワーだ……。

(やられっぱなしじゃ……いられないよな!!)

ケツを向けるラージャンの側面に、双剣を入れる。

ザシュ！ザザン！

ギン！

(!?かってえ!!)

表面の肌か、毛か。

とにかく硬い。

刃が、入らない。

「ガア!!」

「くっ！」

ブン！

ブン！

ブオン！

振り向きざまに、両の拳を振り回してくるラージャン。何度もバックステップを踏みながら、何とか避ける。が、距離感を見誤った。3 回目の拳が完全に俺を捉えている。風を切る音が、目の前に迫る。

(当……脇腹……んん!!)

一瞬。

拳が当たる、その瞬間。

脱力して、俺は回った。

ゴシユ!

(ぶはあ!!)

強烈。

その一言。

拳、その力。

俺の今までの中で、一番に強いそのパワー。

グオン！

俺の視界は、いつも通りの回り方ではなく。

「ぐあっ！！！！」

ドガア！！

斜めに縦に、視界がグルグルと回って、俺は木にぶつかった。
ぶつけられた。

「…………ぐ、ぐうう…………。」

苦しい。

痛すぎる。

鬼人化もせず、回避を試みた……多分タイミングは、合っていた。
なのに、俺の自慢の回転回避は何の功も奏さず。

ただただ、ふっ飛ばされてしまった。

(……………回復薬。)

キュポ。

ゴクン……。

バシヤツ……。

素早く、薬を飲んで、腹にぶっかける。

痛みは引いた……いや、痛いままだが、多少ましになった。

(…………マジかよ…………)。

力を、味わった。

味わってしまった。

俺は、こいつに。

多分だけど。

(…………勝てない、かも。)

心が。

俺の心が、折れそうになる。

「……………グアアアアア!!」

「っ!!」

響き渡るその声に。

恐怖しか、感じられなかった。

金獅子、ラージャン。
勝てる気が、しない。

「……………」。
「……………」。

142 ソロでやりましょう。

頭の中が、色々ゴチャゴチャしている。

そもそもが、色々あったクエストだ。

ラージャンの狩猟。

首都やワサドラの様々な思惑が入り交じる依頼。

イパスさんも含め、余計にややこしくなった中で、予想通りの妨害を食らった。

セツヒトさんが、肩に負傷してしまった。

シヨウコと一緒に、避難してくれた。

セツヒトさんが無事であることを、切に願う。

……今の状況。

結局、俺は一人で、こいつと戦わなければいけない。

金獅子、ラージャン。

前情報通りの、恐ろしいほどの強さ。

だから、想定では複数で叩くはずだった。

たが、もはや想定外。

規格外な力に対して、俺は一人で戦わなければいけない。

そういう状況にある。

ぶつちやけた話、人数が揃っていれば、何とかなるかも、なんて考えていた。

甘かった。

俺は甘かったんだ。

「ふうー……。」

反省ばかりはしてられない。

今は、もうごちやごちやしたことは、とりあえず置いておく。

(……集中……！)

「グウウウ……。」

いろんな事を一瞬で考え終える。

反省も後悔も後でできる。

今はコイツに。
ラージヤンに集中しなければ。
だつて……。

「……………グアアアア!!!」
「っ!!?」

ブオン!!
ドガア!!!

(パワーが……半端なさすぎる……!!)

一発でも喰らえば、終わりなんだから。
さつき、はつきりと分かった。

力の差は歴然。

食らったら致命傷、ではない。
次に食らったら。

多分、終わりだ。

「ガアアア!!」

「っ……!!」

声が出ない。

死の恐怖、思考がそれ一色に染められていく。

多分だけど、こいつは俺を捕食するために戦っている訳ではない。

自分の縄張りを守るため。

または、安眠を邪魔した報いを受けさせるため。

ただただ怒りに身を任せて拳を振り回しているだけ。

冷静に対処すれば、避けられる。

それは、自分でわかる。

だが。

「ガアアアア!!」

「くっ……!!」

ブオン!

ドガア!!

振り上げられた両の拳が、叩きつけられる。

恐ろしいほどの、拳の速さ。

怖い。

恐い。

逃げたい。

それさえできない。

背中を向けたら、死ぬ。

対峙しても、勝てない。

そう思う。

(頭では……わかってる!!)

万全でやれば、避けられると分かっている。

落ち着けば、やれる。

だが。

心が、恐怖で支配されていて、体が動かない。

動かせない。

本能が、早く逃げろ、落ち着けと警鐘を鳴らす。

「ガア！ガア！アアア!!」

何回も振るわれる、パンチのラツシユ。

俺が選択したのは、ぎこちなく後退して、避ける動き。

だが。

(あれ……この避け方じゃ……。)

……ゾクツ……。

悪手。

連撃を避けながら、ふと思り返す。

これでは、先程と同じ。

このバックステップの回避では。

(死ぬ。)

明確な答えが出て、体中が冷え切る。

冷えた体は余計に固まり、脱力とは程遠くなる。

(避……駄……食ら………つつっ!!)

頭の中は、冷え切った体のせいで、ひどく冷静。

死ぬ間際だからなのか、スローモーションとなる世界。

死ぬ時は、生物は記憶を総動員して、集中力を高め、何とか生き残る方法を模索する
という。

その状態。

そんな瞬間。

生き意地汚く思考をフル回転し、頭が焼き切れる程に考えを巡らせたら。

自分の感情のどこかが。

プツ。

切れた。気がした。

「……………っ!!」

バツ!!
ドガアツ!!!

「……………。グアアアア…………。」

俺の背中、後ろにはラージヤン。

自分でも驚きながら、低い姿勢を直して、急いでラージヤンの後ろ姿に目を向ける。

体が、一瞬だけ軽くなった。

俺を殴り殺さんとする金獅子の連撃。

その最後の拳を間近に見ながら。

思い切り踏み込んで、距離を縮め。

懐に入り込むことで、何とか回避に成功した。

……振り返り、よくも避けやがったなという顔で、ラージヤンはこちらを睨みつけてくる。

そんな表情が、見てとれる。

咄嗟の判断、それ以上の刹那。

逃げるのではなく、突っ込むという選択が、うまくいった。

俺は、ラージャンを睨み返しつつも。

別のことに気を取られていた。

(体が………熱い………！)

ズキン……ズキン……。

規則的に心臓が打ち鳴らされる度に、目の痛みが激しくなっていく。

ラージャンに悟られてはいけないと、平静は保っているが。

ついにその痛みは、鈍く全身に及んでいく。

(深呼吸……。)

吸っては、吐く。

落ち着け。

どうした、俺の頭と体。

なぜ。

なぜこんなにも。

(……興奮している……?)

理由は、分からない。

だが、先程のラージャンの攻撃は、間一髪で避けられた。

熱く滾った心。

恐怖を跳ね飛ばし。

急に足に力が入り、素早い対応ができた。

「……………グアウアアア!!」

その剛腕を振り上げ、地に落とさんとするラージャン。

その一挙手一投足が……………見える。

「グアア!!」

ブオン!

ドガアアア!!

地が割れ、草木や石が飛び散る。

挟られた地面からは、その有り余る力が十分に伝わる。

避ける瞬間も、ラージャンから目は離さない。

(……………体が熱い……………)

ドクンドクンと血が巡るたびに、力が湧いてくるのがわかる。

手にも、足にも。

疼くような目の痛みはすこし収まり、全身はピリピリとした痛みが続いている。

何故かは分からない。

分からないけど。

……理由を考えている暇なんて、無い。

好転した。

俺はまだ、こいつと戦える。

今は、この状況を受け入れる。

「……………っしー！」

「……………グウウウ……………」

気合を入れ直すと同時に、ラージヤンから唸り声上がる。

さっきまでの、怯えきった自分はどこに行ったのか。

いや、怖い。

怖いんだけど。

それさえも上回る、この高揚感。

……………ついに俺の頭はイカれたんだろうか。

今一撃をもらえば、俺は死ぬかもしれないというのに。

いや、いい。

とにかく、いいことだと思え。

少なくとも、今は。

「グウウウ……。」

「……………しっ！」

「ガア!？」

呼吸を読み、ラージャンが反応できない、ほんのスキ。

息を吐こうとした、その瞬間。

前に踏み込み、双剣を入れる。

弱点の一つであるその頭部に、数撃だけ。

ザン！ザザザザ！

ヒュパ!!

「…………！」

「ギャアアア!!」

怯え切っていた先ほどの自分ではできなかったであろう、ほんの隙を見つけての攻撃。

しっかりと刃が入った。

手応えが、違う。

ラージャンに、攻撃が効いている。

「…………ふっ!!」

短く息を吐きながら、回転乱舞を繰り返す。

ズザン!

ザシュ! ザザザザザン!!

シュパ!

「グラアアアア!!ガア!!」

「ぬおっ!!?」

きれいに入った攻撃。

その乱舞の終わりに合わせて、ラージャンから振り回された拳。

あまり力は乗っていない一撃だが、当たりたくはない。

寸でのところで避け、姿勢を整える。

目の前にはラージャン。

黒い体は、隆々とした筋肉に覆われ、威圧感が半端ない。

立派な角はとても硬そうで、突進なんぞ食らったら体がバラバラにされるかもしれない。
い。

(……大丈夫だ……落ち着いている……。)

そんなプレッシャーを感じて尚、冷静になれている自分がいる。

ちよつと前まで、恐怖でしかなかった金獅子。

その姿を、しっかりと全体的に捉えることができている。

「ふん！」

「ガアアア!？」

俺はそんな猛攻を。

全て、受け切った。

「……ラアアアアアア」
「っ!？」
!!!!!!

ビリビリッ!!

攻撃は、見切った。

そう言える。

当たれば終わりと思える、ラージャンの猛攻を防ぎ切った。

いや、避け切った、というべきだ。

何なら、回避攻撃で反撃もできた。

自分が自分でよくできていると、評価し始めた頃。

ラージャンにも、変化が起きた。

「グウウウウ……。」

「完全に○イヤ人じゃん……。」

両腕の肘を、まるで空手で気合を入れるかのように腰に当て。

上空に向かって吠えたラージャン。

周囲の木々は揺れ、俺はたまらず耳を押さえた。

ラージャンの体は、一瞬稲妻のような閃光が炸裂。

頭と上半身の体毛が金色に輝き、その剛腕は赤みを帯びている。

……そうか、これが「金」獅子か……。

黄金色に輝く体毛は、薄暗い森の中で目立つ。

野生で生きる者とは思えない程の自己主張。

最強種であれば、そこは問題ではないのだろう。

あの寝姿も、この体毛の輝きも。

バギイ！ドガア！！

ベキベキ……………ズドオン！！

剛腕に当たった大木が、倒れる。

だが、ラージャンの勢いは止まらない。

「ガアアア！！」

（……………ラツシュ！！）

振るわれたのは、その両腕。

ボクサーのように軽やかさはない。

ただただ、その怪力を振り回す、連続の拳。

（5回目……………！！）

「……………ガア！！」

ブワン!!

(ンン!!)

ヒュツ!!

ザシユ!!

「ガアアア!!」

(成功……ンンええ……。)

黒い体の時……通常時に仕掛けてきた連撃とは比べ物にならない。

振り回されるスピードが、まるで違う。

当たったら最後、すべて持っていかれるであろう、その拳。

だが俺は、そこに突っ込んだ。

避けるために、連撃に、突っ込んでいった。

一撃だけ、カウンターを入れながら。

「…………グウウウウ…………。」

振り向きながら、俺に狙いを定めるラージャン。

怖すぎて速すぎて、多分最初の俺なら回避できなかったと思う。ただ、今なら見える。

体も、よく動く。

タイミングが取れるかどうかは一か八か、だった。

だが、やることは同じ。

ふり回される拳の元、その懐に入り込んでしまえばいい。

……シビア過ぎるけどな!!

バツ!

一旦距離を置くため、ラージャンから離れる。

多分コイツは俺から離れない。

完全なるインフアイター。

距離を詰めてくるだろう。

……と思った俺は、爪が甘かった。

「……グアア!!」

「えっ。」

俺が距離をとって着地した瞬間。

体を一瞬だけ震わせたラージャンが、いきなり。

口からビームを放った。

「うおう!??
!!!」

バツ!!

ズガアアアアアアアアアア
!!!!!!

ジュツ。

……もうちよつとで当たつた。

いや、掠つた。

(足、焦げてるぞ……。)

嫌な匂いを放つ自分の靴を、地面に擦り付ける。

……情報画面にあったプレスってこの事だったのか。

金色の体毛といい、ビームといい……。

(アレみたいだな……。)

某有名な漫画を思い出しながら、そう言えば主人公も猿がモチーフだったなあと思いつく。

恐ろしい遠距離攻撃である。

……インファイターだなんだと思いついて自分の頭を訂正。

このモンスター、どんな状況でも戦えるわ……。

「グウウウ……!!」

（次は何だ!?!）

呼吸をしつかり読むと、モンスターが攻撃に移るかどうかが分かってくる。
モーションを読んで備えることは、ハンターには必須のスキル。
そのスキルが、「次、来るよ。」と俺に教えてくれる。

ガツ!!

地を蹴り、上空に飛び上がったラージャン。
思わぬ動きに、俺は必死で頭を巡らす。

（上空に……これは……飛び込み!!）

グルグルと回転したと思ったら、次の瞬間。

ラージャンが、俺に向かって、飛び込んできた。

物理法則など無いのがこの世界。

わかってはいたが……。

(無茶苦茶……過ぎる!!!)

バツ!!

俺が取った選択肢は、空中にいるラージャンの、その真下に回避すること。

これは、セツヒトさんから教えてもらったやり方。

……………。

『いーい？アイツ時たまグルグルグルって上から突っ込んでくるのさー。』

『えっ!?!グルグル……?』

『そー、グルグルー。その時はー、後ろに避けちゃだめだよー?』

『な、なんでですか!?!』

『避けても避けても、追いかけるように何回も来るからさー、避けきれないんだよねー。』

『……じゃ、じゃあどうすれば……。』

『んー……気合いと勇気で突っ込む……かなー?』

『はあ!』

『まーまー、一度やってみるからさー。ソウジなら一発でできるってー。』

……。

気合いと勇気って言ってたけど……。

こういうことだったのか。分かりにくい。

確かに、避けた後も俺を狙い続けてグルグルドカンを繰り返してくるラージャン。

俺は前後ジグザクに回避し続けていく。

どうやってその回転をしながら俺に正確に狙いを定めているのか。

どうやってたら空中で止まって回ってこの勢いで突っ込んでくるのか。

完全に物理法則無視のその動きに、疑問は尽きない。

尽きないが……。

(対応……できる!!)

相変わらず、体の調子がいい。

ガチガチに凝り固まっていた肉体は、打って変わって脱力状態。
ドロドロに溶けた様な体を、ラージャンに投げ出す。

「……………ガアアア——」

(……………!!)

ブワ!!

振り上げられた両腕を掻い潜り。

「——アアア!!」

「……………っ!」

一瞬を見切って。

ヒュパ!

ズザシユ!

ギン!ギギン!!

ズザザザ!!

「ガアアアア!!」

(回避攻撃!!……やっぱ硬いなあ!)

斬った感触が、鈍い時がある。

ダメージを与えられていない、と言うことではなさそうだ。

だが、効率は悪そう。

(剣は……。)

見慣れた双剣。

その刃は、やはり斬れ味が鈍っていた。

「ガアア!!」

「くっ……………!!」

黄金色のラージャンが、咆哮と共に俺に迫る。

まるで俺の反撃など、意に介していない。

ダメージは通っていると、願いたい。

(乱打……………!)

「ガア——」

モーションから、動きを予測する。

上腕が膨れ上がって、力を溜めるポーズ。

これは、乱打。

「——アアア!!」

(拳に合わせて……………こっこっ!!)

相変わらずシビアなタイミングを、見切る。
体を、前進。

そのまま、懐から抜けるように回避して……………。

「ふっ!!」

ザシユ!

ザザザ!ザン!

避けざまに、数撃。

しかしラージヤンは、その猛攻をやめない。

(あんまり使いたくなかったけど……………!!)

カチツ。

落とし穴を仕掛ける。

畏ハメはあまり使いたくないが、四の五の言ってられる状況ではない。予測通り、俺に迫りくるラージヤン。

あと一步……！

「……………グアアア!!」

ヒョイツ。

「うえっ!？」

驚いた。

だって、ラージヤンが落とし穴を避けたのだから。

(何かを仕掛けたのを、見切った……ということか?)

「ガアアアア!!!」

「やべ!!」

ブオン!

(回避……………!!)

ズガア!!

「ぐはあ!!!」

「グラアアアア!!」

ズガアン!!

ゴロゴロゴロゴロ……………ドンツ!

「……………ぐえほつ……………!!……………ううう……………。」

「グルルル……………。」

失敗した。

罨に嵌めようとした。

だが、ラージヤンはそれさえも上回った。

殴られ、転がされ、木に叩きつけられる。

俺の行動の異変。

気づいたのか偶然か、定かではない。

だが、俺の罨を飛び越えて上空から振り回された右の拳に。

俺はモロに被弾した。

「……………ひゅー……………ひゅー……………」

ヤバイ。

息が。

ヤバイヤバイヤバイ。

これって不味いやつだ。
体の確認。

足……手……腕……とにかく痛い。
動くと言えば動く。
だが、それ以上に……。

(……体が、重い。)

まるで徹夜明けの時の様な意識。

朦朧とする。

ただ、ヤバイとはわかる。

多分骨まではいってない。

だが、本当に。

(………何で！なんで動かない!!俺の体!!!)

震えながら、何とか上半身を上げる。

腕に力が入らない。

それでも、ラージヤンから目を離してはならない。

それが、教えられたことだから。

……………これで終わり、なのか。

ここまでか。

……………終わりなら、その最後まで目を瞑りたくはない。

予想通りと言えば、予想通りの終わり方。

無茶が過ぎた。

どこかで漠然と、死ぬ時は狩猟中だろうなどは思っていた。

こんな危ない仕事、死ぬ時は狩り場だろう、と。

何とか恐怖は克服できた。

克服、してしまった。

逃げることを前提に動けば、何とかなっただかも知れないけど。

……後の祭り、か。

「……………ガアアアアアアア!!」

不思議と、本当に怖くない。

超強敵、金獅子ラージャン。

やはり、俺の手には負えなかったか。

「……………グラア!!」

ブオン!!

両の腕を振り上げたラージャン。

ゆつくりと動く世界。

……………何もこんな時までスローモーションにならなくても、とは思う。

「お前……………強かったな……………」

「ガア!!」

捨て台詞とも辞世の句とも取れない変な言葉を口にした。
ここで、終わり。

最後まで、見届けよう。

腕が辛いけど。

このままの姿勢で、やっつけてくれ。

ズア!!

天に向けられた腕が振り下ろされる。

すべてを覚悟して、俺はラージャンを見つめ続けた。

ズガガガガガガガガガガガガ!!

「ギャアアア!!」

「っ!」

その時。

どうにも動けない俺を目の前に、ラージャンが最後の一撃を下ろそうとした。
そんな時。

ボウガンが弾を射出する音。

どこかで聞いたことのある、懐かしい音。

セツヒトさん……ではない。

あの人は、ボウガンを持ってきていなかったはず。

「……………ぐう……………!!」

とにかく、助かった。
すぐの死は免れた。

ならば、と、全身全霊の力で体を起こす。
ゆつくりと、立ち上がる。

ズガガガガガガガガ
!!!!

「ギャオオオ!!……………グラアアア!!」

ボウガンの弾が、連続で着弾。
動き回るラージャンの弱点を、きれいに捉え続ける。
はつきり言って、神業。

………俺は、こんな芸当ができる人物を一人、知っている。
セツヒトさんも、その腕には敵わないと言っていた。
ムカつくけど、と一言添えて。

「………ふっ………うう………!!」

意識を何とか回復させ、ポーチから回復薬を選択する。
酔っ払った時の様な、ブレブレの視界の中。
何とか回復薬グレートを選択。

「………ゴクッ………ゴクッ………ぶはあ!!」

バシヤバシヤ………。

勢い余って、4つも取り出した。

2つを飲み干し、残りは全身にぶっかける。

………先程までのどうしようもない体から、少しはマシになる。

「……………ああ……………痛い……………」

ズガガガガガガガ!!

「ギャオオオ!!……………ガアア!!」

相変わらず、弾のあられを浴びていたラージャン。
突如、後退した。

「……………っ!!ビームです!!」

「何い!?緊急回避い!!!」

ズアアアアア!!

目前で繰り出される、雷光のようなビーム。

横から見ると、その凄まじさがわかるな……………。

「……………ぬおおおお!!!」

ダダダダダ……。

ダン!

どこからどうやって来たのかは分からない。

分からないけど。

世界で一番頼りになる人物が、突然俺の目の前に現れた。

「……………待たせたな!ソウジ君!」

「……………教官!」

大きなボウガンと、ツンツン頭。

隆々とした筋肉は、ラージヤンにも負けていない。

マシヨルク教官、参上。

143 やっぱり二人でやりましょう。

「……………待たせたな！ソウジ君！」

「……………教官!!」

予想外だった。

驚いた。

何という……。

何というタイミングで間に合うんだ、この人は。

間が悪いとか、嘘だろ。

ここまでか、と意を決した。

覚悟を決めたはずなのに。

やっぱり怖かった。

(教官……………)

目頭が熱くなる。

この人には、命を一度助けてもらった。

また、恩ができてしまった。

返しきれない、恩が。

「さて！とりあえず一つ！」

「は、はい！」

気合いの入った声。

ラージャンを遠目に、俺に声をかける教官。

しかし、俺の返事を聞いた教官は、意外な行動に移った。

「……………この、大バカモノ!!」

ガツン！

殴ってきた。

ボウガンの先で。

……………めっさ痛い。

「いつ……………いつてええ！」

痛がる俺。

ワケが分からず、教官を涙目で見つめる。

い、いきなり何!?

「……………生を諦めるな！」

「あ……………」

「死を受け入れるな!! 手が動くなら石を投げろ! 足が動くなら這い回れ！」

「……………は、はい。」

「私の弟子なら、生き意地汚くもがきぬけ!!……………返事い!!」

「さ、サーイエッサー!!」

殴られたのは……………初めてか？

しかもボウガンで。

「怪我人は休養！私は……出るっ！」

「きよ、教官?!」

「動けるなら、来るといい!………はあ!!」

俺に何かを投げると、勢いよくヘビィボウガンを背に担ぎ、ラージャンの方に走り出していった。

俺はただ、呆然とそれを見送るしかなかった。

「……………ラージャン!久しぶりだな!私が相手だ!!」

「……………グアアオアアアア!!!」

「ハーハッハッハッハッ!!」

教官が投げ渡してきたもの。

……………いにしえの秘薬だ……………。

……………ありがたくいただくこう。

(確かに……諦めてたわ。)

どうしようもない状況に、ここまでか、と諦めてしまった。
命の危機は今までも何度もあった。

バサルモス……デイノバルド……。

死ぬかも、という時がたくさん。

だが、諦めたことは無かった。

今回は、何だろう。

あまりの強さに、刃が立たないと。

そう、思った。

だから、諦めた。

体は重いし、どうあがいても敵わない、と。

加えて、ドーピングをしたかのように盛り返した俺の肉体。

それが突如として、鉛のように重くなった。

それもある。

……………何をやっているんだ……………。

精一杯生きると、頑張ると決めたじゃないか。

『私の弟子なら、生き意地汚くもがきぬけえ!』

教官の言葉が、頭の中に何回も響く。

怒っていた。

教官は、心の底から怒っていた。

あんな姿、見たことない。

ズガガガガガガガ!!

「ギャオアアア!!」

「ふんっ!!……………こつちだ!!」

「……………グラアアアア!!」

教官が、ラージャン相手に互角……………いやそれ以上に立ち回っている。

ラージャンの目が俺にいかないように、常にヘイトを稼いでくれている。
……………助けられた。

……………俺はこのままでいいのか。

……………。

「……………いいわけ、無いだろ!!」

キュポン!

ゴキュ……………ゴクン!

「うああ……………苦い……………。」

苦いけど、こいつは効果覷面。

鉛のようだった体が、多少元気を取り戻す。

痛みはまだ残っているけど。

………問題ない!!

(覚悟を決める!!)

教官が、ラージャンを抑え込んでくれている。

だが、俺が狙われる可能性はゼロではない。

だったら、逃げるか。

戦うか。

(………やってやる!)

後者を選んだ俺の体に、力が戻ってくる。

気合いと根性と……まあぶっっちゃ薬のおかげだろうが、体調は七割戻った。

ザッ……。

ザッザッザッザッザッ!!

足元の草を踏みしめ、走り出す。
向かうは、俺史上最強の相手。

「……………教官！すいませんでした!!……………いきます!!」

ジャキン！

双剣を構え、教官を横目に宣言する。

怒られたら、どうするか。

謝罪は……………後でいつでもできる。

今は、やれることをやる。

それだけだ。

「……………やれるのか!?! 満身創痍だろう!」

「やってやります!」

「……………あいわかった! 見せてみる!!」

「は……………サーイエッサー!!」

「ガアアアアア!!」

少しだけ、教官と目を合わせた。

強がりでも何でも無く、やってみるといふ答え。

それを受け入れる教官。

師匠と弟子のやり取りを終え、ラージヤンを見据える。

「お前ら何やってんだコラア！」と言わんばかりに、厳つい顔を更に怖くしたラージヤンが叫ぶ。

ビツカビカに輝く体毛が、目にうるさい。

ついでに言えば、声もうるさい。

「……………ふっ！」

「ギャア……………グアア!!」

咆哮の後、少しだけ前傾姿勢になったラージヤン。

見逃さない。

それは、さつき見た「後ろに跳ぶ」というモーション。

『まずは、見!』

教官の教え。

……破ります!

バツ!

俊敏なラージヤンの動き。

そのバックステップに完璧に合わせて。

ダツ!

張り付くように、付いていく。

「グアア!?!」

「うらあ!!」

ザシユ!

ズザザザサン!

「うむっ!!」

教官の声が聞こえる。

予測して、予想通りの動きに合わせて、攻撃を入れられた。

完璧に動けたと思う。

だが……。

(軽い……。)

斬撃は、入った。

だが、ダメージを与えられた気がしない。

先程までの、しっかりした手応えは無かった。

(教官は頷いてくれているが……。)

「よしっ、いいぞ！ソウジ君……………ふんっ！」

ズガガガガガガ!!

ビシッ！ビシビシッ！

(きれいに入るなあ…………。)

教官の弾は、確実にラージャンに効いている。

と、思う。

弾と斬撃、単純な比較はできないけど。

「グアア…………!!」

現に、ラージャンは教官の方を向いて、敵意をむき出しにしている。

ショウコと俺の逆のパターンだ。

より強い方に、モンスターは意識を向ける。
前衛としては、失格だろう。

「……………こつちだ!!」

ザシユ!

ケツを向けたラージャンに、一撃。

後ろは柔らかいんだな。

手応えはあまり無いけど。

「グリアアアアアア!!!」

ブオン!!

「うわっ!……………とっ。」

ラージャンが振り回す拳に対応する。

グルグルと、コマのように地に這う攻撃を、跳躍して避ける。

……………このままっ！

「ふっ!!」

グルン!

ズザ!

ズザザザザザザン!

ザシユ!!

「ギヤアアア!!」

「うむっ!素晴らしい!!」

飛んだ体をそのままひねり、ラージャンの自慢のツノめがけて回転乱舞を入れる。

落ち着いてやれば、いける。

油断は禁物だけど。

ジャキ！

ズガガガガガガ!!

「交代だ！ソウジ君！」

後ろに援護がいるというだけで、こんなにも安心感が違うのか。

さらに言えば、教官は一騎当千。

射撃でこの人の右に出る者を、少なくとも俺は知らない。

(落ち着けるわけだ。)

一人とは、まるで違う狩猟。

心の余裕があるだけで、こんなに視野が広がるとは。

いや、わかつてはいたけれど。

きつとシヨウウコとセツヒトさんが居れば、同じように狩猟を進められただろう。

「グアアアアアアアアアア!!!」

雄叫びを上げる、ラージヤン。

急に飛び上がると、巨体を振り回して、飛び込んできた。

その動きは、わかる。

重力無視の、回転攻撃。

……………行くぞ!!

「しっ!!」

「ソウジ君!」

教官が驚く声が聞こえた。

無理もない。

飛び上がるラージヤンに向かって進む、俺の行動。

意図がなければ、それはただの自殺である。

だが、これは俺の中の最適解。

落ちてくるラージヤンに合わせて。

俺は、前へと飛び込んだ。

「ぬおおお!!」

「ガアアア!!」

ズドオン!

「ふっ!」

ズドオン!!

「っ!!!」

ズドオン!!!

「……………くっ!!」

縦に回る、ラージヤンの巨体。

飛び上がり、落下し、地面に叩きつけてはまた上がり。

規模がでか過ぎるスーパースーパースーパールのよう。

重力とかそんなの知らない、そう言いたげな攻撃を。

全て避けた。

(最後……………合わせる……………!!)

「ガア……………」

集中を高める。

ラージヤンは、スーパースーパール攻撃の最後、一瞬固まる。
その技後硬直に、合わせる。

シュツ!!

ヒュパツ!!

ズザザザザザ!!

ザシュツ!!

乱舞。

「グアアア………グアアアアアオオオ………!!」

ゴロンゴロンとその場に転げるラージャン。

輝いていた体毛は遂にその光を失い、最初見た黒い姿に戻っている。

のたうち回る姿、初めて見る。

強化した状態から元に戻った………?

何にせよ、これはチャンス!!

「教官!!」

「ああ!!」

ズガガガガガガガ!!

ダララララララララララ!!

ズザシユ! ヒユパツ!!

ズザザザザザザザザザン!!

猛攻。

俺と教官の連撃が、ラージャンを襲う。

ザシユ!ズザン

ズザザザザザザザン!ザシユ!

ズガガガガガガ!

ズガガガガガガ!!

「……………グウウウウウ……………!!」

ズン……………。

ようやく態勢を整え始めるラージャン。

(逃すか!!)

カチツ。

ズババババババ!!!

ビリビリビリビリ!!

「グア!!……………ア……………アアア……………アア!!」

「うらあ!」

「うむ!見事!!」

俺と教官の猛攻。

終わらせない。

数秒ほどで起き上がったラージヤン。

それを逃すまいと、シビレ罠を仕掛けた。

トラップを見分けて避けられる、そんな力がラージヤンにあったとして。

流石に足元に罠を置かれたら、避けようがないだろうと踏んだ。

喰らえ。

「うらああああ!!」

「ふんっ!!」

ズガガガガガガガ!!

ザシユツ!ズザン!ヒユパ!!

ズザザザザザザン!

ダラララララ!!

教官の弾に当たらないよう位置取つての連撃。

教官もここぞとばかりに弾を入れる。

急所ばかりを狙つて……あ、そうか。

弱点か。

「……………グアア……………」

「よっ……………」

「はっ!!」

トトンツ。

ストツ。

俺と教官が、ほぼ同じタイミングでラージャンから離れる。
少し距離を開けて、怒り顔のラージャン。
来るか、と思いきや。

「……………グアアツ!!」

ダン!!

ヒュー……………。

そのまま飛び立ち、どこかに飛んでいってしまった。
いや、翔んでいった。

な、なんという跳躍。

……え？飛び過ぎじゃない!?

天高く飛び立つラーゼジャンは、既に空に小さく見えるほど。つくづくファンタジーだなあ……。

「離脱……しましたね。」

「ああ……あの様に翼がない大型も、大きく跳躍して移動することがある！全く、規格外過ぎるな！」

規格外とかそういう問題ではない気がするが……。

まあ今更か。

俺は教官に向き直る。

「……………教官。」

「ぬっ？どうした!?!ソウジ君！」

「……………ありがとうございます!!」

バツ!!

礼を言いながら、頭を下げる。

気持ちを込めて、感謝を伝えた。

教官は「ふむ……。」と一息つくくと、腕を組んで笑った。

「……………ソウジ君！強くなったな！」

「あ、ありがとうございます!!」

「いや、素晴らしい動きだった!!なぜあそこまで追い詰められていたのか、不思議なほどだ！」

「い、いやあ——」

「だからこそ!!」

つばを飛ばし、いつもの2割増しの大ききで声を上げる教官。

「……………命を投げ出す様な真似は、しないでほしい。」

「……教官。」

「首都に報が入った。ラージャンの出現、しかもソウジ君が狩りに入る、と。そういう情報がない。」

「……………」

「飛んできた。どうにも嫌な予感が拭えず、な。……………間に合ってよかったが、君が諦める姿を見て、悲しくなった。」

「……………すみません。」

教官は、本当に飛んできたんだろう。

足元には泥が跳ね、急いでできてくれた様子が伺えた。

……………不甲斐ない姿を見せてしまった。

来てみれば、死を受け入んとする弟子の姿。

……………まあそりゃ、嫌だわな。

「……………とにかく、反省と振り返りは後だ！それに先程の前衛としての動き。素晴らしかったぞ！」

「……………ありがとうございます。」

「一年半でここまでとは……………恐れ入る！」

褒めるのか怒るのか。

まあ、両方か。

……………深く心に刻もう。

諦めは、一番やつてはいけないことだ。

少なくとも、狩猟中は。

「しかし、俺の剣……………あんまり調子よくないんですよね……………」

「ふむ？」

「あ、いや……………シガイアさんに聞いているかもしれないですが、俺多分狂竜症？つていうのらしくて。」

「狂竜症……………聞いたことがある。」

「あ、本当ですか……………。俺、目が赤いんです。まるでモンスター……………ナルガクルガみたいに。……………俺にしか見えないんですけどね。」

「ほう……………確かに、私には普通に見える！」

「ですよね……………さつきソロでやっているとき、急に怖さがなくなったというか興奮して

きて……まるで命を投げだす事にもためらいがなくなったというか。」
「……………」

「何とか応戦して……一撃食らうと、もう体が……。そんな感じでした。」

珍しく顔を顰める教官。

やっぱ聞いてなかったか。

そりやそうか。ずっと首都にいたのだ。

自分なりに考えてみた。

俺はラージャンがめちやくちや怖かった。

死ぬ、と思った。

そんな時、ドクン、ズキンと痛みが走り、急に平気になった。

動きもよく見えるし、いつもより力が増した。

……これが、症状の一つなんだろうか。

教官との共闘の最中、手応えがそこまで感じられなかった。

いや、攻撃は入っていたのだが。

興奮していた時と比較すると、少し攻撃が弱かったと思う。

「……今は、どうなのだ？」

「あ、今ですか？ えつと……。」

しまった。

自分の目を確認しようにも、鏡とか無い。

買つとけばよかった。

「目は……鏡とか無いからわからないんですけど、気持ちは……別に、変に高揚してはな
いです。普通ですな。」

「……先程ソウジ君が動けなかったのは、それが影響しているかもしれない！」
「えっ!？」

「おそらく、狂竜症とやらを発症し、ソウジ君に何かしらの影響を与えているのだろう！
しかし、肉体というものは限界がある！酷使し過ぎれば、動かなくもなる！」

「……あー。」

確かに。

全く動けない、というよりは……とにかく体がだるくて重かった。
極度の疲労……だったのだろうか。

「思い当たる節はあるようだな！何、ハンターあるあるだ！」

「あ、そうなんですか？」

「ああ！パワーアップの方法など、数多あるからな！それに依存しすぎて、体を壊すハンターは多い……ソウジ君の場合は、狂竜症がそのように作用しているのかもしれない！」

「……狂竜症って、力が入らなくなったり、興奮状態が続いたり、という症状と聞いたんですけど……。」

「詳しくは分からん！素人判断の域は出ない！良ければ、都合をつけて首都の医者に見てもらおうといい！良い医者を紹介する！」

「はあ……。」

100%善意で言ってくれているのがわかるので、無碍に断りづらいが……。

さつき、もしかしたらその首都の追手とやらに、セツヒトさんが襲われたのかも知れないんだよなあ……。

「教官、話の途中すみません。」

「ん？どうした!？」

「ラージヤンの後を追いつつ、話があります。実は……。」

俺は、ラージヤンの飛んだ先に向かいつつ、教官にこの森であったことを話した。

* * * * *

「……兎にも角にも、ラージヤンを早く狩猟し、戻るとしよう!セツヒトも、そのフェニクという女性も、心配だ!」

「はい、そうしましょう。多分、この先です。」

教官に話した内容。

森に入つて、様子が静かだったこと。

湖のほとりで、よくわからない真つ黒なモンスターがいた事。

それがいなくなった途端、モンスターたちの動きが活発になってきたこと。

そして、ラー吉安発見の時にあった、一部始終。

妨害を受け、フェニクさんが追い、セツヒトさんが負傷して、シヨウコとともに避難して。

そんな話を、掻い摘んで伝えた。

それを聞いたからか、すぐに狩猟を終わらせようと提案してきた。

時間はかけたたくない。確かに。

「ソウジ君の『まっぷ』とやらに、反応はあるのかな!？」

「はい……ちようど、俺達が黒いモンスターを見つけたあたり……ですね。」

ぐるっと森を回り、トツバやガーグア車のおじさんのいるであろうスタート地点に向かう形で戻ってきた。

途中大型モンスターが何体かいたが、時間がない。

迂回しつつたどり着いたのは、例の湖であった。

湖を見渡し……見つけた。

「……いました、教官。」

「ソウジ君はやはり目がいいな……ああ、私も見つけた。アレだな。」

木に隠れながら、小さな声で教官に発見報告。

教官も見つけたようだ。

ラージヤンは、いつもの黒い体色。

夕焼けが迫り、ほのかに色づき始めた湖に口をつけている。

水を飲んでいるようだが……。

そんなラージヤンの様子を注意深く見ていると、教官から質問の聲が上がった。

「ソウジ君は……やるのかな？」

「えっ……やる、っていうのは。」

「うむ……あまり言いたくはないがな。その装備、防具では、とてもじゃないがラージヤン程の相手は難しい。」

「あー……やっぱりそうですよね……。」

「うむ。双剣は……氷属性でベルゲルブリザード、しかも一級品だ。それに文句は無い。しかし、ミヨシ村一式は……下手したら一発、だな。」

「……装備を強化するために、今ラージヤンに挑んでいるんです……。」

「おっと、そうだったか。……すまん。修羅の道の途中だったのだな。」

強敵と戦うための装備を作るために強敵に挑む。

人、それを修羅の道と言う。

……本末転倒、とも言う。

「あいわかった。ならば、倒そう。ラージャンを。」

「はい、よろしくおねがいます。」

「うむーあー、一つアドバイスだ。私の弾丸が当たる場所、そこをよく見てほしい。」

「……………弱点、ですよ。」

「ああ。ソウジ君は無意識にできているようだが、ラージャンは硬い。より精度が必要だ。意識してみるといい。」

「……………はいっ。」

武器はまだマシな方、なのに手応えが感じられない時がある。

その原因は、教官の攻撃を見てすぐわかった。

改良の余地が、まだまだあるなあ。

ちなみに、ラージャンに気付かれないように話しているため、教官はいつものように元気な声ではない。

こうしていると、いたって普通の人間である。いつもこうだったらしいのに……。

「では行くぞ！前衛は頼む！」

「はい！フオロー、よろしくお願いします!!」

ザザッ！

「ガア!?!」

後ろに回り、速攻を仕掛ける。

……気付いたな。

だけど、遅い。

ラージャン、こいつはまず……。

「ガアアアア」

（狙い通りの咆哮!!）

ラージヤンに限らず、大型のモンスターはなぜこうも、開幕咆哮が好きなのだろう。いや、相手がそれで怯んでくれれば、大きなスキになるから、だろうけど。

（回転乱舞……!!）

咆哮が来ると、踏んでいた。

意識を無意識に切り替える。

憑依状態を意図的に作り上げ、回転乱舞を開始。

同時に響き渡る、ラージヤンの咆哮。

その顔に、2つの剣を入れた。

ザシュ!!

ズザ！ザザザザザザザ!!

ザザン!!

「おお!!」

教官の声が聞こえる。

見せられた、だろろうか。

俺の編み出した、咆哮無視? 攻撃。

いや、耳の中は痛いんですけどね。

「どうやったか分からないが! いいぞ! ソウジ君!」

バシユツ!

ヒユウウウウウウ……。

ピカッ!

俺に声をかけながら、教官は照明弾を上げた。

もうすぐ夕方に差し掛かる。

煌々と照らされる照明弾は、湖に反射して、そのほとりを明るく照らした。

そして……。

「……………ガアアアアア
!!!!!!」

ビガア!!

バリバリイ!

「グウウウ……………。」

その光に負けじと、ラージヤンも体毛を金色に輝かせた。
強化状態。

……………恐ろしい。

「ソウジ君!!」

と、思っていた俺に、後ろから声がかかる。

「奴め、だいぶ焦っているようだな！……………ここで決めるぞ!!」
「……………サーイエツサー!!」

気持ちが悪くなる。

狂竜症の影響ではない。

後ろに頼もしい人がいる。

これだけで、余裕が生まれる。

ありがたい。

「……………グウウウ……………ガアツ!!」

「ソウジ君！右だ!!」

「サーイエツサー!!」

更には言えば、こうやって指示をくれる時もある。

自分で分かっているにしても、どうにも判断に自信がもてない時がある。

だからこの声掛けは、やはりありがたい。

右に跳んだラージジャンは、着地際に脚に力を込めようとしている……ように見えた。その一瞬を、見逃さない。

「ガアア——」

(遅い！)

明らかに速度を落としているラージジャン。

金ぴか状態なのに。

……俺も目が慣れてきた、というのもあるかも知れない。

兎にも角にもラージジャンの動きを見切った俺は、ヤツが飛び込んでくるだろうと予測。

その飛び込みに合わせることにした。

(集中………鬼人化………!!)

ゆつくりと見えるほど、神経を研ぎ澄ます。

ラージジャンがやってくるのは、ここ。

ならば、おそろく……………。

「————アアアアア!!」

(こっ!!)

ダツ!!

湖のほとり、その湿った地面を踏みしめる。
力を抜いて、回転を加え。

ラージャンの動きに逆らわぬように。

そして、剣撃をムチのようにならせて。

ザシユザシユザシユ!!

ヒュパン!

ズザザザザ!!

「ガアアアア!?!」

バキイ!!

(角、破壊確認!!)

突進する動きに合わせて、双剣を当てた。

力はいらない。

ラージャンの攻撃に、無理に反発しようとするから、駄目なのだ。
力で勝てるわけがないのだから。

ならば、どうするか。

……相手の力を利用する。

それしかない。

「うむっ！正しいー……………ふん!!」

ダラララララララララ!!

教官の追撃が、ラージャンを襲う。
狙う場所は、俺がさつき折った角。

ビシイ!

ビシビシツ!!

「ギャアアア!!」

「タイミング、ばっちり……!」

のけ反るラージャン。

そのスキ、のがしてたまるか。

(反撃は無い……ここ一番のデカイやつ……!!)

折れた角を狙われ、たまらず体を開けたラージャン。
その顎から脳天にめがけて。

(空中……乱舞ッ!!)

高さはいらない。

しかし、俺は究極まで脱力して。

足の先から頭まで、体全体を使って回った。

「うう……おおおおお!!」

ヒュパッ!

ザン!ズザザザザザザザザシユツ!

ザン!

「グアア………!!」

ズウン……。

捻じりに捻った体を、フルに回転。

初めから腕は開き、徐々に体の内側に収束するように。そうすると、えらく体が回る。

ラージャンの顔に集中して斬撃を入れる為の動き。

だから、高さはいらぬ。

必要なのは、回転の速さ。

「ぐつ……！チャンスです！教官！」

「ああ………いけるぞ！ソウジ君！」

教官が合図する、いける、という言葉。

捕獲可能、ということだ。

俺の渾身の一撃を食らって、ラージャンはたまたまらず再び転倒した。短時間に2回もダウンが取れるとは思ってなかったけど。

「素晴らしい！非常に見事である！！素晴らしい！！」

「ありがとうございます………！」

カチツ。

教官にお礼を言いながら、シビレ罨を仕掛ける。
のたうち回るラージャン、その下に一瞬で仕掛けたシビレ罨。

ビリッ……………。

バリバリバリバリバリ!!!

「ガッ……………アアッ……………グッ……………アアアア!!」

無事発動!

麻酔玉!!

「終わりだ……………!」

ボフツ……………ボフツ……………。

「ガアツ……アアアア!!」

……あれ?

「教官! 眠りません!」

「……………すまん! 見誤った!!」

「ええ!?!」

「行くしかない! タコ殴りだ!!」

「えええ!!?!」

どういうこと!?

あ、捕獲のタイミングではなかったってこと!?

……………考えている場合ではない!

攻撃!!

「ぬあああああ!!」

ズガガガガガガガ!!

ザシュツ!ズザン!ヒユパ!!

ズザザザザザザザン!

ダラララララ!!

俺と教官の猛攻が浴びせられる。

動けないまま、斬撃と銃弾を入れられるラージヤン。
だが。

(もう……シビレ罨が……切れる!!)

「ガッ……アアア……アアアアアアアアア!!!」

ビリイツ……バチツ……。

シュウウウウ……。

切れてしまった。

罨が。

「くそっ……倒しきれなかった……。」

四つ足で仁王立ち……ではないが、その場に佇むラージヤン。黙ったまま、俺と教官を睨みつけてくる。

「教官……もう少し、よろしくおねがいます……！」

「……………ソウジ君！」

ラージヤンの巨体は、相変わらず威圧的だ。だが、まだ金色に輝いた強化状態ではない。このまま……倒す!!

「教官は後退を！あとでタイミングもらって、俺一回双剣を研ぎま——」

「ソウジ君！」

「はっ……サーイエッサー！」

「よく見たまえ！……狩猟、完了だ!!」

「……へ？」

間拔けな返事を教官にしてしまう。

完了？

いや、だって……ラージャン、立ってますけど……。

「……………zzz。……………zzz。」

「……………寝てんのかよ!？」

「いやあ！良かったな！ぎりぎりだったが、捕獲の体力まで削れたようだ！」
「体力を……削れた？」

よくわからんが……トラップを仕掛けて、麻酔玉を当てて……。
だけど捕獲には至らなくて……。

仕方がないからがむしやりに攻撃して……。

そしたらうまいこと体力を削って……捕獲できたってこと？

なんじゃそら。

……ま、まあそういうこともあるのか。

……普通斬撃やら銃弾浴びせられたら眠気なんぞ吹っ飛ぶと思うんだが
……。

……もういいや、考えるだけ無駄だろう。

こういう世界なんだ。そういうことにしておこう。

「……………おめでとう！ソウジ君！」

「へ？」

「君は遂に、ラージヤンを狩猟できたぞ！……………私に肩を並べられたと言っても、過言ではないな!!」

「ま、マジっすか。」

教官から、称賛の声が上がる。

いや、あなたがそばにいてくれて、更に手助けしてくれたからですけど……………。

まあ、とは言えど、狩猟できたことは事実。

ありがたく、お言葉をそのままポジティブに受け入れよう。

「……ありがとうございます。教官が、いてくれたからです。教官がいなかったら、俺、死んでました。」

「うむ！全くその通りだな！感謝するといい！」

「……ははは。流星です、教官。」

教官はこういう人である。

裏表など無い人格。

……悪く言えば、何も考えていないともいえるが。

だからこそ、この人の周りには人が集まるんだろう。

「……………zzz。……………zzz。」

「……どうします？このレーザーガン。」

「とりあえず横にしよう！……信号弾は、どうするのだ!？」

「あつ、今撃ちます。」

恐らく、遠方でワサドラ回収班と観測班が待機しているはずである。

上空に向かって、信号弾を打ち上げた。

空は、もう夕焼け。

湖の上に打ち上げられた照明弾が、少しずつその明度を落としていく。

効果が切れてきたんだろう。

こんな時間に、回収に来てくれるのだろうか。

そこに不安は残るが……。

「すみません、教官。俺、その、体が限界です……。」

「うむ！ 難しい話が色々あるが、一先ずはそのガーグア車に行くでしょう！……」

ほれ!!」

「へ？」

教官がその場に座り込むと、背中を見せる。

………おんぶされろって事か？

「いやいや、教官！ 流石に歩けますって！」

「気にするな！ それに、急いだ方がいいのだろうか？」

「そ、それはそうですけど……。」

「なら、よしっ！……ふん！」

「へえっ!?!」

変な声が出た。

なぜなら。

教官に担ぎ上げられたからである。

「さあ！南東だな！行くぞ!!」

「ちよつとま——」

ピュー!!

「はやっ!?!……うえつつ……もちよつとゆつく……!?!」

「ん!?!何だ!!急いだほうがいいのか!!よしっ！」

ピュー——!!

こうして俺は、教官に担がれ、急いでスタート地点のキャンプに戻ることになった。
ラージャン狩猟の喜びも束の間。

激しく揺らされながら、別の意味で命の危機に立たされるのだった。

144 状況を確認しましょう。

記憶のある中で、乗り物酔いはほとんどしたことがない。

姉は車に弱く、車中で夢中になって本を読む俺に向かって舌打ちをしていた。船に乗っても酔わない。眠くなるタイプである。

乗り物酔いというものがどんなものか、一度知りたいとは思っていた。

「……おえ……ぐええええ……。」

前言撤回。

誰だ一度知りたいとか言ってたやつは。

俺だ。

「……うぶっ……気持ち悪う……。」

「お、おいおい……ソウジさん大丈夫か？」

「おじさん……すみません、こんなところ見せて……。」

おじさんに心配をかけてしまった。
申し訳ない。

教官が俺を助けてくれて、無事ラージャンは捕獲完了。

負傷しつつも、助けを借りて勝つことができた。

そして、厚意で教官が俺を担いでくれて。

スタート地点にまで、一瞬でたどり着いた。

あまりの速さ、日もまだギリギリ沈んでいない。

すげえ。

俺の体調と引き換えに、ではあるが。

「……………とにかく、ただ今戻りました……………あつ、セツヒトさんは!？」

「ああ……………あそこで、寝てるよ。」

心配そうな顔はそのままに、おじさんが右を見た。

その先にあるのは、えんじ色のテント。

「シヨウコの嬢ちゃん在必死こいて連れてきてくれてなあ……俺もトツバも驚いたが、止血も解毒も済んでいた。まあ、大丈夫だろうよ！」

「そうですか……ちよつと、行つてきます。」

「あー待て待て！シヨウコの嬢ちゃんに、『絶対ご主人様を中にいれんといして下さい！』つて言われててよ！」

「へ!？」

「よく分かんねえけどよ？何か裸がどうか言つてたぞ？」

お休み中のセツヒトさん。

寝ていたとして。

……………。

……おお、それは危ない。

さすがシヨウコ。俺の相棒。

気が利くじゃないか。

「……………やめときます。」

「おう、それがいい。」

「はい……………それとおじさん……………あれは……………？」

「尋問中……………だとよ。」

「……………はあ。」

次に俺が見つけたのは、焚き火のそばに横たわる丸太、それに隣り合って座る男女の姿だ。

ぱっと見れば、キャンプ中のカップル二人のような感じ。

異様な点を上げるとすれば、片方の男性は縄でぐるぐる巻きにされているのに、やけにこやかである、というところ。

フェニクさんが、その縄の先をしっかりと自分にくくりつけ、逃すまいとしているように見える。

……………何やってんのよあの人は。

「尋問……ですか？あれ。」

「ああ。何でもよ？『話を聞くときはまずリラックスさせることが先決だ。』とかなんとか言うもんでよ。俺もトツバもシヨウコの嬢ちゃんも、タコ殴りにしてやりやいいんだとか言っただがな。」

「はい。」

「それを断固拒否して、フェニクさんがアイツを庇うもんだからよ……そのお陰かなんか知らんが、アイツ、ペラペラと色々教えてくれたぜ？」

「……………」

じ、人心掌握術……………？

……………あり得る、フェニクさんならそれぐらい朝飯前……………な感じがする。

元本職なわけで。

「お……………濟まない。ここにいてくれ。」

その当の本人が、加害者である男に一言断りを入れて俺の方にやってきた。

……………ああ、縄はしっかりと杭にくくるのね。

「おかえり。ソウジさん。」

「はい、ただいま帰りました。」

「まずは、すまない……私がいながらセツヒトさんを守れず。」

「いえ、恨むべきは犯人です。……捕縛、ありがとうございます。」

「ああ。まあ勝手にすつ転んで自爆したただけだな。捕まえ、そのままこちらに連れてきた。良かっただろうか。」

「構わないですよ。………どんなやつかと思つたら、普通の男、ですね。しかも若い。」

見た目中肉中背の、普通の成人男性に見える加害者の男。

顔は下を向きつつも、チラチラと俺の方を見てくる。

………この後の処遇を心配しているんだろうか。

「色々と吐いてくれたが……肝心なところはわからない。恐らく、ただの雇われの射手、
だろう。」

「雇われ……。」

「下っ端、ということさ。今回は裏のルート、はした金で依頼されたそうだ。」

「……なるほど。」

そういう依頼をしたり受けたりできるところがある、ということか。

まあ前世でもそういうものは存在していた。

ましてやこんな命の軽い世界。

裏とかそういうこと自体に、驚きはあまりない。

……そんなことより、セツヒトさんを襲ったということが、俺としては単純に腹が立つ。

だが、フェニクさんは更にその先の黒幕まで洗い出したい様だ。

うーん、本物の警察みたい。

もしくは探偵。

「ソウジさん、一つ頼みがあるのだが……いいかい？」

「えっ?……いや、俺尋問とかしたことないですよ?」

「ははは、いや、そうではないさ。……これからアイツのところに行って、軽く脅してやってほしい。」

「……なぜ?」

「ああいう下っ端というか雇われ風情は、依頼主に忠誠など全く誓っていない。捕まつて、何をされるかもわからない。そんな状況で、唯一味方となってくれる信用のおける女性がいたら……全部話してくれると思わないかい？」

「は、はい……。」

やつぱり全部計算ずくかよ！

しかもまだやる気かよ！

徹底してるなあ……。

「ついでに……そうだな。脅す際は、私を貶めてほしい。」

「えっ!? な、なんで?」

「簡単だ。『四面楚歌、唯一自分を庇ってくれる女性。疑いはしたが、彼女もまたこのコミュニティでよい扱いを受けているわけではない。なんとか力になりたい。』……こう思わせられれば、しめたものだ。」

「おお……。」

やばい。

もう俺この人怖くなってきた。

「少しでも情報を引き出したい。……ラージャンの際に、何もできなかつた汚名を返上したいんだ。私を罵ってくれ。」

「……………りよ、了解しました。」

「ふふ、助かるよ。」

汚名返上のために罵ってくれて……台詞だけ取れば、完全にドMさんの発言である。

……だが、これは黒幕を探るため。

い、致し方ない！

やらいでか！

……………。

……………。

結論から言うと、男は言えること全てを話してくれた。
らしい。

男が依頼を受けたのは、首都東部にある平民街の隅っこ。
その一角の酒場だったそう。

依頼主は名前不明。

ただ、ローブを着てフードを目深に被った男性だったということだけ分かった。
この森にいる俺を見つけたら、狩猟中に致命傷を負わせてほしい、という内容。
金に困って酔っていた男は、大量の前金を目にして、依頼を二つ返事で受諾。

今回のことに至ったそう。

俺が双剣を手にして言い放った、「森の真ん中に置いていく。食われる。」という言葉
が、えらく効いたらしい。

フェニクさんが男を必死に庇うので、ついでにフェニクさんにも「だからあなたをこ
こに連れて来るのは、反対だったんですよ……この荷物持ち風情が……。」と言った。

……という演技をした。

後は退散。

おじさんのところに戻ってきた、という寸法である。

………参考にしたのは、姉が好きだった、よく分らんイケメンが出てくる学園モ

ノドラマである。

性格が悪い生徒会長のマネをした。

ありがとう、ちよつと腐っていた姉貴よ。

あまりの演技クサさに死にたくなつたが、これもまた必要な事。

割り切れ、割り切れ俺。

その後フェニクさんから、男が白状した全てを聞いた。

明日チダイ村に戻り次第、この男は憲兵に突き出そう。

他に何も知らなそうだし。

しかし、黒幕……というか依頼主は誰だろう。

首都の人……？俺に恨みがある人……？

………：こういう人の思惑がたくさん交差しそうな話は、あまり得意ではない。

シガイアさん辺りに丸投げしよう。

うんそうしよう。

「ソウジ君！名演技の後ですまないが、話がある！」

「何でしょう。あと名演技はやめてください。泣きたくなるので。」

俺の一世二代のお芝居を傍から見ていた教官から、声がかかった。

「先程、文が入った！無事、回収班がラージャンを発見、作業が完了したそうだ！」
「ええっ!!早くないですか!？」

「恐らく近くに待機していたのだろう！やはり彼らは優秀だな！」

拙速は何よりも尊ばれるとは言うが……すげえ、回収班。

「首都の雲行きも怪しくてな！私もワサドラまで同行しようではないか！」

「あ、ありがとうございます……。」

「……………なにか気になることでもあるのだろうか!？」

「い、いや、そういうわけでは。」

「なに、ソウジ君のハーレムイチャイチャ道中を邪魔するつもりはない！私は見張りに徹するからな！」

「な、何を言うんですか何を！」

「何?!違うのか!?!これほどまでに女性たちを引き連れて!……………もしや!本命はあの御者

の御仁か!!」

「ちよつと黙つてこの命の恩人!!」

誰がソツチ系だ誰が。

ただでさえ神様連中にあなたとの関係食い物にされているというのに。

餌を与えるんじゃないよ餌を。

「と、とにかくー!ご一緒してくださいるのは助かります。……この先も、何があるかわかりませんし。」

「うむ・任された!大船に乗ったつもりでいるがいい!!」

「はーはっはっはっ!!」と笑いながら、教官は自分のテントに帰っていった。

テントと言つても、ものの10分程で作り上げた、完全お手製の寢床であるが。

……………見た目は完全に、狩猟採取時代の人の住居である。

ある意味、ハンター全盛のこの世界にマッチしている。

「セツヒトさんは、シヨウコが診てくれているから一先ずよし……フェニクさんにあの

男は任せて……おじさんは無事で……教官はうるさいから放つといて……。

声に出して、懸念事項を再確認する。

………何か足りないような。

「私は忘れられた存在。」

「のわあ!!………い、居たのか、トツバ。」

「ひどい。せつかく食料を採ってきたのに。」

俺の後ろでボソツと声がして驚いた。

振り返ってみれば、返り血を浴びたちっこいアイルーが一人。

トツバである。

ケルビを片手に引きずっていた。狩りをしてくれたのか。

………無表情で血を浴びた服を来た黒髪ちびっ子アイルーが、同じく血のついたハンマーを背に後ろから話しかけてきたわけだ。

………ちよつとしたホラーである。

「わ、忘れていたわけではないぞ？おじさんが無事だったのは、トツバのおかげだからな！」

「嘘。今言っていた中に私の名前がなかった。」

「いや、そういうわけでは。」

「シヨック過ぎて、無表情キャラが崩壊する。」

「あ、自覚はあるのね……。」

もう全くこの子の内心がわからない。

読めないわあ……。

「……………ソウジ、今ここにいたのは、誰？」

「ん？ああ、教官……マシヨルクさんだ。」

「!!」

「世話になっていてな。今回も命を救ってもらって……………ど、どうした？トツバ。」

マシヨルク教官の名前を聞いてから、トツバの目が見開く。

当社比1・2倍ほど、ではあるが。

「で、伝説の。カホ・チータの人……泣く子も黙るボウガン使い……。」
「と、トツバ？トツバさーん？」

目をキラツキラさせて、きょうかん 原人の住居を見つめるトツバ。

あれ？

この子、結構なファンとか？

「……………ファンなのか？」

「大好き。憧れ。かつこよすぎ。天才。推し。」

「そ、そうか。」

「……………ソウジは、弟子？」

「ま、まあな。みたいなもんだ。」

「……………ソウジ、プラス10点。」

「……………なんだそりゃ。」

その後聞いた話だと、教官はトツバの憧れの人、らしい。

よかったな、と伝えると、後でサインをもらおう、と鼻息荒く言っていた。
……教官の普段の様子を伝えたら、幻滅するだろうか。

……。

やめておこう……。

夢は夢のままであってほしいよな。

* * * * *

翌朝。

チダイ村には、何事もなく戻ることができた。

警戒していた妨害は、結局狩猟中の最も危険な時に現れたあの男のみ。

道中は現れなかった。

まあ森を過ぎれば殆どが農村地帯、見晴らしも良すぎるし。

妨害もしにくいわな。

加害者の男は、事情を話して憲兵に引き渡した。

「俺頑張るから……フェニクさんも頑張ってください！」などと、訳の分からんことを

言っていた。

まあ、コイツの行く先なんて知らん。

相応の報いを受けてもらおう。

その場に来たイパスさんに、簡単に狩猟の流れを説明。

負傷した俺とセツヒトさんは、イパスさんのところの客間で、休ませてもらうことになつた。

「どうぞ、ゆつくりとお休みくださいね。あの男については、私におまかせを。既にワサドラと首都、両方に文は飛ばしてますので。」

「ありがとうございます。」

「どうもー、助かりますー。」

「お元気になられましたら、また改めてお礼をさせていただきますね。……ラージャンの狩猟、本当にご苦労さまでございました。」

「い、いえいえ。」

深々と頭を下げるイパスさんに、こっちも戸惑ってしまふ。

美人さんがきちんと礼をする姿。
様になっている。

「それでは、失礼いたします……………あ、そうそう、これは独り言なのですが……………」

部屋を出ていこうとするイパスさんが、遠くを見ながら何かを話しました。

独り言、と前置きして。

「あの男の持っていた信号弾。首都ギルド本部配給の印章が彫ってあったんですよ……………。確か、信号弾はハンターの必需品。ギルドから渡されることがほとんどか……………あらいけない。まるで疑うようなことを言ってしまった……………独り言、失礼いたしました。」

「……………」

「あ、そういえば。首都への知らせはまだ送っていませんでした……………早急に、明後日には出すことにしましょう。ええ、急がなければ。」

「……………」

ガチャ……。

バタン。

「……………」。

「……………なんかすごい人だねー、あの人ー。」

「すごいというか、怖いというか……。」

敵にはしたくないタイプではある。

含んだ言い方、首都の近くで農家一帯の長を務めるだけはある。

この話は、公にはできない、ということだろう。

「……………とりあえず、セツヒトさん。」

「せつちゃんー。」

「せ、せつちゃんさん。体は、大丈夫ですか？」

「んー？あー、平気だよー。モンスターにぶん投げられたほうが痛いって…………ソウジ

は、平気ー？」

「あ、俺は平気です。昨日寝たら、だるさもなくなりました。」

「そー?……なーんか雰囲気が……かつこよくなったねー。」

「へ!?そ、そうですか?」

「うん……男を上げたというか……。」

「は、はあ……。」

ラージャンを倒して、確かに自信はちよびつついたけど、
そもそもやられかけたわけで。

教官の助けがなかったら、無理だったわけで。

「……………」

「……………」

無言の時間が流れる。

部屋に二人つきり。

……………あれ?ていうかこの状況……………。

……………セツヒトさんが寝たら大変なことになるのでは!?

い、いかん!

このままでは、意図せず女性の裸を見る変態のレッテルを貼られる！

「……………ソウジ？」

「は、はいっ!!」

「うわっ、声でかいってー。」

「す、すみません…………。」

慌てているところに急に声がかかったもんだから、大きな声が出てしまった。

お、落ち着け、俺。

まだ日も昇りきっていない時分。

何とか対策を練るのだ。

「……………私がケガした時、どう思ったー？」

「……………へ？」

「だからー、ソウジを庇って…………怪我しちゃったわけじゃん？」

「あ、はい…………それはもう…………」

セツヒトさんから唐突に質問が来て、間の抜けた返事をしてしまう。怪我した時は……。

まあ、正直に言おうかな。

「何だろう、怒りと悲しみと……色々と考えましたけど……。」

「悲しみ？」

「はい。……セツ……せつちゃんさんが傷つくのは、見たくなかった、というか。」

「……………」

俺を庇った時。

超反応を見せて、矢と俺の間に体を割り込ませたセツヒトさん。

その、命をも厭わない感じが……何となく悲しかった。

いや、あの時はそうせざるを得なかったわけ。

感謝の気持ちで一杯なんだけど。

「今は、感謝しかありません。でも、あの時は俺が傷を負ったほうが良かった。」

「……………」

「ラージヤンに苦戦しました。でも、せつちゃんさんなら、ソロでももしかしたら、なんて。」

「……………体が動いちちゃったんだよねー。」

「えっ？」

戦力的に考えると、俺が怪我した方が遥かに良かった。

と、思う。

セツヒトさんなら、ラージヤンを手玉に取って、サツと撤退なんてこともできただろう。

だが、セツヒトさんは、体が動いた、と言う。

「あの時さー…………ソウジを守れてよかったーって…………そう本当に思ったんだよー？」

「そ、それは——」

「頭にはよぎったさー。『私が矢を引き受けたら、ラージヤンはどうしよー』とか、『ソウジが間に合わなくても、私がなんとかできるかもー』とかさー…………でも、本能でソウジをかばっちゃったー…………。」

「……………」

「気持ちだが、許さなかったよねー。私の前でー、ソウジが傷つくのなんてー……死んでもごめんだよー。」

セツヒトさんが、珍しく言葉を選びながら話しているように見える。

俺のことを、そこまで大切にしてきている、ということだろう。

………ありがたい話である。

「……………ソウジー？」

「は、はい。」

「あの時さー……私が言ったこと、覚えてるー？」

「あの時……？」

あの時。

セツヒトさんが俺の前に瞬間的に飛び出してきて。

矢を受けて。

フェニクさんが追いかけて。

そしたらラージャンが起きちゃって。

「『好きな人を守れたなら本望』って……そう言ったんだよ……。」

「……………!?!」

「……やっぱり聞こえてなかったか……その耳、一度見てもらったほうがいいねー。頭と一緒にさー?」

「あ、頭って——」

「ソウジ? 私、本気だよー?」

「……………。」

セツヒトさんが、隣のベッドから身を乗り出す。

しなやかな腕。

俺をかばってくれたその腕には、白い包帯が巻かれている。

銀髪のが、ベッドの上にかかっていた。

「一生懸命でー、たまにバカでー……でも、心の底から応援したくなる、ソウジがー

……………す、好きー……なんだよねー。」

「……………へ、へ、へい。」

「……………んふふー……………あー！ー！やー！ー！つと言えたー……………うん。すつきりー。」

「……………。」

言葉が出ない。

いや、出す言葉が考えられない。

頭が真つ白である。

え？告白された？

俺が？

セツヒトさんに？

……………えええええ！

「……………え、えーつと、ですね、ちよちよちよいお待ちを……………！」

「……………ぷつ……………あはははははは！！」

「うえつ!?な、何で笑うんですか!!」

「いやー、ソウジ、めっちゃテンパってるからー……………その顔、おもしろーい。」

「ええ!?い、いや、俺なりに今真剣に考えて……………そ、その、……………純粹に嬉しいなあ……………」

と……………」

「…………う、うん……………」

…………再び流れる無言。

……………な、何だこの空気!!

い、いたたまれない!!

「……………ちよ、超真剣に考えてまして!そ、その……………」

「……………ふふふー、いーよー?ソウジー。」

「へ?」

「返事とか、そういうんじゃないからさー。…………どーしてもー、伝えたかったんだー。」

「……………」

「いつかまたー、私を好きになることがあったらさー…………嬉しいよー。」

「……………は、はい。」

「だからさー、今は……………」

ベッドから立ち上がり、俺の方に向かってくるセツヒトさん。

腰をかがめ、俺に顔を近づける。

ギイツ。

セツヒトさんが片足をかけて、ベッドが軋む。

その長い銀色の髪が、俺の体にかかる。

……………吸い込まれそうな瞳。

数秒ほど、セツヒトさんにじっと見つめられる。

……………素面で顔が赤いこの人なんて、初めて見た。

目を瞑り、ゆっくりと近づくとセツヒトさんの顔。

俺もただ呼応するかのように、目を閉じた。

バターン！

「失礼する!!ソウジ君はいるか……。」

「ご主人様ー!とりあえず面倒な報告聞け……。」

「……………」

無言。

硬直。

状況。

顔を近づけるセツヒトさんと俺。

ノックもせずに入ってきた教官とシヨウゴ。

「……………」

「……………」

「これは失礼!情事の始めに出くわすとは!不覚!」

「じよ、じようじい!?!教官誤解で——」

「さあシヨウゴ君!出直すでしょう!2時間後、また来る!」

「(ぎ) (ぎ) (ぎ) (ぎ) (ぎ) (ぎ) しゅじんさまが！つ、ついにい！！え、えええ、えーつと……ここ、こ
ういうときは!!素数を!!素数を数えて!!」
「さあ!とつとと我々は退散しなければ!!」

やべえ。

何この状況。

更に。

「セツヒトさん、いるかい?相談が……。」

「ソウジ。マシヨルクさんのサイン……。」

もう一度、状況。

更にやってきた二人、合わせて四人。

俺のベッドに片足をかけて近づいたままの、頬が赤いセツヒトさん。

真っ赤な俺。

「「「「「.....」」」」」

おそらく世界で一番間拔けな時間が、場を支配していた。

.....。

もうどうにでもなれ。

145 思い知らされました。

「ガー。」

「グー。」

「……………呑気な顔……………癒やされる……………」

衝撃的で間抜けな時間から、明けて次の日。

俺はふらつとガーグア達の厩舎にやってきていた。

色々あつたもんで、リフレッシュも兼ねてランニングを試みたのだが、この村は広い。
いや、村が広い、という表現は少し正しくない。

延々と続く畑。

村と畑の納屋と、その境界線が微妙なため、村の周回と言ってもどこを走ればいいのかからなかった、というのが正解だ。

チダイ村は一大農産地。

ワサドラにも結構な広さの畑が広がっているが、次元が違う。

北海道に旅行に行ったときのことを思い出してしまった。

人を見かけることも殆どない、のどかな道を走る。

少しずつ気持ちが悪くなる。

結構なペースで走るため、ワサドラではぶつからないように気を使うのだが……ここは楽だ。

そして10周を越えたところで、この厩舎に立ち寄った、というわけである。

「ガー。」

「グー。」

「……………」

間抜けな面。

これだけでコイツらは、かなり優秀。

天敵のジンオウガの縄張りにも臆することなく、忠実に走ってくれる。

おじさんの腕もあるのだろうが、これまでに何度も助けられた。

「今回ばかりは……助けてくれないよなあ……。」

* * * * *

昨日の出来事。

四人に、すごいところを見られてしまった。

セツヒトさんから告白されて、キョドツた俺。

グイグイくるセツヒトさん。

……あれは……キスをしようとしていたんだよな。

……。

……。

ま、まあそこはひとまず置いておいて。

そこから4人がなだれ込むようにやって来た。

いくら何でもタイミングが悪すぎた。

シヨウコは俺以上にテンパるし、教官はなぜかご機嫌だし。

フェニクさんは「そうきたか……。」「とか訳の分からんこと言うし、トツバはしらーつと俺を見つめるし。

そんな4人にどう言い訳したもんかと思ったら。

セツヒトさんが言い放った言葉。

これに全員が驚いた。

『あー……。ごめんねー、告つちやつたー。……。我慢ができないもんで……。』

これにはあっけに取られた。

漢らしいわ。

言い訳とか考えていた俺、恥ずかしい。

その後はもう、セツヒトさんに質問攻め。

俺はなぜかベッドの上に正座して、女性陣がくつちやべっているのを聞くばかり。

『せせせセツヒトさん!! ついに! ついにい!』

『落ち着いてよー、シヨウコちゃん。……。なんかごめん……。』

『い、いやいや! なんで謝るんですか!?!』

『えー、だってシヨウコちゃんー』

『す、ストツプです！……セツヒトさん、かつこええです！ウチも覚悟、決めました！』

『おー。さすがシヨウコ。私の親友。』

『と、トツバ……からかわんといてや……。』

当事者なのに蚊帳の外。

正座でかしくまる俺、かつこ悪い。

そんな時、フェニクさんが俺の横に座り、質問をしてきた。

『で？ソウジさん。返事はしたのかい？』

『……。』

『……その様子だと、まだみたいだね……。まあ、我々もタイミングが悪かったからね。』

ふう、とため息をつくフェニクさん。

すると、いつも以上にキリツとした顔で俺を見つめてきた。

『ソウジさん、いいかい？君は、自覚した方がいい。』

『…………』

『誰もが優しく、言わなかったのだろうけどね。…………無意識に人を傷つけてしまう、そういうことは、あるんだ。ああいや、今回の件に限らず、だけどね?…………君は今、あらゆる人間に好意を向けられている。…………これ以上は私が言う資格などないのだろうか…………これだけは言わせて欲しい。』

『…………はい。』

『まさか引き伸ばそうとか、そんなことを考えてはいまいね?…………もつたいつけるような人間は、碌なもんじゃない。…………普段の様子を含め、いい加減にしたまえよ?ソウジさん。いや、ソウジ君。』

…………これは効いた。

心の臓に、突き刺さった。

…………その後は見兼ねた教官に無理やり連れ出された。

教官に用意された部屋で、おじさんと男三人で、過ごさせてもらった。

脱ぎ癖がすごいセツヒトさんにも、気を遣ったみたいだ。

…………教官が俺とセツヒトさんに気を遣うなど、よっぽどである。

ちなみにおじさんは『やつとかよお!!』と言っていた。

何でも、中々仲が進展しない俺たちを見て、ずっとヤキモキしていたらしい。はたから見ても分かるような感じだった、ということだ。

……俺はその好意を、ずっと無碍にしていたわけだ。申し訳ない気持ちで、いっぱいである。

……以上、回想終わり。

* * * * *

『いい加減にしたまえよ?』

「うう……。」

「グアー……。」

「グー……。」

フェニクさんの言葉が何度も思い出される。

心が痛い。

情けない声が漏れる。

心配げに見てくるガーグー達。

……まあ本当に心配しているわけではないだろうけど、そう見えた。こいつらにまで心配をかけていては、もうダメの極みである。

「……………よう。」

セツヒトさんに返事をしなければならぬ。

セツヒトさんはああは言っていたが、これはケジメだ。

フェニクさんに言われたから返事をする、ではない。

俺が、そう思うから。

今まで何にも気づいて来られなかったから。

俺なりに、返事をする。

心を、決めて。

「いつまでもこのままじゃいけない、よな。」

「……………ガー！」

「……グー……。」

ガーグー達が「せやな」とでも言うように、俺に頭を向けてくる。

……いや、撫でろ、ということか。

もちろんいいけど。

「……………」

こいつらを撫でると。

何故だろう。

俺の頭には、あの人の笑顔が浮かんでくる。

勤勉で、たまにドジで、いつも俺を一生懸命に応援してくれて。

俺がハンターとして生きると決めた、その初めの初めから付き合ってくれた、あの人。

俺の強さとか、見てくれとか。

そういうところではなく、純粋にハンターとしての俺を支えて続けてくれた、あの人

の笑顔が。

支えてくれた人は、他にもいる。

更に頭に浮かぶのは、俺の最高の相棒の姿。

いつも一生懸命で、俺のそばにいつも居て、叱咤激励してくれて。

自分の境遇に屈することなく、常に明るく場を照らしてくれる、相棒。

とても頼りになる、相棒。

世話になっていてというなら、俺を一番に親身に思ってくれているあの子も、忘れてはならない。

この世界に来て、何も知らない俺を、温かく迎えてくれて。

あの子といると、心底安心する。

若いのに、落ち着いていて、気兼ねなく話ができて……そんな関係性が、とても心地よい。

「……俺は何て失礼な奴なんだ……。」

セツヒトさんに気持ちを打ち明けられたばかりだというのに。

次から次へと違う女性を思い浮かべてしまった俺は、やはりダメなやつだ。

フェニクさんの言う通り。

いい加減にしよう。

「……さて。」

自分のことばかり考えてもいられない。

一先ずは、これから先の事。

ラージャン討伐の報告……あの黒いモンスターについて。

喫緊の課題であり、俺のレベルアップには欠かせない、装備の新調について。

そして、シガイアさんから言い渡されている、赤い目のモンスターの件。

その辺も、何とかしないと。

「よしっ！」

気合を入れ直して、厩舎を後にした。

とりあえず、セツヒトさんには普通に接しよう。

ワサドラに帰って落ち着いたら話をしませんか、と。

そこだけ、伝えよう。

俺は、長閑な村の通りをゆっくりと歩き出した。

* * * * *

一日経って、俺の体はかなり良くなっていった。

シヨウコからはいつものように、「その回復力、引きますわあ……。」とお褒めの言葉を預かった。

ものすごくポジティブに、ありがたくその言葉を受け入れることにした。

セツヒトさんは見た目元氣そうだったが、詳しくはわからない。

だが、なるべく早く早く医者に診てもらった方がいいだろう。

毒矢をさされたというのに、「あいつにも色々事情があるんでしょー。」と、犯人の男を擁護するようなことを言っていた。

仏か。

そして、お世話になったイパスさんに、礼を言いに行った。

「もう少し居てくださって構わないのですが……申し訳ありません。ここには首都やワ

サドラのような腕のいい医者はおりませんで……。」

「いえいえ、そこまでの距離じゃありませんし。こんな大人数を泊めていただいて、ありがたい限りです。」

「そう言っていたら、大変ありがたい限りです。ソウジさん……。」

「……………ど、どうしました？」

「また、遊びにいらしてくださいね？ ラージャンの討伐というあなたのハンターとしての大きな節目に立ち会えたこと、誇りに思っております。」

そう言うと、イパスさんがその円縁のメガネを外した。

なーんかこの人怖いんだよなあ……。

含む言い方が多すぎて、もう訳がわからなくなる。

「あ、ありがとうございます。」

「個人的に、ええ、個人的にはありますが……私は、あなたの進む道を邪魔はしないと、ここに明言いたします。」

「……………そ、それはどうも。」

そ、それはあれか？

中立の立場にある、大陸に大きく影響を持つ人物として。

俺の味方でいてくれる、とか……そういうこと？

「どうか、道中お気をつけください。南からの風が、ここのところ強いようですから……。」

「……………あ、ありがとうございます!!それでは、失礼します!!」

ダダっ!!

バタン!

「ふ、ふー……………」

あー怖!

もう色々背負いたくなくて、逃げ出すように部屋を出てしまった。

南風。

南。

……首都、だよなあ……。

あの人、何からどこまで知っているんだろう。

……できるなら今後とも、あまり関わりたくはない方であった。

* * * * *

「道中気をつけて行こう、おじさん。」

「おう、フェニクさん……だったか？頼りにしてるぜ！」

「ああ。まあこの車には、最強の御仁がいるからね。護衛として情けない話だが、安心だよ。」

チダイを出発してから数時間。

御者台に座るおじさんとフェニクさんが話をしている。

頼りになる御仁。

それはもちろん、この方である。

「はーはっはっはっ!!気持ちがいいものだな！幌の上というのは!!」

マシヨルク教官。

恐らく、セツヒトさんに並ぶ最強の一角。

「教官！なんで仁王立ちで突っ立ってるんですか!!」

「見張りを行っているのだ！私が気配を出して、モンスター一匹寄せ付けないと約束しよう！」

「あ、教官もそういう部類でしたか。」

セツヒトさんもいつだかやっていたが、殺気を放ってモンスターが近寄ることさえ許さない芸当。

意味がわからなかったが、どうやら俺の知り合いは意味わからん連中ばかりのようだ。

まあ……教官なら落ちても死なないだろう……。

よし、放っておこう。

それに、荷台の中に入られたら、正直困る。

「あいつー……うるさいんだよーもー。」

なぜなら、セツヒトさんがここにいるから。

荷台にいるのは、俺、セツヒトさん、シヨウコ、トツバ。

教官とセツヒトさんが犬猿の仲になっているのは、全員知っている。

おじさん以外。

「ご、ご主人様……セツヒトさん……マシヨルクさんに怒ってるんちやいます?」

「うーん……まあ何だ、気にするな。」

「ど、どうしてご主人様はそんなに落ち着いているんですか……。」

「……慣れた。」

どうにもならんことがこの世にはあるのだ。

二人の関係は、色々と深い事情があるからなあ。

「慣れって……そ、そういえばご主人様、セツヒトさんにご返事は……。」

「ああ……色々考えた。……セツヒトさん。」

「んー？何ー？ソウジー。あとー、せつちゃんー。」

俺とショウコがいるのは荷台の前方、おじさんの後ろ。

荷台の後方には、過ぎていく景色をぼーっと見つめるセツヒトさん。

そんないつもより少し落ち着いた様子のセツヒトさんに、話しかける。

「せつちゃんさん……横、失礼します。」

「何ー？そんなに私にくつつきたいのー？」

「いえ、話がしたいんです。……ワサドラに着いて、落ち着いてから。」

「お、おー……。うん……。りよーかい。」

「……ありがとうございます。」

いつも通りのテンション。

軽いイジリは、今回ばかりは完全にスルーしておいて。

要件だけ伝えると、俺は荷台の中央に腰を下ろした。

「ご主人様……胎決めたんですね……いいです！男らしい！」

「な、何を言うか！俺はいつでも男らしく……無かったなあ……。」

今までの所業を思い出して、ヘナヘナと力が抜ける。

失礼すぎる。

かつこ悪すぎる、俺。

「ご、ご主人様!?ど、どうしたんです!?」

「い、いや。おれ、かつこ悪いなあと……。」

「ソウジ。はつきり言つて身から出た錆。昨日のフェニクの言葉。とくと味わうとい
い。」

「うぐつ。」

『いい加減にしたまえよ?』

ああああああ。

トツバの言葉がクリーンヒット!!

俺の精神に百万ダメージ!

ついでにフェニクさんの言葉も思い出して追加百万ダメージ！
恐ろしいコンビである。

「……………まーまー、トツバちゃん。これがこいつの良いところでもあるんだからさー。許してやってよー。」

「だめ。こういう男は周りまで駄目にする。おしおき。セツヒトもみんなも苦しんだ。」

うぐう…………。

正にぐうの音も出ない。

いや、ぐうの音だけしかでない。

「そーなんだけどねー。…………ソウジー、ごめんねー。フォローできないわー。」

「い、いえ、いいんです…………俺は…………最低です…………。」

「アカン…………ご主人様が真っ白になつとる…………。」

「んー、ちよつとだけー、いい気味ー。でも可愛そうだから…………。」

ヘナヘナを通り越してヘニヤヘニヤ。

そんな俺の耳元に、セツヒトさんが近寄ってくる。

「そんな情けないソウジも……いいよね……。 (ボソツ)」
「……………っ!!」

……………ボンツ!

一瞬で顔が赤くなる。

おお………今のは効いたわ……。

「………セ、セツヒトさん、何言うたんですか!？」

「んー?………ワサドラまでの、牽制ー?」

「い、いや聞かれても……。」

「………シヨウコちゃん、私やるときはやるからねー?」
「!？」

「んふふー………がんばろうねー?」

「う、うぐぐ。」

「フアイト、シヨウコ。」

女性陣がギャーギャー何かを言い合う中、俺は荷台に横たわったまま。移動一日目はこうして過ぎていった。

あ、あと半日もあるのね……。

* * * * *

その後も無事に移動を終えた。

ワサドラにたどり着いたのは、チダイ村を出発して一日と少し。

「やっぱり一流と移動すると楽だわー」とおじさんが言うように、来たときよりも更に早くたどり着いた。

教官の殺気。恐るべし。

ちなみにその教官は昨晚、セツヒトさんと何か話しているようであった。

ステゴロの喧嘩でもおっ始めないかと心配したのだが、杞憂に終わったので、そこは安心した。

シヨウコなんか「ご、ご主人様、止めてええんですか!？」と、めちやくちや心配してたけど。

あの二人にも色々あるのだし、いい大人だ。

むしろ良い機会だと思つて、何もしないことにした。

何を話していたのか気にはなるが……次の日のセツヒトさんがそこまで機嫌を悪くしていなかったので、悪い話し合いではなかったのだろう。

「それじゃおじさん、ありがとうございました!移動、お疲れさまでした!」

「おうよ!また呼んでくれよな!ソウジさんなら、口ハでもいいぜ!」

「いやいや、そこはちゃんとお金払わせて下さいよ。」

「ははははは!まあ冗談だけだよ!……あー、まあ、何だ。ソウジさん。……頑張れよ!」

「……はいっ!」

「おう!いい返事だ!それじゃあな!!」

おじさんにお礼を言つて、そこで別れた。

いつもいつも気さくで、且つ素晴らしい仕事ぶり。

かっこいいぜ。

これからも懇意にさせていただきたいものである。

「さて……それじゃまず、ギルドの医務室に行きましようか。すぐ報告もしましよう。」

「はい……フェニク、おんぶー。」

「えっ!?……わ、私か!?それはお安いご用だが……。」

思わぬセツヒトさんの言葉に、戸惑うフェニクさん。

しどろもどろになるこの人も、珍しい。

こういう時のセツヒトさんは強い。

だが、より強引なお方がここにいるのを、忘れてはならない。

「何だセツヒト! 情けない! ほら、私が肩を貸してやろう!」

「……絶・対・嫌ー!」

「ははははは! 何! 遠慮するな!」

「人の話を聞けー!!!」

ヒョイツと担がれたセツヒトさんは、多少ジタバタしたものの、何とまあ大人しく教官に担がれていった。

……お、おおお。

な、何があつたんだあの二人。

そんな姿を見て、シヨウゴが話す。

「何か……滅茶苦茶仲の悪いきようだいみたいですね……。」

「あ……それだわシヨウゴ。しつくり来た。」

「……お二人は仲が悪いと聞いていたが……そこまではないのだな。」

「フェニクさん。いや、珍しいですよ。俺も驚いてます……昨晚何話したんだろう……。」

二人の事情を結構知っている俺としては、ちよつと驚き。

……少しは和解したのかな……。

嬉しい。

「……らー!!もうちよつと優しく運べこのバカマシオルク!!」

ズドゴオン!!

「ぐうおおお……い、今のは効いたぞ! セツヒト!

「……………ふんっ!」

スタスタスタスタ……。

な、仲良くなったのかなあ……。

うん、そういうことにしよう。

俺たちも後を追うように、ギルドに向かった。

……人の頭を殴る音ではなかったぞ……。

* * * * *

ギルドは、ちょうど混雑時間が終わったところであった。

まだハンター達は結構いたが、朝と夕の渋滞ほどではない。

入り口に入ると、中がめっちゃザワザワしだした。

……まあ、確かに。

教官にセツヒトさん、人気の高いシヨウコ、美人でかつこいひフェニクさん。

トツバも……まあマニアックなお方にはどストライクだろうし。

話題には事欠かなそうなメンツである。

ちなみに、ギルドに入る時には流石に教官もセツヒトさんを下ろした。

ムスツとしながらスタスタと医務室に向かうセツヒトさんが、ちよつと可愛かったの

は黙っておこう。

そんなザワザワとした雰囲気の中、フェニクさんが口を開いた。

「さて……ソウジさん。我々は別口の依頼だからね。報告はこちらで済ませるよ。護衛と狩猟はまた扱いが違うようだね。」

「あ、そうなんです……わかりました。その、色々ありがとうございました。……助

かりました。」

「ははは、ラージャンを倒した人間に頭を下げられては困るんだがね……………あー……………その、ソウジさん。」

「はい?」

フェニクさんは、俺達とは別に報告する必要があるらしい。

一緒にすれば効率的だと思っただが。

報酬の出所が違うからだろうか?

……………まあ考えても分からん。

そのフェニクさんは、なにか言いたげにモジモジしている。

この人の珍しい姿を、今日はよく見るなあ。

「……………ソウジさん、その、昨日は言いすぎてしまった。済まない。」

「い、いやいや。その、俺も色々と反省しました。……………ありがとうございます。」

「……………ああ。次は是非、クエストでハンターとして、ともに戦いたいものだ。色々教えてほしい。」

「俺なんかで良ければ……………是非。」

「ああ。それでは、な。行こう。トツバ。」

「ソウジ、シヨウコ、ファイト。じゃ。」

スタスタスタ……。

二人がハンター用の受付とは違う方に向かっていった。

何気に今回とても助けられた二人である。

もし今回彼女らがいなかったら……苦しかっただろう。

次は厄介なクエストではなく、一緒に狩りを行いたいと思う。

さて。

俺たちもラージャン狩猟を報告したいところだけど……。

「お、お疲れさまでした！みなさん！」

「あ、ハイビスさん。」

俺たちを見つけると、いつもの受付嬢の制服を着たハイビスさんが走り寄ってくる。

眩しいその御姿に、いつもなら心の中で感謝申し上げるところなのだが……。
どうにも何だかドキドキしてしまう。

……セツヒトさんの告白のせいか、意識している俺。

……アホか。とつとと本題に移ろう。

仕事だ、仕事。

「すみません、ラージャン捕獲の報告をしたのですが……。」

「ええ！もちろん！狩猟、本当にお疲れ様でございました。みなさん、ギルドマスター室までお願いします。……あれ？セツヒトさんは……。」

「……色々と、事情が。とりあえず、セツヒトさんが怪我をしました。」

「えっ!?!?」

「医務室にいつてもらっています。命が、とか、そこまでではないと思うんですが……。」
「……………わ、分かりました。」

顔が白くなるハイビスさん。

仲良くなったもんな、セツヒトさんとハイビスさんの二人。

そもそもセツヒトさんが怪我する姿が想像できない。

「……よかつたら、医務室へ行かれては？」

「えっ。」

「心配……なんですよね。」

「……………す、すみません。すぐに戻りますので！み、皆さんはお部屋まで、どうぞ！」

タツタツタツ……。

「医務室のある方まで駆けていくハイビスさん。」

まあ、俺たちが報告すれば……問題ないだろ。

セツヒトさんとハイビスさん、かなり仲良くなつたよなあ……。

そんな一部始終もあり、周囲からの視線が熱い。

「おそらく、ラージャン捕獲の報告は来ているが故、こうも周りに見られるのだろうか！

なに、気にせず堂々と行こう！」

「ウチ……ちよつと恥ずかしいです。」

堂々としていられる教官の方が珍しいと思う。

* * * * *

コンコン。

『はい。空いております、どうぞ。』

「あ、失礼しまーす……。」

ガチャ。

ゾロゾロとシガイアさんの部屋に入る俺たち。

シヨウコに教官、そして俺。

セツヒトさんはまだ診察中。

「皆さんお揃いで。狩猟、お疲れさまでした。」

「いえ。」

「狩猟の簡単な内容については、先程伺いました。マシヨルク、報告助かった。どうやら力になれたようだな。」

「ああ！だが、正直ギリギリだったな！ソウジ君！」

「はい……教官が来てくれなかったら、多分俺……。」

「……ははは、なるほど。その辺も含めて、お話を聞きましょう。」

革張りのソファに腰を下ろした俺たち。

物珍しいのか、シヨウコはキョロキョロとして落ち着かない様子である。

猫っぼい。

「じゃあですね……。」

腰を落ち着けたところで、シガイアさんに詳細を伝えることにした。

146 報告と考察をしましょう。

ワサドラギルドのギルドマスターの部屋。

その重厚な部屋の内装は、ギルド全体の外観と非常にマッチしている。

床から壁まで石造りの部屋、その正面奥にはシガイアさんのデスク。

そのまた後ろには、大量の資料や書類がまとめられ、整然と並ぶ。

デスクを正面にして左には、革張りのソファと大きな机。

何度も足を運んできたが、やはりここに来ると一段と気が引き締まる。

「……そうですか。やはり、妨害が。」

「……はい。すみません、わかっておきながら防げず。」

なので、話の内容も相まってどうしても緊張してしまう。

セツヒトさんの負傷、しかもモンスター由来ではなくおそらく誰かしらの差し金によつて。

クエスト前のシガイアさんの心配が的中したことが、また雰囲気重くしていた。

「……色々とご報告、ありがとうございます。ひとまずはラージャンの狩猟が出来たと、安心しております。」

「ギリギリでしたけどね。……教官がいなかったら、多分俺、今頃ここにいません。」

「マシヨルクが間に合ってよかったですよ……マシヨルク、助かったよ。ありがとう。」

「正直、最高のタイミングだったと言わせてもらおう！ソウジ君が私に惚れてもおかしくなかったな！」

「惚れるか！」

「……………その話はひとまず置いておきましょう。……………うーん。」

一通り報告を終えた俺は、ソファに深く腰掛けた。

隣にはシヨウコ、向かいにはシガイアさん。

なぜか教官は俺の後ろに仁王立ち状態である。

座ってじつとするとか、苦手なんだろうな……。

考え込んでいるシガイアさんが再び口を開いたのは、それから10秒ほど経ってからだった。

「……マシヨルク、捕まえた奴は、今どのように。」

「首都ギルド北支部に直接連れて行くように仕込んでおいた！中央には中々伝わるまい！時間の問題だとは思わがな！」

「本当か？」

「イパスというあの女傑に頼んでいる！金銭と私の立場も添えてな！あれは相当に慎重で頭が回る人物であった！滅多な事にはならないと思われる！」

「……いいでしょう。マシヨルクにしては、及第点です。」

「うむ！……それにしても、あのフェニクという女性は優秀だ！大体の事情は割れた！尋問も相手を傷つけない素晴らしいものであったぞ！」

「いい人材がいて助かった、か……。いいですね、運がこちらに向いています。」

教官とシガイアさんの会話。

詳細がよく分からないが、マシヨルク教官がかなり動いてくれていたようだ。

しかし、中央とか北支部とか、よくわからない単語が続く。

なんのことだろう。

以前少し聞いたことがある気がするけど。

「ご主人様……ウチ、ちんぷんかんぷんなんですけど……。」

「安心しろ。俺も半分もわからない。」

「ああ、これは失礼しました、シヨウコさん、ソウジさん。少し業務の進捗具合を確認しておりました。」

「は、はあ。」

シガイアさんが「説明しますね。」と言うと、スツとソファから立ち上がり、自分のデスクの引き出しから何かを持ってきた。

くるくる巻きにされた紙。

机に広げられると、中身はどこかの地図のようであった。

シヨウコが興味津々で見つめている。

「お待ちせしました。こちらは、首都の地図です。」

「あ……へえ。結構大きそうですね……。」

「実際とても大きいんですよ、シヨウコさん。……土地面積だけでも、ワサドラの10倍。人口で言う……ざっと20倍、ほどあります。」

「にっ!?……そんなに……?」

「はい。首都だけではなく、その周辺も合わせて、ですが。……比例して、ハンターの数も凄まじいです。そのため、ギルドは一つではまかない切れません。ですから……。」

「……東西南北の支部と、中央本部が存在する……でしたっけ？」

「おお、覚えてらっしゃいましたか。流石ソウジさん。」

以前シガイアさんから軽く聞いたこと。

首都も一枚岩ではなく、それぞれに支部がある。

そして、それぞれが仲良くやっている……というわけでもない。

人の世はどこも似たようなもんだなあ、と妙に納得してしまった記憶があるけど……。

「私の掴んだ情報ですが、今回襲撃してきたハンターをけしかけたのは、首都ギルドの中央本部、そこに近い人間です。」

「……中央。」

「はい。……長くなりますが、背景から説明します。」

そこから、シガイアさんによる大陸の歴史の授業が始まった。

この大陸の歴史は、割と浅いらしい。

まず、別の大陸から入植が始まったのが今から数百年前。

いきなり驚かされたが、この大陸以外にも文明があるという。

俺のマップもそこまでは表示されないの、目から鱗だった。

大陸の一番南の大きな港街、ナニンチ。

入植初期に、最も栄えた街だという。

だが、海棲のモンスターの被害が絶えず、その北の内陸側、大きな川がナニンチとつ

ながるところに街が移りだした。

そこが、ザキミーユシテイ。

この2つはセットで覚えるといいようだ。

大陸との交易で相当に栄えたザキミーユは、さらに入植範囲を拡大。

肥沃な土地、チダイ村周辺を一体とする一大農産地、チダイ平野。

さらに北、俺たちがいる大陸中央のワサドラ。

そして更に北西、北部山地のタオカカとその周辺。

北東には大草原が広がり、大陸先住民である放牧の民が移動集落を構える。

そういった様々な地方に、人間が次々に入っていった。

入植が進み、人口も増える。

次第に大陸からの交易はもとより、この大陸で生まれる様々な資源で、どの町も潤ってくる。

特にモンスター素材は重要。

その際、交通の要衝、いろいろな地域にアクセスも良く、ハンター達の人流もどんどん増える街。

ワサドラが台頭してくる。

「ワサドラって、かなり重要な所なんですな……。」

「このワサドラだけではなく、どこもかしこも最近かなりの発展を遂げていますが、近年の勢いで言えばここが一番でしょう。何よりも大切なハンター人口というリソース、これが増え続けているのが大きい。」

「……なるほど。……でもそうすると……。」

「はい、ソウジさん。気づかれましたか。」

「へっ!? ウチ、よう分からんのですけど……。」

「……多分だけどな、シヨウコ。こういうことだと思う。」

この大陸で覇権を取ってきたのは、ザキミーユ。

まあ、それはこれからも揺るがないだろう。

ところが、最近になって大陸内部での需要と供給のバランスが取れ始めてきた。当然その大陸の地理的中心として位置するワサドラは発展する。

美味しい思いをしている、と悪い方に勘繰る輩もいることだろう。

そしてそんな輩は……恐らく首都に多くいる、ということになるだろう。

「さすがですね。ソウジさん、おそらくあなた……高等教育は修了されていたのではないですか？」

「ま、まあ……そういう世界にいましたからね。」

「こ、こうとう……？ご主人様ってそんなに頭よかつたんや……。」

「いやまあ、そういう社会だったから……。それにこれは、与えられた材料から推測しただけだぞ？」

「そ、それすら出来ひんかったウチって……。」

うなだれる様子のシヨウコ。

だが、落ち込むことはない。

これに似たような話は、俺の前世でも吐いて捨てるほどあったわけで。

そこから考えたに過ぎない。

そして、更に考えられること。

なぜ、今回のような事態に至ったのか。

「シガイアさん、今回のクエストは、ラージャンの狩猟でした。その貴重な機会を、首都は俺たちに譲った形、ですよね。」

「はい、そうなりますね。」

「それを邪魔したかった、という背景は分かりました。……歴史的な部分でも、どうやら一筋縄ではいかない、ということも。」

「はい。」

「それで、今回消極的な妨害に及んだ。俺が負傷して、狩猟に失敗、首都に泣きついてくればそれでよし。ラージャンに俺が殴り殺されでもすれば、それもまたよし。実力の見合わないハンターを派遣したワサドラギルドの失態ととれる。そこを非難して発言力を弱める……こんな所ですか？」

「……はい、大変素晴らしいです。私の見解とソウジさんの見解は、概ね一致します。」

お褒めの言葉を頂いた。

なるほど、それで一人だけの下手人、だったわけだ。

別に俺を抹殺することが目的なら、より大人数を寄越せば済むわけだ。

ところが、足がついたらそれはそれで面倒なことになる。

だから、辿っても足がつかないような、下つ端の食い詰めたハンターに依頼したわけか。

「ソウジ君は聡明だな！前世の知識とやらはかなり有用なようだ！ぜひギルドナイトに——」

「マシヨルク。シヨウコさんもいるんだぞ。」

「いいではないか！聞かれて困る話でもあるまい！」

「困るんだよ、本当に……シヨウコさん、ここで聞いた話は、他言無用でお願いしますね。」

「は、はい……。」

俺の後ろでソワソワしていた教官が、意気揚々と声を上げる。

そんな大きな声で褒められたら……少し恥ずかしい。

その前でシヨウコは縮こまっている様子。

余計にちつちやくなってしまうて、こんな色々な秘密に片足突っ込んでしまつて……
可哀想に。

……俺なんか全身どつぷり突っ込んでいるけどな！

「ひとまずは、ラージャンの素材を得ることができた。しかも完全に我々の手で。これは大きいです。もちろんソウジさんの新しい防具、これに必要な素材は都合をつけさせてもらいますよ。」

「ああ、助かります……ようやく揃つた……。」

『ハンターの素材集めは修羅の道』といいますがからね。おめでとうございます。……で、ここからはマシヨルクの報告に移ります。マシヨルク、首都の動向を端的にまとめてもらえるか？」

「うむ……シガイアさん！ソウジ君たちに聞かせても大丈夫だろうか！」

「えつ。じゃ、じゃあ俺たちは席を外してー」

「ええ。大丈夫です。お願いします。」

……。

ま、巻き込む気満々ですね……。

まあいい……もう引き返せないところまで来ているし。
毒を喰らわば何とやら。

「よしーでは……。」

何が「よし」なのかは知らんが、教官がまたも意気揚々と話し始めた。
シガイアさんもメモを取り出している。

……本当に俺たちがいいのか。

「中央はその西方、禁足地に目を向けている!!」

「禁足地……あんな何もないとどこに?」

「うむ! 中央幹部の話であるからして、確度は高い! 数年前のリオレウス・リオレイア首都襲来に関連している、ということまでは掴んでいる!」

「関連とは、どのような?」

「……調査中だ!」

「……いいでしょう。十分すぎる情報だ。」

リオ夫婦の襲来つて……教官が「カホ・チータ」に居た頃、首都で防衛に当たったという……あの？

関連しているつて……どういうことだろう。

「ハンターたち、それもかなりの手練れを、大陸の外やザキミーユ全体から集めているな！ 数はそこまでではない！ 実力は私には劣るようなハンターたちだが、積極的に狩猟を行っている！」

「……リオ夫婦襲来の時と同じ、か。」

「うむ……考えたくはないが、大陸全体のモンスターの動きが活発になってきていることと関連しているのかも知れん……首都に舞い込むクエストの数も急増している！ にも関わらず、中央は王族依頼のクエストに躍起だ！ 各支部の中央への不満も、相当に溜まっている！」

「……各支部長とコンタクトは？」

「中央以外は、いつでも連絡できる状態にある！」

「素晴らしい……流石ですよ、マシヨルク。」

「この二人の関係性がよくわからない。」

だが、教官がどうやらない仕事をしている、というのはわかる。

ニコニコと笑うシガイアさんが、正直怖い。

……この人は、やはり読めないなあ……。

「……ソウジさん。」

「あ、はい。」

話の途中で、シガイアさんが俺に話しかけてきた。

「話を二人で進めて申し訳ありません……ただ、今回の件、ソウジさんも無関係ではなさそうなんですよ。」

「えっ？ラージャンの狩猟がですか!？」

「いえ……赤い目の件です。」

「赤い目……。」

おそらく狂竜症の症状の一つであろうという、俺のこの赤い目。

ギルドに帰る際、窓の中の自分の目は変わらず赤かった。

もう一生このままか、とも思ってしまうが。

「報告にあつた……黒い竜、なのですが。」

「は、はい。」

「……おそらく、ソウジさんの赤い目の原因は、十中八九その竜でしょう。見た途端、ソウジさんに痛みが走つたなど、もう間違いないとしか言えません。……その足取り、現在すでにギルド……ワサドラギルドで掴んでおります。」

「………本当ですか!？」

「はい。観測班が頑張ってくれましたよ。」

すげえなギルド職員つて。

ラージャン討伐からまだあんまり時間経ってないのに。

尊敬。

「現在もそのモンスター足取りを追っています……ワサドラ西部の先の丘陵地帯。そこに行き着いたそうです。」

「………おほ……。」

「さて、ここからが本題です。ソウジさん……確か以前、黒い霧を体から出しているタマミツネ。その討伐時に、体調に異変が起きた、ということでしたよね。」

「あ、はい。そこからこの赤い目が始まりました。」

「これは推測ですが……まずその黒い煙というものは、どうやら狂竜症として伝染する。モンスターからモンスターに。また、人間も例外ではなく、影響を与えていく。ソウジさんも、大量に霧を吸い込んで発症した。ソウジさん自身が黒い霧を出す、ということは今の所なさそうですね。……そして今回、黒い龍を見て、ソウジさんは体に異変を覚えた。」

「は、はい。」

「まあおそらく、黒い霧の原因は、その黒い竜である、ということですよ。」

「……アイツが……。」

段々と繋がってくる。

俺は、沼地でタマミツネの討伐を行なった際、黒い霧を吸い込みまくった。

そして、いきなり体力が無くなっていった。

避け続け、攻撃し続け、何とか回復したけど……あれはかなり辛かった。

それが狂竜症の初期症状。

なぜ克服できたのかは知らん。

そこから目が赤くなった。

あんまり影響もないかとも思ったが、湖で黒い龍を確認、その時に体が疼くような痛みが続いた。

ラージャン戦でも症状は再発。

一時だけ急激にパワーアップして、そこから急に力が入らなくなった。

死ぬところだった。

……つまり俺って、その黒い龍とやらの影響を受けて、強くなったり弱くなったりしているってこと？

しかもこれ、モンスターや人間に関わらず、誰にでも起こりうるってこと？

一般人……子どもやお年寄りも？

……それってまずいのではないだろうか。

「……民衆の皆が皆、ソウジさんのように症状を克服できるとは到底思えません。ソウジさんはモンスターに立ち向かい続け、いつの間にか克服したようですが……普通の人間には厳しいでしょう。そして霧の影響で強化されたモンスターの個体も、すでに何体か確認できています。更に、黒い龍が飛んできたのは、ワサドラの近く。」

「……あ、あれ?……ヤバくないですか!?

「はい、ヤバいんです。」

飄々と言つてのけるシガイアさん。

だが、雰囲気は至つて真剣だ。

「既にモンスターの動きはおかしいことは、以前お話したとおりです。数年前、タオカカ近辺に獄狼竜が現れたケースとは少し違いますが、出没するモンスターの種類が半端ではない。そして狂竜症を発症していると思われるモンスターも既に確認。いずれも、桁違いの強さ。」

「……………」

「もうお分かりでしょう……ワサドラ周囲一帯が、すでにまずい状況にあるかもしれない、ということですよ。」

「……マジですか。」

「ご、ご主人様……………」

シヨウコが不安そうな声を漏らす。

それもそうだ。

俺たちの街やその周辺が、ピンチに陥りかけているかもしれない。

そういうことなのだから。

「観測班からの情報では、黒い竜は丘陵地帯にねぐらを作り出している、ということでした。」

「じゃ、じゃあこのままだと……？」

「……その見立てが正しければ、周囲一帯のモンスターの狂竜化が止まらないだろうな！」

教官が不吉な予測を立てる。

……マジで？

だってタマミツネの狂竜化个体、めっちゃ強かったぞ!?

そんなモンスターが溢れたら……。

あ、マジでやばい気がしてきた。

「とはいえ、まずはワサドラギルドの上位ハンターたち、彼らにパーティーを組んでもら

い、その黒い竜の観測に向かつてもらいましょう。いけるなら、そのまま討伐してもらいます。」

「お、俺は……。」

「早急に、傷を癒して防具の新調を。今のところマシヨルクもいますし、負傷はしていませんがセツヒトもいる。ですが、他のモンスターのレストランが始まったら……ソウジさん、HR7のあなたにも狩猟に出てもらいます。」

「……。」

真剣な目で俺を見てくるシガイアさん。

セツヒトさんから聞いた、ミヨシ村壊滅の悲劇。

二度と引き起こしてなるものかと、シガイアさんは躍起になっている。

もちろん、俺だって同じ気持ちだ。

俺だけならまだいいが、他のいろんな人たちまで、変な病に犯されているのなんて……見たくはない。

力になりたい。

「……承知しました。俺がどこまで力になれるかわかりませんが、やります。」

「ありがとうございます。ご負担ばかりをお掛けします。」

「いえ。俺の周りを力が及ぶ範囲は、できるだけ守りたい。その為なら、骨が折れたつて、やりますよ。狩猟。」

「骨が折れる前にウチが止めますけどね！」

「はははは……いや、シヨウコさんはいいオトモですね。」

「ええ。俺の最高の相棒です。」

「そ、そんな……生涯最高で最上の伴侶やなんて……。」

「何を言ってるんだお前は。」

テレテレしているシヨウコ。

なぜ体をくねらせる。

「それでは……それぞれ行動に移りましょう。マシヨルク、早速だが、竜便を飛ばしてほしい。」

「うむ！承知した！」

「急ぎで頼む。禁足地とやらに目が向いている今がチャンスだ。首都各支部に連絡を。」

「あ、じゃあ俺たちは一旦宿に戻っても？」

「はい。どうも、ラージヤンの狩猟、そしてご報告、お疲れ様でした。またよろしくお願
いします。」

「はい、失礼します……行くぞ、シヨウコ。」

「は、はい。」

スタスタスタ。

バタン。

報告も終わったので、早々に出ていくことに。

「よ、よかったんですか？まだ色々話をされてましたけど……。」

「あれ以上関わってもなあ……。」

まあ既に手遅れなんだけど。

「ウチ……よう話がわかりませんでしたけど……ご主人様！」

「ん？どうした？」

「……がんばりましょう！ウチも、力になります！」

「……ああ。一緒に頑張ろう！」

「がんばってください」ではなく、「がんばりましょう」。
やっぱりシヨウウコは俺の最高の相棒だ。

「とりあえず……セツヒトさん、見に行こうか。」

「そうですね。」

結局ここにはやって来なかった。

状態も気になるし、一度見に行こう。

ラージャンの討伐。

黒い竜の出現。

そして、ワサドラの周辺の状況。

気になることは色々あるけれど。

一先ずは、俺の命の恩人のセツヒトさんが一番心配だ。

俺たちは揃って、医務室に向かうことにした。

147いつもの日常を、噛み締めましょう。

コンコン。

『はい、どーぞー。』

間の抜けた声が部屋の中から聞こえる。

セツヒトさんの声だ。

ガチャツ。

「失礼しまーす……。」

「おー、シヨウコちゃんにソウジー。おつかれー。」

「いえ、どうですか？ 体調の方は。」

「あー、問題なっしんぐー。」

やってきたのは、俺もいつだか世話になった入院用の部屋。デインバルドにやられた際、1日だけ入院させてもらった。

夜には女神様に来て、翌朝には教官とイシザキさんがなぜか俺のベッドを枕に寝ていて、全く休んだ気がしなかった覚えがある。

部屋にいたのはセツヒトさんだけ。

三角巾を首から右腕に掛け、ベッドに座っていた。

ハイビスさんもいるかと思っただけど……もう戻ったのだろうか。

しかしセツヒトさんがこの部屋にいるということは……。

「問題なしって……この部屋にいるってことは、入院なんですよね？大丈夫なんですか？」

「あー、私の場合さー、例の古傷もあるしねー。当たったところ、まさにそこだしー？毒も食らってるから、様子を見たいってさー。」

「あ、なるほど。……腕は上がるんですか？」

「……試したくないい。」

「……はっ。」

「だから……試したくないのー。」

駄々っ子のようなことを言うセツヒトさん。

何を今更。

骨を折ってリオを狩った方のセリフとは思えない。

「ほらー、これでさらに悪化してー、もう狩猟は行けませんなんて言われたらさー……
そ、ソウジに嫌われないかなーって……。」

「……そ、そんな理由……。」

「そんなって何さー。もうこっちは本気なんだよー。こうなったらソウジにガンガン行
こうって決めた矢先にこんなさー。怖いじゃん……。」

「……………」

俺に嫌われたくなくて、腕が上がるかどうか試してないってこと？

……。

……い、いやなんだそりゃ。

え、えーつと……セツヒトさんが俺のことを……まあ、そういうお気持ちなのはあり
がたいと思いつつ……。

それとこれとは別問題。

というか俺がそんなこと気にするわけなからう。

「……せつちゃんさん。」

「……何さー……。」

何故かムスツとしているセツヒトさん。

完全に意地を張る子どもである。

「……まず、セツヒト……せつちゃんさんの体調がとても気になるんです。その、俺を庇つてできた傷な訳です。それに……あんまり考えたくないですけど……万一、腕がどうにかなくてたとして……そんなことで嫌いになるわけじゃないです。」

「そんなことつてー……だって私はソウジにとって最強なんですよー？……強くないとーー」

「いいえ、関係ないです。……これから俺とセツヒトさんがどういう間柄になろうが、この件は関係ない。……もう一度聞きますけど、腕、本当に大丈夫ですか？」

俺の為に傷ついてくれた。

そんな人の体調を気にして、何が悪いというのか。

心配なのだ。

割と、本気で。

「……………」

「……………せつちゃんさん。どうなんですか。」

「……………ちよ、ちよつとだけ……………痛い。」

「……………動かしたり、上げたりは……………」

「……………」

セツヒトさんは少しの無言の後、ベッドに座ったまま三角巾を取り、腕をゆっくり上げ下げした。

「……………ちよつとまだ痛むけど……………だ、大丈夫、かな。」

「……………本当ですか？」

「ほ、本当だよ。痛むのは傷のところであ、その、獄狼竜の時みたいに筋とかじゃない

からー……多分、大丈夫。」

「……よかった……。」

安心した。

いや、まだ分らないけど。

とりあえず大事は無さそう。

「ご主人様、よかったですね。」

「シヨウコ。」

「だって、めちやくちや心配してましたよね……セツヒトさんの怪我。」

「そ、そりゃあ……。」

「『俺の為に怪我して……くっ……。』なんて、言うとしたやないですか。」

「言っていない……いや、そこまでは言っていない!!」

「……ソウジ。」

シヨウコが随分と盛った話をしてくる。

いや待て、そこまでは言っていないぞ。

なんて返してたら、セツヒトさんがニヤニヤし出した。
いつものセツヒトさんだ。

「……へー、ソウジー、そんなに心配してくれたんだー。」

「そ、それはもちろん……でも、シヨウコはかなり盛ってますよ！」

「でもー、心配だったー？」

「……そ、そりやまあ……はい。」

「ふーん。んー……ふーん。」

ご機嫌。

ニマニマしながら自分の腕をさするセツヒトさん。

……この人には色んな意味で、いつまでも勝てない気がする……。

「…………ありがとうー、ソウジー。嬉しいよ、すつごく。」

「あ、さいですか……。」

「とりあえずこの件はまー置いとこー。話……するんでしょ？」

「……はい。退院して、落ち着いたら。」

「りよーかーい。……それでー？報告はどうなったのー？」

セツヒトさんの方から話を切られ、話題はシガイアさんへの報告の件に。
元々そちらの話もする予定だったので、スラスラと内容を伝えた。

……………。

……………。

「……てな感じですよ。」

「なるー。……やっぱあの黒いの、おかしなやつだったんだねー。」

「一先ず観測する、ということでしたけど。」

「……狂竜症の広がり次第では、早急に手を打たないとまっずいよねー。大元を断ち切れれば、改善すると思うしー。」

「そうですね……。」

大元。

狂竜症を振りまく、ちよつとやばめのモンスター。

どういうからくりかは知らないが、あの黒い霧を吸い込むと俺の体は異変を起こした。

基本無害だが、急に力が抜けたりパワーアップしたりする。

それが普通の人にも同じように起こるなら、ちよつとまずい。

それに、シガイアさんの口ぶりからして、症状を引き起こしたモンスターは凶暴になり、強くなるという。

放っておいて、いいはずがない。

「セツヒトさん……お願いします。」

「………防具、だよねー?」

「はい。……ラージャンンに対して、俺の今の防具だとかかなりキツかった。……ヤツ並みの、それ以上の相手をするとなると、より強い防具があつたほうが、いいです。作成、お願いできますか?」

「もち!おつけー!実はもう準備は進めてたんだよねー!……よし、明日退院したら、ソツコーで作るからねー!」

「い、いや、そんなに急がなくても。」

「何をいうー！ソウジのためなら、たとえ火の中水の中ー！」

「……お気持ち嬉しいですけど、体優先ですよ？」

「そ、それはー……わかってるよー。」

口を尖らせ、上目遣いで恨めしく俺を睨むセツヒトさん。

だが、無茶はさせられない。

まずは体の無事を完全に確認してから。

「おお……珍しくご主人様にセツヒトさんがタジタジや……！」

シヨウコが失礼なことを言う。

そして、俺も完全に同意。

しおらしいセツヒトさんなど中々見ない。

ちよつと可愛いとか思ってしまった。

「……ま、まー無理はしないからさー。体丈夫な方だしー、明日には取り掛かれるよー。」

「はい、無理はなしで、よろしくおねがいます！」

「はい。」

セツヒトさんが、とりあえず大事なさそうで良かった。

シヨウコもいたし、入院中だし、あの話はできなかつたけど。

次会うときは、きちんと返事、しないと。

* * * * *

宿に戻ると、いの一番に俺を心配してくれたのは、ドールではなくハンズだった。

どこかでラージャンの狩猟の話を聞いたのだろう、俺の体は無事かどうか、たくさん質問をされた。

「お、お体は大丈夫ですか？ラージャンなんて……私、お伽話でしか聞いたことがないです!!」

「あ、ああ。平気だぞ。」

「あ、ああ……良かったあ……。」

この子、以前修練場で双剣を教えてから、何だか俺にすごく懐いている。

………一人の人間に懐いているなんて言い方は失礼かもしれないが………何とかいうか。

犬っぼい。

「でも、お怪我とかあんまりなくて……良かったです……。」

「いや、怪我はしたぞ?というか死にかけた。」

「………へっ!?!」

「教官が来るのが遅かったら、多分ここにはいない。」

「………ええええ!?!」

「ついでに言うと、セツヒトさんも負傷した。賊の矢が当たってたな。」

「うええええええええ!!?!」

リアクションが大きい。

とりあえず俺もセツヒトさんも無事なのだが、そこはぼかして伝えたものだから、ハズズの顔が真っ白になっている。

………反応が面白いと思う俺は、Sなのかも知れない。

……だがあんまり心配かけるのも申し訳ないので、大丈夫だと伝えておこう。
荷物をテーブルに置きながら、背中越しにハンスに伝える。

「……………安心してくれ、俺もセツヒトさんも、多分大事はないよ。セツヒトさんは医務室で寝てるし、俺は一日寝たら殆ど痛みは——」

「ご主人様、ご主人様。」

「な、何だシヨウコ。」

「……………ハンスさん、いなくなりました。」

「……………パードウン？」

気づいたら、ハンスは居なくなっていた。

い、いつの間に……。

「ご主人様が『セツヒトさんは医務室』辺りで、こう、ピユーツと出ていきました。」

「……………マジで？」

「はい。……ウチより速いんちやいます？ハンスさん。」

セツヒトさんフリーク、ハンズ。

その愛は、俺の認識をも上回った。

恐るべし。

「……というか、ご主人様、途中から楽しんではりましたよね。」

「さて、ドールはどこにいるかなー。」

「ああ！無視した！ご主人様の都合のいい耳！」

ニヤアニヤア言うシヨウコは流して……。

ドールはどこだろう。

ガチャ……。

「……おや、帰ったの、ソウジさん。」

「あ、ホエールさん。ただいま帰りました。」

「ホツホツ、無事で何より。……だいぶ危なかったそうじゃの？」

「あ、はい。よくご存知で。」

「ドールは買い出しじゃ。もうじき帰る。よかつたら部屋に荷物でも置いて来るといい。昼は食べたかの？」

「いや、まだです。その辺でとろうかと。」

「そしたらワシが作ろうかの。できたら呼ぶわい。」

「あ……いいんですか？」

受付の後ろの部屋から、バケツとモップを持ったホエールさんが出てきた。

多分宿の掃除中だったのだろう。

仕事の邪魔をして、申し訳ない。

「何、わしとドールの分を倍作ればええだけじゃしの。……掃除も済んだ。」

「……………お言葉に甘えます。シヨウコも、いいか？」

「ウチ、ホエールさんのご飯も大好きです！お願ひします！」

「ホツホツ、じゃあしばらく待つとつてくれ。」

ガチャ。

ガシャ……ザッザッザッ……。

そう言うなり、ホエールさんが炊事場に消え、調理を始めた。

申し訳ないけど、お言葉に甘えよう。

ホエールさんの作る飯は、実は結構うまい。

ドールとはうまいのベクトルが違っていて……何というか、男の飯、という印象。材料費などまるで無視した盛り付け、とにかく量がある。

でもうまいんだよなあ。

……いかん、腹減ってきた。

「とにかく、荷物を置きに行くか。」

「はいっ！」

シヨウコも楽しみなのだろう、元気のいい返事が聞こえてきた。

宿「ホエール」は基本昼食は出さないため、このようなことは珍しい。

つまり今回は完全にホエールさんのご厚意である。

サラッと「昼は食べたかの？」と聞いて、作り出すホエールさん。
何だか家族みたいな扱いに、ちよつと心が温かくなった。

* * * * *

そんなこんなで、昼食を頂いた。

メニューは、肉丼とスープ。

以上。

………戸惑う無かれ、これがめちやくちやうまかつた。

まかない飯つぼく、「簡単に肉と野菜を丼ものにしたぞい。」とホエールさんは言うの
だが……。

ホロロースとリノプロシユートが甘辛いタレで炒められ、ご飯にもう超合う。

更にキノコにクルミが入り、食感のアクセントに。

ご飯何杯でもいける。

更にスープは真つ赤つ赤。

別に辛いわけではなく、トマトの色らしい。

完熟シナトマトとベルナス、サイコロミートが入ったポリユームたっぷりスープ。底の方には何か穀物が入っており、スプーンで掬って食べるとまあ美味かった。

高玄米、というやつらしい。

すごく健康に良さそうなスープだが、これが丼ものの油っぽさに丁度いい。

あつという間に食べ切ってしまった。

「余りの食材で作ったが、うまいじゃろ?」

「いやもう……大変美味しゅうございました。」

「ごちそうさまでした!」

シヨウコは少食。

ホエールさんの作る量は俺が腹一杯になるぐらいで作られるため、かなり多い。

そのため、少なめに盛り付けがされた皿が出されたが……ちようど良かったみたいだ。

お腹いっぱい、というポーズをしながら、満足げである。

温かい飯って、最高だよな……。

「ありがとうございます。ご相伴に預かって。」

「気にせんでええぞ？ ドールとワシの分には、多過ぎたしの。」

「いや、本当にごちそうさまでした。」

幸せな気分を満たされた。

もう今日はこのまま寝てしまいたい気分である。

風呂は行きたいけど。

しかしドールは帰ってこないな。

などと呑気な気分です居たとき。

急にドアノブの音が、宿中に響いた。

ガチャガチャ!!

バタン!

「おじいちゃん! ソウジさんとセツヒトさんが怪我した……つて……」

「……………」

「……あれ？ソウジさんとシヨウコちゃん……………」

「……………た、ただいま、ドール。」

「……………ソウジさん、怪我は……………」

「ん？いや、痛かったけど……………まあ大丈夫だぞ？」

「……………よ、良かったあ……………」

ハンズと同じように、安心した顔になったドール。

随分と慌てた様子だったが……………。

「す、すまん。心配かけて。先にギルドに行ったものだから、帰りが遅れて……………」

「……………う、ううん……………ごめんね、慌てちゃって。」

「い、いや。いいぞ。うん……………その、何だ。」

「……………うん。」

「……………ただ今、帰りました。」

「……………うん、おかえり。ソウジさん、シヨウコちゃん。」

ただ、ただいまを伝えるだけなのに。
な、なんでこんなに照れるんだろうか……。

「流石や……ドールちゃんの正妻力は半端ないでえ……。」

制裁力？

ドールにそんな力はないと思うが……。

そこから、ちよつとだけ経緯を聞いた。

何でも、市場の中でハンズに遭遇。

ハンズときたら、俺がここにいることも伝えずに、とりあえず俺とセツヒトさんが怪我をしたと言っていたらしい。

慌て者、ここに極まれり、である。

それを聞いたドールは、急いで宿に戻ってきた、ということであった。

「ドール、飯は食うかの？」

「あ、うん……あ、おじいちゃん！まさか……。」

「ワシが作ったぞい。」

「ああ……もしかして肉類使い切ったんじや……。」

「台所にあつたもんで、チョコチョコイと使わせてもらったわい。」

「……………ああ！リノプロシユートも！ホロロースも！あんなにあつたのに!!」

「お、こりやあすまん。まずかつたかの？」

ホエールさんは、まあ結構どんぶり勘定なところがある。

そして、この宿の財務大臣はドールである。

然るに、このような口喧嘩……もといドールのプンスカ怒る姿を見られるのは、大体
こういう時。

「おじいちゃん……シナトマトは、夜に使うって言ったよね……？」

「……………」

「……………おじいちゃん？あれ？」

「ドール、ホエールさん、どっか行ったぞ？」

「……………もう！おじいちゃん!!」

ドタドタドタ……。

ホエールさんは気配なく消えるのがうまいなあ……。
さり気なく後退りしたあと、裏手から出ていったぞ。

「もう……こんなに使って……。」

「い、いや、かなり美味かったぞ？ホエールさんのご飯。おかげで腹いっぱいだ。」

「……………ソウジさん、おじいちゃんが暴走しそうになったら止めてねって、前言ったよね？」

「す、すまん……。」

「だめ。今晚は簡単なもので済ませます。」

「そ、そんな……ドールの飯、楽しみにしてたのに……。」

「ご主人様、ご愁傷さまで……。」

「シヨウコちゃんも。」

「ええっ?!ウチもお!?!」

「もちろん。イシザキ亭も、行っちゃだめだよ?」

「「ええっ?!?!?!」」

ワーワー。

騒がしい宿、ホエール。

帰ってきたなあ、と、実感できた。

俺とシヨウコの夕飯と引き換えに。

ドールの飯……。

うう……。

「他のご飯屋さん行くのもなしって……ドールちゃん、殺生な……。」

「だめ。ソウジさんも、だよ？」

「い、イエスマム。」

ドールはこの宿の最強の人間である。

ここのお方を怒らせたら、俺たちに明日は無い。

素直に従い、その晩は茶漬けをすすった。

まあめっちゃ美味かったけど。

* * * * *

翌朝。

すっかり傷も癒え、シヨウコにお馴染みの回復化け物扱いを喰らいつつも、いつもの日常に戻った。

お仕置きも兼ねて、ハンズとハード目のランニングを済ませ、朝食を取った。

ハンズは「いつになつたらソウジさんに追いつけるのかな……。」と言っていた。

だが、この子の身体能力と体力の伸びは半端ない。

すぐ追いつける、と言うと、すぐにやる気を取り戻した。

まるで尻尾を振るかのごとく、喜ぶハンズ。

うーん、犬っぽい。

ちなみに、セツヒトさんは何食わぬ顔で武具屋に戻ってきていた。

「すぐに取り掛かるからねー！」と言って、早速防具づくりに励んでいた。

本当に大丈夫か、ちよつと心配。

「無茶は駄目ですよ？」と伝えると、「誰が言う（んです）か！」と、セツヒトさんとシヨウコ二人に返された。

ぐうの音も出なかった。

ギルドに顔を出すと、ヒナタさんに話しかけられた。

細かい事はまだ知らない様子だったが、今日の昼にも上位のハンターチームの調査班が生まれ、未知のモンスター……例の黒い竜のところに向かう、という話だった。

流石、ギルドは仕事が早い。

上位のハンターチーム、しかも調査が中心というなら、滅多なことにはならないだろう。

ちなみに、ヒナタさんに会うのは久々。

相変わらずの凜とした立ち居振る舞いであった。

これで新人に毛が生えた程度の年数しか働いてないというのだから、恐れ入る。

中身おっさんの俺より落ち着いているし。

……まあアイルー亜人を見つけたら、豹変するのだけけれど。

その後はアイテムの補充に行ったりイシザキ亭に顔を出したり……結構充実した休日を過ごした。

ドールの怒りのボルテージもとつくに収まり、美味しい夕飯を頂いたし。満足満足。

そして明くる日の午後。

調査に出ていた調査チームが帰還した。

死人が出たと、急な知らせが入り。

俺は、ギルドに駆け出した。

148 依頼を受けましょう。

ラージャンの討伐から二日後の午後。

シヨウコと、のんびりと屋台で遅めの昼食をとっていた時。

市場には珍しい、男性のギルドの制服を着た男性が現れた。

いつだかの知的イケメン君。

ギルドの受付の男性であった。

「お昼に……すみません、……はあつ……はあつ……い、急いで、ギルドをお願いします
……！」

「えっ……。」

「し、死者が……で、出まして……はあつ……し、至急、ギルドへお願いします。」
「!!」

息を切らして出た言葉。

死者。

その重い言葉にハツとした。

屋台の人に謝って昼食を中斷。

イケメン君を置いて、急いでギルドに向かった。

………。

シヨウコとギルド裏にたどり着いた時。

嫌な予感は現実のものとなった。

布をかけられた、いくつかの担架。

その周りでは、いろんな人間が動いていた。

全員、顔の下半分を布で覆っている。

ただ淡々と、取り付けられた装備を外す者。

傷だらけの顔を真剣に見つめ、何かの記録を取る者。

その向こうでうずくまり、ブツブツと話す者。

ギルドの職員と思しき男性が、その内の一体の布をゆつくりとめくった。

血だらけの布の下には、腹を抉られ、無惨な姿になった人間が。

『死人が出た。』

その実感が、辺りの様子から現実のものとして湧いた。

「これは……。」

「うっ……。」

シヨウコが思わず口を抑える。

「す、すみません……。」

急にギルドに駆け込み、どこかへ行ってしまったシヨウコ。

……無理もない。

さつきまで昼飯食べてたもんな。

「……………」

無言で、辺りを見つめる。

ふと目に入る、大きな男性。

遺体の一つを見下ろし、呆然とした様子で立ち尽くしていた。

ふと布をめくると、男性は拳を握りしめ、歯ぎしりをしていた。

目の前の遺体。

布が被せられていてよく見えなかったが、腕は損傷し、生々しい肉の色が目に入った。腕の細さからして、おそらく女性。

「すまん……。」

そう言うと、男性はギルドに入っていった。

あの人を、俺は知っている。

ザシユーンさん。

俺を応援していると、言ってくれたあの人だった。

……長期の遠征と聞いていたが、今回のメンバーだったのだろうか。

……。

思うところはたくさんあったが、俺はまず両手を合わせた。目を瞑り、心の中で「狩猟、お疲れさまでした。」と唱えた。

* * * * *

「どうぞ、こちらです。」

ギルドに入ると、中は騒然としていた。

慌ただしく動き回る職員達。

その中にハイビスさんを見つけた。

すると、すぐに「会議室」と書かれた一室に通された。

「ハイビスさん。」

「あつ、はい。」

忙しなく業務に戻ろうとするハイビスさんを呼び止める。
申し訳なかったが、言わなければいけない気がした。

「俺、倒します。ヤツを。」

「……………ソウジさん。」

「……………すみません、お引き止めして。それでは。」

それだけ言うと、礼をして扉に向かった。

コンコン。

『空いています。どうぞ。』

「失礼します。」

ガチャ。

中から聞こえる声に反応し、ドアを開ける。

シガイアさんに数人の職員の他……知らない人達もいた。

誰か分からないけど、まあこの際それはいい。

現状が知りたい。

「シガイアさん……お疲れさまです。」

「はい、ソウジさん。……急にお呼びしてすみません。」

「いえ。大丈夫です。」

「少しお待ち下さい……それでは皆さん、この件はそういうことで。よろしくおねがいします。」

「「よろしくおねがいます。」」

その場にいた人達が声を上げると、全員が部屋を出て行く。

ジロジロ見られたが、気にしないことにした。

しばらくすると、シガイアさんが話を始めた。

「お待たせしました。人払いはしましたが……簡潔に現状をお伝えします。」

「はい。」

そこから、情報を色々と教えてもらった。

「まず……例のモンスターを観察に向かった上位ハンターチーム。6人中、4人が死亡。残り2名も、重症と軽症を負っています。随伴したオトモアイルは無事でした。」

「……………」

「混乱を避ける為、また亡くなったハンターの方々の尊厳を守る意味でも、ギルド内に遺体を安置するのが通例ですが……………」

「……………外に、ありました。見ましたよ、シガイアさん。」

「そうですね……………。申し訳なかったのですが、いかんせん例の病気が未だによくわかっていないものでして……………。あのように。」

「……………」

あの病気とは、狂竜症のことだろう。

もしウィルスのように人から人へ伝播するとしたら。

その仮定を踏まえれば、あのように扱うのも無理はない。

……そう自分に言い聞かせた。

「続けます。」

「……はい。」

「報告によると……ハンターチームは現場に到着後、観察を開始。二人組で交代しながら観察に当たっていたそうです。」

「……。」

「ところが、どこをどう嗅ぎつけたか、例のモンスターがハンターチームを視認。交戦に至った、と。」

「……とてつもなく強かった、ということですか？」

彼らは上位ハンター。

しかも、6人のチーム。

集団での戦い方はよくわからないが……蹂躪されるほどの強さだったのだろうか。

「……これは、ザシユーさん……チームリーダーからの報告ですが……。」

「はい。」

「始めは何とか戦えていたそうです。動きも変則的だったようですが、通常の大時とさして変わりなかった、と。ですが……あるタイミグでモンスターが一変。そして黒い霧が辺りに出現し、アイルーを含む全員が、うまく動けなくなつた、と。特にハンターたちは、全く動けなかつたそうです。」

「……………狂竜症。」

「……………おそらくは、そうだと思います。無力化した彼らは為す術なくやられた、と。防御することもできずに、引き裂かれた、ということですよ。」

「……………」

「その場をすぐに離れたアイルーが救援要請を出したものの、4人は徹底的にいたづられ、ヤツはその場を去りました。残りの2人は事前に聞いた話から、霧をあまり吸うことなく難を逃れたようです……運良く見逃してもらえた、と言つてましたね。……ヤツの真意など分かりません。報告は以上でした。」

淡々とした口調で話すシガイアさん。

……だが、表情からは怒りが読み取れる。

いつもより眉が寄り、険しい顔をしていた。

「……シガイアさんが、悪いんじゃないです。アイツの生態は、まだよくわからない。」
「……ええ、ありがとうございます。」

「いえ。」

「……ギルドは救援信号を捉え、すぐに彼らの元に向かいました。無事だった2人と遺体を回収。そして今に至ります。」

「……………」

「現在もヤツは、同じ狩り場……西の丘陵地帯にいます。そして今回の報告を受け、ギルドはあのモンスターを第一級竜災種に指定しました。」

「第一級……………」

ギルドが指定する、竜災指定種。

近隣に危険を及ぼす種類は第二級。

第一級は、それ以上。

大規模に危険を及ぼす種類である。

いつだが教官に習った話を思い出した。

「ええ、一級です。まず現在のワサドラ近隣ですが、ヤツが陣取る西部は立入禁止。街道

は封鎖せざるを得ません。」

「じゃあ流通などは……。」

「完全にストップしてきます。……いえ、これからそのように動いてもらう、が正しいです。ね。」

「……………」

そう言つてシガイアさんは、部屋の入口に目を向けた。

先程出ていった数人の人達。

ギルド職員以外にも何人かいたが、彼らはこのワサドラの重役か何かだったのでだろうか。

ヤツは危険だ。

もし人の住む領域まで出張つてくれば、大惨事は免れない。

……しかし、このままでは。

「生活が、立ち行かなくなりますね。」

「はい。仰る通りです。それに、困ったことにこんな時に大型モンスターが異様な活性

化を見せています。……いえ、原因はヤツです。ヤツの領域から逃げるように、西からワラワラと。腕の立つ上位ハンターの方々に、対応に当たってもらっています。」

「それは……。」

「はい、一部には狂竜症にかかったモンスターもいます。凶暴化し、危険です。……ソウジさんの前情報がなければ、危ないところでした。腕の立つハンターを、私なりに伝手で集めていましたからね。」

いつだかのシガイアさんとのやり取りを思い出す。

『先手を打つことができる』と言っていたのは、この件だったのか。

流石だ。

「失礼します」と言うと、シガイアさんはテーブルにあつたコップを持ち上げ、水を飲んだ。

ふう、とため息を吐く。

すると、一步俺に近づき、目を合わせてきた。

力の入った、鋭い眼光だった。

「……ソウジさん。」

「……はい。」

「察しのいいあなたなら、もうお分かりかもしれませんが……あなたに頼らざるを得ません。」

「………。」

「現在のところ、あの病を克服しているハンターはあなたしか知らない。そして、十分に腕の立つハンターもまた、数えるほどしか。」

「………。」

「……狩猟を、お願いしたいのです。」

いつものシガイアさんは、そこにはいなかった。

必死に、俺を見つめて訴えて来る姿。

初めて見る、シガイアさんだった。

「………。」

よく考える。

……ぶつちやけて言おう。

怖い。

目の当たりにした、死の現実。

危険な仕事とは、分かりすぎるぐらいに分かっていたつもりだったが。

つもり、だった。

俺もああなるのでは、と。

ああなるのだろうか、と。

そう、思わざるを得ない。

でも。

俺しかいないっぽいし。

教官とかセツヒトさんとかに頼ってもいいのかもしれないけど……例の病が怖い。

あの人達なら何とかしてしまいそうだが、万が一ということがある。

克服している自分なら。

對抗できる可能性は、ある。

「……やりませす。やらせてください。」

「……ソウジさん。」

「こうなるのも、多分決まってるんですよ。俺がおかしくなってるから、おそらく。黒い霧を吸い込みまくって、強くなったり弱くなったり……不確定要素が多すぎますけど、やってみませす。」

「……よろしく、おねがいませす。」

苦虫を潰したような顔で、下を向くシガイアさん。

「いつだが獄狼竜に立ち向かうようセツヒトさんに依頼した時も、こんな顔をしていたんだらうな。」

「ちなみに、モンスターの名前って、何ですか？」

「……あ、ああ、それを伝えないと、ですね。……では、正式に申し上げます。」

「あ、はい。」

「気を持ち直すように顔を上げたシガイアさん。」

「……ハンターランク7、ソウジさん。あなたに、黒蝕竜ゴア・マガラの狩猟をお願いします。」

「ゴア・マガラ……。」

「達成条件は、撤退以上。クエスト名は……そうですね、『黒き衣を纏う竜』……こうしましょう。」

表情を切り替えて、いつもの様子で俺にクエスト名を下すシガイアさん。

モンスターの名前は、黒蝕竜ゴア・マガラ。

禍々しい名前に、やっぱり怖いわ、と思いながらも。

俺はクエストを受諾した。

* * * * *

会議室を後にして、準備をするために俺は急いだ。

セツヒトさんのところへ向かって、装備を整える。

新しい防具は慣れてから本格的に使用したいところだが……あまり時間がない。

今夜調整しよう。

作業が始まってから、まだ2日。
仕上がってあげればいいけど……。

「ご主人様！」

「うおつとー……シヨ、シヨウコ？」

ギルドを出ようとすると、シヨウコに呼び止められた。
顔色はあまり良くない。

「大丈夫か？」

「は、はい……すんません、抜け出して……。」

「いや、いいよ。うん。……俺も、辛かった。」

「……………」

無言のシヨウコ。

あの光景をまた思い出しているんだろう。

できるなら、あのハンターたちを綺麗に吊りたい。

だが、ヤツの……ゴア・マガラの黒い霧の影響が判明しない限りは、それは難しい。やりきれない思いが、胸にくすぶる。

「……狩猟に行くことになった。」

「……はい。」

「どうやらあの人たちは、俺みたいに黒い霧の影響を受けて、無力化させられたらしい。克服しているのは、俺しかない。」

「ご主人様……。」

「ケリをつける。……シヨウコ、お願いがある。」

「……はい。」

「俺がもし死んだら、骨を拾ってほしい。」

「…………。」

クエストにシヨウコを連れて行くか、悩んだ。

アイルーにも影響があったというのなら、シヨウコは連れて行かないほうがいいのかも知れない。

だが、シヨウコはおそらく……それを固辞する。

ならばいっそ、連れて行こうと思った。

「……はい。ウチ、絶対行きます。絶対、ご主人様から離れません。」

「ああ。ヤツの霧にだけは、気をつけよう」

「……はいっ。」

シヨウコも一緒に行くことになった。

いざとなれば、シヨウコにはエスケープしてもらおう。

* * * * *

ギルドを出て、俺たちは武具屋に向かった。

俺の装備の出来具合を確認するためだ。

セツヒトさんが無理してないといいけど……夜も工具を打ち鳴らす音が聞こえていたからなあ。

宿と近い武具屋の音は、部屋からよく聞こえる。

「せつちゃんさーん？……入りますよー？」

ギイ……。

いつものやる気のない下げ札には、「おやすみなさーい」と書かれたお馴染みの文字。休業してまでやってくれているのか。

絶対無理してるな……。

「セツ……せつちゃんさーん……？」

「はいはいー！いるよー！こっちこっちー！」

武器屋の中を進む。

埃が薄く被った武器が、壁や棚に並んでいる。その向こう、カウンターの奥。

作業スペースに、セツヒトさんが見えた。

「失礼します……おお……。」

「おー、きたねーソウジー！シヨウコちゃんも、おはよー。タイミングいいじゃん。」
「おはよう言う時間ちやいますよ。うわあ……。」

俺もシヨウコも言葉を失う。

セツヒトさんの武具屋の奥は、作業スペースになっている。

その更に奥、マネキンの何かにかけている防具。

おそらく、俺の注文した装備だろう。

「ちよーど今できたところできー。一息つこうとしていたところだったんだー。」

「あ、すいません。休憩中に。」

「いーのいーの。好きでやってるようなもんだよー。」

「うっ……。」

好き、という言葉に思わず反応してしまう。

……アホか、俺は。

「……これ、かつこいいですねえ……。」

「お？シヨウコちゃん！わかるー!?いやー力も入るよねー！これほど頑張った装備は初めてだよー！」

「へえー……ウチ、ようわからん——」

「まずねー、頭にジンオウガでしょー？胸にはオロミドロ、腰にアンジヤナフで腕はレウスのやつー。脚はいつちばん苦労したラージャンの金色の袴！野暮ったく見えるデザインだけどー、足の動きが相手に見えにくくなるからいーと思うよーこれー！双剣はナルガクルガの夜天連じ——」

「ちよちよちよ……ストツプです！せつちゃんさん！」

「へ？……あー、またやつちやつたー……？」

セツヒトさんの怒涛の説明ターン！

話を聞いていたシヨウコの目がグルグル回っている。

「ごめんねー、シヨウコちゃん。私こういうことになる、何ていうか……マニアックー？」

「いや、聞かれても……シヨウコ、大丈夫か？」

「は、はい！す、すんません！ウチ、あんまり詳しくなくて……。」

そりやそうだ。

装備についての話なんて、俺だってよく分からない事だらけだし。

「セツヒ……せつちゃんさん。すみません、俺もよく分からなくて。」

「ごめんねー、嬉しすぎてさー。スキルとかその辺から説明するよー。」

そこからセツヒトさんは、ゆっくりと俺たちにも分かるように話してくれた。

「どうやら完成した装備は、攻撃力と会心……あのヒュパツと当たる感覚がより多くなる様に構成されているらしい。」

俺が重視してきた弱点への攻撃についても、俺の持つお守り……シヨウコがくれた護石で充分に威力が賄えるという。

「ただねー、回避についてはー、特に何もつけてないんだー。」

「えっ。そうなんですか？」

「ソウジはー、その辺大丈夫だよー。私が保証するー。」

俺の避ける動きの速さと正確さについては、セツヒトさんのお墨付き。

自信があったところだけに、ちよつと嬉しかった。

いや、かなり嬉しかった。

「武器もあるんだよー?」

「ええっ!? 作ったんですか!」

「いやー、流石にこれはあったやつを強化しただけー。でも……いいよー?」

「おお……。」

そう言ってセツヒトさんが持ち出したのは、ナルガクルガの素材から作られるという、夜天連刃という名の双剣だった。

何でも、武具屋に並べられていたヒドウガーという双剣を打ち直したらしい。

いや、強化しただけと言うけど……これも相当手間がかかっているような……。

「……………ありがとうございます。何から何まで。」

「いーのいーの! 私も、もう超楽しかったからねー!」

「あ、そうですか。」

鼻息の荒いセツヒトさんこの人も珍しい。

「さーて……サイズ合わせの前に、お茶しよつかー。」

「あ、はい。」

「ハイビスちゃんー！」

「……………へ？」

セツヒトさんが意外な人を呼ぶ。

すると、人数分のマグカップをトレイに載せて、ハイビスさんがやってきた。

「皆さん、お茶にしましょうね。もう、セツヒトさんったら……2日もろくに寝てないんですから。」

「は、ハイビスさん？いらっしやっただんですね……。」

「は、はい。……多分ソウジさん、ここにいらっしやるだろうと思ひまして……。」

「は、はあ。」

先程までギルドにいたと思うのだが。
フットワークが軽いなあ。

「ギルドの方に、またすぐに戻らなければならないのですが……ソウジさん、お聞きしたいことがあります。」

「は、はい。何でしょう。」

「……ギルドマスターからの話……教えて下さい。」

「……………」

「ソウジ、私も一部は聞いたよ……。……死人が出たってね……………」

ハイビスさんとセツヒトさんが、俺をじっと見つめてくる。

隠せることでもないし、隠すことでもない。

シヨウコが不安げに、俺を見上げる。

「ご主人様……………」

「……………ああ。言うよ。」

俺はしっかりと二人に目を合わせ。

シガイアさんからの話を、伝えることにした。

* * * * *

「よしつ、とつちめちやおうかー、あのタヌキー。」

「ちよっ！せ、せつちちゃんさん！駄目ですよ！ハイビスさんも見てないで止めてくださいー！」

「……私もとつちめます！あのタヌキ、やっちやいましょう!!」

「ハイビスさんも!?!」

二人に事情を話した。

すると、俺が狩猟を依頼された、という辺りから二人の眉間にシワが寄ってきた。

そしてこの有様、である。

「だってさー……ソウジだけに狩猟依頼とか……そんなの、あの時と変わってないしー……。」

「それは……そうですけど。」

あの時。

セツヒトさんが言うのは、ミヨシ村で起きた惨劇のこと。

「……………あの時とは、状況はまるで違いますよ。まず、シヨウコが来てくれる。」

「はいっ、ウチも行きます。」

「更に、他のモンスターについてはハンターを事前に集めていたそうです。少数で対応に当たっていたあの時とは、違います。」

「……………ソウジさん。」

まるでシガイアさんを庇うかのように話す俺。

それを遮る様に、ハイビスさんが話し始めた。

「それは、わかります。私達のギルドマスターは、私の知る中で一番頭が切れます。……ちよつとムカつくところもありますけど、何よりハンターの命を大切にされる方です。」

「……………」

「その方が、ソウジさんに直接依頼した。……ゴア・マガラの狩猟を。……無力化していいとはいえ、上位の方々を蹴散らすほどの強い、あのモンスターに立ち向かえ、と。」

「……ソウジさんは、まだハンターになって2年弱です。……そんな方に依頼する内容では……無いんですよ?。」

冷静になって考えれば、確かにそのとおり。

右も左も分からない、2年前までそんな様子だったひよつ子が、今から凶悪な存在に立ち向かうというのだ。

そりゃまあ、不安にもなる。

実際怖いし。

でも。

でも、だ。

「………死んだ方々を、見ました。」

「……………」

シヨウコが、無言で頷く。

俺と一緒に、あの惨状を目にした。

「……………」俺は、ここで命を拾われた。みんなが、暖かく迎えてくれた。鍛えてくれた。励ましてくれた。」

「……………」

「立ち向かう理由には、十分すぎますよ。……俺はまだまだ、恩を返し切れていない。」

押し黙る二人。

すると、セツヒトさんがふつと顔を上げた。

「……………」私も、行く。」

「……………」駄目です。」

「な、何でよー!」

「体、治りきっていないでしょう。分かりますよ。」
「……………」

毒を食らって、古傷を突かれて。

そんな体が、昨日今日で治るわけもない。

止めさせてもらう。

「…………二人で、行くの？」

「はい。…………考えたくないですが、万が一のために、シヨウウコに来てもらいます。…………俺がいなくなっても、戦い方をわかっている人間がいれば、次に繋げられる。」

「い、いなくなるなんて——」

「その可能性はゼロじゃないです。もちろん、討伐できるかも知れない。」
「……………」

「俺は、行きます。行かせてください。」

頼み込む様な話ではない。

だが、俺が多大にお世話になった方々だ。

納得してもらって、行かせてもらう。

「……………ソウジさんは、ギルドに来た時から分かっていたんですね。ご自身が狩猟を依頼されるであろうことを。」

「はい。」

「だから、私に決意表明をされたんですね…………。」

「……………はい。」

二人が再び黙り込む。

重苦しい空気が、場を包んだ。

その空気を破ったのは、いつもの口調で喋り始めたセツヒトさんだった。

「……………しゃーないねー。ほら、ソウジー。サイズ合わせ、するよー。」

「セ、せつちゃんさん？」

「……………だつてー、決意は揺るがないでしょー？ソウジつてばー、変なところで意地張るんだもーん。」

「す、すみません。」

「……………まあ、そういうところがいいんだけどねー。」

最後の言葉にドキツとしたが、敢えて流した。
返答できるような空気ではなかった。

「……………ソウジさん。」

「はい。」

ハイビスさんが、顔を上げた。

目が潤んでいる。

「……………約束ですよ！絶対に、帰ってきてくださいね！」

「……………はい。」

「帰ってきたら、私からもお伝えしたいことがあります！だから、絶対に……………帰ってきてくださいー！」

「……………分かりました。」

「セツヒトさんばかり、ズルいです！私だって……………言っちゃいます！」

「おー、ハイビスちゃん肚決めたねー?」

「当たり前です!まさか入院部屋で『ごめんねー?先に言っちゃったー』なんて言われたら……私だって、なんてなるに決まっています!」

何やらムキになるハイビスさん。

この暴走特急風味が、この人の持ち味である。

しかしこう言うつてことは……。

まあ、そういうことなんだろうな。

「……………も、もうバレバレかもしれませんけど!ソウジさん!」

「は、はい!」

「……………武運を。」

「……………はい。ありがとうございます。」

ハイビスさん。

俺の初めてのハンターとしての仕事を受け付けてくれた人。

そんな人の、「武運を」という言葉は。

とても力になる。
そんな気がした。

.....。

.....。

そうしてすぐに、俺は防具の最終調整を行うことになった。

ハイビスさんは流石に忙しいのか、真っ赤で真面目という器用な表情をして、ギルドに戻っていった。

.....複雑な気分である。

これから狩猟に向かうというのに。

「.....ソウジ。もう色々と分かってるよねー？」

「.....はい。」

「.....んー。ならよろしー。」

ギョツ！

「いつてえ!!」

「はいガマンガマンー。」

「……せつちゃんさん……わざとでしょう……?」

「もちのろーん。……私も、負けないからねー。」

メジャーを、胸の辺りにきつく締められて、めっちゃ痛かった。

色んな人の、色んな気持ちの背に。

俺とシヨウコは、ゴア・マガラの狩猟に向かう。

「ご主人様！」

「な、なんだ？」

「……ウチも、お二人に負けませんから！」

「……………マジか。」

シヨウコもか。

……こんなやつ、どこがいいのか。
わからん。

よくわからんけども。

一先ずは、目の前の敵に集中する。
やってやる。

易易と、やられるわけにはいかない。

死ぬわけにはいかない、そんな理由がたくさんできた。

黒蝕竜ゴア・マガラ。

もう少しだけ、待っている。

149 黒蝕竜を狩猟しましょう。

装備を手に入れた俺は再びギルドに戻った。

ハイビスさんと、クエスト内容の最終確認。

出立は、夜中未明。

日が明るみ始めてから、狩猟を行えるように、このことであつた。

……夜にヤツを相手にしては、正に闇夜の烏。

真つ黒だもんな。

* * * * *

ハイビスさんに礼を告げてから、宿に戻った。

既に外は夕焼けの時間。

早めに寝て、備えないとな。

「あ、おかえりなさい。……ご飯、まだだよね。」

「あ、ただいま、ドール。」

「今帰りましたー!」

シヨウコの元気な声が、宿に響く。

……明るい様子だが、無理しているようにも見えた。

「……シヨウコちゃん、何かあった?」

「うえっ!? ええと、いやあ——」

「明日、というか夜中、クエストに行くんだ。」

「えっ、すごいね。そんなに早く。」

「ああ。ちよつと……危ないモンスターだ。気をつけて、行ってくる。」

「……………うん。わかった。……………お夕飯、用意するね。」

「ああ。」

ドールに色々と察されて、しどろもどろになるシヨウコ。

そこに、助け舟を出した。

シヨウコと目が合うと、申し訳無さそうに頭を下げてきた。

「……………シヨウコ、無理はしなくていいんだぞ？」

「は、はい。」

「それにドールつてめちやくちや勘がいいからな。バレるつて。」

「流石ドールちゃんやなあ…………。」

「伊達で接客業をしているわけじゃないからな。」

冬山でハイビスさんに、「受付嬢は、一にも二にも観察眼が大事なんです！」と教えられたことを思い出した。

そういう意味では、ドールは受付嬢に向いているのかもしれない。

ドールが受付嬢……………。

「……………」

「ご主人様……………何か変なこと考えてます？」

「えっ!?!いやいや! 考えて無いぞ!?!」

「……………ホンマですかあ？」

……追加。

シヨウコも受付嬢に向いていると思う。

* * * * *

ガラガラガラガラ………ガタン！

「うおっ………と……。」

急な振動に思わず声が出た。

夜の街道は、本当に真っ暗だ。

そんな中、雷光虫の明かりを頼りに進むのは、はつきり言つて無謀。モンスターに「狙ってくれ」と言っているようなものだ。

だが、そのモンスターは、全く出てこない。

おそらくゴア・マガラの影響なのだろう、恐ろしい限りである。

「………なんにも居ませんねえ………。」

「まあ、いたら困るんだけどな。」

車に揺られ、数刻程。

俺たちは、ゴア・マガラの狩猟ポイントとワサドラの真ん中辺りにまで進んできていた。

乗っているのは、当然、あの素敵なおじさんの車である。

もうこの人以上に信頼できる御者なんて、俺の中では存在しない。

「暗くても道の方は任せてくれ！走り慣れた所だ！」

「急にすみません、おじさん。」

「いいってことよ！まさかギルドマスターから直々に声をかけられちゃ、俺も頷く以外ねえしな！何よりソウジさん達を運ぶとあっちゃ、むしろやらせてほしいぐらいだぜ！」

嬉しいことを言ってくれるおじさん。

俺の何を気に入ってくれたのかはさておき、俺はこの人が大好きだ。

だが、いつもと様子が違うのは、おじさんも流星にわかるようだった。

それは、ガーグーたちも同じ。

「……グア！ガ！」

「……………クウウ……………」

時折切なそうに鳴く姿に、申し訳なく思う。

「こいつら、怯えきつててなあ……。すまねえ、ちよつと揺れるぞ！」
「はいっ。」

ガタン！ダン！

「うおっ……………」

「にやつ……………！」

ガタガタと揺れる台車。

少ない光源と、真つ暗な道。

危な過ぎる行程だが、おじさんは流石である。

マップを見ながら行き先を確認するが、ほぼ直進できているのだから。かつこいいぜ。

ちなみに、今日はドール大明神様の頭を撫でられていない。

だつて夜中出発だったし。

シヨウコに「ベッド行きます？」なんて言われたが、無理に決まっている。

朝飯も、お手製のおにぎり携帯食料である。

「……………シヨウコ、最後の確認をしておこう。」

「……………はい。」

昨晚話した内容を、再確認しておく。

夜寝る前。

何かの足しは無いかと情報画面を見ていたら、モンスター情報の下の方に「ゴア・マガラ」の文字が現れていた。

もちろん、すぐさま確認した。

だが期待はすぐに裏切られた。

【モンスター名】

ゴア・マガラ

【種族】??#\$%&

【別名】

黒…#?

【詳細】

??に目?#?.\$れる大型モン?非常に神??鬼没であることから目?.\$?(…:が極めて少なく???)\$,\$,\$&%(&\$),&\$(&%)(\$の生れば…:そ??周辺に多大なる被害をもたららし???)その…:危険度…:は非常に高…:い?赤黒い鉤爪の付いた非常+*,%\$)<?||??翼膜??常に生え代わりを…:繰り返し…:大??鱗粉となつて大気中#\$%&||(&%,?)>?),%…:こ…:??鱗粉を周囲??帯に撒#&||(?>)&??散らした鱗粉を吸引した生物には神経系・身体??力…:??異常、抵抗力の低下と???)た症状が現れ%,\$#||??<?)%>

文字列が浮かんだ思つたらすぐに化け、また戻り…:その繰り返し。

何度も点滅したり文字が変わったりと、視認がかなり難しい。

何とか目を凝らしてわかってきた特徴としては、飛行能力が高いこと、そして黒い霧の正体はその翼の鱗粉であろう、ということぐらいである。

色々と知りたかったが……仕方がない。

そもそも前情報を先に得られること自体が異常なのだ。

「まずは黒い霧。要警戒だ。」

「ですね。」

「報告からじゃ、しばらく経ってからそれが発生したという話だけど。その時はシヨウゴ、ゴア・マガラからは距離を取ってほしい。」

「はいっ。」

「……よし。じゃあ戦い方なんだけども。……ぶっちゃけて言うと、分からん。」

「ご主人様の例のやつは——」

「ああ、今もダメだ。まあしようがない。やるしかないさ。」

「……………」

打ち合わせとも言えない打ち合わせを続ける。

いろんな可能性を考えて動く。これしかないわけで。

「……罾の類は、効きますかね?」

「わからん。だが、ラージャンもそうだったけど、強いモンスターになるとその辺軽く見破ってくるらしいからなあ……あまり期待はしてない。」

「ご主人様の伝家の宝刀も、難しい、と。」

「ああ。もしかしたらジンオウガのシビレ罾みたいに、そもそも効かないヤツもいるしな。」

「よう飛ぶいうなら……閃光玉は?」

「やってみてもいいかもしれない。だけど、過度な期待はしないでおう。」

リオレウスには効果覿面だったけど。

そこから10分ばかり、打ち合わせを続けた。

「——こんな感じで、高度な柔軟性をもって臨機応変に対応しよう。」

「行き当たりばったりってことですね!」

「……………そのとおり。」

身も蓋もないシヨウコであった。

* * * * *

辺りにモンスターの気配がまったくくない。

狩り場とは思えないほどの、静寂に包まれた森丘。

ここが、今日の仕事場だ。

「それじゃ、おじさん。ありがとうございました。手筈通りに。」

「おうっ！がんばれよ！」

「……………はい！」

「シヨウコの嬢ちゃん！ソウジさんをよろしくな！」

「はいっ！」

ザッザッザッザッ……………。

おじさんには、一応の安全地帯と言えるスタート地点に待機してもらおう。
ここから俺たちは、ゴア・マガラを探す。
とは言っても……。

「……………あつち、ですよね？」

「ああ……………何か、分かるな。雰囲気がつよい。」

来た道と同様、周囲一帯には生き物と呼べるようなものがほとんどいなかった。
虫とか魚とか……………そういう小動物はいるけど。
ファンゴもいなけりや鳥のさえずる声もなし。
やっぱアイツ、おかしいわ。

「へ、変に緊張しますね……………」

「俺もだ。」

「ご主人様は普通に見えますけど……………」

「そういう、表情を取り繕うのは、こう、慣れていてなあ。」

その辺は、中身おっさん。

現代社会である程度揉まれてきた訳で。

そうでなくても、今までたくさんの狩猟を行ってきた。

プレッシャーには慣れている。

はずなのだが。

「……………いたな……………」

「うわあ……………」

見つけた。

瞬間で、粟立つ体。

チダイ村の西の森、その湖で見た時はある程度距離があつた。

モンスターにも気取られ無いような距離。

だが、今視認した。

黒い巨体。

木々や緑の地面にあまりに合わないコントラスト。

明らかに、異質。

見た目だけではない。

発する雰囲気もまた、異様であつた。

「っ……っ！」

同時に、俺の体が疼きだしてきた。

もちろん予想はしていたが……ごまかすことはできないような体の異変。

動けないほどではない。

むしろ心と体が熱を帯びている。

(早く戦いたいとか……そういう焦燥感……。)

興奮状態に陥るといふ、狂竜症の症状だろう。

「ご主人様……平気ですか？」

すかさずショウコが、俺の異変に気づく。
流石である。

「ああ、多分平気。」

推測の域は出ない、何となくの返事を返す。

自分の体が自分でわからない事ほど、怖いものはない。

だが、こちらら実年齢は結構な年。

セルフコントロールしてみせよう。

「……………ふうー……………」

深呼吸して、落ち着く。

……………うん、大丈夫だ。

興奮したなら、興奮したなりに攻撃、回避を行えばいい。

「大丈夫だ。最終確認。」

「……はいっ。まず、ウチの耳にもモンスターとかそういうのの音は感じません。天候は晴れ、直に日も差して来る頃合いです。頃合いとしては……。」

「ばつちり、だな。」

今俺たちがいるのは、3メートルほどに切り立った崖の下。

その向こう、30メートルぐらい離れた位置。

黒い翼をポンチョの様に覆って佇む、ゴア・マガラがいる。

崖の影から出れば、おそらくあちらも気づくだろう。

そうなれば、交戦は必至だ。

「まず俺が近づく。状況次第だが、いつもどおりシヨウコは後ろから回って応戦してほしい。霧が出たら……。」

「……退避します。」

「ああ。範囲はわからないが、崖の上にいるといいかも知れない。」

「はい。」

「初撃は頭を狙うけど……無茶はしない。何か俺、体も心も焦ってるんだけど……『まずは、見』だ。」

「ご主人様、無茶せんよう、お願いしますね。」

「約束できないなあ……だって相手が相手だぞ？」

「それを止めるのが、ウチの役割です！」

「はい、ごめんなさい。」

「……ふふ、ええですね、いつも通りや。」

「本当にな。」

異変を異変として分かっているなら、対処の仕様がある。

俺は今、おかしい。

気がはやっている。

なら、焦らない。絶対に。

「焦らず、無茶しないようにする。」

「無茶しない宣言するご主人様なんて……珍しいわあ。」

「………本当にな。」

シヨウコのご尤もなご意見を賜りながらも、最後の打ち合わせは終わった。状況の確認と言っても、やれることなんて限られているし。

いつも通りに。

頑張ろう。

「……………行こう！」

「はいっ！」

ダツ！

崖の裾から、飛び出す。

同時に見えたのは、翼を広げ今にも飛び立とうというところのゴア・マガラ。

(飛ぶ……………なら！)

ヒュッ！

ピカア
!!!

ポーチに手を触れ、閃光玉を取り出した。
すぐさま投擲。

うまいこと、顔の前で炸裂したが……。

「……………効果なし！」

「了解です！」

俺の数歩後ろで返事をするシヨウゴ。

閃光玉は効かないようだ。

残念。

だが、落ち込む暇などもちろん無い。

ダダダッ!!

ジャキン!!

鍛え上げた足腰で、森丘の地面を蹴って走る。

白んできた空の明かりが、薄暗く狩り場を照らし始める。

視界はまあまあ良好。

武器を構える。

双剣を、ダランと両腕にぶら下げた。

「……………グウウ……………!」

こちらの敵意に、今にも飛び立たんとしていたゴア・マガラは再び翼をたたみ始めた。

そのまま、首を上に向ける。

おそらく、叫ぶと思う。

ならば。

(……………鬼人化!!)

「……………グギャアアアアアアアアアアアア!!!」

「っ!!」

鳴き声というよりは、もはや叫声。

何度も聞きたくはない、そんな音。

だが。

俺は一足早くゴア・マガラの足元、その巨体の下にたどり着き。

ザシユ!!ザザザザザン!ザン!

「ギヤアア?!!」

その叫び声に合わせて、回転乱舞を入れる。

様々な大型に見舞ってきた、咆哮無視のカウンター。

うまく入った。

「やあああ!!」

ヒュン！ズザ！

シヨウコの爪撃が、後方で入っている。

挟撃の態勢は整った。

後は……。

(いつも通り……！)

特別な事は無い。

いつもの狩猟を行う。

いくら異質なモンスターとはいえ、モンスターはモンスター。
様子を伺いながら、動きを見切っていく。

「……………ギシャアアアアアアアア!!」

「くっ…………!!」

まさかの2回連続の咆哮。

たまらず耳を押さえる。

「……………ガアアアア……………」

「……………得意げな顔しやがって。……………こつちだ！」

ザン！

そののっぺりとした顔面に一閃。

シヨウコの方には、向かせない。

しかしこいつ……………目が無いのか……………？

閃光玉が効かないわけだ。

「ガアアア!!!」

「うおっ!?!」

ドガア！

右前脚。

俺を命を抉り取るかのような、その攻撃。

咄嗟に左後方に回避する。

(速いっ！)

リズムが独特、というのはシガイアさんから聞いていたこと。

緩急が結構ある。

のらりくらりとしていて、突如としてトップスピード。

気を付けなければ。

そして何より気になるのは……。

(体から常に黒い霧……鱗粉……?)

ゴア・マガラの体からは、交戦直後から既に黒い霧が発生している。微量ではあるが、シヨウコに影響があるとまずい。

「グアアアアアアア!!」

「っ!？」

体を縮めたゴア・マガラ。

すると、急に突進をしてきた。

その四足で地面を抉り取っていく。

俺は転がって避け、すぐにゴア・マガラを視界へ。

「あぶな……シヨウコ!無事か!？」

「はいっ!ウチは何とも!」

「よし、……じゃ——」

「もう一回挟撃態勢に入るぞ」と、言おうとしたその時。

ゴア・マガラは首を震わせた。

その口には、黒紫色の何か。

……まずい。

「——シヨウコ！散れ!!」

「っ!!はいっ!!」

「ガアアアア!!!」

ドオン!

二人してその場から離れる。

直後、ゴア・マガラから放たれたのは、黒紫色の地を這う煙。

煙弾、といえばいいのか。

それが、俺達のいたところに着弾する。

「くっ………!!シヨウコ！当たるなよ!」

「はいっ!」

運悪く、シヨウコが狙われている。

黒い霧と同じような色。

少し紫がかっているが……食らうとまずい気がする。

狂竜症に陥らないとも限らない。

(シヨウコなら回避はいけるだろう……問題は……。)

問題は、2つ。

急いで考える。

まず、霧の問題。

俺が霧が平気……あまり問題にならない、という前提だが、シヨウコに食らわせるのはいけない。

今まさに、その霧が発生し出している。

辺り一帯に充満するのも、時間の問題だろう。

そして距離感の問題。

緩急を付けた攻撃で、中々拳動が読めない。

だが、うまく懐に入れば……対策のしようがあるな。

なら……。

「シヨウコ!!霧の発生!後退!!」

「は、はいっ!!くっ!ご、ご主人様は!」

「……打って出る!!」

ジャキン!

ダダダッ!

煙弾を撃ち、身体を震わすゴア・マガラ。

その喉元に、突っ込む。

(鬼人化……!)

今日二度目の鬼人化。

はつきり言って、新しい装備は重い。

だが、苦にはならない。

どれだけ鍛えて来たと思ってるんだ。

身体能力を上げ、ゴア・マガラの足元に迫る。

(動きを見て……!!)

「ガアアア!!」

(っ！対応する!!)

ヒュオン！

顔の右、掠りそうな程ギリギリのところに、ゴア・マガラの爪撃が通り過ぎる。
避けられた。

ならば。

「ふんっ!!」

ザシユ！ザザン！

「グアアアア!!」

まず一撃。

次に来るのは……左脚か！

当たって、たまるか！

「ふんっ!!」

ダダン！

ゴア・マガラの体の下。

右から振り下ろされる、その攻撃を。

俺は、突っ込んで避ける。

前飛び込みの前転で、左脚の一撃を避け。

「ふんっ！」

ザン！

ザシュザシュ!!ズザザザン!!

「ギアアアアアア!!」

ゴア・マガラの右半身に、下から双剣を入れる。

(デカブツ退治は、やっばこうだな……。)

コイツの挙動は、まだ読めないとこがある。

だが、その巨体の足元は留守になりがち。

攻撃そのものが、届かなければいい。

……言うは易いが、もしボディプレスなんてやられたら、死んでしまう。

諸刃の剣。

だが、こいつは翼が自慢のタイプ。

ボディプレスは無いと、信じる。

「グアア……………!!」

口に見える、黒紫色。

再びの煙弾の構え。

それを待っていた。

(体……………がら空き!!)

今までのモンスターも、たくさんの遠距離攻撃を行ってきた。

ほぼ全てのモンスターに言えることは、その攻撃中は足元ががら空きだということ。

ゴア・マガラも、同じ。

だと思う。

煙弾を吐く、その時間。

隙あり、だ。

ザシュ!

ズザザザン!ザザン!

ヒュパツ!!

(入った……!)

斬り結んだ、その最後の一撃。

音も感触も、違った。

「ガアアアア!!」

ドガア!!

ドガン!!

俺の攻撃なんぞ、まるで効いてないかの様に前脚を振り上げるゴア・マガラ。
1撃、2撃と連続して繰り出されるその爪。
鋭利な切っ先、絶対に当たりたくない。

(……………いち……………にいつ!!)

バックステップで避けたあと、順番に地についたその脚めがけて。

(連斬……!!)

ザザザザザザシユツ!

ヒユパ!!ズザザザン!!

コマのように回りながら、双剣を当てていく。

「グアアアアアアアアアア!!」

感触が違う。

今までのような、ただ斬るだけの感じと違う。

これが新しい武器と防具の効果……。

攻撃が、入っている。

(セツヒトさん……これ凄いです……!)

スキルとやらが働いているんだろう。

狩猟に出る前に情報画面で自分のスキルを見てみたが、訳わからん文字が羅列されていた。

攻撃、弱点特効、力の解放、業物、超会心、強化持続、砥石使用高速化とあった。

セツヒトさんによれば、砥石を研ぐスキルについては後付け、スロットもあるからまだ強化できる、と言っていた。

恐ろしい。

そして、今までそれら無しで頑張ってきた良かったと思う。

この装備に慣れたら、そりゃ腕は落ちるだろう。

それぐらい、違う。

「グアアアアア………。」

忌々しそうに俺を睨みつけるゴア・マガラ。

いや、目がないから実際には違うが。

……………まあおそらく、その鱗粉を撒き散らしながら俺の場所を確認しているんだろう。

そういう役割が、この霧にはあると見た。

(辺りに充満してきたな…………。)

シヨウコを下げてよかった。

おそらく、吸い込んだら悪影響は必至。

「ガアアアアアアアアアア!!」

バツ!

(っ!空中!!)

俺の前足への攻撃が効いたのかは分からない。

ただ、ゴア・マガラはその翼を広げた後、空を飛んだ。

バサツ……バサツ……!!

「グウウウウウ……グルアアアアアアアアアア!!」

(また煙弾!?)

ドガア!

ブワツ……。

空中に飛び上がったゴア・マガラ、その姿勢のままホバリングをしていた。推進力はどこから来るのか……そんなことはどうでもいい。

肝心なのは、黒紫の鱗粉を、次々と地面に撒き散らしていくということ。

着弾する度。

フヨフヨと、煙弾が落ちたところを中心として、円状に拡がる。

(くっ………そお!!)

もはや、辺りに無事なところなどありはしない。

直撃だけは避けながら、視界は悪いが何とかゴア・マガラを視認する。

(…………このままだとジリ貧……!!なら……!!)

空中にいるとは言え、双剣が届かない高さでは無い。

切っ先さえ当たれば、可能性はある。

「…………シツ!!」

ドゴオ!!

再度俺に向かって放たれた煙弾を避けると、一直線に走る。

バサバサと翼をはためかせながら、黒紫の鱗粉を放つゴア・マガラ。その下から。

「…………らあああああ!!」

ダン!!

跳躍し、後ろ脚に双剣の取っ掛かりをつける。
そこを支点として、無理矢理に自分の体を捻じ曲げる。

(空中回転乱舞!!)

ズザザザザザザザザザザザ!!

ザシユ!!ヒユパツ!!

「ギヤアアアアアアアア!!!」

ドガア!!

(成功!!)

ものすごい音とともに、地に墜ちるゴア・マガラ。

空中にいるなら、斬って落とすしか無い。

俺にできるのは、これぐらいいしか無い。

俺は何とか着地して、追い込みに入る。

(鬼人化……乱舞!!)

ザシユ!!

ズザザザザン!!ザザン!!

ザザザザザザ!!

おそらく弱点であろう頭部に、とにかく剣撃を入れまくる。

チャンス。

少しでも、ダメージを稼ぐ!!

ズザザザザザ!!ヒユパ!シユパン!!

「……………グルルルルル……………!!」

「っ！ちいつ!!」

舌打ちをしながら、後退。

「いい感じですよ!!ご主人さま!!」

「ああ！シヨウコ!!こつちには来るなよ!!」

「はいっ！ち、近づけません!!」

「それでいい!!」

おそらく崖の上にいるのであろう、シヨウコに大声で伝える。

崖上が安全であるとは限らないが……最悪スタート地点に戻ってもらっても良い。

それほどに、辺りは黒紫に染まった。

先程まで白んでいた空が、もはや別の世界のようなだ。

(さて……次は……っ!?)

気を取り直して、再び攻勢に出ようとした。

その時。

異変に気づいて、思わず身構えた。

ゴア・マガラの雰囲気が変わった。

その両脚を地に張り付け、踏ん張っている。

「……………シヨウコ!!何かしてくる!!」

「はいっ!!気をつけま——」

遠く切り立った崖の上にいるであろうシヨウコに、大声を上げて伝える。

その返事を聞いた直後。

「グギャアアアアアアアアアア!!」

「っ〜!!」

今までとは比にならないほどの、大咆哮。

俺は耳を押さえ、姿勢は前傾に。
何とか片目で視認する。

「……グギャアアアアアアアアアア!!」
(まだ……。)

2回目の咆哮。

これはある程度、読んでいた。

3回目は、無い。

そう踏んで、耳を離れた。

だが。

「…………ギャアアアアアアアアア!!」
「ぐあ………!!」

耳を劈く、3回目の咆哮。

周囲の空気が震えている。

ゴア・マガラの身体を中心に、同心球状に白い衝撃波のようなものが見える。

(ティガレックス並か……それ以上……！)

耳がキーンとして、うまく聞こえない。

それほど大きな声だった。

そして、何とか開けていた目で確認したゴア・マガラは。

先程までとは、全く違う姿をしていた。

「……………いよいよ本気ってわけか……………」

のっぺりとしていた頭からは、怪しく白紫に輝く角が2本。
体中からは、これでもかと黒紫の霧を放ち。

「……………」

「グアアアアア……………」

一層異彩を放ち始めたゴア・マガラ。

「……………ふうー……………よしっ。」

恐怖で震える心を締め直すように、俺は息を整え。
本気のゴア・マガラと、相対した。

150黒く蝕まれましょう。

空には日が昇り、間違いない朝と呼べる時分。

なのに、辺り一帯は暗い。

目の前の黒蝕竜ゴア・マガラ。

明らかな形態の変化を見せた。

鱗粉が撒き散らされ、もう視界全てが黒い。

シヨウコは無事だろうか。

「シヨウコ!!」

……。

反応無し。

恐らくあまりの規模の霧に、安全な場所まで退避した……そう願いたい。しかし戦い始めからずっと思っていたが……翼とは別に4本の脚がある。

手足の数が、生き物としておかしい。
まあモンスター相手に今更なんだけど。

「……ガアアアアアアアアア!!!」

「何回吠えるんだよ……っ!」

しつこいぐらいの咆哮。

そう何度も聞きたい声ではない。

生物としての本能、体がこわばってしまう。

「……ガアツ!!」

「ぬお!?」

固まってしまっていた俺の体。

そこ目がけて、ゴア・マガラが突っ込んでくる。

大型犬なら可愛いものだが、黒い巨体がやってくるのだ。

恐怖でしかない。

「っ!!ぐあっ!!!」

ドンツ!!

回避は試みたものの、右肩にゴア・マガラの右前脚が激突。かなり吹っ飛ばされてしまった。

(ダメージは……案外平気だな……。)

新しい装備に感謝だ。

以前の装備なら、吹っ飛ばすだけでは済まなかったかもしれない。

「ガアア!!」

(しかし……飛ぶの好きだな!!)

その漆黒の翼を広げ、空中でホバリングを行うゴア・マガラ。

だからどうやってそれやってるんだ。
そう突っ込まずには居られない。

ブワア………！

(!!)

余裕をかましていた直後。
口に沸きたった、黒紫色。
煙弾の構え。

「くっ………!!」

「ガアアア!!」

ドガア!!

横っ飛びで、その煙弾を回避する。

どこにでも回避できるように、構えていた。
だから、よかった。

恐怖を押し退けて、負けじと突っ込んでいたらと思うと、逆にやられていた。
身震いがする。

(当たったら、おそらくひとたまりも……っ！)

考える間もない。

続けてゴア・マガラが繰り出してきたのは、ブレスの応酬。

「ガアツ……グアアアアツ!!」

(マジかよっ!!)

前方にやってくる、黒紫のブレス。

背後には、崖。

追い込まれた。

どうする。

どうする。

(一か八か……!!)

「ぬあああ!!」

鬼人化。

身体能力を上げる。

そして、意識を切り替える。

(霧に……突っ込む……!!)

体を捻り上げ、マグナム弾のように進行方向に回転。
息を止め、霧のブレスに突っ込んだ。

ブワア!!

ザン！

「ガアアアア!?」

「よ、よおし!!このままあ!!」

ザシユツ！ザザン！

ヒユパツ！

「……グウウウウ……。」

「……………」

(あ……あつぶねえええ!!)

今やったこと。

ブレスに突っ込んで、回転回避。

それが、たまたま運よく成功。

そしてたまたま運よくゴア・マガラの頭に双剣が当たり。

怯んで地面に着陸した相手に、そのまま剣を入れた。

(二度とできる気がしねえ！怖すぎる!!)

「……………ガアアア!!」

そこから、再び飛び上がるゴア・マガラ。

だから、こいつ飛びすぎなんだよ…………。

…………落とすには…………。

「…………行くしか、無いよなあ!!」

ダッ!

飛びながら、口から黒紫のブレスを吐こうとしているこゴア・マガラ。

先ほどの攻撃からも、その様子は見え見え。

崖に追い詰められ、結構ピンチだったけど、なんとか凌げた。

だが、そう何度もできるような芸当ではない。
追い詰められたら、終わり。

ブレスを吐こうとする、黒蝕竜。
ならば。

「フン!!」

ザシユツ!!

「うらああ!!」

ズザン!

ヒユパツ!

「しっ!!」

ザザザ!ズザン!!

ずっとブレスを履き続けるゴア・マガラの足元。

そこは、ぶつちやけ安全地帯。

飛び回り、あちこちに移動するゴア・マガラ。

だが、足元からは絶対に離れてやらない。

双剣が届く高さギリギリで、しつこく斬り刻み続けてやった。

「あああああああ
!!!!!!」

ザシユツ!!ズザン!!ザシユ!ザザン!!

「ギャア……………!!」

ズドオオン!

巨体が、遂に落ちた。

「チャンス!!」

今だ。

この時を、待っていた。

全身全霊を、ぶち込む!!

ズガア!ズガザザザザザザザザザ!!

ザザザザン!!

(鬼人化乱舞!鬼人化乱舞!空中回転乱舞!!)

ザザザザザン!!ヒュパツ!!

「……グアツ!!……グアアアアアアアアアアアア
「つ!くつそ!!」
!!!!!!!」

折り切れなかった。

その、おどろおどろしい角。
狙ったのは、その破壊だったのだが。
頑丈だ。

「……グアアアアアア……。」

だが、ヒビが入っているのは確認できる。
もう少しで、いける……。

(……ん?)

「……グウウウウウ……。」

辺りの暗さが、幾分か収まった。

急に、明るくなり出す空。

ふと見れば、ゴア・マガラの頭は元通りのつぺりとした丸いものに戻っている。
雰囲気も、始め見た時と同じような風貌。

(……戻ったのか……？強化形態だったとして……解けた？)

強化形態。

強くなり、ある程度の変化を行うモンスターは、今まで数多くいた。

ジンオウガなんて最たる例だ。

あいつは分かりやすい。

そして、一定のダメージを与えればその形態は解除される。

ゴア・マガラもまた、同じなのか。

……疑問は残るが、とりあえず戻った。

まずは、よしとしよう。

どんなカラクリか知らんけど、周りも明るくなってきたし。

「……………ふうー……………」

アドレナリン全開の頭を、深呼吸で冷やす。

心が、妙に滾っているな……。

コントロール、コントロール……。

「よし……。」

「……グアアアアア!!!」

「(っ)いつ!!」

再びの、開戦。

ゴア・マガラは、その後も技の応酬を続けた。

飛び上がり、ホバリング状態から突っ込んできたり、地を蹴って俺に突っ込んできたり。

距離を離せば煙弾を打ち、中距離からはブレスを吐き。

鋭い爪の音を間近で聞き、振り回される尻尾に驚かされつつも。

その悉くを、俺は見切った。

張り付いて、時には距離をとって。

飛び上がり時には、回転乱舞で無理矢理ねじ伏せた。

その瞬間、翼に当たって左腕を切ってしまったけど。

問題ない。

大した傷ではない。

「ガアアアアアアアアア!!!」

「っ……!!」

飛ぶ事と同じ位、どうやらコイツは吠える事も好きみたいだ。

だが、そのモーションもわかった。

タイミングを掴んで、翼と顔に咆哮無視の回避攻撃を入れていく。

何度もやってくる形態変化を解除させながら。

徐々にダメージを蓄積させていく。

「……しっ!!」

「グアアアア!!!」

ブワア……。

3 回目の、形態変化の解除。

……見るからに、ゴア・マガラはボロボロになっていた。
翼は俺によって切り裂かれ、その先の爪も、前脚の爪も、妖しい色の角も、折ってやっ
た。

「……满身創痕だな……。」

「……グウウウウ……。」

ダメージは、正直かなり稼いだ。

いける。

いけるぞ。

あと少しだ。

「……グアアアアアアアアアア!!!」

（……最後まで、気を抜かない！）

ザッ!!

ヒュン……………!

「…………アアアアア!!」

(…………攻撃!!)

ザシユパ!!

シユザザザザ!ザザン!!

ズザアア!!

「グア…………!!」

「…………。」

力ない、声。

終わりが近いと、なんとなく分かる。

俺の、勝ちだ。

「……………最後だ。」

宣言し、双剣を強く握る。

までは、よかった。

「……………あ……………?」

カラン。

カラン。

どこか、遠くに聞こえる音。
いや、近い。

地面に、何か落ちた？

ん？

俺は。

今、何をしている？

なぜ、地面を？

地面を前にしてー

ドサア……。

「……え……ああ……？」

動かない。

体が、全く。

「……うう……ぶぼえ……」。

込み上げる、嗚咽感。

視界に見えるのは、赤い吐瀉物。

血、か？

頭が、働かない。

(な……………んで……………)

先ほどまで、俺はゴア・マガラに対して、互角の、いやそれ以上の狩猟を見せて……………。
追い込んでいて……………。

なんで、倒れている？

(……………ツ!!……………!!)

やばい状況だと、ようやく分かる。

そこに至るまでにどれだけかかったのか。
数秒か、それとももつと？

分からない。

分からないけど。

「……………グアアアアアア……………」

運がいいのか悪いのか、耳はよく聞こえていて。

ズン……………ズン……………。

地に伏せているからか、ヤツの動きも振動でよく分かって。

ズン……………。

(止まった……………?)

俺の近くにやってきて、止まった。
と言うことは。

「……ガアアアアアア!!」

「……くく!!」

咆哮。

叫び声。

何度も何度も聞いた。

その声色は、さつきまでと違って、どこか勝ち誇っているように聞こえて。

(やばい! やばい!! ……起きろ! 起きろ起きろ!! 起きろってえ!!!)

「ぐう……!!」

小刻みに震えながら、精一杯の力で体を起こす。

腹が痛い。

胸も痛い。

頭は、痛すぎてもうよく分からない。

切れた腕は、あまり痛くない。

足も。

ただ、力が入らない。

……だからって。

「ぐおおお………っ!!」

立たないと。

教官に怒られる。

死ぬまで、俺は諦めないんだ。

絶体絶命。

ようやく、顔を上げた。

そこには。

「……ガアアア!!!」

俺への攻撃を振り下ろす、ゴア・マガラの姿があつた。

ドガアアア
!!!!!!

「ぐぶお……っ！」

ドン！ドン！

ゴロゴロゴロ……。

視界がぐるぐると、回る。

力が入らないせいで、制御できない。

まるでぬいぐるみを蹴り飛ばしたかのように、地に跳ねる俺の身体。

「…………ガアアアア!!」

「…………ぶほお!!…………つ!!」

そして、煙弾を叩き込まれた。

衝撃で一瞬だけ起き上がった俺は、再び倒れ込む。

今度は、仰向けに。

「…………ん…………んぐっ……………」

腕を立て、肘をつき、何とか上半身を起こす。

(ポーチ…………ポーチ…………)

触れて、情報画面を起動。

(…………マジか…………)

起動しない。

起動しないというより、反応が無い。

デインバルド戦の時と同じか？

際の際まで気力を使い果たしたら、起動しなくなった、あの時。同じ状況、ということか？

ゾクリ。

頭によぎるのは、ギルドで見た、ハンターたちの遺体。

寒気が、止まらない。

「……グアア……!!」

グワアツ。

何とか身体を起こした俺が見たのは、飛び立つゴア・マガラ。そのまま行ってくれるのかと、僅かには期待したが。

そんなことをするほど、間拔けな相手ではなかった。

「……グアアアア……。」

じつくりと、品定めでもするかのようなゴア・マガラ。

目が、俺と合った。

……おそらくは、こうやって相手が弱った後に屠るということを、何度もやってきたんだらう。

だからこそその、あの余裕。

ちよつとでもアイツに同情した自分を、叱り飛ばしたい。

さつきまで、勝ち誇っていた自分を。

……諦めては、ならない。

諦めたら、終わりなんだ。

何とか、生きる道を、探るんだ。

思考は、戻ってきた。

だが体は、ほとんど動かない。

ただただその場に倒れ込むことしかできない俺は。死を覚悟した。

ドオン!!

ゴロゴロゴロゴロ……。

ものすごい衝撃が、体を襲った。

横から跳ね飛ばされるような、衝撃が。

「……………ぐあ……………あ……………れ……………う……………」

肘で体を支えて、顔を上げる。

そして、見えた景色は。

……なんで。

なんでだ。

「……な……んで……」。

力も入れられない。

ただただ、虚しく響く俺の声。

心は、こんなにも嘆いているというのに。

なぜ。

なぜ、シヨウコが、ここにいる。

なんで、シヨウコが、あそこに倒れている。

俺がいた場所に。

血が、傷が。

どうして、動かない。

『ご主人様、無茶せんよう、お願いしますね。』

ふとよぎるのは、狩猟前のシヨウコとの会話。

無茶するなって……あれだけ……。

お前が……シヨウコが……言っていたんだぞ……。

「シヨウコオ……!!」

冷え切った俺の頭。

「シヨウコ……!!」

呼びかけても返事のない、俺の相棒。

「……………あああああああ!!!」

ザツ!

「ガアアアア!!!」

体を起こす。

不甲斐ない自分の身体を。

右足を立てる。

その膝に、両手を置いて、体を支える。

そして、立ち上がる。

「……………」

少しでも気を抜くと、倒れてしまいそうだ。
だが、俺の心の中に。

燻る、何かがある。

(……狂気に満ちてもいい。)

クエストの前から、ずっと滾っていた、俺の心の内。怒れ、昂ぶれ、解放しろと、ずっとうるさかった心。セーブしながら、戦ってきた。だが。

今はもう、いらぬ。
必要ない。

(アイツを……殺す……)
!!!!!!!

ピンツ——。

頭の中の何か、弾け飛んだ気がした。

身体中、死ぬほど重い。
だが、動く。
十分だ。

(武器……。)

視界が、赤い。

「……ガアアア……」

奴が、叫んでいる。
ちよつと待つてろ。
得物が無いと、お前を殺せない。
真つ赤な景色の中、双剣を探す。
あつた。

ザッ！
ヒュッ！

速度を上げ、双剣を持ち上げた。

「ガアアアアア!!」

そのすぐ後ろに迫る、ゴア・マガラ。

「……しっ!!」

「ガアアアア!?!」

速度を上げる。

やって来たヤツの、更に背後に回る。

「——鬼人連斬。」

ザヒュツ!!

ズシヤ! ザザザザザ!!!

「ガアアアア!!!」

バツ!!

たまらず飛び立つゴア・マガラ。
逃すか。

「空中回転乱舞。」

トン。

ヒュン!

ヒュパパパパパ!!

ズザザザザザ!!

「ガアアアアア!!!」

グラツ……。

ズウン……。

墜落する、巨体。

「……………ふんっ!!」

俺は落ち様に、尻尾に一撃。

そこを皮切りに、一気に頭まで回転攻撃。

ザザザザザザザシュ!!

「ギャアアアアアア!!」

「……………終わりだ。」

ズザシュ!!
ザザザザザザン
ドシユツ!!
!!!!!!!

「グア……………」

ズウン……。

倒れて、ゴア・マガラが動かなくなつた。

「……………ぐあああ……………っ!!」

安堵した、その瞬間。

割れるように痛む頭。

その痛みが、感覚として認識できた時には。

俺は、正気に戻っていた。

赤く霞んでいた視界が戻ると、目に入ったのは横たわるシヨウコの姿。

「……………しよ……………ウコ……………」

シヨウコが倒れているところまで、歩き出す。

再び、体が重くなる。

ザッ。

膝をつき、体は倒れる。

ズリッ……………ズリッ……………。

這いずり、這いずり。

何とか、シヨウコの元へ。

「シヨウコ……………!!シヨウコ……………!!」

呼びかける。
声にも力が入らない。

「……シヨウコオ!!」

返事が無い。

そんな絶望を味わいながら。

「シヨウ……コ……。」

俺は、意識が無くなっていった。

151 黒蝕竜の狩猟を報告しましょう。

* * * * *

『……………ご主人様？』

『ん？なんだ？』

『ご主人様って……………何でそんなに無茶するんです？』

『何でって……………その時はあれだ、そうするしかないって感じがしてな。』

『そうするしかない？』

『ああ……………何だかな。鬼人化とか、心を漲らせるような技を使いまくる武器種だからなのかな……………リスクを取ってもよりいい攻撃を、って狙ってしまっんだ。』

『もはや病気やないですか、それ。』

『うっ……………い、いや、双剣使って大体そんな感じー』

『んなワケありません！……………もう、やっぱりウチが付いとらんといけませんね！』

『……………よろしくお願いします……………。』

『……………ふふ、任して下さい！』

* * * * *

……………。

……………。

「……………ん……………。」

夢を、見ていた。

夢というか、思い出。

つい先日のショウコとのやりとりを。

ポム。

手を伸ばすと、サラサラとした感触が。

これは……髪の毛……？

「……すう……すう……。」

「……あ、あの……。」

伸ばした右手の先。

そこにいたのは、眠りこけているハイビスさんであった。

「ん？………ああああ!!そ、ソウジさん!!わ、わかりますか!私です!ハイビスです!!」

「……は、ハイビスさん……ここは……。」

「ああ……よかったあ……目を覚まされて……。」

「……へ？」

ガバッと起きたと思ったら、大声で喜んで下さるハイビスさん。

ここは……ギルドの医務室……？

ベッド……。

ということは……。

「……帰って……きたのか……。」

あの、死地から。

ゴア・マガラを狩猟して……その辺の記憶が……。

『ご主人様っ！』

「!!」

シヨウコ……。

シヨウコは!!?!

「ハイビスさん!!すみません!シヨウコは!!?!」

「は、はい!」

「シヨウコは、シヨウコはいますか!?!あいつ、俺を庇って怪我をして!!」

「シヨウコちゃんなら……ふふ、そちらにいますよ?」

「へ?」

目を覚まして二度目の、間抜けな返事。

ハイビスさんが指を差したその先。

俺と並んだベッドで、眠る姿。

シヨウコであった。

「あ……ああ……よかった……シヨウコ……」

心の底から安堵する。

少なくとも、ここがあの世ということで無ければ、俺たちは生きていたということだ。

しかし、ここまでどうやって？

「……シヨウコちゃんは、眠ったままです……お医者様のお話では、全治2週間の怪我、ということですよ。」

「2週間……。」

「はい。直に目を覚ます、と仰っておられましたよ？」

この世界の治りの速さとか回復薬の効果の凄まじさとか、その辺考えると。

……2週間つてめちやくちや重症じゃないか？

「……俺の、せいなんです。俺が油断して、ゴア・マガラにとどめを刺そうとしたら急に倒れて、追い込まれて……それを庇ってくれたんです。なんで狩猟できたのか……いまいちよく思い出せ——」

ズキイ!!!

「——いつ!?!?」

「ソウジさん!?大丈夫ですか!」

「……は、はい……思い出そうとすると頭痛がして……あつ。」

「そ、ソウジさん?」

思い出した。

頭の痛みで、全てを。

確か……俺は追い込まれて……。

シヨウコが俺を突き飛ばして。

そしたら、シヨウコが倒れていて。

体を何とか起こして。

……言い表せないような精神状態になって、何とか踏ん張って。
とどめを刺して……。

「……ソウジさん。」

「は、はい。」

思い出すと、色々と考えるべきことが山積みだ。
なぜ勝てたのか。なぜ体が動かなくなったのか。

そして、何とか体を動かして……あの時のアレは……何だ？
疑問が尽きない。

そんな様子の俺を、ハイビスさんが制してくれた。

「ひとまずですね……ソウジさん、狩猟、お疲れ様でした。」

「あ……。」

忘れていた。

大事な言葉を。

「……ただいま帰りました。ハイビスさん。」

「……はい、お帰りなさい。」

そう言うと、ハイビスさんは笑った。

とても綺麗で、俺はしばらく言葉を失ってしまった。

* * * * *

3日間、俺は眠り続けていたらしい。

俺達が狩猟に成功した、あの時。

辺り一帯の霧が晴れたものの、俺たちは戻らなかった。

ガーグア車のおじさんが不審に思い、車を飛ばして俺たちを見つけてくれた。

まだモンスターが森丘一帯に戻らないのを見計らって、おじさんが迎えに来てくれた、ということらしい。

「全身怪我だらけのソウジさんと、血だらけのシヨウコちゃんを拾って来られたそうです。……あの方には感謝してもしきれませんね。」

「さずがおじさんだ……。」

ワサドラどころかギルドにまで運んでくれたおじさん。

危険地帯まで入ってまで頑張ってくれたガーグーたち。
ありがたすぎる話である。

俺たちは医務室に速攻で運ばれた。

処置をされてもなお、ずっと眠っていた。

流石に3日も寝てるとなると、心配もピークに達したらしい。

「本当に……目覚めてよかった……。」

「ハイビスさん。」

心の底から安堵した、という表情のハイビスさん。

……迷惑をかけてしまったな。

「……………」

身体の様子を確認してみる。

傷を負った左手。他にもいくつか傷があるようで、腕や腹、足に包帯が巻かれていた。

骨は大丈夫そうだが……体の中がとにかく痛い。
筋肉痛も。

……まあ少し休めば大丈夫そうだが。
骨折はしてなさそうだし。

「後処理でギルドも大変でしょう、すみませんお手数かけて。」

「えっ?……いやいや!何を言ってるんですか!?!」

「えっ?」

「ソウジさんは……いわば町のピンチを救った英雄ですよ?ここまでしかできないギルド側の方が、申し訳ない位です!」

「そ、そうですか。」

そこから更に聞いた話。

俺たちの狩猟と同時に、ワサドラ周辺からその西部にかけて広がっていた濃い雲が晴れた。

ゴア・マガラが影響していたのだろう。

ワサドラ周辺の規制も解除、再び交易や人の行き来が可能になったらしい。

まだ危険な町の西部は、現在多くのハンターが対応に当たっているとかが。中には狂竜症の影響で獰猛になった個体を屠った、猛者もいるらしい。

今ではその特殊な個体を討伐しようと、ハンターがあちこちから集まりだしているとか。

元気な話である。

「ゴア・マガラの影響は、まだ残っていますね。」

「ええ。ですが、その大元は絶たれたわけですから。これから収束に向かうだろうと、ギルドは踏んでいます。ゴア・マガラの回収は、霧が完全に晴れてから行われる予定です。」

「なるほど。そしたら——」

コンコン。

「——あ、はい。」

唐突に部屋に響くノックの音。

反射的に、返事をしてしまう。

ガチャ。

「おお！目を覚まされてましたか！ソウジさん！」

「あ、お疲れさまですシガイアさん。」

「それはこちらのセリフですよ、ソウジさん！いやあ、本当に狩猟お疲れさまでした！」

「いえいえ。」

「……色々とお話を伺えたらと思いましたが……その前に。」

一言断ると、急に真面目な顔になったシガイアさん。
すると……。

「……本当に、ありがとうございます。」

深々と頭を下げた。

明るい雰囲気から急に真剣になった。

あまりの落差に、俺は戸惑ってしまふ。

「うえっ!?!いい、いやいや!顔を上げて下さい!シガイアさん!」

「……ギルド……いや、この町を代表して、礼をさせて頂きたい。形ばかりですが……。」

「は、はい。それはもうありがとうございます……頭を上げてください。」

とは言うが、シガイアさんは頭を下げた姿勢のまま。

ハイビスさんもいつの間にかシガイアさんの横に並び、直立不動に。

もう何がなんだか。

「……ギルドは、あなたに全てを託した。……聞こえはいいが、大変無責任なことをしました。ですが、ソウジさんは狩猟を達成しました。ギルドのトップたる私が頭を下げずして、どうするといふのです。」

「いやまあ……もう終わったことですし。何というか、俺の精神安定上もう頭を下げるのは……。」

「……わかりました。」

ようやく頭を上げて、顔を見せるシガイアさん。
少しお疲れのご様子。

そりやそうか、ゴア・マガラの影響はまだまだ残っているのだろう。

「……ソウジさんのおかげで、町の物流、人流も再開しました。直に、元通りになるかといや、感謝してもしきれませんよ。」

「は、はい。そう言っていただけだと、頑張った甲斐があります。」

「まだ影響を受けたモンスターはチラホラといますが……まあ、問題ないでしょう。」
「良かったです。」

「マシヨルクが非常に生き生きと狩猟をしてきてますよ。」

「教官が……それはすごそうですね……。」

「アレは間違いなくこの街のトップの戦力ですからね……むしろ、いなかっただら結構キツかったかもしれません。」

教官が動いてくれているのか。

そりや百人力だ。

頼れる人である。

「凶暴化したアオアシラを瞬殺したと思つたら、すぐさま同様に凶暴化したリオレイアの狩猟に行きました。……先程、完了報告が。」

「凄いですね……。」

「ちなみに、ソロです。」

「うわあ……。」

あの人の体力は底なしか。

「とういうわけで……当面の脅威は去つたと見ていいでしょう。ゴア・マガラについては、早速分析に入りました。首都からも研究職が来る手筈になっています。」

「首都。」

「ああ、ご安心ください。彼らはただのモンスターマニアといえいいのか。色んな謀略とは一番縁遠い方々です。」

「はあ……。」

狩猟の前に、この大陸の成り立ちから首都のよくわからない思惑についてまで色々聞

かされていた。

少し警戒してしまう。

……：そういうやドールのお母さんであるミヤコさんは、どうなんだろう。
時期的に、そろそろ帰省される頃だと思っただけ。

「それで、ハイビスさん。」

「あ、はい！」

「狩猟の方の報告はお済みですか？」

「い、いえ！まだです！」

「それは丁度いい。私もお聞きしたいのです。……ソウジさん、お疲れのところ悪いのですが……：宜しいですか？」

「あ、はい。いいですよ。」

気を遣わせてしまっているが、まあ俺も一応けが人だしな。

気遣いはうれしい。

そこから、シガイアさんとハイビスさんに報告を始めた。

* * * * *

「なるほど……。」

「そ、壮絶ですね……。」

二人が険しい顔をしている。

まあなあ。

死ぬかもしれない瀬戸際、シヨウコも身を挺して、何とか勝てた。

俺たち二人の遺体が上がっていた可能性もあったわけで。

そりゃそんな顔にもなる。

15分ほどかけて、狩猟の報告を行った。

比較的すぐにゴア・マガラが見つかったこと。

狩猟開始後すぐは、普通に……むしろ有利な程、狩猟できていたこと。

鱗粉が充満してきて、シヨウコに下がってもらって。

そして、頃合いかと思ったら急に倒れてしまつて。

そこから蹂躪。

一方的な展開。

そして死を覚悟したその時。

シヨウコが庇ってくれた。

そこから、奮起。

まるで暴走列車のように心臓が全身に血を送り、立ち上がって。

無事に倒せた。

この辺記憶が曖昧だけど。

そしてシヨウコの元にはたどり着いたが、倒れてしまった。

そんな内容を話した。

すると、ハイビスさんが口を開けた。

「……お話、ありがとうございます。その、ソウジさんの今のご体調は？」

「え？ ああ……変に昂る感じとか、そういうのは無いです。あの時は……こう、無我夢中で。我を失ってました。」

そうなのだ。

鬼人化をすると、感覚が鋭敏になり、思考も攻撃的になる。

その辺の心のコントロールは、既に身につけていたつもりだったけど。

あの時は、もう怒りに身を任せて、ゴア・マガラを屠ることしか頭になかった。

「……………ソウジさん。」

「あ、はい。」

話を聞いていたシガイアさんが、呼びかけてきた。

「……………双剣使用の特性について、少し調べました。」

「特性？」

「はい。全武器種中、双剣は特に『鬼人化』と呼ばれる強化状態に、頻繁に移行します。」

「は、はい。」

「極めた者は、鬼神化の更にその先、『獣宿し』という超強化状態になれる、と。」

「……………獣宿し……………」

獣。

確かに。

俺はあの時、獣みたいな思考をしていたかもしれない。

「これは私の推測ですが……狩猟で日常的に鬼人化を行ってきたソウジさんです。そういった精神状態の移行は容易い。その例の力で、憑依状態なるものにも移行した経験もある。それも自主訓練で、無数に。」

「は、はい。」

「そんな中、興奮状態を引き起こしやすい狂竜症に罹患。ソウジさんの身体が、擬似的に『獣宿し』に近い状態になったのではないでしょうか。」

「……………」

「または、『獣宿し』そのものを会得したか……。どちらにせよ、心当たりはありますか？」

思い当たる節は、ある。

あの、プツンと頭の中の何かが切れた時。

ギフトの憑依状態に似た、気持ちのスイッチの入れ替えが行われた。

ような気がした。

意識はあったけど。

「心当たり……あります。」

「そうですか。……ソウジさん。」

「はい？」

「……その力、もう、お使いにならない方が良いでしょう。」

「そ、それは——」

なぜ？

と二の句を告げさせぬまま、シガイアさんが続けた。

「——ソウジさんの命を削る。そんな技だからですよ。……『獣宿し』の使用者の話では、劇的なパワーアップが見込めるそうです。思考スピードの上昇、単純なパワー増加やスピード向上。……そういった状態になったのではありませんか？」

「……………あー……………」

思い出す。

頭は『ゴア・マガラを倒せ』とそれでいっばいだった。

だが、かなりのスピードとパワーがついていた。

動けなかった体の状態からは、考えられないほどの飛躍的な向上。

「……確かに。よく動けてましたし、結果トドメまで刺せました。」

「ええ。ですが、この技。間違いなく、ハンターの命を削っています。」

「……………マジですか。」

「マジも大マジです。事実、先程の使用者は『体を蝕む程の負担を強いるこの技は、後の双剣使いは使用すべきではない。』と書き残していました。」

「うわぁ…………。」

「……………そ、ソウジさん…………。」

ハイビスさんが心配そうな目で俺を見つめてくる。

「……………承知しました。意図的に使おうとするのは、やめておきます。」

「ええ、賢明かと。」

「まあ、その状態になるという方法がよく分かりませんが…………。」

狂竜症の影響による興奮状態。

双剣使いの十八番、鬼人化。そして憑依状態という、精神の移行に慣れている俺。更には、シヨウコをやられたという怒り。

様々な要素が絡み合つて、その『獣宿し』とやらが発動したとして。

……条件がよくわからん。気をつけていこう。

「ちなみに、黒い霧の正体とは、何だったのでしょうか。」

「あ、多分アイツの……鱗粉です。」

「鱗粉?」

「はい。単純に、体から発せられるものって言ったら、それぐらいかなーと。それに閃光玉を使ったら、全く反応がありませんでした。多分目がなくて……あの鱗粉で周囲を探っているんじゃないかな、とも。」

「なるほど……。」

「で、でも、霧がない時も、モンスターはソウジさんを狙っていたんですね?」

ハイビスさんからご尤もな意見をいただく。

「そうなんですよね。まあフルフルとか、目のないモンスターはいますしね。雰囲気とか心配……とか、そのへん感じられるとか？」

「……はあ……モンスターって底が知れませんか……。」

「そうですね、俺もそう思います。」

空中を浮かんだり、体内のどこで生成したんだと突っ込まずにはられない煙弾を繰り出したり。

その辺のファンタジー要素は、もう俺の中で割り切っている。

対して生態なんかは妙に合理的だったりするし……ぶっちゃけて言うと、よくわからん。

「はい……ご報告、ありがとうございます。早速研究分析に役立たせてもらいます。……ハイビスさん。」

「はい、すぐに。」

「助かります。」

サラサラとペンを動かしていたハイビスさん。

このあとひとまとめして、その研究とやらに回すのだろう。
仕事が早い。

「お疲れのところ、申し訳ありませんでした。……本当にごゆっくりされてください。」

「はい、ありがとうございます。」

「………………。ああ…………。ゆっくりはできないかも知れませんね…………。」

「へ？」

ふと入り口のドアを目にしたシガイアさんが、なんだか不穏なことを口にした。

…………。ゆっくりできないの!?

「まあ、直にわかりますよ。それでは、私はこれで。」

「あ、はい…………。」

スタスタ…………。

ガチャ。

颯爽とシガイアさんが去り、ドアを開けた。

その瞬間。

「ソウジー!!生きてるー!?!」

「にや!?!やあつと話が終わったにや!?!お見舞いに来ましたにや!!」

「ソウジさん!見舞いに来たんだが……あんまり人が多くてなあ!騒がしくてすまんな!!」

「ソウジさん!!お見舞いに来まし……あつ——」

ズデーン!

ドアの向こうから現れたのは、シャレにならない事を言うセツヒトさんに、エプロンをつけたままのオスズに、ガーグア車のおじさんに、派手にすつ転んだドジっ子ハンズに……。

急に、病室が嵐のようになった。

「……………ちよつと、みなさん！落ち着いて！」

「ソウジー！無事で……………良かったあ……………!!」

「うわ！ちよ、ちよつと！セツヒトさん!!」

「せつちゃんー!!」

「お、おお……………積極的……………」

セツヒトさんに、頭を抱きしめられる。

いや、締められる。

……………洒落にならないぐらい痛い。

そしてそれを見てハズがなにか言ってる。

助けてくれ。

「シヨウコ……………まだ目をさまさんにやあ……………」

「オスズさん。」

オスズさんはシヨウコが心配な様子。

ずっと眠っているのだ。無理もない。

「せ、セツヒトさん！ここは病室ですから！離れてください！」

「えー。ハイビスちゃんずっと付きつきりだったんでしょー？私もー。」

「わ、私は何もしてません!!」

「ホントにー?」

「……………な、ナニモシテマセンヨ?」

目が泳いでいるハイビスさん。

えっ? 俺何かされたの!?

ここは病室である。

そして俺は病人である。

多分。

なのに主にセツヒトさんとオスズによって、一気に騒がしくなった病室。

ギャーギャー。

ワーワー。

……騒がしい限りである。

「もう……みなさんそろそろ静かにして——」

そう言いかけて、ふと入り口を見やると。

「そ、ソウジさん。」

「ド、ドール？」

ドールがそこにいた。

「う……うう……よかったあ……うう……。」

タタツ。

ギョツ。

「わおっ。」

「わあっ……………」

驚きの声を上げるセツヒトさんとハイビスさん。他のみんなも一斉に静かになった。

「……………お、おがえり……………おがえりなさい……………ソウジさん……………」

「ドール……………」

涙を流して、俺の胸元でえづくドール。

……………心配、かけたな。

「……………ただいま、ドール。」

「……………くん……………おがえりなさい……………」

感情をあまり表に出さない子。

ドール。

その涙を見て。

改めて、俺は生きて戻って来られたんだと、実感した。

ただいま。みんな。

152 退院しましょう。

俺とシヨウコが入院した病室。

お見舞いに来てくれた人達で、たいへん賑やかであった。

……賑やかな病室ってなんだ。

セツヒトさんにオスズさんに、ハンスさんにドールに……。

とにかく騒がしくなってしまった。

「ソウジさん、体の方はどうだ？」

「おじさん。いや、本当に。この度は助かりました。」

「いや、いいってことよ！ 気にしないでくれ！」

俺とシヨウコ、二人を運んでくれたおじさん。

異変を感じて、狩場の中まで迎えに来てくれたというのだから、ありがたいという他なかつた。

「まあ、今はちよつと騒がしいからな！また落ち着いたら酒でも飲もうや！じゃあな！」
「あ、はい！お気をつけて。」

そして迷惑を考え、早々に立ち去っていった。

お見舞いを持ってきてくれた果物類を、スツと置いて。
かつこいい人である。

セツヒトさんは終始、俺にべつたりだった。

「いやー、やるじゃんねー。ソウジー。もうG級でいいんじゃない？」

「何を言いますか。今回もギリツギリの狩猟でしたよ……。」

「誰にも倒せないようなモンスターを倒したって……結構凄いことなんだよー？」

会話こそ普通だが、距離が近い。

ベッドに腰掛けて俺の横を陣取っている。

「セツヒトさん！その、近いですよ！ソウジさんと！」

「おー？何ー？ハイビスちゃんやきもち系ー？」

「ななな何をおっしゃってるのか……。」

「じゃーあー……はーい、どうぞー。」

ヒヨイ。

ポスン。

セツヒトさんが、まるで子猫を扱うかのようにハイビスさんを持ち上げる。すると、自分が座っていた場所にハイビスさんを座らせた。

「えっ!?!えっ!?!」

「よーし、これで文句ないでしょー？」

「い、いやいやいや！そそそそういう話ではありません!!」

「えー。ちがうのー？」

……とりあえず放っておこう。

この方々とは、また話をしないといけない。

その反対側、シヨウコのベッドの周りには、オスズやドール、ハンズが並んでいた。シヨウコはまだ目を覚まさない。

「シヨウコ……お見舞いに来たにやあ……？ダメにや、起きないにやあ……。」

「そ、そんなに起こさなくてもいいんじゃないかな？寝かせてあげよう？」

「そ、そうですよ。お疲れなんですよ、きつと。」

オスズが、寝ているシヨウコのほっぺたをツンツン。

それを制止しようとするドールとハンズ。

珍しい組み合わせである。

「にやあ。シヨウコは昔から、寝るふりがうまかつたんだにや。もしかしたら、と思つてにや。」

「脇腹をこちよこちよして起こすのはどうかと思いますよ……。」

オスズはそんなことまでしていたのか。

見逃した。

なんだその可愛い光景。俺も見たかったぞ。

ヒナタさん辺りが見たら、尊さに涙を流すかもしれない。

「……。」

「ソウジ……ハイビスちゃんがせっかく横にいるのー、変なこと考えてるでしょー。」

「えっ?! いやいやいや、考えてませんよ。」

「ははははハレンチイ!？」

ギャーギャー。

セツヒトさんのいつものいじりに、ハイビスさんの鋭敏なハレンチ感知センサーが発動。

「一体何を考えていたんですか!？」と聞かれ、「オスズさんがシヨウコをくすぐっていてい

「るといふそれはもう可愛らしい光景を頭に浮かべていました」なんて正直に言うわけにもいかず。

何とか誤魔化しているところに救いの手が現れた。

コンコン。

ガチャ。

「入ります。みなさん、ここは病室ですから。面会時間は終わりですよ。」

「あ、はい。じゃねー、ソウジ。シヨウコちゃん。」

「こ、これは失礼しましたにや。また来ますにや！ソウジさん、シヨウコ！」

「ソウジさん、お着替えとか、平気？」

「あ、大丈夫だぞ。ありがとう、ドール。それに、ハンズも。」

「ご無事でとにかく安心しました！また来ます！早くランニングしましょうね！」

「お、おう。」

ハンズからランニングのお誘い。

いつも辛そうな顔をしているからやめておこうと思ったが、よし、そんなに言うならまたやってやろう。

看護師さんがやってきて、皆が素直に病室から出ていく。

ようやく解放された俺。

非常に騒がしかったが、ようやく静かな部屋に戻りそうだ。

「……ソウジさん。」

「あ、はい。」

だが、一人残っているハイビスさん。

看護師さんが来た瞬間、小型のモンスターののように俊敏に起立していた。

「……本当に狩猟、お疲れ様でした。その、ゆっくりされてくださいね。」

「……ありがとうございます。ハイビスさんも、お仕事の方頑張ってください。」

「……はい！ふふ。……よーし、やる気出てきました！残業頑張りますね！」

「あ、はい。」

ボタン。

ハイビスさんが非常にやる気になって、部屋を出ていかれた。
これから残業か。

……………。

うーん、受付嬢を始めとしたギルド職員は、間違いなくブラック。
ハイビスさんが倒れませぬように。

「……………うーん……………」

「……………」

シヨウコが何やら唸っている。

……………俺も何もすることがないので、とりあえずおじさんの持つてきてくれた果物でも
食べることにした。

シヨウコは、まだ目を覚まさない。

* * * * *

病室は暇である。

なので、ボーッと思考するにはちょうどいい。

時刻はもう夜。だが、全く眠くならない。

開け放した窓からは、外の喧騒が少し聞こえてくる。

……既に10回は「乾杯」の声聞こえている。

町の活気が、再び戻ってきたのだろう。

いいことである。

「……………」

考える。

まずは今回の相手、ゴア・マガラのこと。

一言で言えば、異様だった。

思えば、ハンザさん達の暮らす放牧地帯にいるジンオウガの目が、死ぬ間際に赤かつ

たことから、色々と騒動が始まった。

神様から話を引き出して、なんかヤバイことは確定。

そこから沼地でタマミツネと戦った。

アイツは、完璧に鱗粉……黒い霧に感染していた。

攻撃や挙動の凶暴性、強さ……いつもの様子とやらは知らなかったが、それでも異常だった。

その原因、大元が、今回の相手であるゴア・マガラ。

タマミツネと同様に感染したモンスターもまだいる。

早めに倒すことができてよかった。

ギリギリだったけど。

「……………」

狩猟の時を思い出す。

……ギリギリ、だったな。

そりやまあ、体に異変は起きると思っていたし、実際精神的な意味では、狩りの前からおかしかった。

コントロールしながら戦えていたと思うが、急に力が抜けた。急だったし、最悪のタイミングだった。

俺の場合、狂竜症を克服していたと思っていたが、勘違いだったのか。

それとも流石に人間の許容できる鱗粉の量をオーバーしてしまったのか。

……その辺、自分の体なのに定かではない。

……まあ、この辺はいいや。

考えても答えは得られない気がする。

問題なのは、ここから。

命を削る技、『獣宿し』というやつである。

あれは……強力だった。

憑依状態か……それ以上の力を発揮できた。と思う。

頭の中は結構冷静で、冷静なまま、ゴア・マガラを殺してやる、と。

そういうわけわからん心境であったことは、覚えている。

「命を削る技、か……。」

使わない、とは言ったけど。

もし。

もしもまた、今回のような状況になったら？

大切な人がやられて、絶体絶命になったら？

考えたくないことではあるが……切り札として使うしかない。

常に使うことは無くても、その発動条件とやらは、少し研究していくことにしよう。

シヨウコ辺りには全力で止められそうだから、こつそりと。

研究の切り口は、やはり鬼人化、だろう。

今まで何度となく行ってきた、双剣使いにだけ許された、身体強化術。

精神の移行というのか、それを行うことには慣れている。

意図的に、自身の攻撃性を高め興奮状態に持って行く、か。

……難しそうだが、やってみよう。

「う……………ん……………？」

シヨウコの苦しげな声が聞こえた。
チラリと見る。

すると、驚いた。

「あれ……シヨウコ？」

「あ……。」

何と、シヨウコが目を開けて、こちらを見ていた。

その目からは涙が流れ、ベッドにまでポタポタと溢れていた。

「シヨウコ！だ、大丈夫か!?何処か痛いのか!？」

「ご主人様……ご主人様や……ああ……よかつたあ……。」
「……シヨウコ。」

俺の顔を見るなり、泣き出す。

オロオロとしてしまう。

どうすればいいのか。

「……と、とりあえず……無事か？」

「……それは、こっちのセリフです。」

「いやいや！十分に俺のセリフだ！……心配した。」

「それは、ウチもですよ……。」

無理に体を起こそうとするシヨウウコ。

痛みがりながら上半身を起こすと、体のあちこちを確認し始めた。

「痛いんですけど……ご主人様が無事で……すんません。泣いちゃいました。」

「……いや、いいんだ。まずは……ありがとう。」

「……………」

「シヨウウコが底つてくれなかったら……多分今頃、俺たちはここにいない。」

「……………あの時、ウチも体がうまく動かなかったんです……でも、なんとかせんとつて

……気がついたら、崖から飛び降りて、アイツの前に……。」

「そうか……。」

どこかに避難していたわけでは無かったのか。

「死ぬ時は、そんな時や、思うて。氣いついたら、もうここに。」

「そうか。」

「あん時……どうなったんですか？」

「……………」

そこから、シヨウコに色々と伝えた。

何とかゴア・マガラを屠り、おじさんが俺たちを拾ってくれて。

三日間寝込んでいたこと。

昼間には、色んな人がごった返していた事。

特にオスズに色々と体を触られていた。

と伝えたら、シヨウコが頬を膨らませる。

「オスズさんは、後でお説教です……………」

「ははは……………あの人なりに、心配していたんだと思うぞ？」

「そうですよねえ……………あの天然さんは……………」

そんなことを言いながら、わずかに微笑むシヨウコ。

母親、姉、そんな家族みたいな間柄なんだろうな。

お互いに気を使わない、そんな関係。

すると、俺の話題になった。

「……その、ご主人様の獣宿し、ですか？」

「あ、ああ。」

「……絶対に、使っちゃいけませんよ？……命を削るやなんて、そんな……。」

「……………」

確約はできない。

まあ頻繁に使うつもりは勿論ないが。

というか使えるかもわからんし。

でもまあ……ヤバイときは……。

「……………やるつもりですね、ご主人様。」

「……………そりゃあ、な。」

大切な人や町がやられそうなら。

俺は、多分迷わない。

「……………付き合いも長くなりましたからね。ご主人様は、無茶する人なんです。ようわか
ります。」

「ははは。そうだな。」

「もう……………やっぱり、ウチがおらんといけませんね。」

「……………ああ。よろしく頼む。相棒。」

「ふふっ……………はいつ。」

笑みをこぼして、返事をするシヨウゴ。

いつもの弾けるような笑顔に、俺もようやくやく安心することができた。

……………。

.....

「やっぱ、最初は良かったですよね。」

「そうなんだよ。意外と戦えてた。新しい武器と防具は、かなり性能が良かった。」

「流石、セツヒトさんとご主人様です。普通新しい装備なんて、すぐにはよう扱えませんが。」

「体のサイズがぴったりでなあ。すごいよな、セツヒトさん。違和感もなんにもなかった。」

「あの人……超人なんちゃうかって思う時あります。」

「安心するといい。あの方は、狩猟の面ではとつくに超人だ。」

「ああ……そうでした。」

いつものように、狩猟の反省会をした。

体を休めるべきなのだろうが、正直全く眠くない。

とつくに寝る時刻なのだが、俺とシヨウコは遅くまでだべりあった。

「ご主人様？」

「ん？何だ？」

「……もうバレバレかも分かりませんが。ウチ、ご主人様、好きです。」

「ぬおつ、な、何だ急に。」

「まあ……ウチなんて、眼中に無いかもしれませんが。周りには負けませんよ！」

「……………ああ……その、なんだ。今は、そういうつもりは無いです。」

「あ。ええですええです。お側におればもうウチ、最高なんで。」

「お、おう。」

シヨウコらしいストレートな物言いに、少し照れてしまう。

「それに、ウチはご主人様の唯一無二の相棒、なんですよね？」

「そうだ。当たり前だろ。」

「ふふ……よし、一歩リード……！」

「それはリードというのか……。」

非常にまつすぐな告白のされ方をされてしまった。

変にドキドキしない辺り、俺とシヨウコの関係性は、もう行くところまで行っている

気がする。

これからも、相棒として頑張ってもらおう。

「……セツヒトさんやハイビスさんたちは、どうするんです？」

「……腹は決めてる。殺されるかもしれんが、言うしかない。」

「……何言うつもりなんや……。」

そりゃ、返事だけど。

そんなアホみたいな話をしながら、夜は更けていった。

……。

……。

暇な時間は早く過ぎ去るといいうが、実際そうぞ。

二日後。俺は退院した。

「化け物ご主人様！ウチを置いてかんで！」

「人を化け物扱いするやつの言うことなんか聞くか！」

そんな軽いやり取りをして、俺はとつとと退院。

シヨウコは当初の予定よりは早くなりそうで、明日までは様子を見るそうだ。
シヨウコも充分に化け物である。

お医者さんに「あ、ソウジさんはもういいですよ？」なんて言われた。

……ちよつと投げやりで、悲しかった。

その足で退院の手続きをしようとしたら、大変なことになった。
ギルド中のハンターに囲まれたのだ。

歓声が上がリ、何故か胴上げまでされる始末。

しかもさすがハンター。胴上げの高さが半端じゃなかった。

天井にぶつかりそうになり、股間の辺りがヒュツとするような浮遊感と恐怖を味わってたら、

「皆さん!! いい加減にしなさい!!」

というハイビスさんのお言葉で、何とか解放された。

ハイビスさんの前では、ワサドラギルドのハンターは皆、子どものようになる。
おかんみたいだった。

「……ソウジさん! 絶対に今、失礼なこと考えてましたよね!!」
「イイエカンガエテイマセン。」

さすが敏腕受付嬢。

よく見てらっしゃる。

その後は、もう色んな人に飲み、食事にクエストに誘われた。

気のせいではなく、中には熱い視線を送ってくださるお姉様方もいらつしやった。
完全にモテているが、まあ一過性のものであろう。

丁重にお断りを申し上げた。

「いやはや……すごい騒ぎだと思って来たら、ソウジさんでしたか。」

「シガイアさん。」

人だかりが凄くて、さすがのハイビスさんでも収集がつかない、そんな状況。

そこにやってきたシガイアさん。

「これまたとんでもないことを言い始めた。」

「みなさん！明日の夜、宴を開きます！場所はここ！ギルド横集会所！費用はギルド持ちです！」

「……………」

一瞬静まり返る場内。

そして。

「うお——！！」

「やったぜ！タダ酒だ!!」

「飲むぞー!!」

ハンターたちが喜びの声を上げた。

「……………ソウジさん、こうでもしないと、皆さん収まりませんよ。」

「いや、ありがとうございます。」

「とんでもないです。町の救世主にしてやれることがこんなことなんて、むしろ申し訳ないですよ。」

「はあ。」

「というわけで、ソウジさんも。宴。必ず参加してくださいね。」

「は、はい。」

断る理由なんてないが。

完璧なタイミングで、完全に言質を取られてしまった。

さすがのシガイアさんである。

「もしかしてまたギルマスのマスター服姿が見られる!？」
「いけない!みんなに伝えないと!!」

……俺に熱い視線を注いでいらつしやったお姉様方が、速攻で離れていく。
……ちよつと虚しくなった。

シガイアさんのダンディぶりは、どうやらファンが多そうである。

* * * * *

ガチャ。

グイイ……。

「た、ただいま帰りました……。」

宿「ホエール」に帰ってきた俺は、ゆつくりとドアを開けた。
昨日ドールを泣かせた手前、何だか気まずかったからである。

テンションは朝帰りのお父さん。

『あ。おかえりなさい。』

「あ。ドール、ただいま。」

水場から聞こえるのは、いつものドールの声。
いや、いつもより落ち着いて聞こえる。
昨日とは打って変わって。

『お部屋、お掃除したから。』

「ああ、ありが……ドール、風邪でも引いたか？」

『へっ?! いやいや、引いてないわよ!?!』

「……………ん?」

おかしい。

声はドールなのに、何か違う。

こう……少しの違和感なのが。

「ドール？」

『な、なあに？』

「…………いや、気のせいかな。部屋に行くよ。後でホエールさんにも話すけど、しばらくハンター業は休みだ。」

『あ。うん。わかったー。』

「……………？」

どうも様子が変だ。

……………まあいいか。

「それじゃ2階に——」

ガチャ。

「ふう……………ただいま……………あれ？ソウジさん!?もう退院していいの!？」

「……………んん!？」

いやいやいや。

ちよいと待て。

水場にドール。

入口にドール。

これが俺の夢とかならば、まだわかるが。
んなわけない。

「あれ?ど、ドール!?何でここに……?」

「えっ?今買い物をして帰ってきたんだけど……。」

「……………」

入口にいるのは、いつものドール。

膝下まである焦げ茶色のハーフパンツにエプロン、白い半袖Tシャツ。

栗色のショートヘアの髪の毛。

間違いないよなあ……。

「じゃあ今そこにいるのは……?」
「……………ああ!!」

大声を上げたかと思うと、買い物袋を机において水場にダッシュを決めるドール。
つて、速っ!?

『……………やっぱり!!なにかおかしいと思った!!』

『あ、あらー! やっぱりバレちゃったわ!! 作戦失敗ねー。』

『もうっ、普通に帰って来られないの!?!』

『ほ、ほら、私って生まれながらのエンターテイナーだからね? つい、ね? ……驚いた?』
『驚いた……ほら、ソウジさんに謝って!』

『は、はい!!』

なんかやり取りしている。

……………何となく読めた。

この、ドールにそっくりなのに性格がまるで違う人。

俺は知っている。

「わたた……そ、ソウジクーん……ご、ごめんね。驚かせちゃって。」

「驚くも何も……何やってんですか？」

「ドールになりきって、サプライズしようかとね！」

「……いや、流石ですミヤコさん。すっかり騙されました。」

水場から出てきた女性。

ドールにそっくりで全然そっくりじゃないお方。

ドールの母、ミヤコさんであった。

153 人間関係とリスクについて考えましょう。

実家に帰る。

一人暮らしをして、親のありがたみが分かるというもの。

洗濯に炊事に、様々な家事。

たった一人分なのに非常に面倒。

それが仕事と相まっては、更に面倒に。

挙げ句不摂生になって人間としてダメになって。

そんな状態で実家に戻った時の安心感と言ったら無い。

自分のことを思い出して恥ずかしくなる。

そして今、目の前の女性は実家に帰って落ち着いているご様子。

とは言っても、娘の元に帰ってきた母な訳だが。

「あー……すつつごく落ち着くわあ……。」

「……だらけすぎですよ、ミヤコさん。」

「だってね。こんなに安心してできる空間なんて中々……ズズ。……ドールの入れるお茶は年々進化しているわね！」

「俺がお茶好きなもの……いろいろな茶葉を探してくれたんです。」

「あら……愛ね!!」

「何を言つとるんですか。」

その節はドールの優しさとお茶の味に感動したものである。

この目の前のミヤコさん。

ドールのお母様である。

亡くなったお父さんの命日に合わせて、年に一回帰ってくる。

どこからかって、この人の勤め先は何と首都ギルド本部。

しかも確か総務長とか、結構な役職だったと記憶している。

……去年も思ったが、かなり偉い人だよなあ。

ギルドの役職の偉さとか全然知らんけど。

「例年、命日に合わせて帰られていると伺ってましたけど。」

「そうなのよー、色々……本当に色々あってねー? ドールには『遅くなつてごめんね。愛

しの母より。』ってお手紙送ったんだけどね！」
「自分で書く内容じゃない気がします……。」

相変わらずツツコミどころが多いお方である。

俺も去年のしばらくの期間、この宿で生活を共にしていた。

このノリの良さというか、ドールと正反対の性格。
かなり打ち解けてしまった。

「おーミヤコさん。帰られたんじゃな。」

「あらー、お義父さん！本当今帰りました〜！これお土産です！」

「ほっほっ。ありがたく……。本当に、元気そうで何より。今回はどれぐらいいられそうなんじゃ？」

「それがですね、お仕事が立て込んでまして……。しばらくはご厄介になります〜！」

今回も滞在が長いのか。

ドールも喜ぶことだろう。

『……あー！お母さん！勝手に食材いじったでしょ!!』

「あー！ごめんねー。こう、お母さんの料理の腕を久々に奮おうとしたんだけどねー……。」

『もう……今夜は私が作るから、お母さんは座っててね!!』

「むー。はあーい。」

水場から飛ぶ、珍しいドールの大声。

完全に立場が逆である。

実家に帰ってきた娘と、実家の母。

ドール……喜んでいる……よな？

しかしミヤコさん、一体どんな生活を首都で送っているのか。
気になる。

「ミヤコさん、首都で暮らしてるんですよね？」

「ええ！もちろん！シティで働くバリバリウーマンよ!!」

「じゃあその、自炊とか洗濯とかー」

「ーソウジくん。」

「あつ、はい。」

「それ以上は、いけないわよ……。」

「アツハイ。」

人には聞いてはならないことがある。

スルスルー。

本当に、実家に帰ると落ち着くものである。

「ほっほっほ。」

いつものように笑うホエールさん。

うーん、やっぱり落ち着くぜ。

ここが俺の実家みたいなものだからなあ。

* * * * *

翌日。

俺はハンズを連れて、朝のトレーニングに出かけた。

かなり豪勢な夕飯が振る舞われた昨夜。

食ベすぎてしまった。

お陰で胃が少し重い。

「私のためにこんな……！」と、わぎとらしく涙を流す（フリをした）ミヤコさん。
「ソウジさんの退院祝いもあるから。」と塩対応のドール。

温度差が半端なかった。

とはいえ、ドールはそこそこ嬉しそうで、今朝でかけるときもかなり上機嫌だった。

そりゃ嬉しいよな。

年一で帰ってくる母。

それを迎える娘。

……若干立場が逆の気もするが、それは家庭の事情それぞれであって。
ウキウキしているドールの姿は、正直年相応で可愛かった。

「ド、ドールちゃん……喜んで……ましたね……！」

「な。何か、分かるよな。」

「はい……、わ、私も実家に帰ろうか、なあ……はあっ……はあっ……！」
「……………無理して話さなくていいぞ？ ハンズ。」

走りながら俺と会話を行うハンズ。

以前は、町の周りを5周もすればヘトヘトになっていたのに、今はきっちり付いてくる。

特訓を欠かさなかった成果が出ているなあ。

うんうん、偉い偉い。

……。

俺たちは九周目を終え、最後の休憩を取った。

話題は、実家の話。

「しかし、実家なあ……。」

「ソウジさんはご実家は……あ、す、すいません……。」

「あ、いや。気にしなくていいぞ。」

ハンズが謝ってきた。

この子には、俺の事情は特に伝えていない。

記憶喪失でここにやってきた、とだけ言っている。

気を遣わせてしまったな。

「……俺の実家は、この町のあの宿だ。ホエールさんにドールに……世界で一番落ち着く場所だよ。」

「……そうですね……ソウジさん、あそこにいると本当に優しい顔をしています。」

「そ、そうか。」

そんなに見られていたのかと思うと。

ちよつと恥ずかしい。

「ハンズは、実家はいいのか？」

「……実は、次の秋にでも一度帰ろうかと思っています。冬支度の手伝いも兼ねて。」

「ああ、そうなのか。」

ハンズの実家はワサドラの北西に有る大草原の移動集落。

その長、超絶イケメンのハンザさんの妹。

若いののに威厳も有り、とにかくモテるらしいのだが。

「……兄が私の事を大切にしてくれているのは嬉しいです。けど……。」

「……大切に、つてレベルじゃなかったような……。」

「ですよね……。」

いかんせん。とても妹想いのお兄さんであった。

いや、完全にシスコンと言って、差し支えないレベル。

「……もうしばらく、鍛えながら考えてみます。」

「ああ、そうするといい。家族の話だし、俺何にもできないけど。」

「……こうやって一緒にランニングしてくれますし、色々と武器の扱いにもアドバイスを頂いてますし。……感謝しています。ソウジさん。」

「ハンズは飲み込みが凄いからなあ。言うだけで済むんだから、凄いや。」

「え、えへへ……そ、そうですか？」

「ああ。」

嬉しそうにはにかむハンス。

後ろにはしつぽが振られる幻覚が見える。

犬つぽい……。

そういえば二人つきりで走るというのは、今まであまり無かったな。

こういう話をすることも無かった。

新鮮。

「……俺にできることなら、何でもするぞ？」

「じゃあ……兄に紹介してもいいですか？私のお婿さんとして。」

「ツブー!!!」

いきなりの爆弾発言に、思いっきり吹き出す。

な、何を言い出すのこの子!?

「兄は……手紙を見た感じ、ソウジさんの事を大変に気に入ってました。ソウジさんなら、こっちに来てもうまくやっていけると。」
「だ、だからって……。」

そんな、いきなり。

口を袖で拭いながら、慌ててしまう。

「……ふふ、冗談ですよ。だ、第一、そんなことになったら、私色々と敵を作りそうです

……！」

「……………」

敵。

うーん。

「……………それ以外なら、何でも言ってくれ。」

「……………はい！ありがとうございます！」

「……………ああ。……………じゃ、ラスト一周！飛ばすぞ！」

「はい！……………つて！ええ!!速っ!!」

なまった体に鞭打って走り出す俺。

ハンズもまだ余裕そうなので、全力で行かせてもらう。

……………からかわれた気がしてムキになったわけではない！
ないぞ！

「ま、待ってくださいーい!!」

……………。

……………。

「ソウジさん。前も言ったけど、めっ、だよ？」

「はい。」

疲れ果てたハンズを宿に搬送。

お姫様抱っこなんてしたら何を言われるかわからなかったの、おんぶして連れてきた。

ドールに怒られた。

はい、ムキになってごめんなさい。

「尻に敷かれてるわねー。」

ミヤコさんが何か言っていた。

* * * * *

今日は一日フリー。

何の予定もない。

いや、何もなくは無い。

一つ、大事な話をする相手がいる。

「……………入りますよー？」

ギイイ…………。

『開いてるよん』と書かれた、力の抜ける掛札。

そのドアノブを開くと、少し立て付けが悪くなった戸の音が、店中に響いた。

「……………セツ……………せつちゃんさーん。いますかー？」

呼びかけるも、返事はない。

そう、やってきたのは武器屋。

セツヒトさんの店である。

「……………」

静かな店内を見回す。

人のいる気配が無い。

だが、カウンターには湯気の上る湯呑み。

あ、裏庭か？

……………。

ビンゴ。

裏庭に勝手に入らせてもらうと。

いた。

セツヒトさんが、大剣を構えて集中していた。

身の丈ほどもあるその大剣。

ゆっくりと振りかぶって。

「……………ふっ。」

ビュオン!!

「……………」

こちらにまで風が来そうな程の素振り。

地面に当たると直前、ビタツと止める。

まるでプラ製の子どものバットののように軽々と扱っているが…………あれ、俺にできるかなあ…………。

すごいパワーだ。

「……………ふう……………ごめんねー、ソウジー。今終わったからー。」

「あ、いや。大丈夫ですよ。」

どうやら俺が来たことは分かっていたみたいだ。
流石である。

「腕が鈍るといけないからさー、こうやってたまにねー。」

「いや、凄かったです。あんなに軽々と。」

「お、そーおー?……ソウジに褒められると照れるねー。」

少しも照れた様子には見えないが、照れているのか。

相変わらず表情が読めないなあ。

「……………でー? やってきたってことはー?」

「……はい。話をしに、来ました。」

「んー。おけー。とりあえず戻ろっかー。」

ヒュン!

肩に大剣を担ぎ、悠々と歩きだしたセツヒトさん。

揺れる長い銀髪が、とても美しかった。

* * * * *

「お茶、飲むー?」

「あ、頂きます。」

「ポポポポ……。」

きちんと急須でお茶を入れるセツヒトさん。

こういう家庭的な一面は、あまり見なくて新鮮。

「そちやですがー。」

「これはこれは、ご丁寧に。」

「……ふふ。あんまりガラじゃ無いねー。」

「ズズ……いや、うまいですよ。似合ってます。」

「そーおー?」

ゆったりとした時間。

セツヒトさんは基本のんびりさん。

お茶だけでこの雰囲気を作り出せるのは、セツヒトさんならはだと思う。

「……でー？ 話に来たんでしょー？」

「はい。その……今の気持ちを、伝えようと。」

「おー。ドキドキするねー。」

「俺もです。その、結論から言いますと。」

「うー……はい。」

意を決して伝える。

今の思いを。

「……今、お気持ちには、お応えできません。……ごめんなさい。」

「……そっかー。」

「……はい。」

決めていたセリフを、伝える。

心が、重い。

「……一応さー？理由とか、聞いてもいいーいー？」

そりやそうだ。

断るにしても受け入れるにしても、納得というものが必要だ。

納得は難しくても、理解だけでも。

「……その、セツ……せつちゃんさんの気持ちは、とても嬉しかったです、です。」

「うんうん。」

「俺なりに悩んで、それで、一つ思ったことがあつて。」

「……んー？」

「……ほら、俺、というか、俺たち、こんな仕事していますよね。」
「うん。」

ハンター業。

モンスターの命をもらい、植物や鉱石などの採取を行い。

時には危険と隣り合わせの、明日もわからぬこの仕事。

「……好きな人、好き合う人と共に生きていく。そんな時、相手が失われたら。」

「……………」

「少なくとも俺は、自分の愛する人がいなくなったら。……正直、やっていけないです。」

「……それがー、理由ー？」

「……………はい。」

考えた。

俺なりに。

セツヒトさんやハイビスさん、そしてシヨウゴ。

俺の周りには、どうやら俺のことを好ましく思ってくれている人たちがいる。

だが、今回の狩猟で思い知らされた。

自分が傷つく覚悟。そして相手の命を断つ覚悟。

これは段々と身についてきた。

だが、自分の大事な人が傷つき、下手をすればいなくなってしまうような。

そんな状況の覚悟。

全くと言っていいほど、できていなかった。

どこかで、俺自身が傷付けばいいと。

そう、簡単に片付けていた。

だが、違った。

シヨウコが動かなかった、あの時。

絶望した。

最悪の状況を、飲み込めなかった。

何で連れてきた、と。

俺のせいだと。

シヨウコがいなくなるという。

その覚悟が、無かった。

逆に考えて、俺が死んだとして。

その確率はそう低くは無い。

……その時、俺と愛し合う、そんな人がいたら。

その人はどんな気持ちになるのか。

……絶望するよな。

「……大切な人を失ったら。……そんな状況を、作りたくない。だから今、セツ……せつ

ちゃんさんのお気持ちに応える訳には……いきません。」

「……。」

「嫌とか、そんなんじや全然無いです。ぶつちやけ、美人で髪がキレイで強くて、憧れもあつて……そういう気持ちに応えたい想いは、正直あります。でも……。」

「……んーん。いーよー。……ソウジの言いたいこと、なんとなくわかつたからさー。」

「……。」

「私だつてさー……ミヨシの時、いろいろ考えたからねー……。」

ミヨシ村の壊滅。

セツヒトさんは、その当事者であつたわけで。

……大切な人を失うという悲しみを、その目でたくさん見て、そして味わつたはずだ。

……。

「……。」

「……んー、話が重くなつちやつたねー。いやー、ごめんねー。私も勢いで告つちやつたようなもんだしさー？ソウジに色々、考えさせちやつてー？」

「い、いや。自分と自分の周りを見つめ直す、いい機会でした。だから……ありがとうご

「ごいます。」

「おー……まさかフラれて礼を言われるとはー……。」

「い。いや、すみま……いえ。はい。」

これ以上謝りはしない。

何だかセツヒトさんに失礼な気がして。

「……………」

「……………」

静かになる俺たち。

居心地はあまり良くないが、これで別に俺とセツヒトさんの関係が終わるわけではない。

お互いに、いい大人だ。

そんな、中高生じゃあるまいし。

お茶を口にして、少しの間を空けて。

セツヒトさんが話し始めた。

「まあでもさー……別にいいよねー？」

「……はい？」

相変わらず主語も目的格も少ないセツヒト語。

解説に時間を要する。

「んー、だからさー、私がソウジを好きっていう気持ちは、変わらないわけでしょー？」

「は、はい。それは。」

ストレートに言われると、照れる。

「そしてー、それ自体を拒否されたわけでもなんでも無いわけだよねー？」

「ま、まあそうですね。」

「……………決めたー。ソウジが引退するか、絶対に死なない程強くなるまでー、私はこのままでいまーす。」

「……………な、なるほど？」

何かなるほど、なのか。

えっ。

じゃあ今までと大して変わらないんじゃない。

「せっちゃんさ——」

「私の気持ちは変わらない。ね？ソウジ。」

「うっ……………はい。」

「……………んふふー、それにー、私の気持ちは嬉しいんだよねー。それって完全に脈アリじゃんねー。」

「そ、それは……………」

「いつでもいいからねー、ソウジ……………待ってるよー？」

「……………」

ニヤニヤと、そして嬉しそうに笑うセツヒトさん。

……………敵わねえなあ……………。

今のは効いた。

心の臓に。

ドキツと来た。

「よーし……とりまー、この話は一旦置いてー、装備の話でもしようかー。」

「えっ!？」

「何よー。嫌なのー?」

「い、いえ、嫌じゃないです。むしろお願いします。」

「ほいほい、オツケーー!」

そこからは、いつもの様に武具の話題になった。

もちろん、俺の新しい装備について。

さすがセツヒトさんというか、やはりというか。

いつもと同じように接してくれる。

あれ?これ今までと変わらないんじゃないかね?

いや、いいんだけども。

「ふふー。……いいカラダしてるねー。」

「オヤジか。」

「あ、ひどーい。思いを寄せるー、こんないたいけな女性をそんな扱い……。。」

「いたいけて。」

「……ふふー。あー、ソウジー、顔真つ赤ー。」

「これはしようがないんです生理現象です仕方ないんです!!」

「ふふふー……いやー、やっぱり楽しいねー、こういうのー。」

多少気ままずくなるだろうと思っただけ。

軽口を言い合う程である。

それが、セツヒトさんは嬉しそうだった。

……まあ、いいか。

* * * * *

その後、俺はセツヒトさんと分かれ、ギルドに向かった。今夜行われるという、宴。

その前に、一つやっておきたいことがあるからだ。

グイイ……。

重く厳ついギルドのドアを開ける。

「……………」

人のまばらなギルド内。

時間帯的に、ハンターの数は少ない。

そこを通り過ぎて、修練場に向かう。

「久しぶりだなあ……。」

以前来たのは、確か骨折した時。

何か勉強になるならと、ハイビスさんにお誘いされてやって来た。

色んな初心者ハンターの方々と情報交換をしたり双剣を教えたりした。

ここに来たのは、例のアレを試してみたいから。

(……丁度いいな。)

修練場は人っ子一人居なかった。

珍しいが、ある意味チャンスか。

「……………ふうー……………」

ジャキン！

深く呼吸して、二対の刃を構える。

夜天連刃ではなく、修練場備え付けの双剣。

目の前には、からくり蛙。

(鬼人化……!)

スウ……。

体にいつもの感覚。

(……)から……。

思い出す。

あの時を。

ゴア・マガラに追い詰められた、あの時の状況を。

「……………ふんっ!!」

……………。

……………。

変わらない。

駄目か……。

(どうやったら再現できるか……。)

ここにやってきたのは、「獣宿し」の習得のため。

使うことを控えるように言われたが、これを常態で出せるようになればいいな、と。コントロールできるようになれば、扱いも楽になると考えたからだ。だが。

(鬼人化……!)

スウ……。

鬼人化して、心と体を一段階研ぎ澄ませる。

これだけでも集中力を多少要する。

慣れてきたのは、成長の証。

教官に習った頃は、感覚でやっていたけど。
今は自覚して、瞬時に発動できる。

(「い」から……………！)

「……………ふんっ！」

……………。

……………。

できない。

……………まあ、そりやそうか。

あの時の状況をできるだけ再現しようとするならば、ここでは無理。
ここには、動かないからくり蛙しかない。
追い詰められる、という状況が作れない。

(……………あつ。)

一つだけ、思いつく。

からくり蛙には、動くギミックがある。

それを動かして……………。

ギ……………ギギ……………ギギギ……………！！

ズドン！！

(おつ、よし。)

修練場脇にあった歯車を合わせて、蛙の攻撃機能を追加する。

これは、初心者ハンターが攻撃を避けたり防いだり……………より実践に近い形で訓練をするためのギミック。

俺も何度も使ったのに……………今の今までわすれていた。

ついでに、防具もポーチにしまっておく。

全身完全に普段着、武器は修練場備え付けの双剣。

これで、防御力皆無。

攻撃力も低い。

そんな状態になれた。

(あとは……。)

……ズドオン!

まるで四股を踏むように、その足を地に叩きつけるからくり蛙。
規則的に動くそれを、敢えて喰らう。

……ズドオン!!

「ぐあ……!」

痛い。

思わず双剣で防いだけど、防具なしだと怖いな……。

(追い込まれる状況……意図的に傷ついて……。)

やっていることは、かなり馬鹿げている。

からくり蛙の攻撃をわざと受けて。

痛みに耐えながら、身を削って。

命を削る「獣宿し」の習得を目指す。

……削られっぱなしである。

(割に合わないなあ……っ！)

ドガッ!!

「ぐあっ………!!」

再びの一発。
痛い。

……何してるんだろ、俺。

* * * * *

その後、何度からくり蛙の攻撃を受けても、獣宿しには至らず。
今日のところはタイムアップ。

「……やっぱり実践じゃなきや無理かあ……。」

からくり蛙でももしかしたら、なんて考えてみたが、虫が良すぎた。
やはり、相当に追い込まれるような状況じゃないと、厳しいみたいだ。
残念。

「あの……………」

「うわっ!?……………あ、ど、どうも。」

「……………お久しぶりです……………」

急に声をかけられた。

相手は、あのザシューさんだった。

相変わらずの強面。

スキンヘッドが、よりその顔の厳つさを強調している。

装備はしていないから……………訓練ってわけでもなさそうだど。

「……………」

「……………」

無言。

気まずい。

以前俺がお見かけしたのは、ゴア・マガラに上位ハンターチームがやられて帰ってきたとき。

女性の遺体の前で、なんとも言えない顔をしていた。
……大切な人、だったのかな。

「……………あの、その……………大丈夫、ですか？」

「えっ……………」

心配になって、声をかけてしまう。

大丈夫なワケ無いのに。

心配りができない自分が情けない。

だが、そんな俺の心情を汲み取るかのように、ザシユーさんは大人の対応をしてくれた。

「すみません、ソウジさん。ご心配をおかけして。私は平気です。」

「……………そうですか。」

平気。

そんなわけ無いと思う。

だが、俺に気を使って。その言葉を選んでくれたのだと分かる。
俺の馬鹿……気を使わせるとか。

「……ソウジさん。」

「は、はい。」

低い声で俺の名を呼ぶザシユーさん。

な、何だろう。

気を悪くさせてしまったのなら、謝らないと——

「——本当に、ありがとうございます。」

「……へっ?」

予想してなかった言葉。

素っ頓狂な返事をしてしまう。

「……俺のミスで、仲間たちが死んだ。事前の情報を加味すれば、被害は抑えられま

した。なのに……。」

「いや、それは……仕方のないことかと思えます。ザシューさんのせいでは……。」

「俺のせいだと……そう思わないと……やっていけないんです……。」

「……………」

責任を負うことで、自分を保つ。

自分を責めないで、やっていけない。

張り詰めた顔と絞るような声に、そんな心情が伺えた。

「ヤツが……ゴア・マガラが、憎かった。だが……敵わない相手、でした。ソウジさんとシヨウコさんは、そんなやつを屠ってくれた。……勝手な思いかもしれませんが、敵を打ってくれた。なので、礼を。」

「あつ……。」

スツ……。

頭を下げるザシューさん。

「……………ザシユーさん。」

「……………」

「……………大切な人を失うというのは……………多分、どんな悲しみよりも辛い。俺、励ます言葉なんか持ち合わせてないんですけど……………」

「いえ……………そんなことは……………」

「……………前を向いて、ほしいと思います。だから、顔を上げてください。」

「……………ありがとうございます。」

そう言うと、ようやくザシユーさんは顔を上げてくれた。

もし、俺が大切な人をモンスターに殺されたら。

逆に俺がモンスターにやられて、大切な人が絶望したら。

……………やっつられないよな。やっぱり。

しかし気のせいか……………ザシユーさんの顔がより厳つくなっているような……………。

* * * * *

そこから、修練場ということもあり、二人で特訓した。
双剣なら俺に1日の長がある。

ザシューさんはその体格を生かした豪快な剣の振りであった。

試しに力の抜き具合と足の動かし方を教えてみたが、混乱していた。

……正直言つて、ちよつと面白かつた。

「俺の方がハンター歴長いのに……さすがソウジさんです……。」

「い、いや、俺双剣しかできないですし……。」

落ち込んでいた。

励ますつもりが……なんかすみません……。

154 打ち上げをしましょう。

修練場でひと汗かいて、ザシユーさんと銭湯に行った。

さっぱり。

その後、再びギルドに向かおうかという時。

「俺は、ここで失礼します。」

「あ、そうですか。」

「打ち上げは、遠慮しておきます。どうぞ、楽しんできてください。」

「……ありがとうございます。」

「いえ。それでは……また双剣を教えてもらえるとありがたいです。」

ザッザッザッ……。

そう言って、ザシユーさんとは別れた。

打ち上げは難しい、か。……まあなあ、亡くなっている人もいるわけで。

しかもその関係者だし。

気を遣わせないように配慮したんだろう。

せつかく同性のハンター仲間ができたと思っただけけど。

まあ……次の機会に。

* * * * *

「ソウジさん！こっちですよ!!」

「あ、ハイビスさん。」

受付嬢の制服のまま、ギルド横の集会場にいたハイビスさんを見つけた。

カウンター席に呼ばれ、腰掛ける。

集会場の打ち上げは、既に始まっていた模様。

ギルドに入った瞬間、ハンターたちの騒ぎ声が聞こえた。

主賓とか言われてちよつと緊張していたが……べ、別に挨拶とかいらないうな……。

「お疲れ様です……今までどちらに？」

「あ、修練場に行つて、その後銭湯に行つてました。」

ハイビスさんに居場所を聞かれ、素直に応じる。

「あ、ギルドにはいらしたんですね。」

「はい。すみません、こんな早く始まっているとは。」

「いえいえ！その、クエストから帰つてきた方々からこう、自然と始まったと言いますか。こう、みなさん我慢ができなかつたようでした……。」

「あはは、なるほど。」

確かになあ。

大変なクエストから帰れば、待っているのはギルドの金で飲める酒。

そりや我慢もできないか。

明日は休みにしようというハンターたちが多そうである。

いや、逆にそこを狙つて報酬の良いクエストを狙うハンターも増えるのか？

うーん、わからん。

やけに申し訳なさそうなハイビスさん。
受付嬢の制服を身に纏い、今日も可憐。

「す、すみません……一応止めようとしたんですが、ギルドの力およばず……。」

「いや、全然！……むしろ、そんなに気を張らなくてよくて、助かりました。」

「あ、そう言っていただけだと……助かります。」

「いえ。……ちなみに、俺の挨拶とか無いですよね？」

「えっ。」

「えっ。」

「……あー……。」

「……マジですか……。」

話を聞いたところ、乾杯の音頭をとってほしいということである。

はつきり言おう。

そういうの超苦手。

とは言うものの、その乾杯を待ってくださっていただけたいらしいし。

肚を決めるか……。

「あ、あー……御聴衆の皆様！た、大変長らくお待たせいたしましたあ！」

「おー!!主賓が来たぞー!!」

「待ってたぞー!もう既に飲んでるけどよー!!」

「ハハハハハハハハ!!!」

ワイワイガヤガヤ。

あかん。

もう空気ができあがつとる。

これは何言っても無駄。

かくなる上は……。

覚悟を決める。

「……ギルドのタダ酒だ!!いつも素材搔っ払われてる分、たくさん呑むぞ!!乾杯!!」

……。

シーン。

やばい。

大いに外した。

と思ったら。

ドツ!!!

「……へ？」

「わはははは!!!す、すげえ！誰にも言えねえこと言いやがった!!」

「しかもハイビスさんが横にいるのにな!!俺絶対言えないわ!!」

「いぞー!!カンパーイ!!」

「「かんぱーい!!!」」

あ、よかった。

とりあえず盛り上がってくれた。

「ふう……………」

一安心してカウンターを振り向く。

そこには、なんとも微妙な顔をしたシガイアさんが居た。

「……………」

「…………ソウジさん。」

「あっはい……………」

「…………ご自身の影響力を、よくお考えになってください……………」

「…………た、大変失礼いたしました……………」

き、気のせいかな青筋が見えるような……………」

「ソウジさん…………そんな風にお考えだったんですね……………」

ああっ！ハイビスさんがちよっぴり不機嫌に！！

……もう後の祭りだ。

だからこういう挨拶は嫌なんだ。

畜生。

* * * * *

打ち上げは大盛り上がりであった。

朝や夕のギルドの喧騒とは比べ物にならないほどの大騒ぎ。

何ともうるさい雰囲気だが、こういうのは嫌いではない。

人前に立つということが苦手というだけで。

「さっ！主賓なんですから！みなさんとお話ししてきてくださいね!!」

すっかり機嫌を取り戻したハイビスさんに見送られ、いろんなテーブルを回った。

その度にグラスに酒を注がれるものだから、大変であった。

何回か、こっそり解毒薬を服用したのは内緒である。

しかしハイビスさんとシガイアさんの機嫌が直ってよかった。

シガイアさんには、そのマスター服姿を待っていらした女性陣をご紹介したところ、満更でも無いご様子であった。

女性にカクテルを作る姿がそれはもうかつこよかった。

ハイビスさんとは、酒を酌み交わしながら会話した。

「すみません、俺、ああいう挨拶とかとても苦手です……。」

「い、いえ、すみません。こちらにも配慮が足りず……。」

「ハイビスさん……いいんです。ハイビスさんにはいつもお世話になりっぱなしなのに、ギルドの不利益になるようなことを……。」

「い、いえいえ。」

「ハイビスさんが居なかつたら俺、ここに居ないかもしれないのに。」

「へ？」

「え？だつて……この初心者講習に招いてくださったのはハイビスさんですよ？右も左もわからない俺を、こうやっていっぱしのハンターにしてくれた。そのご恩は、一生忘れませんよ。」

「……………」

「なのになあ……すみません。」

「……いい、いいいえ！いいんですよ！！大丈夫です！！」

「で、でも……………」

「いいんです！大丈夫です！！ふ、ふふふふ。」

「……大丈夫ですか？」

「さ、さー！のみましょー！さき！ソウジさん！！」

「は、はい。」

こんな会話をした。

……やけにご機嫌になったのは、感謝申し上げたからであろうか。

真意までは分からない。

そんなこんなで複数のテーブルで色んなハンターと交流した。

モンスター狩猟の話が多かったが、印象に残ったのは戦いにくかったというモンスターの話。

ガララアジャラ、ベリオロス、ガノトトス……色んな名前が出てきた。

音で地雷を爆発させてくる、尻尾が鬱陶しい、異次元タツクル、その他出るわ出るわ
モンスターへの愚痴。

ババコンガというモンスターは、何とう〇こを飛ばしてくるらしい。

「えっ!?!う〇こ」

「何だソウジ……まだ戦ったことねえのか……。」

「……あいつは動きは厄介だけど……それ以前に臭いがなあ……。」

「3日は取れねえよな……。」

厄介なモンスターも笑い飛ばしていた柄の悪そうなハンターたちが、口を揃えて声を
小さくした。

恐ろしいモンスターもいたものである。

臭いのは嫌だよなあ……。

……。

……。

カウンターに戻ってきた。

いろんな話を聞きつつ、酒も酌み交わしつつ。

いい交流ができたと思う。

カウンターには、なんとシヨウコがいた。

「シヨウコ!? もういいの!?」

「あ、ご主人様!! はい! 退院です!!」

「は、早くないか……?」

「ご主人様に言われたくないです。」

「す、すまん。」

ぐうの音も出ない。

「完全には治りきってませんが、入院の必要は無いらしいです! もっとも、お酒はダメですけど。」

「そりゃそうだ。病人が酒飲むなんて。」

「……ご主人様は飲んでますけど。」

「……………すまん。」

仕方ない。

シヨウコとの打ち上げは、また今度やろう。

身内だらけになりそうだけど。

「ソウジさん、戻られましたか。」

「シガイアさん、どうも。……………格好、似合ってますね。」

「いやはや、どうやら中々ウケがいいようでして。いい歳して舞い上がってしまいましたよ。」

ハハハハと笑うシガイアさん。

この人、非常に渋く線も細くて、なんとというかカッコいいオジサマという感じである。

普段がアレだからその辺気にしたことはないが……………ファンは多いと見た。

今でもこつちをチラチラ見ている女性ハンターたちがいる。

人気だなあ……………。

「いや、ソウジさん、シヨウコさん。改めて、狩猟お疲れ様でした。」

「あ、ありがとうございます。」

「ありがとうございます！」

シヨウコの飲み物を差し出しながら、労いの言葉を下さるシガイアさん。

シヨウコのそれは……お酒じゃ無いよね？

「シヨウコさん、どうぞ。チャイ村直送の果物で作った、私オリジナルのミックスジュースです。」

「わあ！ええんですか！」

「ええ、もちろん。よろしければご感想をお聞かせください。」

「はいっ!!」

「めつつつちやうまいですう!!」と目をキラキラさせるシヨウコ。

よかった、シヨウコも少しぐらいこの雰囲気わって欲しかったし。

シガイアさん、流石だぜ。

「みなさんとお話しはできましたか？」

「はい。あんまりこういう交流の機会ってなかったんですけど、楽しかったです。みんなテンション高めだし。」

「……今回は、街全体が沈み込んでいましたからね。早急に私の方から流通やハンターの人流を制限しました。『只事ではない』と広がり、皆さんを不安にさせてしまいました。」

「それは……致し方ないところかと思えます。」

「前代未聞の処置でしたが、やむを得ない、と。判断が遅れては、より被害は広がりますからね。……そんな時、素早く対応し、討伐までしてくださった。しつこいようですが、ソウジさんには感謝申し上げます。」

「いやいや、本当にギリギリでしたから。」

「……謙遜は美德ですが、人によっては嫌味に聞こえますよ？ソウジさん。」

「これは……俺の癖みたいなものなんで。」

元日本人であるからして。これも致し方ないことなのだ。

だって嫌だろ。「俺のおかげだ！」みたいに振る舞うやつなんて。

しないけど。

「シガイアさんって、ずっとここにいますけど……いいんですか？」

「いや、ここにいと色んな噂を聞けるんですよ。楽しいものです。結構抜け出しては、ここに來るんですよ。」

「よくあの忙しさの中……。」

「ははは、逆ですよ。こう、ギルドマスターにもなると、現場に居ることは少なくなりま
すからね。忙しくて疲れている時、ここでハンターの皆さんから元氣をもらっているん
ですよ。」

「あー……なるほど。」

シガイアさんの言う現場というのは、多分受付とかのことだろう。

偉くなるというのも、大変だな。

「それに……ここでしか話せない話もできますからねえ……ね、ミヤコ総務長。」

「シガイアさん……その名前は今は無しで！プライベートですから！」

「おわっ!!み、ミヤコさん!!居たんですか!?!」

「さつき來たばかりよ！ソウジくん！」

「て、テンション高え……。」

酔っているのか、やけに声が大きいミヤコさん。

後ろから俺に寄りかかるとような形で現れた。

で、できあがっている。

……いかん、これ俺がお見送り&ドールにどやされるパターンだ。
そんな未来が見える……。

「ご主人様? どうしたんです? 遠い目をしてますけど……。」

「ああ……明日の朝飯なんだろうなってな……。」

「……? ……変なご主人様。」

あ、そういうやドールに今日夕飯いらないうって伝えるのも忘れてた。

……。

お願い、俺の明日の朝ご飯。

無事できて。

* * * * *

ミヤコさんはどうやらかなり溜まってらっしゃるご様子であった。シガイアさんが、やたら度数が高そうな酒を飲みやすく割ってガンガン出してくるものだから、更にヒートアップ。

俺の朝食生存率は、もはや天文学的数値並に低くなっていた。諦めるしか……無いのか……!?

「……でねえ〜? ちょっと聞いてるソウジくん!」

「あっはい。」

ムニユ。

ドールにそっくりのミヤコさんであるが、見分けるのは簡単である。

表情の豊かさで言えば、ミヤコさんは百面相の様に顔が変わる。対してドールはいつも冷静。

そしてミヤコさんは、お胸の辺りに主張激しいブツをお持ちだ。

スタイルと顔を比べれば、ドールとの違いはすぐにわかる。

ソレを俺の右腕にくつつけながら、妙に近い距離で話を続けるミヤコさん。

……心の中で感謝申し上げておこう。

ありがたやありがたや。

しかし、顔はドールなのでなんか変な感じである。

ミヤコさんの愚痴は続く。

「もう総務なんてねー、もうパシリなのよパシリ！」

「そ、そうなんですか？」

「そうよー！何よー！各支部との連絡をわざと遅らせてほしいとか、どこどこの支部長のアレがダメだコレがダメだとか聞いたたり？！しまいにや王族来るから甘いもの買ってこいとか……完全にパシリよ……。」

「おお……。」

もつとすごいお仕事されてるのかと思っていた。

いや、してるんだらうけど。

今言っているのは、多分やりたくない、めんどくさい部類の仕事だろう。

「これのどこがハンターのためになるってんのよ……もう。」

「まあ……確かにそうですね。」

「でしょお!? わかる? さすがソウジくんね!」

俺だって元社会人。

売上につながるのかこれって言う仕事も腐るほどやってきた。

やり甲斐も何もなく、ただ言われたから遂行するだけ。

そういう時は……。

「もう飲むしかないわ! シガイアさん! おかわり!」

「はいはい。」

(……まあ、気持ちはわかるわ。)

飲むしかないよな。うん。

シガイアさんはグラスを替えると、ミヤコさんに差し出した。

「はーい、いただきます……………ふはあ！これうまい！！つてお酒じゃないわねこれ！」
「ええ、柑橘系のカクテルジュースですよ。少し酔いを覚ましたほうがいい。」
「むう……………」

ナイスな気遣いを見せるシガイアさん。

ドールのご機嫌のためには、ミヤコさんが酔いつぶれては話にならない。
だけど飲みたい気持ちもわかるしなあ。

難しいものである。

すると、シガイアさんから急に話がぶっこまれた。

「……………ミヤコさん、中央は何と？」

「……………いい、今しますか？その話。」

「内容にもよりますが、早い方がいい。首都の安全を考えると、尚更ですね。…………ソウジ
さんに言いにくいのも分かりますが。」

「……………はい。」

観念したかのように天井を見上げたミヤコさん。

俺の方に向き直ったその顔は、完全に仕事モードの彼女であった。俺も畏まってしまう。

「ソウジくん。」

「は、はい。」

「シヨウコちゃん。」

「え、ウチも!？」

「……二人に話があるの。ちょっと聞いてくれる?」

真剣な顔で手招きをするミヤコさん。

顔を寄せろってことか?

まあいいけど。

俺とシヨウコがミヤコさんの近くに寄る。

ミヤコさんがシガイアサンに目配せをすると、シガイアサンは周囲にそれとなく声をかけ、人払いを済ませた。

さりげない。

「シガイアさん、ありがとうございます。じゃあ……二人にお願いというのはね？」

「は、はい。」

「な、何でしょう。」

「……首都に来てほしいの。」

「……えっ？」

シヨウコとハモってしまふ。

……どゆこと？

俺とシヨウコが思案顔でいると、シガイアさんからフオローが入った。

「……ミヤコさん、言葉が足りませんよ。」

「そ、そうですね……。ごめんね、二人とも。話が長くなるんだけど、事情はちやんと言うから。」

「は、はい。」

そう言うと、「ううん」と咳払いをして姿勢を正すミヤコさん。

仕事モードである。

しかし……あの様子だと、シガイアさんは知っているってことか。
なんだろう。

「……いい？驚かないで聞いて。……黒蝕竜ゴア・マガラは、確かに倒した。……でも、復活するの。」

「……はああ!？」

「ちよっ!しー!ソウジくん!」

驚くなど言われたけど……いや無理だよ。

え!?!復活!?

ど、どういうこと!?

「……大丈夫です。周りが騒がしくて助かりましたね。」

「す、すみません。シガイアさん。」

「驚くなつて方が無理だったわね。……とりあえず、静かに聞いてちようだいね。」

「……はい。」

ミヤコさんの話は続く。

俺はもう戸惑うばかりだ。

「……ここからは中央の調査と、シガイアさんからの情報提供から出した結論よ。確度は高いと思っただね。」

「は、はい。」

「……黒蝕竜ゴア・マガラ。あのモンスターの正体は、とある古龍の……幼体。」

「こ、古龍。」

「そう。これはシガイアさんからさっき聞いたホヤホヤの情報だけど……シガイアさん。」

「はい。……観測班と回収班が、ゴア・マガラの調査から戻ってきました。……報告内容は、『ゴア・マガラの亡骸から、白く神々しいモンスターが出現。遠く南南西に飛行、追尾は不可能と判断し、ゴア・マガラの抜け殻、及び同モンスターの竜鱗を回収。』とのことでした。」

「……白いモンスター……。」

黒蝕竜ではない。

ゴア・マガラは真っ黒だった。

白とは、全く違う。

百戦錬磨の観測班が見間違えることなど考えられない。

つまり、報告をそのまま受け取ると。

復活……というか、成長した、ということか？

「……少し話が変わるんだけど……ソウジくん、シヨウコちゃん、以前あなたたちが見つけた遺跡、覚えてる？」

「ああ……ウチとご主人様とでラングロトラ討伐した時に……。」

「そう、その時の遺跡よ。……その遺跡を調査したのは中央だったんだけどね。壁画があったそうよ。」

「……ど、どんな壁画だったんですか？」

思わず聞いてしまう。

遺跡。

俺とシヨウコが以前、ラングロトラ狩猟の際に偶然見つけてしまった地下空洞。

その中であつたという、あれか。

見つけてお金もらえてラッキー、ぐらいに思っていたけど。

「……恐らく後世に残すために、分かりやすくイラストにしたんでしょね。描かれてあつたのは、一際大きな山。そしてそこに舞い降りる6つ脚に翼を持つ龍。そしてその山の周囲へと撒き散らされる黒い霧の絵。……山の周囲には暴れ回るモンスターと思われるものも描かれてあつたそうよ。」

「……………」

「周囲と比較して一際高い山。これは、この大陸の中で最も高いと言われるマシリキ山の事と推測されるわね。もう一つある、北方の霊峰カヒムの可能性もあるけど。」

「マシリキ山とする理由は……」

「……首都西部、マシリキ山に近い村の先住民の話に、『悪しき風が山を蝕んだ。天から降りた神が山の生き物を懲らしめた。』という伝承が残っていた。更に、今回のモンスターが飛んでいった方角は、禁足地のあるマシリキ山。そして、今回見つかった竜鱗。先ほど見せてもらったけど……禁足地にあつたかなり古い鱗と、形状も造りも瓜二つだった。」

「……………マジっすか……………」

いろんな情報が出てきた。
シヨウコも混乱している。

俺も頭の中を整理してみる。

まず、ゴア・マガラ。やつは倒したけど、倒していなかった。

むしろ成虫……成竜？として、復活した。

向かった先は、丘陵地帯から南南西。禁足地のあるマシリキ山方面。

首都からは西に位置する。

俺とシヨウコが見つけた遺跡には、この山から「悪しき風」とやら……まあおそらく
ゴア・マガラが放つあの黒い霧のことだろう、それが描かれていた。

言い伝えにもそれが残っていた。

そして、今回たまたま見つけた鱗と、禁足地で見つけた古い鱗がどうやら同じモ
ンスター由来のもの。

……あれ？でも……。

「……その、復活した白いヤツが古龍？っていうのは、どうしてですか？」

「そこは私がお答えしますよ、ソウジさん。」

「シガイアさん。」

「古龍は、通常のモンスターとは桁が違う。生態、その行動原理、出現する場所や時代まで……もう何から何まで謎です。何せ、数が少なすぎる。まあ……あんなのがたくさんいたら、手に負えなすぎて笑えてしまいますがね。もはや天災ですから、天災。」

「……………」

「話が逸れました。……そんな謎の古龍ですが、通常のモンスターとはまずもつて形態が異なる。飛竜というのは基本後脚2本に2つの翼。だが、今回のモンスターは、脚が6つに翼……2つは翼を支える脚として見ても、正直生物として気味が悪い。それに、いつかもわからぬ遺跡のあつた頃から存在していたモンスターを古龍と言わずして、何を古龍とするのでしょうか。」

「た、確かに……………」

「…………古龍、復活。ギルドとして、そう断定します。」

「……………」

言い切ったシガイアさん。

もう、間違いない。

俺が倒したゴア・マガラは、確かにもういない。

だが、どうやら復活した。

新たなモンスターとして。

「他にも様々な伝承や遺跡の調査から、この古龍の存在は何と無くわかつてはいたのよ？でも、今回のことで確定。……ゴア・マガラが幾多の天を廻り、成長して脱皮、禁足地に舞い戻るということから……『天廻龍シャガルマガラ』と名付けたわ。」

「以前からその存在だけは注視されていました。ゴア・マガラも、その名前だけはギルド内にありましたから。」

「天廻龍……シャガルマガラ……。」

「……と、いうわけで！ソウジクんとシヨウコちゃんには、シャガルマガラ討伐のメンバーとして、首都に来てほしいの。……はあく、ようやく話の最初に戻ったわね。」

ミヤコさんは喉が渴いたようで、カクテルジュースを口に運んでいる。

まるで名探偵みたいな口振りだった。

オンとオフの激しい人である。

そういえば……シガイアさんにゴア・マガラの名前を教えてもらった時、やたらスムーズだった。

その時は、ギルドでも未発見の存在なのに、すぐに名前が決まるもんだなと思ったが。

偉い人たちの中では、前々からその存在はわかっていたってことか。

……あれ？

だが。ということは。

シガイアさんはもしかして。

「シガイアさん。」

「はい、何でしょう。」

不思議に思ったことを、シガイアさんに尋ねる。

「シガイアさんは、ゴア・マガラが復活してシャガルマガラになるということを、予想してたんじゃ無いですか？」

「鋭いですね、ソウジさん。ええ、その通りです。」

「そして、禁足地に向かうであろうことも、ご存じだったんですね？」

「大方は。……予想は、していました。」

マジか。

やっぱすげえなこの人。

シガイアさんが、その思惑を教えてくれた。

「ですが……復活したとして、どこに向かうかもわからない。もしソウジさんでさえ敵わなかったら。ワサドラが襲われでもしたら。……悪い予想ばかりしていましたよ。だが、伝承通り禁足地に向かっていった。そうすると、その狩猟の領分はどこになりますか？」

「そりゃあ、首都のギルド……です。」

「そう、そこです。そうすると、首都は古龍討伐に対して、経験的に最も有効なカードであるところのソウジさんを欲します。……そこで、ワサドラの事情に明るく、私やソウジさんと縁深いミヤコさんが派遣された。そういう流れでしょう。」

「……はいその通りです。だから私がパシられたんです。」

「ソウジさんを動かすためには、こちらに頭を下げるしか無くなりますよねえ。いやあ、先手を次から次に打つことができ、私のギルドマスターとしての発言力も高まるばかりですよ。」

「うっわあ……。」

非常に悪い顔をしているシガイアさん。

いや、顔には出ていないのだが、そんな風にもう見えてしまう。

またもシヨウコとハモってしまう。

そうだ。この人、こういう人だった。

「……まあ、というのは半分冗談ですがね。」

「半分は本気なんですネ……。」

「もちろんです。」

サラツと言える辺り、この人に敵は多そうだなーと思ってしまう。

「……ですが、中央もミヤコさんを派遣してくるとは流石に思いませんでした。ワサドラギルドのトップハンターの一人であるソウジさんを動かすのに、かなり本気と見えま
す。……ソウジさん。」

「あ、はい。」

「ギルド全体から、あなたへの個人依頼です。……シャガルマガラ討伐に、力を貸してほ

しい。黒蝕竜ゴア・マガラをも屠ったその腕を、存分に生かしてほしい。……いかがでしょうか。」

個人依頼。

ハンターランクが7になった時、俺個人に向けての依頼が増えるぞと、そんな話を聞いた。

ギルドだけでなく、街や国、そういう大きい単位の話になるから、と。今回が、それか。

……返事なんて、決まっている。

「……わかりました。俺でよければ、行かせてください。」

「……素晴らしい。」

「シヨウコも……ついてきてくれるか？」

「愚問ですよ、ご主人様！またウチが守ります!!」

「……そうならないように、一緒に特訓しような。」

アイツは、俺が倒しきれなかったモンスター。

周りがどう思うかは知らんが、俺の中では取り逃してしまったモンスター。そういう認識だ。

だから、尻拭いはすべきである。

シガイアさんとミヤコさんを見つめ。

俺とシヨウウコは、シャガルマガラ討伐の依頼を快諾したのだった。

1555さよならをしましょう。

黒蝕竜ゴア・マガラが、復活。

天廻龍シャガルマガラとして。

その古龍の討伐を、引き受けた。

まあ、俺が狩猟して復活したわけだし。

無関係ではない。

緊張する。

だって、古龍とか初めて。

準備の仕方から、よくわからん。

「……ミヤコさん、討伐の流れって、どうなります?」

「うーん……その辺私詳しくないのよね。シガイアさん、分かります?」

「ええ。何となくは。」

もうシガイアさんにわからないことなどないのでは、と勘ぐってしまう。

この人がワサドラに居て良かった……。

「中央は既に禁足地周辺にハンター達を展開しています。いずれも掻き集めですが、優秀なハンター達ですよ。各支部へ通達は行っているようですが、中央と西支部以外はハンターを出しているところは無いようです。……一応、機密情報なので内密にお願いしますね。」

「あ、はい。」

「ソウジさんたちは、その西支部のチームに入っていたかどうか形だと思われれます。」

チームを組む形か。

流石にソロじゃないわな。

少し安心。

と同時に不安……人と組んだことなどほとんど経験がないんだけど。

「狂竜症の怖さがどこまで分かっているのかは不明ですが……まあ、すぐにシャガルマガラに特攻を仕掛けるということは無いでしょう。むしろマシリキ山周辺で引き起こ

されるであろうモンスターとの連鎖的なスタンピード現象に、各員が当たる。その間に特別チームを組んで、シヤガルマガラを討伐。……こういう流れかと思われます。」

「……俺達はいつ頃ここを出ればいいですか?」

「すぐにでも、です。ここから首都まで、どんなに急いでも3日はかかる。そこから更に禁足地周辺に行くまでに、数日は要する。」

「……長いですね。」

「竜便に乗る、という手もありますが……あれは人間を辞めたようなハンターがとる最終手段ですね。マシヨルクとか。」

「ああ……。」

人間離れたハンターと聞いて、まあ初めに浮かぶのは教官あの人である。

それで首都とここを行ったり来たりしてるのだろうか。

話ではとんでもない高度を飛ぶって聞いたけど……。

生身でそれとか。すげえな。

「私も乗ろうかしらね〜!」

「やめてください。」

ミヤコさん……あなた四肢バラバラになりますよ……。

その後、ミヤコさん、シガイアさんと打ち合わせをした。

出立は、明後日の朝。

明日は準備に忙しくなりそうだ。

* * * * *

そろそろ打ち上げも終わりの時間。

そういえば、この打ち上げてゴア・マガラ狩猟を祝つてのものだ。

復活したなんて聞いたら、どうなることやら。

「倒してないじゃないか」と俺に非難が来るならまあいいけど、ギルドに文句の一つも言いたくなるのではないだろうか。

……あ、だから飲み代はギルド持ちなのね。

納得。

シヨウコとミヤコさんと集会所を出ようかと思っていたら、シガイアさんからミヤコさんに質問が飛んだ。

「ミヤコさん、最後に。……中央で他に怪しい動きはありませんか？」

「えっ？怪しい動き？んん、どうでしょうね。そう言われれば全部怪しいんですけど……。」

「いや、何というかですね。シャガルマガラ以外にも、モンスターが出現するとかそういう。」

「あー……厄ネター一つありました……ソウジくん、先に帰ってきてくれる？」

「え？いいんですか？」

「いいわよく、遅くなるかもって、ドールに伝えておいてくれる？」

「は、はい。」

今の今まで忘れていた。

ドールに何て言い訳したもんか。

「…………主人様。まるで遅帰りの若旦那さんみたいな顔してますよ？」

「……何だその具体的な表現。」

「いや、そのまんまです。」

……誠心誠意謝るしかない。

* * * * *

宿に帰ってきた。

入口は……まだ明るい。

窓の向こうに見えるのは、ドールの姿。

すっきり馴染んだ扉を開ける。

そして、俺は翔んだ。

ズザア!!

「……ほんつとうにいい!!遅くなつてごめんなさい!!!」

ジャパニーズ・ドゲザをかます。

この技、いつだかハイビスさんの溜飲をも有耶無耶にできたという最終手段である。見様によつては、ただのおふぎけ。諸刃の剣。

だが、俺は酔っていた。

勢いって大事!!

(まだまだ！ドールのリアクションがあるまでは、このきれいな姿勢を解かない!!)

お前は何と勝負してるんだ。

そんな心の中の冷静なツツコミはどこ吹く風。

俺は、明日の朝食をゲットする為に全力を尽くす。

……大事なことなのだ！

(……………?)

しかし。

いくら待てども、何の反応も無い。

(あ、あれ？もしかやハズした!?)

ヤバい。

1分ばかり同じ姿勢だが、ドールどころかシヨウコのツツコミもホエールさんの笑い声も起きない。

完璧に外している。

(酒の勢いって、やっぱり駄目だわ。)

完敗である。

おそらく顔を上げれば、ドールの冷たい目線が突き刺さることだろう。

俺は覚悟して顔を上げた。

そして、予想だにしない事態に直面した。

「お疲れ様です、双治さん。」

「のわあ!!……えっ!？」

「いきなりの大技、恐れ入りました。これは何でも許したくなりますね。」
「……………はああああ!!?？」

目の前にいたのは、女神さまであつた。

というか、ここどこ!？」

ドアを開けてすぐに地面に頭を伏せたから、何がなんだか。

「いきなりこんなことをされて、何がなんだかです。」

「いやいやいや!!こっちのセリフですよ!出てくるタイミングが!」

「大体にして、双治さんが飲んだ後ばかり狙っているのですが。」

「それにしても……予想外でした。」

場所を確認。

「ここは……うん、宿「ホエール」だ。」

それに間違いはない。

だが、肝心のドールとかホエールさんはいない。

一体……。

「今回も顕現は厳しく、このような形になりました。」

「確か……前回は夢の中に出てきましたよね。」

「はい。」

「じゃあ今回は……。」

「夢ではなく、双治さんの意識下にお邪魔しております。」

「い、意識下に？じゃ、じゃあ……今ここが宿なのはなぜです？」

「現実の方の双治さんが、今現在この場所にぶっ倒れていらっしやるからです。」

「………はあ!？」

「土下座しようとした直後なので、おそらくその姿勢のまま気絶しているかと。」

「………え、えーつと。」

つまり何だ？

俺は宿に入った瞬間土下座した。

その直後、女神様は俺の意識の中に入り込んだ。

俺もどうやら気絶して意識下へ。

土下座姿勢キープのまま、気絶しているってこと!?

「すごく面白い構図ですね。」

「いや何してくれちゃってんのあなた!完全に俺変なやつじゃないですか!!」

「まさか入るなり土下座ジャンプをされるとは思いもよらず。失礼しました。」

「……………」

「……………」

「…………分かってましたよね?」

「はい。」

「嘘かよ畜生!!」

「そっちの方が面白そうでした。テヘペロ。」

「何だその理由!ていうかテヘペロて!!」

意識から覚めたら何て言い訳しようと思いつながら。
諦めるしかないと思えるのに、若干の時間を要した。

* * * * *

「落ち着かれましたか？」

「はい、落ち着きました。というか諦めました。」

諦らめるのに、いささか時間がかかった。

考えたらこの人……神がメチャクチャなのは今に始まったことではない。

そう考えたら、少しは楽になった。

「それにしても男性が土下座している姿を見るのは、初めてでした。」

「あ……すんません。お見苦しいものを。」

「いえ。新しい何かに目覚めました。感謝申し上げます。」

「何言ってるの!？」

「DSとは、こういう気持ち良さを味わうんですね。勉強しました。」

「そんな勉強忘れてください！」

すみません、地球の方々。

あなた達の神は、そっち方面に目覚めてしまったようです。

「そろそろお話しても？」

「ええ、どうぞ……………」

何時ものようにもうどうにでもなくれ精神となった俺は、もはや何でもいいやという気持ちの元、女神様の話を聞くことにした。

その女神様は、何やら宿の机を動かして、キューブ型の機械をその上に置いている。

「それは……………何ですか？」

「こちらは神界で今人気のプロジェクターです。」

「プロジェクター？」

「はい、このように起動すると……………」

フツ……………。

女神様がその機械のスイッチを押すと、辺りの風景が一変して暗くなった。

そして、宙に浮いたモニターがいくつも浮かんできた。

おお、すげえ、めっちゃ未来的。

スクリーン要らずとか何それ。かっこいい。

「ありがとうございます。高い買い物をして良かったです。」

「あ、買ったんですね。」

「はい、衝動買いでした。」

「神様も衝動買いとかあるんですね……。」

「『すべてを終末にする大セール』と銘打つだけあって、お買い得でした。」

「何ですかその物騒なセールは……。」

神界いい加減にしろ、というツツコミは今更なので止めておく。

不毛な気がしてならない。

そんな俺のどうでもいい葛藤の中、女神様が話し出した。

「前回、赤い目の異変についてお話しました。様々手を打っていたいただいたようで。ありがとうございます。」

「あ、はい。色々やりました。まあ、その大元は復活しちゃったわけですけど。」

「はい。ですがあのモンスター、もし双治さんが事態を放っておいたら、おそらくこの宿のある町は崩壊していたかと思います。」

「えっ。」

「止めて良かったと思います。……現世の人間に未来を伝える事は、かなりのご法度なのですが。うまく行って何よりです。ひとまず、崩壊までは至りません。」

「えっ……そ、そんなにやばかったんですか？」

「はい。」

おっそろしい……シガイアさんに相談して良かった。

俺一人だと何もできなかった気がする。

「ゴア・マガラの狩猟、大変に好評でした。」

「そうなんです。」

「私としては、双治さんが死ぬかも、と気が気でありませんでした。」

「……未熟で申し訳ないです。ご心配おかけしました。」

「もしいなくなったらこれから商売どうしようと、不安になりました。」

「正直すぎて引くわ。」

もうこの女神、思考が資本主義の犬のようである。

どうしてこうなった……。

「今のは本当に冗談です。」

「分かりにくいですって……それに、ヤツはまだ生きています。」

「はい、そのようですね。……どうか、お気をつけて。」

「……ありがとうございます。」

「……実はゴア・マガラ狩猟の際、サーバーが一つ吹っ飛ぶ珍事がおきました。」

「えっ?」

「シヨウコさんが体を張って双治さんを守り、双治さんが奮起した所です。……これです。」

「おお……。」

中空をなぞるように右の人指し指を動かす女神様。

一つの画面が俺の前に出てくる。

内容は、いつものグラフ。

詳しい見方は分かんが、ある一点にかけて凄まじいまでの伸びを見せている。

「少年漫画的展開が熱かったようで、大変に好評でした。」

「死にかけてたんですけどね。」

「それがまた良かったようですね。『覚醒キタ——（。▽。）——!!』『マジシヨウコちゃんオトモの鑑』『生きてるよなあ!』『生きてるよなあ!』『シヨウコにゃん画面越しにペロペロするから起きてえええ』という興奮した書き込みやつぶやきが多数散見されました。その後掲示板のサーバがダウン。SNSの方では連日のトレンド入りです。」

「……もはや変態的な部分は突っ込みませんよ?」

「そんなご無体な。」

変態ばかりなのだから、そりやこういうコメントも増えるわけである。

俺はとうに慣れてしまった。

「更に言えば、これより前の日の……この時間、ですね。ゴア・マガラ狩猟以上の伸びです。何があったか覚えてらっしゃいますか?」

「えーつと……?」

女神様が見せてきたグラフは、ゴア・マガラ狩猟時よりグラフの動きが激しいものであった。

これは……ロージャン狩猟……の後? チダイ村に帰った後……。

何だ?

「セツヒトさんの告白のシーンです。」

「ブーーーーー!!!」

「凄まじい反響でした。」

「そ、それは……。」

どうやらセツヒトさんの告白も、相当な注目を浴びていたらしい。

本人が知ったら神様にブチ切れるんじゃないや……。

神殺し……。

「その後のフェニクさんの『いい加減にしまえよ』発言には、たくさんの「いいね」が

付いております。」

「あー……それは……。」

「双治さんの煮えきらない態度に対して、若い層を中心にそれはもう憎悪の嵐でしたから。」

「ぞ、憎悪!?!」

「『フェニクよく言った。』『双治さまあwwwwww』『本日のスカツとスレはここですか?』『ついでもうこいつ〇してやってくれ。』と、大反響でした。」

「もう殺して……。」

アカン。

俺つてもう駄目すぎる。

セツヒトさん、ごめんなさい。

「今までにも、セツヒトさんを始めとした女性の好意を無碍にしてきたわけですから。相応の報いです。」

「き、厳しいですね。」

「神々の総意と捉えていただければ。」

「うう……。」

二の句が継げない。

だって俺のせいだし。

しかし神々の総意で。

怖いわ。

「……私個人としては、双治さんが一生懸命に生きていらっしやればそれでいいのです
が。」

「……むしろ俺が神様たちを焚きつけるような事をすればいい、と？」

「はい。仰る通りです。察しが良いですね。」

「……ちよつとは隠してくださいよ、その態度。」

「炎上商法ってやつですね。」

「言っちゃったよ！ ついに言っちゃったよ商法って!! チクシヨウ!!」

もういいや。

俺はもう神様たちの敵になるんだ。

どうにでもなつてしまえばいい。

* * * * *

その後も女神様発の馬鹿話は続く。

古参……前々から俺を応援してくださっている根強い層がいるそうで、今回もその応援がすごかったらしい。

ちよつと嬉しかった。

反面、俺のように日和見的な態度でいることが、いつの間にかSNS界限で『#ソウジる』と拡散。

お前ソウジってね？みたいな使い方をするらしい。

チクシヨウ。

また、あまりにもこの世界を体験したいがために、神界でオンライン型ゲーム『ハンターズ』が開発。

だがβ版の好評虚しく、一般公開初日に大量のバグが発見。

たった一日で苦情が嵐のように舞い込み、永遠に続く復旧に次ぐ復旧、ついに公式が頓挫。

一夜にして消えた幻のゲームとして、とにかく有名になったとか。なんだそのゲーム俺もやりたい。

ちなみに、そのゲームの衣装や防具といった小道具類のデザインをしたのは女神様らしい。

契約料だけもらってあとはトンスラ。

「とても美味しい仕事でした。追加有料DLCの売上げだけが心残りです。」と爽やかに言い切っていた。

恐ろしい……。

だがまあ、こんな馬鹿話も正直ちょっと面白いと思えてきた。

神様たちだって、本気で馬鹿やって、本気で楽しんでるようだ。

そこには、ちょっとだけ好感が持てる。

だが、俺と教官、ハンザさん、そして御者のおじさんと、男性陣のカップリング論争に終焉は見えないという。

そういうところさえなければ、素直に笑えるのになあ……。

そんなアホな経緯をしばらく聞いたあと。

唐突に、本当に唐突に、女神様が俺に声を掛けた。

「……双治さん。」

「はい？」

「……覚悟を決めましたね？」

「……………」

覚悟。

それは、確かに。

肚を括った。

「……次の戦いは、おそらく双治さんの一世一代のものになります。」

「……それ、言っちゃっていいんですか？」

「私の力は、この世界にはもう及ばない領域に達してきました。干渉も何も、私の権限ではどうにもならないところまで来た、ということですよ。」

「……………」

「双治さんはこの世界に順応しています。……正直、この邂逅もギリギリです。もう何を言っても構わないでしょう。」

「……もう、神様には会えないかも、ということですか？」

「そうです。予感はされていたのでは？『マップ』も『モンスター情報』も、アップデートが不能になっております。機能している『アイテム一覧』『装備』も、いつ消えるかわかりません。」

「……マジっすか。」

「ええ。マジっす。」

だいが、俺とフランクに話せるようになった女神様。

だが、この気を置かない会話も、終わりが近いのか。

「話を戻しますが……双治さん、顔つきが変わりましたね。覚悟を決めた顔です。」

「……………」

「死を覚悟した顔、でしょうか。雰囲気は普通ですが、分かります。」

「……次の敵は、古龍です。敵うかどうか。」

「……………」

「……でも、女神様との約束は変わらない。俺を頼りにする方々がいる。困っている人がいる。……俺は、一生懸命ハンターをするだけ、ですよ。」

一生懸命に生きる。

それは、女神様との約束。

俺の命を拾ってくれた、この眼の前の方との、最初の取り決め。

一時は、無理しなくていいとまで言ってくれた。

ゴア・マガラ戦でも、心配してくれたんだらう。

口ぶりからわかる。

どんだけ長い付き合いだったと思ってんだ。

冗談まで飛ばして、ごまかしてるんじゃないよ、女神様。

そして、俺のこの心の中の独白も、女神様はお見通しだ。

「……双治さんは、変わりませんね。」

「ええ、変わりませんよ。……次が最後なら、その最後を徹底的にやりますよ。……一生懸命に、ね。」

「……はい。そのお気持ち、受け取りました。」

真面目なトーク。

普段の冗談交じりの話し合いにはない、マジのトーン。

女神様は、神様らしくその場に背筋を伸ばして佇む。

神々しさ全開で、力のこもった目つき。

最後、か。

「双児さん。どうか、お気をつけて。」

「はい。」

「私とは会えなくなるでしょうが……寂しくありませんか?」

「いや、寂しいですよ。でもまあ……やっていきますよ。」

「……はい。双治さん、最後に。」

女神様が近寄ると、俺の手を取った。

まっすぐに俺を見つめてくる。

その吸い込まれそうな大きな瞳に、俺は釘付けになる。

「……これほど一人の人間に入れ込んで、神失格なのでしょうが。とても楽しかったです。これからもこの世界で、あなたはあなたらしく、存分に生きてください。」

「……………はい。」

「少なくとも、死ぬつもりで狩猟に出かけるなど、あつてはなりませんよ?」

「……………はい。」

「古龍なんて、とつととぶつ倒して、とつとと女の子侍らしちゃってください。」

「……………最後に何てこと言うんですか。」

「……………ふふ。」

!?

初めて笑う顔を見た…………。

「……………いけませんね。感情を露わにしては。……………それでは、失礼いたします。」

「……………どうか、お元気で。」

「それはこちらのセリフです。どうか、お元気で。」

「……………はいっ。」

「……………さようなら、です。」

フツ…………。

* * * * *

「……………ご主人様?ご主人様!?!」

「んあ……………?シヨウコ?」

「一体どうしたんですか!?!まさか狂竜症で……………」

「……………いや、違うぞ。大丈夫だ。」

「そないな姿勢で言われても……………」

姿勢。

うおっ、土下座してる。

慌てて立ち上がると、シヨウコと同様に心配しているドール。

「……いや、これだけ長い土下座したら、許してくれるかなー……と。」

「30秒くらい土下座してましたよ!?!ボケにしても長すぎます!」

「は、ははは……すまん。ドールもごめん。」

「ううん……でも……ソウジさん、なんで泣いてるの?」

「えっ。」

言われて気がついた。

俺は涙を流していた。

顎にまでかかる雫。

まるで髭剃りの後のように、それを手で拭った。

「い、いやあ、何だろう。よく分からん。」

「……………」

「で、でもすまん、ドール。遅くなって。申し訳無い。」

「う、ううん。大丈夫だよ?おじいちゃんから、ソウジさんが打ち上げに行ってるって聞

いてたから。……お帰り、ソウジさん。」

「……ああ、ただいま。」

そうか。

ホエールさんが知っていたか。

あの人も知っているなあ。

だが、助かった。

「……ドールちゃん、ご主人様、はよ寝かしてやってええ？ 疲れとるみたいや。」

「あ、ごめんね、ソウジさん。うん、おやすみなさい。」

「あ、ああ。」

ドールに曖昧な返事をして、その場を去った。

不思議がつっていたけど、説明ができません。

取り繕うにも、何も浮かばない。

頭が、真っ白だ。

……。

……。

自分の部屋に入ると、シヨウコが小さな声で話してきた。

「ご主人様……もしかして、神様とやらに会ってたんですか？」

「……あ、ああ。分かるか。」

「なんとなく、ですけど。」

「……すまん、心配かけた。大丈夫だ。……もう会えないかもしれないんだ。ずっと世話になってた人……神様だから。何か、心の整理がつかん。」

「……ええですよ、謝らんで。……とりあえず、休みましょう？明日は忙しそうだしね！」

「……ああ、そうだな。できるだけ準備はしよう。」

「はいっ！」

シヨウコが気を利かせてくれた。

ありがたかった。

と同時に、俺自身が相当戸惑っているのに気がついた。
シヨック、だったんだな、俺。

シヨウコとおやすみなさいの挨拶をして、自分のベッドに入る。

あの美しくも俗っぽい女神様を思い出しながら。

俺と二人で過ごした時間を思い出しながら。

俺は目を瞑って、眠りについた。

156ある宿の看板娘の話②

私はドール。

宿「ホエール」で働いている。

毎日毎日、部屋の掃除と食事の用意、その買い出しと、色々やっている。

たくさんやることがあるけど、大変だと思ったことはない……かな。

こういうの、私、好きみたい。

それに……。

「今日は……撫でていかないの？」

「あ、いや。はい。失礼します。」

この目の前の男の人、ソウジさん。

密かに慕っている。

宿にやって来た時は、あんなに頼りなかったのに

どんどん強くなっていった、筋肉の付き方とか顔つきとか……どんどんかっこよく

なつて。

正直、毎日毎日ドキドキしている。

お友達も少ないから、それを相談できる相手もいなくて。

よくシヨウコちゃんに聞いてもらったり、お母さんに手紙を送ったりしてる。

そのことをお母さんにからかわれてからは、なるべく書かないようにしてるけど……。

お母さん、口が軽いから。

お母さんは、首都ザキミーユギルドの偉い人……らしい。

一度中央から来たというギルドの職員さんが言ってた。

「ミヤコ総務長の……娘さん……!？」と言われ、頭を下げられた時は、ビックリした。私が偉いわげじゃないのに。

でも、お母さんが年に一回返ってくるのは……実はちよつとだけ嬉しい。

一緒に寝て、ご飯作ってあげて。

まあ、たまにダメな時はご飯抜きにしちゃうこともあるけど。

お母さんと一緒にいると、楽しいから。

でも、私の心配をし過ぎで……スキンシップが過剰なんだ。一度ザキミーユに再び仕事で戻る時は、もうこねくり回されて大変だった。とりあえずあしらったら、トボトボ出ていったなあ。……また帰ってきたら、優しくしようつと。

* * * * *

ソウジさんは、冬の時期に北の山にある村に遠征した。お母さんと一緒に居なくなっただから……ちよつと寂しかった。

「ウチも付いてった方が良かったんかなあ……。」

「シヨウコちゃんも、いなくなったら……私、寂しいな。」

「……もう！ドールちゃんかわええ!!」

「う、うわっ!」

「いなくならんで！ウチはこの宿大好きやから!」

「う、うん……ありがとう……。」

シヨウコちゃんとは、とても仲良くなった。

急に抱きつかれても、嬉しいと思える程には。

すぐく仲良くなったきっかけは、やっぱりあの時。

ソウジさんが、でいのばるど？っていう、とても強いモンスターにやられて帰ってきて。

私も心配で、お母さんとお見舞いに行つた。

生きていて、嬉しくて、でも怖くて、泣いちゃつて。

ソウジさんに逆に心配された。

お母さんも謝つてたなあ。

その晩。

シヨウコちゃんがとても落ち込んでいて。

心配で、一緒に寝たんだ。

「ウチ……もう……うっ……うっ……」

「……大丈夫だよ。シヨウコちゃん、頑張つたよ。」

「うう……ドールちゃん……」

狩猟の事なんて、これっぽっちもわからないけど。

シヨウコちゃんも落ち込んでいたから。

頭をなでて、一緒にベッドで一晩過ごした。

だから、すぐに立ち直った時は、安心したな。

良かった。

ソウジさんもすぐに退院して。

ハンターさんもオトモさんも強いなって、心から思った。

ソウジさんがすぐに治るように、私は身の回りのお世話をがんばった。

やりすぎて、ソウジさんは戸惑ってたけど。

背中流したり、あーんするぐらい、いいよね？

シヨウコちゃんが「ウチと交替制で！」なんて言うから、あんまりできなかったけど。
むう。

そんなこんなで。

ソウジさんが居なかった冬の間は、少しだけ退屈で。

でも、シヨウコちゃんと商店街をデートしたり、宿の備品をまとめて買いだしたり、帳簿をつけ直したり……。

なんだかんだ、平穩……なのかな。

そういう日々だった。

でも、遠くにいると寂しいなって。

そう、実感しちやった。

* * * * *

ソウジさんが冬山から帰ってきた。

いきなりだったから、びっくり。

しかも、宿の出口のドアを開けようとしたら目の前に居て。

抱きしめられた。

「うわっ。」

「えっ……。」

「あ、あああ、わ、悪い！ドール！わぎとではないんだ！」
「そ、そそそそソウジさん!?!」

急にくつつかれたから。

心臓が、飛び出るかと思ったよ。

「……………い、いきなりごめん、ドール。」

「……………う、うん。」

「……………え、えーつと…………た、ただいま帰りました。」

「う、うん。おかえりなさい、ソウジさん。」

何とか落ち着いて、お帰りが言えたけど。

ドキドキして、もう落ち着かなくて。

コーヒーを入れながら、とにかく深呼吸をした。

いきなりすぎるよ…………もう。

その晩、おじいちゃんにも許可をもらって。

初めて、夜のお店にでかけた。

飲み会っていうのかな。

ソウジさんが、いろいろ優しくしてくれて、嬉しかった。

セツヒトさんもいて、ハイビスさんも合流して、シヨウコちゃんもいて。

楽しかったんだ。とても。

「んでもさー、ドールー。何か違うことしたいとかー、無いのー？」

「え？違うこと？」

「そーそー。例えばー、やってみたいこととかー、就きたい仕事とかー……そういうのー

？」

「……………考えたこと、無かった。」

私の、やりたいこと。

今まで、考えたこともなかった。

お父さんが死んで、お母さんも忙しくて、宿も忙しくて。

毎日が目まぐるしかったから。

セツヒトさんの質問に、ちよつとだけドキツとした。

「ドールは何かしたいとか、無いのー？」

「そうだね……………あ、あった。」

「お、なにになー？」

「えつとね。笑わない？」

「笑わないよー。そういう夢を語るのもー、飲み会の醍醐味ー？」

「じゃ、じゃあ……………」

一つだけ。

思いつくものを、そのまま話すことにした。

「えつとね……………お嫁さん。」

「……………ふえ？」

「お嫁さん……………宿のお仕事、私嫌いじゃないし……………お料理も好きだよ？だから、それを続けながらやるなら、お嫁さんかなあつて。」

「……………お、おおお。」

「わー！素敵な夢や！ええな！ドールちゃん！」

「そ、そうかな。」

「女の子の憧れやー!」

「ハイビスちゃん……私は汚れてしまったんだね……。」

「セツヒトさん……私も自分が何だか恥ずかしくなってしまうて……。」

唯一、思いつくのは、やっぱりこれ。

やりたいことって、難しい。

宿も続けられて、生活のお世話をして。

ただ漠然と、これかなって。

「……と、というか、ドールちゃん? その、お、お相手はいるのかしら?」

「お相手?」

「ほ、ほら、お嫁さんということは、旦那さんもいるわけであってね?」

「……あ……そ、そういえばそうだね。考えて、無かった。」

「あ、そ、そうなの! いいのよ? そんな無理して考えなくて!」

「そ、そーそー! そうなのはー、頑張って探すものでもないしねー!」

顔が、熱くなった。

だって、お嫁さんって。

誰かの奥さんになるってことだから。

でも……誰かのお嫁さんになるって言うなら。

やっぱり、ソウジさんだよね。

うん。

「あ、でも……。」

「で、でも!？」

「……そうなたらいいな、っていう人なら……いるよ?」

「え、ええええええええと!?!それは今言ってもいいのかしらいやよくないかしら!!」

「落ち着いてーハイビスちゃん!ていうか言わせちゃダメな気がするよー!」

「うん。言わない方がいいよね。」

「ホッ……。」

「今はまだ。」

「「まだあ!?!」」

この気持ちは、大切にしたいなって思う。

ソウジさんを、困らせたくないから。

隣に座るソウジさんに、話しかけた。

「……飲み会って、楽しいね。」

「……ああ、そう思ってくれたなら、今日連れてきてよかったよ。」

「うん。よかった。」

「ああ。」

私の初めての飲み会は、とても楽しい思い出になった。

お酒の匂いがキツくて、フラフラになっちゃったけど。

その晩は、ショウコちゃんが一緒に寝てくれた。

「ドールちゃん……お嫁さんって、ええなあ。」

「ショウコちゃん……。」

「……あの時言ってたお相手って……。」

「あ……う、うん。」

「……やっぱりそうや……ホンマ、ウチのご主人さまは罪な男や……。」

「……………シヨウコちゃんもでしょ？」

「なあっ!? ……あー……………ま、まあなあ……………」

「……………ふふつ……………私達、おんなじだね。」

「……………こ、この余裕……………セツヒトさんにハイビスさん、こら強敵やで……………」

「？」

シヨウコちゃんが何言ってるか分からなかったけど。

もつともつと、シヨウコちゃんと仲良くなれた気がする。

おかえりなさい、ソウジさん。

* * * * *

ソウジさんは、みるみる忙しくなってきた。

ハンターランクというのが上がって、舞い込むクエストも強敵ばかりみたい。

怪我をして帰ってくる事もあった。

私にできることなんて、料理とかお掃除とか。

だから、ソウジさんが好きな魚料理は、うんと勉強した。

ソウジさんは少しずつ記憶が戻ってきているみたいで。

知らない料理をたくさん教えてくれた。

キレアジのヒラキ、というのは中々に大変だった。

でも、料理の幅が広がると、夜の宿の料理もレパートリーが増えるわけだし。

頑張ったんだ、私。

「うめえ……うめえよ……。」

「そ、そうかな。」

ソウジさんが料理を褒めてくれると、もう本当に嬉しくて、嬉しくて。

やる気が、たくさん湧いてくる。

ソウジさんが来る前は、こんなことなかったから。

ソウジさんには、色んな意味で感謝してるんだ。

でも、ソウジさんの記憶が戻ったら。

他の街の、もしかしたら違うところに行っちゃうのかなって。
……そう思うと、胸が苦しい。

* * * * *

私とソウジさんの間には、一つ約束がある。

それは、頭を撫でてもらうこと。

狩猟の前とか、お仕事に行くとき。

決まって私の頭を撫でてもらう。

心から落ち着く、ソウジさんの手。

お父さんみたいに大きくて……たまに雑な時とかあるけど。

ソウジさんも始めは照れていたけど。

というか、私なんて今でも恥ずかしくて、かなりドキドキするんだけど。

おまじないみたいなものかなって考えてる。

ソウジさんも、いつだか「ご利益……。」なんてつぶやきながら撫でていた。

ちよつと失礼だなんて思ったけど……。

でも、好きな人に頭なでてもらうって、嬉しい。

だから、日課としてやってもらっている。

……らーじやんというモンスターを狩猟する時は、特に丁寧に撫でてもらった。だって、皆が「とても強いモンスター」って言ってたし。

私も「みんなが無事でいますように、ソウジさんが無事でいますように。」って、目を瞑って祈ったんだ。

なんだから、私の思いまで背負って戦ってくれているって思うと、少しだけ嬉しい。

狩りで助けられることなんて、私には無いから。

* * * * *

ソウジさんがそのらーじやんの狩猟から帰ってきた日。

いつものように市場で買い出しをしていたら、慌てた様子のハンズさんにいきなり引き止められた。

ハンズさんは、最近うちの宿に泊まりだしたハンターさんで、ちよつとおつちよこちよいさん。

でもとってもいい人で、お料理とか裁縫がとっても上手。

髪の色も似ていて、なんだかお姉さんみたいな人。
そのハンズさんがただならぬ様子でいたから、私はドキツとした。

「ド、ドールちゃん！大変なの!!」

「は、ハンズさん!?どうしたの?」

「実は……さつき、セツヒトさんとソウジさん達が帰ってきて……怪我をして……。」
「えっ……。」

「わ、私、今からセツヒトさんのいる医務室に行こうと思って……そしたら、ドールちゃんが見えて……!!」

「……………!!」

「ど、ドールちゃん!」

途中まで聞いて、駆け出してしまった。

とりあえず、荷物を置いて。

おじいちゃんに留守を頼んで……。

ギルドに行かなきゃ……!!

「おじいちゃん！ソウジさんとセツヒトさんが怪我した……って……」

「……………あれ？ソウジさんとシヨウコちゃん……………」

「……………た、ただいま、ドール。」

「……………ソウジさん、怪我は……………？」

「ん？いや、痛かったけど……………まあ大丈夫だぞ？」

「……………よ、良かったあ……………」

宿に着いたら、ソウジさんとシヨウコちゃんが居た。

とても普通に。ご飯を食べながら。

普通っぽい……………。

……………良かったあ……………。

「す、すまん。心配かけて。先にギルドに行ったものだから、帰りが遅れて……………」

「……………う、うん……………ごめんね、慌てちゃって。」

「い、いや。いいぞ。うん……………その、何だ。」

「……………うん。」

「……………ただ今、帰りました。」

「……………うん、おかえり。ソウジさん、シヨウコちゃん。」

何だか、照れちゃう。

いつもみたいにお帰りっというだけなのに。

……………慌てたところを見られたからかな？

恥ずかしい……………。

「流石や……………ドールちゃんの正妻力は半端ないでえ……………。」

シヨウコちゃんがよくわからないことを言っていた。

制裁力？

とにかく、みんなが生きていて良かった。

セツヒトさんは、怪我をしたみたい。

ソウジさんを庇って怪我をしたって聞いたけど……………。

セツヒトさんって、とっても強いハンターさんって聞いていたから、驚いた。

ちなみに、その日のお夕飯は、お茶漬け。

だつて……メインの食材が無くなったんだもん。

おじいちゃんが、ソウジさんたちの昼ごはんに使い切ってしまったみたい。

それを分かかっていて止めなかったソウジさんもシヨウコちゃんも、同罪。

ハンズさんも、同罪です。

おじいちゃんはこのうどんぶり勘定などところがあるから、やっぱり私がしつかりしないよね。

おじいちゃんは、ワサドラの村長代理として結構偉い立場にあるはずなんだけど。

私にとっては、大切な家族で……ちよつぱり抜けてるおじいちゃんだから。

私も心配したんだから、ソウジさんたちには反省してもらうことにした。

もちろん、次の日の夕飯は豪勢なものしたけど。

* * * * *

ソウジさんはすぐに回復した。

人よりすぐく回復が早いから、毎回驚かされるけど……もう慣れちゃった。

お世話とかしてあげたいのに、すぐ治っちゃうんだよね。いいことなんだけど。

そしたら、すぐにまた狩猟に行くということだった。二人が、何だか少しだけ落ち込んで宿に帰ってきて。ちよつとだけ、気になったんだ。

「あ、おかえりなさい。……ご飯、まだだよね。」

「あ、ただいま、ドール。」

「今帰りましたー!」

いつもみたいに元気に挨拶するシヨウコちゃん。でも、何だかいつもと違う。

無理、してる……?」

「……シヨウコちゃん、何かあった?」

「うえっ!? ええと、いやあ——」

「明日、というか夜中、クエストに行くんだ。」

「えつ、すごいね。そんなに早く。」

「ああ。ちよつと……危ないモンスターだ。気をつけて、行ってくる。」

「……………うん。わかった。……………お夕飯、用意するね。」

「ああ。」

何時ものように、お夕飯を作った。

すぐに休むって聞いたから、消化の良いものにした。

何だか、とても嫌な予感がした。

次の朝起きたら、ソウジさんたちはもういなくて。

「頭、撫でられてないな。」なんて考えちゃったら、余計に不安になった。

……………大丈夫だよね。

ソウジさん……………シヨウコちゃん……………。

そんな不安は、やっぱり当たるもので。

翌日、ワサドラが大変なことになってるって、分かった。

157ある宿の看板娘の話③

「た、大変だよ！ホエールさん!!」

「おや、どうした。」

「どうもこうもないよ!! 流通が停止して……ど、どういうことだい!! どうすればいいんだい!! 私達!!」

「……ただ事じゃなさそうじゃの……ドール、しばらく宿を頼んだ。」

「あ、うん。」

ソウジさんたちが狩猟に行った後。

不安なまま、宿の朝の業務を始めていた時。

市場の野菜売りのおばさんが、血相を変えて駆け込んできた。

流通の停止……?」

「あ、ドールちゃん……。ごめんねえ、朝から騒がしくしちゃって……。」

「ううん。……おばさん、今の……。」

「……………隠しとくわけには行かないねえ。実はね……………」

そこから、おばさんに色々と教えてもらった。

ワサドラの食品とか、いろいろな品物が、外から入って来られなくなったみたい。

おばさんも朝、急に言われて驚いたらしい。

市場は大慌てで、大変なことになっているという話だった。

「何でも……………強いモンスターが現れて、安全が確認できるまでは無理って……………」

「そんな……………」

「ウチはね？ほら、野菜はこの所、ワサドラでも質がいいのが取れるからね……………でもほら、大半の食料は南部からだろう？ハンターさん達も止められちゃねえ……………周りのみんな、困り果てちゃってねえ……………」

「……………」

「……………あら、ごめんね！ドールちゃん。とりあえずさ、買えるものは買つといた方がいいよ！値段も吊り上がってくるだろうからさ！ウチの野菜は安くしとくよ！」

「あ、ありがとう……………」

「この市場があるのも、元はドールちゃんのお父さんが頑張ってくれたおかげなんだよ

「！こういうときに助け合わなくちやね！」
「う、うん……。」

おばさんは、とても優しくしてくれる人だ。

いつだか、ソウジさんが大型モンスターの初狩猟に行くと聞いて私が落ち込んでいた時、助けてくれた。

本当にいつも、お世話になっている人。

とりあえず、言われたとおりに先に買い出しを済ませた。

市場はいつもの活気は無く……こんな初めで、不安になった。

でも、私が顔を出すたびに、出店の人たちは笑顔で食材を売ってくれた。

何時ものように。

何なら、まけてくれたりした。

「ドールちゃん！どうだい！今日もいいリノブロ、入ってるよ！」

「あ、うん。……おじさん、これ、いつもので。」

「あいよ!!」

おじさんは、普通だった。

いつもどおりの、元気な声。

でも、買い出しを終えて振り返ると、おじさんは頭を抱えていた。

行く人たちが、みんな不安そうにしていた。

なんでも、この原因になっているモンスターは、今までと違って相当に恐ろしい、とか。

町を出ようか、とか。

聞くたびに、私も不安になった。

………私って、何にもできないのかな。

悔しい。

おじいちゃんみたいに、村の相談役としていられてるわけでもないし。

ソウジさんたちみたいに、モンスターを狩って、安全を守ったりしているわけでもないし。

ハイビスさんは、きつと今、ギルドで奮闘しているんだろうし。

みんながみんな、できることを頑張っているのに。

私だけ、蚊帳の外みたいで。

……自分の無力さが、嫌になった。

宿に帰ると、おじいちゃんも戻っていた。

中には数人の大人がいて、何か話していたようだった。

私が入ると、「……それでは、そういうことでの。よろしく頼んだ。」とおじいちゃんが言っていた。

大人の人達が、宿の裏口から出ていく。

「……おおドル。お帰りなさい。どうした？変な顔をして。」

「……おじいちゃん。」

「ん？」

「私、何もできてない。」

「……ドル？」

「……市場の人、みんな困ってた。……野菜売りのおばさんから聞いたよ？ワサドラが大変だった。」

「……。」

おじいちゃんが黙っている。

私は話を続けた。

「……お肉屋のおじさん、いつもみたいに優しくかった。でも、私がいなときは……頭抱えてたよ？お肉つて、ハンターさんが仕入れるんだよね？それも、今からはとれなくなるんだよね？」

「……………ドール、お前も大きくなつたんじやの。」

「おじいちゃん、今はそういう話じゃ——」

「——ドール。……ソウジさんとシヨウコ殿は、その原因を倒しに行つとる。」

「……………えっ。」

急にそんなことを言われて。

心臓が、キュツとなった。

ソウジさんとシヨウコちゃんが？

みんな、みんな、どうしようもないモンスターだつて、口を揃えて……。

それを？

「……シガイアから聞いたわい。あやつも色々考えたんじやろ。ソウジさんが、数あるハンターから選ばれ、今、狩猟をしてくださつとる。」

「……お、おじいちゃん。それ、どうして……。」

「止めはできんじやろ。……ギルドの方針に、ワシは反対できる立場にないしの。……ちとドールには難しいかの？」

「……そんなことない。わかるよ。わかるもん……。」

子ども扱いされていることが、ちよつとだけ、腹立たしかった。

「……私だつて、分かるよ。ソウジさんが、どんどん難しい狩猟を任されていて、まるで追い込まれるように頑張つて強くなっているつて。」

「それがわかるなら、ドールや。お前は、お前にできることをやらんとな。」
「え……。」

私にできること。

私に、できることなんて……。

「焦っておるの。じゃが、そんなに思い詰めんでいい。人にはそれぞれ役割がある。」
「役割……?」

「そうじゃの。ドール、お前には、ソウジさんを大切にしたいという気持ちがある。」
「えっ……。」

言われて、顔が少し赤くなる。

「……ソウジさんは、常々感謝しておった。『自分の家はここだ』と、何度も、の。」
「……………」

「その居場所を作ったのは、ドール。お前じゃ。」
「……………」

私にできること。

ソウジさんを、暖かく迎えること。

この宿で。

ソウジさんが、家だと言ってくれる、この場所で。

「お前の料理の腕は中々じゃ。イシザキの坊主にも、負けとりやせんわい。ソウジさんもシヨウコ殿も、大層気に入っておる。」

「あ……。」

思い出す。

何度も何度も、ソウジさんは私の料理を褒めてくれた。

「ドール、お前にできることなんて、いくらでもあるじゃろ？」

「……………う、うん。」

「ほっほっ。……………いい顔に戻ったの。」

見つけた。

私にできること。

私にしか、できないこと。

やっど。

やっどわかった。

「……………まあ、相当に難しい狩猟と聞いておる。じゃがの、ソウジさんとシヨウコ殿のことじゃ。怪我はするかもしれないが……………まあ、帰ってくるじやろ。」

「……………うん、そんな気がする。」

「待つわしらが、まずは堂々とせんと、の？」

「……………うんっ。」

何も解決してないけど。

……………いや、私の気持ちは解決した。

ソウジさんを、迎えてあげなきや。

私が。

私と、おじいちゃんが。

この宿、「ホエール」で。

「……………おじいちゃん、ごめんね。私、どうかしてた。」

「ええ、ええ。そりや、愛する人が大変な目に遭つとるんじや。そりや、どうかするじやろ。」

「あ、愛す……………!?!」

「ドール、その気持ちはとても素敵で素晴らしいものじゃ。……大事にしなさい。」
「……………うん。」

おじいちゃんは、私がソウジさんに想いを寄せていることを、早々に気づいていた。
……もう。

敵わないなあ……………。

私は、気持ちを切り替えた。

ソウジさんとシヨウコちゃんは、きつと今、一生懸命に頑張っているんだ。

私も、できることをやる。

ううん、やりたい。

二人を……………あの人を、支えたい。

だから。

だからソウジさん。

頑張つて。

* * * * *

結果として。

ソウジさんとシヨウコちゃんは、ちゃんと帰ってきた。
でも、シヨウコちゃんは大怪我をしていた。
ソウジさんも、気を失ったまま。

命に別条はなさそうと聞いていたけど、不安で不安でしよがなかつた。

医務室には、ギルド関係者以外立入禁止。

ハイビスさんが、二人の身の回りを見てくれていた。
二人が眠っている間、私は何回もギルドに訪れた。

「ハイビスさん。」

「ドールちゃん。……二人、まだ眠っているわ。」

「そう……うん。ありがとう。」

「えっ?」

「えつと……二人を、診てくれて。」

「あら……ふふ。こちらこそ、ありがとう。……ねえ、ドールちゃん。」
「えっ？」

「まるで、二人の家族みたい。その感謝の仕方。」

「そ、そうかな……そうかも。」

「ふふ……ドールちゃんのお宿が、二人の家だもんね。……大丈夫。二人は強い。きつとすぐ、目を覚ますわ。」

「……うん。」

ソウジさん達は眠り続けた。

そんな中、町はもうお祭り騒ぎだった。

市場は、まるで嘘みたいに雰囲気が変わっていた。

まるで収穫期のバーゲンの時みたいだった。

「いやあ！一時はどうなるかと思っただがよ！ソウジさんとショウコちゃんがやってくれたって聞いたときはもう……感謝感激よ！」

「何言ってるんだい!?死んだ目をしていたくせに！」

「そ、それは……だってよ!?もう終わりかと思っただけ!?それがたった半日でやつ

「けちまうなんて……。」

「あらあら！肉屋が泣いてるよ！！みんな！集まっておくれ！！」
「う、うるせえ！！泣いてねえぞ！！」

ワハハハ……。

ワイワイ。

ガヤガヤ。

……いつものワサドラ。

その楽しいげな市場が、すぐに戻ってきた。
それを取り戻してくれたのは、あの二人。
うちの、二人なんだよって。

誇らしくて。

おっきな声で、言いたくなかった。

* * * * *

ソウジさんが目を覚ました時は、泣いてしまった。

泣いて……そのままの勢いで、ソウジさんにくつついてしまった。

後で思い返して、恥ずかしくなってしまうた。

みんないたのに……。

嬉しいこともあった。

お母さんが、帰ってきた。

だけどというか、やっぱりというか、ちよつと帰り方が変だったけど。

……なんで毎回私のフリをするんだろう……。

そりゃ、私にとても似てるって、色んな人に言われるけど。

ソウジさんも、ちよつと騙されたみたいだった。

ちよつと悔しい。

お母さんが帰ると、宿がとつても明るくなる。

やっぱり、ホツとする。

でも今回は、お仕事が本当に忙しいみたいで。

中々一緒に話す時間が取れなかった。

少しだけ、寂しいけど……もう私も自立する歳になったし。

私は、私にできることがあるんだって。そう、分かったから。

お母さんも頑張っているって分かるし。

変わらず、宿のお仕事を頑張ろうと思った。

お母さんが帰ってきたその次の日。

ソウジさんたちは、例の……ごあまがら？というモンスターを倒した、祝勝会に行つたらしい。

お母さんもうやら、そこに顔を出したとかで、宿にはいなかった。

おじいちゃんが教えてくれた。

帰りが遅くなったソウジさんが、いきなり床に伏せた時は、びっくりした。

しかも、何故か涙を流していた。

「……ソウジさん、なんで泣いてるの？」

「えっ。い、いやあ、何だろう。よく分からん。」

「……………」

「で、でもすまん、ドール。遅くなって。申し訳無い。」

「う、ううん。大丈夫だよ？おじいちゃんから、ソウジさんが打ち上げに行ってるって聞

いてたから。……お帰り、ソウジさん。」

「……ああ、ただいま。」

「……ドールちゃん、ご主人様、はよ寝かしてやってええ？ 疲れとるみたいや。」

「あ、ごめんね、ソウジさん。うん、おやすみなさい。」

「あ、ああ。」

シヨウコちゃんは、なんでソウジさんが涙を流しているのか、分かったみたい。

そんな気がした。

そして、私には分からない二人だけの秘密があるんだと、この時なんとなく分かった。

……二人が何か、隠している。

ちよつとだけ、気になる。

私には言えないことなのかな。

* * * * *

次の日の朝。

珍しく、お母さんが早く起きていた。

そして、お母さんが座る椅子の隣には、おじいちゃんがいて、何か話していた。聞き耳を立てた。

「……というわけなんです。」

「なるほどのう。」

「ええ……ですから、すぐにこちらに戻るかは確約できませんが……。」

「いや、ここまで待ったんじや。1年や2年、どうってことはないわ。倅も喜ぶ……。」

「ありがとうございます……その、ただあの子が心配で……帰ってきたのにまたすぐに、なんて。」

「……ドールは心配ないじやろ？あの子はこの数日で見違えるようじや。……のう？」

「ドール？」

「えっ!？」

驚いた様子のお母さんが振り向く。

お母さんと目が合った。

「……お母さん、また首都に戻るの？」

「ど、ドール……え、えつとね、お母さん……。」

「……………大丈夫、だよ？」

「えつ…………。」

お母さんがまた首都に戻るんだって、話の内容から何となく分かった。

お母さんは、私のことが心配なんだっていうのも。

ちよつと前の私なら……うん、少し怒っていたかも。

寂しくて。

また置いていくの、って。

でも、大丈夫。

いつもの強がりなんかじゃなくて、本当に。

「お母さん。」

「な、なあに？ドール？」

「……………私もう、子どもじゃないよ？」

「あ、あら…………。」

「もう、自立する歳になったんだ。自分がやりたいことも、何となくだけど、分かった。」

……私ね、やっぱりソウジさんが好き。この町が、この宿が、大好き。」

「……ドール。」

「……ソウジさんとかシヨウコちゃんとか、ハンターやオトモの人達を支えたい。食事とか、宿とか、そういう生活の面から、だけど。それが私の、やりたいこと。」

「……。」

「……お母さんが離れているのは、寂しいよ？でも……大丈夫なんだ。本当に。」

「……っ……!!」

ガバッ。

ギユッ。

「…………ホッホッ。」

おじいちゃんがいつものように笑う。

それが、この宿「ホエール」の名物。

そんな中、お母さんが私を抱きしめた。

抱きしめてくれた。

いつものふぎけた抱きしめ方じゃない。
心から安心する、あつたかくて優しい抱擁。

「ドール……あなた、大きくなったのね……。」

「……うん……。」

「……ホント、ソウジくんには感謝ね。この私の大切なドールを、こんなに大人にしてくれて……。」

「……うん……。」

ソウジさんがいなかったら、やりたいことなんてわからなかったかも知れない。

でも、あの人がいたから。

好きな人のために頑張るって気持ちだが、私を前に進めてくれた。

「……お母さん決めたの。この仕事を最後に、ワサドラに戻るって。」

「……えっ!?!」

「でもね、かなーり大きな仕事でね……ソウジくんも、ちよつと連れて行くわ。」

「あ、そうなんだ……。」

「でもでも大丈夫よ！ソウジくんならば一つと狩猟が終わらせて帰ってくると思うし！お母さんも……ま、まあちよつと後始末が大変そうだけど、すぐに終わらせてくるから！」

スツ。

お母さんが、私から離れる。

いつになく、真剣な目。

ちよつと、似合わないけど。

かっこいいお母さんだった。

「……アナタとあの人がいるこの町で……また、暮らしましょうね。」

「……お母さん。」

「……ホツホツホツ。」

「……ああ！お義父さんももちろん！一緒ですよ!？」

「それは言わんほうが逆にええんじゃないかのか？」

かっこいい顔であたふたするお母さんは、やっぱりお母さんで。三人で、朝っぱらから笑い合った。

余談だけど、お母さんがその後、いつもの如く暴走した。

「まさか……本当にソウジくんに大人にされてないわよね!？」

「えっ……ええ!？」

「その反応はまだだね!! いけないわ!! このままではソウジくんに私の可愛い可愛いドールが手籠めに……!! ま、まだ手を出さないように私からキツくお灸を据えて……!!」

「お、お母さん!! ちよつとまって!! お願い!!」

「ソウジくん!! ソウジくん!!」

「お母さん!!」

その後、物理強制的にお母さんを止めた。

ついでに朝食抜きを宣告し、反省を促した。

……私だって、もう子どもじゃないんだからね。

* * * * *

翌日。

ソウジさんとシヨウコちゃんは、お母さんと一緒にザキミーユシテイに出発した。

ソウジさんには、念入りに、すぐく念入りに頭を撫でてもらった。

というか、撫でさせた。

シヨウコちゃんにも、撫でさせた。

ソウジさん専用の頭とか言ってたけど、シヨウコちゃんだったらもういくらでも撫で

てもらいたい。

正直言うと。

やっぱり寂しい。

だけど……でも、不思議と大丈夫。

今日も宿には、ハンズさんを始めとして、色んなハンターさんが出入りする。

美味しい食事を作って、部屋をきれいに整えて。

私は、私にできることをするんだ。

私は、ドール。

この宿で働いている。

それが、私の仕事。

がんばってね、お母さん、ソウジさん、シヨウコちゃん。

私、応援しているから。

皆の帰りを待っているから。

ここ、「ホエール」で。

158準備をしましょう。①

女神様とのお別れから翌日。

体を起こすと、不思議と全身が軽かった。

気持ちもスツキリし、やる気に溢れている。

(女神様……かな。)

心の中で、感謝をしておく。

ありがとうございます。

た。昨夜、ギルド横の集会場で、ハンターズギルド……シガイアさんから直接依頼を受け

内容は、古龍の討伐。

天廻龍シャガルマガラ。

俺とシヨウコで倒したはずの、黒蝕竜ゴア・マガラの進化版？モンスター。

明日の出立のためにも、今日は入念に準備をしなければ。
懸念が2つ。

1つ目、女神様からの話では、例のギフトの機能がかなり落ちている……下手したら機能しないかも知れないとのことだった。

念の為、手慣れた動きで「情報画面」を起動する。

……確かに。

今の所「装備」や「アイテム一覧」は無事だが、「モンスター情報」や「マップ」に異変が見られた。

故障した液晶画面のように変な筋が入っていたり、文字化けを起こしていたり。

「アイテム調査」やその他の機能については、選択することさえできなくなっている。

……この世界に順応している為、とか言ってたけど……むしろ今までよくもつたな、と思う。

ギフトにも持ち物を入れておくが、回復薬とかは余分に違うアイテム収納を用意することしよう。

2つ目、討伐はチームで行う可能性が高い、ということだったが……そこが不安。複数で一匹に立ち向かうというのが、俺は不安でしかない。

双剣を振り回してる時に、隣から近接が突っ込んできたら……。

「おお……怖つ……。」

「んあ……おはようございます、ご主人さま。」

「お。おはよう、シヨウコ。すまん、起こしてしまったか。」

「いえ……。」

寝ぼけ眼でシヨウコが目覚めた。

俺は、ドールが用意してくれたのであろう水が張った桶に、タオルを突っ込む。固く絞り、シヨウコに渡した。

「あ……ありがとうございます、ご主人さま。」

「ああ。ランニングに行つてから、飯食つて、買い出し……かな？今日は。」

「ふう……はいっ！」

急に元気な声を上げるシヨウコ。

寝起きは少し悪いが、すぐに目を覚ますことができる。

俺も手慣れた手付きで情報画面から着替えを行う。

……うーん……。

「どうしたんです？ご主人さま？」

「いや……今日は自分で着替える。何だか、そろそろギフトが使えなくなるっぽい。」

「うえっ!？」

「いや、そんなに大したことじゃないぞ。で、そのためにこう、ギフトに頼らない生活を送らないといけないな、とな。」

「……」主人さまの早着替えがもう見れなくなるんですね……。」

「あれ？意外と楽しみだったか？」

「はい。何だか毎朝、手品見ているみたいで。」

手品で。

人の着替えを楽しむんじゃないよ。

* * * * *

今日はランニングは軽めにしておいた。

ハンズから「今日についてはつけてます!!」と言われ、本気を出してやろうかとも思ったけど。

先日ドールに釘を刺されたばかりなので、やめておいた。

また行くときは、地獄を見せてやろう。

ちなみにハンズは、明日にも一度、故郷に戻るようだった。

「ギルドに教えてもらったんですが、放牧のルートが今南に向いるようで……タイミン格的にベストなんです。」

「そうか。……寂しくなるな。」

「ソウジさん、シヨウコちゃん。また戻ったら、一緒にトレーニングしましょうね。」

「ハンズさんも、気をつけてくださいいね!!……お兄さんのことでなんかあったら、いつでもワサドラに帰ってきて下さいいね!!」

「そんな、今生の別れじゃないんですから。」

あの兄がそう簡単にハンズを手放すのか……？
わからん。

宿に戻ると、ドールがいつもの朝食を用意してくれていた。

今日はご飯メニュー。

ツチタケノコの煮物、モガモ貝の味噌汁、ツヤツヤの白飯に焼き魚……大根おろしもセツト。

うーん、完璧。

「ドール様、いつもありがとうございます。」

「さ、様って……いつものメニューだよ。」

「この『いつもの』にどれだけ支えられているか……な？ ショウウコ？ ハンズ？」

「……（ガツガツ）」

「……（ガツガツ） ……あ、おかわりをもらっても……。」

「あ、うん。ハンズさんもたくさん食べてね。」

「……俺も食べよう……。」

二人にガン無視される。

うまい飯の前に、言葉は無用か。

俺も味わっていたくでしょう。

しかし、食堂の隅で真っ白になっているミヤコさんがいるが、何かあったのだろうか……。

……何かあったんだろう。

察する。

そして。

「あ、ドール様。俺もおかわり。」

「だから、様はやめてよ、もう。……はい。」

「ありがとうございます。」

俺は、スキル「気にしない」を発動し、完全に無視することにした。

触らぬ神に祟りなし。

触れればドール神の怒りを買う恐れあり。

おそろしやおそろしや。

「あ、ドール。」

「ん？なに？ソウジさん。」

ドールを呼ぶ。

どのようなクエストに行くかは置いておくとしても、明日から出かけることは伝えとかないと。

「実は明日、首都の方に向かうんだ。」

「……うん。」

「……あれ？知ってた？」

「あ、うん、ごめんね。お母さんからちよつと。」

「そうか。」

話はしていたのか。

……ならその過程で、

「お母さん首都に戻るの。」↓「そう。」↓「冷たい！ドールが反抗期!!（暴走）」↓「もう！ごはん抜き！」↓「チーン（真っ白）」

というパターンか。もしくは、

「お母さん首都に戻るの。」↓「そう。」↓「ああ！でもドールかわいい！（暴走）」↓「もうーごはん抜き！」↓「チーン（真っ白）」
というパターンと推測される。

「聞いているなら話は早いんだけど……モンスターに、少しばかり時間がかかるかも知れない。」

「うん。」

「……な、なので、よろしくお願いいたします。」

「わかった。」

「……？」

ちよつとドールが冷たい気がしなくもない。

な、何で？

「気をつけてね。ソウジさん。シヨウコちゃん。」

「あ、ああ。」

「ありがとな！ドールちゃん！」

シヨウコは普通の返事。

ドールも普通なんだろうけど……何だろう、妙に引つ掛かる。

いや、ドールはいつも落ち着いた子なんだけど。

何というか……少し大人っぽい落ち着き具合になったと言うか。

「ど、ドール？」

「ん？どうしたの？ソウジさん。」

「いや……何か、大人っぽくなったと言うか、何というか。」

「そ、そうかな。……うん、そうかも。ちよつと、成長できた。」

「おお……。」

ドールが自分でそういうことを言うのは、珍しい。

何かあったんだらうな。

「……次のモンスターは、今までで一番強いかも知れない。」

「むぐつ……ご、ご主人さま？それ、言いますか？」

シヨウコがご飯を頬張りながら俺に突っ込んできた。

言うも何も。

……何だか、今のドールにそれを言わないのは、何だか失礼な気がした。

本気で俺達のことを心配してくれて、こんなに甲斐甲斐しく身の回りを見てくれる人
に。

ちゃんと伝ええないといけない気がする。

「ある人に聞いたんだけど……多分今回は、俺の一世一代の大仕事になる。」

「……………」

「ぶっちゃけ、五体満足で帰れるか分からん。死ぬかも知れない。」

「……………」

「ご主人さま……………」

「でも、頑張るから。帰ってきたら、また、おかえりって言ってほしい。」

すべて、正直に話す。

今までは、ドールに心配かけまいとごまかしてきたところだけど。

……ドールには、話しておきたい。

真剣な目を向けると、ドールもまた真剣な目で俺を見つめ返してきた。

「……うん。任せて。みんなの帰りを、ここで待つてる。無事を祈るから。」

「ああ。」

「だから……頑張つて。」

「……ああ。」

ここは俺の家だ。

俺の実家だ。

ドールもホエールさんも、俺の家族みたいな存在だ。

帰りを待つ人がいる。

それだけで、頑張れる。

「……ソウジくん、よく言ったわ！」

「うわあ!!み、ミヤコさん!?!」

いつの間にか背後にミヤコさんがいた。

先程まで真つ白だった人が大きな声を出したから、ビビった。

「ソウジくん。ドールにきちんと話してくれて、嬉しいわ。」

「い、いや、どうも。」

「……ドール、ソウジくんのバックアップは、こつちも全力を尽くすから、心配しないでね。」

「うん。お母さんがそう言うなら、安心。」

何だか、ミヤコさんとドールの感じが、いつもと違ってちゃんとお母さんと娘っぽく見えた。

気のせいかも知れないけど。

「ドール、明日はしっかり見送ってね？」

「うん。」

「また、絶対帰ってくるからね？」

「うん。」

「……だから、今日の朝しよー」

「ーそれは駄目。」

ツチーン。

真つ白になるミヤコさん。

いい感じムードの中、ついでに朝食もゲットしようとして試みたようだったが……ドールのほうが上手であった。

最早様式美ですらある。

「もぐもぐ……ドールちゃん、おかわり！」

「ウチも！」

「わっ……みんなよく食べるね。」

「ホッホッホッ。」

マイペースに飯を食らうハンズとシヨウコ。

いつものように笑うホエールさん。

……死ぬとかなんだとか、言っっちゃ駄目だよな。

「ご主人さま？」

「ん？」

「……絶対に、ここ、帰ってきましようね！」

「……ああ、もちろんだ！」

古龍だからなんだ。

無事に帰ってきてやるぞこの野郎。

やる気に満ち溢れる、俺とシヨウコであった。

* * * * *

「旅の用意は最低限でいいわよ？旅費もこつちでもつから、狩猟のことだけを考えてちようだいね！」

復活したミヤコさんからそんな話を聞いて、俺とシヨウコは午前中から精力的に商店

と市場を駆けずり回った。

購入するのは、回復薬グレートなど薬関係がメイン。

以前教官から、古龍には搦め手は効きにくいと聞いていたので、その辺のアイテム……罫とか閃光玉とかは控えめにしておいた。

ギフトの「アイテム一覧」から出してしまえば良いのだが、いつ使えなくなるかも分からない。

念には念を入れて、購入しておく。

金は割とある。

食料品はミヤコさん……ギルド側に頼るとして、イシザキ亭の弁当は買っておき
い。

昼の時間前に、オスズからA弁当とB弁当を4セットほど購入しておいた。

店の前には人だかりが相変わらず凄かった。

というか、増えていた。

「ありがとうございますにやあー！ありがとうございますにやあ!!」とオスズが大声で叫ぶ
ぶ最中、シヨウウコが弁当を買い始めたものだからさあ大変。

シヨウウコは退院したことをオスズに知らせていなかった。

まあそんな暇無かったしな。

「しよ、シヨウコー!!し、心配したにやああああ!!」

「ちよつ!!お、オスズさん!？」

「一人前になったかと思つたらあんだけ心配かけて……でも良かったにやああああ!!」
「わっ!す、すんません……つて!!鼻水かけんと!!ああ!お気に入りの服があ!!」

ギャーギャー

ニャーニャー

うんうん。

微笑ましい限りである。

「ご、ご主人さまも見とらんと!は、はよう助けて下さい!!」

「いや、これも家族のスキンシップみたいなものだ。……オスズさん、存分にどうぞ。」

「ご、ご主人さま!？」

「じゃ、俺は昼飯を別のところで食ってくるから。また後でな、シヨウゴ。」

家族のような間柄の二人である。

大きな仕事の前に、少しでもスキンシップを取ってほしい。

やだ、俺ってば紳士。

「ご、ご主人さまアアア!!!」

「シヨウコ……本当によかったにやあ……（スリスリフキフキ）」

「う、ウチの袖で鼻水を!!!」

……さーて、俺はギルドの方にも行くかな。

ん？

あれは……？

「(じー……)。」

「……………」

イシザキ亭から大通りに向けて離れた建物の影。

双眼鏡を駆使してオスズとシヨウコを見つめる人物がいた。

フードを目深に被り、わかりにくくしているつもりだろうが……そのOLっぽいスカートはごまかせていませんよ。

「……ヒナタさん。」

「ふえええ!?!」

「俺です。ソウジです。」

「あ、ああ……同志でしたか……これは、大変お見苦しいところを。」

「い、いや、平気です。」

見苦しいと言うか、鼻血前提でハンカチを鼻に押し当てて双眼鏡を覗くフード丸かぶりのOL風スカート女性がいたら。

もうツツコミどころが多すぎて訳が分からん。

しかも「ふえええ」て。

「……ヒナタさんは、いつもここにいらして居るんですか?」

「い、いえ。昼休憩が長めに取れた時には、こうしてオスズ様を眺めて、眼福としている

のです。」

「さ、流石です。」

ヒナタさん。

ワサドラギルドの新人受付嬢で、そのクールな印象から結構な人気がある。

ハイビスさんと人気を二分するほどの美人さんであり、仕事の方もこれまたスマー
ト。

だが、彼女には俺と同じ秘密を共有している。

そう、猫っぽいもの大好き属性、である。

おっさん時代、そういった趣味は完全にキモいと思われるため自重するスキルを持つ
俺に対して。

ヒナタさんは、その隠密性の高さも相まって、俺の前では自重しない。

というか、本領を發揮する。

引くほど。

うん、俺今も引いてる。

同志なのに。

「すみませんただでさえ尊いオスズさんにシヨウコさんが混じってもうこれはたまらない状態が急加速しはじめておりましてもう私居ても立っても居られないようなこんな状況下でまさかのソウジ様ご登場となってはもうー」

「ーはい、存分に二人のやり取りをご覧になって下さい。待ちますから。」
「感謝いたします。」

バツ!!

目にも留まらぬ速さで双眼鏡をセットし直すヒナタさん。

もう完全にヤバい人である。

通行人がジロジロ見てくるのを何とか隠しながら、しばらく待つ俺であった。

何してんだ俺……。

* * * * *

「すみませんでした……私としたことが……。」

「い、いえ。大丈夫ですよ。」

ヒナタさんが鑑賞を終え、正気に戻ってきた。

一緒にギルドに向かうことにする。

その間、ずっと謝られっぱなしである。

「その、我を失うほど、今日のはその、可愛すぎまして……。」

「それは……そうですね。今日のオスズさんは、一味違いました。」

「分かりますか?……流星はソウジ様です。」

分かるとも。

今日のオスズの髪型は、ツインテールであった。

猫耳ツインテール、エプロン、ピコピコのしっぽ。

正直言おう。

アレは国宝として崇めるべきレベルである。

「しかもあのエプロン……サイズが合っていない。」

「!?同志ソウジ様!それはどういう……。」

「おそらく、忘れてしまったか汚してしまったか……ケイさんのものを借りたんでしよう。ダボダボでした。」

「そ、そんな。ドジっ子アピールも忘れないとは……。」

「しかも天然です……凄まじい破壊力でしたね……。」

「ええ……完璧でした……。」

心の中のどこかで、「お前何してんの？」と冷静に突っ込む俺がいる。

だが待て、心の中の俺よ。

趣味の話をするというのは、もうこれは、心の開放なのだ。

ちよつと黙ってろ。

そこからギルドに着くまで、非常に密度の濃い猫っぽいものトークに花を咲かせた。

ようやくギルドを目の前にして、「……そういえばソウジ様は、ギルドにどんな御用でしよう？」と聞かれ、我に返ったほどであった。

オスズとショウコ……恐ろしい子っ!!

* * * * *

さて。

正氣に戻った俺は、昼飯を適当に集会所で食べた。

イシザキ亭ではシヨウコがオスズに捕まってしまったから。

腹を空かせてギルドに入ると、昨日のバーカウンターの所へ呼ばれたのである。

シガイアさんに。

「いかがですか？私のパスタも中々のものでしょう。」

「……驚きました、うまいです。シガイアさんって何でもできますね。おみそれしました。」

「独身も長いと、自炊も上達しますよ。」

「おお……。」

昼をごちそうしてくれるというので行ってみたら、何とまあお手製のパスタを食べさせられた。

しかし、嘆きとも驚きともとれぬ返しをしてしまった。

だって難しいだろ、独身長いとか言われて。
なんて返せばいいんだ。

「ははは、失礼。今のは忘れて下さい。」

「あ、はい。」

適当な返事でごまかしておく。

シガイアさんは、昨晚のようなバーのマスターっぽい服装ではなく、紺のスラックスに白いワイシャツ姿。

シャツの袖を肘までめくり、ネクタイは付けていない。

「仕事を抜け出して遊びに来た」感がすごく出ている……。

「……それで、俺をここに呼んだのは……。」

「ああいえ。明日の出発の前に、いろいろとクエストの詳細を詰めようと思ひましてね。」

「シガイアさんが直接ですか？」

「中々公にしづらい内容ですから。とはいえ、ハイビスさんには伝えておりますよ？ヒ

ナタさんにも、後ほど。」

「あ、そうですか。」

ハイビスさんやヒナタさんが知っているなら、今後も楽だ。

シガイアさんだつてヒマじゃないだろうし。

いや、ここでパスタ作るぐらいには暇なのか？

……まあいいや。

「準備は進んでいますか？」

「あ、はい。旅支度自体は楽なもんですよ。その辺色々ミヤコさんがやってくくださるらしくて。」

「なるほど。費用は中央持ちですか。それはいい。」

心底嬉しそうな笑顔を見せるシガイアさん。

この人、本当に中央ギルドを目の敵にしているな。

「まあアイテムなどは、ソウジさんの例のお力を使えば簡単なものでしょう。」

「あー……………それがですね。その力、もうじき使えなくなるかもです。」

「……………本当ですか？」

「あ、はい。力をくれた……………例の方に、直接言われました。既に使えないやつもあります。」

「……………そうですか。」

いたく残念そうなシガイアさん。

そうか、俺の力を結構アテにしていたのかもしれないな、この人。

いつだかギルドで働かないかと誘われたこともあるし。

あれは多分、本気だった。

「いや、失礼しました。……………いえ、その方がいいでしょう。」

「?どういうことですか？」

「ああ、いえ。……………その力は、人が操るには余りあるもの。平穩に生きることが願うのであれば、いつそなくなつたほうがいい。」

「あ……………」

「過ぎたる力は、時に身を滅ぼす。ですから、その方がいいと。……………私も、あなたの幸せ

を願う一人ですから。」

「……ありがとうございます。」

シガイアさんは、俺の力を利用してのし上がってやろう、とか考えていると思っただけだ。

邪推、か。

……失礼なのは俺であつた。

心の中で、謝しておく。

「……この狩猟を終えても、またこの町に戻ってきてくださいますよね？」

「当たり前じゃないですか。ここは、俺の故郷なんですから。」

「……ははは。いや、失礼しました。……コーヒーでも淹れましょう。」

そう言うと、慣れた手付きで用意を始めるシガイアさん。

ガラスの容器に注がれるお湯を見ながら、のんびりと待つ。

明日出立なのに、ゆっくりしているなあ、俺。

「さて、抽出を待つ間に、狩猟の話しましょう。」

「はい。」

話はいよいよ本題へ。

布巾でカウンターを拭くと、シガイアさんが俺に向き直った。

「出発は明朝。……同行として、ワサドラギルドからはハイビスさんを出します。」

「えっ!？」

「彼女は首都出身です。地理には明るい。また、業務の面は言わずもがな文句なしです。」

また、他にも私の方で色々と手を打っておきます。」

「……ありがとうございます。」

「ヒナタさんも首都出身ですし、候補ではあつたんですがね。本人からのたつての希望もありまして。」

「な、なるほど。」

「ギルドの業務をしてもらおうと言うよりは、ソウジさんの付き人……のような立ち位置と考えていただければ。」

「はあ。」

ハイビスさんが希望したということか。

付き人……ということはマネージャーみたいな感じか？

あまり忙しくなさそうだし、ハイビスさんは帰郷できるというメリットも有るけど……どうなんだろう。

まあ知っている人がいるのは心強い。

ミヤコさんもいるけど、あつちに着いたらミヤコさんがどうするのかなんて分からないし。

シヨウコと二人だけだと、少しだけ心細かったし。

「討伐の詳細は、西支部で聞いて下さい。支部長には、文を出しておきました。」

「何から何まで、ありがとうございます。」

「いえ。……ソウジさん。」

「は、はい。」

いつになく真剣な目つきで、シガイアさんが俺を見てくる。

この人への苦手意識は、いつまで経っても消えない。

そういうものだと思って、開き直すことにする。

「……狩猟、どうかお気をつけて。ご武運を。」

「……はい。」

コト……。

湯気の立ち昇るコーヒーカップが、俺の目の前に優しく置かれた。口に運ぶと、苦味と酸味と旨味が丁度良く混じっていて。コーヒーの味の良さなど分からない俺だが、うまかった。

159 準備をしましょう。②

コーヒーを頂いてしばらく後、シガイアさんは仕事に戻っていった。

なんだかんだ、やっぱりお忙しいんだろう。

昨夜も遅くまでミヤコさんと話していたみたいだけど……何だったんだろう。

……まあいいか。偉い人たちの考えなど、気にしたところではないだろうし。

……。

コーヒーを飲み干した俺は受付に向かった。

夕方にはまだ早い時間。

もうそろそろ、クエスト帰りのハンターたちが増えてくることだろう。

その前に、一言ハイビスさんに挨拶をしておこうと思った。

「お疲れ様です。」

「あ、ソウジさん！お疲れ様です……どうされました？」

「いや、特に用事があるわけでは無いんですけど……そのほら、明日からお世話になりますので、挨拶を。」

「あ……そ、そうでしたか。ちよ、ちよっとお待ち下さいね！」

受付に広げられた書類をサツと片付けると、ハイビスさんが姿勢を正す。

……座っている横、作業用の小さい机の下に、お菓子の袋が見えた。

隠れて食べているのかな。

口の周りを何となく見たが、特に汚れてはいないご様子。

良かった。以前は食べかすが残っていて、指摘するかどうか迷ってしまったから。

こういう抜けているところが多々あるのに、仕事はきっちりとされるのだから、人間とはわからないものである。

人間分析の真似事を一瞬で終えた俺は、ハイビスさんの向かい、受付の椅子に座るところにした。

「お待たせしました、ソウジさん。」

「いえ、ありがとうございます。……とはいっても、本当に挨拶だけなんですけど。」

「はい、シガイアから聞きました。明日からどうぞ、よろしく願います！」

「はい、よろしくお願いいたします。……冬山の時依頼ですね、こういうの。」

「ふふ……楽しかったです、あの冬山の出張。」

「はい。」

冬山。

冬季になるとモンスターが減り、ハンターたちも少なくなるワサドラ。

その間、俺を鍛え上げるためにセツヒトさんが考えたのが、冬山への遠征だった。

ギルドの業務も兼ねて、ハイビスさんも同行して、何とも奇妙な三人旅になったが……。

うん、今思い返せば、結構楽しかったと思う。

「あんな雪景色、中々拝めませんからね。」

「俺も初めてでしたよ、あんなの。明日から向かう首都は、冬はどうなんですか？」

「雪なんて全く降りませんよ？一年中暖かくて、冬はこちらよりもよっぽど過ごしやすいんです。……モンスターの数も、それなりですけど。」

「あー、なるほど。」

厳しい気候に適したモンスターもいれば、温暖湿潤な気候を好むモンスターもいるか。

というか、後者の方が普通か。

なんであの雪山、冬にモンスターが増えるのか……その辺りの疑問は付きないけど。

「私とヒナタは同郷……ザキミーユの西側出身なんですよ？首都の中では、治安は良いほうです。」

「へえ。じゃあ他の場所は？」

「首都と言っても広くて、私も全部は分かりませんが……中央はとにかく厳かな建物が立ち並ぶ都会ですね。ワサドラの比じゃありませんよ？」

「おお、すごいな。見たい。」

「ふふ、時間があれば、私が案内します。北部は、農産物品を扱う大きな市場があります。南部は更に南の港町ニナンチと首都を運河で結ぶ場所ですから、商業系の建物が多いです。」

「じゃあ東部は？」

「西と同じで住宅街が広がってます。……良くも悪くも、大雑把な人が多くて……あ、あまりおすすすめは……。」

「へえ……。」

首都の話は色々聞いたことが合ったが、こういう地理的な中身まで聞いたのは初めてだった。

ちよつと面白い。

街の成り立ちとか昔の道とか、そういうのは大好物である。

「いいですね、そういう話。あちらへの道すがら、もつと聞かせてほしいです。」

「は、はい。私で良ければ、いくらでも！」

やけに張り切っているハイビスさんであった。

「……ソウジさん。」

「は……。」

明日の集合時間や持ち物について話をしていると、ハイビスさんが少しだけ真面目な顔をした。

名前を呼ばれ、返事をする。

「シガイアから聞きました。古龍の討伐……なんですよね。」

「あ、はい。」

「ど、どうしてそんなに落ち着いていらっしやるのかなー、と。思いまして……。」

「ああ、それは……。」

何でだろう。

今日一日、俺は非常にリラックスして過ごしている。

覚悟は変わらない。

むしろ色んな人に会いながら、だんだんとやる気に満ちてきている。

……女神様のおかげなのかも。

朝、やたら頭がスッキリしていたし。

「……一生懸命やるだけ、ですから。」

「だ、だけって……。」

「相手は古龍。もしかしたら死ぬかも知れません。」

「……………」
「でもまあ、やるしかないなら、やってやりましょうという気持ちというか。約束なんです、ある人との。精一杯生きるって。……だからですかね。落ち着いています。不思議と。」

女神様とはもう会えないけど。

約束は変わらない。

俺は、精一杯生き続ける。

死ぬまで。

「…………ソウジさん、この席、覚えていますか？」

「え？」

「…………ソウジさんが初めてギルドに来た時の席なんですよ？」

「ああ…………。」

思い返す。

懐かしいなあ。

……マジでなんにも知らなかったな、俺。

とりあえずモンスター倒したろ！ぐらいの気持ちだったっけ。

「……俺あの時、右も左もわからなかったです。」

「はい。それはもう、私が鮮明に覚えております。前代未聞でしたから。」

「うっ……。」

「ふふふっ……でも、予感したんですよ？」

「えっ？」

「この人を、ここで逃しちゃいけないって。絶対、大物になる気がするって。直感で、こ
う、感じたんです。」

「そ、そうだったんですね。」

記憶では、俺が何も知らないでくのぼうだと判明してからは、何かちよつぱり冷た
かったように覚えているのだが……。

「それが今や、ギルドから古龍討伐を依頼されるまでになって。……私の目は正しかっ
たんですね。」

「いや、倒せるか分かりませんが……」
「……た、倒します！」

ハイビスさんが、大きな声を出した。

当然その声はギルド中に響き、何があつたのかと周囲の視線がこちらに集まる。

しかし、ハイビスさんは堂々と続けた。

「ソウジさんは、か、必ず！この大陸中に名を馳せるような、立派なハンターになるんですー！」

「ハイビスさん。」

「わ、私が担当するソウジさんは、絶対に！」

「……………」

冬山でも言われたこと。

思い出した。

この人は、いつでも俺を応援してくれる。

「で、ですから!」

「ハイビスさん。」

「は、はい!」

「ありがとうございます。嬉しいです。」

「あ……。」

「ハイビスさんがそうやって後押ししてくれるだけで……やる気が漲ってきましたよ。」
「……………いえ! お力になれたなら、私も嬉しいです。」

笑顔で応えるハイビスさん。

眩しいなあ。

だけど。

「な、なので……その、大声は控えた方が……。」

「えっ? ……あ……。」

自分でも気づかなかつたのだろう。

大きな声を出してしまったことが今更恥ずかしくなったのか、ハイビスさんは顔を

真つ赤にして俯いた。

あらら。

「す、すみません……。。」

「……………ははははは!!」

「ちよ、ちよっ! ソウジさん! 笑わないでくださいますか!？」

「す、すいません、つい。……ははははは! だ、ダメだ!」

「ソウジさん! ……もうっ!」

ハイビスさんの気持ち嬉しくて。

抜けているハイビスさんはやっぱりいつも通りで。

つい笑ってしまった。

その後、キヨドリまくったハイビスさんが自分のお菓子を床に散乱させ。

涙混じりで謝りながら、俺と掃除を行うという珍事が発生。

また俺が笑ってしまったものだから、ハイビスさんはすっかりむくれてしまった。

明日からは、長い道のり。
折を見て、謝ろう……。

* * * * *

ギルドを後にした俺は、そのまま真つすぐ宿に帰った。

夕飯をとつて、部屋でブーツとする。

日課のトレーニングも今日は軽め。

シヨウコは「ご主人様がいなくなつてから大変でしたよ！」と愚痴を言いながら、銭湯に向かつていった。

一体オスズに何をされたのか。

気になったが、聞かないことにした。

ちよつと嬉しそうだったし。

ベッドに腰掛け、すっかり暗くなつた窓の外を見る。

向かいにある建物の明かりが灯つた。

「……………」。

静かな時間。

しばらくは、こうやってゆつくりとワサドラで過ごすこともできなくなる。
外からは、野太い笑い声。

ガヤガヤとした喧騒、今日もそこかしこで飲み会が行われているのだろう。
こういう平和な夜を、いつまでも迎えられるように。

ハンターとして、俺は頑張りたい。

決意は固まっている。

だがまあ……今はのんびりする……か……。

「……………!?!」

衝撃が走った。

声にも出せず、ただただ驚く。

なぜなら、窓の枠、その下。

いきなり手が出てきたからである。

(えっ!?人!?)

思わず近寄ると、その手の持ち主が分かった。

……何てアホなことをしてるんだ、この人は。

「セツヒトさん……何してるんですか、そんなところで。」

「せつちゃんだって……よーい……しよつと!!」

「うわ!!」

窓枠にかかった手はセツヒトさんであった。

窓を開けるなり、身軽にヒョイツと部屋の中に入ってくる。

「……………(こ)こ、二階ですよ?」

「知ってるよー。だからジャンプしてきてみましたー。」

「何故そこまでして……。」

「んー……夜這いー？」

「ぶふお!!」

夜這いで。

こつそり侵入しようとする辺り、まあ確かに泥棒か夜這いっぽいけども。俺が思わず吹き出したものだから、セツヒトさんが顔を顰める。

「わー！きちやなーい！冗談だよー。」

「分かりにくいですって！マジかと思いましたよー！」

「まあでも半分は……そのつもり？」

「何故に疑問形！そして俺は貞操の危機!?!」

「はははー、冗談だよー。……その、お話をしに、ねー？来たんだー。」

「は、はあ……。」

備え付けの椅子に腰掛けたセツヒトさん。

俺はそのままベッドに座る。

「聞いたよー？明日から、行くなってー？」

「あ、はい。そうなんです。……って、誰から聞いたんですか？」

「シガイアさん。」

「あ、なるほど。」

相変わらず主語も間も抜けた話をするセツヒトさん。

付き合っても長いから、それなりに会話は成り立つけど。

「……しかもハイビスちゃんとかと一緒になんでしょー？」

「あ、そうです。何でも、ワサドラギルド側からも人間を出す、って言ってました。シガイアさんが。」

「へえー……ふーん。」

「……な、何でしょうか。」

シガイアさんがセツヒトさんに伝えたということか。

すると、セツヒトさんが素っ頓狂なことを言い出した。

「……私は残るけどー……ソウジ、その、寂しいー？」
「へっ？」

寂しいって。

どういうこと？

「……そりや、まあ。セツヒトさんとはしばらく会えなくなりますけど。」

「そーそー。だからー……さ、寂しいー？」

「……もしかして付いてきたい……とかですか？」

「な、何を言うのー？このセツヒトさんがー……そんなこと言うわけ無いでしょー？」

「は、はあ。」

いや、だって。

あからさまにモジモジしてるし。

この人がモジモジとか、明日は雨か？

……ついてきたい……のかな。

「いや、危険な狩猟になりますし。」

「いやいやー、私だよね？この天下のセツヒトさんだよね？古龍なんて、ボッコボコにするってー。」

「……………」

プロボクサーのシャドーボクシングのように、パンチを繰り出すセツヒトさん。そりゃ、セツヒトさんが付いてこられるなら百人力だ。ただど…………。

「……………ふっ！」

「!!?」

ヒュン!!

セツヒトさんが繰り出す拳。

その隙間を縫うように。

俺はセツヒトさんの左肩にグーパンチをかました。

「っ…………!!」

「……………やっぱり。ダメじゃないですか。」

「……………うー…………ソウジにはわかるかー。」

「そりゃ分かりますよ。…………見れば。」

俺が出した右拳。

剣の速度に比べれば何てこともない、子ども騙しのパンチ。

左手でそれをいなし、俺のがら空きの左半身に右を返せばそれでよし。

だが、セツヒトさんはできなかつた。

返せなかつた。

右手で左肩を庇い、防ぐような動き。

シャドーボクシングの様を見ていたらわかる。

明らかに、良くはない。

精細を欠いた、何かを気にしているフットワーク。

…………先のラージャン戦で痛めた左腕は、良くなっていない。

そう判断して、試してみたけど。

「……俺を庇った、傷ですね。」

「うー……そうなんだけどー。で、でもねー？右手だつて戦え——」

「——絶対に、ダメです。」

「……………」

「俺の前で傷つくのは……もう、させたくない。」

心情として。

セツヒトさんが傷つく姿など、もう見たくもない。

それに、現実として。

俺の、力も入れていない簡単な攻撃をいなせないようなセツヒトさんは。

……多分、戦えない。

「……………うん……そうだよねー……………」

「……………」

「いやー、流石に古龍はねー。ちよつちー……キツイか。」

「ちよつとではなく、キツイですよ。……というか、俺が気づいてなかったら付いてくる

つもりだったんですか？」

「……………うん。」

「いや、それは——」

「——ソウジが、好きだから。」

「っ!!」

思わぬ返事。

ドキツとする。

「……………ただ、それだけ。…………ソウジ、目が、本気だから。」

「……………。」

「考えたくないんだよー？でもさー…………そんな目をして、消えてった奴なんて、たくさん見てきてからさー…………。」

「……………。」

「ふ、不安…………なんだよー。うん。本当に…………。」

…………俺が言ったことだ。

セツヒトさんの想いに対して、応えた。

「大切な人を失う悲しみは、味わいたくない」と。
でも。

今セツヒトさんは、そういう感情にとらわれているわけ。
だから。

「ついていって、少しでも、ソウジが生きていられるならさー……そりゃー、い、行きたいよねー。」

「……………セツヒトさん。」

「……………」

セツヒトさんの想いは、とても良くわかる。

俺のことを、好きだと言ってくれた。

何てありがたいことだろう。

……返答は、もちろん。

「……ダメです。」

「えー！?!なんでよー!!」

「いや、当たり前ですよ!怪我したままの人を連れて行くとか、頭おかしいやつですつて!」

「で、でもさー!ここは『わかりました、愛しの人よー!』とか言つて抱きしめるところでしょー!?!」

「それはもつと頭おかしいですよ!!」

連れて行けるわけ無い。

アホか。

「その、セツヒトさん……だ、大事だからこそですね、連れて行くわけにはいきません。」

「う……………」

「俺、絶対に帰ってきます。……約束します。だから、無理はしないで下さい。」

「……………む、むー。」

「……………」

「……………わ、わかったよ……………もう。」

ようやく折れるセツヒトさん。

説得……………できたのか？

「……………もー！ソウジー！ロマンのかけらもないよねー！」

「いや、めっちゃ現実考えなきゃいけない場面ですよね!？」

「それはわかるけどさー？こー、なんていうのー？ほら、ロマンティックにー？」

「……………はいはい。」

「あー!!適当になってきた!!さいてー!!」

ギャーギャー言われても。

お互い様だけど、俺はセツヒトさんの死なんて見たくもない。

そりゃ、そつちもだろうけど。

何が何でも、現実を見させてもらおう。

「……絶対に、帰ります。俺。絶対に。」

「……絶対に約束、だよー？」

「…………はい。」

「…………ま、まあ？よーし。」

良しとか何とか言うけども。

……変な所でガンコなセツヒトさんが折れたのは、やっぱり自分の状態を分かっているからだろう。

この人は超の付く実力者なわけで。

自分の状態なんて、とっくのとうに分かりきっていたはずだ。

「……腕、相当悪いんですよね？」

「…………ま。まあ、ねー。」

「やっぱり……。」

俺をかばってできた傷。

あの獄狼竜を相手にしてできた古傷をえぐったわけだ。

未だに痛むのは、仕方がないし、何よりも申し訳ない。

「……………」

「……………」

静寂。

お互いに黙り込む。

聞こえるのは、外の喧騒。連日のお祭り騒ぎは今夜も続いている。

なのに、俺とセツヒトさんは静かなまま。

変な時間が流れる。

……………な、何か、お互いにお互いを思いやっていたからだろうか……………ちよつと気恥ずかしい……………。

「ま、まあさー。」

「……………ほ。」

そんな間を嫌ってか、セツヒトさんが静寂を破った。

「ソウジのためにできた傷なら……まあ、いいよねー。」

「っ!!」

「……お?今のは効いたー?」

「効いてません。」

「嘘だよー、ソウジ顔赤いもーん。」

「赤くありません!!」

嘘である。

……今のは効いた。

今日はなんだか妙にしおらしいから……ギャップにやられ気味だったところを、突然のストレート。

ちくしよう。

顔が熱い。

「と、とにかくですね……その、ご心配は嬉しいです。でも、負けるつもりなんか毛頭な

いのです。」

「……うん。」

「あちらにも屈強な方々がいるという話ですし、俺一人でやるわけでも無さそうですし。

……何とかお力添えをして、古龍を討伐します。」

「えー。そこは『俺一人に任せとけ!!』とか言うところだよー?」

「アホですか。言えませんよ。」

それこそ、セツヒトさんクラスの猛者だっているかもわからない。

いや、知らんけど。

「……ソウジレベルの奴なんて、そうそういないと思うよー?」

「いや、いますよ。セツヒトさんとか教官とか……。」

「私らクラスがゴロゴロいたらー……そんなにこの業界、大変じゃないってー。」

「………そ、それはそうですけど。」

確かに……教官が10人とかいるんだったら、この世界にモンスターはいなそうではある。

教官10人……。

想像してしまった……暑苦しい。

そんな苦々しい顔をした俺を、セツヒトさんが下から覗き込んできた。
長い銀髪が、横に垂れている。

「……ソウジ―?」

「はい?」

「……………約束、だよ―?」

「……………はいっ。」

「あーでも……約束しすぎると帰って来られないかも……。」

「どないやねん。」

今更である。

死亡フラグってやつか?

そんなもの、今日はもう立ちまくりである。

今日は色んな人と話をしまくったわけ。

後ろに手を組んだセツヒトさんが、なんか急にモジモジしました。
珍しい姿を、今日はよく見る日である。

「……………じゃ、じゃあさー。」

「は、はい。」

「約束ついでにキスなんて…………。」

「しません。」

「え……………」

「だってもうそれ完全に死ぬやつですよ!？」

「もういいじゃーん!むしろ今しかないじゃーん!!」

「殺す気満々!？」

その後、子どもが駄々を捏ねるかのように喚くセツヒトさんをなだめつつ、丁重にお
帰りいただいた。

ちゃんと宿の入口から。

「いくじなし。」とかなんとか言われたが、それはそれ、これはこれである。

……これを眺めているのか知らんが、神さんたちは今頃「ソウジる」とか言ってるんだらう。

……………。

……知るかボケえ!!

こちらとら死ぬか生きるか瀬戸際なんじゃあ!!

と、開き直すことにした。

へタレ、ここに極まれり、である。

更に、この一部始終はシヨウコにバツチリ聞かれていた。

「ご主人様はやつぱり鬼畜や……。」とかなんとか言っていた。

ガン無視だガン無視。

そのまま、俺は不貞寝。

……何とも落ち着かない、出立前夜となった。

160ザキミーユシテイに入りましょう。

ワサドラを出立して五日目の昼。

俺達一行は、無事に首都ザキミーユシテイにたどり着いた。

シテイ。

街。

町ではなく、街。

……というか、もうバツチリ都。

首都、である。

「うお……人しかいない……。」

「ウチも初めて来ましたが……あの高い建物!!あれやつぱり凄いです!!」

「ふふ、シヨウコちゃん、あれは時計塔よ。」

「と、時計塔!?!」

シヨウコが驚くのも無理はない。

この世界ではなかなかお目にかかれない、高層の建物。それが幾重にも続く街並み。

その中でも一際高い建物が、その時計塔であつた。

前の世界のどこぞにあつた、教会風の建物。

細長い直方体が垂直に立ち、その先は方錐形。

四面にはそれぞれ時計。

どこから見ても時間がわかるようになっていたのか。

……おお、噴水とか久々に見たぞ。

この世界の建築技術の水準的に結構難しい技術なんじゃないだろうか。

首都ってすごいな……。

「あの時計塔の下に学院があつて、私とヒナタの母校なんです。」

「あ、あそこか。」

「はい。あそこから縁あつて、ワサドラの受付嬢に就職したんですよ？」

「はああ……すごいわあ。ウチ、驚いてばかりや……。」

開いた口が塞がらないという感じのシヨウゴ。

遠目の丘から見た首都の景色は圧巻だったけど……まさかこんなにこの時計塔がでかいとは。

「まあ、こんなすごい街並みは中央ばかりなんですけどね。」

「そうなのか？」

「はい！他は、多分ワサドラと同じような感じですよ？東西南北、それぞれに市が立っていて、ギルドの支部があります。それぞれに特徴があつて……」

鼻息荒く説明を続けるハイビスさん。

故郷に帰り、地元を案内する。

饒舌にもなるか。

しかし、ワサドラを出るときは、こんなに榮えているとは思わなかった。
いい意味で、とても驚いている。

* * * * *

ワサドラを出る朝は、それはもう目まぐるしかった。

まあその前の日から色々あって、俺自身落ち着いてなかったというのもあるが。

まずはしつかり、ドールお手製の朝ごはんを頂く。

しばらくは食べられないので、ゆっくり味わって食べたかった。

……だが、そうは問屋が卸さない。

そう。

暴走特急ミヤコ号がいつものごとくハッスルしたのである。

「ドールが愛おしくてやっぱり行きたくない」と駄々をこね始め。

始めはちよつと嬉しそうにしていたドールも、段々とボルテージを上げる。

そして、そこに気付かないのがミヤコ号の暴走特急たる由縁。

大噴火になるまで、そう時間はかからなかった。

「お母さん……………」

「あ、あら？ドール……………ちゃん？」

「いい加減にしないと……!!」

「わ、わわわ!ご、ごめんねドール!そ、ソウジくん!助けてえ!!」

ムニユ。

おお。

ナイス感触。

右腕に素敵な柔らかいサプライズ。

「……………」

「……………」ど、ドールちゃん?」

「さつさと行きなさい!!」

「は、はいいい!!じゃ、じゃあソウジくん達!わ、私先に行くわね!!」

「は、はい。」

ピュー。

………。

嵐が去った……。

「ドールちゃん、どんどんご飯うまくなるなあ……おかわり！」

「あ！私ももらいます！」

ハンズとシヨウコは、いつものごとく飯をかつ食らう。

ミヤコさんの引き起こすこんな朝は日常茶飯事。

……慣れたな。

「……ドール、ホエールさん、そろそろ行きます。」

「ほっほっ、頑張つてきなさい。シヨウコ殿も、どうかご武運を。」

「はいっ！」

「シヨウコちゃん！ソウジさん！がんばってくださいね！」

「ああ、ハンズも気をつけて帰れよ。」

「はい！」

パタパタ。

ハンズが尻尾を振る幻覚が見える。

犬……。

「……ソウジさん。」

「ん？」

「……はい。」

ズイツ。

俺の前に立ち止まるドール。

……いつものヤツですね。分かります。

「そ、それでは失礼して。」

「うん。」

「……。」

ナデナデ。

「……………んっ。」

「よ、よし。じゃあ——」

「あ、まだ。」

「えっ!? あ、ああ、わかった。」

「ん…………。」

ナデナデ。

……………な、なんだ!?

今日はやけに長い!!

「……………ん。」

「あ、はい。」

そろそろもう良いかというところで、ドールが離れる。

………何かタイミング的に俺が名残惜しそうにしているようになってしまった。
恥ずい……。

そのままドールはシヨウコのところへ。

「シヨウコちゃん……気を付けてね。」

「うん！まかしときー！」

「うん。………やる？」

「えっ!?ええの!!？」

「うん。いいの。シヨウコちゃんなら。」

「………いただきます!!」

シヨウコもドールを撫で始めた。

いただきますって、おい。

足をかがめて身長に合わせるドールが、非常に可愛らしい。

あれ？前は俺専用とか言って……。

い、いや！何を言ってるんだ俺は！

べ、別にいいんだぞ!?

あ、あれ!?なんで俺悔しがつてんの!?

「……………はあ、ごちそうさまでした!ドールちゃん!」

「う、うん。いっぱい撫でられた。」

「……………」

よし、落ち着け、俺。

お前中身おっさんだろ?何も慌てることはない。

「…………ご主人様、なんで悔しがつとるんですか?」

「何を言いますかシヨウコさんそんなことはありません。」

「めつちや早口!…………ど、ドールちゃん!ご主人様が珍しく嫉妬しとるで!」

「ば、ばかやろう!さあ!行くぞ!!」

「ああ!そんな引つ張つてムキにならんと!」

恥ずかしくてとつとと出発。

「じゃあドール！ホエールさん！ハンズ！行ってきます!!」
「気をつけてね！」

慌ただしく宿を出た。

長く頭を撫でてたから、もう結構な時間である。
早足でガーグア者乗り場に向かった。

……………。

車乗り場では、結構な人で賑わっていた。

数あるガーグア車、どれも似たり寄ったりの外観。

だが、俺たちは一目で目的の車を見つけてしまった。

「うん！今日からよろしくね!!ガーちゃん！グーちゃん！」

「ガー。」

「グー。」

「……………」

2頭のアホっぽい顔をしたガーグア。

その頭を撫でる女性。

しかもギルドの受付嬢の制服を着ている。

こんなことをする人なんて、少なくとも俺は一人しか知らない。

「……………お待たせしました、ハイビスさん。」

「あーおはようございます、ソウジさん、シヨウコちゃん。」

「おはようございますー！」

シヨウコが元気よく挨拶をする。

快活な様子が伝わってくる、シヨウコらしい姿だ。

「すみません、出るのに手間取りまして。お待たせしました。」

「いえ、私も今、来たところです。ガーちゃん和グーちゃんに会うのは久々でしたので、ついで。」

いつもの笑顔の3割増しで、ご機嫌なハイビスさん。
この方の愛は留まるところを知らない。

「お、ソウジさん！来たか！」

「あ、おじさん。今回もよろしくお願いいたします。」

「ははは！相変わらず礼儀正しいな！ああ、よろしくな！」

いつものおじさんも登場。

荷台の中を整理していたのか、太い二の腕を腕まくりしている。

「今回は遠出だからよ！久々に腕が鳴るぜい！」

「はい。本当に、頼りにしています。おじさんにはいつも助けられてばかりです。」

「ははははは！そうお世辞まで言われちゃな！張り切っちゃまうよ！」

お世辞とおじさんは言うが、本音だ。

俺のこの方への尊敬ゲージは常にマックスである。

俺の大切な狩猟には、いつも付いてきてもらっている気がする。

今回も運び役として、俺がシガイアさんにゴリ押しした。

シガイアさんも「あの方なら。我々も非常に信頼しております。」と二つ返事。

一つの仕事を極めることに対して、俺は尊敬の念を抱かずには居られない。

「あー、ソウジさん。今回のことは、何となく聞いている。」

「……はい。」

「……まあ、モンスターが相当凄えやつてことだから、コイツらがどこまでできるか分からんがな！精一杯やらせてもらおうぜ！」

「……………はいっ!!」

いつも笑顔のおじさんの力強い言葉。

元気をもらえる。

かっこいいなあ……。

「ハイビスさん……ご主人様ってやっぱり……。」

「ええ……それは私も危惧してるのよ……あり得るわよね……。」

「ハンザさんの件は、ウチも結構心配してて……。」

「分かるわ……で、でも、な、何なの、この気持ち……いつそのまま突き進んでほしいような……期待しちやいけないんだけど……。」

「き、期待しちやあかんで！ハイビスさん！そ、そこは行つちやあかん世界な気がしますから！戻ってきて！」

「はっ！……いけない！」

「……ウチら負けませんよ！」

「そ、そうね！」

シヨウコとハイビスさんが何やらアホなことを話している気がした。

スルーしておこう。

二人から何か、女神様発の変態神達の雰囲気を感じる……。

「あらー！ソウジくん達！来たのね！」

「ミヤコさん。」

「……ドールは何か言ってたかしら？」

「は、はい。頑張ってきて、とのことでした。」

「…………ふふ、あの子も素直じゃないからね！よし、お母さん頑張るわよー!!」

…………どうやらミヤコさんの中で、朝の騒動は無かった事になっている様子。
こちらもおスルーしておこう。

家族の問題は人それぞれであるからして。

……………。

そこからテントでの宿泊をはさみつつ、俺たちはかなり急ぎ目で首都に向かった。

ガーグー達の頑張りもあり、車はどんどん進んでいく。

「首都とワサドラを結ぶ道は、この大陸の輸送の要とも言えます。チダイ村を挟んでの
一大販路で、公的資金だけでなく、豪商や豪農の私的な投資もありますから。」

「なるほど…………道のそこかしこにある目印は…………。」

「一里塚…………ですね。大体4kmごとに建てられています。モンスター避けの強固な柵
や香を設置しているのは、我々ハンターズギルドなんですよ?」

「なるほど…………。」

道行く途中、ちよいちよい入るハイビスさんの補足。
これ系の話は大好きなため、俺も熱中している。
楽しいんだよなあ、こういう地理的な話。

「はあ……シヨウコちゃんって柔らかいのねえ……。」

「うわあ……ミヤコさんの肩、こってますねえ……。」

「……年齢には勝てないのよ……。」

「……何か、すみません。」

「謝られると辛い!!」

対してミヤコさんとシヨウコは超リラックスマード。

シヨウコの小さい膝に頭を乗せてゴロゴロするミヤコさん。

この人本当に偉い人なのかな……。

二人とも、ハイビスさんの話はあまり興味はそそられないのか。

……常識レベルか。そりやそうだ。

「あつ……す、すみませんソウジさん。私ばかり話してしまつて……。」
「えっ? いやいや! いいんですよ! 俺ほら、その辺の話、全く知らないですし! それに楽しんでますよ!」

「ほ、本当ですか? ご迷惑でしたら……。」

「迷惑なんて。好きなんです、こういう話。」

「す、好き!」

「あ、はい……そうです。」

「……す、すみません。」

テンションがやたら高めのハイビスさん。

緊張感が全員ともあまり無いのはいかがなものか。

……まあいいか。今気張つてもしょうがない。

「ハイビスさん、そういえば。」

「はい! なんです!」

「ハイビスさんのご実家つて、帰られるんですか?」

「……えっ? 実家ですか?」

「は、はい。」

何か変なことを聞いただろうか。

故郷に帰るわけだし、至極自然な質問だと思うのだが。

「ま、まあ……顔を出す時間が取れば……。」

「は、はあ。」

なんとも微妙な返事。

……あまり仲良くないのかな？

深く聞くのはやめておくか。

「ソウジクーん。シヨウコちゃんマツサージ上手よく……あー、そこそこ。」

「ふんっ！……わあ、ここも固い……ふっ!!」

「ああっ！いいわ！そこそこ!!」

「何してるんすか、ミヤコさん。」

シヨウコにグリグリと肩を揉まれ、変な声を上げるミヤコさん。
シヨウコもやたらと張り切っている。

「何って、マツサージよ……ああ……光が見えるわ……。」

「ご主人様もハイビスさんも、次やってあげますね！ウチ、得意みたいです！」

「いや、多分ミヤコさんが肩こり過ぎなだけじゃ……。」

「あつ私やつてもらいたいかも……。」

「じゃあハイビスさん！こつちへどうぞ！」

いそいそとシヨウコの元へ向かうハイビスさん。

そんなに肩がこっているのか。

まあ完全なデスクワークだからなあ、受付嬢って。

「あ……あああああいいいい……。」

「うわっ…………ミヤコさん以上や。」

「はあああ……気持ちいいですねえ……。」

恍惚の表情を浮かべるハイビスさん。

……若いのに、大変なんだなあ……。

「ハイビスちゃん……どうやらあなた、慢性的肩こりさんね！」

「は、はい、総務長。私、肩こりが酷くてです……あ……あ……。」

「ほら、ハイビスさん。動かんと、じつとじつとつてください。」

「ああ……ごめんねシヨウコちゃん……ああ、ここは天国……。」

いや、これから向かうのは天国どころか古龍なんだが。

ちなみに、俺とおじさんもやってもらったが。

「……………ご主人様の肩、柔らかくて面白いです。」

「なぜ俺は責められてるんだ？」

「おじさんの肩は大っきくてもみにくいんです。終わり。」

「も、もう終わりか!?! 何だ、せつかくシヨウコの嬢ちゃんが肩揉んでくれるって張り切ってたんだがなあ。」

俺とおじさんはもみ甲斐が無いと、シヨウコは早々にやめてしまった。いいことなんだが、気分は複雑であった。

何とも気の抜けた時間であった。

………。

2日目の夕方にはチダイ村にたどり着いた。

そして、明朝にはすぐに出発することに。

何故かって、俺があまりこの村にいたく無いからである。

この村の雰囲気は全くもって問題ではない。

むしろ長閑な農村。

そこかしこに商店や宿は点在しているが、不思議と落ち着くところである。広すぎる農地こそ前世の日本とは対極的だが、村の作りは素朴で愛着が湧く。

緑も多いし。

だがちよいと苦手な方が、ここには居るのだ。

「ソウジさん、やっぱり、わたくしの屋敷でお休みになられますか？」

「いやいや、せっかく取つていただいた宿ですので！こちらで！」

「そうですか……ふふ、ソウジさんはやっぱり謙虚な方ですね。素敵ですわ。」

「あ、ありがとうございます……。」

苦手な方。

そう、この一大農産地を取り仕切る女傑。

イパスさんである。

この方、見た目はものすごく女性らしく、農村の方とはとても思えなかった。

初対面では全くもって気づけなかった。

だが、中身はもう完全に治める側の人。

シガイアさんとか、その辺の種類の人間であった。

「お仲間さん達も、この宿でよろしかったでしょうか……何か不都合がございましたら、すぐにおっしゃってくださいね。使用人をここに置いておきますので。」

「ええ!? いや、そこまでしていただかなくても。」

「……大変な狩猟を目の前にされているのですから。このぐらい、させてください。」

ニコツ。

綺麗なお顔。フワツとした深い茶色の髪。

丸刈メガネの奥にある、大きな青い瞳。

さぞおモチになるであろう。

その笑顔は破壊力抜群である。

だが俺はもう警戒心の塊。その笑顔さえちよつと怖い。

「それでは、短い間ですがゆつくりとお休みください。」

「は、はい。おやすみなさい。」

「はい。失礼いたします。」

スタスタスタ……。

宿から去るイパスさん。

あー緊張した……。

ガチャ。

近くの一室から顔を出す一人の人物。
御者のおじさんであつた。

「い、行つたか？」

「行きましたよ……ひどいですよ、俺一人置いてみんな……。」

「いや、すまねえな。妙に警戒しちまつてよ……。」

「まあ……そうですねえ……。」

村に着いたら早々に屋敷の人間だという方々に歓迎され。
貸切の宿に向かい。

とても美味しい夕食をいただき。

なんならガーグア達の面倒も見てもらい。

全員がもう完全に警戒心MAXになつてしまった。

「……俺の部屋にはよ……これがあつたわ。」

「……酒ですか。」

「これ高いやつだぞ……飲んでいいのか？」

随分と年季の入ったラベルが貼られた酒瓶。

まだ開けられていないそれは、セツヒトさんあたりが見たら泣いて喜びそうな逸品に見えた。

「まあ俺としちゃ、ガ―グアたちを見てくれるし餌代もいらねえって言うし酒もくれるし……ああ、アイツらの名前から好物の餌までばっちりだったなあ……。」

「……明日朝、すぐに出立しましょう。」

「おう。そうすつか。」

その酒、何か入ってたりして……。

その後、寝付けない俺を気遣ってくれたおじさんが「飲むか？」と誘ってくれた。おじさんとちよつとばかりの酒盛りをしてから寝た。

単純なる厚意でこのような歓待を受けたと純粹に思えない自分がいる。

次の日の朝には、イパスさんに深々と礼をして、すぐに出立した。

「お帰りをお待ちしておりますわ。」という、ありがたいお言葉を頂きながら。

「はあ……落ち着かん宿でした……マタタビ団子ようさん食べられて嬉しかったですけど……。」

「猫グッズだらけのお部屋で、なかなか楽しめました……。」

シヨウコもハイビスさんも、どうやら手厚い歓待を受けた様子。

……まあ、歓迎してくれたことは大変にありがたい。

警戒しすぎか、俺。

「あれ？私のお部屋には何もなかったわよ？」

ミヤコさんだけは、なぜかそういうわけでは無かったようであった。

* * * * *

その後、ミヤコさんの若干の不機嫌を宥めつつ。

ようやく5日目の昼、ザキミーユシティにたどり着いたという次第である。

ミヤコさんとハイビスさんの話では、俺たちはこのまま西支部とやりに直行。

そこで今後のことについて話し合われるということであった。

ちなみに、車には乗ったままである。

街の大通りは、基本的に車道と歩道が別れている。

信号や横断歩道といったものは無かったが、ここまで整備された道を見たのはこの世界では初めてであった。

おじさんもそのまま、俺たちを運んでくれている。

「おじさん、そこを右に行ってもらえますか？」

「おうよ、ハイビスの嬢ちゃん!……あ、あれか!」

「はい。あれが、西支部になります。」

ハイビスさんの指差す先。

周囲の住居よりは少し大きい程度の、3階建ての建物が見えた。

色の基調は白。そして木の色の茶。

基礎こそはワサドラのような石造りだが、1階の中段辺りから、壁は真っ白な漆喰で

塗り固められている。

その白を支えるように、交差した柱が見える。

窓枠や屋根は木造、基礎は石、外壁は漆喰。

住居の建ち並ぶ周囲を邪魔しない、中々におしやれな外観である。

ワサドラは主張激しいガツツリ石造りだからなあ。

荘厳というか厳ついというか。

見慣れたし、愛着も湧いてきたけど。

「裏手に車を止められますので、おじさん、そこに行きましょう。」

「おうよ！安全運転で行くぜ！」

「ガア。」

「グア。」

ゆっくりとした歩みを進めるガーグア達。

5日間走りっぱなしだったからなあ……ゆっくり休めればいいけど。

ザキミーユギルド西支部。

もう「西支部」と一言で済ますことが多いらしい。

その裏手、車を停める大きなスペースの更に向こうには、大きい川が流れていた。

街の北部から入って、中心街のやたら大きな橋を渡ったときは感動したが……運河なのだろうか。

そういえば細かい水路もたくさんある。水運も発達してるんだな。

「北西から南東に街を横切る、ヨード川です。このま南のナニンチと繋がっているんですよ?」

「すごいな、こういうのはワサドラには無い。」

「はい。夏は川のおかげで涼しいですね。私も小さい頃はよく泳ぎに来ていました!」

ハイビスさんが運河について補足をしてくれる。

なるほど、こうやって別の大陸側からの輸出入の物品を運んでいるのか。

栄えるわけである。

経済、政治の中心である首都ザキミーユシテイ。

聞けば聞くほど、ちょっと面白いなと思った。

* * * * *

コンコン。

「失礼します。」

ハイビスさんとミヤコさんに連れられ、俺たちはとある一室に向かった。ギルドマスターの部屋か。支部ごとにいるのかな。

西支部の内部は、至って普通だった。

外観からさぞかしおしよれな風を予想していたが、やはりハンターズギルド。

ごった返してはいなかったが、ハンターたちの出で立ちがワサドラと変わらない。

案内板や受付台も、ワサドラと造りが似ている。

見たことがあるような無いようなハンターもいたため、ちよつと落ち着くなあ。

まあ入った時はジロジロと見られたため、あまりいい気分ではしなかったけど。

気にしないことした。

『おう。入ってくれ。』

「はい。」

ガチャ。

部屋の中に入る。

ハイビスさんとミヤコさんが先行。続くように俺、後ろから隠れるように入るシヨウコ。

おじさんは先に休んでもらっている。

中は、圧迫感たつぷりのシガイアさんの部屋とは全く違っていた。

高そうな家具はなく、椅子も机も木製。

簡素な事務机の後ろには、棚の上に山と積まれた書類。

シガイアさんのところはきっちり整理整頓されていたため、ちよつと驚いた。

ミヤコさんがずっと前に出て、話し始める。

「どうも、お元気？」

「お元氣も何も、いつも通りだ。しかし、遅えぞ。そいつが、例のヤツか？」

「相変わらず失礼な物言いねー！せつかく休暇すつ飛ばして連れてきたっていうのに。」

「そんなもんは中央に言ってくれ。俺だって、急に対応しろなんて言われて困ってんだからよ……。」

「むしろ私そういう陳情を聞く側だし。」

「じゃあ自分で何とかしろ。」

ギルドマスターと思しき人物。

俺なんか軽々と持ち上げそうな太い腕、でかい体格。

顔にもぶつとい首にも無数の傷跡が見える。

引退した、歴戦のハンターさんかな……威圧感たつぷり。

部屋の奥に立てかけられたハンマーは自前だろうか。

……いや、でかすぎじゃない？

これ操れるのか……恐ろしい……。

そんな人とタメ口で軽口を叩きあえるミヤコさん。すごい。

……いかんいかん、自己紹介せねば。

「は、初めまして。ワサドラギルドより参りました、ソウジと言います。」

「おお、よろしく。話は聞いているぞ。……しかし本当に礼儀正しいな。マシヨルクの弟子ってんでどんなヤベエやつかと思っただが……普通じゃねえか。」

「へ？」

「ああいや、すまん。こんな話し方しかできねえ。気を悪くしないでほしい。」

「い、いや。俺は、全く」

教官の名前……知り合いつてことか？

まああの、ザキミーユに太いパイプがあるつて、確かシガイアさんが言つてたけど……。

ふと横を見ると、ハイビスさんはまるで脳面のように無表情。

怒っている……？いや、緊張しているのか？こわばつて見える。

どつちだ。

「お、そつちはハイビスさんか。優秀なギルド職員だつてシガイアさんから聞いている。よろしくな。」

「は、はいい!!よろしくお願ひします!!」

あ、どうやら緊張していただけだなコレ。

テンパリ具合が半端ないわ。実にハイビスさんらしい。

しかし、そんなに緊張せんでも。

「ははは、元気がいいな。……後ろのちっこいのは……。」

「しよ、シヨウコ、です。」

「おお、ソウジの。そうか。献身的なオトモだつてな。よろしく頼む。」

「は、はい。」

シヨウコはシヨウコで、俺の後ろに隠れてしどろもどろ。

いつもの元気はどうした。

「さてソウジにシヨウコ。お前達には相当に期待している。黒蝕竜ゴア・マガラの討伐の話、聞いていて俺も燃えた。」

「そ、そうですか。」

「ああ……なあミヤコ、こいつらなんでこんなに緊張してんだ？」

「アンタが怖いからよ！まず自己紹介とかしたらどう？」
「お、おお。それを忘れてたな。」

ミヤコさん、ナイスツツコミ、

むしろ普通にタメ口で話せるあなたが、今日はとても頼もしく見えます。
だってめっちゃ怖いんだもんこの人。

「俺の名はハスガ。一応この西支部でギルドマスターっぽいことを嫌々やらされてる。」
「ちよつ……もうちよつといい言い方無いの？」

「事実だ。形だけでも頼むなんて言われちゃなあ。……ああ、すまん。俺のこと、わかるか？」

「……ええと。」

ハスガさん。

ハスガ……。

思い出す。

確か、どこかで……。

あ。

「……ああ！」

「お、知ってたか。俺も捨てたもんじゃないな。」

「むしろアンタを知らないハンターがいたら、お目にかかりたいもんね。」

セツヒトさんから聞いたことがある。

教官もいた、伝説のハンターチーム「カホ・チータ」。

そのリーダーっていうのが……。

「ハスガ……さん。」

「おう。得意な武器は……ハンマーと大剣だ。まだ現役で、な。」

うわ……。

西支部のギルドマスターにして現役のハンター。

剛腕ハスガ、その人が目の前にいた。

161 決意を新たにしましょう。

ザキミーユシティのハンターズギルド。

その西支部ギルドマスターは、ハスガさんだった。

以前、セツヒトさんから聞いた話。

伝説のハンターチーム、「カホ・チータ」。

討伐歴、その個体数、難易度の高さ、全てにおいてトップクラス。

だが、メンバーが亡くなり、解散。

今なお、熱烈なファンは多いらしい。

「鳩が豆鉄砲を食らったような顔してるな……大丈夫か？」

「あーい、いや！大丈夫です！」

「そ、そうか？……なあミヤコ、俺ってそんなに怖いか？」

「私は別に？頭がきれいだなあと考えたことはあるけど。」

「……お前が俺のこと怖くないってことは、よくわかったわ。」

急な紹介を受けたため、かなり驚いてしまった。

しかしこの人がなあ。

話だけは聞いていた有名な人に会えた様な感覚。

この世界、テレビなどは無いため、顔は知らなかった。

そんなハスガさんと軽口を叩き続けるミヤコさん。

仲良さげである。多分。

「功績とか何とか言われるがな。俺はただの力持ち、脳筋つてやつだ。器用なことは向いてねえ。そういうのは他の奴に任せてた。」

「は、はあ。」

いや、脳筋と言われる人がギルドマスターなんて大役を任されるなんて、無いと思うのだが。

確かこの人は「カホ・チータ」でもリーダーをやっていた。

マシヨルク教官を含めた個性的なメンツを束ねていたわけだ。

おそらくリーダーシップとか頼り甲斐とか、そういう部分を買われたのではないかと推測できる。

……しかしハイビスさんはずっと直立不動だな。
すごい人なんだろうな、というのか伝わってくる。
ひしひしと。

「……じゃあ、そろそろ話の本題といくか。」

そう言うのと俺たちを椅子に案内したハスガさん。

それに従って、席につく。

対面にはハスガさんとミヤコさん。

俺を真ん中にしてハイビスさんとシヨウコが座る。

……シヨウコは小さくて足がつかないからか、どこか手持ち無沙汰な様子。
足持ち無沙汰？なんて言えばいいんだこれ。

「ああ、楽にしてくれ、シヨウコ……だったか？」

「は、はい……。」

そう言われて、シヨウコは椅子の上に正座し始めた。

そつちの方が辛いと思うのだが……まあいいか。

「さて、現状を伝える前に、だ。ソウジ。」

「はい。」

「どこまで知ってるか、教えてくれ。」

「ええと、どこまで、というのは……シヤガルマガラについてですよね？」

「ああ、そうだ。……まずは黒蝕竜ゴア・マガラを屠った。そしてワサドラのギルドが天廻龍シヤガルマガラの復活を確認。そこまではいいな？」

「あ、はい。」

ハイビスさんやショウコはやたらと緊張しているようだが、俺としてはスキンヘッドの怖い人には慣れているからか、そうでもない。

イシザキさんにザシューさんに……厳つい人ばかりである。

怖いというよりは、どちらかというと強そうで……というか実際に強くて、気圧されてる。

そういう表現の方が合っている。

「ええと……。」

俺は、一応知っていることを話すことにした。

とは言っても、大して知っていることなんて無いんだけど。

「シャガルマガラが……首都の西方の禁足地？というところに向かった、と。その西方には、ザキミーユのハンターたちが多く派遣されているということも聞いています。」

「ああ。そのとおりだ。他には？」

「いや、知らないです。むしろ、教えてほしいというか。」

「分かった。じゃあ現状だが……。」

少しの間を置くハスガさん。

「……既に何名か、重体だ。」

「……………」

「……あんまり驚かねえな。」

「い、いえ。ワサドラも、死者が出たので。」

「そうか……死因は？」

「……ハイビスさん。」

「……お伝えしてよろしいかと思えます。シャガルマガラが同様の生態かどうか、確認が必要です。」

「……………はい。」

そこから、ゴア・マガラと戦って亡くなってしまったハンターたちの話をした。

狩猟途中で狂竜症にかかり、動けなくなったところで引き裂かれた。

無惨な姿であったことまで、覚えていること聞いたことは全てを伝えた。

話をしながら横を見ると、ハイビスさんもシヨウコも険しい顔をしている。

……凄惨だったもんな。

話を終えると、同じような顔をしたハスガさんが口を開いた。

「……………そうか。……………こつちの重体の奴らも、似たような感じだ。」

「シャガルマガラと戦って——。」

「いや……………アイツと面と向かってやられたわけじゃねえ。」

「えっ。」

「凶暴化したモンスター。種類で言えば、いつも倒しているような相手だ。そいつらに、敵わなかった。」

「……………」

ということは、つまり。

「シャガルマガラと相対しては、いないということですよね。」

「ああ。観測班が数日前から禁足地の頂上にいるのを確認している。だが、その周辺のモンスターの対処に手間取っているのが現状だ。」

「……………」

「相当な数のハンターを集めたが、それでも足りん。俺も出ようかと考えているが……根本的な解決をしねえと話にならん。」

真剣な顔で淡々と話すハスガさん。

やはりこの人も未だ現役、教官と同じく前線に立てるといふことか。

戦うギルドマスター……すごいな、この人。

しかし、根本的な解決とは。

つまりは、シャガルマガラ、元凶を倒すということだ。

「中央は俺を前線に出したくは無いみたいだがな。」

「万が一にも亡くなったら、ハンター全体の士気に関わるからよ。」

「もうそんな事言つてられる状況じゃねえぞ?……それで、ソウジ。シヨウコ。」

唐突に名前を呼ばれ、シヨウコがビクツと反応する。

緊張はまだ解れない様子。

「お前達には、西支部の精鋭チームの後ろにくっついて貰う。」

「援護をする、ということですか?」

「いや、逆だ。他チームが援護、俺たちは本隊つてところか。」

すっかりハンターの一人として自分を数に入れているハスガさん。

いいのか?

「強力な大型がわんさかいやがる。イヤンクツクでさえ、下位のハンターじゃ手も足も

でねえ程だ。そいつらは俺ら側で倒す。ソウジは体力を温存。お前はどうかやら狂竜症を克服している。」

「……………」

「頂上に辿り着いたら、俺とソウジ、シヨウコでいっぺんに叩く。シヨウコはサポート。俺は援護。メインはソウジ。霧の影響はやべえだろうが……俺が死んだらそれまでだ。捨て置け。」

それはつまり。

周囲のハンターたちを放っておいても、シャガルマガラを倒す方を優先しろ、ということか？

道中、ハンズさんを含めたそのハンターたちに頼りながら。

簡単に、自分が犠牲になることを提案するハスガさん。

本気……なんだろうな。

「異論はあるか？」

「……いえ、無いです。」

「そうか。……わかった。」

思うところははいっぱいある。

だが、精鋭と表現する以上は、かなりの手練れがいるんだろう。

「出発は明朝にする。旅の疲れはあるだろうが、これ以上引き伸ばせばどうなるかわからん。」

「いえ、大丈夫です。シヨウコも、いけるか?」

「……はいっ。」

淡々と進んだ話し合い。

恐らくは、既定事項だったのだろう。

既に怪我人も出ているし、打っ手は限られる。

「さて……めんどくせえ書類が山程ある。今日のところはこの辺で終いだ。明日から、よろしく頼む。」

「はっ。」

「……私からも一ついい?」

「ん？何だ？」

ミヤコさんが話に割り込んできた。
いつもの表情とは違う、仕事の顔。

「……先のラージャン戦。ハスガは、何か知ってる？」

「あれか？ソウジが狙われて……セツヒトが怪我したっていう。」

「そう。話は聞いてるみたいね。」

「言っとくが、俺は関与してねえぞ？むしろ手を出さなって言ったのは、お前ら中央の方じゃねえか。」

「それが私にもわからないのよ。お偉方にそれとなく質問しても、みんなそんな回答。……絶対に黒幕がいるのよね。」

「……俺が探りを入れてもいいが……。」

「あーダメダメ。あなたはそっち側でどっしり構えていて。私がやるわ。」

「ああ、助かる。そういうのは、シガイアさんとかあのいけすかねえ農家の娘の領分だからな。」

何かよくわからん話を始めた二人。

聞くに、セツヒトさんが怪我をしたときの話だと思うんだが。

黒幕……。

「……セツヒトさんが、俺をかばって怪我をした。俺は、その犯人が知りたいです。」

「ソウジくん。」

「すみませんミヤコさん。その辺、首を突っ込むのはどうかと思っただけです。……ハスガさん。中央にいる以上は、俺たちの安全は確保してもらいたい。」

「……もちろんだ。少なくとも西にいる内は安心しな。お前たちには手出しはさせん。」

「本当ですか？正直俺、中央は信用してないんですけど。」

「そりゃ、当たり前だわな。自分の命狙ってきたような奴を信用するなんて、どうかしている。……まあゴア・マガラやティガレックスをソロでやっちまうような奴に手を出す方法なんて限られる。飯はこっちで用意する、周辺警護も完璧にやる。だからソウジ、心配するな。」

「……ありがとうございます。」

万が一の状況、ショウコは自分で何とかなるかも知れないが、こっちにはハイビスカ

んがいるのだ。

身の安全を保証してもらわねば。

「じゃあな。宿は、ギルドの施設を使ってくれ。すぐ隣にハンター用のところがある。」

そうぶつきらぼうに言うと、ハスガさんは事務机にどっしりと座り、書類とにらめっこを始めた。

巨体ゆえ、その紙も手に持つペンも、やたらと小さく見えた。

邪魔しないように、俺たちは静かに部屋を出ていくことにした。

* * * * *

「さて！私は中央に顔を出してくるわね！」

「色々と、ありがとうございしました。」

「いいのよー、ていうか無茶言ってるのこつちだしね。反乱分子みたいなのがいたら、ハスガの下の子たちが黙ってないと思うわよ？西も北も南も、みーんな中央嫌いだからね。」

「……あんまりザキミーユって仲良くないんですね。」

「そうなのよ……お陰で折衝役の私はてんでこ舞いな……はああ……ああ、いけな
いいけない！そしたらね！また明日、見送りに来るわ！」

「はい。」

「シヨウコちゃんも頑張つてね！応援するから！」

「はいっ！ありがとうございます！」

「ふふっ……ハイビスさんも、良かったわね？」

「えっ!?わ、私、なにかいいことありましたか？」

すっかり緊張もほぐれ、宿の部屋でリラックスマードの俺たち。

人心地つくと、ミヤコさんが仕事に戻ると言い出した。

ハイビスさんはミヤコさんに「良かったわね」と言われて、戸惑っている様子。

なんのことだ？

「だって、あの顔の怖いハスガにメンチ切って『俺たちの安全を保証しろ』って言うなん
て。……かつこよかったわよ？ソウジくん？」

「あ……。」

「……ハイビスさんを心配したんでしょう？やるわね。」

「い、いや、まあ、そうですけど……。」

「ふふ。……それじゃあね！」

ボタン！

嵐のように去っていくミヤコさん。

取り残された俺たち。

ハイビスさんは顔を赤くして、俺の方をチラチラと見てくる。

な、なんか恥ずいぞ。

「ソウジさん。」

「あ、はい。」

「……ご、ごめんなさい！私、やっぱりお荷物かもしれません……。」

「い、いやいやいや！何言うんですか！首都の案内とかその辺、めちやくちや助かりますって!!」

「……ありがとうございます。ソウジさんとシヨウコちゃんに守られているって思う

と、嬉しい反面、こう、申し訳無くて。」

そんなことはない。

こちらの地理に詳しいハイビスさんがいなければ、やっぱり不安である。

ミヤコさんもいるけど、あの人も中央に行ったり来たりだろうと踏んでいたし。

そういう意味で、頼れる人間がいるのは大変ありがたいのだ。

「気に病むことではないです。ハイビスさんは、いてくれるだけで力になるんです。」

「……………」

「それに、首都に詳しいっていうか、地元の方じゃないですか。頼もしいし、ありがたいです。」

「ソウジさん……………」

顔がポーツと赤いハイビスさん。

美人さんがこういう顔をするのは、反則的である。

それにどこか目が潤んでいるような。

「ご主人様……天然ジゴロもええ加減にせんと、あきませんよ？」

「て、てんね……俺は本音を言ってるだけだぞ。大事なことだからな。」

「ですよねえ、流石ですホンマ。……でも、ウチらのことを気い使って、ハスガさんにあして言ってくれて、カツコよかったですよ？」

「お、おお。」

そう言うと、シヨウコは部屋の出口に歩きだした。

「ウチ、ちよつとギルド行つて、情報集めてきますね。どんだけヤバいモンスターが湧いとるのか、見てきます！」

「あ、ああ。頼んだ。」

「はいっ！……ハイビスさん！」

「は、はい!？」

「……………(グッ!!)」

「……………うん、りよ、了解！」

「……………では！」

ガチャ。

シヨウコも部屋を出て行ってしまった。

……最後のサムズアップは何だ。

ハイビスさんもやたらと張り切って返事をした。

「そ、ソウジさん!!!」

「うわっ! はい!」

シヨウコの謎の行動の理由について俺が考えを巡らせていると、ハイビスさんが急に
でかい声を上げた。

びっくりした……。

「あ、す、すいません……驚かせて……。」

「あ、いや。こちらこそ。……なんでしょうか。」

「……ええと……。」

スツ。

立ち上がったハイビスさんは、ゆっくりと俺に近づくと、隣に座った。

俺は自分のベッドに腰掛けていたため、並んで座っている形。

……あれ、そういえば……部屋ってこの一つしかないのか!?

おう、いかん。早急にハスガさんに言っつて、もう一つ部屋を押さえてもらわねば!!

「……道中、シヨウコちゃんに言われまして……。」

「な、何をでしよう。」

俺が邪なアレコレを考え出すのと同じタイミングで話し出したハイビスさん。

すいません。

「……せ、セツヒトさんもシヨウコちゃんも、ソウジさんにちゃんと想いをお伝えしたの
に、わ、私はいいいのか、と……。」

「そ、それは……」

「わ、私は！わ、私も!!も、もうお気づきのことかとは思いますが!!」

「……………」

「お、お慕い申し上げて…………お、り、り、ます…………。」

言いながら、真つ赤な顔を俯かせるハイビスさん。
花がしおれるように、徐々に小さくなっていった。

「…………シヨウコちゃんは…………私とソウジさん、二人の時間を必ず作るから、と言ってくれ
て。…………本当にあの子、優しい子ですよ。」

「そ、そうですね。」

「『ウチ、ご主人様もハイビスさんも好きやから！』って…………ふふつ、敵いませんよ。シヨ
ウコちゃん。」

「シヨウコがそんな事を…………。」

「…………本当に、いいオトモと契約できましたね、ソウジさん。中々居ませんよ？あんな献
身的な子！」

「…………はい。もちろんです。アイツは、俺の最強の相棒ですよ。」

命まで救われた、唯一無二の存在。

恋愛感情とかは置いていても、それはいつまでも変わらない。

「……でも、振ったんですよ？」

「……はい。」

『今はまだ考えられない』って。セツヒトさんにも。」

「……はい……。」

内情を全てを把握してらっしゃる……。

女性のネットワークってやつか……恐ろしい……。

まあ多分、本人達が普通に話したんだろうけど。

「ソウジさん。私は覚悟しています。」

「……覚悟、ですか？」

「はい。……私は、ソウジさんの専属担当受付嬢です。シヨウコちゃんがずっと相棒のオトモさんなら、私はずっと、あなたの専属の受付嬢さんです。」

「……。」

「……ソウジさんのお気持ちは、もう決まってるんじゃないですか？」

「……そう、ですね。」

「……ふふふ。やっぱり。当たり前ですね。」

ハイビスさんもシヨウコも、こんなにも俺のことを想ってくれているのに。

俺は今、なぜあの人の事を考えている。

……好きだから、だ。

うん。ストンと来た。

「……今回の戦いは、ソウジさんが命を賭すものになります。」

「はい。」

「ソウジさんのことですから、シヨウコちゃんは何としてでも生かして返そうと思ってるんでしよう?」

「……そりゃ、そうです。」

「ご覚悟が決まってるっしやるのは……見てわかります。……ですけど!!」

そう言うと、ハイビスさんはこちらに振り向いて、俺の手をぐつと握ってきた。

力強い目、長いまつげ。

こんなにも美人を目の前にして、嫌が応にもドキドキする。

「……ソウジさんにとっては、ここは通過点なんです！」

「つ、通過点？」

「はい！だめです！あんなモンスターに気圧されちゃ……帰りを待つ人が、大勢います！みんな、ソウジさんを信じています！だから……。」

「……………」

「……………絶対に！帰ってきてください！！古龍が何ですか！私の信じたハンターさんは、そんなもんじゃありませんよ！……絶対に。約束です！」

「……………」

そんなことを言われ。

俺は、教官の教えをふと思いつく。

『……………死なないことだ！命があれば、また戦える！例え無様でも卑怯でもいい！生きて帰るんだ！それが最も、ハンターとして大切な資質だ！』

『……………サーイエッサー！』

……………。

忘れていたわけではない。

ただ、相手が相手だけに、その教えは頭の隅にしまっておいた。あれは別格だ。

俺は、倒さなければ。命を賭してでも。刺し違えてでも。

……そう思っていたけど。

さすがハイビスさんだ。

いつも、俺のことは見てくれていた受付嬢として。

俺の意識を、叩き起こしてくれる。

鬱屈した気持ちだ。

どこかマイナス方向に向かっていた思いが、やる気が変わる。

変えてくれた。

ハイビスさんが。

「……………はい。もちろんです。……絶対に、生きて帰ります。」

「……………そうです。その目、お待ちしていました。」

「……ははは。ありがたいです。冬山でも、こういうことがありました。」
「……………」

「ゴシャハギさ……雪鬼獣を倒したとき、周りがみんな褒めてくれる中……ハイビスさんだけ叱咤激励してくれたんです。……あのとき、とても嬉しかった。」

「あ、あの時……………」

覚えてくれていたか。

俺はあの時、ハイビスさんの言葉にかなり救われた。

「ちゃんと見てくれている人がいる。励ましてくれる人がいるって。俺は、これからも強くなるって。そう、思えたんです。……ハイビスさん。」

「……………はい。」

「やってきますよ。シャガルマガラ。倒して、帰ってきます。絶対に。」
「……………ええ、はい！」

未来のことなんて、古龍討伐なんて……無謀な約束なんてできないけど。
無謀ではない。

俺は頑張ってきた。

自信をもって。

倒してやろう。

天廻龍、シャガルマガラを。

そう改めて、新たな気持ちで決意できた。

「……はああ、私、結構本気だったんですけどねえ……。」

「……………」

「ソウジさんのことです。」

「あ、ああ……………」

何て返せばいいか分からない。

言葉に詰まる。

「でも…………セツヒトさんに想いがあるのはもう見てれば分かりますから。…………がんばってくださいね、色々と！」

「……………はい。」

それなのに、応援してくれるというのだ。

どんだけ甲斐甲斐しいんだこの人は。

俺の周りには、優しい人が溢れている。

そう、実感した。

「あ……………その、部屋をもう一つ取らないとですね。」

「あ、そうですね。でも……………私はこのままでもいいんですよ?」

「い、いやいやいや!そういうわけには!」

「ふふ……………何だかセツヒトさんの気持ちがわかってきました!ソウジさんをいじるの、面白いですね。」

「は、ハイビスさん……………」

「冗談です!……………さて、じゃあ私、ギルドの方に行つて、お部屋の方お願いしてみますね。」

「は、はい……………」

スタスタスタ……。

ガチャ。

部屋を出ていくハイビスさん。

………こうも想われているのに、俺は応えられない。

何だか、罪悪感で一杯だけど。

取り繕うのは違う。

それは、失礼な話。

俺は俺で、精一杯やるだけだ。

励ましてくれた。

こんな男を。

………よし。

「………武具の点検と、アイテムの確認をするか。」

今できることなんて限られているけど。

やれることをやろう。

俺はそう決めて、ポーチに触れた。

……………。

余談だが。

部屋は、ハスガさんが結局2つ用意してくれた。

「す、すまん。すっかりソウジの恋人なんだと思ってよ……。いや、邪推して申し訳ねえ。」

「い、いやいや！大丈夫ですよ！」

ハスガさんがわざわざ部屋まで来て、頭を下げられた。

顔が真っ赤なハイビスさんを連れて。

恐らくは「恋人」の部分に反応したのだろう。

俺が行けばよかった……。

そうして俺達は、慌ただしくもザキミーユの到着初日を終えたのだった。

162 禁足地に向かいました。

ギルド横の宿は、結構いいところであった。

高級ホテルと言えば良いのか、どう見ても来賓用。

こんな部屋を2つも取ってもらって、大変ありがたい限りである。

夕飯も部屋に用意してもらえたため、外に出かける必要もなかった。

用心すべき身としては、こちらも大変ありがたかった。

当たり前だが、部屋割りはショウコとハイビスさんで一部屋。俺とおじさんで一部屋。

「お、俺もいいのか？ こんないい宿を……。」とおじさんは戸惑っていたが、俺としてはおじさんがいると心休まる。

寧ろ俺からお願ひした。

ベッドに寝転んでからは、おじさんとだべった。

「落ち着かねえよ……ソウジさん。こんないいところ、ありがとうなあ。」

「いやいやおじさん。長い日数移動疲れもあるでしょうし。それに、部屋を用意してく

「れたのは俺じゃなくてギルドなんで。」

「いや、御者仲間のツテで聞いた宿は満室ですよ。もうこのまま荷台で寝ようかと思っ
いたら急にギルドに呼び出されて……いや、助かった。」

「そんな、早く言つてくださいよ。」

「これからすんげえモンスター狩るつてのに、迷惑はかけらんねえよ。」

おじさんはこういう人である。

豪快に見えて、気配りの人。

こういう人こそ、職場の上司になってほしいものだ。

きつとそこは、働きやすいところになると思う。

「俺とおじさんの仲じゃないですか。おじさんが見つかつて良かったです、本当に。」

「……おう！ありがとよ！ソウジさん！」

「はい。とんでもないです。」

おじさんは俺の狩猟の数々を支えてくれた一人だ。

仲間と言つても過言ではない。

「……ソウジさん。」

「はい。」

「……がんばってな。俺は運ぶことしかできねえが……応援してるぜ。」

「……はい！一緒に、頑張りましょう！」

元気が湧いてくる、そんな励ましをもらった。

俺とおじさんは、そのままウトウトと話しながら寝た。

いよいよ明日は、狩猟だ。

* * * * *

コンコン。

「ソウジさん……起きてらっしゃいますか？」

「ん……はい、はい!!」

眠っていた体を、頑張つて起こす。

この声はハイビスさん。

「……………ど、どうかしましたか!？」

時刻は明け方。夜は明けきっていない、そんな時分。

同室のおじさんは爆睡していた為、起こしたら申し訳ないと思いつつもドアを開ける。

何かあつたのだろうか。

ガチャ。

「す、すみません、こんな早くに。」

「いえ、大丈夫ですよ。その、ご要件は。」

こんな朝早く、ハイビスさんの格好はすでにバツチリと受付嬢の制服。

きちんと髪もまとめられて…………いや、少し寝癖を発見。

かなりの急ぎだな。

「実は、先程部屋にギルドの方がいらして……ソウジさんをなるべく早く呼んでほしい、と。」

「あ、わ、分かりました。すぐに行きます……でも何でハイビスさんが？」

急用なら、俺に直接いえば良いのに。

「そ、その……ソウジさんにはゆっくり休んでもらいたくて……な、何かあった時は専属受付嬢の私にお知らせくださいと昨晚……。」

「あ、な、なるほど……？」

ハイビスさん、俺にかなり気を配ってくれている。

昨晚、何かギルドに人と話していると思ったら、そういうことだったのか。

……やっていることが完全に秘書とかマネージャーである。

いや、ありがたい限りなのだが。

「シヨウコちゃんは、既に準備中です。ソウジさんも、お早く。」
「は、はい。」

とにかく急ぐことにした。

* * * * *

「簡潔に言う。多数のモンスターが首都方面に向かって来ている。」

「なっ……。」

「観測班との連絡が遅れた。夜中に動き出すとは……すまねえ。」

通されたギルドマスターの部屋。

厳つい顔を更に強張らせたハスガさんが迎えてくれて、事情の説明を始めた。

一応の装備は、俺とシヨウコとも整えてきた。

昨夜、確認していて良かった。

「想定はしていた。現地のハンターたちで対応しているが……ここにきて、禁足地周辺

の霧が更に濃くなってきているらしい。」

「それが、原因ですか？」

「まあ、そうとしか考えられねえな。とんでもない範囲らしい。」

「……………ウチらも、急がんと。」

「ああ、シヨウゴ。これ以上は引き延ばせねえ。……急いで発つて、大元を叩く。いいか？」

「はい、承知しま——」

コンコン。

「失礼します。お話のところ、すみません。」

「おう、どうした？」

話を素早くまとめ、狩猟に急いで向かおうかという時。

部屋に、ギルド職員と思しき女性がやってきた。

少しデザインの違う制服。

スカート長めなんだな。

「ギルドマスター、実は……。」

「ああ、いい。全員に聞かせてくれ。関係者だ。」

「あ、し、失礼しました。……モンスターの移動に妙なところが見られています。」

「妙なところ?」

「はい。確かに西からの移動ではあるのですが……多少の南下が見られます。」

「南下……予測は?」

ザキミーユシティから西にある禁足地。

そこまでの行程、俺と教官がラージャンを倒した森林地帯の南には、山地が広がっている。
地理的には大して高い山ではない。

「ザキミーユ北東の山地から、強力な個体が出現した可能性があります。」

「……なるほど、な。観測班は?」

「原因は追求中ですが……その、山地帯に確認できた大型に一つ、珍しいモンスターがい

た、と。」

「もったいぶるな。教えろ。」

「はい。……雷狼竜、ジンオウガです。」

「ジンオウガ……。」

雷狼竜ジンオウガ。

俺がシヨウウコと移動集落周辺で討伐したモンスター。

素早さ、攻撃の多彩さ、力強さ。

そのバランスの良さに、結構苦戦したが……。

「……………嫌な予感がするな。観測を怠るな。異変があつたときは、すぐに知らせてくれ。」

「は、はい。そのように。……失礼します。」

バタン。

そそくさと去る女性。

ドアを閉めた途端、駆け足で戻る足音が聞こえた。
こんな朝早くから対応に追われているのだろう。

「…………ソウジ。」

「はい。」

「…………お前は どう思う?」

「……………」

どう思う、と聞かれて。

少し考える。

まず、モンスターの移動。

これはシガイアさんやセツヒトさん、教官たちからも色々聞いてきたため、わかる。
スタンピード、というやつだろう。

強力な個体、シャガルマガラの出現。

それによる、モンスター達の縄張りの大きな変化。

弱肉強食の世界に生きる彼らにとって、敵わないほどの強力な敵からは逃れるしかな

く。

且つ、生きていくために、新しい地に活路を求める。

そういう現象。

それが首都近辺、人の多く住む地域にまで及べば、大変なことになる。

だが、もう一つの情報。

移動のおかしさ。

西方から来ていたモンスターが南下……北部に強力な個体がいると仮定して……。

「……………確証は全く無いですけど。」

「いい。考えを教えてほしい。」

ハスガさんの顔が、真剣味を増す。

俺の言葉を信頼してもらえるのかは分からないが。

まあ、言ってみるか。

「……モンスター達の移動の原因が、まずはシャガルマガラだとして、ですね。」

「ああ。」

「アイツらからしたら、古龍は最強種。逃げるしかない。でも、生きてきた地を逃げるのは、相当な決断です。縄張りを変えるというのは、簡単なことではない。それこそ命がけです。」

「……………」

「そして、先程の話。俺も倒しましたからわかりますが……ジンオウガは強いです。でも、ゴア・マガラやラージャンほどの理不尽な強さは感じなかった。」

「……………ああ。」

「……………ジンオウガ相手に、大型モンスターたちが経路をかえるほど逃げることは、あまりないんじゃないかと思えます。」

「……………」

結論が遠回しになったが、俺の考えは。

「シャガルマガラや、そういう恐ろしいほどの強さを誇る個体が……山地から出現したんじゃないんでしょうか。」

「……………」

「ジンオウガは強いですが、他の大型だって必死だ。何だったら、移動しているモンス

ターには狂竜化して獯猛な個体だっているはずですよ。……それらさえも逃げ出すつて……ヤバいんじゃないかな、と。」

「……………」

黙りながらも、表情は重苦しくなり思案するハスガさん。

そりやそうだ。ここに来て違う問題が噴出しているかもしれないから。

俺の話は単なる推測に過ぎない。

だが、モンスターは自然の中で生きる存在。

散々ファンタジーを経験してきた俺だが、この世界のモンスターたちに共通していたこと。

それは、生態に関しては、その自然に対してかなり順応して生きていることだ。

極端な話、ザボアザギルが氷の無い草原に出るわけが無いし、乾燥した場所にオロミドロが出るなんてことも、まあない。

わざと追いつめればいけるかもしれないけど。

モンスター自身が変に動くのだって、理由があるはずだ。

単に、生き物として。

素直に、何か理由があつての行動と考えるべき。

この推測は、多分そこまで大きく間違つてはいない……と思う。

「……………悪い予感が拭えねえな。」

ゴツい頭をでかい手でボリボリと搔きながら、ハスガさんが話し出す。

「……………すまねえ、前言撤回だ。…………ソウジの推測を信じたい。…………直感もかなり入っているが、山地带から嫌な感じがする。」

「いや、完全に素人判断ですけど…………。」

「うーんとな…………何だかな、ソウジからは…………こう、その辺の奴とは違う感じが伝わるんだよな…………達観してるつつうか、若く見えねえんだ。」

「あ、あ……………そ、そうですね。」

思い出す。

教官やシガイアさんたちにカミングアウトした時のことを。

あの人達が俺のギフトなんかには気づいたのも、俺自身の在り方の歪さに違和感を持つたからだ。

ハスガさんも、あのレベルの強者と言えるわけで。

まあ話すことは無いが。

ふと横を見ると、ハイビスさんもシヨウコもハスガさんの話をスルーしている様子。
……………いや、二人とも誤魔化しきれてないな……………。

表情が硬すぎる。

「……………勘の域は出ねえ。だが、俺はソウジの説を推したい。ハイビスさんはどうだ？」

「えっ？わ、私ですか!？」

「ああ。シガイアさんの元で鍛えられてきたんだろ？意見を聞きたい。」

「そ、そうですね……………」

俺の出自をなんとか誤魔化そうと、能面を頑張つて保っていたハイビスさん。

だが、この人そこまで腹芸が得意な方ではない。

ハスガさんに気圧されてしまった様子。

しかし、少しの間を開けてハイビスさんが話し始めた。
顔つきは、いつもの仕事モード。

このギャップこそ、この人の持ち味だ。

「……ソウジさんのお考えは、信憑性が高いかと思えます。詳しくは言えませんが、そういう推測などに必要な情報を、ソウジさんはたくさんお持ちです。」

「ハイビスさんも、同意見ってことでいいな？」

「……はい。」

俺の力をギリギリのところまで隠しつつ、説を推してくれた。

ハイビスさんも同じ考えか……。

「……シヨウコは？」

「う、ウチも、ご主人様のお考えは正しいんじゃないかと思えます！……ご主人さまは、こういう所では外しませんから！」

「そうか……。」

シヨウコにも意見を求めたハスガさん。

仲間として扱ってくれているんだな。

嬉しい。

ハスガさんは、少し息を吐くと、これからの方針を打ち出した。

「……ギルド……観測班とソウジを信じる。俺は北西に向かう。山地帯に、何がありそう
うだ。モンスター移動に当たると、他の支部にも協力を願う。中央は……無視だ無
視。」

「い、いいんですか?」

「もはや別の機関だしな、あれ。気にするな。何かあっても、俺の首一つで済むだろう
よ。」

「うわあ……。」

辞める気満々である。

そっぴや嫌々ギルマスやらされているとか言ってたなこの人。

本音だとしたら、確かに首一つ程度、なんだろうけど。

「ソウジ達は禁足地の方に向かってくれ。山地帯が杞憂で済むなら、すぐに合流する。」
「了解です。」

「他のトップハンター達も、軒並みモンスターの移動の方に割いている……全くもって人手が足りてねえ。すまん。」

「……いえ。望むところです。俺もチームの狩りには慣れてませんし、そもそも俺が取り逃がしたモンスターです。……尻を拭わせて下さい。」

「……ああ。結局、こうなっちまったな。」

こうなっちまった、というのは……俺とショウコ二人で狩りに行くということだろう。

まあ、そもそもそのつもりであった。

特に異論はない。

それに、禁足地に佇むモンスターに、トップハンターたちのリソースを割いたとして。現状被害を出しているのは、こちらにやってくる食い詰めたモンスターたちだ。

目の前のモンスターには、やはり地理的に詳しい首都のハンターたちが当たる。

最強戦力であろうハスガさんが、北西の山地帯の調査へ。

俺は経験を活かして、シヤガルマガラへ。

ありえる采配だとは思う。

「……少し外す。お前たちは、いつでも出られるようにしておいてくれ。御者の御仁は？」

「えっと、まだ寝ているかも……。」

「起こしてくれ。シガイアさんから、移動運搬で信頼できる人間と聞いている。お前たちの、禁足地までの移動を依頼しよう。」

「……分かりました。」

おじさんの信頼は、シガイアさんも折り紙付きだ。
流石。

「よしっ！動くぞー！」

「はこっ！」

俺とシヨウウコがハスガさんに返事をする、全員が一斉に動き出した。

* * * * *

何と、おじさんは起きていた。

何ならガーグア達を起こし、ギルド裏で既に荷車の用意をしていた。

「トラブルメーカーのソウジさんが朝早くからいねえからよ！間違いいねえと思ったぜ
！」

「ははは……。」

俺への変な信頼は置いといて。

仕事の速さには恐れ入る。

かっこいい。

「ソウジさん。私はここで。」

「はい。ハイビスさんも、無理しないよう。」

「はい………どうか、ご武運を。」

「………はい！」

ハイビスさんとは短めに挨拶。

昨晩たくさん話したしな。

そこまで言葉は必要ない。

「おう、もう準備はいいのか。」

「はい。」

「流石だな………御者の御仁。二人を頼む。」

「へ、へい！」

流石のおじさんも、ハスガさんの厳つきにはたじろぐ様子。

まあ無理もないか。

ハンターとしての功績とかは置いておいて、単にプレッシャーが凄い。

「それじゃ………ソウジさん、シヨウゴ！準備はいいか!？」

「はい！よろしくお願いします！」

「はいっ！」

ガラガラガラガラ……。

「そつちも気をつけろよ！合流できそうなら、合図を送る！！緑だ！！」
「はい！！」

信号弾を上げるといふことか。

承知した。

何時ものように手綱を引き、ガーグア達を走らせ始めたおじさん。
向かうのは、西。禁足地。

狙うは、天廻龍シャガルマガラだ。

*
*
*
*
*
*

街を出ると、外には多くのハンターたちの車が走っていくのが見えた。その大半は、俺たちとは違う方向に向かう。

「あれは南の支部のハンターらしいぜ？」

「他の支部のハンターですか？」

「ああ。つっても俺も、さつき聞いたんだけどな？若い、手柄を立てたがるような血気盛んな連中が、南には多いんだと。」

「へえ……。」

なかなか興味深い話である。

「北は狩り場が広いからなあ。今出られるのは南と西と……。東は……まあ、アレだなあ。」

「アレ？つて、何です？」

「……ガラが悪いらしいぜ？」

「えっ？な、何で？」

「さてなあ……昔、首都に来たときから既にそんな感じだ。街からして治安悪いしなあ。そういうのが集まるんだらうなあ。」

「へえ……。」

「そういうば俺を狙ってセツヒトさんを傷つけたあの狼藉者。」

「アイツも確か、東がどうか言ってたな。」

「気をつけよう。」

「ご主人さま。」

「お、どうした。」

「シヨウコがおずおずと話しかけてくる。」

「昨日はハイビスさんと同じ部屋で休んでいたシヨウコ。」

「何だかしっかり話すのも久しぶりな気がする。」

「その、ギルドでゆうてた山地？のモンスター。大丈夫でしょうか。」

「強力かもしれないヤツ……か？」

「はい。ウチ、その、うまくいえんと申し訳ないんですが、めっちゃ嫌な予感がします。」
「……………」

シヨウコはアイルー亜人、感覚が鋭い。

嗅覚や聴覚なんていう部分では、人間よりも相当に。

直感的な部分ももちろんである。

不安が拭えない、か。

「……………ここに来て慌ただしくなってきたところに、更に北にヤバいモンスターがいるとなると……………確かに嫌だな。」

「ウチらも山地に向かった方がええんちゃうかな、と。」

「……………」

判断が難しい。

……………だけど。

「……………ここはハスガさんを信じよう。あの人、実際に戦うところは見たことないけど、多

分教官とかその辺のレベルの人だ。逆にそれでも敵わない相手だったら……。」

「……………だったら?」

「……………諦めるしかないぐらい、ヤバいな。」

「うわあ…………。」

実際そうだろう。

じゃあ他に誰がいいというのか。そういう話である。

「…………だから、信じる他ない。もしかしたら完全に杞憂で、すぐに俺たちと合流するかもしれないし。」

「やったらええんですけど…………。」

「とにかく、今は目の前のことに集中しよう。…………おじさん、禁足地まではどれぐらいかかりですか?」

「この辺はあまり来たことねえが、まあ大体半日もあれば麓に着くだろうよ!それまでゆつくりしていてくれ!」

「…………ありがとうございます。」

気持ちばかりはやるが、焦っても仕方ない。

俺とシヨウコは、おじさんの言葉に甘えて休むことにした。

シヤガルマガラの影響は大きい。

何事も無いといいけど……。

* * * * *

車を走らせて数時間ほど。

何事もなければ、なんて言う俺の願いも虚しく。

一つ問題が起きた。

「あれは、ちよいとすげえわ……。」

「……………おじさん、やめときましよう。」

停止した車。

地面の草を踏みしめ、ガーガーたちが所在なさげにしている。

停まった理由。

それは、少しずつ見えてきた禁足地が、ドス黒く覆われていたからだ。

シヤガルマガラの霧。

だが、ゴア・マガラのような霧とは少し違う。

最早、天候さえ変わっている。

分厚い雲、薄暗くこちらの方まで伸びたそれは、辺りの雰囲気を鬱屈としたものにしていった。

更には、この先。

霧が立ち込めていて、進むのには躊躇してしまう。

「……俺たちここから、歩いていきますよ。」

「いやいや！それはいけねえ！まだ距離はあるぞ!？」

「おじさんやガーグー達に影響があるかもしれないです。……あの黒い霧、ヤバいんですよ。」

「それは……そうらしいけどよ。」

霧。

その正体は、恐らくゴア・マガラやシャガルマガラの鱗粉。

狂竜症の原因であり、多くのモンスターの特異化にも影響している。

辺りはモンスターどころか、生き物の影も形もない。

禁足地のある山一帯に広がっている黒い霧は、生きとし生けるもの全てを拒むようであつた。

おじさんやガーグー達にまで、迷惑はかけられない。

……と思つたのだが。

「……………っしー出すぞー！」

「うえっ!? ちよ、おじさん!？」

ガラガラガラガラ……!

突如として車を前進させ始めたおじさん。

愚直にも言うことを聞いて、ただ走り出すガーグー達。

「お、おじさん! この霧マジでヤバいんですって! 俺たちを降ろして引き返して——」

「馬鹿野郎！」

「!?」

おじさんの大声。

しかも馬鹿野郎ときた。

な、何で。

「…………ソウジさんもシヨウコも、これからあの原因を倒すため命をかけるんだろ!? ここで俺たちが頑張らなきゃよ! 何の為の御者だつてんだ!」

「ガアー。」

「グアー。」

「…………おじさん。」

おじさんが、真つ直ぐ前を見ながら言う。

ガーグー達も、まるで呼応する様に鳴き声を上げた。

…………おじさんはこういう人だった。

そうだったわ。

「……マジで行くんですね。」

「マジも大マジだ!! 当たり前だろ!!……も、もちろん、モンスター側の側なんて無茶はしねえがな!」

「それこそ当たり前ですよ。」

「ご主人さま……。」

シヨウコが心配げに俺を見つめてくる。

シヨウコとしては、ここから二人で行くべきだと言いたいんだろう。

そりやそうだ。

まず間違いなく、何かしらの影響は出るだろう。

おじさんやガーグー達に。

「……おじさん、着いたら、すぐに引き返してください。影響は最小限にしたい。」

「……おう!」

「状況が好転したら……もし霧が晴れたり、天候が回復したなら迎えを頼みます。……何も変わらなければ……。」

「ああ！その時は、その時だ！」

「……はい。」

俺たちをフォローするという気持ちはありがたい。

無碍にはしたくない。

ここが譲れる最大限だ。

「口の周りに布を巻いておきましょう。ガーグー達もできるなら。あまり吸い込まないほうがいい。」

「おお。分かった。」

「ご、ご主人さま。」

「おじさん達の気持ちを尊重する。霧の正体がゴア・マガラと同じ鱗粉なら、目に見える大きさだ。細菌やウイルスレベルの微細さとは考えにくい。気休めかもしれないけど、口に覆いをすれば、多少は防げると思う。」

「さ、さいきんとかウイ？とか、そ、そのよくわかりませんが……了解です！」

「あ、すまん。」

現代日本ならマスクとかあったんだらうけど。仕方がない。布を巻いておこう。

おじさんと俺たちで、ガーグー達にも布当てを装着した。鼻とくちばしを覆えるようにするのは大変だったが、意外にも素直に着けてくれたので良かった。

俺達自身も装着。

これで怪しい集団の一丁上がり。見た目が完全に砂漠のならず者たち、である。

「逆に心配になってくるな……。」

「お、おじさん。ウチも我慢しますから、頑張りましょう！」

「俺も恥ずかしくなってきた……。」

「ご主人さまも!?!」

冗談は置いといて。

おじさんには、ガーグー達にその辺の草木や虫を与えないように伝えておいた。

荷車にあつた飼葉にも、覆いをしておく。

更にはウチケシの実をたくさん譲つた。

服用すれば、対症療法だが軽減はする。

ガーグー達に効くのかまではわからん。

そもそも薬とか……食べるのかな。

「逆に迷惑かけたな。すまん！」

「いえ。できることはやっておきましょう。水は……。」

「ああ！最悪、飲まず食わずで霧の外に出る……ソウジさんとシヨウウコは、狩猟に集中してくれ！」

「……はい！」

「おじさん！ありがとうございます!!」

シヨウウコと共に、礼を言う。

本当に、この人には頭が上がらない。

そこから、俺達はなりふり構わぬ行軍を続けた。

モンスターも居ないため、スピードは速い。
順調……なのかはわからんが、とにかく急いだ。

禁足地の麓まで、あと少しだ。

163あるソロハンターの話④

私はタオカカ周辺へのハンターを引退。

ワサドラに住み着いた。

シガイアさんの斡旋もあって、引退間近のおじいちゃんが経営していた武器屋をそのまま継がせてもらった。

跡継ぎがないという時に、渡りに船。

あつちもこつちも。

ういんういんつてやつ？

「筋がいい。お前さん、上手いわ。」

「じいちゃんの教え方がいいんだよー？」

「倅の変わりがこんなに可愛い子とは……嬉しいぞい。新しいギルドの人は、いい人を紹介してくださった。」

「いやー、可愛いなんてそんなー、本当のことを言われてもー。」

「そういう誤魔化し方も、可愛いのー。」

「……バレたかー。」

自分で言うのも何だけど、武器の知識とか器用さなら、負けたことはない。

天才なんて言われて図に乗ってるのは重々承知だけど。

できるなら、とことんやりたいタイプなんだよね。

でも、私が敵わないと思つた人。

シガイアさんに、カホ・チータのメンツ。

そしてこのおじいちゃん。

しばらくして、その息子さんがおじいちゃんを連れて、ワサドラを出ていった。

遠く西の漁村、ブラツに行くらしい。

あそこは私も、一回行つたことがあるだけ。

「のどかな所で、余生を過ごすか。」と、名残惜しさも何も無くおじいちゃんは去つていった。

私の一人ぼっちの武器屋経営が始まつた。

* * * * *

超はつきり言うど、計算とかもうめっちゃ苦手。

経理って何!?!税金って!?!

って感じ。

その辺おじいちゃん教えてくれなかつたからなあ。

何となく帳簿をつけては、武器を売って、武器を打つ毎日。

やってくるハンターのスキル構成と一緒に考えるのは、めっちゃ楽しい。

でも、お金のことになると、ちよい加減。

まあ……私だし？

ご飯とかその辺は、近くの宿のおじいさんに世話になることが多い。

その人も息子が居ないとか言っていた。

宿の名前は「ホエール」。

おじいさんの名前も「ホエール」。

紛らわしいけど、そこはまあいいや。

そこには、もうめっちゃ可愛い女の子がいた。
そして私よりも料理が上手で、計算もできる子だった。

「ドールー!!助けてー!!」

「うわっ……な、何?セツヒトさん。」

「もういつまでも計算が合わないのー!!何がどうなってるのー!」

帳簿について、逐一聞くような仲になっていた。

あっちは私のこと、お姉さんみたいに思っているんだろうけど。

……完全に女として負けているよね……。

うーん……。

花嫁修業とかしたほうがいいのかなー……。

* * * * *

数年経った春。

新聞やギルドからの報告で、ハンターチーム「カホ・チータ」が解散したことが分かった。

原因も聞いた。

ウミさんとムルトさんが、亡くなったということだった。

村……町の人はみんな、「カホ・チータ」が無くなったことを嘆いていたけど。

私はそんなことよりも、その二人の死が受け入れられなかった。

あんなに強くて。

あんなにかっこよくて。

ショックで、マジで三日ぐらい寝込んだ。

……それでも、生活は変わらない。

どこか遠い国の話のようで。

しかも見限った人たちの死なんて、とか思う嫌な私もいて。

複雑だった。

* * * * *

そんなある日。

ある出逢いがあつた。

ソウジと名乗るハンターが、店にやってきた。

その子を、私は知っていた。

確か二日前、宿にやってきた新顔。

ある夜、ドールが血相変えて助けを求めてきたので、よく覚えている。

だって、お尻びよいーんって出して、泡拭いて気絶してたんだよ？

笑うつて。

「きよ、今日は、そのお礼に参りました。」

「んー、いーよいよよ。元気ならそれだけでめつけもんだつて。」

「助かりました、セツヒト……さん。」

「その名前、あんまり好きじゃないんだよねー。せつちゃんでもいいよー？」

「せつちゃんさん、ありがとうございます。」

「うーん、何かかしこまりすぎない気もするけどー？まあいいやー。」

顔は結構好みだったので、余計に覚えていた。

しかも律儀にお礼を言いに来るとか。

さてはこのソウジとかいうの………いいやつだな？

「まあ、でもさー。……心配かけちゃ、駄目だよー？」

「はい、もう二度と。」

「……うーん、よろしい。いいね君。気に入ったよー。」

「そ、それはどうも。」

真っ直ぐな目。

どこかその辺の若いものとは違う何かを感じた。

何ていうのかなー……年齢に雰囲気につつきに……。

ちぐはぐなんだよなー。

ソウジ……よし、名前覚えた。

………何だろうな………いじってやりたい欲がガンガン湧いてきた。

ソウジは、お礼ついでに武器屋としての私と顔を合わせておきたいようだった。まあつまり、自分のためでもある、と。

うんうん、そういう打算的なところもいいねー。

「ん、いーよ。そういうことなら。よろしくされてもー？袖振り合うも多生の縁つてね。いつでもおいでー？お姉さんが教えてあげるよー。」

「あ、ありがとうございます！」

「とりあえず、得意な武器だけ聞いといていいー？」

「片手剣と双剣、とりあえずこの2つです。」

「……へー、了解りようかい。」

私が最後に握った武器。

好んで使っていた、双剣。

別に全武器使えるけどさ。

少しだけ驚いた。

「うん、今日はちよーつと忙しいんだー。でも明日からなら、いつでもおいでよー。だ

い、かんげーい。」

「それでは、お忙しい中失礼しました！」

「えーっ？もう行っちゃうのー？」

「実はこのあとギルドに行くんです。講習会？というのに参加するので。」

「あー、そかそかー。なる。じゃー、気をつけて行ってらっしゃい？」

「はいー！」

関係がここで終わるのも嫌なので、私からあるものをプレゼントした。

新人ハンターならよく身につける「初心の護石」。

笑顔で爽やかに受け取るソウジを見て。

心臓がちよつとだけ、ドキツとした。

* * * * *

メキメキ力をつけていくソウジ。

しかもそれを教えていたのは、何の因果がマシヨルクだった。

私の心の黒い部分。

その嫌なところが、マシヨルクを遠ざけたくて仕方がなかった。今思えば、逃げていたんだよね。

惨劇から、あのミヨシの惨状から。

そしたら、ソウジが大型の狩りに行くと聞いた。

バカな。

早すぎる、と思った。

とりあえずマシヨルクに何か言ってやらなきやいけない気がして。

狩りの出掛けに、釘を差しておいた。

久々に、しかも町中で殺気を出してしまった。

受付嬢のハイビスちゃんが震え上がっていた。

うーん……未熟だなー、私。

そして。

結果として、ソウジはいとも簡単にバサルモスを倒してきた。

マジで拍子抜けだった。

マシヨルクの見立ては正しかったわけだ。

恥ずかしかつたけど。

とにかくソウジが無事で安心した。

心から。

そこからの狩猟で、ちよいちよい会う内に、ソウジとは自然と仲良くなっていた。

私の方は、だけど。

だって明らかにソウジ、心の距離開けてるんだもんなー。

ちよつと……怖すぎたかな。マシヨルクに。

寝ずに防具を作ったりもした。

なーんでここまでやるんだろう自分はー、なんて思ったりしたけど。

多分……惹かれてるんだろうなー、ソウジに。

どっちかって言うのと、放っておけないって感じだけどさ。

せつちゃんと呼ばせるのは、ソウジだけだし。

あーもう……。

……自分が自分でわかんない。

* * * * *

嫌な知らせが舞い込んだ。

ソウジと最近付いたオトモの子が狩猟に行き、とんでもないモンスターに出会ったという話だった。

駆け込んできたマシヨルクに教えられた。

最初は今更何の用だとか思ってたけど。

それどころじゃなかった。

「いけるか！セツヒト！」

「当たり前!!私が助ける！」

「……そうか！よろしく頼む！」

ギルドにすつ飛んでいくと、もうてんやわんや。

オトモの子は意気消沈していた。

でも、相手は斬竜ディノバルド。

まだまだソウジ達には手強すぎるモンスター。

むしろ、すっ飛んでソウジの救援を要請しに来たこの子に、好感をもてた。

狩り場に急行した。

ファンゴ車に乗るのも、何なら狩りに行くのも久々だったけど。

やられそうなソウジを見たら、瞬間的に全てを思い出した。

ソウジ、見えて。

これがG級だよ。

マシヨルクと交代でダメージを与えると、ディノバルドはすぐにぶっ倒れた。

結構ダメージが入っていた。

やるじゃん、ソウジ。

ズタボロだったけど。

とにかく、無事で良かった。

必死になって救援に来て、良かったって思った。

この時だったかなー。

……あー、好きなんだ、私って。

自覚したのは。

* * * * *

ソウジは私の教えを請いにやってきた。

狩りはもう、って思っていたけど。

……ソウジのためなら、復帰だって構いやしない。

とにかく、ソウジは必死だったから、私もいろんな訓練法を考えた。

小型を素手で仕留める方法は、実はあんまりみんなやってない。

でも、弱点の把握とか体の動かし方とか……そういう基礎にはもってこいだと思うんだよねー。

……ソウジは目的をちょっと勘違いしていたけど。

結果として、いい感じにレベルアップできていたから、よし。

そして、今年もワサドラ周辺に冬がやってきた。

モンスター……特に大型の数は激減する。

……あそこに行くしか、無いかな。

しばらく里帰りもしてないし。

というわけで、ギルドに直談判して、冬山の遠征に向かうことになった。

もうトラウマとかどうでもよくて、ソウジと二人きりとかどうなっちゃうのー!?と
か、結構舞い上がってたんだけど。

……受付嬢のハイビスちゃんもついてくることになった。

……まあいいんだけどー。

* * * * *

ちよつと思うところはあつたけど。

ハイビスちゃんは、もう本当にめっちゃいい子だった。

そして可愛い。

更には美人。

お胸も結構ある。

……うーん、私が男だったら放っておかないねー。

隙だらけで抜けてるところも結構あつて。

更に言えば、ソウジのことが好きだった。

………も、超意気投合したよねー。

お互いにソウジの不満を言い合つて。

好きなどころも言い合つて。

始めはあんなにビビられていたのに、冬山を降りる頃には凄く仲良くなれた。

親友つてやつが、できた気がした。

ソウジはソウジで、かなり強くなった。

冬山や氷海の手強い敵……ザボアザギルとかガムートとか。

その辺をクリアできたから、まあ及第点かなーとか思っていたら。

雪鬼獣ゴシヤハギまで、倒してのけた。

更に、あの轟竜ティガレックスまで。

なんの冗談かと思うほどに、ソウジは強くなつていった。

………このまま行けば、ソウジは恐ろしいほどに強くなるんじゃないや、って。思った。

思っちゃった。

ますます好きになってしまった。

………あー、もうこれやばーい。

* * * * *

ソウジはさらなるレベルアップを求めて、装備の充実を図っていた。

冬山では、新しい武器を私が作り。

ワサドラに戻っては、私と最強のスキル構成の装備を考えた。

というか、私のプロデュース！

うーん……楽しい……。

ソウジは引いてたけど。

そして一つ、おっきなハードルがあった。

金獅子、ラージャン。

こいつの素材が、必要。必須。

でも……こいつは他の大型と比べるべくも無いほどに、別格。

古龍とか、その辺の強さ。

だから、何なら私が素材を用意したって構わない、と。

そう本気でソウジに言ってみて。

そしたら……断られた。

「せ、せつちゃんさん……。素材はその、ありがたいんですけど……。できたら、自分で倒したモンスター達の力をモノにしたいと言うか。」

「……………」

「ラージャンはやめるように言われているんですけどね……。なのでその、わがままなんですけど。残りの素材も、頑張って集めたいと言うか。」

「……………ふんふん。」

「…………ハンターになって……。やっぱり俺はまだ甘い。どこか、命をとることに対して臆病なんです。これは、この世界の間人ではないことが関係しています。だから……。せめて自分の装備だけは、きちんと自分の手で倒したモンスターの物を使いたい。」

はつきりと、言われた。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけシヨックだったけど。
かつこよかった。

「……………いーねー。やっぱいいよー、ソウジー。」

「……………いや、すみません。急を要するつて時に…………。」

「いやー、男を見たねー。気持ちわかるよー? うん。」

「……………ありがとうございます。」

「まー、ラージャンはキツイだろうから…………その時は私が組んでもいいよー?」

「えっ!? 本当ですか!?!」

「うん。お力になれるかは分かりませんがー。」

更には一緒に狩猟の約束も取り付けた。

よし…………やるねー、自分。

狩れる時に狩らないとねー。

モンスターと、同じー?

* * * * *

渡りに船と言えはいいのか。

ラージャンの狩猟は、すぐにやってきた。

シガイアさんがウツキウキでとつてきたクエストだった。

首都に興味返しができると、もうニコニコ笑顔のシガイアさん。

うーん。

この人こういうところ、怖いよねー。

まあ私も楽しいからいいけどねー！

……ラージャン戦に同行したのは、私とソウジ、シヨウコちゃん。

更にはフェニク……キリツとした金髪のおねーちゃんと、そのちっこいオトモのトツバって子。

そして御者のおじさん。

結構大所帯だった。

まあ……二人きりなワケないと思つてたけど。

しようがないか。

しっかしフェニクって……やっぱりなにか隠してるな……。
とは思っていたけど。

その鈍く光るクロムメタル装備は、ぐつときた。

触らせてもらった。

ソウジに注意された。

ごめん。

そして、フェニクのオトモのトツバ。

やけにちっこい、なのに秘めたパワーは半端なさそう。

ショウコちゃんとはまるでタイプの違うアイルー。

ハンマーとか、珍しいよねー。

……ふとハスガを思い出してしまった。

体格とかまるで違うのに。

アイツもパワーは凄まじかった。

今でも、敵う気はしない。

そんなこんなで、チダイ村を經由して大森林へ入った。

環境不安定の土地。なのにモンスター影も無く。

あからさまにおかしかったけど。

原因はすぐに見つかった。

真つ黒なモンスター……ソウジが湖で見つけた途端、おかしくなってしまった。

目を痛がっていた。

大丈夫か、本当に心配した。

……ソウジはたった二年足らずで、アホみたいに強くなつて来ているけど。

その反動とか、無理してないかなとか、毎回不安になる。

いつか、消えてなくなっちゃうんじゃないかって。

心の奥底で、心配が絶えない。

………。

爆睡しているラージャンを見つけた。

それに、奇襲を仕掛けようとした時。

事件は起きた。

実はちよつと怪しいと思っていたフェニク。

一応気をつけるか、と思っていたら。

全く明後日の方向から、ソウジを狙う矢が見えた。
反射的に、体が動いた。

「避けろお!!ソウジさん!!」

「えー」

ソウジを守らなきやって。

死なないでって。

「っ!!ソウジ!!……ぐあっっ!」

「セツヒトさん!!」

振り返れば、もうちよつと矢を受ける場所を考えればよかつたかなーって思うけど。必死だったよねー。

「ぐう……あー……痛すぎー……!!」

「セツヒトさん！す、すまない！私としたことが!!」

「だいじょーぶ……フェニク!!」

「!!あ、ああ！」

バツ！

フェニクを、犯人の捕縛に向かわせた。

……疑って悪かつたね、フェニク。

放たれた矢と、ソウジの間。

自分でも信じられないぐらいの速度で、割り込んだ。

腕に刺さった。

いったあ……うわあ、こういうの久々……っ!!

「セツヒトさん！」

シヨウコちゃんもソウジも、駆け寄ってきた。

まあ……私は多分平気……じやなさそー。

毒かなー、これ……。

私はモンスターかったの。

「いやー、やっちったねー……ぐ……んー!!」

グジュ……ジュバツ……。

「うーわ、毒テングダケのやつかー……キツツイわけだよー……。」

「す、すみません……俺を庇って……今、解毒薬と回復薬を出します。……撤退しましよ
う。」

「うん……ありがとー……ソウジ? 気にしないでー。ソウジを守れたなら、本望だ
よー。」

「セツヒトさん……。」

「……好きな人を守れたんだ……私もうれしーー」

「グアアアアアアア
!!!!!!!」

「「?!」」

最悪。

もう、考えうる可能性の中で、一番最悪な事態だった。

私が負傷して、ラージヤンは起きて。

私の体は、ちよつと起こすので精一杯。

少しだけ逡巡していると、ソウジがすぐに大声で指示を飛ばした。

「……ショウコ!!」

「は、はい!!」

「……セツヒトさん最優先!一緒に逃げろ!」

「いやっ、でもー!」

「ショウコ!!今はこれしかない!!俺も隙を見て逃げる!」

「ソウジー!」

「二人とも!早く!」

「……………っ!!はい!セツヒトさん!はよう!」

「シヨウコちゃん……ソウジイ！」

シヨウコちゃんに引つ張られ、もつれる足をなんとか動かす。

ソウジ。

ソウジは。

「セツヒトさん!!」

「シヨウコちゃん……。」

「……ご主人さまなら平気です！もうめつちや強いんです！お陰様で………今は、逃げましょう！」

シヨウコちゃんは目にいっぱい涙をためて。

でも、渾身の力で私を引つ張っていた。

この子は。

この子は、なんて強い子だろう。

いいオトモを得たね、ソウジ。

………信じる。

ソウジなら、絶対に大丈夫。

「うん……………ぐうう……………シヨウコちゃん、ごめんねー、何とか、歩く……………」
「……………はいっ！」

とても戦えそうにない体。

ラージャンに挑めば、足手まといは必至。

あつという間に、三つの死体が出来上がるだろう。

……………ソウジの判断は、正しい。

自分を省みないという一点を除いて。

「ふっ……………ふっ……………」

「はあっ……………はあっ……………」

息を上がらせ、でも少しでも体力を温存しながら。
私達は、何とかスタートキャンプに戻ってきた。

「な、何だ!? セツヒトさんか!? ……おいおいおい!! 怪我してるじゃねえか!!」

「……………いけない。テントに入っ。おじさん、お湯沸かして。」

「お、おう!」

シヨウコちゃんとトツバとおじさん。

三人で、介抱してくれた。

私は、正直限界で。

テントで寝転がった。

「ソウジ……………ソウジ……………」

「ご主人さまなら大丈夫です! ……セツヒトさん、寝といて下さいね! 救援も、出しときますから!」

「シヨウコちゃんは……………強いね……………」

「ウチも……………心配やけど。今は、信じるしかない。あの人の無茶を止めるのがウチの役目やのに……………」

シヨウコちゃんの涙が、私の横に落ちてくる。

そう……だよね。

シヨウコちゃんも、辛いよね。

……ソウジ、絶対に帰ってきて。

女の子が、泣いてるよ。

* * * * *

全部シヨウコちゃんから聞いた話だけど。

私が寝ている間に、フェニクが犯人を捕縛して連行してきた。

尋問中らしい。

一発ぶん殴ってやろうかとも思ったけど、まあただの食い詰め者だろうし。

いいやー、もう。

そして。

ソウジは……無事に帰ってきた。

怪我していたけど、問題はなさそうって聞いて。

私はテントの中で下着1丁のまま、安心した。

何でこんな格好かって……寝てたら脱いじゃうんだよねー、私。

更に驚いたことに。

ソウジは結構やばかったみたいで。

それを助けてくれたのが、何とマシヨルクだった。

救援とかそれ以前に、ラージヤン狩猟と聞いて嫌な予感がしたとかで、首都からすっ飛んできたらしい。

………タイミングいいじゃん。

逆にムカつくけど。

ソウジは運がいい。

アイツとソウジなら……ラージヤンはイけるだろう。

マシヨルクは、首都にいるって聞いてたけど。

今回は、間に合ったんだね。

ふーん。

チダイ村に帰ったら、安静にさせられた。

毒の方も体の方も、もうかなり平気だったんだけど。

腕はまだ痛むので、お言葉に甘えた。

だってソウジと二人きりなわけで。

役得だと思ふことにした。

……そしてついでに、言いたくても言えなかったことを、話すことにした。

「……………ソウジー？」

「は、はい。」

「あの時さー……………私が言ったこと、覚えてるー？」

「あの時……………」

矢を受けたとき、私は反射的に好きって言ってしまっていた。

でもソウジは聞こえてなかったみたい。

まああの時は、事が事、だったしねー……………。

だから……………今しかない、覚悟を決めて言った。

「『好きな人を守れたなら本望』って……そう言ったんだよ……。」

「……………!？」

「……やっぱり聞こえてなかったか……その耳、一度見てもらったほうがいいねー。頭と一緒にさー？」

「あ、頭って——」

「ソウジ？ 私、本気だよー？」

「……………」

「一生懸命でー、たまにバカでー……でも、心の底から応援したくなる、ソウジがー……す、好きー……なんだよねー。」

「……………へ、へ、へい。」

「……………んふふー……あー！ やーーっと言えたー……うん。すつきりー。」

うん。

めっちゃスッキリした。

やっと言えたから。

そしたらソウジはあたふたしていた。

ふふん。

今までの私の想いを受け取って、たくさん困るといいよー？

ちよつとしたお仕置きだねー。

「……………え、えーつと、ですね、ちよちよちよいお待ちを……………」

「……………ぷっ……………あははははは!!」

「うえっ!? な、何で笑うんですか!!」

「いやー、ソウジ、めっちゃテンパってるから……………その顔、おもしろーい。」

「ええ!?! い、いや、俺なりに今真剣に考えて……………そ、その、……………純粹に嬉しいなあ……………と……………」

「……………う、うん……………」

ヤバい。

可愛い。

ソウジ可愛い。

ストレートなのに弱いんだね、ソウジは。

……………もつと早くからストレートで攻めればよかったなー。

しかし、もう告白してしまった。

ハイビスちゃんとかシヨウコちゃんとかドールとか……その辺には申し訳ないでも。

もう、止められないよー。うん。

「……………ちよ、超真剣に考えてまして！そ、その……………」

「……………ふふふー、いーよー？ソウジー。」

「へ？」

「返事とか、そういうんじゃないからさー。……どーしてもー、伝えたかったんだー。」

「……………」

「いつかまたー、私を好きになることがあつたらさー……嬉しいよー。」

「……………は、はい。」

「だからさー、今は……………」

もうここで決めてしまおう、と。

何かもう、今まで我慢していた気持ちが爆発してしまった。

ソウジの顔を目の前にして。

私は、キスをかます!!
よーし!!

……いつてきまーす!!

* * * * *

………キス作戦は、失敗した。

何であのタイミングでショウウコちゃんもマシヨルクも来るかなー!!
もう少しだったのにー!!

……と、その時は思ったんだけど。

よく考えたら、周りを出し抜いたのは私なわけで。

それに冷静になって考えたら、怪我をかはってあげた相手、それをいいことにキスを
迫ったわけで。

うーん!

……痴女じゃん!!

………止められて、良かったかも………。

……それから。

チダイ村を出て、ワサドラまでゆっくりと車に揺られた。

ソウジは今までの鈍感野郎のツケが回ってきて、色々と悩んでいた。

よしよし、存分に悩むがいいよ、ソウジ。

そういうところも、いいからねー。

ちなみに、ワサドラに着く前夜。キャンプを張ったとき。

マシヨルクと、色々話をした。

「セツヒト。……怪我は大丈夫か。」

「……………へーきだよ。」

「……………そうか。」

……………。

ワサドラに続く道の脇。

行商とか、ハンターがキャンプを張るための場所。

吹き抜ける草原の風が心地いい。

マシヨルクに死ぬほど頭にきていたのが嘘だったかのように。

その夜は、冷静に話げできた。

「……………ソウジを助けてくれて……………ありがとう。……………貸しにしといて。」

「貸しなど。私自身が心配だったのだ。」

「それでも。私の気が晴れないから。」

「そうか……………わかった。」

マシヨルクに恩を借りっぱなしでは、気持ちが悪い。

素直に礼を言つて、とつと返すに限る。

「……………間に合つて良かった。ソウジ君は、本当に死ぬ間際だった。」

「うん……………聞いたー。」

「……………セツヒトに言うのもどうかと思うが……………私はもう、惨事は起こしたくない。」

「……………。」

「ミヨシ……あの獄狼竜が招いた悲劇は、私は一生忘れない。だから、間に合ったんだ。」
「……そう。」

「セツヒトがいつまでも恨んでくれているおかげで、私は私を許さずにいられる。」

「……………許せないよ。そりゃあ、さ。」

「ああ。もちろんだ。それでいい。」

許せない自分と、感謝する自分。

2つが交差し、モヤモヤが晴れない。

少しだけ息を吐くと、マシヨルクが話を続けた。

「セツヒト。」

「なに。」

「…………ムルトとウミが亡くなる時…………二人は、お前の名を口にしていた。」

「え……………」

思わぬ話。思わぬ二人の名前。

マシヨルクの方を見る。

その目は、とても優しい目をしていた。

「……ごめん、と。つらい思いをさせてすまない、と。……繰り返しな。」
「……………」

「私達の中で、ミヨシの惨劇は一生忘れてはならないと決めていた。沸き立つ首都の歓声も、私達はどこか上の空だった。」

「ウミさん……ムルトさん……。」

私の思い出の中の二人。

凸凹で、仲睦まじくて、とても強くて……。

憧れの人たち。

最後まで、私のことを気遣ってくれていた。

……そんな二人がこの世からいなくなったことに対して、心の整理はまだできていなかった。

胸に、キュツと寂しい思いがやってきて。

悲しくなってきた。

ちよつと心細くなって。

そしたら。

ポン。

マシヨルクが、私の頭に手を置いてきた。

あの時と同じように。

アヤで少女だった私を慰めてくれた、あの時みたいに。

「……………立派なハンターになった。セツヒト。」

「あ……………」

「……………俺たちが愛した村を守ってくれて……………ありがとう。」

「……………どの口が言うのよ。」

「……………すまん。」

スツ。

手を離れたマシヨルクは、どこか落ち着かない様子でいた。

いつもなら、さっきの発言で私は激昂していたと思う。

……なのに、私は落ち着いていた。

あの時のままの関係性ってわけにはいかないし……色々思うところはあるけれど。

少しだけ。

ほんの少しだけ。

……安心している自分がいた。

サアア……。

……優しい夜風が頬を撫でて。

でもほんのりと胸の内が温かくなった。

「ソウジ君との仲を、私は全力で応援しよう。」

「……へっ!?!」

「……はっはっはっ! セツヒト! お前は私の妹のような存在だ!! 幸せを願わずして、何が兄か!」

「あ、兄貴面すんな！バカマシヨルク!!」

「はーはっはっは!!ソウジ君は断れまい!とつとつこましてしまえばいい!!」

「それを邪魔したのはあんたでしょ!!」

「……………そうだったな!!はーはっはっはっはっ!!」

「……………い……………つしょうコイツと馬が合うことは無いけどー!!」

「……………い……………」

「……………い……………」

「……………」

164あるソロハンターの話⑤

ラージャンの狩猟後、チダイ村を経由してワサドラに帰ってきた。

私は医務室に直行。

マシヨルクにいきなり担がれたのがムカついて、ぶん殴っておいた。

「こらー!!もうちよつと優しく運べこのバカマシヨルク!!」

ズドゴオン!!

「ぐうおおお……い、今のは効いたぞ!セツヒト!」

「……………ふんっ!」

こいつとウマが合うなんてことは、やっぱり一生無い!!

ふんだ!!

医務室で安静にするよう言われた私。

そしたらソウジがやってきて。

腕のことをかなり心配してきた。

……古傷の上。正直、痛い。

本気で腕の振りを試したら、次こそ本当に動かなくなりそうで。

そしたらソウジに嫌われちゃうんじゃないかって。

怖かった。

でもソウジは、間髪入れずに否定してくれた。

「……方一、腕がどうにかなってたとして……そんなことで嫌いになるわけじゃないです。」

「そんなことってー……だって私はソウジにとって最強なんですよー？……強くないとー」

「いいえ、関係ないです。……これから俺とセツヒトさんがどういう間柄になるうが、この件は関係ない。……もう一度聞きますけど、腕、本当に大丈夫ですか？」

真剣に心配してくれた。

まるで、私の考えなんてお見通し、みたいに。
ちよびつと悔しくて。

だけど、とつても嬉しかった。

「……つ……ちよつとまだ痛むけどー……だ、大丈夫、かなー。」

「……本当ですか？」

「ほ、本当だよー。痛むのは傷のところでー、その、獄狼竜の時みたいに筋とかじゃないからー……多分、大丈夫。」

「……よかった……。」

痛いのは痛いし……本気で動かしたらどうなのかはわからないけど。

ソウジは本当に心配してくれたみたいで。

う、嬉しいなー……。

でもやっぱり、ちよつと悔しいから。

苦し紛れにいじっておいた。

* * * * *

そうこうしているうちに。

ワサドラ周辺の事態は急展開。

チダイ村、その西の大森林の湖で見た黒いモンスター。

黒蝕竜ゴア・マガラ、というらしいけど。

そいつがワサドラ近くの丘陵地帯に出たらしい。

……黒い霧を発生させ、周囲一帯に影響を与える厄介なモンスター、と。

ソウジの体調不良の原因も、多分そいつ。

ソウジから依頼された防具の作製を急いだ。

もう、急ピッチも急ピッチ。

ちよつと前に矢で射られた人間とは思えないぐらいには、働いた。

辛くはない。

だってソウジの為だし。

………わ、我ながら愛が重いかなー。

そして。

しかしというかやはりというか、ソウジはゴア・マガラの狩猟を頼まれていた。

シガイアさんの信頼も厚いもんだよねー。

……頼りすぎだとは思っただけどねー……デビューして一年半の新人にさ？

それだけソウジは強くなった、ということだけど。

ソウジの装備の最終調整をして、送り出した。

そりや、私も行けるなら行きたかったけど。

……怪我はまだ、治りきっていない。

* * * * *

ソウジは、帰ってきた。

そりや、完璧に無事であつてわけではなかったけど。

ちやんと帰ってきてくれて、よかった。

ソウジの周りの人、みんな喜んでいた。

シヨウコちやんが体を張ってソウジを守つたつて聞いた。

体を張つたのは、私だけじゃないつてこと。

……ソウジ、愛されてるねー。

いつもの様にみんなでわちやわちやと騒ぎ立てた。

町中どこも、お祝いムード。

そりや、流通も何もかもストップって聞いたら、みんなキツツイよねー。

……それをソウジは救ったわけだ。

やるじゃん、と素直に思った。

……うーん。そう思うと、何か胸がキunksunksunするなー。

むー。

ギルドで打ち上げも行われていた。

私もその話を聞いて、ギルドの集会所に向かった。

無関係なんだけど、何だか行かなきゃいけない気がして。

ついでにソウジに会えるかなって。

……そしたら、ソウジは既に帰っていて。

カウンターの、シガイアさんとミヤコさんがヒソヒソ話をしていた。

「……こんばんはー、シガイアさんと……ミヤコさん。帰ってたんですねー。」

「あー、セツヒト、久しぶり……あなた、相当無理したんですって?」

「うわー、耳が早いなーミヤコさん。」

「もう、ソウジくんに影響されたのかしらね……セツヒト、怪我は平気なの？」
「はははー、まあ……多分大丈夫でーす。」

嘘をついた。

本気の振りは、まだ試していない。

そして……。

「……セツヒト、腕の調子、よくないだろ。」

「……シガイアさん。」

「隠しても無駄だ。どれだけ長い付き合いだと思っている。」

「……はーい。」

シガイアさんにはバレバレだった。

すぐに見破ったねー……。

「……しばらく狩猟は厳禁。町から出るなよ？」

「善処しまーす。」

「……セツヒト。」

「……はい……休みます。」

腕の調子。

ちよつとまあ……今までのようにはいかなかなー……。

まあでも、それはいい。

ソウジが助かったなら、私は本望。

そこに、迷いはない。

せつかくここに来たんだし。

二人の話を聞いておこうと思った。

聞かなきゃいけない気がした。

「シガイアさん達、何の話してたんですかー？」

「……………」

「……………」

「うわー……そんなヤバい系の話ですかー……？」

二人が押し黙る理由。

相当な厄ネタか、私には聞かせたくない理由があるか、だ。

「……セツヒト、他言無用、そして絶対安静。」

「約束します。」

「……わかった。」

そこから、シガイアさんとミヤコさんから、とんでもないことを聞いた。

ソウジが倒した黒蝕竜ゴア・マガラが、復活。

古龍、天廻龍シャガルマガラとして。

場所は、首都西部の禁足地。

その討伐メンバーに……ソウジが加わるという。

そんな話……。

「……マジですかー？」

「本当だ。」

「わー……。」

シガイアさんとの付き合いは長い。

この人の本気は、すぐわかる。

古龍、復活。

……。でも。

「……ソウジに依頼したのはー？」

「……誤解無いように私から言うけど、中央も切羽詰まってる。……ハンターの数を集めてなお、結構ピンチなの。ソウジ君の手伝いがなければキツいってね……で、派遣されたのが私。」

「ミヤコさんが、直々にー？」

「そう。だから……シガイアさんの独断でもなければ、中央の謀略とかそういうんでもなく……純粹で遠回しな救援要請……そういうこと。」

「……………」

ミヤコさんには悪いけど。

首都の考えなんて分からないし、知りたくもない。

だが、結構まずい事態ってことは伝わってきた。

「セツヒトのことだろうから、付いていくつて言い出すと思つてな。先に釘を差させてもらった。」

「……………いやー、シガイアさん。流石です。」

「ソウジさんのことに関しては、セツヒトは無茶をしかねないからな。…………フオローとして、うちからはハイビスさんを派遣する。セツヒトは、怪我をまず治すんだ。」

「……………はい。」

……………なんて、口では言つてたけど。

私は諦めてなかった。

ソウジが、もつと強いモンスターに立ち向かうんだ。

ゴア・マガラで、ボロボロになったのに。

それよりもつと強いやつと。

……………そんなの、1人で行かせられるわけ、無いじゃん。

* * * * *

というわけで、ソウジの部屋に侵入した。

窓から。

自分一人を支えるくらいなら、腕もそこまで痛くない。

ソウジは部屋にいた。

一人で。

……あれ？チャンス？

そう思って、何ならチューでもかましてやろうかと思っただけ。

完全にストーカーだと思って自重した。

それに……ソウジの目は、覚悟が決まっていた。

この目を、私はよく知っている。

死に行くようなハンターの、恐れを知らない様な、キマった目。

……やっぱり私、行く。

ソウジに、ついていく。

「いや、危険な狩猟になりますし。」

「いやいやー、私だよー？この天下のセツヒトさんだよー？古龍なんて、ボッコボコにするってー。」

「……………ふっ！」

「!!？」

ヒュン!!

お遊びで格闘の動きの真似をしてみたら。

ソウジがいきなり私にグーパンチを繰り出してきた。

お？何だ？私を試そうってのー？とか、頭の中では余裕ぶっこいてたんだけど。

反応、できなかった。

頭ではなく、腕が。

上がらなかった。

「……………俺を庇った、傷ですね。」

「うー……………そうなんだけどー。で、でもねー？右手だって戦え——」

「——絶対に、ダメです。」

「……………」

「俺の前で傷つくのは…………もう、させたくない。」

ソウジにもバレバレだったかー。

嬉しいような、悲しいような。

そんな複雑な気持ち。

「いやー、流石に古龍はねー。ちよつち…………キツイか。」

「ちよつとではなく、キツイですよ。…………というか、俺が気づいてなかったら付いてくるつもりだったんですか?」

「……………うん。」

「いや、それは……………」

「…………ソウジが、好きだから。」

「っ!!」

言っちゃった。

…………もう、そのまま気持ちを押し出すことにした。

好きだから、心配ですって。

ソウジに、ストレートに伝える。

ソウジは、ストレートに弱い。

「……ただ、それだけ。……ソウジ、目が、本気だから。」

「……………」

「考えたくないんだよー？でもさー……そんな目をして、消えてった奴なんて、たくさん見てきてからさー……………」

「……………」

「ふ、不安……なんだよー。うん。本当に……。ついていって、少しでも、ソウジが生きていられるならさー……そりゃー、い、行きたいよねー。」

「……………セツヒトさん。」

「……………」

ここまで言つて、ソウジは考えた。

狩猟は無理かもだけど。

なら、先達として教えられることは山ほどあるし。

私だって、役に立ってみせる。

だから、ソウジ。

私も連れてけー、って。

心の中で、全力で念じた。

「……………ダメです。」

「えー！ー!?なんでよー！ー!!」

はーい、はっきりと断られましたー。

えー！ダメなのー!?って思ったけど。

ソウジは私のことをとにかく心配してくれていて。

その気持ちは嬉しかった。

普通の女の子の様に扱ってくれて。

「……………絶対に、帰ります。俺。絶対に。」

「……………約束、だよー?」

「……………はい。」

「……………ま、まあ？…よし。」

ソウジが絶対に約束すると、念押ししてきた。
こりや、だめか。

どさくさでキスもかまそうとしたら、「殺す気か」と言われた。
人の唇をなんだと思ってるんだよー。もー。

* * * * *

仕方がないのでお留守番。

ワサドラは今日も平和。

ソウジ達はとつくに首都に着いた頃かなー。

……さーみーしーいー！

まあしようがないかー……。

とか思ってたら。

私の武器屋に来てほしくない人ランキング、堂々1位の男が、暑苦しくやってきた。

「セツヒト！セツヒトはいるか!!」

「……………うるさいよー、もー。」

「おお！いたか！よかつた！」

こんな爽やかな朝っぱらから……………何の用だ。

冷やかしだったら容赦しないけど。

「何の用ー？私こう見えて忙しいんだよー？」

「暇そうではないか！いや、可及的速やかに伝えたいことがある!!」

「……………聞くー。」

「うむー」

マシヨルクはふざけた態度にしか見えないけど、目は真剣だった。

この男読めないところがあるけど。

すると、たっぷりの間を空けてマシヨルクが話を続けた。

「……………雷狼竜だ！」

「……………はあ？」

「首都北西部に雷狼竜が現れた！」

「……………だから、何？」

雷狼竜。

ジンオウガ。

その名を聞いて、拍子が抜ける。

確かに、ワサドラ以南にジンオウガは珍しいけど……………それがどうしたっていうの。

「経緯はこうだ！まず、首都西部でシャガルマガラによって引き起こされた超大規模なスタンピードが確認された！」

「まあ……………それはありうるよねー。」

「更に続報！スタンピードは進路を南に向けて変更し始めた！」

「……………北から強いやつが現れたとかー？」

「うむ！私の見立てもそれだ！ギルドが対応に追われているそうだ！」

「ふーん……………」

別にまあ、おかしいところはない。

いや、おかしいっちゃんやおかしいのかなー。

進路を……変える？

必死こいて逃げてたモンスターたちが？

そんなことって……。

「……………マシヨルク。」

「ん!?なんだ!」

「……………まだ続き、あるんでしょ?」

「……………ああ!」

「勿体つけずに教えて。」

だから何が言いたいんだコイツは。

ソワソワし始める私。

何だかなー……。

すごく嫌な予感がする。

「……更に更に続報だ！その山地帯に出現……いや、観測されたジンオウガ。」

「……………」

「……………体色が、通常と比べて黒っぽかったそうだ!!」

「!？」

ジンオウガ。

黒。

進路を変えたモンスター達のスタンピード。

強力個体の出現の可能性。

山地帯。

……………。

「……………獄狼竜？」

「確度は低い！だが！」

「……………」

「……………嫌な予感しかせん!!!」

わかる。

……その感じは、分かる。

私だって。

黒っぽいジンオウガなんて聞いたら。

獄^ヤ狼^ツ竜としか、思えないよ。

「……………どこ情報？」

「ワサドラギルドの方の観測班だ!!首都ギルドは唯のジンオウガだろうと結論づけて、動き出すか迷っているところらしい!!」

「……………」

はつきり言うけど。

アイツは、別格中の別格。

全盛期の私が、良いようにやられた相手。

私の……私の周りの人たちみんなの、因縁の相手。

でも、すでに首都が動いているかもしれない。

そんな状況なのに。

マシヨルクは、アホ丸出しの提案をしてきた。

「セツヒト!!」

「なに。」

「行くぞ!!」

「……………どこに。」

「その山地帯、ジンオウガのところなんだ!!」

「……………アンタ、バカなの?」

ここから首都まで数日の距離。

そこから更に北西に向かって半日の場所、それが山地帯。

禁足地よりは近いし、ワサドラとザキミーユの管轄の狭間。

……………とはいえ。

「……………間に合う訳無いじゃん。首都もアホじゃないし? ヤバい奴の可能性があるなら、もう行ってるんじゃない?」

「うむ！それはそうだ!!討伐に向かっている間に、ジンオウガもどこにいくかわからんだらう！普通に向かつては、我々が間に合うわけがない！」

「じゃあー」

「普通では、だがない!!」

「普通普通つてうるさ……アンタ、まさか……!!」

「ああ！」

実に自慢げに、そして誇らしげに胸を張ったマシヨルクが、大声で話す。

「アレに乗れば、間に合うかもしれん!!」

* * * * *

ヒュオオオオオ………!!

風が強い。

いや、そうじゃない。

私達が、速いんだ。

ビシビシと顔に当たる風。

鼻の上まで布を覆ってきたけど……寒すぎ!!

「うっわー……寒っ!!」

「何だだらしない！セツヒトは北の山出身だろう!？」

「それでもー！キツイもんはキツイってのー!!」

「ハツハツハツ!!だが！速いだろう!!」

「確かに……移動速度はダンチ！」

マシヨルクが提案してきた、とんでもない手段。

普通じゃない、移動方法。

……竜便に乗って。

いや、ぶら下がって移動するという。

……まあその辺の人からしたら、ただの自殺行為だよねー……。

提案に乗った私も私だけどさー。

「前の貸しは、これでチャラだな！」なんて言われたら、もう行くしかなかった。

竜便。

ギルド自慢の、この大陸最速の情報伝達手段。

ギルドでもトップレベルの人間しか使えないこれは、はつきり言つて人が運ばれるものではない。

常人ならざる腕力と何より度胸が必要。

そりゃー……私とかマシヨルクならワケないけどさー。

怪我也、自分を支えるくらいならそこまで痛くはない。

「メルノス……だっけー!?これー!?」

「ああ!!ギルドの中でも最速の二体だ!!力も強い!!」

「それはすごいけど……!うわっ!」

「気をつけてくれ!バランスを取り間違えると、地上に真つ逆さまだ!!」

「そういうのは乗る前に言えつての……。」

「ん!?何か言つたか!!」

「……なんでもない!!」

風切る音で、マシヨルクとの会話は常に大声。
まあマシヨルクは常に大声だけだ。

ヒュオオオオオ……!!

この風だ。

よく聞こえないったらない。

翼竜という、モンスターの中では比較のおとなしいモンスター。

この大陸には生息しておらず、今ぶら下がっているコイツも多分外から連れて来られた翼竜種。

ギルド専属の調教師が、野生の翼竜を飼い慣らしして、荷物や郵便の運搬等に使えるよう鍛えたモンスターだ。

ザキミーユにしか居ないってことになっているけど……。

「シガイアさんの許可が取れて良かった！」

「……私が狩猟に向かうことはー？」

「黙っている！」

「……なんか悪いことしてる気がしてきた。」

「実際悪いことだ！シガイアさんのお気に入りの二体をこのように扱ってはな！しかもお前は絶対安静！……はっはっはっ!!これは怒られるな!!」

「……笑うな!!」

シガイアさん秘蔵の翼竜。

それを、二体持ち出す。

しかも、私が。

……どうやったって、シガイアさんに大目玉を喰らうだろうな……。。

「……セツヒト！大森林を抜けたら一度降りる！」

「降り方ってどうやるの!？」

「フイーリングだ!!」

「……アホかー!!」

獄狼竜とかシガイアさんとか言う前に、私無事でいられるのかなー。
とにかく頑張つて、私とマシヨルクは降下した。

* * * * *

ワサドラから首都までの道のりは、どう頑張つても数日はかかる。

南西に向かって行き、大森林を迂回してチダイを経由。

南下を続けて、首都へ。

だが空を飛ぶことで、目的地の山地帯まで直線で進める。

一日足らずでたどり着くことができた。

竜便が早いわけだ。

タオカカから一日ちよつとで首都に文が届くんだから、そりや早いって分かっ
たけど。
すげえ。

「……………では！メルノス達はここで首都へ！行けっ！」

バサツ……。

文句も言わずに飛び立つと、あっという間に南東、首都方面に飛び立った二体。私達とその荷物を降ろして本来の重量に戻ったからか、軽々と去っていった。

「……………帰りは歩きで首都へ行くとして……………山地帯って初めて来たな。」

「……………私は何度もある！だが……………ここまで異様なのは初めてだな！」

相変わらず暑苦しく話すマシヨルク。

だが流石に歴戦の猛者。その指摘は合っているだろう。

周囲に生物がいる感覚は無く、感じるのは異様な気配。

いるね……………これ。

「もう少し西だな……………セツヒト！動けるか!？」

「今更聞くなっつーの。……………いけるよ。でも、過度な期待はしないで。」

……ジャキン！

徐ろに取り出した双剣。

一回振っただけでわかる。

恐らく、そこまで動けはしない。

「……多分、前みたいなきはできない。陽動に徹する。」

「ああ！それでいい！私がいる！」

「……はいはい。」

ムカつく。

ムカつくけど、頼もしいつちや頼もしい。

その辺の信頼は厚い。

「……うわっ……。」

「……………凄まじいな……。」

山地帯の山を登り、ふと西に目を向けた。

眼の前の光景に、胸が痛くなる。

遠く見える、山。

その一つが、黒い霧で周囲をドス黒く覆われていたからだ。

アレが、例の古龍の影響だというのだから、凄まじいというほかない。

あそこに、ソウジが行く……。

「マシヨルク。」

「ん？何だ？」

唐突に聞いてみる。

なぜ、私を連れてきたのか。

わかりきってること、だけど。

「何で……私を、ここに？」

「……………ソウジ君についてきたかったのだろうか？」

「……………」

「何もしないで黙ってソウジ君を待つなど、セツヒトは辛いだろうと思つてな。それに……仮にここに居るのが獄狼竜だとした場合だ。……お前の枷を外したいと思つた。」

「枷？」

「あの時のように、悲劇は生ませない。獄狼竜なら、首都近郊の住人はただでは済まない。おとなしい個体ならば見逃してもいいが……観測班に見つかるほどだ。やつは、動いている。」

「……………」

「今回は。今回こそは。我々が倒す。引導を渡し、過去の私達を払拭する。……それが、セツヒトを連れてきた理由だ。」

「……………」

ムカつくやつだけど。

コイツは、一貫して自分の正義を貫いてきた。

今回も、かなりの無茶をして私をここに連れてきた。

私も、何も言わずに付いてきた。

「…………急ごう、マシヨルク。何か、雰囲気がおかしい。」

「……………ああー！」

礼は言わない。

心の中で感謝はしておこう。

* * * * *

山地帯は、はつきり言って狩り場には向いていない地形と言えた。

ゴツゴツでむき出しの岩場が多く、日の当たらない場所には苔むしたものである。

峻険な、とまでは言わないが、傾斜は多く、広き場所は少ない。

そこかしこにある木々も含めて、モンスターが身を潜めやすい場所とも言えた。

まあ、どこだろうと油断などしない。

私達はG級。

気の緩みがあつては、ここまで生きてこられてはいない。

自然と言葉を控え、嫌な予感がする方へ進む。

極限まで集中していたからだだろうか。

それとも、過去の記憶が呼び起こされたからか。

それはわからない。

わからないが。

「……………マシヨルク。」

「……………」

スツ。

つぶやくような私の声を聞き逃さず、身を低くするマシヨルク。

この辺りの察しの良さは、流石。

一声で、状況を把握したようだ。

大きめの木の裏に身を潜めた私達。

その向こう。目立った音は聞こえない。

だが、木々が触れ合う僅かな音がして。その草木のさざめきに違和感を感じた。そして、身をかがめた直後。

遠く向こうに、見えた。

山地帯の中腹に。

禍々しい体色。

この山に似つかわしくない、黒と白。

時々弾けるように、体から発せられる赤い雷光。

凶悪な色合いは、全身の棘々にも散見される。

何より、ようやく見えた頭部。

折れた角が、見えた。

あの時私がへし折った、角。

……間違いない。

間違いない、ヤツだ。

ジンオウガ亜種。

獄狼竜。

「……………」
「……………」

言葉を、出せないでいた。

私達、二人とも。

怖気づいているわけではない。

寧ろ、迸るほどの感情を抑えられない。

興奮、怒り、悔しさ、悲しさ、後悔。

色んな思いが、頭を渦巻く。

唯一つ、私の心の中で共通して響くのは。

アイツが、憎い。

「……………っ!!」

「……………」

私が、抑えきれぬ殺気を放とうとすると。

マシヨルクが、手で制してきた。

間合いを測れ、と。

落ち着け、と。

そう言ってる気がした。

「……………」

コクン。

素直に応じる。

そうだ。

ここで逃すわけには行かない。

ヤツは、気づいていない。

己を屠る、ハンター達の姿に。

落ち着け。

奴が、一步一步、足音も立てずに近づいてくる。

流石の足運び。

無双の狩人……雷狼竜に遥かに勝る強さ。

一つひとつの所作からも、その強さが伝わる。

そして。

正面に位置する私達には、気づいている様子はない。

焦れる。

焦れるが、焦らない。

チャンスを。

初撃の間合いを、逃すな。

迫りくる、対決の時。

雌雄を決するまで。

あと、数十秒。

165 古龍討伐を開始しましょう。

俺達が禁足地にたどり着くまでに、ガーグー達に異変が起きた。

正確にはガーちゃんの方がおかしくなった。

落ち着きなく首を振り、進むことが難しくなった。

苦しげに呻きながらも走る姿に、心配した。

無理もない。

辺り一帯、黒い霧。

申し訳程度の感染対策では、ただの付け焼き刃。

こうなることは、目に見えていた。

「どろっ！どろっ！！」

おじさんが巧みな綱さばきでガーちゃんを宥めつつ、何とか禁足地の麓までやってきた。

……ここからは、流石に歩くことにした。

「…………おじさん。」

「……………すまねえ。限界みたいだ。」

「いいんです。本当に……………ありがとうございます。」

「気にしねえでくれ！もらった薬、試してみるからよ！幸いもう一匹は変わらねえ！一
旦戻るとするわ！」

「はい。…………お気をつけて。」

おじさんにそう言葉をかけると、いつものように軽口が飛んできた。

「ははははは!!そりや俺のセリフだ!!ギルド風に言えば、ご武運を、つてな!……………シヨウ
コの嬢ちゃん!」

「はいっ!」

「ソウジさんを、よろしく頼む!」

「…………お任せください!」

「ああ!…………ソウジさん。」

「はい。」

「……霧が晴れたら、また迎えに来る。いや、何が何でも、絶対に俺達が迎えに来るからよ。だから……頑張ってこいよ!!」

「……はい!!」

ガラガラガラガラ……。

少しずつ遠ざかる、おじさん達。

黒い霧のせいもあって、すぐに見えなくなつた。

ありがとう、おじさん。

ガーグー、がんばつたな。

ありがとう。

行つてきます。

「……シヨウコ、行こう。体調は？」

「はいっ!!問題なし!です!」

「……よしっ!」

その返事を皮切りに、俺達は禁足地のでっぺんに向けて、歩みを進め始めた。

頂上からは、ゆつくりと下ってくる黒い霧。

まあなんとも分かりやすい手がかりである。

隠れる気とか無いな、シヤガルマガラは。

「索敵とかその辺、気にせんでええから楽ですね。」

「ははは。確かにな。」

シヨウコが同じことを思ったようだ。

その言い方に、心が少し軽くなる。

やっぱりシヨウコは、俺の最高の相棒だ。

頼りにしてるぜ。

* * * * *

禁足地。

名前の通り、足を踏み入れてはならない場所。

大陸に入植が始まる前から、そう呼ばれていたらしい。

古龍……まあつまり相当な昔から生きているモンスターがここにいて、いつしか先住民から禁足地と呼ばれるようになった……ということなんだろう。

だが、頂上近辺にたどり着いたら少し驚いた。

「……こんな場所にも、スタートキャンプがあるんだな。」

「キャンプっていうよりも、掘っ立て小屋があるだけですけどね。」

禁足地だと言うからってつきり何の人工物もないところだと想像していた。

だが、小屋が一つ。

その周囲には、岩に結ばれた縄やその縄にくくりつけられた様々な紋様の布など。山を登りながら強風に煽られていたが、不思議とこの近辺は寒くない。

風はある程度は強いが、凌げそうな場所ではある。

「昔の人が作ったんですかね？」

「……だろうな。そしてあの先……多分シャガルマガラがいる。」

もう、霧を頼りにしなくても分かる。

明らかに放たれる、禍々しい空気。

それが、頂上へ向かう道から漏れ出ていた。

その周囲には、古く色褪せた無数ののぼりが立っていた。

まるでお祭りの飾りのようだが、風雨に晒されてボロボロになった布は、どこか不気味ですらある。

「『この先禁忌の地。立ち入るべからず。』……か。」

「……ご主人さま、あれ読めるんですか?」

「えっ、読めないのか? ショウゴ。」

「は、はい。ウチは知らん文字です。」

のぼりに書かれた文字。

いつも使っている文字とはかなり違うが……俺は何故か読める。

ショウゴが読めないってことは、俺にまだギフトの力が残ってるんだろう。

女神様も、見てくれているのかな。

……行つてきます。

「よし。最終確認。」

「装備……アイテム、問題なしです！」

「よし、今日も基本は手数で勝負。挟撃で行くけど……まあ行き当たりばったりだ。」

「はい！いつも通りですね！」

「ああ。目標は……シヤガルマガラ討伐。そして、ワサドラに帰ることだ。」

「異存無し！です！」

「よし！……行こう！」

「はいっ！」

元気なシヨウコの声。

心が軽くなり、元気が湧く。

この子は死んではいけない。

もちろん、俺も。

シヨウコだけじゃない。
二人で。

生きて帰る。

……。

……。

「……………久しぶり。……………で合ってるのか？これ。」

「……………。」

狩り場に入っですぐ。

中央には、待ち構えていたかのようにシャガルマガラがいた。
叫ぶでもなく、かと言って座り込んでいるわけでもなく。

ただ悠然と立ち上がり、俺を見つめる。

待っていた、ってことか？

双剣を取り出した。

だが、シャガルマガラは再び叫ぶ。

「……………ガアアアアアア!!!」

「つ……………」

二度目の咆哮。

うん。うるさい。

でかいな、コイツ。

そして…………ちよつと気持ち悪い。

翼、そこに爪はあるのに…………しつかりと四本脚で立っている。

体色は、翼が金色、体は青白く、灰が交った奇妙な色も見える。

翼を広げれば、相当に大きい。

更には、口から漏れ出る濃い青紫の煙。

その色にも立派な角にも、ゴア・マガラの面影は残っているが…………。

「完つ全に別物じゃん…………。」

「ガアアア!!!」

バツ!!

俺の発言に怒りを覚えたのかどうかは知らないが。

シャガルマガラは初撃をはやらず、バックステップで俺と距離を取った。

「……………ふっ!!」

「ギャア!!」

離されないように付いていった。

その瞬間。

ビュオ!!

かなりの速さで繰り出される左前脚。

通常ならその攻撃をいなし、次に備えるところ。

だが、俺は構わず突っ込んだ。

「おおおおお!!!」

ヒュン!

ズザザザザン!!

ヒュパツ!!!

「グアアアアアア!!」

(……………成功!)

宙に浮きながら、技が入ったことを確認。

回避攻撃が綺麗に決まった。

(懐に入るには……………思い切りと度胸!!)

大型のモンスターは、逆にその懐にスキがある。

入り込むには、とても勇気がいるけど。
リターンはでかい。

もちろん、リスクも。

クルツ。

ヒュパ!!

ザシユ!!

「ギヤアア!?!」

「つと……。」

足で踏ん張り、そのまま横一閃。

そのデカイ翼に斬撃をくれてやる。

固くはない。

刀もいっ斬れ味だ。

感謝します、セツヒトさん。

「シヨウコ!!」

「はいっ!!」

技後硬直。狙われやすい大きな隙。

そこを完璧なタイミングで、シヨウコが背後から斬りつける。

ザザザザザ!

ザン!

「こっちや!!」

「グアアアアア!!」

ブン!

挟撃の形。

戦いに入る前の段階で、シヨウコには背後に回ってもらっていた。気づいていたのかは知らんけど。

とりあえずは、うまくいった。
シヨウコの方を振り向くシャガルマガラ。

「……背中がから空きだ！」

ダン！

ヒュオ……。

ズザザザザザン！

ザシュ！！

「ギヤアアアア!?」

「ぬおらっ……!!」

ザザザザザ!!

空中回転乱舞。

ティガレックスで極めた、この技。

ちやんと、俺のものになっている。

隙だらけの背中に、斬撃をお見舞いした。

「ご主人さま!!」

「ああ！わかつてる!!」

タタン！

シヨウコと俺、それぞれがバックステップで離れ、安全な距離を取る。

調子に乗って攻撃を喰らう……なんてことは一番避けたい。

シヨウコに怒られてしまうからな。

「初撃はうまく……?!」

攻撃が入っていることに多少安心したのも束の間。

向こうに見えるシヨウコの足元から、イヤな予感がした。

「シヨウコ!! 飛び退けえ!!!」

「は、はい!!」

ヒュイイイイイイ……。

ドガア!

(爆発!?)

ただ、驚くしかなかった。

シヨウコが飛び退いた直後。

地面が青紫色に光り、そして爆発。

白い破片のようなものが、周囲に散らばった。

「シヨウコ!!」

「無事です!! これ氣い付けて下さい!……相当強いですし……ふわっ!!」

ドガア!!

「……どこに出てくるか、分かりません!!」
「……了解!!」

新たな光が発生する。

だが、さすがはシヨウゴ。

光の爆発を、見た瞬間に避けている。

この反射速度。俺は到底敵わない。

しかし、厄介な攻撃だなアレ。

(となると……。)

「ガアアアアアア!!」

ギョオン!!

ドガッ!ドガッ!ドガッ!!

……………。

猛り狂ったかのように、気持ちの悪い四つ脚を動かして俺に突進してきたシャガルマガラ。

俺は思考をつづけながらも、それを横つ飛びで回避する。

「グウウウウウ……。」

(……発光した瞬間に対応するしか無い……。)

地面が発光してから爆発するまでのタイムラグ。

一秒にも満たない程の時間で、回避する。

それしか無い。

だがもし、攻撃や回避の最中に地面が光ったら……。

(その時は……食らうの覚悟で、行くだけだな。)

もとより無事で済む等、これっぽっちも思っちゃいない。

死を受け入れてはいない。

ただ、怪我をしないで帰れるほど、甘い相手でもない。

「ギヤアアアアア!!」

「来い!!」

決めていた覚悟を再確認できた。
やるしか、ないんだ。

「グウウウ……アア!!」

俺に体を向けたシャガルマガラ。
一瞬で距離を詰めたと思ったら。

グワア……!!

ズドオオオ!!!

「うっわ……!!」

両前脚を振り上げ、その体を地面に打ち下ろしてきた。
信じられないほどの地響き。

いや、もはや立っていられないほどの地震のようだ。
ふらついてしまう。

「……くっ!!」

「グアアアアア!!」

動けない俺を見て、シヤガルマガラは好機と判断。
右前脚を振り上げた。

(決ら……避……無理……!!)

態勢を崩されて、うまく動けない体。
迫る攻撃。

なので俺は。

ふらつく体を、そのまま諦めることにした。

「ガアアアア!!」

(……集中……!!)

コンマ数秒の世界。

ゆつくりと動き出す、周囲の様子。

集中に集中を高める。

諦めたといっても、攻撃をそのまま受け入れる訳では無い。

揺れ動く自分に逆らわずに、自身の体幹を捉える。

体の軸を、見つける。

(……あつた……このタイミング……!!)

ギョルン!!

ヒュオツ!!

ズガア!!

「ご……ご主人さまあ!!!」

「………無事だ!!態勢を変えるな!!」

「は、はい!!……よかったあ……。」

シヨウコの声が響く。

大丈夫だぞ、俺は生きてる。

……シャガルマガラの反撃。

ふらつく俺は、格好の餌食であったはずだ。

絶対に、一撃で仕留めに来ると思った。

だから、俺は回って回避した。

極限まで脱力して、ただただ体の軸……独楽の中心を捉えて。

(回転回避……ラージヤンには外したけどな。)

ラージヤン戦。

その怪力に、自慢の回転回避が為す術なく破られてしまった。

あの時は、体がこわばっていた。

それでは、強敵には敵わない。

体をどろどろに溶かして、まるで液体のようになった自分をイメージして。

攻撃を、受け流す。

何とか成功した。

一か八か、だったけど。

「よっ……と。」

バツ。

バックステップで、再び距離を取る。

先程から、博打のような狩猟が続く。

さっきの回避も、そう何回もできるわけではない。

ギリギリの狩猟。

できることをすべてぶつけてもなお、コイツには足りない気がする。

だが、今までやってきたことを全てぶつける。

それしか無い。

自分を、シヨウコを、信じる。

「……シヨウコ!!」

「はい!!」

「霧の方はどうだ!？」

「問題ないです!!」

「よし!!何かあったら——」

「——すぐ言います!!」

すぐの返事。

よし。今のところ、シャガルマガラの鱗粉の影響は無さそうだ。

俺もシヨウコも。

いいことだが、油断は禁物だ。

「やああああ!!」

「グアアアア!!」

ザザザザ!!

ザシュ!!

ドガア!

シヨウコが巧みに避けながら、後ろ脚を斬りつけ続けている。

シヤガルマガラには多少は効いているようだが、大きなダメージにはなっていない。だが、それでいい。

少しずつ、少しずつ削る。

こんな最強生物たる古龍に大技なんかしたら、痛いしつぺ返しがやってくる。

それに、その間少しでもコイツが俺から集中をそらしてくれれば、最高だ。

攻撃する隙ができるのだから。

「……いいぞー! シヨウコ!! 挟撃続行!!」

「はいー!」

シヤガルマガラを前後、または左右で挟む。

「ガアアアアアアア!!」

シヤガルマガラは、頭の先を中心として扇形に90度角度を変え、態勢を整えてくる。だが、挟み撃ちの形は崩さない。

俺とシヨウコの、黄金のチームワークだ。

逃がさないからな。

「うおおおお!!」

ヒユツ……ザシユ!

ズザザザザン!

ヒユパツ!

ギン!

「グアアアアア!!」

空中回転乱舞ではなく、しっかりと地に足をつけた斬撃を入れる。
おそらく弱点であろう頭部へ。

硬い角に刃が逸らされたが、いいのが入った。

シャガルマガラは先程から、俺とシヨウコのどちらに狙いを定めるか迷っている様子が見られる。

できるなら、俺にターゲットを絞ってほしい。

こつちを見ることで、俺たちのいつものスタイルが確立するから。
そのためには……。

「こい！ シャガルマガラ!!」

「ガアアアアアアア!!」

ズアツ……!!

ズン！………。

俺の声に反応したのか、それとも先程の斬撃が効いたのか。

シャガルマガラは俺を正面に捉える。

殺気が、俺の体に纏わりつく。

おお……すごい。

身体が勝手に震える。

絶対的強者のプレッシャー。

やっぱり半端ない。

(……まあ、だからって怖気づくわけにはいかないけど。)

もつともつと未熟な頃から。

敵わなそうな敵に立ち向かってきた。

圧倒的な力の差なんて、山ほど感じてきたんだ。

「……………負けねえ！」

「ギャアアアア!!」

ブオン!!

シャガルマガラが、大きく左前脚を上げる。
力を溜める様子。

それを視認した瞬間、恐ろしいほどの速さで腕が振り下ろされる。

(……………懐っ！)

俺が選んだのは、灯台の下。

下暗し、シャガルマガラの巨体の下。

ズガアツツ!!!

地を抉る音が響く。

シャガルマガラ渾身の一撃を回避できた。

今いるのは、ヤツの腹の下。

(チャンス!!)

ヒュン!

ズザザザザザザン!!

ザザシユ!!

「グアアアア!!」

「まだまだ!!」

腹部に連撃を入れていく。

自分の体の下、死角から攻撃されるのは、どういう気持ちなんだろう。

……まあ想像したくはない。

なんて、再びの攻撃を繰り返していた時。

「ガアアア!!」

「っ!?!」

ダダッ。

急に突進するシャガルマガラ。

懐にいた俺は、後ろ脚に引つかかり。

ドガア!!

「ぐわっ!？」

ゴロゴロゴロゴロ……………!

「……………つてえ……………。」

弾き飛ばされてしまった。

……そういう攻撃の仕方もあるのか。

やはり、大型モンスターの真下は、リスクもでかい。

「ご主人さま!!」

「平気だ!そこまでダメージはない!」

シヨウコが心配する言葉をかけてくる。

正面にいたわけでは無いので、大きなダメージはない。

まあ痛いもんは痛いけど。

(懐には、入れて3、4秒……。)

頭に入れておく。

巨体の下からの攻撃が、有効であることに違いはない。

ギリギリを見極めなければ。

ヒユイイイイ……!

「……!!?やべえ!!」

バツ!!

ズドオン!!

「……っぐうー!」

爆風に煽られる。

地面が光つたと思つたら、爆発。

……思つたより早いな。

上方修正。爆発まで一秒もない。

(これを避けながら……いや、考えるな。)

爆発を起こす青白い光は、周囲に無数に現れている。

おそらく、出現のパターンなどはない。

それを、反射的に避ける。

喰らうなら、もう仕方ない。

そういうレベルの話。

避けてばかりいては、おそらく狩猟は失敗する。

勇気をもつて、突っ込む時は突っ込む。

(できたら喰らいたくはないけどな……。)

あの爆発。相当な威力だ。

自分の反応を、信じるしかない。

「……ガアアアアア!!」

一瞬の間を開けて、両前脚を上げるシャガルマガラ。

何かを吸い込……ブレス!?

「何か来ます!」

「ああ!!」

予想する。

シヤガルマガラの口元には青紫の煙。

何かを放とうとしているのは分かる。

問題はその性質。

ラージャンやバサルモスの様な直線的なビーム。

それなら寧ろチャンス。

左右に避けて懐に入って、数秒の隙を手に入れられる。

だが、ジンオウガやフルフルのように辺り一帯を攻撃するものだったら。

距離を離して様子を見る。これが正解となる。

……情報も経験も足りない！

ここは……。

ザッ！

瞬間の思考の後。

俺は大きく後ろに飛び退いた。

大げさなほどに、距離を開ける。

「……………グアア!!!」

グオン……………ドオオン!!

ドン!

ドオオン!!

「うひい……………」

シヤガルマガラは、全く予想外の攻撃を行った。

放たれた青紫の煙は、直進することなく。

ただ中空に漂っただけ。

しかし、その直後。

シヤガルマガラを中心として、ハの字の形に煙が地を這い、爆発。

まるで連鎖しているかのように連続して弾けていく。

遠く離れたため、その様子がよく分かった。

……突っ込んでいたらと思うと……。

(幸運だった……。)

もし、いつものように「ブレスはむしろ大きな隙！」と得意げに突っ込んでいたら、多分、弾け飛んでいた。

俺の体が。

予想外の動きに、距離を開けて様子見して正解。

無茶しなくて良かった……。

「……グアアアア……。」

「……。」

なんでお前逃げるんだよ、と言いたげなシャガルマガラ。

いや逃げるわ。アホか。

お前強すぎなんだよ。

「さて……!!」

「ギィアアアアアアア!!」

距離が離れた俺とシャガルマガラ。

多分俺と距離を詰めてくる、と予想した瞬間。

愚直にも、ヤツは突っ込んできた。

突進。

でもな、シャガルマガラ。

それ俺、得意なんだ。

避けるの。

「……ふっ!!」

ヒュッ……クルッ。

ズザザザ!!

「ガアアア!？」

突進を、いなす。

体を回転させ、相手の角を、牙を、爪を受け流しつつ。

双剣の刃を立て、カウンターを入れていく。

俺の、十八番だ。

「ガアアア……！」

ズドオ………。

きれいに入った俺のカウンター。

シャガルマガラが転げて、地に伏せた。

これは……チャンス!!

「シヨウコ！」

「はいっ！」

付かず離れずの距離でいたシヨウコに呼びかけ。

一斉に攻撃を開始。

俺は頭部。シヨウコは翼と尻尾。

二人で、シャガルマガラへ攻撃を入れた。

「うあああ!!」

「やあああ!!」

自然と雄叫びを上げる。

偶然にも、シヨウコとハモった。

ザザン!

ズザシユ! ヒユパツ!

ズザザザザザザザザン!

反撃の術も無く、ただ俺たちの攻撃を受けながらのたうち回るシャガルマガラ。

ここで、少しでもダメージを稼ぐ!!

「……………ご主人さま!!」

「ああ!!」

バツ。

「ガアアア……………」

ムクリと体を上げ、再びその四足で立ち上がったシャガルマガラ。

どれほどのダメージが入ったか。

見た目は全く効いているように見えない。

さすが古龍。

強い。

「……………ガアッ!」

グググ……………。

途轍もない咆哮。

体が思わずすくみ上がる。

ズウン……！

そのまま降り立ったシャガルマガラは、悠然と俺に視線を向ける。
俺もそのまま、戦闘の姿勢をとる。

(……異様な姿……。)

空に浮かび上がったシャガルマガラ。

全身をよく見ると、その異質さが良くわかった。

見た目は、龍といえば龍。

ただ翼の他にある四つ足。

それが、他の生物とは一線を画していた。

翼を広げた姿は、もはや神々しさすら感じた。

だが、コイツも自然に生きる者。

「……………もう一度！攻めるぞ！シヨウコ！！」

「はいっ！！」

狩りが順調なのかは分からない。

その様子からは、全くダメージを食らった様子は見受けられない。
だが、やることは同じ。

繰り返し、削りに削っていく。

コツコツと。

ジャキン！！

俺は再び、双剣を構えた。

166天廻龍を狩猟しましょう。

ジリ貧。

少しずつ、だが確実に追い詰められる様を言う。

現状、どうやらその表現が一番近い。

「……………ショウコー！下！！」

「は……………いつ！！」

ドゴオ！！

「にやつ！！」

「大丈夫か！！」

「は、はい！いけます！」

足元に浮かび上がるのは、爆発の予兆である白い光。

かろうじて避けるシヨウコに声をかける。

狙って出しているようではなさそうだが、それだけに全く読めない。

ランダムに出てくる光を気にしながら、更にシャガルマガラの猛攻を凌いでいく。

禁足地に辿り着いてからの攻防は、既に半日が経っていた。

黒い空が立ち込め、シャガルマガラ自身やその周囲に光が出ているため、正確な時間

はよくわからない。

ただ、体感ではもう丸一日戦っているような気分だった。

光の爆発。

そして、当たれば大ダメージは免れない、青紫色のブレス。

一度追い詰めたと思うと、空に浮かび上がり咆哮。

その後、何事もなかったかのように再び始まる命のやり取り、

俺とシヨウコは徐々に疲弊している。

狩り場を変えられるような場所では無い。

息をつく暇が、無い。

「つ!?ご主人さまあーブレスですー!」

「はいよっ!!」

ドゴオ!!

ドオン!!!ドオン!ドオン!!

もう何度目かも分からないブレスが爆発する。

その度に大きく後退。

威力からして、喰らえばただでは済まない。

だから逃げるしかないわけだが、そうすると……。

「グアオアアアアアアアアアア!!!」

シヤガルマガラが攻勢を強めてくるわけだ。

それがもう何度も何度も繰り返される。

「はあっ……はあっ……。」

(シヨウコ……。)

シヨウコを見やれば、息が少しずつ上がってきている。
限界が近いのかもしれない。

厳しいか……？

古龍。

その辺の大型とは比較にならないほどの強さ。

だが古龍と呼ばれるからには、ただ強いだけではないと考えていた。

その姿形、物理法則を無視した攻撃……それに加えて。

この体力。

恐れ入る。

「……グアアアアアア!!!」

「ひゃっ!?!」

ドガアツ!!

「シヨウコ!!」

何てことの無い、前脚での振り払い攻撃。

モーシオンが小さく、確かに避けづらいが……。

シヨウコが、食らってしまった。

あの、回避なら誰にも負けないシヨウコが。

「シヨウコ!!」

「っ……いい、いけます!」

「……くっ!! シャガルマガラ!! こっちだコラ!!」

「グアアアアア!!!」

ズア……………

……上体を起こしてのボディプレス……!

(緊急回避!!)

……ズドオ!!!

「うおお……あつぶねえ……!」

巨大な前脚が地を踏む寸前に、シヨウコから離れながら回避する。俺に誘導して、シヨウコをカバーすることにした。

「……っ!!シヨウコ!!何とか立て直せるか!」

「……はいっ!ありがとうござ……います……!!」

……おそろくだが、シヨウコはこれ以上は厳しい。体力の限界だ。

敵は思った以上、いや超想定外の体力のようだ。狩猟の始めから、全く変わらぬその様子。流石、というべきか。

「ギヤアアアアアア!!!」

(突進！)

スツ……。

鬼人化、脱力。

相手の脇をすり抜け、受け流すイメージ。

……回転！

ヒュパツ……ズザザザザ！

ザシユウ！ズザン！！

「グアアアアアア!?」

「よしっ!!」

既に見切っている、シャガルマガラの突進。

その距離、威力、モーションまで、慣れてはきた。

問題はオレたち自身の体力だ。

特にシヨウコは、もう限界だろう。
死への恐怖。

そんなものは無いと言いたいところだが、怖いもんは怖い。
むしろその感情は、ハンターをやる上でなくしてはいけない感情だ。
その感情の先が、いま目の前まで迫ってきている気がする。

(シヨウコは限界。双剣を研ぐ暇は……まあなんとかできる。俺もまだ動ける。)

冷静に分析する。

まだ、なんとかなる域。

しかし、それを越えれば……。

「ギヤアアアアア!!」

「!! ~っ!!」

何してやがると言いたげな咆哮を上げるシャガルマガラ。

考える時間ぐらい欲しいものである。

まあ、あっちもそう悠長なこと言ってられんってわけか。

「……ご主人様！ いけます!!」

「よし！ いくぞ！ 仕掛ける！」

「……はいっ!!」

シヨウコの疲れている声。

引くに引けないこの戦いの中、これ以上引き伸ばすことは、危険。

決死の覚悟が、俺たち二人の間で固まった。

もう、いくしかない。

「シヨウコ!! 合わせろ!!」

「はいっ!!」

返事をしてすぐ、シャガルマガラの後方に走るシヨウコ。

素早い動き、そして敵の意識は俺に向いていたため、シヨウコが気を引くことはない。

「……せーのっ!!」

「やああああ!!」

「うらああああああ!!」

シャガルマガラがこちらに攻撃を仕掛けようとする、その寸前。
俺たちは、一斉に攻撃を仕掛けることにした。

肩をいからせ、片翼を俺に叩きつけようとするシャガルマガラ。
そのタイミングを、待っていた!

(回避……回転っ!!)

グルン……。

「グウアア!?!」

「うらああ!!」

ヒュパ!!

ズザザザザザザ!!
ザシュ!!ザザン!!

「グアアアアアア!!」

「まだまだあ!!」

攻撃を交わして、得意の回避攻撃。

上空に浮かび上がり、重力に身を任せながら更に回転を上げる。

(喰らえっ!!俺にできる最大の……火力!!)

ズザザザザザザザザザザザザン
!!!!!!

ザシュン!!

「ギアアアアアアア!!」

とにかく、叩き込んだ。

叩き込めた。

今できる、精一杯の力で。

(頭部に！完璧に決まった!!)

手応えは、十分。

ザツ！

(シャガルマガラは!?)

着地後、間髪いれず敵を確認する。

どんな時も、敵を見失わない。

教えは忘れない。

教官、いいのが入れられましたよ、俺。

「ガアツ……！」

ズウン……。

シャガルマガラが、その巨体を横たえた。

……チャンス!!!

「シヨウコオ!!ありったけ叩き込むぞ!!」

「はい!!」

シャガルマガラの後方、俺の反対側で足を削っていたシヨウコ。

見れば、強靱な四つ足に無数の傷痕が見える。

足へのダメージの蓄積、そして俺の弱点攻撃。

これが、俺たちのチームワークだ!!

「ぬらあああああ!!!」

「やあああああ!!!」

ザシュっ!! ザザザザザザザザン!!
ヒュパツ!ズザシュ!!

猛攻を仕掛ける俺たち。

今しかない、今できるだけダメージを稼ぐ!

ここで……。

(倒す!!!)

「ギヤア!グアアア!?!……ガアア!!」

ジタバタともがくシャガルマガラ。

今までにも大型モンスターが倒れ伏せ、追撃を加えてきたことは多々あった。

そのモンスターたちと同じように、ただただ俺たちの攻撃を喰らい続けるシャガルマガラ。

こいつもまた、モンスターだ。

「やあつ………！はあつ………！」

時間にして十秒ほど。

その半ばで、シヨウコはもう息も絶え絶えだった。

覚悟を決めての、一斉攻撃。

うまくいった後の、ボーナスタイム。

体力を全て使い切った、そんな顔をしていた。

(……で倒せないと………!!)

嫌な考えが頭をよぎる。

「うらあああ!!」

考えるより先に、双剣を天に向けた。

飛び上がり、体を縦に回転する。

ヒュン……!!

(叩き込め!!)

ズザザザザザザザザザザザザン!!!

「ギィァァァァァァァァァァァァ!!!」

ヨーヨーのように回った俺は、今までやったこともない縦の動きをかました。地獄車とでも言えばいいのか。

「らあ!!……うおつと……!!」

ザッ。

地に足をつけ、シャガルマガラを急いで確認する。

なんせ、俺の中では地球がぐるぐると上下に回っていたのだ。高速に。

自分を見失ってしまった。
通常時は使えないな、この技……。

「グア……アアアア……。」

ズウン……。

……。

「……ち、沈黙……。」

「…………。」

「ご、ご主人様……。止まりました……。」

「……マジか……。」

シャガルマガラが止まったまま、動かない。

口を開けたまま、頭を横たえて微動だにしない。

「……。」

スツ……。

「ご主人さま!?!」

ゴアマガラの首元に手を伸ばす。

……脈は感じられない。

生気というか、生きている気配も感じられない。
倒した……。

ついに……シャガルマガラを……!

「止まっている……な。」

「……や、やりましたあ……うう……。」

フラツ……。

「しよ、シヨウコ!大丈夫か!?!」

「す、すみません……ちよ、ちよつと限界で……。」

トスツ。

フラついたシヨウコを両手で抱き止めた。

軽いな……そして疲労の色が隠せていない。

あんな強敵相手に、心も体も限界だったのだろう。

「すみません……やりましたね……ああ、ほつとするわあ……ご主人様の腕の中……。」

「アホなこと言ってる場合か……えーと、信号弾は後だ。一旦あの掘建て小屋に戻ろう。」

「はい……うっ……。」

「……シヨウコ?」

シヨウコの様子がおかしい。

顔色が……かなり白い……。

「ゴホッ！……ゴホッゴホッ！！」

ビチャ。

シヨウコの口から出てきたもの。

血。

口の周りが赤く濡れている。

「……!? シヨウコ!! お前——」

限界だったのか、という寸前。

シヨウコが俺の口に指を当てた。

「ふふふ……主人様にも気取られんようにできたわ……さすがウチ、オトモの鑑です……」

「な、何を……ま、まで、今ウチケシの実を……!」

「大丈夫です……とりあえず、休めば平気です。」

「ばっかやろう……やばい時は言えっつー」

「強敵、でした。」

「あ……」

「命賭けるっつて、決めたやないですか、ウチら。……ご主人様がウチの立場なら、ぜーっつたい黙っとる。」

「う……」

「ほら、凶星や……ふふ。……ゴホツゴホツ!!……あー、つらいですー……」

余裕……そうに見えるけど……。

軽口は叩いてはいるが、一刻も早く医者に診せなければ……。

まったく、コイツは本当に……。

「……お前は……やっぱり俺の最高の相棒だよ。」

「……何回言われてもええですね、それ。」

「何度でも言っつてやる。でも、不調を黙つてたのはダメだ。減点。」

「……ここまで頑張つた可愛いオトモに、ご主人様はひどいわあ……ふふふ。」

ザッ。

シャガルマガラの亡骸を背に、とりあえず俺は先ほどの小屋に向かうことにした。シヨウコはふざける余裕はありそうだが、体に力が入っていない。

それに、顔色は相変わらず悪い。

頭には、ワサドラでゴア・マガラにやられたハンターたちの姿がよぎる。

……死なせるかよ。絶対に。

最悪、俺がおぶって麓まで行く。

おじさんのお迎えが来れば御の字。

何なら、街まで走ってやる。

「えへへ……ご主人様のお姫様抱っこやー……。」

「馬鹿なこと言ー」

抱きかかえているシヨウコの顔。

やっぱ元気なんじゃ無いかと、少し安心して見下ろした、その瞬間。

地面が、光った。
俺たちの、足元。

(光!!爆———避け)

キュイイ……

ズガアアアアン!!

瞬時に駆け巡った俺の思考。
と同時に起きた、爆発。

「ぐああ!!」

「きやあ!!」

ゴロゴロゴロゴロ……ズザア!!

ゴツゴツの岩が並ぶ地面に、転がる俺たち。

俺にできたことは、シヨウコを庇うことだけ。

光に背を向けて、地面に接しないように抱きかかえて、なるべくシヨウコに影響が無
いように。

跳んで、転がった。

間に合ったのかと言われれば、それは嘘になる。

背中にはかなりの痛み。

「……………ぐう……………!!」

「うう……………」

油断した……………いや、シャガルマガラは完全に沈黙していた。

確かめた。間違いなく。

……………古龍……………他のモンスターとは一線を画す、その存在。

悔っていた。

それを油断というのなら、俺は完全に間違えたワケだ。

「……シヨウコ……?」

「う、うう……。」

「おいっ!シヨウコ!しっかりしろ!!」

「……うう……。」

シヨウコの返事はない。

意識はあるが、顔色はさらに悪くなり、朦朧としている様子。

狂竜症か或いは……くそっ……。

「……ふっ!!」

脇目も振らずに、俺はシヨウコを抱えて走り出した。

向かうは、最初に見た掘建小屋。

なぜか知らんが、シャガルマガラは咆哮を上げながら空を飛び続けている。

今は、シヨウコの無事が最優先だ。

* * * * *

「おい!! シャガルマガラ!!」

「グルルルルル……。」

空に浮かんでいたシャガルマガラを呼ぶ。

ふわふわと降下してくるその様は、もう完全に神のようである。

物理法則さんは完全に息をしていない。

「どんな手品で生き返ったのかは知らん。いや、ぶっちゃけ少し興味あるけど……今はいい!!」

「グアアアア……。」

素直に、すごいと思えた。

あの時、脈拍は確かに無かった。勘の域は出ないが、生物としての気配も消えていた。だが、土煙の向こうにはヤツはいた。

平然と。さも当たり前のように。

(……状況は……かなりやばいよなあ……。)

手足は動く。

ただ、疲労は結構きてる。

シヨウコがばてるほどの運動量をこなしているわけだし。

それに、周囲は暗いが鱗粉が明るく照らし、今が何時なのか全くわからない。

心は折れてない。

呑気に、そして冷静にそんなことを考えている自分を褒めたい。

ちなみに、背中 of 怪我。

はつきり言う。すっげえ痛い。

腰を曲げると痛烈な痛みが走る。

これで回避攻撃とかできるのか、俺。

「ガアアアア!!!」

「……やるしか……!!!」

ズガアアアア!!!

ヒュン……。

ズバア!!

「ギャアアアアア?!」

「ないよなあああ……いつてえええ!!!」

華麗に。

それはもう華麗に、シャガルマガラの踏み抜き攻撃を避けた俺。

その技のキレとは裏腹に、背中が。

もう、めつちや痛い。

(締まらねえ……背中、結構な傷だろうな……。)

多分、ちよつとエグい感じに怪我していると踏んでいる。

しかも結構な範囲で。

見えないから、気にしないことにした。

……嘘です動くだけで痛いですごめんなさい許してください。

「グアアア!!!」

ですよね攻撃の手は緩めてくれませんかよねわかってましたよチクシヨウ!!

「のわっ!!」

ドガ!!ドガツ!ドガツ!!

突進をかましながら、岩ごと俺を踏み潰そうとしてきたシャガルマガラ。
避ける。今のは避けるしかない。

(痛いのが邪魔だ……咄嗟の反撃ができない……。)

もう一度状況整理。

怪我をしている俺。頭から回復薬を被ったとはいえ、失血なんてなったらもうアウ

ト。

シヤガルマガラはなんか元気。さっきまで心臓止まってましたよアイツ。
反射神経はもう当てにならない。体はどんどん重くなる。
シヨウコのためにも、早くこの狩猟を終わらせたい。
……終わりつて……。

「諦めたく無いんだけどなあ……。」

なぜ先ほどから俺は余裕で冷静なのか。

自分でもわからないほどに、落ち着いている。

そんな冷静な頭で、奴を屠る方法を考えてみる。

思い浮かばない。

「……ちよつとやばいなあ……。」

軽く口にした俺を。

「ガアアアアア!!!」

シャガルマガラは、容赦なく追撃してきた。

167あるソロハンターの話⑥

息遣いが聞こえるほどには、近づいてきている。

獄狼竜。私の、因縁の相手。

抑えきれない衝動を、必死に抑える。

(屠る……殺す……ヤル……!!!)

そんな漏れ出そうなほどの殺気を抑えられたのは、マシヨルクのおかげだった。隣にこいつが居なかつたら、もう今頃私は一撃をお見舞いしている。

だが、私の体は万全ではない。

いいようにやられるのが目に見えている。

助けられた。

……うん、落ち着いてきた。

「……………」

スツ……スツ……。

歩みを止めることなく、静かに進む獄狼竜。

その動きが、モンスターとしての凄みを実感させる。

すぐにでも次の動作へ移せるような、そんな足運び。

音もわずか。この体重でそれはすごい。

わたしたちには気づいていないようだが、一度姿を現せばたちまちのうちに激しい攻撃を喰らうことだろう。

強い。こいつは、相変わらず。

(角……無い、ねー……。)

あの時。

へし折ってやった、自慢の角。

その形と全く同じ。

こいつは、ヤツ。

油断しているヤツに、一発ぶちかます予定が、その作戦が崩れた。

「ガアアアアア!!」

ズガアン!!

獄狼竜は、モーシヨンも何もなしに、赤黒い何かを激しく打ち下ろしてきた。閃光、雷光、いや、もつと恐ろしいなにか。

どこか気味の悪い赤と黒。

これが、かなり痛い。

私とマシヨルクは、左右に広がった。

「セツヒト! 横からいけ!! 私を援護する!!」

「……うん!!」

油断したのは悪かった。

いや、最悪だった。
未熟すぎる。

「ガアアア!!」

「ふん……動きは変わらない……ね!!」

ガッ……。

ヒュッ……ザザザザザシユツ!!

ズザン!!

連続で振り下ろされる、その前脚。

駄目な自分を払拭するように、交わして、一撃だけ入れる。

飽きるほどにイメトレで回想した、ジンオウガお得意の連続攻撃。

雷狼竜と変わらない。

違うのは、その回数と尋常じゃない速度。

コツは、怖気付かないこと。

「ふっ………!!」

懐に入り込み。

「うらああああ!!!」

ズザアア!!!

「ギヤアアアアア?!!………グルルルル………!!」

斬り刻む。それだけ。

憎い。

鳴けばいい。

苦しめばいい。

お前は、それだけのことをしたんだ。
許さない。

……許さない許さない許さない!!

「まだまだあ!!」

「!!よせっ!セツヒト!!」

マシヨルクの警告が聞こえた。

だが、怒りに任せれた私の体は、もう動き出していた。その頭部めがけて狙いすました追撃は、止まらない。

(あ。)

そして、またしてもやってしまった。

そうだ、こいつには。

「ガアアアアア!!」

ズガアアアアア!!

カウンターがあつたんだ。

ドガアツ!!!

「ぐうっ!!!」

ドン!……ドン!……ゴロゴロゴロゴロ……。

体ごと、地面に吹っ飛ばされた私。
なんとかその勢いを止める。

「……ごめん……油断した……。」

「セツヒト!!無事か!!」

「んー……へーき。」

五体確認。

うん、異常なし。

擦り傷は勘定に入れてないけど。

「……ヤツの放電は、ノーモーションか……。」

「うん。……いや、ごめん。今のは私の油断だよ。……もうやんない。」

そうだった。

雷狼竜とは違うところ。

その一つが、帯電と放電の仕方。

まず、ジンオウガの放電の正体である雷光虫は、獄狼竜にはない。

その生態とかはまるつきりわかんないけど、赤黒いアレは間違いなく雷光虫ではない。
い。

もっと恐ろしい何か。

だから、マシヨルクの言う放電攻撃は、正しくは放電ではない。

まあどつちでもいいんだけどさ。

大切なのは、その速度と威力。

頑丈な私が吹っ飛ばされて怪我をするぐらいには強くて、最強の私が反応できないほどの速度で帯電、放電するってこと。

これは、並のハンターならやばい。

ソウジならどうかなー……避けるのうまいからなー。

「うむー私も気をつけることとしようー！いくぞ!!」

「……言われなくても!!」

憎しみが、冷静さを欠く。

よくある話だけど、自分がそうなっちゃうなんて。

未熟だ。

「でもっ……!!」

ズガガガガガ!!

マシヨルクの援護射撃が、獄狼竜の頭を弾く。

「グアツ!？」

「負けない!!」

心を囚われてはいけない。

思い切りを、冷静に、相手にぶつける。

ザザザザザザン!!

ザシユ!!ヒユパ!!

「ガア……!!」

ザツ。

攻撃してもなお、呼吸はそのままに。

基本のキ、だよねー……思い出したよ。

「グルルル……。」

憎々しげにこちらを見つめる獄狼竜。

そう、それでいいよ。その感情にお前が囚われる限り。

「……………スキができるからねー!!」

ヒュツ……。

「ガア!？」

獄狼竜には、私は見えたのか。

そこまではわからないけど。

私の動きを捕らえるのは、そう簡単じゃないよ。

「……………ふんっ!!」

ザン!!

「ギャアアアアアアア!!」

一発。

私は瞬時に後ろに回り込み。

ムチのようにしなった体を使って、最大の一撃を叩き込んだ。

尻尾めがけて。

こいつがうつとおしいのは、尻尾。

斬ってやりたい。

「うむ！力みのない、素晴らしい一撃だ！」

「あんが……と!!」

トンツ……。

「らあっ!!!」

ザザザザザザザ!!

「ギャアアアアア!!」

私はそのまま尻尾から飛び。

背中に連続斬りを叩き込んだ。

尻尾を攻撃された瞬間の、一瞬のたじろぎ。
逃すか。

「うむ!!」

ズガガガガガガ!!!

ビシッ! ビシビシビシビシ!!!

「ギャアアアアア!!?」

マシヨルクの恐ろしさ。

それは、とにかくその射撃の精度にある。

これはもはや、天賦の才としか言えない。

どんな体勢だろうが、どんな弾だろうが、外すのを見たことがない。

風、気温、湿度。

銃身の温度、射出から狙いまでの弾のブレ。

自身の体調、傾き具合まで。

余すところなく、計算のうち。

……現に私が剣を当てたところに、寸分変わらず弾を撃ち込んでいる。

流石の私も、これはできない。

「……………グルルルル……………!!」

私を睨みつけながら、憎々しげにこちらに殺気を向けてくる獄狼竜。

強いね。

強いけど。

「……………負けない。」

それは、獄狼竜に、なのか、マシヨルクに、なのか。
自分でもわからないけど。

「ここで、お前を、殺す。ハンターとして。」

「……………ガアアアアアア!!!」

なんて、かっちよいいことを言って、私は獄狼竜に突っ込んだ。

* * * * *

獄狼竜は、呆れるほどの体力だった。

いくら斬り刻もうと、いくら撃ち込もうと、その様子に変わりはない。
でも、ね。

「体力で私達を凌ぐのは、ちよつち無理ー?」

ヒョイツ。

「ガア!？」

「ふっ……!!」

ズザシユ!ザザン!!

「ガアアアア!!」

先程から、同じことの繰り返し。

避けては刻み、弾丸が援護し、スキを作っては刻み、避け……。

認めたくはないが、マシヨルクのおかげか、攻撃のルーティンができつつある。

私一人では到底無理だった狩猟方法。

これが、あの時出来ていればと思う。

「私達、とは!嬉しいぞ!セツヒト!!」

「うるさい!!一緒にすんなー!!」

「はっはっはっ!照れるな照れるな!!」

ジャキイ!!

ズガガガガガガ!!

ビシッ!ビシビシビシビシッ!!

「うむ!いいな!」

(認めたくないけどね……すごいよ、コイツは。)

射撃に必要な、もう一つの要素。

何事にも揺れない、精神力。

それが、正確無比な一撃を更に恐ろしいものに変える。

コイツにヘビィボウガンをもたせたら、右に出るやつはいないと思う。

私はお構いなしに突っ込んでいるけど、射線を切られないように移動しながら、私に指示を飛ばしながら……。

認めざるは、得ないよね。

「……しかし！こいつは強い!!くう!!たまらん!!」

そしてアホなことも言いながら。

実力だけは、世界一なんじゃないだろうか。
嫌いだけど。

「グルルルルル………!!」

ようやく疲労の色を見せ始めた獄狼竜。

いや、そんな感じがしただけ、だけど。

なんとなく、分かる。

「マシヨルクー!!」

「ああ!!」

二つ返事。

アイツにも分かるか。

流石。

「一気にいくよー!」

「ああ!!とつておきを見……………セツヒトお!止まれえ!!」

「え!?!」

マシヨルクの指示が無かったら、私はどうなっていたのか。

わかんないけど。

とにかく、助かった。

だって。

気づいたら、獄狼竜の脚が、目の前の地面にめり込んでいたから。

「……………は?」

「退避い!!」

ジャキ!

ズガガガガガガ!!!

「くっ……!」

すんなり終わるとは、思っていなかったから。
だから、止まれた。

気づいたら、攻撃を終えた脚が地面にあつた。
つまり、要するに、ヤツは。

私の反応速度を超えて、攻撃を繰り出したわけだ。

「……………わぁお、やるね……………」

「……………気をつけるセツヒト!どんな隠し玉がわからない!!」

「……………りよー!回避に徹する!」

「ああ!!」

冷静なんだけど。

怖さがあつた。

何かわからない攻撃ほど、恐ろしいものはない。

それが強烈無比な、命を刈り取るものならなおさら。

(しかも、マシヨルクの目ですら追えない……?)

視認できなかった?

………わからない。

わからないけど……。

「あの時は、本気じゃなかったってわけだね……!」

あの時。

ミヨシ村が襲撃された、あの日。

村を気にせずに、周りに人もいなければ、私はやれたと思う。

頭の中で、何度も何度もシミュレーションしてきた。

でも違った。

想定外の攻撃。

何をした？どうやった？

考えてもわからない。

ただわかるのは……。

(……上っ!!)

嫌な感じがした方向から、逃げなければいけない、と言うことだけ。

ズガア!!

(下から振り上げ!!)

ヒヨイツ。

グワア!!

目にも止まらない、というのは、こういう攻撃を言うんだらう。
超速の連撃。

その風切る音が、鼓膜に響いてキーンと痛い。

それを避けられている私。

なぜかなんて、自分でも分からぬ。

「セツヒト!!引け!!無理はするな!!」

「わかって……いるけど!!」

そんなこと、いうけどさ。

無理をして避け続けない限りは、ギリ貧。

感覚を研ぎ澄ましまくって、なお鋭敏に保って。

ようやく、これ。

逃げようものなら、猛追に猛追を食らって、殺される。

間違いなく。

……きつつい。

なんて、少しの弱音が心をよぎった、その時だった。

ズキイ!!!

「つゝ!?!」

「セツヒトお!!くつ!!」

避けるしかない、連撃。

相前に、体に無理をかけた。

無理な体勢で体をひねった、その瞬間。

右肩に、痛烈な痛みが走った。

(赤黒い……キズ……!?)

目の端で捉えられたのは、自分の右肩の血。

その向こうには、赤黒い光。

(反応……したのに……!)

反応はできていた。

少なくとも、直撃は避けられた。

でも、相手は手負いの獄狼竜。

火事場の馬鹿力なのかわからないけど。

やられかけのモンスターほど、手強いものはない。

何か、された。

油断はしていない。

体力も負けていない。

あるならば、それは反応速度の負け。

私の速さを、ヤツのわけわからない攻撃が上回った。

それだけのこと。

「セツヒトお!!」

ガガガガガガガガガ!!!

強烈な弾の音がする。

マシヨルクの声が近づいてくる。

私は、腕が上がらなくなった。

もう、完全に。

痛みが、頭を鈍くする。

「ガアッ!!」

ヒュオン!!

短い、獄狼竜の叫び。

同時に攻撃が私にくる。

音が聞こえる。

だが、足が反応できない。

やばい。

ヤバイヤバイヤバイ。

頭の中で分かる。

なのに、体は動かないって。

最悪じゃん。

死が目の前に迫るというのに。

私は、アイツのことを考えていた。

ソウジ。

……………ソウジ、ゴメンね。

死ぬかも。

「うらあ
!!!!!!」

ズドゴオ!!!

「ギャアアア?
!!!」

グラツ……。

「えっ。」

「もういつ……ちよおおお!!!」

ドゴオオオ
!!!!

「ギャイン?
!!!」

とつくに死んだと思っていた。
でも、生きてる。

「セツヒト!!動けるか!?!」

「あ、アンタは……。」

「……………全く!!さすが、いいタイミングだ!!」

「うるせえよ馬鹿野郎!!しっかりお前が援護しやがれ!!」

「……はっはっはっ!!すまん!!ちよつとヤツは強すぎる!!」

「つたく……せ、セツヒト!!お前、その、無事か!?!」

「……………あ、うん……………」

死んだと、そう思ったら。

バカでかい何かが、獄狼竜に突っ込んで。

その攻撃が、外れた。

バカでかい……でも、懐かしい。

ハンマー。

つるつるのハゲ頭。

「……は、ハスガ、さん。」

「……おう。元氣そうじゃねえか。」

「……。」

「……悪い、遅れちまった……ていうかお前ら、なんでいるんだよ!! どうやって来た!!」

「はっはっはっ!! 企業機密だ!!」

「……竜便か……無茶しやがる……。」

私は。

助け、られた。

覚えてる。

忘れられるわけがない。

これは、2回目だ。

「……話は後だ! ハスガ! ヤツは結構ダメージを食らっている!!」

「お前が言うなよ……ていうか、あれ獄狼竜かあ?……ソウジ達の見立ては合ってた

なあ……。」

そうか。

ハスガ……さんは、初見。

「……まあ……俺らが揃ったなら、負ける気がしねえけどよ。」

「…………は、ハスガさ——」

「セツヒトオ!!」

「う、うん!!」

「お前からもらった毛生え薬! 全く効き目がねえ!! 後で色々聞くことがあるからよ!!」

「うん……。」

「…………一緒に、狩るぞ!!」

「ああ! 我々で屠るぞ!! セツヒト!!!」

「…………うん、りようかい!!」

体が、漲る。

心が、昂ぶる。

腕は上がらない。

だから、何だ。

やれることはある。

私達は。

私達なら。

無敵だ。

「さて！獄狼竜！！」

「グルルルルル……。」

「死ぬほど素早い前衛1！そしてバカなほど強烈な一撃のある前衛2！そして完璧な援護の後衛！！」

「グア……。」

「流石に同情する！我々に負ける要素が無くなった！！」

「……………グアア……………」

「……………とつとつと倒れるがいい！！全員突撃い！！」

「なんでお前が仕切るんだ……よつと！」
「ふっ……!!」

不思議だ。

マシヨルクへの憎しみが、消えた。

ハスガさんにだって。

だって。

この人たちは。

あの時の、そしてさっきの……命の恩人だ。

私を、二度も助けてくれた二人。

借りは……返さないとねー!!

「おはようおはようおはよう!!」

ズガガガガガガ!!

後ろからは、弾丸の射出音。

笑いながらぶっ放すマシヨルク。

その射線の中を、お構いなしに突っ込む。

だって、マシヨルクだ。

私達に、当てる訳が無い。

ヒュン……!!

ズザッ!!

ザザザザザ!!

ちよつと突っ込み気味に、獄狼竜の体を斬り刻む。

隙だらけの私。

「ガア!!!」

まあ、反撃は来るよね。

しかも、超速の、私の反応を超えたやつ。

このままなら、私は八つ裂き。
でも。

「らあっ!!!」

ドゴオオオ!!!

「ギャアアア!!!」

こつちばかり狙ってたら、痛いしっぺ返しが来るよー？

ハスガさんの渾身の一撃を喰らい、フラつく獄狼竜。

どんなに超速の攻撃だろうと。

当たらなければ、どうということはない。

「ガアツ……!!」

ハスガさんのハンマーの威力は、もう半端ない。

加えてその速度と弱点を狙う正確さ。

私からすつかり目を離し、ハスガに対峙する獄狼竜。

うん。そうなるよね。

ハスガさん強いもんねー。

……………悪手、だよー。

「ハッハッハッ!!!」

ズガガガガガガガガガ!!!

ビシビシ!!ビシィツ!!

「グアア!!!」

攻撃は、私達一人ひとりのものではない。

私達が連携を取れば、それは一つの大きな生き物のように。

うねりとなって、襲いかかる。

攻撃の手を絶やさない。

しかし……容赦ないねー、マシヨルク。

目に飛び込んだ弾丸に、獄狼竜が怯んでいるよ。

「セツヒトを傷つけた恨み、返させてもらおう!!」

ズガガガガガガガガガガガガ!!

「フハハハハハハハハ!!」

恨みを返す……?!

……いやー、あれはむしろ楽しんでるような……。
そんな時。

「ガアツ!!!」

バリバリバリ!!

ドオオン!!

獄狼竜の放つ赤黒い閃光が、辺りに散らばり始める。

コレだ、これが痛い。

これを食らっては、こちらの波状攻撃が止まる。

一人の例外を除いて。

ズガア!!

「ぬおっ!!」

一番近くにいたハスガさんに、直撃した。

「グウウウ……!」

あ、油断しないほうがいいよー、獄狼竜ー。

「……………何勝ち誇った顔してやがる!!!」

ブオン……。

ドガアツ
!!!!!!!

「ギヤイン!!!??」

「はっはっはっ!!相変わらず丈夫だな!!ハスガ!!」

「うるせえ!痛えんだぞ実際!!」

ハスガさんは相変わらず強い。

もう、人間としての強度は軽く超えていると思う。

……………人間かなー、あれ。

なんてことを考えながら。

おそらく、そろそろ私に目を向けるであろう獄狼竜の、その呼吸を読んで。

私は、瞬時に動いた。

「ガア!!」

ズドオ!!

地を抉る、その爪撃。

しかし、私はそこにはいない。

「……だよー。」

余裕綽々。

来るとわかっていているなら、避けるのなんて朝飯前。

「ふっ……!!」

ヒュイツ……ズザザザザザ!!

ザシュツ!!

「ギャアアアアアアアアアア!!!?」

ザン!……ドンツ!……ドサ……。

ぶつとい尻尾が切れて、宙を舞った。

私がやったこと。

視界に入らないように、獄狼竜の瞬きのスキを盗んで移動。

あとは、回り込んで、尻尾を狙う。

それだけ。

手元にあるしっぽなら、腕は振れる。

上がらない腕だって、まあ使いようだねー。

尻尾が切れたのは、ラッキー。

「おー、切れた切れた。へっへー。」

「……………あいつが一番エグいな……………」

「はっはっはっ!!さすがソロのG級は伊達ではないな!!」

「……………ホントに強くなったなあ、セツヒトよお……………!!」

嬉しいこと言ってくれるけど。

とつととアンタらも、攻撃してー。

流石に一人はキツイってー。

「マシヨルク！潰すぞ！！多少俺に弾当てても構わねえ！」

「はっはっはっ！安心しろ！！絶対に仲間には当てん！！！」

「そりゃ結構！！」

二人が笑いながら獄狼竜に突っ込む。

その姿を見て。

どこか懐かしいと思った。

……………。

その後は、もうムチャクチャだった。

獄狼竜は私達3人に対して、代わる代わる攻撃を繰り返してきた。

でも、ちよつとねー。

多勢に無勢ー？

少しずつ、だが確実に体力を減らしていく獄狼竜。

だが、油断はしない。

冷静に、きつちりと、命を刈り取る。

落ち着いて……落ち着いて……。

「……おい！セツヒト!!」

「な、なにー!？」

ハスガさんが、戦闘中なのに思いつき話しかけてきた。

そして、冷静になろうという私に、とんでもない事を言ってきた。

「……遠慮なんかするんじゃない!!」

「え……。」

「全部叩き込んじまえ!!俺たちへの恨みも、村のみんなを失った悲しみも!!フン!!」

ドゴオオオ!!

「グアアアア!?!」

怯む獄狼竜。

ハスガさんは器用に攻撃をしながら、なおも言葉を続ける。

「憎しみも、苦しみも全部!!」

「ハスガさん……。」

「冷静さなんかいるか!!お前の今までを、ぶっけろお!」

「……………はいっ!!!」

いいんだ。

なんだ。

それでいいのか。

……なりふり構わず。

怒りを、ぶつける……!!

そこからはもう、凄惨に。

強烈に、力を込めて。

心構えなんて気にせず、自分のできる限りを全てぶつけた。

* * * * *

「しっかし……遠目にお前らを見つけたときは、何の冗談かと思っただぜ。」
「冗談でもいいよ……こいつと二人きりとか、今でも虫酸が走るもん。」
「ハツハツハツ!!セツヒトは冗談が上手いな!!」
「本気だつてのー!このバカマシヨルク!!」

獄狼竜。

私の中で、最強の敵。

屠るべき、最も憎い相手。

それが今、骸となって私の前に横たわっている。

倒した。

倒したけど。

……………。

感慨とか、そういうのは……………無いかなー。

「そっか」って感じ。

ハスガさんの言うとおり。自分の全ての思いと技をぶつけた。

獄狼竜は、ついに私達に反撃もままならないまま、倒れ伏した。

……………スツキリしたわけじゃないけど。

ありつたけの思いを爆発させたから、少しは気が晴れた。

ミヨシやタオカカ、アヤのみんなに、後で報告しよう。

そんなことを考えていると、ハスガさんが近寄ってきた。

相変わらずでっかい。

頭は、そのまんまなんだねー。

険しい顔をして、私に頭を下げる。

「セツヒト……。その、なんだ。」

「んー？」

「……………あの時は。いや、今もか。……………苦しい思いをさせてしまつて、すまなかつた。」

「……………うん。」

「……………いや、『うん』つてお前。」

「……………わからないんだよー……………二人には、カホ・チータのみんなには……………恨みもあるし感謝も恩もあるし……………でも、今日だつて助けられたしさー。」

ハスガさんは、そのでかい体を折り曲げて謝罪してきた。

今更……………なんだろうけど。

それで何かが終わるわけでも始まるわけでもない。

死んだ皆が帰ってくるわけでも、報われるわけでもない。

ただ、わかるのは。

この二人が、カホ・チータが、あの日のことをしっかりと想っていたってこと。

忘れずに、今だつて。

それでまあ、いいんじゃないかって……………思えた。

私は、感謝も怒りも、もう色んな気持ちをごちゃまぜになってたけど。うん。このままで、いいや。

全てを抱えて、これからも生きていこうと思う。

……それに、今は。

ソウジが気になって、しょうがない。

「……………ハスガさん。そんなことより……………ソウジとシヨウコちゃんは、どうなったのー?」

「……………ああ。そうだ、気になるよな。」

古龍、天廻龍シャガルマガラ。

獄狼竜より弱い、なんてことはないだろう。

ピンチなら、すぐに向かいたい。

「さつき、緑の信号弾を打った……………だが、あの霧だ。見えてねえかもしれねえ。」

「緑の?」

「ああ。ソウジたちには伝えたんだがな？コッチのカタがついたら、連絡するってよ。だが、黒い霧は晴れてねえ。もしかしたら、今まさに、やってる時かもしれねえ。」

「……………ソウジ……………」

心配するな、なんて無理だ。

できるなら、今からでも向かいたい。

ソウジなら、やってくれると思う。

私が惚れた男が、負けるわけない。

……………と思いたいんだけど。

「……………ソウジのところ、行きたい。」

「……………ま、そう言うよなあ。」

だって、近くにいたいんだもん。

「……………うむ！ハスガ！セツヒトがこう言ってるわけだ！ガーグア車か何かを手配してやって来たのだろう？それで行くのではないか！」

「……ああ……あ、いや、やっぱりダメだ。」

「えー!?なんでー!?」

だめなのー?

「セツヒト……お前、性格まるつきり変わったな……昔はこう、もつと純粹で素直でかわいい……。」

「む、むむ昔の話はいいからー!!なんで行っちゃだめなのさー!!」

昔の話って……あの頃の私の性格の話はしないでほしい。

自分で言うのも何だけど、可愛らしい女の子だったと思うし……。

今は……自由?うん。

まあカワイゲは無いかなー……。

とか何とか思っていると、ハスガからシャガルマガラのところに行けない理由が話された。

「……………狂竜症だ。人体への影響が計り知れん。」

「……………あ……………」

すっかり忘れていた。

ゴア・マガラ……シヤガルマガラの恐ろしさは、その強さもそうだけど、原因不明の病気になるところにある。

確かシガイアさんが、鱗粉の影響って話してた気がするけど……。

「どういいうわけかは分からねえが、ソウジはそれを克服しているようだ。……俺たちが手を合わせればシヤガルマガラにも負けねえと思う。さっきの狩猟で、よくわかった。だが、狂竜症は別だ。わざわざ毒を食らってまで死に行くバカがどこにいる。」

「私に行きたいぞ!!」

「マシヨルクハカ代表は黙ってる。……そういうわけだ。」

「……………。」

何も言えなくなる。

ワサドラでの被害。

その死傷者には、痛々しい傷があった。

体が動かなくなる……だっけ。

詳しいことはわからないけど、それが事実なら致命的だ。

……でもさー。

ソウジが心配。

………近くに行きたい。

「………禁足地の近くには、行けるよねー？」

「ま、まあな。霧の影響が及ばない範囲なら……。」

「………そこまで行く。」

「………本気か。」

本気だよ。

だって、二人が、ソウジが、心配なんだもん。

ハスガさんをじつと見つめる。

私の気持ち伝わったのか、ハスガさんは大きい手でつるつる頭をポリポリかいて、

口を開けた。

「……ああ、分かった。但し、何かあつたらすぐに引き返す。もちろんソウジに何かあつたら、逆に突つ込む。……それでいいか？」

「……………うん。ありがとー、ハスガさん。」

「おう。……マシヨルクも、それでいい……ああ!?! いねえ!!」

私達はすぐに山地帯を下りた。

マシヨルクは既に車の上に乗って、私達を待っていた。

さすがの速さとアホさに、私達はため息をついたけど。

急いでいたのは確かなので、すぐに西に向けて出発した。

目指すは、禁足地の近く。

ソウジ、頑張つて。

ソウジなら、できるよ。

応援しか、今はできないけど。

ソウジなら、大丈夫。

私は西のドス黒い空を見ながら。
あの空が綺麗に晴れますように、と。
ソウジが無事でありますように、と。
心の中で祈った。

168 天廻龍と約束しましょう。

シャガルマガラと対峙して、もうかなりの時間が経ったと思う。

時間は分らない。

だって空暗いし、周りはシャガルマガラの鱗粉？のせいで薄明るいし。

体は疲れ果てている。

万全ではない。

シヨウコを爆発からかばった時に、背中に傷も負った。

負った、と思う。

確証が持てないのは、背中は見えないから。

見えないからまあいいやという謎理論を持ち出し、とりあえずなんとか気を保つてい
る。

双剣の斬れ味も問題だ。

なんとか岩場に駆け込んだら、スキを見て砥石で研いでいるが……この戦法も、命が
けである。

まあそもそもが狩猟自体命懸けなわけだけど。

砥石使用高速化が無ければ、終わってた。スキルと防具……セツヒトさんに感謝だ。というわけで、俺がシャガルマガラに敵う要素が割と少ない。

(……………でも、不思議と、なあ、)

落ち着いている。

いつもみたいに、アドレナリンドバドバ状態ではない。

リラックス……とまでは言わないが、なんかいい感じに力が抜けている。だからって、状況が好転するわけではないけど。

「グアアアアアアア!!」

「くっ…………!!」

再び空に舞い上がり、大きな咆哮を上げるシャガルマガラ。

そのたびに身が竦み、狩りが仕切り直しとなる。

先程から、実は何回かカウンターを入れられている。

だが、その度にこう飛び上がられてはたまらない。

手数の武器である双剣は、リズムも大切。やりにくいっつらない。

それに、攻撃が効いている気が全くしない。

動きは相変わらず素早く、一撃一撃はとてつもなく重い。

不規則な地面の光攻撃と相まって、俺はかなり疲弊していた。

(あんだだけ走りこんだんだけどなあ。)

自分の体力の無さに、もっと鍛えておけばよかった、と後悔してきた。

いや、頑張ってきた、とも思うけど。

「……………グルルルル……………」

「……………強いなあ、お前。多分俺史上最強だよ。」

「……………ガアッ!!!」

「ぬおおっ!!?」

ドダッ、ドダッ、ドダッ!!

突進攻撃。

まだ食らってはないけど、あれ一撃でもかなり持っていられる。

気をつけないと。

更に言えば……。

「グルアツ!!」

「こっちか!!」

ビュオオ!!

体を翻し、尻尾の勢いも付けて前脚で薙ぎ払う攻撃。

これは範囲も広く、注意が必要だ。

回った巨体の左の懐に突っ込んでいくと、案外無事であることは分かっている。

だが、当たったらタダでは済まない。

そして。

「グルアアアア!!!」

「くっ……!!」

ブワツ……ドガアツ！ドガツ！ドガアツ!!

こつちがうまいこと足元に回避していると、すぐさまブレスを仕掛けてくる。

広範囲で威力の高いブレス。

おかげで行ったり来たりを繰り返している。

……そりゃあ疲れるわけだ。

何ならこのブレス、時間差で爆発する。

こつちが「あれ？なにもない？」とか思っていると爆発するのだ。

おかげで既に数回吹き飛ばされている。

不規則な光の地面攻撃と似ているが、威力が違う。

これもこれ以上喰らえば、致命傷を免れない。

「グルルルル……」

「……………」

避けんなよコラ、とでも言わんばかりに、こちらをにらみつけるシャガルマガラ。
いや、あんたの攻撃大概強力ですから。
避けるよそりや。

(……………ああ、でも。)

そういえば、と思い返す。

避けられては、いる。

不思議と。

いや、当たったらやばいんだけども。

背中の痛みと相まって、当たったらどうなるかなんて考えたくもないんだけども。

「グアアア!!!」

「っ!!?またかよっ!!」

ドドドドドド、と迫りくる突進。
やっぱり避ける。

(まあでも、ティガレックスの時よりはましか……アイツのときは足場が雪だったし、
んでもなくしつこかったし………ああ。)

思い出した。

思い出してきた。

俺は、ハンターになって、いろんな出会いがあった。

モンスターもまた、たくさん。

経験が、ある。

シャガルマガラの攻撃全てに、経験が。

「グアア!!」

(爪撃……。)

ヒヨイツ。

ドガア!!

岩に突き刺さり、砕くほどの一撃。

威力こそ違うが、ジンオウガの前脚よりはまだ避けやすい。

アイツは動きから何からバランスが良かったからなあ……かつこいいし。

シャガルマガラは……なんと言うか、ちよつとアンバランス。

「グア……!!」

ヒユイイイ……!

(ブレスの前触れ……!)

シャガルマガラが苦しそうに、青黒い煙を口から漏らす。

ブレスします、と教えてくれる。

(初ブレス……というかビームは……ああ、あいつだ。)

俺が初めてこの世界に来たときに戦った、あいつ。

そりゃ岩と間違えてくつろいだ俺が悪かったけどさ。

……死ぬかと思つた経験は、あのバサルモスが初めてだったなあ……。

ズドオ!!ズドオ!ズドオン!!

なんてことを考えていたら、その青紫のブレスが爆発した。

ブレスを避けるのは得意技……なんて言ったらシヨウコに怒られるけど……。

ま、まあとにかく。

懐に潜ればいい。

スツ。

「……ふっ!!」

ザシュー！ザザン！ザン！！

「ギヤアアア！！」

（ラージャンのビームも、アレやばかったよなあ……。）

斬りつけながら思い出すのは、金色の光線。

スーパリーなサイ○人さながらの、アニメでしか見ないようなあの光線だ。

（足元にスキができるのは、こいつも同じだ。）

冷静だ。

不思議と。

いや、不思議じゃないか。

シャガルマガラの動きは、今までの奴らを思い出せば、なんてことはない。

いや、当たると死ぬと思うんですけど。

……………どうにかなる気がする。

「ギャアアア!!」

(飛び上がって……滑空、かな。)

これもラージジャンのローリング物理法則無視アタック……………いや、リオレウスの滑空攻撃に近いかな？

ラージジャンの方は当たる寸前に避けるのがミソだったけど……………シヤガルマガラの場合範囲が広い。

リオレウスの滑空も、範囲が広いからなあ。

(横に避けるのは諦めて……………ふっ!!)

当たる目前。寸前に。

飛び上がり、回転。

攻撃まで行うのは、ちよいとキツイ。

今回は回転しての回避のみ。

ギギン!!

「うおつとお……うん、うまくいった。」

「グアアアア!!!」

回転回避。

相手の力を、そのままいなす、俺の技。

コツをつかんだのは、雪山だったな。

ゴシヤハギさん……あの時はお世話になりました……!!

「グアア!!グアア!ギアアアア!!!」

「ぬおつ!!ほっ!ふんっ!!」

上から振り下ろされた、シヤガルマガラの前脚による連続攻撃。

だが、落ち着いて見切る。

(ゴシヤハギさん……あなたの連続斬りには、遠く及びません!!避けられます!!)

いや、多分シャガルマガラの方が強烈だと思うけど。

故・ゴシャハギさんへの思い出補正は、俺の中でそれほど強い。

実際、あの連続斬りはヤバかったし。

後にも先にも、モンスターにさん付けしたのはゴシャハギさんだけだと思う。

「……………グウウウ……………!!」

(……………雰囲気が変わったな。)

緊張が、辺りを包む。

いい加減避けまくる俺に業を煮やしたのか。

シャガルマガラか、身を低くして構える。

(空気が、ピリピリする……………デインバルドを思い出すなあ……………。)

数々の、死ぬかと思つた経験。

その中でも、段違いにやばいと思つたモンスター。

斬竜デインバルド。

(尻尾を嘔んで……あの溜める瞬間は、マジで怖かった。)

思い出す。

あの時の緊張感。

回避に失敗すれば、天国への直行コース。

「……………ガアア!!!」

(……………っ!!)

刹那、前脚を振り上げて俺を切り裂きに來たシャガルマガラ。

間違はなく殺しに來ている、その一撃。

速度が、今までとは比較にならない。

でも。

(……………見える。)

ヒュン……。

ザシユ!!

ズザザザザザザザザザ!!!

「ギャアアアア!!?」

(空中回転………乱舞っ!!!)

ズザザザザザザザザザン!

「グアアアア……。」

ズウン。

(……チャンス!!)

ピンチはチャンス。

デインバルドで分かったこと。

アイツの尻尾は、最大の武器であり、最大の弱点。

狙って攻撃できるなら、むしろ最強の尻尾攻撃は最大のチャンスともなる。

まあ狙ってカウンターばかり、なんてやってたら、死ぬけど。

(鬼人化!!)

ザン!!

ザシユ!!ヒユパツ……。

ズザザザザザザザザザザン!!

「ギヤア!?ギヤア!!グアアアア!!」

「ふっ……ふん!!うらあ!!」

倒れ伏せる相手を、タコ殴りにする。

……シャガルマガラには失礼ながら。

俺は頭のどこかで、これまでの敵を思い出していた。

バサルモス、ドス系、アオアシラ、プケプケ、ロアルドロスにルドロス……。
リオレウス、リオレイア、デイノバルド、オロミドロにタマミツネ……。
ジンオウガ、ティガレックス、ゴシヤハギさん、ベリオロスにザボアザギル……。
アンジヤナフ、そしてラージャン。さらに、ゴア・マガラ……。こいつの前の形態。
強敵の数々。

……今、相対するは、天廻龍シヤガルマガラ。

こいつが、生まれ変わって何度となく俺の前に現れるとしたら。
さつきみたいに、また復活するとしたら。

俺は、その度にこいつを倒す。

天廻龍シヤガルマガラ。

輪廻を巡り、また再び俺たちの前に現れるのかもしれない。
生き返って来る。

それが、コイツの生態であり、生き方。

ただ、命を全うするだけの、生き物。

それがお前だというのなら。

「…………お前に罪なんか無いけどっ！なっ！」

ザン！ズザザザザザン！

「人間の、俺たちの勝手な勝手なエゴだけどな!!」

ザシュツ!!ヒュパツ!!

ズザザザザン!!

「グアアアア……………！」

連撃に加えた連撃の後。

苦しげに立ち上がったシャガルマガラは、まっすぐに俺を見据えた。

「……………大切なみんなが生きるために。俺が生きるために。お前を屠る。それが俺の生き方なんだ。モンスターハンター、なんだ。」

「グウウウ……………」

「……………また生き返るのがお前の使命なんだってんなら……。」「……………ガアアア!!!」

シヤガルマガラが、両の前脚を持ち上げた。体重を乗せた、攻撃が来る。

「……………いつだって、俺は、お前を倒す!!!」

俺は、軽く跳び上がると、身体を捻った。力はいれない。身体を溶かしに溶かしていく。

ヒュン……。

「……………うらあ!!!」

「グルアアアアアアアアア!!!」

グアツ!!

眼の前に迫る、シャガルマガラの爪。
寸前で、受け流し。

ヒュン!!

ザシユン!!

ズザザザザザザザザザザザザザザザザン!!

相手の勢いに任せた、俺のカウンター。
回転は勢いを増し。

ザシユウ!!ズザザザザン!!!

「グア!!……………アアア……………」

……………ズウン……………。

シャガルマガラの体を引き裂いて。

「……………」

「はあっ……………はあっ……………」

遂に、仕留めたのだった。

170思い出しましょう。(終)

「……………やったんだよな、俺たち。」

真夜中、一人でボソツとつぶやく。

ここは首都ギルド西支部の医務室。

背中が痛いたため、ベッドにうつ伏せになりながらの独り言。

(……………正式な完了報告は、後でいいってことだし……………装備もアイテムも……………まあ大丈夫だし……………)

ずっと気になっている。

心の中のモヤモヤ。何か、忘れてはいけないものを忘れている。

そんな感じ。

* * * * *

首都に戻ってからは、てんやわんやだった。

キレイな夕焼けの中、西門をくぐってすぐにギルドに向かった。

街の中は普通だったのに、ギルドに入った途端拍手喝采に包まれた。

ギルドマスター直々の獄狼竜の狩猟。

しかも、往年の仲間であるマシヨルク教官と、超有名人のソロハンターであるセツヒトさんを伴っての猟果。

更には、俺とシヨウコの古龍の討伐。

その色んな情報が相まってか、それはそれは盛大に迎えられた。

「ソウジさん！シヨウコちゃん!!」

大きな声をあげたのは、ハイビスさん。

ギルドにずっといたのだろう。眠ってないのか、目が赤く腫れている。

ただいま帰りました、と言おうとしたら。

何と、俺とシヨウコ二人に飛びついてきた。

「…………ご無事で…………お疲れさまでした…………。」

「は、ハイビスさん。」

「ウチら、生きてますよ。…………ただいまです、ハイビスさん！」

俺たち二人を抱きしめながら、涙を流して迎えてくれた。
もうびつくり。

「おー!!いいぞー!受付嬢のねーちゃん!!」

「一番の功労者だー!!やれやれー!!」

やんややんや。

周りのハンターたちが、好き勝手に囃し立てる。

「…………す、すみません。あまりに、う、嬉しくて…………。」

「…………いえ、とんでもないです。」

俺たちから離れるハイビスさん。

そのまま、キリツとした顔に切り替わった。

「本当に、狩猟お疲れさまでした。皆様の報告、承ります。」

「……はい！」

これだ。

いつも華麗な受付嬢、ハイビスさん。

帰ってきたって感じがする。

「おう、ありがとな、ハイビスさん。色々と確認したいことがある、部屋に行こうや。みんな、いいか？」

「あ、はい。」

周囲の歓迎ムードも、ハイビスさんの抱擁もお構いなしにぶった切るハスガさん。流石である。

「もーハスガさん。無粋ー。」

「せ、セツヒト。そう言うな。」

そしてそんな強面に、いつもの調子で突っ込めるセツヒトさんもすごい。

随分と打ち砕けてるなあ。

まあ、昔もこんな感じだったのかも知れない。

周囲にザワザワと声をかけられながら、俺たちは部屋に移動した。

.....。

.....。

「と、シャガルマガラの方はこんな感じでした。」

「.....。」

「.....あー、なので、また出てきたら俺が頑張りますので、はい。」

「.....お、おいソウジ。本当か？」

「えっ？」

部屋に着いたら、まず俺の方から報告。

首都を出てから、おじさんにギリギリまで送ってもらって。

それからは禁足地の頂上まで山歩き。

戦闘に突入。

半端ない体力、熾烈な攻撃で圧倒してきたシャガルマガラ。

シヨウコの限界、そして俺の負傷。

さらに、止まっただけのシャガルマガラの復活。

絶体絶命の中、不思議と落ち着いて狩猟できたこと。

そして、天廻龍シャガルマガラとは、また戦うことになる、という変な予感。

その流れを伝えた。

そして、ハスガさんが変な顔をして俺を見てきた。

……そんな反応するわな……。

「とりあえず、お前がすげえってのは分かったわ……。」

「は、はあ……。」

「うむ！ソウジくんとシヨウコくんの死闘、この目で見られなかったことが悔やまれる

!!」

「いや、マシヨルク、そこじゃなくてな……。」

ハスガさんは、スキンヘッドをポリポリと搔いて、静かに、だが重く、俺に問いかけ
てきた。

「……本当に、復活するのか？」

「……する……と思います。間違いなくトドメは差した、心臓も止まっていた。でも、い
つか必ず。」

「……いつだ？」

「……頭おかしいと思われても、構いません。ただ絶対アイツはまた来るとしか、思えま
せんでした。」

「……………」

ぶつとい腕を組んで、俺を睨みつけてくるハスガさん。

俺の言動の真偽を見極めているのだろう。

だが、そんなに見られてもどうしようもない。

だって……俺だってただの勘なのだ。

確信はしているけど。

数秒の沈黙の後、ハスガさんが重い口を開いた。

「……わかった。お前がそこまで言うなら、俺は信じる。」

「……マジですか。自分で言うのもなんですけど、俺すつごく変なこと言ってますよ?」「だってなあ……倒した本人がそう言ってるし、何なら自分でまたやるってんだ。……別に警戒するに越したことは無いし、ソウジが納得してんなら、俺からは何もねえよ。」「……ありがとうございます。」

周りのみんなも、アホなことを言う俺に突っ込むかと思ったら、100%信じている様子。

いいのかそれで。

「まー、ソウジは嘘つくようなヤツじゃないしー? 私も信じるー。」

「ご主人さまは少しはこつちを頼って下さい。」

「ソウジ君! その時は私を呼ぶといい!! 私もシャガルマガラとやらとやってみたいぞ!!!」

「い、いくらマシヨルクさんでも、狂竜症はどうしようもないのでは無いでしょうか……？」

「そんな時はまた俺が送っていくからな！二回も三回も変わらねえ！」

「……みんな……。」

うん、信じてくれている。

なんなら次の予定まで決めだしている。

いや、そんなすぐに復活されたら流石に困るんだけども。

「あー、とにかく、だ。」

すると、場を制してハスガさんが話し始めた。

「この件はギルドのトップで預かる。現在回収班が現地に行っているはずだ。その辺の情報と加味して、判断する。それまでは全員他言無用で頼む。変な混乱は招きたくねえ。……またミヤコに相談しねえと……あいつすげえ顔しそうだなあ……。」

判断が速い。

この辺、伊達にギルマスをやっていないよな。

頼り甲斐という言葉が何とも似合う人である。

「じゃあ俺たちの方が……まあ何てこたねえ。数年前……大陸北部に急遽出現した獄狼竜が、シャガルマガラのスタンピードの影響でどういうわけか出現。場所は首都から北西の山地帯。途中まではマシヨルクとセツヒトが狩猟。途中、俺が参戦して討伐完了。以上だ。」

「だいぶ端折ってるけどー、私なんてあんまり役に立たなかつたよー。いやー、強かつたー。」

「トドメを差した張本人が何を言う！素晴らしい狩猟だつたぞ！セツヒト!!」
「うるさいよー……ありがと。」

……おお、セツヒトさんが教官にお礼を言うとか……！

明日は雨が降るぞ。

「その個体は、あの時の獄狼竜だつたんですね。」

「うん、間違いないよー。あの角の折られ方、私が見間違うわけないしー。」

気になったことを俺が聞くと、即答で返事が返ってきた。

セツヒトさんは呑気に言うが、それだけあの時の獄狼童を常に頭に思っていた、というわけだろう。

決していい思い出ではなかるうに。

……いつか必ず倒すと、決めていたもんな。

まあ本人は、そこまで感慨は無さそうだけど。

* * * * *

報告はそこまで。

「細かくはまた。とりあえずもう遅い。怪我人は医務室。他は飯食って寝るぞ。」とハスガさんが締めて、お開きとなった。

俺はハイビスさんに付き添われ、シヨウコとセツヒトさんと医務室へ。

セツヒトさんは腕を、シヨウコは特に体の中を診てもらった。

意外にも俺が一番重症だったため、そのまま経過観察で入院。

数時間おきに看護師さんが背中の薬を貼り替えなければならぬとのことだった。

医者には、「何でアンタ立ってられるんですか!？」と驚かれた。

やたらとエグい傷だったらしいが、俺には見えん。

見えないものはわからん。

よって、俺は無事なのだ。

Q. E. D.

「そのワケワカラン怪物理論はご主人さまにしか通用しません。今夜ばかりは、大人しく治療されて下さい。」

「はい。」

バツサリとショウウコに切り捨てられた。

ひどい。

そして現在に至る、というわけである。

ちなみに、先程二回目の薬の塗替えをしてもらった。

看護師さんに、めっちゃめっちゃ容赦なく薬を塗ったくられた。

「はいめっちゃ痛いですから覚悟してください。」なんて言われて、0.5秒後には激痛が走った。

まさしく白衣の悪魔であった。

ギルドの医務室の職員なんて、そんなものらしい。

真夜中、眠い中俺のためにやってくれているのだ。文句は言えない。

とはいえ……ワサドラの医務室が懐かしい……あの優しい看護師さんに会いたい……。

そんなどうでもいい郷愁に駆られながら、俺はうつ伏せ状態のまま、眠りについたらのだった。

……。

……。

……。

夢を見た。

場所は禁足地。

目の前に浮かぶのは、天廻龍シャガルマガラ。

不思議と怖くはなかった。

戦う……のではなく、ただただにらみ合うだけの俺たち。

そんな始まり方。

急にシャガルマガラが空を見上げた。

そしてそのまま、暗雲立ち込める空に突っ込むように飛んでいった。

急に開ける雲。広がる青空。

シャガルマガラの姿は、もう無かった。

ただ、大きな一枚の鱗が落ちてきた。

白い、そしてどこか神々しい。そんな一片の鱗。

手に取り、じつと見つめる。

また相まみえる時は、これを持っていこう。

『すべての生物の頂点に喧嘩を売るとか、正気の沙汰ではありませんね。』

(……そうですね……俺とんでもない約束しちゃったかなあ……。)

『ご安心下さい。約束とかそんなもの、あつちは全く気にしてないようです。』

(えええ!?マジですか!?)

『はい。そもそもが輪廻転生を繰り返して、この世にまた現れる。そんな摩訶不思議常識なにそれおいしいの生物です。人間のことなんて、ほとんど興味ありません。』

(……おれみんなにめっちゃ「約束したぜ!」みたいに触れ回ってしまったんですけど……。)

『はい。かつこ悪いですね。』

(容赦ないツツコミ!!)

『……。「…….…….まあその時は、またやるよ、俺。モンスターハンターだもん。」とおっしゃってましたね。』

(うぐう!!)

『「……頭おかしいと思われても、構いません。ただ絶対アイツはまた来るとしか、思えませんでした。」とも、おっしゃってました。』

(ぐはあ!!)

やめて!女神様!!もう掘り下げないで!!何この気持ち!?

中学生とかその頃の恥ずかしい思い出を、同窓会とかで周囲にネタにされたときみたいな甘酸っぱい気持ち!!

血吐きそう!!

『でも……。』

(……へ?)

『あちらは、ソウジさんのことはインプットしたようです。』

(い、インプット……?)

『おめでとうございます。無事、最強生物に目をつけられたみたいですね。』

(……いや、なんかその言い方だと、俺が自殺願望のある変態みたいな感じに。)

『そのつもりで申し上げております。』

(ですよねえチクシヨウ!!)

気づいたら何か女神様といつものやり取りをしていた。

懐かしい、いつものやつを。

女神様がボケて、際限なく俺が突っ込んで。

場所も変わって……。

……ん？

ここは……覚えがある。

白い、ひたすらに白い風景が広がって……水が張っているこの地面……。

……!?

ここは、俺が……。

俺がこの世界に来た時の……

* * * * *

「……女神様!!」

「わあ!?!」

「……あれ?」

夢から覚めた。

……はつきりと。

はつきりと思い出した。

俺は、この世界にやってきた、異世界の人間。

変な女神様に言われるがままに成り行きで助けてもらって……。
そこから……。

「そ、ソウジ―？」

「……のわっ!!セツヒトさん!？」

「そ、そうだよー?ていうかせつちゃ……。ソウジ、どしたのー?……。だいじよぶー?」

「え、ええ……。」

セツヒトさんが、心配そうに俺の顔を見つめてくる。

……。何で。

何で忘れていたんだろう。

一生忘れない、忘れるわけもない、俺の恩……。神。

俺が、この世界に生きる、その始まりの、超俗っぽいあの……。

「……ソウジ―？」

「あ……。すみません……。取り乱して。」

不安そうな顔をするセツヒトさん。

長い銀髪をベッドに垂らして、俺の顔を覗き込んでくる。

「……女神様って……ソウジが言っていた、あのー？」

「……あ、そ、そうです！おれ、さっきまでそのこと忘れていて……な、なんで……。」

忘れていた？

俺の、俺自身の事を。

大切な事を。

「……んー、よくわかんないけどー……。」

そういうとセツヒトさんは、当たり前のように言った。

「……大切なことなら、思い出してよかったんじゃないー？」

「あ……。」

「もう二度と忘れないように、何か書いたり残したりしておくとかさー。……わたしもー、覚えておくよー。」

そうか。

単純に考えれば。

俺は思い出せた。

大切な事を、思い出した。

二度と、もう二度と。

忘れたくない。

すると、セツヒトさんが姿勢を正して、俺に向き直った。

いつものニヤケ顔ではない。

美しい、凜とした。

それでいて、どこか抜けているような、そんないつもの表情を浮かべていた。

「私の、大切な人のー、大切な……思い出ー？一緒にさー……覚えておくからさ……。」

「……………セツヒトさん。」

「だからー……そんな顔しないでー？……ソウジが泣きそうな顔してると……わ、私も……何か泣きそう……。」

泣きそう？

俺が？

……あ。

俺は。

俺は。

今、悲しいのか。

「……………」

「……ねー、ソウジー？」

「……は、はい。」

「わ、私がそばにいるからさー？」

「……………」

「……今だけ、思いつきり悲しんでいいよー？……そしたらさー……。」

「……………」

フワリと、抱きしめられた。

温かい、セツヒトさんの、腕。

誰よりも強く、誰よりも悲しみと憎しみを背負ってきた、そんな腕。
それが今、俺を包み込んでいる。

「またワサドラで……………美味しいもんだべよ？」

「……………う……………」

「……………ねー？」

「うああ……………」

……………俺は、泣いた。

恥ずかしげもなく、静かに。

恥ずかしくはない。

この人なら、俺は、全てを預けられる。

だから、言われたように、今だけは。

今だけは……。

このよくわからない喪失感を、共有してもらおう。
ありがとうございます、セツヒトさん。

俺は、古龍を討伐した。

多分、自分で言うのも恥ずかしいけど、かなりの功績。
成し遂げたって気はしない。

だから、これからも、生きていく。

みんなを、俺の大切な人たちを守る。

モンスターハンターとして。

あとがき

本編、完了しました。

この稚拙で遅筆な筆者の話にお付き合いただいた皆様、本当にありがとうございます。また、

初投稿でしたが、どんな形であれ終わりまで持つていったのは、一重に応援いただいた皆様のおかげです。

ここでは、ご質問に答えたり、とっ散らかった話の内容についての反省をしたり、その辺の言い訳を簡単に書き殴ります。

☆きっかけ

モンハンの小説やネット小説が好きです。ノベル版など読み漁り、ハーメルンに流れ着きました。

「これこれこんなので、こんな小説読みたいんですけど。」

↓「じゃあ自分で書きなさい。」

↓「はい。」

と、友人に言われたのがきっかけです。何と言う成り行き任せ……。ちなみに、筆者もおっさんです。

☆世界観について

ただただモンハンが好きです。二次創作として、MH4やRISEなどの世界に寄せました。独自解釈も大いにありました。戸惑われた方、不快に思われた方、たくさんいらつしやいました。もう本当に申し訳無いです。

双剣は、モンハンで私の最も愛する武器です。派手でリスクも高い、初心者向けなのか上級者向けなのかよくわからない感じが、主人公の戦い方そのままに生かされました。

☆キャラクター・展開について

考えていたキャラクターはほとんど出せましたが、隠し玉は出しそびれました。話の展開を途中で修正するという暴挙に出たためです。

ラストを天廻龍にしたのは、狂竜症の発症と鬼人化を合わせての克服という展開にしたかったからです。また、どうしてもソコを強いられるという流れしたかったので。

黒龍とか風雷神とかその辺も考えましたが、何が出ても「強キャラ複数使ったら勝てるやんけ。」となりまして。ソウジが一人で出張るようにするための布石として、黒蝕竜&天廻龍を出していく方向にしました。

書いていて一番楽しいのはハチャメチャなキャラです。あとおっさん。なので、マシヨルク教官とか御者のおじさんとかシガイアさんとかその辺です。無い頭で策略と考えるのは骨が折れました。向いてないです、こういうの。

ヒロインは話の流れ的に彼女しかいない、となりまして、落ち着きました。今でもこれがよかったのかはよくわかりません。

というわけでダラダラと垂れ流しましたが、以上であとがきも終わりです。

後日談を何話か載せるつもりでおりますので、ぜひ見てやってください。

今日までのご愛読、本当にありがとうございます。

感想などは、これからも見させていただけます。次回作もがんばります。

171 続けましょう。(後日談①)

後日談です。

ゆっくり進みます、基本蛇足です。

目が覚めた。

さて……今から寝相の悪いあの人を起こし、洗濯とトレーニングの準備……。

……できない。

目が覚めたら、動けない。

落ち着いて状況確認。

ただいま、万力の如き力で締め付けられている。

この人に。

服は……着ているな。矯正の成果が出ている。

だが、この寝相の悪さはまだ改善しない……。

そしておそらく、力ではまだまだ全く敵わない。
いかん。

このパターンは……。

「んー……ソウジー……。」

「あの、セツヒトさん？いい加減起きないと、俺の身体がおそらく無事ではー」
「せつちゃんー……。」

ギリギリギリギリ……!!!

「ぬあああああ！ぎ、ギブギブ!!し、死ぬ!!!」

「あれー……？……ふん！」

「ぐああああああ!!!も、もう……あ……。」

あれ？何か見える。

あれは……天国？

あつ。

……いや内臓が内の臓物が昨日の夕飯が上から下から出ちやいそいやもうやめてええええええあ

チーン。

* * * * *

「ぬああ……いてえ……。」

万力からようやく抜け出し、急いで準備。

何とか、寝起き臓物ごと布団にべっちやり☆的な大惨事は免れた。

かなり遅れた。シヨウコ、怒ってるかな……。

しかしセツヒトさん……生物学的にありえない力である。

まだまだあの方には敵う気がしない……色々あるこの世界、あの人が一番ファンタジーじゃないだろうか……。

「……おっ……いかんいかん。」

遅刻だが、忘れてはいけないことが一つ。

一階に降りた俺は、武具屋の受付の上に顔を向けた。
深呼吸して、気持ちを整えて……。

パンツパンツ!!

柏手を2回。

「……行つてきます。」

目を瞑つて、挨拶を申し上げた。

忘れてはならない、毎日の習慣。

受付の後ろ上、簡単に作った棚の上には、少しボロくなったアイテムポーチと一枚の
白い鱗。

そしていろんな勲章とか、そんなの。

それに向かって、一礼した。

「……………やばいつ、シヨウコに怒られるっ！」

ダツシユで家を出た。

女神様、行つてきます。

……………。

急いで向かった村の入口には、既にシヨウコがスタンバっていた。

「ご主人さまー！遅いですよー!!」

「す、すまん……………今日はガララアジャラのごとく締め付けられて……………うう……………」

「……………顔を見るに、またやられたんですね……………」

「シヨウコ、代わつてもいいぞ。ていうか一度やられてみる。」

「……………さ、さーて、今日こそはウチが勝ちますからねー!!しゅっぱーっ！」

「あ、こら！無視して勝手に始めるな!!おい!!」

セツヒトさんからの愛の抱擁（極強）を、今日も今日とて喰らい。

すつかり慣れ……いや、慣れそうにもないのだが、そんな修羅場？をくぐり抜け。

俺とシヨウウコは、いつものランニングを始めた。

「ふふん！最近のご主人さまも息上がるまでには来ましたからね！今日ぐらいで追いつきます!!」

「ほう……随分と主人思いのオトモだな……だが!!」

サツ！

コチヨコチヨ!!

「ふにやあああん!!」

「ふはははは!!先はもらったあ!!」

「み、耳は卑怯です!!こ、こんのご主人さまー!!」

最近シヨウウコが体力的にも追いついてきている。

アイルー系亜人の本領発揮。そもそもが人間よりも圧倒的な体力をもつ。

さらには、シヤガルマガウ戦の後は、「不甲斐ない自分は嫌なんです!!」と、より体力アップに余念がないのだ。

特にここ最近の力の付き具合は尋常ではない。

そろそろもう、俺は追いつけそうにないぐらい。

……だが、まだ勝ち譲らん!

「待つてくだ……待てやご主人さまー!!」

「ははははは!!勝てばいいのだ勝てば!!」

……だってちっちゃい女の子に負けるって、悔しいじゃないですか。
しばらくは、負ける気はない。

* * * * *

「いただきます。」

「い、いただきます……。」

宿「ホエール」で朝食を。

もちろんセツヒトさんも一緒に。

ちなみにシヨウコは「くやしい！今日は2セットやります!!もうぜつつつたい負けへん!!」といって、辛うじてランニング勝負に勝った俺を残して走り去っていった。

ドールの朝食を置いてまで行くとか……シヨウコの本気具合が伺える。

……もう明日にも抜かれる気がする……。

そんな疲れ気味の俺に、セツヒトさんが寝ぼけ眼で話しかけてきた。

「ソウジー、ほっぺ、ご飯粒ついてるー。」

「あ、すいません……。」

「……ついにシヨウコちゃんに抜かされたー?」

「い、いえ。今日はまだ。」

「あの子もソウジも、そろそろ私とかマシヨルク抜くよー?もう二人の体力やばいつてー。」

「ま、マジすか。」

そんな怪物たちを超えていくというのか、シヨウコ。

というか俺も。

うーん。

継続は力なり。

コトツ……。

そんなことを考えていると、ドールが最後のおかずを持ってくる。

机に並ぶのは、純和食の食卓。

ドールはまた腕を上げた。

「はい、冷奴。ご飯のおかわりは、いる？」

「あードールちゃん。おねがーい。」

「ん。ソウジさんは？」

「い、いや、今日は止めておく……。」

「そう？じゃあ……。」

スタスタスタ……。

いつものようにおかわりを聞きに来てくれたドール。

セツヒトさんもまた、いつものようにおかわりをした。

俺？

もう吐きそう……。

こうやって、朝食と夕食は、俺たちは完全にドールのお世話になっている。

自炊も考えたが、「ご近所に最高に料理が上手くて可愛い子がいる食堂があるじゃんねー。」とか何とかセツヒトさんが言い、現在のように落ち着いた。

これでいいのか、と言われればこう答えよう。

もう大正解。

だってこの世界に来てからこっち、この味から離れられないのだ。しょうがないっつらないのだ。

「ホッホッ。今日もふたりとも、元気そうじゃのー。」

「ホエールさん、おはようございます。頂いております。」

「ええ、ええ。払うもんは払ってもらっておるしの。……セツヒトは、少しは料理を覚え

んのかの?」

「んー、前向きに善処いたしております次第ですー。」

「……やる気はあるようじゃのー。」

政治家のようなセツヒトさんの答弁に皮肉を返すほどには、ホエールさんは相変わらず元気。

今日もいつものように笑い、いつものように宿の業務をこなしている。

俺もあとから聞いて驚いたのだが、村長さんだった。

……正確には村長代理さんだった。

何でもワサドラの相談役……みたいな役回りらしい。

え、いや、全然知らなかったんですけど!? 何で教えてくれなかったの!?

そりゃ、(やたら事情通だなー。)とは思っていたんですけど!!

なんて聞いたら、「聞かれなかったしのー。」と、さも当然のように返された。

……納得はいかんが、まあいいかと思うことにした。

「そういえばソウジさん。前回のモンスターはどうじゃ?」

「前回……ああ、あの正体不明で現地調査に行かされたやつですか?」

ホエールさんに聞かれ、思い出す。

ギルドマスターから、無茶振りともいうべきクエストを受けた。

「正体不明、環境不安定。じゃ、頼んだ。」と。

ゴア・マガラだったら、ソウジの一番だからな、と。

そりゃ正体不明の変なマスターが現れたら、優先して回してほしいとお願いしたけど……。

「……ゴア・マガラじゃありませんでした。バゼルギウスっていう……爆撃機みたいなデカブツでした。」

「ばくげき……というのによくわからんが。まあ、ゆつくりやんなさい。古龍なんて恐ろしいモンスター、出んほうがええわい。」

「それもそうですね……。」

何度目かわからない、ギルドからの、急な俺個人への雑な依頼。

そういつたクエストをクリアしつつ、シヨウコとトレーニングしつつ、セツヒトさんと生活を共にして。

そんな日々が、続いている。

* * * * *

「んー……今日もいい天気だねー……。」
「そうですね。」

セツヒトさんが、道の往来で思いっきり伸びをする。

見慣れたワサドラの大通り、二人で歩く。

街並みは色々変わったし道行く人も様々。それでも、この街は落ち着く。

俺の、ふるさとだ。

シヤガルマガラ討伐から3年が経過した。

大陸全土にまで影響を与えていたモンスター。

ハンターズギルドを困りに困らせていた存在、黒蝕竜ゴア・マガラ……改め、天廻龍

シヤガルマガラ。

多数のモンスターの異常強化を引き起こす狂竜ウイルスは、ハンターたちの回復力を

奪い、身体を蝕む。

そんな最悪の厄災を断ち切ったハンターとオトモして、俺とシヨウコは何かもう色んな人にチヤホヤされた。

よくやった、とか、アンタすげえよ、とか。

酒奢らせてくれとか、一戦交えてくれとか、キヤーサインちよーだーい！とか。

今夜うちに来ない？なんて、見目麗しい女性から幻のようなお誘いを頂いたりもした。

明らかにハニートラップだと思ったので、丁重にお断り申し上げた。

シヨウコもシヨウコで、名のあるハンターたちからたくさんお誘いを頂いていた。

「ウチは主人さまのものです！」と盛大に誤解を生む発言を繰り返していたらしく、俺はアイルーを愛する主に男性の方々から、殺したるかの目で見られ続けた。

ていうか今も見られ続けている。

シヨウコには言い方を考えてほしいものであるが、完全に後の祭りなので気にしないことにした。

そして終いには、よくわからん王族とかいう人たちに首都に招かれ、勲章とか賞金とかいらぬ称号をもらった。

勲章とかは、一応神棚に飾ってあるけど……ホコリ被っていたなあ……。

それに「ドラゴンキラー」なんて厨二病っぽい称号。

いらんわ……。

偉業を成し遂げた……なんて言う大仰な実感は、いまいち湧いてこなかった。

ヤツを倒し切ったとは思っていない。

絶対に、シャガルマガラは復活する。

その日まで、いやその日からも、俺はみんなを守るハンターでいたい。

だから、ここワサドラで、トレーニングと狩猟を続ける日々を送っている。

シャガルマガラがいつかは復活する、という市井の混乱を引き起こしかねない情報。

これは、ギルドのトップシークレットとして一部の人しか知らない。

俺を始めとしたあの狩猟に関わった人間には、きっちり正式に箝口令が布かれた。

だが、なんというか、人の口に戸は立てられないとはよく言ったもので。

人々の間では、噂レベルで「また出るんじゃない？」と囁かれている。

まあそれぐらいの緊張感があつた方がいい。

古代の遺跡にシャガルマガラのことを書き残した人達も、そういう危機感から言い伝

えを後世に残そうとしたわけで。

天廻龍シャガルマガラ。

名指しで俺に襲いかかってくれればいいのに。

『あ、もしもし、お世話になっております。私、天廻龍のシャガルマガラと申します……ソウジさんいらつしやいます?』

『あ、はい。私、本人です。すみませんわざわざご連絡いただきまして。例の件ですよね。場所は禁足地で?』

『あ、いえ、ワサドラ近くの丘陵地帯に一旦幼体で出ますので、まずはそこでいかがでしょう?』

『あ、はい。承知しました。では日取りを……。』

みたいな。

俺だけ頑張つてなんとかなるなら、ぜひともシャガルマガラにはそうしてほしい次第である。

……なんてアホなことを考えながら、セツヒトさんと二人でギルドに向かっている。

いきなり、セツヒトさんから声がかかった。

「……ソウジー。また自分だけが、なんて考えてるんでしょー？」

「え?! いや……はい、すみません。」

「もー、いったじやーん。……わ、私がそばにいるって……。」

「……はい。」

あの日。

セツヒトさんから「そばにいる」と言われた、首都でのあの日。

俺は、セツヒトさんとともに生きていくことを決意した。

プロポーズのように「ずっと、一緒にいてください。」と伝えた。

なので、ずっと一緒にいる。

少なくとも今日まで。

これからも、そのつもり満々である。

……思い出すと顔から火が出そうなので、回想はこの辺にしておこう……。

「ソウジー？」

「は、はい!!」

「ギルドに着いたよー? なーんか今日はブーツとしてんねー。」

「い、色々と……思うことがあります。」

「……ふーん。」

上手くごまかせただろうか。

「あなたへのプロポーズを思い出してニヤニヤしてました。」なんて、口が裂けても言えない。

「じゃー私、修練場行ってくるねー。」

「あ、はいはい! お気をつけて!」

「……ふふふー……ソウジー?」

「へ?」

ここは市中、町中、ギルド前。

街の人もハンターも往来の激しい、朝の時分。

そんな中で。

ギョツ。

抱きしめられた。

「せ、セツヒトさん！……こ、こんなところで……。」

「んー、せつちゃんー……ソウジはモテるからねー……示威行為ってやつー？」

「せつちゃんさん……じ、示威行為って、意味が違う気が……。」

「んふふー……ソウジー、さつき私のことも考えてたでしょー？」

「うえっ!? な、なんでそれを!？」

「やっぱりねー……もー、愛の言葉なら面と向かって言えばいいのに。」

「いや、さすがにそれは……。」

恥ずいでしょ……。

しかし、俺の思うことなんてばつちりお見通しである。

隠し事なんて、この人の前ではできないな……いや、そんなもんないけど。

勘が鋭いのは、相変わらずである。

セツヒトさんは満足したのか、ようやく俺から離れた。

「よし、帯電かんりよー……いつてくるねー、ソウジー。」

「へ、へい。」

そう言つて右手をヒラヒラ上げると、セツヒトさんはギルドの中に入つていった。

帯電つて……アンタジンオウガかよ……。

いや、怒つたらジンオウガより怖いかも。

……。

めっちゃ見られてますねすみませんはいごめんなさい私もギルド入ります。

お願いですから必殺の表情で睨みつけてないでセツヒトファンらしきその女ハントーさん。

俺は悪くないんです悪くないんで……。

「……………んんん？」

「……………どうも、お久しぶりです。」

そそくさとギルドに入ろうとしたら、久しぶりですと声をかけられましたけど。

こんな美人さん、俺の知り合いにいたっけ。

いつだかお誘い頂いたお姉さんズの一人？

いや、違うな。相当若い。

じゃあ……誰だっけ………。

!?

「……あ、あああああ!?!」

「……ずーっと見てたのに、気づかないまま抱きしめ合うなんて……ソウジさん!!」

「は、はい!」

「……本当に、お久しぶりです! お元気でしたか!?!」

「……ああもちろんだ。そっちも、元気だったか。」

数年ぶりだが、こんな濃い印象の子、忘れるわけがない。

いや、すぐには分からなかったけど。

身長も少し伸びて、ショートヘアはすっかりロング。

ロングパンツに、白いシャツの上には茶色の革のコート。
どこか大人の女性風になり……だいぶ変わったけど。
幻の尻尾が見える、ワンコ系ハンター。
放牧の民のプリンセス、ハンズだった。

172 続けましょう。(後日談②)

「いつぶりだっけ？」

「ソウジさんが首都に旅立つ時に、一緒に出ましたから……。」

「三年前か。……早いなあ。」

時が経つのは早いものです。

あのおつちよこちよい女子大生風の子が、すっかり大人の女性に変貌しているのですから。

「……あれから、どうしてたんだ？」

数年の間、気になっていなかったわけではない。

ハNZは帰郷の後、ワサドラに戻ることは無かった。

シヨウコやドルが文でやり取りしていたから、何となくの近況なんかは聞いていたけど……正式に本人の口から聞きたい。

「移動集落のゴタゴタが片付いてからは……ずっと、ハンターをしていました。」

「そうか。……ちよつと聞いた話だと、色んなところで狩猟しているって。」

「たまに、ですけどね。タオカカから辺にもう一度行ったり、遠いところだと西のブラツ港とか……自分の腕試しを兼ねて。」

「へえ……。」

大陸を股にかけて……なんて言えばいいのかはわからんけど。

要は放浪のハンターである。

そういえばフットワークがやたらと軽い子であった。

「雪山でガムートとかザボアザギルにリベンジしてジンオウガを倒して……東の湿地では、タマミツネとオロミドロも。港のシヨウグンギザミは怖かったなあ……。」

「いや、凄いな。俺が知らないモンスターのいる。」

「世界は……広いです。思い知らされた3年でした。」

「へええ……。」

うーん……達観した顔をしている。
何だろうこの気持ち。

近所の年下の妹みたいな子が、社会人になって帰省して、世間の荒波に揉まれた顔つきになった、みたいなの。

いや、そのまんまだが。

「……ソウジさんの、おかげです。」

「ん？俺の？」

俺たちが座るのは、ギルド内の酒場。

いつだかシガイアさんといた、例のバーカウンスターだ。

すっかり大人になった素敵な女性と、二人でグラスをかたむけつつ。

まだ午前中だし、中身はジュースだけ。

そんな雰囲気たっぷりの中、ハンスが話を続ける。

「三年前のあの偉業を聞いて……私も奮い立ったといえますか。いつか、私もG級になって、肩を並べたいって……。そう思って、がんばれました。」

「おお……そうか。……ちなみに今はHRは？」

「えと……ろ、6です。」

「おお！……すごいなハンズ!!」

「ソウジさんにはまだまだ、ですけどね。がんばりました。つい最近昇格したばかり、です。……ふふ、やっとソウジさんに報告できました！」

パタパタ。

嬉しそうな様子。

尻尾をブンブン振り回しながら笑う姿は、昔のまま。

少し安心した。

いや、尻尾なんて見えないけども。

しかし数年、この若さでHR6って。

俺が言うのも何だけど、相当凄いのではないか？

「いい節目だと思ってワサドラに戻ってきたら、ソウジさんが、そ、その……セツヒトさ

んと抱き合っていて……。」

「すみませんが、あれは俺悪くないんです信じてください。」

「は、早口ですね。」

改めて言われると、本当にただのおバカカップルである。

恥ずい……。

せめて俺からではないと伝えておく。

「……何だか複雑な気持ちでした。」

「複雑？」

「その、憧れのお二人が仲良くされているのを見て……嬉しい反面、こう、ドス黒い感情が。」

そういえば。

この子はかなりのセツヒトさんマニアであった。

ドス黒いって。

……しかし、何だかからかいたくなってきた。

ちよつとおすまし美人さんみたいにしてるけど、俺の中でハンズはおつちよちよのワンコさんである。

……意地悪してやろう。

「今、一緒に暮らしてるんだ。」

「うっ！」

「3年間、一緒に。」

「はう!!」

「そして、さっきの抱擁はセツヒトさんからだ。」

「ぐはあ!!!」

バタン。

カウンターに突っ伏すハンズ。

ノリがいい。

「私の心にクリーンヒット……砂糖吐きそう……い……いつからソウジさん、そんなドSさんに……。」

「周りがあんまりからかうもんでな……慣れた。」

「そ、そんな……あの頃のソウジさんはどこに……!？」

「ふっ……俺も成長したのだよ、ハンズくん。」

嘘です。

慣れるわけありません。

ただの強がりでございます。

……まあオフザケはこの辺にして。

「……あんまり変わってないぞ。みんな。」

「え?」

「俺は相変わらずヘタレだし、セツヒトさんはのんびりだし、シヨウコはちっちゃいし……あ、ドールは少し背が伸びて、大人っぽくなったぞ?でもホエールさんは本当にそのまんまだし……まあ全部が全部あの時のままってわけじゃないが、そんなに変わらな
い。」

「あ……………」

「だから…………おかえり。ハンズ。」

「…………はいっ！」

そう言つて笑つたハンズは、三年前と全く変わらない明るさだった。

* * * * *

それからいろんなことを話した後、ハンズはギルドを後にした。

今日は宿「ホエール」に泊まるという。

久々にドールと楽しく過ごしてくれればと思う。

ちなみに、お兄さんのハンザさん。

シスコンぶりは少し収まり、結婚もしたとか。

というか嫁さんが既に3人いるらしい。

…………流石である。

まあそういう立場にある人だし、あれだけ頼り甲斐のある人だ。

重婚、と聞いても全く驚かなかつた。

これからも幸せになって欲しいと思う。

「さて……。」

今日ギルドにやってきたのは、クエストの為ではない。

ギルドマスターに呼び出しを食らっているのだ。

いつでも来ていいと言われて、余裕ぶっこいてこんな時間になってしまったけど。

まあ大丈夫だろ。

あの人だし。

……。

コンコン。

「ソウジです。来ました。」

「おう、入ってくれ。」

ガチャ。

相変わらずの重厚な石造りの室内。

そして……相変わらず書類が散乱している。

まあ首都西支部の部屋も、そういえばこんな感じだった。

シガイアさんはきっちり整理整頓していた為、ギャップが凄い。

「おう、早かったな。まあ座ってくれ。」

「はい……結構遅くなったつもりなんですが。」

「ん？そうか？……こんなもんだろ？」

既に時刻は早めの昼食をとつても差し支えないぐらいなのだが。

うん。やっぱり大丈夫だった。

「急げ急げと、ここの職員は優秀すぎるんだよ……シガイアさんの凄まじさを毎日味わっている。」

「ははは……やっぱり、慣れませんか？」

「ああ、もう一年以上いるがな。まさか西支部が懐かしく思える日が来るとは思わなかった。」

隆々とした筋肉。

初めてあつた人間は、威圧感に圧倒されること間違いなし。

ワサドラギルドマスター、ハスガさん。

まだ慣れないとは言うが、職員や街の方からはとても受けがいい。

第一印象こそアレだが、頼りがいのある、親分肌の人だ。

シガイアさんとは180度違う方向で、心配りもできる。

「あー……またクエスト行きたくなってきた……。」

「だめですよ。またハイビスさんに怒られますよ?」

「……もうアイツがギルドマスターになればいいんじゃないやねえか?」

「……………」

「おい、黙るな。冗談だ。」

「本当に?」

「……………5割は。」

おいおい。

半分本気かよ…………。

そう、ハスガさんは、二刀流。

双剣使用とかそういう意味ではなく。

ギルマスとハンター、そのどっちもこなすという人間である。当たり前ながら、シガイアさんには到底無理な芸当であつて。

これがまあ、ハンター連中から尊敬の念を集めている。

そもそもが半端ない実力を持っている伝説のハンター。

就任当初はハンターと職員の間で温度差が凄かったけど。

俺個人としては、非常によいギルドマスターだと思う。

ここにきて一年と少し。

前任のシガイアさんが偉大すぎてどうか、みたいな声を払拭し、非常にこの人らしくやつてらっしやると思う。

「……………人が良すぎるんですよ、ハスガさんは。」

「そうは言うがな、ソウジ。元はと言えばお前が……………いや、いいわ。もう言わねえ。」
「ははは……………」

……………その実績に本人の意欲が伴っているかと言われれば、微妙だ。

ちなみにシガイアさんは、首都ギルドの重役に昇進した。

手腕を発揮し、首都内部のギルドの横のつながりを強化。並行して、ハンター業とは関係ないような業務を片っ端から廃止、簡素化を進めている。

ギルド中央制度そのものを無くし、首都ハンターズギルドをきっちり4分割するのが最終目標らしい。

風通しをよくするという理念の基、改革に躍起になっている。

ここまでたった3年である。ギルド職員の若手にはウケはいい。

だが、急な改革に敵はつきもの。保守派や王族側からは本気で目の敵にされているとか。

近くに護衛を置いているけど……………それだけ物騒つてことだよな……………。

まあつまり、シガイアさんは前世のドラマとか漫画でよくあったような話を、マジでやっている。

本当にかっこいいと思う。

そのあおりを食らったのはハスガさんだ。

このワサドラの街は大陸の地理的な中心であり、今尚発展著しい。

そんな場所にあるギルド、相当な人物にしか後任をお願いできない。

そこに白羽の矢が立ったのがハスガさんだ。

あんなに現役一本に戻りたがっていたハスガさんが、ワサドラのギルマスになると聞いた時は、驚いたものだ。

……そして、ワサドラに俺がいることも無関係ではないらしい。

トラブルメーカーだから、という。

申し訳ない限りである。

俺が「シャガルマガラは復活する」なんて事を言うものだから。

そして俺がワサドラでハンターをするとこだわるものだから。

「俺が近くにいたほうが色々やりやすいだろ。」と、すんなりギルマスに就任した。

……そういう意味で、ハスガさんには頭が上がらない。

閑話休題。

ハスガさんは一枚の紙を取り出した。

やけに小さく見えるその書類を手に、俺が座る革張りのソファの向かいに座る。

「……………気になる報告があつた。」

「……………気になる？」

「ああ、ちよつと長いぞ。」

そう言うと、ハスガさんは本題を始めた。

173 続けましょう。(後日談③)

3年経っても、ワサドラギルドの構えは全く変わっていない。外見の厳つさは、年数が経ってもなおそのまんま。

内装はかなりバージョンアップされたけど。

「使う人みんなが、不安にならないギルドづくり。」をモットーに、ハイビスさんがあれやこれやと改装した。

おかげで俺たちは多大に恩恵を受けたが、その時のハイビスさんの死にそうな顔は今でも忘れない。

「なんで私って自分を自分で追い込むんでしょうね……。」とはハイビスさんの談だ。何度も飲んで、セツヒトさんと二人で慰めたっけなあ……。

でもギルドの厳つい外見はそのままだ。

俺が今やって来た修練場も、もちろんそのまま。

からくり蛙……切り立った岩の崖に滝……多数のギミック……。

うん、懐かしい。

教官との地獄の特訓が思い出される。

そんな中、ある声が聞こえる。

「はい、ご苦労さまー。じゃー次はー……。」

「きよ、教官！ちよ、ちよつともう足が……!!」

「そーお？じゃー……今日は終わりー。」

「ええ!?!いや、極端すぎでは……。」

「えー？わがままだなー。」

「えええ………?」

………。

のんびりした声で新米女性ハンターに特訓させているのは、セツヒトさんである。

そう。セツヒトさん。

何と、初心者講習の臨時教官になりました。

あんなに嫌がっていたのになあ……。

相変わらず教えるのは苦手なようだが。

俺もコミュニケーションの齟齬から、セツヒトさんの特訓に疑問符が絶えなかった一人である。

あの新人ハンターさんの苦勞が偲ばれる。わかる、わかるぞ、そこの名も知らぬ君。

「じゃー調合でも教えるねー。」

「は、はいっ!!ぜひっ!!よろしくお願いします!!」

「んじゃーまずー、大タル爆弾Gでもー……。」

「そ、それ以外でお願いします!!」

「……………超猛毒の紫毒姫リオレイアの毒ビン——」

「そ、それ以外で!!」

「えー——。」

……………が、頑張れ!新人ハンターさん!!

ていうか何作らせようとしてんだあの人。

物騒な名前しか聞こえんかったぞ。

……ちなみに、講習の教官の依頼をしたのは誰かというところ。何と、マシヨルク教官である。

しかもセツヒトさん、まさかの二つ返事。

『セツヒト、教官をやってくれ!』

『……いーよー。』

こんな感じだった。

今でも信じられないが、そうだった。

あの時は知り合い中がざわつきまくった。

「私もやるときはやるよー?」とよくわからんやる気をみなぎらせるセツヒトさん。

その様子を見て、明日は空から大剣が降ってくると覚悟したものである。

そしてマシヨルク教官は教官で、その後マジで何の前触れもなく消えた。

「そしてさっきのハスガさんの話、か……。」

* * * * *

ギルドマスターの部屋で聞いた話は、ちよつと衝撃的で、よくわからないものだった。

「結論から言う。マシヨルクの痕跡が見つかった。」

「えっ!?!」

「……ザキミーユの東支部からの報告で、な。」

「……いや、良かったじゃないですか。俺もずっと気になってましたし。」

教官は、2年前どこかに消えた。

本当に誰も何も聞いておらず、イシザキ亭のイシザキさんと飲んだのを最後に消息を絶った。

その後、なんにも手がかりもないまま月日が流れていたが。

欲しかった手がかりが見つかったなら……それは良かった。

だが、しかめっ面のままのハスガさん。

……ヤバい話か？

「……………からなんだが。」

「は、はい。」

「見つかったのはボロボロの装備だったとよ。」

「……えっ？」

「首都東部の湿地帯にマシヨルクの装備と持ち物、それがボロボロ……モンスターからの傷だらけで見つかった、とよ。」

「……ええええええ!!？」

「いや、落ち着け。まだ死んだとかそういう確定の情報じゃねえ。……ただ、消息を絶つたまま数年経ったヤツのモノが、そんな風に見つかったとあつちやなあ……。」

「……………」

落ち着いて……いや、無理。

心臓が、嫌な感じに激しく動き出す。

「……それ以外の情報は？」

「アイテムポーチにはマシヨルクの名前。装備はアイツのもので間違いねえ、らしい。ギルドが見間違えるとは思えねえし……。」

「マジですか……。」

うん、確かに。

ハスガさんがしかめっ面になるのも分かる。
俺だつて聞いた瞬間は心臓が跳ね上がった。

……うーん。

たしかに不安だけど。

でもなあ……。

「でもよお……。」

「はい……。」

俺とハスガさんは、揃って眉をハの字のまま。

そして目を合わせて、同じような胸の内を明けた。

「アイツが死ぬわけねえよなあ……。」

「はい、そうですね。俺もそう思います。」

「な？希望的観測でもなんでもなく、なんていうか……。」

「教官は死んでも死なないですよ。うん、間違いない。」

「だよなあ……よし、じゃあ逆に都合がいいわ。」

俺たち二人の認識はバツチリ一緒。

間違いなく、教官は生きている。

変な信頼がある。

……だって、あの教官だし？

死ぬわけではない。

都合がいい、の意味がわからなかったけど。

「……というわけで、ソウジ。お前に頼みがある。」

「……ギルドナイトみたいなのは、正直お断りしたいんですが……。」

「シガイアさんからそういう扱いで構わないって聞いてるからな。すまんが、諦めろ。」

話が終わったと思ったら、これである。

もうこの人の無茶振りは今に始まったことではないが……俺は普通に一生懸命ハン

ターしたいだけなのに。

「ソウジ、お前はもうギルド内のことを知りすぎている。もうギルドナイトみてえなもんだ。」

「いやそのりくつはおかしい。」

「すぐにでも首都に行つて、マシヨルクを探してきてくれ。」

「えーーーーーーー」。

「お、お前……一応俺、ギルドマスターだからな？……少しセツヒトに似てきたな……。」

やつぱり……そんなこつたろうと思った……。

まあ確かに教官の行方は気になるけど……。

うーん。

ぶつちやけ断りたい。

だって、セツヒトさんの生活もあるし……ドールの飯からは離れたくないし……シヨウコに抜かされたくないし……。

イシザキ亭での月例会もあるし……そこでハイビスさんの愚痴を定期的に聞かないとあの爆発しそうだし……教官どうせ生きてるだろうし……。

「あーまあ……それで……ついでに、セツヒトも連れて行ってやれ。」

「……へ？」

すると、ハスガさんが歯切れ悪く変なことを言い出した。

え？セツヒトさんも？

……なんで？

「だから……宿泊代とか旅費とか土産代とか観光費用とか、その辺は気にするな。ぶつちやけ、適当でいい。2週間ぐらいかけてゆつくりだ。泊まるところは、ザキミーユの中央のロイヤルホテル。……わ、分かるか？」

「……いや、わかりません。」

「えーつとな、だから、首都のこう、名所というか……そういうところをだな、二人で……」

「……首都ならハイビスさんやヒナタさんの方が、地理に明るいんじゃない？」

「いやそれ一番ダメだろ！少しは察せよ!!……ああ、だめだシガイアさん、俺にこういうのは……」

??

何だ？

ハスガさんが何かうなだれている。

と思つたら、なんか諦めの表情で話し出した。

「とにかく、俺からの命令だ。行け。」

「……断つたら？」

「お前の有る事無い事ギルド職員とワサドラ中のハンターに言いふらして微妙に住みにくくしてやる。」

「顔と体格の割に陰湿!？」

「ああああうるせえ!……もうとにかく、行け! ゴー! ハウス!」

行け、なのか。帰れ、なのか。

でもまあ……教官のためだし……金はかからないみたいだし。

「セツヒトさんが納得するなら、良いです。」

「ああ、安心しろ。教官の代理は既に都合をつけてるし……アイツは平気だろうよ。」
「へ？何でですか？」

「いやだってお前……も、もういいから。ほら、回れ右！」

グイグイ。

バタン。

……………。

部屋から出された。

無理やり。

『出発は明後日の朝だ！例の御者の御仁には話してある!!』

ドアの向こうから大きな声が聞こえた。

まじかよ、もう決定じゃないか。

ああ……何だかシガイアさんが恋しくなってきた……。

* * * * *

そして話は冒頭に戻る。

何なのか全くわからなかったが……。

とりあえず教官の手がかりをもとに、探せってことでいいんだよな？

期間は2週間ばかり。

……。

いや何の仕事だよ!!

俺探偵でも何でも無いんですけど!?

犬じゃあるまいし、そんなん分かるか!!

……あ、だからセツヒトさん連れて行けってことか？

勘とかそういう分野では、あの人はかなりすごい。

今朝だって簡単に俺の考え見破ってきたし。

……だからってなあ……何で俺とセツヒトさんが……。

……まあいいか。

色々タダらしいし。

気楽に行こう。

修練場の向こうには、仲睦まじく調合の仕方を教えるセツヒト教官の姿が。

「お、そーそー。筋いいじゃーん。」

「ほ、本当ですか!?!」

「回復薬グレートつてちよいとコツがねー。よしよーし、じゃあ次は大タル爆弾行
こー。」

「どうしてそう物騒なものを!?!」

がんばれ、名もなき新人ハンターさん。

その人、明後日からいないだろうけど。

くれぐれも調合ミスって爆発しませんように……。

「あ、火薬草多すぎたー。」

「ひいひいひい!!!」

……が、がんばれー。

首都に行く話は後にしておこう……。今日は月例会もあるし。

* * * * *

喧騒の中、ワサドラの中央市場を歩く。

今日も今日とて、商売人の大きな声が響いている。

「おっ！ソウジさん！今日は休みか！」

「あ、そうなんです。たまには市場をブラブラしようかと。」

「おお、いいね！じゃ、これ買ってくか!？」

「ははは、また今度にします。」

こここの市場の人達とは、もう随分と仲良くなった。

最初はいいかモとして、だったけど。

街の危機を救ったハンターと認識されてからは、無理やり買わされることもなくなっ

た。

俺もさつきみたいにあしらい方を覚えた。

おぼちゃんたちからは、これ食べていきな、これドールちゃんとホエールさんに持つていつて、と結構モテる。

……体の良いパシリと思われている可能性も大きくあるけど。
ポジティブに捉えておこう……。

「あれ、ソウジさん。今、帰り？」

「ん？あ、ドール。買い出しか？」

市場を歩いていたら、見知った顔を見かけた。

ドールであった。

大きい袋を両肘に抱えて、更に手には重そうな野菜の載ったザル。

「……荷物、持つよ。」

「え、いいよ。そんなに重くない。」

「飯、世話になってるし……よっと。」

「あつ……もう、私もう子どもじゃないよ。」

そう言いながら素直に荷物を預けるあたり、実はちよつと重かつたんだらう。
うん……女の子にこれはキツイだらう。重いわ。

「そうやって、いろんな女の子に優しくしてると、セツヒトさんに怒られるよ？」
「む……いや、大丈夫だろ。気にしないって。」

「余裕だね……私も……。」

「ん？」

「ん、んーん。なんでも無い。」

ドールはなにか言いたげだが、あえて流した。

ドールは、大きくなった。

身体的な意味でも、精神的な意味でも。

背格好は、もう本当にミヤコさんそのまんまだ。

でも……何かこう、芯が通ったキリツとした感じになった。

大人になったな、と思う。

栗色の可愛かったショートヘアも、肩にかかるぐらいのセミロングになった。シヨウウコに似合うと褒められてからは、ずっとこの髪型である。

「あ、そういえば。いきなりで申し訳ないんだけど、明後日から首都に向かうことになった。」

「わ。いきなりだね。……モンスター?」

「いや、人探しの仕事。よくわからないんだけどな。」

「……大変だね、ソウジさん。いつも駆けずり回ってる。」

「慣れたよ。無茶振りは、そもそも俺の専売特許だ。」

「ふふ……でも、気をつけてね。体調とか。」

「ああ。ありがとう。」

以前なら、もっと心配していただろうけど。

今のドールなら余裕のある笑顔で、行ってらっしゃいと言ってくれるだろう。

こういうところにも、成長を感じる。

まあ今回は危険な討伐でもないしな。

……あ、そうだ。

大事なこと言うの忘れてた。

「聞いて驚いてくれ。ハンズが帰ってきてたぞ？」

「えっ!!ハンズさんが!？」

「ああ。さつき会った。ホエールに泊まりたいって言ってたな。」

「わわ、早く帰って用意しなきゃ……!」

「……はは、嬉しそうだな、ドール。」

「もちろんだよ。嬉しい。……ふふ、どんな話しようかな。」

「……………」

初めて会った時。

真顔のこの子の心の内が分からなかった。

ドールは、相手に踏み入れられないよう、自分の心の中に無意識に壁を作っていた。

それを無くしてくれたのは、俺だと教えてくれた。

俺に感謝していると、顔を真っ赤にして教えてくれた。

2年前の冬……だったっけな。

あの日のドールは、忘れない。

何か、かつこよかった。

「ソウジさん、早く行ける?」

「ああ、走るか?」

「……うん!」

表情も前より豊かになったと思う。

シヨウコみたいにコロコロと変わる感じではないけど、それは人それぞれであって。

これぐらいが、ドールにはぴったりだ。

それが俺のおかげなんて言われたら、そりゃ嬉しいってもんだ。

これからも、この子の笑顔が増え続けたいと思う。

俺たちは宿「ホエール」まで駆け出した。

時刻は昼下がり。

今日は本当にいい天気だ。

174 続けましょう。(後日談④)

「えー、それではお集まりの皆様。グラスは持ちましたでしょうか。」

「かたくるしーよー、そーじー。」

「はい、もう出来上がっている方もいらつしやいますが、気にしないよう……乾杯!!」

「「「かんぱーい!」」」

夜。

イシザキ亭。

恒例の、月例会。

俺の親しい人たちを集めた……月例会なんて聞こえはいいが、まあ仲間内のただの飲み会である。

「えー、今日は主賓がいますので紹介します。」

「わわ、いいですよ、ソウジさん。」

「ハンズが……帰ってきました!」

「わーっ!!!!」

女性陣がハンズに集中する。

セツヒトさんにシヨウコ、酒が飲めるようになったドール。

ハイビスさんとヒナタさんは……残業かな。まだいない。

最初の頃はこれに教官や、たまにフェニクさんとトツバもいて、随分賑やかだった。

……思えば、こういう盛り上がりには教官が必要だ。

教官、今何してるんですか。

まさかくたばってませんよね。

……探しに行きますからね。待っていて下さい。

ハンズはもみくちや。

シヨウコとドールが特にベツタベタである。

まあ久しぶりだしな。

放っておこう。

俺は、自分の定位置になっているカウンターに腰掛けた。

「なあソウジさん……俺場違いじゃねえか？」

「いやいやいや、そんなことはないです。すみません、そんな思いをさせて。今日は俺がお酌しますので。」

「ちよつ、ちよつと待て！街の……大陸の英雄にそんな事させたらバチが当たつちまう！」

「だめです。おじさんは俺がお酌するんです。」

「ご、強情だな……まあいいや、ケイさん！ビールおかわり！二つな！」

「はいはい！お待ちくださいねー！」

今日はたまにしか来ないおじさんもぜひ、と呼ばせてもらった。

そして、俺の隣りに座ってもらった。

明後日からお世話になるわけで、話がしたかった。

そんなおじさんは、先程からキヤイキヤイ騒がしいテーブルを眺めている。
ハンズとは知らない仲では無い。

「あれがハンズか……いや、見違えたなあ。」

「そうですよね。俺も最初分かりませんでした。」

「……しかしよお……ソウジさんは、セツヒトさんと一緒に住んでもう長えよな？」
「え、ええ。お陰様で。」

「周りに女性ばかりですよ……よくぞ今までで無事で居られたなあ、とな。俺はいつソウジさんが刺されねえか心配だぞ？」

おじさんの心配は、まあご尤も。

俺には心に決めた女性がいる。

だからといって、いやだからこそ、こう多数の女性といるのはどうか、ということだろう。

でもなあ。

別に俺が何かしたわけでもないしする予定もないし。

この数年でそれ系のやつかみみたいなのは……慣れた。

何ならギルドで一回絡まれた時は、きっちりと大人として対応させてもらった。

一ヶ月前にもこんなことがあった。

『。う。い。い。お。』

『アツハイ。何でしょう。』

『お前誰だか知らねえがいい加減にしろよ?』

『……………』

『女侍らしてアイルーちゃんまで囲っててめえ——』

『いやすみませんマジでごめんなさい(土下座ズザー)』

『……………えっ?』

『ほんつとおおおおおにいいいいいい心からあああああごめんな

さあああああ——』

『あ。もういいです。(ドン引き)』

……………回想終わり。

みたいな。

平和に解決。

これぞ、大人の対応。

うんうん。

「ソウジさん？何か遠い目して……目が潤んでるけどよ。大丈夫か？」

「いえ……何でもありません……全部俺が悪いんです……。」

「よく分かんねえなあ……。」

あの時はもう周りの目がすごかったなあ……。

え？あの人なにしてんの？え？あの人本当に古龍やった人？え？という感じの目。

……別につらくない。

つらくなんて、ないのだ。

穏便に済んだし。

あの後もそのチンピラみたいなハンターを見かけることはなかったし。

俺に引きすぎて街を出たのかな……。

……そんな俺のプライドズタズタ話は置いて。

おじさんとは、明後日からの行程について簡単に打ち合わせしておいた。

俺が無茶振りを受けておじさんが急に仕事を依頼されるなんて、ファンゴに大型狩猟を邪魔されるぐらいにはよくある話なので、一瞬で終わった。

「街道沿いに行つて……チダイ村はどうする？」

「まあいつも通り行くしかないでしょうね……。」

あの村にはイ^苦パス^手さんが居るが……仕方ない。

だって、いい宿もあるし。

おじさんには少しでも疲れてほしくないし。

チダイは、ここワサドラと首都ザキミーユのちょうど中間にある村だ。

肥沃な土地、水はけの良い広大な平地は、大陸の食を支える一大農産地となっている。

そしてその一帯トップの代理が、イパスさんである。

物腰柔らかかで、美しく穏やかそうな見た目とは裏腹に、非常に計算高く強かな女性である。

そして……何故か俺の狩猟遍歴とか様々な事情に詳しい……。

初めてお会いしてから今日まで、とても苦手とするお方である。

「まあ、悪くされるなんてことはないだろうし、いいんじゃねえか？」

「俺、話すだけで緊張するんですよ……こう、警戒がMAXになるといふか……気を抜いては一気にやられる、みたいなの。」

「そんな、大型モンスタージャアあるめえしよ……ま、了解したわ。気をつけていこう。」
「はい、よろしくおねがいします。」

そんなこんなで、仕事の話、終了。
うん、色々気をつけていこう。

* * * * *

「もう飲む。飲みまくる。」

「ご主人さま？何かヤケになつてませんか？」

「だつておじさん帰るし寂しい。」

おじさんは「色々準備があるからよ！じゃあな！」と言つて、そそくさと帰つていった。

落ち込んだ俺を見かねて、シヨウコがそばにやってきた。
気遣いのできる相棒である。

「俺の心のオアシスがなくなった。」

「たまにご主人さまって、ホンマにソツチちやうかと思えてなりません。」

「もうええんや……ワイはヘタレでソツチでギルドの犬でんねん……。」

「アカン、暴走しとる。」

シヨウコに怒られそうな言葉遣いで、愚痴をこぼす。

なんだか今日は飲みたい気分。

「あ……そうだ、シヨウコ。」

「は……。」

呆れ顔のシヨウコに、明後日から首都に行くことを言っておかないと。

仕事の話は終わりのつもりだったけど、そうもいかない。

「明後日からギルドの仕事で、首都に行ってくる。」

「い、いきなりですね。はい。了解です。」

「セツヒトさんも一緒だ。」

「へ？何で……そんなに大変な仕事ですか？」

「いや、教官探し。」

「……よ、ようわかりませんが……。」

うん、言ってる俺もよくわかっていない。

まあ詳しく言わないとな。

「教官の痕跡が見つかったんだ。それもボロボロの装備、モンスターのつけたものだったらしい。」

「……えええ!？」

「まあ、教官のことだから滅多なことはないと思うんだけどな？それを手がかりに、教官を探せって命令だ。」

「………ハスガさん……ギルドマスターから、ですか？」

「うん。」

まあ驚くよな、そんなこと聞いたら。

俺だって驚いたし。

「……まあマシヨルクあさんがどうにかなるとは思えませんけど……なんですかその無茶苦茶でフワフワした仕事。」

「だよなあ……俺、別に探偵でも便利屋でもないっての。」

「……ちなみに期間は？」

「確か、2週間とか言ってたぞ？ ゆっくりでいいし、しかもセツヒトさんは同行させろつて、どういうことだろう。」

「……………んん？」

シヨウコが変に考え込んでいる。

何かが分かったのだろうか。

「どうした？ 何かまずいことでも……………」

「いや……………それ、ハスガさんからのプレゼントやないんですか？ セツヒトさんと二人で、首都観光楽しんで、的あな。今まで苦労かけたし、みたいあな。」

「……………んなアホあな。」

おかしなことを言うシヨウコ。

そんなわけ無いだろう。

どうやって教官を探しながら羽を伸ばせと言うのか。

しかし、シヨウコがそこで俺に畳み掛けてきた。

「……………費用はどうなんですか？」

「そりゃ……………当たり前だけど旅費とかは全部ギルド持ち……………あ、いや、土産代とか観光費もいって言ってたな。」

「……………宿泊は？」

「それも大丈夫って言ってた……………確か首都のロイヤル何とかって——」

「ブー—っ!!ろ、ロイヤルホテル!!?それって……………王族御用達の来賓向けのやつ……………」

「へ?そ、そうなの!？」

……………んん?

何か変な話になってきた。

「推測するに……………適当な仕事の都合つけて、ご主人さまとセツヒトさんに休みあげよ

うってことちやいます?」

「……………いやいやいや。」

「ハスガさん、様子おかしかったとか無いですか? そんな遠回しなシガイアさんみたいなやり方、あの人得意や無いでしょうし。」

「……………あーー。」

うん。おかしかった。

変だった。

……………じゃあ何か?

俺は遠回しにハスガさんに旅行をプレゼントされたってことか?

な、なんで?

……………でも信憑性高そう。

「凄いなシヨウコ、ちよつと合点が入った……………マジで探偵みたい。」

「い、いやいや。ご主人さまが鈍すぎるだけかと……………」

「それは否定できない……………シヨウコさん、その推理力使って、教官探し手伝ってくれません?」

「いやいやいや！そんなことでできませんよ！！お二人の旅行に！！」

「いや、セツヒトさんとの旅行と決まったわけでは……。」

「なにになにー？私の話ー？」

「うわあ！！」

後ろから俺とシヨウウコに寄りかかってきたのは、今まさに話題の人、セツヒトさん。いきなり来るから驚いてしまった。

「わー！ふたりともー、声おつきいー。」

「す、すみません。」

「何の話してたのー？わたしの名前言ってたでしょー。」

「あー……なんと言いますか。」

困った。

ハスガさんの話をそのまま伝えていいものか。

「仕事行きませんか？」は「めんどーなのやー。」とか言われそう。

「一緒に教官探しません？」はシンプルに「嫌。」だろうし。

……あれ!? 詰んでない!?
なんて言えばいいのこれ!?

「……ご主人さま、もう普通に言うてくださいい……。」

「うえっ?! ショウゴ……いや、何言っても断られそうで……。」

「いや、いけます。大丈夫やと思います。マシヨルクさんのところは伏せて。」

「な、なるほど。」

「だーかーらー、何の話ー?」

しびれを切らしそうな酔っぱらいが、俺の首に絡んでくる。

今日はよく締め付けられる日である。

「せ、セツヒトさー」

「せつちゃんだつてー……いつも言ってるでしょー。」

「せ、せつちゃんさん、お話があります……。」

「んー……何ー?」

うっ…………。

ふ、不機嫌だ。

…………ええい！ままよ！！

「…………俺と、二人で首都に行きませんか？2週間ぐらいかけて、ゆっくり。」

「……………え…………。」

「お金の心配はいらない……………そうです。泊まるところはロイヤルホテルです。」

「…………え、あ、あのすっごいたつかいところー!?すご……………な、なんでー!?」

「あ、ああいや……………ついでにとある仕事もあるんですが……………旅行、みたいな。」

「……………旅行……………ソウジと……………二人つきり……………」

「お、おじさんも一緒ですよ!?御者の!!」

「……………二人……………」

仕事の部分は、ちよつとぼかした。

う、嘘は言っていないよな……………?

誘いを受けたセツヒトさんは、なんか……………くねくねしている。

「んふ……んふーふーふー……そっかー……ソウジ、そっかー……。」

「……せ、せつちゃんさん？一応旅行みたいな、ですよ？その、仕事もありますからね？しかも明後日からいきなり、ですよ？」

「……えへへへ……い、いーよー？いきなりでもさー？……修練場の仕事も明後日からお休みだしー……。」

「あ……本当ですか？良かった……断られたらどうしようかと。」

「え、えー？そ、そりやねー、私もやぶさかではないっていうか……んふふふふふふ。」

………何か不安だが。

よし。

何とかセツヒトさんを誘うことに成功。

「ケイさーん!!おかわりおねがいしまーす!!」

「はいよセツヒトさん!今日は飲むわねえ!!」

「えー?いやー、ちよつと……うへへへー!」

何だかいつになくご機嫌になったセツヒトさんは、追加注文をしてテーブルに戻っていった。

よかった……断られなくて。

俺がホツとしていると、シヨウコが声をかけてくる。

「ご主人さま！うまくやりましたね！」

「ああ……ありがとうなシヨウコ。事前に旅行とかそういう感じ分からなかったら、大変なことになっていた……。」

「いや、ホンマに……。修羅場無くせて良かったです。」

旅行だと思っについていって、そしたら俺は完璧に100%仕事モードでした、なんてなったら……。

うーん。不機嫌セツヒトさんの一丁上がり、だったろう。

安心した。

「ドールちゃん、聞いてよー。ソウジがさー……どうしてもって言うからねー？明後日から首都に行ってくるねー。」

「あ、セツヒトさんも行くんだ。人探し。」

「そーそー人をー……………人探しー？」

あ、やばい。

ドールに先に伝えていたんだった。

「うん。あれ？ソウジさん、お仕事だつて言つてたよ？」

「んー？あー、仕事もあるつてー言つて……………んん？」

……………あれ？

何か二人の話の流れが……………えーつと。

……………やばくないか!?

「……………まーいやー！とりあえず！行つてきます！」

「う、うん。気をつけて行つてきてね。……………セツヒトさん、飲みすぎだよ？」

「だいじょーぶー。まだ序の口ー。」

「いやあ!! 久しぶりのワサドラは気持ちがいいな!! 今帰ってきたぞ!!」
「……………は?」

「おや! ソウジ君にセツヒトに……全員勢ぞろいではないか!!」

「……………うわあ、アンタくたばってかかったのー?」

「はははは!! 冗談を!! ケイさん! イシザキ! 土産を持ってきたぞ! 受け取ってくれ!!」

えっ。

えっ。

「あらあらあら!! マシヨルクさんじゃないかい!! もうずつといなくて心配して……
もうっ! 来るなら来るって言ってちょうだいよ! 今日貸し切りだよ!!」

「何っ?! はははは! すまない! どうしても挨拶がしたくてな!!」

「……………久しぶりだから、座っていけばー?」

「おお! セツヒト! いいのか!」

「……………ソウジがいいならー、だけど。」

えっ。

教官。

教官が、帰ってきた……………帰ってきたあ!?

ま、待て待て待て。

落ち着け、俺。今こそ落ち着け。

冷静に。冷静に、だ。

とりあえず今、教官がここに来た。

そして、一緒に飲んでいいかと、俺に委ねられた。

「……………も、もちろんです。きよ、教官…………。」

「なんだ!!ソウジ君、久しぶりだというのに元気がないな!」

「さ、サーイエツサー!!…………ど、どうぞ飲んでいきましよう!!」

「はっはっはっはっはっ!!ありがとう!!」

さすが教官。

そこからは場が一気に、更に明るくなり。

飲み会のボルテージも最高潮。

久しぶりの人がやってきて、そりやもうみんな大歓迎。

俺ももちろん嬉しいんだけど。

その……。

ど、どうしよう……。

「ご主人さま……。」

「シヨウコ……俺、セツヒトさんに何て言えば……。」

「……………ドンマイですっ!!」

「相棒!？」

ピューッと俺の前から消えたシヨウコ。

俺の肩をつかんで、飲め飲めと騒ぐ教官。

あつれえ!?

175 終わりましたよ。(後日談⑤)(終)

話がややこしくなってきた。
整理する。

俺は明後日から首都に仕事に向かう。

内容はマシヨルク教官探し。

ただ名探偵シヨウコの推理から、それは口実で単なるご褒美旅行ではないかと推測された。

俺もそう思った。

なのでセツヒトさんをお誘いした。

快く了承をもらった。

セツヒトさんも旅行とお考えの様子。

そしたら件の教官が帰ってきた。

かえって、きた……。

「おや！そこにいるのはシヨウコくんか！久しぶりだな!!」

「あ……お、お久し振りです。お元気、でしたか？」

「ああ！全くもって元気だ!!少しばかり外の大陸にでかけていてな!!いや、世界は広いぞ!!」

「へ、へー！そうなんですねぇ……。 (チラツ)」

シヨウコが俺を見ってくる。

……ああ、シヨウコ。分かってる。

お前が心配していること。

そして俺が今目茶苦茶不安なこと。

旅行が無しになるんじゃないかってことだ。

……仕事を口実にとって……その搜索目標が今、目の前で大酒をかつ喰らっているの
ある。

行く理由が無いじゃない……。

混乱極まる俺の頭。

テンション最高潮のイシザキ亭。
そんな場とも知らず、再び鐘の音を鳴らしてドアが開いた。

カランカランカラン。

「どうもすみません……残業で遅れま……し……えええええ!? マシヨルクさん!」

「おや! ハイビスくん! 久しぶりだな! いや、ハイビス部長といえばいいのかな!」

「え、えーつと……はい。いや、そうじゃなくて!! 一体、今までどこに!」

「今帰ってきた!!」

「……………ええええ……………。(チラツ)」

ハイビスさんが俺を見る。

あ、この人、事情を知っているわ。

だって、俺を見る目が憐れみに満ちているもの。

「そ、ソウジさん……セツヒトさんにお話は……?」

ハイビスさんが、盛り上がる場を抜けて俺に近づいてきた。

「……………既に、旅行を兼ねた仕事…………いや、仕事を兼ねた旅行と伝えております。」

「うわあ…………。」

「教官のことは伏せました。」

「うわあ…………。」

「…………めちやくちや、喜んでらっしやいました。」

「…………う、うわあ…………。」

いや、そんな顔しないでください。

元はと言えば、ギルドが持ってきた話じゃないですか。

俺に鎮火を任せる？

多分その時、俺はセツヒトさんの業火に焼かれるぞ。

「ハイビスさん。首都に二週間ほど行くような、長期且つ超簡単ほぼ旅行みたいなクエスト、ありませんか…………？」

「そんなのあるわけないじゃ無いですか…………私だってさつきギルマスから話を聞いて

……ええええ……。」

マシヨルク教官を見て、ため息とも驚嘆とも取れない声を漏らすハイビスさん。
うん。

ハイビスさんの反応からして、ギルド……またはハスガさんが用意した旅行であることは確定。

そして、それがうまくいかなそうなこともまた、確定。

ギルドも全くもって予想外だろう。

教官はそもそもそういう生物であるけど。

想定外の塊。

「……………ハイビスさん。とりあえず残業、お疲れ様です。」

「ソウジさん…………。」

「俺、逝つてきます。」

「ええ!?!ちよ、ちよつと!ソウジさん!一体何を!」

「いや、もう全部打ち明けよう…………。」

「待ってください！まだ案は……あります！」

「……ほ、本当ですか!？」

藁にもすがる思い。

ハイビスさんの案とやらを、俺は聞いてみることにした。

* * * * *

「なるほど……。」

「い、いけるかと思えます！女性の立場からしても、これなら！」

「は、はい。……やってみます。」

ハイビスさんからの妙案。

とは言っても、結構普通のことだったが。

俺が冷静になれただけでもめつけもんである。

作戦はこうだ。

まずは、きちんと正直にセツヒトさんに打ち明ける。

「旅行の件ですが、実は内情これこれこういう感じだったんです。」と。

多分そこで、セツヒトさんはガツカリする。

もしくは不機嫌になられる。

だがしかし、もうそれはいい。

俺が、俺から、自分から「旅行に行きましよう。もうギルドとか抜きで。」と言うのだ。セツヒトさんも修練場の仕事は休みと言っていたんだし、多分いける。

何なら、「俺が自発的にセツヒトさんを誘った」という事実が大切らしい。

ハイビスさんからののお墨付きである。

うーん……ナイスだぜ、ハイビスさん。

「よし……お二人の力になれるなら、何よりです！」

胸を張って、そう言うハイビスさん。

こういうところ……強くなったなあと思う。

この方、俺とセツヒトさんと3人でよく飲みに行くのだが……正直すごい。

3年前、一段落して3人で飲みに行った時。

俺のことが好きだ、と言った。

セツヒトさんの目の前で。

これを打ち明ける時点で、もうかなりすごい。

さらには、セツヒトさんは私にとって、とても大切な人です、とも言った。

だから、お二人を全力で応援します、と。

ど、どんだけいい人なんだこの人。

なんて思ったりしたものである。

度々俺やセツヒトさんのいろんな相談に乗ってもらっている。

もちろんハイビスさんの様々な愚痴にも付き合っている。

というかそれがメイン。

そんな折。

数年前の回想。

『なんで私じゃ無いんですかー！ソウジさーん!!』

『えー？ハイビスちゃん！それ私の前で言うー？』

『じゃー！わ、私は今までどーりソウジさんにアプローチしますよー!!』

『お、いーねーハイビスちゃん！望むところー!!』

『よっしや言質取ったー!!』

『……あ、あのー、お二人さーん？飲み過ぎですよー？』

『『ああん!?!』』

『イエナンデモアリマセン。』

……回想終わり。

怖かった……あの時は怖かった。

あの2人が酔っ払ってタッグを組んだら、もう俺に太刀打ちできる手段はない。

「……ハイビスさん、何かすみません。色々。」

「……言ったじゃ無いですか。私、お二人のことが大好きなんです。」

「……。」

「応援、していますよ?。」

「は、はい。」

「8割は、ですけど。」

「お、おお……。」

残り2割は何ですか、とは、とても聞けない。
聞いちゃいけない。

察しろ、俺。

「……じゃ、行つてきます。」

「はい……武運を!!」

かつこよく話すハイビスさん。

それは、ギルド受付嬢のお決まりの文句。

クエストに向かうハンターへの励ましとなってきたその言葉。

まあ今回は全く状況が違うけど。

……行つてきます。

俺は勇気を出してセツヒトさんに突貫した。

作戦、実行!!

* * * * *

結論から言います。

……作戦成功しました。

「もー、お金使いたくないからー、マシヨルクもう一回行方不明になっちゃえばいいじゃーん。」

「はっはっは!!セツヒトは面白いことを言うな!!せっかくお前の兄貴分が帰ってきたというのに!!」

「本気だよー!!ていうかー!だ・れ・が、兄貴だー!!」

セツヒトさんは色々な経緯を聞いた後、結局俺の旅行の提案に乗ってくれた。

よ、よかった……。

何か矛先が教官に行ってるけど。

まあ仕事で完全にタダ、つてわけにはいかなかったわけで。

……だがしかし!

俺には一応蓄えがある!!

ロイヤルなんとかだかなんだか知らんが、2週間の滞在ぐらい何だ。任せろ!!

「しかしソウジ君も剛毅だな!あの様な高級な所に長期滞在とは!!」

「いや、どうせ行くならいいところ行きたいじゃないですか。そもそもその予定でしたし。」

「ははははは!確かにな!!」

ちなみに俺の意を決した作戦遂行は、皆に注目されてしまった。

当たり前だけど。

まさか何処かの純情中学生のように、呼び出して告白するようなことでもないし。

公然の仲だし。

俺の話を聞いていた教官が、俺を剛毅だと言う。

そこまで高いのか。

だが心配はいらない!

結構な金持ちですからね!俺!

「ソウジさんもすごいわねえ！いやあ、トップハンターになるとやるのが違うわあ！」
「いや、それほどでも……。」

ケイさんも感心しきり。

そんなに褒められても困りますよ、と返事しようとしたら。

「だって一泊これぐらいよー？」

そう言つて4本の指を立てるケイさん。

……4, 000z?

い、いやいや高級な宿らしいし……。

一泊40, 000zと言つたところか。

移動日抜いて、大体10日で……。

……ま、まあまあ！

それぐらいならいける!!全然!!

「うわわ、やっぱりすごいね。一泊でうちの2千倍。」

「あそこはね、とんでもないんだから！お付きの人は常に部屋に常駐。窓からの景色は、それはもう絶景らしいわよー？高級なお酒をグラスに注がれて……夕焼けに染まる街を見下ろしながら乾杯……いいわよねえ！」

「うーん……うちも何とかつこよくしようかな……。」

「いいのよ！『ホエール』には『ホエール』にしかない良さがあるもの！」

ドールがとんでもないことを言い出す。

しかしケイさんがナイスフォロー。

あそこを高級志向に変えるなど、とんでもないことである。

「そうだぞ、ドール。あそこはもう、何というか、完璧なんだ。俺にとっての家だ。そのままであってほしい。」

「そーそー。ドールちゃんのご飯がないとー、私も困るー。」

「……うん、ありがとう。みんな。……あのまま、みんなの安心できる場所にする。」

……かつこよく言い切るドールであった。

うん、本当に、大きくなったなあ。

……ん？

ちよつとまで。

なんか引つかかる。

何だろう。

『うわわ、やっぱりすごいね。一泊でうちの2千倍。』

……。

……えーつと……。

「お待たせしましたにやー！ビールの追加だにやー!!」

「お、オスズさん。ちようどよかった。ちよつと計算を頼んでいいですか？」

「ケイさんならそこにいるにや？」

「いや、そつちでなく。数字の方の。」

「なんだややこしいにや！おまかせにや!!」

ちようどよくやってきたオスズ。

かなり不安になってきたところに、丁度この店のマスコットの存在がやってきた。

オスズは計算が得意なのだ。

え、えーつと……ドールのところの一泊は銀貨2枚で2000z……。

「一泊2,000zの宿があつたとします。」

「ふむふむ。」

「2000回泊まつたら——」

「——4,000,000zですにや!」

……………えつ。

一泊で?

「それに10をかけると……?」

「40,000,000z、ですにや!!」

オスズが、元気に可愛く胸を張る。

ああ、ヒナタさんなら今頃鼻血でも出してるんだろうな、とか思いながら。
俺は頭が真っ白になってしまったのであった。

い、家買えるやんけ……。

* * * * *

2日後。

ガーグア車乗り場前。

御者のおじさんが、二人分の荷物を荷台に載せていく。

「おう、おはようさん！しばらくよろしくな！」

「よ、よろしくお願ひします……。」

「……どうしたソウジさん？元気ねえなあ……とりあえず俺はあいつらの様子見てくるからな！」

おじさんに心配されてしまった。

そのままガーグアたちの方へと向かっていく。

すると、後ろから低い声がかかった。

「よおソウジ……。」

「あ、ハスガさん……。」

暗めの顔でやってきたのは、ハスガさん。

……すんごい申し訳無さそうな顔をしていらっしやる。

「……ま、まだ間に合うぞ？ シガイアさんに掛け合って、何とか無理矢理予約キャンセルってことも……」

「……いい、いえ。大丈夫です。流石にそういうお願いはちよつと……。」

「……すまねえ……いつそのままのマシバカョチャルクロウをもう一回行方不明にして……。」

「本末転倒ですよ……。」

ハスガさんとは、昨日話した。

「教官が帰ってきました、話は変わりますが首都に旅行に行ってきます。」と言った辺りで全てを察したハスガさん。

金銭的な援助を申し出てくれたが、俺たちは完全な私用。

お断り申し上げます。

だつてもうしようがないじゃない。

「うっわー！ワクワクしてきたねー！ソウジー！！」

「は、はい、セツヒーー」

「ーっせっちゃんー！！」

「……せっちゃんさん。」

「うん！よろしー！！」

この人はもうご機嫌さんなのだから。

も超笑顔。

……好きな人の、この表情を見られるのだ。

く、悔いは無いぞ！！

.....。

.....。

出発の時分が近づくと、なぜか知り合いが続々と集まってきた。

「ご主人様ー！お土産よろしくお願いしますねー!!」

「シヨウコ……お前色々容赦ないなあ。」

「もう諦めてください！そしてウチにザキミーユ名物の高級マタタビ団子を!!」

「前向きに検討しつつ、善処します。」

「あー！絶対に買わんやつや！」

シヨウコに適当に返事をしておく。

だって首都でどんな出費があるか分からないのだ。

聞いた話だと、食事代別なんですって。

.....ひい.....。

「ソウジさん！私はバックなんか欲しいです！」

「エプロンとか、首都のおシャレなやつをお願いしますニヤ!!」

「そういうファッション系は自分で買ってくださいお二人共。」

ハイビスさんとオスズが、ショウウコに続いてお土産ねだりをしてくる。

買うとか以前に、そういうセンスは俺には皆無である。

自分で買いなさい。

「私はお土産はいらないよ!!」

「け、ケイさん！」

「あーでも、お店で仕入れる首都名産のお酒……直接買えると安いんだけどねえ……。」「ケイさん……。」「

もう欲望まみれである。

何なのこの人たち!!

俺に金があると分かってこんな寄ってたかって!!

いや、払えるんですけどね！それぐらいは蓄えありましたけど！

……………流石にちよつと桁が違いすぎる。

貯金がキレイに吹っ飛んだ。

「あ、ソウジさん…………。」

「ドール。」

そこにやってきたのは、ドール。

やけに心配げな顔つき。

…………ああ、流石はドールだ。

きつと、俺が金を使いすぎていることを心配しているんだろう。

この子は、優しい子なのだ。

…………きつと『気をつけて、行ってきてね。』といつも通りに言ってくれ——

「私、宝石がいいな。」

「一番エグい要求!!?」

「できたら、ネックレス。紅玉の。」

「しかもめっちゃ具体的!!」

はい、ドールも欲まみれでした。

……チクシヨウ!

「よし、出発するぞー!」

「あ、はい。」

「じゃーみんなー。いってきまーす!」

ヒラヒラ。

セツヒトさんが手を振る。

俺も、見送りのみんなに手を振った。

……お土産は買ってこよう。

普通のやつを。

「……………ソウジー。」

「はい？」

セツヒトさんが、少し心配そうな顔で俺を見てくる。

「……ずっと言わないけど……お金、やばいんでしょー？」

「………いいえ、大丈夫です。」

「ほんとにー？」

「本当です。」

ニヤニヤと俺に笑いかけるセツヒトさん。

好きな女性のの前では、少なくとも虚勢を張っていたい。

男の悲しい性である。

「………まー、私と、一緒にいながらさー。」

「は、はい。」

ガラガラガラガラ。

後ろにワサドラの入り口が見える。

徐々に小さくなるそれを見つめながら、セツヒトさんに返事をした。

「一緒にー、稼いでいこっかー。ねー？」

「……………はい。」

「……………んー！よーしーじゃー、楽しもー！！」

「……………はい！！」

まるで逆プロポーズみたいな言葉をかけられながら。

ごきげんなセツヒトさんを見つめた。

この人と、一緒に歩いて行こう。

この先も。

……………今日も、いい天気だ。